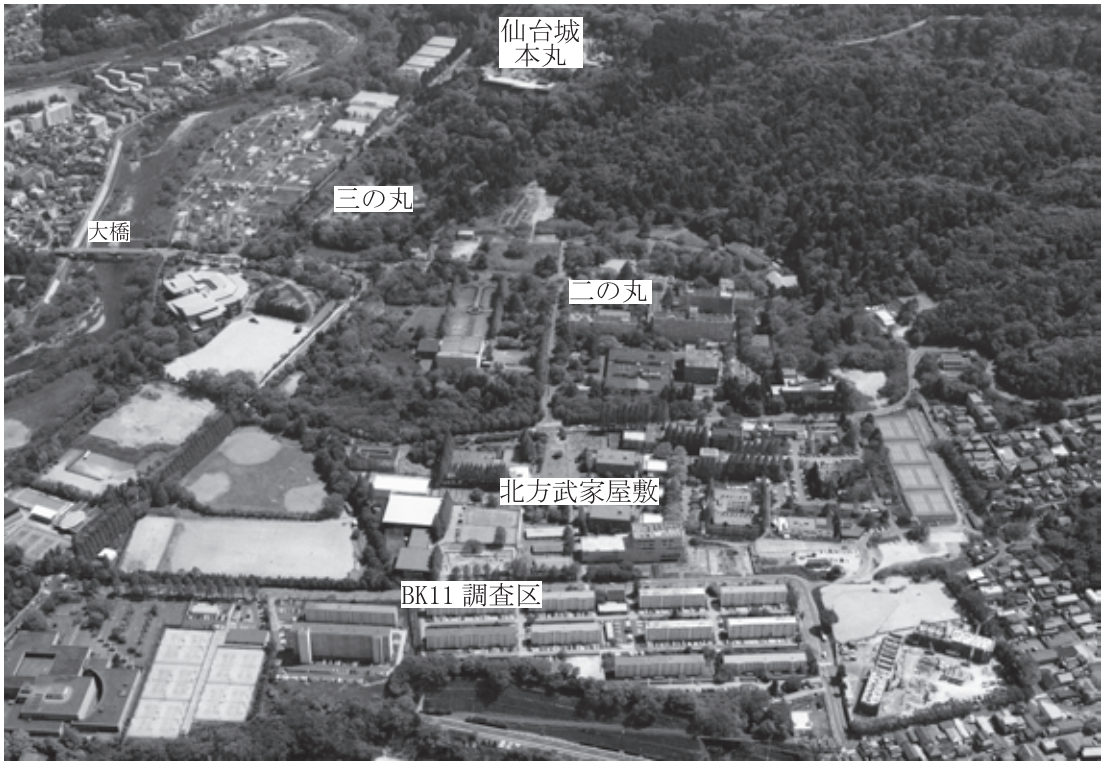
東北大学

ISSN 2185-6990

東北大学埋蔵文化財調査室調査報告１

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区
第 11 地点・第 12 地点
－仙台市高速鉄道東西線機能補償関係調査報告書－



仙台城二の丸北方武家屋敷地区第 11 地点（BK11）
北から仙台城本丸を望む

東北大学埋蔵文化財調査室
２０１１

東北大学埋蔵文化財調査室調査報告１

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区
第 11 地点・第 12 地点

－仙台市高速鉄道東西線機能補償関係調査報告書－

東北大学埋蔵文化財調査室
２０１１

武家屋敷地区第11地点全景（2007年8月撮影、左側が北）

序

このたび東北大学埋蔵文化財調査室では、『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』という新たなシリーズで、東北大学構内における埋蔵文化財調査報告書を刊行することとしました。これまでは『東北大学埋蔵文化財調査年報』として、年度ごとに事業概要と調査成果の報告をまとめて刊行してきました。年度ごとの事業概要の報告は、『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』として別に刊行し、発掘調査の報告については『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』として、独立させて刊行していくこととなりました。

本報告書は、『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』の最初として、2006年度から2008年度にかけて実施した、仙台市地下鉄東西線建設に伴う機能補償関係の調査成果を報告いたします。調査を実施したのは、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区の第11地点と第12地点の、２地点です。地下鉄東西線機能補償関係の調査は、仙台市からの補償費を財源とした事業であり、これらをまとめて報告します。

今回報告する調査の中でも二の丸北方武家屋敷地区第11地点は、調査面積が1,401平方メートルという大規模調査であり、多数の江戸時代の遺構が検出されております。様々な種類の遺物も出土しており、仙台城周辺の武家屋敷の研究の上で、重要なデータを加えることになったと考えております。

地下鉄東西線機能補償関係の調査は、限られた期間で調査を遂行することが必要であったため、補償費を財源とした任期付き職員を増員して、調査および整理作業を進めることとなりました。当調査室にとっては未経験のことでありましたが、幸いなことに、大学内外の関係機関の御協力を得て、滞りなく事業を進めることができました。ここに厚くお礼申し上げるとともに、本書で報告されるデータが各方面で活用されることを望むものです。

東北大学埋蔵文化財調査室

室長　**阿子島　香**

例　言

1．本調査報告は、東北大学構内において、東北大学埋蔵文化財調査室が2006年度から2008年度にかけて行った、仙台市高速鉄道東西線（地下鉄東西線）建設に伴う機能補償に関わる遺跡調査、ならびに研究成果をまとめたものである。

2．報告される遺跡と略号、調査期間、調査担当者は以下のとおりである。

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点（ＢＫ11）

本調査　2006年10月２日～2007年９月10日　藤沢敦・柴田恵子・高木暢亮・小原一成・百々千鶴

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第12地点（ＢＫ12）

本調査　2008年１月11日～2008年３月14日　藤沢敦・高木暢亮・小原一成・百々千鶴

3．調査・整理作業は、東北大学埋蔵文化財調査室が行った。

4．本年報の編集は、阿子島香の指導のもとに、藤沢敦・柴田恵子・高木暢亮（2008年度まで）・菅野智則（2009年度から）が担当した。

5．本文は、藤沢敦・柴田恵子・高木暢亮・菅野智則・小原一成・百々千鶴が執筆したほか、東北大学大学院文学研究科考古学研究室大学院生の村田弘之・傳田惠隆両氏に石器・石製品に関する作図・本文執筆をしていただいた。また、東北大学大学院文学研究科日本史研究室大学院生の澁谷悠子氏に、川内地区の江戸時代の絵図に記載された人名について分析を依頼し、分析結果について原稿を執筆していただいた。また、年代測定・植物遺存体・動物遺存体については、それぞれ加速器分析研究所・古代の森研究舎・川口貴史氏（東松島市奥松島縄文村歴史資料館）に分析を依頼し、分析結果の報告をいただいた。執筆分担は以下の通りである。

第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章１・２（１）・６、第Ⅴ章２：藤沢敦

第Ⅲ章２（２）・（３）：菅野智則

第Ⅲ章３：高木暢亮・小原一成作成の原稿に、藤沢敦・菅野智則が補足。

第Ⅲ章４〔（２）③・⑥・⑩以外〕、第Ⅳ章：柴田恵子

第Ⅲ章４（２）③・⑩：村田弘之・傳田惠隆（東北大学大学院文学研究科考古学研究室）

第Ⅲ章４（２）⑥：百々千鶴

第Ⅲ章５（１）：加速器分析研究所

第Ⅲ章５（２）：吉川順子（古代の森研究舎）

第Ⅲ章５（３）：川口貴史（東松島市奥松島縄文村歴史資料館）

第Ⅴ章１：澁谷悠子（東北大学大学院文学研究科日本史研究室）

英文要旨については、菅野智則が作成し、阿子島香が校訂した。

6．遺物実測図の作成にあたっては、原図はすべて手描きで作成している。遺物実測図の内、石器・石製品については手描きのトレースによって原版を作成した。それ以外の遺物実測図と遺構の測量図は、デジタルトレースによって原版を作成した。また、磁器と陶器の文様部分の図面原版は、国際文化財株式会社に委託し、オルソイメージャーを用いたデジタル写真から作成した。

7．遺物写真については、有限会社仙台写真工房に委託して撮影した。

8．発掘調査および整理・報告書作成にあたっては、以下の方々や関係機関から御指導・御協力を賜った。記して感謝申しあげる（敬称略）。

仙台市教育委員会、仙台市博物館、東北大学考古学研究室、東北大学史料館

佐藤洋（仙台市教育委員会）、菅野正道（仙台市博物館）、曽根原理（東北大学史料館）

9．出土遺物・調査記録は、東北大学埋蔵文化財調査室で保管・管理している。

凡　例

1．方位は真北に統一してある。

2．図１・６・147 は、国土地理院の１万分の１地形図「青葉山」を使用した。

3．川内地区の仙台城跡二の丸地区、および二の丸北方の武家屋敷にあたる地域の地形測量図は、仙台市教育委員会の作成による「仙台城跡地形図」（縮尺500分の１）を使用した。

4．国土座標値を用いる場合には、日本測地系と世界測地系の別を、それぞれ記入した。

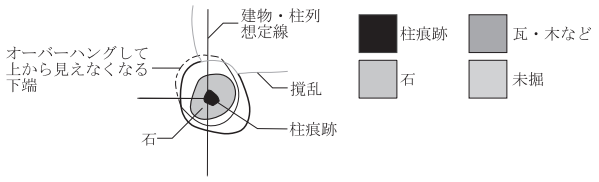
5．提供いただいた写真の所蔵機関は下記のとおりである。提供各機関に御礼申し上げたい。表紙（川内地区の航空写真）：東北大学施設部、図８（キャンプ・センダイ時代の建物）：東北大学史料館、図142（大橋から仙台城二の丸への遠望）：仙台市博物館所蔵三原良吉コレクション。

6．遺物の実測図および写真の縮尺は、それぞれに示した。

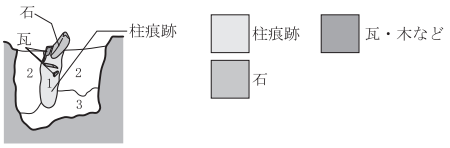
7．引用・参考文献は、巻末にまとめた。また本文中で『東北大学埋蔵文化財調査年報』を引用する場合は、年報１という形で略記した。

8．挿図中の表記は、特に指示しないものについては、以下の通りである。

遺構平面図



遺構断面図



これら以外については、それぞれに指示した。

目　次

巻頭カラー図版

序
例言
凡例
目次
図目次
表目次
図版目次

第Ⅰ章　仙台市高速鉄道東西線機能補償関係埋蔵文化財調査の概要 …… 1
1．調査にいたる経緯……1
（1）仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区における
これまでの調査……1
（2）地下鉄東西線機能補償と
埋蔵文化財調査……5
2．調査の概要……6
（1）地下鉄東西線機能補償に係わる
埋蔵文化財調査体制 ……6
（2）全体の調査経過 ……7
①発掘調査……7
②立会調査……10
③整理作業と遺物の保管方法……13
第Ⅱ章　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区の立地と歴史……14
1．仙台城と周辺武家屋敷の立地……14
2．仙台城と仙台城下の武家屋敷……16
（1）仙台城の歴史 ……16
（2）仙台城周辺の武家屋敷 ……17
第Ⅲ章　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点……25
1．調査経緯 ……25
（1）調査地点の位置 ……25
（2）調査にいたる経緯 ……25
（3）調査の方法と経過 ……28
①発掘調査の経過 ……28
②記録方法 ……33
③遺構の名称について ……34
④遺物の取り上げについて ……34
⑤整理作業 ……35
2．基本層序と時期区分 ……36
（1）基本層序 ……36
（2）遺構の変遷段階の設定 ……39
（3）各期の推定時期 ……40
3．検出遺構 ……52
（1）江戸時代以前の遺構 ……52
（2）江戸時代以降の遺構 ……57
①Ⅰ期の遺構……57
②Ⅱａ期の遺構 ……76
③Ⅱｂ期の遺構 ……86
④Ⅱｃ期の遺構…… 105
⑤Ⅱｄ期の遺構…… 113
⑥Ⅱｅ期の遺構…… 123
⑦Ⅲ期の遺構…… 131
（3）２層上面の遺構 …… 139
4．出土遺物…… 142
（1）江戸時代以前の遺物 …… 142
①須恵器…… 142
②古代の瓦…… 142
③石器…… 142
（2）江戸時代以降の遺物 …… 143
①陶磁器…… 143
②土師質土器…… 152

③瓦質土器…… 154
④土製品…… 155
⑤軟質施釉陶器…… 156
⑥瓦…… 157
⑦漆塗製品…… 161
⑧木製品・竹製品…… 162
⑨金属製品…… 163
⑩石器・石製品…… 164
5．分析…… 241
（1）仙台城跡における放射性炭素年代（ＡＭＳ測定）…… 241
（2）仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点（ＢＫ11）より出土した種実遺体…… 244
（3）動物遺存体 …… 246
6．まとめ…… 249
（1）検出遺構について …… 249
①屋敷区画と検出遺構の関係…… 249
②地鎮遺構…… 253
③防空壕…… 254
（2）出土遺物について …… 256
（3）小結 …… 258
第Ⅳ章　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第12地点 …… 260
1．調査経緯…… 260
（1）調査地点の位置 …… 260
（2）調査にいたる経過 …… 260
（3）調査の方法と経緯 …… 260
2．検出遺構と出土遺物…… 262
（1）検出遺構 …… 262
（2）出土遺物 …… 262
3．まとめ…… 263
第Ⅴ章　仙台城周辺の武家屋敷地区についての検討 …… 266
1．仙台城下絵図にみる屋敷拝領者変遷と階層性－川内地区の事例に基づいて－ …… 266
2．川内地区における江戸時代の道路の復元 … 299
引用・参考文献
東北大学埋蔵文化財調査室刊行報告書一覧
英文要旨
写真図版

図　目　次

図1　仙台城と二の丸の位置 …… 2
図2　川内北地区機能補償関係調査地点 …… 9
図3　仙台城周辺の地形区分図 ……15
図4　川内地区周辺の絵図・地図（1）……20
図5　川内地区周辺の絵図・地図（2）……21
図6　川内地区における江戸時代の道路の復元 …22
図7　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点調査区の位置 ……26
図8　キャンプ・センダイとカワウチ・シアター… 27
図9　武家屋敷地区第11地点調査区模式図 ……29
図10　武家屋敷地区第11地点調査状況 ……31
図11　武家屋敷地区第11地点基本層序模式図 ……36
図12　武家屋敷地区第11地点基本層序断面図 ……37
図13　武家屋敷地区第11地点遺構変遷模式図 ……41
図14　武家屋敷地区第11地点江戸時代以前の遺構配置図 ……54
図15　武家屋敷地区第11地点沢状遺構断面図（1）……55
図16　武家屋敷地区第11地点沢状遺構断面図（2）……56
図17　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期遺構配置図 ……58
図18　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（1）……65
図19　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（2）……66
図20　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（3）……67

図21　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（４）……68
図22　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（５）……69
図23　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（６）……70
図24　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（７）……71
図25　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（８）……72
図26　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（９）……73
図27　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（10）……74
図28　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（11）……75
図29　武家屋敷地区第11地点Ⅱａ期遺構配置図　…77
図30　武家屋敷地区第11地点Ⅱａ期の遺構（１）…81
図31　武家屋敷地区第11地点Ⅱａ期の遺構（２）…82
図32　武家屋敷地区第11地点Ⅱａ期の遺構（３）…83
図33　武家屋敷地区第11地点Ⅱａ期の遺構（４）…84
図34　武家屋敷地区第11地点Ⅱａ期の遺構（５）…85
図35　武家屋敷地区第11地点Ⅱｂ期遺構配置図…87
図36　武家屋敷地区第11地点Ⅱｂ期の遺構（１）…94
図37　武家屋敷地区第11地点Ⅱｂ期の遺構（２）…95
図38　武家屋敷地区第11地点Ⅱｂ期の遺構（３）…96
図39　武家屋敷地区第11地点Ⅱｂ期の遺構（４）…97
図40　武家屋敷地区第11地点Ⅱｂ期の遺構（５）…98
図41　武家屋敷地区第11地点Ⅱｂ期の遺構（６）…99
図42　武家屋敷地区第11地点Ⅱｂ期の遺構（７）…100
図43　武家屋敷地区第11地点Ⅱｂ期の遺構（８）…101
図44　武家屋敷地区第11地点Ⅱｂ期の遺構（９）…102
図45　武家屋敷地区第11地点Ⅱｂ期の遺構（10）…103
図46　武家屋敷地区第11地点Ⅱｂ期の遺構（11）…104
図47　武家屋敷地区第11地点Ⅱｃ期遺構配置図…106
図48　武家屋敷地区第11地点Ⅱｃ期の遺構（１）…109
図49　武家屋敷地区第11地点Ⅱｃ期の遺構（２）…110
図50　武家屋敷地区第11地点Ⅱｃ期の遺構（３）…111
図51　武家屋敷地区第11地点Ⅱｃ期の遺構（４）…112
図52　武家屋敷地区第11地点Ⅱｄ期遺構配置図…114
図53　武家屋敷地区第11地点Ⅱｄ期の遺構（１）…117
図54　武家屋敷地区第11地点Ⅱｄ期の遺構（２）…118
図55　武家屋敷地区第11地点Ⅱｄ期の遺構（３）…119
図56　武家屋敷地区第11地点Ⅱｄ期の遺構（４）…120
図57　武家屋敷地区第11地点Ⅱｄ期の遺構（５）…121
図58　武家屋敷地区第11地点Ⅱｄ期の遺構（６）…122
図59　武家屋敷地区第11地点Ⅱｅ期遺構配置図…124
図60　武家屋敷地区第11地点Ⅱｅ期の遺構（１）…127
図61　武家屋敷地区第11地点Ⅱｅ期の遺構（２）…128
図62　武家屋敷地区第11地点Ⅱｅ期の遺構（３）…129
図63　武家屋敷地区第11地点Ⅱｅ期の遺構（４）…130
図64　武家屋敷地区第11地点Ⅲ期遺構配置図 ……132
図65　武家屋敷地区第11地点Ⅲ期の遺構（１） … 135
図66　武家屋敷地区第11地点Ⅲ期の遺構（２） … 136
図67　武家屋敷地区第11地点Ⅲ期の遺構（３） … 137
図68　武家屋敷地区第11地点Ⅲ期の遺構（４） … 138
図69　武家屋敷地区第11地点
　　２層上面遺構配置図…… 140
図70　瓦分類概念図…… 157
図71　瓦当直径と周縁幅の関係 …… 158
図72　武家屋敷地区第11地点出土磁器（１） …… 165
図73　武家屋敷地区第11地点出土磁器（２） …… 166
図74　武家屋敷地区第11地点出土磁器（３） …… 167
図75　武家屋敷地区第11地点出土磁器（４） …… 168
図76　武家屋敷地区第11地点出土磁器（５） …… 169
図77　武家屋敷地区第11地点出土磁器（６） …… 170
図78　武家屋敷地区第11地点出土陶器（１） …… 171
図79　武家屋敷地区第11地点出土陶器（２） …… 172
図80　武家屋敷地区第11地点出土陶器（３） …… 173
図81　武家屋敷地区第11地点出土陶器（４） …… 174
図82　武家屋敷地区第11地点出土陶器（５） …… 175
図83　武家屋敷地区第11地点出土陶器（６） …… 176
図84　武家屋敷地区第11地点出土陶器（７） …… 177
図85　武家屋敷地区第11地点出土陶器（８） …… 178
図86　武家屋敷地区第11地点出土陶器（９） …… 179
図87　武家屋敷地区第11地点出土陶器（10） …… 180
図88　武家屋敷地区第11地点出土陶器（11） …… 181
図89　武家屋敷地区第11地点出土
　　土師質土器（１） ……182
図90　武家屋敷地区第11地点出土
　　土師質土器（２） ……183
図91　武家屋敷地区第11地点出土
　　土師質土器（３） ……184
図92　武家屋敷地区第11地点出土
　　土師質土器（４）・瓦質土器（１）……185
図93　武家屋敷地区第11地点出土瓦質土器（２）…186
図94　武家屋敷地区第11地点出土瓦質土器（３）…187
図95　武家屋敷地区第11地点出土瓦質土器（４）…188

図96　武家屋敷地区第11地点出土瓦質土器（５）…189
図97　武家屋敷地区第11地点出土土製品（１）…190
図98　武家屋敷地区第11地点出土
　　土製品（２）・軟質施釉陶器 …… 191
図99　武家屋敷地区第11地点出土瓦（１） …… 192
図100 武家屋敷地区第11地点出土瓦（２） …… 193
図101 武家屋敷地区第11地点出土瓦（３） …… 194
図102 武家屋敷地区第11地点出土瓦（４） …… 195
図103 武家屋敷地区第11地点出土瓦（５） …… 196
図104 武家屋敷地区第11地点出土瓦（６） …… 197
図105 武家屋敷地区第11地点出土瓦（７） …… 198
図106 武家屋敷地区第11地点出土瓦（８） …… 199
図107 武家屋敷地区第11地点出土瓦（９） …… 200
図108 武家屋敷地区第11地点出土瓦（10） …… 201
図109 武家屋敷地区第11地点出土瓦（11） …… 202
図110 武家屋敷地区第11地点出土漆塗製品 …… 203
図111 武家屋敷地区第11地点出土下駄 …… 204
図112 武家屋敷地区第11地点出土
　　その他の木製品（１） …… 205
図113 武家屋敷地区第11地点出土
　　その他の木製品（２） …… 206
図114 武家屋敷地区第11地点出土
　　その他の木製品（３） …… 207
図115 武家屋敷地区第11地点出土煙管 …… 207
図116 武家屋敷地区第11地点出土
　　その他の銅製品（１） …… 207
図117 武家屋敷地区第11地点出土
　　その他の銅製品（２） …… 208
図118 武家屋敷地区第11地点出土
　　鉄製品・鉛製品 …… 208
図119 武家屋敷地区第11地点出土古銭 …… 209
図120 武家屋敷地区第11地点出土石器・石製品…210
図121 武家屋敷地区第11地点出土種実 …… 245
図122 武家屋敷地区第11地点周辺の絵図・地図 … 250
図123 武家屋敷地区第４地点の地鎮遺構 …… 253
図124 武家屋敷地区第11地点の防空壕 …… 254
図125 武家屋敷地区第７地点の防空壕 …… 255
図126 武家屋敷地区第12地点調査区の位置 …… 261
図127 武家屋敷地区第12地点
　　１区・４区遺構配置図 …… 264
図128 武家屋敷地区第12地点３区遺構配置図 …… 265
図129 寛文４年絵図川内地区模式図 …… 289
図130 寛文８・９年絵図川内地区模式図 …… 290
図131 延宝６～８年絵図川内地区模式図 …… 291
図132 延宝９年～天和３年絵図川内地区模式図 … 292
図133 元禄４・５年絵図川内地区模式図 …… 293
図134 享保９年絵図川内地区模式図 …… 294
図135 宝暦10年～明和３年絵図川内地区模式図 … 295
図136 天明６年～寛政元年絵図川内地区模式図 … 296
図137 安政３～６年絵図川内地区模式図 …… 297
図138 川内地区に拝領屋敷を持つ家臣の
　　家格の変遷 …… 298
図139 川内地区に拝領屋敷を持つ家臣の
　　知行高・禄高の変遷 …… 298
図140 川内地区に拝領屋敷を持つ家臣の
　　家格および知行高・禄高の相関関係 … 298
図141 川内地区周辺の道路の対比 …… 300
図142 大橋東側の道路の変化 …… 301
図143 大堀通の復元 …… 303
図144 二の丸北側の堀の復元 …… 304
図145 川内Ａ遺跡周辺の道路の復元 …… 305
図146 大橋の橋脚柱穴 …… 305
図147 川内地区における江戸時代の道路の復元 … 308

表　目　次

表１　仙台城と仙台城周辺武家屋敷の調査一覧 … ３
表２　地下鉄東西線機能補償関係調査体制 …… ７
表３　地下鉄東西線機能補償関係調査進行表 …… ８
表４　地下鉄東西線機能補償関係調査一覧表 …… ８
表５　主要な仙台城下絵図 …… 19
表６　武家屋敷地区第11地点関連絵図人名 …… 24

表７　仙台藩の家格 ……24
表８　武家屋敷地区第11地点遺構名称対照表（１）…43
表９　武家屋敷地区第11地点遺構名称対照表（２）…44
表10　武家屋敷地区第11地点遺構名称対照表（３）…45
表11　武家屋敷地区第11地点遺構名称対照表（４）…46
表12　武家屋敷地区第11地点遺構名称対照表（５）…47
表13　武家屋敷地区第11地点時期別遺構一覧表 …48
表14　武家屋敷地区第11地点遺構属性表（１）……49
表15　武家屋敷地区第11地点遺構属性表（２）……50
表16　武家屋敷地区第11地点建物属性表 …… 51
表17　武家屋敷地区第11地点出土
磁器集計表（１）…… 211
表18　武家屋敷地区第11地点出土
磁器集計表（２）…… 212
表19　武家屋敷地区第11地点出土
磁器集計表（３）…… 213
表20　武家屋敷地区第11地点出土
陶器集計表（１）…… 214
表21　武家屋敷地区第11地点出土
陶器集計表（２）…… 215
表22　武家屋敷地区第11地点出土
陶器集計表（３）…… 216
表23　武家屋敷地区第11地点出土
土師質土器・瓦質土器集計表（１）… 217
表24　武家屋敷地区第11地点出土
土師質土器・瓦質土器集計表（２）… 218
表25　武家屋敷地区第11地点出土
土製品・軟質施釉陶器集計表…… 219
表26　武家屋敷地区第11地点出土瓦集計表（１）…220
表27　武家屋敷地区第11地点出土瓦集計表（２）…221
表28　武家屋敷地区第11地点出土瓦集計表（３）…222
表29　武家屋敷地区第11地点出土木製品集計表… 223
表30　武家屋敷地区第11地点出土金属製品・石器
・石製品・その他の遺物集計表（１）… 223
表31　武家屋敷地区第11地点出土金属製品・石器
・石製品・その他の遺物集計表（２）… 224
表32　武家屋敷地区第11地点出土
磁器観察表（１）…… 225
表33　武家屋敷地区第11地点出土
磁器観察表（２）…… 226
表34　武家屋敷地区第11地点出土
陶器観察表（１）……227
表35　武家屋敷地区第11地点出土
陶器観察表（２）……228
表36　武家屋敷地区第11地点出土
陶器観察表（３）……229
表37　武家屋敷地区第11地点出土
陶器観察表（４）……230
表38　武家屋敷地区第11地点出土
陶器観察表（５）……231
表39　武家屋敷地区第11地点出土
土師質土器（皿）観察表……232
表40　武家屋敷地区第11地点出土
その他の土師質土器観察表……233
表41　武家屋敷地区第11地点出土土製品観察表… 233
表42　武家屋敷地区第11地点出土
瓦質土器観察表……234
表43　武家屋敷地区第11地点出土
軟質施釉陶器観察表……234
表44　武家屋敷地区第11地点出土古代瓦観察表…235
表45　武家屋敷地区第11地点出土軒丸瓦観察表…235
表46　武家屋敷地区第11地点出土軒平瓦観察表…235
表47　武家屋敷地区第11地点出土
軒平瓦類観察表……235
表48　武家屋敷地区第11地点出土丸瓦観察表……236
表49　武家屋敷地区第11地点出土丸瓦類観察表…236
表50　武家屋敷地区第11地点出土平瓦観察表……236
表51　武家屋敷地区第11地点出土
平瓦１類観察表……236
表52　武家屋敷地区第11地点出土
平瓦２類観察表……237
表53　武家屋敷地区第11地点出土桟瓦類観察表…237
表54　武家屋敷地区第11地点出土熨斗瓦観察表…237
表55　武家屋敷地区第11地点出土面戸瓦観察表…237
表56　武家屋敷地区第11地点出土
その他の瓦観察表……237
表57　武家屋敷地区第11地点出土
漆塗製品（椀）観察表……238
表58　武家屋敷地区第11地点出土
その他の漆塗製品観察表……238

表59　武家屋敷地区第11地点出土下駄観察表……238
表60　武家屋敷地区第11地点出土
　　その他の木製品観察表……238
表61　武家屋敷地区第11地点出土古銭観察表……239
表62　武家屋敷地区第11地点出土
　　煙管雁首観察表……239
表63　武家屋敷地区第11地点出土
　　煙管吸口観察表……239
表64　武家屋敷地区第11地点出土
　　その他の銅製品観察表……240
表65　武家屋敷地区第11地点出土鉄製品観察表…240
表66　武家屋敷地区第11地点出土鉛製品観察表…240
表67　武家屋敷地区第11地点出土
　　石器・石製品観察表……240
表68　武家屋敷地区第11地点出土種実観察表……244
表69　武家屋敷地区第11地点遺構別出土種実……245
表70　武家屋敷地区第11地点出土
　　動物遺存体種名表……246
表71　武家屋敷地区第11地点出土貝類集計表……248
表72　武家屋敷地区第11地点出土魚類集計表……248
表73　武家屋敷地区第11地点出土鳥類集計表……248
表74　武家屋敷地区第11地点出土哺乳類集計表…248
表75　武家屋敷地区第12地点出土遺物集計表……263
表76　検討対象となる仙台城下絵図……270
表77　寛文４年絵図川内地区人名など一覧（１）…271
表78　寛文４年絵図川内地区人名など一覧（２）…272
表79　寛文８・９年絵図
　　川内地区人名など一覧（１）……273
表80　寛文８・９年絵図
　　川内地区人名など一覧（２）……274
表81　延宝６～８年絵図
　　川内地区人名など一覧（１）……275
表82　延宝６～８年絵図
　　川内地区人名など一覧（２）……276
表83　延宝９年～天和３年絵図
　　川内地区人名など一覧（１）……277
表84　延宝９年～天和３年絵図
　　川内地区人名など一覧（２）……278
表85　元禄４・５年絵図
　　川内地区人名など一覧（１）……279
表86　元禄４・５年絵図
　　川内地区人名など一覧（２）……280
表87　享保９年絵図川内地区人名など一覧……281
表88　宝暦10年～明和３年絵図
　　川内地区人名など一覧（１）……282
表89　宝暦10年～明和３年絵図
　　川内地区人名など一覧（２）……283
表90　天明６年～寛政元年絵図
　　川内地区人名など一覧（１）……284
表91　天明６年～寛政元年絵図
　　川内地区人名など一覧（２）……285
表92　安政３～６年絵図川内地区人名など一覧…286
表93　川内地区における拝領屋敷の
　　名義人数と名義変更……287
表94　川内地区に拝領屋敷を持つ上級家臣……288

図　版　目　次

図版１　武家屋敷地区第11地点全景（１）……321
図版２　武家屋敷地区第11地点全景（２）……322
図版３　武家屋敷地区第11地点
　　広域セクション（１）……323
図版４　武家屋敷地区第11地点
　　広域セクション（２）……324
図版５　武家屋敷地区第11地点
　　広域セクション（３）……325
図版６　武家屋敷地区第11地点
　　広域セクション（４）……326
図版７　武家屋敷地区第11地点
　　広域セクション（５）……327

図版８　武家屋敷地区第11地点
江戸時代以前の遺構…… 328
図版９　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（１）…329
図版10　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（２）…330
図版11　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（３）…331
図版12　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（４）…332
図版13　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（５）…333
図版14　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（６）…334
図版15　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（７）…335
図版16　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（８）…336
図版17　武家屋敷地区第11地点
Ⅰ～Ⅱａ期の遺構…… 337
図版18　武家屋敷地区第11地点
Ⅱａ期の遺構（１）…… 338
図版19　武家屋敷地区第11地点
Ⅱａ期の遺構（２）…… 339
図版20　武家屋敷地区第11地点
Ⅱａ期の遺構（３）…… 340
図版21　武家屋敷地区第11地点
Ⅱａ期の遺構（４）…… 341
図版22　武家屋敷地区第11地点
Ⅱａ期の遺構（５）…… 342
図版23　武家屋敷地区第11地点
Ⅱａ期の遺構（６）…… 343
図版24　武家屋敷地区第11地点
Ⅱａ期の遺構（７）…… 344
図版25　武家屋敷地区第11地点
Ⅱａ～Ⅱｂ期の遺構…… 345
図版26　武家屋敷地区第11地点
Ⅱｂ期の遺構（１）…… 346
図版27　武家屋敷地区第11地点
Ⅱｂ期の遺構（２）…… 347
図版28　武家屋敷地区第11地点
Ⅱｂ期の遺構（３）…… 348
図版29　武家屋敷地区第11地点
Ⅱｂ期の遺構（４）…… 349
図版30　武家屋敷地区第11地点
Ⅱｂ期の遺構（５）…… 350
図版31　武家屋敷地区第11地点
Ⅱｂ期の遺構（６）…… 351
図版32　武家屋敷地区第11地点
Ⅱｂ期の遺構（７）…… 352
図版33　武家屋敷地区第11地点
Ⅱｂ期の遺構（８）…… 353
図版34　武家屋敷地区第11地点
Ⅱｂ期の遺構（９）…… 354
図版35　武家屋敷地区第11地点
Ⅱｂ期の遺構（10）…… 355
図版36　武家屋敷地区第11地点
Ⅱｂ期の遺構（11）…… 356
図版37　武家屋敷地区第11地点
Ⅱｃ期の遺構（１）…… 357
図版38　武家屋敷地区第11地点
Ⅱｃ期の遺構（２）…… 358
図版39　武家屋敷地区第11地点
Ⅱｃ期の遺構（３）…… 359
図版40　武家屋敷地区第11地点
Ⅱｃ期の遺構（４）…… 360
図版41　武家屋敷地区第11地点
Ⅱｃ～Ⅱｄ期の遺構…… 361
図版42　武家屋敷地区第11地点
Ⅱｄ期の遺構（１）…… 362
図版43　武家屋敷地区第11地点
Ⅱｄ期の遺構（２）…… 363
図版44　武家屋敷地区第11地点
Ⅱｄ期の遺構（３）…… 364
図版45　武家屋敷地区第11地点
Ⅱｄ期の遺構（４）…… 365
図版46　武家屋敷地区第11地点
Ⅱｄ～Ⅱｅ期の遺構…… 366
図版47　武家屋敷地区第11地点
Ⅱｅ期の遺構（１）…… 367
図版48　武家屋敷地区第11地点
Ⅱｅ期の遺構（２）…… 368
図版49　武家屋敷地区第11地点
Ⅱｅ期の遺構（３）…… 369
図版50　武家屋敷地区第11地点
Ⅱｅ期の遺構（４）…… 370
図版51　武家屋敷地区第11地点
Ⅱｅ～Ⅲ期の遺構…… 371

図版52　武家屋敷地区第11地点Ⅲ期の遺構（１）…372
図版53　武家屋敷地区第11地点Ⅲ期の遺構（２）…373
図版54　武家屋敷地区第11地点Ⅲ期の遺構（３）…374
図版55　武家屋敷地区第11地点
　　Ⅲ期・２層上面の遺構 ……375
図版56　武家屋敷地区第11地点２層上面の遺構 …376
図版57　武家屋敷地区第11地点出土磁器（１） …377
図版58　武家屋敷地区第11地点出土磁器（２） …378
図版59　武家屋敷地区第11地点出土磁器（３） …379
図版60　武家屋敷地区第11地点出土磁器（４） …380
図版61　武家屋敷地区第11地点出土磁器（５） …381
図版62　武家屋敷地区第11地点出土陶器（１） …382
図版63　武家屋敷地区第11地点出土陶器（２） …383
図版64　武家屋敷地区第11地点出土陶器（３） …384
図版65　武家屋敷地区第11地点出土陶器（４） …385
図版66　武家屋敷地区第11地点出土陶器（５） …386
図版67　武家屋敷地区第11地点出土陶器（６） …387
図版68　武家屋敷地区第11地点出土陶器（７）… 388
図版69　武家屋敷地区第11地点出土陶器（８） …389
図版70　武家屋敷地区第11地点出土陶器（９） …390
図版71　武家屋敷地区第11地点出土陶器（10） …391
図版72　武家屋敷地区第11地点出土陶器（11） …392
図版73　武家屋敷地区第11地点出土
　　土師質土器（１） ……393
図版74　武家屋敷地区第11地点出土
　　土師質土器（２） ……394
図版75　武家屋敷地区第11地点出土
　　土師質土器（３） ……395
図版76　武家屋敷地区第11地点出土
　　土師質土器（４）・瓦質土器（１）…396
図版77　武家屋敷地区第11地点出土
　　瓦質土器（２） ……397
図版78　武家屋敷地区第11地点出土
　　瓦質土器（３） ……398
図版79　武家屋敷地区第11地点出土
　　瓦質土器（４） …… 399
図版80　武家屋敷地区第11地点出土
　　瓦質土器（５） …… 400
図版81　武家屋敷地区第11地点出土
　　土製品・軟質施釉陶器…… 401
図版82　武家屋敷地区第11地点出土瓦（１）…… 402
図版83　武家屋敷地区第11地点出土瓦（２）…… 403
図版84　武家屋敷地区第11地点出土瓦（３）…… 404
図版85　武家屋敷地区第11地点出土瓦（４）…… 405
図版86　武家屋敷地区第11地点出土瓦（５）…… 406
図版87　武家屋敷地区第11地点出土瓦（６）…… 407
図版88　武家屋敷地区第11地点出土瓦（７）…… 408
図版89　武家屋敷地区第11地点出土
　　瓦（８）・漆塗製品（１）…… 409
図版90　武家屋敷地区第11地点出土
　　漆塗製品（２） …… 410
図版91　武家屋敷地区第11地点出土下駄…… 411
図版92　武家屋敷地区第11地点出土
　　その他の木製品（１） …… 412
図版93　武家屋敷地区第11地点出土
　　その他の木製品（２） …… 413
図版94　武家屋敷地区第11地点出土
　　その他の木製品（３）・煙管 …… 414
図版95　武家屋敷地区第11地点出土
　　その他の金属製品…… 415
図版96　武家屋敷地区第11地点出土古銭 …… 416
図版97　武家屋敷地区第11地点出土
　　石器・石製品…… 417
図版98　武家屋敷地区第11地点出土
　　動物遺存体（貝類・魚類） …… 418
図版99　武家屋敷地区第11地点出土
　　動物遺存体（鳥類・哺乳類） …… 419
図版100 武家屋敷地区第12地点
　　全景・検出遺構（１） …… 420
図版101 武家屋敷地区第12地点
　　全景・検出遺構（２） …… 421

第Ⅰ章　仙台市高速鉄道東西線機能補償関係埋蔵文化財調査の概要

１．調査にいたる経緯

（１）仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区におけるこれまでの調査

東北大学の川内地区は、沢とその脇を東西に走る道路によって、川内南地区と北地区に分かれている。この川内南地区は仙台城二の丸が置かれた場所であり、北地区は家臣の屋敷が存在した区域に相当する（図１）。

仙台城は、慶長15年（1600年）から、仙台藩初代藩主である伊達政宗によって築城が開始された近世城郭である。その後、幾たびかの改変を受けつつ、幕末まで仙台藩の中枢として機能していく。この仙台城は、本丸と二の丸の一部を除き、2003年に国史跡に部分指定されている。

仙台城の考古学的調査は、本丸・二の丸・三の丸などの各地区において実施されている。この内二の丸地区については、東北大学の施設整備事業などに先立ち、東北大学によって調査が実施されてきた。三の丸地区では、仙台市博物館の建て替えに伴い、仙台市教育委員会による調査が実施されている。本丸地区では、石垣修復工事に伴う仙台市教育委員会による調査が、1997年から実施され、多大な成果をあげるとともに、史跡指定への直接的な契機となった。2001年度からは、文化庁の国庫補助を受けた遺構確認調査が仙台市教育委員会によって開始され、現在も継続中である。表１に、仙台城と、周辺武家屋敷地区における調査の一覧を示しておいた。

仙台城周辺の武家屋敷地区についての調査は、近年急速に調査事例が増加している。

1978年、川内北地区のプール西側の排水管埋設工事の際、石組みの井戸などが発見された。この時、東北大学の文学部考古学研究室によって緊急の調査が行われたのが、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区における最初の考古学的調査であった。しかしこの時は、既に掘削が実施された後に、露出した遺構の記録を作成する緊急の調査であったため、ごく部分的な調査にとどまらざるをえなかった。この時には、川内北地区は周知の遺跡の範囲内ではなく、新たに周知の遺跡として登録する措置もとられていない。

東北大学に埋蔵文化財調査委員会が1983年に設置され、構内遺跡の組織的な調査が開始されると、川内北地区についても遺跡が広がっている可能性に配慮し、必要な措置がとられるようになった。すなわち、施設建設が計画されている場所については試掘調査を行うとともに、営繕工事に際しては、立会調査を実施してきた。その結果、いくつかの調査において、江戸時代の遺構面が残存していることが明らかとなってきた。また、1986年度に調査を実施した二の丸第８地点は、二の丸北側に東西に延びていた堀の、北側の岸の部分の調査であった（年報４）。二の丸に伴う堀の調査のため、調査地点名称は二の丸地区の名称を採用したが、調査を実施した場所は川内北地区であった。これらの調査は、川内南地区が周知の遺跡である仙台城跡の範囲内に含まれていたことから、周知の遺跡の隣接地という位置づけで、調査を実施していたものである。

これらの調査によって、川内北地区においても、江戸時代の遺構面が良好に残存していることが判明してきた。しかも、二の丸地区の遺構面から、途切れることなく、周辺の遺構面が連続して残っていることも明らかとなってきた。このような成果を受けて、仙台市教育委員会・宮城県教育委員会とも協議した結果、1993年度に仙台城跡の範囲を拡大する措置がとられた。川内北地区に江戸時代の遺構面が良好に残存していることと、二の丸のすぐ北側に位置し、二の丸と密接に関連することから、仙台城跡の一部として扱うこととなった。これにより川内北地区のほとんどが、周知の遺跡である仙台城跡の範囲に含まれることとなった。ただし、川内北地区の中でももっとも東側のグラウンドについては、それまで実施した立会調査によって、確実に江戸時代に遡る遺構面が残存している場所は確認できていなかった。またこのグラウンド部分は、西側よりは段丘崖によって一段低くなっている区域であり、二の丸地区が立地する段丘面より、一段低い段丘面であった。これらの理由から、仙台城跡の範囲拡大にあたって、グラウンドの区域は含まれなかった。

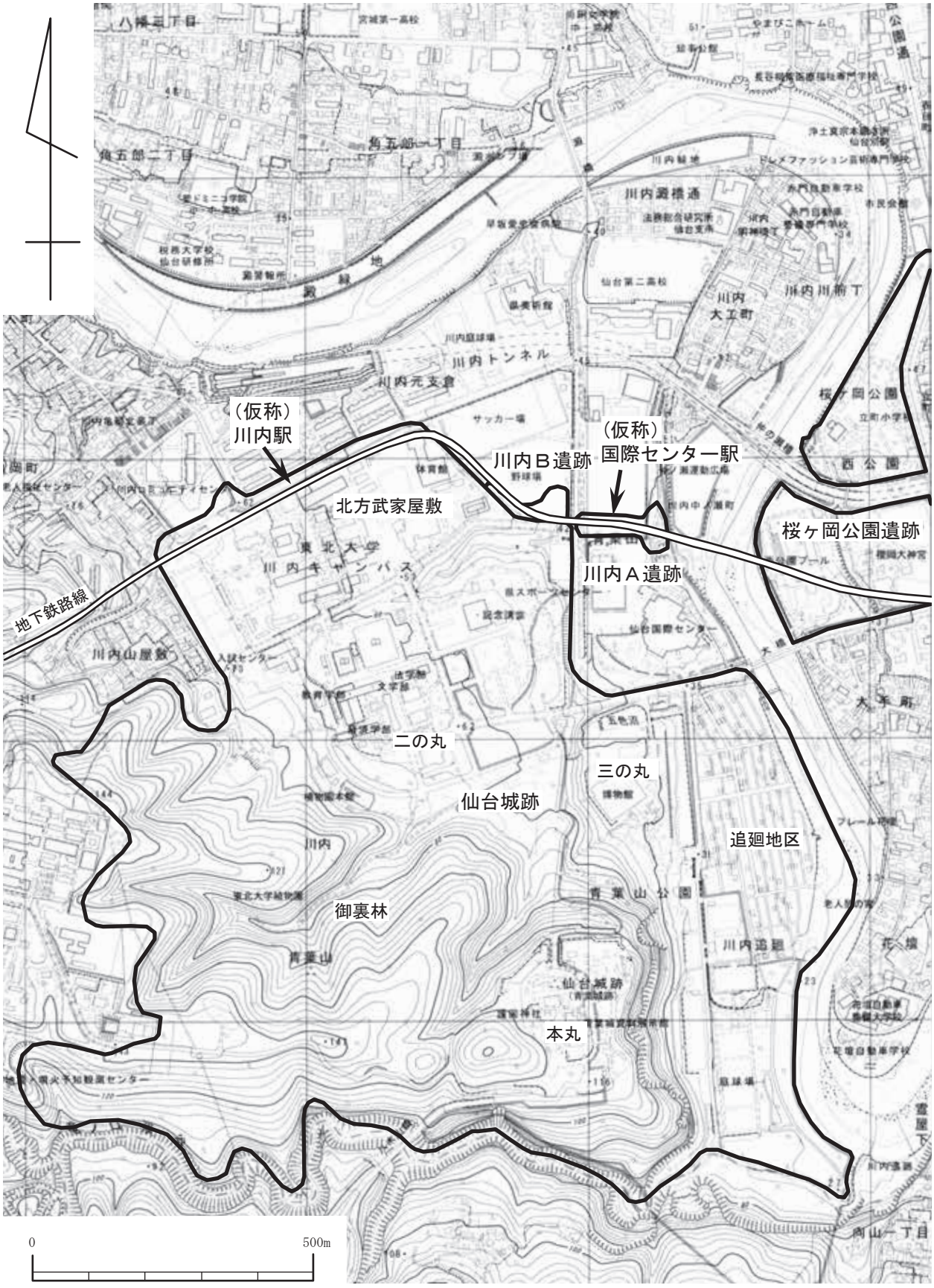


図１　仙台城と二の丸の位置
Fig.1　Distribution of Sendai Castle

表１　仙台城と仙台城周辺武家屋敷の調査一覧
Tab.1　List of excavations of Sendai Castle and Samurai Residences around Sendai Castle

年度		仙台市調査		東北大学構内		仙台市調査（周辺武家屋敷）	
		国庫補助確認調査以外	国庫補助重要遺跡遺構確認調査	二の丸地区	二の丸北方武家屋敷地区	二の丸北方武家屋敷地区	その他の周辺武家屋敷
1974	昭和49			文系厚生施設緊急調査（仙台市教委）			
1978	昭和52				プール脇排水管緊急調査（考古学研究室）		
1982	昭和57			第１地点試掘			
1983	昭和58	三の丸博物館新築 （76集）		第１地点（年報１） 第２地点（年報１） 第３地点（年報１）			
1984	昭和59			第４地点 （1987年度継続）	第１地点試掘		
1985	昭和60			第５地点試掘	第４地点試掘		
1986	昭和61			第７地点（年報４） 第８地点（年報４）			
1987	昭和62			第４地点（年報５） 第５地点 （翌年度継続）			
1988	昭和63			第５地点（年報６）			
1989	平成１			第５地点付帯部（年報７） 第９地点試掘	第５地点（年報７）		
1990	平成２			第９地点（年報８）			
1991	平成３			第10地点（年報９）			
1992	平成４			第11地点試掘 第12地点試掘 第13地点（年報10）			
1993	平成５			第12地点（年報11） 第14地点（年報11）			
1994	平成６			第15地点（年報12）	第４地点（翌年度継続）		
1995	平成７			第11地点（年報13）	第４地点（年報13）		
1996	平成８	本丸１次石垣修復確認調査			第６地点（年報14）		
1997	平成９	本丸１次石垣修復 （翌年度継続）		第16地点（年報15）			
1998	平成10	本丸１次石垣修復 （翌年度継続）		第17地点試掘			
1999	平成11	本丸１次石垣修復 （翌年度継続）					
2000	平成12	本丸１次石垣修復 （翌年度継続）		第17地点（年報18）			
2001	平成13	本丸１次石垣修復 （翌年度継続）	第１次大広間１次 第２次清水門（259集）		第７地点（年報19）		
2002	平成14	本丸１次石垣修復 （翌年度継続）	第３次大番士土手他 第４次巽櫓 第５次本丸大広間２次（264集）		第８地点（年報20）		
2003	平成15	本丸１次石垣修復 （275･282･298･349集）	第６次全域分布 （271集） 第７次大広間３次 第８次登城路 第９次広瀬川護岸石垣（270集）		第９地点（年報21）		
2004	平成16	中門・清水門復旧整備（299集）	第10次大広間４次 第11次広瀬川護岸・沢曲輪他石垣（285集）			東西線試掘（289集）	川内Ａ･桜ヶ岡公園東西線試掘（289集）
2005	平成17	清水門周辺復旧整備 （299集） 登城路１次（300集）	第12次大広間５次 第13次三の丸１次 第14次広瀬川護岸・中門石垣（297集）			東西線試掘（302集）	川内Ａ周辺・桜ヶ岡公園東西線試掘（302集） 川内Ａ遺跡東西線（312集）
2006	平成18		第15次大広間６次 第16次三の丸２次（309集）		第10地点（年報24） 第11地点（翌年度継続）	東西線 （亀岡トンネル開削部･342集）	川内Ａ周辺・川内Ｂ東西線試掘（316集） 追廻遺構確認１次（350集）
2007	平成19		第17次大広間７次 第18次三の丸３次 第19次本丸北西石垣（330集）		第11地点（調査報告１） 第12地点（調査報告１）	東西線（川内駅部・立坑部）	川内Ｂ東西線試掘 東西線桜ヶ岡公園（広瀬川高架橋部・公園駅部他） 桜ヶ岡公園２次（西公園再整備･318集） 追廻遺構確認２次（350集）
2008	平成20		第20次大広間８次 第21次造酒屋敷１次 第22次本丸北西石垣（348集）		第13地点（本体部分）	東西線（扇坂トンネル部）	東西線川内Ａ（広瀬川右岸橋梁部）・川内Ｂ（扇坂トンネル部）・桜ヶ岡公園（公園駅部他） 桜ヶ岡公園３次（西公園再整備･335集）追廻遺構確認３次（350集）
2009	平成21	登城路２次（354集）			第13地点（付帯工事）	東西線（扇坂トンネル部・亀岡トンネル開削部） 第２次雨水幹線（356集）	東西線川内Ｂ

東北大学埋蔵文化財調査委員会に始まり、東北大学埋蔵文化財調査研究センターを経て、現在の埋蔵文化財調査室に至る、東北大学の構内遺跡調査組織による、施設整備などの工事に伴う二の丸北方武家屋敷地区における調査は、2009年度までに第１～13地点の調査が実施されてきた（図２）。この内、1985年度に実施した第２地点（ＢＫ２）と第３地点（ＢＫ３）の調査は、結果的に立会調査で終了したため欠番としている。したがって、11地点で調査が実施されていることとなる。

第１地点（ＢＫ１）は、2001年度に調査を実施した第７地点と一部重なる区域で、1984年度に実施した試掘調査である。当時、課外活動施設の建設候補地であったため、江戸時代の遺構・遺物の有無を確認する目的で、２×２ｍの試掘調査区を３ヶ所設けて調査を行っている。その結果、東よりの調査区で、江戸時代の遺構面が残存していることが確認されている。試掘調査実施後は、課外活動施設の建設場所が変更されたため、第７地点の調査が行われるまで、それ以上の調査は実施されなかった。

第４地点（ＢＫ４）は、1985年度に試掘調査を実施し、1994～1995年度に本調査を行った。試掘調査時には保健管理センターの建設予定地であったが、その後の計画見直しによって課外活動施設がこの地点に建設されることとなり、本調査を実施した。調査面積が1,143㎡という、二の丸北方武家屋敷地区では、初めての大規模な調査となった。江戸時代の初頭から幕末に至る、多数の遺構が検出された（年報13）。

第５地点（ＢＫ５）は、教養部学生実験施設（現学生実験棟）にエレベーターを設置するのに伴い、1989年度に実施した。40㎡という小規模な調査であったが、溝が検出されている（年報７）。

1996年度に実施した第６地点（ＢＫ６）は、給水管埋設に伴う調査である。調査面積は15㎡と少なかったが、比較的多くの遺構が検出されている（年報14）。

2001年度に実施した第７地点（ＢＫ７）は、マルチメディア教育研究棟新営に伴う調査である。調査を行った面積が810㎡と、まとまった規模の調査としては、第４地点に続く調査となった。礎石建物・掘立柱建物・掘立柱列や溝・井戸など、江戸時代の各時期の遺構が検出された。特筆されるものは、大規模なゴミ穴が検出され、様々な種類の遺物が大量に出土したことである。このゴミ穴からは、享保年間の年号が記されたものを含む、多数の荷札木簡が出土している。木簡の記載内容や、捨てられたゴミの内容から、堀をはさんだ二の丸地区のゴミが運び込まれて捨てられたものと考えられる（年報19第１～５分冊）。

第８地点（ＢＫ８）は、厚生会館前の上屋取設工事に伴い、2002年度に調査を実施した。28.6㎡と小規模な調査であった。溝やピットなどが検出されている（年報20）。

第９地点（ＢＫ９）は、課外活動施設（川内ホール）新営に伴い、2003年度に調査を実施した。体育館西側の、グラウンドとの段差に近い区域での調査であった。363.5㎡とやや規模の大きな調査であったが、段丘崖にかかる区域での調査であったため、遺構密度はさほど高くなかった。小規模な石垣や溝、掘立柱列などが発見されている（年報21）。

第10地点（ＢＫ10）は、学生実験棟改修に伴い、2006年度に調査を実施した。建物の東側と、中庭の２ヶ所で調査を行った。建物東側の調査区は、第５地点の調査区に隣接し、溝・井戸などが検出されている。中庭の調査区では、道路側溝の可能性のある、石垣が発見されている（年報24）。

第11地点（ＢＫ11）と第12地点（ＢＫ12）は、本報告書の第Ⅲ章と第Ⅳ章において報告する、仙台市高速鉄道東西線（以下地下鉄東西線と略記）機能補償に関係する調査である。

第13地点（ＢＫ13）は、厚生会館増改築に伴い調査を実施した。2008年度に増築建物本体部分（774.8㎡）、翌2009年度に付帯工事部分（44.85㎡）の調査を実施している。武家屋敷地区と二の丸地区の境となる千貫沢から分岐する沢や、そこに接続する溝などが検出されている。第13地点の調査については、現在整理作業中であり、作業終了後に『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告２』において、報告がなされる予定である。

一方、仙台市教育委員会による調査も、地下鉄東西線建設に伴う調査を中心に、多数実施されるようになって

いる。地下鉄東西線関係の本調査に先立ち、2004年度から 2006年度にかけて試掘調査が行われている。本調査と併行して、2007年度にも東北大学のグラウンド部分で試掘調査が行われている。これらの試掘調査は、仙台城二の丸北方武家屋敷地区だけでなく、その東側の東北大学のグラウンド部分と仙台商業高等学校グラウンド跡地の区域、広瀬川を渡った対岸の西公園の区域でも、試掘調査が行われている。これらの試掘調査の結果、仙台商業高等学校グラウンド跡地の一部が川内Ａ遺跡、東北大学グラウンドの一部が川内Ｂ遺跡、広瀬川を渡った対岸の西公園部分が桜ヶ岡公園遺跡として、新たに周知の遺跡として遺跡登録がなされ、記録保存のための調査が行われるようになった。

仙台市教育委員会による地下鉄東西線建設に先立つ調査は、2005年度の川内Ａ遺跡から始まり、二の丸北方武家屋敷地区では 2006年度から 2009年度にかけて、川内Ｂ遺跡では 2008年度と 2009年度に調査が行われている。桜ヶ岡公園遺跡では、2007年度と 2008年度に調査が行われている。これら、地下鉄東西線建設に伴う調査以外にも、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区では雨水幹線の移設工事、桜ヶ岡公園遺跡では西公園の再整備に伴い、事前調査が行われている。

仙台城三の丸地区の東側の追廻地区は、重臣を含む家臣の屋敷地や、馬場やそれに付随する施設などが置かれていた区域である。この追廻地区は、青葉山公園整備計画の対象区域となっており、公園便益施設や庭園などを設置する計画で検討が進められている。公園整備事業の推進にあたって、埋蔵文化財の確認を目的として、2006年度から 2008年度に、遺構確認調査が実施されている。

（２）地下鉄東西線機能補償と埋蔵文化財調査

仙台市の地下鉄（高速鉄道）は、南北線が 1987年に開通し、1992年には一部が延伸された。地下鉄南北線は、一日平均乗車人員約15万人で、仙台市の公共交通機関の中心を担っている。

その後、東西交通軸整備に関する検討が進められ、地下鉄東西線の建設が進められることとなった。2003年９月には、東の荒井駅（仮称）から仙台駅前を経由して動物公園駅（仮称）に至る営業距離13.9km の東西線として、鉄道事業法に基づく事業許可を取得した。2005年８月には鉄道事業法に基づく工事施行認可を取得し、2006年11月から本体工事が着手され、2015年度の開業を目指して工事が進められている。

地下鉄東西線は、川内地区では東北大学が使用している区域の一部を通ることとなった。そのため、東西線建設によって使用できなくなる建物や施設について、東北大学が機能補償を受けることとなった。

国立大学時代、川内地区など、東北大学が使用していた土地のほとんどは、財務省所管のものであった。国立大学法人化の際に、文部科学省所管を経て、法人化と同時に無償で国立大学法人東北大学の所有となっている。川内北地区の東西線予定地については、法人化の時点で、将来の東西線での使用が見込まれていたことから、財務省所管のままである。財務省所管の土地を、東北大学が引き続き利用する形となっている。そのため東北大学は、地下鉄東西線建設によって使用できなくなる建物や設備などの機能補償を受けることとなった。

なお、地下鉄東西線の建設に伴い仙台市都市計画道路川内旗立線の整備も同時に進められるため、東北大学への機能補償は、地下鉄東西線と都市計画道路川内旗立線の両方が対象となっている。しかし、事業としては一体として進められるため、以下の記述では地下鉄東西線機能補償として一括して記述することとする。

東北大学と地下鉄東西線事業の実施機関である仙台市交通局との間で、機能補償に関する協議が進められるにしたがい、機能補償の対象となる建物・設備の概要が明らかとなってきた。その中で、武道場と第二食堂の代替建物が建設されることと、その建設に先立ち記録保存のための発掘調査が必要なことが明らかとなってきた。そのため東北大学埋蔵文化財調査室では、これらの調査を実施する体制について、仙台市教育委員会文化財課と協議の上、検討して決定したいと考え、協議を申し入れた。

これに対して仙台市教育委員会文化財課からは、東北大学において調査を実施して欲しい旨の回答がなされた。

その内容は、①東北大学への機能補償で建設される建物部分の調査は、全体の工程との関係で迅速に実施する必要があること、②仙台市教育委員会文化財課では東西線本線部分の調査などを実施するだけで調査体制は限界となっており、東北大学への機能補償分の調査を迅速に実施することは不可能であること、③したがって東北大学への機能補償に関係する事業に伴う埋蔵文化財調査については、東北大学埋蔵文化財調査室が担当して実施して欲しいこと、④その調査に必要な経費は機能補償費に含めて補償するとのことであった。しかも、上記の内容で、仙台市内部では、文化財課と交通局との間での協議がすでに固まっているとのことであった。

このような回答を受け、地下鉄東西線機能補償関係事業に伴う埋蔵文化財調査は、東北大学埋蔵文化財調査室が担当して実施せざるを得ないと判断した。そのため、具体的な調査の内容と調査計画や必要な経費などを、東北大学施設部の担当者と協議しつつ検討し、必要な経費を仙台市への機能補償費に組み込んで要求し、補償費を財源として調査を実施することとなった。

２．調査の概要

（１）地下鉄東西線機能補償に係わる埋蔵文化財調査体制

2005年度に、東北大学と仙台市交通局との間での、機能補償に関係する協議が進められるにしたがい、機能補償の対象となる事業が明らかとなってきた。地下鉄東西線建設に伴い取り壊される主な建物は、体育館の北側に附属している武道場と、第二食堂などが該当することとなった。これら建物の代替えとして、川内サブアリーナ棟が建設されることとなったが、建設予定地全域での発掘調査が必要と見込まれた。これら以外には、給排水管の移設工事で記録保存のための事前調査が必要となる可能性が考えられたが、比較的小規模な調査で対処できる見込みであった。これら以外の機能補償に伴う工事は、立会調査で対処が可能であると考えられた。

武道場などの取り壊される建物のある区域については、2008年度から仙台市教育委員会による地下鉄路線部分の埋蔵文化財の事前調査が予定されていた。そのため武道場などは、2007年度中に取り壊して、跡地を引き渡すことが機能補償の条件となった。この条件を満たすためには、それ以前に新しい川内サブアリーナ棟の建設工事が終了し、移転が済んでいることが必要となる。この期限を基準として、建設工事に必要な工期から逆算すると、2007年７月末までに調査を終了し、８月当初より建設工事に入ることが必要となった。

東北大学埋蔵文化財調査室は、文化財調査員３名という体制で業務を行っている。この体制で実施した川内地区の調査実績では、調査地点の状況にも左右されるが、遺構・遺物が多い地点では、調査面積100㎡あたりで調査期間１ヶ月を要するのが通常であった。川内サブアリーナ棟では、最終的な調査面積が1,401㎡となった大規模な調査であり、通常の調査体制では１ヶ年以上の期間を要することが予想された。しかも、この地下鉄東西線機能補償関係の事業と併行して、東北大学での各種事業に伴う調査や整理作業など、埋蔵文化財調査室としての通常業務を実施する必要がある。そのため文化財調査員３名体制で、地下鉄東西線機能補償関係の業務を求められる期間で遂行することは不可能であり、調査を担当する文化財調査員を増員して調査体制を強化することが不可欠であるとの結論に至った。東北大学と仙台市交通局との協議においても、増員する調査担当職員の人件費を、必要であれば補償費の中に組み込んで対応できることとなった。そのため、地下鉄東西線機能補償関係の埋蔵文化財調査を担当する職員として、任期付き職員を採用して増員し、調査体制を強化し対処すること、必要な人件費は補償費に組み込むこととなった。

東西線機能補償関係の整理作業は、2007年度から2009年度まで行う予定であったため、増員する職員の任期は2009年度末までとした。機能補償関係の発掘調査は2006年10月から開始したが、準備の関係もあり、任期付き職員の増員は、2007年度当初からとした。2007年度当初から、文化財調査員（一般職員）１名、技術補佐員（准職員）１名を任期付きで採用した（表２）。文化財調査員は、2007年度末で当人の都合で退職したため、2008年

表２　地下鉄東西線機能補償関係調査体制
Tab.2　Staff list of Archaeological Reserch Office in fiscal year 2006－2009

職　名		2006年度職員	2007年度職員	2008年度職員	2009年度職員	備　考
調査室長	文学研究科教授	阿子島　香	阿子島　香	阿子島　香	阿子島　香	併任
文化財調査員	特任准教授	藤沢　敦	藤沢　敦	藤沢　敦	藤沢　敦	
	専門職員	柴田　恵子	柴田　恵子	柴田　恵子	柴田　恵子	
	専門職員	高木　暢亮	高木　暢亮	高木　暢亮	菅野　智則	
	一般職員	なし	小原　一成	菅野　智則	欠員	地下鉄東西線機能補償費を財源とした任期付職員
技術補佐員	准職員	なし	百々　千鶴	百々　千鶴	百々　千鶴	
整理作業員	時間雇用職員	なし	５名（９月～３月）	７名（通年３名・短期４名）	７名（通年３名・短期４名）	地下鉄東西線機能補償費を財源とした職員

度当初から交替した。また、埋蔵文化財調査室の正規枠の文化財調査員１名が、他大学の教員として採用されるため、2008年度末で退職した。その後任補充に、東西線機能補償費を財源とした任期付き文化財調査員が採用された。整理作業も比較的順調に進み、残り１年の任期で、職員を採用することが難しかったこともあり、機能補償費を財源とした文化財調査員１名については、2009年度は欠員とした。

（２）全体の調査経過

地下鉄東西線機能補償に関係する埋蔵文化財調査関係業務は、2006年度から2010年度の５ヶ年に渡って実施した（表３）。この間、記録保存のための発掘調査２件、立会調査14件を実施している（表４）。整理作業は、2007年度から2009年度にかけて実施した。2010年度の事業は、本報告書の印刷刊行だけである。

①発掘調査

発掘調査は2006年度から2007年度にかけて、２件実施した。いずれも、本書の第Ⅲ章と第Ⅳ章において、調査経緯を含めて詳細に報告するので、ここではごく簡単に概略だけを記す。

【仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点（ＢＫ11）】

地下鉄東西線建設によって取り壊される武道場や第二食堂などの代替えのために建設されることとなった川内サブアリーナ棟新営に伴う調査である。川内サブアリーナ棟は、体育館と第二食堂の間の、多目的広場として利用されていた場所に建設されることとなった。建物の詳細な設計が完了しておらず、規模や位置がおおよそ決定していた状態であったが、地下鉄工事スケジュールとの関係から、早急に調査に着手する必要があった。そのため600㎡分について、先行して調査を開始することとし、2006年10月２日から重機による掘削を開始し、10月10日から作業員を投入した精査に入った。その後、建物計画が確定したのに伴い、12月と、翌2007年２月と４月の合計３回にわたって、追加の表土掘削を行い調査範囲を拡大した。最終的な調査面積は、1,401㎡である。

１・２月は、厳冬期に入るため、少人数の人員で、遺構の精査を小規模ながら実施した。３月からは作業員を増員し、本格的な調査を再開した。2007年度の調査は、３月からの作業をそのまま引き継ぎ実施した。

2007年度当初より、補償費を財源とした任期付き職員として、文化財調査員１名（一般職員）と技術補佐員１名（准職員）が増員され、調査体制が強化された。また、年度当初より、測量業務を国際航業株式会社文化事業部に委託し、同社の測量担当者１名が現地に常駐して測量作業を行うこととなった。

調査期間は、建築工事の工程との関係で、当初は７月末までの予定であった。上記のように調査体制を強化したが、多数の遺構が検出されたことなどから、調査は予定より遅れ気味であった。一方、当初予定されていた８月の建築工事着手は、遅延することが避けられなくなってきた。2005年に発覚した耐震偽装問題を受けて、建築確認・検査の厳格化を柱として改正された建築基準法が、2007年６月に施行された。これ以降、全国各地で建築

表３　地下鉄東西線機能補償関係調査進行表
Tab.3　Process of archaeological reserch on the campus that related to construction business done in reparation of function lost by construction of the Sendai Subway Tozai Line

	2006年度（平成18年度）	2007年度（平成19年度）	2008年度（平成20年度）	2009年度（平成21年度）	2010年度（平成22年度）
川内サブアリーナ棟新営に伴う発掘調査（BK11）					
屋外給排水設備工事に伴う発掘調査（BK12）					
立会調査					
整理作業					
報告書印刷刊行					

表４　地下鉄東西線機能補償関係調査一覧表
Tab.4　List of archaeological reserch on the campus that related to construction business done in reparation of function lost by construction of the Sendai Subway Tozai Line

年度	調査の種類	地区	調　査　地　点（略号）	原　　因	調査期間	面積（㎡）	時期
2006年度	本調査	川内北	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点（BK11）	川内サブアリーナ棟新営	10/2 ～ 3 /31 翌年度継続	1,391	近世
	立会調査	川内北	ハンドボールコート（2006－7）	ハンドボールコート改修工事	8 /30、9 /6	－	－
		川内北	マルチメディア教育研究棟北側他（2006－9）	支障樹木伐採・移植	11/24･30	－	－
2007年度	本調査	川内北	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点（BK11）	川内サブアリーナ棟新営	前年度から継続 4 / 1 ～ 9 /10	1,401	近世
		川内北	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第12地点（BK12）	屋外給排水管設備その他工事	1 /11 ～ 3 /14	59.6	近世
	立会調査	川内北	共通実験棟北側（2007－2）	地下鉄東西線機能補償工事（駐輪場移転等その２・スロープ整備）	5 /28	－	－
		川内北	国際交流センター南側（2007－3）	市埋文調査に伴う機能補償工事（駐輪場移転等）	6 / 1 ・ 5	－	－
		川内北	国際交流センター南側、厚生会館北東側、プール東側（2007－4）	地下鉄東西線機能補償工事（駐輪場移転等その１）	6 / 1 ・ 5、7 / 3	－	－
		川内北	テニスコート東側一帯、課外活動施設東側（2007－7）	地下鉄東西線機能補償工事（駐車場整備その１）	8 /23･24･27、9 / 3 ･13･20･21･25、10/12	－	－
		川内北	課外活動施設東側（2007－11）	地下鉄東西線機能補償工事（駐輪場等整備その２・支障樹木伐採除根）	10/18	－	－
		川内北	体育館南側・西側、厚生会館北側・西側、グラウンド（2007－15）	屋外給排水設備その他工事	12/17･19･21、1 /10･11･17･25、3 /10	－	－
		川内北	厚生会館北側（2007－16）	地下鉄東西線機能補償工事（駐輪場移転等その３・駐輪場上屋取設）	1 /17	－	－
		川内北	テニスコート北側（2007－18）	市埋文調査に伴う樹木移植	3 /21・24	－	－
2008年度	立会調査	川内北	テニスコート東側（2008－2）	便所新築工事	4 /10	－	－
		川内北	川内北キャンパス中央部（2008－5）	屋外環境整備（プラザ等）工事	8 /20 ～ 22、9 / 1 ・ 2 、10/ 6 ･29、11/ 5 ･11･12	－	－
		川内北	体育館西側（2008－7）	川内サブアリーナ新営工事（付帯工事）	8 /25･28、9 / 4	－	－
		川内北	旧第二食堂周辺（2008－8）	武道場等取り壊しその他工事	10/14	－	－

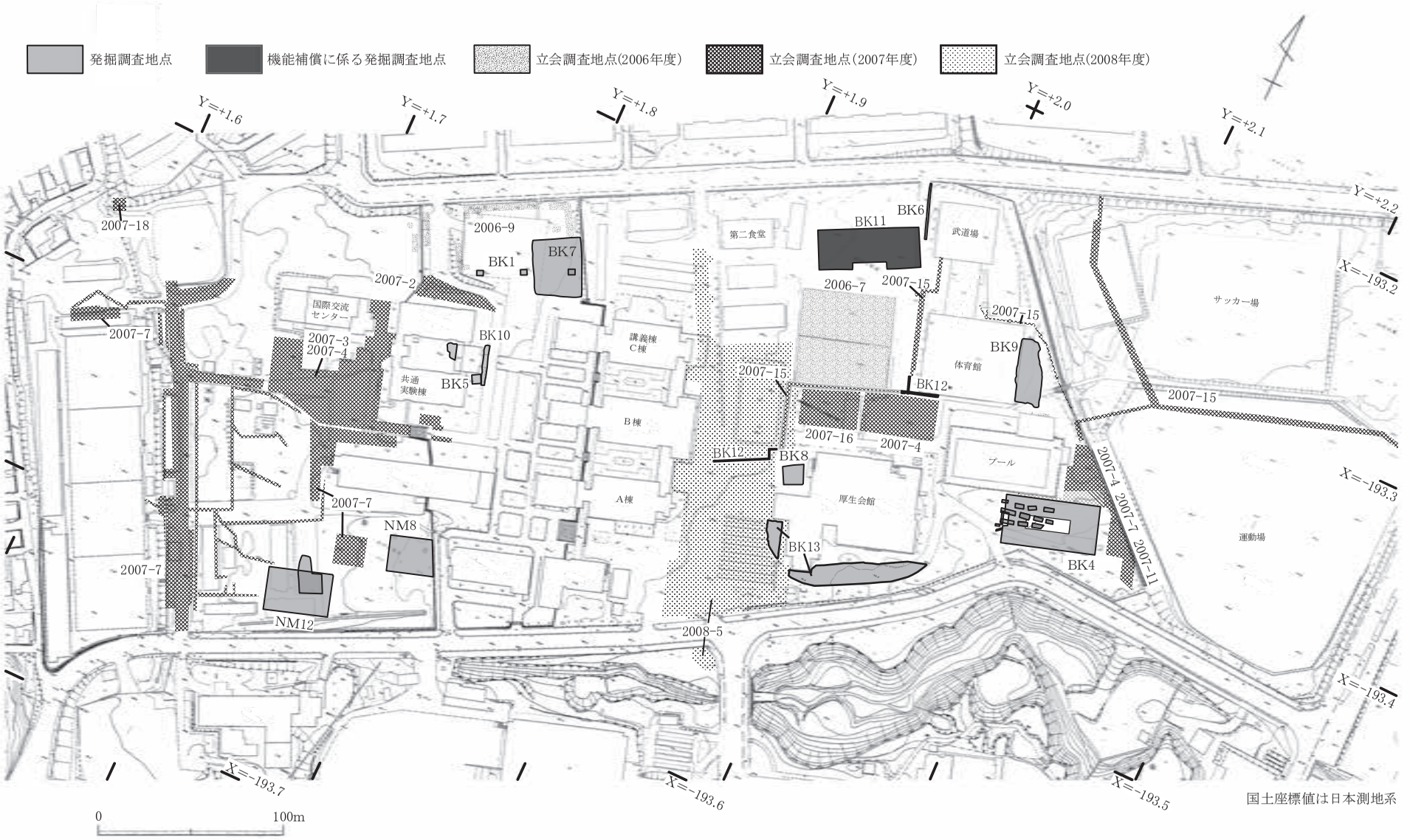


図２　川内北地区機能補償関係調査地点

Fig.2　Archaeological research on the campus that related to construction business done in reparation of function lost by construntion of the Sendai Subway Tozai Line

確認申請業務に著しい遅延が発生した。仙台市においても、建築確認申請業務の遅延は甚だしく、確認申請に必要な期間の目途すらたたない状態となった。そのため、当初予定した８月からの建設工事着手は不可能となり、結果的に、発掘調査を実施できる期間に余裕ができた。当初予定の期間では、調査遂行にまったく余裕がない状態であったため、関係機関と協議の上、８月末まで調査期間を延長することとした。作業員を投入した作業は、予定通り８月末で終了した。その後、図面の点検など若干の残務を行い、９月10日で調査の一切を終了した。また、調査成果の概要が明らかとなった８月４日には、現地説明会を開催した。

検出遺構は、ピット768基、大型の遺構31基、井戸８基、溝16条などであった。地鎮遺構も１基確認されている。遺物は、陶磁器類や瓦、木製品などが、コンテナ165箱出土した。江戸時代初頭から明治時代初頭にかけての各時期のものが出土している他、縄文時代の石器や古代の須恵器や瓦も少数出土している。

【仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第12地点（ＢＫ12)】

屋外給排水設備その他工事に伴う調査で、2007年度に実施した。この工事については、本調査を実施した区域（仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第12地点・略称ＢＫ12）と、立会調査で対処した区域（立会調査番号2007－15）の両方がある。そのため、立会調査部分も、この項目の中で、併せて概要を述べる。

川内北地区の給水管は、北東隅にポンプ室があり、そこから敷地北端の市道脇を通り、武道場の西側から南に折れ、体育館西側を通って厚生会館北側へと続いている。この給水管が地下鉄工事の支障となるため、サッカー場と野球場の間を通って、体育館南側を経て厚生会館北側へルートを変更することとなった。体育館から厚生会館の周辺区域では、場所によっては遺構面に掘削が達する可能性があったため、できる限り既存管の掘り方を利用して埋設することとした。しかしながら、管路の接続部分など、既存管掘り方を利用できない部分では、掘削が遺構面に達する可能性が考えられた。そのため、工事実施時に立会調査を行い、既存管掘り方からはずれ、掘削が遺構面に達する場合には、工事を中断し、記録保存のための本調査を実施することとした。また、東側のグラウンド部分については、周知の遺跡の範囲からは外れるが、念のため立会調査を実施することとした。

工事の進行と併行し、2008年１月11日から３月14日にかけて、断続的に調査を実施した。３ヶ所（１・３・４区）で、明治時代初頭の整地層（２層）や地山が残存しており、手掘りによる精査を行った。調査面積は、59.6㎡である。体育館西側の一部で２層が残存しており、当初は２区として精査対象としたが、掘削が２層まで及ばないこととなり精査は行わなかった。これら以外は、既存管による既掘削範囲か、新しい盛土の範囲内であった。

本調査を実施した区域は、調査順に１・３・４区とした。１区ではピット７基を検出した他、北側部分に２層が残存していた。３区はほとんどが撹乱されていたが、東端部分と西端部分で２基の遺構を検出した。４区ではピット３基を検出し、東側部分で２層が残存しているのを確認した。遺物は陶磁器類や瓦が少量出土した。

②立会調査

地下鉄東西線機能補償関係の立会調査は、2006年度２件、2007年度８件、2008年度４件の、合計14件を実施した。以下に、各年度ごとに、立会調査の概要を示す。これらは、各年度の調査概要を報告した『年報24』『年次報告2007』『年次報告2008』において掲載した内容を再録したものである。

【2006年度】

2006年度に実施した、地下鉄東西線機能補償関係の立会調査は、２件であった。概要は、次のとおりである。

・ハンドボールコート改修工事に伴う調査（2006－７）

地下鉄東西線の補償建物が、体育館西側の多目的広場として利用されていた場所に建設されることとなったのに伴い、体育関係の施設の使用方法が見直されることとなった。その一環として、厚生会館北側にあるハンドボールコートが、地下鉄東西線補償関係の事業として改修されることとなった。工事内容は、舗装の改修、既存側溝や排水管の改修で、いずれも掘削深度が浅いため、立会調査とした。工事は、表層の掘削にとどまり、遺構・遺

物は発見されなかった。

・マルチメディア教育研究棟北側ほか支障樹木伐採・移植に伴う調査（2006－９）

川内北地区の敷地の北端には、樹木が並木状に植えられていた。地下鉄東西線は、川内北地区の北側に沿って建設されるため、これらの樹木を除去することが必要となり、大半は伐採されることとなった。しかし、オオモミジ２本については、移植することとなったため立会調査を実施した。移植のために樹木の周囲を円形に、深さ約100㎝の溝状に掘ったところ、一部で溝状の遺構が確認された。そのため、それ以上深く掘削することは中止し、この深さで進められる範囲で、移植工事を続けることとした。

【2007年度】

2007年度に実施した、地下鉄東西線機能補償関係の立会調査は、８件であった。その内、屋外給排水設備その他工事については、本調査を実施した区域（仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第12地点・略称ＢＫ12）と、立会調査で対処した区域（立会調査番号2007－15）の両方がある。これについては、立会調査部分も、上記した発掘調査の項目の中で、併せて概要を述べている。それ以外の７件の概要を、以下に示す。

・東西線機能補償による駐輪場移転等その２（スロープ整備、2007－２）

地下鉄東西線によって、従来の敷地の北端が失われるため、川内北地区全体で、駐輪場や駐車場の再配置が必要となった。2007年度には、地下鉄工事に先立つ市教委による埋蔵文化財調査も開始され、それらの工程の関係上、早急に事業を進めていく必要があった。そのため、工事の条件と計画が整った部分から、順次事業が発注され、それに伴い土木工事の届出がなされて、立会調査を実施していくこととなった。なお立会調査については、実施した順序で番号を付けており、届出の順番とは一致していない。

この工事は、共通実験棟北側の段差のあるところを通っている、駐輪場へ至る通路のスロープ部分を整備する工事である。擁壁基礎の掘削（深さ30㎝）と、舗装を直すための掘削（深さ25㎝）が行われたが、いずれも浅いため、新しい盛土の範囲におさまり、特に問題はなかった。

・市埋文調査機能補償による駐輪場移転等（2007－３）

地下鉄東西線工事に先立って、仙台市教育委員会による埋蔵文化財調査が実施されるため、調査対象区域に置かれていた駐輪場を移設するための工事である。川内北地区の北西よりの場所にある国際交流センターの南側一帯に駐輪場を整備する工事である。既存舗装を撤去し、舗装をやり直すもので、掘削深さはいずれも30㎝以下の浅いものであった。掘削は、新しい盛土の範囲内におさまり、問題はなかった。

・東西線機能補償による駐輪場移転等その１（2007－４）

上記した市埋文調査機能補償によって移転する駐輪場（立会調査番号2007－３・駐輪場１）に外灯を設置する工事と、厚生会館北東側にある駐輪場に上屋を設置するための基礎工事（駐輪場２）、プールの東側に駐輪場を設置する工事（駐輪場３）である。駐輪場１では、外灯基礎の設置と電気ケーブル配管埋設の工事が行われた。外灯基礎は、深さ１を超える掘削が行われたが、盛土が厚い場所であったためか、新しい盛土におさまった。電気ケーブル配管埋設は、深さ40㎝以下と浅いため問題はなかった。駐輪場２では、基礎ブロックが埋設されたが、深さが20㎝程度とごく浅く、問題はなかった。駐輪場３は、舗装を行う工事のため、掘削される深さは30㎝以下で、こちらも問題はなかった。

・東西線機能補償による駐車場整備その１（2007－７）

川内北地区の西端に近いテニスコートの東側一帯と、北地区東側の課外活動施設の東側の２ヶ所に、駐車場を整備する工事である。テニスコート東側では、舗装、外灯設置と電気ケーブル埋設、花壇の移設と花壇用の給水管埋設、車止めやフェンスの設置などの工事が行われた。外灯基礎の掘削が１ｍ前後と深い以外は、比較的浅い掘削であった。新しい盛土がやや厚いためか、掘削は盛土の範囲におさまった。課外活動施設東側では、舗装工事だけで、掘削は30㎝未満とごく浅く、問題はなかった。

・東西線機能補償による駐車場等整備その２（支障樹木伐採除根、2007－11）

東西線機能補償による駐車場整備その１（立会調査番号2007－７）において整備された課外活動施設東側の駐車場の、さらに南側に接する区域の整備である。支障樹木を撤去し、周囲を舗装する工事である。掘削深さは27㎝以下とごく浅く、問題は生じなかった。

・東西線機能補償による駐輪場移転等その３（駐輪場上屋取設）（2007－16）

東西線機能補償による駐輪場移転等その１において上屋設置工事を実施した、厚生会館北東側の駐輪場（立会調査番号2007－４、駐輪場２）の西側に並んでいる駐輪場に、上屋を設置する工事である。上屋設置のための基礎と、併せて設置される雨水桝・雨水溝・雨水管の部分が、掘削を伴う工事であった。いずれの掘削も、深さ50㎝以下であったため、新しい盛土の範囲内におさまった。

・市埋文調査に伴う樹木移植（2007－18）

川内北地区の北東隅に近い場所に植えられていた樹木を、市教委による埋蔵文化財調査に先立って、移植する工事である。東西線工事対象区域の樹木のほとんどは伐採されたが、この地点のウワズミザクラ２本とムラサキシキブ１本については、移植することとなった。盛土が厚いと考えられる場所であったため、立会調査とした。掘削は新しい盛土の範囲内で、問題はなかった。

【2008年度】

2008年度に実施した、地下鉄東西線機能補償関係の立会調査は、４件であった。概要は、次のとおりである。

・テニスコート東側便所新築工事（2008－２）

地下鉄東西線建設のため取り壊される屋外便所の代替えとして、新たに屋外便所を新築する工事である。基礎の掘削は50㎝程度におさえられることとなったため、立会調査で対処した。掘削は、新しい盛土の範囲内におさまり、問題はなかった。

・屋外環境整備（プラザ等）工事（2008－５）

川内北地区の中央部は、講義棟と厚生会館にはさまれた広場となっている。この広場に、南側の道路から入ってくる区域を、プラザとして整備することとなった。工事内容は、舗装、植樹、サイン設置、車止設置、排水溝･配水管整備などであった。周辺の調査成果から、排水管などの工事では、掘削が遺構面に達する危険性が考えられた。そのため、工事実施時に立会調査を行い、掘削が遺構面に達することが明らかとなった区域については、工事を中断して記録保存のための本調査へ移行する体制を組むこととした。結果的には、工事による掘削は新しい盛土の範囲か、既に掘削された範囲におさまり、全て立会調査で対処可能であったため、記録保存のための調査を実施した区域はない。なお、入口部分に設けられた車止めのゲートポール設置箇所の１ヶ所では、溝の側石の可能性のある間知石が発見された。江戸時代に遡るものか、明治時代以降のものか明確でなかったため、この場所での掘削は中止し、既存施設で掘削されていた近隣区域に、設置位置を移動させる措置をとった。

・川内サブアリーナ棟新営付帯工事（2008－７）

地下鉄東西線建設により取り壊されることとなった、武道場と第二食堂などの機能補償のための代替建物として川内サブアリーナ棟が建設されることとなり、建物本体部分の事前調査は、2006年度から2007年度にかけて実施した（仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点・ＢＫ11）。建物本体以外の付帯工事部分については、2008年度の工事実施にあわせて、対処することとした。建物本体以外で掘削を伴う工事は、給排水・電気・ガスなどの設備関係の配管埋設、建物南側での屋外環境整備（舗装･ベンチ設置など）であった。これらについては、建物本体の発掘調査で確認できた､新しい時代の盛土の範囲内の深さにおさめることを原則とした。排水管など、掘削深度が深くならざるを得ないものについては､近現代の撹乱の中に入るようにルートを設定することとした。これらの対処を行った結果、今回の工事での掘削は、いずれも新しい盛土や、既に掘削された範囲におさまり、問題はなかった。

・旧第二食堂周辺取り壊し等工事（2008－８）

上記した川内サブアリーナ棟が完成したことに伴い、武道場と第二食堂が取り壊されることとなった。建物の取り壊しは掘削を伴わない工事であったが、関連して実施される第二食堂周辺の舗装・境界ブロック・横断防護柵撤去などの工事では、若干の掘削がなされることとなった。いずれも、設置工事の際に既に掘削されている範囲を掘削することになるため、立会調査とした。既に掘削された範囲にとどまり、特に問題はなかった。

③整理作業と遺物の保管方法

武家屋敷地区第11地点の調査の終了後ただちに、2007年９月から整理作業を開始した。2007年度は、武家屋敷地区第11地点から出土した遺物の、洗浄や注記などの基礎的作業を実施した。2008年度は、第11地点の出土遺物の分類・接合・集計・実測・トレース・写真撮影などの作業を行った。また、遺構の検討や、遺構図面の整理・作成などの作業も行った。武家屋敷地区第12地点については、出土遺物が少なかったため、当年度に全ての作業を実施している。2009年度は、武家屋敷地区第11地点に関する、残る作業を実施した。遺構の検討や遺構図面の作成・トレース、全ての遺物の実測・トレース・写真撮影、遺物観察表の作成、図版のレイアウトなどの作業を行った。2008年度と 2009年度の整理作業では、いくつかの作業を外部委託している。遺物実測図の作成では、磁器と陶器の文様部分について、国際文化財株式会社に委託し、オルソイメージャーによって撮影したデジタル写真をもとに作成した。遺物写真の撮影は、有限会社仙台写真工房に委託して行った。2010年度は、一部残っていた原稿作成と編集作業を行い、印刷刊行する運びとなった。

武家屋敷地区第11地点の調査では、木製品・漆塗製品・金属製品など、保存処理が必要な遺物も出土している。東北大学埋蔵文化財調査室では、木製品と金属製品について、当調査室で保存処理を進めている。木製品については、1997年度以降、糖アルコール法によって処理している（年報16）。武家屋敷地区第11地点から出土した遺物についても、当調査室で保存処理を行うこととした。

2007年度は、武家屋敷地区第11地点から出土した処理の必要な遺物の中で、植物繊維で編まれた俵２点など、大型の遺物の処理を開始した。翌2008年度は、前年度に引き続いて植物繊維で編まれた俵の処理を実施した他、しがらみ・杭・木樋など、大型の遺物の処理を実施した。2009年度には、整理作業が進んだ木製品・金属製品などの保存処理作業についても、一部処理を行った。保存処理が必要な残る遺物については、当調査室の通常業務として、2010年度以降も継続して実施する予定である。

東北大学埋蔵文化財調査室では、整理作業済みの出土遺物は、容器の大小にかかわらず、箱の数で保管遺物数量を管理している。再整理や詰め直しなどによって箱番号を変更する必要が生じた場合、その調査分の箱番号を変更するだけで済むように、調査ごとに箱番号を付し、箱台帳を作成して保管している。ただし、保存処理を行う必要のある遺物については、別に保管しているため、ここには含まれていない。累積した保管資料の数量については、『年報』や『年次報告』で年度ごとに整理して報告しているところである。

武家屋敷地区第11地点の出土遺物は、調査時には 165箱であったが、整理作業後には 121箱となった。整理後の方が箱数が減少しているが、一つの箱にできるだけ多く入るように詰め方に留意したことと、上述のように保存処理が必要な遺物を抜き出して別扱いにしていることも関係している。武家屋敷地区第12地点の出土遺物は、調査時には１箱、整理作業後も１箱であった。

第Ⅱ章　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区の立地と歴史

１．仙台城と周辺武家屋敷の立地

仙台平野は、宮城県のほぼ中央部に位置し、西は奥羽脊梁山脈とそこから派生する丘陵地帯に接し、東は仙台湾に開いた平野である。狭義では、北は仙台市域北部の丘陵地帯によって区切られ、南は阿武隈川によって区切られる範囲を指す。仙台平野には、奥羽脊梁山脈に源を発した河川が西から東へ流下している。北から七北田川、広瀬川、名取川である。この中の広瀬川は、丘陵地帯を抜けて仙台平野に入ると、青葉山などの丘陵地の北東麓を流下し、やがて名取川に合流し、太平洋にそそいでいる。この広瀬川の両岸には、河岸段丘が発達している。河岸段丘は、高位から台原段丘・上町段丘・中町段丘・下町段丘と分けられており、河岸段丘の間は段丘崖となっている。

仙台城は、宮城県仙台市青葉区川内および荒巻に所在する。現在の仙台市街地中心部から、広瀬川を西に渡った川内・青葉山地区に位置しており、市街地西部に張り出す青葉山丘陵の東縁辺と、その裾に広がる河岸段丘上に立地している。広瀬川が青葉山などの丘陵地の北東麓を流下しているため、広瀬川の南西側にあたる川内地区の河岸段丘はさほど広くない。一方、広瀬川の北東側には、広い河岸段丘面が連なっており、その東縁は活断層である長町 - 利府線によって画され、沖積平野に接している。仙台城下のほとんどの範囲は、この広瀬川北東側の河岸段丘上に位置している。現在の仙台市街地中心部も、この広瀬川の河岸段丘上に立地し、仙台城下を引き継ぎ発展してきた。

仙台城の構成は、大きく本丸・二の丸・三の丸（東丸）に分かれる。

本丸は広瀬川と竜の口渓谷に囲まれた標高115 ～ 138mの、青葉山の高位段丘面（青葉山Ⅲ面）に立地している。本丸の北西側に二の丸が、北東側に三の丸が配置されているが、本丸だけは一段高い高位段丘面に位置している。本丸の東側は、60m以上の断崖となっている。現在の広瀬川は、本丸の立地する丘陵からやや離れたところを流れている。しかし江戸時代には、広瀬川は大きく蛇行して、本丸東側の崖下までせまっていた。本丸の南側は、広瀬川の支流である竜の口渓谷の急崖で画されている。本丸は防御を重視して、このような急峻な地形を利用して造られたと考えられている。

本丸の北側に広がる川内地区は、広瀬川によって形成された河岸段丘の中の、上町段丘面・中町段丘面・下町段丘面にあたる。二の丸は標高54 ～ 71mの上町段丘面に、三の丸は標高40m前後の下町段丘面に立地する。周辺の武家屋敷も、西側の標高の高い部分から広瀬川に向かって順に、上町段丘面・中町段丘面・下町段丘面に立地する。東北大学の川内北地区は、東側の一段低いグラウンド部分が中町段丘面にあたり、それ以外の区域は上町段丘面に相当する（図３）。

これらの河岸段丘を開析しつつ、広瀬川の支流が、西から東へ流れている。これらの支流のひとつである千貫沢が、二の丸の北側を流れており、千貫沢をはさんで南側が二の丸地区、北側が二の丸北方武家屋敷地区となる。千貫沢は、標高差の大きい河岸段丘を横切る形で流下していることから、これらの段丘面を深く切り込んでいる。二の丸裏門から北に延びる道路が千貫沢を渡るところに造られた千貫橋付近では、段丘面の標高が57m程度、千貫沢の沢筋の標高は46m程度である。千貫橋付近の段丘面と千貫沢の標高差は11mあまりになり、深くて急峻な沢筋となっている。大橋付近を流れる広瀬川の河原の標高は22m程度で、千貫橋付近の段丘面との標高差は、およそ35mとなる。また大手門の北側にも沢筋が残っており、仙台城の造営によって改変されていると思われるが、本来は急峻な沢筋であったと考えられる。

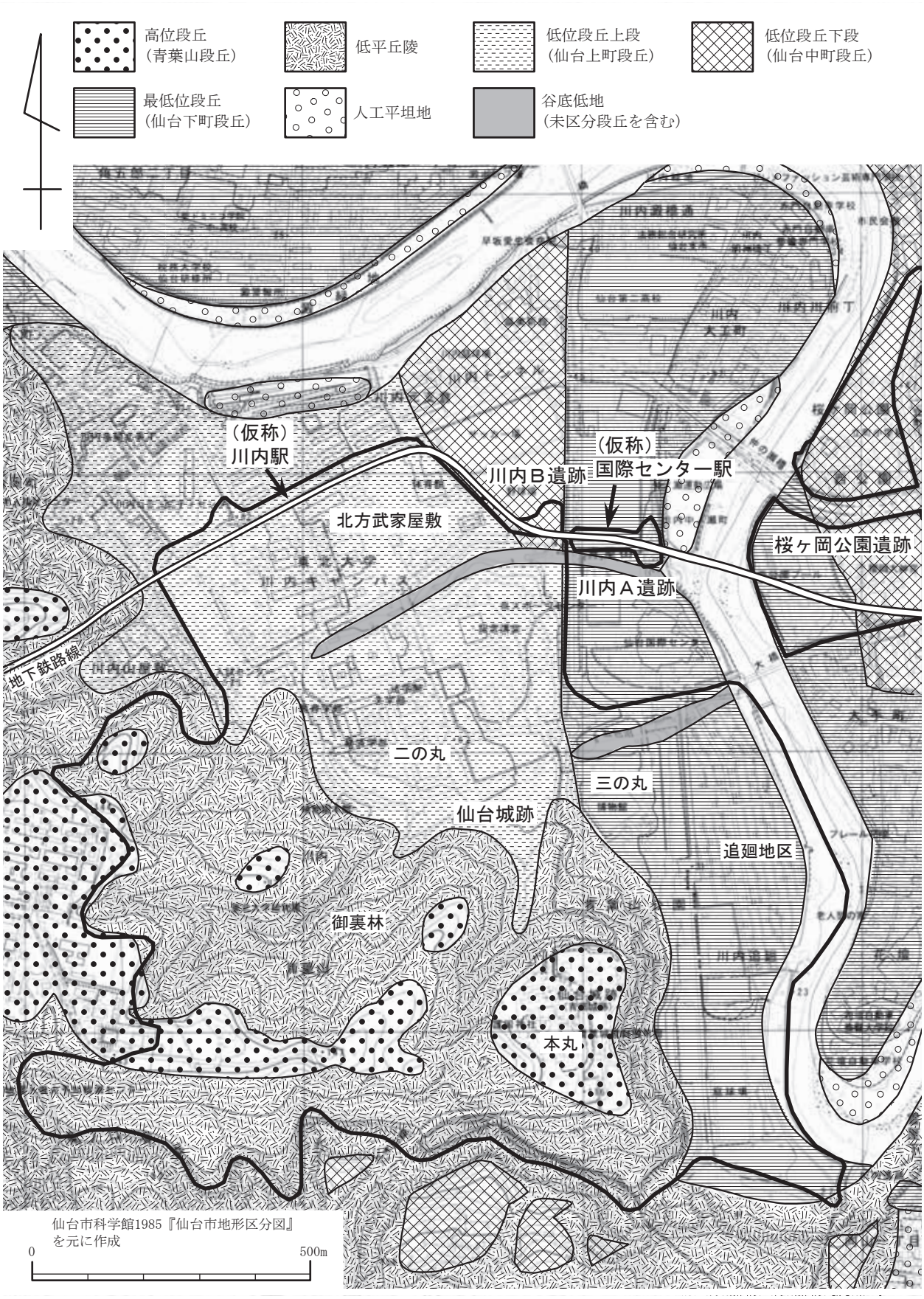


図３　仙台城周辺の地形区分図
Fig.3　Topographical map around Sendai Castle

２．仙台城と仙台城下の武家屋敷

（１）仙台城の歴史

仙台城は、仙台藩初代藩主である伊達政宗によって、慶長５年（1600年）12月24日の縄張始めを嚆矢として、築城される近世城郭である。

この伊達政宗による築城以前には、国分氏の千代城が存在したことが知られていたが、その実態は不明なままであった。1998年の仙台市教育委員会による本丸石垣修復工事に伴う調査の際に、虎口・竪堀・平場・通路などの遺構が検出され、初めて国分氏の千代城の遺構の一端が明らかとなった（金森・渡部2009）。千代城は、文献記録や発掘調査成果の検討から、築城期は不明であるが、16世紀末の天正年間（1573 ～ 92年）頃に廃絶されたと考えられている。

伊達政宗によって造営された仙台城の本丸は、慶長７年（1602年）には、土木工事にあたる普請がほぼ完成していたと考えられる。各種の殿舎建築は継続中であったと思われ、本丸の中心建物となる「大広間」は、慶長15年（1610年）に完成したとされる。築城時に、本丸北側には石垣が築かれるが、石垣修復に伴う発掘調査によって、３時期に渡る変遷が明らかとなった。築城期のⅠ期石垣は、元和２年（1616年）の地震で大きな被害を受け、Ⅱ期石垣が築かれる。Ⅱ期石垣も、寛文８年（1668年）の地震で大きく崩壊し、現存するⅢ期石垣が造られたことが明らかとなっている（金森・渡部2009）。

仙台城が築城された時点での、本丸以外の施設を含めた仙台城の全体像は、必ずしも明らかではない。

後に三の丸（東丸）とされる区域では、仙台市教育委員会による発掘調査によって、政宗時代の茶室や四阿の可能性のある建物跡などが発見されている。池跡も検出されており、庭園が伴うものと推定されている（佐藤洋ほか1985）。本丸に付随した施設として、整備が進められていたと考えられる。

この段階では、二の丸は造られておらず、後に二の丸が造られる場所には、政宗の四男である伊達宗泰の屋敷があったとの伝承がある。しかし、この伝承を検証できる資料はない。本丸の築造が進められた慶長年間には、伊達宗泰は元服前の幼少期であり、この時期に伊達宗泰の屋敷が置かれていたと想定することは難しい。伊達宗泰の屋敷が置かれていたとしても、本丸築城期より遅れる可能性もある。また、他の重臣の屋敷が置かれていた可能性を示す史料もある。文献史料に残されていない、これら以外の屋敷が置かれた可能性も検討していく必要もある。いずれにせよ、二の丸第９地点などの発掘調査では、江戸時代初頭に遡る遺構が検出されており、本丸築城期から、何らかの施設が置かれていたことは確実である（年報８・９）。

元和６年（1620年）には、伝伊達宗泰屋敷の北側に、政宗の長女五郎八（いろは）姫の居館である「西屋敷」が造られる。五郎八姫は、伊達政宗の正室愛姫との間に生まれた長女で、慶長４年（1599年）に徳川家康の六男忠輝と婚約し、慶長11年（1606年）に輿入れする。しかし、元和２年（1616年）に忠輝が、大阪夏の陣の際の遅参・怠戦と、家臣による旗本殺害に対する不謝罪を理由に改易され、伊勢国に配流されると、五郎八姫は政宗の江戸屋敷へ帰され、さらに元和６年には仙台に移ることとなった。この五郎八姫の、仙台における居所として造られたのが「西屋敷」である。正保２年（1645年）の『奥州仙台城絵図』（正保絵図）に描かれており、東西102間、南北60間であったことが記されている。東側に門が描かれ、東向きの屋敷であったことが判る。二の丸第５地点の調査では、西屋敷期の礎石建物跡などが発見されており、その西側に複雑な形態の池が連なる庭園が広がっていたことが判明している（年報６・７）。

伊達政宗は、寛永４年（1627年）、仙台城下の南東側にあたる現在の仙台市若林区古城において、若林城を造営する。「仙台屋敷構」として幕府の許可を得たものであるが、周囲に堀と土塁をめぐらした城郭である。寛永５年（1628年）に若林城が完成すると、政宗は国元では若林城を居城とし、仙台城に滞在するのは、儀式など特別な場合に限られるようになる。対照的に、後の二代藩主伊達忠宗は、国元では仙台城に滞在していた。この若

林城の建物が、後の二の丸造営の際に、移築されていることが仙台藩の公式記録である『治家記録』に記されている。若林城跡の第５次調査と第８次調査で調査された１号建物跡が、仙台城二の丸を描いた『御二之丸御指図』に見られる「大台所」と一致することなどが明らかとなり、若林城の建物を仙台城二の丸に移築したという文献記録を裏付けることとなった（仙台市教委2006・2008）。

伊達政宗は寛永13年（1636年）に死去し、伊達忠宗が二代藩主となる。忠宗は、寛永15年（1638年）に、伝伊達宗泰の屋敷跡に二の丸を造営する。二の丸が造られると、仙台藩の政治・諸儀式のほとんどは二の丸で行われるようになり、藩主の居所も二の丸へ移る。これ以降、二の丸が仙台城の実質的な中枢となり、この状態は幕末まで維持されていくこととなる。二の丸の造営とほぼ同じ頃に、三の丸（東丸）には、米蔵が置かれるようになったと考えられる。

寛永15年に二の丸が造営された時点では、五郎八姫の「西屋敷」が、二の丸の北隣に存続していた。五郎八姫が寛文元年（1661年）に死去すると、もとの「西屋敷」は「天麟院様元御屋敷」と呼ばれ、蔵や作業所など、二の丸に附属する実務的な施設が置かれるように変化する。

17世紀末から 18世紀初頭の元禄年間には、四代藩主伊達綱村によって、二の丸は大改造が施される。その際、もとの「西屋敷」の敷地は二の丸に取り込まれ、中奥がもとの「西屋敷」の範囲に大きく拡張された。仙台城では、藩主と側室の居住の場を「中奥」と呼んでいた。この改造によって、仙台城は完成した姿を迎えた。二の丸は、文化元年（1804年）の火災でほぼ全焼する被害を受けつつも、従来通り再建され、幕末まで仙台城の中枢として維持されていく。

明治維新による新政府の成立と幕藩体制の崩壊により、仙台城も大きく変化する。仙台藩は奥羽越列藩同盟の中心として新政府に対抗するが、相次ぐ軍事的敗北の中で同盟は瓦解する。仙台藩は慶応４年（明治元年・1868年）９月に新政府に降伏謝罪し、12月には領地・領民をいったん取り上げられた上で、28万石を新たに拝領し存続が許された。明治２年（1869年）の版籍奉還により、藩主伊達宗基が仙台藩知藩事となり、二の丸には藩の統治機関たる勤政庁が置かれた。明治４年（1871年）の廃藩置県後は、仙台城が明治政府の管轄下に移り、二の丸には東北鎮台（後に仙台鎮台）が置かれる。本丸の建物は、明治の早い時期に取り壊されるが、二の丸の建物は鎮台本営として引き続き利用された。しかし明治15年（1882年）の火災で、二の丸建物のほとんどが焼失してしまう。そして明治19年（1886年）には仙台鎮台から陸軍第二師団に改称され、明治21年（1888年）には正式に師団常備軍制度が施行され、敗戦まで続くこととなる。二の丸跡には師団司令部が置かれ、三の丸跡には陸軍倉庫が置かれていた。本丸跡には、明治37年（1904年）に仙台招魂社（後の護国神社）が建てられ、戦没者を祀る場所へと変わっていく。

昭和20年（1945年）７月21日の仙台空襲の際には、仙台城の建物として最後まで残っていた大手門・脇櫓と巽門が焼失してしまう。敗戦後は、二の丸跡をはじめとする川内地区のかつての軍用地が、アメリカ軍の駐屯地であるキャンプ・センダイとなる。昭和32年（1957年）のアメリカ軍からの返還を受け、二の丸地区のほとんどは東北大学が使用することとなり、一部は仙台市の公園となり、現在に至っている。

（２）仙台城周辺の武家屋敷

仙台城下は、仙台城の造営と併行して、その建設が進められていく。慶長６年（1601年）の正月11日に、仙台城の普請始めが行われ、同じ日に「御城下地形ノ絵図を以テ諸士等ノ屋敷割仰付ラル。」との記録が残されている（『貞山公治家記録巻之二十一』）。この時以降、城下の建設が進められていったものと考えられる。江戸時代の地誌である『仙台萩』には、慶長７年（1602年）に、仙台に移る以前の本拠であった岩出山の士民に、仙台へ移るよう命令したことが記されている。その戸数などは不明ながら、家臣団や町方をはじめ多数が移住したと見られている。仙台城下の範囲は、その後徐々に拡大し、それに伴い再配置が行われる場合もあったが、基本的な

構成は踏襲されていく。川内地区は、一部の寺社と職人屋敷を除くと、侍屋敷として使われていた。

仙台城下の様相を知ることができる基本的な資料は、城下絵図である。表５に、知られている主要な城下絵図の一覧を示した。これらの城下絵図には、年代が近接するものもあるため、時期による変遷が判るように選択して、川内北地区周辺の部分を示したのが、図４・５である。道路の変化を見るため、明治時代の地図についても、併せて示しておいた。

仙台城下を描いた知られている最も古い絵図は、正保２年（1645年）の『奥州仙台城絵図』である（図４－１）。これは幕府提出用絵図のため、細かな屋敷割は記されていないが、仙台城の周辺には「侍屋敷」と記されており、この時点では武家屋敷が広がっていることが判る。これまでの川内北地区での調査でも、各所で江戸時代初頭に遡る遺構や遺物が発見されており、この区域では江戸時代初頭から屋敷地が整備されていったものと考えられる。

正保絵図以降の藩政用絵図には、屋敷割が記され、人名が書き込まれたものが多くある。川内地区においては、大手門の周囲などに最も上級の家臣の屋敷が置かれ、それ以外の区域にも上級家臣の屋敷が多い。東北大学の川内北地区も、比較的上級の家臣の屋敷が置かれていた。川内地区全体の屋敷の様相については、第Ⅴ章２において検討しているので、詳細はそちらを参照していただきたい。

仙台城下絵図で、川内地区の道路の位置を見ると、正保絵図（図４－１）以降、明治15年（1882年）の地図（図５－13）に至るまで、基本的に変化がないことが判る。江戸時代における道路の位置の復元については、第Ⅴ章１で詳しく検討してので、ここではごく概略を述べることとする。

二の丸と北方武家屋敷との境には、千貫沢とそれを広げた堀がある。この千貫沢や堀沿いに「筋違橋通」が東西に走っているが、それより北側には東西方向の道路が「中ノ坂通」と「亀岡通」の２本ある。ところが現在は、千貫沢沿いの道路の北側には、東西方向の道路は１本だけである。現在のような道路は明治26年（1893年）の地図（図５－14）において、初めて見られるようになる。これと同時に、大手門から北側へ延びる道路も改変されている。大手門前から北へ延びる道路は、もともとは、千貫沢を渡る筋違橋の北側で鍵の手状に屈曲していたが、この時にまっすぐ北へ延びる道路へ変わっている。同様に、広瀬川を渡る大橋から大手門へいたる道路も、もとは大手門手前で屈曲していたのが、大橋からまっすぐ延びる形に変わっている。明治22年（1989年）の広瀬川の洪水によって木橋であった大橋が流失し、第二師団の要請で鉄橋が架けられることとなり、明治25年（1892年）に竣工した際に、大橋から大手門へ至る道路が直線になった。川内北地区の道路がつけ替えられたのが、大橋鉄橋架橋と同時かどうかは確認できていないが、明治21年（1888年）の第二師団の設置以降、一連の過程で川内地区の整備が進められていったものと考えて良いであろう。

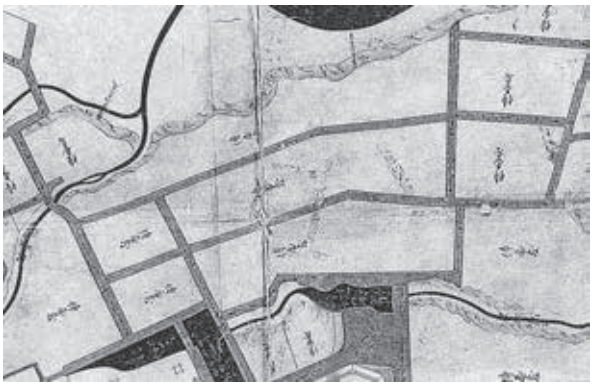
明治時代の地図も、初期のものは、全てを正確に測量して作成されたものではない。ある程度信頼が置けるものは、明治26年の地図以降であるが、この段階では川内北地区周辺の道路は、改変された後である。改変以前の道路を正確に測量した地図は、確認できていない。したがって、絵図や明治時代初期の地図をもとに、江戸時代の道路を正確に復元することは難しい。第Ⅴ章１で詳述するが、南北方向の道路については、ある程度復元根拠が知られている。しかし東西方向の道路である「中ノ坂通」と「亀岡通」については、復元根拠を欠いており、正確な位置を復元することは難しい。このような限界を踏まえて、江戸時代の道路の位置を、現在の地図上に推定復元したのが図６である。

千貫沢の北側を東西に走るのが「筋違橋通」である。その北側を東西に走るのが「中ノ坂通」と「亀岡通」である。二の丸裏門である台所門を出て、千貫橋を渡って北に延びる道路が「裏下馬通」で、それとほぼ並行して西側にあるのが「大堀通」である。筋違橋から北へ延び「中ノ坂通」に至るのが「川内柳丁」、さらに北へ延び澱橋へ至るのが「澱橋通」である。

武家屋敷地区第11地点は、南北を「中ノ坂通」と「亀岡通」にはさまれ、東西を「裏下馬通」と「澱橋通」にはさまれた東西に長い区域の、西端に近い部分に相当するものと考えられる。この区域は、北側の「亀岡通」に

表５　主要な仙台城下絵図
Tab.5　List of picture maps where Sendai town was drawn in Edo period

製作年代（西暦）	名　　称	『仙台城下絵図の研究』	『絵図・地図で見る仙台』	『絵図・地図で見る仙台』2	現　所　蔵	旧 所 蔵	図
正保２年 1645	奥州仙台城絵図	一 付図１・14	①		斎藤報恩会	斎藤報恩会	図４－１
寛文4年 1664	仙台御城下絵図	二 付図２	②		宮城県図書館73	伊達家	図４－２
寛文８・９年 1668～69	仙台城下絵図	三 付図15				第二高等学校	図４－３
寛文９年 1669	仙台城下絵図	四 付図３			宮城県図書館74	伊達家	－
寛文・延宝年間（天和２） （1682）	奥州仙台城并城下絵図	五 付図なし			宮城県図書館75	伊達家	－
延宝６～８年 1678～80	仙台市街絵図	六 付図なし			宮城県図書館76	伊達家	－
延宝６～８年 1678～80	仙台城下大絵図				宮城県図書館77		－
延宝６～８年 1678～80	仙台城下大絵図	七 付図４・16			宮城県図書館78	宮城県図書館	図４－４
延宝６～８年 1678～80	仙台藩治絵図	八 付図５				第二高等学校	－
延宝６～８年 1678～80	仙台城下絵図				宮城県図書館79		－
延宝６～８年 1678～80	仙台御城下絵図	九 付図なし			宮城県図書館80	宮城県図書館	－
延宝９年～天和３年 1681～83	仙台城下絵図			①	仙台市歴史民俗資料館		図４－５
天和2年 1682	奥州仙台城并城下絵図	十 付図６			宮城県図書館81	伊達家	－
天和２年 1682	仙台御城下御絵図	十一 付図７				個人	－
元禄４・５年 1691～92	仙台城下五釐卦絵図		③		斎藤報恩会		図４－６
元禄16～享保17年 1703～32	仙台城下絵図	十二 付図８				個人	－
享保９年以降 1724～	仙台城下絵図			②	東北歴史博物館		図４－７
宝暦10年～明和３年 1760～66	仙台城下絵図			③	斎藤報恩会		図５－８
安永１～７年 1772～78	仙台城下絵図	十三 付図９				個人	－
安永１～７年 1772～78	仙台城下絵図	十四 付図なし				斎藤報恩会	－
天明３年～寛政元年 1783～89	仙台城下絵図	十五 付図なし				個人	－
天明６年～寛政元年 1786～89	仙台城下絵図	十六 付図10	④		仙台市博物館	個人	図５－９
文化９～14年 1812～17	仙台城下絵図	十七 付図11				個人	－
文政３年 1820	仙台城下絵図	十八 付図12				個人	－
安政３～６年 1856～59	安政補正改革仙府絵図	十九 付図13・17	⑤		戦災焼失	第二師団	図５－10



1．正保二年（1645年） 奥州仙台城絵図

2．寛文四年（1664年） 仙台城下絵図

3．寛文八・九年（1668・69年） 仙台城下絵図

4．延宝六～八年（1678～80年） 仙台城下大絵図

5．延宝九～天和三年（1681～83年） 仙台城下絵図

6．元禄四・五年（1691・92年） 仙台城下五釐卦絵図

7．享保九年（1724年）以降 仙台城下絵図

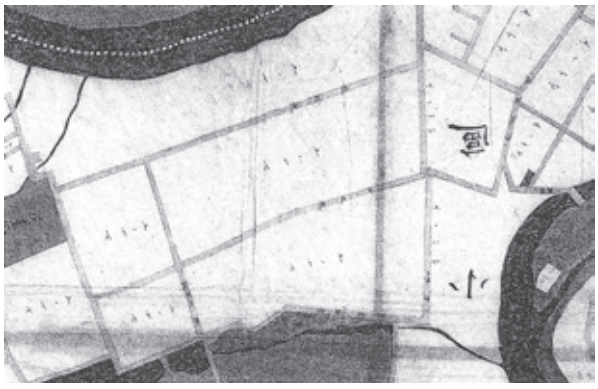
1・2・6『絵図・地図で見る仙台』
5・7『絵図・地図で見る仙台 第二輯』
3・4『仙台城下絵図の研究』

図4 川内地区周辺の絵図・地図（1）
Fig.4 Picture maps around the Kawauchi area (1)

8．宝暦十～明和三年（1760～66年） 仙台城下絵図

9．天明六～寛政元年（1786～89年） 仙台城下絵図

10. 安政三～六年（1856～59年） 安静補正改革仙府絵図



11. 明治8年（1875年） 宮城郡仙台町地引図

12. 明治13年（1880年） 宮城県仙台区全図

13. 明治15年（1882年） 仙台区及近傍村落之図

14. 明治26年（1893年） 仙台市測量全図

9・10・14『絵図・地図で見る仙台』
8・11～13『絵図・地図で見る仙台　第二輯』

図５　川内地区周辺の絵図・地図（２）
Fig.5　Picture maps around the Kawauchi area（2）

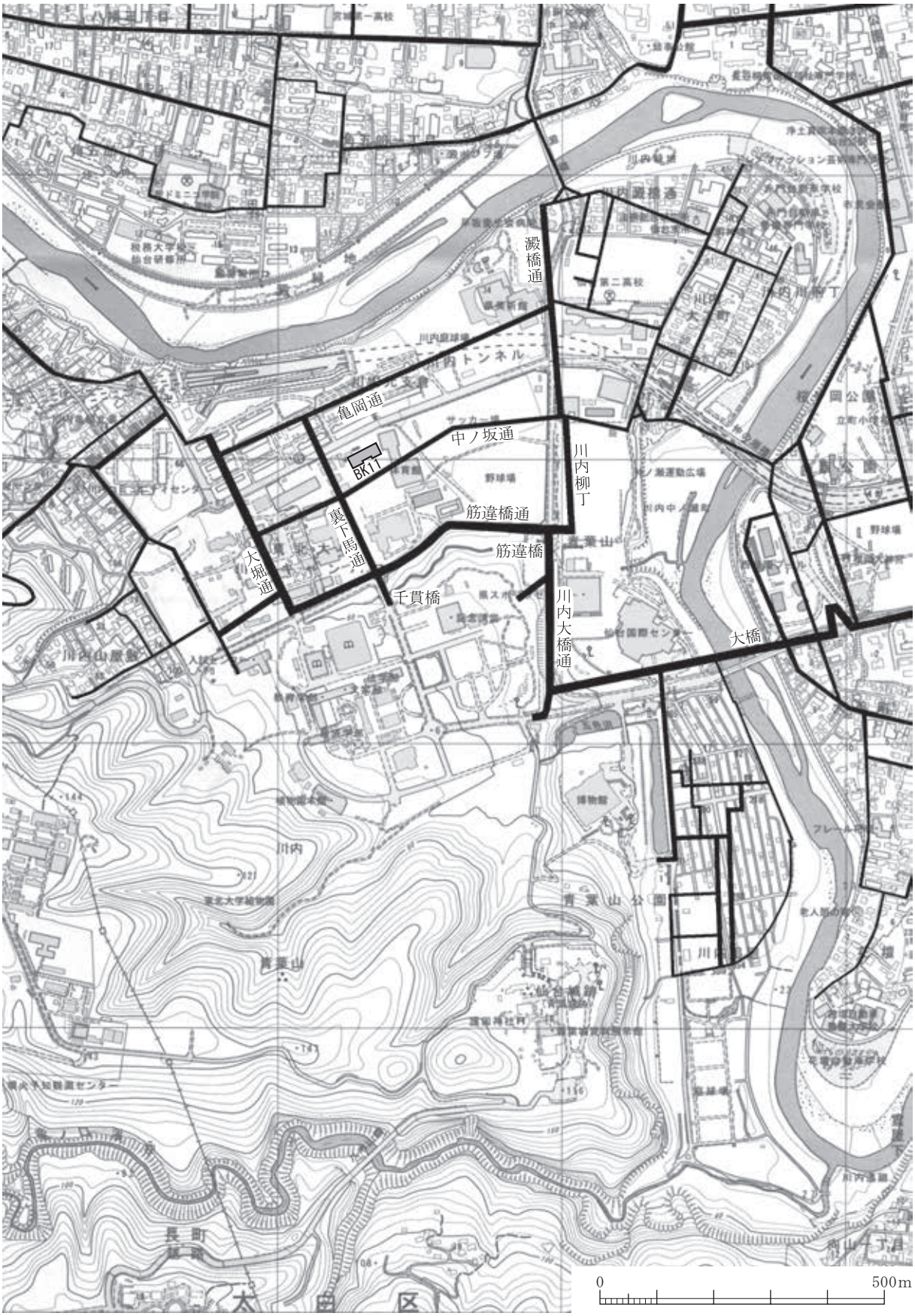


図６　川内地区における江戸時代の道路の復元
Fig.6　Reconstruction map of the road of Edo period at Kawauchi area

接する屋敷と、南側の「中ノ坂通」に接する屋敷に大別できる。時期によっては、さらに細かく区画されたり、２区画が一つとなっている場合もあるが、北側は８区画に、南側は７区画に区分され、各時期の絵図でも基本的に変化していないと考えられる。前述のように、東西方向の道路の位置関係が不確実なため、第11地点の調査区が、南側の屋敷に相当するのか、北側の屋敷なのか、あるいは両方が入ってくるのか、確実なことは判らない。

千貫沢の脇の「筋違橋通」に沿っている屋敷は、「裏下馬通」から３区画目の屋敷が不整形となっている。元禄４・５年の絵図（図４－６）では、この３区画目にあたる成田助之丞の屋敷の東側の屋敷境が、土手のような表現となっている。これが段丘崖に相当すると考えられる。現在のグラウンドとの境の段差が､段丘崖にあたる。この「筋違橋通」沿いの屋敷の位置関係から推定すると､「中ノ坂通」と「亀岡通」にはさまれた区画では､「裏下馬通」から３区画が段丘崖より上側と考えて良いだろう。宝暦10～明和３年の絵図（図５－８）では､「中ノ坂通」に接し「裏下馬通」から３区画目の渡部滝助の屋敷の東側の屋敷境が二重線で表現されている。ここだけのため確証はないが､これが段丘崖を示すものかもしれない。このような想定が正しいとするならば､「裏下馬通」と段丘崖との位置関係から、第11地点の調査区が「裏下馬通」から２区画目に相当することは間違いが無いと思われる。１区画目、あるいは３区画目が調査区に一部入ってくる可能性もあるが、東西の細かな位置関係は絵図の検討だけでは確定できないため、不明である。いずれの可能性もあると言えるだろう。

以上の検討を踏まえ､「中ノ坂通」と「亀岡通」にはさまれ､「裏下馬通」から３区画目まで、合計６区画の屋敷を使用していた人名を、城下絵図から拾い出したものが表６である。記載されている人名をもとに、これらの家臣の禄高や家格などについて、次に見てみたい。ただ、記載された家臣の全てについて、詳細が判明している訳ではないが、おおよその傾向は判明する。なお仙台藩では、生産高や知行高を、一般的な石高ではなく、戦国時代以来の貫高で表示していた。貫高と石高の換算は、寛永検地を経て、１貫（1000文）を 10石に換算するように定められた。寛永検地以前の換算については、いくつかの説がある。ただし、ここで検討材料とする屋敷拝領者が記載されている藩政用絵図が、寛文４年（1664年）以降のものしか存在せず、全て寛永検地より新しい時期のものとなるので、１貫を 10石と換算すれば良いこととなる。

仙台藩の家格は、家格の高い順から、一門・一家・準一家・一族・宿老・着座・太刀上・召出・平士・組士・卒というように分けられていた（表７）。平士は、仙台藩家臣団の主力を構成した家臣で、多くは大番組に属する大番士であった。平士（大番士）は、登城した際に控える部屋の名前をとって、上位から虎の間番士・中の間番士・次の間番士・広間番士に分けられた。組士と卒が下級藩士となる。

表６に示した６区画では、南西隅の区画が一時期南北に分けられている。細分された場合には、禄高がやや低い家臣が拝領している。それを除くと、この６区画では、家格では召出・着座が比較的多く、平士（大番士）では、虎の間番士と中の間番士が見え、その中では虎の間番士が多い。禄高は 30貫文から 50貫文のものが多いが、100貫文を越えるものも含まれている。

安政３～６年の絵図（図５－10）では、胆沢郡金ヶ崎に知行地を有していた、大町因幡の屋敷がこの区域に置かれていることが判る。大町氏は一族の家格で、寛永21年（1644年）二代藩主伊達忠宗の時代に、東磐井郡藤沢より金ヶ崎に移り、金ヶ崎要害を拝領し、明治維新を迎えるまでそこに居を構えていた。大町因幡は、安政３年（1856年）に奉行職に就いている。それまでの２区画分を使用しており、家格に応じて広い屋敷を拝領したものと考えられる。

以上のように、第11地点の調査区の周辺は、江戸時代を通じて、30貫文以上の、虎の間番士以上の家格の家臣が屋敷を構えていた場所であった。比較的上級の家臣の屋敷が並んでいた区域と言うことができるであろう。

表６　武家屋敷地区第11地点関連絵図人名
Tab.6　List of names of *samurai* lived at this location

年代（西暦）	図	北側「亀岡通」沿い			南側「中ノ坂通」沿い		
		西から１区画目	西から２区画目	西から３区画目	西から１区画目 北側	西から１区画目 南側	西から２区画目	西から３区画目
寛文４年 1664	図４－２	岡部有節 内科医　17貫357文	米山兵左衛門 中之間　15貫文	今村善太夫 不明　30貫24文	川野三四郎 不明		渋川助太夫 虎之間　108貫375文	黒沢勘右衛門 虎之間　30貫文
寛文８・９年 1668 ～ 69	図４－３	記載無し	米山兵左衛門 中之間　15貫文	今村善太夫 不明　30貫文	川野三四郎 不明		記載無し	黒沢勘右衛門 虎之間　30貫文
延宝６～８年 1678 ～ 80	図４－４	鈴木弥左衛門 召出　50貫文	新妻勘兵衛 虎之間　39貫388文	鈴木求馬 不明	（田）村彦八 不明	中村久兵衛 不明	斎藤吉兵衛 不明	黒沢勘兵衛 不明
延宝９年～天和３年 1681 ～ 83	図４－５	鈴木孫左衛門 不明　15貫文	新妻勘兵衛 虎之間　39貫388文	新妻求馬 中之間　22貫200文	中村久兵衛 不明		永沼五郎右衛門 着座　150貫文	黒沢勘右衛門 虎之間　30貫文
元禄４・５年 1691 ～ 92	図４－６	朽木元佐 虎之間　50貫文	塙喜三郎 虎之間　50貫文	牛田三之丞 虎之間　15貫文	田村数右衛門 虎之間　10貫文	〔　〕 不明	長沼玄蕃 不明	黒沢勘右衛門 虎之間　30貫文
享保９年以降 1724 ～	図４－７	白石善三郎 不明	内崎新左衛門 不明	鴇田正兵衛 虎之間　20貫文	佐々木左七郎 虎之間　40貫文		大町出雲 着座　63貫文	橋内柳安 不明
宝暦10年～明和３年 1760 ～ 66	図５－８	記載無し	松本縫殿右衛門 着座　130貫文	村上六兵衛 不明	木村蔵馬 不明		沼辺左太郎 召出　32貫文	渡部滝助 虎之間　15貫文
天明６年～寛政元年 1786 ～ 89	図５－９	竹内寿伯 不明	金上伝之進 召出　40貫文	山路八郎治 虎之間　38貫文	木村藤馬 虎之間　100貫文		沼辺陳伍 召出　42貫文	黒沢左門 中之間　30貫文
安政３～６年 1856 ～ 59	図５－10	大町因幡 一族　300貫文		浜田大善 不明	木村皆之助 虎之間　100貫文		平賀図書 着座　100貫文	志賀三太夫 不明

表７　仙台藩の家格
Tab.7　List of status in *Sendai-han*

家　格	人数	備　考
一門	11	角田石川氏・亘理伊達氏・水沢伊達氏・涌谷伊達氏・登米伊達氏・岩谷堂伊達氏・岩出山伊達氏・宮床伊達氏・川崎伊達氏・白河氏・三沢氏
一家	17	鮎貝・秋保・柴田・小梁川・塩森・大条・泉田・村田・黒木・石母田・瀬上・中村・石川・中目・亘理・梁川・片倉
準一家	10	猪苗代・天童・松前・葦名・本宮・高泉・葛西・上遠野・保土原・福原
一族	22	大立目・大町（胆沢郡）・大塚・大内・西大条・小原・西大立目・中島（江刺郡）・宮内・中島（伊具郡）・茂庭・遠藤・佐藤・畠中・片平・下郡山・沼辺・大町（宮城郡）・高城・大松沢・石母田・坂
宿老	3	着座のうち一番座の三家（遠藤・但木・後藤）
着座	28	正月等の儀式で登城し着座して藩主に挨拶する家臣
太刀上	10	正月賀礼に太刀を献上し藩主から盃を頂戴する家柄
召出一番座	38	正月宴会に召し出される家柄
召出二番座	51	正月宴会に召し出される家柄
平士（1000石以上）	6	
平士（500石以上）	68	
平士（100石以上）	994	
合　計	1,258	

第Ⅲ章　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点

１．調査経緯

（１）調査地点の位置

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点の調査は、仙台市地下鉄東西線建設によって取り壊される、武道場や第二食堂の機能補償として建設されることとなった、川内サブアリーナ棟の建設に伴う調査である。川内サブアリーナ棟は、体育館と第二食堂の間の、多目的広場として利用されていた場所に建設されることとなった（図７）。調査前の状況は、アスファルト舗装がなされていた区域である（図10－１）。

第Ⅱ章で検討したように、今回の調査地点は、江戸時代には二の丸北方の比較的上級の武家屋敷が置かれていた区域にあたる。二の丸裏門から千貫橋を渡って北に延びる「裏下馬通」の東側で、「中の坂通」と「亀岡通」にはさまれた区域であったと考えられる。

調査地点の現状は広場であったが、敗戦後のキャンプ・センダイ時代には、大型の建物である「カワウチ・シアター（Kawauchi Theater）」が建っていた場所である（図８）。アメリカ軍から返還された後、キャンプ・センダイの建物を東北大学で使用していた時点での建物配置図を、現況地図と照らし合わせたところ、調査地点には大型の建物が建っていたことが判明した。駐留アメリカ軍関係者の記録などから、「カワウチ・シアター」と呼ばれていた建物であることが明らかとなった。アメリカ軍からの返還後、東北大学教養部が川内北地区を使用するようになった後は、「教養部講堂」として使用されていた建物である。

今回の調査地点の北東側には、1996年度に調査を実施した武家屋敷地区第６地点（ＢＫ６）の調査区がある（年報14）。給水管埋設に伴う調査のため、細長い調査区となっており、検出された遺構の性格を判断することは難しいが、江戸時代の遺構が良好に保存されていた。明治時代初頭の畑の耕作土層や、江戸時代にさかのぼる整地層も、ほぼ全面に存在することが確認されている。

また調査地点の周辺では、地下鉄東西線計画に伴う試掘調査が、仙台市教育委員会によって2005年度に実施されていた（佐藤・竹内ほか2006）。調査地点北側の地下鉄路線予定区域で、東から西へ、Ｇ区№１～№５トレンチの５ヶ所で試掘調査が行われている。なお、この区域の地下鉄路線部分の事前調査は、仙台市教育委員会によって2008年度に実施されている。

これまでの調査結果から、川内北地区は、本来は西から東へ向かって緩やかに下っていく地形であったと考えられる。現在見られる平坦面と段差は、もともとの段丘崖を除くと、ほとんどは明治時代以降に造成されたものである。明治時代以降、西側の高い部分を削り、東側の低いところへ盛土する形で、平坦面を広げている。そのため、平坦面の東よりの部分では保存状態が良いが、西側では削平を受けていることが通常である。今回の調査地点も、武家屋敷地区第６地点の調査成果と仙台市による試掘調査結果から見て、西側ほど削平が大きいことが想定された。

（２）調査にいたる経緯

地下鉄東西線機能補償に関わる調査全体の経緯については、第Ⅰ章で述べているので、ここでは武家屋敷地区第11地点の調査に関わる経緯についてのみ簡単に記す。

2005年度に、東北大学と仙台市交通局との間での、機能補償に関係する協議が進められるにしたがい、機能補償の対象となる事業が明らかとなってきた。地下鉄東西線建設に伴い取り壊される主な建物は、体育館の北側に附属している武道場と、第二食堂などが該当することとなった。これら建物の代替えとして、体育館西側の多目的広場に川内サブアリーナ棟が建設されることとなった。建設予定地周辺での、従来の調査成果を検討したところ、予定地全域での発掘調査が必要と見込まれた。

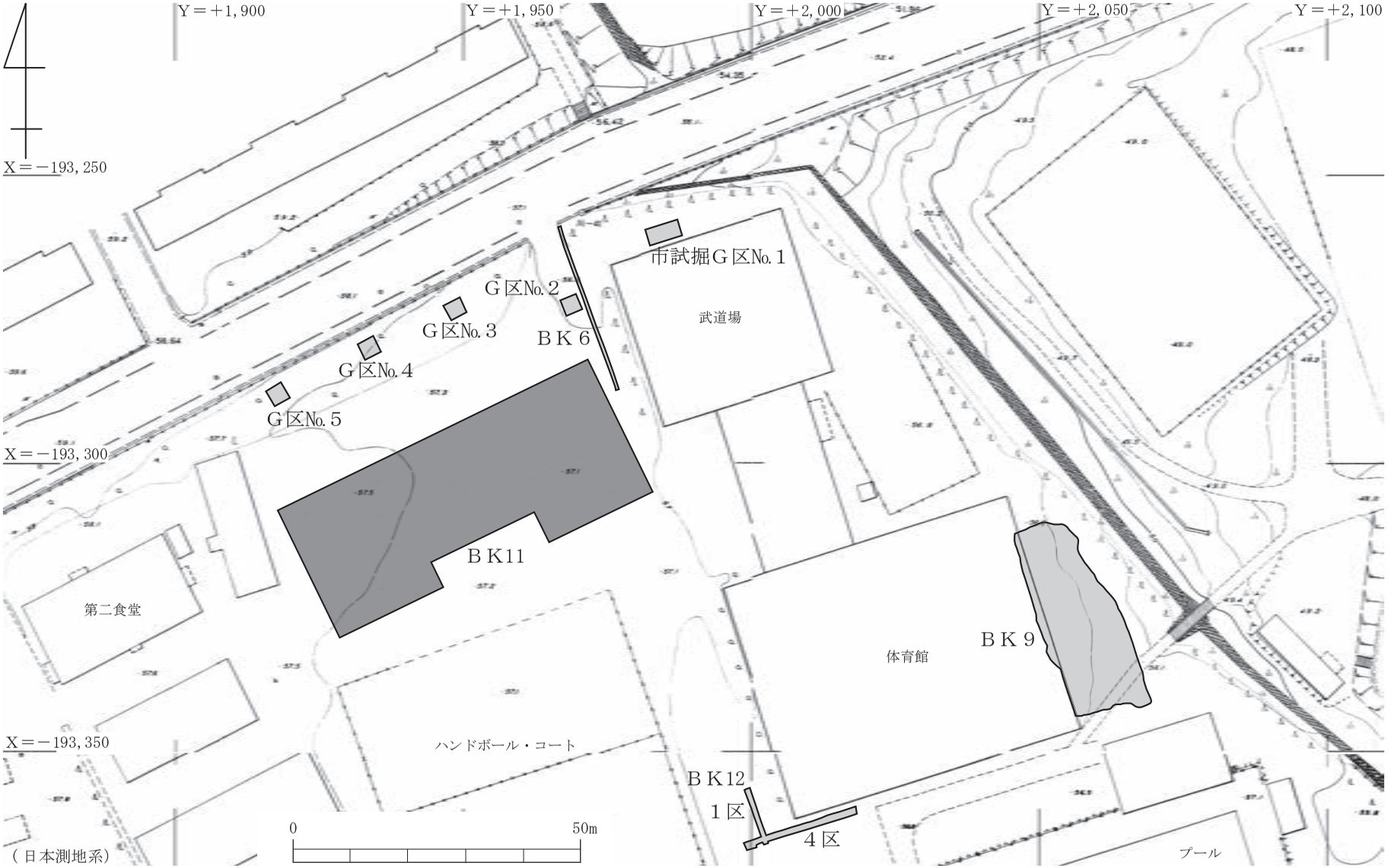
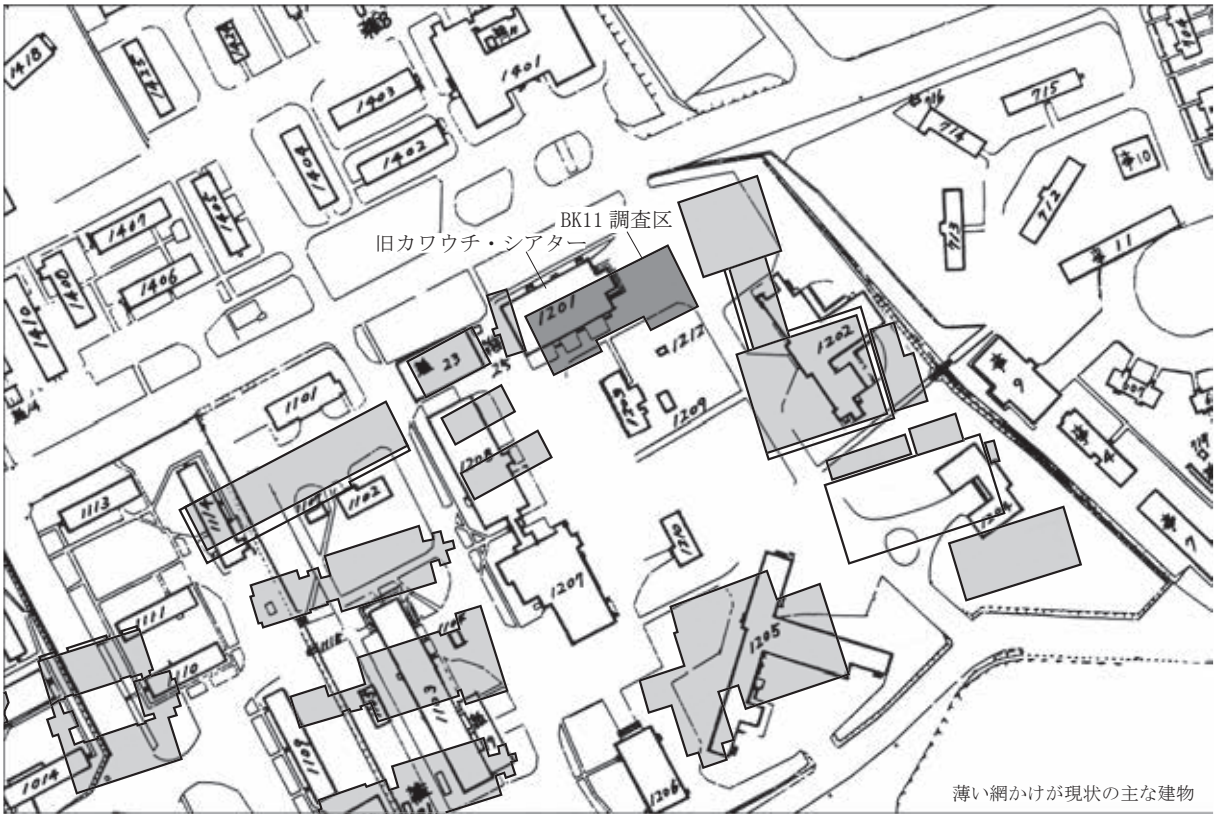


図７　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点調査区の位置
Fig.7　Location of BK11 (BK11 i.e. Location 11 of samurai residence)



1．キャンプ・センダイの建物と現状との対比（1964 年・東北大学教養部使用時の測量図をもとに作成、縮尺約 1:3000）

2．キャンプ・センダイ時代の空撮（1956 年）

3．東北大学が使用していた時期（1960 年頃・西から）

4．東北大学が使用していた時期（1960 年頃・南から）

5．東北大学が使用していた時期（1965 年頃・東から）

2～5：東北大学史料館提供

図8　キャンプ・センダイとカワウチ・シアター
Fig.8　Map of Camp Sendai and views of Kawauchi Theater

地下鉄東西線機能補償に関わる埋蔵文化財調査は、仙台市教育委員会の意向もあり、東北大学埋蔵文化財調査室で実施することとなった。そのため、具体的な調査の内容と調査計画や必要な経費などを、東北大学施設部の担当者と協議しつつ検討した。それを踏まえ、必要な経費を仙台市への機能補償費に組み込んで要求し、補償費を財源として調査を実施することとなった。

武道場などの取り壊される建物のある区域については、2008年度から仙台市教育委員会による地下鉄路線部分の埋蔵文化財の事前調査が予定されていた。そのため、武道場などは2007年度中に取り壊して、跡地を引き渡すことが機能補償の条件であった。この条件を満たすためには、それ以前に新しい川内サブアリーナ棟の建設工事が終了し、移転が済んでいることが必要となる。この期限を基準として、建設工事に必要な工期から逆算すると、2007年７月末までに調査を終了し、８月当初より建設工事に入ることが必要となった。埋蔵文化財調査室が実施した川内地区での調査実績から、通常の調査体制で、この期限までに調査を終了させることは難しく、調査を担当する文化財調査員を増員して、調査体制を強化することが必要であると考えられた。東北大学と仙台市交通局との協議においても、増員する調査担当職員の人件費を、必要であれば補償費の中に組み込んで対応できることとなった。そのため、地下鉄東西線機能補償関係の埋蔵文化財調査を担当する職員として、任期付き職員を採用して増員し、調査体制を強化し対処すること、必要な人件費は補償費に組み込むこととなった。

地下鉄東西線機能補償関係の整理作業は、2007年度から2009年度まで行う予定であったため、増員する職員の任期は2009年度末までとした。機能補償関係の発掘調査は2006年10月から開始したが、準備の関係もあり、任期付き職員の増員は、2007年度当初からとした。2007年度当初から、文化財調査員（一般職員）１名、技術補佐員（准職員）１名を任期付きで採用した。

（３）調査の方法と経過

①発掘調査の経過

以下に詳述するが、諸般の理由から、表土の掘削は４回に分けて実施することとなった。やや複雑な調査経過となるため、時系列に従って、調査の経過を以下に記しておく（図９）。

調査に着手した時点では、補償建物の詳細な設計が完了しておらず、規模や位置がおおよそ決定していた状態であった。しかし、仙台市の地下鉄工事スケジュールとの関係もあり、早急に調査に着手する必要があった。そのため、建物範囲に入ることが確実であった600㎡分について、先行して調査を開始することとし、2006年10月２日から重機による掘削を開始した。重機で表土を除去したところ、キャンプ・センダイ時代の「カワウチ・シアター」の建物基礎と傾斜した床の一部が残っていた（図10－２）。基礎は、一辺1.8m四方で、深さ２ｍを超える大規模なものが並んでいた。調査前の検討によって、シアターの基礎が残っていることは想定していたが、その規模は想定を大きく超えるものであった。また、シアターの床面が残存していたのも想定外であった。これらについては、表土掘削とは別に、撤去と搬出作業を別工事で発注し、重機で除去した。

重機で除去しきれなかった第二師団期以降の盛土と、撹乱の埋土については、手掘りによって除去した。川内地区の調査では、撹乱については、深さの大小にかかわらず、最初の段階で全て掘り上げることを基本方針としている。これは、井戸などの深い遺構が、撹乱の底面で検出される可能性もあることと、撹乱内の埋土に由来する新しい遺物の混入を防ぐことが目的である。また、整地層も関係した複雑に切り合う遺構の様相を把握するため、調査の最初の段階で撹乱を完全に除去し、断面を充分に観察できるようにするためでもある。

今回の調査区でも、先述した「カワウチ・シアター」の建物基礎をはじめ、近代以降の多数の撹乱が各所に存在した（図９）。調査区南よりのＧ～Ｉ列には、東西方向の礎石建物が確認された。建物北辺の礎石列は、大きな礎石が３個ほど重ねて入れられているものであった。第４地点（年報13）や第７地点（年報19）でも同様の礎石が発見されており、陸軍第二師団の建物基礎と考えられる。また調査区の各所に、排水管と排水桝が埋設され

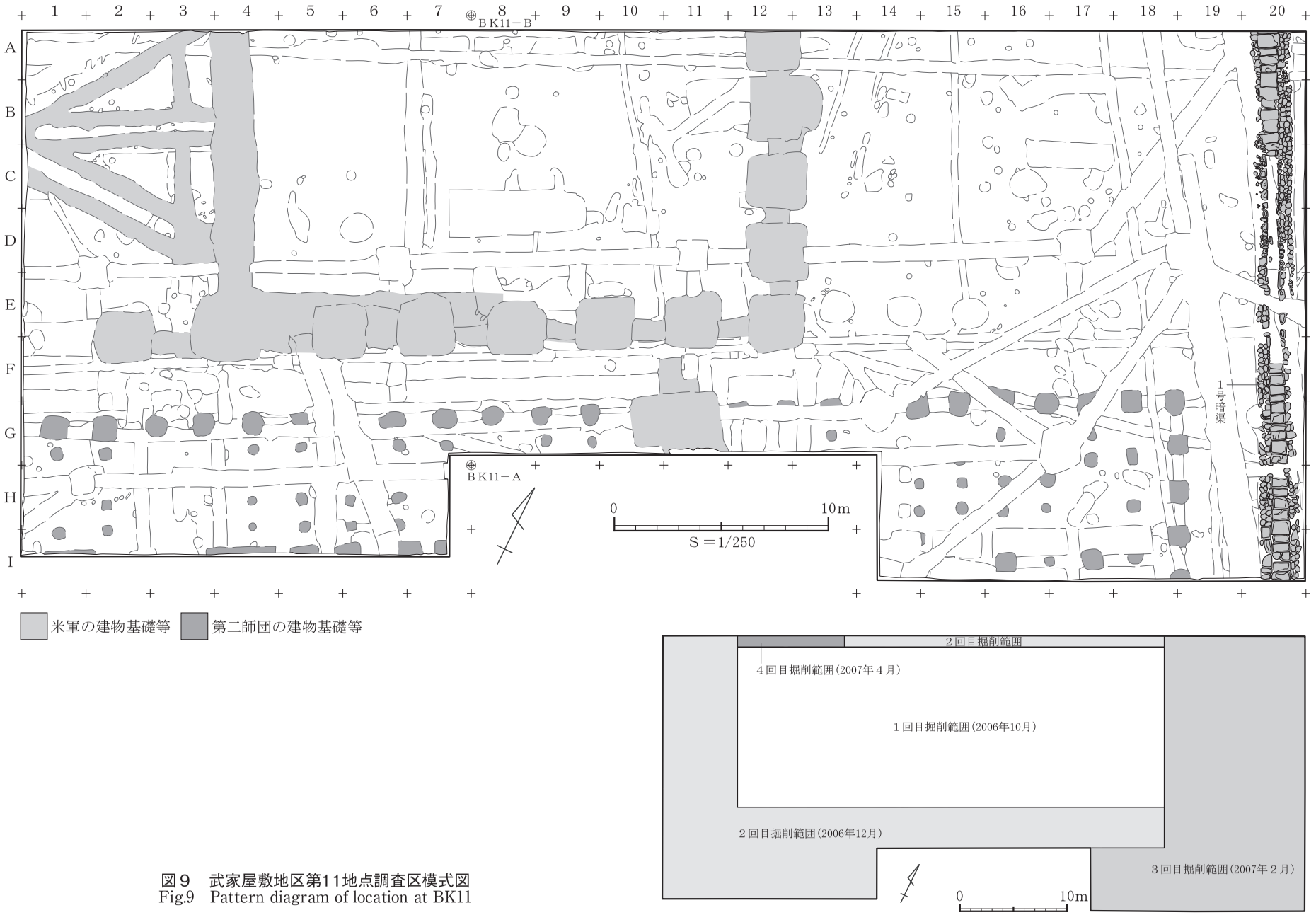


図９　武家屋敷地区第11地点調査区模式図
Fig.9　Pattern diagram of location at BK11

ていた。陸軍時代から戦後にいたるまで、各時期の排水管と考えられる。他に、キャンプ・センダイ時代の給水管なども埋設されていた。

撹乱を除去する過程で、第二師団時代の撹乱から、「九九式発射発煙筒二十箇入」と記入された木箱が発見された（図10－３）。木箱の内部には、未使用状態の「発射発煙筒」20本が納められていた。そのため、宮城県警仙台中央署に連絡し、対処をお願いした。同署を通じて陸上自衛隊に照会の上、中央署生活安全課で引き取り処分することとなった。なお、この件については、仙台中央署から報道機関への発表が行われ、新聞報道がなされている。

二の丸北方武家屋敷地区の調査では、明治時代初頭の畑の耕作土と考えられる地層が、各所で確認されている。今回の調査においても、調査区の南東側に、同様の地層（２層と呼称）が分布していた。それより上位の地層は、第二師団期以降と考えられるものであった。そのため、第二師団期以降と考えられる地層を１層として一括した。この１層と撹乱の埋土を除去した段階で、空中写真撮影と、空撮写真による写真測量を実施することとした。

最初に掘削した600㎡分については、11月までに表土除去と撹乱の掘り上げが終了したため、11月30日に空中写真撮影と、空撮写真による写真測量を実施した。この時点で建物計画の詳細が確定していたので、12月１日から416㎡について追加の重機掘削を行い、調査範囲を拡大した。２回目に掘削した範囲についても、表土除去と撹乱の掘り上げを引き続いて実施した。併せて、１回目に掘削した範囲については、深い撹乱で遺構が関係していない部分については、作業にあたって危険なため埋め戻すこととした。埋め戻す際には、雨水の排水を考慮して、要所に排水パイプを埋設するとともに、砕石を埋め暗渠状にするなどの工夫をした。埋め戻しは排出土で行ったが、上面には山砂を敷き、写真撮影時に目立たないようにするとともに、歩行時に汚さないよう工夫した。また、「カワウチ・シアター」の基礎による撹乱の一つを利用して、排水ポンプ用の釜場とし、200V の大型ポンプを設置した。

厳冬期を迎えるため、作業員を多数投入する作業は2006年12月末で一旦終了したが、少しでも作業を進めるため、一部の作業は継続して実施することとなった。最初に重機掘削を行った600㎡分の区域のほとんどでは、１層として一括した第二師団以降の盛土を除去した段階で、地山面が露出していた。2007年の１月と２月は、少人数の人員で、この区域での遺構の精査を小規模ながら実施した。

これらの作業と併行して、２回目の掘削の際に露出した使用中の排水管の迂回工事など、支障物の除去作業を行った。また、調査区東側に確保していた通路を移動する目処がたったため、2007年２月14日から仮囲いの位置を移動し、375㎡について３回目の重機掘削を行った。これによって、合計の調査面積1,401㎡の内、手掘りで掘削することとなった10㎡分を除く1,391㎡について、2006年度に調査に着手したこととなった。

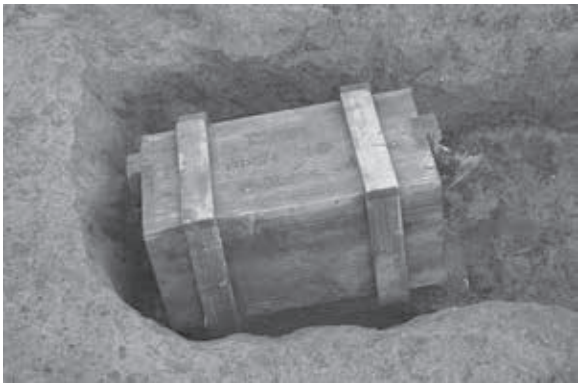
３月からは作業員を増員し、本格的な調査を再開し、追加掘削した区域の表土除去と撹乱の掘り上げを行った。また、埋蔵文化財調査室の文化財調査員２名が、冬期間に小型車両系整地等特別教育を受講した。３月の本格的調査の再開と同時に、小型油圧シャベルをリースで借り、特別教育を受講した文化財調査員が操縦して、調査を進めることとした。小型油圧シャベルは、撹乱の除去などの際に威力を発揮することとなった。

2007年度の調査は、３月からの作業をそのまま引き継ぎ実施した。新年度より、補償費を財源とした任期付き職員として、文化財調査員１名（一般職員）と技術補佐員１名（准職員）が増員され、調査体制が強化された。また、年度当初より、測量業務を国際航業株式会社文化事業部に委託し、同社の測量担当者１名が現地に常駐して測量作業を行うこととなった。

３回の掘削によって調査に着手した1,391㎡分については、４月上旬で１層の除去と撹乱の掘り上げが終了したため、４月11日に空中写真撮影と空撮写真による写真測量を実施した（図版１、図10－４）。残された10㎡については、仮設の作業小屋などとの位置関係から、重機の進入が難しく、手掘りで表土掘削を行うこととなった。この区域については、４月17日から23日の期間に表土を除去した。これにより、調査面積1,401㎡の全てで、精

1．調査前の状況（南東から・2006 年 7 月 27 日）

2．カワウチ・シアターの基礎（東から・2006 年 10 月 13 日）



3．発射発煙筒検出状況（西から・2006 年 11 月 7 日）

4．ラジコン・ヘリによる空撮（北西から・2007 年 4 月 11 日）

5．現地説明会・全体説明（南東から・2007 年 8 月 4 日）

6．現地説明会・１号遺構の説明（南東から・2007 年 8 月 4 日）

7．現地説明会・地鎮遺構の説明（南から・2007 年 8 月 4 日）

8．現地説明会・出土遺物展示（西から・2007 年 8 月 4 日）

図10　武家屋敷地区第11地点調査状況
Fig.10　Situations of excavation at BK11

査に着手することとなった。

今回の調査区では、南東部にのみ明治時代初頭の２層が分布していた。しかし、２層上面の遺構はほとんどなかったため、２層上面の精査の後ただちに２層を除去し、江戸時代の遺構の精査に移った。それ以外の区域では、順次江戸時代の遺構の精査を開始した。なお、調査区の北西隅付近は、「カワウチ・シアター」を取り壊した建設廃材で埋められており、壁が安定せず崩壊する危険があった。この区域は削平が激しく、江戸時代の遺構は、ごくわずかしか存在しなかった。そのため北西隅については、遺構精査を行い記録を作成した後、土嚢で区切って埋め戻した。また、２回目以降に掘削した範囲の撹乱についても、深いもので遺構が関係していない部分については、危険なため埋め戻した。

調査期間は、建築工事の行程との関係で、当初は７月末までの予定であった。上記のように調査体制を強化したが、多数の遺構が検出されたことなどから、調査は予定より遅れ気味であった。建築工事の準備作業が遅れたことから、発掘調査を実施できる期間に余裕ができたため、関係機関と協議の上、８月末まで調査期間を延長することとした。

調査区の南西側では、大規模な沢状の遺構が検出された。南東側では、比較的古い時期の、大規模な掘り込みを有する遺構が集中していた。これらの埋土を掘り込んで作られているピットが多数検出されたことから、沢状遺構と南東部の古期大型遺構の埋土を残した状態で、ラジコンヘリを用いた空撮により全景写真を８月７日に撮影した（図版２）。

沢状遺構については、先行したトレンチ調査の結果、埋土の上面付近を除くと、遺物が含まれていない見込みであったため、埋土の厚い部分は重機で掘削した。その際、西側と東側については、調査区の外周壁まで掘り上げると、現地表からの深さが２ｍを越えるため、一定幅を残して掘削することとした。南東部の大型遺構などを掘り上げ、より古いピットなどの調査を終え、作業員を投入した作業は、予定通り８月末で終了した。８月30日には、最終状況の全景写真を、ラジコンヘリを用いた空撮により撮影した。その後、図面の点検など若干の残務を行い、９月10日で調査の一切を終了した。

調査成果の公開としては、調査が終盤を迎え、調査成果の概要が明らかとなった８月４日に、現地説明会を開催している（図10－５～８）。参加者は約80名であった。歩み板を用いて調査区内に通路を設置し、調査状況を至近距離から見学できるように工夫した。なお一般公開に先立って、報道機関むけの発表を行っている。

学会等での調査成果の公表としては、2007年12月16日に仙台市博物館で開催された平成19年度宮城県遺跡調査成果発表会において、「仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点」として調査成果概要を発表した。また、宮城県考古学会の会誌『宮城考古学』第10号（2008年５月発行）の「2007年度宮城県内主要発掘紹介」に、「仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点」として、調査概要を寄稿して紹介した。

調査期間中に、調査現場を活用した、授業などの教育活動への協力として、以下の３件を実施した。

・東北大学大学院文学研究科・文学部　考古学研究実習Ⅱ・考古学実習　発掘調査実習

　2006年11月１日、授業担当教官：阿子島香（大学院文学研究科教授）・柳田俊雄（総合学術博物館教授）

・宮城県仙台第二高等学校　日本史授業発掘調査見学

　2007年３月14・15日、授業担当教官：小村田達也（宮城県仙台第二高等学校教諭）

・東北大学全学教育　科学と情報「考古学でとく『科学』以前の科学」 発掘調査見学

　2007年６月21日、授業担当教官：深澤百合子（大学院国際文化研究科教授）

なおⅠ章でも記したが、川内サブアリーナ棟新営に関わる、建物本体以外の付帯工事部分については、2008年度の工事実施にあわせて、立会調査で対処することとした（立会調査番号2008－７）。建物本体以外の掘削を伴う工事は、給排水・電気・ガスなどの設備関係の配管埋設、建物南側での屋外環境整備（舗装・ベンチ設置など）であった。これらについては、建物本体の発掘調査で確認できた、新しい時代の盛土の範囲内におさめることを

原則とした。排水管など、掘削が深くならざるを得ないものについては、近現代の撹乱の中に入るようにルートを設定した。これらの対処を行った結果、今回の工事での掘削は、いずれも新しい盛土や、既に掘削された範囲におさまった。

②記録方法

調査にあたっては、建物建設予定区域の方向に合わせて、３ｍグリッドを作成した（図９）。南東隅にあたるＩ－１区の南東コーナーを原点として、グリッドラインに沿って局地座標を設定し、実測作業は局地座標を利用して行った。調査に際して設定した基準点の国土座標値は、以下のとおりで、基準点の位置は図９に示した。平面直角座標系は、Ｘ系である。グリッドは、北で 26° 01′ 00″西偏している。

ＢＫ11－Ａ	局地座標	Ｘ＝＋ 6.000	日本測地系	Ｘ＝－193,317.070	世界測地系	Ｘ＝－193,008.338
		Ｙ＝＋21.000		Ｙ＝＋ 1,945.563		Ｙ＝＋ 1,645.668
ＢＫ11－Ｂ	局地座標	Ｘ＝＋27.000	日本測地系	Ｘ＝－193,298.201	世界測地系	Ｘ＝－192,989.469
		Ｙ＝＋21.000		Ｙ＝＋ 1,936.353		Ｙ＝＋ 1,636.459

なお、本年報にも掲載した、縮尺500分の 1地形図などは、旧来の日本測地系によるものである。そこで当面の間、基準点の国土座標値は、日本測地系と世界測地系の座標値を、両方とも掲載することとしている。掲載図版中の座標値についても、日本測地系か、世界測地系のものか、それぞれに明示している。

先述のように川内地区の調査では、撹乱については、深さの大小にかかわらず、最初の段階で全て掘り上げることを基本方針としている。その上で、１層と撹乱の埋土を除去した段階で、全景写真を撮影し、平面図を作成することとしている。撹乱については、作業の行い易さと安全確保の観点から、一旦掘り上げた上で、遺構が関係していない部分については、埋め戻している場合も多い。そのため撹乱については、少なくとも一回は、掘り上げた状況が全景写真に残るようにしている。この１層と撹乱の埋土を除去した段階での平面図については、空撮写真による写真測量によって作成した。経過にも記したとおり、2006年11月30日と 2007年４月11日に空中写真撮影と、空撮写真による写真測量を実施した。

これ以外の平面図と断面図は、作業の進行にあわせて順次作成した。2007年１・２月に精査した遺構については、手作業によって実測作業を行った。2007年４月以降は、測量業務を国際航業株式会社文化事業部に委託し、同社の測量担当者１名が現地に常駐して測量作業を行った。委託した測量業務では、トータルステーションを利用した測量と、デジタル写真測量を併用した。測量結果は、ＣＡＤデータと、それをもとにイラストレーターのデータを作成した。１・２月に手作業によって作成した実測図も、スキャナーで図面を読み込み、デジタルトレースをすることでデジタルデータとした。これらのデータをもとに、整理後の時期区分に従って図面を区分し、調整して各時期の遺構平面図としている。

近世の遺跡は、その場所が近代以降に様々に利用されている場合が多く、必然的に近代以降の撹乱が多数存在することとなる。また頻繁な建て替えなどにより、多数の変遷段階が認識されることがほとんどである。このような場合、古い段階では、新しい段階の遺構による破壊を受け、保存状況が良くない場合が多い。撹乱や後世の遺構による破壊を遺構実測図で表現する場合、通常は線の太さを最も細くして表現する方法がとられている。しかし、遺構の数が多く複雑に切り合う場合、線の太さの違いだけでは、必ずしも判り易い表現方法とは言えない場合もある。そこで先の年報18・19 に引き続いて、撹乱や後世の遺構による破壊部分を、破線で表現した。

記録写真は、35㎜フィルムによるカラーリバーサルとモノクロを基本として使用し、デジタル写真も同じカットで撮影した。ラジコンヘリによる空撮では、６×６のカラーリバーサルとモノクロ写真を撮影し、デジタル写真も同じカットで撮影している。

③遺構の名称について

近世遺跡の調査においては、多種多様な遺構が検出される。その際、遺構の詳しい用途まで判明する場合もある一方で、遺構の形状からしか名称を付けられないものも存在する。そのため、異なる基準での名称が混在する場合が多い。本来は、同一基準での命名が望ましいが、作業を進める上での判り易さという点も無視できない。今回使用した遺構名称は、次の通りである。

遺構・建物・柱列・杭列・溝・木樋・暗渠・井戸

沢状遺構・地鎮遺構・落ち込み・瓦溜まり・礫集中部・焼土遺構

ピット・石・杭

従来は、比較的大型の掘り方を有する遺構については、「土坑」との名称を使用してきた。その中には、池状を呈する大型のものから、比較的大型のピットと呼べるようなものまで、規模の面でも性格についても、様々なものが想定される遺構が含まれている。そのため、一定の性格を想定させる呼称を避け、比較的大型の遺構を一括する呼称として、「○号遺構」との呼称を採用することとした。従来は土坑と呼んでいたような遺構も、基本的に「○号遺構」と呼称することとした。しかし、調査時に方針が徹底せず、1号土坑との呼称を使用したものがあったため、これは31号遺構と改称した。1号遺構としたものは、調査の進行によって、大型の沢状の古い段階と、その埋土を掘り込んだ新しい段階に分かれることが判明した。調査中は、1号遺構古段階と新段階としていたが、古段階は人為的な遺構というより、自然の沢状の落ち込みである可能性が高くなった。そのため、1号遺構古段階は沢状遺構と改称した。

柱穴などのピットについては、建物や柱列を構成することが現場で判明している場合でも、ピット番号として、全体で一連の通し番号を現地で付けた。川内地区での調査の場合、遺構が複雑に重なり合うと、現場での検討では、組み合う全ての柱穴を確認できない場合が多い。調査後の図面整理の過程で、建物や柱列を確認している場合が多数を占める。現地で組み合うことが判明したものについて柱番号を付すと、その後に同じ建物などを構成することが判明したピットの番号と、柱番号が前後する場合が生じる。整理後に柱番号を付け直すと、現地での呼称との間で混乱をきたしかねない。そのため、現地で付ける遺構名称は、通し番号のピット番号に統一し、建物や柱列を構成するピットについては、図面整理後に柱番号を新たに付ける形で、名称を変更している。

掘り方が検出できず石だけが確認されたものについては、礎石や柱穴の底面に置かれた石であった可能性も残るため、個別の番号を付けて記録した。調査時には「S○」との名称を用いたが、建物を構成することが明らかとなったものについては建物の柱番号を付し、それ以外は「石○」とした。杭についても、個々に番号を付けて記録した。現場での名称が混乱していた部分があったため、整理して改称している部分がある。

表8～12に、現地で付した遺構名称と、本報告にあたっての遺構名称の対照表を示している。遺物に付された注記は、全て現地での遺構名称となっている。また、ピットや石・杭以外の、各時期ごとの遺構の一覧を、表13に掲げておく。

④遺物の取り上げについて

近世以降の遺跡の調査においては、それ以前の時代の遺跡と比較すると、遺物の出土量が極めて多くなるのが通常である。その際、破片では特徴が判別し難い瓦などについて、全てを取り上げるか否かが問題となる。

当調査室の調査においては、江戸時代に遡る可能性がある遺物については、全て採集することを基本方針としている。今回の調査では、明治時代の早い時期と考えられ、畑の耕作土として利用された可能性のある、2層より下位の層序から出土した遺物については、基本的に全ての遺物を採集している。それより上位の整地層や現在の表土は、まとめて1層・撹乱として、明らかに近現代に下るもの以外について、遺物を回収した。ただし、1層・撹乱から出土した遺物の内、瓦については、一定の基準を設けて現地で選別を行った。瓦は、江戸時代のも

のと、明治以降のものを識別することが、破片の場合ほとんど不可能なものも多い。そこで、長さと幅の判明するもの、軒瓦、刻印や線刻のあるもの、その他特殊なものについては採集するという基準を設けている。刻印や線刻の有無などについては、土壌が付着したままでは判別が難しいので、現地で土壌をおおよそ落とした上で、上記の基準に当てはまる資料のみを収集している。

⑤整理作業

出土遺物の水洗と注記の作業は、調査中に一部実施していたが、ほとんどの作業は、調査の終了した2007年９月から開始した。2007年度後半と2008年度および2009年度を、整理作業期間とした。

2007年度は、出土遺物の洗浄や注記などの、基礎的作業を実施した。2008年度は、出土遺物の分類・接合・集計・実測・トレース・写真撮影などの作業を行った。また、遺構の検討や、遺構図面の整理・作成などの作業も行った。2009年度は、遺構の検討や遺構図面の作成・トレース、全ての遺物の実測・トレース・写真撮影や、遺物観察表の作成、図版のレイアウトなどの作業を行った。遺物実測図の作成では、磁器と陶器の文様部分について、国際文化財株式会社に委託し、オルソイメージャーによって撮影したデジタル写真をもとに作成した。遺物写真の撮影は、有限会社仙台写真工房に委託して行った。2010年度は、一部残っていた原稿作成と編集作業を行い、印刷刊行する運びとなった。

近世遺跡の調査では、様々な材質の遺物が出土する。水浸木製品のように、材質に応じて特有の取り扱いを必要とするものも多いことから、遺物の種類ごとに整理作業を進めている。遺物の各種類ごとの細かな整理作業の方法、それぞれの分類基準ついては、出土遺物の報告の各項目の中で、必要に応じて記述する。

図面ないし写真を、本報告書に掲載した遺物については、種類ごとに以下の頭文字を決め、その下に通し番号の登録番号を付けている。実測図・写真図版・観察表の番号は、いずれもこの登録番号に統一している。遺物を管理する台帳も、全てこの登録番号をもとに作成しており、保管にあたっても、この登録番号を基礎に管理するようにしている。

磁器：ＣＪ　　陶器：ＣＴ　　軟質施釉土器：ＣＮ
土師質土器：ＣＨ　　瓦質土器：ＣＧ　　土製品：ＣＯ
瓦：Ｔ（古代の瓦を含む）
漆塗製品：ＷＬ　　木製品：Ｗ
古銭：ＭＣ　　古銭以外の金属製品：ＭＯ
石器・石製品：Ｓ

今回の武家屋敷地区第11地点の調査では、木製品・漆塗製品・金属製品など、保存処理が必要な遺物も出土している。東北大学埋蔵文化財調査室では、木製品と金属製品について保存処理を実施しており、武家屋敷地区第11地点から出土した遺物についても、当調査室で保存処理を行うこととした。

2007年度は、武家屋敷地区第11地点から出土した処理の必要な遺物の中で、植物繊維で編まれた俵２点など、大型の遺物の処理を開始した。翌2008年度は、前年度に引き続いて植物繊維で編まれた俵の処理を実施した他、しがらみ・杭・木樋など、大型の遺物の処理を実施した。2009年度には、整理作業が進んだ木製品・金属製品などの保存処理作業についても、一部処理を行った。保存処理が必要な残る遺物については、当調査室の通常業務として、2010年度以降も継続して実施する予定である。

２．基本層序と時期区分

（１）基本層序

今回の調査区を含めて川内地区のもともとの地形は、全体的にごくゆるやかに東へ向かって下っていたと考えられる。調査区東側の、グランドとの境に見られる大きな段差が段丘崖であるのを除くと、現在見られる平坦面と段差は、近代以降に行われた切り土と盛り土によって造成されたものであることが、これまでの調査で明らかとなっている。それぞれの平坦面の中では、もともとの標高の高い西側ほど、近代の切り土による削平が深い傾向がある。今回の調査地点でも、西側ほど削平が深くまでおよんでいると考えられる。また今回の調査区では、西側にキャンプ・センダイ時代の大規模な建物である「カワウチ・シアター」の基礎があったため、それによる破壊も著しかった。そのため調査区西側では、もともと存在した層序の多くが、削平によって失われているものと考えられる。

基本層序は、図11の模式図のように区分した。

比較的広い範囲に広がると考えられる地層を、数字であらわすこととし、１層・２ａ層・２層・３層、そして地山層に区分した。これら以外に、部分的に分布する地層も確認されている。区別するために、層の呼称には数字を用いず、別にＡ層・Ｂ層とした。

１層

現在の表層、および陸軍第二師団期以降の近現代の整地層と考えられる地層を、１層として一括した。次の２層および２ａ層より上位にある層は、全て１層としてまとめて取り扱った。そのため、層相は、様々なものが混在している。ほとんどを重機で掘削している。

２層

２層は、にぶい黄褐色の粘土質シルトを基調とする地層で、地山起源と思われる黄褐色土のブロックを含む部分もあるが、それを除くと比較的均質な地層である。図69に分布範囲を示したように、14列より東側の、調査区南東部を中心に分布していた。本来は全面に分布していたと考えられるが、西側は近代以降の削平によって失

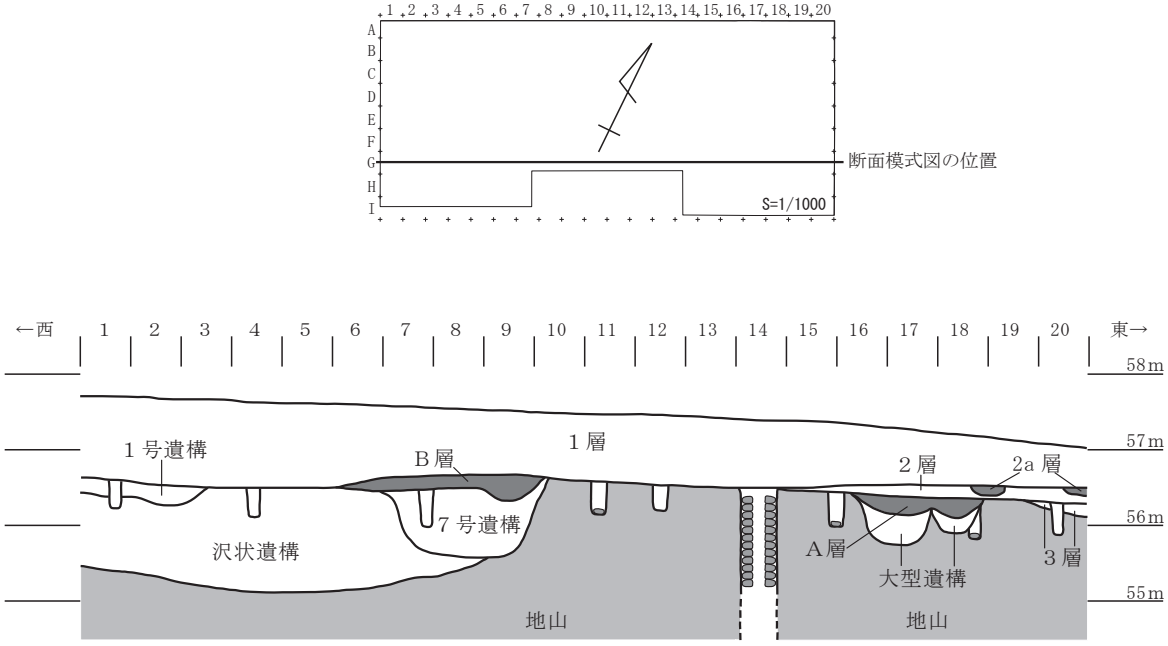


図11　武家屋敷地区第11地点基本層序模式図
Fig.11　Schematic profile of BK11

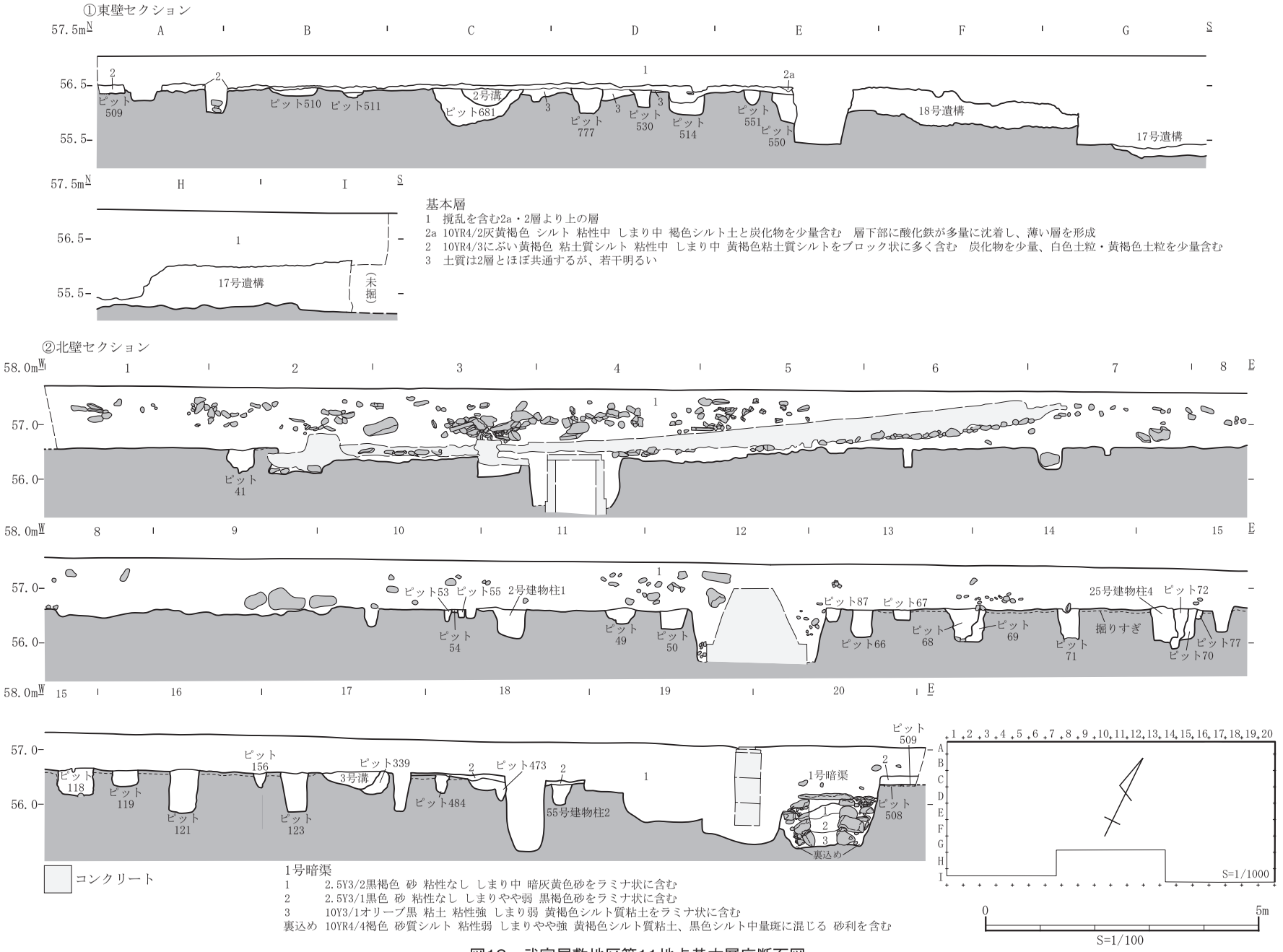


図12　武家屋敷地区第11地点基本層序断面図
Fig.12　Fundamental layer sections at BK11

われているものと推定される。

この２層に類似する地層は、武家屋敷地区第４地点（年報13）、武家屋敷地区第７地点（年報19）など、二の丸北方武家屋敷地区の各所で確認されている。第４地点と第７地点では、この２層に類似する地層の上面において、畝状遺構が検出されている。第４地点では、畝状遺構を取り囲んで区画する溝状遺構も検出されている。これらの特徴から、二の丸北方武家屋敷地区の各所で確認されているこの地層は、畑の耕作土であったと考えられている。明治初年に屋敷が取り壊されて以降、陸軍関係の施設が設置されていくまでの間に、畑として利用されていた可能性が推定されている。今回検出された２層については、畝状の凹凸は確認されていない。しかし、後世の削平もあって２層上面の保存状態が良くないため、確認できなかった可能性もある。層相が、他の地点で確認されている畑耕作土と類似することから、今回確認された２層も、畑耕作土として利用された可能性が残っている。幕末を中心とした時期の遺物を多く含んでおり、この特徴も、武家屋敷地区の各所で確認されている畑耕作土と共通している。

２ａ層

２層の上面には、土質は２層に類似しているが、色調が異なる部分が各所で認められた。調査中はⅠ層と呼称し、その範囲をⅠ層の落ち込みとして調査した。Ⅰ層を掘り上げた底面には不整形な凹凸が認められる場合が多い。また下部に酸化鉄が多量に沈着し、薄い層を形成している部分もある。そのため、くぼみなどに堆積した水性堆積層か、あるいは２層が部分的にグライ化した可能性もある。いずれにしても、２層との関係が深い可能性があるため、本報告では、Ⅰ層を２ａ層と改称した。２層分布範囲内での、２ａ層の落ち込みの位置は、図69にその範囲を示している。

この２ａ層に相当する層序で、層相が類似する地層が、調査区南西よりの、沢状遺構埋土の上面にも分布している（図15・16・19）。この区域では２層は分布しておらず、２ａ層に類似する地層の分布も断片的で、面的に広がるものではない。調査中はⅠ層相当と呼称したが、本報告では２ａ層相当と改称した。一連の層序ととらえて良いか問題が残るが、形成された時期は近接していると思われ、２ａ層、２ａ層相当とも、明治時代の早い時期と考えられる。

３層

３層は、調査区東端の、調査区東壁際において、ごくわずかな範囲で確認されたたけである。層相は２層に類似し、若干色調が明るい。江戸時代の整地層の可能性が考えられるが、検出範囲がごく狭いこともあり、詳細は不明である。遺物も出土しておらず、形成された年代を確定することはできていない。３層が分布する範囲で検出されたピット530・681・777 およびピット681 を切っている２号溝は、３層の上面から掘り込まれている。３層の下面から掘り込まれた遺構は確認できていない。

今回の調査区の北東側には、二の丸北方武家屋敷地区第６地点の調査区がある（図７）。第６地点では、今回の調査で確認されている明治時代初頭の耕作土（２層）に相当する地層が確認されており、４ａ層と呼称している。その下層に、４ｂ層とした、４ａ層に類似する地層が分布していた。第６地点では、４ｂ層上面と下面の両方から掘り込まれた遺構が確認されている（年報14）。今回確認された３層と、この第６地点の４ｂ層との関係は明らかではないが、いずれも江戸時代に形成された整地層の可能性が考えられる。

地山層

地山層は黄褐色粘土を基調とする、ローム起源の水性堆積層である。層相は場所による変移が大きく、粘土から砂まで土質の変移も大きい。下位に至ると段丘礫層の砂礫層となる。川内地区一帯で観察される地山層と、基本的に共通する。地山層の最上部には漸移層が観察される場合も多いが、今回の調査区では、漸移層の形成はあまり顕著ではない。

Ａ層

Ａ層としたのは、調査区南東部に分布する大型遺構の埋土上部に堆積していた地層である。これらの大型遺構の築造年代は、17世紀から19世紀までかなり幅があるが、多くが埋没した後も、上部がややくぼんだ状態であったと考えられる。Ａ層は、このくぼんだ部分に形成された地層で、個々の遺構の広がりを越え、複数の遺構の最上部にまたがる形で分布している部分も多い。調査の過程では、一部でベルトを残したが、ほとんどの区域では、Ａ層として遺物を取り上げながら掘り下げ作業を行い、遺構輪郭の検出を行った。図45の25号遺構と28号遺構をつないで作成した断面図に、遺構埋土とＡ層の関係が示されている。遺構の輪郭がおおむね分離された後にも、くぼんだ部分にＡ層に相当する層序が堆積している場合もあった。その場合には、遺構の範囲内部のＡ層に相当する層序を、○○遺構Ａ層相当として、遺物を取り上げている。あるいは、○○遺構埋土上部としたものが、Ａ層に相当する場合もある。Ａ層とピットなどとの関係を把握することが難しいこともあり、全体をかなり掘り下げて切り合い関係を確認してから、ベルトを設定した埋土の掘り下げに移行した場合には、断面図にＡ層相当層が示されていない遺構も多い。これらの層序の確認状況や、遺物の取り上げ層序の関係については、個々の遺構の記載において説明する。

層相は、にぶい黄褐色の粘土質シルトを基調とするが、場所によって変移がある。陶磁器や瓦をはじめとする遺物を多く含んでいる。場所によっては、礫や瓦が集中していた部分も認められた。Ａ層から出土した陶磁器類には、17世紀から19世紀までの各時期のものが含まれており、18世紀代の遺物も多い。陶磁器類の中で最も新しいのは幕末頃のもので、混入の可能性も残るごく少数の資料を除くと、確実に明治時代に下るものは見られない。そのためＡ層の形成年代は、幕末あるいは、明治時代に下ってもごく初期までにとどまると考えられる。遺構の変遷段階との関係では、Ⅲ期の直前、あるいはⅢ期以後で２層が形成されるまでの間のいずれかが考えられる。しかし、確実にⅢ期に下る建物などの遺構との前後関係は不明であるため、このどちらであるかを確定できていない。

Ｂ層

Ｂ層としたのは、Ⅰ期の７号遺構の埋土の上位で確認された整地層である。分布は、７号遺構の範囲にほぼ限定されているが、一部西側の沢状遺構埋土の範囲に延びている（図15・23）。７号遺構がある程度埋められた後、上部に蓋をするように施された整地層である。７号遺構の埋土も、ほとんどは人為的に埋められたものと考えられるが、Ｂ層の下面から掘り込まれたピット426が確認された。そのため、それ以下の層序を７号遺構埋土とし、それより上位の層序をＢ層として区分した。調査時には、Ⅱ層という名称を使用していたが、分布が限定されることが明らとなったため、Ｂ層と改称した。

いくつかに細分され、それぞれの層相はかなり異なっている。異なる土砂を少しずつ運んで整地していったものと考えられる。最上部には、地山起源の黄褐色土が多く用いられている。その下位には、小円礫を多く含む部分があり、地盤を堅固にする意図があるものと考えられる。遺物がほとんど出土していないため、形成された時期、遺構の変遷段階との関係は確定できていない。

（２）遺構の変遷段階の設定

全ピット769基のうち347基（45.1％）を建物、柱列として認定した。建物数は58棟、柱列数は４基となる。本調査区上部の堆積層は削平されている部分が多く、ピットの確認面はほかの遺構埋土か地山となる。建物を構成するピット総数347基の検出層位は、地山のものが272基（78.4％）、遺構埋土で検出されたものが69基（19.9％）、両方にまたがるものが３基（0.9％）、不明のものが３基（0.9％）ある。遺構、溝、井戸などの検出面も、そのほとんどが地山かほかの遺構の埋土となる（表14 ～ 16）。このような状況であるため、検出層位による遺構の時期区分は難しい。また、東壁セクションの検討に基づき、２層に類似する土質の３層の存在が確認された。この３

層は平面では確認できず、遺物も出土していない。東壁セクションにかかる遺構のごく一部（ピット530・681・777）が、この３層上面を堀り込み面とするのみである（図12）。これらの状況からすると、ほとんどの遺構は２層より下からの検出となる。この２層は、幕末もしくは明治時代のごく早い時期の遺構と考えられる２号溝の埋没後に堆積している。また前述のように、類似した地層が二の丸北方武家屋敷地区の各所で確認されており、屋敷取り壊し後の畑の耕作土の可能性が考えられている。これらのことから、２層は明治時代初頭の武家屋敷の取り壊し後、第二師団の設置までの間の時期の地層として捉えられる。したがって、ほとんどの遺構はそれ以前の時期に帰属する。

最初にピットの配置関係から建物を認定し、そのほかの遺構を含めた重複関係から、相対的な順番を導き出した。また、建物の軸角度を0.5°刻みで計測し、その軸角度を算出した。この建物の軸角度のまとまり、遺構の配置関係、出土遺物などから、細かな段階を設定した（図13）。Ⅰ期（17世紀初頭から前葉）とⅢ期（明治以降）を設定し、その間の時期をⅡ期としてⅡａ期からⅡｅ期に細分した。なお、重複関係や出土遺物も無く、明確にいずれかの時期に帰属させることのできないピットはⅠ～Ⅲ期として扱った。

建物の柱間寸法に着目すると、もっとも古い段階に、１間が６尺５寸のものが集中することが明らかとなった。そのため、６尺５寸の柱間寸法の建物が展開する段階をⅠ期として分離した。それ以降の建物では、柱間寸法は、１間が６尺３寸となっている。なおⅠ期の遺構からの出土遺物には、江戸時代初頭よりさかのぼるものは、ごく少数の伝世品と考えて良いもの以外出土していない。このことから、Ⅰ期の上限は江戸時代初頭と考えることができる。

一方、重複関係からもっとも新しい段階には、軸の角度が一定しない小規模な建物のみが分布することが明らかとなった。これらの建物は、幕末から明治時代のごく早い時期と考えられる２号溝より新しい。明治時代の早い時期に、屋敷が取り壊されていく過程で、一時的に造られた小規模な建物である可能性が高いと考えられる。そのため、この最も新しい段階を、Ⅲ期として分離することとした。

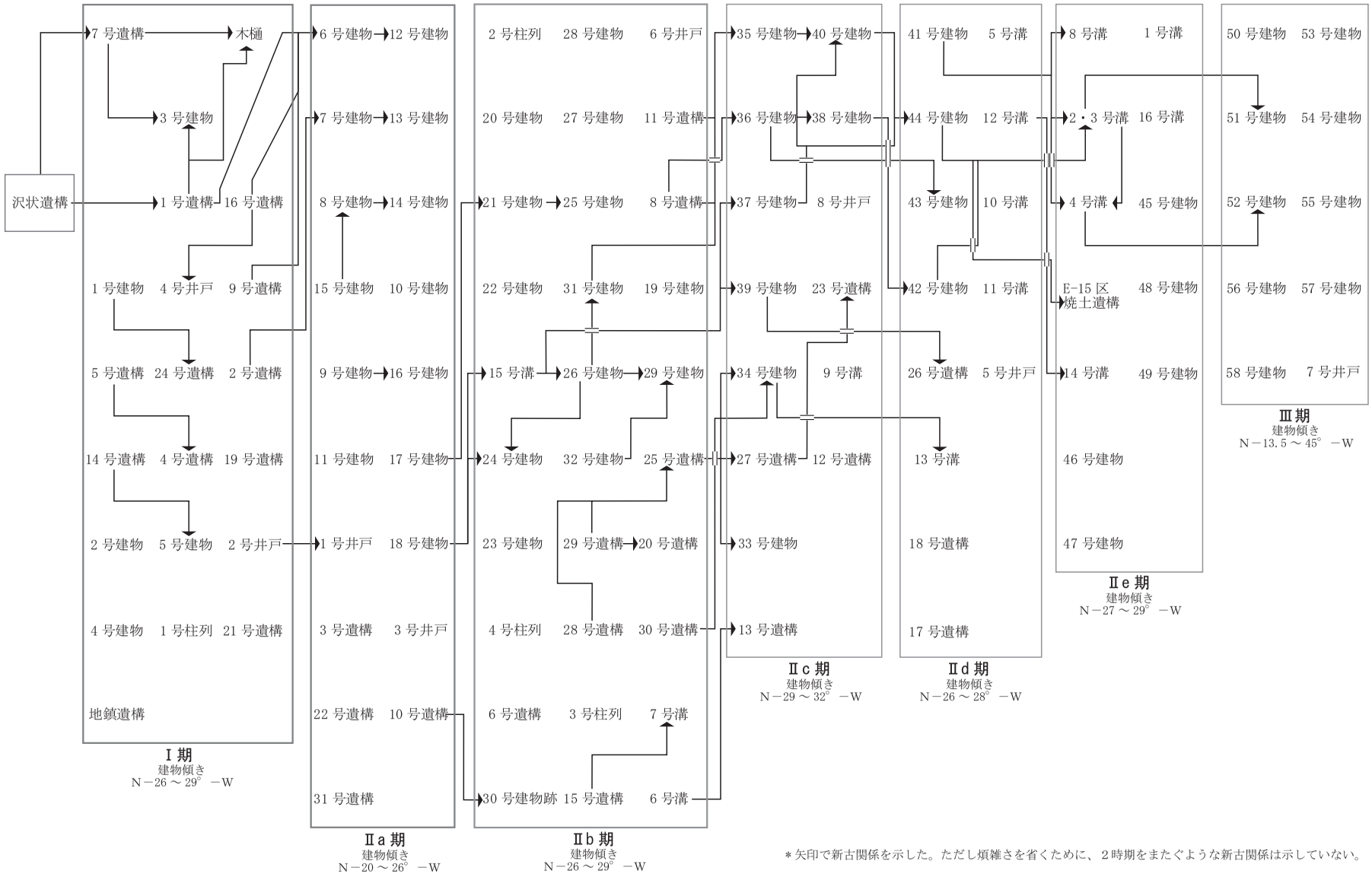
このⅠ期とⅢ期を除いた部分をⅡ期とした。その上で、建物の軸角度のまとまり、遺構の配置関係、出土遺物などから、細かな段階を設定し、Ⅱａ期からⅡｅ期に細分した。

また、Ⅰ期よりさかのぼる江戸時代以前と考えられる沢状遺構も存在するため、これを江戸時代以前の遺構とした。Ⅲ期以降の２層上面で確認された遺構については、Ⅰ～Ⅲ期とは別に、２層上面の遺構として、別に段階を設定している。

（３）各期の推定時期

各期の時期推定にあたっては、細別された各期の遺構の中でも、比較的規模の大きな遺構から出土した遺物の検討が基本となっている。ただし、まとまった一括資料はさほど多くないため、時期の細かな限定が難しい場合も多い。また出土遺物以外にも、いくつかの点で、時期を検討できる材料がある。

Ⅰ期の建物の柱間寸法は、１間が６尺５寸となっており、Ⅱ期では６尺３寸となる。これまでにも、仙台城跡二の丸地区や武家屋敷地区での検討から、１間の寸法が、江戸時代初期の６尺５寸から、６尺３寸へ変化していくことが明らかとなっている（年報19第５分冊）。近年、仙台市教育委員会による若林城跡の調査が進展し、寛永４年から５年（1627～1628年）にかけて造営された若林城では、１間が６尺５寸という柱間寸法が使用されていたことが明らかとなった。また、若林城跡の１号礎石建物跡が、『御二之丸御指図』にえがかれた「大台所」と一致することが明らかとなり、若林城の建物が仙台城二の丸へ移築されていることが、考古学的なデータからも確認されることとなった。さらに、『御二之丸御指図』の詳細な検討から、１間が６尺５寸の建物と６尺３寸の建物で、色を違えて描かれている可能性が指摘されている。そのため、１間が６尺３寸という柱間寸法が、寛永15年（1638年）の二の丸造営時には使用されていた可能性が高くなっている（佐藤淳ほか2010）。武家屋敷地



＊矢印で新古関係を示した。ただし煩雑さを省くために、２時期をまたぐような新古関係は示していない。

図13　武家屋敷地区第11地点遺構変遷模式図
Fig13. A transition of features at BK11

区での６尺３寸の使用開始が、仙台城などと同じと考えて良いかという問題は残るが、６尺５寸という柱間寸法は、おおむね17世紀前葉までにおさまる可能性が高い。今回の調査で６尺５寸が使用されているⅠ期については、出土遺物もおおむね17世紀初頭から前葉のものとなっており、柱間寸法の変遷時期とほぼ整合していると考えて良いだろう。

Ⅲ期や２層上面の遺構と関係する、川内地区における武家屋敷の取り壊し時期については、以前に若干の検討を加えたことがある（年報19第１分冊、51頁）。国際日本文化研究センター所蔵の明治８年（1875年）頃に撮影されたと考えられる古写真を見ると（三浦正幸監修2002）、大橋から大手門へいたる道路の北側にあった、登米伊達家と水沢伊達家の屋敷では、門は撤去されているが門脇の建物は残っている。今回の調査地点の状況を直接示すものではないが、明治維新後、直ちに屋敷が全て取り払われたのではないと考えられる。一方、明治15年（1882年）の地図（図５－13）では、市街地の建物がある部分には、簡略ながら建物を示す記号が記されているが、調査区周辺には建物を示す記号はない。これまでには、屋敷の撤去が進んでいたものと推定される。以上のことから、畑耕作土の可能性が高い２層上面の段階は、明治時代初期から、陸軍関係の建物整備が始まる明治20年を前後する時期までに限定でき、中でも明治10年代を中心とする可能性が高い。それに先行するⅢ期は、屋敷の取り壊しが進められ畑として利用されるまでの、明治時代初期に限定され、おそらく明治10年代までは下らない可能性が高いと考えることができる。

以上から推定される、各期の時期は、次のとおりである。

Ⅰ期　：17世紀初頭から前葉
Ⅱａ期：Ⅰ期以降の 17世紀代
Ⅱｂ期：18世紀
Ⅱｃ期：18世紀末葉から 19世紀初頭
Ⅱｄ期：19世紀前葉から中葉
Ⅱｅ期：19世紀中葉から後葉（明治時代初頭）
Ⅲ期　：明治時代初期（明治10年代以前）
２層上面の遺構：明治時代初期から明治20年前後（明治10年代中心）

表８　武家屋敷地区第11地点遺構名称対照表（１）
Tab.8 List of the strubtual remains name which are collated (1)

現場名称	確定名称	備考	時期
なし	１号建物	個別ピット番号	Ⅰ
なし	２号建物	個別ピット番号	Ⅰ
なし	３号建物	個別ピット番号	Ⅰ
なし	４号建物	個別ピット番号	Ⅰ
なし	５号建物	個別ピット番号	Ⅰ
なし	６号建物	個別ピット番号	Ⅱa
なし	７号建物	個別ピット番号	Ⅱa
なし	８号建物	個別ピット番号	Ⅱa
なし	９号建物	個別ピット番号	Ⅱa
なし	10号建物	個別ピット番号	Ⅱa
なし	11号建物	個別ピット番号	Ⅱa
なし	12号建物	個別ピット番号	Ⅱa
なし	13号建物	個別ピット番号	Ⅱa
なし	14号建物	個別ピット番号	Ⅱa
なし	15号建物	個別ピット番号	Ⅱa
なし	16号建物	個別ピット番号	Ⅱa
なし	17号建物	個別ピット番号	Ⅱa
なし	18号建物	個別ピット番号	Ⅱa
なし	19号建物	個別ピット番号	Ⅱb
なし	20号建物	個別ピット番号	Ⅱb
なし	21号建物	個別ピット番号	Ⅱb
なし	22号建物	個別ピット番号	Ⅱb
なし	23号建物	個別ピット番号	Ⅱb
なし	24号建物	個別ピット番号	Ⅱb
なし	25号建物	個別ピット番号	Ⅱb
なし	26号建物	個別ピット番号	Ⅱb
なし	27号建物	個別ピット番号	Ⅱb
なし	28号建物	個別ピット番号	Ⅱb
なし	29号建物	個別ピット番号	Ⅱb
なし	30号建物	個別ピット番号	Ⅱb
なし	31号建物	個別ピット番号	Ⅱb
なし	32号建物	個別ピット番号	Ⅱb
なし	33号建物	個別ピット番号	Ⅱc
なし	34号建物	個別ピット番号	Ⅱc
なし	35号建物	個別ピット番号	Ⅱc
なし	36号建物	個別ピット番号	Ⅱc
なし	37号建物	個別ピット番号	Ⅱc
なし	38号建物	個別ピット番号	Ⅱc
なし	39号建物	個別ピット番号	Ⅱc
なし	40号建物	個別ピット番号	Ⅱc
なし	41号建物	個別ピット番号	Ⅱd
なし	42号建物	個別ピット番号	Ⅱd
なし	43号建物	個別ピット番号	Ⅱd
なし	44号建物	個別ピット番号	Ⅱd
なし	45号建物	個別ピット番号	Ⅱe
なし	46号建物	個別ピット番号	Ⅱe
なし	47号建物	個別ピット番号	Ⅱe
なし	48号建物	個別ピット番号	Ⅱe
なし	49号建物	個別ピット番号	Ⅱe
なし	50号建物	個別ピット番号	Ⅲ
なし	51号建物	個別ピット番号	Ⅲ
なし	52号建物	個別ピット番号	Ⅲ
なし	53号建物	個別ピット番号	Ⅲ
なし	54号建物	個別ピット番号	Ⅲ
なし	55号建物	個別ピット番号	Ⅲ
なし	56号建物	個別ピット番号	Ⅲ
なし	57号建物	個別ピット番号	Ⅲ
なし	58号建物	個別ピット番号	Ⅲ
なし	１号柱列	個別ピット番号	Ⅰ
なし	２号柱列	個別ピット番号	Ⅱb
なし	３号柱列	個別ピット番号	Ⅱb
なし	４号柱列	個別ピット番号	Ⅱb
なし	１号杭列	個別杭番号	Ⅲ
なし	２号杭列	個別杭番号	Ⅲ

現場名称	確定名称	備考	時期
１号溝	１号溝		Ⅱe
２号溝	２号溝	３号溝と一連	Ⅱe
３号溝	３号溝	２号溝と一連	Ⅱe
４号溝	４号溝		Ⅱe
５号溝	５号溝		Ⅱd
６号溝	６号溝		Ⅱb
７号溝	７号溝		Ⅱb
８号溝	８号溝		Ⅱe
９号溝	９号溝		Ⅱc
10号溝	10号溝		Ⅱd
11号溝	11号溝		Ⅱd
12号溝	12号溝		Ⅱd
13号溝	13号溝		Ⅱd
14号溝	14号溝		Ⅱe
15号溝	15号溝		Ⅱb
16号溝	16号溝		Ⅱe
1号暗渠	1号暗渠		Ⅲ以後
木樋	木樋		Ⅰ
１号遺構古段階	沢状遺構		Ⅰ以前
１号遺構新段階	１号遺構		Ⅰ
２号遺構	２号遺構		Ⅰ
３号遺構	３号遺構		Ⅱa
４号遺構	４号遺構		Ⅰ
５号遺構	５号遺構		Ⅰ
６号遺構	６号遺構		Ⅱb
７号遺構	７号遺構		Ⅰ
８号遺構	８号遺構		Ⅱb
９号遺構	９号遺構		Ⅰ
10号遺構	10号遺構		Ⅱa
11号遺構	11号遺構		Ⅱb
12号遺構	12号遺構		Ⅱc
13号遺構	13号遺構		Ⅱc
14号遺構	14号遺構		Ⅰ
15号遺構	15号遺構		Ⅱb
16号遺構	16号遺構		Ⅰ
17号遺構	17号遺構		Ⅱd
18号遺構	18号遺構		Ⅱd
19号遺構	19号遺構		Ⅰ
20号遺構	20号遺構		Ⅱb
21号遺構	21号遺構		Ⅰ
22号遺構	22号遺構		Ⅱa
23号遺構	23号遺構		Ⅱc
24号遺構	24号遺構		Ⅰ
25号遺構	25号遺構		Ⅱb
26号遺構	26号遺構		Ⅱd
27号遺構	27号遺構		Ⅱc
28号遺構	28号遺構		Ⅱb
29号遺構	29号遺構		Ⅱb
30号遺構	30号遺構		Ⅱb
１号土坑	31号遺構		Ⅱa
１号井戸	１号井戸		Ⅱa
２号井戸	２号井戸		Ⅰ
３号井戸	３号井戸		Ⅱa
４号井戸	４号井戸		Ⅰ
５号井戸	５号井戸		Ⅱd
６号井戸	６号井戸		Ⅱb
７号井戸	７号井戸		Ⅲ
８号井戸	８号井戸		Ⅱc
地鎮遺構	地鎮遺構		Ⅰ
焼土遺構	焼土遺構		Ⅱe

表９　武家屋敷地区第11地点遺構名称対照表（２）
Tab.9　List of the strubtual remains name which are collated (2)

Pit 番号	確定名称	備考	時期	Pit 番号	確定名称	備考	時期	Pit 番号	確定名称	備考	時期
1	13号建物 柱１		Ⅱａ	76	ピット76		Ⅰ～Ⅲ	151	22号建物 柱３		Ⅱｂ
2	13号建物 柱２		Ⅱａ	77	ピット77		Ⅱｂ以前	152	欠番		－
3	ピット３		Ⅰ～Ⅲ	78	25号建物 柱11		Ⅱｂ	153	４号建物 柱２		Ⅰ
4	ピット４		Ⅰ～Ⅲ	79	21号建物 柱１		Ⅱｂ	154	ピット154		Ⅰ～Ⅲ
5	ピット５		Ⅱａ以後	80	ピット80		Ⅰ～Ⅲ	155	ピット155		Ⅰ～Ⅲ
6	ピット６		Ⅰ～Ⅲ	81	25号建物 柱13		Ⅱｂ	156	ピット156		Ⅰ～Ⅲ
7	６号建物 柱10		Ⅱａ	82	23号建物 柱５		Ⅱｂ	157	ピット157		Ⅰ～Ⅲ
8	ピット８		Ⅰ～Ⅲ	83	ピット83		Ⅰ～Ⅲ	158	６号建物 柱８		Ⅱａ
9	ピット９		Ⅰ～Ⅲ	84	ピット84		Ⅰ～Ⅲ	159	６号建物 柱13		Ⅱａ
10	ピット10		Ⅰ～Ⅲ	85	２号建物 柱６		Ⅰ	160	６号建物 柱12		Ⅱａ
11	６号建物 柱11		Ⅱａ	86	25号建物 柱17		Ⅱｂ	161	ピット161		Ⅱｂ以後
12	欠番	５号遺構に変更	－	87	２号建物 柱３		Ⅰ	162	25号建物 柱16		Ⅱｂ
13	13号建物 柱５		Ⅱａ	88	25号建物 柱18		Ⅱｂ	163	41号建物 柱10		Ⅱｄ
14	ピット14		Ⅱａ以前	89	ピット89		Ⅰ～Ⅲ	164	22号建物 柱１		Ⅱｂ
15	ピット15		Ⅰ～Ⅲ	90	ピット90		Ⅱｂ以後	165	ピット165		Ⅱａ以前
16	ピット16		Ⅰ～Ⅲ	91	ピット91		Ⅱｂ以後	166	17号建物 柱１		Ⅱａ
17	ピット17		Ⅰ～Ⅲ	92	ピット92		Ⅰ～Ⅲ	167	ピット167		Ⅰ～Ⅲ
18	ピット18		Ⅰ～Ⅲ	93	ピット93		Ⅱｂ以前	168	ピット168		Ⅲ
19	ピット19		Ⅰ～Ⅲ	94	50号建物 柱１		Ⅲ	169	50号建物 柱３		Ⅲ
20	ピット20		Ⅰ～Ⅲ	95	８号建物 柱１		Ⅱａ	170	17号建物 柱２		Ⅱａ
21	45号建物 柱３		Ⅱｅ	96	ピット96		Ⅰ～Ⅲ	171	48号建物 柱３		Ⅱｅ
22	13号建物 柱３		Ⅱａ	97	ピット97		Ⅰ～Ⅲ	172	ピット172		Ⅱａ～Ⅱｅ
23	45号建物 柱２		Ⅱｅ	98	４号建物 柱４		Ⅰ	173	ピット173		Ⅱａ～Ⅱｅ
24	ピット24		Ⅱｃ以前	99	ピット99		Ⅱｅ以後	174	17号建物 柱３		Ⅱａ
25	ピット25		Ⅱｃ以前	100	41号建物 柱４		Ⅱｄ	175	38号建物 柱２		Ⅱｃ
26	７号建物 柱４		Ⅱａ	101	41号建物 柱５		Ⅱｄ	176	ピット176		Ⅰ～Ⅲ
27	ピット27		Ⅰ～Ⅲ	102	15号建物 柱１		Ⅱａ	177	ピット177		Ⅰ～Ⅲ
28	ピット28		Ⅱａ以前	103	８号建物 柱２		Ⅱａ	178	ピット178		Ⅱａ以前
29	ピット29		Ⅰ～Ⅲ	104	48号建物 柱１		Ⅱｅ	179	ピット179		Ⅱａ以前
30	ピット30		Ⅰ～Ⅲ	105	57号建物 柱１		Ⅲ	180	ピット180		Ⅰ～Ⅱａ
31	ピット31		Ⅰ～Ⅲ	106	14号建物 柱２		Ⅱａ	181	48号建物 柱４		Ⅱｅ
32	ピット32		Ⅰ～Ⅲ	107	ピット107		Ⅱａ	182	14号建物 柱３		Ⅱａ
33	ピット33		Ⅱａ以後	108	８号建物 柱３		Ⅱａ	183	50号建物 柱４		Ⅲ
34	ピット34		Ⅰ～Ⅲ	109	ピット109		Ⅱａ以前	184	13号建物 柱６		Ⅱａ
35	７号建物 柱２		Ⅱａ	110	欠番		－	185	ピット185		Ⅱａ以後
36	13号建物 柱４		Ⅱａ	111	41号建物 柱９		Ⅱｄ	186	７号建物 柱５		Ⅱａ
37	ピット37		Ⅱａ以後	112	ピット112		Ⅱａ以前	187	ピット187		Ⅰ～Ⅲ
38	７号建物 柱６		Ⅱａ	113	ピット113		Ⅰ～Ⅲ	188	ピット188		Ⅱａ以後
39	７号建物 柱３		Ⅱａ	114	ピット114		Ⅰ～Ⅲ	189	ピット189		Ⅱａ以後
40	ピット40		Ⅰ～Ⅲ	115	38号建物 柱１		Ⅱｃ	190	25号建物 柱14		Ⅱｂ
41	ピット41		Ⅰ～Ⅲ	116	ピット116		Ⅱｂ以前	191	21号建物 柱４		Ⅱｂ
42	ピット42		Ⅰ～Ⅲ	117	４号建物 柱５		Ⅰ	192	17号建物 柱４		Ⅱａ
43	ピット43		Ⅰ～Ⅲ	118	25号建物 柱５		Ⅱｂ	193	21号建物 柱３		Ⅱｂ
44	７号建物 柱１		Ⅱａ	119	ピット119		Ⅰ～Ⅲ	194	ピット194		Ⅱｂ以前
45	ピット45		Ⅰ～Ⅲ	120	ピット120		Ⅰ～Ⅲ	195	50号建物 柱８		Ⅲ
46	ピット46		Ⅰ～Ⅲ	121	25号建物 柱６		Ⅱｂ	196	41号建物 柱１		Ⅱｄ
47	２号建物 柱１		Ⅰ	122	ピット122		Ⅲ	197	ピット197		Ⅰ～Ⅲ
48	ピット48		Ⅰ～Ⅲ	123	25号建物 柱７		Ⅱｂ	198	22号建物 柱４		Ⅱｂ
49	２号建物 柱２		Ⅰ	124	ピット124		Ⅰ～Ⅲ	199	ピット199		Ⅱａ以前
50	23号建物 柱２		Ⅱｂ	125	ピット125		Ⅰ～Ⅲ	200	ピット200		Ⅱａ以前
51	ピット51		Ⅰ～Ⅲ	126	ピット126		Ⅰ～Ⅲ	201	ピット201		Ⅰ以前
52	ピット52		Ⅰ～Ⅲ	127	23号建物 柱８		Ⅱｂ	202	４号建物 柱３		Ⅰ
53	ピット53		Ⅱｂ以前	128	ピット128		Ⅰ～Ⅲ	203	ピット203		Ⅰ～Ⅲ
54	ピット54		Ⅱｂ以前	129	ピット129		Ⅰ～Ⅲ	204	ピット204		Ⅰ～Ⅲ
55	23号建物 柱１		Ⅱｂ	130	ピット130		Ⅰ～Ⅲ	205	６号建物 柱16		Ⅱａ
56	23号建物 柱３		Ⅱｂ	131	23号建物 柱６		Ⅱｂ	206	ピット206		Ⅰ～Ⅲ
57	ピット57		Ⅱｂ以後	132	ピット132		Ⅰ～Ⅲ	207	ピット207		Ⅰ～Ⅲ
58	ピット58		Ⅱｅ以後	133	ピット133		Ⅰ～Ⅲ	208	ピット208		Ⅱｂ以前
59	45号建物 柱１		Ⅱｅ	134	23号建物 柱７		Ⅱｂ	209	25号建物 柱15		Ⅱｂ
60	ピット60		Ⅰ～Ⅱｅ	135	50号建物 柱６		Ⅲ	210	41号建物 柱３		Ⅱｄ
61	２号建物 柱４		Ⅰ	136	15号建物 柱３		Ⅱａ	211	52号建物 柱３		Ⅲ
62	ピット62		Ⅰ～Ⅲ	137	50号建物 柱７		Ⅲ	212	６号建物 柱７		Ⅱａ
63	２号建物 柱５		Ⅰ	138	ピット138		Ⅰ～Ⅲ	213	ピット213		Ⅱｂ以後
64	23号建物 柱４		Ⅱｂ	139	ピット139		Ⅰ～Ⅲ	214	ピット214		Ⅱｂ以前
65	ピット65		Ⅰ～Ⅲ	140	ピット140		Ⅰ～Ⅲ	215	20号建物 柱２		Ⅱｂ
66	25号建物 柱１		Ⅱｂ	141	43号建物 柱８		Ⅱｄ	216	６号建物 柱９		Ⅱａ
67	４号建物 柱１		Ⅰ	142	ピット142		Ⅰ～Ⅲ	217	ピット217		Ⅰ～Ⅲ
68	25号建物 柱２		Ⅱｂ	143	45号建物 柱４		Ⅱｅ	218	ピット218		Ⅱａ以前
69	ピット69		Ⅱｂ以前	144	ピット144		Ⅰ～Ⅲ	219	30号建物 柱１		Ⅱｂ
70	ピット70		Ⅱｂ以前	145	ピット145		Ⅰ～Ⅲ	220	ピット220		Ⅱａ以前
71	25号建物 柱３		Ⅱｂ	146	ピット146		Ⅰ～Ⅲ	221	12号建物 柱３		Ⅱａ
72	ピット72		Ⅱｂ以前	147	ピット147		Ⅱｂ	222	１号柱列 柱２		Ⅰ
73	25号建物 柱４		Ⅱｂ	148	ピット148		Ⅱｂ以後	223	12号建物 柱４		Ⅱａ
74	ピット74		Ⅱｂ以後	149	ピット149		Ⅱｂ以後	224	１号柱列 柱３		Ⅰ
75	25号建物 柱10		Ⅱｂ	150	22号建物 柱２		Ⅱｂ	225	54号建物 柱１		Ⅲ

表10　武家屋敷地区第11地点遺構名称対照表（３）
Tab.10　List of the strubtual remains name which are collated (3)

Pit 番号	確定名称	備考	時期	Pit 番号	確定名称	備考	時期	Pit 番号	確定名称	備考	時期
226	６号建物 柱１		Ⅱａ	301	ピット301		Ⅱａ以前	376	51号建物 柱３		Ⅲ
227	６号建物 柱５		Ⅱａ	302	24号建物 柱１		Ⅱｂ	377	ピット377		Ⅰ～Ⅲ
228	12号建物 柱２		Ⅱａ	303	ピット303		Ⅰ～Ⅲ	378	ピット378		Ⅰ～Ⅲ
229	１号柱列 柱１		Ⅰ	304	ピット304		Ⅰ～Ⅲ	379	ピット379		Ⅰ～Ⅲ
230	６号建物 柱６		Ⅱａ	305	10号建物 柱１		Ⅱａ	380	３号建物 柱４		Ⅰ
231	56号建物 柱４		Ⅲ	306	ピット306		Ⅱａ以前	381	ピット381		Ⅰ～Ⅲ
232	ピット232		Ⅰ～Ⅲ	307	ピット307		Ⅰ～Ⅲ	382	43号建物 柱３		Ⅱｄ
233	ピット233		Ⅰ～Ⅲ	308	ピット308		Ⅰ～Ⅲ	383	ピット383		Ⅰ～Ⅲ
234	52号建物 柱１		Ⅲ	309	ピット309		Ⅰ～Ⅲ	384	ピット384		Ⅰ～Ⅲ
235	ピット235		Ⅰ～Ⅲ	310	31号建物 柱１		Ⅱｂ	385	30号建物 柱２		Ⅱｂ
236	ピット236		Ⅰ～Ⅲ	311	ピット311		Ⅱｄ～Ⅱｅ	386	35号建物 柱８		Ⅱｃ
237	ピット237		Ⅰ～Ⅲ	312	41号建物 柱７		Ⅱｄ	387	ピット387		Ⅰ～Ⅲ
238	41号建物 柱６		Ⅱｄ	313	６号建物 柱４		Ⅱａ	388	43号建物 柱１		Ⅱｄ
239	50号建物 柱９		Ⅲ	314	ピット314		Ⅰ～Ⅲ	389	44号建物 柱１		Ⅱｄ
240	56号建物 柱１		Ⅲ	315	ピット315		Ⅰ～Ⅲ	390	40号建物 柱２		Ⅱｃ
241	12号建物 柱１		Ⅱａ	316	56号建物 柱２		Ⅲ	391	ピット391		Ⅰ～Ⅲ
242	12号建物 柱５		Ⅱａ	317	ピット317		Ⅰ～Ⅲ	392	43号建物 柱５		Ⅱｄ
243	６号建物 柱２		Ⅱａ	318	ピット318		Ⅰ～Ⅲ	393	２号柱列 柱２		Ⅱｂ
244	ピット244		Ⅱｅ以後	319	ピット319		Ⅰ～Ⅲ	394	３号建物 柱３		Ⅰ
245	ピット245		Ⅱｅ以後	320	56号建物 柱３		Ⅲ	395	ピット395		Ⅱｃ以前
246	ピット246		Ⅱｅ以後	321	欠番	２号井戸に変更	－	396	ピット396		Ⅰ～Ⅲ
247	ピット247		Ⅱｅ以後	322	ピット322		Ⅰ～Ⅲ	397	36号建物 柱３		Ⅱｃ
248	50号建物 柱５		Ⅲ	323	ピット323		Ⅰ～Ⅲ	398	ピット398		Ⅰ以前
249	52号建物 柱２		Ⅲ	324	53号建物 柱２		Ⅲ	399	36号建物 柱２		Ⅱｃ
250	41号建物 柱８		Ⅱｄ	325	ピット325		Ⅰ～Ⅲ	400	ピット400		Ⅱｂ以後
251	ピット251		Ⅱｄ以後	326	ピット326		Ⅰ～Ⅲ	401	２号柱列 柱３		Ⅱｂ
252	54号建物 柱２		Ⅲ	327	19号建物 柱４		Ⅱｂ	402	ピット402		Ⅱｂ以後
253	17号建物 柱５		Ⅱａ	328	53号建物 柱１		Ⅲ	403	３号建物 柱１		Ⅰ
254	ピット254		Ⅰ～Ⅲ	329	ピット329		Ⅱｅ以前	404	欠番		－
255	ピット255		Ⅲ	330	ピット330		Ⅰ～Ⅲ	405	ピット405		Ⅰ～Ⅲ
256	50号建物 柱10		Ⅲ	331	48号建物 柱５		Ⅱｅ	406	42号建物 柱６		Ⅱｄ
257	３号柱列 柱１		Ⅱｂ	332	14号建物 柱４		Ⅱａ	407	ピット407		Ⅱａ以前
258	ピット258		Ⅰ～Ⅲ	333	41号建物 柱２		Ⅱｄ	408	40号建物 柱１		Ⅱｃ
259	ピット259		Ⅰ～Ⅲ	334	40号建物 柱３		Ⅱｃ	409	ピット409		Ⅱｃ
260	11号建物 柱１		Ⅱａ	335	16号建物 柱１		Ⅱａ	410	35号建物 柱５		Ⅱｃ
261	11号建物 柱２		Ⅱａ	336	41号建物 柱14		Ⅱｄ	411	ピット411		Ⅰ～Ⅲ
262	ピット262		Ⅰ～Ⅲ	337	ピット337		Ⅱｅ以前	412	ピット412		Ⅰ～Ⅲ
263	11号建物 柱３		Ⅱａ	338	ピット338		Ⅰ～Ⅲ	413	47号建物 柱１		Ⅱｅ
264	57号建物 柱２		Ⅲ	339	25号建物 柱８		Ⅱｂ	414	ピット414		Ⅰ～Ⅲ
265	17号建物 柱６		Ⅱａ	340	ピット340		Ⅱｅ以前	415	19号建物 柱１		Ⅱｂ
266	ピット266		Ⅰ～Ⅲ	341	57号建物 柱３		Ⅲ	416	ピット416		Ⅰ～Ⅲ
267	11号建物 柱６		Ⅱａ	342	35号建物 柱７		Ⅱｃ	417	ピット417		Ⅰ～Ⅲ
268	18号建物 柱１		Ⅱａ	343	35号建物 柱４		Ⅱｃ	418	ピット418		Ⅰ～Ⅲ
269	ピット269		Ⅰ～Ⅲ	344	ピット344		Ⅰ～Ⅲ	419	19号建物 柱３		Ⅱｂ
270	54号建物 柱３		Ⅲ	345	８号建物 柱４		Ⅱａ	420	ピット420		Ⅱｃ以前
271	ピット271		Ⅰ～Ⅲ	346	15号建物 柱２		Ⅱａ	421	ピット421		Ⅱｃ以前
272	ピット272		Ⅰ	347	ピット347		Ⅱｅ以後	422	ピット422		Ⅱａ以前
273	ピット273		Ⅰ～Ⅲ	348	51号建物 柱１	348①から変更	Ⅲ	423	ピット423		Ⅰ～Ⅲ
274	ピット274		Ⅰ～Ⅲ	349	38号建物 柱３	349①から変更	Ⅱｃ	424	32号建物 柱１		Ⅱｂ
275	16号建物 柱３		Ⅱａ	350	14号建物 柱１		Ⅱａ	425	ピット425		Ⅰ～Ⅲ
276	24号建物 柱３		Ⅱｂ	351	ピット351		Ⅰ～Ⅲ	426	ピット426		Ⅰ～Ⅲ
277	10号建物 柱４		Ⅱａ	352	ピット352		Ⅱｅ以前	427	ピット427		Ⅱｃ
278	24号建物 柱２		Ⅱｂ	353	38号建物 柱４		Ⅱｃ	428	35号建物 柱３		Ⅱｃ
279	18号建物 柱２		Ⅱａ	354	36号建物 柱４		Ⅱｃ	429	42号建物 柱３		Ⅱｄ
280	ピット280		Ⅰ～Ⅲ	355	ピット355		Ⅰ～Ⅲ	430	ピット430		Ⅱｂ以前
281	16号建物 柱２		Ⅱａ	356	ピット356		Ⅰ～Ⅲ	431	ピット431		Ⅱｂ以前
282	ピット282		Ⅰ～Ⅲ	357	ピット357		Ⅱｃ以前	432	ピット432		Ⅱｃ以前
283	11号建物 柱５		Ⅱａ	358	ピット358		Ⅰ～Ⅲ	433	ピット433		Ⅰ～Ⅲ
284	11号建物 柱４		Ⅱａ	359	42号建物 柱２		Ⅱｄ	434	36号建物 柱１		Ⅱｃ
285	３号柱列 柱３		Ⅱｂ	360	６号建物 柱14		Ⅱａ	435	ピット435		Ⅰ～Ⅲ
286	10号建物 柱３		Ⅱａ	361	６号建物 柱15		Ⅱａ	436	ピット436		Ⅰ～Ⅲ
287	ピット287		Ⅱａ以前	362	ピット362		Ⅰ～Ⅲ	437	ピット437		Ⅱａ以前
288	ピット288		Ⅰ～Ⅲ	363	48号建物 柱２		Ⅱｅ	438	ピット438		Ⅱａ以前
289	６号建物 柱３		Ⅱａ	364	ピット364		Ⅰ～Ⅲ	439	ピット439		Ⅰ～Ⅲ
290	ピット290		Ⅰ～Ⅲ	365	51号建物 柱２		Ⅲ	440	ピット440		Ⅰ～Ⅲ
291	ピット291		Ⅱａ以後	366	42号建物 柱５		Ⅱｄ	441	ピット441		Ⅱｂ以前
292	44号建物 柱２		Ⅱｄ	367	欠番		－	442	35号建物 柱１		Ⅱｃ
293	３号柱列 柱２		Ⅱｂ	368	ピット368		Ⅰ～Ⅲ	443	欠番		－
294	ピット294		Ⅰ～Ⅲ	369	ピット369		Ⅰ～Ⅲ	444	ピット444		Ⅰ
295	ピット295		Ⅰ～Ⅲ	370	２号柱列 柱１		Ⅱｂ	445	19号建物 柱３		Ⅱｂ
296	欠番	１号井戸に変更	－	371	３号建物 柱２		Ⅰ	446	20号建物 柱１		Ⅱｂ
297	ピット297		Ⅰ～Ⅲ	372	ピット372		Ⅰ～Ⅲ	447	ピット447		Ⅱｃ以前
298	ピット298		Ⅰ～Ⅲ	373	ピット373		Ⅰ～Ⅲ	448	ピット448		Ⅰ～Ⅲ
299	ピット299		Ⅱａ以前	374	ピット374		Ⅰ～Ⅲ	449	ピット449		Ⅰ～Ⅲ
300	10号建物 柱２		Ⅱａ	375	ピット375		Ⅰ～Ⅲ	450	ピット450		Ⅰ～Ⅲ

表11　武家屋敷地区第11地点遺構名称対照表（４）
Tab.11　List of the strubtual remains name which are collated (4)

Pit 番号	確定名称	備考	時期	Pit 番号	確定名称	備考	時期	Pit 番号	確定名称	備考	時期
451	ピット451		Ⅱc 以前	526	ピット526		Ⅱb	601	ピット601		Ⅱb 以後
452	ピット452		Ⅰ～Ⅲ	527	ピット527		Ⅰ～Ⅲ	602	欠番		－
453	ピット453		Ⅰ～Ⅲ	528	50号建物 柱２		Ⅲ	603	33号建物 柱４		Ⅱc
454	ピット454		Ⅰ～Ⅲ	529	ピット529		Ⅱb 以前	604	34号建物 柱４		Ⅱc
455	ピット455		Ⅰ～Ⅲ	530	ピット530		Ⅰ～Ⅲ	605	49号建物 柱４		Ⅱe
456	19号建物 柱７		Ⅱb	531	ピット531		Ⅱb 以後	606	ピット606		Ⅰ～Ⅲ
457	ピット457		Ⅱb 以後	532	欠番		－	607	43号建物 柱４		Ⅱd
458	19号建物 柱５		Ⅱb	533	５号建物 柱１		Ⅰ	608	37号建物 柱１		Ⅱc
459	ピット459		Ⅰ～Ⅲ	534	５号建物 柱２		Ⅰ	609	24号建物 柱４		Ⅱb
460	19号建物 柱10		Ⅱb	535	ピット535		Ⅰ	610	ピット610		Ⅰ～Ⅲ
461	ピット461		Ⅰ～Ⅲ	536	ピット536		Ⅱb 以後	611	ピット611		Ⅱa 以前
462	ピット462		Ⅱb 以前	537	ピット537		Ⅱb	612	ピット612		Ⅰ～Ⅲ
463	ピット463		Ⅱb 以後	538	28号建物 柱３		Ⅱb	613	ピット613		Ⅲ
464	19号建物 柱９		Ⅱb	539	ピット539		Ⅱb 以前	614	43号建物 柱２		Ⅱd
465	ピット465		Ⅰ～Ⅲ	540	ピット540		Ⅰ～Ⅲ	615	ピット615		Ⅱc 以後
466	20号建物 柱４		Ⅱb	541	47号建物 柱４		Ⅱe	616	34号建物 柱５		Ⅱc
467	ピット467		Ⅱd 以後	542	ピット542		Ⅰ～Ⅲ	617	ピット617		Ⅰ～Ⅲ
468	41号建物 柱12		Ⅱd	543	ピット543		Ⅰ～Ⅲ	618	１号建物 柱２		Ⅰ
469	55号建物 柱２		Ⅲ	544	29号建物 柱２		Ⅱb	619	30号建物 柱３		Ⅱb
470	41号建物 柱16		Ⅱd	545	26号建物 柱11		Ⅱb	620	ピット620		Ⅰ～Ⅲ
471	27号建物 柱１		Ⅱb	546	47号建物 柱５		Ⅱe	621	46号建物 柱３		Ⅱe
472	55号建物 柱３		Ⅲ	547	32号建物 柱６		Ⅱb	622	43号建物 柱７		Ⅱd
473	25号建物 柱９		Ⅱb	548	32号建物 柱７		Ⅱb	623	ピット623		Ⅱb 以後
474	ピット474		Ⅰ～Ⅲ	549	５号建物 柱10		Ⅰ	624	ピット624		Ⅱb 以後
475	41号建物 柱13		Ⅱd	550	ピット550		Ⅰ以前	625	ピット625		Ⅱa～Ⅱd
476	55号建物 柱１		Ⅲ	551	ピット551		Ⅰ以前	626	９号建物 柱４		Ⅱa
477	ピット477		Ⅱb 以後	552	27号建物 柱３		Ⅱb	627	31号建物 柱２		Ⅱb
478	28号建物 柱１		Ⅱb	553	４号柱列 柱３		Ⅱb	628	26号建物 柱１		Ⅱb
479	ピット479		Ⅰ～Ⅲ	554	26号建物 柱７		Ⅱb	629	ピット629		Ⅱb 以前
480	27号建物 柱２		Ⅱb	555	欠番		－	630	ピット630		Ⅲ
481	28号建物 柱２		Ⅱb	556	ピット556		Ⅰ以前	631	40号建物 柱４		Ⅱc
482	55号建物 柱４		Ⅲ	557	ピット557		Ⅰ～Ⅲ	632	ピット632		Ⅱb 以後
483	ピット483		Ⅰ～Ⅲ	558	47号建物 柱２		Ⅱe	633	ピット633		Ⅰ～Ⅲ
484	52号建物 柱５		Ⅲ	559	41号建物 柱15		Ⅱd	634	ピット634		Ⅰ～Ⅲ
485	６号建物 柱17		Ⅱa	560	ピット560		Ⅱd 以前	635	ピット635		Ⅱb 以後
486	20号建物 柱３		Ⅱb	561	ピット561		Ⅰ以前	636	欠番		－
487	41号建物 柱11		Ⅱd	562	ピット562		Ⅰ～Ⅲ	637	35号建物 柱６		Ⅱc
488	18号建物 柱４		Ⅱa	563	ピット563		Ⅰ～Ⅲ	638	４号柱列 柱１		Ⅰ
489	ピット489		Ⅰ～Ⅲ	564	ピット564		Ⅰ～Ⅲ	639	44号建物 柱４		Ⅱd
490	ピット490		Ⅰ～Ⅲ	565	32号建物 柱４		Ⅱb	640	26号建物 柱５		Ⅱb
491	ピット491		Ⅰ～Ⅲ	566	ピット566		Ⅰ～Ⅲ	641	26号建物 柱９		Ⅱb
492	欠番		－	567	58号建物 柱３		Ⅱc	642	ピット642		Ⅰ～Ⅲ
493	５号建物 柱３		Ⅰ	568	ピット568		Ⅰ～Ⅲ	643	34号建物 柱１		Ⅱc
494	ピット494		Ⅰ～Ⅲ	569	53号建物 柱４		Ⅲ	644	49号建物 柱３		Ⅱe
495	ピット495		Ⅰ～Ⅲ	570	ピット570		Ⅰ～Ⅲ	645	ピット645		Ⅰ～Ⅲ
496	ピット496		Ⅰ～Ⅲ	571	53号建物 柱３		Ⅲ	646	34号建物 柱３		Ⅱc
497	ピット497		Ⅰ～Ⅲ	572	ピット572		Ⅰ～Ⅲ	647	33号建物 柱２		Ⅱc
498	ピット498		Ⅰ～Ⅲ	573	ピット573		Ⅰ～Ⅲ	648	ピット648		Ⅰ～Ⅲ
499	58号建物 柱２		Ⅱc	574	32号建物 柱５		Ⅱb	649	ピット649		Ⅰ～Ⅱc
500	ピット500		Ⅰ～Ⅲ	575	ピット575		Ⅰ～Ⅲ	650	33号建物 柱３		Ⅱc
501	ピット501		Ⅰ～Ⅲ	576	29号建物 柱３		Ⅱb	651	ピット651		Ⅰ～Ⅲ
502	ピット502		Ⅲ	577	26号建物 柱12		Ⅱb	652	ピット652		Ⅰ～Ⅲ
503	ピット503		Ⅰ	578	ピット578		Ⅱb 以前	653	34号建物 柱２		Ⅱc
504	ピット504		Ⅰ～Ⅲ	579	ピット579		Ⅰ～Ⅲ	654	ピット654		Ⅰ～Ⅱd
505	29号建物 柱１		Ⅱb	580	ピット580		Ⅰ～Ⅲ	655	ピット655		Ⅰ～Ⅱd
506	ピット506		Ⅰ～Ⅲ	581	ピット581		Ⅱb 以前	656	ピット656		Ⅰ～Ⅱd
507	58号建物 柱1		Ⅱc	582	欠番		－	657	49号建物 柱２		Ⅱe
508	ピット508		Ⅰ～Ⅲ	583	ピット583		Ⅱb 以前	658	ピット658		Ⅰ～Ⅱb
509	ピット509		Ⅰ～Ⅲ	584	ピット584		Ⅰ～Ⅲ	659	ピット659		Ⅰ以前
510	ピット510		Ⅱb	585	ピット585		Ⅰ～Ⅲ	660	ピット660		Ⅰ以前
511	ピット511		Ⅰ～Ⅲ	586	ピット586		Ⅲ	661	ピット661		Ⅰ以前
512	５号建物 柱７		Ⅰ	587	ピット587		Ⅰ～Ⅲ	662	ピット662		Ⅰ～Ⅱe
513	５号建物 柱９		Ⅰ	588	ピット588		Ⅰ～Ⅲ	663	ピット663		Ⅱe 以後
514	ピット514		Ⅰ以前	589	ピット589		Ⅰ～Ⅲ	664	欠番		－
515	欠番		－	590	ピット590		Ⅰ～Ⅲ	665	ピット665		Ⅰ～Ⅱd
516	欠番		－	591	ピット591		Ⅰ～Ⅲ	666	４号柱列 柱２		Ⅱb
517	ピット517		Ⅱb 以前	592	ピット592		Ⅰ～Ⅲ	667	33号建物 柱１		Ⅱc
518	ピット518		Ⅰ	593	ピット593		Ⅰ～Ⅲ	668	39号建物 柱２		Ⅱc
519	５号建物 柱８		Ⅰ	594	ピット594		Ⅰ～Ⅲ	669	ピット669		Ⅰ～Ⅲ
520	32号建物 柱３		Ⅱb	595	49号建物 柱１		Ⅱe	670	ピット670		Ⅰ～Ⅲ
521	47号建物 柱３		Ⅱe	596	ピット596		Ⅱe 以前	671	39号建物 柱６		Ⅱc
522	欠番		－	597	ピット597		Ⅱe 以後	672	ピット672		Ⅰ～Ⅲ
523	29号建物 柱４		Ⅱb	598	ピット598		Ⅱb 以後	673	ピット673		Ⅰ～Ⅲ
524	ピット524		Ⅱb 以後	599	ピット599		Ⅰ～Ⅲ	674	ピット674		Ⅰ～Ⅲ
525	ピット525		Ⅰ～Ⅲ	600	ピット600		Ⅱb 以前	675	ピット675		Ⅱb～Ⅱd

表12　武家屋敷地区第11地点遺構名称対照表（５）
Tab.12　List of the strubtual remains name which are collated (5)

Pit番号	確定名称	備考	時期
676	ピット676		Ⅱb～Ⅱd
677	ピット677		Ⅱb～Ⅱd
678	25号建物 柱12		Ⅱb
679	21号建物 柱２		Ⅱb
680	52号建物 柱４		Ⅲ
681	ピット681		Ⅰ～Ⅱe
682	28号建物 柱４		Ⅱb
683	ピット683		Ⅰ～Ⅲ
684	24号建物 柱５		Ⅱb
685	26号建物 柱３		Ⅱb
686	37号建物 柱２		Ⅱc
687	24号建物 柱６		Ⅱb
688	42号建物 柱４		Ⅱd
689	ピット689		Ⅱd～Ⅱe
690	26号建物 柱４		Ⅱb
691	ピット691		Ⅱa以前
692	ピット692		Ⅱb以前
693	９号建物 柱１		Ⅱa
694	44号建物 柱５		Ⅱd
695	ピット695		Ⅰ～Ⅲ
696	37号建物 柱３		Ⅱc
697	ピット697		Ⅰ～Ⅲ
698	ピット698		Ⅱa以後
699	44号建物 柱３		Ⅱd
700	31号建物 柱３		Ⅱb
701	26号建物 柱８		Ⅱb
702	ピット702		Ⅰ～Ⅲ
703	９号建物 柱３		Ⅱa
704	24号建物 柱９		Ⅱb
705	18号建物 柱３		Ⅱa
706	ピット706		Ⅱb以後
707	ピット707		Ⅰ～Ⅲ
708	39号建物 柱１		Ⅱc
709	５号建物 柱５		Ⅰ
710	ピット710		Ⅱa～Ⅱd
711	５号建物 柱６		Ⅰ
712	ピット712		Ⅱb以前
713	46号建物 柱２		Ⅱe
714	５号建物 柱４		Ⅰ
715	９号建物 柱５		Ⅱa
716	ピット716		Ⅰ～Ⅲ
717	24号建物 柱10		Ⅱb
718	42号建物 柱７		Ⅱd
719	ピット719		Ⅱb
720	10号建物 柱５		Ⅱa
721	ピット721		Ⅱa以前
722	39号建物 柱３		Ⅱc
723	ピット723		Ⅱb以後
724	ピット724		Ⅱb以後
725	18号建物 柱５		Ⅱa
726	26号建物 柱６		Ⅱb
727	ピット727		Ⅱb以後
728	ピット728		Ⅰ～Ⅲ
729	ピット729		Ⅰ～Ⅲ
730	ピット730		Ⅰ～Ⅲ
731	ピット731		Ⅱb以後
732	ピット732		Ⅱd以前
733	ピット733		Ⅰ～Ⅲ
734	１号建物 柱５		Ⅰ
735	ピット735		Ⅰ以前
736	ピット736		Ⅱb以後
737	16号建物 柱４		Ⅱa
738	ピット738		Ⅱb以後
739	ピット739		Ⅱb以後
740	26号建物 柱10		Ⅱb
741	24号建物 柱７		Ⅱb
742	ピット742		Ⅰ～Ⅲ
743	46号建物 柱４		Ⅱe
744	40号建物 柱５		Ⅱc
745	43号建物 柱6		Ⅱd
746	ピット746		Ⅱb以前
747	ピット747		Ⅰ～Ⅲ
748	26号建物 柱２		Ⅱb
749	ピット749		Ⅱa以前
750	24号建物 柱８		Ⅱb
751	ピット751		Ⅰ以前
752	ピット752		Ⅱa以前
753	ピット753		Ⅰ～Ⅲ
754	46号建物 柱１		Ⅱe
755	16号建物 柱５		Ⅱa
756	ピット756		Ⅱb以後
757	ピット757		Ⅰ以前
758	１号建物 柱１		Ⅰ
759	ピット759		Ⅰ以前
760	ピット760		Ⅰ以前
761	ピット761		Ⅰ以前
762	ピット762		Ⅰ以前
763	９号建物 柱２		Ⅱa
764	ピット764		Ⅱc以前
765	ピット765		Ⅰ～Ⅲ
766	ピット766		Ⅱd以前
767	ピット767		Ⅱd以前
768	39号建物 柱５		Ⅱc
769	１号建物 柱４		Ⅰ
770	ピット770		Ⅰ以前
771	39号建物 柱４		Ⅱc
772	ピット772		Ⅱd以前
773	ピット773		Ⅱd以前
774	ピット774		Ⅰ以前
775	32号建物 柱２		Ⅱb
776	ピット776		Ⅱd以前
777	ピット777		Ⅰ以前
778	ピット778		Ⅱd以前
779	１号建物 柱３		Ⅰ
780	ピット780		Ⅱb以前
781	ピット781		Ⅰ以前
782	ピット782		Ⅱb以前
783	ピット783		Ⅱb以後
784	19号建物 柱６		Ⅱb
なし	42号建物 柱１	348②から変更	Ⅱd
なし	ピット786	349②から変更	Ⅱc
なし	ピット787	A－13区瓦溜まりから変更	Ⅲ
S１	石１		Ⅰ～Ⅲ
S２	石２		Ⅰ～Ⅲ
S３	石３		Ⅰ～Ⅲ
S４	石４		Ⅰ～Ⅲ
S５	石５		Ⅰ～Ⅲ
S６	19号建物 柱８		Ⅱb
S７	19号建物 柱８		Ⅱb
S８	19号建物 柱７		Ⅱb
S９	石９		Ⅰ～Ⅲ
S10	石10		Ⅰ～Ⅲ
S11	石11		Ⅰ～Ⅲ
S12	石12		Ⅰ～Ⅲ
S13	石13		Ⅰ～Ⅲ
S14	石14		Ⅰ～Ⅲ
S15	石15		Ⅰ～Ⅲ
S16	石16		Ⅰ～Ⅲ
S17	石17		Ⅰ～Ⅲ
S18	石18		Ⅰ～Ⅲ
S19	石19		Ⅱb以後
S20	石20		Ⅰ～Ⅲ
S21	石21		Ⅰ～Ⅲ
S22	石22		Ⅰ～Ⅲ
S23	石23		Ⅱe以後
S24	石24		Ⅱb以後
S25	石25		Ⅰ～Ⅲ
S26	石26		Ⅰ～Ⅲ
S27	石27		Ⅱd以後
S28	石28		Ⅰ～Ⅲ
S29	石29		Ⅰ～Ⅲ
S30	石30		Ⅰ～Ⅲ
S31	石31		Ⅰ～Ⅲ
S32	石32		Ⅱb以後
S33	石33		Ⅱb以後
S34	欠番		－
S35	石35		Ⅰ～Ⅲ
S36	石36		Ⅱb以後
S37	石37		Ⅰ～Ⅲ
S38	石38		Ⅰ～Ⅲ
S39	欠番		－
S40	石40		Ⅱe以後
木杭１	１号杭列 杭１		Ⅲ
木杭２	１号杭列 杭２		Ⅲ
木杭３	１号杭列 杭３		Ⅲ
杭４	２号杭列 杭１		Ⅲ
杭５	２号杭列 杭２		Ⅲ
杭６	２号杭列 杭３		Ⅲ
杭７	杭７		Ⅲ
杭８	杭８		Ⅲ
杭９	杭９		Ⅲ
杭10	杭10		Ⅲ
杭11	杭11		Ⅲ
杭12	欠番		－
杭13	杭13		Ⅰ
杭14	杭14		Ⅰ
杭15	杭15		Ⅰ
杭a	杭16		Ⅰ～Ⅲ
杭b	杭17		Ⅰ～Ⅲ

表13　武家屋敷地区第11地点時期別遺構一覧表
Tab.13　List of all strubtual remains divided in period

確定名称	現場名称	備考
Ⅰ期以前		
沢状遺構	1号遺構古段階	
Ⅰ期		
1号建物	なし	個別ピット番号
2号建物	なし	個別ピット番号
3号建物	なし	個別ピット番号
4号建物	なし	個別ピット番号
5号建物	なし	個別ピット番号
1号柱列	なし	個別ピット番号
木樋	木樋	
2号井戸	2号井戸	
4号井戸	4号井戸	
1号遺構	1号遺構新段階	
2号遺構	2号遺構	
4号遺構	4号遺構	
5号遺構	5号遺構	
7号遺構	7号遺構	
9号遺構	9号遺構	
14号遺構	14号遺構	
16号遺構	16号遺構	
19号遺構	19号遺構	
21号遺構	21号遺構	
24号遺構	24号遺構	
地鎮遺構	地鎮遺構	
Ⅱa期		
6号建物	なし	個別ピット番号
7号建物	なし	個別ピット番号
8号建物	なし	個別ピット番号
9号建物	なし	個別ピット番号
10号建物	なし	個別ピット番号
11号建物	なし	個別ピット番号
12号建物	なし	個別ピット番号
13号建物	なし	個別ピット番号
14号建物	なし	個別ピット番号
15号建物	なし	個別ピット番号
16号建物	なし	個別ピット番号
17号建物	なし	個別ピット番号
18号建物	なし	個別ピット番号
1号井戸	1号井戸	
3号井戸	3号井戸	
3号遺構	3号遺構	
10号遺構	10号遺構	
22号遺構	22号遺構	
31号遺構	1号土坑	

確定名称	現場名称	備考
Ⅱb期		
19号建物	なし	個別ピット番号
20号建物	なし	個別ピット番号
21号建物	なし	個別ピット番号
22号建物	なし	個別ピット番号
23号建物	なし	個別ピット番号
24号建物	なし	個別ピット番号
25号建物	なし	個別ピット番号
26号建物	なし	個別ピット番号
27号建物	なし	個別ピット番号
28号建物	なし	個別ピット番号
29号建物	なし	個別ピット番号
30号建物	なし	個別ピット番号
31号建物	なし	個別ピット番号
32号建物	なし	個別ピット番号
2号柱列	なし	個別ピット番号
3号柱列	なし	個別ピット番号
4号柱列	なし	個別ピット番号
6号溝	6号溝	
7号溝	7号溝	
15号溝	15号溝	
6号井戸	6号井戸	
6号遺構	6号遺構	
8号遺構	8号遺構	
11号遺構	11号遺構	
15号遺構	15号遺構	
20号遺構	20号遺構	
25号遺構	25号遺構	
28号遺構	28号遺構	
29号遺構	29号遺構	
30号遺構	30号遺構	
Ⅱc期		
33号建物	なし	個別ピット番号
34号建物	なし	個別ピット番号
35号建物	なし	個別ピット番号
36号建物	なし	個別ピット番号
37号建物	なし	個別ピット番号
38号建物	なし	個別ピット番号
39号建物	なし	個別ピット番号
40号建物	なし	個別ピット番号
9号溝	9号溝	
8号井戸	8号井戸	
12号遺構	12号遺構	
13号遺構	13号遺構	
23号遺構	23号遺構	
27号遺構	27号遺構	

確定名称	現場名称	備考
Ⅱd期		
41号建物	なし	個別ピット番号
42号建物	なし	個別ピット番号
43号建物	なし	個別ピット番号
44号建物	なし	個別ピット番号
5号溝	5号溝	
10号溝	10号溝	
11号溝	11号溝	
12号溝	12号溝	
13号溝	13号溝	
5号井戸	5号井戸	
17号遺構	17号遺構	
18号遺構	18号遺構	
26号遺構	26号遺構	
Ⅱe期		
45号建物	なし	個別ピット番号
46号建物	なし	個別ピット番号
47号建物	なし	個別ピット番号
48号建物	なし	個別ピット番号
49号建物	なし	個別ピット番号
1号溝	1号溝	
2号溝	2号溝	3号溝と一連
3号溝	3号溝	2号溝と一連
4号溝	4号溝	
8号溝	8号溝	
14号溝	14号溝	
16号溝	16号溝	
焼土遺構	E-15区焼土	
Ⅲ期		
50号建物	なし	個別ピット番号
51号建物	なし	個別ピット番号
52号建物	なし	個別ピット番号
53号建物	なし	個別ピット番号
54号建物	なし	個別ピット番号
55号建物	なし	個別ピット番号
56号建物	なし	個別ピット番号
57号建物	なし	個別ピット番号
58号建物	なし	個別ピット番号
7号井戸	7号井戸	
1号杭列	なし	個別杭番号
2号杭列	なし	個別杭番号
Ⅲ期以降		
1号暗渠	1号暗渠	

表14　武家屋敷地区第11地点遺構属性表（1）
Tab.14　Attributes of all structural remains at BK11 (1)

名称	時期	区	形状	面積（㎡）	規模（東西×南北）（m）	確認面	古い遺構	新しい遺構	時期不明
沢状遺構	Ⅰ期以前	C－1～3、D－1～6、E･F･G･H－1～7、I－2～7	－	324.6	23.1+×19.5+	地山		1・7号遺構、5号溝、3・6・11・19・53・56号建物、 2・3号柱列、1・2号井戸、ピット282・290・291・295・297・298・304・314・315・317～319・322・323・326・372～375・377～379・384・387・391・414・416 ～ 418・425・444・448・454・455・457・459・463・483・489、石2・3・5～7・12～14・16、2号杭列、杭9・11・16・17	
1号遺構	Ⅰ期	E－1～4、F－1～5、G－2・4	長方形	54.2	13.2+×4.7（最大8.1）	沢状遺構埋土	沢状遺構	53号建物、木樋、ピット325・351・570・572、石17・18、杭10・13・14・15	
2号遺構	Ⅰ期	C－9・10	長方形	2.8	(3.2)×0.9	地山		7・13号建物、ピット180・185・187	
3号遺構	Ⅱa期	B－5	長方形？	1.0	1.0×1.1	地山			
4号遺構	Ⅰ期	B･C－6	正方形	0.7	0.9×0.8	地山	5号遺構、ピット272		
5号遺構	Ⅰ期	B･C－6・7	長方形	3.0	(2.6)×1.2	地山		4号遺構、ピット259・272	
6号遺構	Ⅱb期	A･B－3	長方形？	0.9	(0.6)×(2.0)	地山			
7号遺構	Ⅰ期	F－7～9、G－7～10、H･I－7	不明	37.2	9.6+×10.0+	沢状遺構埋土、地山	沢状遺構、ピット659～661	13号遺構、6号溝、木樋、3・20号建物、2号柱列、ピット400・402・405・423・426・433・435・436・439・450・453・465・490・491・496、石1・29・30・31	
8号遺構	Ⅱb期	C－14･15	長方形	0.9	1.0×1.1	地山		35・36・51号建物、2号溝	
9号遺構	Ⅰ期	E－7・8	楕円形	5.0	0.8（復元2.1）×3.0	地山		6号建物、ピット362	
10号遺構	Ⅱa期	C－13	長方形	1.5	1.5×(1.5)	地山	ピット437・438	2号溝、30号建物	
11号遺構	Ⅱb期	D－13	長方形	2.0	(1.6)×1.4	地山	ピット430・462	35・42・43号建物、2号溝	
12号遺構	Ⅱc期	D－17	楕円形？	1.1	1.8×(1.1)	地山		杭7・8	
13号遺構	Ⅱc期	F･G－7・8	長方形	4.3	2.6×(1.9)	7号遺構埋土	7号遺構	石28	
14号遺構	Ⅰ期	C･D－18～20	不整形	21.0	6.8+×4.4	地山	ピット777	2・7号溝、5・27・28号建物、ピット495・537・681	
15号遺構	Ⅱb期	D･E－19	楕円形？	1.3	(1.0)×1.8	地山	7号溝、ピット529・539		
16号遺構	Ⅰ期	F－8・9	溝状	1.7	(3.2)×0.8	地山		4号井戸、6･20号建物、ピット440・494・503	
17号遺構	Ⅱd期	G～I－20	不明	1.9	0.4+×6.5+	地山			
18号遺構	Ⅱd期	E･F－20	不明	0.8	0.6+×(2.1)	地山			
19号遺構	Ⅰ期	F－13	長方形	1.5	(0.8)×(1.9)	地山	ピット535		
20号遺構	Ⅱb期	E･F－19･20	楕円形	4.6	(1.8)×3.2	地山、29号遺構埋土	29号遺構、5号建物、ピット780		
21号遺構	Ⅰ期	D～G－17･18	長方形	23.3	3.9×(8.4)	地山	ピット751・774・781	23・25・27・29号遺構、8・9号溝、ピット568・587・594・599・634、石20～22	
22号遺構	Ⅱa期	G－11･12	不明	1.1	(1.3)×1.1+	地山			
23号遺構	Ⅱc期	F－18	楕円形	1.0	1.2×(1.0)	21・27・29号遺構埋土	21・27・29号遺構		
24号遺構	Ⅰ期	G～I－14～16	楕円形	32.8	6.3+×6.6	地山	1号建物、ピット757・759・760・761・762	33･34･39･49号建物、13号溝、ピット642・645・648・649・651・652・658・662・665・672・753・765、石25・26・27・35・37・38	
25号遺構	Ⅱb期	G－17～19、H･I－16～19	楕円形	44.6	(11.5)×4.4	地山	21・28・29号遺構、1・5号建物、ピット712・735・782	27号遺構、10･11･12･14号溝、33・34・49号建物、ピット598・601・615・623・624・632・635、石24	30号遺構、ピット702
26号遺構	Ⅱd期	F･G－16･17	楕円形	9.3	4.5×(2.9)	地山	1・39号建物、ピット766・767・770・772・773・776・778		
27号遺構	Ⅱc期	F･G－18･19	不整形	6.5	(3.9)×(3.6)	29号遺構埋土	21・25・29号遺構	23号遺構、14号溝	
28号遺構	Ⅱb期	H－20、I－18～20	不明	6.4	(4.9)×2.0+	地山		25号遺構、11･13･14号溝、ピット663・783	
29号遺構	Ⅱb期	E－19、F･G－18～20	楕円形	20.9	(4.6)×5.3	地山	21号遺構、5号建物、ピット746	20・23・25・27号遺構、石19・32・33・36	
30号遺構	Ⅱb期	I－17･18	不明	4.1	1.1+×4.4	地山		10号溝、34号建物、ピット783	25号遺構
31号遺構	Ⅱa期	D－7	長方形	2.4	1.1×(2.3)	地山	ピット218	ピット188・189	
地鎮遺構	Ⅰ期	F－10	－	－	－	ピット398埋土	ピット398		
焼土遺構	Ⅱe期	E－15	長方形	0.09	44×19	ピット689埋土	ピット689		

＊規模の（　）は残存長、＋は調査区外に伸びることを示す。表15も同様。
＊焼土遺構の規模は長軸×単軸（cm）

表15　武家屋敷地区第11地点遺構属性表（２）
Tab.15　Attributes of all structural remains at BK11 (2)

名称	時期	区	方向	最大幅（m）	長さ（m）	確認面	古い遺構	新しい遺構	時期不明
１号溝	Ⅱe期	D･E－10	N－25°－W	0.4	(0.8)	地山			
２号溝	Ⅱe期	A－17、B－17、C－13～ 20、D－13～ 17	N－59°－E	1.3	24.3+	地山	８・10・11・14号遺構、７号溝、６号井戸、５・16・18・25・35・36・40 ～ 44号建物、ピット329・337・340・352・357・409・437・441・447	４号溝、51・57号建物、１号杭列、ピット211・244 ～ 247、石40	
３号溝	Ⅱe期	A－17、B－17、C－13～ 20、D－13～ 17	N－36°－W	0.7	5.5+	地山			
４号溝	Ⅱe期	A－16･17	N－60.5°－E	0.3	(2.7)	地山	３号溝、41号建物、ピット311	52号建物	
５号溝	Ⅱd期	F･G･H･I－１	N－26.5°－W	0.8	(8.4)	沢状遺構埋土	沢状遺構		
６号溝	Ⅱb期	F－７	N－82.5°－W	0.6	(1.8)	地山、沢状遺構	沢状遺構、７号遺構、13号溝		
７号溝	Ⅱb期	C･D－19	N－16°－W	0.3	(3.2)	地山、14号遺構埋土	14号遺構、ピット537	15号遺構、２号溝	
８号溝	Ⅱe期	D－18	N－36°－W	(0.4)	(1.9)	地山	21号遺構、41号建物、ピット560		
９号溝	Ⅱc期	F－17･18	N－50°－W	0.6	(1.5)	21号遺構埋土	21号遺構		
10号溝	Ⅱd期	H･I－18	N－30°－W	0.9	4.6+	25号遺構・30号遺構埋土	25・30号遺構		
11号溝	Ⅱd期	G･H･I－18	N－33°－W	(0.6)	4.1+	25号遺構埋土	25・28号遺構		12号溝
12号溝	Ⅱd期	G･H－18･19、I－18	N－28.5°－W	(0.6)	3.9+	25号遺構埋土	25・28号遺構	14号溝、石23	11号溝
13号溝	Ⅱd期	G･H･I－15･16	N－23.5°－W	2.1	7.0+	24号遺構埋土	24号遺構、34号建物、ピット654 ～ 656・665・732・757	石27	
14号溝	Ⅱe期	F･G･H･I－18･19	N－24.5°－W	(0.9)	(9.1)	地山	25・27・28・29号遺構、12号溝、ピット746	ピット663、石23	
15号溝	Ⅱb期	D－13～ 15、E－13～ 17	N－68°－E	0.9	9.5	地山	18号建物	24・26・37・39・40・44号建物、ピット706・723・724・727・731・756	
16号溝	Ⅱe期	E－17	N－32°－W	0.3	1.1	地山			
１号暗渠	２層上面	A～ I－20	N－27°－W	1.9	25.7+	2層上面	13・14・17・20・25・28・29号遺構、２号溝、５号建物、ピット508・514・543・702・777		
木樋	Ⅰ期	F－６・７	N－65.5°－E	0.6	(3.9)	沢状遺構埋土	沢状遺構、１・７号遺構	２号柱列、ピット490	

名称	時期	区	構造	直径（m）	確認面	古い遺構	新しい遺構	不明
１号井戸	Ⅱa期	D －１・２	桶	1.2	沢状遺構埋土	沢状遺構、２号井戸		
２号井戸	Ⅰ期	D －２	素掘り	1.1	沢状遺構埋土	沢状遺構	１号井戸	
３号井戸	Ⅱa期	F －10・11	素掘り	1.3	地山			
４号井戸	Ⅰ期	F －９・10	素掘り	2.1	地山	16号遺構、ピット503		
５号井戸	Ⅱd期	A・B －14・15	石組み	2.3	地山	21・25号建物、ピット675	50号建物	
６号井戸	Ⅱb期	A・B －17・18	石組み	3.7	地山		３号溝、41・52号建物	
７号井戸	Ⅲ期	F・G －14・15	石組み	2.8	地山	ピット753・765	ピット502・613・630	
８号井戸	Ⅱc期	B・C －８・９	素掘り	1.6	地山	ピット25		

表16　武家屋敷地区第11地点建物属性表
Tab.16　Attributes of all buildings at BK11

建物名	区	角度	間数（東西×南北）	尺	時期	古い遺構	新しい遺構
1号建物	F～I－14～16	N－27.5°－W	3×4	6尺5寸	Ⅰ期	ピット735・770	24・25号遺構、39号建物
2号建物	A－11～13	N－26°－W	3×1	6尺5寸	Ⅰ期		ピット60・65・84
3号建物	G・H－4～7	N－28°－W	4×2	6尺5寸	Ⅰ期	沢状遺構、7号遺構	
4号建物	A・B－13・14	N－29°－W	2×2	6尺5寸	Ⅰ期	ピット201	57号建物、ピット107・112・178・179
5号建物	C～G－20	N－28°－W	1×7	6尺5寸	Ⅰ期	14号遺構、ピット514・550・551・556	29号遺構、2号溝、ピット543
6号建物	C～F－5～8	N－22°－W	5×4.5	6尺3寸、6尺3寸半	Ⅱa期	沢状遺構、1・7・9・16号遺構	12号建物
7号建物	A～C－9・10	N－20°－W	1×4	6尺3寸	Ⅱa期	2号遺構、ピット180	13号建物、ピット33
8号建物	B－13～15	N－25°－W	2×1	6尺3寸	Ⅱa期	15号建物、ピット109・199・200	14号建物、ピット99・107・427
9号建物	E－13～15	N－26°－W	2×1	6尺3寸	Ⅱa期	ピット691・721	16・42・43・46号建物、ピット698・710
10号建物	D・E－14～16	N－25°－W	3×2	6尺3寸	Ⅱa期	ピット287・306・407・749	
11号建物	C－2～4	N－24.5°－W	2×1	5尺3寸、6尺3寸	Ⅱa期	1号遺構	
12号建物	A～C－4～6	N－21°－W	2×3	6尺3寸	Ⅱa期	6号建物、ピット220	
13号建物	B・C－7～10	N－21°－W	4×1	6尺3寸	Ⅱa期	7号建物、ピット14・28	ピット37・185
14号建物	B・C－14・15	N－25°－W	2×2	6尺3寸	Ⅱa期	8号建物、ピット107・109・422	35・48号建物
15号建物	B・C－13・14	N－26°－W	1×1	6尺3寸	Ⅱa期	ピット200	8・50号建物
16号建物	D・E－14～16	N－23°－W	4×2	6尺3寸	Ⅱa期	9号建物	2号溝、46号建物、ピット738
17号建物	A～C－15・16	N－26°－W	1×3	5尺、5尺半	Ⅱa期		21・57号建物、ピット173
18号建物	C～E－16	N－24°－W	1×2	6尺3寸	Ⅱa期		2・15号溝、24号建物、ピット723・724
19号建物	G～I－1～5	N－26°－W	6×2.5	6尺3寸、6尺3寸半	Ⅱb期	沢状遺構、1号遺構	ピット457・463
20号建物	E～G－8	N－26°－W	1×4	6尺3寸	Ⅱb期	16号遺構、ピット214	ピット213
21号建物	A－13～15	N－26°－W	3×？	6尺3寸	Ⅱb期	17号建物、ピット194	25号建物、41号建物
22号建物	C～E－9・10	N－26°－W	1×2	6尺3寸	Ⅱb期	ピット165	ピット148、149
23号建物	A～C－10～12	N－26°－W	3×3	6尺3寸	Ⅱb期	ピット54・116	ピット57・90・91
24号建物	D・E－13～16	N－27.5°－W	5×2	6尺3寸	Ⅱb期	18・26号建物	
25号建物	A－13～18	N－26°－W	8×1	6尺3寸、6尺3寸半	Ⅱb期	21号建物、ピット69・70・72・93	5号井戸、ピット74・161・677
26号建物	D～F－13～17	N－29°－W	6×2	6尺3寸	Ⅱb期	15号溝、ピット535・629・692	24・29・31号建物、ピット724・736・739
27号建物	B・C－18・19	N－26°－W	1×2	6尺3寸	Ⅱb期	14号遺構	
28号建物	B～D－18・19	N－26°－W	2×2	6尺3寸	Ⅱb期	14号遺構	ピット477・531・537
29号建物	F－12～14	N－26°－W	3×1	6尺3寸	Ⅱb期	26・32号建物、ピット526	
30号建物	C～E－12・13	N－26°－W	2×3	6尺3寸	Ⅱb期	10号遺構	
31号建物	D・E－13・14	N－26°－W	2×2	6尺3寸	Ⅱb期	26号建物、ピット441・629	35号建物
32号建物	F・G－11～14	N－26°－W	3×1	6尺3寸	Ⅱb期	ピット517・578・581・583・600	29・47・58号建物、ピット526
33号建物	G～I－16・17	N－31°－W	2×3	6尺3寸	Ⅱc期	24・25号遺構	
34号建物	H・I－15～17	N－31°－W	3×2	6尺3寸	Ⅱc期	24・25・30号遺構、ピット649	13号溝
35号建物	C～E－13・14	N－31°－W	2×4	6尺3寸	Ⅱc期	8・11・14・31号建物、ピット395・422・431・432・451	40号建物、ピット409・427
36号建物	C・D－13・14	N－31°－W	2×2	5尺、5尺6寸	Ⅱc期	8号遺構、ピット395・420・421・431・437	38・43号建物、ピット427
37号建物	E－13～15	N－30°－W	3×1	6尺3寸	Ⅱc期	15号溝	40号建物、ピット689
38号建物	B・C－13～15	N－30°－W	3×1	6尺3寸	Ⅱc期	36号建物、ピット427・437	42号建物
39号建物	E～G－15・16	N－29°－W	1×4	6尺3寸	Ⅱc期	24号遺構、15号溝、ピット749	26号遺構
40号建物	D・E－14～16	N－32°－W	4×2	6尺3寸	Ⅱc期	35・37号建物、ピット357・409・441・764	44号建物
41号建物	A～D－15～18	N－26°－W	4.5×4	6尺3寸、6尺3寸半	Ⅱd期	6号井戸、21号建物、ピット208・560	2・4・8号溝、50号建物、ピット251・311・467
42号建物	C～E－13・14	N－27°－W	1×3	6尺3寸	Ⅱd期	11号遺構、9・38号建物、ピット407・422・427・430・437・691	2号溝
43号建物	C～E－13～15	N－28°－W	3×4	6尺3寸	Ⅱd期	11号遺構、9・36号建物、ピット421・422・427・437・625・710・721	
44号建物	D・E－15・16	N－28°－W	2×2	6尺3寸	Ⅱd期	40号建物、ピット441	2号溝、ピット689、焼土遺構
45号建物	A・B－9～11	N－29°－W	3×1	6尺3寸	Ⅱe期	ピット25・28・60	ピット58
46号建物	E・F－14	N－28°－W	1×2	6尺3寸	Ⅱe期	16号建物、ピット721	
47号建物	F・G－12・13	N－27°－W	3×2	6尺3寸	Ⅱe期	32号建物、ピット578	
48号建物	B・C－14・15	N－29°－W	2×2	6尺3寸	Ⅱe期	14号建物、ピット172・201・422	ピット99・347
49号建物	G・H－14～17	N－28°－W	4×2	6尺3寸	Ⅱe期	24・25号遺構、ピット596・662	
50号建物	B・C－14～17	N－13.5°－W	5×1	6尺3寸	Ⅲ期	5号井戸、15号建物、41号建物、ピット140	ピット168・255
51号建物	C－13・14	N－29°－W	2×1	6尺	Ⅲ期	2号溝、ピット422・427	
52号建物	A・B－16～18	N－21°－W	2×3	6尺3寸	Ⅲ期	4号溝	ピット122
53号建物	D・E－1～3	N－16°－W	3×2	6尺3寸	Ⅲ期	沢状遺構、1号遺構	
54号建物	C－6	N－15°－W	1×1	7尺	Ⅲ期		
55号建物	A・B－18・19	N－45°－W	1×2.5	6尺3寸、6尺3寸半	Ⅲ期		
56号建物	C～E－6	N－23°－W	1×3	6尺	Ⅲ期	1号遺構、ピット271・318	
57号建物	B・C－14～16	N－26°－W	2×2	6尺	Ⅲ期	4・17号建物、ピット107	
58号建物	F・G－13・14	N－31°－W	1×1	6尺	Ⅲ期	32号建物	
1号柱列	A～C－6	N－23°－W	2	6尺5寸	Ⅰ期		
2号柱列	H－4～7	N－63.5°－E	4	6尺3寸	Ⅱb期	沢状遺構、7号遺構	ピット400
3号柱列	B～D－2	N－26.5°－W	2	10尺	Ⅱb期	沢状遺構	
4号柱列	E－15～17	N－64°－E	3	6尺3寸	Ⅱb期		

３．検出遺構

前述の時期ごとに検出遺構を報告する。時期ごとに調査区全体の遺構配置図（Ｓ =1/250）を示し、遺構を検出した区域に関しては拡大した遺構配置図（Ｓ =1/100）を作成した。見難くなるため調査区全体の遺構配置図では、柱痕跡は表示していない。本文では、時期ごとの特徴や遺構配置について述べた後に、各遺構の特徴について記載する。この記載は、表13の時期別遺構一覧表に合わせ、建物・柱列、溝、井戸、遺構、その他の遺構の順番にした。なお、図版も同様である。遺構の新古関係については、図13と表14 ～ 16にまとめた。また、遺構掘り込み面に関しては遺構埋土の場合のみ表記した。

（１）江戸時代以前の遺構（図14）

江戸時代以前に遡る可能性が高い遺構としては、沢状遺構が調査区南西に広がる。これ以外では、ピットの中にⅠ期の遺構に切られているものがあり､これらについてはⅠ期もしくはⅠ期より古い時期に遡る可能性が残る。しかし、以下の理由で、ここには図示しなかった。

今回検出された遺構では、沢状遺構以外に、確実にⅠ期より古い時期に遡る遺構は、他に存在していない。沢状遺構も、後述のように自然の流路である可能性が高い。出土遺物を見ても、江戸時代初頭より古い遺物は、縄文時代や古代の遺物がごく少量出土していることと、ごく少数の伝世品と考えて良いもの以外には、出土していない。そのため、縄文時代や古代を除くと、江戸時代以前にこの地点が利用されていた積極的な根拠は見出し難い。江戸時代に先行する中世期において遺構が存在した可能性はほとんどない。したがって、Ⅰ期の遺構に切られているピットについては、Ⅰ期の中での時期差である可能性が高いと考えられる。そのため、江戸時代以前の遺構としては、沢状遺構のみを示すこととする。

【沢状遺構】（図14 ～ 16、図版８）

１層を除去したところ、調査区南東部側の２層が残っていた区域を除くと、すぐに地山上面の遺構確認面が露出した。調査区南西部側には、黒褐色を基調とする埋土の、大規模な落ち込みが存在することが確認された。調査の当初は、この大規模な落ち込み全体を、１号遺構として取り扱っていた。

落ち込みの規模がきわめて大きく、複数の遺構が関係している可能性もあったので、調査を円滑に実施するため、最初に埋土の断面を観察して検討することとした。埋土上面の状況が失われることを避けるために、できるだけ撹乱を利用し、壊されていない部分のみを一部を先行して掘りあげることによって、一連の断面を観察できるようにした。東西方向では、Ｇ列に存在した土管の掘り方を利用して、埋土を底面まで掘り下げた。南北方向では、東西方向のような一続きの撹乱が無かったため、２列と３列の境で、撹乱をつなぐように、その間を掘り下げることで、一連の断面を検討できるようにした（図15・16)。

これらの検討の結果、１号遺構として一括していた大規模な落ち込みは、新旧２段階の遺構に大別できることが明らかとなった。調査中は、１号遺構の古段階と新段階と区分して呼称していた。調査の進展によって、古段階は大規模な沢状の流路であり、新段階はその埋土を掘り込んだ長方形の遺構であることが明らかとなった。両者の規模や性格がかなり異なるため、本報告では、古段階を沢状遺構、新段階を１号遺構と呼称することとした。沢状遺構と呼称しているが、形態や規模、埋土の状況から、自然の流路と考えられる。

先行して断面観察のために掘り下げた部分では、埋土最上部以外では遺物が含まれていないことが確認されていたため、埋土１層の部分を除く埋土の掘り下げは、調査終盤に重機によって行っている。東西両端部分は、調査区外壁際まで埋土を掘り下げると、現地表からの深さが２ｍを越え危険なため、段をつけて掘り下げることとした。そのため、西側は１列の部分、東側は６・７列の部分について、埋土の掘り下げは行わないで残すこととした（図14のアミかけ部分)。

沢状遺構は、今回の調査で検出された遺構の中では、重複関係から見て最も古い。ほぼ西から東へ向かって延びている。東よりの北岸付近には、江戸時代Ⅰ期の７号遺構が造られており、北岸部分がこれによって壊されている。南北の両端は、ごく緩やかな傾斜となっている。この緩い部分は、南側は調査区外まで延びている。この緩やかな両端部分を除く、急傾斜で落ち込んでいく範囲の上幅は、南北13.0 ～ 14.3m、下幅は 9.0 ～ 10.3mである。深さは最も深いところで135cmである。南岸は、途中で傾斜が緩い部分があり、二段になって下っている。底面の標高は、調査区の中では、大きな差は無く、ほぼ段丘礫層の上面が底面となっている。川内地区が、西から東へ下っていく地形であることから、この沢状遺構も西から東へ流下していたものと考えられる。ただし、今回の調査範囲を見る限りでは、その傾斜はかなり緩やかであったと考えられる。

埋土は、８層に大別し、さらに細別される。このうちの埋土１層は、場所による変移が大きい。埋土３層や５ａ層では、分解しきっていない有機物の薄い層がラミナ状に堆積している。これらを含めて全体として、比較的静かな状態で自然堆積したものと考えられる。

出土遺物は、埋土１層の上面付近の最上部で、陶磁器類などが出土しているが、ほとんどは小片であった。先行して断面観察のために掘り下げた際に、遺物の出土状況を確認したが、埋土最上部以外では、遺物が出土しなかった。埋土６層出土という瓦があるが（表26）、これは撹乱を掘りあげた底面に接する埋土６層の部分から出土しており、本来は撹乱内に含まれていた遺物が、沢状遺構埋土にめり込んだ状態になっていた可能性も残る。埋土最上部から出土した陶磁器などの年代は、17世紀代のものが多く、特に陶器では17世紀初頭のものが多い。一方で、18 ～ 19世紀代の磁器・陶器や軟質施釉陶器も含まれており、江戸時代の様々な時期のものが混在している。沢状遺構を切っている１号遺構や７号遺構がⅠ期に属し、17世紀初頭から前葉と考えられていることから、これらの遺物は混入を含んでいる可能性が高い。沢状遺構の埋土は、全体に水分の多い軟弱な土壌であり、埋没した後も、その上面は軟弱な状態であったと考えられる。その場合、埋土より新しい遺物であっても、簡単に埋土内にめり込む状況にあったと推定される。遺物が埋土の最上部のみで出土すること、それらの遺物も小片がほとんどを占めることから、混入を想定しておくべきと考えられる。

このように、遺構の年代を出土遺物で判断することが困難であったことから、理化学的年代測定で年代の手がかりを得たいと考え、^{14}Ｃ年代測定を行うこととした。先行して掘り下げた部分に含まれていた自然の樹木の枝３点を採集して、年代測定資料とした。いずれも、樹皮が残存した小枝で、^{14}Ｃ年代は、その枯死・伐採年代を反映すると考えて良い。

年代測定の結果は、第３章５の（１）において報告しているが、３点で年代が大きく異なる結果となっている。３点の ^{14}Ｃ年代は、№１が 890 ± 30yrBP、№２が 200 ± 30yrBP、№３が 550 ± 30yrBP であった。暦年校正年代（１σ）では、11世紀後半から 12世紀（№１）、17世紀後半から 20世紀前半（№２）、14世紀から 15世紀初頭（№３）となる。№２に関しては、遺構の切り合い関係などから推定している年代と、大きく齟齬をきたしており、測定資料とした樹枝が、混入したものであった可能性が排除できない。撹乱部分の埋土を、完全に除去できていなかった可能性もある。他方、№１と№３については、遺構の切り合い関係などとの齟齬はないが、年代幅がかなりある。そのため、これら資料が示す 11世紀後半から 15世紀初頭という年代の間、沢状遺構が機能していたことを直ちに示すと考えて良いかについては、問題が残っている。沢状遺構が機能し、樹枝などの堆積が進行する状態が続いていた可能性がある期間として、とらえておくにとどめておきたい。

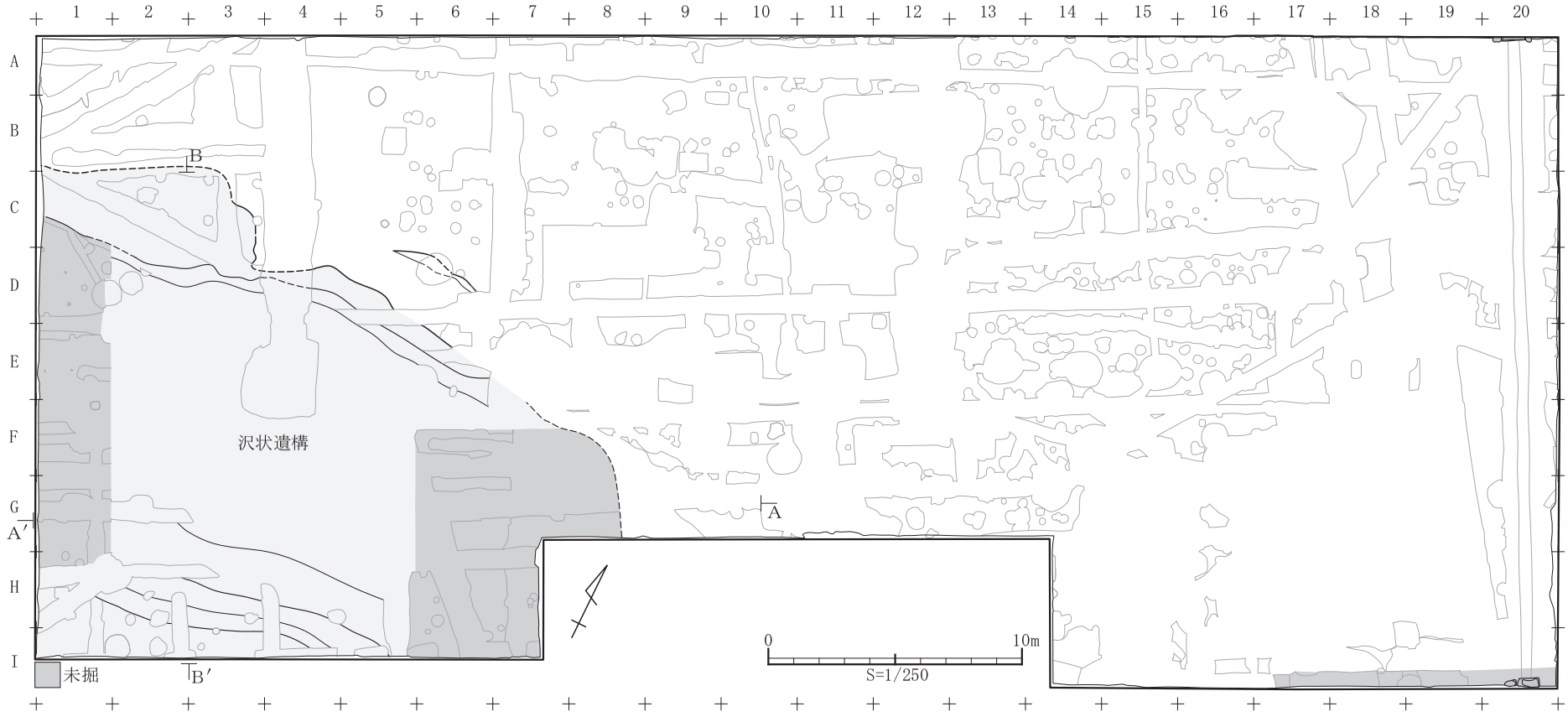
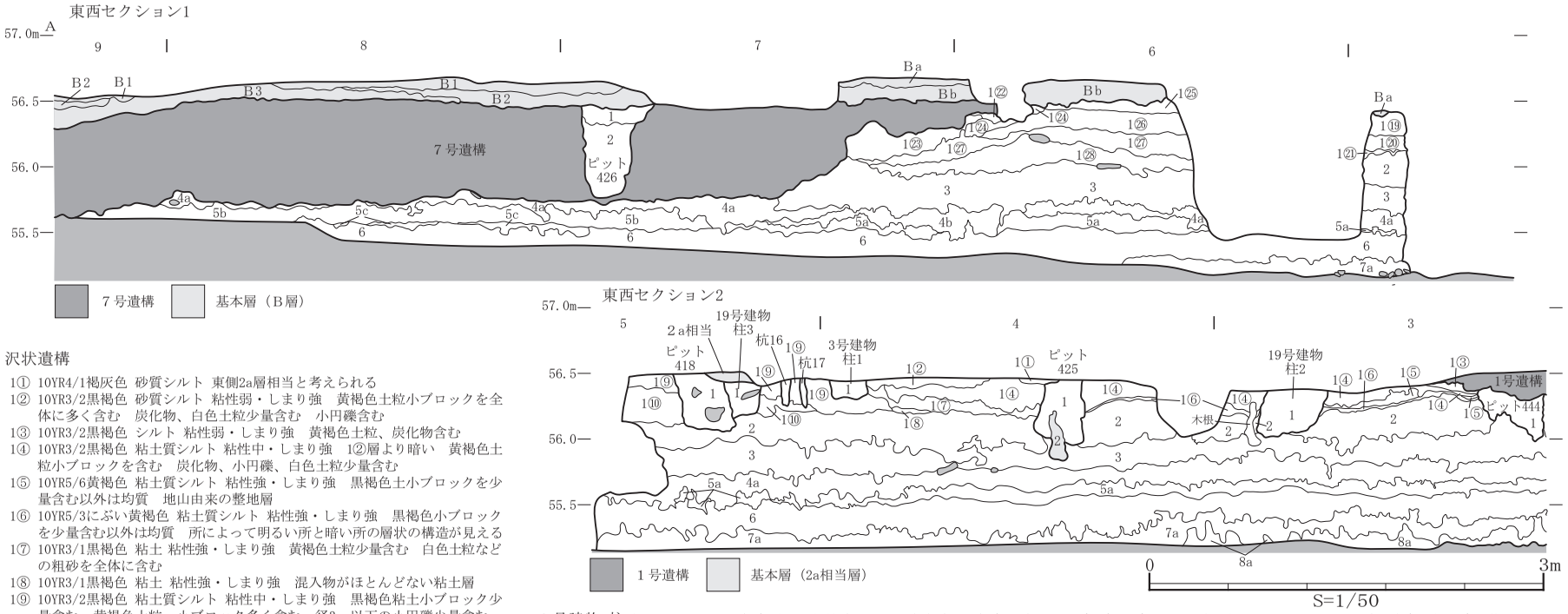


図14　武家屋敷地区第11地点江戸時代以前の遺構配置図
Fig.14　Distribution of futures belonging to before Edo period at BK11



沢状遺構

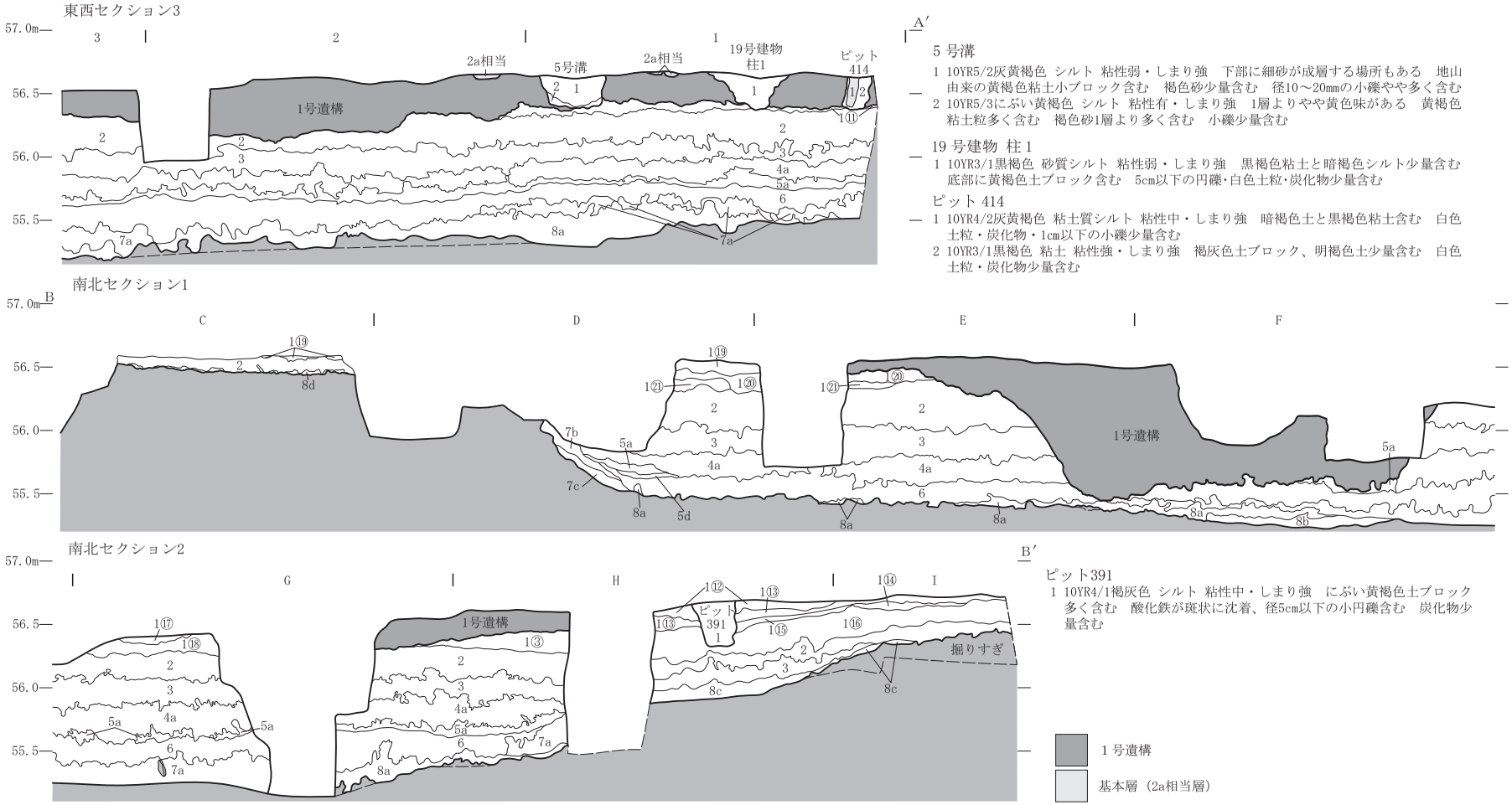
1① 10YR4/1褐灰色 砂質シルト 東側2a層相当と考えられる
1② 10YR3/2黒褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 黄褐色土粒小ブロックを全体に多く含む 炭化物、白色土粒少量含む 小円礫含む
1③ 10YR3/2黒褐色 シルト 粘性弱・しまり強 黄褐色土粒、炭化物含む
1④ 10YR3/2黒褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり強 1②層より暗い 黄褐色土粒小ブロックを含む 炭化物、小円礫、白色土粒少量含む
1⑤ 10YR5/6黄褐色 粘土質シルト 粘性強・しまり強 黒褐色土小ブロックを少量含む以外は均質 地山由来の整地層
1⑥ 10YR5/3にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性強・しまり強 黒褐色小ブロックを少量含む以外は均質 所によって明るい所と暗い所の層状の構造が見える
1⑦ 10YR3/1黒褐色 粘土 粘性強・しまり強 黄褐色土粒少量含む 白色土粒などの粗砂を全体に含む
1⑧ 10YR3/1黒褐色 粘土 粘性強・しまり強 混入物がほとんどない粘土層
1⑨ 10YR3/2黒褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり強 黒褐色粘土小ブロック少量含む 黄褐色土粒・小ブロック多く含む 径3cm以下の小円礫少量含む
1⑩ 10YR4/2灰黄褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり強 黄褐色土粒少量含む 白色土粒多く含む
1⑪ 10YR4/1褐灰色 粘土質シルト 粘性中・しまり強 にぶい黄褐色粘土質シルト、黒褐色粘土ブロック、炭化物を多く含む
1⑫ 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 粘性弱・しまり強 暗褐色シルトが隙間を埋めるように入る 径1cm以下の小礫を少量含む
1⑬ 10YR4/2灰黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 にぶい黄褐色土粒を多く含み、下部では部分的にブロック状になる 褐色の粗砂多く含む
1⑭ 10YR4/2灰黄褐色 シルト 粘性弱・しまり強 黄褐色土ブロックを多く含む 炭化物をごく少量含む 酸化鉄が沈着している 1⑯層に近い
1⑮ 10YR4/1褐灰色 粘土質シルト 粘性弱・しまり強 にぶい黄褐色土粒僅かに含む 径1cm以下の小礫も少量含まれるが、全体的に均質な層
1⑯ 10YR4/2灰黄褐色 シルト 粘性弱・しまり強 黄褐色～にぶい黄褐色粘土のブロックを全体に多く含む 炭化物少量含む 酸化鉄が斑に沈着
1⑰ 10YR4/2灰黄褐色 シルト 粘性弱・しまり強 黄褐色土粒、黒褐色粘土小ブロック少量含む 炭化物僅かに含む 酸化鉄が斑に沈着
1⑱ 10YR4/2灰黄褐色 シルト 粘性弱・しまり強 黄褐色土粒やや多く含む 炭化物、白色土粒少量含む 2層に近いが黄褐色土粒多い
1⑲ 10YR4/2灰黄褐色 シルト 粘性やや弱・しまり強 にぶい黄褐色砂質シルト粘性やや弱しまり強が少量混じり、鉄分、径0.1cm程の粒を僅かに含む
1⑳ 7.5YR3/1黒褐色 粘土質シルト 粘性有・しまり強 1⑲層と同様の混入物だが、明るい色調の土は少ない
1㉑ 7.5YR4/2灰褐色 粘土 粘性強・しまり強 混入物はほとんどない 褐色の小礫含む 層状の構造は発達しない
1㉒ 7.5YR3/1黒褐色 シルト 粘性やや弱・しまり強 黄褐色砂質シルト少量含む 赤褐色砂質シルト僅かに含む 径1～2mmの炭化物、白色土粒、径2cm以下の小礫少量含む
1㉓ 10YR3/1黒褐色 粘土 粘性強・しまりやや強 赤褐色砂質シルト少量含む 径2～3mmの白色土粒、小礫少量含む
1㉔ 10YR3/1黒褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 黒褐色粘土、にぶい黄褐色粘土質シルトの小ブロック多量に含む 炭化物少量含む 白色土粒含む
1㉕ 1②層と共通するが、黒褐色土、にぶい黄褐色土ブロックが大きく、逆に主体を占める
1㉖ 10YR3/3暗褐色 シルト 粘性中・しまり強 黒褐色土、黄褐色ブロック多く含む 白色土粒含む 少しずつ色の異なる土がランダムに混ざる
1㉗ 10YR2/3黒褐色 粘土質シルト 粘性やや強・しまりやや強 にぶい黄橙色の小ブロック極僅かに含む 径5mm以下の炭化物、白色土粒、小礫粒状に含む 酸化鉄が斑に沈着
1㉘ 10YR3/2黒褐色 粘土 粘性強・しまりやや強 にぶい黄橙色の小ブロック極僅かに含む 径1cm以下の炭化物、白色土粒を粒状に含む 径20cm程度の円礫含む 酸化鉄が斑に沈着

3号建物 柱1　1 10YR3/1 黒褐色 粘土 粘性強・しまりやや強 明褐色・暗オリーブ灰色土ブロックが斑に混じる 4cm以下の円礫・白色土粒・炭化物少量含む
19号建物 柱2　1 10YR4/1 褐灰色 粘土質シルト 粘性中・しまり強 黄褐色土ブロック多く含む 黒褐色土小ブロック含む 上半中心に酸化鉄が沈着
19号建物 柱3　1 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト 粘性やや強・しまり強 黒褐色粘土含む 白色土粒・炭化物少量含む
杭16・杭17　1 10YR4/2 灰黄褐色 砂質シルト 粘性中・しまり強 黄褐色土粒小ブロック含む 杭16には径5cm以下の小円礫含む
ピット418　1 10YR3/1 黒褐色 粘土質シルト 粘性やや強・しまり強 暗灰黄色・黒褐色土含む 白色土粒・炭化物少量含む
ピット425　1 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性弱・しまり強 明黄褐色ブロックを多く含む 暗褐色土ブロックを含む 炭化物、径5cm以下の円礫を含む 酸化鉄が斑に沈着
2 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性弱・しまり強 明黄褐色土ブロックを多く含む 暗褐色土粒、炭化物、白色土粒含む 酸化鉄が若干沈着
ピット444　1 10YR4/1 褐灰色 粘土質シルト 粘性中・しまり強 にぶい黄褐色、明黄褐色小ブロック、黒褐色粘土小ブロック含む 炭化物少量含む 全体に酸化鉄が沈着

基本層

2a相当 10YR4/1褐灰色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 白色土粒を含む 層下面に酸化鉄が沈着
B1 10YR5/6黄褐色 シルト(砂質の所もある) 粘性弱・しまり強 黒褐色シルトが少量入り込む以外はほとんど均質な地山土を用いた整地層
B2 10YR4/2灰黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 黄褐色土、黒褐色土の小ブロック多く含む 径3cm以下の小円礫含む
B3 10YR4/3にぶい黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 黄褐色・にぶい黄褐色・黒褐色土粒含む 径10cm以下の円礫を含むが、東側の岸よりは少ない
Ba 10YR5/3にぶい黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 灰黄褐色土と地山由来の黄褐色土が混ざった土層 白色粒含む 径5cm以下の小円礫含む B1層かB2層に相当する可能性がある 沢状遺構埋土1層の可能性も残る
Bb 10YR4/2灰黄褐色(やや黒褐色に近い) 砂質シルト 粘性弱・しまり強 にぶい黄褐色土小ブロック多く含む 黒褐色土小ブロック含む 径5cm以下の小円礫、白色土粒を含み、下面の一部では層状に入る B2層かB3層相当の可能性がある 沢状遺構埋土1層の可能性も残る

図15　武家屋敷地区第11地点沢状遺構断面図（1）
Fig.15　Fundamental layer sections in swamp-like (1)



5 号溝
1 10YR5/2灰黄褐色 シルト 粘性弱・しまり強 下部に細砂が成層する場所もある 地山由来の黄褐色粘土小ブロック含む 褐色砂少量含む 径10～20mmの小礫やや多く含む
2 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト 粘性有・しまり強 1層よりやや黄色味がある 黄褐色粘土粒多く含む 褐色砂1層より多く含む 小礫少量含む

19 号建物 柱 1
1 10YR3/1黒褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 黒褐色粘土と暗褐色シルト少量含む 底部に黄褐色土ブロック含む 5cm以下の円礫・白色土粒・炭化物少量含む

ピット 414
1 10YR4/2灰黄褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり強 暗褐色土と黒褐色粘土含む 白色土粒・炭化物・1cm以下の小礫少量含む
2 10YR3/1黒褐色 粘土 粘性強・しまり強 褐灰色土ブロック、明褐色土少量含む 白色土粒・炭化物少量含む

ピット391
1 10YR4/1褐灰色 シルト 粘性中・しまり強 にぶい黄褐色土ブロック多く含む 酸化鉄が斑状に沈着、径5cm以下の小円礫含む 炭化物少量含む

沢状遺構

2 10YR4/2灰黄褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり強 暗褐色粘土粒、明黄褐色、白色粗砂全体に多く含む 下面近くににぶい黄褐色粘土質シルト、にぶい黄褐色粗砂が入る所が多い
3 7.5YR3/2黒褐色 粘土 粘性強・しまり中 上部スクモ層 分解しきっていない有機物の薄い黒色層(1mm前後)がラミナ状に入る 部分的に暗褐色の所もあるが、全体には安定した層 静かな状態で自然堆積した層と考えられる
4a 10YR3/2黒褐色 粘土質シルト 粘性強・しまり中 下面近くに5a層由来の黒色粘土含む にぶい黄褐色粘土のブロックが攪拌された状態で入る 径1～2mmの白色砂多く含む 下面は凹凸が多い
4b 3層と4a層が混在したような状況を示す層 4a層より粘質が強い
5a 7.5YR3/2黒褐色粘土 下部スクモ層 黒色の分解しきっていない有機物の薄い層がラミナ状に入る 分解度は3層より低く、黒色部分の厚さもやや厚い 上・下面とも凹凸が大きく、ラミナ状のラインも凹凸に沿って湾曲する
5b 10YR4/1灰褐色 粘土 粘性強・しまり弱 混入物のない自然堆積と考えられが、5a層のようなラミナ構造は見られない 酸化鉄が僅かに沈着
5c 7.5GY3/1暗緑灰色 粘土 粘性強・しまり弱 5a層のように未分解の有機物が入るが、ラミナ構造ははっきりしない
5d 10YR3/1黒褐色 粘土 粘性強・しまりやや強 0.5cm程の炭化物、鉄分を僅かに含む
6 2.5Y3/2黒褐色 粘土質シルト 粘性強・しまり中 白色砂多く含む 径5mm前後の炭化物、1cm以下の小礫少量含む 成層構造は認められないが、全体に均質な層である 下面は凹凸が多い
7a 10YR2/1黒色 粘土 粘性強・しまり弱 黒褐色粘土、にぶい黄褐色粘土小ブロック含む 黒褐色粘土はブロックとの境がはっきりせず、ムラのある 径1cm程の小礫やや多く含む 白色砂を含む
7b 10YR4/1褐灰色 粘土 粘性強・しまり強 にぶい黄橙色粘土が僅かに斑に混じり、0.2～0.3cm程の炭化物、0.1cm程の白色土粒、鉄分僅かに含む
7c 10YR4/1褐灰色 粘土 粘性強・しまり中 にぶい黄橙色と灰黄褐色の砂質シルトを少量と鉄分を斑に含む
8a 10YR4/1灰褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり中 地山の灰黄褐色細砂、7a層由来の黒褐色粘土斑に混じる
8b 8a層と同様の斑に混じる層だが、地山砂礫層を起源とする灰褐色粗砂が主体になる
8c 2.5Y4/2暗灰黄色 粘土 粘性強・しまり弱 地山のにぶい黄橙土を多く含む 酸化鉄が斑に多く沈着
8d 10YR6/4にぶい黄橙色 シルト質粘土 粘性やや強・しまり強 暗褐色シルト質粘土斑に含む 白色土粒少量含む 酸化鉄が僅かに沈着

図16 武家屋敷地区第11地点沢状遺構遺構断面図（2）
Fig.16 Fundamental layer sections in swamp-like (2)

（２）江戸時代以降の遺構

①Ⅰ期の遺構（図17）

出土遺物と重複関係、柱間寸法が６尺５寸となる建物の存在などから、17世紀初頭から前葉と推定される遺構群である。調査区南側に大形の遺構が複数存在する。それらの遺構が埋没した後に建物が多く構築される。例えば３号建物柱４は、７号遺構がかなり埋まりきった段階で構築されている。このことから、７号遺構の構築から埋没するまでの時間幅の存在が予想でき、Ⅰ期の中でさらに数段階の存在が想定できるが、調査区全体を通じた細分段階の設定はできていない。また、調査区中央部付近では小形方形の遺構も多く存在する。なお、建物群の軸の角度は、Ｎ－26 ～ 29° －Ｗとなる。

また、Ⅰ期の遺構に切られることから、Ⅰ期もしくはⅠ期以前に遡る可能性があるピットも少量（21基）存在する。しかし、確実にⅠ期より古い時期に遡る遺構は自然流路と考えられる沢状遺構だけであること、ごく少数の伝世品と考えて良いもの以外には中世の遺物などは発見されていないことから、江戸時代に先行する中世期において遺構が存在した可能性はほとんどない。そのため、Ⅰ期の遺構に切られているピットについても、Ⅰ期の範疇に収まる可能性が高いものと考えここにまとめて図示した。

【１号建物】（図27・28、図版９）

Ｆ～Ｉ－14 ～ 16区で検出した。ほぼ24号遺構（Ⅰ期）と重なるように存在し、柱１はその埋土に直接覆われている。24号遺構のほか25号遺構（Ⅱｂ期）より古い。柱間寸法は１間が６尺５寸であり、３×４間（東西×南北：以下同様）となる。方向はＮ－27.5° －Ｗとなる。柱は５基検出されたが、他の柱は撹乱などにより不明である。これらの柱は、円形あるいは楕円形を呈する。径は25cm（柱３）～ 67cm（柱５）とばらつきが大きいように見受けられるが、その他の柱１・２・４の長軸は44cm（柱２・４）と48cm（柱１）となりまとまる。深さは９cm（柱２）～ 29cm（柱１）である。この最も深い柱１の断面のみで柱痕跡が確認されている。出土遺物は柱２からの瓦３点のみである。

【２号建物】（図24、図版９）

Ａ－11 ～ 13区で検出した。柱間寸法は６尺５寸の３×１間となるが、調査区外の北側へと伸びる可能性が高い。方向はＮ－26° －Ｗとなる。全ての柱穴が撹乱で部分的に破壊され、柱１～３は調査区外へと伸びることから、形状などは明確にできないが、ほぼ円形あるいは楕円形を呈するものと推定される。残存している部分から判断すると、西側の柱１・２、４・５は掘り方の規模が大きく、径58cm（柱２）～ 74cm（柱４）となる。深さは28cm（柱２）～ 53cm（柱１）となり差が大きい。それに比べ、東側の柱３・６の径はそれぞれ21cm、41cmと小さい。深さも柱３が23cm、柱６が４cmと浅い。また、撹乱が著しい柱３以外は礎板として礫を配置している。柱３・４・６では柱痕跡が確認されている。４号建物と近接するが、多少軸方向が異なる。出土遺物は、柱１から不明土師質土器２点、柱４からの瓦２点のみである。

【３号建物】（図21・22、図版９・10）

Ｇ・Ｈ－４～７区で検出した。柱間寸法は６尺５寸で、４×２間となる。方向はＮ－28° －Ｗとなる。先に述べたように柱４が７号遺構埋没後に構築されている。ほかにも１号遺構（Ⅰ期）より新しい。柱１～３は円形を呈する。柱１は撹乱により部分的に破壊され、柱４は調査区外へと伸びることから、その規模は明確ではないが、半径が50cm程度のもの（柱３）と、半径30cm程度のもの（柱１）の２種類がある。柱４は、検出できた部分からすると柱３と同規模になることが推定できる。この柱３・４は、深さがそれぞれ24、26cmとなり、ほぼ同じである。一方、柱１の深さは10cmしか無く、やはり規模は小さい。柱２は、73×56cmの楕円形で、深さ16cmの規模となるが、柱痕跡が２箇所認められることから、建て替えあるいはピットが重複していた可能性も考えられる。柱３は柱痕跡を有する。柱２では礫と柱材が確認されている。柱材は、残存長24.6cmで、幅は8.2×7.3cmとなる。残存状態が悪いため判然としないが、面取りが施されている。柱２から４で瓦片が多少出土している。ま

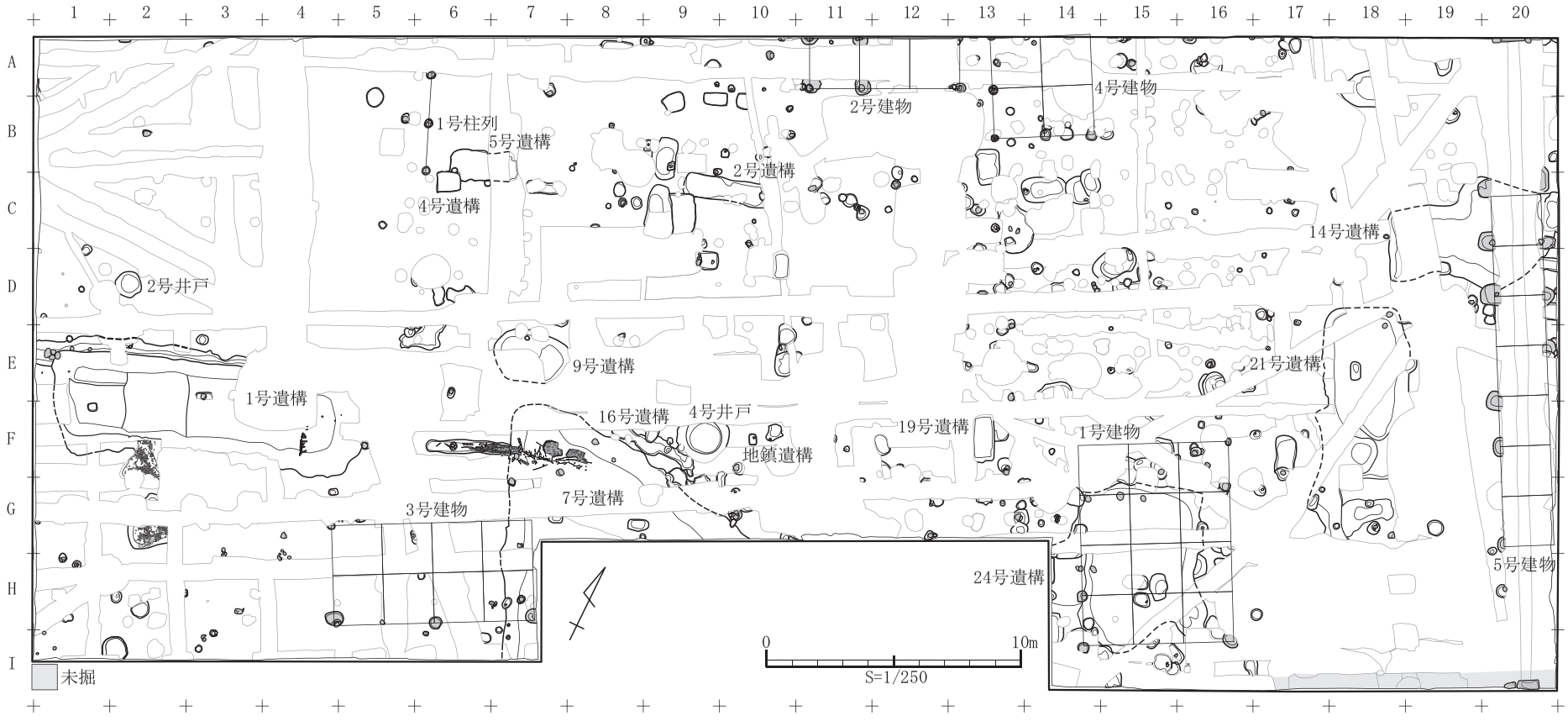


図17　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期遺構配置図
Fig.17　Distribution of futures belonging to phase I at BK11

た柱３からは開元通寶が１枚出土している（図119－３）。

【４号建物】（図24、図版10）

Ａ・Ｂ－13・14区で検出した。柱間寸法は６尺５寸で、２×２間となるが、２号建物と同様に調査区外北方へと伸びる可能性が高い。方向はＮ－29°－Ｗとなる。柱１の大部分は調査区外へと伸びているため不明であるが、柱２・３は円形、柱４・５は楕円形を呈する。柱１は残存部位からは円形を呈するものと考えられる。この円形の柱１～３の掘り方の規模は径29～36cm、深さ18～23cm程であり、それぞれ柱痕跡を伴う。柱２・３には礎板として礫が伴う。柱２では中央の柱痕跡の下部に１点、その周辺を巡るように４点の礫が敷き並べられる（図版10－４・５）。柱３では４点の礫が配置されるが、部分的に重ねている。柱４は44×47cm、柱５は42×41（残存長）cmとなり、柱１～３に比べてやや大きい。深さは柱４が14cm、柱５が38cmとなり、柱５がとくに深い。出土遺物は無い。

【５号建物】（図25・26、図版10・11）

Ｃ～Ｇ－20区で検出した。方向はＮ－28°－Ｗとなる。柱間寸法は６尺５寸で、１×７間となる。調査区外となる東側へと伸びる可能性が高い。また、北あるいは南方向へとさらに伸びる可能性もあるが、２層上面で検出された１号暗渠により破壊されているため不明である。14号遺構（Ⅰ期）より新しい。柱掘り方の形状は、隅丸方形に近い楕円形を呈する。また、全ての柱穴が１号暗渠により破壊されているため明確ではないが、残存部の長軸は51cm（柱８）～97cm（柱７）となり、他の建物よりとくに大きい。深さは13cm（柱５）～65cm（柱３）となりばらつきが大きい。柱痕跡は柱３・９・10で確認された。柱２・８では礎板と考えられる礫が検出されている。また、柱３の柱痕跡では礫や瓦が落ち込んだ状態で検出されている。出土遺物は柱２・３・８からは陶磁器・土師質土器が出土している。柱２出土の焼塩壺１点を図示した（図91－40）。そのほかには各柱掘り方から瓦片が出土している。

【１号柱列】（図21・22、図版11・12）

Ａ～Ｃ－６区で検出した。方向はＮ－23°－Ｗとなる。北側に伸びる可能性がある。柱間寸法は６尺５寸である。組み合う柱が一列だけなので柱列としたが、一般的に建物に使われる寸法であることから、建物の一部である可能性も残っている。柱穴は、全て円形を呈する。その半径は29～36cmとなり、ほぼ同規模である。しかし、柱３の深さは30cm程であるが、調査区北側の柱１・２はそれぞれ13.2cm、6.8cmと浅い。その、柱１・２共に柱痕跡があり、掘り方底面に底面と同規模の礫を礎板として設置する。また、柱痕跡が無い柱３からは、陶器１点、土師質皿１点が出土している。

【２号井戸】（図18、図版12）

Ｄ－２区で検出した。南西部を１号井戸（Ⅱａ期）によって破壊される。平面形は円形で、確認面での直径は約110cmである。確認面から約90cmの深さで掘り下げを止めた。川内地区では、井戸の深さがかなり深い場合が一般的で、これまでの調査でも完掘した事例は少ない。二の丸第17地点の１号井戸では、遺構確認面から底面まで7.15mもの深さであった（年報18）。そのため川内地区における調査においては、井戸の埋土の掘り下げは、安全が充分確保できる範囲にとどめることとしている。今回の調査においても、全ての井戸において、調査は途中で打ち切っている。この２号井戸は、直径が比較的小さいことから、約90cmの掘り下げで調査を終了した。埋土は単一の層で５cmから30cm大の礫を非常に多く含む。石組みや井戸枠などは確認されず、直径も大きくないことから素掘りの井戸であると判断した。出土遺物は瓦片が少量みられるのみである。

【４号井戸】（図21・22、図版12・13）

Ｆ－９･10区で検出した。北側部分を撹乱によって壊されているが、平面形は円形を呈する。16号遺構（Ⅰ期）より新しい。確認面での直径は約200cmである。約180cmの深さで掘り下げを止めた。掘り下げた部分の埋土は９層に分かれる。埋土中央部分がややくぼむが井戸枠は確認されず、素掘りの井戸であると判断した。出土遺物は

磁器３点が出土しているが、詳しい特徴がわかるものはない。ほかには、瓦74点（8.8kg）がある。そのうち軒丸瓦、平瓦を図示した（図99－3、図103－29）。

【１号遺構】（図18 ～ 20、図版13･14）

Ｃ～Ｈ－１～５区で検出されたもので、全体が沢状遺構の埋土を掘り込んで造られている。

江戸時代以前の遺構の沢状遺構においても述べたが、１層除去作業直後に、調査区南西部側に、黒褐色を基調とする埋土の大規模な落ち込みが存在することが確認された。調査の当初は、この大規模な落ち込み全体を、１号遺構として取り扱っていた。複数の遺構が関係している可能性もあったため、先行して層序の確認を行った。東西方向はＧ列、南北方向は２列と３列の境で、撹乱を利用しつつ一部を掘り下げることで、一連の断面を検討した。これらの検討の結果、１号遺構として一括していた大規模な落ち込みは、新旧２段階の遺構に大別できることが明らかとなった。調査中は、１号遺構の古段階と新段階と区分して呼称していた。調査の進展によって、古段階は大規模な沢状の流路であり、新段階はその埋土を長方形に掘り込んだ人為的な遺構であることが明らかとなった。両者の規模や性格がかなり異なるため、本報告では、古段階を沢状遺構、新段階を１号遺構と呼称することとした。図19に示した断面図は、先行して掘り下げた一連の通しセクションの断面図から、１号遺構に該当する部分を抜き出して作成したものである。１号遺構以外の層序と、１号遺構埋土との関係は、図15・16に示されている。

隅丸長方形の本体部分と、それがある程度埋没した際に造られた付属的な部分からなる。この本体以外の部分については、本体に附属する形で構築された可能性を考え、１号遺構の中の細部構造として、１号遺構の落ち込みａと落ち込みｂと呼称する。土管などの撹乱が各所で横断しているほか、北東側はカワウチ・シアターの基礎によって大きく壊されている。

本体部分は、幅3.8 ～ 4.1m、長さ12.5mの細長い長方形を呈する。深さは90mを測る。この範囲が急傾斜で深く掘られた範囲で、その周囲はごく緩やかな傾斜の落ち込みが、西よりの部分でＣ列からＨ列まで広がっており、この範囲まで上部の埋土が分布している。撹乱によって分断されていることもあり、緩い傾斜で落ち込んでいる範囲については、その境界線を明確に示すことが難しいため、図18に上部埋土が広がる範囲を網かけで示しておいた。本体部分の底面は、沢状遺構の埋土の範囲で終わっているが、沢状遺構の底面である段丘礫層まで、10㎝程度の深さまで達している。

本体の埋土は、一部には様々な土壌がブロック状に混じり人為的に埋められた可能性のある層序もあるが、全般には自然に堆積したものと考えられる。特に、底面に近い埋土は、黒色から黒褐色を呈する粘土質の土壌を主体としており、比較的静かな状態で自然堆積したものと考えられる。

内部の東よりの場所に、杭としがらみからなる土留め施設が造られている（図版13－６）。東端の下場からは1.2mほどの所にあり、この範囲が別に区切られる形となる。土留めの北側は、撹乱によって壊されているが、本来は全体を区切る形で構築されていたものと考えられる。太さ10㎝以下の、比較的細い丸材や割材による木杭を打ち込んでいる。木杭は段丘礫層まで、しっかりと打ち込まれており、頑丈に造られている。細い樹枝を束ねてしがらみ状にしたものを、この杭に直交するように、杭の西側に取り付けられている。堆積土の様相から見ても、西から流れてきた土砂を堰き止め、土留めの西側がほとんど埋没した時点でも、東側は深いまま維持されていたものと考えられる。このような土留めの様相から、１号遺構は水を溜める何らかの施設と考えられるが、これ以上の詳細な用途や使い方については判らない。

本体の南側で確認された落ち込みａは、Ｆ～Ｈ－２・３区の範囲に広がる。西よりのＦ・Ｇ－２区には、２ヶ所、拳大程度か、それより小さな円礫を敷き詰めた部分が確認されている（図版13－４・５）。東側はＨ－３区まで落ち込み埋土が広がるが、ごく緩やかな落ち込みとなっている。堆積土の検討からは、本体がある程度埋没した後に造られたことが判明している。Ｆ－２区の石敷の北端は、本体方向に向かって傾斜している。本体との

接続部分が撹乱によって分断されており、落ち込みａと本体内部の埋土との関係は、充分明らかとなっていない。そのため、落ち込みａが構築された段階で、どの程度まで埋没していたかについては判明していない。いずれにせよ、本体が完全に埋没しておらず、くぼんだ状態で、そのくぼみに接続するように落ち込みａが造られ、石敷が施されたと考えられる。

本体の北側には、落ち込みｂと呼称した浅い溝状の部分が、ちょうど本体の上端付近に延びている。これも堆積土の検討から、本体がある程度埋没した後に構築されたことが判明している。幅80～100cm、深さ15cm程の浅い溝状を呈し、西側は本体よりさらに外側まで延びている。外側に延びる部分には、底面に扁平な川原石が置かれた部分がある。東側は撹乱によって破壊されており、どこまで続いていたのか不明である。本体のちょうど北側の上端部分にあることから、何らかの関連をもって造られた可能性が考えられるが、具体的な用途については判然としない。

出土遺物は、大きく上部と下部に分けて取り上げた。落ち込みａと落ち込みｂの部分の埋土も、上部埋土としてとりあげている。遺物には18～19世紀のものも含まれるが、上位の埋土に新しい時代の遺物が混入したものと考えられる。それを除くと、年代が明らかなものは、17世紀初頭から前葉の時期にまとまっている。出土した遺物の種類は、きわめて多様であるが、陶磁器類をはじめ遺物の数量はさほど多くない。その中で、下部埋土を中心に、木製品・漆塗製品などの有機質遺物が比較的多く出土している。全般に低湿な状況であったことが反映していると考えられる。また、植物遺存体・動物遺存体もやや多く出土している。本章５．において、植物遺存体・動物遺存体についての報告を掲載している。種子ではオニグルミが多く、貝類ではアカニシが多い。また、イヌの骨がややまとまって出土していることも注目される。

磁器は出土量は少ないが、中国の漳州窯系の製品とみられる端反の碗（図72－２）が出土している。陶器も出土量は多くないが、瀬戸・美濃の天目碗、絵志野の製品、絵唐津の向付（図78－３～６）などが見られる。これらの磁器や陶器は、いずれも17世紀初頭、あるいは17世紀初頭から前葉頃と考えられ、年代は比較的まとまっている。土師質土器、瓦質土器も、出土量はさほど多くない。土師質土器では、ほとんどが皿である。瓦質土器では、擂鉢が８点とややまとまって出土しており、その内４点を図示した（図92・93－２～５）。瓦も若干出土しているが、保存状態が良い資料はほとんどない。

漆塗製品（図110－１～10）では、碗類をはじめ、刳り物、桶などの蓋、箱状の製品などが出土している。漆碗の中には、、線描きによる千鳥（鶴）文とみられる文様が描かれたものがある（図110－４）。同種の漆碗は、これまでの仙台城跡二の丸地区の調査においても、17世紀初頭から前葉の時期の資料が知られている。木製品は下駄（図111－１～４）をはじめ、多様なものが出土している（図112・113－８～24）。木簡と考えられるものも出土しているが、墨痕が薄く書かれた文字は判読はできなかった（図113－24）。竹製品としては、竹ひご状の素材で作られた編物が出土している（図版93－31）。加工の痕跡が認められるものを加工木として集計しているが、角材・丸材の他に、小片となったものが多数出土している。木羽もさほど多くないが、下部埋土を中心に出土している。

金属製品も出土量は多くない。和釘の出土量も少ない。古銭は２点出土しているが、いずれも永楽通宝である（図119－４・５）。その他、銅製品としては小柄の柄（図116－10）、鉄製品では小刀（図118－21）、？（図118－20）などが出土している。

【２号遺構】（図21・22、図版14）

Ｃ－９・10区で検出した。７号建物（Ⅱａ期）より古い。平面形は東西方向に長い長方形を呈する。確認面での幅は約90cm、長さは約330cm、深さは約40cmである。底面はほぼ平坦だが、中央部分が高くなっており２つの遺構が連結したような形態をとる。２つの別の遺構が切りあっている可能性も考慮したが、埋土の堆積状況から１つの遺構であると判断した。出土遺物は多くはない。図示した志野破片（図78－７）のほか、土師質土器皿、

瓦が数点のみである。

【４号遺構】（図21・22、図版14）

Ｃ－６区で検出した遺構で、平面形は東西方向がやや長い長方形である。同時期の５号遺構より新しい。確認面での南北長は約80㎝、東西長は約100㎝、深さは約70㎝で、底面は平坦である。壁は垂直に立ち上がる。埋土は６層に分かれ、中部の３層と４層は10～30㎝大の礫を含む。出土遺物としては、埋土３層より志野の小中皿１点（図78－８）のほか、埋土から土師質土器皿・瓦が数点出土している。

【５号遺構】（図21・22、図版14）

Ｂ・Ｃ－６・７区で検出した。平面形は東西方向に長い長方形を呈する。同時期の４号遺構より古い。東側の一部を撹乱によって壊されている。確認面での幅は約120㎝である。全体に削平を受けており、埋土の残存状態はあまり良くない。底面はほぼ平坦である。出土遺物は非常に少ない。陶器の土瓶蓋破片２点が出土しているが混入の可能性もある。ほかには瓦類４点のみである。

【７号遺構】（図21・23、図版15）

Ｆ～Ｉ－７～10区で検出した。南側は調査区外へと広がるため全体の平面形は不明である。壁の立ち上がりは比較的急で、確認面からの深さは約80㎝である。前時期の沢状遺構埋土を掘り込んでおり、上面はＢ層に覆われている。また、同時期の木樋と３号建物より古い。埋土は大別17層に分かれる。埋土下部からは有機質の遺物の出土が目立つ。Ｆ－７・８区には杭を打ち込み、そこにしがらみを絡ませた土留めの痕跡がある（図版15－２）。土留めの北側は南側より20～30㎝ほど底面が高くなっており、北側に土を積んだと考えられる。また土留めの北側からは俵が出土している（図版94－32・34）。藁状のもので編まれており、内部には何も入っていなかった。土を詰めた土嚢として用いられた可能性も考えられる。土留めの部分を除くと底面はおおむね平坦であり、極端な凹凸はない。出土遺物のうち、磁器は破片２点のみと少ないが、陶器は11点出土している。上部埋土には18世紀の陶器細片が含まれ混入と考えられるが、それ以外は17世紀初頭から前葉のものが主体を占める。その中から17世紀前半の向付３点、擂鉢１点を図示した（図78－９～12）。向付のうち１点（図78－12）は埋土最下層の17層から出土しており、遺構の年代を考える上で重要である。土師質土器皿（図89－２・３）や瓦質土器擂鉢（図93－６）なども出土している。瓦はあまり多くなく、軒丸瓦（図99－４）を図示しえただけである。漆塗り製品や木製品は比較的多量に出土している。漆塗り製品には椀（図版90－11）等があり、木製品には下駄（図111－５）や鞘と思われるもの（図113－27）などがある。

【９号遺構】（図21・22、図版15）

Ｅ－７区で検出した遺構である。南側を撹乱によって壊されているが、本来の平面形は東西方向に長い楕円形であると考えられる。６号建物（Ⅱａ期）より古い。底面は東側部分が一段低くなっており、２つの遺構が切りあっている可能性も考えられたが、埋土の堆積状況から一つの遺構であると判断した。確認面からの深さは西側の平坦な部分で約40㎝、東側の一段深くなっている部分は約60㎝である。出土遺物は多くはない。陶器２点、土師質土器皿１点のみである。陶器の瀬戸･美濃の擂鉢（図78－14）は、17世紀初頭から前葉のものと考えられる。天目碗（図78－13）は、高台周辺に鉄化粧がなされていることから16世紀代の製品と推測され、伝世品の可能性が考えられるものである。

【14号遺構】（図25・26、図版15）

Ｃ･Ｄ－18～20区において、２層由来と考えられる堆積土を地山まで掘り下げた時点で検出した。５号建物（Ⅰ期）より古い。撹乱による破壊が著しいが、長軸が東西方向の不整形を呈すると考えられる。壁は外傾しながらゆるやかに立ち上がり、底面は基盤の段丘礫層上面まで平坦に掘り込まれている。深さは70㎝で、埋土は灰黄褐色を主体とした埋土上層（１層）と、黒褐色土以下の埋土下層（２層以下）からなる。比較的多くの遺物が出土しているが、その大多数は埋土上層かくぼみに堆積したＡ層に帰属する。そのため、18世紀や19世紀に下る

新しい時期の遺物も混じっている（図79－15など）。

【16号遺構】（図21・22、図版15）

Ｆ－８・９区で検出した。北西－南東方向に溝状に広がるが、平面形は不定で、底部の凹凸も激しい。そのため溝ではなく遺構の範疇に含めて名称を付けた。４号井戸（Ⅰ期）、６号建物（Ⅱａ期）より古い。撹乱によって破壊されているが、本来はさらに北西方向に広がりを持っていたと考えられる。確認面からの深さは10～20㎝ほどである。出土遺物は無い。

【19号遺構】（図27・28、図版16）

Ｆ－13区で検出した遺構で、平面形は南北方向に長い長方形を呈する。埋土は３層に分かれる。確認面での幅は約80㎝、長さは約190㎝、深さは約90㎝である。平面積は小さいながらも、磁器・陶器に限らず土製品や木製品（図114－29）や漆塗製品（図版90－12）も出土している。これらの内、埋土Ａ層として取り上げた土製品には18世紀以降に下るものが含まれるが、それを除くと17世紀初頭から前葉のもので占められている。下層の埋土２・３層出土の中国磁器２点（図72－３・４）は、17世紀初頭から前葉頃のいわゆる「明末清初」の製品と考えられる。

【21号遺構】（図25・26、図版16）

Ｄ～Ｇ－17～19区で検出した。周囲を別の遺構や撹乱によって破壊されている。南北9.1ｍ以上、東西3.4ｍ以上であり、長軸が南北方向の不整形を呈する。北側の壁は外傾し、底面は平坦な隅丸方形を呈する。南側の壁はゆるやかに外傾し、底面は凹凸が激しい。深さは70㎝ある。埋土の土質や堆積状況から、埋土下層の２・３層がある程度自然に堆積した後に、埋土上層の１層の土で人為的に埋め戻した可能性が高い。出土遺物は、平瓦を主体として瓦が541点（約６kg）出土しているが、その他の遺物は多くはない。埋土上層では新しい遺物（図72－５）も混ざるが、埋土下層では17世紀初頭から前葉頃の志野（図79－17・18）や唐津（図79－19）などが出土している。

【24号遺構】（図27・28、図版16）

Ｇ～Ｉ－14～16区で検出した。南北6.8m以上、東西5.8m以上であり、平面形は基本的に長軸が南北方向の楕円形と考えられる。１号建物（Ⅰ期）より新しい。西側にはテラス状の段差があり、調査区外までのびる。南東側には張り出しを有する。壁は外傾しながら立ち上がり、底面は平坦である。深さ70㎝であり、埋土は、黄褐色～暗褐色土を主体とする埋土上層の１層と、黒褐色～黒色土が特徴的な２層以下の埋土下層からなる。Ⅰ期の遺構の中では多くの遺物が出土しているが、ゴミ穴と判断できるほどの量ではない。埋土下層では17世紀前半の中国磁器（図72－７～９）や、同時期の志野等の陶器（図79－22など）が出土している。それより新しい遺物（図72－６）も見られるが、これのみが他の遺物より明らかに新しいものであり、混入の可能性が疑われる資料である。

【木樋】（図21、図版12）

Ｆ－６・７区で検出した。確認面は沢状遺構埋土で、７号遺構より新しい。確認された部分での掘り方の幅は約50㎝、長さは約380㎝、深さは約30㎝である。掘り方の断面は長方形である。木樋は東側部分で残りが良いが、西半部では木片のみが残存している状態である（図版12－３・４）。掘り方の西端よりの部分では、木樋の保存状態が良くないが、特に枡などの施設は設けられていないと思われる。木樋は中央部分がくぼんでおり、断面は浅いＵ字状である。木樋の部材以外の遺物は出土していない。

【地鎮遺構】（図27、図版17）

Ｆ－10区で検出された。１層を除去して露出した地山面を清掃中に、土師質土器の皿がつぶれた状態で重なっているのが確認された。明治時代以降に削平を受けている可能性が高い場所であり、埋設された土師質土器の皿が、かろうじて残存している状況であった。２枚の皿を、合わせ口にして埋設していたと考えられるが、上側の

皿は半分以上が削平で失われ、一部が残されていたにとどまる。下側の皿は正位で、ほぼ全体が残されていた。２枚の皿を合わせ口にした埋設方法や、下側の皿の内面に輪法文が墨書されていたことから、地鎮遺構であると判断した。

検出した段階では、皿がほとんど露出する状況であった。皿の確認後に、その周囲を精査したところ、不整形の浅い掘り込みが確認された。最大幅70㎝、深さ10㎝ほどの、不整形の掘り込みである。皿は、この掘り込みの南西端に位置する。皿の位置が、掘り込みの端にかなり偏っていることから、この掘り込みが皿の埋設とは別の施設となる可能性も残っている。その場合、この掘り込みとは別に、皿の大きさぎりぎりの掘り込みを設け、その中に皿を埋設したと考えることとなる。調査時には、別な掘り込みが存在する可能性も想定し精査したが、確認した段階ですでに皿の大部分が露出するという残存状況の悪さもあり、明確にはではできなかった。不確実な点も残っているが、不整形の掘り込みの隅に置かれたものと考えておきたい。

土師質土器の皿は、下皿が口径12.4㎝、上皿が口径12.6㎝で、中型の皿である（図89－11・12）。通常の土師質土器の皿と、法量・形態・製作技法の点で、特に変わるところはない。皿の中には、何も入っていなかった。下側の皿の内面には、輪法文がほぼ全面に墨書され、中央に梵字の「ア」が墨書されている。上皿には墨書は認められない。

類似した地鎮遺構は、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第４地点の調査において発見されている（年報13、本書図123参照）。近接して３基が発見されており、いずれも小規模なピットの底面に、土師質土器の皿を合わせ口に重ねて埋設したものである。この内の２基では、皿の中に銭貨が入れられていたが、全て永楽通宝で占められていた。そのため、17世紀初頭頃の遺構と考えられている。今回の調査で発見された地鎮遺構も、第４地点の例と同様に、合わせ口にした土師質土器の皿を、柱穴などのピットに埋納したものと考えられる。第４地点の事例との類似点も参考に、屋敷地が造成されていくⅠ期の可能性が高いものと考えたが、より下る時期のものである可能性も残されている。

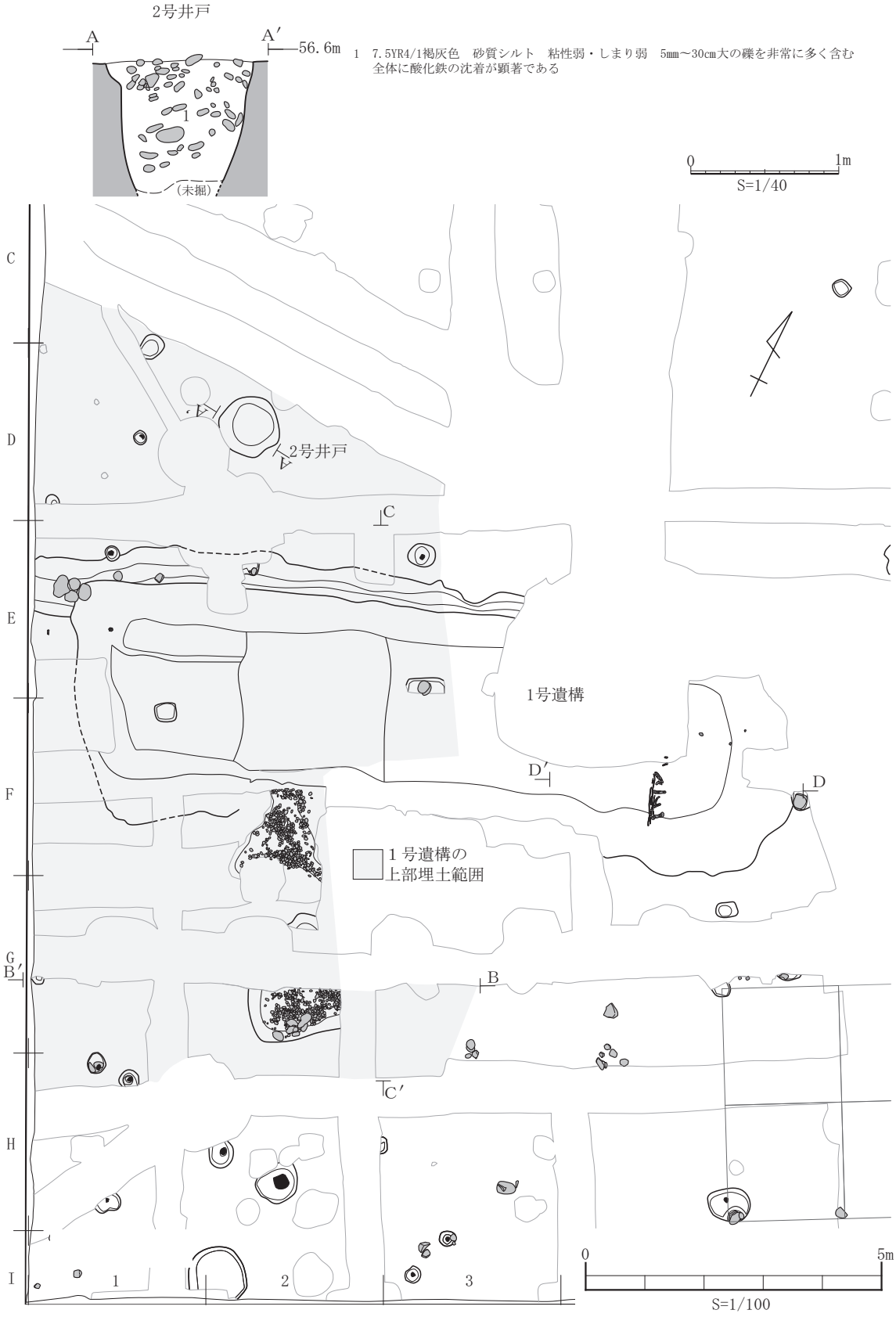
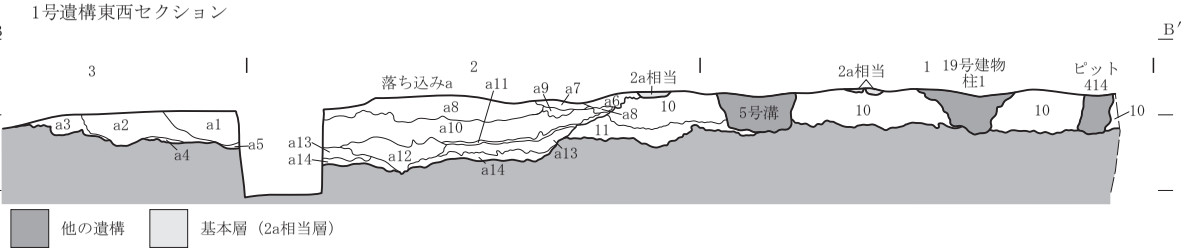
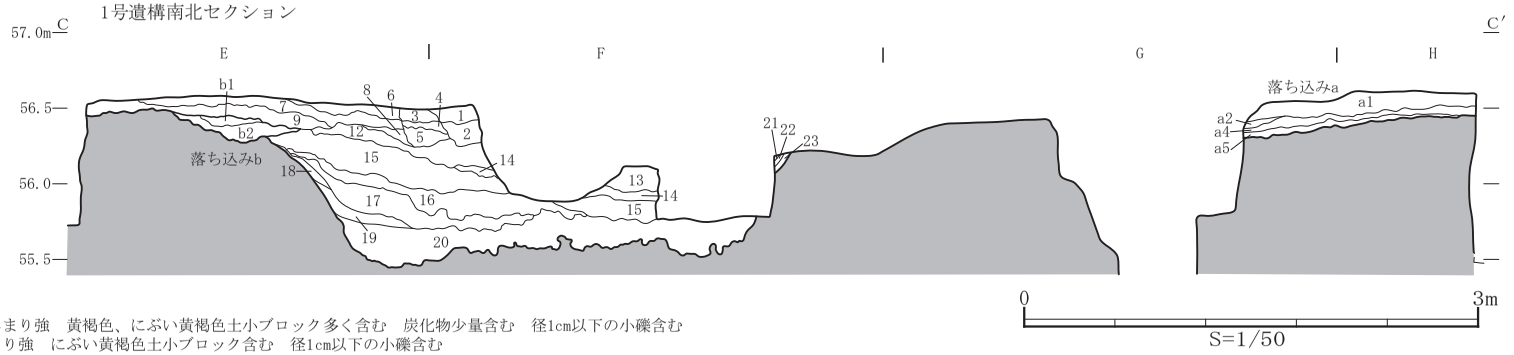


図18　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（1）
Fig.18　Features belonging to phase I at BK11 (1)

1号遺構東西セクション



1号遺構南北セクション



1号遺構落ち込みa

a1 10YR4/1褐灰色 シルト 粘性弱・しまり強 にぶい黄褐色粘土小ブロック上半部に多く含む 暗褐色土粒含む 炭化物を少量含む 上半部に酸化鉄が沈着

a2 10YR3/3暗褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 黄褐色、褐灰色、黒褐色土小ブロック全体に含む 炭化物含む 径1～5cmの小円礫少量含む

a3 10YR3/3暗褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 a2層に類似するが、小礫がやや多い黄褐色砂が下面に入る 黄褐色粘土が少なく、黄褐色砂小ブロックが入る

a4 10YR3/2黒褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 やや褐灰色に近く、a1層より暗い にぶい黄褐色シルト小ブロック含む 黒褐色・黒色土が上面に薄く入る 炭化物を多く含む

a5 10YR4/2灰黄褐色 粗砂 粘性弱・しまり強 部分的に粒土が細かくなる所がある 炭化物少量含む 灰白色土粒含む

a6 10YR4/2灰黄褐色 シルト 粘性弱・しまり強 径5mm以下の白色、黄褐色粗砂含む 酸化鉄が斑に沈着

a7 a6層と共通するが、酸化鉄の沈着が多い

a8 10YR4/2灰黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 黄褐色・暗褐色土の小ブロックを多く含む 炭化物、白色土粒、小礫含む 下半は色が暗くなる

a9 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト 粘性弱・しまり強 黄褐色土ブロック含む a8層の地山由来ブロックが多い部分と考えられる

a10 10YR5/2灰黄褐色 シルト 粘性中・しまり強 黄褐色、にぶい黄褐色土小ブロック多く含む 炭化物少量含む 径1cm以下の小礫含む

a11 10YR3/3暗褐色 シルト 粘性中・しまり強 にぶい黄褐色土小ブロック含む 径1cm以下の小礫含む

a12 10YR5/2灰黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 にぶい黄褐色土の小ブロック多量に含む 白色土粒、径1cm以下の小礫含む

a13 2.5Y4/2暗灰黄色 粘土 粘性強・しまり中 下半ににぶい黄褐色土小ブロック含む 炭化物少量含む

a14 10YR5/4にぶい黄褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり強 a13層に類似する暗灰黄色粘土がにぶい黄褐色土の隙間に入る 白色土粒、炭化物含む 径5cm以下の小円礫多く含む

1号遺構落ち込みb

b1 10YR3/3暗褐色 シルト 粘性やや弱・しまり強 黒褐色シルト小ブロック中量含む 径5mm以下の炭化物、径1～2mmの白色土粒、径1cm以下の小礫少量含む 酸化鉄が多く沈着

b2 10YR3/1黒褐色 粘土質シルト 粘性やや強・しまり強 灰黄褐色シルト小ブロック中量含む 径1～3mmの炭化物、白色土粒、小礫少量含む

1号遺構

上部埋土

1 10YR5/3にぶい黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 黒褐色シルト、明黄褐・赤褐色の砂質シルトを斑に中量含む 径1～2mmの炭化物、白色土粒、小礫少量含む 酸化鉄が沈着

2 10YR4/2灰黄褐色 シルト 粘性やや弱・しまり強 黒褐色シルト、赤褐色砂質シルト、灰黄色砂質シルトを少量含む 径1～2mmの炭化物、白色土粒、小礫少量含む 酸化鉄が沈着

3 1層と同様であるが、黒褐色が主体となる

4 1、3層と構成している土は同じ 1層よりも黒褐色土が多く含まれている 酸化鉄が斑に沈着

5 2.5Y3/2黒褐色 粘土質シルト 粘性やや強・しまりやや強 黒褐色粘土小ブロック中量、暗灰黄色粘土質シルトなど少量含む 径1～2mmの炭化物、白色土粒、小礫少量含む

6 構成している土は1、3、4層と同じだが、1層よりも明黄褐色土の割合が多い 酸化鉄が多く沈着

7 10YR3/3暗褐色 シルト 粘性やや弱・しまり強 黒褐色シルト、赤褐色砂質シルトを斑に中量含む 径1～2mmの炭化物、白色土粒、径2cm以下の小礫少量含む 酸化鉄が沈着

8 10YR3/1黒褐色 粘土 粘性強・しまり中 黒褐色粘土質シルト、赤褐色砂質シルトを少量含む 径1～2mmの炭化物、白色土粒、径5mm以下の小礫を少量含む

9 10YR3/3暗褐色 シルト 粘性やや弱・しまり強 黒褐色シルト、赤褐色砂質シルト、明黄褐色砂質シルトの小ブロック斑に中量含む ラミナ状に成層する場所がある 径5mm以下の炭化物、径1～2mmの白色土粒、径1cm以下の小礫少量含む 酸化鉄が多く沈着

10 10YR4/2灰黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 黄褐色土、暗褐色土の小ブロック多く含む 炭化物、白色土粒、小礫含む 下半は色が暗くなる

11 10YR4/2灰黄褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり強 黄褐色、にぶい黄褐色土の小ブロック多く含む 炭化物、白色土粒、小礫少量含む

下部埋土

12 構成している土は5層とほぼ同じだが、更に黒褐色小ブロック少量含む

13 2.5Y5/3黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 黒色シルト中量、明黄褐色シルト少量含む 径2cm以下の炭化物、径1～2mmの白色土粒、小礫少量含む

14 2.5Y3/1黒褐色 シルト 粘性やや弱・しまり強 赤褐色砂質シルトを僅かに含む 径1～2mmの炭化物と小礫少量含む 均質な層

15 10YR3/2黒褐色 シルト 粘性やや弱・しまり強 黒褐色粘土ブロックを中量、暗灰黄色粘土質シルト、赤褐色砂質シルト、オリーブ褐色シルト、黒褐色砂質シルトブロック少量含む 径5mm以下の炭化物を少量含み、層の中部に径10～15cm程度の炭化物の塊がある 径1～2mmの白色土粒、小礫少量含む

16 10YR2/1黒色 粘土質シルト 粘性やや強・しまりやや強 灰黄褐色粘土、赤褐色砂質シルトブロック少量含む 径1cm以下の炭化物、小礫、径1～2mmの白色土粒少量含む

17 構成している土は16層と同じだが、更に黒色土の割合が増える 層の下部に径20cm程度の炭化物がある

18 構成している土は16、17層と同じだが、若干灰黄褐色の割合が増える

19 10YR2/1黒色 粘土質シルト 粘性やや強・しまりやや強 黄褐色粘土質シルト、赤褐色砂質シルト、明黄褐色粘土小ブロック斑に中量含む 径1～2mmの炭化物、白色土粒、小礫少量含む

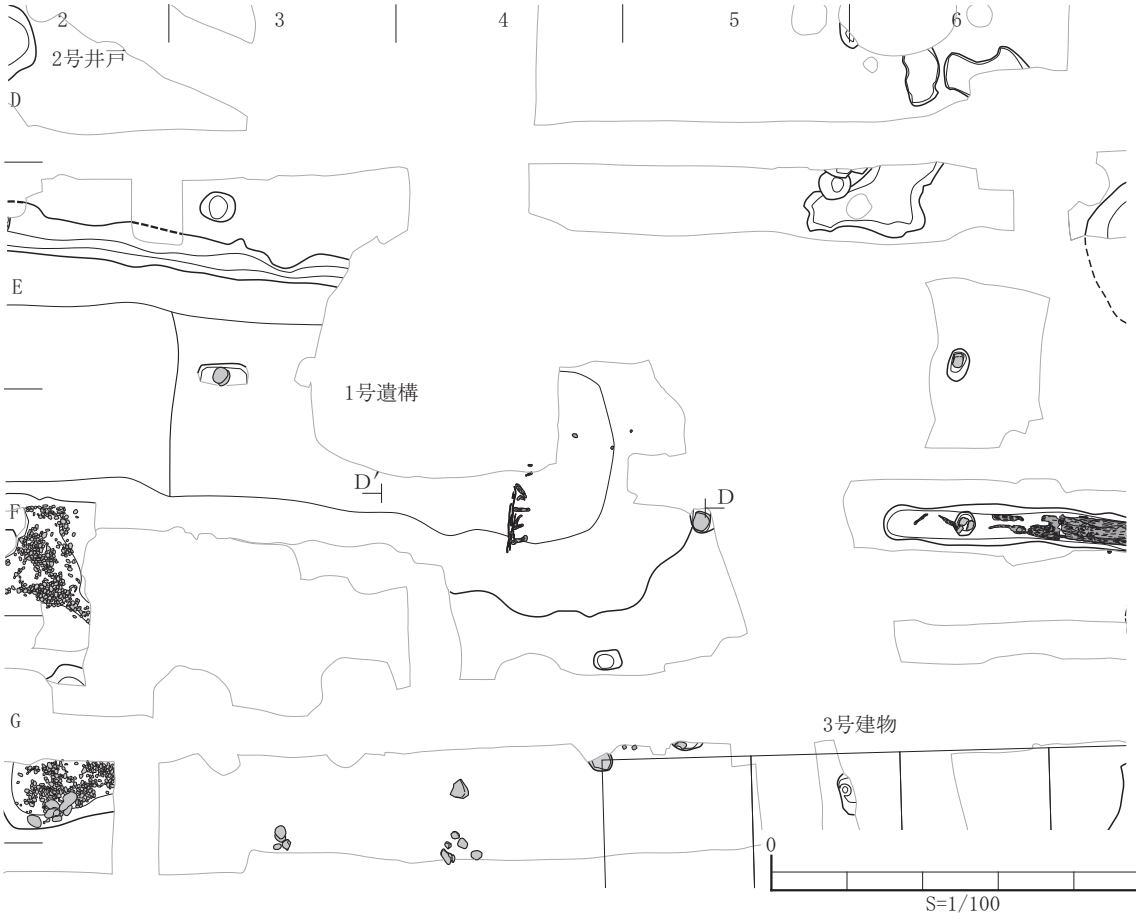
20 10YR2/1黒色 粘土質シルト 粘性やや強・しまりやや強 赤褐色砂質シルト少量含む 径1～2mmの炭化物、白色土粒、小礫少量含む

21 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト 粘性弱・しまり強 暗褐色、灰黄褐色土若干混じる

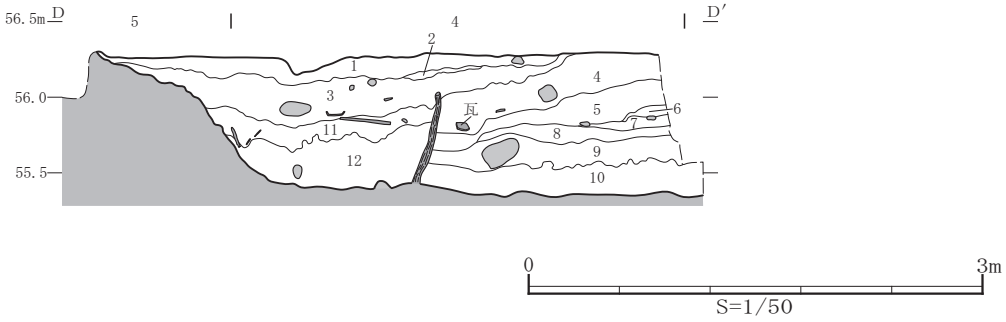
22 10YR3/2黒褐色 シルト 粘性弱・しまり強 木片などの有機質を多量に含む

23 10YR5/2灰黄褐色 細砂 粘性無し・しまり強 上部はやや暗く粘土質に変わる 細砂はごく薄いラミナ状になる 最下層の自然堆積層

図19 武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（2）
Fig.19 Features belonging to phase I at BK11 (2)



1 号遺構 F4 区断面図



1 10YR2/2黒褐色 シルト 粘性中・しまり中 灰黄褐色とにぶい黄褐色土を全体にブロック状に含む 径5㎜程度の赤色土粒を僅かに含む 径2㎜以下の白色土粒を極僅かに含む
2 10YR3/2黒褐色 シルト 粘性やや強・しまり中 褐色土小ブロック僅かに含む 径5㎜ほどの赤色土粒を全体に含む
3 10YR3/1黒褐色 粘土 粘性強・しまり中 黄褐色砂層ラミナ状に混ざる にぶい黄褐色粘土小ブロックと径5～10㎜の炭化物、木片僅かに含む 径5～20㎝の円礫極僅かに含む
4 10YR3/2黒褐色 シルト 粘性中・しまり中 灰黄褐色小ブロック僅かに含む 白色土粒を僅かに含む 径3～10㎝の円礫を極僅かに含む 全体に酸化鉄が沈着している
5 10YR3/2黒褐色 粘土質シルト 粘性強・しまり強 にぶい黄褐色粘土ブロック全体に斑に含む 黒色・赤色土粒僅かに含む 径5㎝の円礫極僅かに含む 全体に酸化鉄が沈着
6 10YR3/3暗褐色 シルト 粘性弱・しまり弱 木の葉等植物質のものが堆積、腐食した状態で5層と7層の間に部分的に入る
7 10YR3/2黒褐色 粘土質シルト 粘性強・しまり強 にぶい黄褐色粘土ブロック全体に斑に含む 黒色・赤色土粒僅かに含む 径5㎝の円礫極僅かに含む 全体に酸化鉄が沈着
8 10YR2/2黒褐色 粘土質シルト 粘性強・しまり中 にぶい黄褐色粘土小ブロック僅かに含む 径2～5㎜程の炭化物を全体にやや多く含む 小さな木片が層状に堆積する
9 10YR3/1黒褐色 粘土 粘性強・しまり強 部分的に黄褐色砂層が層状に堆積する 全体に酸化鉄が沈着
10 10YR3/2黒褐色 粘土 粘性強・しまり強 一部ににぶい黄橙色砂層がラミナ状に堆積する 白色土粒を含む 全体に酸化鉄が沈着
11 10YR4/2灰黄褐色 粘土 粘性強・しまり中 にぶい黄橙色粘土小ブロック僅かに含む 酸化鉄が沈着
12 10YR4/2灰黄褐色 粘土 粘性強・しまり強 にぶい黄橙色粘土小ブロック、白色土粒を僅かに含むが、11層よりも均質

図20 武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（3）
Fig.20 Features belonging to phase I at BK11 (3)

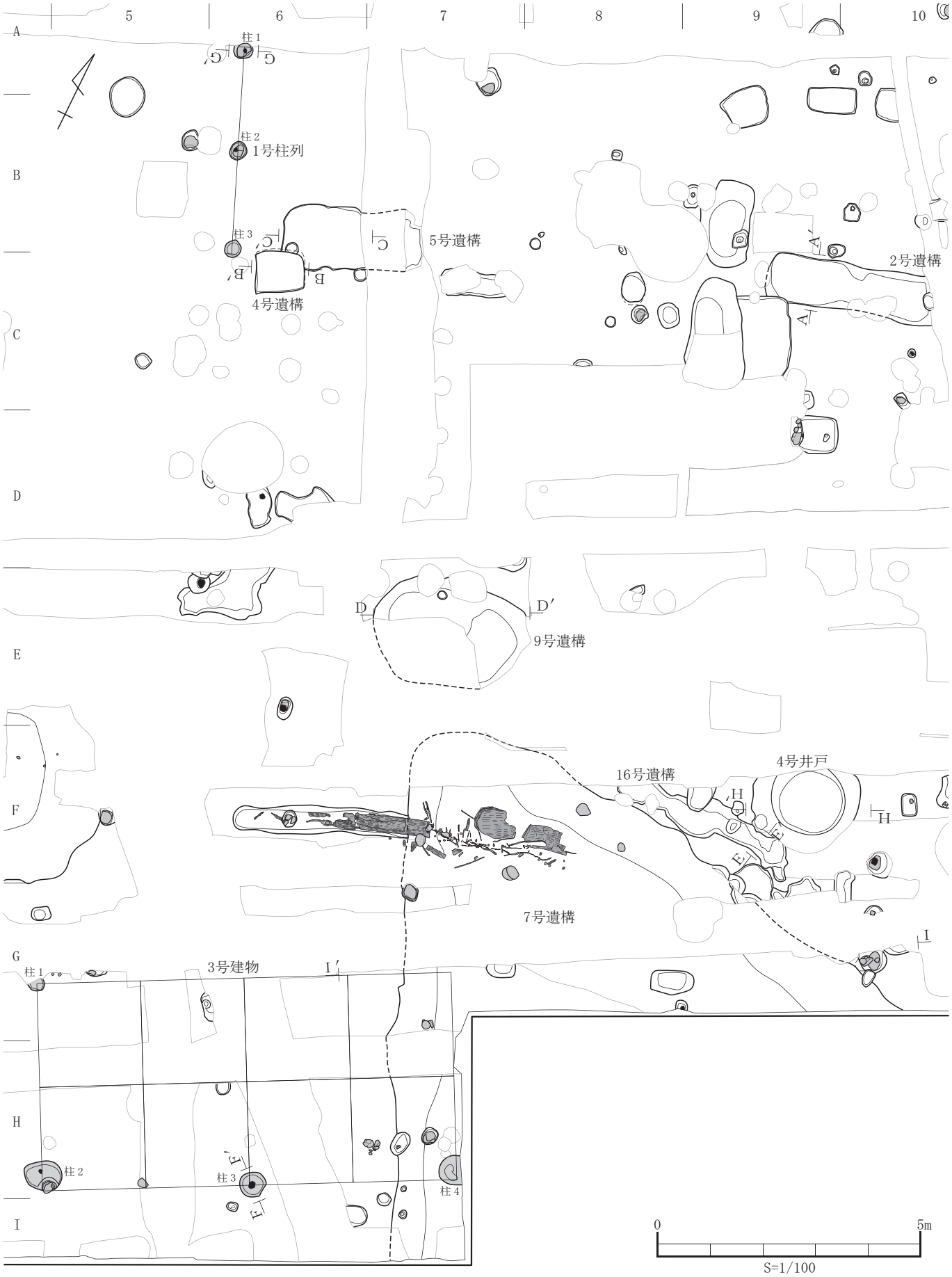
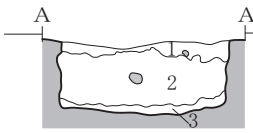


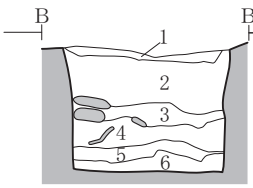
図21　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（4）
Fig.21　Features belonging to phase I at BK11 (4)

2号遺構



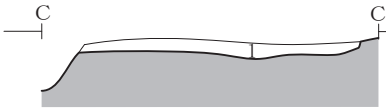
1　10YR4/1褐灰色　粘土質シルト　粘性やや弱・しまりやや弱　径5～30㎜ほどの炭化物を含む
2　7.5YR5/1褐灰色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　径2～10㎝ほどのオリーブ灰色シルト質粘土のブロックを多量に含む　径1～3㎜の炭化物を少量含む
3　7.5Y4/1灰色　粘土　粘性中・しまり中　地山由来の明黄褐色粘土のブロックを含む

4号遺構



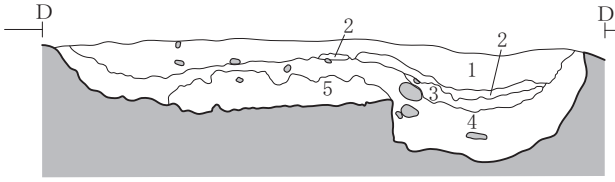
1　5Y4/3暗オリーブ色　粘土質シルト　粘性中・しまりやや強　径2～3㎜の白色土粒を多量に含む
2　5YR3/1黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまりやや弱　径3～5㎝の明黄褐色粘土のブロックを多く含む　全体に鉄分の沈着が著しい
3　10YR3/3暗褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり弱　褐灰色砂質シルトをラミナ状に含む　30㎝大の礫を含む
4　5Y3/1オリーブ黒色　シルト質粘土　粘性中・しまり弱　10㎝大の礫を含む
5　2.5Y5/4黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり弱　20㎝大の礫を含む
6　2.5Y4/2暗灰黄色　シルト質粘土　粘性弱・しまりきわめて弱　炭化物を幅2㎝ほどの帯状に含む

5号遺構



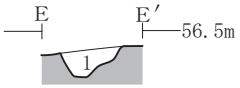
1　10YR6/3にぶい黄橙色　シルト質粘土　粘性中・しまりやや弱　径5㎝ほどの黒褐色粘土質シルトのブロックを少量含む　径2～5㎜の白色土粒を僅かに含む　全体に鉄分の沈着が著しい

9号遺構



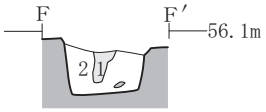
1　10YR5/1褐灰色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　暗褐色粘土質シルト、暗オリーブ色粘土と互層をなす　径3～7㎝の礫を少量、瓦片を僅かに含む
2　10YR3/2黒褐色　シルト　粘性やや弱・しまりやや弱　径5㎜～1㎝のにぶい黄橙色粘土のブロックを全体にまばらに含む
3　10YR3/4暗褐色　シルト質粘土　粘性やや強・しまり弱　径1～3㎝の灰黄色粘土質シルトのブロックを全体にまばらに含む
4　2.5Y3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや弱　径1～3㎝の灰白色粘土のブロックを多く、径1～15㎝の礫を少量含む
5　7.5YR4/6褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり弱　一部に15㎝大の暗褐色砂質シルトの焼土らしきブロックを含む　全体に径1～5㎝の褐灰色粘土質シルトのブロックをまばらに含む

16号遺構



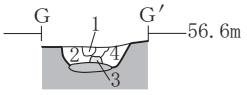
1　10YR4/4褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　径5～10㎜の炭化物を中量含む　層下部に地山由来の黄褐色粘土のブロックを含む

3号建物　柱3



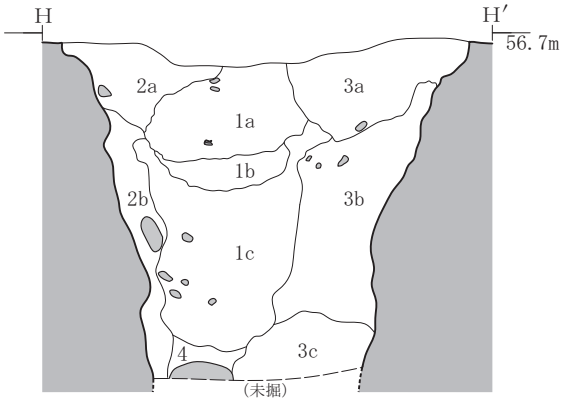
1　7.5R3/2暗赤褐色　シルト質粘土　粘性強・しまり弱　植物の根を多く含む
2　10YR3/4暗褐色　粘土　粘性強・しまり弱　植物の根と2～5㎝大の礫を少量含む

1号柱列　柱1



1　2.5Y2/3黄褐色　シルト　粘性弱・しまり弱　浅黄色粘土質シルトを含む
2　2.5Y3/3暗オリーブ褐色　シルト粘性やや弱・しまり中　炭化物粒を僅かに含む
3　7.5YR2/2黒褐色　シルト質粘土　粘性弱・しまり弱　木質の繊維を多量に含む
4　5Y6/2灰オリーブ色　粘土　粘性やや強・しまり中　酸化鉄を僅かに含む

4号井戸

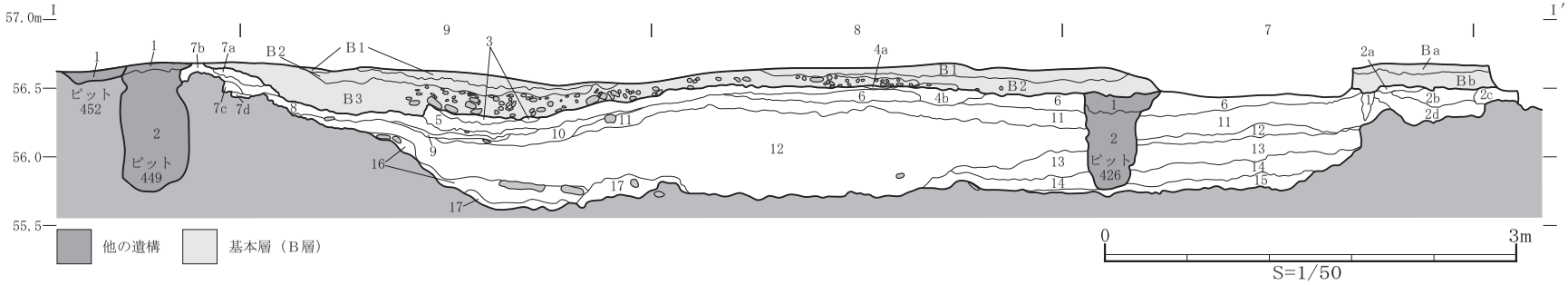


1a　10YR4/2灰黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや強　黄褐色粘土質シルトと赤褐色砂質シルト全体に斑に含む　径1～2㎜の白色土粒と小礫、径1㎝ほどの炭化物を少量含む
1b　10YR2/2黒褐色　粘土　粘性強・しまりやや強　層下部ににぶい黄褐色粘土質シルトを層状に含む　径1～2㎜の白色土粒、径2㎝ほどの炭化物を少量、1～2㎝大の礫を僅かに含む
1c　10YR4/3にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまりやや強　にぶい黄褐色粘土質シルトと黒褐色粘土が互層をなす　全体に径5㎜ほどの白色土粒と小礫、1㎝ほどの炭化物を少量含む
2a　10YR4/3にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　径2～3㎜の白色土粒と小礫、径5㎝ほどの炭化物を少量含む
2b　10YR3/3暗褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり弱　瓦片と20㎝大の礫を含む　植物の根を僅かに含む
3a　10YR4/2灰黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　径1～2㎝の礫をまばらに、径5㎜ほどの炭化物を僅かに含む
3b　10YR5/2灰黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまりやや弱　径3～5㎝の礫を少量含む全体に酸化鉄を多く含む
3c　2.5Y5/1黄灰色　シルト質粘土　粘性強・しまり弱　酸化鉄をラミナ状に含む　径5㎜～1㎝の炭化物を僅かに含む
4　7.5Y4/1灰色　粘土　粘性強・しまり弱　赤褐色砂質シルトと径1～2㎝の礫を少量含む

0　1m
S=1/40

図22　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（5）
Fig.22　Features belonging to phase I at BK11 (5)

7号遺構



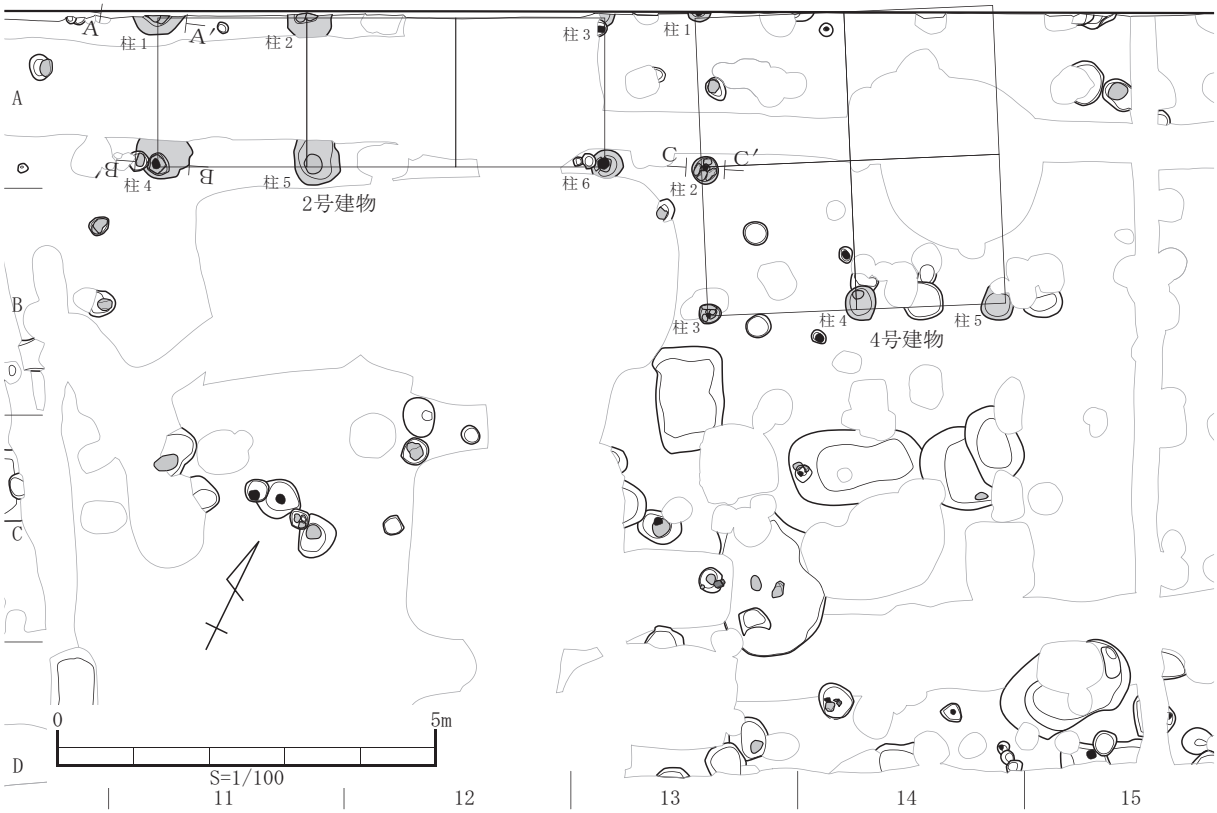
1 10YR2/2黒褐色 シルト 粘性中・しまり中　灰黄褐色、にぶい黄褐色土を全体にブロック状に含む　径5mm程度の赤色土粒僅かに含む　径2mm以下の白色土粒を極僅かに含む
2a 10YR3/2黒褐色 シルト 粘性やや強・しまり中　褐色土小ブロック僅かに含む　径5mmほどの赤色土粒全体に含む
2b 10YR3/1黒褐色 粘土 粘性強・しまり中　黄褐色の砂層がラミナ状に混ざる　にぶい黄褐色粘土小ブロック僅かに含む　径5～10mmの炭化物、木片僅かに含む　径5～20cmの円礫を極僅かに含む
2c 10YR3/2黒褐色 シルト 粘性中・しまり中　灰黄褐色小ブロック僅かに含む　赤色土粒(鉄分)が全体に斑に入る　白色土粒僅かに含む　径3～10cmの円礫極僅かに含む　全体に酸化鉄が沈着
2d 10YR3/3暗褐色 シルト 粘性弱・しまり弱　腐食した木の葉等の有機質物が堆積　2c層と沢状遺構1㉓層の間に部分的に入る
3 10YR4/2灰黄褐色 シルト 粘性中・しまり強　黒褐色、黄褐色、にぶい黄褐色土粒全体に多く含む
4a 10YR3/1黒褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強　赤褐色砂質シルト含む　径1～2mmの炭化物、白色土粒、小礫少量含む
4b 10YR3/1黒褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強　赤褐色砂質シルト、明黄褐色砂質シルト中量含む　径6～7mmの小礫、径1～2mmの炭化物、白色土粒中量含む
5 10YR5/6黄褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり強　場所によっては砂質土となる　白色土粒含む　ほとんど混入物がない　地山土を用いた整地層
6 10YR2/2黒褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり強　明黄褐色土小ブロック全体に含む　径1cm以下の炭化物、白色土粒、小礫含む
7a 10YR4/3にぶい黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強　黄褐色土小ブロック、黒褐色土粒含む　白色土粒含む
7b 10YR3/4暗褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強　黄褐色土粒と小ブロック、黒褐色土粒含む　径2cm以下の小円礫多く含む
7c 2.5Y4/2暗灰黄色 砂質シルト 粘性弱・しまり強　褐灰色シルトブロック、黄褐色土粒含む　径1cm以下の小円礫含む
7d 10YR3/3暗褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強　下面では褐灰色シルト、にぶい黄褐色シルトが互層をなす
8 10YR5/6黄褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強　5層と同様にほとんど混入物のない地山土を用いた整地層であるが、砂質土が主体を占める
9 炭化物層
10 10YR3/3暗褐色 粘土質シルト 粘性やや強・しまりやや強　黒褐色粘土質シルト中量、明黄褐色粘土、赤褐色砂質シルト少量含む　径3cm以下の小礫、径1～3mmの炭化物、白色土粒少量含む
11 10YR4/4褐色 シルト 粘性中・しまり強　黒褐色粘土質シルト、明黄褐色粘土、赤褐色砂質シルト少量含む　径1～4mmの炭化物、白色土粒、小礫少量含む
12 10YR3/2黒褐色 シルト 粘性中・しまり強　にぶい黄橙色・黒褐色の粘土質シルトと灰黄褐色・赤褐色の砂質シルト斑に中量含む　層下部には、砂質シルトの割合が大きい　径1cm以下の炭化物、径1～4mmの白色土粒、径5cm以下の小円礫少量含む
13 10YR3/1黒褐色 粘土質シルト 粘性やや強・しまりやや強　にぶい黄褐色粘土・赤褐色砂質シルト斑に中量含む　径1～2mmの炭化物、白色土粒、径1cm以下の小礫少量含む
14 13層と構成している土は同じだが、黒褐色土が主体となる　径1cm以下の炭化物、小礫、径10cmの円礫含む
15 構成している土は13層・14層と同じだが、14層より赤褐色土の割合が大きくなる　層上部に径20cm程度の炭化物の塊がある　径1～2mmの炭化物、径3cm以下の小礫少量含む
16 10YR4/6褐色 粗砂 粘性弱・しまり強　明黄褐色・黒色・黒褐色・暗褐色の小ブロック多量に含む　径5cm以下の小円礫含む
17 10YR4/6褐色 粗砂 粘性なし・しまり強　黄褐色粘土・黒褐色粘土の小ブロックを含む　径5cm以下の小円礫含む　層下面に酸化鉄が沈着

ピット 426
1 10YR4/2灰黄褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり中　径3～5cmの礫と径2～5mmの白色土粒少量含む
2 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト質粘土 粘性やや強・しまりやや弱　径2～5mmの炭化物を僅かに含む　酸化鉄が沈着

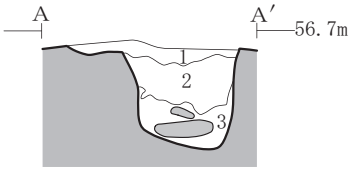
ピット 449
1 10YR3/3暗褐色 砂質シルト 粘性弱・しまり強　黄褐色土粒少量含む　径1cm以下の小礫やや多く含む
2 10YR5/8黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強・しまり強　黒色シルト中量、灰黄褐色粘土と赤褐色砂質シルトを少量、径3～4mmの白色土粒、小礫、炭化物含む

ピット452
1 10YR3/3暗褐色 シルト 粘性やや弱・しまりやや強　黄褐色粘土質シルトと径1～3mmの白色土粒、炭化物少量含む

図23　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（6）
Fig.23　Features belonging to phase I at BK11 (6)

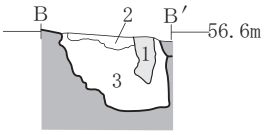


2号建物　柱1



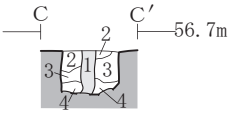
1　10YR3/3暗褐色　シルト　粘性中・しまりやや強　にぶい黄橙色シルトのブロックを多量に含む
2　10YR2/2黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　オリーブ褐色粘土質シルトのブロックを多量に含む
3　10YR6/8明黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　埋土2由来の黒褐色土をまばらに含む

2号建物　柱4



1　10YR5/2灰黄褐色　シルト　粘性中・しまりやや強　径2～5㎜の酸化鉄を僅かに含む
2　10YR5/3にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　径5～10㎜の酸化鉄をまばらに含む
3　10YR3/3暗褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　径5～8㎝の黄褐色粘土のブロックを多量に含む

4号建物　柱2



1　10YR3/4暗褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまりやや強　黄褐色砂を少量斑に含む
2　10YR6/8明黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまりやや強　暗褐色砂質シルトが少量斑に混じり、白色土粒を少量含む
3　10YR3/4暗褐色　シルト　粘性やや弱・しまりやや強　黄褐色シルトを小ブロックで含む
4　10YR5/6黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや強　褐色砂質シルトを中量斑に含む

0　1m
S=1/40

図24　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（7）
Fig.24　Features belonging to phase I at BK11 (7)

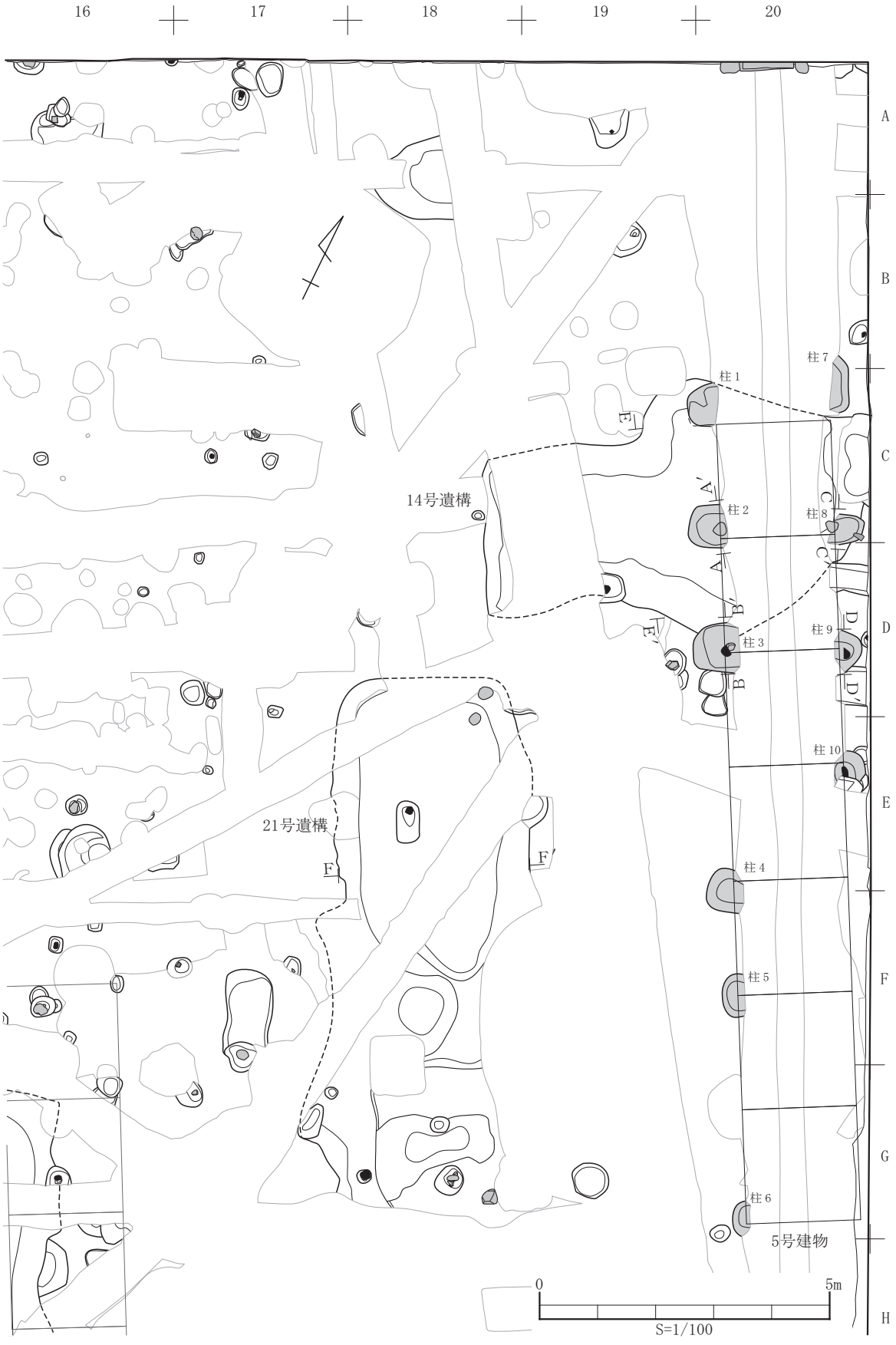
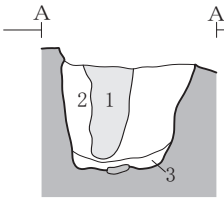


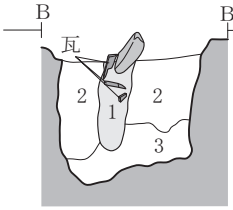
図25　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（8）
Fig.25　Features belonging to phase I at BK11 (8)

5号建物　柱2



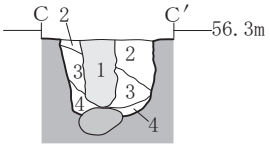
1　10YR4/2灰黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　黄褐色粘土が少量斑に混じる　径0.5～2cmほどの炭化物を少量含み、中位に炭化物の塊を含む　小礫を僅かに含む
2　10YR5/2灰黄褐色　粘土　粘性強・しまり強　黄褐色シルトが少量、明赤褐色シルトが僅かに斑に混じり、径1mmほどの炭化物、白色土粒を僅かに含む
3　10YR3/3暗褐色　粘土　粘性強・しまりやや強　黒褐色土が少量斑に混じり、褐色の鉄分を含む

5号建物　柱3



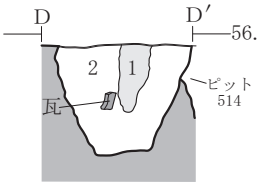
1　10YR3/3暗褐色　シルト　粘性強・しまり中　径1～5mmのオリーブ褐色粘土質シルトを斑に含む　径2～3mmの炭化物を少量含む
2　10YR3/3暗褐色　シルト　粘性やや弱・しまり中　径5～10cmのオリーブ褐色粘土質シルトを斑に多量に含む　径1～2mmの小礫をやや多く、径2～3mmの炭化物をごく少量含む
3　10YR3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　径2～3cmの暗褐色粘土質シルトを斑にやや多く含む　径1～2mmの小礫を少量、径5cm前後の礫をごく少量含む　径3～5mmの炭化物をごく少量含む

5号建物　柱8

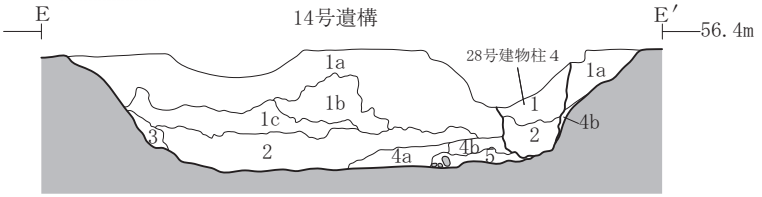


1　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり強　にぶい黄褐色粘土、黄褐色粘土が少量、シルトが僅かに斑に混じり、径1mmほどの炭化物を僅かに含む
2　10YR3/3暗褐色　粘土　粘性強・しまり強　にぶい黄褐色粘土が少量斑に混じり、径2～10cmほどの黄褐色粘土のブロックを少量、径0.5～1cmほどの炭化物、白色土粒を僅かに含む
3　10YR5/6黄褐色　シルト質粘土　粘性やや強・しまり強　暗褐色粘土が中量斑に混じり、径1mmほどの炭化物をごく僅かに含む
4　10YR4/3にぶい黄褐色　粘土　粘性強・しまり強　黒褐色粘土が少量斑に混じり、径2～3cmほどの黄褐色粘土のブロックを少量含む

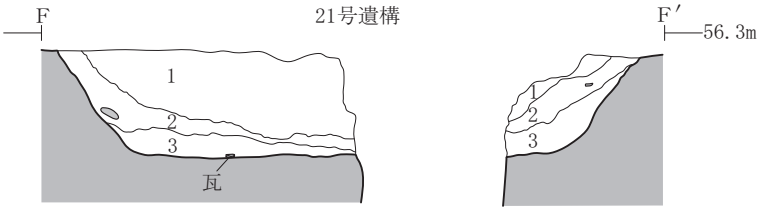
5号建物　柱9



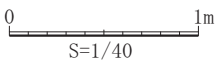
1　10YR3/2暗褐色　粘土　粘性強・しまりやや強　褐色粘土を中量、にぶい黄褐色シルト質粘土、黒褐色粘土が少量斑に混じる
2　10YR5/6黄褐色　粘土　粘性強・しまり強　暗褐色粘土が中量、にぶい黄褐色粘土が少量斑に混じる



1a　10YR4/2灰黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり強　黄褐色シルト質粘土、明黄褐色シルトブロックを全体的に多量に含む　炭化物を少量、白色土粒をやや多く含む　径2～5cmの円礫を少量含む　酸化鉄がやや多く沈着している
1b　10YR4/2灰黄褐色　シルト　粘性中・しまりやや強　黄褐色粘土質シルトを少量含む　白色土粒を少量含む　酸化鉄が多く沈着している
1c　10YR4/2灰黄褐色　シルト質粘土　粘性中・しまりやや強　明黄褐色シルト質粘土をごく少量含む　炭化物、白色土粒をごく少量含む　酸化鉄が多く沈着している
2　10YR3/2黒褐色　シルト　粘性弱・しまりやや弱　径2～3mmのにぶい黄橙色粘土質シルト、明黄褐色シルト質粘土を全体的に多量に含む　黒褐色シルト質粘土が部分的に層を形成している　炭化物、白色土粒をごく少量含む　酸化鉄がやや多く沈着している
3　10YR7/4にぶい黄橙色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に含む　地山崩落土
4a　10YR4/2灰黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　径1～2mmのにぶい黄橙色シルトを少量含む　酸化鉄が少量沈着している
4b　10YR4/6褐色　シルト　粘性中・しまり中　にぶい黄橙色シルトを層下部にブロック状に含む　径1～2mm黒褐色粘土質シルトを僅かに含む　酸化鉄が僅かに沈着している
5　10YR3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　径1～2mmの明黄褐色シルトや、黒色シルトを少量含む　酸化鉄が僅かに沈着している



1　10YR6/6明黄褐色　シルト　粘性弱・しまり強　にぶい黄褐色シルトをブロック状に含む　黄色土粒、白色土粒を僅かに含む
2　10YR3/2黒褐色　シルト　粘性強・しまり中　径5mmの炭化物を含む　白色土粒、黄色土粒、赤色土粒を多く含む　径5～10cmの円礫を僅かに含む
3　10YR4/3にぶい黄褐色　粘土　粘性強・しまり中　黒褐色、にぶい黄褐色、にぶい黄褐色粘土ブロックを斑に含む　にぶい黄褐色砂質シルトブロックを一部に含む　白色土粒を多く含む　黄色土粒を僅かに含む　酸化鉄の沈着が顕著である



S=1/40

図26　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（9）
Fig.26　Features belonging to phase I at BK11 (9)

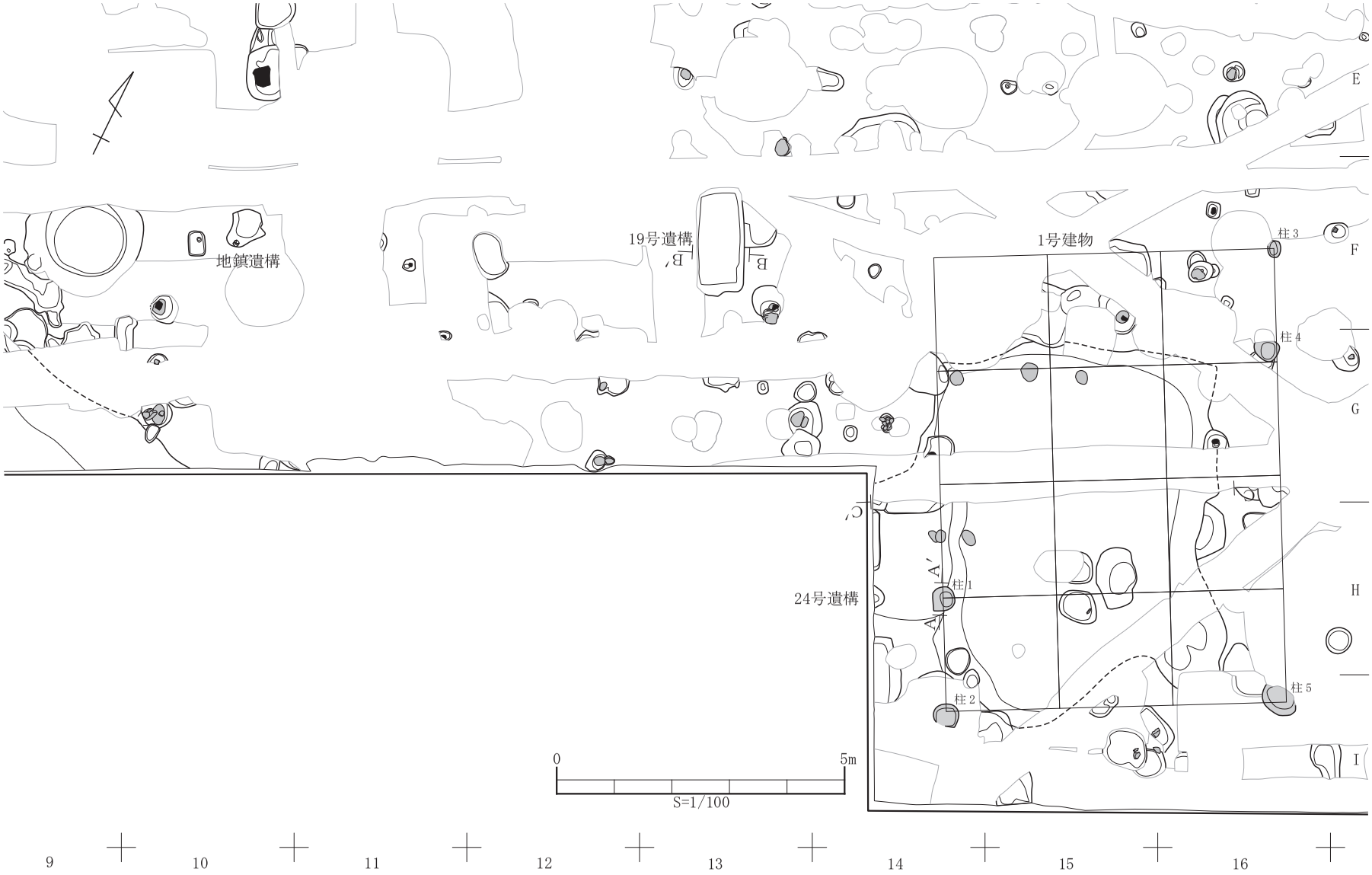
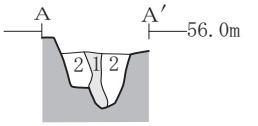


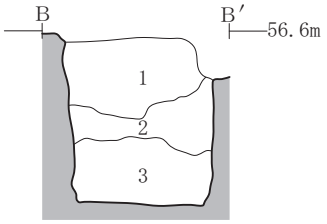
図27　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（10）
Fig.27　Features belonging to phase I at BK11 (10)

1号建物　柱1



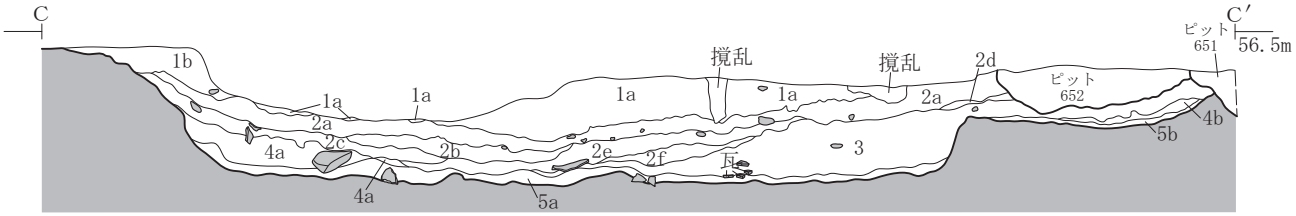
1　10YR3/4暗褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　黒褐色シルトをやや多く含む
2　10YR4/2灰黄褐色　シルト質粘土　粘性強・しまり中　褐色粘土質シルトを少量含む　白色土粒を少量含む

19号遺構

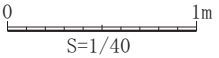


1　10YR4/3にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　径1～5cmの礫と5mm～3cmの炭化物を少量含む
2　10YR3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり弱　西側では厚さ10cmほどで明黄褐色粘土を層状に含む　径5～10mmの炭化物を中量、1～3cmの礫を少量含む
3　10YR4/2灰黄褐色　粘土　粘性強・しまりきわめて弱　黒褐色シルト質粘土と互層を成す　最下部に明黄褐色粘土を厚さ1cmほどの層状に含む

24号遺構



1a　10YR5/8黄褐色　シルト質粘土　粘性中・しまり中　暗褐色粘土質シルトを斑にほぼ前面に多く含む　径2～3mmの黒褐色シルトを少量含む　白色土粒、径5mm～2cmの小礫を少量含む　酸化鉄が僅かに沈着している
1b　10YR3/4暗褐色　粘土質シルト　粘性やや弱・しまり中　黄褐色シルト質粘土を層下部中心に多く含む　径2～3mmの炭化物をごく少量含む　白色土粒、黄褐色土粒、赤褐色土粒を斑にやや多く含む径2～5cmの円礫をやや多く含む
2a　10YR4/2灰黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまりやや弱　褐色シルト質粘土を層下部中心にやや多く含む　径3mm～1cmの炭化物、白色土粒を少量含む　径3～10cmの円礫を少量含む　酸化鉄が僅かに沈着している
2b　10YR3/3暗褐色　粘土質シルト　粘性弱・しまりやや弱　径3～5mmの黄褐色粘土質シルトと暗褐色粘土質シルトを少量含む　層の西側には、黒色シルトが堆積している　径5mm～1cmの炭化物、白色土粒を少量含む
2c　10YR3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまりやや弱　褐色シルト質粘土を少量含む　径3～5mmの炭化物を少量含む　白色土粒、径2～5mmの円礫を少量含む　酸化鉄が僅かに沈着している
2d　10YR4/3にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや強　灰黄褐色粘土質シルトを少量含む　炭化物、白色土粒を僅かに含む　酸化鉄が僅かに沈着している
2e　10YR3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　部分的に褐色シルトを含み、東側では主体的になる　層下部では灰黄褐色粘土質シルトが主体となる　炭化物、白色土粒を少量含む
2f　10YR4/2灰黄褐色　シルト質粘土　粘性強・しまりやや強　明黄褐色シルト質粘土、黒色粘土質シルト粘性を斑に多量に含む　白色土粒を少量含む　全体に酸化鉄がやや多く沈着している
3　10YR2/1黒色　粘土質シルト　粘性中・しまり弱　径3mm～1cmのにぶい黄褐色シルト質粘土を多量に含む　褐灰色粘土質シルトを層下部を中心にやや多く含む　白色土粒を少量含む　径3～5cmの円礫、瓦片を含む
4a　10YR5/4にぶい黄褐色　シルト質粘土　粘性強・しまり中　褐色粘土質シルトを斑に多量に含む　暗褐色シルトを斑に少量含む　白色土粒を少量含む　酸化鉄が僅かに沈着している
4b　10YR5/4にぶい黄褐色　シルト質粘土　粘性強・しまり中　褐色粘土質シルトを斑に少量含む　暗褐色粘土質シルトを斑に少量含む　炭化物、白色土粒を少量含む　酸化鉄が僅かに沈着している　4a層に非常に類似している
5a　10YR4/6褐色　粘土質シルト　粘性弱・しまり中　径1～3mm黄褐色粘土質シルト、褐色粘土質シルトを斑に多量に含む　炭化物を少量、白色土粒を少量含む　酸化鉄が多く沈着している　東側や西側に行くにつれて黒褐色粘土質シルトが主体となり、にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に多く含むようになる
5b　10YR4/2灰黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　径5mm～1cmのにぶい黄橙色シルト質粘土を多量に含む　径2～5mmの黒色粘土質シルトをやや多く含む　白色土粒を少量含む



S=1/40

図28　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（11）
Fig.28　Features belonging to phase Ⅰ at BK11 (11)

②Ⅱａ期の遺構（図29）

このⅡａ期以降、建物の柱間寸法は、基本的に６尺３寸となる。Ⅰ期において遺構が分布していた調査区南側の範囲では遺構は認められず、中央部より北側に遺構が集中する。東側では８棟の建物が密集し、さらに北側と南側に分割できる。北側の17号建物は不明であるが、その他の建物は15号建物→８号建物→14号建物の順に変遷する。南側の10・18号建物は不明だが、９号建物→16号建物と変遷する。このように、さらに数段階の変遷が想定できる。東側建物の軸角度は、Ｎ－23°～26°－Ｗの範囲となる。一方、西側では大形の建物と推定できる６号建物のほか、４棟の建物が存在する。この建物群の軸角度は、Ｎ－20°～24.5°－Ｗとなり、東側とは一致しない。また、この西側では９号遺構・16号遺構などの次に６号建物が構築されており、さらにその後に12号建物が構築されている。このことから、東側と同様により細かな段階の存在が推定できる。Ⅱａ期の遺構から出土した遺物は全般に少ないため、前後の時期の遺構の時期などから、Ⅰ期以外の17世紀代、とくに後半を中心とした時期と推定している。

【６号建物】（図30・31、図版17・18）

Ｃ～Ｆ－５～８区で検出した。方向はＮ－22°－Ｗである。12号建物（Ⅱａ期）より古く、Ⅰ期の１・９・16号遺構より新しい。同時期の31号遺構との関係は不明である。17基の柱が検出された。柱間寸法は６尺３寸である。柱２・３・４・６・７・８・９の部分が２×２間となり、その北・東側に半間で柱１・５・10～14が並ぶ。その外にも柱15・16・17が存在するが、その他の部分が不明であるため配置関係は判然としない。半間で並ぶ柱の内、柱14以外の柱の掘り方は円形を呈する。その規模は、径29cm（柱12）～39cm（柱１・５）となり、小規模で統一的である。また、とくに大きい柱15と離れている柱17以外の柱は、やや楕円形であり、その平面規模は長軸が44cm（柱16）～58cm（柱14）×短軸が40cm（柱７）～51cm（柱14）となる。これらの深さは、５cm（柱12）～48cm（柱９）である。円形の柱の深さの平均値は24cm、同様に楕円形の柱は30cmとなり、形状による差異はそれほど認められない。柱３・４・６～８・13・14・16には柱痕跡がある。また柱16には遺存状況が極めて悪い柱根の破片が残る。柱３・５～７・９・10～13では、掘り方底面に大きめの礫を１点敷く。柱15では、やや大きめの掘り方の片側に２点の礫を重ねて配置する。ちょうどその礫の上で、柱根跡を検出している。柱穴の数に比べ、出土遺物は少ない。出土した遺物は陶器３点、土師質土器皿２点などである。そのうち柱10から出土した土師質土器皿１点を図化した（図89－13）。

【７号建物】（図32、図版18）

Ａ～Ｃ－９・10区で検出した。方向はＮ－20°－Ｗである。２号遺構（Ⅰ期）より新しく、13号建物（Ⅱａ期）より古い。柱間寸法では６尺３寸で、１×４間となる。調査区外北側に伸びる可能性がある。６基の柱穴が検出された。柱掘り方形状は、おおむね円形である。柱３は径23cmほどで小形であるが、それ以外の柱掘り方の径は、33cm（柱６）～46cm（柱１）にまとまる。柱３以外の深さは、11cm（柱５）～37cm（柱２）であり、対向する柱２（37cm）と柱４（21cm）のみがやや深く、それ以外は10～20cmの間に収まる。また、柱１・４には柱痕跡が残る。柱４の掘り方底面に礫を１点置く。出土遺物は柱５からの瓦２点のみである。

【８号建物】（図33・34、図版18・19）

Ｂ－13～15区で検出した。方向はＮ－25°－Ｗである。同時期の15号建物より新しく、14号建物より古い。柱間寸法は６尺３寸で、２×１間となる。４基の柱穴が検出された。北側の柱１～３の掘り方形状は、長方形あるいは楕円形を呈する。その規模は、55cm（柱１）～61cm（柱２）×32cm（柱３）～41cm（柱１・２）となりまとまる。南側の柱４の平面規模は、38×33cmとなり、やや規模が小さい。柱１～４の深さは、それぞれ41cm、26cm、11cm、16cmとなり、ばらつきがある。最も浅い柱３以外の柱では柱痕跡が残る。その中でも柱１・２では柱痕跡下に礫を配置する。柱３でも礫を配置しているが、西側と南側を別のピットにより撹乱されているため、柱に伴うものか不明である。出土遺物は無い。

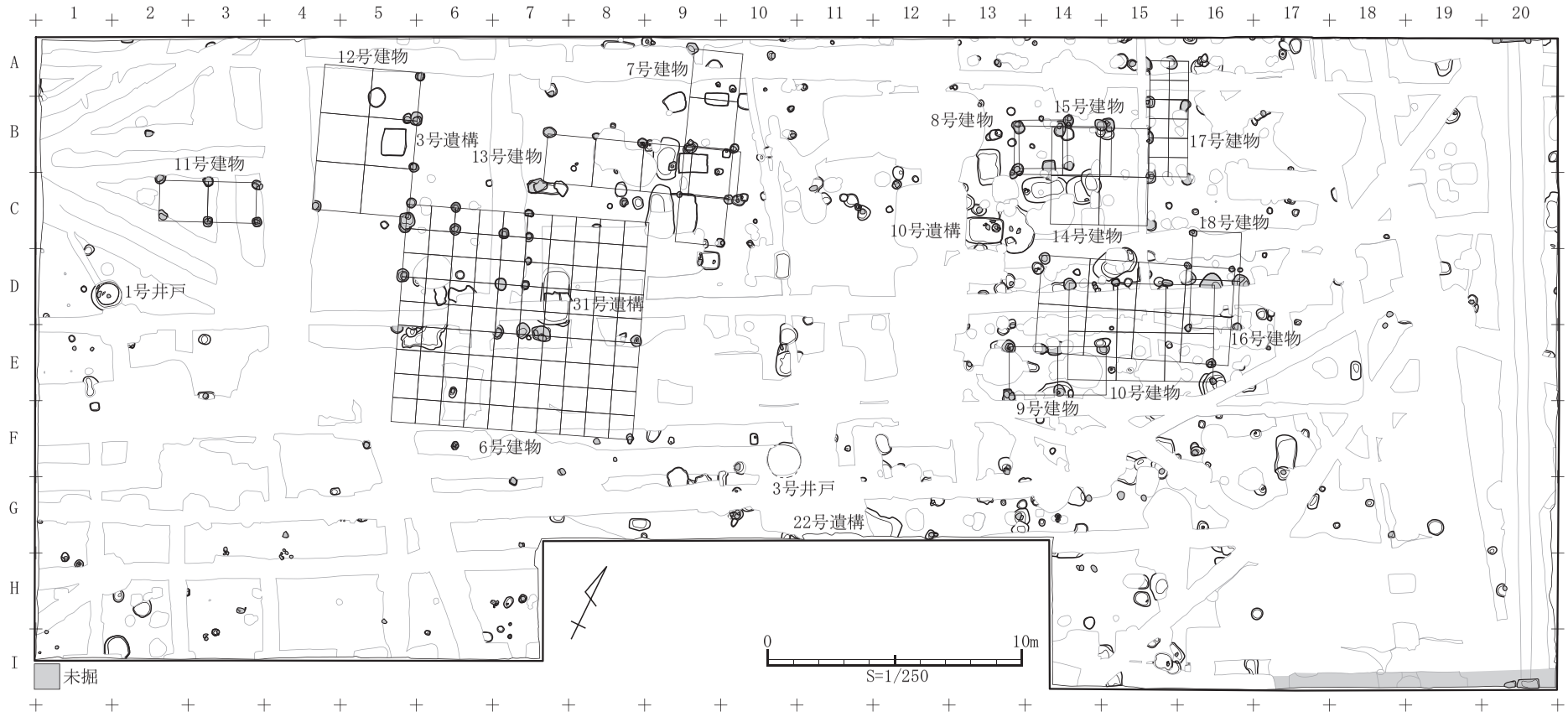


図29　武家屋敷地区第11地点Ⅱａ期遺構配置図
Fig.29　Distribution of futures belonging to phase IIa at BK11

【９号建物】（図33・34、図版19）

Ｅ－13 ～ 15区で検出した。方向はＮ－26° －Ｗである。同時期の 16号建物より古い。柱間寸法は６尺３寸で、２×１間となる。５基の柱穴が検出された。柱掘り方の全てが撹乱等により破壊され不明瞭ではあるが、その形状は円形あるいは楕円形を呈するものと考えられる。比較的残りの良い柱１は、残存長54×49㎝で、深さは 63㎝と深い。この柱の掘り方は二段の掘り込みを伴うもので、最下段には礫を配置する。柱４でも礫を配置しているが、他のピットによる撹乱が著しく、ほぼ礫のみの検出となる。柱２の規模は 68×27㎝で、やや大きめであるが、９㎝と浅い。柱３・５の規模は、柱１とほぼ同様であるが二段の掘り込みは伴わない。また、柱３・５の掘り方は、それぞれ深さ 25㎝、39㎝となり、柱１に比べると少し浅い。出土遺物は土師質土器皿、瓦片１点ずつである。

【10号建物】（図33・34、図版19）

Ｄ・Ｅ－14 ～ 16区で検出した。方向はＮ－25° －Ｗである。柱間寸法は６尺３寸で、３×２間となる。５基の柱穴が検出された。柱掘り方形状は、円形（柱１・２・５）と楕円形（柱３）のほか、さらに規模の大きなやや楕円形の柱４がある。円形の柱１・２・５の径は、それぞれ 48・33・28㎝となりばらつきがある。深さは 12、７、23㎝となり、ばらつきがあるものの全体的に浅い。この中の柱２では、底面よりやや浮く状態で長方形の礫が置かれていた。楕円形の柱３の規模は、41×22㎝、深さは 14㎝となる。柱４の掘り方は現存長で 84×60㎝となり、ほかに比べ大きい。その掘り方は、やや不整形であり、西方壁面が開く。柱３・４・５には柱痕跡がある。柱４の柱痕跡は、ほぼ垂直だが、その下面には瓦片が敷き詰められる（図34）。出土遺物は、柱１埋土から陶器片１点、和釘１点、柱４から瓦片６点のみである。

【11号建物】（図30・31、図版20）

Ｃ－２～４区で検出した。方向はＮ－24.5° －Ｗである。柱間寸法は南北１間６尺３寸と東西２間で５尺３寸と、ほかの建物とは異なる。検出位置や建物方位も６・７・12・13建物とはやや異なっており、異質な様相が見受けられる。６基の柱穴が検出された。柱掘り方形状は、隅丸方形に近い円形である。その規模は、径34㎝（柱３）～ 43㎝（柱４）となり、ほぼ同様である。深さについては、柱６が 13㎝と浅いが、それ以外の柱は 21（柱１）～ 32㎝（柱２・４）の間に収まる。全ての掘り方底面に、礫を配置する。出土遺物は瓦質土器３点、瓦片１点のみである。

【12号建物】（図30・31、図版20・21）

Ａ～Ｃ－４～６区で検出した。Ⅰ期の１号柱列の西側に位置する。同時期の６号建物より新しい。方向はＮ－21° －Ｗである。柱間寸法は６尺３寸で、２×３間となるが、調査区外北側へと伸びる可能性がある。５基の柱穴が検出された。柱掘り方形状は、円形（柱２・４）あるいは楕円形（柱３・５）である。柱１は、撹乱のため形状が不明である。円形の柱２・４の径は、それぞれ 36・40㎝であるが、楕円形の柱３と５はそれぞれ 52・69×45・56㎝となり、やや大きい。柱１は、残存している部位の規模からすると、楕円形のものに近い。深さは、22㎝（柱１）～ 35㎝（柱５）となり、その差は大きくない。全ての柱掘り方底面に礫を配置する。東側列の柱２～５ではそれぞれ柱痕跡があるが、礫の上面に位置している。出土遺物は無い。

【13号建物】（図32、図版21）

Ｂ・Ｃ－７～ 10区で検出した。方向はＮ－21° －Ｗである。柱間寸法は６尺３寸で、４×１間となる。７号建物より新しい。６基の柱穴が検出された。撹乱により半分近く破壊されている柱２以外の柱の掘り方形状は、やや楕円形を呈する。その平面規模は、柱３が最小で 42×36㎝、柱５が最大で 78×49㎝となる。深さは 14㎝（柱５）～ 28㎝（柱４）となり、差はそれほど大きくはない。柱痕跡は柱１・３・４に認められた。柱４は平らな礫を１点底面に敷く。柱６は底面中央に方形の礫を置く。柱３では底面に方形・長方形の小形の礫を円形に配置し、その中央を囲むように礫を並べる。柱痕跡はその中央部にあたる（図版21－４・５）。出土遺物は柱６から陶器

１点のみである（図80－38）。瀬戸・美濃の天目碗で、高台は削り出し輪高台、高台周辺は露胎である。上半が欠損しているため詳細は判らないが、17世紀代のものと考えられる。

【14号建物】（図33・34、図版21）

Ｂ・Ｃ－14・15区で検出した。方向はＮ－25°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸で、２×２間となる。８号建物より新しい。４基の柱穴が検出された。柱１の掘り方の形状は長方形だが、それ以外は円形あるいは楕円形を呈する。長方形の柱１の規模は76×50cm、深さ30cmとなりやや大規模である。柱３・４は撹乱により不明であるが、柱２の平面規模は51×40cm、深さ36cmとなり、深さの値は柱１と近似する。この柱１・２には柱痕跡がある。ただし柱１の柱痕跡は、想定される位置よりはやや北側にずれる。また、柱２～４は底面に大きめの礫を置く。出土遺物は瓦片のみである。

【15号建物】（図33・34、図版22）

Ｂ・Ｃ－13・14区で検出した。方向はＮ－26°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸で、１間四方となる小形の建物である。８号建物より古い。３基の柱穴が検出された。柱掘り方形状は、楕円形を呈する。撹乱で破壊されていない柱１の規模は44×40cmであり、他の柱も同規模になる可能性が高い。ただし、柱１～３の深さは、それぞれ９・35・16cmとばらつきがある。柱痕跡は、とくに深い柱２のみに認められた。また、柱１・２の掘り方底面には礫を配置する。出土遺物は瓦片のみである。

【16号建物】（図33・34、図版22）

Ｄ・Ｅ－14～16区で検出した。方向はＮ－23°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸で、４×２間となる。９号建物より新しい。５基の柱穴が検出された。柱掘り方形状は、やや楕円形のものが主体となるが、柱４のみは明瞭な楕円形である。現存長で31cm（柱２・４）～44cm（柱１）×22cm（柱２・５）～43cm（柱１）となる。柱４以外の深さは、20cm（柱３・５）あるいは30cm（柱１・２）になる。柱１～３には柱痕跡がある。出土遺物は瓦片１点のみである。

【17号建物】（図33・34、図版22・23）

Ａ～Ｃ－15・16区で検出した。方位はＮ－26°－Ｗである。21号建物（Ⅱｂ期）より古い。柱間寸法は５尺であり、半間の位置にも柱がある（柱４）。６基の柱穴が検出された。ほとんどが撹乱により破壊されているため不明瞭ではあるが、柱掘り方形状は、円形あるいは楕円形に近い形となる。残存部分の長軸は43cm（柱５）～52cm（柱４）となり､それぞれの柱の掘り方はやや大きめである。柱３には柱痕跡がある。礫を伴う柱もあるが、礫の大きさと位置から、礎板のような機能は無いものと考えられる。また、傾きや柱間寸法がやや異なるが、隣接する14号建物との関係も考えられる。出土遺物は無い。

【18号建物】（図33・34、図版23）

Ｃ～Ｅ－16区で検出した。方位はＮ－24°－Ｗである。15号溝（Ⅱｂ期）より古い。柱間寸法は６尺３寸で、１×２間となる。５基の柱穴が検出された。柱掘り方形状は、円形あるいは楕円形となる。柱２・４は規模が大きく、それぞれ現存長で58・66cm、深さは49・52cmとなる。残りの柱は、31cm（柱１・３）～35cm（柱５）×22cm（柱３）～33cm（柱５）、深さは11cm（柱３）～14cm（柱１・５）となり、ほぼ同規模である。また、柱１・２には柱痕跡がある。さらに柱２では、礫が検出されている。出土遺物は無い。

【１号井戸】（図30・31、図版23）

Ｄ－１・２区で検出した。平面形は円形である。確認面での直径は約1.3mである。隣接する２号井戸（Ⅰ期）より新しい。確認面から90cmほど掘り下げたところで井戸枠（桶）を検出した。この井戸枠の直径は約90cmである。確認面から110cmの深さで掘り下げを止めた。この部分までの埋土は５層に分かれる。１～３層までは５～30cmの礫を多く含む。この礫の間から、点数は少ないが漆塗椀（図版90－14）や古銭（図119－９・図版96－10）などの多様な遺物が出土している。埋土３層からは17世紀中葉～後葉の磁器小中皿（図72－10）が出土し

ており、Ⅱａ期の時期内で埋没したものと考えられる。また小片であるが、絵志野も出土している（図80－39）。

【３号井戸】（図32、図版23・24）

Ｆ－10・11区で検出した。平面形は円形を呈し、確認面での直径は約1.4ｍである。確認面から 2.1ｍほどの深さで掘り下げを止めた。掘り下げた部分の埋土は５層に分かれる。石組み、井戸枠は検出されず素掘りの井戸であると判断される。出土遺物は陶器小中皿１点土師質土器皿１点など少量である。陶器は、志野の長石釉の丸皿（図80－40）で、17世紀初頭、あるいは 17世紀初頭から前葉頃のものである。

【３号遺構】（図30・31、図版24）

Ｂ－５区で検出した。削平が著しく、残存状態は良くない。西側が破壊されているが、本来の平面形は東西方向に長い長方形であった可能性が高い。確認面での南北方向の長さは約100㎝である。底面は平坦で壁は垂直に立ち上がる。遺物は出土していない。

【10号遺構】（図33、図版24）

Ｃ－13区で検出した。２号溝（Ⅱｅ期）より古い。西側の一部を撹乱されている。東西1.5m ×南北1.0m であり、長軸が東西方向の隅丸長方形を呈する。壁はやや内湾しながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。深さは 30㎝程度で、埋土の下層には炭化物がまとまっている部分がある。層上部を中心に礫が多く混入しており、北東側には拳大から人頭大の川原石が混入する。出土遺物はそれほど多くはないが、さや鉢と考えられるものが出土している（図80－41）。口縁部内面には敲打痕がみられ、口縁部と底部には炭化物が観察されることから、さや鉢を火入や灰吹などに転用したものと考えられる。他には棒状鉄製品（図118－22）などが出土している。

【22号遺構】（図33、図版24）

Ｇ－11・12区で検出された。西半分は撹乱によって壊されているが、南側は調査区外に広がる。確認面からの深さは約40㎝で、埋土は３層に分かれる。底面はほぼ平坦である。遺物は出土していない。

【31号遺構】（図30・31、図版25）

Ｄ－７区で検出された。平面形は南北方向に長い長方形に近い。南側の３分の１ほどを撹乱されている。確認面での幅は約120㎝、長さは約230㎝、深さは約80㎝で、底面はほぼ平坦である。壁は垂直に近い立ち上がりを見せる。埋土は８層に分かれるが、上部の１～４層は下部の埋土に比べると粒度が粗くやや砂っぽい。出土遺物には瓦13点（660g）、土師質土器皿６点等がある。

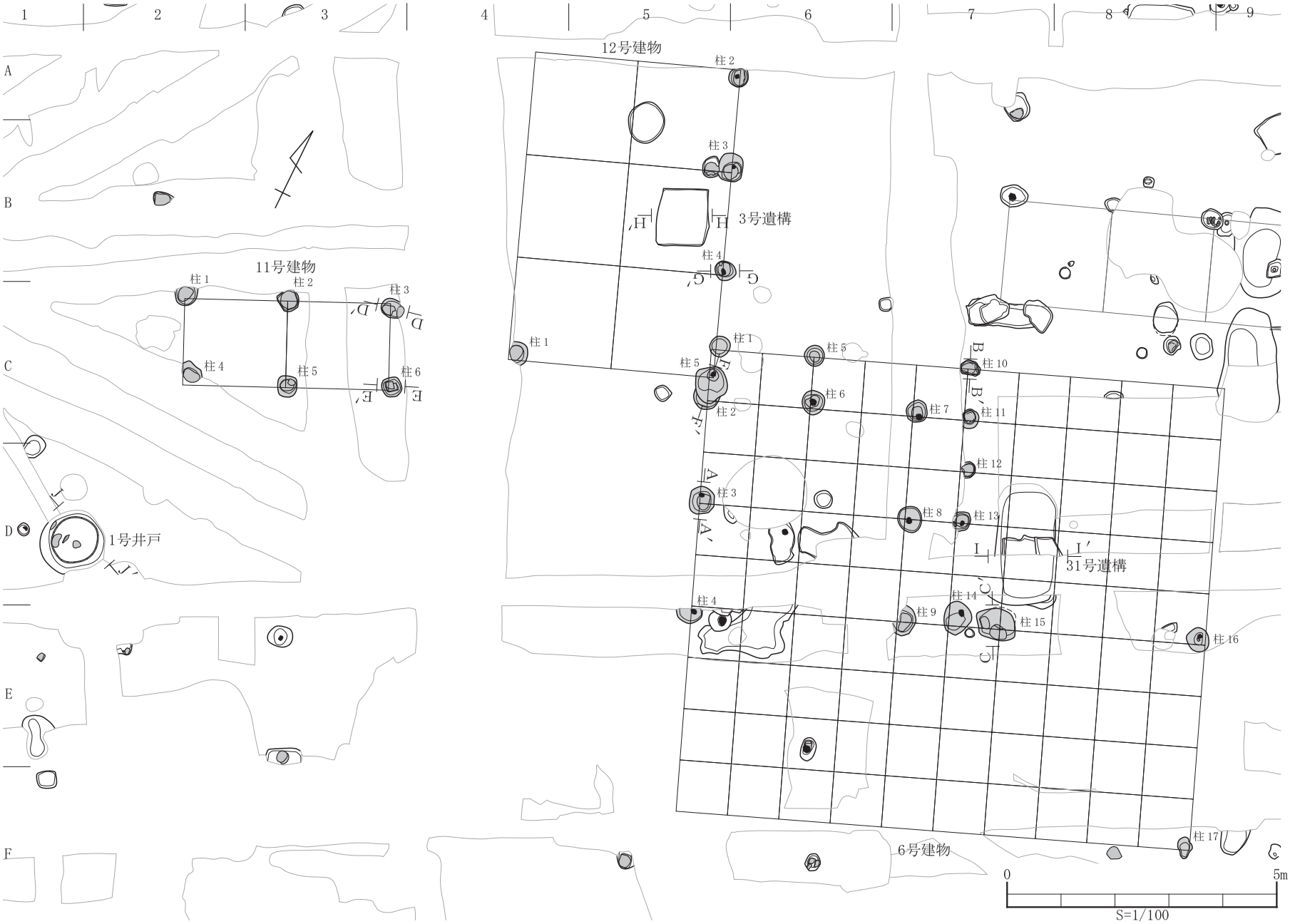
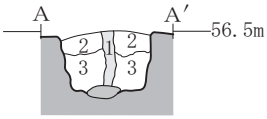


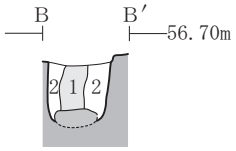
図30　武家屋敷地区第11地点Ⅱａ期の遺構（1）
Fig.30　Features belonging to phase IIa at BK11 (1)

6号建物　柱3



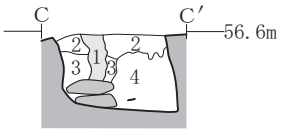
1　7.5YR3/1黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　径3～5cmの黄褐色粘土のブロックを層下部に多く含む
2　7.5YR3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性弱・しまりやや弱　径5mm～5cmの明黄褐色粘土のブロックを多く含む　層左側に褐色粘土質シルトのブロックを含む　径1～3mmの炭化物を僅かに含む
3　10YR6/8明黄褐色　粘土　粘性やや強・しまり弱　褐色粘土質シルト中のブロックを多く含む

6号建物　柱10



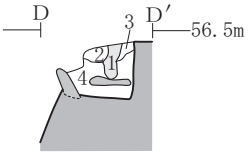
1　10YR2/3黒褐色　粘土質シルト　粘性やや弱・しまり中　径5mm程の炭化物を少量含む
2　10YR3/1黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　にぶい黄色　粘土質シルトのブロックを含む

6号建物　柱15



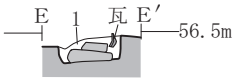
1　5YR4/1褐灰色　シルト質粘土　粘性やや強・しまり中　径1～3cmの炭化物を少量含む
2　7.5YR4/1褐灰色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　径1cmほどの炭化物を僅かに含む
3　5Y7/4浅黄色　粘土　粘性強・しまり中　黒褐色粘土質シルトをまだらに含む
4　10YR8/6黄橙色　粘土　粘性強・しまり弱　黒褐色粘土質シルトを斑に含む

11号建物　柱3



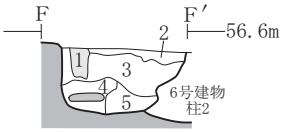
1　5YR3/1黒褐色　シルト　粘性やや弱・しまり弱　炭化物粒を僅かに含む
2　5Y7/2灰白色　粘土　粘性やや強・しまりやや弱　径3～5mmの白色土粒を多く含む 径4cmほどの黒褐色粘土質シルトのブロックを含む
3　10YR3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　径5cmほどの礫を含む
4　10YR2/2黒褐色　シルト　粘性やや強・しまり弱　1層に類似した灰白色粘土ブロックを多く含む

11号建物　柱6



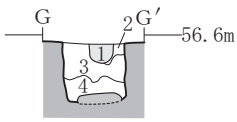
1　7.5YR5/1褐灰色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　径5～10mmの炭化物を僅かに含む

12号建物　柱5



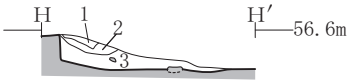
1　2.5Y4/1黄灰色　シルト質粘土　粘性やや強・しまりやや弱　径2～5mmの黄橙色粒を少量含む
2　10YR5/4にぶい黄褐色　シルト　粘性弱・しまりやや弱　径5～8cmのにぶい黄色粘土質シルトのブロックを多く含む
3　2.5Y7/4浅黄色　シルト質粘土　粘性中・しまりやや強　径1～5cmの黒褐色粘土質シルトのブロックを多く含む
4　10YR6/6明黄褐色　粘土　粘性やや強・しまりやや弱　径1～2cmの褐色粘土質シルトのブロックを多く含む
5　7.5YR7/6橙色　粘土　粘性やや強・しまりやや弱　褐色粘土質シルトを斑に含む

12号建物　柱4



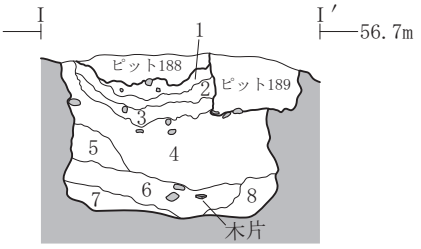
1　7.5YR4/1褐灰色　粘土質シルト　粘性中・しまりやや弱　橙色粘土をラミナ状に含む
2　10YR7/6明黄褐色　粘土　粘性中・しまり中層上部に褐灰色粘土質シルトを含む
3　10YR3/3暗褐色　シルト　粘性やや弱・しまり中径3～6cmの黄褐色粘土のブロックを多量に含む
4　2.5Y4/2暗灰黄色　シルト質粘土　粘性やや強・しまりやや強　径3～8cmの明黄褐色粘土のブロックを多量に含む

3号遺構



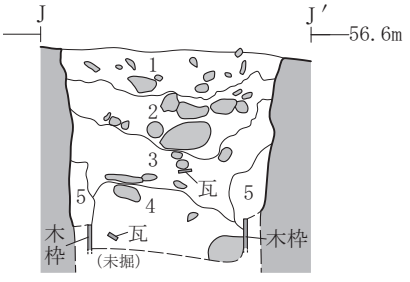
1　7.5YR3/3暗褐色　シルト　粘性やや弱・しまりやや弱　径3～5mmの鉄分を僅かに含む
2　10YR4/6褐色　シルト　粘性中・しまり中　層左側に暗褐色粘土質シルトを含む
3　7.5YR3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　径3～5cmの礫を含む　地山由来の黄褐色粘土の小ブロックを少量含む

31号遺構



1　2.5Y6/2灰黄色　砂　粘性弱・しまり強　明黄褐色砂質シルトを少量斑に含み、白色土粒を僅かに含む
2　10YR5/6黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　灰黄褐色砂質シルトと黒褐色砂質シルトが少量斑に混じる
3　10YR5/2灰黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　黄褐色砂質シルトが中量斑に混じり、黄色砂質シルトを部分的に含む　白色土粒を僅かに含む
4　2.5Y5/1黄灰色　砂　粘性なし・しまり強　黒褐色シルトと灰黄褐色シルトをラミナ状に含む　径1～3cmの炭化物を含み、一部ラミナ状に堆積する
5　10YR6/にぶい黄橙色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　明黄褐色粘土質シルトと黒褐色粘土質シルト、暗灰黄色砂を少量斑に含む
6　2.5Y3/3暗オリーブ褐色　砂　粘性なし・しまり強　黒褐色粘土、暗灰黄色粘土質シルト、褐色砂をラミナ状に含む
7　10YR6/8明黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　灰黄褐色粘土質シルトと黄褐色粘土質シルトをラミナ状に含む
8　7.5YR3/4暗褐色　シルト質粘土　粘性中・しまり強　黄褐色粘土、褐灰色粘土、黒褐色粘土質シルトをラミナ状に含む

1号井戸



1　10YR4/3にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　5～15cm大の礫を多く、径3～5mmほどの炭化物を斑に含む　瓦片を少量含む
2　10YR3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　径5mmほどの炭化物と2～30cm大の礫を多く含む
3　2.5Y4/3オリーブ褐色　シルト質粘土　粘性強・しまり弱　5～15cm大の礫を含む
4　5Y4/2灰オリーブ色　粘土　粘性強・しまり弱　5～10cm大の礫を含む　瓦片を少量含む
5　5Y2/2オリーブ黒色　粘土　粘性強・しまり弱　2～5cm大の礫を少量含む

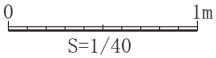


図31　武家屋敷地区第11地点Ⅱａ期の遺構（２）
Fig.31　Features belonging to phase IIa at BK11 (2)

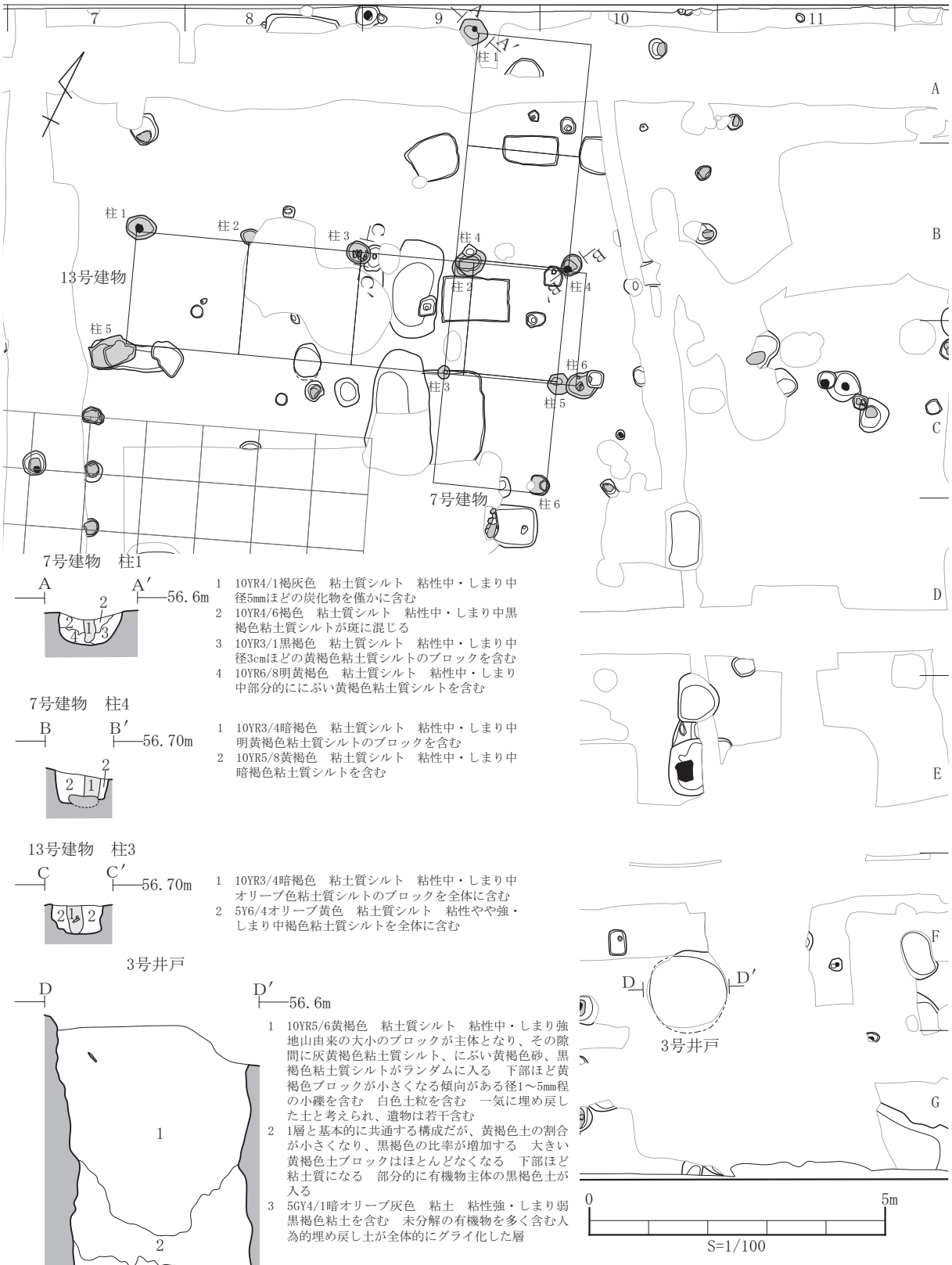
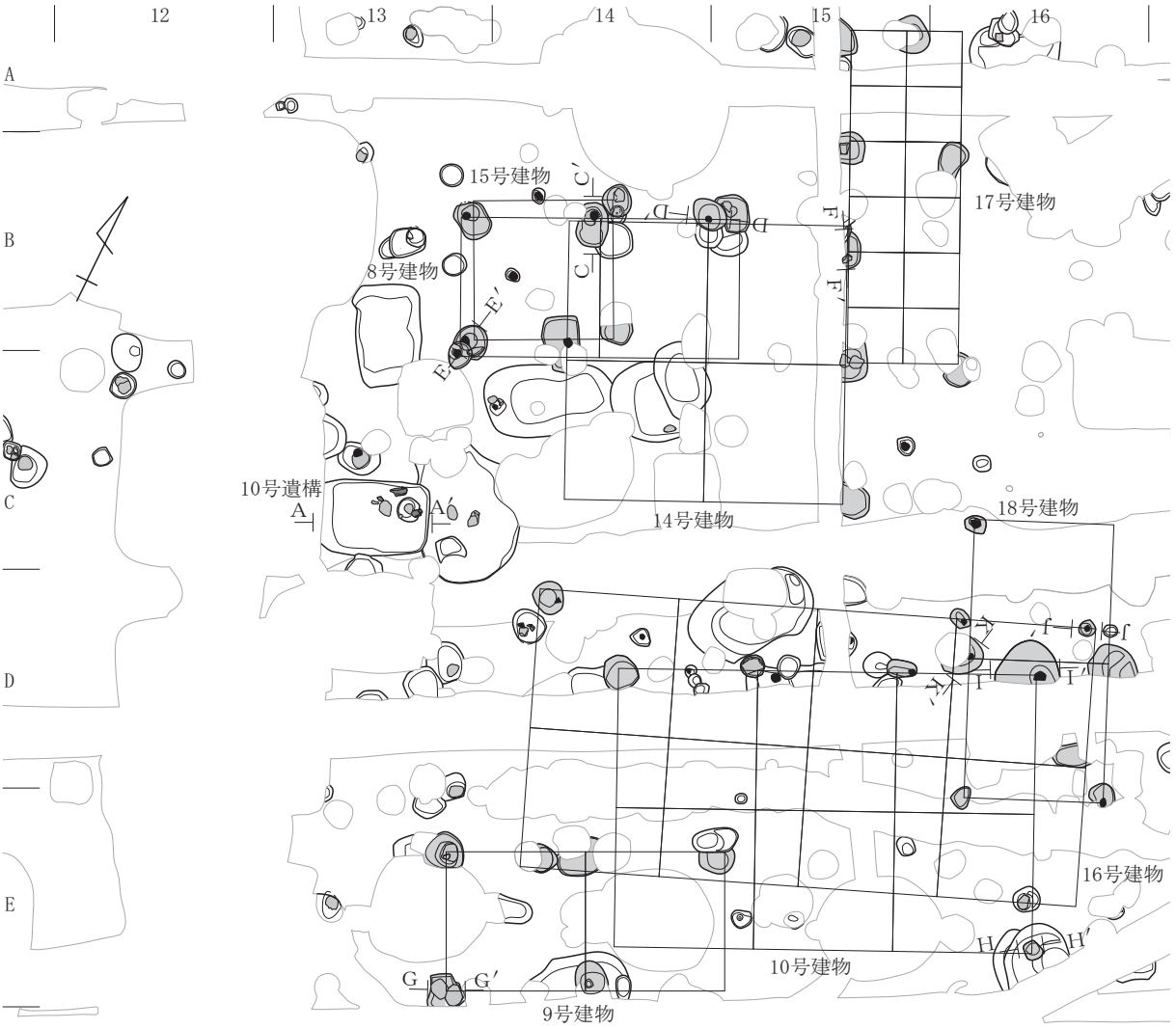
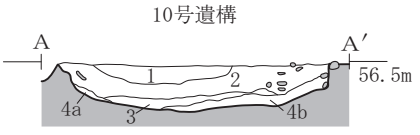
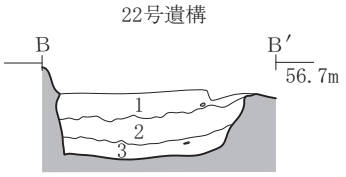


図32　武家屋敷地区第11地点Ⅱａ期の遺構（３）
Fig.32　Features belonging to phase IIa at BK11 (3)





1 10YR3/3暗褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　褐色シルトが少量斑に混じり、径1cmほどの炭化物を僅かに含む
2 10YR2/2黒褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　黄褐色粘土が中量斑に混じり、径1cmほどの炭化物を僅かに含む
3 10YR2/3黒褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　褐色粘土質シルトが少量斑に混じり、層上部に炭化物のまとまりがみられる
4a 10YR2/3黒褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　明黄褐色粘土が斑に混じる
4b 10YR2/3黒褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　明黄褐色粘土が斑に混じり、層上部に黄褐色粘土質シルト、層下部に明黄褐色粘土の塊が見られる



1 10YR3/4暗褐色　粘土質シルト　粘性やや弱・しまりやや弱　径3㎜～5㎝の黄褐色粘土質シルトのブロックと3～5㎜の炭化物を多く含む
2 10YR3/3暗褐色　粘土質シルト　粘性中・しまりやや弱径5～10㎝の黄褐色粘土のブロックを多く、径2～5㎜の炭化物を少量含む
3 2.5Y4/1黄灰色　粘土　粘性強・しまり弱　橙色粘土をラミナ状に含む　3～4㎝大の礫を少量含む

0
1m
S=1/40

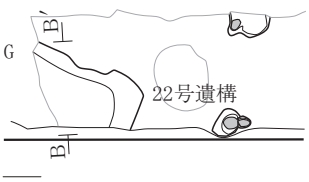
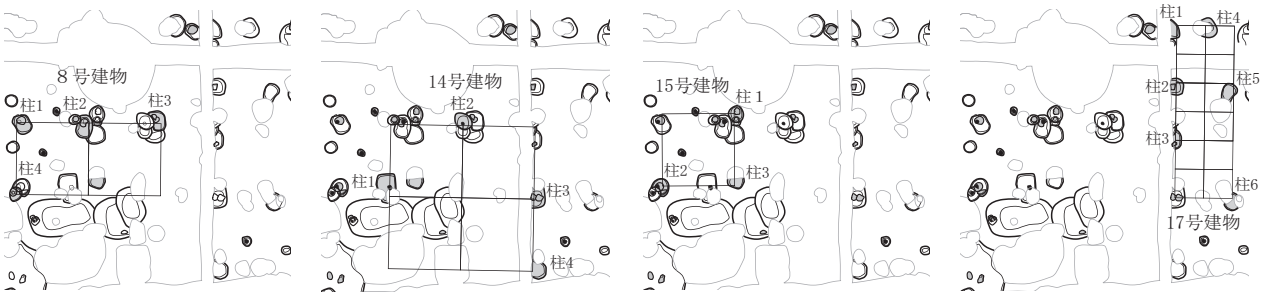
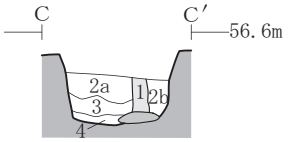


図33　武家屋敷地区第11地点Ⅱａ期の遺構（４）
Fig.33　Features belonging to phase IIa at BK11 (4)

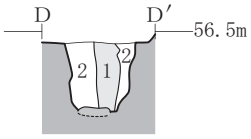


8号建物　柱2



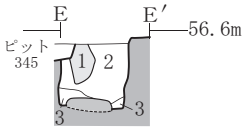
1 10YR4/4褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　明黄褐色シルトと黒褐色粘土質シルトをまばらに含む
2a 10YR5/6黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　暗褐色粘土質シルトが少量斑に混じる
2b 10YR3/3暗褐色　シルト　粘性中・しまり強　径3～5cmほどの明黄褐色粘土質シルトのブロックを少量含む
3 10YR3/2黒褐色　シルト　粘性中・しまりやや強　褐色粘土を中量斑に含む
4 10YR4/4褐色　粘土　粘性やや強・しまり強　黄褐色粘土が中量斑に混じる

14号建物　柱2



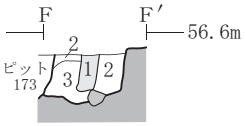
1 10YR5/6黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや強　黒褐色粘土質シルトを中量斑に含む
2 10YR3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　褐色粘土質シルト、にぶい黄褐色シルトを少量斑に含む

15号建物　柱2

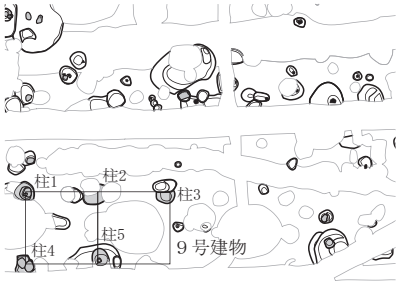


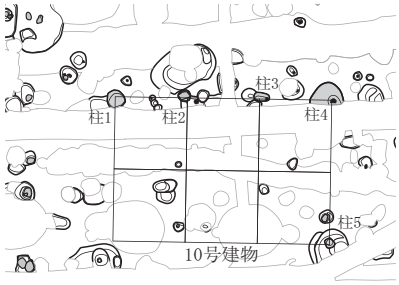
1 10YR4/4褐色　シルト　粘性中・しまり強褐灰色粘土、にぶい黄褐色シルトを少量斑に含む
2 10YR5/6黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　暗褐色シルト粘性中しまり強を少量斑に含む
3 10YR3/2黒褐色　粘土　粘性やや強・しまり強

17号建物　柱3



1 10YR3/2黒褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　明黄褐色砂が少量斑に混じり、白色土粒を僅かに含む
2 10YR4/4褐色　砂　粘性弱・しまり強　暗褐色砂が少量斑に混じり、白色土粒を少量含む
3 10YR5/6黄褐色　シルト　粘性中・しまり強暗褐色砂が少量斑に混じり、白色土粒を少量含む

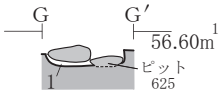




10号建物　柱4

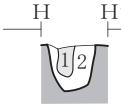
1 10YR3/4暗褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　明黄褐色シルトが中量斑に混じり小礫を少量含む
2 10YR6/8明黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　黄褐色粘土質シルトと暗褐色粘土質シルトを少量斑に含む
3 10YR5/6黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　径1cmほどの黒褐色粘土質シルトのブロックを少量含む
4 10YR6/4にぶい黄橙色　シルト質粘土　粘性やや強・しまりやや強　暗褐色粘土質シルトを部分的に、黄褐色粘土を少量、褐色粘土質シルトを少量斑に含む

9号建物　柱4

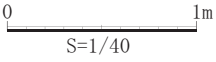


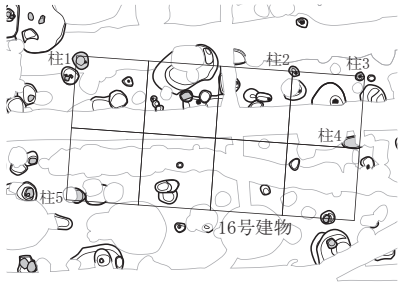
注記なし

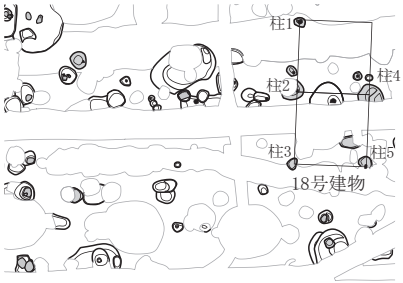
10号建物　柱5



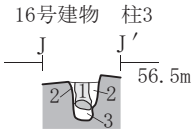
1 10YR3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり弱　径2～4mmの炭化物を僅かに含む
2 10YR4/6褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり弱　径3～5mmの炭化物を中量含む





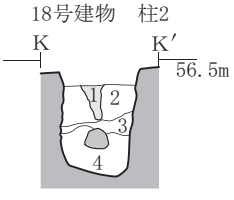


16号建物　柱3



1 10YR5/4にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり強　明黄褐色シルトを径1～2mmほどの粒で少量含み、小礫が僅かに混じる
2 10YR4/2灰黄褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり強黄褐色シルトを少量部分的に含み、径2mmほどの炭化物を僅かに含む
3 10YR3/3暗褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや強　明黄褐色粘土質シルトが径1～2mmほどの粒で少量混じる

18号建物　柱2



1 注記なし
2 10YR4/6褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり強黒褐色砂質シルトを中量斑に含む
3 10YR4/6褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり強褐色シルトを少量斑に含む
4 10YR2/1黒色　砂質シルト　粘性やや弱・しまりやや弱にぶい黄褐色粘土質シルトが中量斑に混じり、黄褐色粘土質シルトを大きな塊で含む

図34　武家屋敷地区第11地点Ⅱａ期の遺構（５）
Fig.34　Features belonging to phase IIa at BK11 (5)

③Ⅱｂ期の遺構（図35）

前時期に建物が存在していた西側は、遺構が少なくなる。特に北西側の区域には、３号柱列などが見られる以外には、遺構はほとんど見られない。その他の場所では、軸角度Ｎ－26°－Ｗが主体となる建物と遺構群が展開する。最も遺構が多い時期である。また、やや大形の建物が各地点に存在する。北側では大形の 21・23・25号建物が存在し、調査区外北側へと伸びることが推定できる。東側中央部では建物がかなり重複しており、15号溝→26号建物→24・29・31号建物という順序が認められる。また、25号遺構などの大形の遺構が南東隅を中心に存在する。15号遺構、20号遺構、25号遺構からやや多くの陶磁器が出土しており、それらの年代と、前後の時期との関係から、18世紀初頭から後葉と大きくまとめた。

【19号建物】（図36、図版25）

Ｇ～Ｉ－１～５区で検出した。方向はＮ－26°－Ｗである。柱間寸法は基本的に６尺３寸であるが、その半間も用いられ６×2.5間となる。調査区外の、南・西方に延びる可能性は残っている。沢状遺構が完全に埋没した後に構築されている。10基の柱穴が検出された。柱１～３の掘り方は撹乱を受けており、その正確な形状は不明だが、深さは 25cm（柱１）～ 35cm（柱２）でありまとまっている。柱８は礫のみである。柱４・５の掘り方形状は長方形を呈し、規模はそれぞれ 63・53cm×45・40cm、深さは８・12cmであり、比較的浅い。柱６・７・９・10 の掘り方形状は、ほぼ円形である。その中の柱７・10 の規模は、それぞれ径85・69cm、深さ 51・19cmとなり、他の柱より大きい。柱７には柱痕跡が残り、その最下面では、斜めに落ち込んだ礫が検出されている。柱３・９の掘り方底面には礫を配置する。また、柱４の底面には小さいピット状の落ち込みが認められる。出土遺物は瓦片１点のみである。

【20号建物】（図42、図版25）

Ｅ～Ｇ－８区で検出した。方向はＮ－26°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸であり、１×４間となる。４基の柱穴が検出された。柱１・２の径は 40cm程で、ほぼ同規模であるが、その深さはそれぞれ６・31cmと差がある。柱２では底面に川原石を敷き、その上にやや角張った礫を重ねている。埋土１・２層は柱痕跡に相当するものと考えられる。柱３は楕円形で、平面規模37×24cm、深さは 36cmである。柱４の半分は撹乱により不明瞭ではあるが、柱掘り方形状はおおむね円形あるいは楕円形を呈する。柱４は、深さ８cmと極浅い。出土遺物は無い。

【21号建物】（図40・41、図版26）

Ａ－13 ～ 15区で検出した。方向はＮ－26°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸で３間である。17号建物（Ⅱａ期）より新しく、同時期の 25号建物より古い。柱配置などが 25号建物と類似すること、柱間寸法が建物に一般的な６尺３寸であることから、北側に伸びる可能性があると判断し、建物として扱った。４基の柱穴が検出された。重複が著しいため柱掘り方形状などは判然としないが、円形あるいは楕円形を呈する可能性が高い。深さは７cm（柱１）～ 36cm（柱３）となり、ばらつきが大きい。柱１のみに柱痕跡を伴う。出土遺物は柱１からの不明鉄製品１点のみである。

【22号建物】（図37・39、図版26）

Ｃ～Ｅ－９・10区で検出した。方向はＮ－26°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸で、１×２間となる。本建物の西・南側の撹乱が著しい。４基の柱穴を検出した。柱掘り方形状は、円形あるいは楕円形を呈する。平面規模は、40cm（柱４）～ 53cm（柱３）×38cm（柱４）～ 47cm（柱３）とまとまるが、深さは 23cm（柱１）～ 57cm（柱４）とややばらつきが認められる。柱３と柱４には柱痕跡を伴う。この柱３・４の底面には大きめの礫を１点置く。柱２は底面に礫を２点重ねる。柱１では１点の礫がやや南側に置かれている。出土遺物は無い。

【23号建物】（図40・41、図版27）

Ａ～Ｃ－10 ～ 12区で検出した。方向はＮ－26°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸で、３×３間となる。北側へ伸びる可能性が高い。８基の柱穴が検出された。柱１・８は撹乱などにより不明な点が多いため判然としないが、

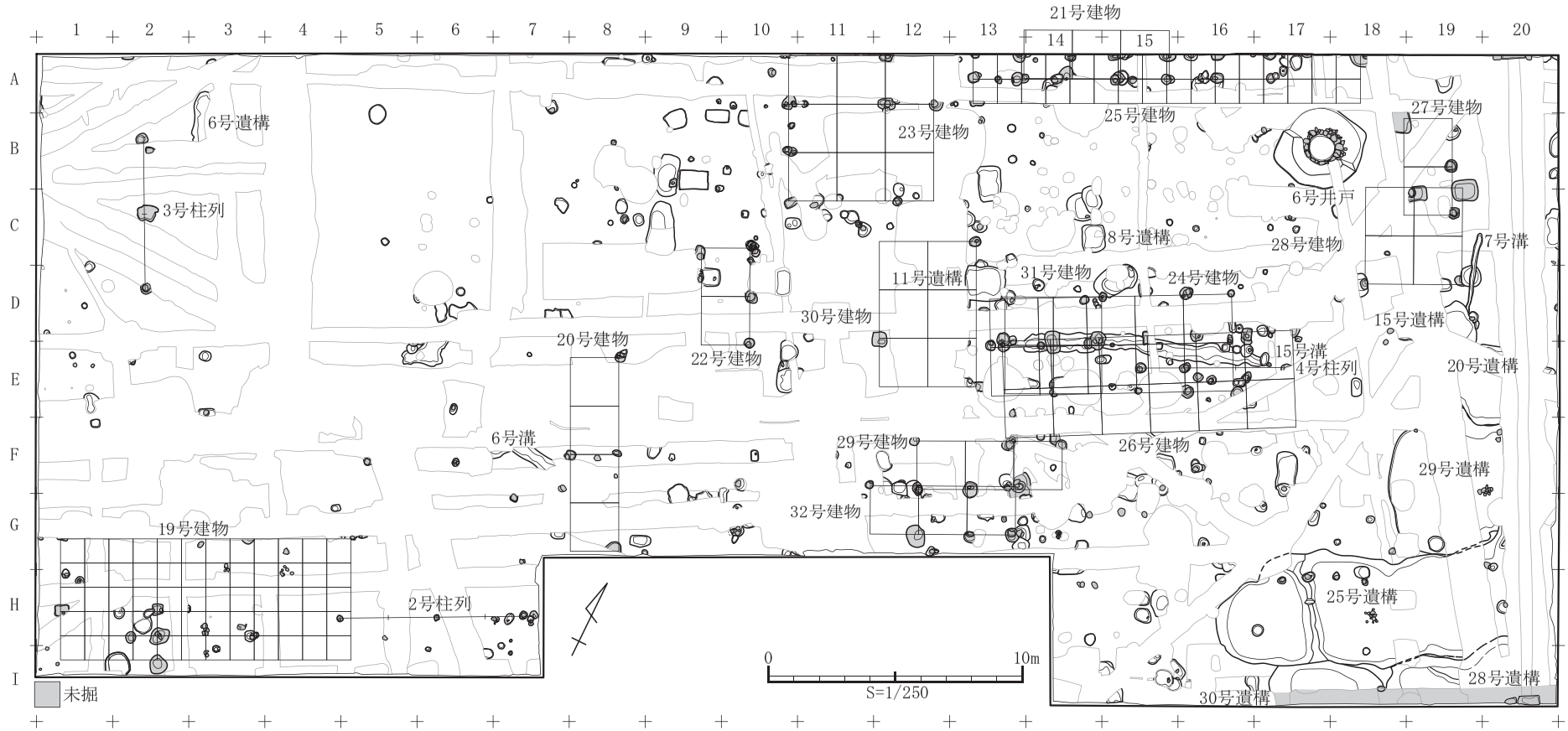


図35　武家屋敷地区第11地点Ⅱb期遺構配置図
Fig.35　Distribution of futures belonging to phase IIb at BK11

柱の掘り方形状は、円形あるいは楕円形を呈する。柱６の掘り方の規模は径33cm、深さ23cmであるが、その他の柱は51cm（柱２）～68cm（柱４）×26cm（柱２）～40cm（柱３）となり、やや大きい。柱２と柱４の深さは、それぞれ35・51cmとやや深いが、それ以外の柱の深さは、14cm（柱５）～23cm（柱６）と浅い。また、柱１・８以外では、柱痕跡や底面に礫などを伴う。柱３・５・７では柱痕跡が残る。また、柱２・４・５・６では掘り方底面にやや大きめの礫を敷く。柱３の埋土に小形の礫が３点存在するが、礎板的役割は考えづらい。出土遺物は陶器２点のみである。

【24号建物】（図37・38、図版27）

Ｄ・Ｅ－13～16区で検出した。方向はＮ－27.5°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸で、５×２間となるやや大形の建物である。18号建物（Ⅱａ期）、26号建物（Ⅱｂ期）より新しい。10基の柱穴が検出された。柱掘り方形状は、円形（柱１～５・８～10）と、楕円形（柱６・７）がある。柱３・５・８の規模は、径27cm（柱３）～30cm（柱８）、深さ５cm（柱８）～９cm（柱３）となり、小形で浅い。残りの柱の長軸・径は、38cm（柱１・７）～54cm（柱２）、深さ12cm（柱１）～53cm（柱10）となり、柱３・５・８に比べやや大きい。柱痕跡は、柱１～３で検出された。また、平面では確認できなかったが、断面の検討により柱10でも柱痕跡を確認した。柱２・８～10では掘り方下面に礫を配置する。柱２では大形の礫を底面に置き、その上にさらに礫を重ねている。柱痕跡はちょうどその上にあたる。柱８～10では底面付近にやや大形の礫を敷く。遺物は磁器と陶器、瓦が出土している。柱９から出土した青磁香炉を図化した（図75－40）。筒形の形態で平底に三足を有するもので、青磁釉の色調などから波佐見の製品とみられる。

【25号建物】（図40・41、図版28）

Ａ－13～18区で検出した。方向はＮ－26°－Ｗである。21号建物より新しい。柱間寸法は、６尺３寸と半間の組み合わせで８×１間となる。東西に長い建物であるが、北側に伸びる可能性が高い。18基の柱穴が検出された。柱掘り方形状は、楕円形を呈する。調査区外へと伸びる柱１～９と、撹乱によりそのほとんどが破壊されている柱17･18以外の柱の掘り方形状は、円形あるいは楕円形を呈する。規模は、39cm（柱16）～61cm（柱12）×27cm（柱16）～43cm（柱11）、深さは11cm（柱16）～52cm（柱12）となる。それに比べ、北側の柱１～９の深さは、35cm（柱９）～80cm（柱６）とかなり深い。撹乱などで破壊されるものが多いため明確ではないが、大体の柱では柱痕跡や礎板の礫を伴う。柱３～６・10～13では柱痕跡（柱３・４・６・12は断面のみ）、柱２～５、13・15では礫を伴う。出土遺物は柱９から磁器・陶器、瓦質土器破片などが出土している。

【26号建物】（図37・38、図版28・29）

Ｄ～Ｆ－13～17区で検出された。方向はＮ－29°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸で、６×２間となるやや大形の建物である。15号溝（Ⅱｂ期）より新しく、24・29・31号建物（Ⅱｂ期）より古い。12基の柱穴が確認された。柱２・４・６の掘り方形状は、南北を長軸方向とした長方形を呈する。撹乱により不明瞭ではあるが、残存部位からすると、柱12も同様の形状となることが推測される。その他の柱の掘り方形状は、円形あるいは楕円形になる。長方形で残りの良い柱掘り方の規模は、柱２が87×53cm、深さ７cm、柱６が64×39cm、深さ16cmであり、平面規模に比べ浅い。平面規模は不明であるが、柱４・12の深さも15・30cmと比較的浅い。円形あるいは楕円形の柱は、39cm（柱９）～71cm（柱３）×19cm（柱８）～57cm（柱３）とばらつきが大きい。この中では、東西方向に長方形の柱と並ぶ楕円形の柱（柱１・３・５･11: 柱７は不明）の規模が大きい。柱痕跡は、柱１～３・５・６で認められた。柱５・６は断面のみである。柱１・３・５・６・10・15では礫を伴う。ただし柱５の礫は円礫で小さいため、礎板としての役割は想定しづらい。柱４・６以外の柱跡からは陶磁器などの遺物が出土しているが、詳細が判明するような遺物は無い。

【27号建物】（図43・44、図版29）

Ｂ・Ｃ－18・19区で検出された。方向はＮ－26°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸であり、１×２間となる小

形の建物である。３基の柱穴が検出された。柱１は、残存部からすると規模は大きいようであるが、撹乱のため形状は判然としない。深さは10cmと浅い。柱２・３は円形で、それぞれ径は50・45cm、深さは15・16cmである。その柱２には柱痕跡が残る。さらに柱２では、掘り方とほぼ同規模の大形の礫を底面に置く。柱３では中央に大型の礫を置き、その周囲に単軸方向を垂直に立てた楕円形の礫を設置する。また、柱１から磁器・陶器破片それぞれ１点と、土師質の人形破片が１点出土している。

【28号建物】（図43・44、図版29）

Ｂ～Ｄ－18・19区で検出された。方向はＮ－26°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸であり、２×２間の小形の建物となる。４基の柱穴が検出された。柱２の掘り方形状は長方形である。撹乱により破壊されているが、柱１も同様の形状であるものと推測される。柱３・４は楕円形を呈する。柱２の掘り方の規模は103×82cm、深さ70cmとなり、かなり大規模である。柱１も、残存部位の形状と深さ（74cm）から、柱２と同規模になることが推測される。柱３・４はそれぞれ長軸43・44cm、短軸28・24cm、深さ24・34cmであり、ほぼ同規模である。柱２・３から柱痕跡が検出されている。また、柱１と２から陶磁器などが出土しているが、詳細が判明する遺物は無い。

【29号建物】（図37・38、図版29・30）

Ｆ－12～14区で検出された。方向はＮ－26°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸であり、３×１間となる。同時期の26・32号建物より新しい。４基の柱穴が検出された。柱掘り方形状は、円形あるいは楕円形を呈する。その規模は39cm（柱１）～53cm（柱４）×32cm（柱１）～39cm（柱４）と差はほぼ無い。しかし、柱１～４の深さは、それぞれ23・22・51・11cmとばらつきが大きい。最も浅い柱４は、ほぼ礫のみが検出されているだけで、その上部は削平されたものと考えられる。柱２では、柱痕跡が検出されている。柱３から陶磁器破片などが出土している。

【30号建物】（図37・39、図版30）

Ｃ～Ｅ－12・13区で検出された。方向はＮ－26°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸であり、２×３間となる。３基の柱穴が検出された。柱１の掘り方形状は、ほぼ方形であり、その規模は70×55cm、深さ17cmである。柱２の掘り方形状は楕円形で、規模は46×37cm、深さ21cmとなる。柱３は、撹乱のため正確な形状は不明であるが、残存部からは柱２と近い形状が想定できる。柱１・２では柱痕跡を伴う。礎板状の礫は認められない。柱２では、ちょうど柱痕跡があたる底面部分がくぼんでいる。柱１から陶器３点、瓦２点のみが出土している。

【31号建物】（図37・38、図版30）

Ｄ・Ｅ－13・14区で検出された。方向はＮ－26°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸であり、２×２間の小形の建物である。同時期の26号建物より新しく、35号建物（Ⅱｃ期）より古い。３基の柱穴が検出された。柱掘り方形状は、円形あるいは楕円形を呈する。柱１・３の規模は、それぞれ径35・32cm、深さ９・12cm程度であるが、柱２は18×16cm、深さ24cmと小形で深い。柱２・３では柱痕跡が残るが、柱３は断面のみでの検出である。柱１では礫１点を底面に配置する。出土遺物は、柱１・３から陶器と磁器破片が、それぞれ１点のみ出土している。

【32号建物】（図37・38、図版31）

Ｆ・Ｇ－11～14区で検出された。方向はＮ－26°－Ｗである。29号建物より古い。柱間寸法は６尺３寸であり、３×１間となる。７基の柱穴が検出された。柱掘り方形状は、円形あるいは楕円形を呈する。柱４・５の掘り方は楕円形で、それぞれ108・90cm×78・71cmと規模が大きい。柱１はほぼ円形で、径35cm、深さ５cmと小さいが、撹乱の底面で検出されているため、削平によるものと考えられる。その他の柱は楕円形で、44cm（柱６）～61cm（柱３）×38cm（柱２）～60cm（柱３）、深さ15cm（柱７）～54cm（柱６）となる。とくに深さの面でばらつきが大きい。柱１と同様に、撹乱の影響があるものと考えられる。柱１・３では柱痕跡が残る。柱１の柱痕跡はやや北側にずれる。また、30号建物柱２のように柱痕跡と接触する底面部分がくぼんでいる。柱３・４・６・７では底面に礫を伴う。柱３では底面にやや大きめの礫を敷き、その上に小さな礫を置く。柱痕跡は、ちょうどその上に

あたる。柱６でも２段に礫を積んでいるが、１段目の上に柱痕跡が当たっているため、２段目の礫には柱側方を支える役割が想定できる。柱７では、やや角張った礫１点のみが置かれている。柱４は、掘り方底面と側面から礫が検出されている。この柱４の掘り方は浅く広く広がり、柱痕跡も無いことから、この礫は柱が抜き取られた際に動いたものである可能性も考えられる。陶器や土師質土器皿などが少量出土している。柱７より出土した寛永通寶（新）を１点のみ図示した（図119－７）。

【２号柱列】（図36、図版31）

Ｈ－４～７区で検出した。方向はＮ－63.5°－Ｅである。柱間寸法は６尺３寸の倍となっており、６尺３寸を基本に、２間分ごとに柱穴が検出されている。柱間寸法が建物に一般的な６尺３寸を基本としていることから、建物になる可能性も残っている。Ⅰ期の沢状・７号遺構より新しい。３基の柱穴が検出された。柱掘り方の規模は、径24㎝（柱１）～33㎝（柱３）、深さ14（柱２）～40㎝（柱３）となる。柱３の規模がやや大きい。また、その柱３は検出時より柱部分が空洞の状態であった（図36）。その柱部下の底面は一段くぼむ。柱１・２では柱痕跡が確認された。出土遺物は無い。

【３号柱列】（図42、図版32）

Ｂ～Ｄ－２区で検出した。方向はＮ－26.5°－Ｗである。柱間寸法は10尺であり、２間分確認できた。沢状遺構（Ⅰ期）より新しい。３基の柱穴が検出された。柱掘り方形状は、円形あるいは不正円形を呈する。柱１・２は、上面の削平が著しく、深さはどちらも10㎝程度で遺存状況は良くない。柱３の掘り方は、径47㎝、深さ54㎝である。この柱３では､底面から大きめの礫３点を縦に重ねている（図42）。柱痕跡は確認されていない。また、出土遺物も無い。

【４号柱列】（図37・38、図版32）

Ｅ－15～17区で検出した。方向はＮ－64°－Ｅである。柱間寸法は６尺３寸で３間分確認できている。３基の柱穴が検出された。柱３は撹乱により詳細は不明であるが、他の柱の状況から推測すると、円形で径40㎝程度になるものと想定できる。柱１～３の深さは、それぞれ34・18・28㎝と比較的深い。柱痕跡は、いずれの柱穴にも確認されていないが、柱１・２では底面に大きめの礫を設置する。出土遺物は無い。

【６号溝】（図36、図版32）

Ｆ－７区で検出された。大半を撹乱によって壊されているため延びる方向は不明瞭ではあるが、北西－南東方向から北東－南西方向へとクランク状に曲がっている可能性がある。残存状況の良い東側の方位はＮ－82.5°－Ｗである。確認面は沢状遺構の埋土であり、13号遺構（Ⅱｄ期）より古い。断面形は底面がほぼ平坦な台形である。確認面での幅は約50㎝、深さは約30㎝である。遺物は、陶磁器、土師質土器、石製品などが出土している。陶磁器は小片のため図示したものはないが、陶器では18世紀代のものが出土している。火打石１点、碁石２点を図示した（図120－5・10・11）。

【７号溝】（図43・44、図版33）

Ｃ・Ｄ－19区で検出した素掘りの溝である。同時期の15号遺構より古い。遺存状態は良くない。3.2m分を検出した。方位はＮ－16°－Ｗである。幅10㎝、深さ5㎝である。磁器・陶器・軟質施釉陶器破片が少量出土している。いずれも小片で年代などは判らない。

【15号溝】（図37・39、図版33）

Ｄ・Ｅ－13～17区で検出された東西方向に延びる溝である。方位はＮ－68°－Ｅである。全体に削平を受けており、遺存状況は悪い。18号建物（Ⅱａ期）より新しく、26号遺構（Ⅱｂ期）と37・39号遺構（Ⅱｃ期）より古い。検出された範囲外には広がっている様子はなく、全長は約10ｍである。確認面での幅は約70㎝で、深さは５㎝程度とごく浅くしかのこっていない。上面をＡ層が覆う。陶磁器、土師質土器、瓦質土器、瓦、古銭などの金属製品が出土している。陶磁器は18世紀代を主体とし、陶器の産地としては大堀相馬と京・信楽などが見ら

れる（図81－45 ～ 48）。

【６号井戸】（図40・41、図版33・34）

Ａ・Ｂ－17・18区で検出した。平面形は円形を呈する。掘り方の直径は3.7m程あり大形である。長軸を中心に向けた楕円形の礫で井戸枠を積み上げる。この井戸枠の内径は約１mである。しかし、確認面より１m下までは石積みが破壊されており、埋没土として考えられる１～８層の土層が堆積していた。井戸を廃棄する際に、上部の石積みを壊して、埋めたものと考えられる。９～ 11層は、石積みの裏込め土となる。石積みが残っていた深さから60cmほどは、石積み内部の堆積土を掘り下げたが、それ以上は危険なため中止した。確認面より1.6m程で掘り下げを止めたこととなる。出土遺物は比較的多く、陶磁器（図72・73－11 ～ 13、図80－42 ～ 44）、土師質土器、瓦質土器、漆塗製品、鉄製品が出土している。陶磁器の年代は18世紀が中心となるが、磁器の小型丸碗（図72－11）は、切込の可能性が考えられる資料で19世紀代の製品である。別の遺構埋土を認識できていなかったか、あるいは混入であろうと考えられる。

【６号遺構】（図42、図版34）

Ａ・Ｂ－３区で検出された。遺構の半分以上を撹乱によって壊されているため、本来の形状は不明であるが、南北方向に長い長方形であった可能性が考えられる。埋土は２層に分かれる。確認面からの深さは約20cmで、底面はやや凹凸がある。出土遺物には陶磁器、土師質土器、瓦があるが、量は多くはない。図示できたものは、18世紀の陶器灰吹のみである（図81－49）。

【８号遺構】（図37・39、図版34）

Ｃ－14・15区で検出した。南北110cm、東西90cmの隅丸長方形で、長軸が南北方向を向く。35・36号建物（Ⅱｃ期）より古い。壁は外傾して立ち上がり、底面はほぼ平坦である。深さは20cmで埋土は褐色土と黄褐色土の２層からなり、すり鉢状に堆積する。出土遺物は瓦12点（1,160g）のみである。

【11号遺構】（図37・39、図版34）

Ｄ－13区で検出した。遺構上部の大部分を２号溝（Ⅱｅ期）埋土が覆う。35号建物（Ⅱｃ期）より古い。西側の一部を撹乱によって破壊されている。東西160cm、南北110cmの不整な長方形である。南東側は、ほぼ90°屈曲して約40cm張り出す。別遺構の可能性も考えられたが、埋土中の黒褐色土が一連で堆積しているため、同一の遺構と判断した。壁は外傾して立ち上がり、底面の北側にはゆるやかな段差がある。深さは60cmである。、遺物は陶磁器（図73－14）、土師質土器（図89－17）、瓦、漆塗製品（図版90－15）、古銭（図119－12）が出土している。陶磁器には、17世紀前半の古い中国磁器が混じる（図73－14）。小型の碗で、梅花文が描かれ、「明末清初」の時期と考えられる。

【15号遺構】（図43・44、図版34・35）

Ｄ－19区で２層由来と考えられる堆積土を地山まで掘り下げた時点で検出した。同時期の７号溝より新しい。西と南を撹乱によって破壊されている。東西170cm以上、南北100cm以上であり、円形、もしくは楕円形と考えられるが、詳細は不明である。壁は外傾しながらゆるやかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。深さ50cmであり、すり鉢状に堆積した埋土の中程には、炭化物ブロックが比較的まとまる。残存していた規模は小さいが出土遺物が多く、Ａ層からの出土遺物も多い。陶磁器（図73－15 ～ 17、図81－50・51）、土師質土器（図90－18）、瓦質土器、軟質施釉陶器、瓦、漆塗製品、鉄製品、硯が出土している。出土した陶磁器は18世紀代が主体となる。陶器では大堀相馬と小野相馬が主体で、京・信楽のものが含まれる。

【20号遺構】（図43・44、図版35）

Ｅ・Ｆ－19・20区で２層掘り下げ時に他の遺構と重複して検出した。同時期の29号遺構より新しい。29号遺構との関係などからⅡｂ期として推定した。大半を撹乱によって破壊されている。南北180cm、東西110cm以上であり、円形、もしくは楕円形を呈すと考えられるが、詳細は不明である。壁は外傾しながら立ち上がり、底面は

ほぼ平坦である。深さ30㎝であり、埋土は、上層である１層のにぶい黄褐色土と、下層の２層以下のにぶい黄褐色～暗褐色土からなる。出土遺物が非常に多い。遺物の種類も多様で、陶磁器（図73・74－18 ～ 23、図81－52 ～ 56）、土師質土器（図90－19、図91－48）、瓦質土器（図94－13 ～ 15）、土製品、軟質施釉陶器、瓦、漆塗製品、鉄製品、硯が見られる。陶磁器は、埋土１層や埋土上層として取り上げたものには、19世紀代のものを含むが、埋土下層出土遺物の時期は17世紀末～ 18世紀代に集中する。磁器は肥前のもので占められ、陶器には大堀相馬や岸などが見られる。図81－54は信楽の壺で、破片のため断定はできないが、16世紀代まで遡る可能性もある。図94－15は瓦質土器の蓋で、屋根を表現したものである。型作りで成形した後、沈線と刺突で屋根の細部を表現したもので、あまり出土例がないものである。

【25号遺構】（図43・45、図版35）

Ｇ～Ｉ－16 ～ 19区で他の遺構と重複して検出した。同時期の28・29号遺構より新しく、Ⅱｃ期の27号遺構より古い。また、同様に30号遺構と重複するが、新旧関係は不明である。27 ～ 29号遺構との重複関係からⅡｂ期に推定した。東西11.5m以上、南北4.4m以上であり、長軸は東西方向となる。形状は不整形であり、壁は外傾して立ち上がる。底面には区画するような段があり、東西で別の遺構が連結している様相を呈するが、埋土が一連で堆積していることから､同一の遺構と判断した。この段には東西を連結する幅14㎝の小溝が掘り込まれている。埋土は、にぶい黄褐色～褐灰色土を主体とする埋土上層（２層）と、３層の暗褐色～黒褐色以下の埋土下層からなる。その上層には、25・28号遺構を覆うようにＡ層が広く堆積している。底面では、サンクラック状に土が介入した固くしまった黄褐色土が堆積している。このことから、底面が露出して乾燥していた時期があった可能性が考えられる。西側は深さ70㎝、東側は深さ80㎝となり、底面はほぼ平坦である。

出土遺物は非常に多種多様である。陶磁器（図74・75－24 ～ 39、図81・82－57 ～ 69）、土師質土器（図90－20 ～ 25、図91－49）、瓦質土器（図94－16・17）、土製品、軟質施釉陶器、瓦（図99－６・７、図100－16 ～ 18、図101 ～ 103－23 ～ 27、図105－35 ～ 37、図108･109－58･62 ～ 64）、漆塗製品、古銭（図119－13）金属製品（図116－11）、石製品（図120－８・９）などがある。

埋土下層出土の陶磁器では、17世紀後半から18世紀前半段階に収まるものが主体的である。磁器は肥前の製品が中心となる。17世紀中葉から後葉頃とやや古くなるものも含まれる。陶器では、肥前と瀬戸・美濃を中心として、器種によっては岸や信楽？が加わる。碗では、肥前の呉来手（図81－57 ～ 59）がほとんどを占める。18世紀に主体となる大堀相馬や小野相馬、京・信楽の製品は、小破片でわずかに確認されるが、ほとんど含まれない。唐津（図81－60）や志野（図82－68）の向付などもわずかではあるが出土しており、磁器と同様に、陶器にも古いものが含まれている。Ａ層相当層には、19世紀の可能性のある陶器甕（図82－69）や、大堀相馬の青土瓶や軟質施釉陶器などが出土している。また、埋土から瓦が多量に出土しており、特に埋土下層の出土点数は1,798点と非常に多い（表27）。ただし、層ごとの瓦１点あたりの重量（重量／点数）は、埋土上層215.6ｇ、埋土下層40.3ｇとなり、埋土上層出土瓦の遺存状態が良かったことが推察される。特に、丸瓦や平瓦で、遺存状態の良いものが多い（図101 ～ 103－23 ～ 27、図105－36・37）。そのため、図示した瓦も埋土上層が主体的となった。

【28号遺構】（図43・45・46、図版36）

Ｈ・Ｉ－18・19区で他の遺構と重複して検出した。25号遺構より古い。大半を他の遺構や撹乱によって破壊されており、遺存状態は悪い。東西4.9m以上、南北2.1m以上であり、詳細な平面形は不明である。壁は外傾しながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。深さ50㎝であり、埋土は周囲の遺構と同様に大規模な遺構であった可能性が高い。調査した面積が狭いこともあり、出土遺物はそれほど多くはない。陶磁器、土師質土器、土製品、軟質施釉陶器、瓦が出土しているが、いずれも量は少ない。陶磁器は、埋土下層として取り上げたもの以外には、19世紀に下るものが含まれる。埋土下層としてとりあげたものには、時期などが判明するものがない。図示した磁器碗（図75－41）も18世紀末以降に下るもので、埋土として取り上げているため、上層に入る資料であった

可能性が考えられる。

【29号遺構】（図43・44、図版36）

Ｅ～Ｇ－18 ～ 20区で、27号遺構（Ⅱｃ期）を完掘した後に検出した。同時期の 20･25号遺構より古い。東西4.9ｍ以上、南北６ｍ以上であり、不整な円形、もしくは楕円形を呈すると考えられる。壁は外傾しながらゆるやかに立ち上がり、底面は平坦である。深さ 30㎝であり、埋土はほぼ水平に堆積している。陶磁器（図75－42・43、図83－70 ～ 73）、土師質土器（図91－50）、瓦質土器、土製品、軟質施釉陶器が多少出土している。磁器には、年代の明確な資料はほとんどない。陶器には、埋土上層に 19世紀代の土瓶が１点含まれるが、新しいものはこれだけである。17世紀代のものを含むが、大半は 18世紀代のものである。図示したもののうち、図83－70・72・73 は、美濃の 17世紀代に遡るやや古手のものである。27号遺構との関係を考えるならば、Ⅱｂ期でも前半段階にあたる可能性がある。

【30号遺構】（図43・46）、図版36

Ⅰ－17・18区で 25号遺構掘り下げ時に検出した。重複する部分をほとんど完掘していたため、25号遺構との新旧関係は不明である。34号建物（Ⅱｃ期）より古い。東西4.7ｍ以上、南北1.2ｍ以上であり、残存部分から推定すると、大規模な円形、もしくは楕円形の遺構であったと考えられる。壁は外傾しながら立ち上がり、底面にはゆるやかな凹凸がある。深さ 100㎝であり、埋土は、にぶい黄褐色～褐色の埋土上層と、３層の黒褐色土以下の埋土下層からなる。周辺の遺構と同規模な遺構であったと考えられる。近接する 28号遺構と同様に調査した面積が狭いためか出土遺物は多くない。陶磁器、土師質土器、瓦、鉄製品が少量出土している。埋土上層より出土した軒丸瓦１点のみを図示した（図99－８）。

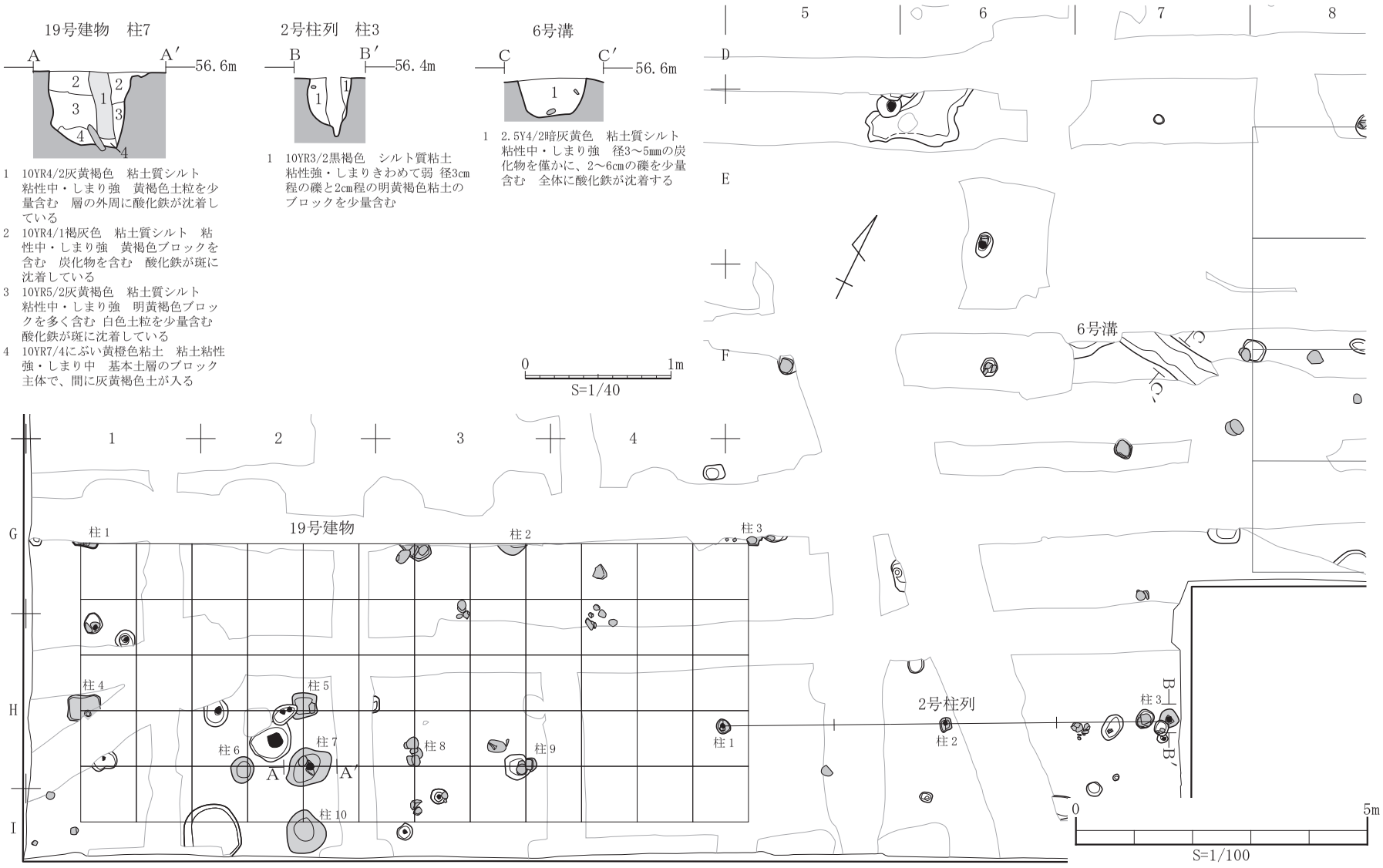


図36　武家屋敷地区第11地点Ⅱｂ期の遺構（1）
Fig.36　Features belonging to phase IIb at BK11 (1)

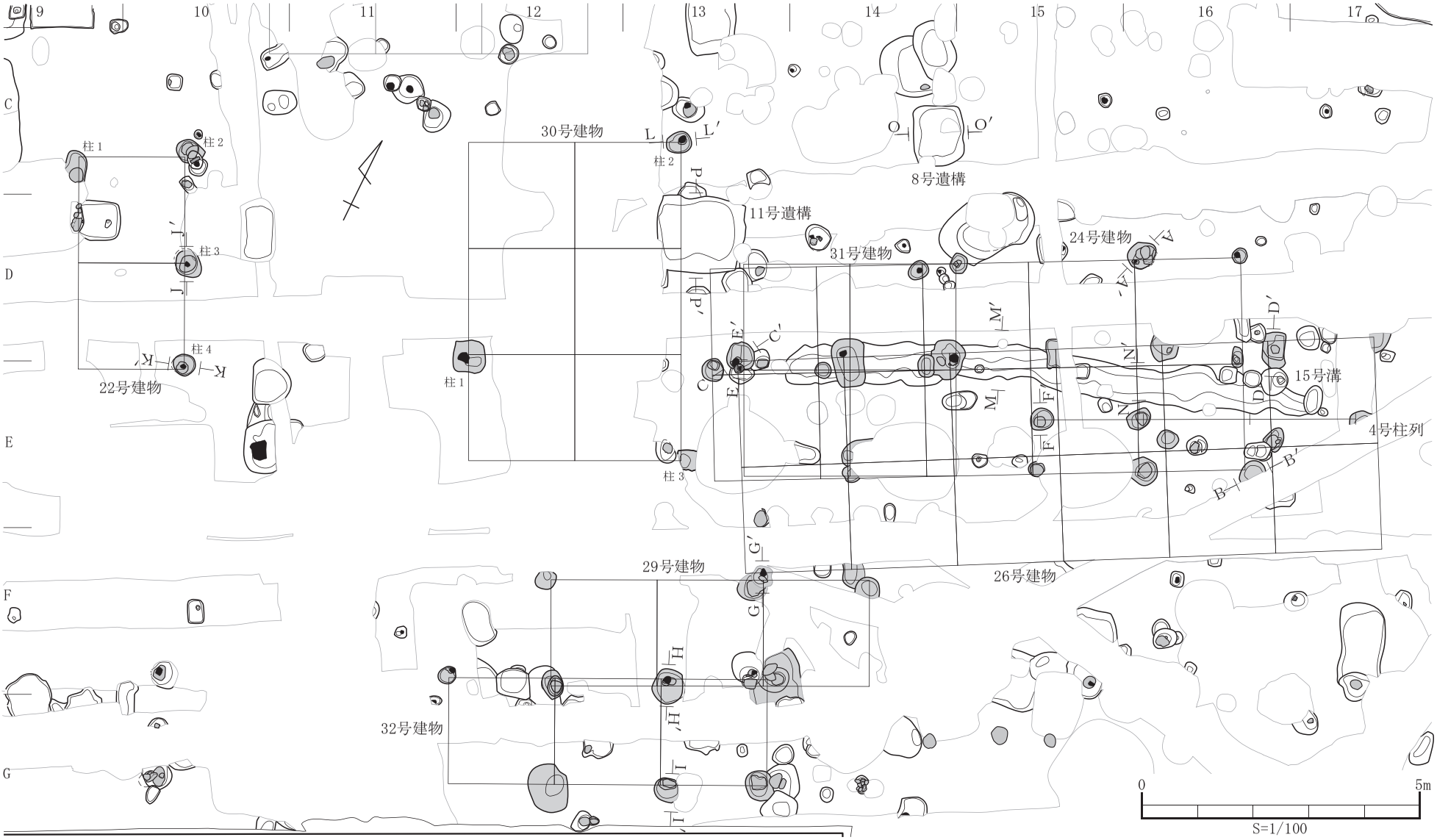
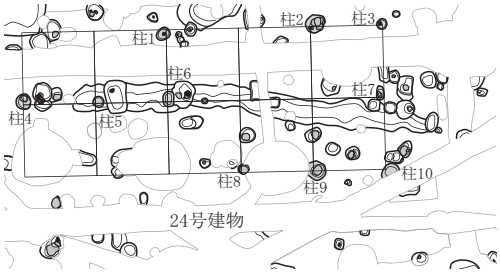
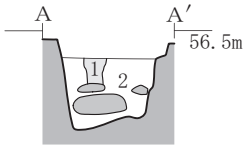


図37　武家屋敷地区第11地点Ⅱb期の遺構（2）
Fig.37　Features belonging to phase IIb at BK11 (2)

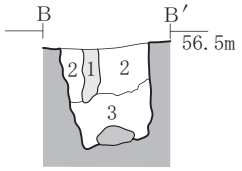


24号建物　柱2

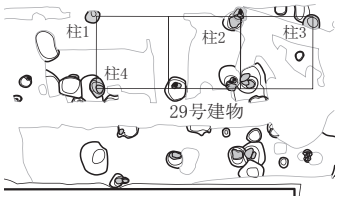


1　10YR3/2黒褐色　シルト質粘土　粘性中・しまり強　暗褐色粘土質シルトを極少量斑に含む
2　10YR3/2黒褐色　シルト　粘性中・しまり強　暗褐色シルト、黄褐色シルトを少量斑に含む

24号建物　柱10

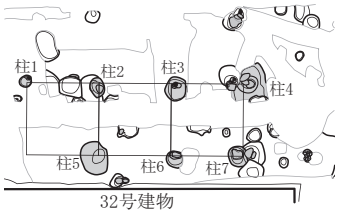


1　2.5Y4/1黄灰色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　径2～5㎜の炭化物を少量含む
2　10YR3/3暗褐色　シルト　粘性弱・しまりやや弱　径5～10㎝のオリーブ褐色粘土のブロックを多く、1～2㎝大の炭化物を少量含む
3　10YR3/4暗褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　上部に厚さ10～15㎝ほどでオリーブ褐色粘土を層状に含む

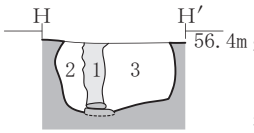


29号建物　柱2

1　10YR3/1黒褐色　粘土　粘性やや強・しまりやや弱　径1～3㎝のオリーブ褐色シルト質粘土のブロックと径3～6㎜の炭化物を少量含む
2　10YR4/2灰黄褐色　シルト質粘土　粘性やや強・しまりやや弱　明黄褐色シルト質粘土と黄褐色粘土が斑に混じる　径5～8㎜の白色土粒を少量含む

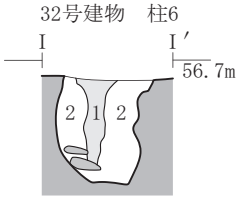


32号建物　柱3

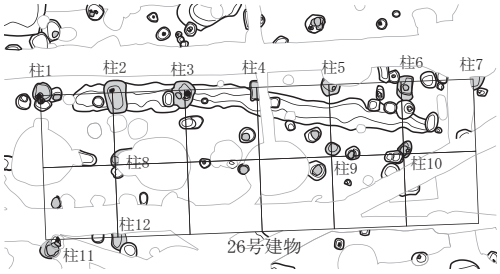


1　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト質粘土　粘性強・しまり弱　径5～8㎜の炭化物と1～5㎝の黄褐色粘土のブロック、4～6㎝大の礫を少量含む
2　10YR2/3黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまりきわめて弱　径3～10㎝の明黄褐色粘土のブロックを多く、径1～2㎝の礫を僅かに含む
3　10YR6/8明黄褐色　粘土　粘性やや強・しまり弱　層中部から下部にかけて暗褐色シルト質粘土を厚さ1～8㎝の層状に含む

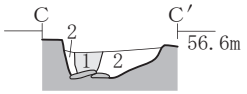
32号建物　柱6



1　10YR4/3にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや弱　径2～4㎜の白色粒と径3～5㎜の炭化物を多く含む
2　10YR3/3暗褐色　シルト　粘性やや弱・しまりやや弱　明黄褐色粘土が全体に斑に混じる
径3～6㎜の明赤褐色砂質シルトのブロックを少量、径5～8㎜の白色土粒を中量含む

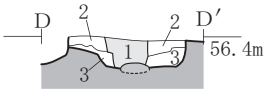


26号建物　柱1

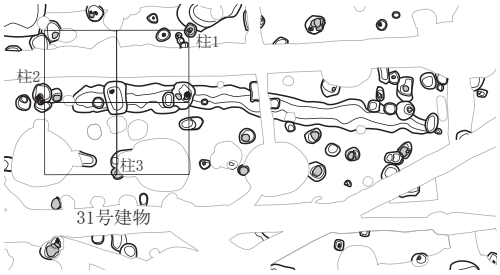


1　2.5Y4/1黄灰色　シルト質粘土　粘性強・しまり弱　径1～2㎜の炭化物を僅かに含む
2　7.5YR3/1黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　径1～3㎝の浅黄色粘土のブロックを中量含む

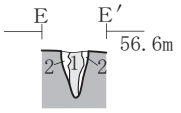
26号建物　柱6



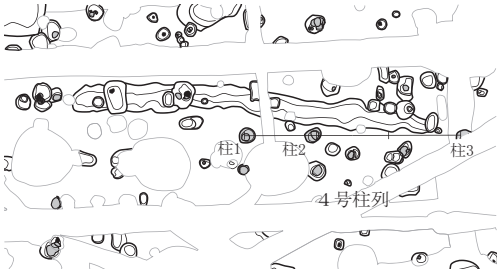
1　10YR4/1褐灰色　粘土質シルト　粘性弱・しまり弱　径1～3㎜の炭化物を僅かに含む
2　7.5YR4/1褐灰色　シルト　粘性弱・しまり弱　径1～5㎝の明黄褐色粘土のブロックを多く、径1～2㎜の炭化物を僅かに含む
3　10YR7/6明黄褐色　粘土　粘性強・しまり弱　径2㎝ほどの暗褐色粘土質シルトのブロックを少量含む



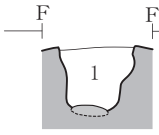
31号建物　柱2



1　2.5Y3/2黒褐色　シルト質粘土　粘性やや強・しまりやや弱　径1～2㎜の炭化物を少量含む
2　2.5YR6/6明黄褐色　粘土　粘性強・しまり弱　褐灰色粘土質シルトが斑に混じる　径2～5㎜の炭化物を少量含む



4号柱列　柱1



1　10YR5/2灰黄褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり強　にぶい黄褐色粘土質シルト、褐色粘土が少量斑に混じり、径2～5㎜の炭化物、白色土粒を僅かに含む

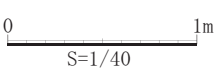
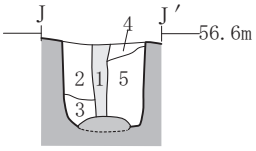


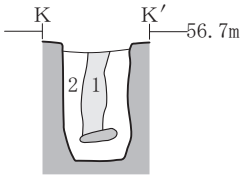
図38　武家屋敷地区第11地点Ⅱb期の遺構（3）
Fig.38　Features belonging to phase IIb at BK11 (3)

22号建物　柱3



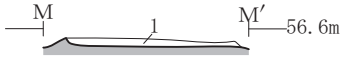
1　2.5Y5/2暗灰黄色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　径5cmほどの炭化物を含む　柱痕跡
2　10YR4/2灰黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　明黄褐色粘土のブロックを層下部に多く含む
3　10YR7/8黄橙色　粘土　粘性中・しまり中　暗褐色粘土質シルトを全体に含む
4　5Y5/2灰オリーブ色　シルト　粘性中・しまりやや強　酸化鉄を少量含む
5　10YR4/3にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　明黄褐色粘土のブロックを多量に含む

22号建物　柱4



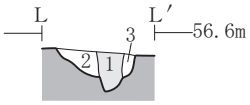
1　10YR4/4褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　径2～3mmの炭化物をまばらに含む　柱痕跡
2　7.5YR4/6褐色　粘土質シルト　粘性中・しまりやや強　褐色粘土質シルトを斑に含む

15号溝(E-15区)



1　10YR4/2灰黄褐色　粘土質シルト　粘性弱・しまりやや強　径2～6mmの炭化物を中量含む

30号建物　柱2

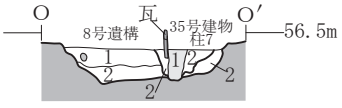


1　10YR4/2灰黄褐色　シルト質粘土　粘性中・しまり強　橙色砂質シルトを僅かに含む
2　10YR6/6明黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　暗褐色シルト、橙色砂質シルトを少量斑に含む
3　10YR4/1褐灰色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　黄褐色粘土質シルト、褐色粘土質シルトを少量斑に含む

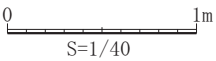
15号溝(E-16区)

1　10YR4/3にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性弱・しまり中　径5mm～1cmの炭化物を中量、3～5mmの白色土粒を少量含む

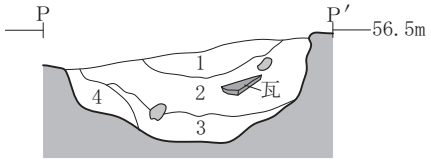
8号遺構



1　10YR4/4褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり強　径1～2cmの褐色粘土質シルトのブロックを少量含む
2　10YR6/6明黄褐色　粘土　粘性強・しまり強　黒褐色粘土、褐色シルト質粘土をごく少量斑に含む



11号遺構



1　10YR4/3にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり強　黒褐色砂質シルト、褐色砂質シルトが少量斑に混じり、小礫を僅かに含む
2　10YR3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　径0.5～1cmほどのにぶい黄褐色シルトのブロックを層上部に暗オリーブ色粘土、黒褐色粘土を層下部に含み、全体に小礫、径1cmほどの炭化物を少量含む　瓦、漆製品、木製品などの遺物を多量に含む
3　2.5Y3/2黒褐色　シルト質粘土　粘性強・しまり強　黄褐色粘土、灰黄褐色粘土を少量、暗赤褐色砂質シルトがまばらに混じる
4　10YR5/6黄褐色　粘土　粘性強・しまりやや弱　褐灰色粘土が少量、暗赤褐色砂質シルトがまばらに混じる

図39　武家屋敷地区第11地点Ⅱb期の遺構（4）
Fig.39　Features belonging to phase IIb at BK11 (4)

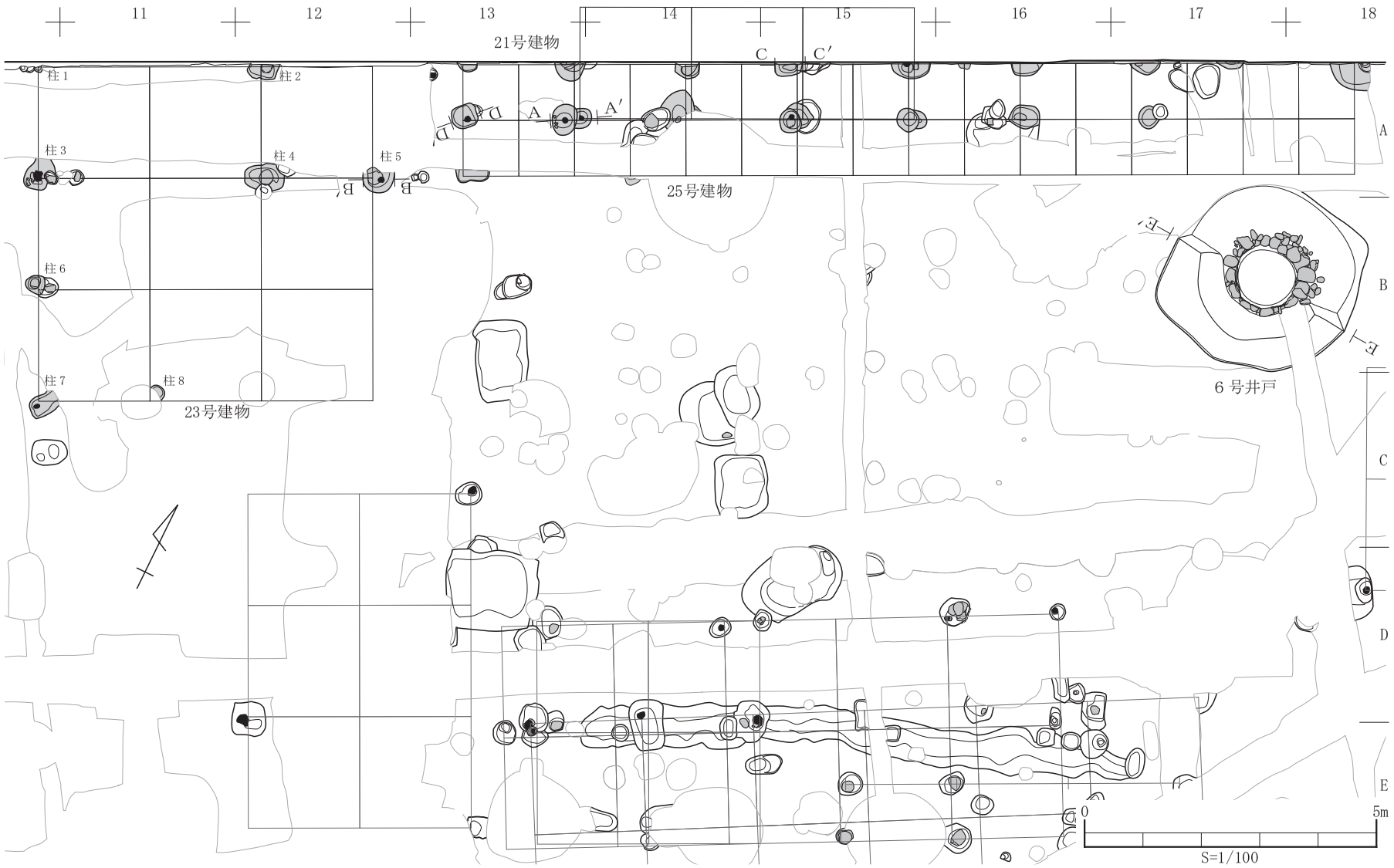
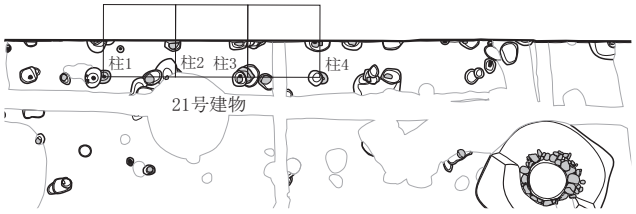
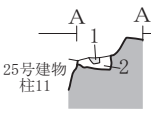


図40　武家屋敷地区第11地点Ⅱｂ期の遺構（５）
Fig.40　Features belonging to phase IIb at BK11 (5)

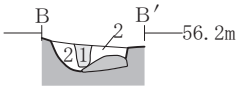


21号建物　柱1

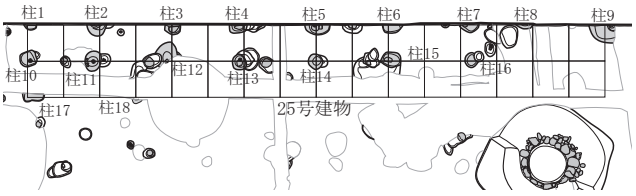


1　10YR3/3暗褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　明褐色砂質シルトが少量斑に混じる
2　10YR3/3暗褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり強　明赤褐色砂質シルトが僅かに混じり、黄褐色粘土質シルトの小ブロックと白色土粒を少量含む

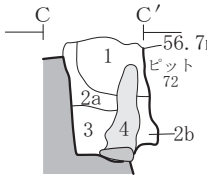
23号建物　柱5



1　10YR3/4暗褐色　シルト質粘土　粘性やや弱・しまり中　径1cmオリーブ褐色シルト質粘土ブロックを少量含む
2　5Y5/6オリーブ　シルト質粘土　粘性中・しまり中　黒褐色シルト質粘土ブロックを少量含む

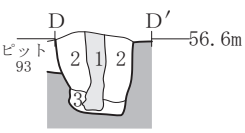


25号建物　柱4

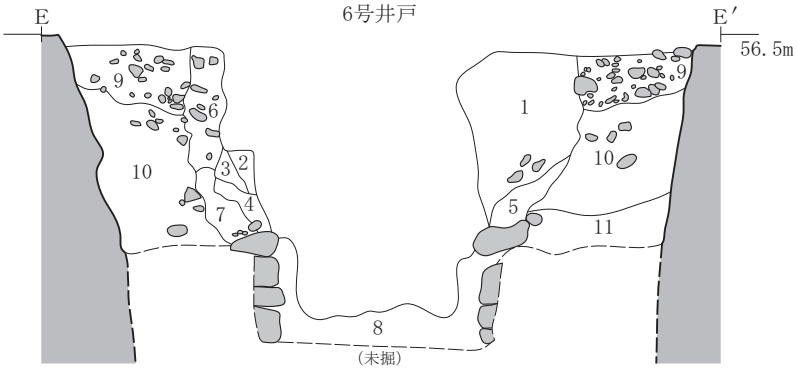


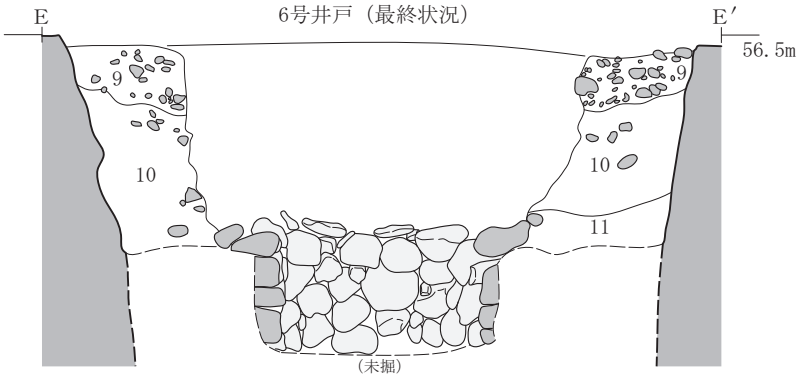
1　10YR3/2黒褐色　シルト　粘性やや弱・しまり強　径2cm程の明黄褐色シルトのブロックが中量、黒褐色シルトが斑に混じり白色土粒を僅かに含む
2a　10YR5/8黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　にぶい黄褐色砂質シルトが斑に混じり、暗褐色シルトを部分的に含む
2b　10YR3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　径3cmほどの明黄褐色粘土質シルトのブロックを中量含む
3　10YR4/2灰黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　橙色粘土質シルトが少量、明黄褐色粘土質シルトが中量斑に混じる
4　10YR3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり強赤褐色の土が径1mmほどの粒状に混じる

25号建物　柱10



1　2.5Y3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや強　明赤褐色粘土質シルトを層下方に僅かに含む
2　2.5Y4/2暗灰黄色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり強　黒褐色シルトの小ブロックが少量、黄褐色シルトの小ブロックが中量混じる
3　10YR6/8明褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや強　黒色土粒を僅かに含む

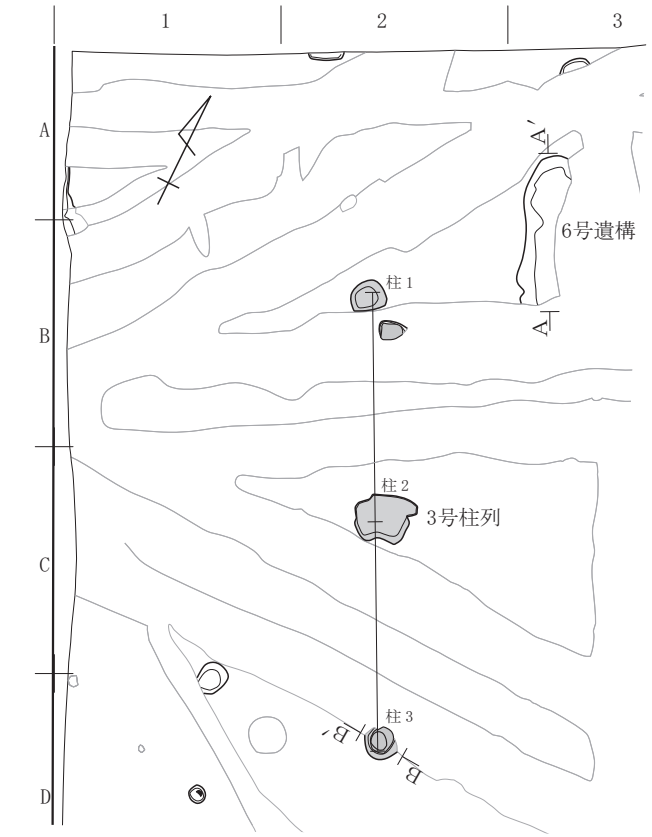


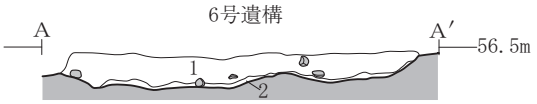


1　2.5Y3/3暗オリーブ褐色　シルト　粘性中・しまりやや強　径1～2cmほどの明黄褐色粘土のブロック、径0.5～2cmほどの炭化物を少量、小礫を僅かに含む　径10cmほどの石を包含する
2　10YR4/2黄褐色　粘土　粘性強・しまり強　褐色粘土が少量斑に混じり、径1～5mmほどの炭化物、径1mmほどの白色土粒を僅かに含む
3　10YR3/2黒褐色　粘土　粘性強・しまり強　褐色シルトが少量斑に混じり、径5cmほどのにぶい黄褐色粘土、灰黄色砂のブロック、径0.1～2cmほどの炭化物を含む
4　10YR3/2黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　黄褐色砂質シルト、暗赤褐色砂質シルトを部分的に少量含む　にぶい黄橙色粘土を径5mmほどの粒で含み、径2mmほどの炭化物小礫を僅かに含む
5　10YR4/2灰黄褐色　粘土　粘性強・しまり中　径5cmほどの明黄褐色砂質シルト、にぶい黄色砂のブロックを少量含み、径1～2cmほどの炭化物、小礫を僅かに含む　径3cmほどの石を多量に包含する
6　2.5Y4/2暗灰黄色　粘土　粘性強・しまり中　径3～10cmほどの灰黄色砂のブロックを少量、径0.5～1cmほどの炭化物、小礫、白色土粒を僅かに含む　径10cmほどの石を包含する
7　10YR4/3にぶい黄褐色　粘土　粘性強・しまりやや弱灰黄色砂質シルト、明褐色砂質シルトが少量、明黄褐色粘土が僅かに斑に混じり、径1mmほどの炭化物、小礫、白色土粒を僅かに含む
8　10YR4/2灰黄褐色　粘土　粘性強・しまりやや弱　にぶい黄橙色粘土、黄褐色粘土がごく少量斑に混じり、径5mmほどの炭化物を少量、小礫を僅かに含む
9　2.5Y6/4にぶい黄色　砂　粘性弱・しまり強　径3～5cmの礫を多く包含する
10　10YR6/8明黄褐色　砂　粘性弱・しまり強　明黄褐色砂、浅黄色砂が少量斑に混じる　鉄分を含み、径5～10cmの礫を多く包含する
11　2.5Y7/2灰黄色　砂　粘性弱・しまり中　明黄褐色砂質シルトが少量斑に混じり、径5mmほどの炭化物をごく僅かに含む　径5cmほどの礫を少量包含する

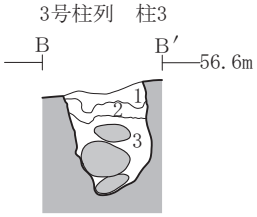
0　1m
S=1/40

図41　武家屋敷地区第11地点Ⅱb期の遺構（6）
Fig.41　Features belonging to phase IIb at BK11 (6)

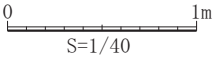


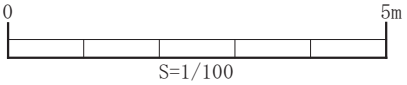


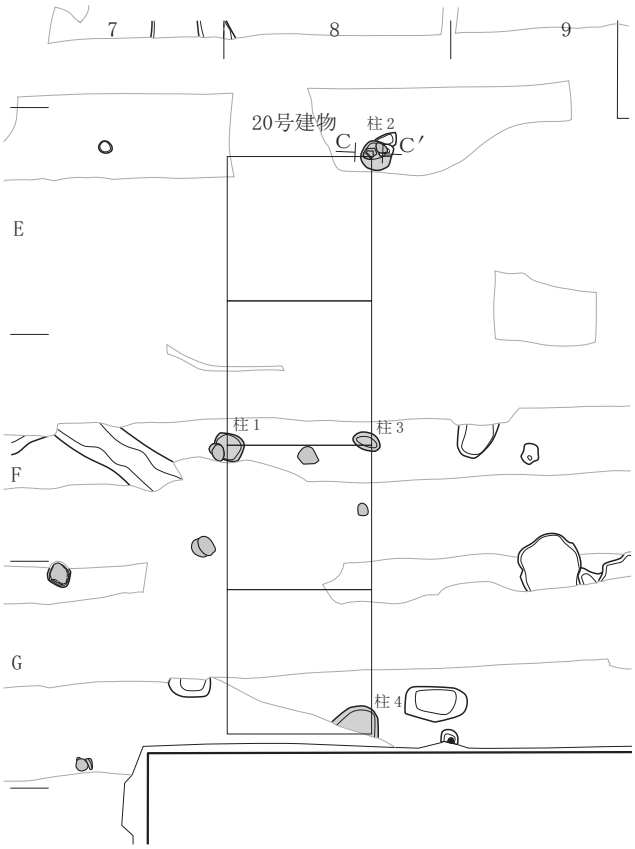
1　7.5YR5/2灰褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまりやや弱　径5～10㎝の礫を含む層下部に厚さ1～3㎝の炭化物がラミナ状に堆積する部分がある
2　10YR8/6黄橙色　粘土　粘性やや強・しまり中　10㎝大の礫を含む　全体にまばらに鉄分を含む

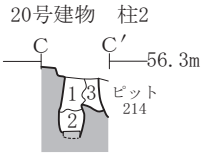


1　10YR3/2黒褐色　シルト　粘性やや弱・しまりやや強　下部に明黄褐色粘土を多く含む　全体に酸化鉄の沈着が著しい
2　2.5Y4/2暗灰黄色　粘土質シルト　粘性中・しまりやや強　黒褐色シルト質粘土を帯状に含む　径1～5㎝の灰黄色粘土のブロックを少量含む
3　2.5Y3/3暗オリーブ褐色　粘土　粘性強・しまりやや弱　径5㎜～10㎝の灰白色粘土のブロックを多く含む　5㎜大の炭化物を僅かに含む

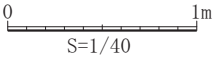








1　10YR5/1褐灰色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　酸化鉄を多く含む層下部に地山由来の黄褐色粘土のブロックを含む
2　10YR4/1褐灰色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　地山由来の黄褐色粘土の小ブロックを少量含む
3　10Y7/2灰白色　粘土　粘性やや強・しまり中　黒褐色粘土質シルトが斑に混じる 層上部から左側にかけて明黄褐色粘土を含む



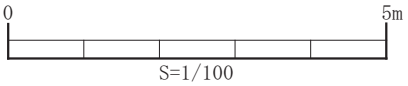


図42　武家屋敷地区第11地点Ⅱb期の遺構（7）
Fig.42　Features belonging to phase IIb at BK11 (7)

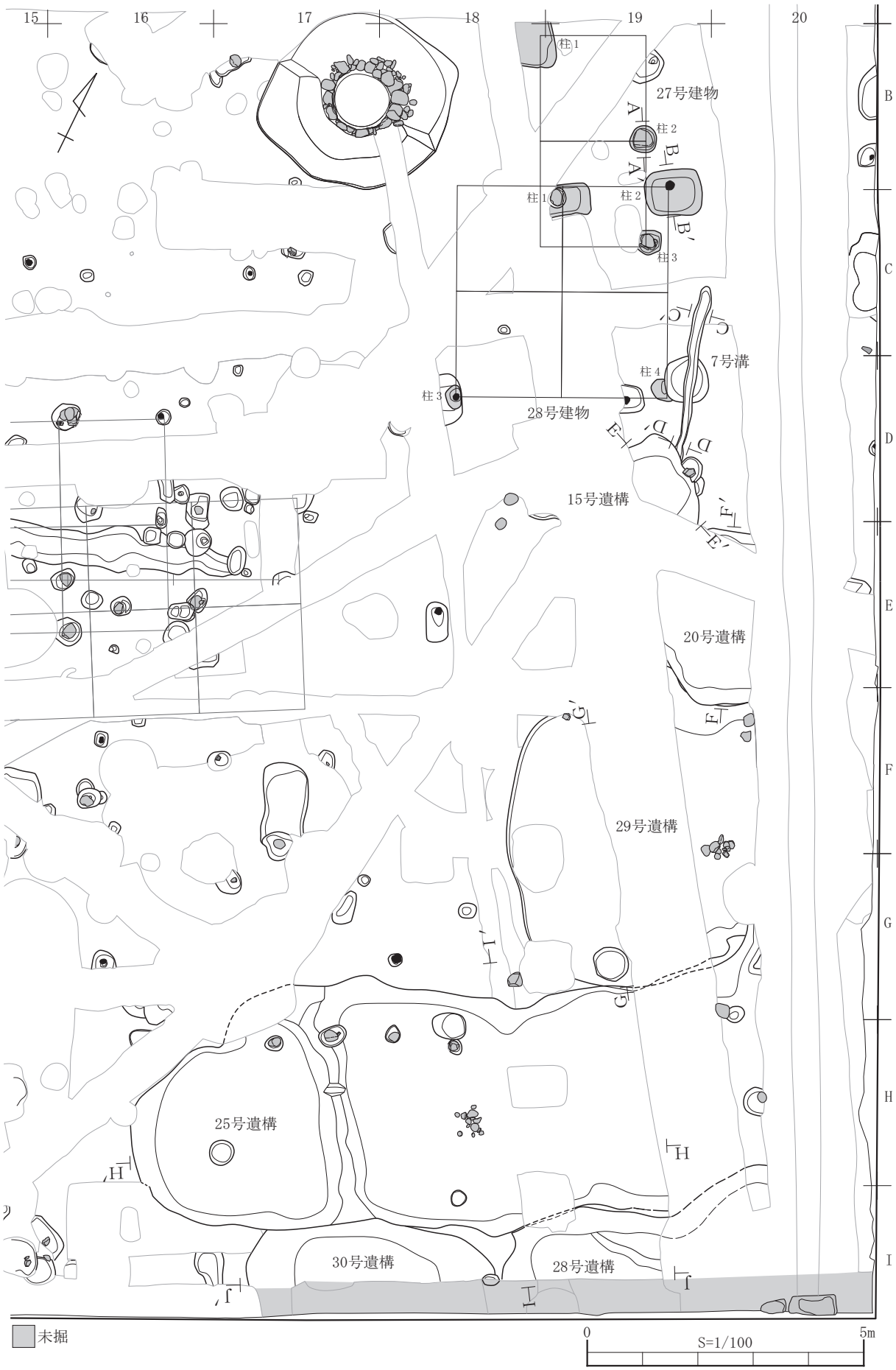
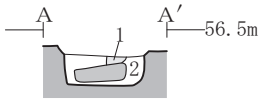


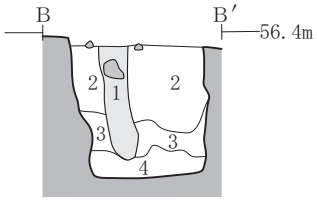
図43　武家屋敷地区第11地点Ⅱb期の遺構（8）
Fig.43　Features belonging to phase IIb at BK11 (8)

27号建物　柱2



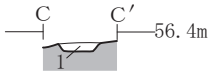
1　10YR3/3暗褐色　シルト　粘性弱・しまり弱　径1㎜前後の小礫、炭化物をごく少量含む
2　7.5YR3/4暗褐色　シルト質粘土　粘性中・しまり中　オリーブ褐色粘土質シルトの大ブロックを多量に含む　径2～5㎝の暗オリーブ褐色シルトを少量含む

28号建物　柱2



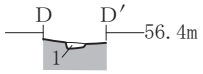
1　10YR4/3にぶい黄褐色　粘土　粘性強・しまり強　黄褐色粘土が少量、灰黄褐色粘土が僅かに斑に混じり、径3～5㎜ほどの炭化物を僅かに含む
2　10YR5/6黄褐色　粘土　粘性強・しまり強　暗褐色粘土、明黄褐色粘土が少量斑に混じり、径1～2㎝ほどの炭化物を僅かに含む
3　10YR5/6黄褐色　粘土　粘性強・しまりやや弱　明黄褐色粘土、灰黄褐色粘土が少量、明褐色シルトが僅かに斑に混じり、径5㎜ほどの炭化物をごく僅かに含む
4　10YR6/4にぶい黄橙色　粘土　粘性強・しまりやや強　明褐色粘土が僅かに斑に混じり、径3㎝ほどのにぶい黄褐色シルトのブロックを少量、径5㎜ほどの炭化物をごく僅かに含む

7号溝（北側）



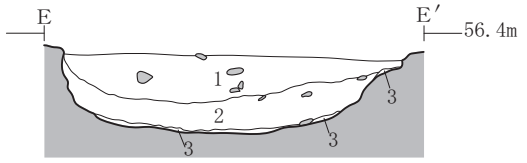
1　10YR3/3暗褐色　シルト　粘性やや強・しまり中　径2～5㎜暗オリーブシルトを少量含む　径1～2㎜の炭化物を少量含む

7号溝（南側）



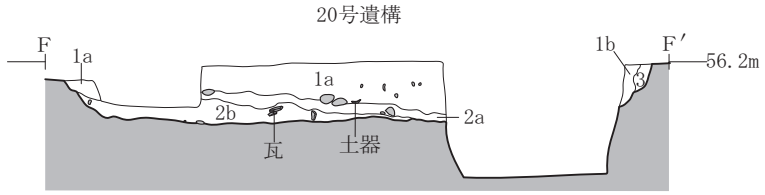
1　10YR4/3にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　径1～3㎝ほどの黄褐色粘土のブロックを中量、径2㎜ほどの炭化物、径1㎜ほどの白色土粒を僅かに含む

15号遺構



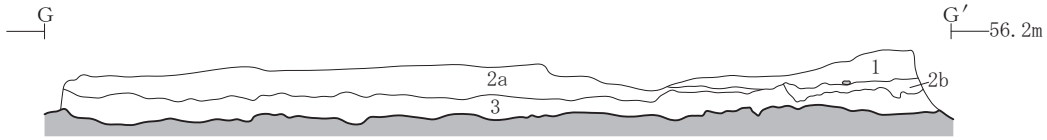
1　10YR3/4暗褐色　シルト　粘性中・しまり強　褐色シルトを少量、径1㎝ほどの明黄褐色粘土のブロックと径1～3㎝ほどの炭化物、小礫を僅かに含む　層下部に大きめの炭化物が集中する
2　10YR3/3暗褐色　シルト　粘性中・しまり強　灰黄褐色砂が中量、暗褐色砂質シルトが少量斑に混じり、黄褐色砂質シルトの大きな塊と径0.5～2㎝ほどの炭化物、径1㎜ほどの白色土粒を僅かに含む
3　10YR5/6黄褐色　粘土　粘性強・しまり強　灰黄褐色粘土が中量、明褐色粘土質シルトが少量斑に混じり、径5㎜ほどの炭化物をごく僅かに含む

20号遺構

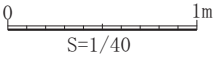


1a　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性弱・しまり強　炭化物をやや多く含む　白色土粒、黄褐色粒を少量含む
1b　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性弱・しまり強　明黄褐色シルトをやや多く含む　炭化物、白色土粒を少量含む
2a　10YR4/3にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　明黄褐色シルトをブロック状に含む　白色土粒を少量含む　酸化鉄が僅かに沈着している
2b　10YR3/4暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　黄褐色シルトを少量含む　炭化物を少量含む　白色土粒、黄褐色土粒を少量含む
3　10YR6/6明黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　褐色シルトを少量含む　炭化物、白色土粒を少量含む

29号遺構

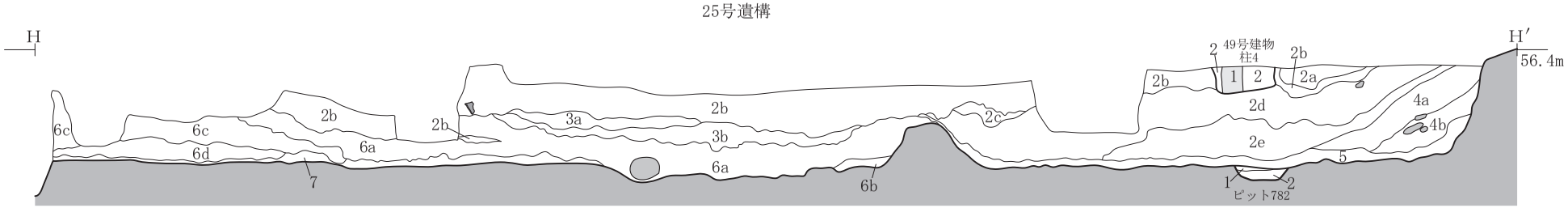


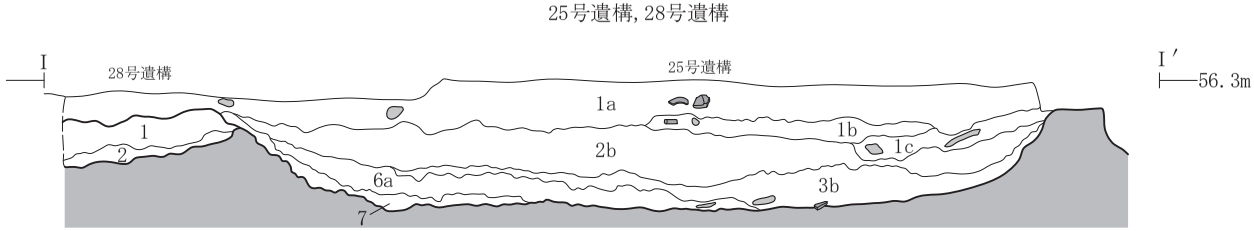
1　10YR3/3暗褐色　シルト　粘性弱・しまり強　黄橙色シルトをブロック状に多量に含む　白色土粒を少量、径2～3㎜の円礫を少量含む
2a　10YR4/6褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　黄褐色シルト質粘土をブロック状に多量に含む　炭化物を少量、白色土粒をやや多く含む
2b　10YR4/6褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　にぶい黄橙色砂質シルト、褐色粘土質シルトを部分的に含む　白色土粒を少量含む
3　10YR5/6黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまりやや強　明黄褐色シルトを斑に多量に含む　白色土粒をごく少量含む



S=1/40

図44　武家屋敷地区第11地点Ⅱb期の遺構（9）
Fig.44　Features belonging to phase IIb at BK11 (9)





25号遺構

1a　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト質粘土　粘性やや弱・しまりやや弱　炭化物をごく少量含む　白色土粒、黄褐色土粒を少量含む　径3～5cmの円礫を含む　酸化鉄が僅かに沈着している　11号溝埋土であり、A層に相当する
1b　10YR3/3暗褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　褐色シルトをやや多く含む　炭化物、白色土粒をごく少量含む　A層に相当する
1c　10YR3/4暗褐色　粘土　粘性強・しまり中　褐色シルトが層上部に多量に堆積している　白色土粒、こぶし大の円礫をごく少量含む
2a　10YR3/4暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　径2～3cmの炭化物を含む　白色土粒を含む
2b　10YR6/4にぶい黄褐色～10YR5/8黄褐色　粘土質シルト～粘土　粘性やや強・しまり中　明黄褐色粘土質シルト、にぶい黄褐色シルトをブロック状に多量に含む　暗褐色土、黒褐色土ブロックを多く含む　白色土粒をごく少量含む　黒色土粒を含む　酸化鉄が僅かに沈着している
2c　10YR3/2黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　径5mmの炭化物を僅かに含む　黄色土粒を僅かに含む
2d　10YR4/1褐灰色　粘土　粘性強・しまり強　にぶい黄褐色、黒褐色、明黄褐色土ブロックを斑状に多く含む　径5mmの炭化物、黒色土粒をごく僅かに含む　酸化鉄が僅かに沈着している
2e　10YR5/1褐灰色　粘土　粘性強・しまり強　明黄褐色ブロックを斑状に含む　黒褐色土をブロック状に含む　酸化鉄が沈着している
3a　10YR3/3暗褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　黒褐色、明黄褐色土をブロック状に僅かに含む　黒色土粒を僅かに含む　酸化鉄が沈着している
3b　10YR4/2灰黄褐色～10YR3/2黒褐色　シルト質粘土～粘土　粘性強・しまり強　明黄褐色粘土質シルトをやや多く含む　褐灰色土、にぶい黄橙色土ブロックを含む　炭化物を僅かに含む　白色土粒をごく少量含む　酸化鉄が僅かに沈着している
4a　10YR4/1褐灰色　砂質シルト　粘性弱・しまり弱　明黄褐色土小ブロックを僅かに含む　径1cmの炭化物をごく僅かに含む　酸化鉄が沈着している
4b　10YR5/1褐灰色　シルト　粘性中・しまり弱　明黄褐色土ブロックを含む　黒色土粒を僅かに含む
5　10YR4/1褐灰色　粘土　粘性強・しまり強　埋土上部に部分的に黒褐色土を含む　にぶい黄橙色土ブロックを僅かに含む　径5mmの炭化物を僅かに含む、
6a　10YR6/8明黄褐色　シルト　粘性やや弱・しまり中　暗褐色粘土質シルト、黒褐色シルト質粘土を斑にやや多く含む　酸化鉄が僅かに沈着している
6b　10YR7/4にぶい黄橙色　粘土　粘性強・しまり強　灰黄褐色土ブロックを僅かに含む　酸化鉄が沈着している
6c　10YR4/3にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　明黄褐色粘土質シルト、褐色シルトをブロック状に多量に含む　白色土粒をごく少量含む
6d　10YR4/4褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　暗褐色粘土質シルトを斑に多量に含む
7　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト質粘土　粘性中・しまり中　部分によっては灰黄褐色粘土質シルトになる　径2～5mm黄褐色粘土質シルトを少量含む　酸化鉄が僅かに沈着している

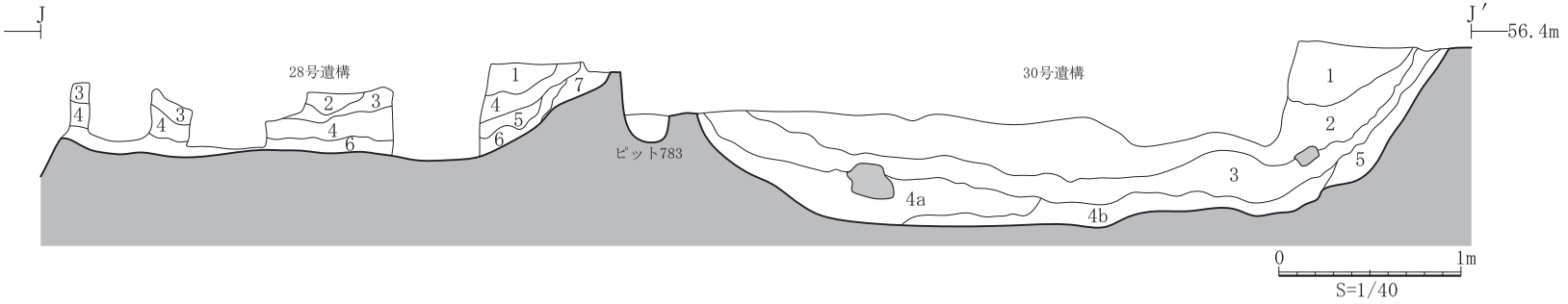
28号遺構(南北ベルト)

1　10YR3/4暗褐色　シルト質粘土　粘性中・しまり中　黄褐色シルトを少量含む　白色土粒を少量含む　酸化鉄が僅かに沈着している
2　10YR4/2灰黄褐色　シルト　粘性弱・しまり中　褐色粘土質シルトを少量含む

0　1m
S=1/40

図45　武家屋敷地区第11地点Ⅱb期の遺構（10）
Fig.45　Features belonging to phase IIb at BK11 (10)

28号遺構,30号遺構



28号遺構(東西ベルト)
1　10YR4/2灰黄褐色　シルト　粘性中・しまり強　黄橙色粘土、にぶい黄橙色砂質シルトが少量斑に混じり、径0.3～1cmの炭化物、径1mmの白色土粒を僅かに含む
2　10YR3/3暗褐色　粘土　粘性強・しまり強　黄褐色粘土、明褐色粘土を少量斑に含み、径2mmほどの炭化物、径1mmほどの白色土粒を僅かに含む
3　10YR4/2灰黄褐色　粘土　粘性強・しまり強　橙色粘土、褐色シルトが少量斑に混じり、径0.5～2cmの炭化物、径5mmの小礫を僅かに含む
4　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり強　径1～2cmの褐色粘土のブロック、明褐色シルト質粘土のブロック少量、径0.5～1cmの炭化物、鉄分、径1mmの白色土粒を僅かに含む
5　10YR3/2黒褐色　粘土　粘性強・しまり強　径0.5～2cmの明黄褐色粘土のブロックを少量、径1mmの白色土粒、鉄分を僅かに含む
6　10YR4/2灰黄褐色　粘土　粘性強・しまり強　黒褐色粘土を中量斑に混じり、径1～3cmのにぶい黄橙色粘土のブロックを少量、鉄分を僅かに含む
7　10YR4/3にぶい黄褐色　粘土　粘性強・しまり強　黄褐色粘土、褐色粘土が少量斑に混じり、径0.5～1cmの炭化物を僅かに含む

30号遺構
1　10YR4/3にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり強　暗褐色砂質シルトが中量、明黄褐色シルト質粘土、にぶい黄褐色粘土が僅かに混じり、径0.5～1cmの炭化物、径2～5mmの小礫を含む
2　10YR4/4褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　黄褐色シルト質粘土が中量、灰黄褐色粘土質シルトが少量、明褐色粘土、黒褐色粘土が僅かに斑に混じり、径1mmほどの白色土粒、径0.5～1cmの炭化物を僅かに含む
3　10YR3/1黒褐色　粘土質シルト　粘性強・しまりやや弱　にぶい黄褐色を少量、層左側ににぶい黄橙色粘土を少量含む　径0.1～1cmの炭化物、径1mmほどの白色土粒を僅かに含み、層下部には層状に炭化物を含む
4a　2.5Y5/3黄褐色　粘土　粘性強・しまりやや弱　暗灰黄色粘土、明赤褐色粘土が少量混じり、径5mmほどの炭化物をごく僅かに含む
4b　2.5Y5/2暗灰黄色　粘土　粘性強・しまりやや弱　灰色粘土を中量、にぶい黄橙色粘土、明黄褐色粘土が僅かに斑に混じり、径1cmほどの炭化物を僅かに含む
5　10YR4/2灰黄褐色　粘土　粘性強・しまりやや強　にぶい黄橙色粘土、橙色粘土が少量斑に混じり、径2mmほどの炭化物を含む

図46　武家屋敷地区第11地点Ⅱｂ期の遺構（11）
Fig.46　Features belonging to phase IIb at BK11 (11)

④Ⅱｃ期の遺構（図47）

調査区東半分のみに遺構が展開する。建物の軸角度はＮ－29～32°－Ｗとなり、前時期より傾きがかなり大きくなる。最大で２×３間程度の建物が多く、それほど大規模な建物は存在しない。特定の場所に連続的に重複しているが、直接的な重複関係からは、36号建物から38号建物、35・37号建物から40号建物という順番が認められる。切り合い関係から当該期と考えられる27号遺構などから出土した遺物から、時期は18世紀末葉から19世紀初頭と捉えた。

【33号建物】（図49、図版37）

Ｇ～Ｉ－16・17区で検出した。方向はＮ－31°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸であり、２×３間となる。４基の柱穴が検出された。柱掘り方形状は、円形あるいは楕円形を呈する。柱２は円形で、径47㎝、深さ22㎝である。柱１・４共に撹乱を受け規模は不明であるが、楕円形を呈する。深さはそれぞれ46・49㎝あり、ほぼ同規模であろう。柱３は楕円形で、規模は63×33㎝、深さ18㎝である。柱２～４には柱痕跡が残る。少し規模の大きな柱４のみ、底面に礫を伴う。柱３では長軸方向を下に向けて垂直に立てた楕円形の礫が、柱痕跡の側方に検出されている。出土遺物には、陶磁器・瓦破片などが数点出土しているのみである。

【34号建物】（図49、図版37）

Ｈ・Ｉ－15～17区で検出した。方向はＮ－31°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸であり、３×２間の建物である。５基の柱穴が検出された。柱掘り方の形状は、円形あるいは楕円形である。柱１は楕円形で、規模は88×55㎝、深さ36㎝である。その他は円形で、柱２・５はそれぞれ径53・35㎝、深さ21・14㎝である。柱３・４の規模は、撹乱により不明である。柱１・２・５で柱痕跡が検出される。そのうち柱１と５では、掘り方底面に規模の様々な礫あるいは瓦片を詰める。少量の陶器、瓦などが出土している。

【35号建物】（図49・50、図版37・38）

Ｃ～Ｅ－13・14区で検出した。方向はＮ－31°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸であり、２×４間となる。やや大形の建物である。40号建物より古い。７基の柱穴が検出された。柱７は、８号遺構（Ⅱｂ期）に埋没後に構築されている。柱掘り方形状は、円形あるいは楕円形を呈する。柱１～３は、径がそれぞれ32・35・34㎝で、深さは24・12・30㎝でほぼ同規模である。柱７は、撹乱により部分的に破壊されているが、深さ16㎝で、平面規模もそれらの柱と同規模であろう。柱４～６は楕円形を呈する。それぞれ73・68・75×50・64・39㎝、深さ41・26・18㎝となり、柱１～３・７よりやや大きい。また、柱２～４・６・７で柱痕跡が検出されている。柱痕跡下部は、さらに一段掘りこまれ、掘り方底面に段ができる。その柱痕跡周囲には、礫と瓦片が配置され、柱を支える機能が想定できる。器種不明の土師質土器３点、瓦片６点のみが出土している。

【36号建物】（図49・50、図版38）

Ｃ・Ｄ－13・14区で検出した。方位はＮ－31°－Ｗである。柱間寸法は５尺６寸（東西）と５尺（南北）の２間四方となる。38・43号建物より古い。４基の柱穴が検出された。柱掘り方形状は、楕円形を呈する。その規模は、53㎝（柱１）～69㎝（柱４）×41㎝（柱２・４）～56㎝（柱３）、深さは11㎝（柱４）～46㎝（柱１）である。柱２・４で柱痕跡が残る。柱１～３は礫を伴う。柱１では大形の礫２点を、部分的に重なるように並べる。柱２では掘り方底面に礫を置く。柱痕跡はその上に乗る。柱３ではやや大形の礫を掘り方底面近くに置く。磁器・瓦などが極少量出土している。

【37号建物】（図49・50、図版38）

Ｅ－13～15区で検出した。方位はＮ－30°－Ｗとなる。柱間寸法は６尺３寸であり、３×１間となる。40号建物より古い。３基の柱穴が検出された。柱掘り方形状は円形である。柱１～３の規模は、それぞれ径39・33・43㎝、深さ17・８・16㎝となり、ほぼ同規模である。これらのうち、柱１で柱痕跡が検出された。その部分の底面はくぼむ。出土遺物は無い。

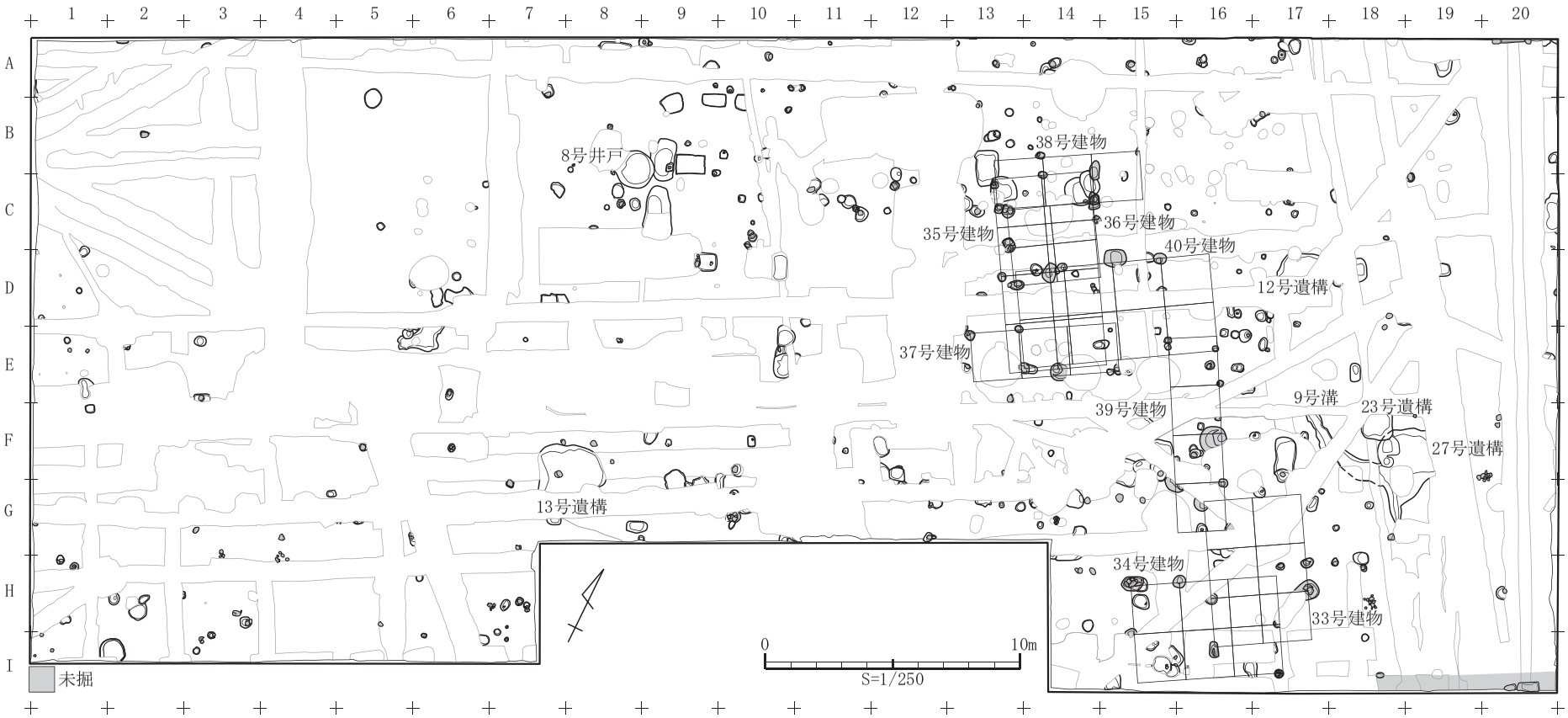


図47　武家屋敷地区第11地点Ⅱc期遺構配置図
Fig.47　Distribution of futures belonging to phase IIc at BK11

【38号建物】（図49・50、図版38・39）

Ｂ・Ｃ－13 ～ 15区で検出した。方位はＮ－30°－Ｗとなる。柱間寸法は６尺３寸であり、３×１間となる。36号建物より新しい。４基の柱穴が検出された。柱２はその大部分が撹乱を受け不明瞭ではあるが、各柱の掘り方形状は、やや方形に近い円形を呈する。柱１・３・４の径は、それぞれ37・38・38㎝で、深さは18・18・16㎝となり、かなりまとまる。この柱１・３・４では柱痕跡が伴う。また柱３・４ではやや大きめの礫を底面近くに置く。柱痕跡は、これらの礫の上にあたる。柱２より瓦片１点のみが出土している。

【39号建物】（図49・50、図版39）

Ｅ～Ｇ－15・16区で検出した。方位はＮ－29°－Ｗとなる。柱間寸法は６尺３寸であり、１×４間となる。６基の柱穴が検出された。柱掘り方形状は円形である。そのうち柱１・３・５の規模は、それぞれ径29・28・35㎝、深さ16・24・６㎝である。それらに比べ、柱２・４の規模は、それぞれ径83・108㎝、深さ43・59㎝となり、大形である。また、撹乱によりほぼ破壊されている柱６も、残存部位の形状から、大形になる可能性が高い。柱２で柱痕跡を伴う。また、柱３の掘り方底面にくぼみが認められ、柱の位置が推定できる。柱４は、掘り方上面で西側に向かって大きく広い。磁器・瓦片がそれぞれ１点ずつ出土しているのみである。

【40号建物】（図49・50、図版39）

Ｄ・Ｅ－14 ～ 16区で検出した。方位はＮ－32°－Ｗとなる。柱間寸法は６尺３寸であり、４×２間となる。35・37号建物より新しい。５基の柱穴が検出された。柱２の掘り方形状は長方形を呈し、平面規模は87×69㎝と大きいが、深さは29㎝と比較的浅い。それ以外の柱は、円形で柱２より小さい。柱１・３～５は、径24㎝（柱５）～ 49㎝（柱３）、深さ14㎝（柱５）～ 53㎝（柱３）となる。柱１～３で柱痕跡を確認した。その他の礫などは伴わない。出土遺物は、柱２から瓦片１点のみのほか、柱４から磁器・陶器などがある。図示した磁器（図75－46）は、白磁の小坏である。

【９号溝】（図51、図版40）

Ｆ－17･18区で検出した素掘りの溝である。21号遺構より新しい。北､南側は撹乱によって破壊されている。1.4ｍ分を検出した。方位はＮ－50°－Ｗである。幅30 ～ 60㎝、深さ10㎝である。撹乱をはさんで西側に隣接する27号遺構の溝の張り出しと連結すると考えられ､これらの遺構が一連であった可能性が高い。調査面積は狭いが、遺物は多少出土している。陶器（図83－77・78）のほか、土師質土器、瓦が少量出土している。図83－77は、錆絵と呉須絵で山水文が描かれた京・信楽の丸碗で、18世紀代のものと考えられる。

【８号井戸】（図48、図版40）

Ｂ・Ｃ－８・９区で検出された。平面形は円形を呈する。北東部を撹乱によって壊されている。確認面での直径は約150㎝である。埋土は均一で礫はほとんど含まない。石組みや井戸枠などは確認されず、素掘りの井戸であると判断される。なお調査時当初には、撹乱と誤認してかなりの深さまで掘り進めたため、セクション図は作成していない。残った埋土は１層のみであり、粘性やや強、しまりやや弱の黒褐色（10YR3/1）シルト質土である。出土遺物は､図示した17世紀初頭の陶器小破片（図83－76）と､瓦片１点のみである。陶器は絵唐津の皿で、17世紀初頭頃まで遡るものである。建物など、周囲の遺構の配置関係からⅡｃ期のと考えたが、別な時期の可能性も残っている。

【12号遺構】（図49・50、図版40）

Ｄ－17区で検出した。２・３号溝（Ⅱｅ期）の合流地点から本遺構にかけて、２層由来と考えられる堆積土が広がっていた。これを地山まで掘り下げた時点でプランを検出した。東側と南側を撹乱によって破壊されている。東西170㎝以上、南北90㎝以上であり、平面形は楕円形を呈すると考えられるが、詳細は不明である。壁は外傾しながら立ち上がり、底面はほぼ平坦である。深さは20㎝であり、埋土は黒褐色と黄褐色の２層からなる。出土遺物には、19世紀代の陶器蓋（図83－79）、土師質土器皿（図90－27）などがあるが多くはない。土師質土器

の焙烙（図91－51）は、内耳の付くものである。

【13号遺構】（図48、図版40）

Ｆ・Ｇ－７・８区で検出された。７号遺構（Ⅰ期）埋土上面で平面プランを確認した。南側は撹乱によって壊されており、全体の平面形は不明だが、隅丸長方形であった可能性が考えられる。確認面からの深さは約30㎝である。陶磁器（図75－47・48、図83－80）、土師質土器（図91－52）、土製品（図97－４）、瓦が出土しているが、遺物量は多くない。陶器の図83－80は、大堀相馬で18世紀末から19世紀初頭以降に多く見られるようになる小碗である。

【23号遺構】（図51、図版41）

Ｆ－18区で21号遺構（Ⅰ期）埋土中において検出した。21号（Ⅰ期）・27号（Ⅱｃ期）・29号（Ⅱｂ期）遺構より新しい。北側を撹乱によって破壊されている。東西120㎝、南北100㎝以上であり、円形、もしくは楕円形を呈していたと考えられる。深さ20㎝であり、壁は内湾気味に立ち上がり、底面は平坦である。規模は小さいが比較的多くの遺物が出土しており、陶磁器（図75－49・50、図83－81～84）、土師質土器（図92－53・54）、瓦質土器、瓦、漆塗製品、鉄製品が見られる。磁器の図75－49は青磁の香炉で、17世紀後葉頃までさかのぼる。漆継ぎの痕跡が確認されることから、比較的長期間使用された可能性もある。陶器では、18世紀から19世紀中頃にかけての大堀相馬の製品が中心となっている。

【27号遺構】（図51、図版41）

Ｆ・Ｇ－18・19区で検出した。21号（Ⅰ期）・29号（Ⅱｂ期）遺構より新しく、23号遺構（Ⅱｃ期）、14号溝（Ⅱｅ期）より古い。北側の輪郭は、29号遺構とほぼ同一である。西側の一部を撹乱によって破壊されている。不整形を呈し、西と南側は溝状に張り出す。西側は９号溝に連結する可能性があり、本来は一連の遺構であったと考えられる。壁は外傾しながらゆるやかに立ち上がり、断面形は浅い皿状を呈する。深さは20㎝であり、埋土は暗褐色の単層である。その埋土からは、陶磁器（図76－51、図83－85・86、土師質土器、土製品、瓦（図100－19）、ガラス製品が出土している。図83－86は瀬戸・美濃の擂鉢で、年代では17世紀末から18世紀初頭とやや遡るものである。図83－85は大堀相馬の見込み印花文の皿で、釉は一部が糠白色に白濁していることから、18世紀末葉から19世紀初頭と考えられるものである。

図48　武家屋敷地区第11地点Ⅱc期の遺構（1）
Fig.48　Features belonging to phase IIc at BK11 (1)

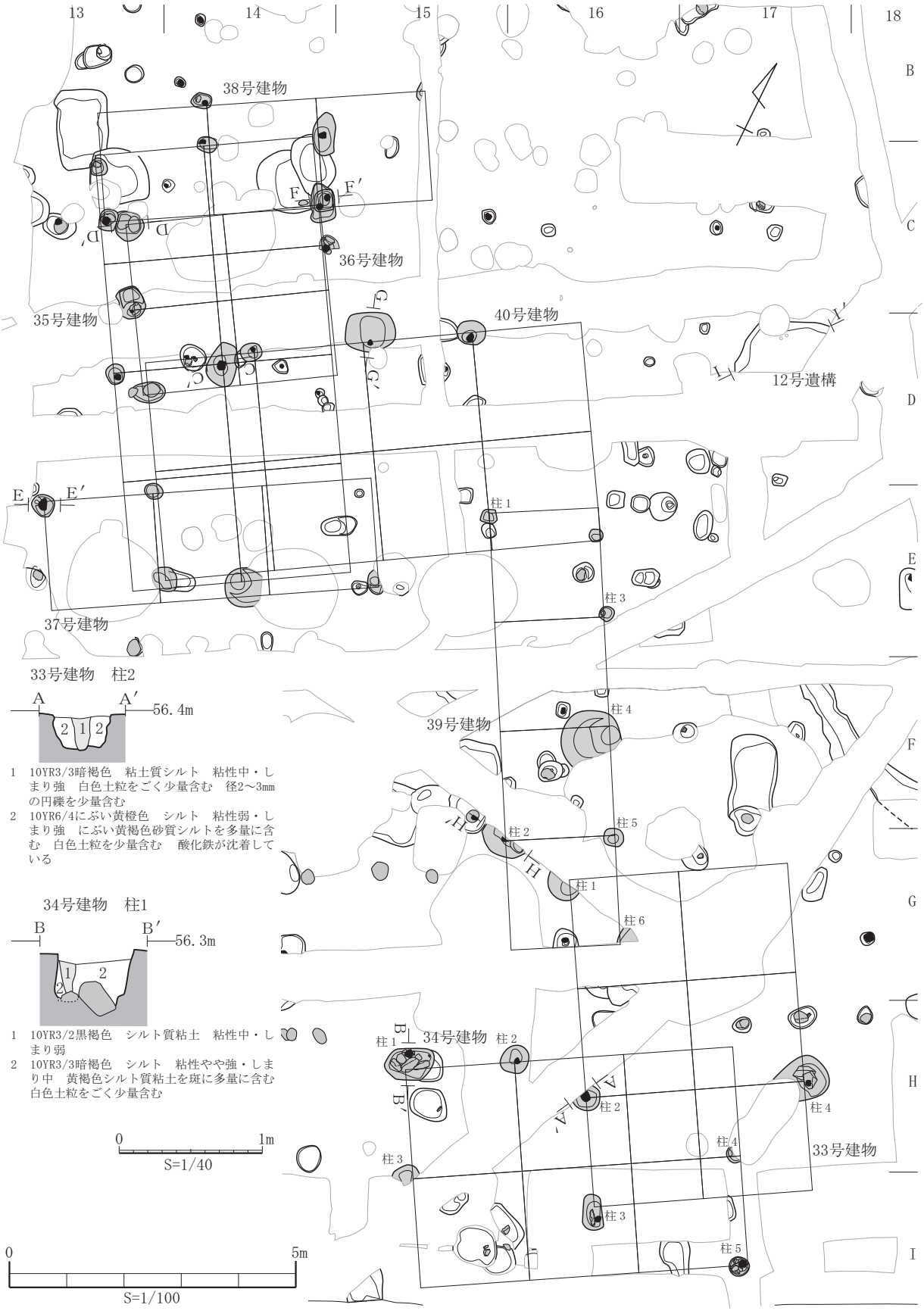
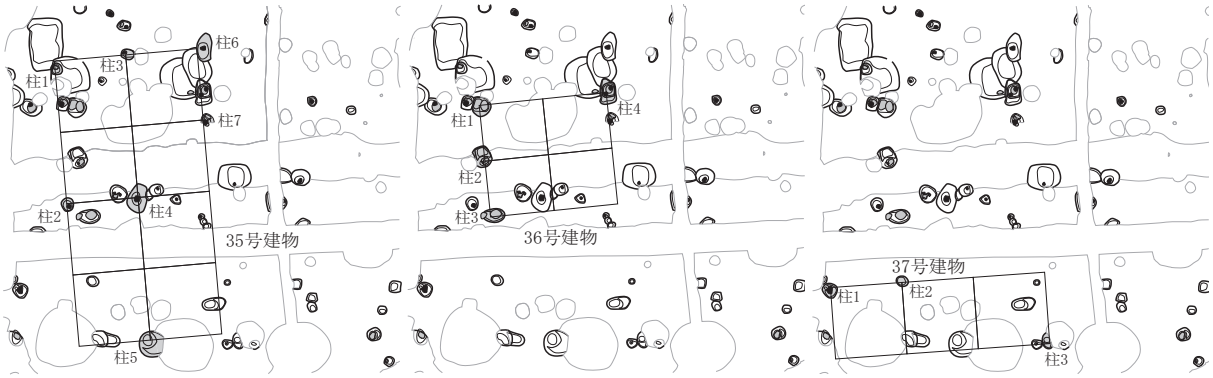
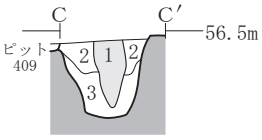


図49　武家屋敷地区第11地点Ⅱc期の遺構（2）
Fig.49　Features belonging to phase IIc at BK11 (2)

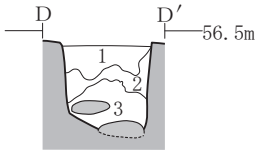


35号建物　柱4



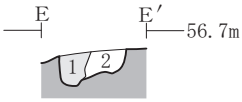
1　10YR4/2灰黄褐色　粘土　粘性強・しまり中
2　10YR3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　黄橙色粘土を中量斑に含み、暗褐色粘土を僅かに斑に含む
3　10YR6/4黄褐色　粘土　粘性強・しまり中　径1～2cmの黄褐色粘土、黒褐色粘土のブロックを僅かに含む

36号建物　柱1

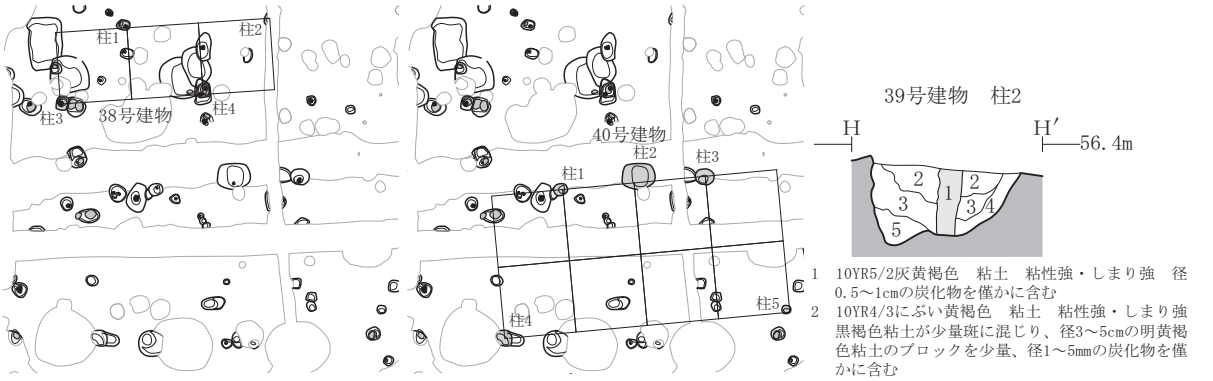


1　7.5YR2/3極暗褐色　粘土質シルト　粘性やや弱・しまり中　径2mm～5cmオリーブ褐色粘土質シルトを多量に斑に含む
2　10YR3/3暗褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　径2mm～5cmオリーブ褐色シルトを斑に多量に含む
3　2.5Y4/4オリーブ褐色　砂質シルト　粘性弱・しまりやや弱　径5mm～2cm暗褐色粘土質シルトを少量含む

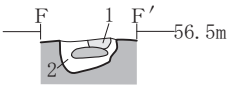
37号建物　柱1



1　10YR4/1褐灰色　粘土質シルト　粘性中・しまりやや弱　径2～4mmの炭化物と1～3mmの白色土粒を僅かに含む
2　10YR3/1黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　層下部に明黄褐色粘土を含む

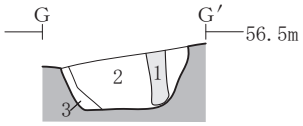


38号建物　柱4



1　10YR4/4褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり強　小礫を僅かに含む
2　10YR4/2灰黄褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり強　径0.5cmほどの黄褐色砂質シルトの粒と小礫を僅かに含む

40号建物　柱2

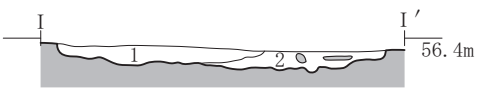


1　10YR3/2黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　径2cmほどの炭化物を僅かに含む
2　10YR3/3暗褐色　粘土　粘性強・しまりやや強　径2～5cmほどの粘土のブロックを少量含む
3　10YR5/6黄褐色　粘土　粘性強・しまりやや強　にぶい黄褐色粘土を僅かに含む

39号建物　柱2

1　10YR5/2灰黄褐色　粘土　粘性強・しまり強　径0.5～1cmの炭化物を僅かに含む
2　10YR4/3にぶい黄褐色　粘土　粘性強・しまり強　黒褐色粘土が少量斑に混じり、径3～5cmの明黄褐色粘土のブロックを少量、径1～5mmの炭化物を僅かに含む
3　10YR5/4にぶい黄褐色　粘土　粘性強・しまり強　暗褐色粘土質シルト、黄褐色シルト質粘土を少量、黒色シルト質粘土を僅かに斑に混じり、鉄分、径1mmほどの炭化物をごく僅かに含む
4　10YR3/2黒褐色　粘土　粘性強・しまり強　にぶい黄褐色粘土が中量、にぶい黄橙色粘土が少量斑に混じり、径1cmほどの炭化物、径5mmほどの白色土粒を僅かに含む
5　10YR6/6明黄褐色　粘土　粘性やや強・しまり強　にぶい黄褐色シルト質粘土を少量斑に含む

12号遺構



1　10YR3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　黄橙色砂質シルト、黄褐色粘土質シルトが少量斑の混じり、径0.5～4cmほどの炭化物、小石、小礫を少量含む
2　10YR5/8黄褐色　粘土　粘性強・しまり強　黒褐色シルトが中量斑に混じり、径0.5cmほどの炭化物と小石、小礫を僅かに含む

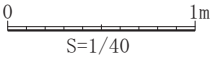
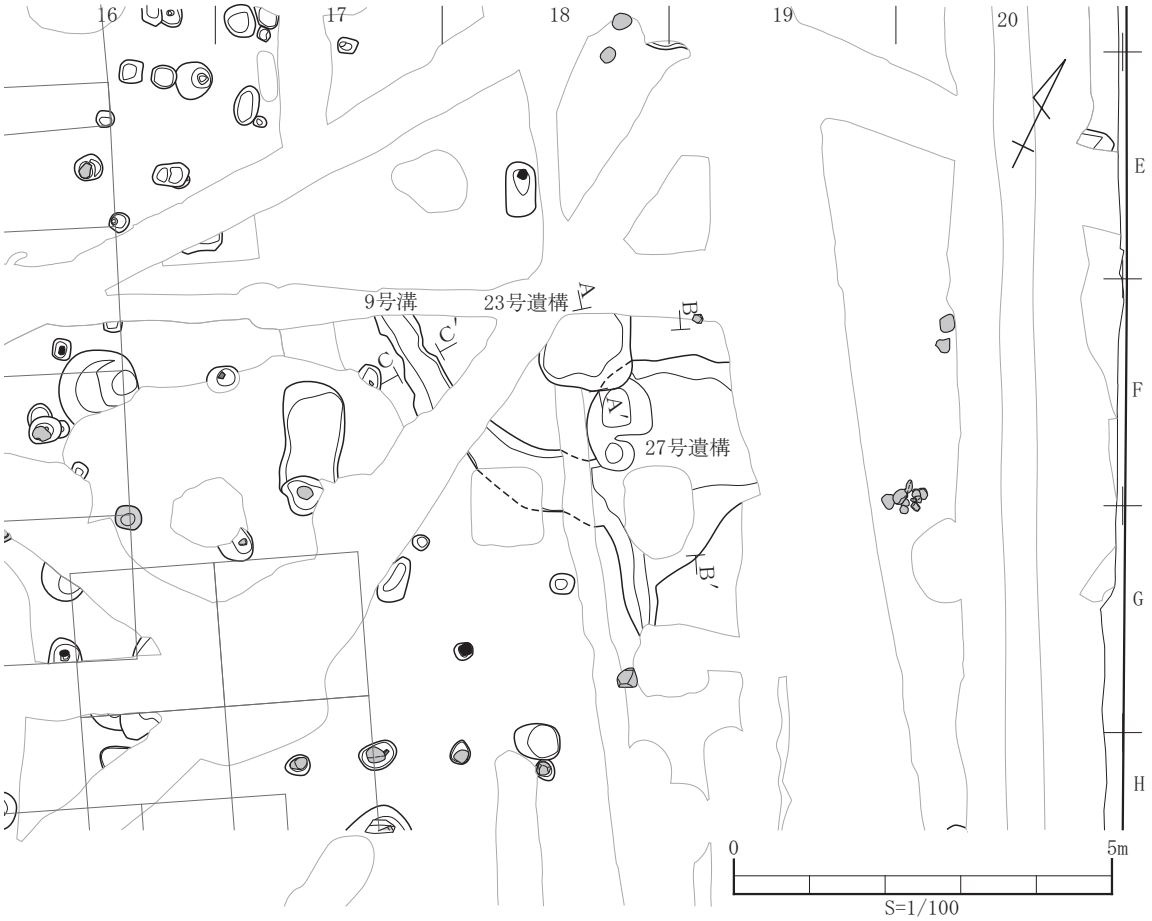
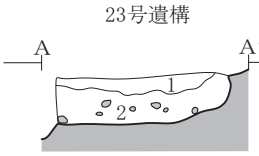
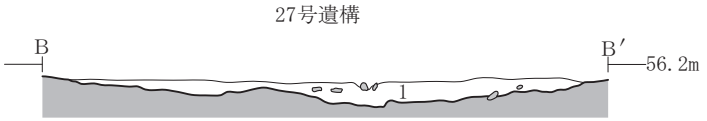


図50　武家屋敷地区第11地点Ⅱc期の遺構（3）
Fig.50　Features belonging to phase IIc at BK11 (3)

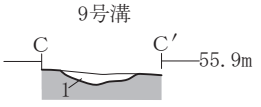




1 10YR4/2灰黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　にぶい黄褐色砂質シルトが少量、褐色シルトが僅かに斑に混じり、径0.5～1cmほどの炭化物と小礫を僅かに含む
2 10YR4/2灰黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　黄褐色砂が少量斑に混じり、径1～3cmほどの炭化物を層上部を中心に少量、鉄分と小礫を僅かに含む



1 10YR3/3暗褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　明黄褐色ブロックをごく僅かに含む　径3～5mmの炭化物を含む　白色土粒、赤色土粒を僅かに含む　径5cm程の円礫を含む



1 10YR3/2黒褐色　シルト　粘性弱・しまり強　部分的に黄褐色土小ブロックを含む　炭化物を多量に含む　径5cmの小円礫を含む　底面に部分的に褐色粗砂が入る所がある　A層と共通する土である

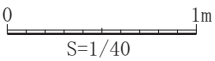


図51　武家屋敷地区第11地点Ⅱc期の遺構（4）
Fig.51　Features belonging to phase IIc at BK11 (4)

⑤Ⅱｄ期の遺構（図52）

調査区東側に建物跡が展開する。ほぼ前時期と同じ場所に位置する42･43･44号建物のほか、大形の41号建物が存在する。これらの建物の軸角度はＮ－26～28°－Ｗとなり、前時期に比べ傾きが小さくなり、Ⅱｂ期と近い値となる。その角度と合わせるように、調査区南半では溝跡が多数出現する。直接的な切り合い関係は認められない。19世紀前葉から中葉にかけての時期と推定した。

【41号建物】（図53・54、図版41・42）

Ａ～Ｄ－15～18区で検出された。方位はＮ－26°－Ｗである。柱間寸法６尺３寸と半間で、４.５×４間となる規模の大きな建物である。44号建物と重複するが、前後関係は不明である。16基の柱穴が検出されている。柱掘り方形状は、円形あるいは楕円形を呈する。検出された柱16基のほとんどが、撹乱により破壊されており、正確な規模などは不明である。残りの良い柱２・６・８～10の平面規模は、長軸42cm（柱９）～53cm（柱６）×短軸34cm（柱９）～52cm（柱６）、深さ７cm（柱６）～45cm（柱８）となり、比較的まとまっている。また、柱２･６･８･10･11･14では、柱痕跡が検出されている。柱６・８・10・11・14・15の掘り方底面には、礫が設置されている。柱痕跡がある柱６・８・10では底面近くに大形の礫が１点配置される。この柱８では、柱根が遺存していた。この柱は遺存状態が悪く形状が不明であるが、残存長17.2cmで、幅8.4×3.9cmとなる。出土遺物は瓦片３点のみである。

【42号建物】（図53・54、図版42）

Ｃ～Ｅ－13・14区で検出された。方位はＮ－27°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸で、１×３間となる。43号建物と重複するが、前後関係は不明である。７基の柱穴が検出されている。柱掘り方形状は、ほぼ円形である。柱３・６は、撹乱を受けたため形状などは不明瞭ではあるが、柱６はやや大きい。その他の柱の径は、40cm（柱４）～59cm（柱１）程であり、ばらつきは小さい。しかし、深さは５cm（柱５）～52cm（柱７）となり差が大きい。また、柱２・５・７で柱痕跡が検出されている。柱５では柱痕跡の北西側にやや大きな長楕円形の礫が置かれている。柱３・６は南側大部分を撹乱により破壊されているため詳細は不明である。出土遺物は磁器片１点、瓦片３点のみである。

【43号建物】（図53・54、図版42・43）

Ｃ～Ｅ－13～15区で検出される。方位はＮ－28°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸で、３×４間となる、やや大きめの建物である。42号建物と重複するが、前後関係は不明である。８基の柱穴が検出された。柱掘り方形状は、円形あるいは楕円形である。柱１・２・４・７は撹乱のため、正確な規模などは不明瞭である。柱３・６・８は円形で、それぞれ径34・56・46cm、深さは12・53・20cmとなり、柱６が比較的大きい。柱５は楕円形で、平面規模は63×43cm、深さ23cmである。南北方向に柱５・６と、やや大きな柱が並ぶ。柱７も、残存部位と深さ（45cm）から、それらと類似する規模であることが推測される。また、柱痕跡は、柱１～３・６・７で検出されている。柱３は、その柱痕跡があたる底面部分が一段くぼんでいる。柱７では、柱痕跡にあたる部分の大部分が空隙となっている（図版43－１）。柱２・５・８には大形の礫が１点底面に置かれており、柱２では柱痕跡下に礫がある。柱５から瓦片、柱７からは磁器の小中皿が出土している（図75－52）。

【44号建物】（図53・54、図版43）

Ｄ・Ｅ－15・16区で検出される。方位はＮ－28°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸で、２×２間となる。41号建物と重複するが、前後関係は不明である。５基の柱穴が検出された。柱掘り方形状は、ほぼ円形である。柱掘り方の規模は、径18cm（柱３）～41cm（柱１）、深さ６cm（柱１）～32cm（柱５）であり、それほど大きくはない。柱１・２で柱痕跡が残る。陶器破片１点のみが出土している。

【５号井戸】（図53・54、図版45）

Ａ・Ｂ－14・15区で検出した。平面形は円形を呈する。掘り方の直径は2.3mである。楕円形の大形礫の小口

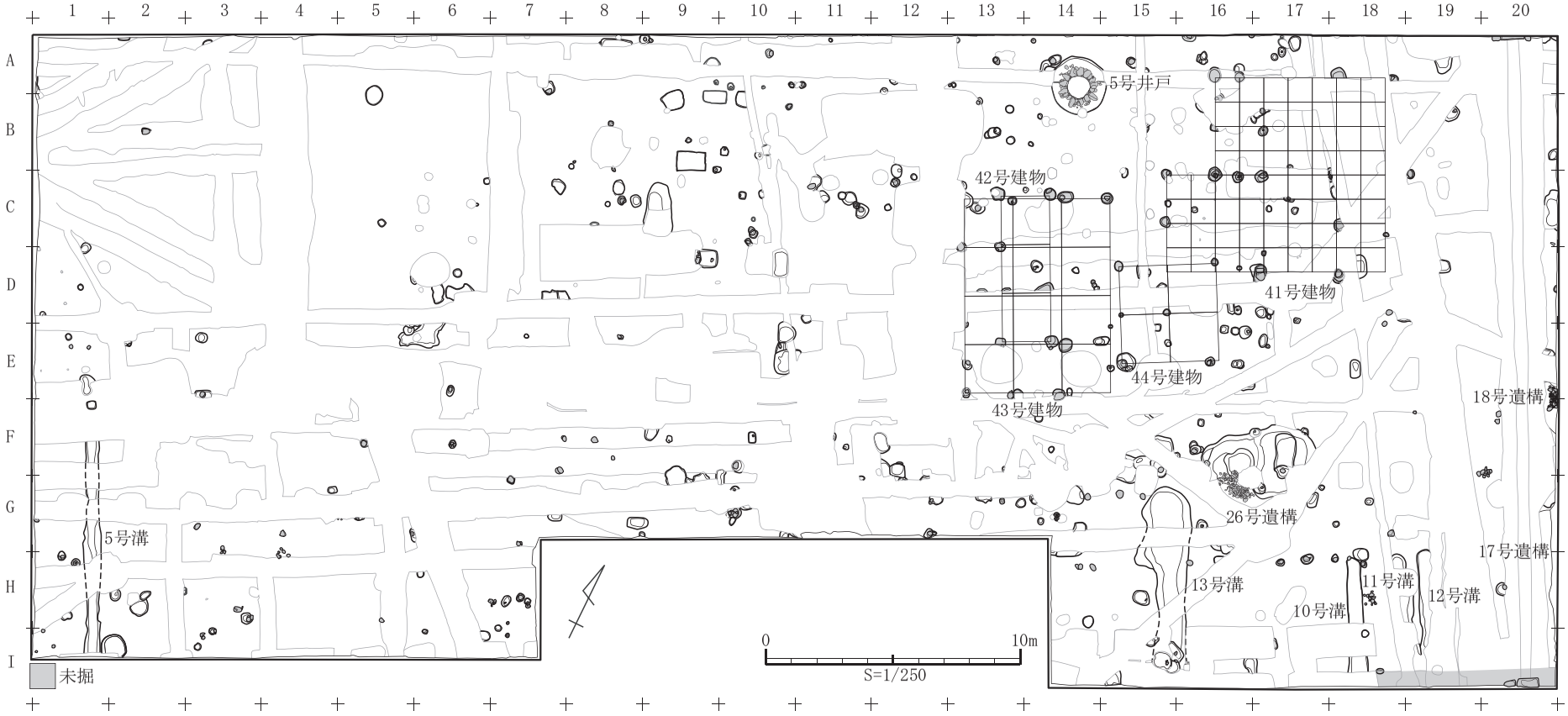


図52　武家屋敷地区第11地点Ⅱd期遺構配置図
Fig.52　Distribution of futures belonging to phase IId at BK11

方向を中心に向け積み上げ、井戸枠を構築する。この井戸枠の内径は約90㎝である。確認面より１ｍ程で掘り下げを止めた。この部分までの埋土は５層に別れる。１層は礫を多量に含んでいる。下層の方はグライ化した黒褐色を主体とした層となる。４層ではやや大形の礫、瓦などを含む。６層は石積み裏込め土となる。遺物は陶磁器（図76－53、図83・84－87 ～ 90）を中心として比較的多くの遺物が出土している。出土している陶器は18世紀から19世紀の年代幅があるが、図83－88の大堀相馬産の糠白色の土瓶蓋などから19世紀中頃には埋没した可能性を推定した。この井戸は、この遺物とほかの遺構との重複関係などからⅡｄ期と推定した。

【５号溝】（図58、図版43）

Ｆ～Ｉ－1区で検出した素掘りの溝である。方向はＮ－26.5°－Ｗとなる。底面は平坦である。残存長8.4m、幅80㎝、深さ25㎝である。沢状遺構埋土に構築されている。陶磁器や瓦が出土しているが極少数であり、図化した遺物は無い。

【10号溝】（図55・56、図版43・44）

Ｈ・Ｉ－18区で25・30号遺構（Ⅱｂ期）埋土において検出した素掘りの溝である。遺存状態は良くない。南側は調査区外にのびる。4.5m分を検出した。方位はＮ－30°－Ｗである。幅70 ～ 80㎝、深さ10㎝である。25・30号遺構埋土の溝状のくぼみに（Ａ層）が堆積して形成された可能性がある。陶磁器、土師質土器、瓦などが出土しているが、少数である。形態が判明する出土遺物は少なく、図化した遺物は無い。

【11号溝】（図55・56、図版44）

Ｇ～Ｉ－18区で25・28号遺構（Ⅱｂ期）埋土において検出した素掘りの溝である。12号溝がほぼ平行であるのに対して、若干西に傾いている。この12号溝と重複するが、新旧は不明である。西側は撹乱によって破壊されている。方位はＮ－33°－Ｗである。南側は、サブトレンチを設定した際に破壊してしまったが、おおむね長さは4.1m前後、幅50㎝以上、深さ20㎝である。25・28号遺構の埋土のくぼみに（Ａ層）が溝状に堆積して形成されたと考えられる。陶磁器、土師質土器、瓦が出土しているが極少数であり、図化した遺物は無い。

【12号溝】（図55・56、図版44）

Ｇ～Ｉ－18・19区で25・27（Ⅱｃ期）・28号遺構埋土において検出した素掘りの溝である。14号溝（Ⅱｅ期）より古い。南側は調査区外にのびる。3.9m分を検出した。方位はＮ－28.5°－Ｗである。幅60㎝以上、深さ20㎝以上である。25・28号遺構埋土の溝状のくぼみに（Ａ層）が堆積して形成された可能性がある。陶磁器、軟質施釉陶器、瓦が出土しているが、ほかの溝と同様に、極少数である。図示できたのは、瀬戸の磁器１点のみである（図76－54）。蓋付き碗の蓋で、19世紀前葉から中葉のものと考えられる。

【13号溝】（図55・56、図版44・45）

Ｇ～Ｉ－15・16区で検出した素掘りの溝である。南側は撹乱によって破壊されている。本来は調査区外までのびていたと考えられる。7.1ｍ分を検出した。方位はＮ－23.5°－Ｗであり、東側に並ぶ10･12･14号溝と近似する。幅は80 ～ 210㎝であり、北側が広く、南側が狭くなっている。深さは30㎝である。24号遺構（Ｉ期）埋土のくぼみに（Ａ層）が堆積して形成された可能性がある。多数の遺物が出土している。種類も多様で、陶磁器（図84－91 ～ 100）、土師質土器（図92－55）、瓦質土器（図94・95－18・19）、土製品、軟質施釉陶器、瓦（図107－52、図109－65）、煙管吸口（図115－５）や硯（図120－13）などがある。陶器は大堀相馬と東北産かと考えられる産地のものが中心で、19世紀代のものが主体を占める。

【17号遺構】（図55・57、図版45）

Ｇ～Ｉ－20区の１号暗渠完掘後に、壁面で検出した。東側と南側の大部分が調査区外であるため、平面形の詳細は、不明である。壁の立ち上がりも、撹乱によってほとんど破壊されており、北側でわずかに底面付近の立ち上がりを確認したのみである。底面はゆるやかな凹凸があり、南ほど深くなる。深さは90㎝であり、埋土は、ほぼ水平に堆積し、暗褐色～黒色土で構成され、下層ほど黒みが増す。下層の黒色土を中心に、木材が多量に出

土した。これらのことから、ゴミ捨て穴の可能性がある。暗渠をはさんで隣接する25･28号遺構（Ⅱｂ期）とは、埋土の違いから別遺構と判断した。周辺の遺構と同規模の遺構であったと考えられる。出土遺物は非常に多い。種類も多様で、陶磁器（図76－55 ～ 58、図84・85－101 ～ 110）、土師質土器（図90－28 ～ 33、図92－56・57）、瓦質土器（図95－20 ～ 23）、土製品（図97－５）、軟質施釉陶器、瓦、漆塗製品（図110-16）、木製品（図114－30）、鉄製品がみられる。陶磁器は、19世紀代を中心とするもので占められる。陶器では、大堀相馬の製品に加えて、東北の地方窯で作られたとみられる陶器や産地不明のものが非常に多くなり、肥前や瀬戸・美濃などはほとんど含まれなくなる。

【18号遺構】（図55・57、図版45）

17号遺構と同様に、Ｅ・Ｆ－20区で１号暗渠完掘後に壁面で検出した。東側の大部分が調査区外であり、周囲を撹乱によって破壊されているので、平面形の詳細は不明である。壁の立ち上がりも、撹乱によって破壊されているため、不明である。底面はゆるやかな凹凸があり、南ほど深くなる。埋土上層の集石は、当初は別遺構と考えていたが、断面検討の結果、埋土中のものと判断した。暗渠をはさんで隣接する20･29号遺構（Ⅱｂ期）とは、埋土の違いから別遺構と判断した。周辺の遺構と同規模の遺構であったと考えられる。調査した面積が小さいためか遺物は多くはない。陶磁器（図85－111 ～ 113）、土師質土器、瓦が出土している。

【26号遺構】（図55・56、図版46）

Ｆ・Ｇ－16・17区で検出した。39号建物柱４と重複し、それより新しい。南半の大部分を撹乱によって破壊されている。東西4.5m、南北3m 以上であり、不整な円形もしくは楕円形を呈すると考えられる。壁は外傾しながら立ち上がり､底面には凹凸がある。深さは60㎝であり､埋土はにぶい黄褐色と暗褐色が主体となる埋土上層（１～３層）と、にぶい黄褐色～褐色が主体となす埋土下層からなる。南西側には東西140㎝×南北130㎝の範囲で集石を検出した。明確なプランはなく､埋土下層の褐色土に混在しているため､埋土堆積時の混入の可能性がある。遺物は多量に出土しているが、埋土上層や埋土Ａ層相当層から出土したものの比率も高い。陶磁器（図76－59・60、図85・86－114 ～ 124）、土師質土器（図90－34・35）、瓦質土器（図95－24・25）、土製品（図97－７・８）、瓦、金属製品（図117－12）、火打石（図120－４）など多種多様な遺物が出土している。磁器は、肥前に加えて、東北産と考えられるもの（図76－59）や瀬戸（図76－60）が含まれる。陶器では､大堀相馬が非常に多く､肥前､瀬戸・美濃はわずかに含まれる程度である。陶磁器には、古くさかのぼるものも若干含まれるが、大部分は19世紀代のもので占められている。

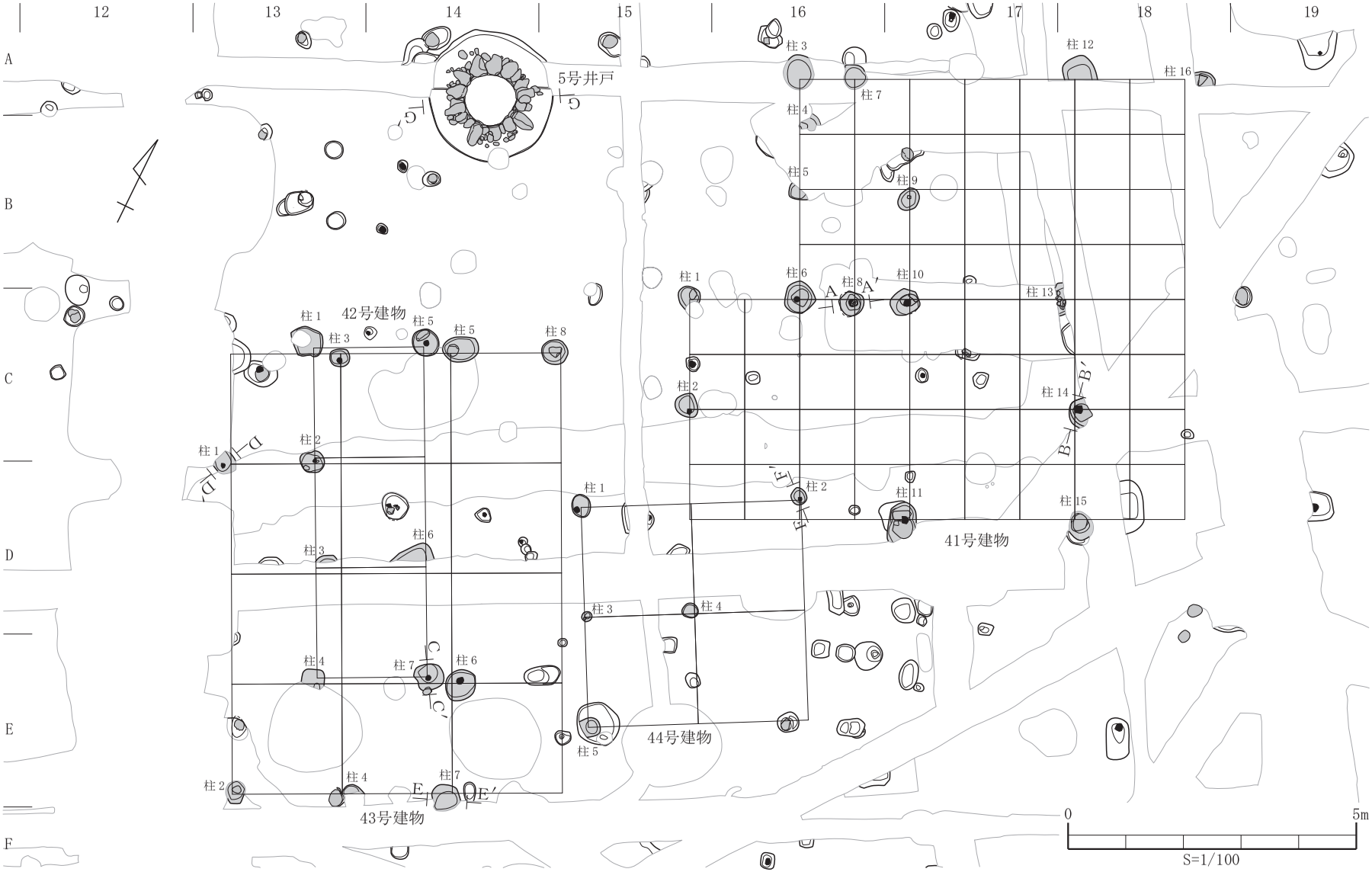
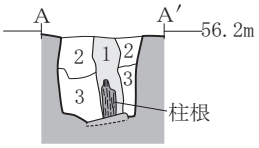


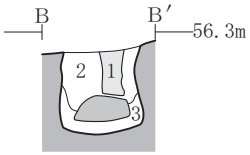
図53　武家屋敷地区第11地点Ⅱｄ期の遺構（1）
Fig.53　Features belonging to phase IId at BK11 (1)

41号建物　柱8



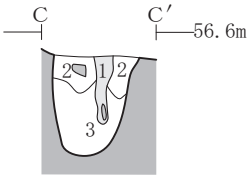
1　10YR3/1黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　灰黄褐色粘土質シルトを少量斑に含む　長さ約19cm、幅約3cmの柱の破片が残存
2　10YR6/4にぶい黄橙色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　黄褐色粘土が部分的に少量混じり橙色砂質シルト、にぶい黄砂質シルトを僅かに含む
3　10YR5/4にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　黒褐色粘土が少量斑に混じり、黄褐色粘土質シルトを僅かに含む

41号建物　柱14



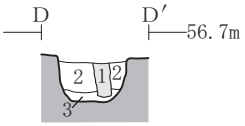
1　10YR2/3黒褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　径1cmほどの黄褐色粘土のブロックを中量、白色土粒を僅かに含む
2　10YR5/6黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　径1cmほどの黒褐色砂質シルトのブロックと小礫を少量含む
3　10YR6/4にぶい黄褐色　粘土　粘性強・しまり強　径1cmほどの黒褐色砂質シルト、明赤褐色砂質シルトを僅かに含む

42号建物　柱7



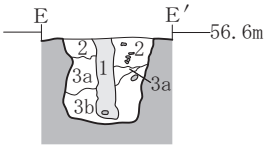
1　2.5Y3/1黒褐色　砂質シルト　粘性中・しまり強　灰黄褐色砂質シルト、オリーブ褐色粘土が少量斑に混じり、径5mmほどの炭化物、小礫、径1mmほどの白色土粒を僅かに含む
2　10YR6/6明黄褐色　粘土　粘性強・しまり強　にぶい黄褐色シルト質粘土が中量斑に混じり、灰黄褐色粘土質シルト、褐色粘土を部分的に含む　径0.1～1cmの炭化物、径0.3～1cmほどの小礫を僅かに含む
3　10YR4/4褐色　粘土　粘性強・しまり中　にぶい黄橙色粘土、黄褐色粘土が少量、橙色粘土が僅かに斑に混じり、径1mmほどの白色土粒を僅かに含む

43号建物　柱1



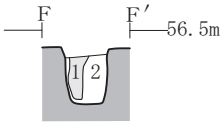
1　10YR4/3にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　径1cmほどの黄褐色粘土のブロックを少量、赤褐色砂質シルトを少量斑に含む
2　10YR6/6明黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　にぶい黄褐色シルトが中量斑に混じり、黒褐色粘土質シルトを粒状に少量含む
3　10YR3/2黒褐色　シルト質粘土　粘性やや強・しまり強　径1cmほどの黄褐色粘土、暗褐色粘土のブロックを少量含み、暗赤褐色粘土質シルトが僅かに混じる

43号建物　柱7



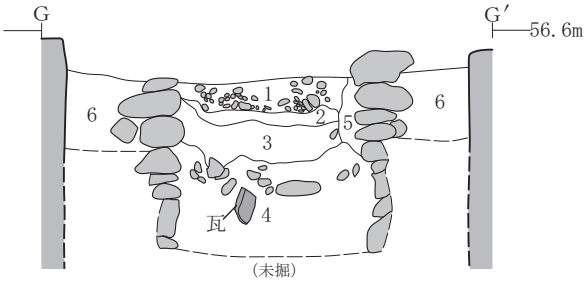
1　注記なし
2　10YR4/1褐灰色　粘土質シルト　粘性やや弱・しまりやや弱　1～5cm大の礫を多く含む
3a　10YR6/6明黄褐色　粘土　粘性やや強・しまりやや弱　径5mm～5cmの黒褐色粘土質シルトのブロックを少量含む
3b　10YR4/1褐灰色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　径3mm～5cmの明黄褐色粘土のブロックを多く含む

44号建物　柱2

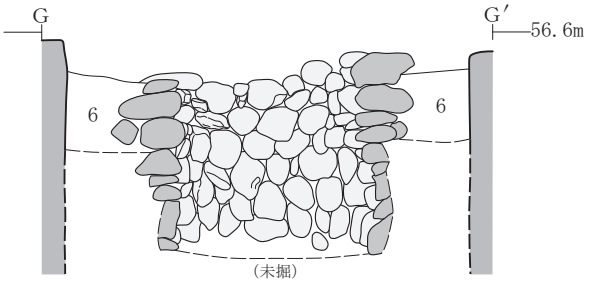


1　10YR5/3にぶい黄褐色　粘土　粘性強・しまり中
2　10YR5/6黄褐色　粘土　粘性やや強・しまりやや強　明黄褐色粘土質シルト、暗褐色粘土を極少量斑に含む

5号井戸



5号井戸（最終状況）



1　10YR4/6褐色　砂質シルト　粘性中・しまり中　径2～10mmの円礫を多量に含む　径1mmの白色土粒を含む　径1～10cmの円礫を多量に含む
2　10YR4/4褐色　シルト　粘性中・しまりやや強　径1～5mmの明黄褐色土粒を多く含む　径1mm以下の白色土粒、黒色土粒(マンガンか)を含む
3　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　径2～5mmの明黄褐色土粒を多く含む　径5～20mmの炭化物を僅かに含む　白色土粒を僅かに含む　径2～3cmの円礫をごく僅かに含む
4　10YR3/2黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱　径1cmの褐色小ブロックを含む径5mmの炭化物を含む
5　10YR3/2黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱　径1～3cmの明黄褐色小ブロックを多く含む　径1～2cmの炭化物を含む　白色土粒を含む
6　10YR3/4暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　地山由来と考えられる明黄褐色粘土ブロックを多く含む　白色土粒を含む　径1～5cmの円礫をやや多く含む

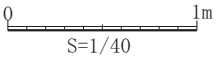


図54　武家屋敷地区第11地点Ⅱｄ期の遺構（２）
Fig.54　Features belonging to phase IId at BK11 (2)

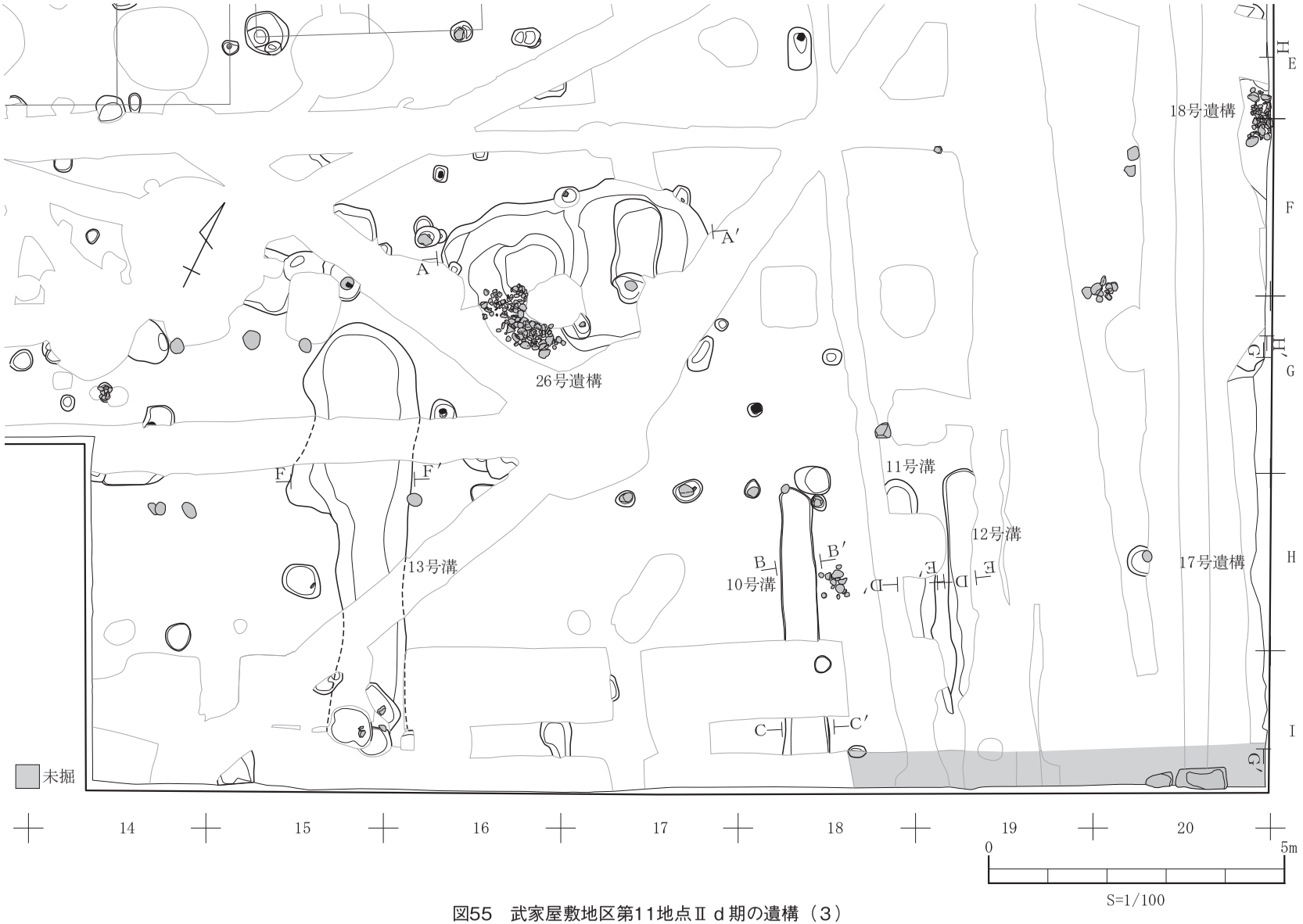
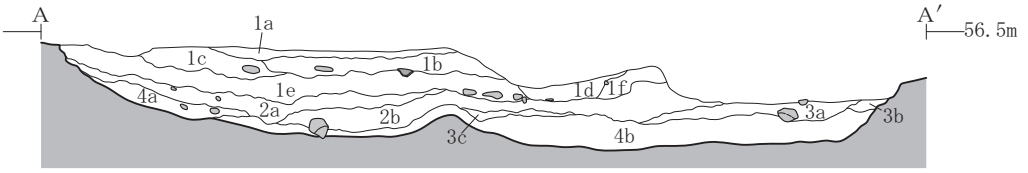


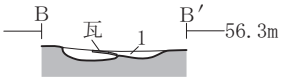
図55　武家屋敷地区第11地点Ⅱｄ期の遺構（３）
Fig.55　Features belonging to phase IId at BK11 (3)

26号遺構

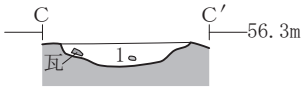


1a　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性弱・しまり中　明黄褐色ブロックを含む　径2～5㎜の炭化物を含む　径1㎜程の白色土粒、赤色土粒を含む
1b　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性弱・しまり中　径1～2㎝の炭化物をやや多く含む　径1～2㎜の白色土粒、赤色土粒を含む　径2㎝以上の礫を僅かに含む
1c　10YR3/3暗褐色　シルト　粘性弱・しまり中　径2～5㎜の炭化物を僅かに含む　径2～3㎜の白色土粒、赤色土粒を含む　径2㎝以上の礫を僅かに含む
1d　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　径2～3㎜の炭化物を僅かに含む　径1～2㎜の白色土粒、赤色土粒をやや多く含む　径2～3㎝の礫を僅かに含む　酸化鉄が沈着している
1e　10YR3/4暗褐色　シルト　粘性弱・しまり中　径2～5㎜の炭化物を含む　径1～2㎜の白色土粒、赤色土粒を含む　径1～3㎝の礫を僅かに含む
1f　10YR4/2灰黄褐色　シルト　粘性弱・しまり中　明黄褐色ブロックを僅かに含む　径2～3㎝の炭化物を僅かに含む　径1㎜の白色土粒を含む　径2～3㎝の円礫を僅かに含む　酸化鉄が沈着している
2a　10YR3/3暗褐色　シルト　粘性弱・しまり中　径2～10㎜の炭化物を僅かに含む　径2～3㎜の白色土粒、黄色土粒を僅かに含む　径2～3㎝の円礫を僅かに含む　酸化鉄がやや沈着している
2b　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　明黄褐色土小ブロックを僅かに含む　径2～10㎜の炭化物を僅かに含む　径1～2㎜の白色土粒、赤色土粒を僅かに含む　酸化鉄が沈着している
3a　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　径2～5㎜の炭化物を僅かに含む　径1～2㎜の白色土粒、赤色土粒を含む　径3㎝以上の円礫を僅かに含む酸化鉄がやや沈着している
3b　10YR4/2灰黄褐色　シルト　粘性弱・しまり中　白色土粒を僅かに含む　酸化鉄が僅かに沈着している
3c　10YR3/3暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　径3㎜の炭化物をごく僅かに含む　径1～2㎜の白色土粒、赤色土粒を僅かに含む
4a　10YR4/4褐色　シルト　粘性やや強・しまり中　径2～3㎜の炭化物を僅かに含む　径1～2㎜の白色土粒をやや多く含む　径1～2㎜の赤色土粒を僅かに含む　酸化鉄が僅かに沈着している
4b　10YR5/4にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり強　黒褐色土小ブロック、にぶい黄橙色土小ブロックを多く含む　赤色土粒を多く含む　酸化鉄が多く沈着している

10号溝（北側）

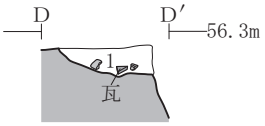


10号溝（南側）



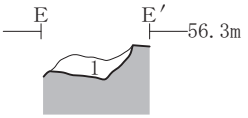
1　10YR3/4暗褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり強　径0.5㎝～2㎝ほどの明黄褐色粘土のブロック、径1～5㎜ほどの炭化物、小礫をごく僅かに含む

11号溝



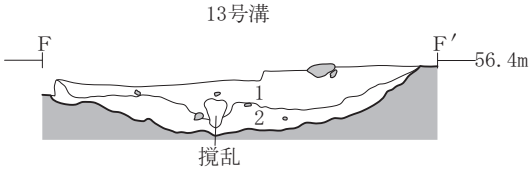
1　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　明黄褐色粘土質シルトを少量含む　白色土粒をやや多く含む　径3～5㎝の円礫を含む

12号溝

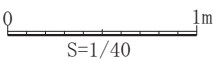


1　10YR3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり弱　にぶい黄褐色粘土質シルト、黄褐色シルト質粘土をブロック状に多量に含む　炭化物を多量に含む　白色土粒をやや多く含む

13号溝



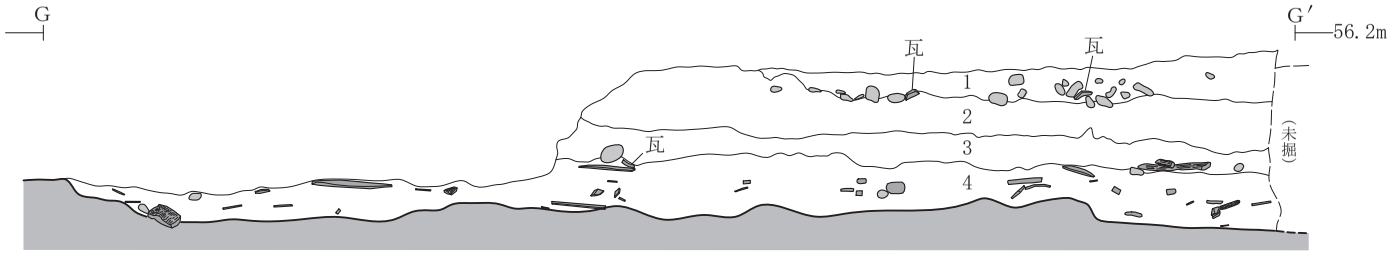
1　10YR4/3にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　下面近くは砂の割合が多くなる　黄褐色土小ブロックを僅かに含む　径1㎝前後の炭化物を含む　小円礫、人頭大の川原石を多く含む
2　10YR4/3にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　1層よりやや明るい　明黄褐色土小ブロックを多量に含む　炭化物を含む　5㎝以下の小円礫を含む



S=1/40

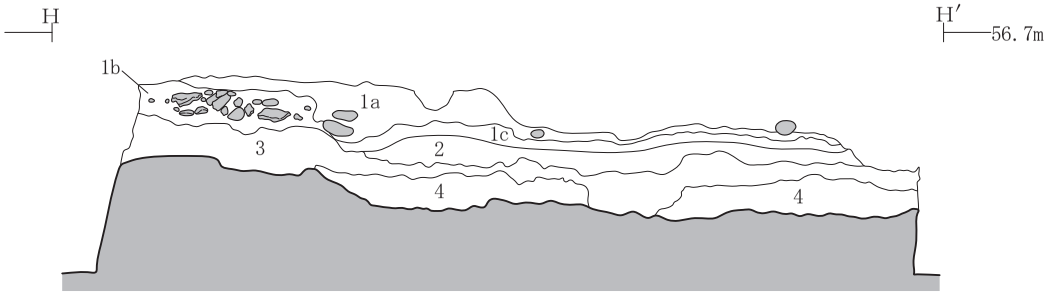
図56　武家屋敷地区第11地点Ⅱｄ期の遺構（４）
Fig.56　Features belonging to phase IId at BK11 (4)

17号遺構



1　10YR3/4暗褐色　シルト　粘性やや弱・しまり中　オリーブ褐色粘土質シルトを層の上部にブロック状に多量に含む　褐色シルトを斑に多量に含む　径5cm～拳大の礫を多量に含む
2　10YR3/3暗褐色　粘土質シルト　粘性中・しまりやや弱　径5mm～3cmの炭化物を斑に多量に含む　層の下部に酸化鉄が沈着している
3　10YR2/2黒褐色　シルト質粘土　粘性中・しまりやや弱　灰黄褐色粘土質シルトやにぶい黄褐色シルトを少量含む　径5mm～3cmの炭化物を斑にやや多く含む
4　10YR2/1黒色　シルト質粘土　粘性弱・しまり弱　灰黄褐色シルトを少量含む　全体に酸化鉄が沈着している　自然木や木材を多量に含む

18号遺構



1a 10YR4/4褐色　シルト　粘性やや弱・しまり中　黄褐色粘土質シルト、暗褐色シルト質粘土、黒褐色粘土質シルトをブロック状に多量に含む　炭化物を少量、白色土粒、黄褐色土粒をやや多く含む　酸化鉄が僅かに沈着している
1b 10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性やや強・しまり中　径3～4mm黄褐色粘土質シルトをブロック状に多く含む　炭化物をごく少量含む　層の中央付近に川原石が密集して混入している　基本土層の2層に非常に類似している
1c 10YR3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性弱・しまり弱　炭化物、白色土粒を少量含む
2　10YR4/4褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　褐色粘土質シルトをブロック状に少量含む　炭化物、白色土粒、径2～3mmの円礫を少量含む
3　10YR3/4暗褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり強　黄褐色粘土質シルトをブロック状に多量に含む　炭化物、白色土粒を少量含む
4　10YR4/3にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　灰黄褐色粘土質シルト粘を多量に含み、層の下部に集中する　黄褐色粘土質シルトをブロック状にやや多く含む　炭化物、白色粒、径2～4cmの円礫を少量含む　酸化鉄が僅かに沈着している

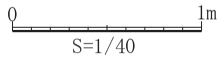
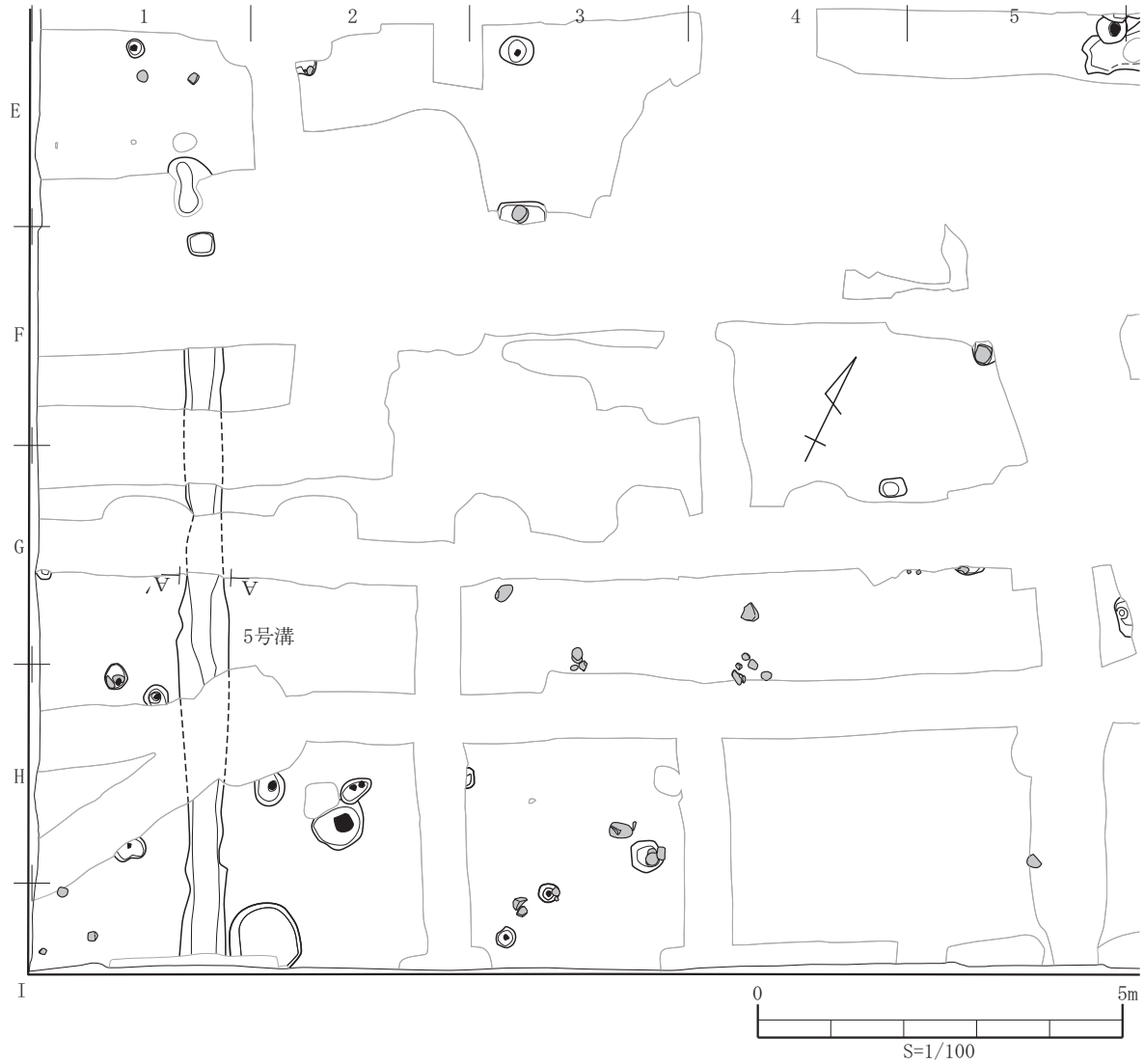
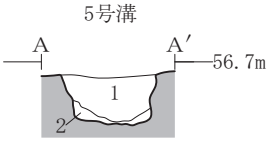


図57　武家屋敷地区第11地点Ⅱｄ期の遺構（５）
Fig.57　Features belonging to phase IId at BK11 (5)





1 10YR5/2灰黄褐色 シルト 粘性弱・しまり強 下部に細砂が成層する場所もある 地山由来の黄褐色粘土小ブロック含む 褐色砂少量含む 径10～20㎜の小礫やや多く含む
2 10YR5/3にぶい黄褐色 シルト 粘性有・しまり強 1層よりやや黄色味がある 黄褐色粘土粒多く含む 褐色砂を1層より多く含む 小礫少量含む

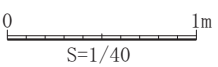


図58 武家屋敷地区第11地点Ⅱd期の遺構（6）
Fig.58 Features belonging to phase IId at BK11 (6)

⑥Ⅱｅ期の遺構（図59）

溝跡が比較的多く出現する時期である。今回の調査区では、溝跡は全般に少ないが、その中ではⅡｅ期は溝跡が多い。調査区東半に２～４・８号溝が交差しつつ展開する。建物が調査区中央から東よりの区域に造られているが、比較的小規模な建物が多い。建物の分布も疎らで、特に密集する部分もない。Ⅱａ期からⅡｄ期に見られるような、同じ場所での建て替えは認められない。建物の軸角度はＮ－27～29°－Ｗとなる。２号溝などからまとまって出土した陶磁器類から、時期は幕末（19世紀中葉）から明治初頭（19世紀後葉）頃と推定した。次のⅢ期との関係から、明治時代に入ったとしても、屋敷の取り壊しが始まるまでの、ごく最初の時期までに限定できると考えられる。

【45号建物】（図60、図版46）

Ａ・Ｂ－９～11区で検出された。方位はＮ－29°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸で、３×１間となる。４基の柱穴が検出された。柱掘り方の遺存状況は悪く、柱１ではほぼ礫のみが検出され、柱４の形状などは不明である。柱２は楕円形で、51×36cm、深さ18cmである。柱３は円形で、径33cm、深さ９cmと浅い。出土遺物は無い。

【46号建物】（図61、図版46）

Ｅ・Ｆ－14区で検出された。方位はＮ－28°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸で、１×２間となる。４基の柱が検出された。柱掘り方形状は、楕円形を呈する。柱１・２の掘り方の規模は、それぞれ41・39×40・31cm、深さ44・54cmとなり、ほぼ同規模である。柱３・４は、深さ35・58cmであるが、撹乱のため正確な平面規模は不明である。柱痕跡や礫は、柱４のみに認められた。底面に礫が置かれており、柱痕跡はその上面にあたる。

【47号建物】（図61、図版47）

Ｆ・Ｇ－12・13区で検出された。方位はＮ－27°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸であり、３×２間となる。５基の柱穴が検出された。柱掘り方形状は、ほぼ楕円形を呈する。柱５がもっとも大きく、71×44cm、深さ19cmである。そのほか、撹乱で半分が破壊されている柱１（深さ９cm）以外の規模は、28cm（柱２）～43cm（柱４）×19 cm（柱２）～43 cm（柱４）、深さ６cm（柱２）～23cm（柱４）となる。柱１・５に柱痕跡が検出された。礫等は存在しない。出土遺物は陶器片１点、瓦片７点のみである。

【48号建物】（図62・63、図版47）

Ｂ・Ｃ－14・15区で検出された。方位はＮ－29°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸であり、２×２間となる。５基の柱穴が検出された。柱掘り方形状は、楕円形を呈する。長軸37cm（柱４）～45cm（柱２）×短軸26cm（柱１）～36cm（柱３）、深さ15cm（柱４）～36cm（柱１）となり、規模に大きな差異は認められない。柱３・５では、明瞭な柱痕跡が検出されている。柱１では、確認面上部に礫が置かれており、その礫下に柱痕跡状の垂直な埋土が存在する。柱２の掘り方底面には礫が置かれているが、柱痕跡状の埋土部分とは重ならない。出土遺物は陶器片１点、瓦片３点のみである。

【49号建物】（図61、図版47・48）

Ｇ・Ｈ－14～17区で検出された。方位はＮ－28°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸であり、４×２間となる。24号遺構（Ⅱｄ期）、25号遺構（Ⅱｂ期）の上面に構築されている。４基の柱穴が検出された。柱掘り方形状は、円形あるいは楕円形を呈する。円形の柱１・４は、径36・41cmで、深さは15・18cmである。楕円形の柱２・３は、55・25×40・21cm、深さ22・27cmである。形状による規模の違いは、ほぼ認められない。柱１では礫、柱２・４では柱痕跡が検出されている。柱２の掘り方底面では、柱痕跡のあたる部分がくぼんでいる。柱４は、25号遺構がかなり埋没した段階で構築されている（図45）。その柱４からは、17世紀後半と推定される磁器猪口（図76-61）が出土しているが、周辺はⅠ期より遺構が多く存在する地域でもあるため、混入したものと考えられる。ほかに柱１・３からは陶磁器・瓦などが出土している。

【１号溝】（図60、図版48）

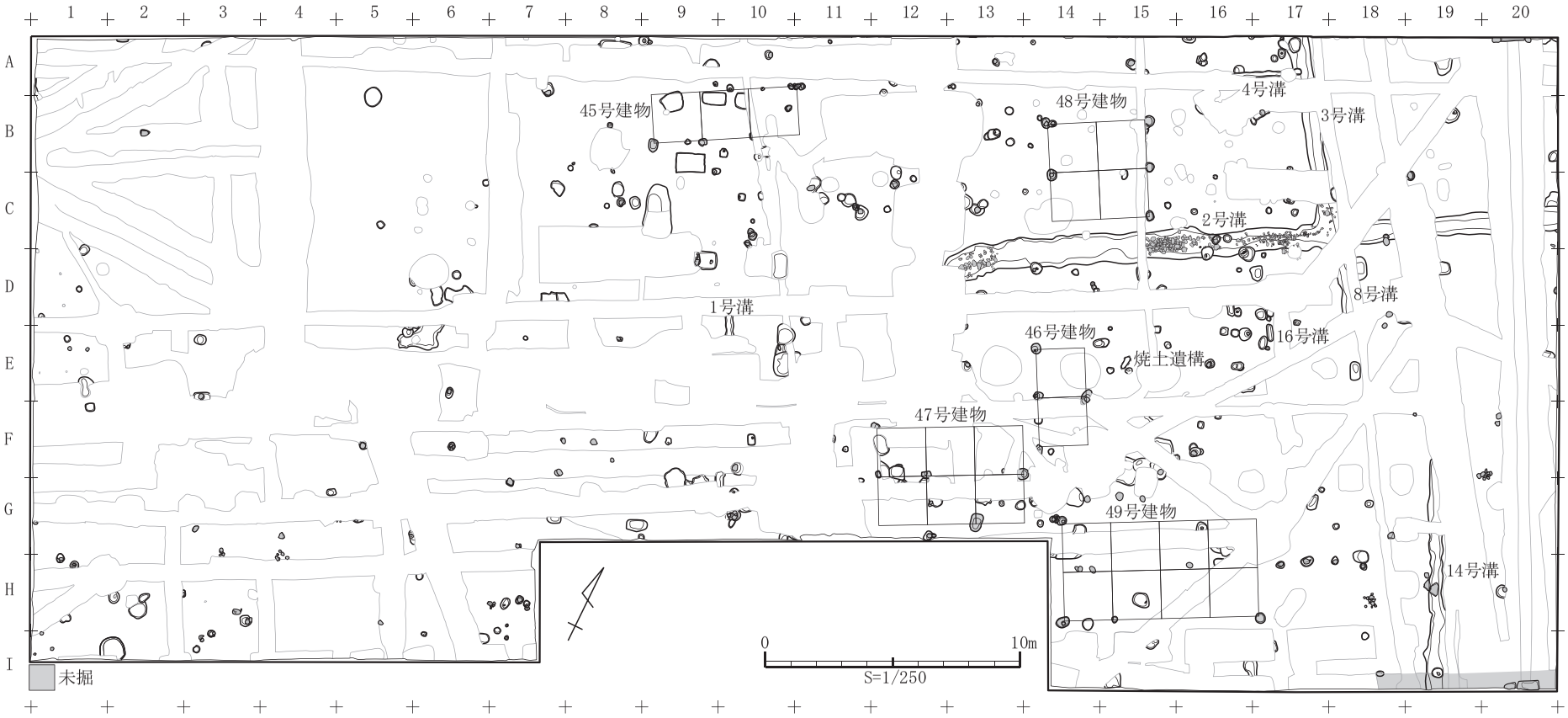


図59　武家屋敷地区第11地点Ⅱe期遺構配置図
Fig.59　Distribution of futures belonging to phase IIe at BK11

Ｄ・Ｅ－10区で検出された、南北方向に延びる溝である。全体に削平を受けており、地山面で確認された。確認された部分での幅は約30㎝、深さは約10㎝である。埋土は２層に分かれる。断面形はＵ字状である。出土遺物は無い。

【２・３号溝】（図62・63、図版48・49）

Ａ～Ｄ－12 ～ 20区の広範囲にかけて検出した素掘りの溝である。当初は別個の遺構と考え、東西方向にのびる溝を２号溝、南北方向にのびる溝を３号溝として調査していた。交差する部分に明確な角を有さず、なだらかに合流すること､埋土の観察で切り合い関係が認められなかったことから､一連の遺構と判断した。ここでは､２・３号溝として一括して記載する。Ⅱｄ期の 41・42・44号建物より新しく、Ⅱｅ期の４号溝、Ⅲ期の 51号建物より古い。

２号溝は、西側を撹乱によって破壊されている。東側は調査区外にのびており、24.4ｍ分を検出した。方位はＮ－59°－Ｅ､幅は70～120㎝で東ほど相対的に狭くなっている｡西端は南に向かってゆるやかにカ－ブしている。底面標高は 56.1 ～ 56.4ｍとなり、東側が約30㎝低くなっている。13 ～ 16列にかけて、底面直上に酸化鉄が層状に沈着している。また､酸化鉄が分布する範囲で地山がグライ化している。川原石が集中する部分が３ヶ所ある。西側と東側のまとまりは、埋土中、中央のまとまりは底面付近で検出した。いずれも明確なプランは認められない。

３号溝は、２号溝と 95°で交わり、方位はＮ－36°－Ｗである。北側は調査区外にのびており、7.4ｍ分を検出した。幅は 60 ～ 90㎝で断面はすり鉢状である。底面標高は 56.2 ～ 56.3ｍであり､南に向かってわずかに低くなっている。合流地点で両者の底面標高はほぼ同じになる。また、南側で隣接する８号溝は、底面標高56.2ｍであり、３号溝の傾斜をさらに南に延長することを想定した場合の標高と近似する。また、埋土の様相が似ていることから、８号溝は３号溝の延長部分であった可能性がある。

底面標高からは、３号溝を通じて北から流れてきた水が２号溝に合流し、２号溝の西からきた水とともに東方へと流す排水施設であった可能性が高い。

出土遺物は多く、多様なものが出土している。陶磁器（図76－62 ～ 66、図86－125 ～ 138)、土師質土器、瓦質土器（図96－29)、土製品、軟質施釉陶器（図98－１)、瓦、漆塗製品、古銭（図119－15)、金属製品などがある。陶磁器類では、幕末頃のものが主体を占めるが、やや古いものも散見され、伝世品か混入と思われる。磁器では肥前に加えて、他の産地の製品の割合もより高くなっている。碗では、端反碗が多く、広東碗もみられる。図76－64 は、胎土や釉、呉須の発色から肥前や瀬戸の製品ではなく、東北産の磁器と考えられるものである。図76－63 は非常に薄手の磁器で、19世紀中葉以降と考えられ、混入の可能性もある。陶器では、大堀相馬と東北産と思われるものが中心である。堤の可能性が考えられるものも含まれる。大堀相馬の陶器では、灰釉はいずれも糠白色を呈した失透釉である。大堀相馬の土瓶の蓋では、鉄釉に白土で筒描きの文様が描かれるもの（図86－126）や、飛び鉋による文様が施され鉄釉が施釉されたもの（図86－127）がみられ、明らかに明治期に下るものは含まれていない。これら陶磁器類に比べ、瓦類の出土量は多くはない。

【４号溝】（図62・63、図版49・50）

Ａ－16・17区で検出した素掘りの溝である。３号溝より新しい。西側は撹乱によって破壊されている。2.7ｍ分を検出した。方位はＮ－60.5°－Ｅである。幅10㎝、深さ 10㎝であり、断面は蒲鉾状である。出土遺物は陶器・瓦が１点ずつのみであり、図化したものは無い。

【８号溝】（図62・63、図版50）

Ｄ－18区で検出した素掘りの溝である。21号遺構（Ⅰ期）より新しい。北、東、南側を撹乱によって破壊されている。２ｍ分を検出した。方位はＮ－36°－Ｗである。撹乱により東端が破壊されているため、幅は 40㎝以上と見られる。深さは 10㎝である。撹乱をはさんで北側に隣接する３号溝とは、底面標高、軸方位が近似してい

ることから、３号溝の延長部分の可能性が高い。遺物は非常に少なく、陶磁器、土師質土器、土製品、瓦がわずかに出土しているだけである。図示できたものは無い。陶磁器は小片のみで、年代などが詳しく判明する資料は見られない。

【14号溝】（図61、図版44・50・51）

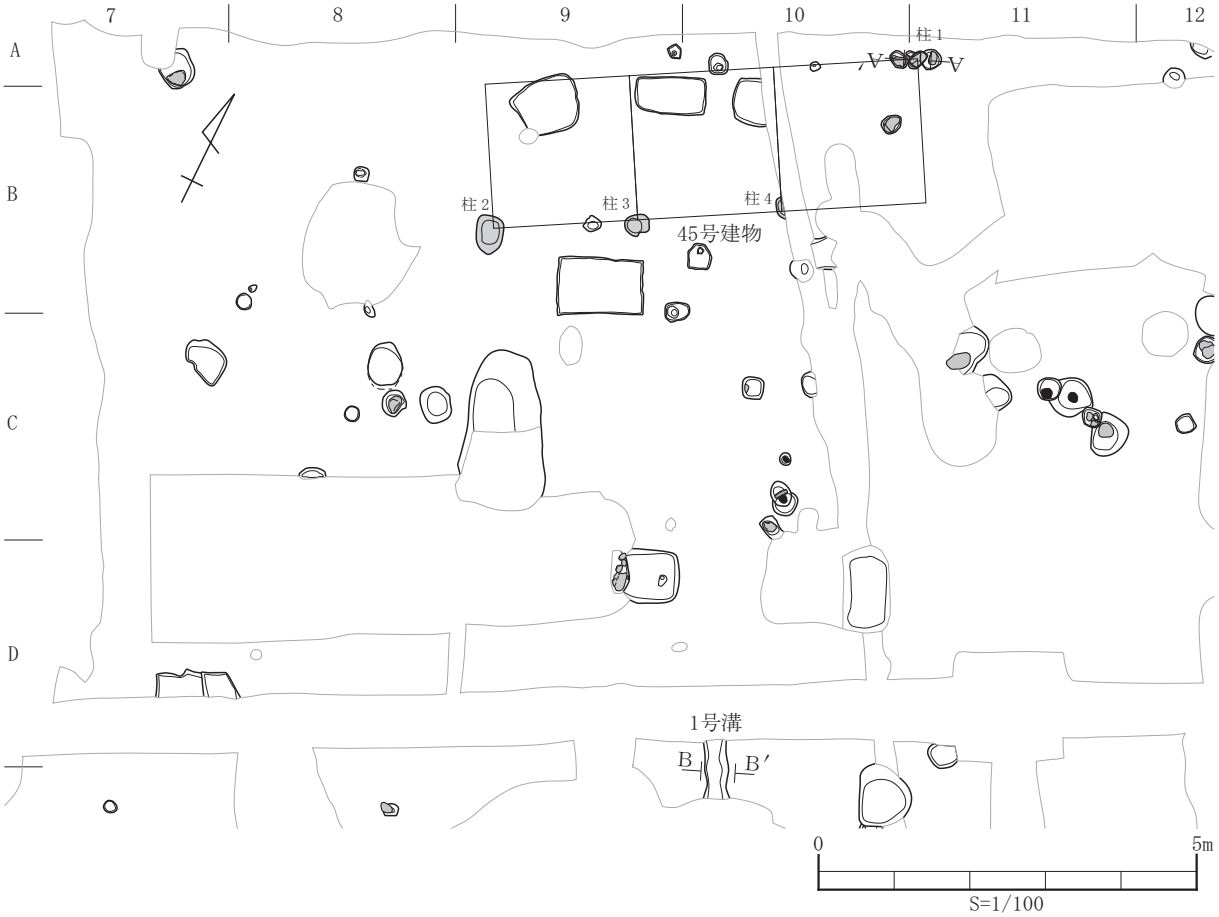
Ｆ～Ｉ－18・19区で25・27・28号遺構埋土において検出した素掘りの溝である。それらの遺構のほか、12号溝（Ⅱｄ期）より新しい。遺構検出時には、12号溝と14号溝をひとつの遺構として認識していたため、遺物についても多くが12･14号溝としてまとめて取り上げられている。南側は調査区外にのび､東側の一部は撹乱によって破壊されている。９ｍ分を検出した。方位はＮ－24.5°－Ｗである。幅50㎝前後、深さ50㎝である。調査区南壁で確認したセクションには、埋土に介入するように２ａ層に類似した土が堆積していた。25・27・28号遺構埋土の溝状のくぼみに（Ａ層）が堆積して形成された可能性がある。ほとんどの遺物の取り上げが12号溝と一緒になってしまっているため、14号溝に帰属できる遺物は少ない。12・14号遺構として取り上げた陶磁器類は、17～18世紀に収まるものがほとんどであるが、19世紀のものも含まれており、年代にまとまりがない。14号溝として取り上げた遺物には、陶磁器（図76－67、図86－139）、土師質土器、瓦、金属製品がある。図76－67は、小型端反碗で、瀬戸の磁器とみられる。遺構の重複関係からⅡｅ期に比定した。

【16号溝】（図62・63、図版51）

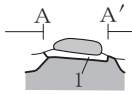
Ｅ－17区で検出された南北方向に延びる素掘りの溝状の遺構である。検出された範囲外に広がっている様子はなく、確認面での幅は約20㎝、長さは約70㎝である。長さが短いことから、溝としての機能を想定して良いか問題が残る。断面形は浅いＵ字状を呈する。出土遺物は無い。

【焼土遺構】（図62・63、図版51）

Ｅ－15区のピット689（Ⅱｄ～Ⅱｅ期）埋土で検出した。長軸44㎝、単軸19㎝の楕円形を呈する。深さは12㎝である。出土遺物は無い。

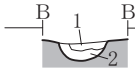


45号建物　柱1



1　2.5Y5/4黄褐色　シルト　粘性中・しまりやや強

1号溝



1　7.5YR3/2黒褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　径2～5cmほどの礫を含む
2　10YR4/2灰黄褐色　シルト　粘性やや弱・しまりやや弱　径1cmほどの黄褐色シルト質粘土のブロックを少量含む

0　1m
S=1/40

図60　武家屋敷地区第11地点Ⅱe期の遺構（1）
Fig.60　Features belonging to phase IIe at BK11 (1)

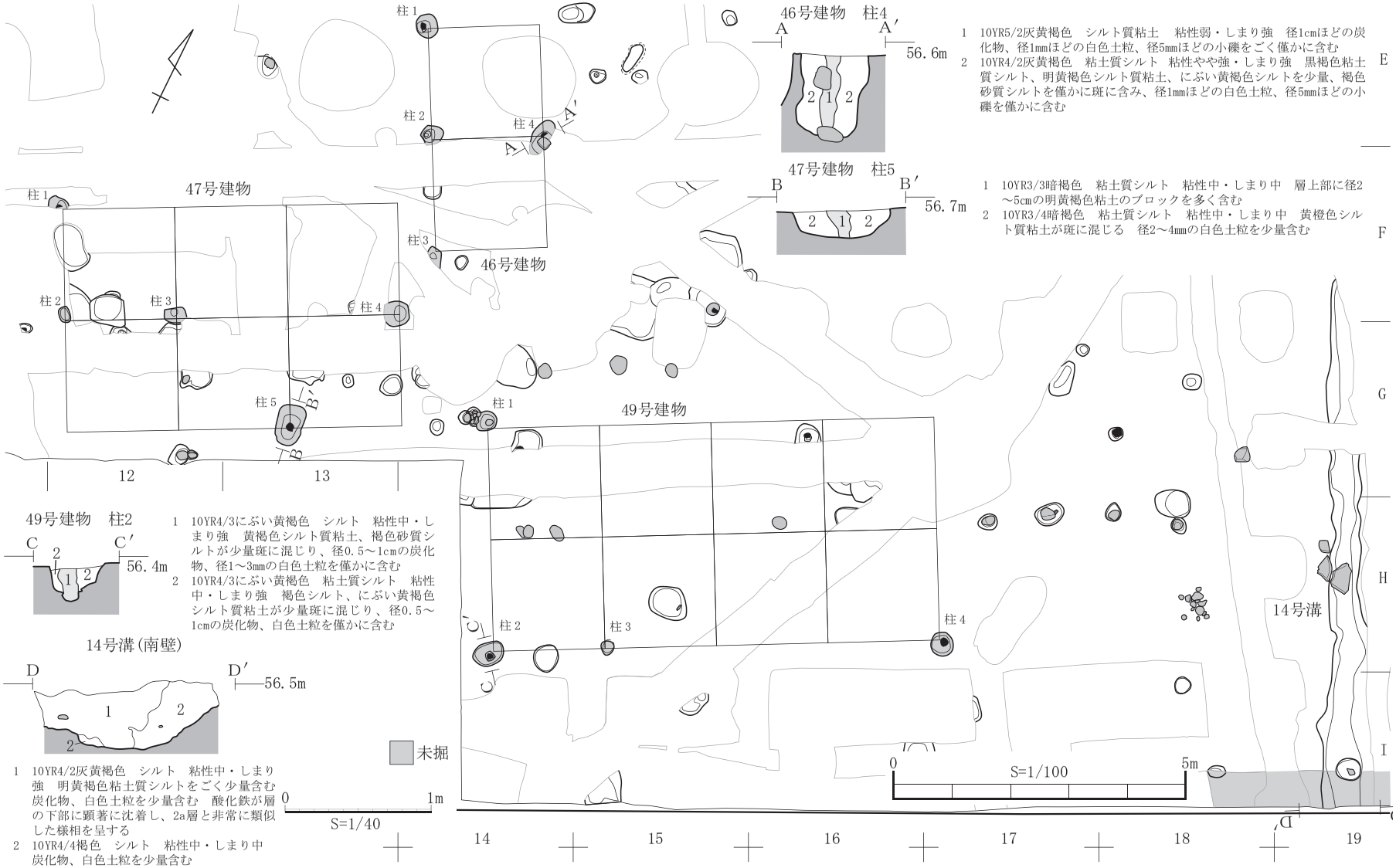


図61　武家屋敷地区第11地点Ⅱｅ期の遺構（2）
Fig.61　Features belonging to phase IIe at BK11 (2)

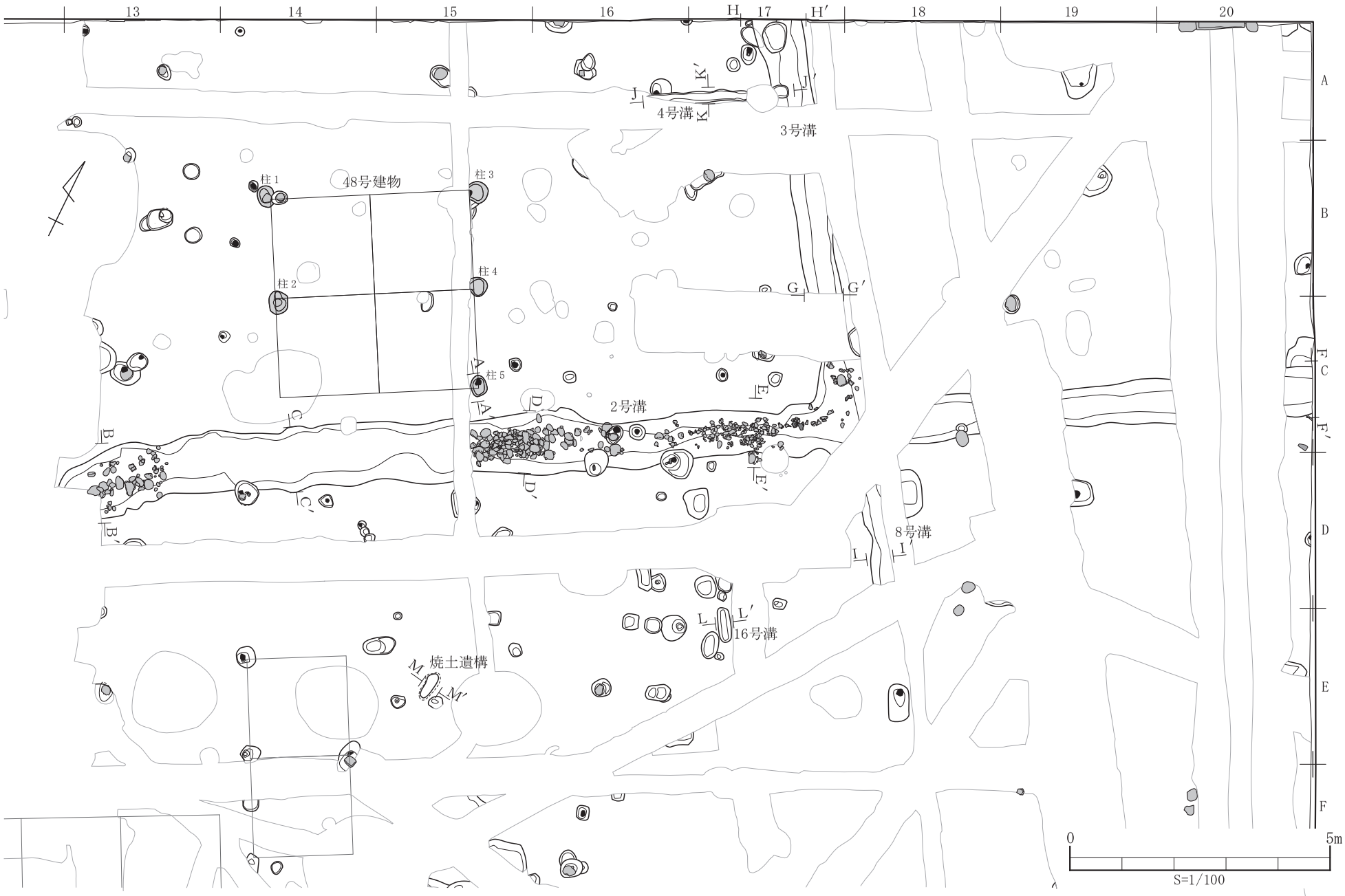
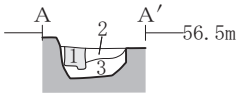


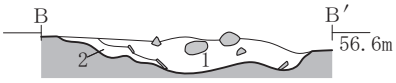
図62　武家屋敷地区第11地点Ⅱｅ期の遺構（３）
Fig.62　Features belonging to phase IIe at BK11 (3)

48号建物　柱5



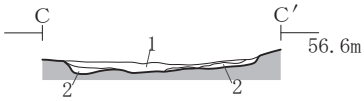
1　2.5Y4/2暗灰黄色　シルト質粘土　粘性中・しまり強　径0.2～1cmほどの黄褐色粘土質シルトのブロックを僅かに含む
2　10YR5/6黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　黒褐色シルトが少量斑に混じり、径0.2cm～0.5cmほどの炭化物を僅かに含む
3　10YR5/6黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強

2号溝(C・D-13区)



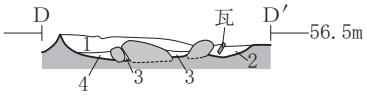
1　2.5Y3/2黒褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり強　径1cmほどの炭化物と石灰質の粒を僅かに含む
2　2.5Y3/2黒褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり強　径2cmほどのオリーブ褐色砂質シルトの鉄分を少量含み、径5mmほどの炭化物を僅かに含む

2号溝(C・D-14区)



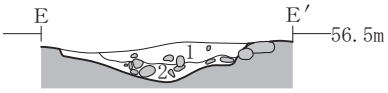
1　2.5Y3/2黒褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり強　径2cmほどのオリーブ褐色砂質シルトの鉄分を少量含み、径5mmほどの炭化物を僅かに含む
2　2.5Y4/3オリーブ褐色　シルト質粘土　粘性中・しまり強

2号溝(C・D-15区)



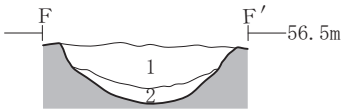
1　2.5Y3/2黒褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり強　径1cmほどの炭化物と石灰質の粒を僅かに含む
2　10YR4/2灰黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　小礫を少量含む
3　2.5Y3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　2.5Y5/3黄褐色砂質シルト粘性弱しまり強を少量斑に含む
4　2.5Y4/3オリーブ褐色　シルト質粘土　粘性中・しまり強

2号溝(C・D-17区)



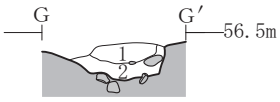
1　2.5Y3/2黒褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり強　径1cmほどの炭化物と石灰質の粒を僅かに含む
2　10YR4/2灰黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　小礫を少量含む

2号溝(C-20区東壁)



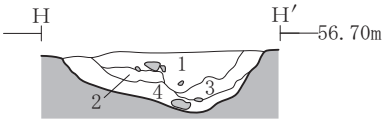
1　10YR3/3暗褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや強　径10cm以下の小円礫、径1cm以下の炭化物を少量含む　僅かに明黄褐色のブロックを含む
2　10YR4/2灰黄褐色　シルト質粘土　粘性強・しまり中　にぶい黄澄色粘土質シルトを少量含む全体に酸化鉄が沈着している　径5mm以下の小礫、炭化物を少量含む

3号溝(B-17区)



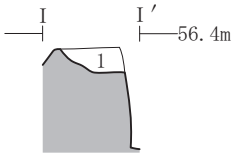
1　10YR6/4にぶい黄橙色　砂　粘性弱・しまり強　10YR5/6黄褐色砂粘性弱しまり強、灰黄褐色砂が部分的に混じり小礫を僅かに含む
2　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり強　径1～2cmの黄褐色粘土のブロック、径0.5cmほどの炭化物と小礫が僅かに混じる

3号溝(A-17区北壁)



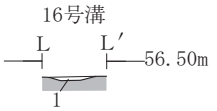
1　10YR3/3暗褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　径5cmほどの黄褐色シルト質粘土のブロック、径0.2cmほどの褐色砂の粒、小礫を少量含む
2　2.5Y3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　褐色砂質シルトが斑に少量混じり、径1cmほどの炭化物を僅かに含む
3　2.5Y3/2黒褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり強　暗灰黄色粘土質シルトが少量斑に混じり、白色土粒と径1～2mmの炭化物を僅かに含む
4　2.5Y3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　灰黄褐色粘土質シルトが部分的に混じり、径1cmほどの炭化物を少量含む

8号溝



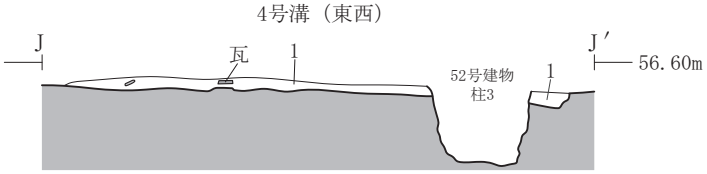
1　10YR3/2黒褐色　シルト　粘性弱・しまり強　にぶい黄褐色シルトをごく僅かに含む　径1cm以下の炭化物を含む　径1～5mmの白色土粒を少量含む　径5cm以下の小礫を含む　全体に酸化鉄が少量沈着している　3号溝の南側にあたる可能性がある

16号溝

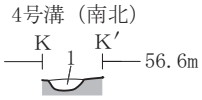


1　10YR6/4にぶい黄橙色 砂質シルト 粘性弱・しまり強 明褐色シルト、にぶい黄褐色粘土質シルトが少量斑に混じり、径1mmほどの小礫を少量含む

4号溝（東西）

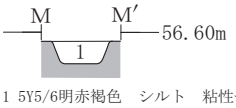


4号溝（南北）



1　10YR3/4暗褐色　砂　粘性弱・しまり強　褐色粘土質シルトが中量斑に混じる

焼土遺構



1　5Y5/6明赤褐色　シルト　粘性やや弱・しまりやや弱　含有物がほとんどない均一な層

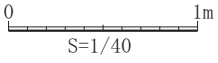


図63　武家屋敷地区第11地点Ⅱｅ期の遺構（4）
Fig.63　Features belonging to phase IId at BK11 (4)

⑦Ⅲ期の遺構（図64）

Ⅱｅ期の２号溝より新しい51号建物（Ｎ－29°－Ｗ）や、４号溝より新しい52号建物（Ｎ－21°－Ｗ）の存在から、この時期の建物の方位が一定ではないことが把握できる。また、55号建物（Ｎ－45°－Ｗ）などのように、これまでの方位と非常に異なる建物も存在する。また柱間寸法が６尺３寸のほか、６尺や７尺などの建物も出現する。このような特徴は、Ⅰ期・Ⅱ期には見られないものであり、この地区における土地利用のあり方が大きく変化したことを伺わせる。本章の２．（３）各期の推定時期においても述べたように、川内地区では、明治維新後、直ちに屋敷が全て取り払われたのではないと考えられる。一方、明治15年頃までには、屋敷の撤去が進んでいたものと推定される。次の２層上面の段階は、武家屋敷が取り壊された後の畑として使用された時期と考えられる。そのため、明治時代初期から、陸軍関係の建物整備が始まる明治20年を前後する時期までに限定でき、中でも明治10年代を中心とする可能性が高い。それに先行するⅢ期は、屋敷の取り壊しが進められ畑として利用されるまでの、明治時代初期に限定され、おそらく明治10年代までは下らない可能性が高いと考えることができる。様々な方向を向く小規模な建物が見られることから、一時的に簡素な建物が建てられていた可能性が考えられる。

柱間寸法６尺の建物は、これまでの二の丸地区や二の丸北方武家屋敷地区の調査では、遡っても幕末から明治時代のごく初期の事例が知られているだけで、確実に江戸時代に遡るものは知られていない。武家屋敷地区第４地点では、明治20年代以降の第二師団の時期と考えられる礎石建物が６棟（１～６号建物）確認されているが、柱間寸法はいずれも６尺であった（年報13）。武家屋敷地区第７地点では、Ⅲ期（19世紀前葉頃から明治初頭頃）の最も新しい段階に、柱間寸法６尺の礎石建物（１号建物）が確認されている（年報19第１分冊）。この第７地点Ⅲ期の遺構に後続する時期は、武家屋敷が取り壊された後の畑として使用された時期となる。武家屋敷が取り壊され畑として使用される直前に、柱間寸法が６尺の建物が出現することは、今回の第11地点のⅢ期の様相と類似している。７尺という柱間寸法は、武家屋敷地区第４地点で、Ⅱａ期（17世紀末から18世紀前葉）の８・９号建物に見られる（年報13）。また同じ第４地点では、Ⅰｂ期（17世紀中葉から後葉）の28・32号建物では桁行７尺、梁行６尺５寸という事例が見られる。今回の第11地点とは時期が大きくずれるため、７尺という柱間寸法は、時期的な特徴というよりは、個別の特殊な事例である可能性が考えられる。

【50号建物】（図66・67、図版51・52）

Ｂ・Ｃ－14～17区で検出された。方位はＮ－13.5°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸であり、５×１間となる。10基の柱穴が検出された。柱掘り方形状は、円形あるいは楕円形を呈する。柱４は楕円形で、41×27㎝、深さは４㎝と極浅い。その他は円形で、径25㎝（柱７）～45㎝（柱３）で、深さは３㎝（柱９）～28㎝（柱５）で、規模はそれほど大きくはない。柱痕跡は、柱３・６～８で検出されている。柱２は底面に礫を置くが、さらにその上にやや大型の礫を重ねる。柱５は、底面に礫を２点置く。柱６では底面に板状の礫を敷き、その上に土を入れ小さめの礫を置く。そして、その礫にちょうどあたるように柱痕跡が存在する。柱４では柱痕跡・礫などは存在しないが、やや大きめの丸瓦が出土している。その瓦などのほか、磁器、土師質土器が少量出土している。

【51号建物】（図66・67、図版52）

Ｃ－13・14区で検出された。方位はＮ－29°－Ｗである。柱間寸法は６尺で、２×１間の小形の建物である。２号溝（Ⅱｅ期）より新しい。３基の柱穴が検出されている。柱掘り方形状は円形を呈する。柱１～３の規模は、径35・20・25㎝、深さ17・８・４㎝で、ほぼ同規模と考えられる。柱１・３で柱痕跡が認められた。柱３の底面では、柱痕跡があたる部分がくぼむ。出土遺物は瓦片２点のみである。

【52号建物】（図66・67、図版52・53）

Ａ・Ｂ－16～18区で検出された。方位はＮ－21°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸で、２×３間である。４号溝（Ⅱｅ期）より新しい。５基の柱穴が検出された。柱掘り方形状は、柱３・４では円形、柱１・２では撹乱により不明確ながら長方形を呈するものと考えられる。柱５は、そのほとんどが調査区外に伸びるため不明ではあ

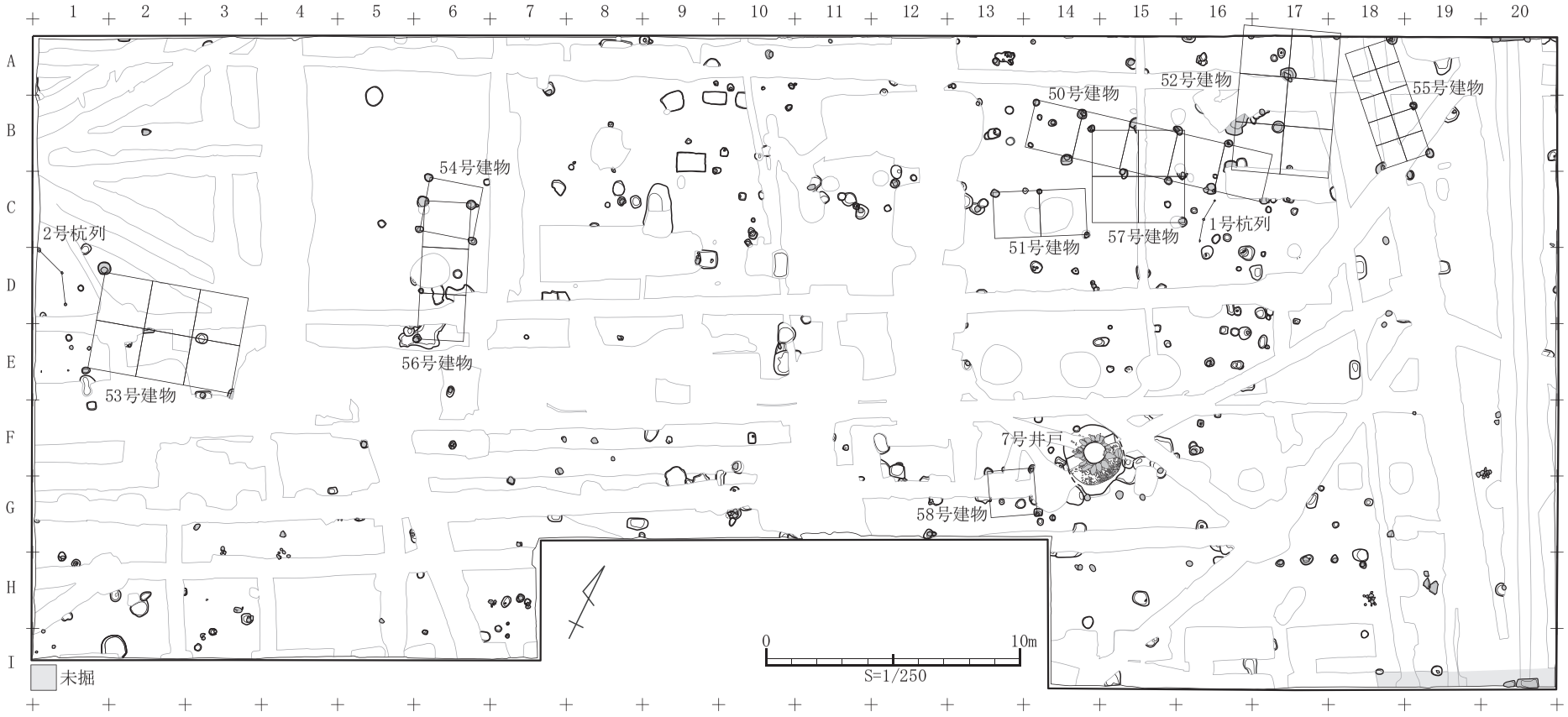


図64　武家屋敷地区第11地点Ⅲ期遺構配置図
Fig.64　Distribution of futures belonging to phase III at BK11

るが、円形を呈するものと推定できる。円形の柱４は、径48cm、深さ９cmと浅い。同様に円形の柱３は、撹乱により部分的に破壊されているが、径は61cm、深さ34cmと規模が大きい。正確な平面規模は不明ながら、柱１・２の深さは、それぞれ64･７cmとなり、ばらつきがある。柱５の深さは34cmと、比較的深い。柱痕跡は柱１・３・５で確認された。柱３では底面柱痕跡下に大きい礫を置く。陶器片などが出土している。

【53号建物】（図65、図版53）

Ｄ・Ｅ－１～３区で検出された。方位はＮ－16°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸で、３×２間となる。４基の柱穴を検出した。柱掘り方形状は、円形あるいは楕円形を呈する。柱２・４は部分的にしか残存していないため不明確ではあるが、円形の柱１の規模は、径51cm、深さ32cmである。楕円形の柱３は、32×25cm、深さは12cmである。柱２・４（深さ29・12cm）は、残存している形状からすると、楕円形を呈するものと考えられる。柱１で柱痕跡及び礫が検出されている。この礫は、大きな円形の礫であり、底面よりやや浮いた状態で置かれている。出土遺物は瓦片２点のみである。

【54号建物】（図65、図版53）

Ｃ－６区で検出された。方位はＮ－15°－Ｗである。柱間寸法は７尺で、１×１間となる小形の建物である。３基の柱穴を検出した。柱掘り方形状は、楕円形である。柱１～３の規模は、それぞれ34・32・35×30・23・27cm、深さ14・21・20cmとなり、ほぼ同規模である。柱１では、掘り方と同規模の平たい礫が底面に設置されている。柱２では柱痕跡が認められるが、礫などは無い。出土遺物は無い。

【55号建物】（図66・67、図版54）

Ａ・Ｂ－18･19区で検出された。方位はＮ－45°－Ｗである。柱間寸法は６尺３寸であり、１×２.５間となる。４基の柱穴が検出された。柱掘り方形状は、円形あるいは楕円形を呈する。柱１は撹乱により４分の１程が破壊され、柱２は半分が調査区外へと伸びるため、それらの柱掘り方の正確な規模は不明である。柱３･４の規模は、それぞれ30・23×37・29cm、深さ６・４cmであり、かなり浅い。一方で、柱１・２は残存部位と深さ（それぞれ18・28cm）から、柱３・４よりは規模が大きいことが推測される。また、柱１・３では底面に礫を配置する。柱２では柱痕跡と底面付近に礫が認められた。出土遺物は無い。

【56号建物】（図65、図版54）

Ｃ～Ｅ－6区で検出された。方位はＮ－23°－Ｗである。柱間寸法は６尺であり、１×３間となる。４基の柱穴が検出された。柱掘り方形状は、ほぼ円形である。柱１～４の規模は、径46・19・32・38cm、深さ17・８・22・29cmである。柱２がやや小さい。柱４で柱痕跡が検出された。この柱４の柱痕跡があたる底面部分はくぼんでいる。柱１・３の底面には礫が置かれている。どちらも、ほぼ掘り方底面と同規模の平たい円礫である。出土遺物は無い。

【57号建物】（図66・67、図版54・55）

Ｂ・Ｃ－14～16区で検出された。方位はＮ－26°－Ｗである。柱間寸法は６尺であり、２×２間となる。３基の柱穴が検出された。柱掘り方形状は、柱１は円形を呈するが、柱２・３では撹乱のため不明である。柱１の規模は、径29cm、深さ33cmである。柱２･３の深さは、それぞれ11･12cmであり、柱１に比べ浅い。この柱１では、柱痕跡と底面に小さな礫３点が認められる。柱痕跡（埋土３層）は平面検出時には把握できず、断面の検討から確認した。また堆積状況から、柱痕跡より上位に位置する埋土１層は、小規模なピットの可能性も考えられる。柱３でも柱痕跡が確認されている。柱２では大形の礫が１点底面に置かれている。出土遺物は無い。

【58号建物】（図68、図版55）

Ｆ・Ｇ－13・14区で検出された。方位はＮ－31°－Ｗである。柱間寸法は６尺であり、１×１間の小形の建物である。３基の柱穴が検出されている。撹乱により半分が破壊されているため不明瞭ではあるが、柱１・２は楕円形を呈する可能性が高い。柱３は方形である。柱１・２の深さは、それぞれ16・20cmであり、残存部の平面

規模もほぼ同様である。柱３は１辺が32cm程、深さ30cm程であり、柱１・２に比べ大きい。柱痕跡は、楕円形の柱１・２で確認されている。柱１では、掘り方と同規模の大形の平たい円礫を底面に置く。柱痕跡は、その円礫の上面にあたる。柱３では柱痕跡は無いが、掘り方の底面がくぼむ。出土遺物は瓦片１点のみである。

【７号井戸】（図68、図版55）

Ｆ・Ｇ－14・15区で検出された石積の井戸である。確認面での掘り方の直径は約250cm、石積みの内側の直径は約90cmで、平面形は円形である。確認面から約1.6mの深さまで掘り下げた。掘り下げた部分の埋土は７層に分かれる。井戸の側石として20～40cmほどの大きさの扁平な石を、長軸を井戸の中心に向けて放射状に積み重ねている。陶器147点をはじめとして多量の遺物が出土している。陶磁器（図87－143～147）、土師質土器（図90－37）、瓦質土器、軟質施釉陶器、瓦、古銭（図119－16）が見られる。陶磁器は、19世紀後葉や19世紀代のものが中心ではあるが、17世紀代や18世紀代のものも若干混在して含まれている。最も新しいものは、幕末から明治初頭頃のものである。陶器の出土量が多いが、磁器・陶器ともに小破片が多く、詳細な特徴が判明するものはあまり多くはない。陶器では、19世紀代のものでは大堀相馬や東北産と思われるものがほとんどである。堤の可能性が推測されるものも含まれる。陶器の年代に幅があることに加えてが、完掘はしていないので遺物による時期比定は難しい。そこで、遺構の重複関係などからⅢ期に含めた。

【杭列】（図65・66）

１号杭列はＣ16区、２号杭列はＤ１区にて検出された。どちらも３本の杭が、弧を描く様に配置されている。杭自体の遺存状況は悪い。

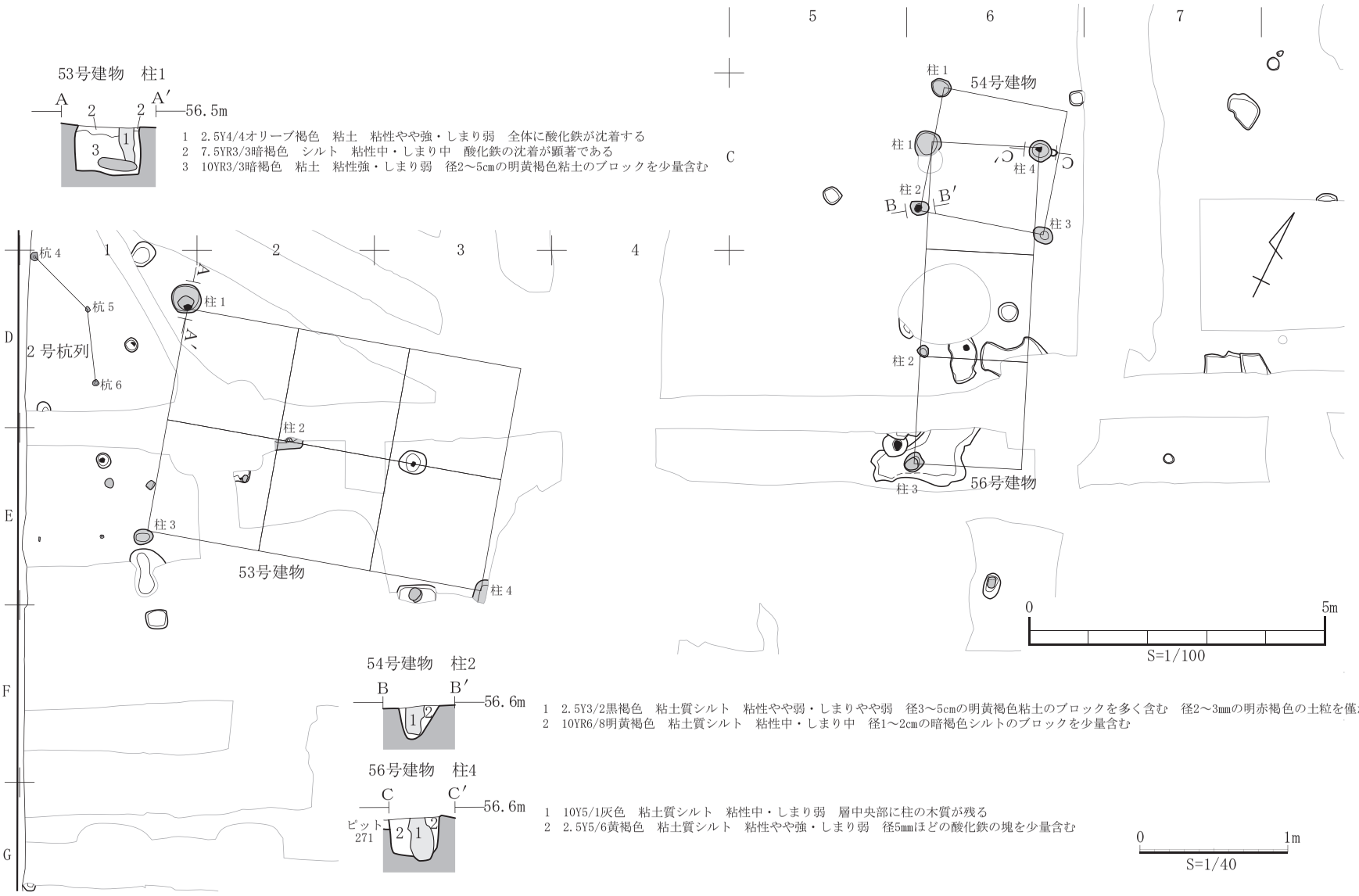


図65　武家屋敷地区第11地点Ⅲ期の遺構（1）
Fig.65　Features belonging to phase Ⅲ at BK11 (1)

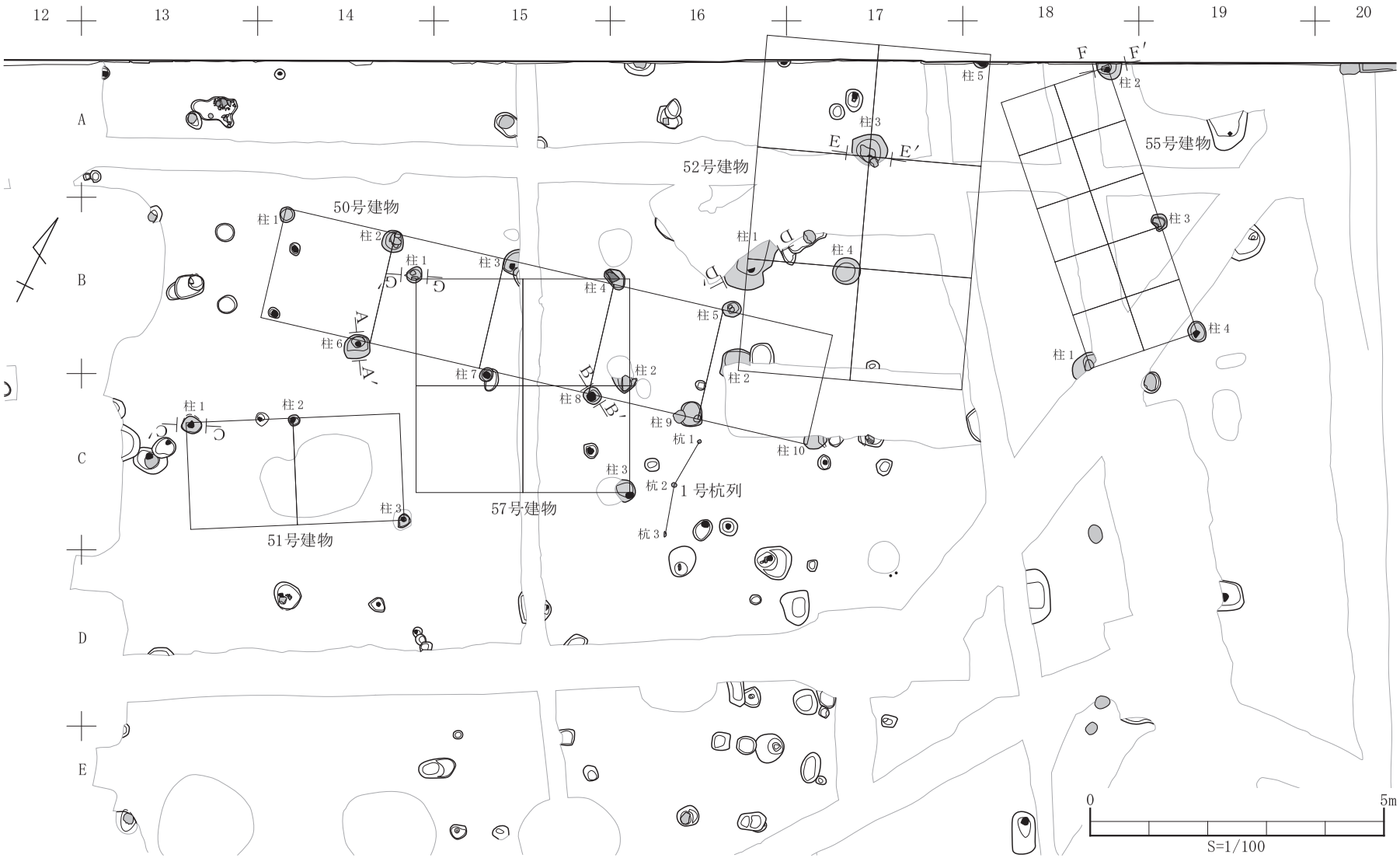
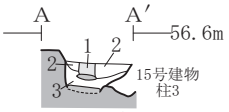


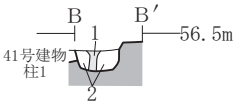
図66　武家屋敷地区第11地点Ⅲ期の遺構（2）
Fig.66　Features belonging to phase III at BK11 (2)

50号建物　柱6



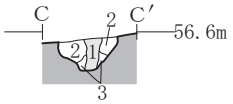
1　10YR3/2黒褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　白色土粒と黒色土粒を僅かに含む
2　10YR6/8明黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまりやや強　暗褐色粘土質シルトが斑に混じり、径2cmほどの黄褐色シルトのブロックを含む
3　10YR6/8明黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　暗褐色シルトがまばらに混じる

50号建物　柱8



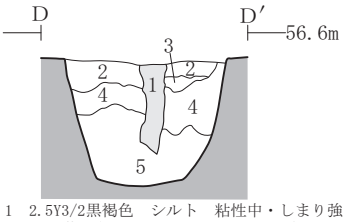
1　10YR3/4暗褐色　粘土質シルト　粘性弱・しまりやや強　径1mm前後の小礫を少数含む
2　7.5YR3/4暗褐色　粘土質シルト　粘性弱・しまり中　径1～2mmの炭化物を少量含む　1～5mmシルト質粘土ブロックを少量含む

51号建物　柱1



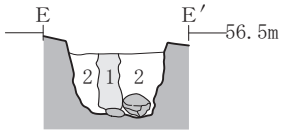
1　10YR4/3にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　小礫を僅かに含む
2　10YR4/3にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり強　黄褐色粘土質シルト、明赤褐色砂質シルトを少量斑に含む
3　10YR4/2灰黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　にぶい黄褐色粘土を中量斑に含む

52号建物　柱1



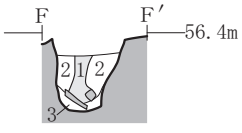
1　2.5Y3/2黒褐色　シルト　粘性中・しまり強　にぶい黄褐色粘土質シルトを部分的に含む
2　10YR4/2灰黄褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり強　径1～2cmの明黄褐色砂質シルトのブロックを少量と白色土粒を僅かに含む
3　10YR5/6黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　黒色の土を僅かに粒状に含む
4　10YR5/6黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　褐色シルト、黒褐色砂質シルトが少量斑に混じり、白色土粒を少量含む
5　10YR5/6黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　褐色砂質シルトを少量斑に含み、径0.5～2cmほどの黒褐色粘土質シルトのブロックが混じる

52号建物　柱3

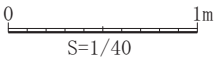


1　10YR5/2灰黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　褐色砂質シルト、にぶい黄橙色砂質シルトを少量斑に含む
2　10YR6/8明黄褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり強　灰黄褐色砂質シルトを少量斑に、明褐色砂質シルトを径1mmほどの粒で僅かに含む

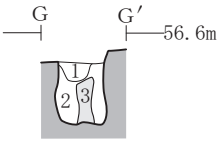
55号建物　柱2



1　10YR3/3暗褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　径1～3mmオリーブ褐色シルトを少量含む
2　7.5YR3/4暗褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　径1～5cmオリーブ褐色シルト質粘土を斑に多量に含む　径5cm前後の暗褐色シルトを少量含む
3　10YR4/6褐色　粘土質シルト　粘性やや弱・しまりやや弱

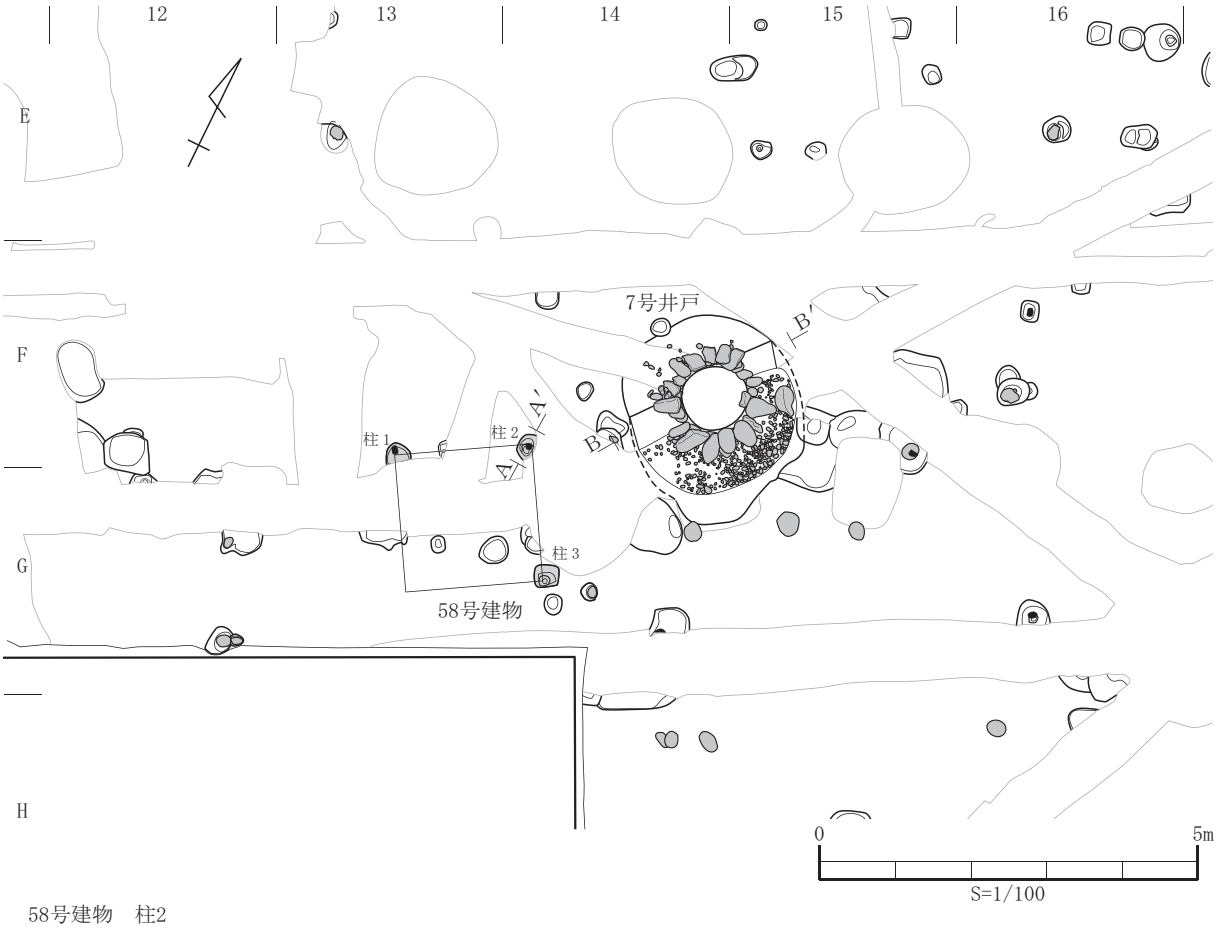


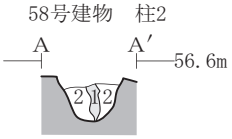
57号建物　柱1



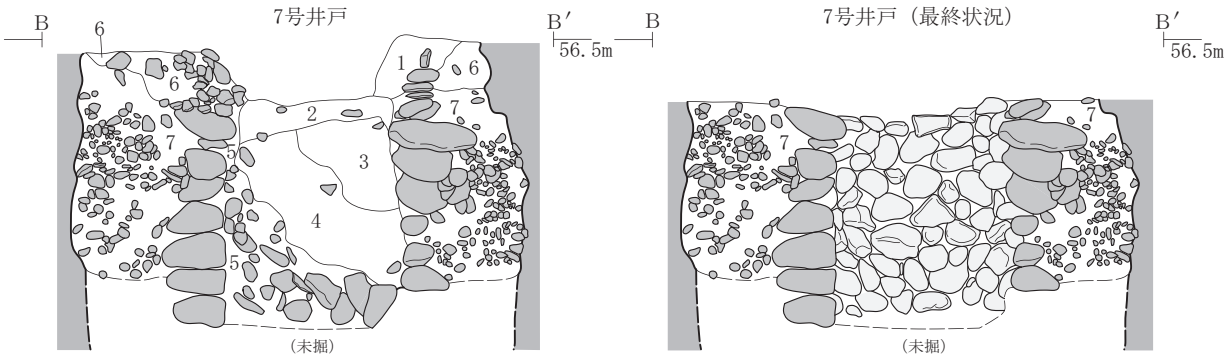
1　10YR3/2黒褐色　シルト　粘性やや弱・しまり強　明黄褐色シルトの小ブロックを少量含み、明赤褐色砂質シルトがごく僅かに混じる
2　10YR5/6黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや強　暗褐色シルトがごく少量斑に混じる
3　10YR3/2黒褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　にぶい黄橙色粘土質シルトが中量斑に混じる

図67　武家屋敷地区第11地点Ⅲ期の遺構（3）
Fig.67　Features belonging to phase III at BK11 (3)





1　10YR5/3にぶい黄褐色　シルト質粘土　粘性やや強・しまりやや弱　径5㎜～5㎝の明黄褐色粘土のブロックを多く含む
2　10YR5/2灰黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　径1～10㎝の明黄褐色粘土のブロックを多く、径2～10㎜の炭化物を僅かに含む



1　10YR3/2黒褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり強　にぶい黄褐色砂質シルトが中量、黄褐色砂質シルトが少量斑に混じり、径0.5～1㎝の炭化物、径1～5㎜の小礫、径10～20㎝の石を僅かに含む
2　10YR5/4にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　褐灰色粘土を部分的に中量含み、径0.5～1㎝の明黄褐色シルト質粘土のブロックを少量、径0.5～1㎝の炭化物と小礫、鉄分、径3～20㎝の石を少量含む
3　10YR4/2灰黄褐色　砂　粘性弱・しまり強　にぶい黄褐色砂質シルトが少量、にぶい褐色粘土が僅かに斑に混じり、径0.5～2㎝の炭化物、径1㎜ほどの白色土粒、径1～2㎝の小石を含む
4　10YR3/1黒褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり強　にぶい黄褐色砂質シルトが少量斑に混じり、径0.5～1㎝の黄褐色粘土のブロックを極僅か含み、径0.5～1㎝の炭化物、径1～2㎝の小石を僅かに含む
5　10YR4/2灰黄褐色　砂質シルト　粘性中・しまりやや強　にぶい黄褐色粘土、黄灰色粘土が斑に少量混じり、径10～30㎝ほどの石を多量に含む
6　10YR5/4にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　黄褐色シルト質粘土が中量斑に混じり、径0.5～1㎝の炭化物、径1～3㎜の白色土粒、径2～10㎝の小石を僅かに含む
7　10YR4/3にぶい黄褐色　粘土　粘性強・しまり強　黄褐色粘土、にぶい黄橙色粘土を中量斑に含み、鉄分、径10～20㎝ほどの石を多量に含む

0　1m
S=1/40

図68　武家屋敷地区第11地点Ⅲ期の遺構（4）
Fig.68　Features belonging to phase III at BK11 (4)

（３）２層上面の遺構（図69）

調査区の東よりの区域には、２層が分布していた。14列より東側の、調査区南東部を中心に分布していた。本来は全面に分布していたと考えられるが、西側は近代以降の削平によって失われているものと推定される。

基本層序の項目において詳述したとおり、２層は畑の耕作土の可能性が考えられる。同様の地層が、二の丸北方武家屋敷地区の各所で確認されている。今回は畝状の凹凸は確認されていないが、後世の削平もあって２層上面の保存状態が良くないため、確認できなかった可能性もある。層相が、他の地点で確認されている畑耕作土と類似することから、今回確認された２層も、畑耕作土として利用された可能性が残っている。明治初年に武家屋敷が取り壊されて以降、陸軍関係の施設が設置されていくまでの間に、畑として利用されていた可能性が推定される。明治20年を前後する時期には、新たな整地が行われ、陸軍第二師団の大規模な建物や関連施設の建設が進められていったものと考えられる。そのため２層上面の段階の年代は、明治時代初期から、陸軍関係の建物整備が始まる明治20年を前後する時期までに限定でき、中でも明治10年代を中心とする可能性が高い。

今回の調査では、２層上面の保存状態が良くなかったこともあり、畝状遺構や、畑を区画する溝などは検出されていない。２ａ層の落ち込みとした、２層に類似した土層の分布が、各所に認められるだけである。ここでは、あわせて１号暗渠について報告する。

１号暗渠は、陸軍第二師団期の遺構と考えられるもので、２層上面よりも、さらに新しい段階の遺構となる。今回の調査では、２層上面の遺構より新しい時期のものは、すべて撹乱扱いとし、調査の対象外として詳細な記録は作成していない。しかし１号暗渠だけは特別に、遺構扱いとして調査対象に含めた。１号暗渠は、後に詳述するように、壁面を石積で構築し、板石を蓋にした暗渠である。仙台城やその周辺では、江戸時代と明治時代における石積がどのように異なっているか、その変化がいつ頃におきていたのかについては、明らかとなっていないことも多い。時期が判明しない個々の石積の評価をする際には、石積の時期的変遷を明らかにしておくことが必要である。１号暗渠については、石積の状況が良好に残されていたため、江戸時代の石積との比較検討を行う上で、良好な資料となると考えられた。そのため、調査対象に含めて記録を作成することとしたので、この項目であわせて報告する。

【２ａ層の落ち込み】（図69、図版56）

２層の上面には、土質は２層に類似しているが、色調が異なる部分が各所で認められた。調査中はⅠ層と呼称し、その範囲をⅠ層の落ち込みとして調査した。Ⅰ層を掘り上げた底面には不整形な凹凸が認められる場合が多い。また下部に酸化鉄が多量に沈着し、薄い層を形成している部分もある。そのため、くぼみなどに堆積した水性堆積層か、あるいは２層が部分的にグライ化して変質した可能性も考えられる。いずれにしても、２層との関係が深い可能性があるため、本報告では、Ⅰ層を２ａ層と改称した。

２ａ層の落ち込みの形状は、いずれも不整形で、特別の規則性は見出し難い。大きさも多様である。全体に均質に分布するのではなく、３グループほどにまとまる傾向も見て取れるが、このまとまりに明確な傾向性を見出すことは難しい。

２層に類似する地層は、武家屋敷地区第４地点（年報13）、武家屋敷地区第７地点（年報19）など、二の丸北方武家屋敷地区の各所で確認されている。第４地点と第７地点では、この２層に類似する地層の上面において、畝状遺構が検出されている。第４地点では、畝状遺構を取り囲んで区画する溝状遺構も検出されている。今回２層上面で検出された遺構は、２ａ層の落ち込みだけで、これは第４地点や第７地点の畝状遺構や溝などとは形状などの特徴が異なっている。そのため、２ａ層の落ち込みを、畑に関わる遺構と考えることは難しい。

【１号暗渠】（図69、図版55・56）

調査区の東端の 20列において検出された、東壁にほぼ沿うように、南北方向に走っている石組暗渠である。方位はＮ－27°－Ｗである。南北両方とも、調査区外へ続いており、30ｍ分を検出した。検出した範囲では、北

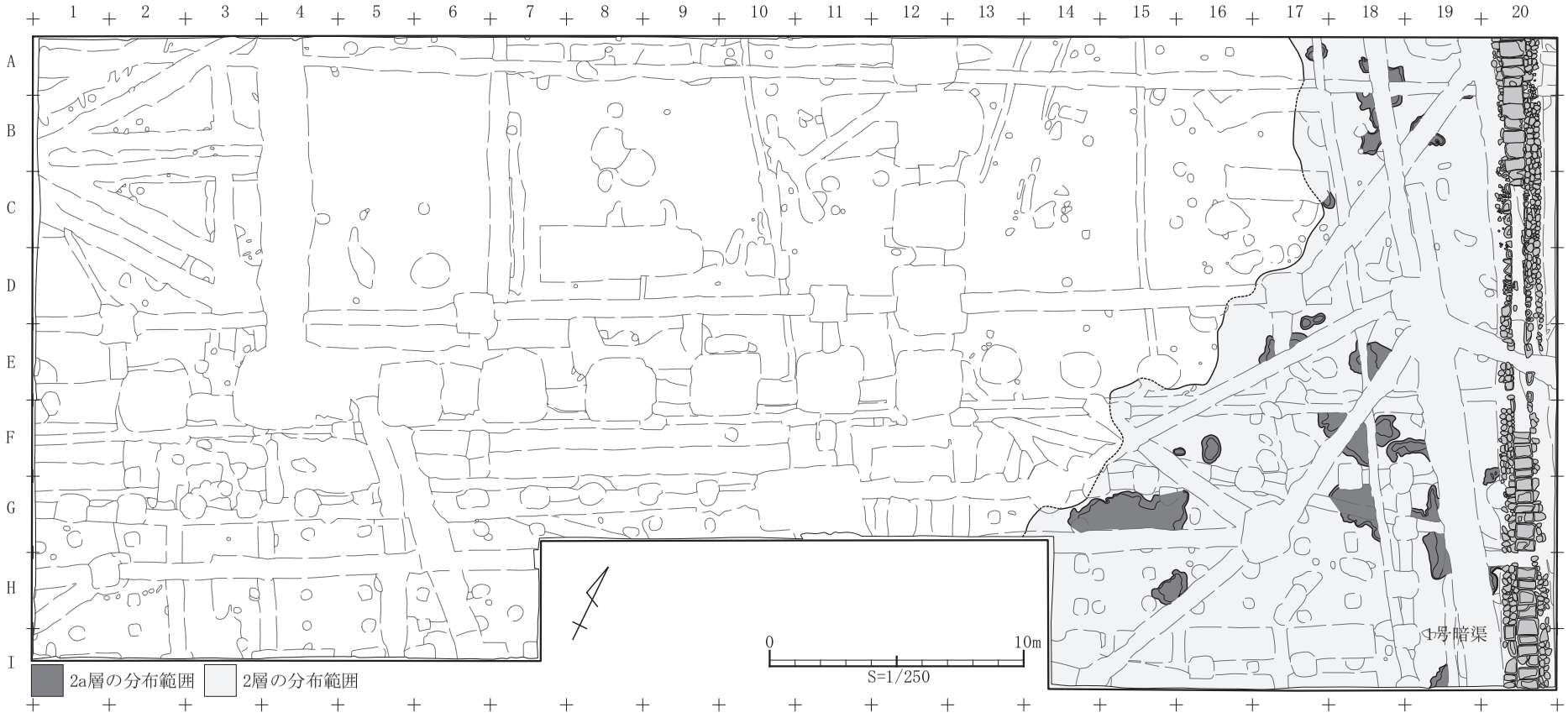


図69　武家屋敷地区第11地点２層上面遺構配置図
Fig.69　Distribution of futures belonging to surface of layer 2 at BK11

端の底面標高が、南端より 25㎝ほど高いため、北から南へ流れていたものと考えられる。この暗渠に斜めに重なるように、米軍時代の給水管が造られており、途中がこれによって壊されている。

幅２ｍ前後、深さ 1.4ｍほどの、断面方形の掘り方を掘り、両側に石積で壁を構築し、板石で蓋をして暗渠としている。底面は、掘られたままとなっており、特に施設は設けられていない。両側の石積の下部も、特に何も設けられず、掘り方の底面となっている。石積はほぼ直立するが、上部にいくにしたがい、若干外側に開いている。石積暗渠の内側の幅は底面で 40㎝ほど、蓋石に接するところで 50㎝ほど、高さは 90㎝となる。

壁の石積みには、底面近くに大きな石材を使用する傾向があるが、最上部にも大型の石材を使っているところもある。円礫が多いが、円摩度の少ない角礫や亜角礫も用いられている。石材も多様で、特定の材質の石だけを選んでいるような様相は見受けられない。扁平でやや細長い川原石を利用しているところが多く、それらは長軸を暗渠と直交方向に置く。壁面を見ると、扁平な石を横手に積む部分も多いが、縦に置くものや、斜めに落とし積みにしている場合もある。壁面を平坦にするため、壁面側の端部を打ち欠いて平坦にしている石も多い。壁体の石積みの背後には、裏込めの石は、若干入れられているが、まばらである。一杯に詰められていると言える状態ではない。

蓋石は、暗渠に直交する側の長さ 70 ～ 90㎝、幅30 ～ 60㎝の大きさに、粘板岩を切ったものを使っている。宮城県石巻地方で産出する稲井石と思われる。明治以降の構造物には、良く利用されている。蓋石の両側には、掘り方一杯に川原石を敷き詰めている。この蓋石の上面で、当時の地表面から 30㎝ほど下であったと考えられ、この部分が埋め戻されて暗渠となっている。

遺物は陶磁器を中心に、比較的多く出土しているが、当然ながら明治期に下るものも多く含まれている。蓋上の埋め戻し土に、薬莢や銃弾が含まれていることは、陸軍第二師団の時期に構築されたことを示す。図示したのは、陶器１点と古銭（図119－18）だけである。図示した陶器は、18世紀の堺産と考えられる擂鉢である（図87－149）。１号暗渠とは大きく年代がずれる、古い資料が入り込んだものであるが、18世紀代の陶器のバラエティを示すために図示したものである。

４．出土遺物

今回の調査で出土した遺物の大部分は、江戸時代以降のもので占められ、それ以外には、縄文時代および古墳時代から古代の遺物がごく少量存在するだけである。この両者では、遺物の種類や出土状況が大きく異なっている。そのため以下の報告では、江戸時代以前の遺物と江戸時代以降の遺物に大別し、その上で遺物の種類ごとに報告することとした。また16世紀代に遡る遺物がごくわずか含まれているが、江戸時代の遺構から出土しており、伝世品と考えられることから、江戸時代以降の遺物に含めて記載する。

（１）江戸時代以前の遺物

江戸時代以前の遺物は、古墳時代～古代の須恵器１点、古代の瓦１点、縄文時代の石器３点である。いずれも、江戸時代遺構の層序や遺構からの出土で、本来の位置を保ったものではない。

①須恵器（表31）

須恵器は25号遺構から１点出土している。後世の遺構への混入で、本来の層序や遺構に伴うものではない。小片のため図示しなかったが、大甕の体部破片と考えられる。厚さ1.3㎝で、外面に叩き目、内面に同心円の当て具痕が観察される。内面には、幅５㎜前後の弧状にのびる融着痕がある。古墳時代～古代の須恵器と考えられるが、詳細な時期は不明である。二の丸北方武家屋敷地区では、第４地点（年報13）と第７地点（年報19第２分冊）において、須恵器が出土している。

②古代の瓦（図99、表26・44、図版82）

古代の瓦とみられるものは、Ａ層から出土したＴ１の１点のみで、本来の層序や遺構に伴うものではない。小破片のため、全体の特徴は不明であるが、上面には布目があり、下面には縄目が観察でき、平瓦と考えられる。詳細な時期は不明であるが、古代の瓦と考えて差し支えない。二の丸北方武家屋敷地区では、第４地点（年報13）で多賀城創建期の手描き重弧文の軒平瓦や古代の平瓦が出土している。第７地点（年報19第２分冊）においても、類似した平瓦の小片が出土している。

③石器（図120、表30・31・67、図版97）

縄文時代の石器と考えられるのは、Ｓ１～３の３点である。ぞれぞれ、Ⅱｅ期以降に属するピット247と、沢状遺構埋土１層、Ａ層からの出土であり、縄文時代の層序や遺構に伴うものではない。

Ｓ１は、頁岩製の石鏃である。交互剥離による丁寧な加工が行われているが、素材面を若干残している。先端部と基部との境界は不明瞭である。先端部と基部の側縁はほぼ直線状であり、最大幅が中間部に位置している。長さ43.1㎜、幅13.5㎜、厚さ6.4㎜、重量3.3ｇである。

Ｓ２は、玉髄製の石鏃である。先端部から中程にかけて欠損している。交互剥離による丁寧な加工が施されている。基部には深い抉りが入る。側縁はほぼ直線状である。長さ15.4㎜、幅13.4㎜、厚さ2.7㎜、重量0.5ｇである。

Ｓ３は、玉髄製の使用痕ある剥片である。比較的大型の横長剥片を素材としている。素材剥片には大きくバルブが発達している。素材剥片末端部の一端には、背面側から腹面側への二次加工により尖鋭部が作出されている。また、素材剥片の末端部には散発的に微小剥離痕が認められる。このことから、この箇所が刃部として機能していた可能性がある。長さ43.8㎜、幅69.4㎜、厚さ14.5㎜、重量38.4ｇである。

（2）江戸時代以降の遺物

基本層序や検出遺構の項目においても記載したが、今回の調査では、調査区南東側に大型の遺構が集中し、それらの上部にA層と呼んだ幕末頃の地層が確認された。これらの大型の遺構には、A層が堆積した時点で、上部がくぼんだ状態であったものも存在したと考えられ、遺構埋土の最上部に、A層やそれに類似する地層が堆積している場合が多く認められた。各遺構のプランが確認できた後は、最上部にA層に由来する地層が存在した場合も、遺構の埋土として取り扱っている。明らかにA層に由来する場合は○○遺構埋土A層とし、A層に由来する可能性がある場合は○○遺構埋土A層相当として遺物を取り上げた。○○遺構上部埋土とした場合も、A層に由来する地層が含まれている可能性も残る。整理作業の際に、各遺構の中でA層やA層相当として取り上げた遺物を、遺構埋土から除外して扱うことも検討した。しかし、A層とそれ以外の遺構埋土との区分が難しい場合も多く、遺構埋土と別扱いとする基準を明確にすることが困難なことから、遺構ごとにまとめて整理することとし、ここでの記載も遺構ごとにまとめて行う。

大型の遺構の場合、それが埋没してから新しい柱穴などが掘られている場合もあるが、その場合、概して遺構の確認は難しい。調査時には、可能な限り検出に努めたが、確認できなかった遺構が残っている可能性は否定できない。遺物整理の結果、他の遺物とは大きく年代が異なる遺物が、ごく少数含まれる場合もある。このような場合、確認できなかった遺構の埋土に含まれていた遺物である可能性は残る。大型の遺構の場合、下部の埋土では、このような混入の危険性は低いと考えられるが、上部の埋土については、混入の危険性は高いと言わざるを得ないだろう。

このように今回の調査では、埋土の違いによって、遺物の年代が大きく異なる遺構もある。特に、埋土最上部にA層が入っている場合は、年代が大きく異なる場合が多い。そのため、埋土によって年代が異なる遺構については、すべての遺物について、埋土を分けたまま集計して示した。一方、埋土で遺物の年代に差がみられない遺構については、埋土をまとめた形で集計表に示している。

遺構の時期区分にあたっては、切り合い関係を基本にし、出土遺物については、埋土でも下部から出土した遺物を中心に年代決定資料とした。そのため以下の遺物の報告では、遺構の帰属時期とは異なる遺物が記載されている場合がある。各遺構の埋土A層やA層相当層、あるいは上部埋土については、上述のように、遺構の年代と大きく異なる遺物が含まれている場合が多い。その場合でも、各遺構ごとに、遺物を記載していることに留意していただきたい。

①陶磁器（図72 ～ 88、表17 ～ 22・32 ～ 38、図版57 ～ 72）

陶磁器は、時期ごとの変化がもっとも顕著で、時期決定の基準となる。同時に、産地をはじめ時期ごとの様相の変遷が、さまざまな面で問題となる。そのため、陶器と磁器を別個に記載するよりも、両者の変化をまとめて示した方が理解が得やすいと思われる。そのため、ここでは陶器と磁器をまとめて、遺構の所属時期ごとに記載していくこととした。

陶磁器の出土傾向としては、基本層では２層とA層からの出土が多い。A層は、全体的に細片化したものが多く、特徴が判明するものがあまり多くはない。年代としては、18世紀代から19世紀代のものが混在し、量的には18世紀代のものが多い。A層自体の年代としては、大堀相馬の糠白釉の土瓶や青土瓶が多く、確実に明治に下るものは含まれていないことから、19世紀でも幕末頃までと考えられる。２層についても、A層と類似した様相を呈している。

遺構出土の陶磁器で、比較的まとまって出土するのは、Ⅱ期以降の遺構からである。Ⅱｂ期の20号遺構、25号遺構、Ⅱｄ期の17号遺構、26号遺構、Ⅱｅ期の２号溝、Ⅲ期の７号井戸、Ⅲ期以降となる１号暗渠などから、陶磁器が比較的多く出土している。Ⅰ期に属する遺構では、磁器・陶器ともに出土量はあまり多くない傾向にあ

るが、24号遺構については陶器がやや多く出土している。

【江戸時代以前の遺構出土の陶磁器】（図72－１、図78－１・２）

江戸時代以前と考えられる遺構は、沢状遺構のみである。遺構の報告においても述べているように、この沢状遺構は、江戸時代以前に存在した自然の流路の可能性が高い。ごく一部を除くと、遺物は埋土の最上部のみで出土し、それらの遺物も小片がほとんどを占めること、江戸時代の様々な時期のものが混在することから、これらは混入の可能性が高いと考えられる。埋土が軟弱な土壌のため、上部に新しい遺物が混入しやすかったものと考えられる。沢状遺構から出土した陶磁器は、ごくわずかである。そのうち、磁器１点と陶器２点を図化している。磁器は、17世紀中葉頃とみられる肥前の皿（ＣＪ１）である。高台径が小さく、口紅と雲文が描かれている。陶器は、唐津の灰釉皿（ＣＴ１）と志野の向付（ＣＴ２）であり、いずれも17世紀初頭頃の製品である。小破片であるが、17世紀初頭とみられる絵唐津の向付なども含まれている。その他には、18～19世紀代の磁器・陶器や軟質施釉陶器も含まれている。

【Ｉ期の遺構出土の陶磁器】（図72－２～９、図78～80－３～35）

Ｉ期では、陶磁器の出土量は全体にあまり多くない。24号遺構で陶器の出土がやや多い程度である。14号遺構Ａ層の陶器もやや多いが、これは上層のＡ層のものが混入している層であり、年代的には新しい時期のものが多く含まれている。

Ｉ期の遺構からは、出土量はあまり多くはないものの、年代的には17世紀初頭から前葉のものが中心に出土している。陶器では志野や唐津の製品、瀬戸・美濃の天目碗や擂鉢などがみられ、磁器では中国の製品が含まれる傾向にある。

１号遺構からは、中国とみられる磁器が出土している（ＣＪ２）。端反の碗で、漳州窯系の製品と考えられる。陶器では、瀬戸・美濃の天目碗（ＣＴ３）、絵唐津の向付（ＣＴ４）、小破片で器種は確定できないが絵志野の製品（ＣＴ５・６）などがみられる。これらの年代は、いずれも17世紀初頭、あるいは17世紀初頭から前葉頃と考えられ、比較的まとまっている。

２号遺構からも絵志野の製品（ＣＴ７）が出土しており、４号遺構からは志野の菊皿がみられる（ＣＴ８）。７号遺構では、絵唐津の向付が３点出土している（ＣＴ９・10・12）。特にＣＴ10とＣＴ12は、器形、文様、胎土、釉調などから組みとなる製品であろうと推測される。同じ器形で、文様をわずかに違えている。ＣＴ９は、文様、胎土、釉調などがこれらとは異なっている。他に、瀬戸・美濃の擂鉢（ＣＴ11）もみられる。いずれも17世紀初頭、あるいは17世紀初頭から前葉の製品である。

ＣＴ11に類似した瀬戸・美濃の擂鉢は、９号遺構からも出土しており（ＣＴ14）、17世紀初頭から前葉のものと考えられる。９号遺構からは、天目碗（ＣＴ13）も出土している。この天目碗は、高台周辺に鉄化粧がなされていることから、16世紀代の製品と推測される。遺構の年代よりも古いことから、伝世品である可能性が高いと考えられる。

14号遺構の陶器では、肥前の変形皿（ＣＴ16）が出土している。花弁状の形を呈するとみられ、長石釉が施釉される。胎土から肥前の製品と推測され、17世紀前葉から中葉頃ではないかと考えられる。一方、14号遺構の埋土Ａ層からは、18世紀や19世紀に下るとみられる陶磁器が出土している。ＣＴ15の擂鉢も埋土Ａ層出土であり、産地が不明なため詳細はわからないが、胎土や釉調、擂目の様子などから19世紀代に下る製品ではないかと推測される。

19号遺構では、中国の青花磁器が２点出土している（ＣＪ３・４）。ＣＪ３は、折縁の口縁に窓絵七宝文と青海波文が描かれ、見込みには鳳凰文が配されるものとみられる。高台畳付や高台内には粗い砂が顕著に付着している。漳州窯系の磁器と考えられる。ＣＪ４は胎土が精緻で、比較的薄手の作りである。口縁部内面には唐草文が、見込みには波文が描かれている。いずれも17世紀初頭から前葉頃のいわゆる「明末清初」の製品と推測さ

れる。19号遺構では、陶器は小破片がわずかに出土するのみであるが、同時期の唐津や志野とみられる破片が確認される。

21号遺構では、磁器の小中皿（ＣＪ５）、陶器では志野の丸皿（ＣＴ17）や角鉢（ＣＴ18）、絵唐津の向付（ＣＴ19）などが出土している。ＣＪ５は貼り付け高台で、いわゆる「こんにゃく判」による草花文が見込みにみられる。ＣＴ17は、長石釉で見込みと高台内に目跡が残る。ＣＴ18の角鉢は、見込みと外面に鉄絵による文様が描かれる。残存する底部は平坦であるが、欠損部分に脚が付く可能性も考えられる。磁器の小中皿（ＣＪ５）を除くと、陶器では17世紀初頭、あるいは17世紀初頭から前葉の年代でまとまっている。ＣＪ５は埋土上層の出土であり、混入の可能性も考えられる。

24号遺構からは、Ⅰ期の他の遺構に比べると、やや多くの陶磁器が出土している。磁器では、肥前（ＣＪ６）に加え、中国のものが３点出土している（ＣＪ７～９）。ＣＪ７～９は、いずれも小破片のみであるが、「明末清初」の青花磁器であろうと考えられる。ＣＪ７は芙蓉手の文様が、ＣＪ８には「虫喰い」がみられる。肥前の磁器で図化できたのはＣＪ６のみであるが、「こんにゃく判」を用いた「くらわんか手」の製品であり17世紀末以降に下るものである。24号遺構埋土下層出土のものでは、これのみが他の遺物より明らかに新しく、混入の可能性が疑われる資料である。

24号遺構の陶器では、瀬戸･美濃製品と肥前製品が多いが、信楽？の製品が加わる。美濃では、折縁ソギ皿（ＣＴ20）、鼠志野の丸皿（ＣＴ21）、長石釉の丸皿（ＣＴ22）、志野織部の鉄絵蔓草文皿（ＣＴ23）、志野の鉄絵鉢（ＣＴ25）など、多様な種類の製品が出土している。肥前の小中皿（ＣＴ24）では、見込みに胎土目の痕跡が確認される。また、碗では、瀬戸・美濃の天目碗（ＣＴ28）に加え、肥前産とみられる長石釉の端反碗（ＣＴ26）や筒形碗（ＣＴ27）など、茶器と考えられるものがいくつか出土している。ＣＴ26は、器形や釉調から朝鮮の碗の写しではないかと推測される。ＣＴ27は外面は鉄釉で、内面は口縁部付近で鉄釉と長石釉を掛け分けたものである。茶器とみられる碗に加えて、茶道具では水指（ＣＴ29）も出土している。ＣＴ29は耳付きの鉄釉が掛けられた水指で、観察表では産地不明として記載しているが、唐津とは胎土が明らかに異なり、高取や他の九州の窯の製品ではないかと推測される。ＣＴ30・33は、信楽かと推測される壺あるいは甕の破片である。ＣＴ30は鉄釉が施釉され、ＣＴ33は無釉である。胎土に特徴のある砂粒を含むことから信楽の可能性が推測されるが、器形が不明なため確定ではない。ＣＴ31は肥前の甕である。体部には鉄釉が施釉されているが、口縁部付近は無釉である。内面には同心円の当て具痕が観察され、底部と口唇部には窯詰めの痕跡が観察される。ＣＴ32は大堀相馬の仏花瓶で、19世紀代に下るものである。他の陶磁器はおおむね17世紀初頭から前葉の時期でまとまるが、このように年代が下るものがわずかに含まれている。ＣＴ32は埋土上層からの出土であるため、上層の形成時期が下るのか、あるいは新しいものが混入した可能性が考えられる。

他に、Ⅰ期のピットからは、17世紀初頭から前葉の陶器が出土している（ＣＴ35・36）。ＣＴ35は志野の長石釉の製品で、鉄絵の文様と底部には半環足が付く。ＣＴ36は唐津の皿で、見込みに文様はないが、口唇部に鉄釉を掛けて皮鯨の装飾をしている。

ＣＴ37は、Ⅰ期以降の時期に属するピット489からの出土である。底部は碁笥底で、志野の製品と推測されるが、灰釉の発色が良くなく、一部が失透釉となっている。

【Ⅱａ期の遺構出土の陶磁器】（図72－10、図80－39 ～ 41）

Ⅱａ期は、帰属する遺構が少なく、出土する陶磁器も非常に少ない。陶磁器の年代としては、17世紀代のものと考えられる。

磁器では細片がほとんどで、１号井戸出土のＣＪ10を提示できるのみである。肥前の製品で、高台畳付きに砂が付着し、器形から17世紀中葉から後葉頃のものと考えられる。

陶器も細片がほとんどである。１号井戸からは絵志野の製品（ＣＴ39）が、３号井戸からは志野の長石釉の丸

皿（ＣＴ40）が出土しており、17世紀初頭、あるいは17世紀初頭から前葉頃のものである。ＣＴ40は口縁部にわずかではあるが炭化物の付着が確認されることから、灯明皿などに転用された可能性も考えられる。ＣＴ38は、13号建物柱６から出土した瀬戸・美濃の天目碗である。高台は削り出し輪高台で、高台周辺は露胎である。上半が欠損しているため詳細は明らかにし難いが、17世紀代のものと考えられる。10号遺構出土のＣＴ41は、内外面無釉でロクロ目が顕著な様子からさや鉢の可能性が考えられる。内面と見込みには付着物が観察され、陶器か磁器が入れられて焼成された際の痕跡ではないかと推測される。産地や時期は不明である。また、口縁部内面には敲打痕がみられ、口縁部と底部には炭化物が観察されることから、さや鉢を火入や灰吹などに転用したものであることが考えられる。

【Ⅱｂ期の遺構出土の陶磁器】（図72～75－11～45、図80～83－42～75）

Ⅱｂ期では15号遺構、20号遺構、25号遺構からやや多くの陶磁器が出土している。陶磁器の年代としては、18世紀代が中心であるが、さらに年代を絞れるものでは17世紀後葉から18世紀前葉頃のものが多い傾向にある。また、比較的多くの遺構で、17世紀初頭から前葉、あるいは中葉など、やや年代の遡る資料が若干含まれている傾向が見て取れる。磁器では肥前のものが中心となる。陶器では、肥前、美濃、瀬戸・美濃、大堀相馬、京・信楽などの産地がみられる。肥前、美濃、瀬戸・美濃の製品がやや多く、大堀相馬はあまり多くない。京・信楽もあまり多くはないが、一定程度含まれている。さらに、擂鉢、壺・甕類などの特定の器種では、岸や信楽の製品がみられる。

25号遺構は、17世紀後葉から18世紀前葉頃の時期のものが比較的まとまって出土している。磁器は肥前の製品が中心となる。中型の丸碗では、器厚が比較的薄手の種類の碗（ＣＪ32･33）や高台内に銘がみられるもの（ＣＪ25）などである。筒形碗（ＣＪ39）は、呉須の発色などから波佐見の製品とみられる。皿では、高台径が比較的小さいもの（ＣＪ26）、吹墨による文様のもの（ＣＪ30）、日の字鳳凰文のもの（ＣＪ31）、比較的緻密な文様が描かれるもの（ＣＪ36）、色絵文様のもの（ＣＪ28）、大皿（ＣＪ27）と、比較的多様な皿が出土している。年代は、17世紀中葉から後葉頃とやや古くなるものも含まれる（ＣＪ26･27･30･31）。小型の端反碗では、染付（ＣＪ34）と白磁（ＣＪ24）がみられる。また、年代は不明であるが、型打の水滴が出土している（ＣＪ37・38）。ＣＪ37は型打と染付で植物のような意匠となっている。ＣＪ38は七福神の布袋を模している。高台内の銘はＣＪ25とＣＪ34にみられ、何らかの銘を崩したものと考えられるが、原形は不明である。ＣＪ35の中型の瓶類は、19世紀代のものとみられ、混入の可能性が高い。

陶器では、肥前と瀬戸・美濃を中心として、器種によっては岸や信楽？が加わる。大堀相馬や小野相馬、京・信楽の製品は、小破片でわずかに確認されるが、ほとんど含まれないようである。碗では、肥前の呉来手（ＣＴ57～59）がほとんどで、小破片の資料で大堀相馬の碗の可能性があるものがわずかに含まれるが、他の産地のものはみられない。小中皿では、肥前（ＣＴ61・66）、瀬戸・美濃（ＣＴ67）がみられる。ＣＴ66は、肥前の見込み蛇ノ目釉剥ぎの小中皿である。蛇ノ目釉剥ぎ部分は露胎で、砂目跡などはない。磁器の皿と同様に、やや古い17世紀代のものも含まれている（ＣＴ61・67）。ＣＴ61は、肥前の印花文の大皿で、見込みと高台に白土目が観察される。瀬戸・美濃の小中皿（ＣＴ67）は、灰釉製品である。また、唐津や志野の向付など（ＣＴ60・68）もわずかではあるが出土しており、磁器・陶器ともに、年代の古いものが含まれている。その他、壺・甕類や擂鉢などの器種では、信楽（ＣＴ62）や岸（ＣＴ63～65）といった産地の製品がみられる。

15号遺構の磁器では、皿（ＣＪ16・17）と白磁の猪口（ＣＪ15）がみられる。いずれも肥前である。ＣＪ17は比較的細かな線や濃淡のあるダミなど緻密な文様の上手のものである。ＣＪ16は、高台内に銘がみられるが、「年製」の部分のみ確認される。陶器では、色絵製品と錆絵染付の製品がみられる（ＣＴ50・51）。ＣＴ51は京・信楽の錆絵染付の丸碗である。ＣＴ50は色絵（青）と鉄絵による文様がみられるものであるが、器面の状態がよくなく、胎土にも疑問があるため、産地は不明である。

20号遺構の磁器では、中型丸碗（ＣＪ22）、小中皿（ＣＪ18・20・21）、蓋物（ＣＪ19）、青磁の香炉（ＣＪ23）などがみられる。小中皿（ＣＪ18・20）では、見込みに「こんにゃく判」を用いた五弁花文がみられる。ＣＪ21の小中皿は、比較的緻密な文様が描かれたもので、年代もやや古く17世紀後葉から末葉のものと考えられる。中型丸碗（ＣＪ22）は、京焼の影響を受けたと考えられる高台が小振りで器高も浅めの器形のものである。青磁の香炉（ＣＪ23）は、鼎形で高台と三足を持ち、青磁釉の色調などから波佐見の製品とみられる。陶器では、大堀相馬の丸碗（ＣＴ55）、岸の擂鉢（ＣＴ53）、信楽の壺（ＣＴ54）と、産地不明の筒形碗（ＣＴ56）、擂鉢（ＣＴ52）などが出土している。信楽の壺（ＣＴ54）は、破片のため断定はできないが、16世紀代まで遡る可能性もある。ＣＴ56の筒形碗は、胎土がマーブル状を呈する練上手で、接合しない破片部分には鉄絵で文字が書かれている。文様や釉調から京焼系の可能性も推測されるが、確実ではないため、産地不明とした。ＣＴ52の擂鉢は口縁部形態が特徴的であるが、産地は不明である。

他の当該期の遺構では、まとまった資料はみられないが、特徴のあるものについてふれていく。磁器では、肥前のものがほとんどであるが､11号遺構では中国の製品が出土している（ＣＪ14）。小型の碗で､梅花文が描かれ､「明末清初」の時期と考えられる。肥前磁器の皿では、上述の15号遺構、20号遺構、25号遺構と同様に、緻密な文様の上手のもの（ＣＪ13・45）に加え、見込み文様に「こんにゃく判」を用い、文様がやや簡略化されたもの（ＣＪ12）もみられる。24号建物柱９からは、青磁の香炉が出土している（ＣＪ40）。20号遺構出土の香炉（ＣＪ23）と同様に波佐見のものと考えられるが、器形は異なり、筒形の形態で平底に三足を有するものである。平底部分には鉄化粧が施されている。29号遺構からは、白磁の端反碗（ＣＪ42）と紅皿（ＣＪ43）が出土している。

６号井戸の小型の丸碗（ＣＪ11）は、切込の可能性が考えられる資料である。28号遺構の中型端反碗（ＣＪ41）は焼継ぎがなされており、底部には焼継ぎの文字が確認される。これらは、18世紀末以降、あるいは19世紀代の時期が考えられるものであり、推定される遺構の年代より新しいものである。別の遺構埋土を認識できていなかったか、あるいは混入であろうと考えられる。

陶器では、29号遺構で、17世紀代に遡るやや古手のものがいくつか出土している（ＣＴ70～73）。ＣＴ70は美濃の大鉢で、鉄絵と銅緑釉による文様がみられる。器面全体は、長石釉の薄い部分が灰白色の斑点状を呈している。土岐市美濃陶磁資料館所蔵の清安寺窯跡の出土品に類例がみられる（瀬戸市埋蔵文化財センター2003）。ＣＴ72・73は、細片のため器種は不明であるが、志野や志野織部の製品である。いずれも17世紀代に遡る年代が考えられるものである。他に、肥前の皿（ＣＴ71）が出土しており、見込み蛇ノ目釉剥ぎをした銅緑釉のものである。これは17世紀末以降に下るものである。

その他、京・信楽では、６号溝から色絵製品（ＣＴ43）が、ピット510からは呉須絵の製品（ＣＴ74）が出土している。ＣＴ43は輪花皿で、色絵で草文などの文様があるが全体の文様は不明である。

肥前の可能性が考えられるものでは、６号井戸出土のＣＴ42、６号遺構出土のＣＴ49がある。ＣＴ42は胎土がマーブル状を呈する練上手の製品で、底部は碁笥底である。同じ練上手のＣＴ56とは胎土や意匠が異なり、肥前の製品の可能性が考えられるが断定はできない。ＣＴ49は灰吹で、鉄絵で草花文が描かれている。口縁部には敲打痕が観察される。

また、15号溝からは大堀相馬と京・信楽が出土している（ＣＴ45～48）。京・信楽は、灰釉の丸碗（ＣＴ46）と色絵の袋物（ＣＴ48）で、いずれも18世紀代の年代が考えられるものである。色絵部分は金？で葉文が描かれていたとみられるが、色はほとんど退色した状態である。大堀相馬の製品（ＣＴ45・47）は、灰釉と鉄釉の掛け分けのものであり、18世紀中葉以降にみられるものである。15号溝は、18世紀でも中葉以降の年代のものが含まれている。

ＣＴ75は、Ⅰ～Ⅱｂ期に属するピット658出土で、肥前の白泥刷毛目文の大鉢である。

【Ⅱｃ期の遺構出土の陶磁器】（図75・76－46 ～ 51、図83－76 ～ 86）

Ⅱｃ期は、帰属する遺構が少なく、陶磁器の出土量もあまり多くはない。23号遺構、27号遺構で若干多い程度である。年代を限定できる遺物では、18世紀末から19世紀初頭頃と考えられるものが多い。

23号遺構では、陶器が多く、磁器はあまり多くはない。磁器では、青磁の香炉（ＣＪ49）、蓋物（ＣＪ50）が出土している。ＣＪ49の青磁の香炉は、高台内に鉄化粧がなされており、年代としては17世紀後葉頃までさかのぼる。漆継ぎの痕跡が確認されることから、比較的長い間使われた可能性があると考えられる。陶器では、大堀相馬が多く、瀬戸・美濃や肥前のものは、やや古手のものが小破片で混ざる程度である。また大堀相馬以外では、東北産とみられる陶器が、甕などの器種でわずかに含まれる。大堀相馬の陶器では、灰釉碗（ＣＴ81）、印花文の皿（ＣＴ82）、鉄絵山水文の皿（ＣＴ83）、鬢水入（ＣＴ84）などがみられる。18世紀末から19世紀初頭の大堀相馬の灰釉では、糠白色の濁りがみられるものになる場合が多いが、これらの資料には含まれていない。

27号遺構の磁器では、18世紀代の肥前の染付製品が中心で、小破片が多い。図化したものでは、白磁の筒形碗（ＣＪ51）があり、体部に隆帯が１条めぐる器形をしている。陶器では、肥前や瀬戸・美濃（ＣＴ86）、大堀相馬（ＣＴ85）、小野相馬などがみられる。ＣＴ86は瀬戸・美濃の擂鉢で、年代は17世紀末から18世紀初頭とやや遡るものである。ＣＴ85は、大堀相馬の見込み印花文の皿で、釉は一部が糠白色に白濁している。

その他の磁器では、40号建物柱４から白磁の小坏（ＣＪ46）が、13号遺構からは蓋物（ＣＪ47）、小型丸碗（ＣＪ48）が出土している。ＣＪ47は、蛸唐草文で、高台内には銘の一部が認められる。また、漆継ぎの痕がみられる。ＣＪ48は色絵の唐草文で、赤で輪郭を描き、金で中を塗っているが、金の部分はほとんどが退色した状態である。

陶器では、13号遺構で大堀相馬の小碗（ＣＴ80）が出土している。大堀相馬においては、小碗は18世紀末から19世紀初頭以降に多くなるものである。９号溝からは京・信楽の丸碗（ＣＴ77）と、産地不明の中碗（ＣＴ78）が出土している。京・信楽の丸碗は、錆絵と呉須絵で山水文が描かれている。ＣＴ78の中碗は、鉄釉が一部白濁した釉の製品であるが、産地や年代は不明である。８号井戸からは、絵唐津の皿（ＣＴ76）が出土しており、17世紀初頭頃まで遡るものが含まれている。

【Ⅱｄ期の遺構出土の陶磁器】（図75・76－52 ～ 60、図83 ～ 86－87 ～ 124）

Ⅱｄ期では、17号遺構、26号遺構から多くの陶磁器が出土している。年代としては、19世紀前葉から中葉頃が中心であるが、ごくわずかに古手のものが含まれる場合がみられる。この頃になると、大堀相馬できわめて多様な器種を大量に生産するようになることと、各地の地方窯で陶器が生産されるようになることも影響して、陶器の出土量が多くなる。そのため13号溝のように、磁器はそれほど多く含まれていないものの、陶器の出土量が多い遺構もみられるようになる。磁器では、肥前に加えて、瀬戸や東北の地方窯のものとみられる磁器も含まれるようになる。

17号遺構の磁器では、肥前の中型端反碗（ＣＪ55）、小型端反碗（ＣＪ56）、小型丸碗（ＣＪ57）、瓶類（ＣＪ58）などがみられる。ＣＪ55は、外面に竹林文、見込みにも文様がみられ、端反碗となるものである。ＣＪ56は墨弾きによる牡丹文が描かれ、焼継ぎによる補修の痕跡がみられる。ＣＪ57は、清朝磁器の影響でこの頃に流行する素描きの技法で草花文が描かれている。いずれも19世紀代、あるいは19世紀前葉から中葉のものである。陶器では、大堀相馬の製品に加えて、東北の地方窯で作られたとみられる陶器や産地不明のものが非常に多くなり、肥前や瀬戸・美濃などはほとんど含まれなくなる。大堀相馬では、碗や鉄絵の皿（ＣＴ110）に加えて、袋物不明（ＣＴ104）、土瓶、土鍋（ＣＴ108）などの器種がみられる。ＣＴ104やＣＴ108のように、大堀相馬の製品は、その胎土の特性から比較的器厚の薄い製品が多い。土瓶は破片のみで図化できるものはなかったが、糠白色の灰釉のものや銅緑釉をかけた青土瓶である。東北産？としたもの（ＣＴ102・106・109）は、東北地方の地方窯の製品と考えられる陶器をまとめたものである。胎土や釉調が似ているものもあれば、同一個体の中でも部

位や焼成の状態によって色調が微妙に異なるものもあり、それらを分類することは困難なため、東北産？としてまとめている。仙台城下の比較的近郊の窯だけでなく、仙台藩領内や領外の地方窯も想定したものである。胎土は砂粒を含む粗いものが多く、鉄釉が掛けられている場合が多い。産地不明としたものは、東北産？と範囲を絞ることが難しく、東北以外の可能性もあり、産地を推測することが困難なものである。ＣＴ102の擂鉢は、口縁部が内彎する器形をしている。口縁部外面の形態に違いはみられるが、ＣＴ140・145の東北産？の擂鉢にも、口縁部が内彎する類似した特徴がみられる。ＣＴ106の蓋は、鉄釉が掛けられ、口径が比較的大きいことから、甕や壺などの蓋が推測される。ＣＴ105の小中鉢は、産地、年代とも不明である。見込みには線彫による花文が、外面にも線彫による文様がみられる。比較的柔らかい胎土で、内面には黄色の彩色が、外面には緑色の彩色がみられることから、華南三彩の可能性も考えられる資料である。

26号遺構では、磁器は肥前に加えて、東北産と考えられるもの（ＣＪ59）や瀬戸（ＣＪ60）が含まれる。ＣＪ59の小型端反碗は、口紅があり、雪輪に草花文が描かれ、見込みには蝶？の文様がみられる。肥前や瀬戸とは胎土や呉須の発色が異なり、切込や平清水などの可能性が考えられるが、断定できないため東北産としている。ＣＪ60の瓶類は瀬戸で、口縁部に焼継ぎの痕跡がみられる。陶器では、大堀相馬が非常に多く、肥前、瀬戸・美濃はわずかに含まれる程度である。大堀相馬（ＣＴ114 ～ 117・119 ～ 123）では、碗・皿もみられるが、土瓶や瓶類、仏飯器、灯明皿など、多様な器種がみられる。土瓶では、図化したものはいずれも蓋で、白化粧に青釉や鉄絵で文様を描くもの（ＣＴ115）や糠白色を呈した灰釉のもの（ＣＴ116）がみられる。大堀相馬の瓶類では、体部は灰釉で、口頸部に鉄釉を掛けたものがみられる（ＣＴ114・119・120）。ＣＴ114では、体部に鉄絵で、左駒の走馬文が描かれている。ＣＴ117の灰吹・火入れは、白泥と呉須で梅花を描き、鉄絵で枝を描いた文様であるが、産地は不明である。ＣＴ118は、鳴海織部の向付であり、鉄絵と白泥によって山形文が描かれ、口縁部には銅緑釉が掛けられている。年代は17世紀初頭から前葉であり、古手のものがわずかではあるが含まれている。ＣＴ124は、緑釉の刷毛目がある大鉢である。器形や文様は唐津の刷毛目文のある大鉢と似ているが、胎土が異なっているため、産地は不明とした。

13号溝では、磁器は小破片が若干出土しただけで、図化できるものはなかったが、陶器は比較的多く出土している（ＣＴ91 ～ 100）。陶器の産地では、大堀相馬と東北産？が中心である。大堀相馬では、碗（ＣＴ91・92）に加え、土瓶（ＣＴ95）や灯火具（ＣＴ93）がみられる。灰釉の碗は、やや透明度がなくなった状態の灰釉に加え（ＣＴ91）、完全に糠白色を呈した灰釉（ＣＴ92）もみられる。土瓶では、糠白色の灰釉に青釉と鉄絵で巴文を描くもの（ＣＴ95）のほか、青土瓶がみられる。東北産？の陶器では、壺・甕類（ＣＴ94）、鉢類（ＣＴ97・98）甕（ＣＴ99）、など、比較的大型の日用雑器が中心である。鉄釉を掛けたものが多いが、ＣＴ99のように口縁部に灰釉流し掛けがなされているものもある。

その他に、５号井戸の陶器では、大堀相馬の鉄絵のある平形の碗（ＣＴ87）や、糠白色を呈した土瓶の蓋（ＣＴ88）、見込み印花文の小中皿（ＣＴ90）、東北産の可能性がある小中鉢（ＣＴ89）などが出土している。磁器では小中皿で、17世紀後葉から18世紀前葉に遡る年代のもの（ＣＪ53）が出土している。緻密な線による草花文の文様がみられ、高台内には銘があり、比較的上手の製品とみられることから、伝世品の可能性もある。12号溝からは、瀬戸の磁器が出土している（ＣＪ54）。蓋付き碗の蓋で、内面には「太明年製」の文字と、つまみの内部には銘がみられる。

【Ⅱｅ期の遺構出土の陶磁器】（図76・77－61 ～ 69、図86・87－125 ～ 142）

Ⅱｅ期の遺構では、２号溝から多くの陶磁器が出土している。陶磁器の年代は、19世紀代のものが主体で、新しいものでは幕末から明治初頭頃のものも含まれている。

２号溝の磁器では、肥前に加えて、他の産地の製品の割合もより高くなっている。碗では、端反碗が多く、広東碗もみられる。ＣＪ62は、瀬戸の中型端反碗である。ＣＪ64は、胎土や釉、呉須の発色から肥前や瀬戸の製

品ではなく、東北産の磁器と考えられる。広東碗で、外面に蝙蝠文が描かれ、見込みには目跡がみられる。ＣＪ63は、非常に薄手の磁器で、口唇部には金で口紅が、見込みには呉須による上絵付で文字と文様が描かれている。産地は不明であり、年代も19世紀中葉以降と考えられ、明治期以降の製品である可能性も考えられる。

２号溝の陶器は、大堀相馬と東北産？が中心である。大堀相馬では、碗、皿（ＣＴ131）、土瓶の蓋（ＣＴ126・127）などの器種がみられる。碗（ＣＴ136～138）は、丸碗以外に中型の端反碗や小型碗がみられ、灰釉はいずれも糠白色を呈した失透釉である。

皿（ＣＴ131）は、透明度がみられる灰釉であることから、18世紀後葉から18世紀末頃とやや年代の遡るものであると考えられ、見込みに目跡が３箇所確認される。土瓶の蓋では、鉄釉に白土で筒描きの文様が描かれるもの（ＣＴ126）や、飛び鉋による文様が施され、鉄釉が施釉されたもの（ＣＴ127）がみられる。ＣＴ125・133は胎土や釉調から東北産？と考えられるものである。ＣＴ125は鉄釉の上に灰釉が流し掛けられている。ＣＴ134の甕は、鉄釉の上に口頸部にのみ灰釉が掛け分けされたもので、灰釉には縮みがみられる。鉄釉の釉調や胎土から、堤？の可能性が考えられる。ＣＴ129の小中鉢は、艶のない鉄釉が特徴的であるが、産地は不明である。ＣＴ135は、内面に灰釉、外面には鉄釉を掛けた製品で、高台内も鉄釉が施釉されており、高台に砂が付着している。産地は不明である。また、ＣＴ128、130は肥前の製品である。ＣＴ128は刷毛目文による文様をもつ鉢で、17世紀後葉から18世紀前葉の年代である。ＣＴ130は、絵唐津の向付で、17世紀初頭の年代である。いずれも遺構の年代より古く、伝世品か混入であろう。

他に磁器では、14号溝から稲束文？の小型端反碗（ＣＪ67）が出土しており、瀬戸の磁器とみられる。やや年代の古いものでは、49号建物柱４からは、肥前の白磁の猪口（ＣＪ61）が出土しており、17世紀後半頃の可能性が考えられる。３号溝の肥前の丸碗（ＣＪ65）は、窓絵に一屋風景文と漢詩とみられる文字がみられる。高台が小振りで、器高も低い器形から、18世紀前葉の年代とみられる。

12・14号溝については、12号溝はⅡｄ期に、14号溝はⅡｅ期に属するが、遺構検出当初はひとつの遺構として認識していたため、遺物についても一部が12・14号溝としてまとめて取り上げられている（ＣＪ68・69、ＣＴ140～142）。ＣＪ68は白磁の輪花皿で、ＣＪ69は青磁に色絵（金･赤･青･黒）で梅花文が描かれたものである。いずれも年代を絞ることが難しく、それぞれ18世紀、あるいは18世紀以降の可能性が指摘される。陶器では、19世紀の可能性が推測される東北産？の擂鉢（ＣＴ140）、17世紀前葉とみられる丹波の擂鉢の口縁部破片（ＣＴ141）、17世紀後葉から18世紀の年代が考えられる肥前の大鉢（ＣＴ142）と、年代にまとまりはみられない。

【Ⅲ期の遺構出土の陶磁器】（図87－143～150）

Ⅲ期の遺構では、７号井戸からの出土が多く、中でも陶器の出土量が多くなっている。他のⅢ期の遺構は、建物であるため、遺物の出土はほとんどない。

７号井戸出土の陶磁器は、19世紀後葉や19世紀代のものが中心ではあるが、17世紀代や18世紀代のものも若干混在して含まれている。最も新しいものは、幕末から明治初頭頃のものである。陶器の出土量が多いが、磁器･陶器ともに小破片である場合が多く、器種や器形が判明するものはあまり多くはない。磁器では、図化したものはなかった。陶器では、19世紀代のものでは大堀相馬や東北産？のものがほとんどであるが、17世紀代や18世紀代の陶器では、美濃、京・信楽といった産地のものが含まれている。ＣＴ143は志野の長石釉の大皿で、17世紀初頭から前葉のものである。ＣＴ146・147は、京・信楽の色絵製品である。ＣＴ146は型打輪花皿で、高台内には色絵（青）で銘がみられる。ＣＴ147の丸碗は色絵（赤・緑）で松文が描かれている。いずれも18世紀代のものと考えられる。19世紀代のものでは、東北産？のものが出土している（ＣＴ144・145）。ＣＴ144の鉢は、見込みと高台畳付きに重ね焼きの痕跡がみられる。鉄釉の釉調や胎土から、東北の窯の中でも堤の可能性が推測される。ＣＴ145の擂鉢は､口唇部が内彎する形態をしており特徴的であり､東北の地方窯のものと考えられるが、特定はできない。

その他、Ⅰ～Ⅲ期に属するピット753からは、小中皿（ＣＴ148）が出土している。底部は厚手で、高台の削りはごく浅く、口縁部を意図的に歪めた意匠をしている。窯道具を外した痕跡なのか、高台内の釉が蛇ノ目に剥落している。17世紀初頭の肥前のものではないかと推測される。Ⅲ期以降の遺構では、１号暗渠から堺の擂鉢の破片が出土している（ＣＴ149）。18世紀のものと考えられる。時期不明のピット145からは、中型の丸碗が出土している（ＣＴ150）。高台内も施釉され、見込みの灰釉は厚く、貫入が顕著である。18世紀代の瀬戸・美濃の可能性が考えられる。

【基本層出土の陶磁器】（図77－70 ～ 78、図87・88－151 ～ 168）

２層、２層相当、Ａ層、Ａ層相当、Ｂ層、Ｂ層相当では、幕末から明治初頭頃とみられる陶磁器が中心である。基本層出土の陶磁器は、出土量が多いため、すべてを提示することは困難である。また、これらの時期の陶磁器の基本的様相は、過去の調査で提示した資料の内容と大きく異なることはないため、重複するような資料については割愛し、特に遺存状況が良く全体の様相のわかる資料や特徴のある資料、古手のものなどを中心に選択して提示している。

Ｂ層相当では、総織部の皿（ＣＴ151）、志野の長石釉の鉢（ＣＴ152）が出土している。ＣＴ151は、口縁部内面に沈線による圏線が巡り、全体に織部釉が掛けられたもので、仙台城跡の三の丸の調査において、同様のものが出土している（結城慎一・佐藤洋1985）。17世紀初頭から前葉のものである。ＣＴ152は、長石釉が高台内にも施釉されている。17世紀初頭のものである。

Ａ層では、磁器の蓋（ＣＪ70）がみられる。蓋付き碗の蓋と考えられ、外面には「こんにゃく判」による楓文がみられる。18世紀代のものと考えられる。陶器では、志野の鉄絵皿（ＣＴ153）、京焼の皿（ＣＴ154）、東北産？の仏花瓶（ＣＴ156･157）、産地不明の蓋（ＣＴ155）が出土している。ＣＴ153は、鉄絵によって蔓草文が描かれ、見込みと高台内に目跡がみられる。17世紀初頭から前葉のものである。ＣＴ154の皿は、陶胎染付で、白化粧した後に呉須で花弁文が描かれている。角型の輪花皿のような器形になるものと推測され、口唇部には呉須と鉄釉によって口紅がなされている。また、花弁文の縁を模るように銀彩を施す。京焼と考えられるが、銀を大胆に用いた装飾意匠は、琳派との関係を想起させ、乾山による製品の可能性も検討する必要がある。ＣＴ156の仏花瓶は産地を相馬系？とした。釉調は小野相馬と似ており、胎土は大堀相馬に近いが、底部が非常に厚く、高台脇の釉処理がきれいであることから、大堀相馬とも違う要素を持っているためである。釉の様子から18世紀後葉から19世紀前葉頃と推測される。ＣＴ157の仏花瓶は、産地を東北産？としたが、胎土や釉に縮みがみられる特徴から、19世紀代の堤の可能性も考えられる。

２層の磁器ではＣＪ71 ～ 76を提示した。ＣＪ71は素描きの雷文と竹に雀の文様の小型筒形碗である。ＣＪ73は見込みに島に海鳥のような文様が描かれている。ＣＪ74はすべて素描きによる文様で、見込みにも文様があり、高台内にも銘がみられる。ＣＪ75は墨弾きの技法によって波と花文が描かれている。ＣＪ76は見込みに松梅文が描かれている。陶器では、擂鉢（ＣＴ158）、皿（ＣＴ159・160）がみられる。ＣＴ158の擂鉢は、口縁部の形態と、擂り目が浅いことが特徴的であるが、産地は不明である。ＣＴ159は大堀相馬の皿で、内面には掻き目を交叉させた文様がみられ、底部には墨書がある。ＣＴ160は志野の長石釉の皿である。

１層・撹乱の磁器では、白磁で型押による鉢（ＣＪ77）と、色絵（赤）の瓶類（ＣＪ78）を図示した。陶器では、肥前、志野、小野相馬、東北産？などの産地がみられる。ＣＴ165は唐津の沓茶碗で、鉄絵による文様がみられる。ＣＴ164は志野の型打菊皿で、見込みと高台内に目跡がみられる。ＣＴ161は東北産？の小中鉢で、口縁部には敲打痕のような痕跡がみられる。東北産？と推測しているが、胎土や縮んだ灰釉の釉調から堤である可能性も考えられる。ＣＴ168の擂鉢は、底部に丸の刻印がみられるもので、胎土や鉄釉の釉調から堤の可能性が推測されるものである。ＣＴ167は、非常に小型の擂鉢で、産地・年代とも不明である。

②土師質土器（図89 ～ 92、表23・24・39・40、図版73 ～ 76）

土師質土器は、皿、焼塩壺、鉢、焙烙、さな、灯明皿、灯明台などが出土している。接合と同一個体識別作業後の土師質土器全体の破片数では、皿822点、焼塩壺（蓋を含む）45点、鉢15点、焙烙５点、その他６点、不明1,287点が出土している。皿が多く、それ以外の土師質土器の出土量はごくわずかである。そのため、皿とそれ以外のものに分けて報告する。２層、Ａ層、１層・撹乱からの出土量が多い。遺構では、Ⅰ期の24号遺構、Ⅱｂ期の15号遺構、25号遺構、Ⅱｄ期の17号遺構、26号遺構、Ⅱｅ期の２号溝、Ⅲ期の７号井戸などからやや多く出土している。Ⅰ期とⅡａ期の17世紀代の遺構からは、皿と焼塩壺のみの出土であり、その他の器種は18世紀以降の遺構から出現する。

【皿】（図89・90、表23・24・39、図版73・74）

土師質土器の皿は、口縁もしくは底部外周の６分の１以上が残存し、なおかつ器高が判明するもの、すなわち口縁端部から底部までが残っており、口径、底径の復元および器高の計測ができるものを抽出し、諸属性の観察を行った。口縁もしくは底部外周の６分の１以上残っているものを抽出基準としたのは、経験的に、これだけ残存していれば、口径もしくは底径の復元において、安定した数値が得られるであろうという判断に基づいている。抽出した資料は54点である。これによって法量の変移などを検討して、出土場所ごとに代表的な資料を図示した。また、器形や調整方法などが特徴的なもの、あるいは墨書が認められるものなどについて図示することとし、合わせて39点を図化して掲載している（ＣＨ１～ 39）。

年代を特定できる遺構となると、点数が限られるため、法量などの時期による変化については検討できなかった。皿の製作技法に関しては、いずれもロクロ成形で、底部が回転糸切りされている。底部の回転糸切り痕は、右回転と左回転のものがある。さらに、糸切り痕跡の中心がどちらか一方に偏る技法ａと、中心が底面のほぼ中央に位置する技法ｂとが存在する（年報９）。回転糸切りの技法では、17世紀初頭～前葉にあたるⅠ期の遺構では技法ａが比較的多く、技法ｂも存在するもののごく限られている。18世紀以降となるⅡｂ期より新しい遺構では、技法ａと技法ｂはほぼ同程度の出現頻度となる。この傾向は、年報９および年報19第５分冊で示した分析結果とも一致している。

内外面ともロクロナデ調整されたものが大半であるが、ロクロナデの後、ミガキ調整されるものも若干含まれている。抽出された資料では、Ⅰ期に属する遺構ではミガキ調整のものは含まれず、Ⅱａ期以降でみられるようになる。

主に皿の口縁部を中心に、スス状の炭化物の付着がみられるものがあり、灯明皿として用いられたものと考えられる。抽出資料54点のうち、炭化物の付着がみられたものは、26点（48.1％）である。抽出資料全体の数量がさほど多くないため、厳密性には問題が残るが、比較的高い割合であることには間違いがない。年報９、および年報19第５分冊の分析では、二の丸地区出土の土師質土器の皿では、資料により若干の違いはあるものの、炭化物が付着しているものの割合はおおよそ３割以下である。しかし、武家屋敷地区第４地点の調査では、抽出資料の47.4％に炭化物の付着が確認されており（年報13）、本資料と類似した値を示している。これらは、二の丸地区と武家屋敷地区の場の違いと考えられる。二の丸地区では武家の饗宴などの儀礼的な席上で使用され、そのまま廃棄された皿の割合が非常に高く、そのため炭化物の付着率は低いものと考えられる。一方、武家屋敷地区では、そのような儀礼的な席上で用いられた皿の割合が低いため、炭化物の付着率が高くなっているものと考えられる。

墨書のある皿は、２点確認されている（ＣＨ11・31）。ＣＨ11は地鎮遺構に伴う土器である。ＣＨ11は下側に置かれていた皿で、上にＣＨ12が被った状態で検出されているが、土圧などで上皿、下皿ともにつぶれた状態で出土している。下皿内部には何も納められていなかった。ＣＨ11にのみ墨書がみられ、ＣＨ12には墨書は認められない。墨書は、「輪宝」を模したものとみられ、その中央に梵字の「ア」を表す文字が記されている。輪

宝とは密教法具のひとつである（日本民具学会1997）。武家屋敷地区第４地点の調査からは、地鎮遺構が３基検出され、地鎮遺構に伴う土師質土器の皿が出土している（年報13）。それらは合わせ口になって埋納されており、内２基には永楽通寶が入れられ、その内の１つには皿の中に稲穂が一面に入っていた。２点の皿の底面に、それぞれ「東」「中北天」と墨書されていた。同じ武家屋敷地区における地鎮遺構でも、埋納方法などに様々な方法があったことが理解される。

ＣＨ31は、17号遺構（Ⅱｄ期）からの出土で、底部に墨書が観察される。小破片のため、文字の読解はできなかった。

【その他の土師質土器】（図91・92、表23・24・40、図版75・76）

皿以外の土師質土器としては、焼塩壺、焼塩壺の蓋、鉢、焙烙、さな、灯明皿、灯明台の一部などが出土している。皿以外では焼塩壺がやや点数が多いが、まとまって出土する遺構はない。その他の器種は、いずれもごく少数の出土である。

焼塩壺は、45点出土しており、そのうち11点を図化した（ＣＨ40・43～45・47・49・50・59・60・63・64）。

ＣＨ40は５号建物柱２、ＣＨ43は14号遺構、ＣＨ44は24号遺構からの出土であり、いずれもⅠ期（17世紀初頭～前葉）に属する。ＣＨ40・44は地元産焼塩壺に多くみられるロクロナデの調整痕が観察され、胎土も赤みを帯びたものである。ＣＨ40は直線的な体部、ＣＨ44はやや丸みのある底部付近の破片である。地元産の焼塩壺はＡ～Ｄ類に分類されており（年報９、年報19第５分冊）、17世紀初頭～前葉の時期では、地元産の焼塩壺Ａ類に直立する体部をもつものがあり、Ｂ類に緩やかな稜線をもつものがみられる。Ａ類、Ｂ類とも底部付近をカットガラス状に削るという特徴を有する。ＣＨ40は底部が欠損しており、ＣＨ44はカットガラス状のケズリは観察されないため、確実ではない部分も残るが、これら地元産焼塩壺に相当するのではないかと考えられる。ＣＨ43は、器面の状態がよくなく、外面の調整痕は不明であるが、内面の状態からロクロ成形ではなく手づくねとみられる。底部の形も円形ではなく、不整円形を示している。胎土はやや白っぽく、地元産の焼塩壺に多い赤みがかった胎土とは異なることから、畿内産の焼塩壺ではないかと考えられる。

ＣＨ45は６号井戸、ＣＨ47は15号遺構、ＣＨ49は25号遺構、ＣＨ50は29号遺構からの出土であり、Ⅱｂ期（18世紀代）に属する。ＣＨ45・49・50は、いずれもロクロ成形で、コップ状の形態をしており、体部下半に格子タタキをもつものである。このような焼塩壺は、これまでの調査では17世紀末～18世紀初頭以降からみられ、地元産の焼塩壺Ｄ類と考えられる（年報９、年報19第５分冊）。コップ状の凹みには、深いものと浅いものがみられるが、ＣＨ49は深いものに含まれる。ＣＨ47はロクロ成形であるが、格子タタキは確認されない。胎土は地元産に多くみられるものと共通するが、小破片のため、詳細は不明である。

ＣＨ59・60は２層、ＣＨ63・64は１層・撹乱からの出土である。ＣＨ59・60・63は、外面に格子タタキ目が観察されるが、ＣＨ60のみ格子目が細かい。ＣＨ60は、口縁部がわずかに外彎し、体部下半に丸みを有する器形をしており、地元産焼塩壺Ｃ類（年報９、年報19第５分冊）に相当する可能性が考えられる。ＣＨ59･63はコップ状の形態をしたＤ類である。ＣＨ64は、ロクロ成形で、器厚は比較的薄手で、器面はやや黒みがかった色調を示している。形態から焼塩壺の蓋の可能性が考えられるが、詳細は不明である。いずれも、１層・撹乱と２層の出土であり、下層からの混入と考えられるため、年代は不明である。

灯明皿は３点出土しており、すべてを図化した（ＣＨ53～55）。ＣＨ53・54はⅡｃ期の23号遺構から、ＣＨ55はⅡｄ期の13号溝からの出土である。ＣＨ54には灯心を据えるための舌状の突起がみられる。ＣＨ53、55は突起が剥落しており、突起が貼り付けられていた痕跡のみが確認される。口縁部や突起の先端には、火を灯した痕跡とみられる炭化物が確認される。

焙烙は５点出土しており、Ⅱｃ期の12号遺構からと、２層、１層・撹乱からの出土である。そのうち２点を図化した（ＣＨ51・65）。ＣＨ51は、12号遺構からの出土である。平底で、内部３ヵ所に内耳の貼り付けが確認

される。外面全体と内面の底部が黒色化しており、使用による痕跡とみられる。内耳を有する焙烙は、武家屋敷地区第７地点の調査において、18世紀前葉の一括資料である２号遺構から出土が確認されている（年報19第２分冊）。ＣＨ65は１層･撹乱出土で､フライパン形の焙烙の把手部分である。把手の上下には小孔が開けられている。ＣＨ65は1層・撹乱出土のため、時期については不明である。二の丸第９地点の18世紀後葉の一括資料の中に、類似した焙烙が確認されている（年報８、年報９）。

ＣＨ56は、用途不明であるが、何らかの容器と考えて、鉢としている。Ⅱｄ期の17号遺構出土である。ロクロ成形で、内外面にロクロナデの調整痕が明瞭に観察される。付着物や黒色化などの使用痕は観察されない。

その他に、器種・用途不明の土師質土器もみられる。ＣＨ41はⅠ期の１号遺構下部埋土出土で、鋳型の可能性が推測されるものである。上面には円形の凹みがあり、内部が黒色化している。凹みの底面は不規則な凹凸はあるが、何らかの文字や模様などの痕跡は確認できない。側面の１ヵ所には穿孔がみられるが、貫通はしていない。ＣＨ42はⅠ期の７号遺構出土で、用途不明の土師質土器である。同様の形態のものが、１層・撹乱からも出土している（ＣＨ62）。いずれもロクロ成形で、内部にはロクロナデの調整が確認され、外面は八角形に面取りされている。ＣＨ42は底部に墨書が確認される。

ＣＨ52は13号遺構（Ⅱｃ期）の出土である。焼塩壺の可能性も考えられるが､口縁部付近のみの小破片のため、器種不明とした。ロクロ成形である。ＣＨ46は11号遺構（Ⅱｂ期）の出土で、器種は不明である。内面には布目圧痕とタール状の付着物が観察される。胎土は灰色～灰褐色を呈する。ＣＨ48は20号遺構（Ⅱｂ期）出土で、器形は方形を呈し、低い脚部が付くものと考えられる。外面には沈線による雷文と刺突文がみられ、沈線や刺突内には付着物が観察される。

ＣＨ58はピット655（Ⅰ～Ⅱｄ期）出土で、器種は不明（台）としている。口縁部の形態は軟質施釉陶器の器台に類似しているが、破片のため、詳しくはわからない。

③瓦質土器（図92～96、表23・24・42、図版76～80）

瓦質土器は、火鉢、蚊遣り、五徳、擂鉢、十能、火消壺、焜炉などが出土している。特に集中して出土する遺構はなく、２層、Ａ層、１層・撹乱からはやや多くの瓦質土器が出土している。全体で271点出土しており、そのうち特徴がよくわかる34点を図化した。

火鉢は13点出土しており、そのうち1点を図化した。ＣＧ１は、江戸時代以前の遺構である沢状遺構下部埋土の出土となっているが、後世のものが混入した可能性も考えられる。口径に対して器高が浅く、外面に粘土紐貼り付けなどの装飾をもたない、火鉢Ａ２類（年報９、年報19第５分冊）に相当する。口縁部は内外面に突出することなく、体部から比較的真っ直ぐに伸びている。これまでのところ、火鉢Ａ２類は、二の丸地区第５地点（年報６）の元禄年間の整地層から出土したものが最も古いものであった。外面の調整には、カキメの調整痕が観察される。胎土には、特徴のある砂粒あるいはシャモットが混和されている。カキメ調整や特徴的な砂粒を含む胎土は、二の丸地区や武家屋敷地区で出土する瓦質土器にはあまりみられない特徴であり、搬入品の可能性も考えられる資料である。

擂鉢は14点出土しており、７点を図化した（ＣＧ2～6・10・11）。擂鉢は、Ⅰ期とⅡａ期の遺構からの出土に限られており、17世紀代に限定されることが注目される。18世紀以降は、陶器製の擂鉢が普及するため、瓦質擂鉢が衰退していった可能性がある。いずれもロクロ成形である。擂り目は４～６条一組で､あまり密ではない。ＣＧ５は１号遺構（Ⅰ期）出土で、外面に突起があり、持ち手になるものと考えられる。ＣＧ４も１号遺構（Ⅰ期）出土で、内面の擂り目がほぼ摩滅した状態である。ＣＧ10は24号遺構（Ⅰ期）出土で、口縁部内面に波文状の沈線がみられる。

焜炉は２点出土しており、１点を図化した（ＣＧ８）。７号井戸（Ⅲ期）からの出土で、破片のため全体形状

は不明であるが、口縁部に窓を有し、鍋などを支えるための突起が口縁部内面に付く形態であることが確認される。焜炉類は、武家屋敷地区第７地点の調査からもいくつか出土しているが、これらとも異なる形態である。

さなは３点出土しており、すべてを図化した（ＣＧ7・22・23)。Ⅱｄ期の17号遺構（ＣＧ22・23）と、Ⅲ期の７号井戸（ＣＧ７）からの出土であり、すべて19世紀以降の年代である。いずれも、円盤状の板に、円形の孔が数カ所開く形態をしている。

蚊遣りはⅡｂ期以降の遺構、Ａ層、２層、２ａ層、1層・撹乱から出土している。本体は、円形の上半部と円錐台形の下半部からなり、上部は塞がれずに蓋が伴う。下半部には台形の焚き口が開けられ、上半部の上部に円孔が穿たれるものである。年報９において、類例をもとに全体形状を復元したものを示したが、上半部と蓋の円孔とその周囲に、タール状の付着物が顕著に認められることから、蚊遣りと考えているものである。今回出土したものも、同様の形態で、タール状の付着物が顕著なものを蚊遣りと判断した。27点出土しており、そのうち４点を図化した（ＣＧ18・20・24・26)。ＣＧ18（13号溝、Ⅱｄ期）とＣＧ20（17号遺構、Ⅱｄ期）は蚊遣りの底部で、焚き口の窓の部分である。底部には３方向に脚を有するものとみられるが、上半部は欠損している。ＣＧ24は26号遺構（Ⅱｄ期）出土で、蚊遣りの上半部と下半部の境となる部分と考えられる。円窓を有し、内面はくびれ部分を境に下半が黒色化している。外面には脚上部の装飾が剥落したような痕跡が観察される。獅子の顔などの装飾が、この部分に付いていたものと推定される。ＣＧ26は12・14号溝（Ⅱｄ・Ⅱｅ期）出土で、蚊遣りの蓋である。円窓を有し、外面の口縁部付近と内面全体には、多量のタール状の付着物が観察されることから、蚊遣りの蓋であると考えた。

ＣＧ29・30・33は五徳である。ＣＧ29・30はＡ層、ＣＧ33は２ａ層出土である。３点とも細部の形状が異なっている。ＣＧ29は筒状の形態の五徳で、欠損しているため不明であるが窓などを有する可能性も考えられる。ＣＧ30は爪状の突起を有し、これが鍋や土瓶などを受ける部分と考えて五徳とした。ＣＧ33は一部に切れ目があり、上面から見た形態がＣ字状になるものとみられる。さらに円形の窓を有する。

甕は６点出土しており、20号遺構（Ⅱｂ期）出土の２点を図化した（ＣＧ13・14)。いずれも内面はロクロナデで、外面と口唇部はミガキ調整されている。

ＣＧ15の蓋は屋根を表現したものである。20号遺構（Ⅱｂ期）出土で、型作りで成形した後、沈線と刺突で屋根の細部を表現している。箱庭道具などの可能性が考えられるが、用途は不明である。ＣＧ17は25号遺構（Ⅱｂ期）出土の炭櫃である。本体は方形の箱形で、板作りである。外部に水平に突出する鍔状部を有するとみられるが、欠損している。類似するものは、二の丸地区第２地点などで出土しているが（年報１)、これらはいずれも19世紀のものである。ＣＧ17は、18世紀初頭頃と考えられ、年代が異なる。これまで出土したものと用途などが同じものか、今後、検討していく必要がある。ＣＧ28・34の蓋は、内部に落とし込む状態で蓋をするものとみられ、火消壺の蓋である可能性が考えられる。ＣＧ28は12・14号溝（Ⅱｄ・Ⅱｅ期）出土、ＣＧ34は１層・撹乱出土である。

ＣＧ９は24号遺構（Ⅰ期）出土で、ロクロ成形後、口縁部を歪めて製作している。鉢状の製品とみられ、脚部を有し、外面には貼り付けの痕跡がみられる。ＣＧ12は６号井戸（Ⅱｂ期）出土で、何らかの製品の脚部である。ＣＧ19は13号溝（Ⅱｄ期）出土で、板作りで、Ｌ字に曲がる部分を貼り付けて製作されている。内面はナデ、外面は軽いミガキ調整されている。用途は不明である。ＣＧ31はＡ層出土である。板作りで、形態はＣＧ19と類似している。しかし、ＣＧ31は内外面とも上半部が黒色化しているなど、使用の痕跡が異なることから、用途は異なるものと考えられる。

④土製品（図97・98、表25・41、図版81）

土製品は、土師質土器、軟質施釉陶器のうち実用品でないもの、玩具や人形をまとめた。Ⅰ期～Ⅲ期の遺構、

Ⅲ期以降の遺構など各期の遺構と、Ａ層、２層、２ａ層、１層・撹乱から、多くはないものの出土がみられる。130点出土しており、そのうち特徴のわかる14点を図化した（ＣＯ１～14)。土人形とままごと道具や碁石などの玩具がみられる。

玩具には、瓶、蓋、碗、硯、土瓶？などのままごと道具や、碁石などがみられる。ＣＯ４は13号遺構（Ⅱｃ期）出土のミニチュアの瓶である。ＣＯ１は１号井戸（Ⅱａ期）出土で、瓶の下半部であると考えられる。いずれもロクロ成形で、底部には回転糸切り痕がみられる。ＣＯ１は軟質施釉で、ＣＯ４は部分的に鉄釉の痕跡が残存しており、軟質施釉であろうと考えられる。ＣＯ５は土師質の碁石である。17号遺構（Ⅱｄ期）出土で、手づくねである。ＣＯ７は、蓋である。26号遺構Ａ層相当出土で、軟質施釉で、外面にのみ透明釉と緑色の彩色がなされている。ＣＯ12は、２層出土で、磁器の紅猪口を模したものとみられ、型作りで土師質である。ＣＯ13は硯で、土師質である。２層出土で、型作りとみられ、表面には胡粉あるいは雲母を塗布したような痕跡が観察される。ＣＯ14は土師質で、土瓶と推測される。１層･撹乱出土で、ロクロ成形で、底部には回転糸切り痕が観察される。注口部分は剥落している。

土人形には、人物のほか、蟹、馬、猪、犬などの動物がみられる。ＣＯ２はⅢ期のピット502出土で、土師質で、蟹を模っている。型作りで、蟹の目、足、ハサミなどを表現しており、甲羅の中心には小孔がみられる。ＣＯ３はⅡｂ期以降のピット524出土である。土師質で､何らかの人物を模っているとみられるが､上部が欠損しており、詳細は不明である。前後合わせの型作りで、足の表現などがみられる。底部には穿孔がある。ＣＯ６は26号遺構Ａ層相当出土である。土師質で、人物とみられる。上半は欠損している。前後合わせの型作りで、中実である。手、足、着物の襟元などの表現がみられる。また、表面には、胡粉あるいは雲母を塗布したような痕跡が観察される。ＣＯ８はⅡｄ期の26号遺構出土で､土師質の馬である。胴体部分は左右合わせの､中空である。型作りで、鞍や胸懸、尻懸が表現されている。内面には成型時の指圧痕が顕著に観察される。脚部は中実棒状で、胴体部分に貼り付けられている。腹部と鞍の中央部には孔がある。ＣＯ９はＡ層礫集中部出土の土師質の猪である。左右合わせの型作りで、内面には成形時の指圧痕が観察される。猪の体毛の表現がみられる。ＣＯ11は、Ａ層出土の土師質の犬である。左右合わせの型作りで、中実である。頭部は欠損しているが、脚と巻いた尾の表現から犬と考えられる。

ＣＯ10はＡ層からの出土である。種類不明で､墨書がみられる。欠損があるため､文字の読解はできなかった。内面の痕跡から、型作りで中空であろうと考えられる。

⑤軟質施釉陶器（図98、表25・43、図版81）

透明な鉛釉の施された軟質施釉陶器のうち、ミニチュアなどを除いた実用品を、ここにまとめている。Ⅰ期からⅢ期以降の時期まで､ほぼ各期の遺構から出土しているが､Ⅰ期やⅡｂ期など17世紀代や18世紀代の遺構では、埋土Ａ層などの比較的新しい時期の埋土からの出土である場合がほとんどを占める。出土点数が多くなるのはⅡｄ期より新しい時期である。これまでの調査においても、軟質施釉陶器は19世紀に入ると少量含まれるようになり､幕末以降の年代で出土量が多くなることが知られている。今回の調査においても､同様の出土傾向である。点数が多いのは焙烙であるが、焙烙は個体ごとの差が少ないことから接合が困難で、結果的に破片数が多くなっていることにも起因している。他には、仏飯器も数点出土している。全体で264点出土しており、そのうち２点を図化した。

ＣＮ１は２号溝（Ⅱｅ期）出土、ＣＮ２は２層出土の焙烙である。平底で、中空の把手が付くフライパン形の器形をしており、底部の外面や把手などに炭化物が付着する。類似した形態の焙烙は、仙台市の堤において、昭和期まで製作されていたことが知られており、これらも堤の製品と考えられる。

⑥瓦（図99 ～ 109、表26 ～ 28・44 ～ 56、図版82 ～ 89）

瓦の分類・集計・計測の基準は年報６・７・８・９で示しており、年報18 では、新たな種類を設定し改めて分類基準をまとめている。今回報告する資料の分類基準も基本的には年報18 に準じているが、概念について再整理を行ない図にまとめた（図70）。その結果、一部新たに設定した種類がある。

平瓦は、確実に平瓦と判断できるものを集計し、反りがあるものを平瓦１類系、反りがなく平坦であるものを平瓦２類系として大別した。前者のうち、地瓦は平瓦群・桟瓦群に分類し、瓦当の有無で細分した。瓦当面のみが残存し、どちらの群か明確でないものは、軒平瓦類を設定し分類した。また、平瓦を切って作る隅切瓦は平瓦に包括し、桟瓦群のうち、一部分のみの残存であるものは桟瓦類として分類している。道具瓦については、棟瓦、熨斗瓦に分類した。さらに、平瓦１類系の瓦の一部である可能性があるものは平瓦１類とした。平瓦２類系については、従来通り板塀瓦と板状瓦に分類し、それらの一部の可能性があるものを平瓦２類としている。

丸瓦系については、地瓦である丸瓦群を、丸瓦と、丸瓦を加工して作られる軒丸瓦・鳥伏間・谷丸瓦に分類している。丸瓦は、従来通り瓦当面がないことが確実なものだけを分類した。道具瓦については、面戸瓦、輪違いに分類した。また、丸瓦系の瓦の一部である可能性があるものについては丸瓦類としている。

平瓦・丸瓦系に分類できない瓦については、その他の瓦として分類した。特徴ごとに鬼瓦、Ｔ字瓦に分類を行い、これらの可能性がなく特殊な形状で用途や名称が明確でないものについては特殊瓦に分類した。また、小片であるため形状が不明で、分類自体が困難な瓦については、不明瓦として分類を行っている。

今回報告する瓦は、軒丸瓦、軒丸瓦類、軒平瓦、軒平瓦類、丸瓦、平瓦（１類・２類）、隅切瓦、熨斗瓦、桟瓦類、面戸瓦、谷丸瓦、古代瓦の 11種類と特殊瓦に分類した数点である。

分類・集計した瓦のうち、年報６に示した基準に従って計測できるものを抽出し、諸属性の観察を行った。図示したものはそれぞれの種類の中で比較的残存率が高く、よく特徴を示しているものを中心に選択し提示している。ただし、刻印の認められる瓦については、種類や残存の度合いに関わらず、すべてを提示している。

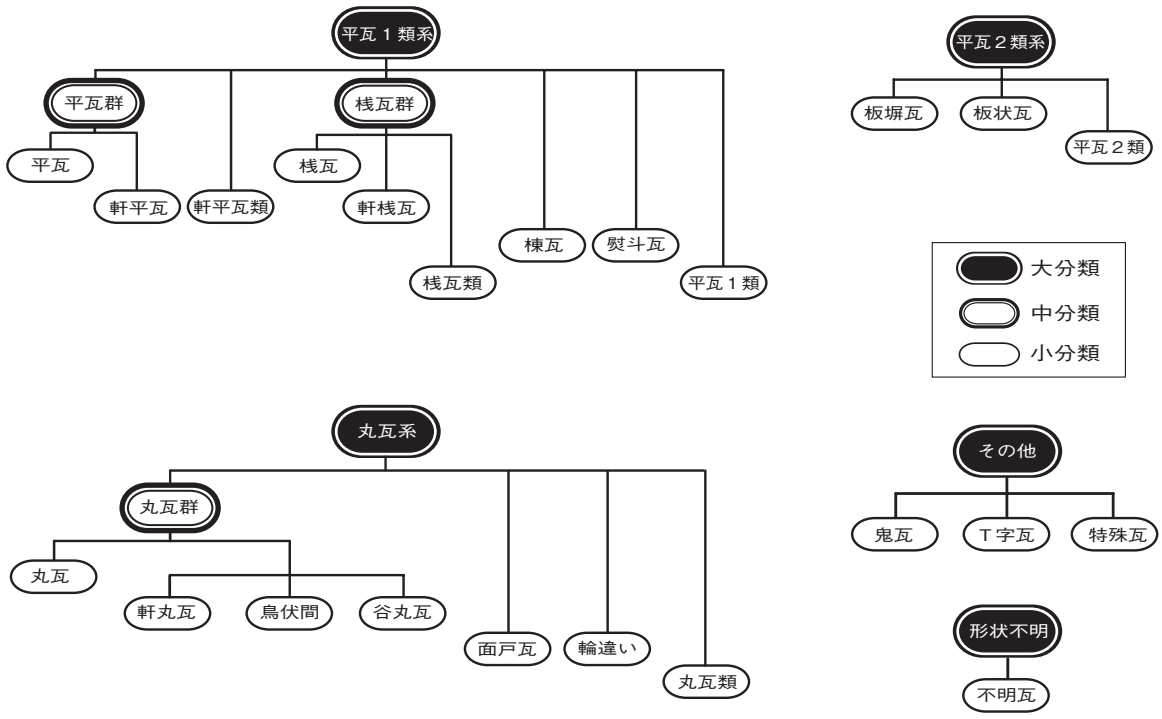


図70　瓦分類概念図
Fig.70　Conceptual diagram of classification of roof tile

軒平瓦・軒平瓦類の瓦当文様の分類は、年報９において示した分類名称を使用している。

【軒丸瓦】（図99、表45、図版82）

軒丸瓦は34点出土している。このうち瓦当文様が比較的識別できる12点を図示した（Ｔ２～13）。

瓦当文様が判明するものでは、連珠三巴文10点、菊花文１点、連珠のみ残存するもの８点、巴文のみ残存するもの４点である。連珠三巴文が圧倒的に多く、三引両文や九曜文はまったく出土しなかった。連珠三巴文はすべて左巻き、巴文のみ残存したものも左巻きが多く、右巻きはＴ４の１点のみである。菊花文（Ｔ13）は浮き彫り状のもので、年報９の分類上ＢかＣであると考えられる。二の丸地区第５地点（年報６）、三の丸跡（結城慎一・佐藤洋1985）出土の瓦に類例がみられる。

瓦当の直径が判明する残存状態のものは一つもない。残存率が高い瓦から推定値を導くと15㎝～18㎝の幅におさまり、17㎝のものが最も多い。周縁幅は1.5～2.1㎝で大きな差はみられない。瓦当直径と周縁幅の比についても大きなばらつきはなくまとまっている（図71）。

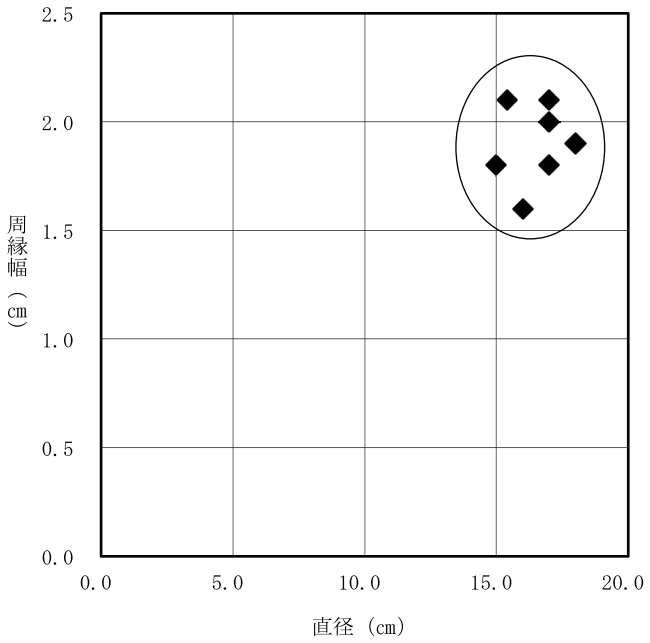


図71　瓦当直径と周縁幅の関係
Fig.71　Correlation of the diameter and the rim width of eaves-tile end piece

【軒平瓦】（図99、表46、図版82）

軒平瓦は、24号遺構（Ⅰ期）、ピット25（Ⅱｃ期以前）から各１点ずつ、計２点出土している。このうち、瓦当文様が識別可能である前者を図示した（Ｔ14）。瓦当文様は四弁花？＋唐草６類で、下端を垂下させ、くびれを持つ逆三角形のような滴水瓦の形態を持つ軒平瓦である。これに似た形態の瓦当は二の丸地区第９地点で出土している。瑞巌寺で1650年以前に使用されていたものに類似し、仙台城でも瑞巌寺創建の滴水瓦と同範の瓦が出土している。

【軒平瓦類】（図100、表47、図版82）

軒平瓦類は計36点出土している。全体が残っていないため、桟の付かない軒平瓦となるのか、軒桟瓦になるのか判明しないものを、軒平瓦類としている。文様が判明するものでは、24号遺構（Ⅰ期）では細葉雪持笹＋唐草

４類が２点、唐草４類のみ残存の瓦が１点、25号遺構（Ⅱｂ期）では、細葉雪持笹＋唐草２類が２点、四弁花？＋唐草３ｄ類が１点、唐草４類のみ残存する瓦が１点、27号遺構（Ⅱｃ期）では四弁花＋唐草３ｄ類が１点、26号遺構（Ⅱｄ期）では桔梗文のみ残存する瓦が１点、Ａ層瓦集中部では、細葉雪持笹＋唐草４類が４点、Ｂ層相当では、細葉雪持笹＋唐草４類が１点、１号暗渠（Ⅲ期以降）では細葉雪持笹＋唐草２類が１点、唐草１類のみ残存した瓦が１点である。全体的に細葉雪持笹と唐草４類の組み合わせが多いが、25号遺構、27号遺構では四弁花と唐草３ｄ類が、26号遺構では桔梗文が出土している。

そのうち、文様構成が明らかな７点を図示した（Ｔ15 ～ 21）。Ａ層瓦集中部、Ｂ層相当、24号遺構、27号遺構出土の各１点、25号遺構出土の３点である。瓦当の文様構成で最も多くみられるのは、細葉雪持笹＋唐草４類で大部分を占める。次いで、細葉雪持笹＋唐草２類、四弁花＋３ｄ類の順である。図示していないものに、剣形桔梗文、唐草１類の瓦があるが、文様構成が明らかでないため詳細はわからない。

【丸瓦】（図100 ～ 103、表48、図版83）

ほぼ全体が残っており、丸瓦と断定できたものは計11点である。このうち、残存率の高い６点を図示した（Ｔ22 ～ 27）。1号井戸（Ⅱａ期）出土の１点と、25号遺構（Ⅱｂ期）出土の５点である。胴長は 23.2 ～ 27.5㎝でばらつきがある。26㎝台と 27㎝台が２点ずつで、その他は１点ずつである。幅が測定できた瓦は３点のみで 11.5 ～ 14.2㎝である。このうち、Ｔ23 は長さが 26㎝台で幅が 11.5㎝、Ｔ25・Ｔ26 は長さが約23 ～ 24㎝で幅が 14㎝台で、必ずしも長さに比例して幅が大きくなるわけではない。

【丸瓦類】（図103、表49、図版82）

丸瓦類は 84点出土している。約半数が 24号遺構（Ⅰ期）から出土しているが、その他の遺構でも数点ずつ出土している。破片資料であるため、長さや幅が計測可能であるものはごく少ない。このうち特殊な形態である１点を図示した（Ｔ28）。24号遺構出土で、丸瓦の胴部を斜方向に切ったような形態であるが、本来の形態・用途については明らかにするのは困難である。

【平瓦】（図103 ～ 106、表50、図版84 ～ 86）

平瓦と特定できたものは 14点である。各遺構から１点～数点の出土で、25号遺構（Ⅱｂ期）埋土上層４点、25号遺構埋土下層３点が比較的多い程度である。

このうち残りの良い 11点を図示した（Ｔ29 ～ 40）。ほとんどが頭幅は 22 ～ 25㎝、尻幅は 22 ～ 26㎝の間におさまる。長さは 25.2 ～ 33.8㎝で、27 ～ 28㎝のものが多い。これらは、幅の開きの差はあるものの、尻から頭にかけ幅が減少する台形である。その中で、Ｔ34 は頭幅30㎝、長さ 33.8㎝と大きい。また、尻幅は計測不可能であるが、それ以外のどの部分の幅もほぼ30㎝であり、ほぼ正方形になると思われる。釘穴のあるものは１つも出土していない。Ｔ32 は､24号遺構（Ⅰ期）から出土した隅切り瓦である。一辺が斜方向に切られているもので、長さは約32㎝とやや長いものである。

【平瓦類】（図106・109、表51・52、図版87・89）

平瓦類については、破片資料のため計測可能な瓦が少ない。そのため、刻印があるもの、特殊な形状のもののみを図示した。

平瓦１類は 38点出土しており、このうち特殊な瓦１点、刻印のあるもの４点を提示した（Ｔ41 ～ 45）。Ｔ42 はピット34（Ⅰ～Ⅲ期）から出土している。上面に斜め方向に交差する切り込みが見られるものである。１層・撹乱出土のＴ44 には「四宮」、Ｔ45 には「Ｖ」字状、Ⅱｂ期の 29号建物出土のＴ43 には「□」の刻印が側面にあり、Ⅰ期の 24号遺構出土のＴ41 には幼虫のような形の圧痕がある。

平瓦２類は、24号遺構出土の１点のみである。特殊な形態のため図示した（Ｔ46）。平瓦を斜めに切ったような形態になると思われ、斜辺の上面は、表面から斜方向に削っている。図示した左側辺付近には、水切り溝のようなくぼみが作られているが、上まで延びてはいかないようである。斜めに切られた側面には、３㎜四方の小孔

が開いており、串状のものを差した痕跡のようである。ほぼ平坦なため平瓦２類に含めたが、特殊な形態の瓦となる可能性もある。

【桟瓦】

桟瓦はピット787（Ⅲ期）、１号暗渠（近代）から各１点、計２点出土している。残りが悪いため計測不可能であり図示していない。前者はきき足が左にある右桟瓦である。

【桟瓦類】（図109、表53、図版89）

桟瓦類は１層・撹乱出土の１点のみである（T47）。切り込み部のみの破片であるため、計測は不可能である。「Ｖ」字状の刻印がある。

【板塀瓦】

板塀瓦は、２号溝（Ⅱｅ期）、17号遺構（Ⅱｄ期）から各１点、２層から２点の計４点が出土している。桟幅は５～7cmで、桟の断面はすべて方形である。いずれも残りは悪く、図示したものはない。

【熨斗瓦】（図107、表54、図版87）

熨斗瓦は11点出土している。そのうち、Ⅰ期の24号遺構出土の２点、Ⅰ期以降のピット34出土の２点、Ⅱｄ期の13号溝出土の１点を図示した（T48～52）。

幅は11ｃｍ前後のものが多く、12ｃｍを超えるのはT52のみである。全長が測定可能なのは２点のみで、T51が24.9cm、T48が23.7cmである。T49・T52の凹面には、それぞれ２条、３条の筋が入れられている。ほとんどが割り熨斗瓦で、T51・T52のみ四辺を整形された熨斗瓦である。割り熨斗瓦のうちT48は、２点の割られた熨斗瓦が接合したもので、割って使用する前の形態を観察することができた。ほぼ正方形の平瓦の中央に割目となる筋があり、それが割られた状態で出土したと考えられる。

【面戸瓦】（図107・108、表55、図版88）

面戸瓦は16点出土している。Ⅰ期の24号遺構から10点とやや多く出土する以外は、各遺構から1、２点の出土にとどまる。このうち、比較的残りの良い６点を図示した（T53～58）。完形のものは24号遺構出土のT55のみで、その他は破片資料である。長さは8.6～10.5cmで９cm台のものが多い。幅は、T55のみ計測可能で14.4cmである。側辺が直線的なまま角の部分が面取りされたものと、側辺が湾曲線を描くように面取りされたものに大別することができる。

【棟瓦】

棟瓦は２点出土しているが、残りが悪かったため図示したものはない。計測可能な個所が残っているものも少なく、桟幅が両者とも７cmであること、桟の形状が方形であること以外に詳細は判らない。

【その他の瓦】（図108・109、表56、図版88・89）

その他の瓦には、谷丸瓦、特殊瓦を掲載した（T59～66）。谷丸瓦は、24号遺構（Ⅰ期）出土のT61、25号遺構（Ⅱｂ期）出土のT62の２点である。前者には釘穴が１つ開いており、垂れ部分がはがれたような痕跡が認められる。谷丸瓦には左右の区別があり、後者は尻を上に向けたときに垂れが右側に来る「右」の瓦である。垂れの下端が直線に切られるのではなく、扁平なM字型に整形されている。

谷丸瓦の一部と考えられる特殊瓦は、１号遺構（Ⅰ期）出土のT59、24号遺構（Ⅰ期）出土のT60の２点である。前者には、内側に張り合わせる際に付けられた溝状の痕跡が残っている。後者は、丸瓦部から垂れ部分との角度が、鈍角になるものである。

特殊瓦は、２層から１点、25号遺構（Ⅱｂ期）から２点、13号溝（Ⅱｄ期）から１点出土している。２層出土のT66は断面形状がＬ字型を呈するもので、調整・焼成は瓦に近いことから瓦の一種と考えたが、用途は不明である。25号遺構（Ⅱｂ期）出土のT63には、凹面に垂直方向の筋が１条、T64は斜方向に３条の筋がある。両者とも、図示した左辺は割れ面であるが、黒色に焼けており、割った後に焼成された可能性がある。この点か

ら割り熨斗瓦の可能性もあるが、残存している部分が少ないため、確実ではない。13号溝（Ⅱｄ期）出土のＴ65は、若干湾曲した長方形の板状で、側面は面取りされている。剥離面には付着させるための溝が観察でき、他の部分と接合されていたことが判るが、板塀瓦とは接合方法が異なっている。

⑦漆塗製品

【椀・蓋】（図110、表29・57、図版89）

今回の調査では、漆塗製品の椀とその蓋は、出土量はさほど多くない。Ⅰ期の１号遺構下部埋土から、椀の身６点、蓋１点、身か蓋か不明なものが６点が出土しているのが最も多く、他では、Ⅰ期の７号遺構埋土、Ⅱｂ期の６号井戸、Ⅱｃ期の23号遺構から１点あるいは２点が出土しているのみである。残存状態も良いものはなく、大きく欠損したものや、一部の破片のみが残存したものがほとんどである。

これらのうち、残存状態の良いものを抽出して図化を行っている。また、残存状態が良くないものでも、特徴的な文様などについては写真を提示するなど、可能な限り資料化して提示することとした（ＷＬ１～４・８・９・11・13・14）。

ＷＬ１～４・８・９はいずれもⅠ期の１号遺構下部埋土からの出土である。ＷＬ１は、内面が朱色地、外面は黒地で、文様はみられない。内面には被熱痕がみられ、小孔が２ヵ所確認される。ＷＬ２は、内外面朱色地で、高台内に黒色で「王」の文字が入る。ＷＬ３・４は、内外面黒地で、朱色で文様が描かれている。ＷＬ４の文様は、明確でない部分は残るが、線描きによる千鳥（鶴）文とみられる。仙台城と仙台領内で出土した漆器椀類については、年報９と年報19第５分冊において、その変化などを検討している。その結果、線描きによる千鳥（鶴）文は、17世紀初頭～前葉の椀身Ａ類、Ｂ１ａ類、Ｂ１ｂ類に主にみられる文様であることが明らかとなっている。今回出土した線描きによる千鳥（鶴）文をもつＷＬ４は、Ⅰ期に属する１号遺構下部埋土出土であり、以前の分析結果と年代が一致するものである。

ＷＬ13（24号遺構：Ⅰ期）・ＷＬ14（１号井戸：Ⅱａ期）は椀とみられるが、木質はほとんど残っておらず、漆膜のみ残存したものである。そのため、形態などの特徴は判らない。ＷＬ13には三引両文が、ＷＬ14には梅花文の文様が確認される。

【その他の漆塗製品】（図110、表29・58、図版89・90）

その他の漆塗製品も、出土量は多くない。椀・蓋以外の漆塗製品では、刳り物、箱状製品、蓋の他、形状不明のものや漆膜のみ残存しているものなどがみられる。Ⅰ期の１号遺構下部埋土で漆膜のみのものを含めて７点が出土しているほか、漆膜のみ残存しているものは、各期の遺構から１ないし２点の出土がみられる。図化したのは、ＷＬ５～７・10・16の５点である。漆膜のみが残存していたＷＬ12・15・17については、写真のみを提示することとした。

ＷＬ５は刳り物で、内外面に黒漆が塗られており、側面には小孔が２ヵ所穿たれている。ＷＬ６・７は桶などの蓋で、同一個体とみられる。内外面に黒漆が塗られている。ＷＬ６・７にはそれぞれ小孔があり、孔で結束されていたものとみられる。ＷＬ７には、ＷＬ６の圧痕とみられる痕跡がわずかに確認される。ＷＬ10は、箱状の製品の一部とみられ、内外面に黒漆が塗られている。ＷＬ５～７・10は、１号遺構（Ⅰ期）の出土である。ＷＬ16は形状不明の製品である。欠損はあるものの、断面円形の棒状の製品に黒漆が塗られている。17号遺構（Ⅱｄ期）の出土である。ＷＬ12・15・17はいずれも漆膜のみ残存したもので、製品の種類は判らない。ＷＬ12と17は黒地に朱色の文様、ＷＬ15は朱地に金色の文様が認められる。ＷＬ12は19号遺構（Ⅰ期）、ＷＬ15は11号遺構（Ⅱｂ期）、ＷＬ17はＢ層相当の出土である。

⑧木製品・竹製品

【下駄】（図111、表29・59、図版91）

下駄は、Ⅰ期の１号遺構下部埋土から５点、７号遺構埋土から１点と、１層・撹乱から１点出土しているのみである。残存状態の悪い１号遺構出土の１点を除いた、残り６点を図化した（Ｗ１～６）。

Ｗ１～４は、１号遺構下部埋土出土で、丸型連歯下駄（Ｗ１・２）、角型露卯差歯下駄（Ｗ３）と差歯下駄の差歯部分（Ｗ４）がみられる。Ｗ１・２は、出土場所、法量、形態、横緒孔が後歯の前になる形状などから、対になる可能性も考えられる。Ｗ３の歯が差し込まれる枘穴の形状は、四角の小孔が前後それぞれ２個ずつ並ぶものである。

Ｗ５は、７号遺構埋土から出土したものであるが、欠損が著しい。連歯下駄とみられるが、詳細な形状は不明である。Ｗ６は１層・撹乱出土の丸型連歯下駄である。歯の磨り減りが顕著である。

【その他の木製品・竹製品】（図112～114、表29・60、図版92～94）

漆塗製品と下駄以外の木製品・竹製品などの有機質製品をここでまとめた。Ⅰ期の１号遺構下部埋土からの出土が最も多く、同じくⅠ期の７号遺構埋土とⅡｄ期の17号遺構からの出土がやや多くなっている。角材、丸材や小片といった加工木のほか、曲物、桶、箸、櫛、定規、灯明台、円板状木製品、板状木製品といった製品がみられる。個々の点数は多くないものの、比較的多様なものが出土している。製品の特徴がある程度判明するものを図示することとした。

Ｗ７は沢状遺構（江戸時代以前）、Ｗ８～23は１号遺構下部埋土（Ⅰ期）、W24は１号遺構上部埋土（Ⅰ期）からの出土である。Ｗ７は、薄い板状で小孔が複数ヵ所みられるが、全体形状や用途などは不明である。Ｗ８・９は、円板状木製品である。Ｗ９には側面に鉄釘や釘穴などが観察され、容器状の製品の天板か底板となる可能性が考えられる。W10は角棒状の木材の一端に、人物の顔型の彫りの加工がみられるものであるが、用途は判然としない。W11は、断面形が半円形の棒状製品である。W12は薄い板材で、判読はできないが文字とみられる刻みがみられる。W13も薄板の製品である。W14は､加工された２枚の板材を樹皮の紐で縛ったものであるが、用途は不明である。W15・16は串状木製品で、上端は断面方形、下端は細くなり断面がほぼ円形に加工されている。W17は、上部の突起部分が、他の部材と組み合わさるものかどうか、よく判らない。W18は、桶の天板あるいは底板である。表面には、削った加工痕が多数観察される。W19とW20は、弧状の形態の薄板製品で、小孔が観察される。W21は、一辺の両端に、断面円形の突起を削りだした板状製品で、この突起をはめ込んで可動させる部材と思われる。W22は物差である。墨書によって目盛りが刻まれており、大きな目盛り一つが三寸を表している。W23は櫛である。塗りや装飾はみられない白木の櫛である。W24は、形状と墨痕から木簡と考えられる。『木簡研究』で提示されている型式に対比すると、長方形の材の一端の左右に切り込みを入れ、他端を尖らせたもので、O33型式に該当するものと考えられる。一面にのみ墨書が確認されるが、墨痕が薄く判読はできなかった。

W25～28はⅠ期の７号遺構埋土からの出土である。W25は灯明台で、木製の台部と刳り物の皿部が底部から鉄釘で固定されている。W26は、小羽状の薄板製品で、一辺が弧状に整形されている。W27は、小刀などの鞘の一部とみられる。２枚の材を貼り合わせる構造で､内面は小刀の先端に合わせて尖った形状に加工されている。W28は、棒状のものを組み合わせた製品の部材と思われる。

W29はⅠ期の19号遺構、W30はⅡｄ期の17号遺構からの出土である。W29はコマ状木製品で、武家屋敷地区第11地点の調査において同様のものが出土している（年報19第４分冊）。W30は、鈎状の形態の製品である。

W31は１号遺構（Ⅰ期）の上部埋土出土の編物で、竹ひご状のものの編み目が観察される。欠損のため、全体形状は不明である。W32・33はいずれも７号遺構から出土した俵である。藁状のもので編まれており、内部には何も入っていなかった。土を詰めた土嚢として用いられた可能性も考えられる。

⑨金属製品（図115 ～ 119、表30・31・61 ～ 66、図版94 ～ 96）

金属製品は、古銭、煙管などの銅製品、釘、小刀などの鉄製品と、鉛製品を含むその他の金属製品に分類して、集計している（表30・31）。

Ａ層、２層から、和釘といった鉄製品を中心として、やや多くの金属製品が出土している。

古銭については、出土した全点を登録し、可能な限り図化して提示している。その他の金属製品については、残存状況のよいものや特徴的な形状のものを中心に抽出して図化し、観察表にまとめている。

【古銭】（図119、表30・31・61、図版96）

古銭は、32点出土している（ＭＣ１～32）。基本層では、２層、Ａ層、Ｂ層相当、１層・撹乱から出土しているが、いずれも数点ずつであり、まとまった出土はみられない。遺構では、江戸時代以前では沢状遺構から、Ⅰ期では３号建物、１号遺構、ピットから、Ⅱａ期では１号井戸、10号遺構から、Ⅱｂ期では 32号建物、15号溝、11号遺構、25号遺構から、Ⅱｄ期では 26号遺構Ａ層相当から、Ⅱｅ期では３号溝から、Ⅲ期では７号井戸から、Ⅲ期以降では１号暗渠から出土しているが、いずれの遺構においてもまとまった出土はみられない。

出土した全てについて遺物番号を付して、観察表に特徴を記載した。保存状態が特に悪いものと、近代以降のものを除いて、全てについて拓本あるいは実測図を提示した。写真図版は、近代以降のものを除いて、全てを掲載している。

古銭の種類では、寛永通寶が 15点と最も多く出土している。そのうち、古寛永は９点、新寛永は６点（うち文銭２点）である。また、寛永通寶以外にも、各種の渡来銭が出土している。渡来銭は 12点出土しており、その種類は、皇宋通寶、天聖通寶、開元通寶、永楽通寶、不明渡来銭がみられる。江戸時代以前やⅠ期など比較的古い時期の遺構に若干多い傾向はあるものの、各期を通して出土していると言える。なお、渡来銭か、日本での写しかについては、その区別が付かないため、すべてを渡来銭として記載している。その他に、百円銀貨、１セントコイン、種類不明の古銭２点と、鉄銭１点が出土している。

【煙管】（図115、表30・31・62・63、図版94）

煙管は、雁首13点、吸口８点の合計21点が出土している。煙管は２層から９点の出土が最も多く、他では１層・撹乱、Ａ層、Ⅰ期の 14号遺構、Ⅱｂ期の 15号溝、Ⅱｄ期の 13号溝から１点～数点出土している程度である。そのうち、残存状態のよい雁首４点、吸口５点を図化した（ＭＯ１～９）。

観察表（表62・63）の煙管の形態分類は、年報６に従っておこなった。分類の模式図は、年報18 に掲載しているので参照されたい。

雁首の全体形状では、不明のものも含まれるが、ＩＡ類とⅡＣ類はなく、ＩＢ類、ＩＣ類、ⅡＢ類に限られている。合わせ目は左、あるいは下に限られる。吸口の全体形状は、ⅡＡ類かⅡＢ類であり、Ⅰ類はみられなかった。２層出土のＭＯ６・７には、内部に羅宇が残存している。ＭＯ５は、Ⅱｄ期の 13号溝出土で、線彫りによる七宝繋ぎ文が施されている。

【その他の金属製品】（図116 ～ 118、表30・31・64 ～ 66、図版95）

古銭、煙管以外の金属製品を、その他の金属製品としてまとめて、その特徴を述べていく。その他の金属製品には、銅製品、鉄製品、鉛製品が含まれている。

銅製品では、小柄の柄、匙、留金具、商標、薬莢などが出土している。出土が多いのは、２層や１層・撹乱からで、遺構出土のものはごくわずかである。そのうち、９点を図化した（ＭＯ10 ～ 18）。

小柄の柄（ＭＯ10・13・17）は、いずれも片面に文様が刻まれている。ＭＯ10 はⅠ期の１号遺構出土で、桐・梅・唐草の文様である。ＭＯ13 は時期不明のピット368出土で、渦巻き状の文様である。ＭＯ17 は２層出土で、機織の杼と糸の文様とみられる。

ＭＯ11 は、Ⅱｂ期の 25号遺構出土の匙である。柄などに文様は見られない。ＭＯ12 は、Ⅱｄ期の 26号遺構出

土の留金具と思われるものである。MO14はA層出土で、柄部分の内部に木質が残存しており、銅製の釘で留められている。本体部分には小孔が認められる。欠損部分もあり、用途は不明である。MO15は、A層出土で、組紐が内部に残存しており、組紐を通して使用していた金属製品とみられるが、詳しい用途は判らない。MO16は、2層出土の釣針状の製品である。MO18は、1層・撹乱出土の商標である。近代以降のものであるが、文字が良好に読めることから、写真のみを提示しておいた。

鉄製品は、釘、鉄銭、小刀、鉄鍋、鏃などが出土している。出土量が多いのは和釘で、特に2層、A層などで出土量が多くなっているが、各期の遺構からも数点ずつの出土がみられる。鉄製品のうち、6点を図化した（MO19～24）。MO19・21は、小刀である。それぞれ法量は異なるが、柄部分には目釘孔と思われる小孔がみられる。MO19は江戸時代以前の沢状遺構出土、MO21はⅠ期の1号遺構出土である。MO20はⅠ期の1号遺構出土の鏃である。MO22は、Ⅱa期の10号遺構から出土した、薄板を断面台形の棒状に加工したものであるが、用途は判らない。MO23は、形状から鉄銭の可能性も考えられるが、錆化が顕著であり、文字などは判明しない。Ⅱd期の10号溝出土である。MO24はA層出土の取手で、一方に金具が残存している。

鉛製品の出土はごく限られており、戸車状の製品や銃弾などが出土している。そのうち、1点を図化した（MO25）。MO25は、Ⅰ期の24号遺構出土の戸車状の製品である。

⑩石器・石製品（図120、表30・31・67、図版97）

S4～6はメノウ製の火打石である。S4は26号遺構（Ⅱd期）埋土上層、S5は6号溝（Ⅱb期）埋土1層、S6はA層から出土している。火打石は、稜部分に使用による痕跡が見られる場合も多いが、今回出土した資料には、使用痕跡はほとんど見られない。S7は砥石である。器面全体に擦痕が認められるが、特に背面上部が著しく摩滅している。S8～11は粘板岩製の碁石である。これらの碁石は、形状の特徴から正円・薄型（8・9）と楕円・厚型（10・11）の2種類に分類できる。S12・13は粘板岩製の硯である。S13は海から波止にかけて欠損している。陸の中央には、直径5mm程度の小孔が穿たれているが貫通はしていない。何の目的で穿孔したのか不明である。また背面には向かって右から「白岩勇蔵」、「田□〔吉カ〕」、「○白岩勇□〔蔵カ〕」と刻字されている。中央の文字列は、非常に浅く細く刻まれている。

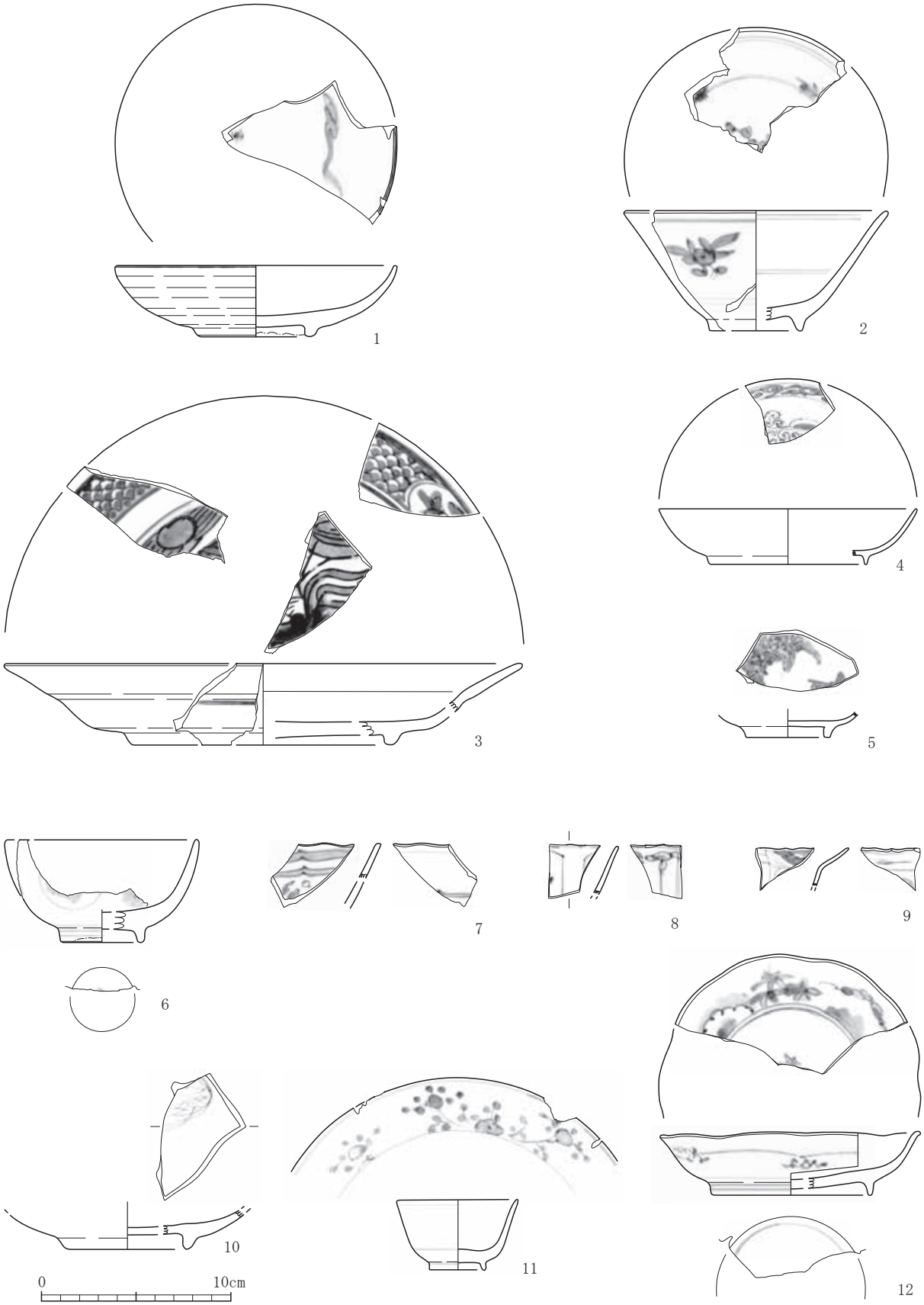


図72　武家屋敷地区第11地点出土磁器（1）
Fig.72　porcelains from BK11 (1)

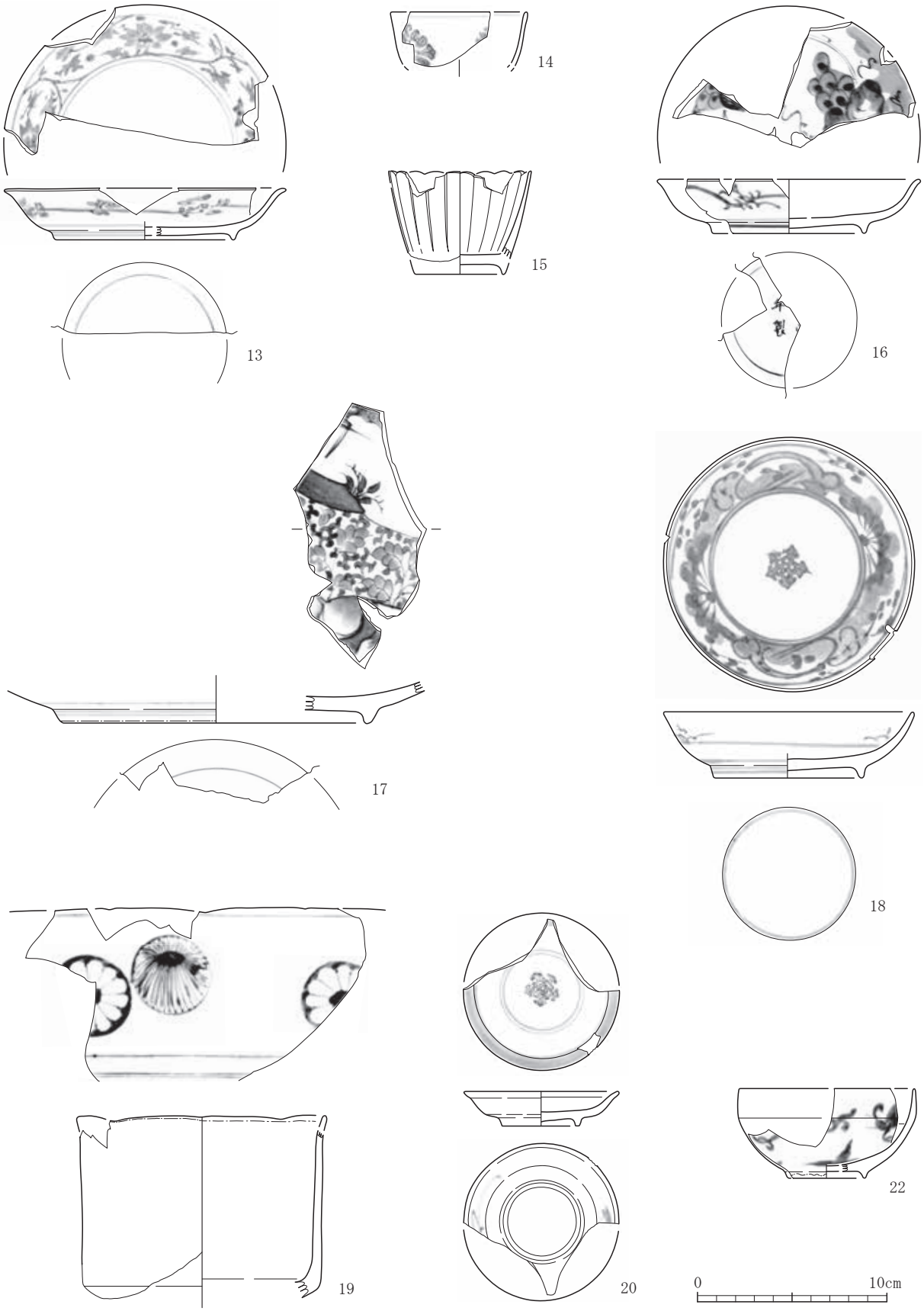


図73　武家屋敷地区第11地点出土磁器（２）
Fig.73　Porcelains from BK11 (2)

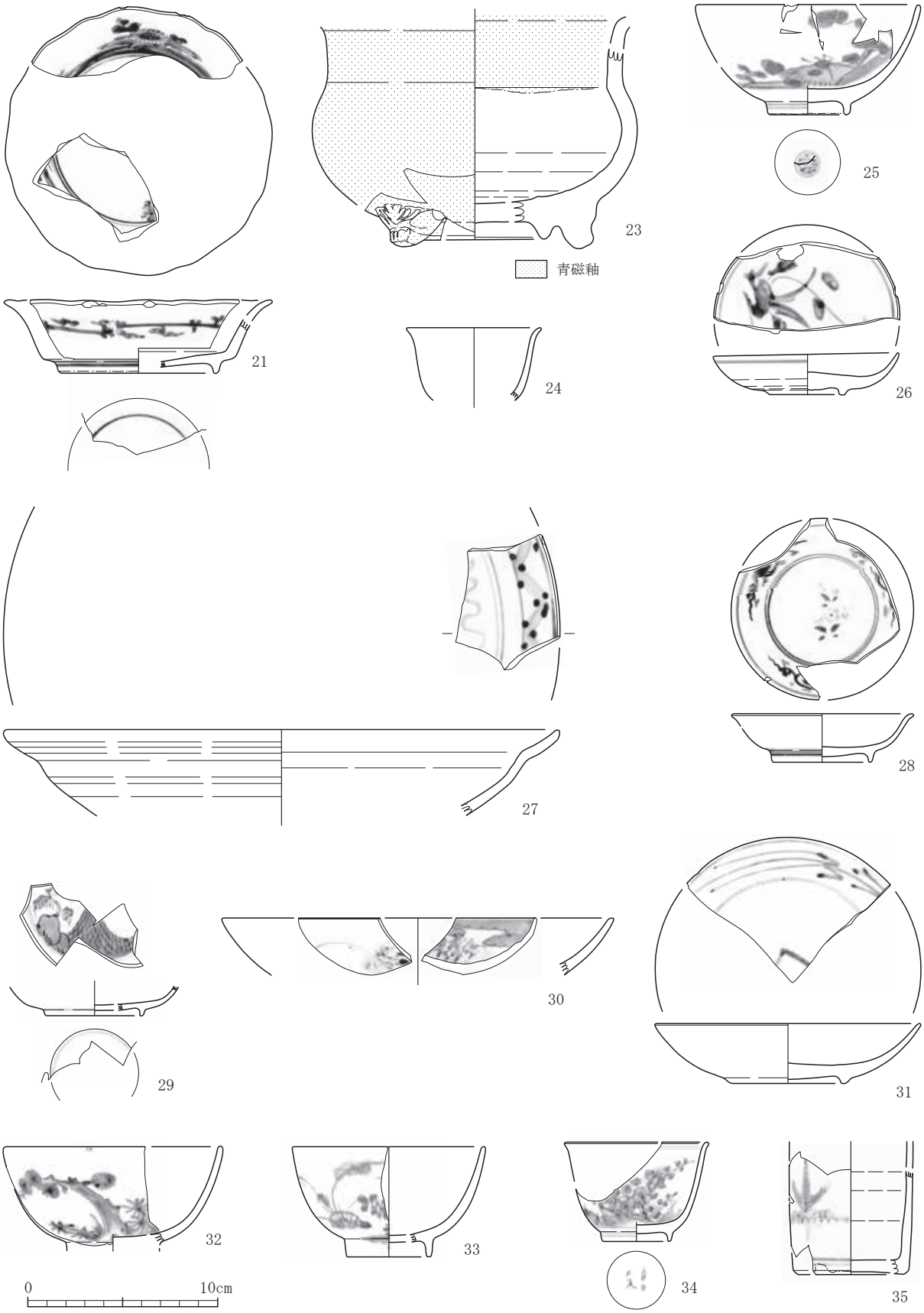


図74　武家屋敷地区第11地点出土磁器（３）
Fig.74　Porcelains from BK11 (3)

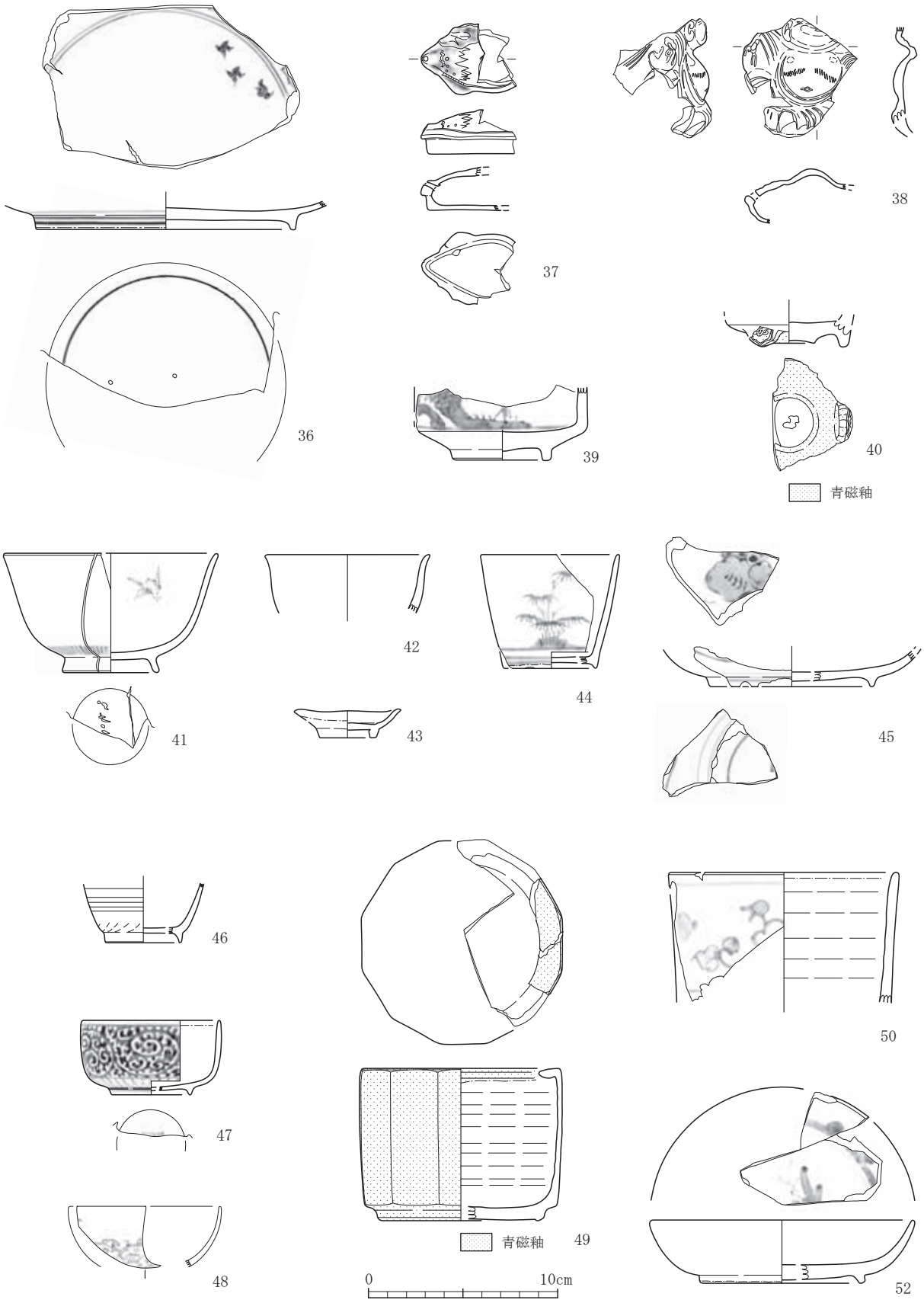


図75　武家屋敷地区第11地点出土磁器（４）
Fig.75　Porcelains from BK11 (4)

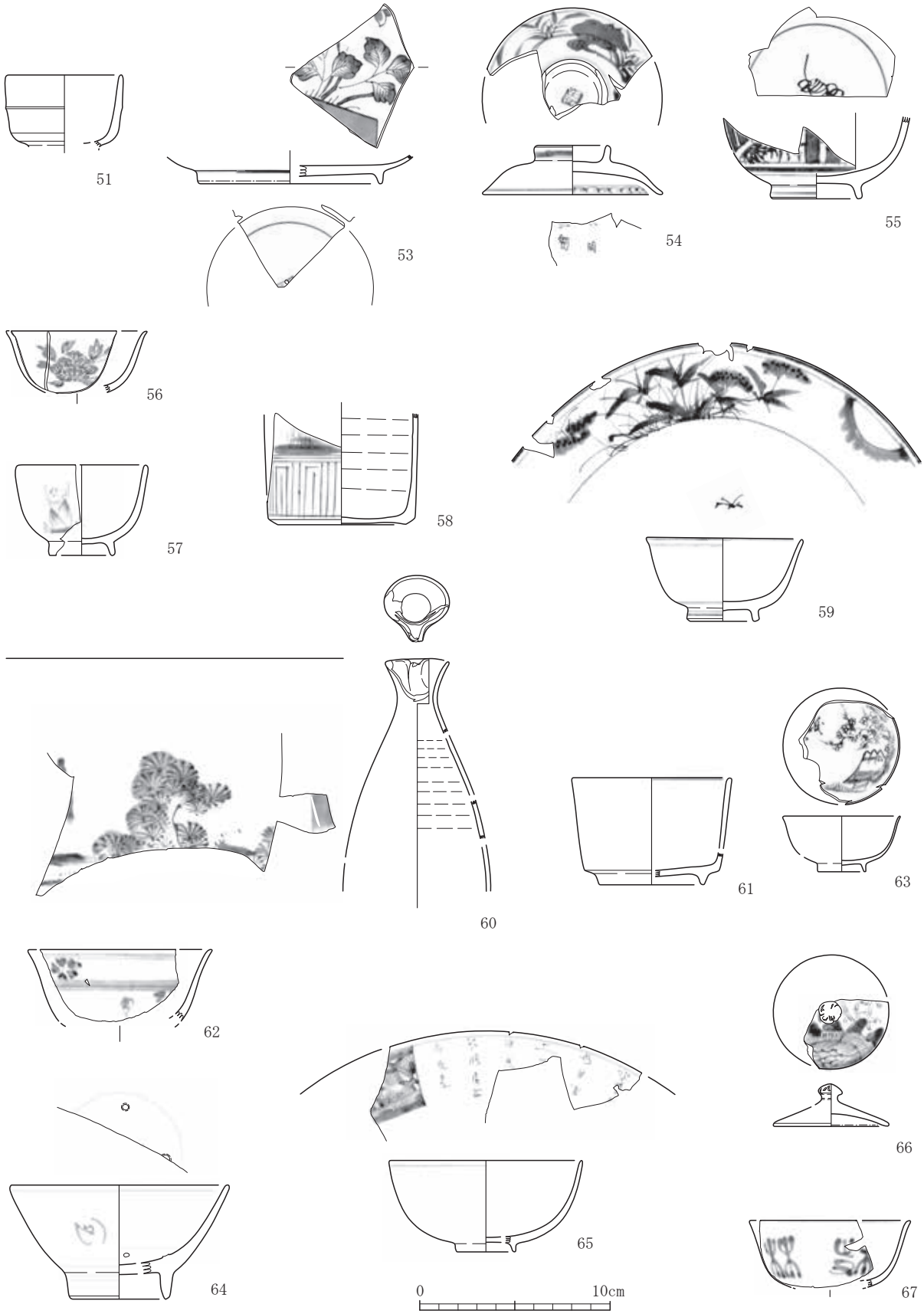


図76　武家屋敷地区第11地点出土磁器（５）
Fig.76　Porcelains from BK11 (5)

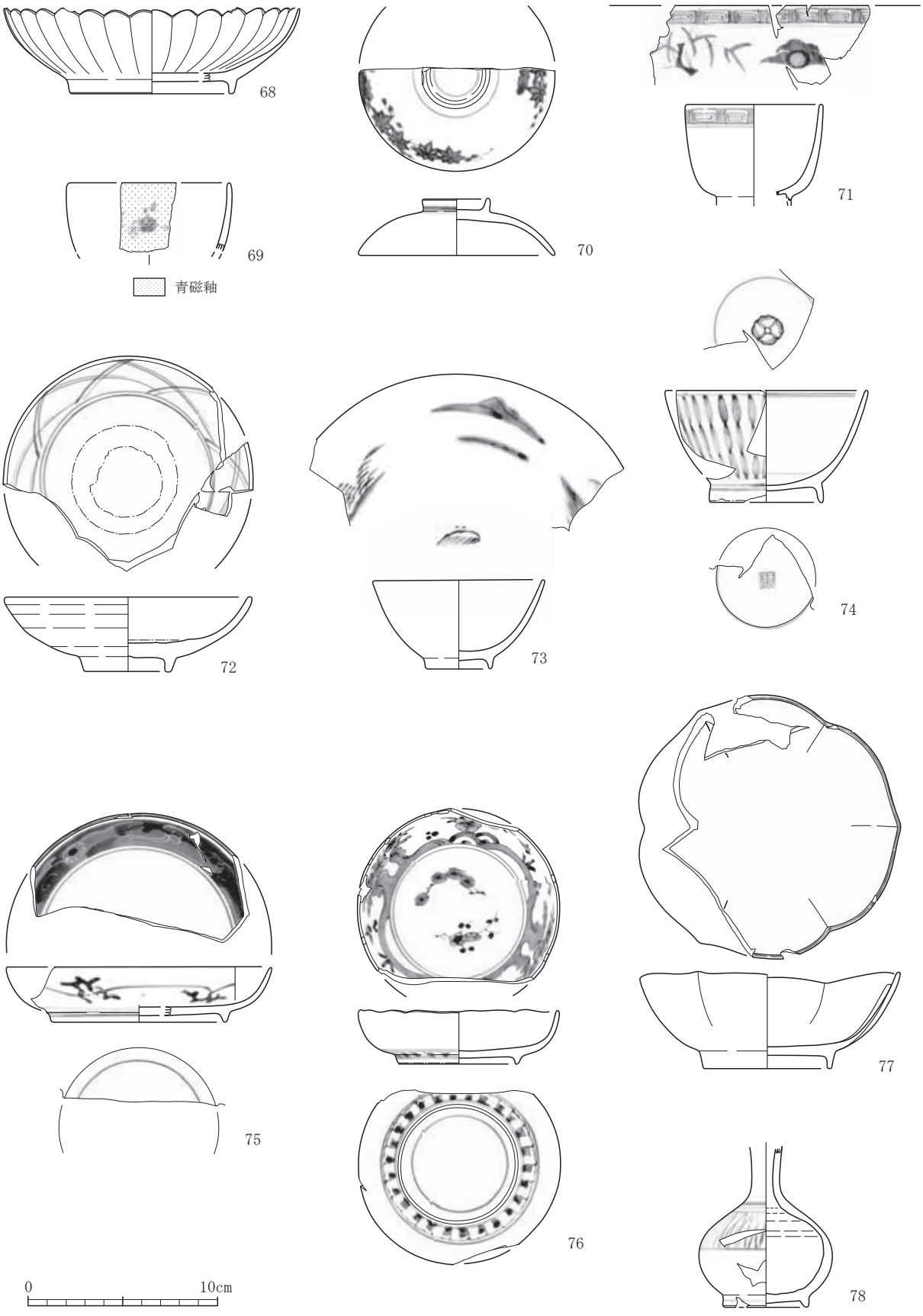


図77　武家屋敷地区第11地点出土磁器（６）
Fig.77　Porcelains froM BK11 (6)

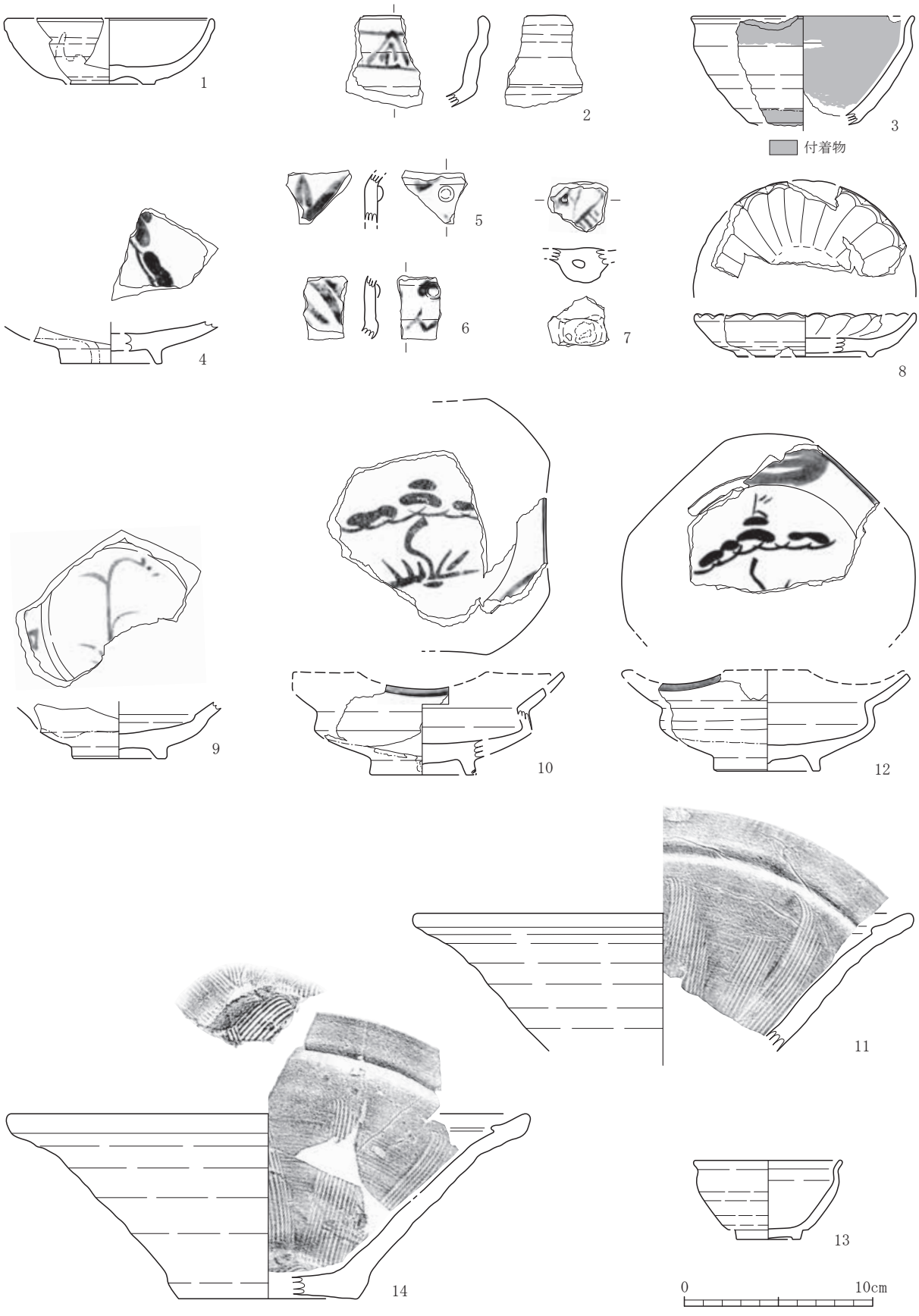


図78　武家屋敷地区第11地点出土陶器（1）
Fig.78　Glazed ceramics fro m BK11 (l)

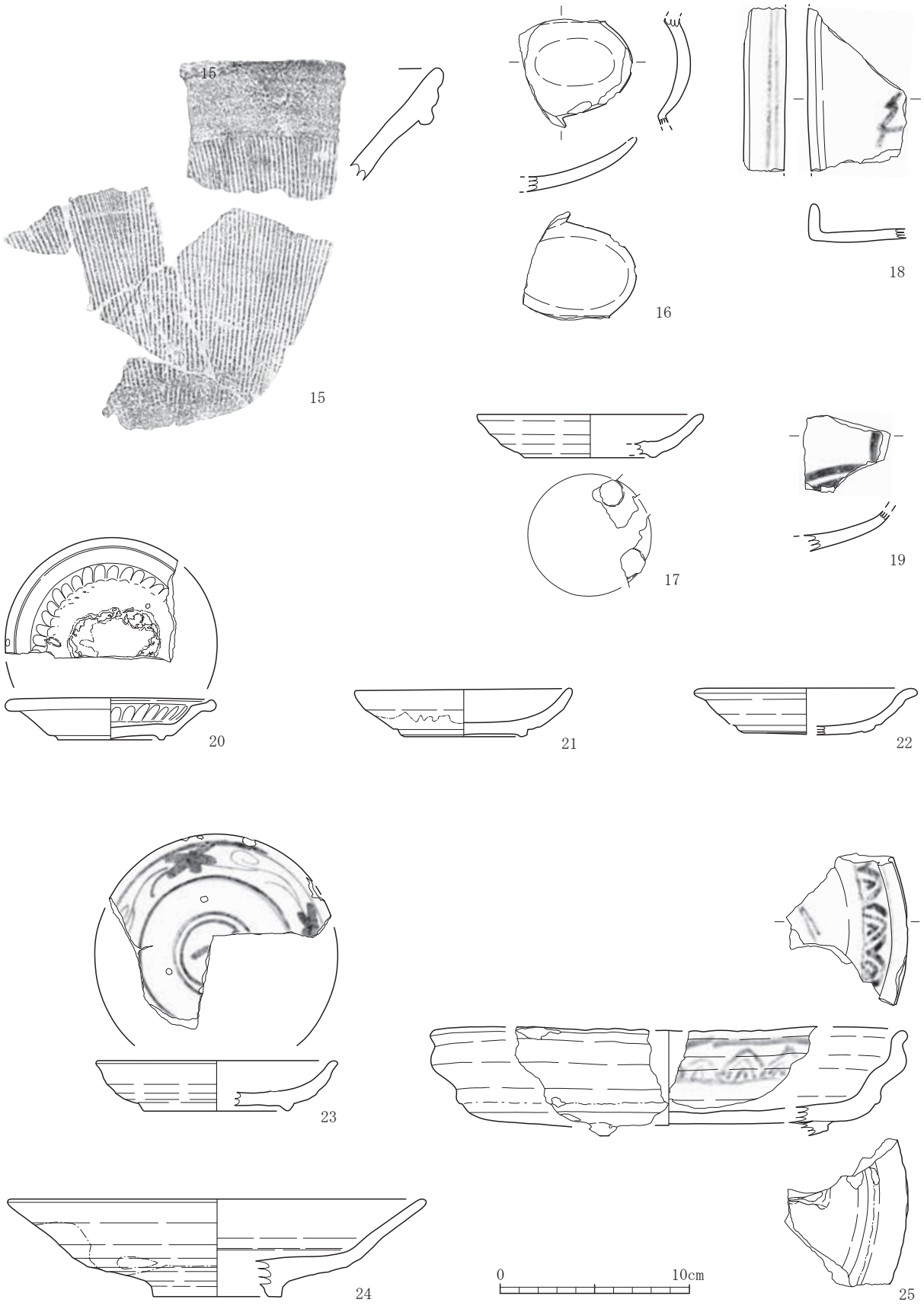


図79　武家屋敷地区第11地点出土陶器（２）
Fig.79　Glazed ceramics fro m BK11 (2)

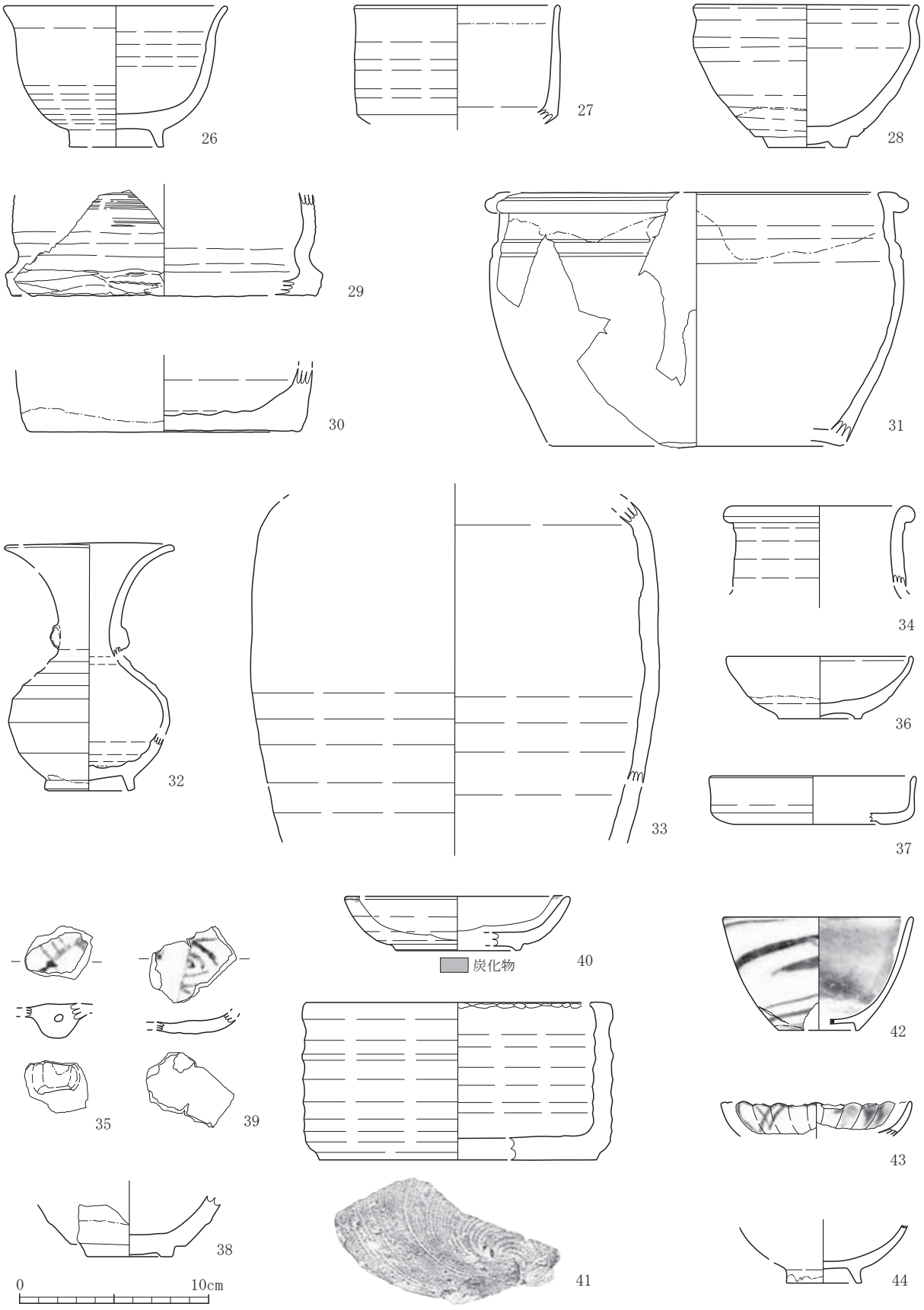


図80　武家屋敷地区第11地点出土陶器（3）
Fig.80　Glazed ceramics fro m BK11 (3)

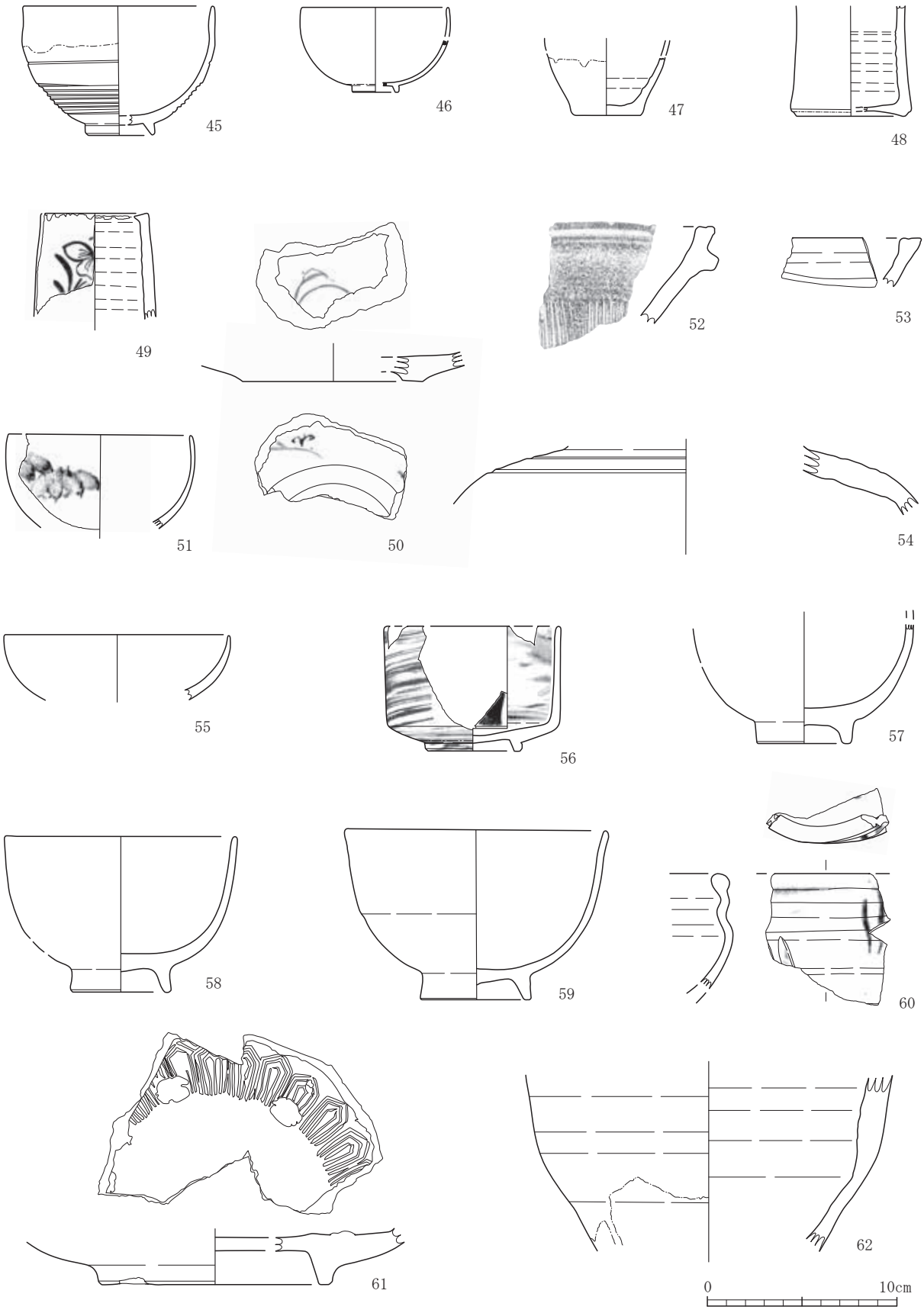


図81　武家屋敷地区第11地点出土陶器（4）
Fig.81　Glazed ceramics fro m BK11 (4)

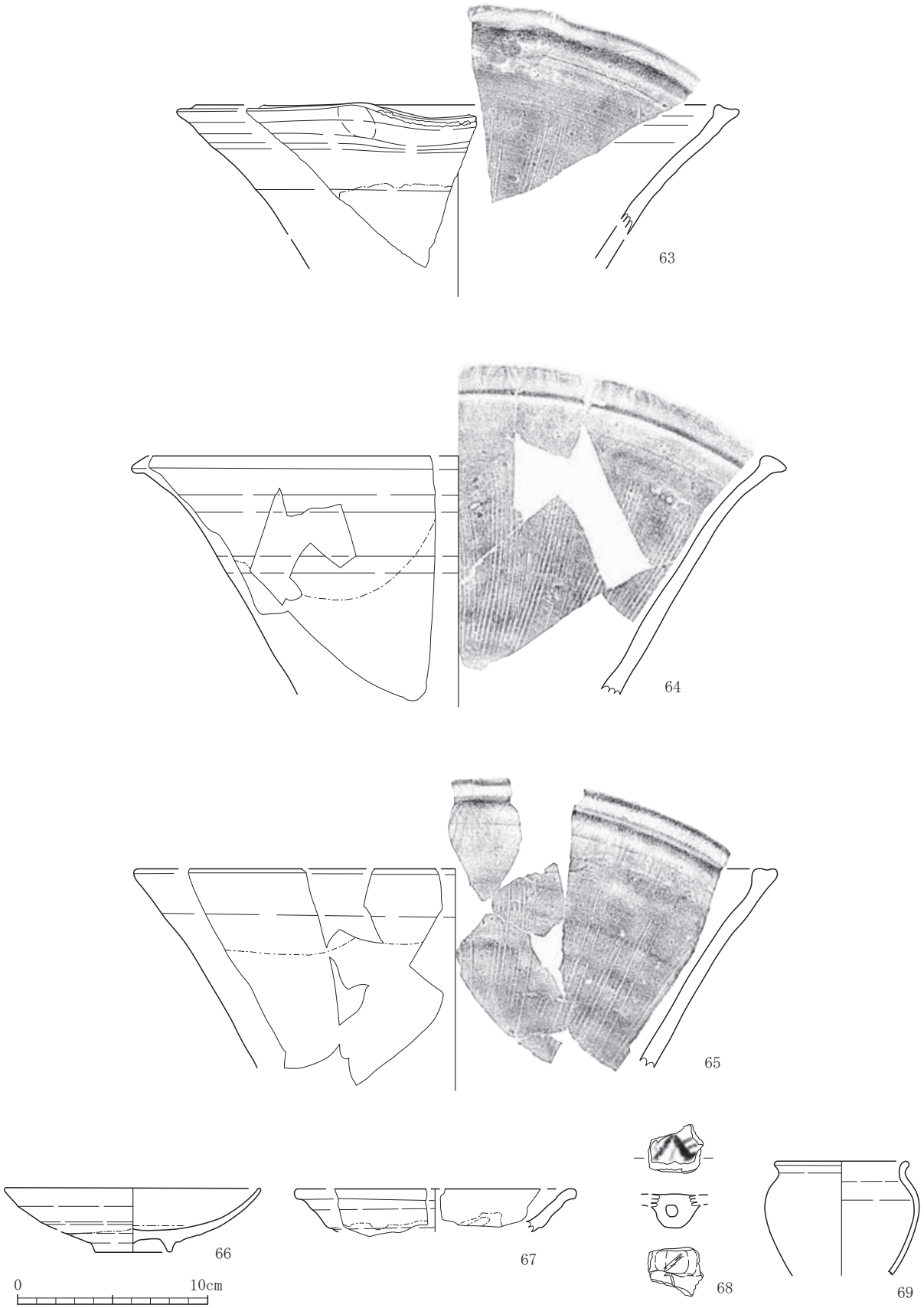


図82　武家屋敷地区第11地点出土陶器（５）
Fig.82　Glazed ceramics fro m BK11 (5)

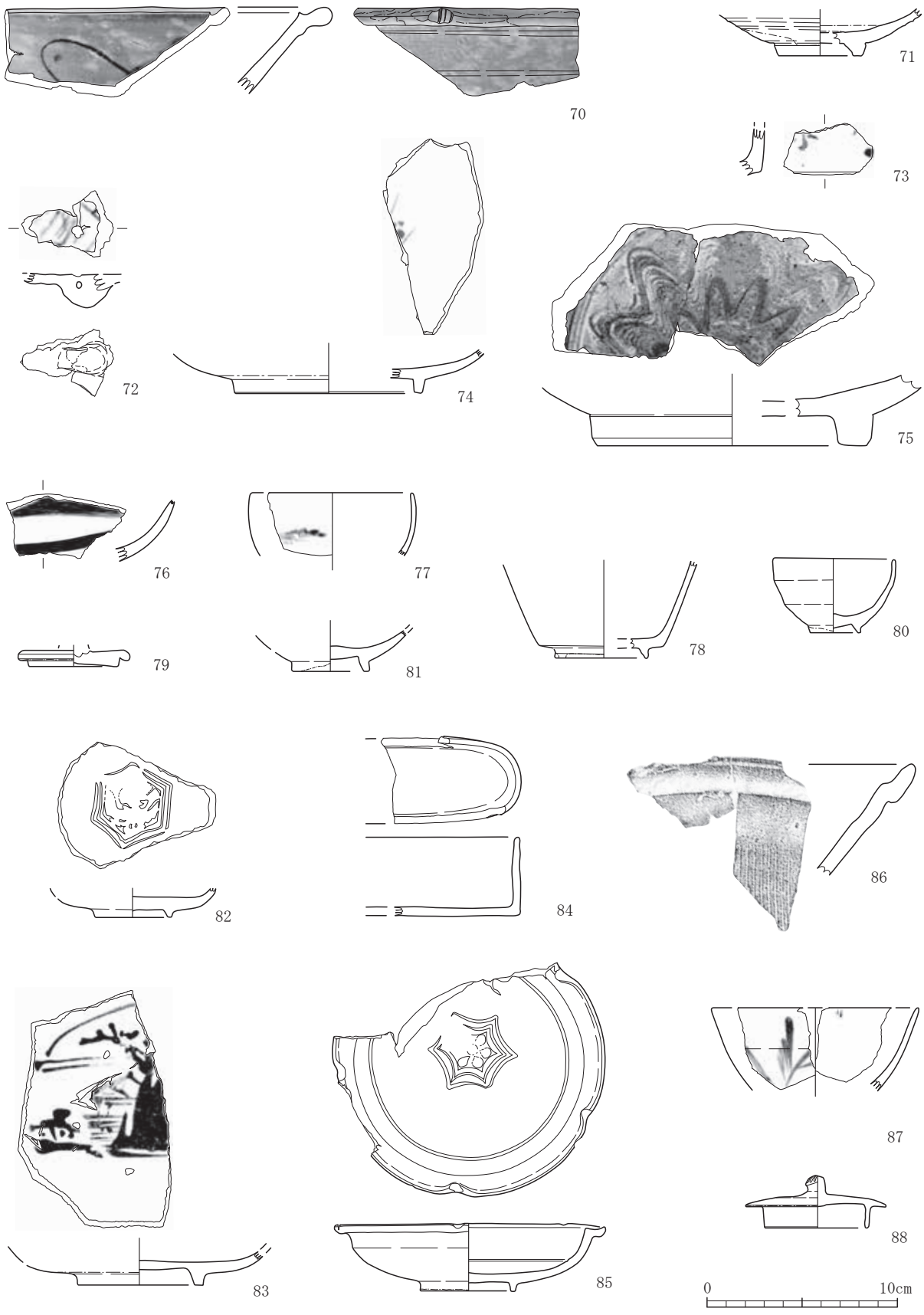


図83　武家屋敷地区第11地点出土陶器（6）
Fig.83　Glazed ceramics fro m BK11 (6)

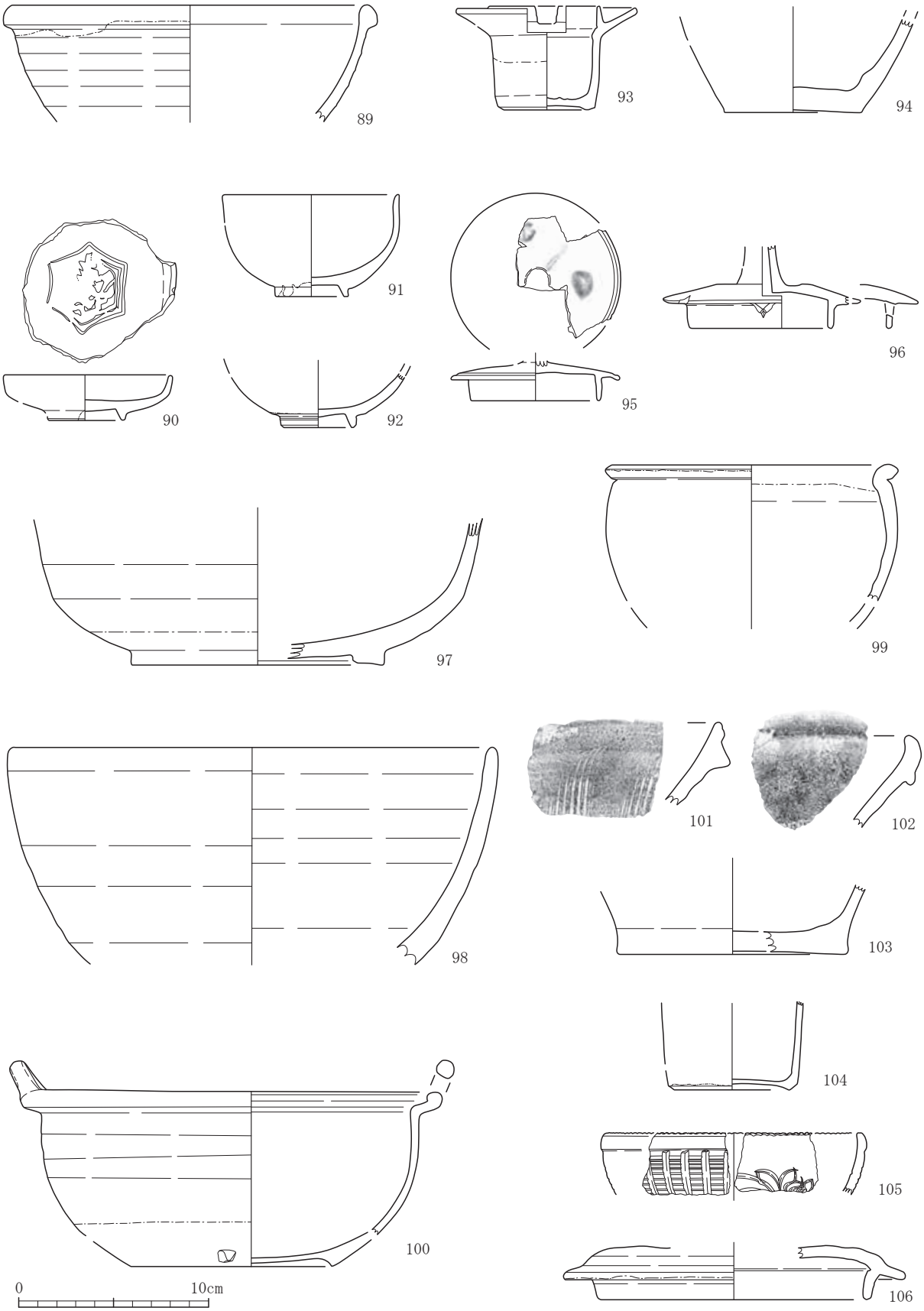


図84　武家屋敷地区第11地点出土陶器（7）
Fig.84　Glazed ceramics fro m BK11 (7)

図85　武家屋敷地区第11地点出土陶器（8）
Fig.85　Glazed ceramics fro m BK11 (8)

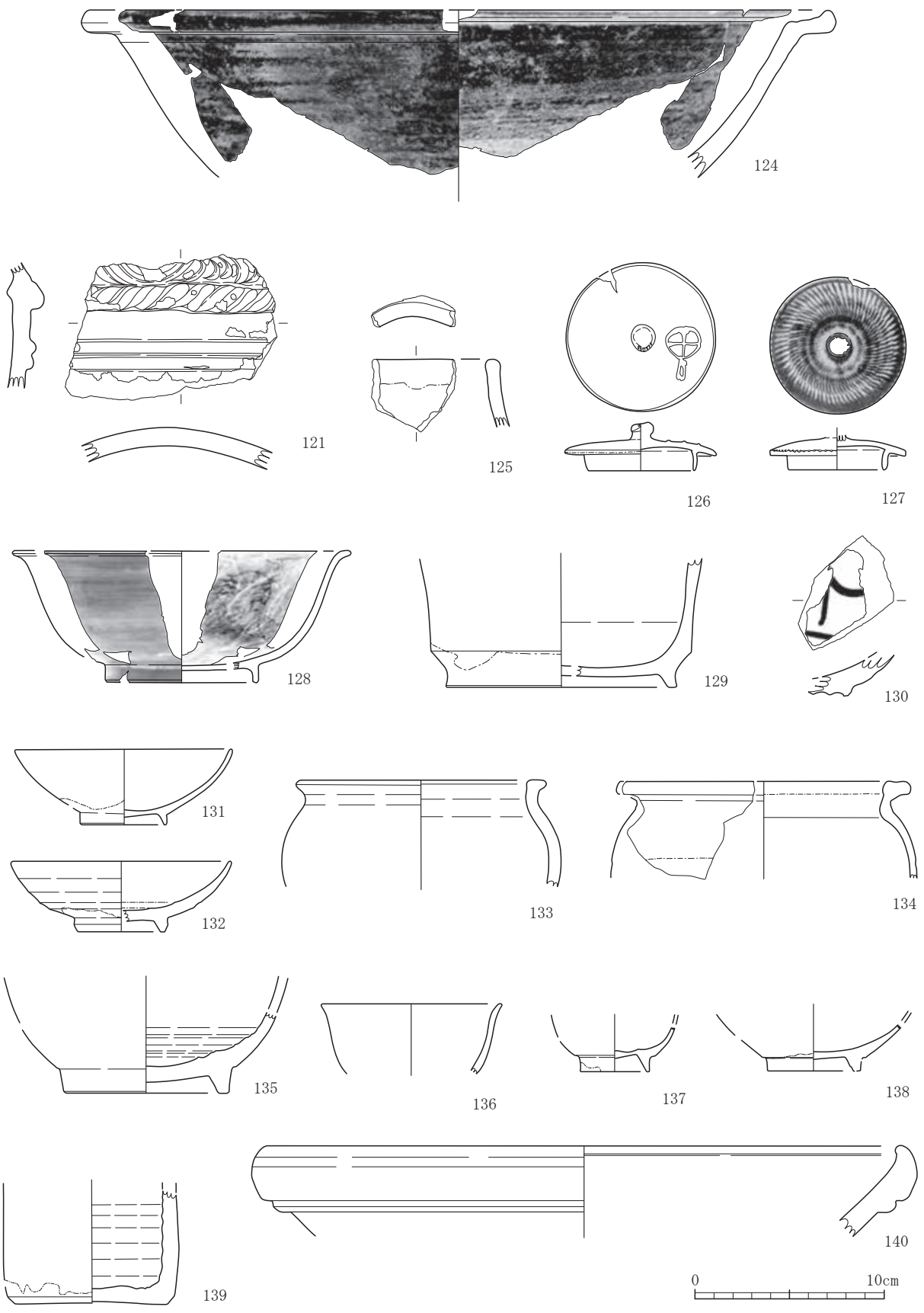


図86　武家屋敷地区第11地点出土陶器（9）
Fig.86　Glazed ceramics fro m BK11 (9)

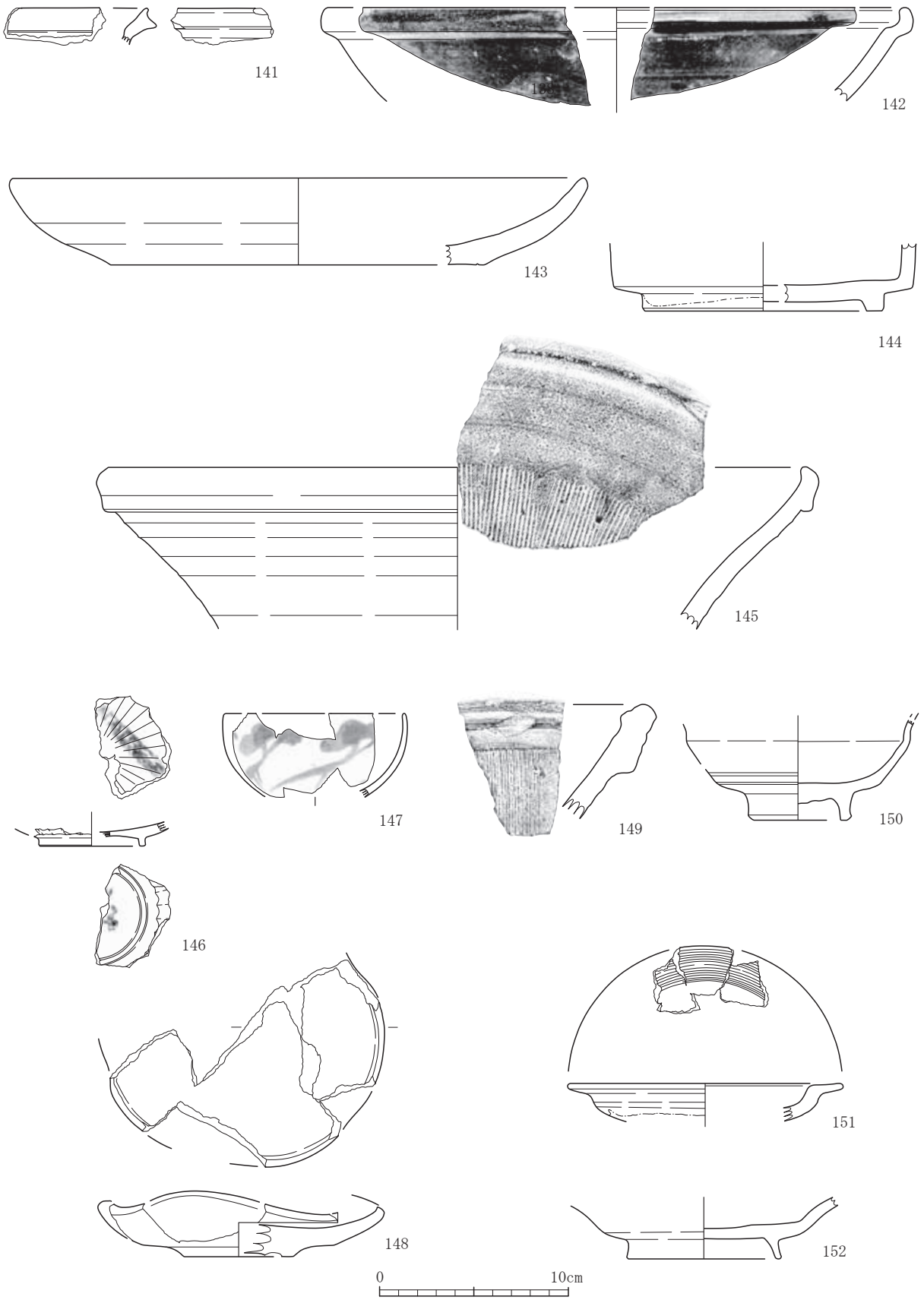


図87　武家屋敷地区第11地点出土陶器（10）
Fig.87　Glazed ceramics fro m BK11 (10)

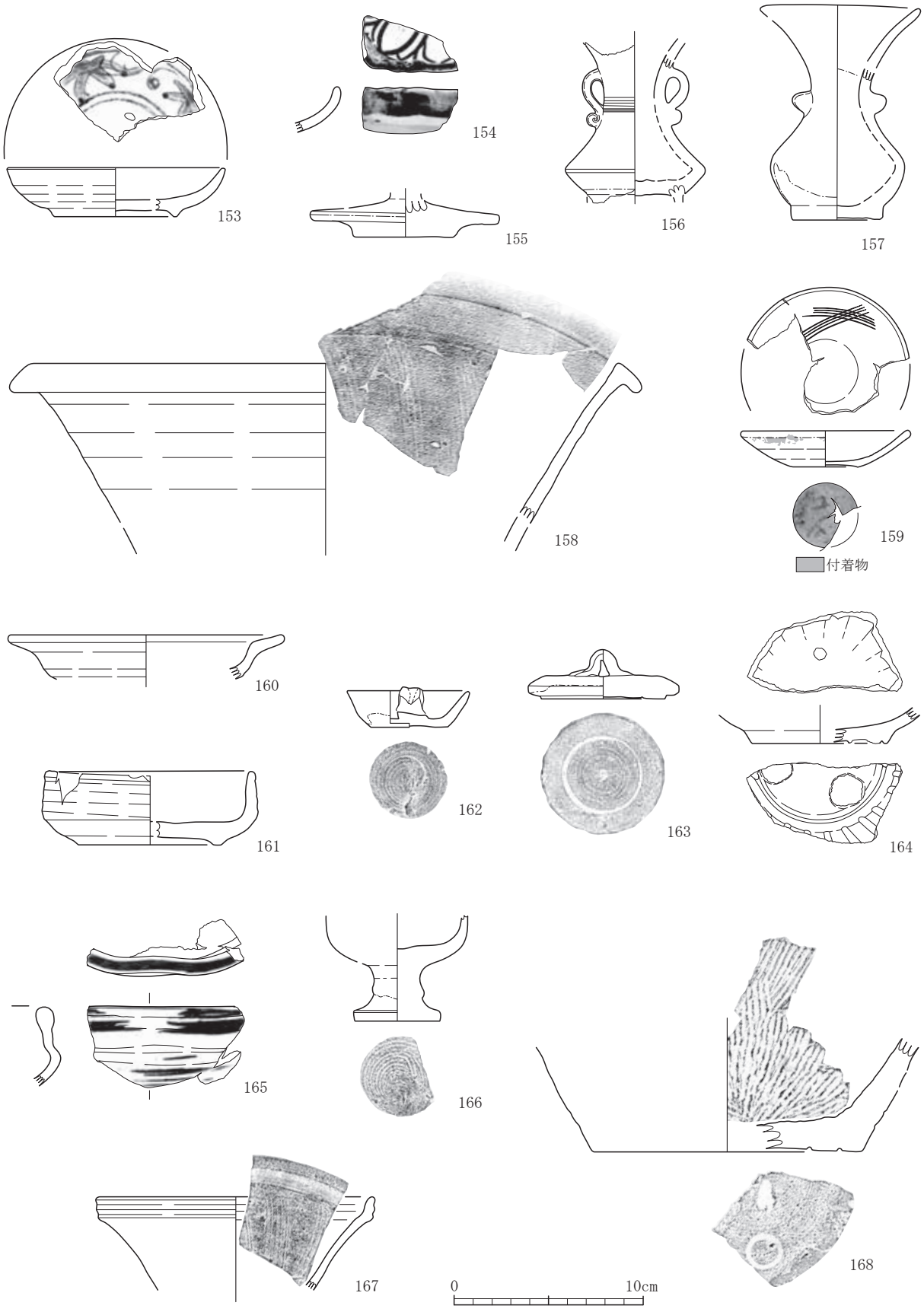


図88　武家屋敷地区第11地点出土陶器（11）
Fig.88　Glazed ceramics fro m BK11 (11)

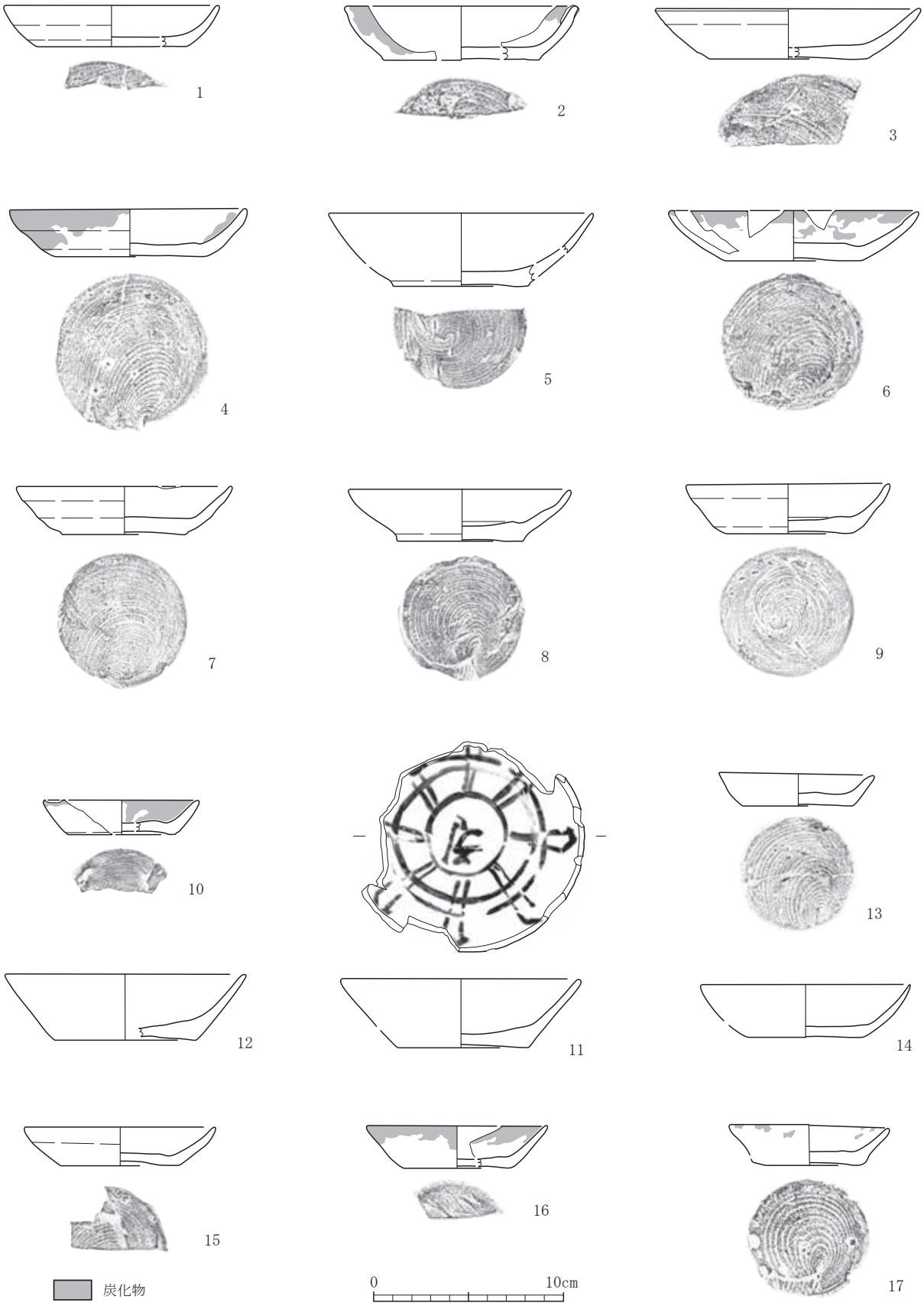


図89　武家屋敷地区第11地点出土土師質土器（1）
Fig.89　Unglazed ceramics from BK11 (1)

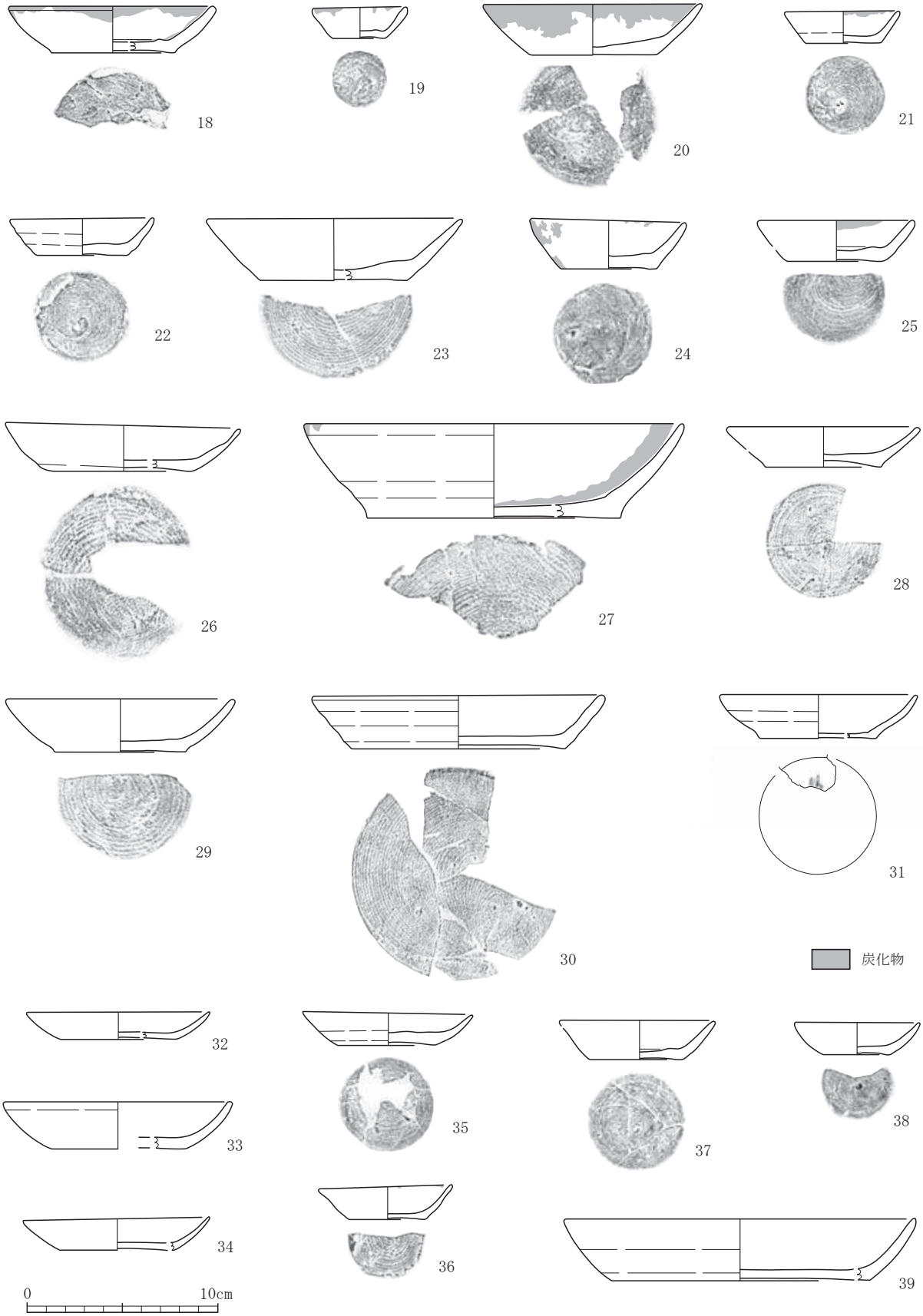


図90　武家屋敷地区第11地点出土土師質土器（２）
Fig.90　Unglazed ceramics from BK11 (2)

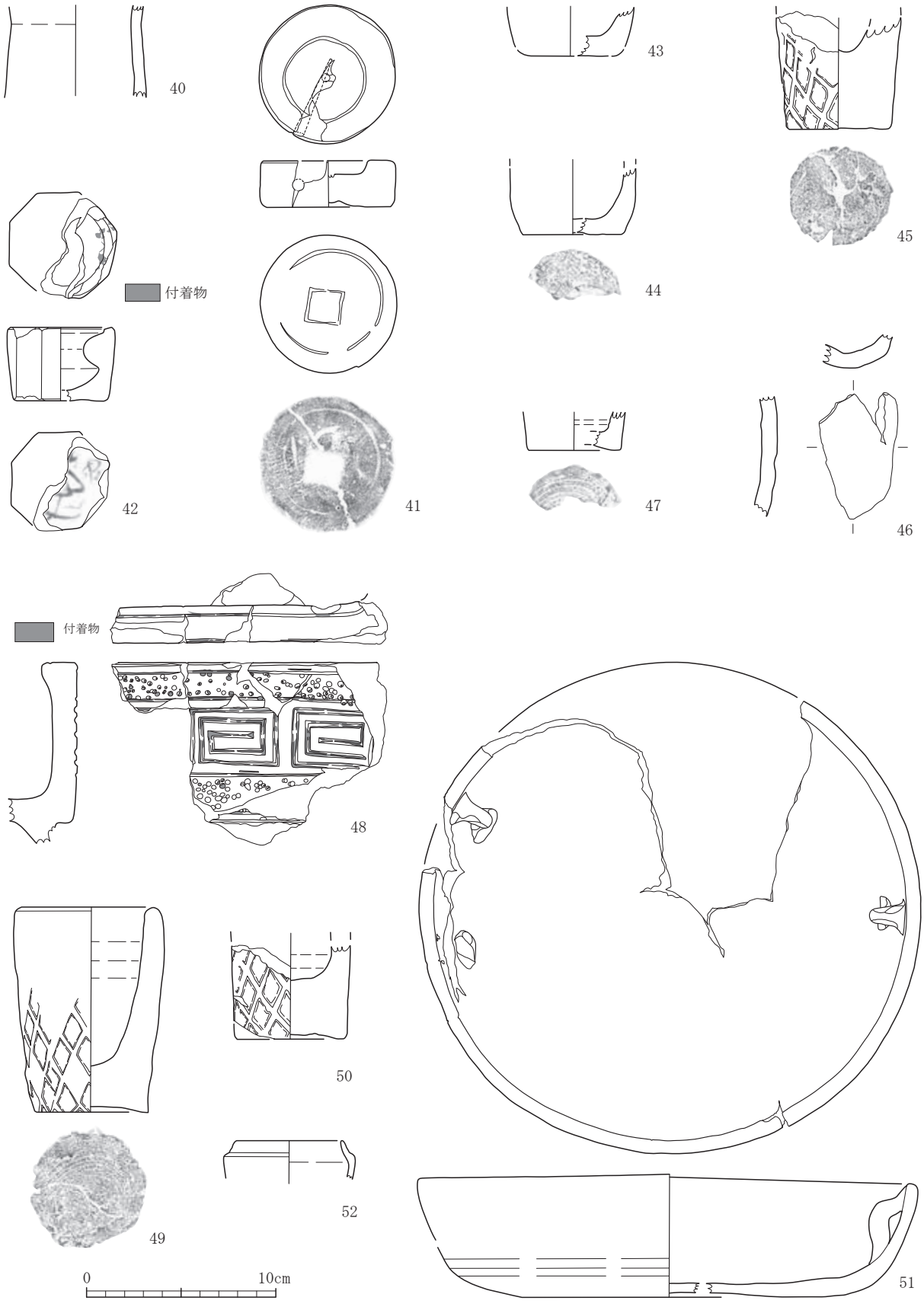


図91　武家屋敷地区第11地点出土土師質土器（３）
Fig.91　Unglazed ceramics from BK11 (3)

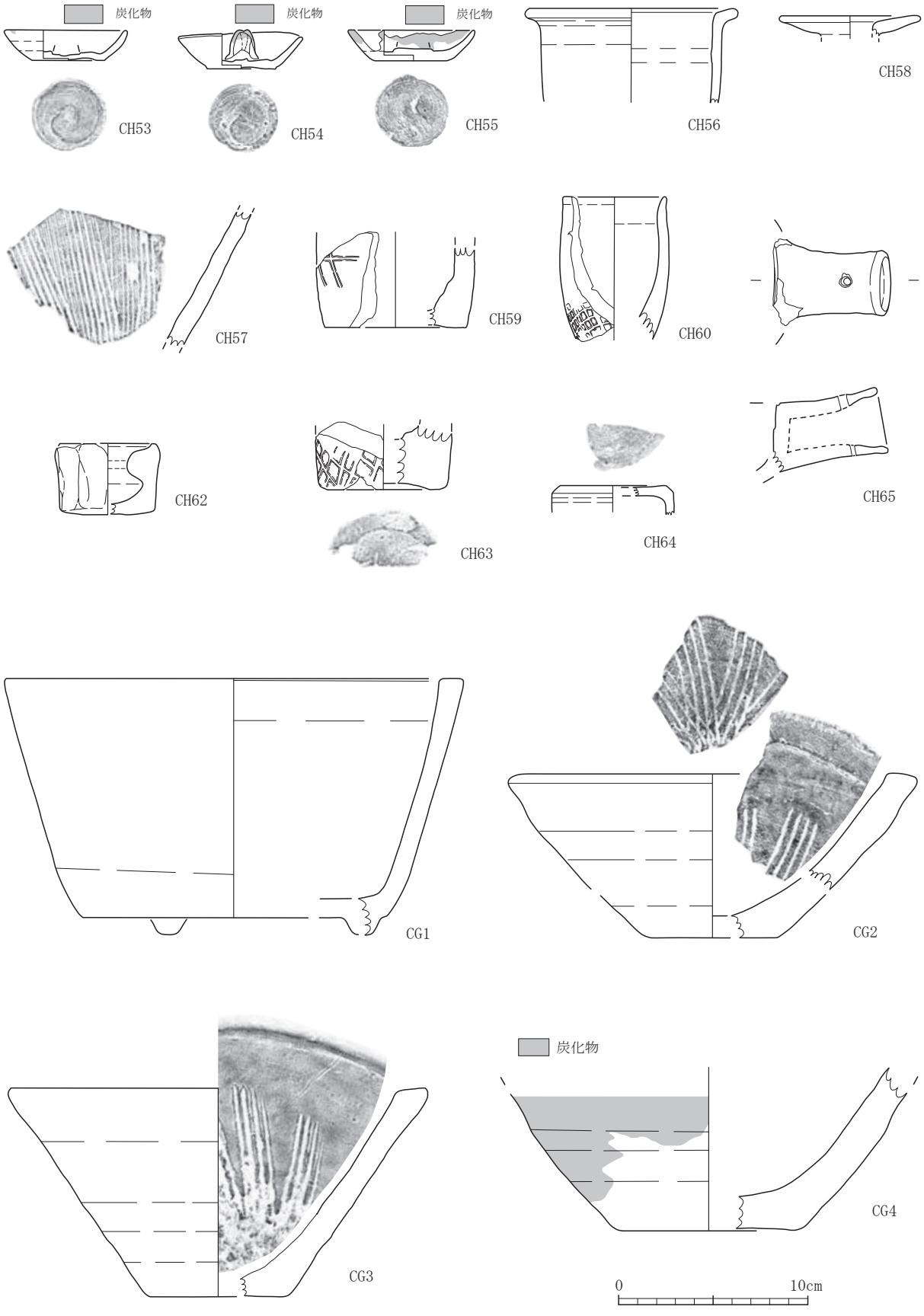


図92　武家屋敷地区第11地点出土土師質土器（4）・瓦質土器（1）
Fig.92　Unclazed ceramics from BK11 (4)

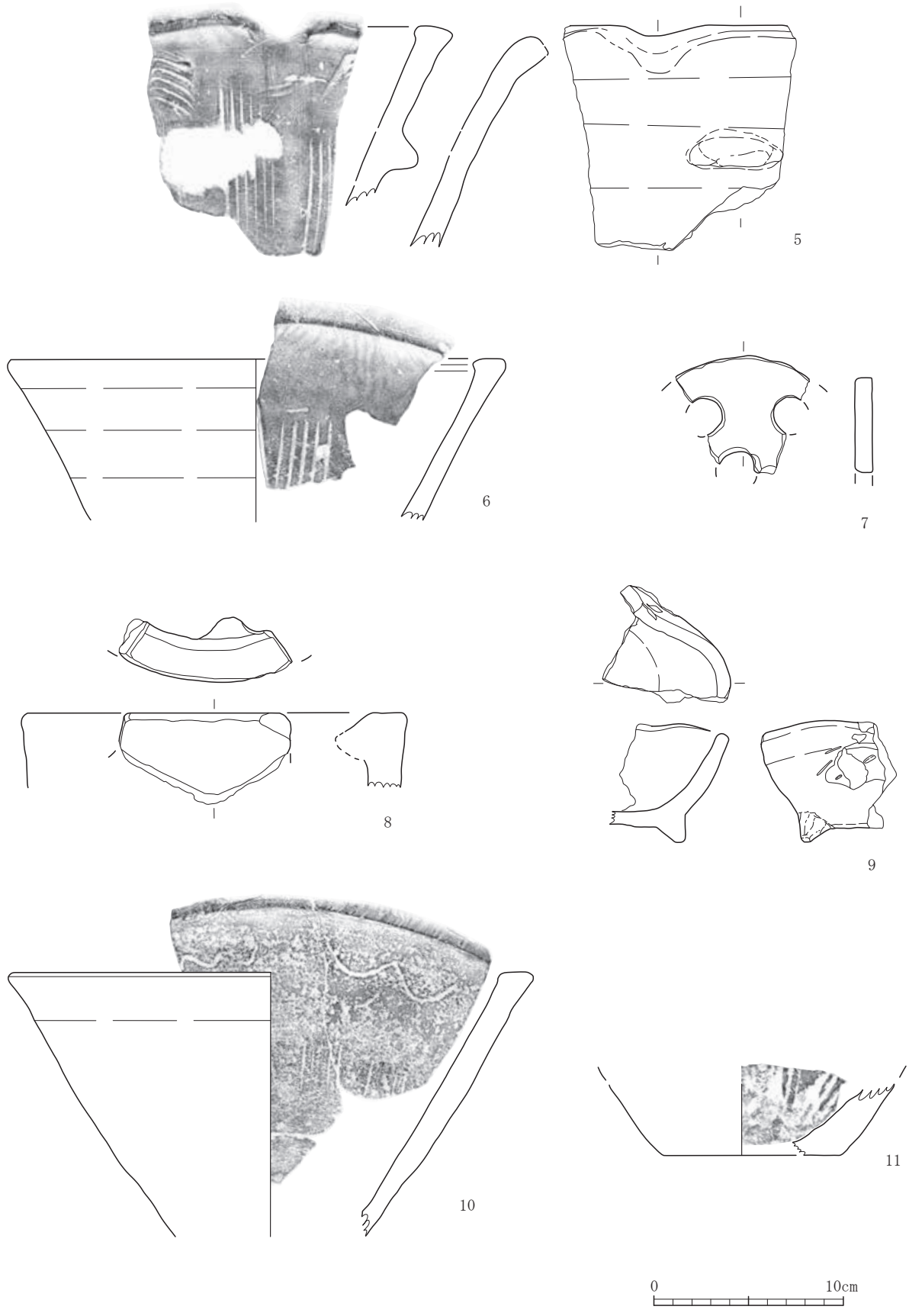


図93　家屋敷地区第11地点出土瓦質土器（2）
Fig.93　Unglazed ceramics from BK11 (5)

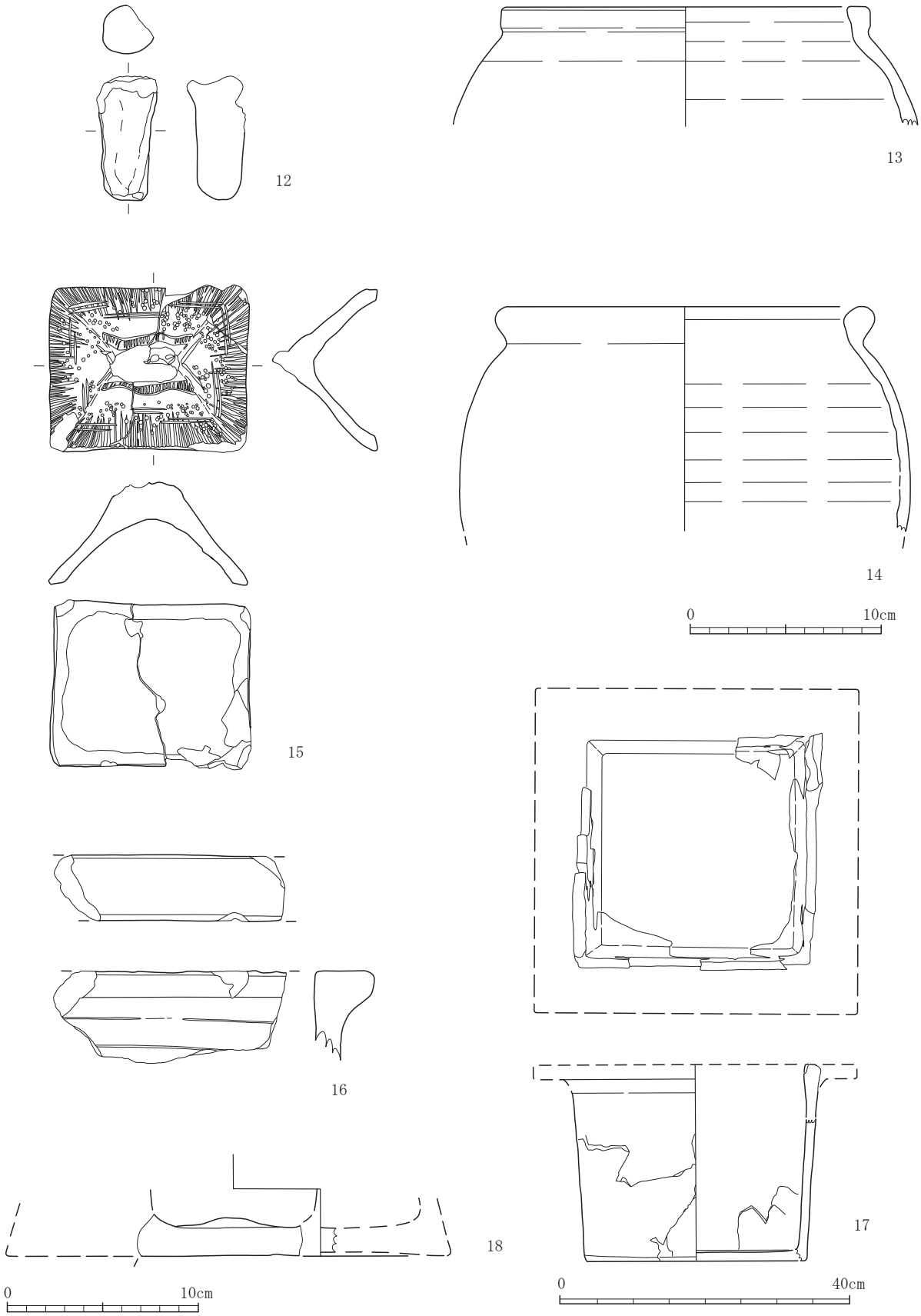


図94　武家屋敷地区第11地点出土瓦質土器（3）
Fig.94　Unglazed ceramics from BK11 (6)

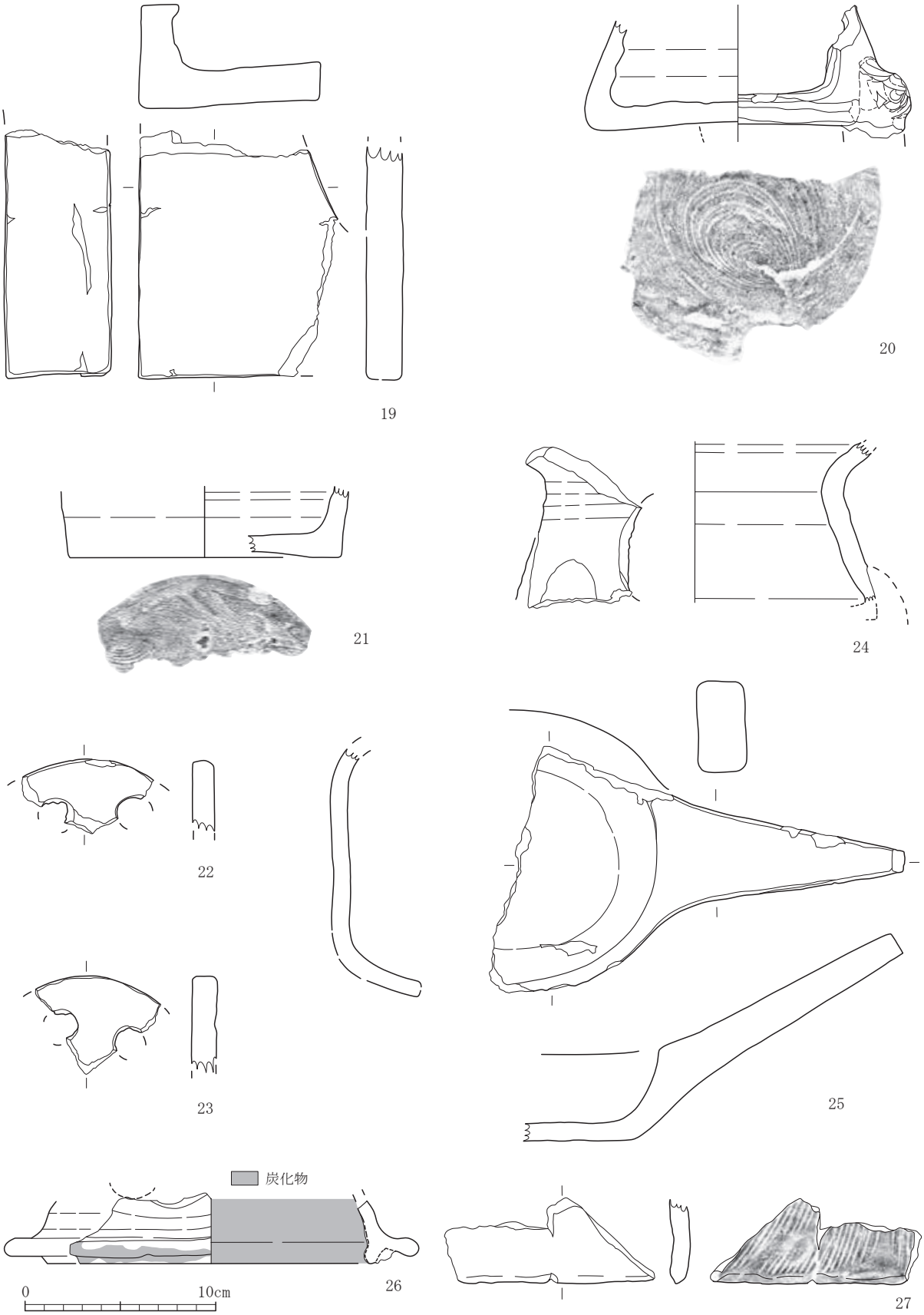


図95　武家屋敷地区第11地点出土瓦質土器（4）
Fig.95　Unglazed ceramics from BK11 (7)

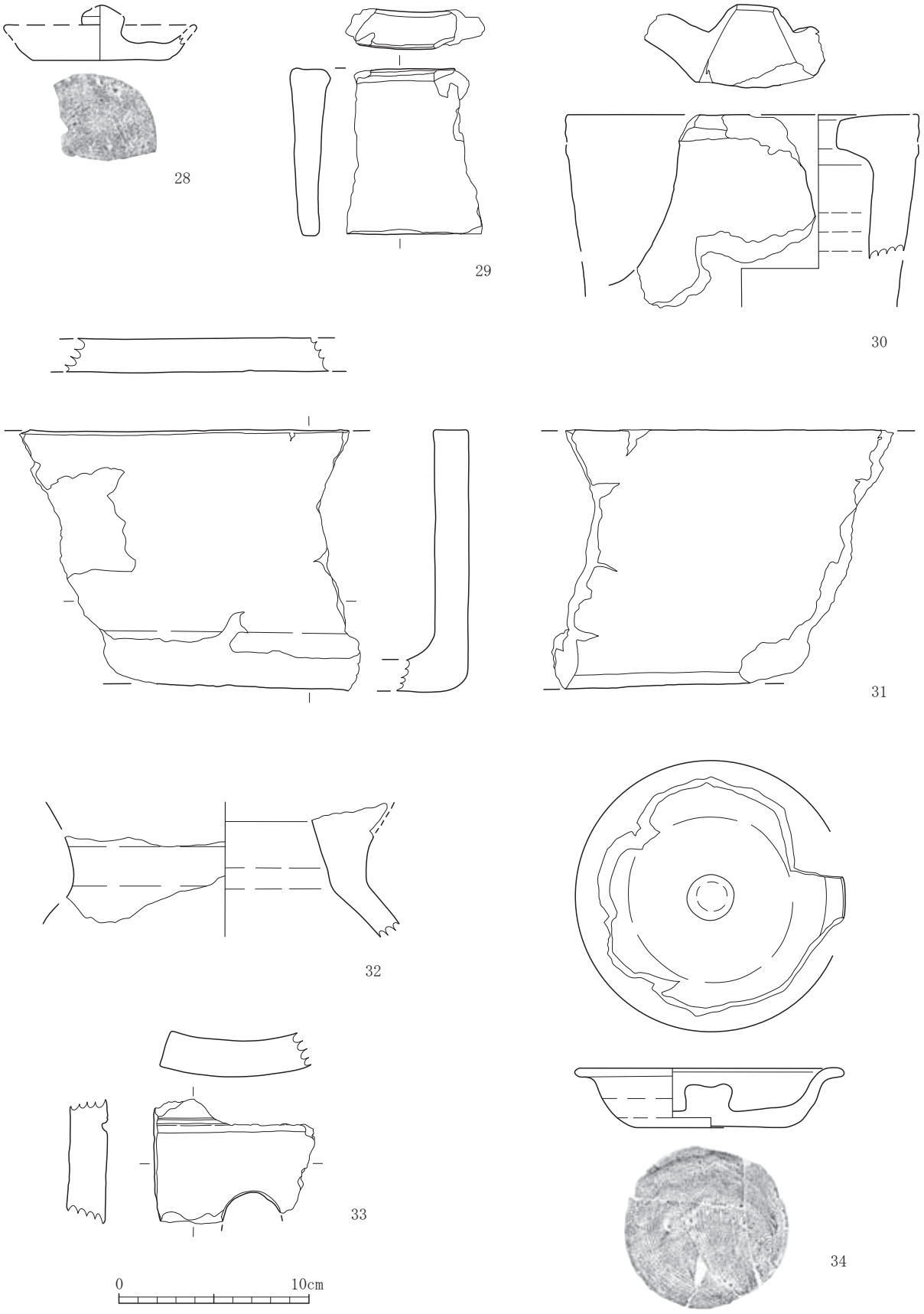


図96　武家屋敷地区第11地点出土瓦質土器（5）
Fig.96　Unglazed ceramics from BK11 (8)

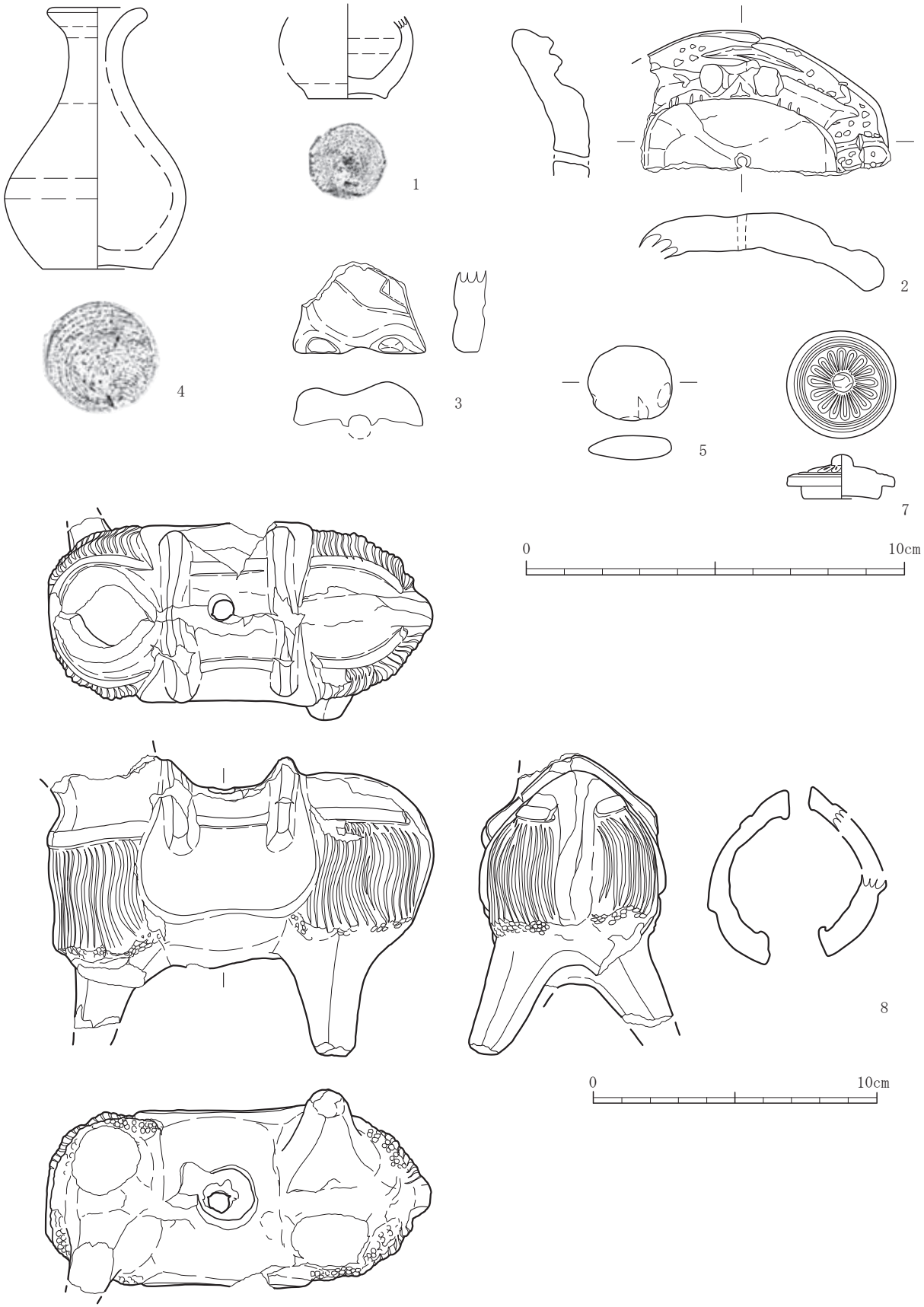


図97　武家屋敷地区第11地点出土土製品（1）
Fig.97　Clay objects and figures from BK11 (1)

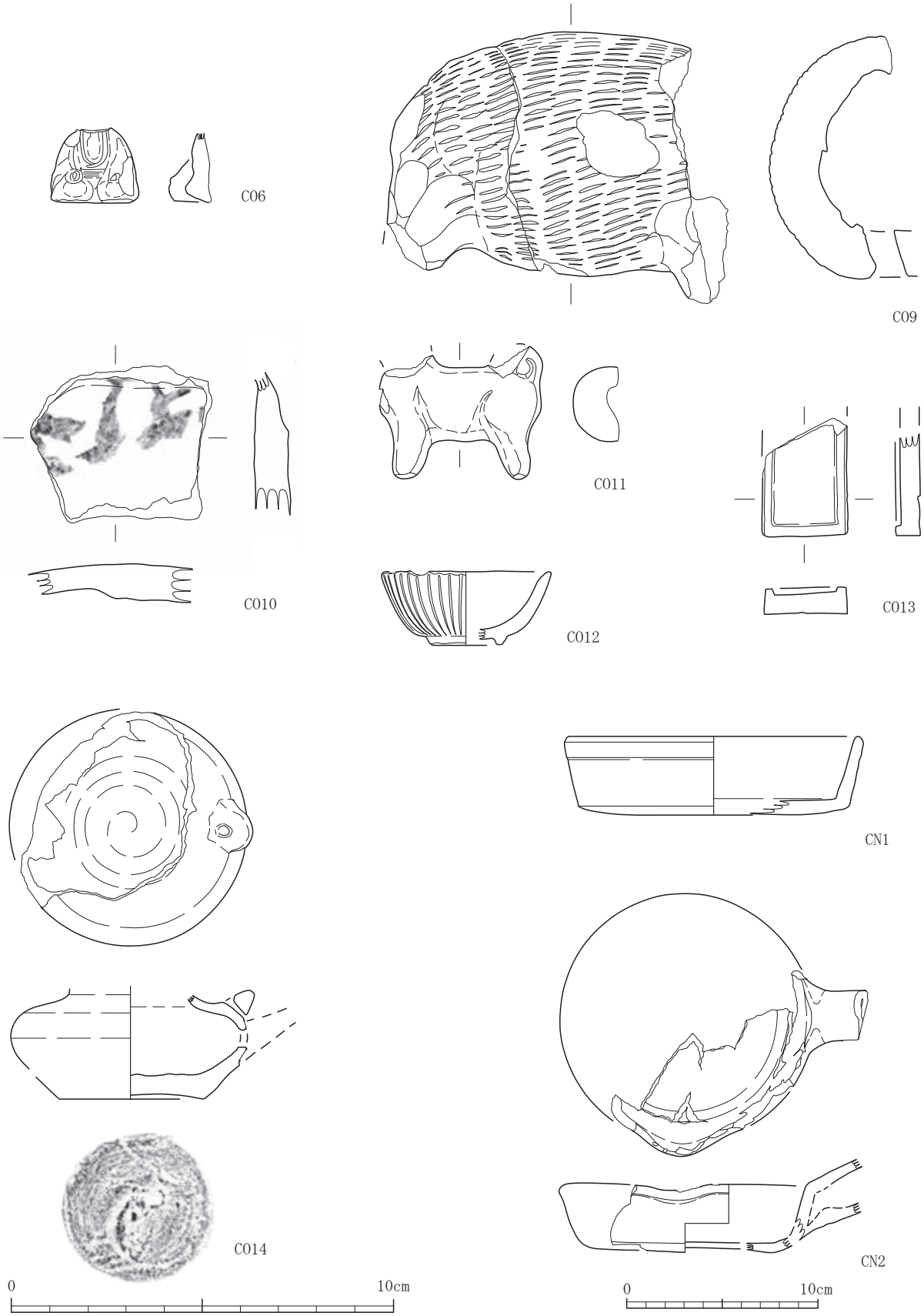


図98　武家屋敷地区第11地点出土土製品（2）・軟質施釉陶器
Fig.98　Clay objects and figures, lead glazed soft ceramics from BK11 (1)

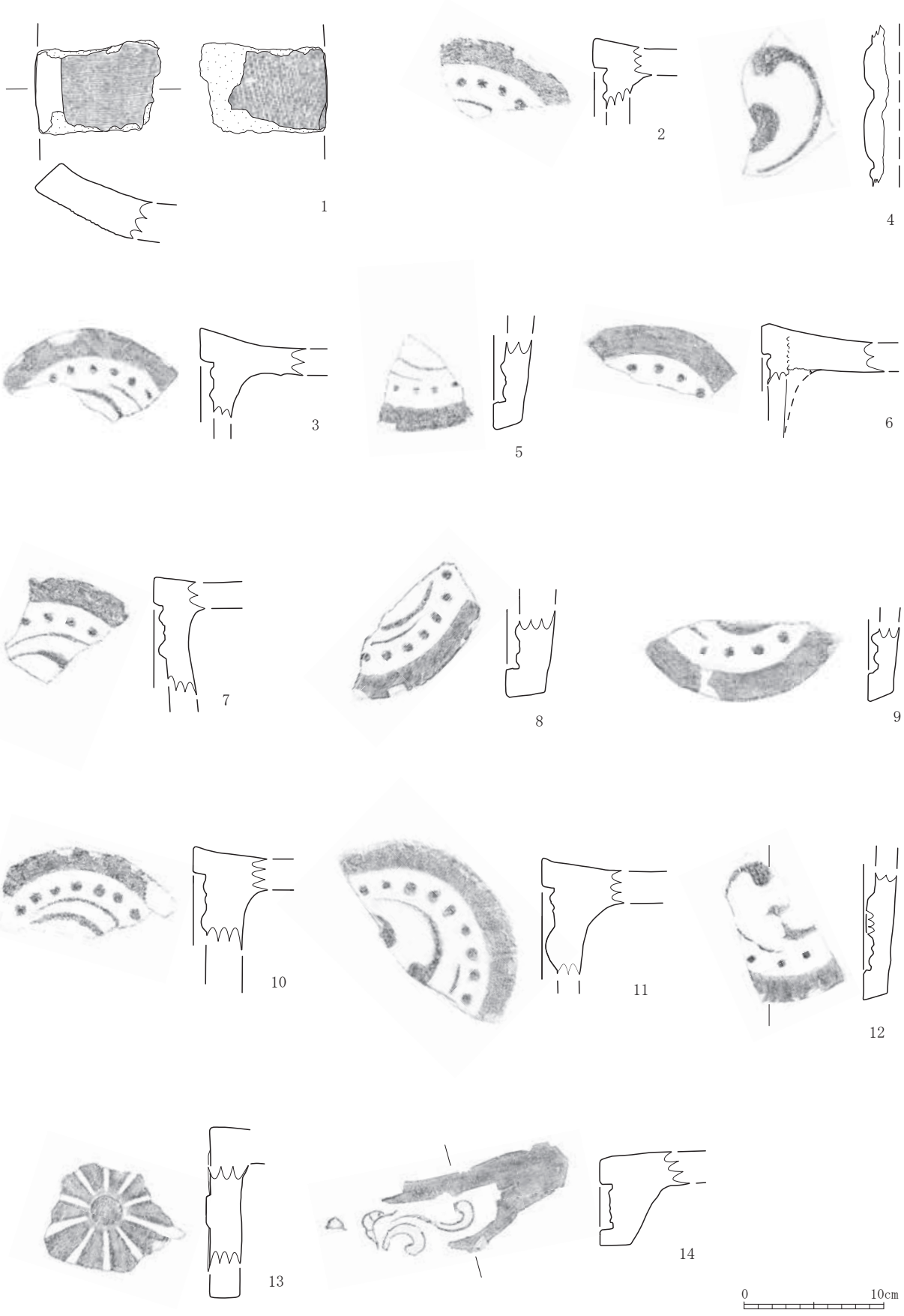


図99　武家屋敷地区第11地点出土瓦（1）
Fig.99　Various roof tiles from BK11 (1)

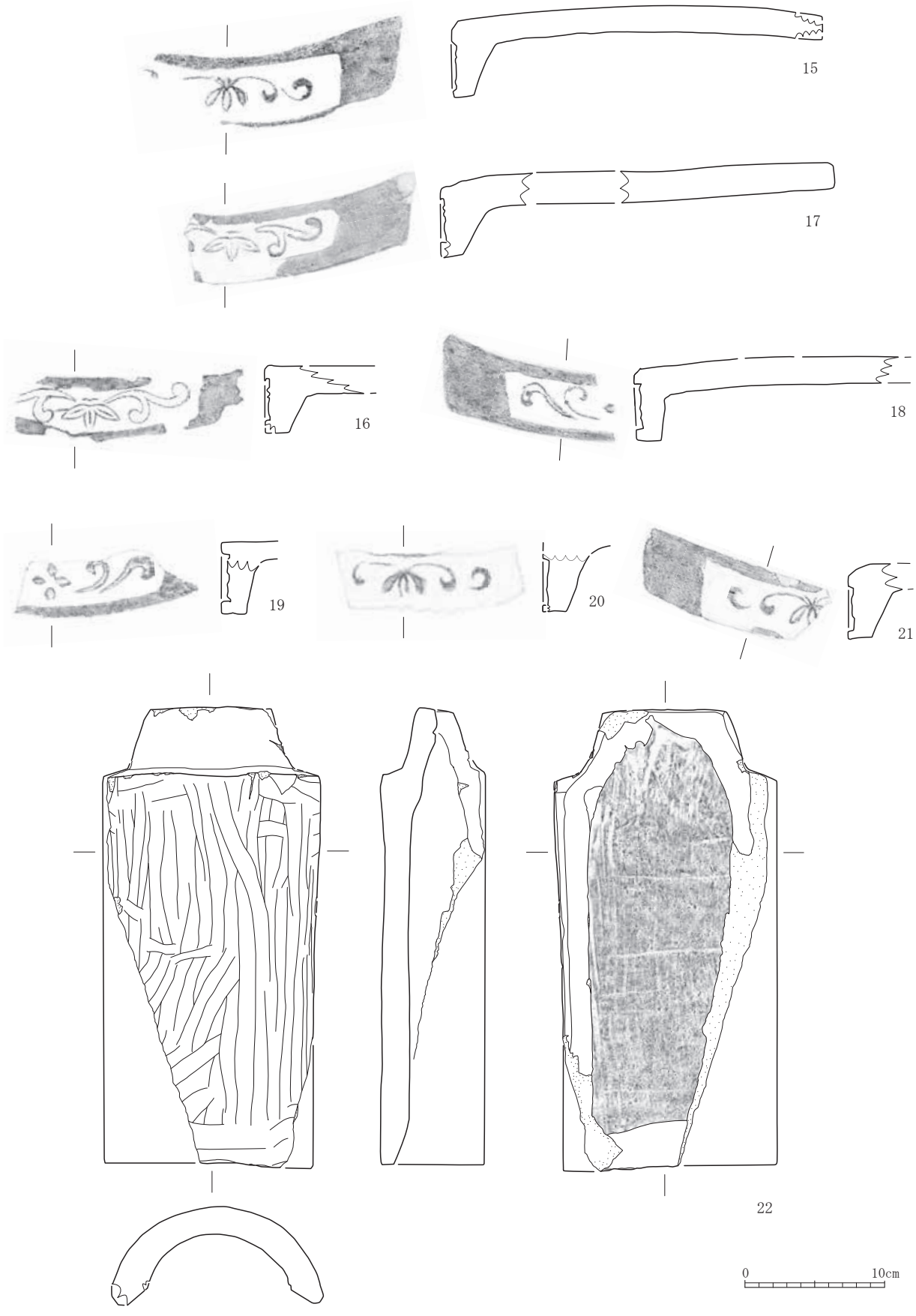


図100　武家屋敷地区第11地点出土瓦（2）
Fig.100　Various roof tiles from BK11 (2)

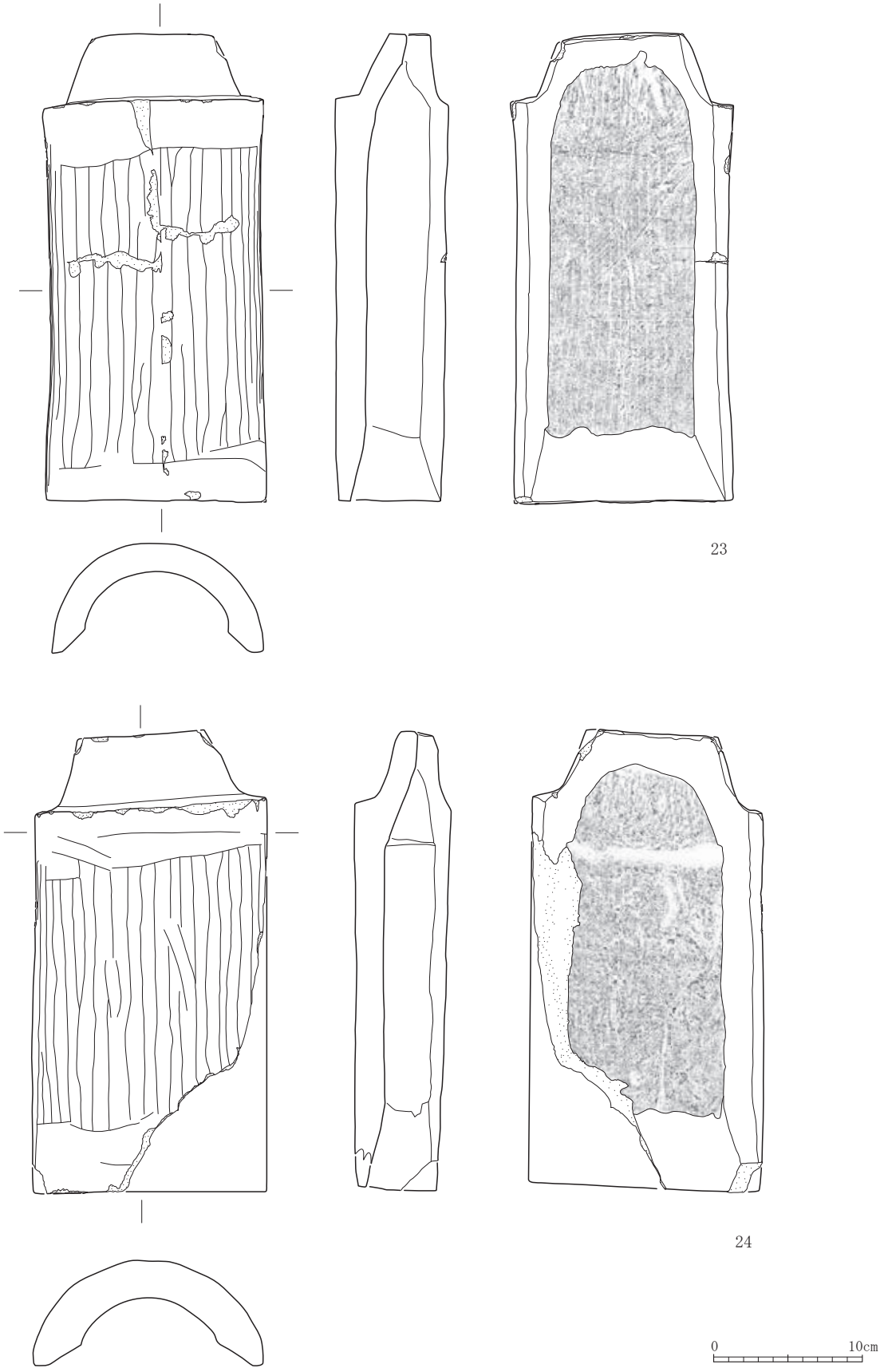
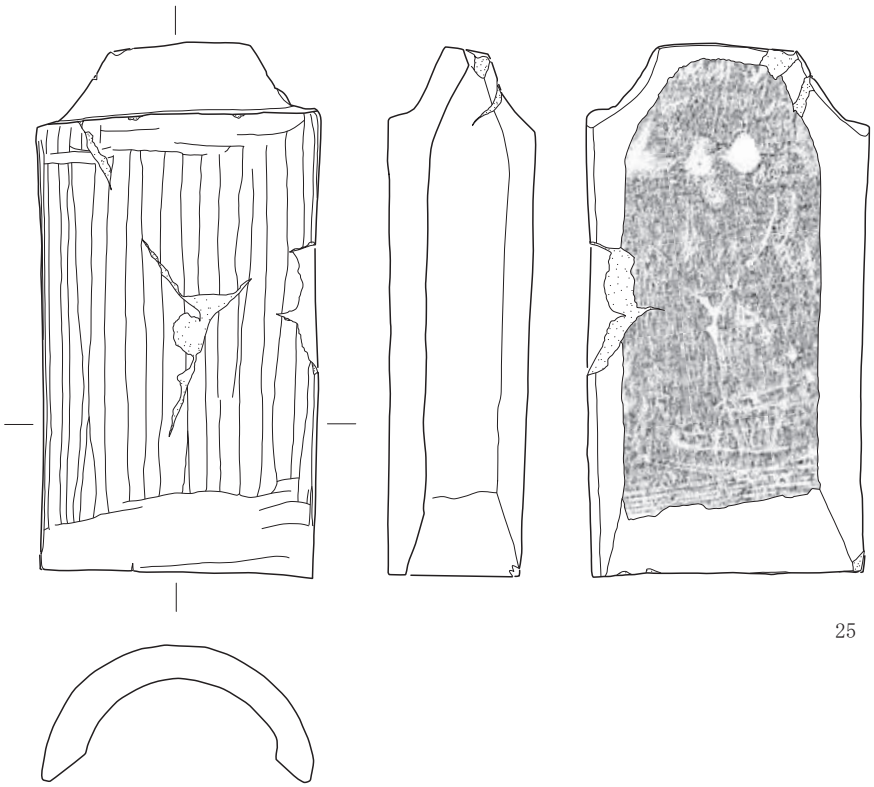


図101　武家屋敷地区第11地点出土瓦（3）
Fig.101　Various roof tiles from BK11 (3)



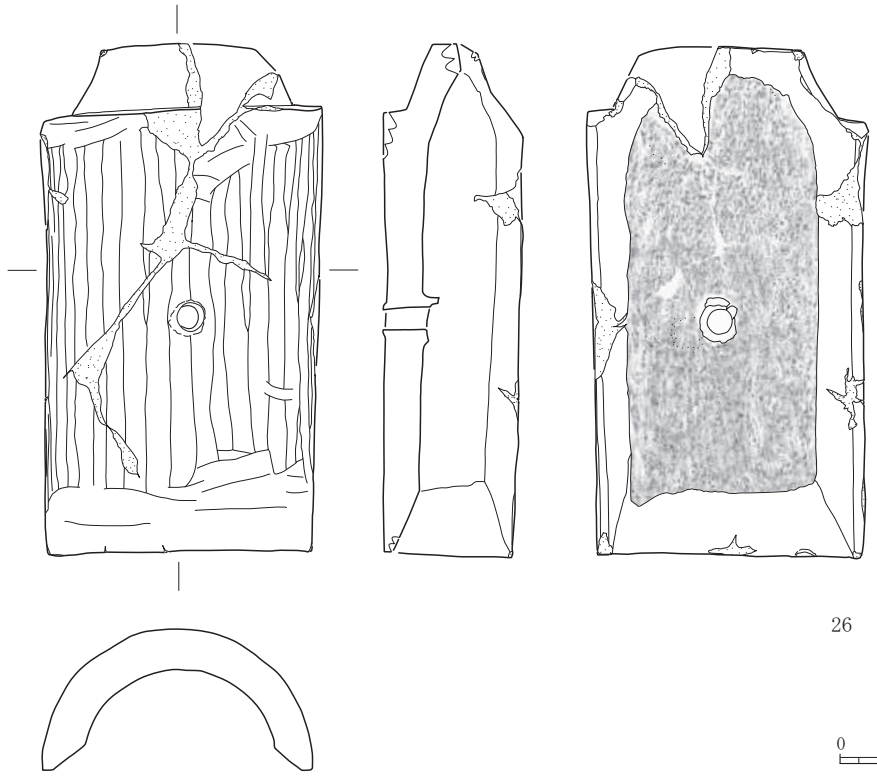


図102　武家屋敷地区第11地点出土瓦（4）
Fig.102　Various roof tiles from BK11 (4)

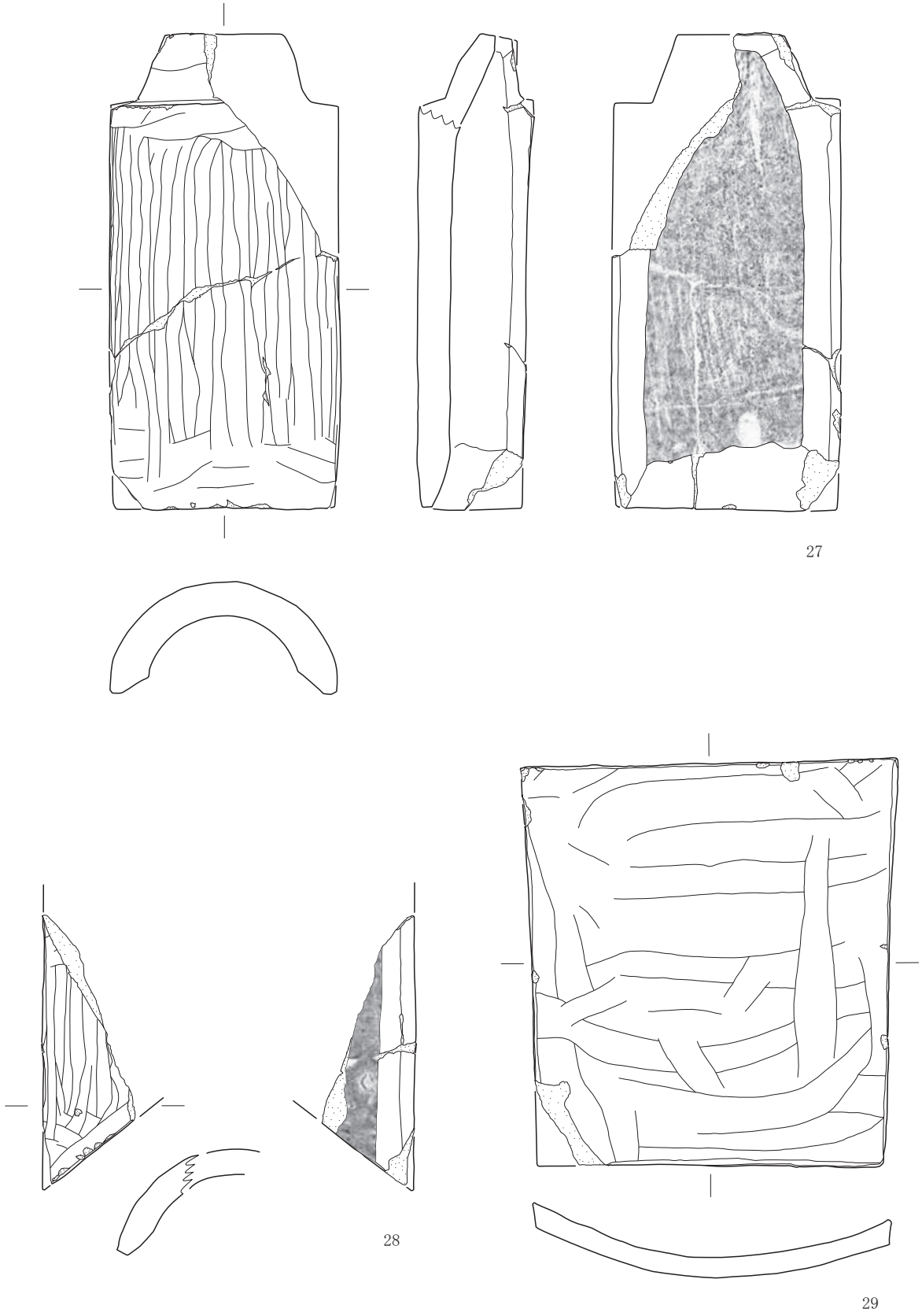


図103　武家屋敷地区第11地点出土瓦（5）
Fig.103　Various roof tiles from BK11 (5)

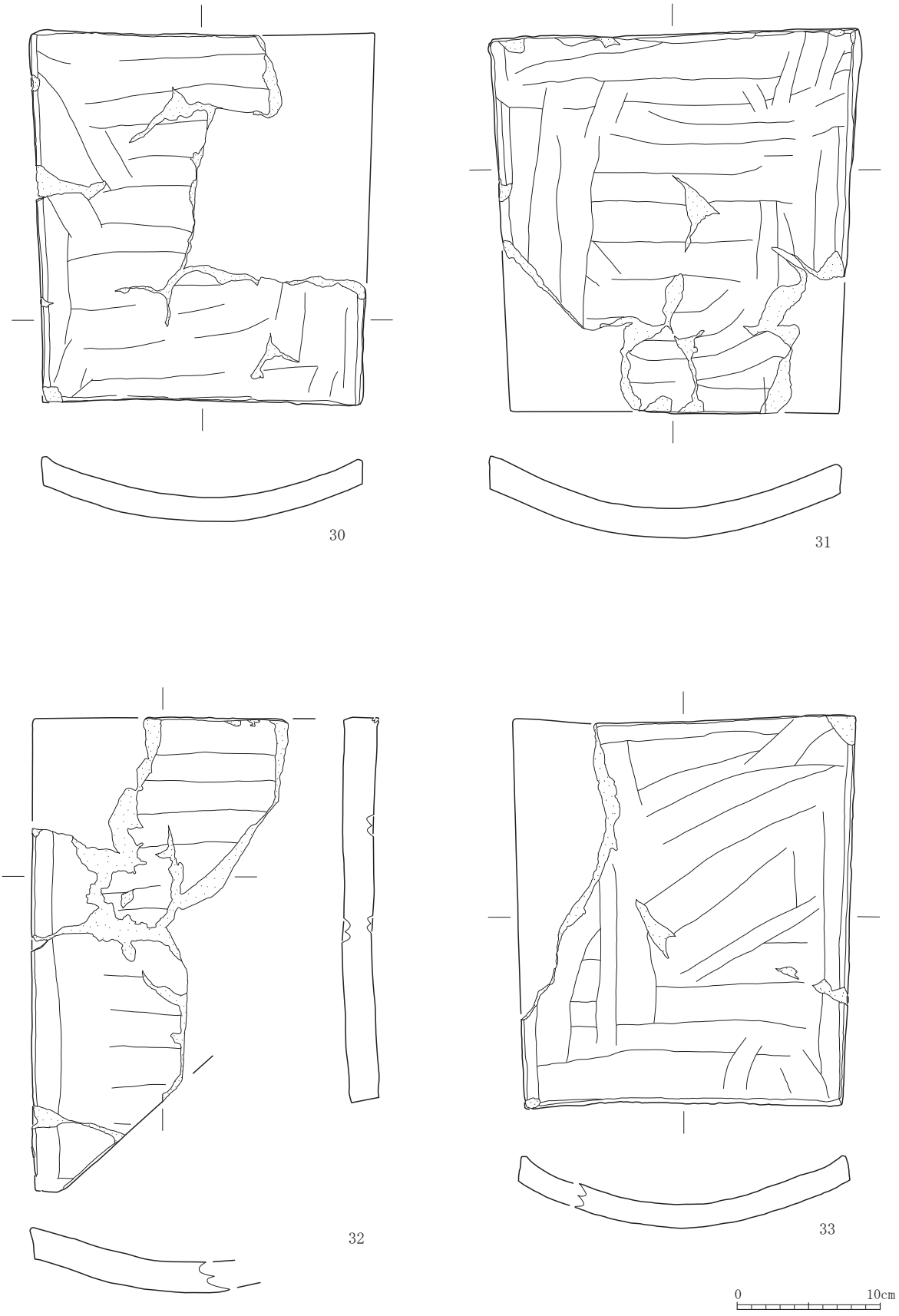


図104　武家屋敷地区第11地点出土瓦（6）
Fig.104　Various roof tiles from BK11 (6)

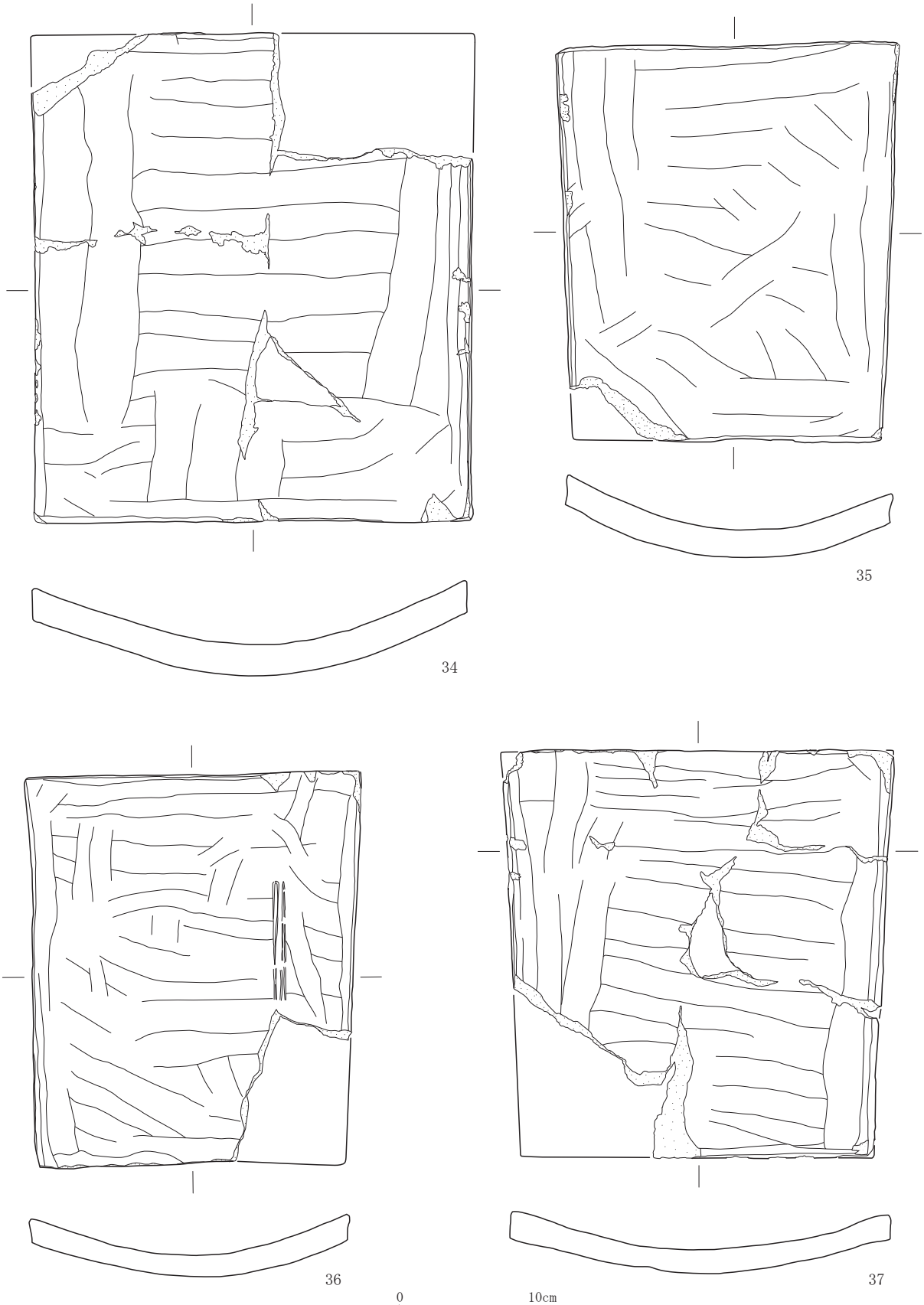


図105　武家屋敷地区第11地点出土瓦（7）
Fig.105　Various roof tiles from BK11 (7)

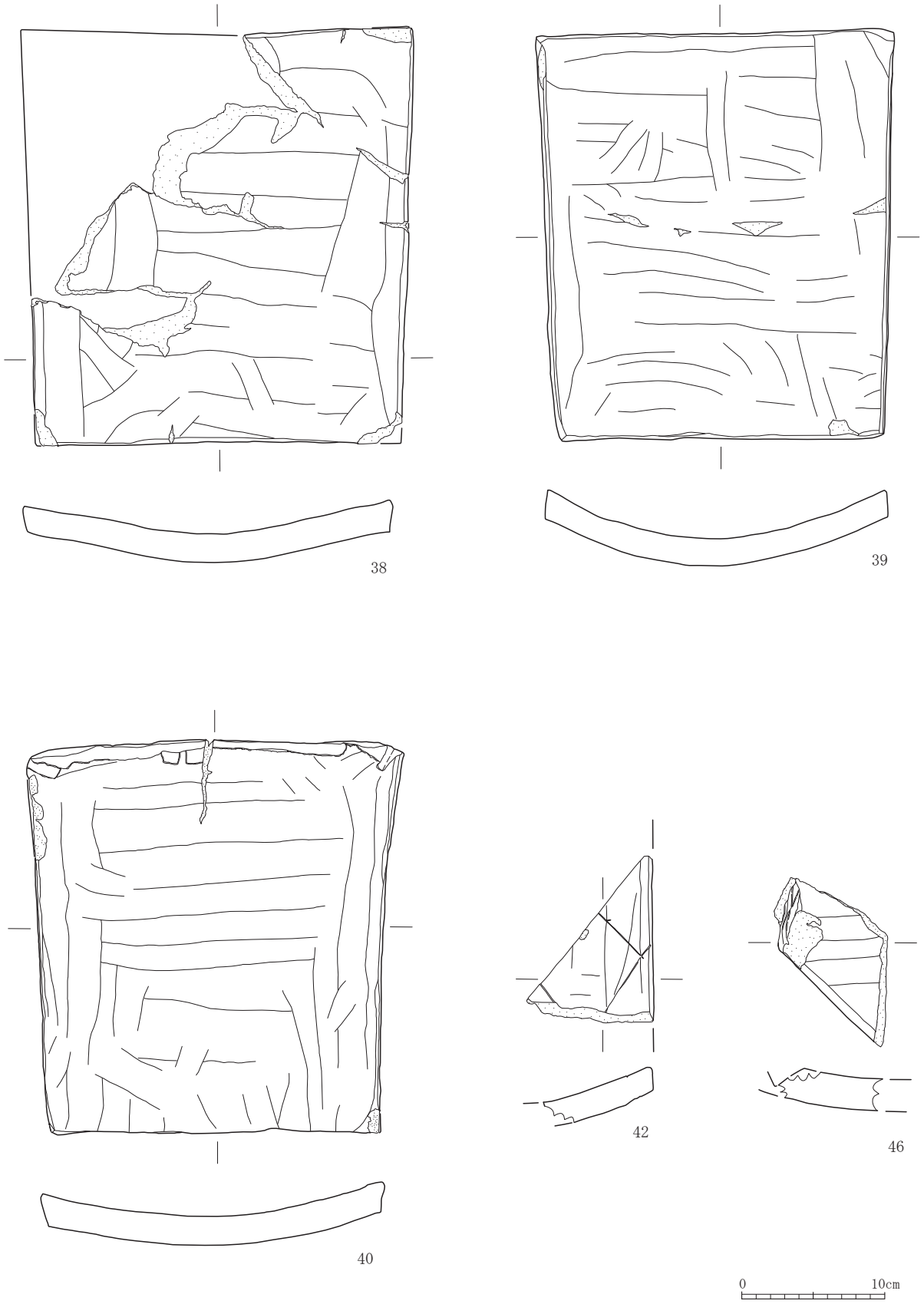


図106　武家屋敷地区第11地点出土瓦（8）
Fig.106　Various roof tiles from BK11 (8)

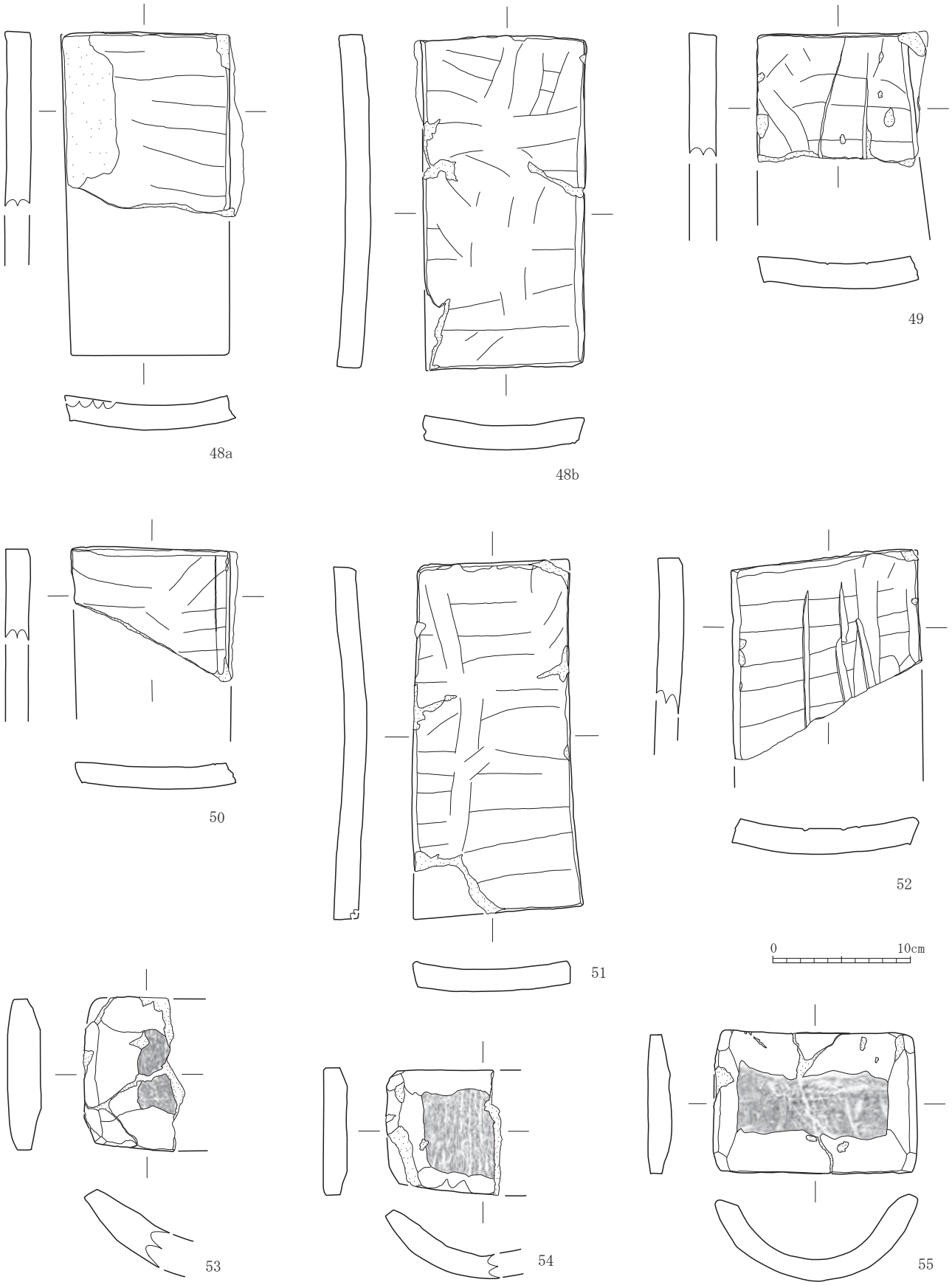


図107　武家屋敷地区第11地点出土瓦（9）
Fig.107　Various roof tiles from BK11 (9)

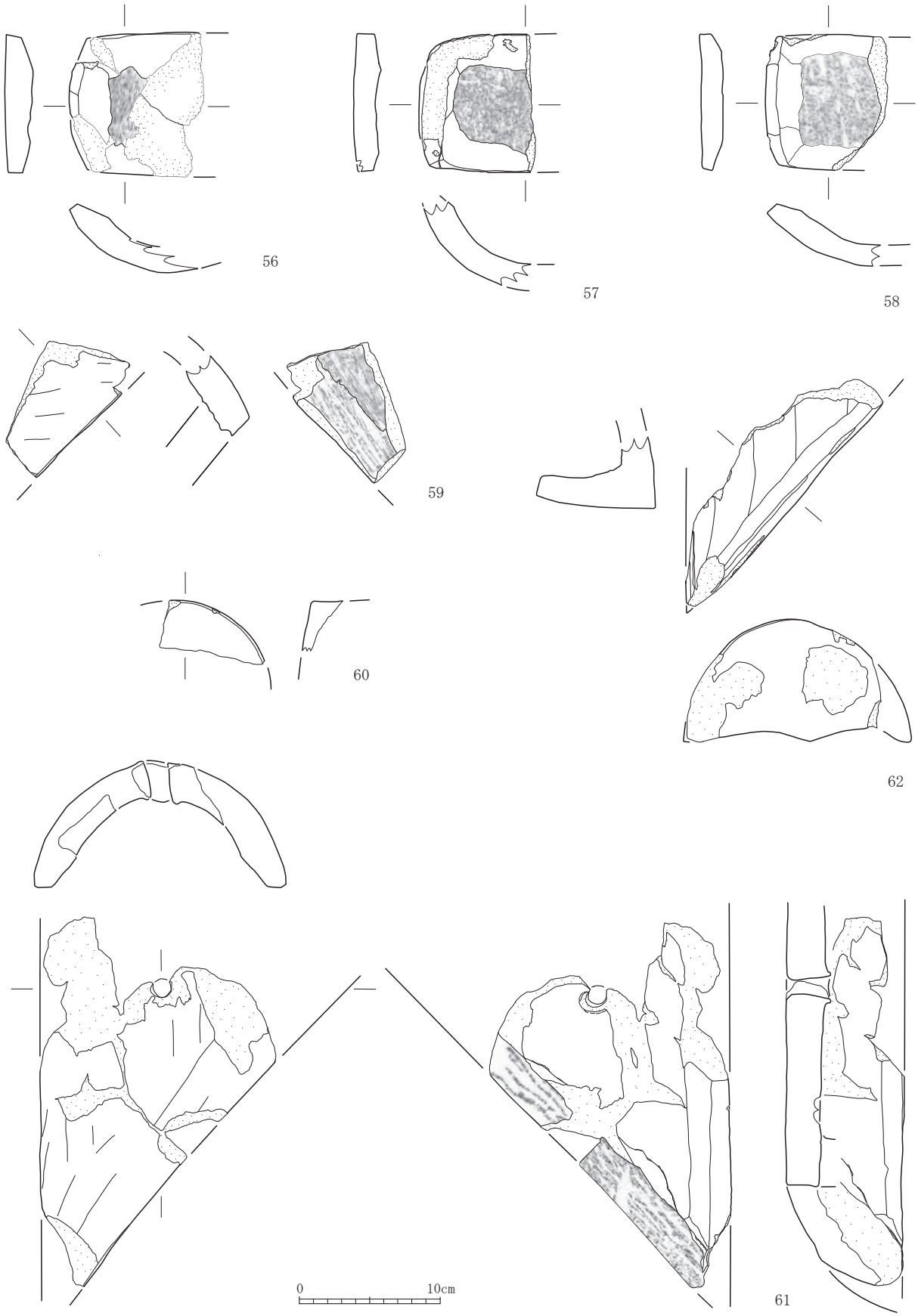
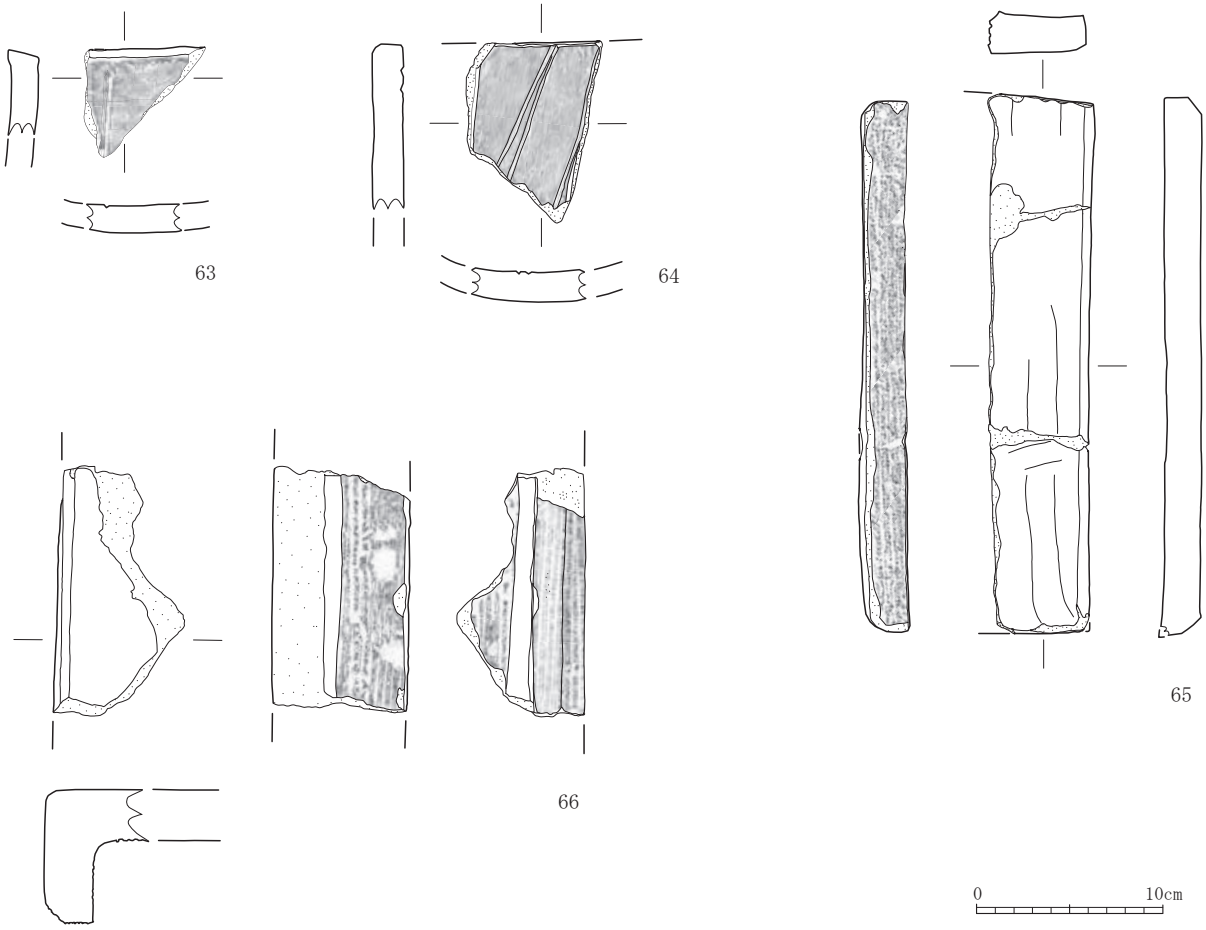


図108　武家屋敷地区第11地点出土瓦（10）
Fig.108　Various roof tiles from BK11 (10)



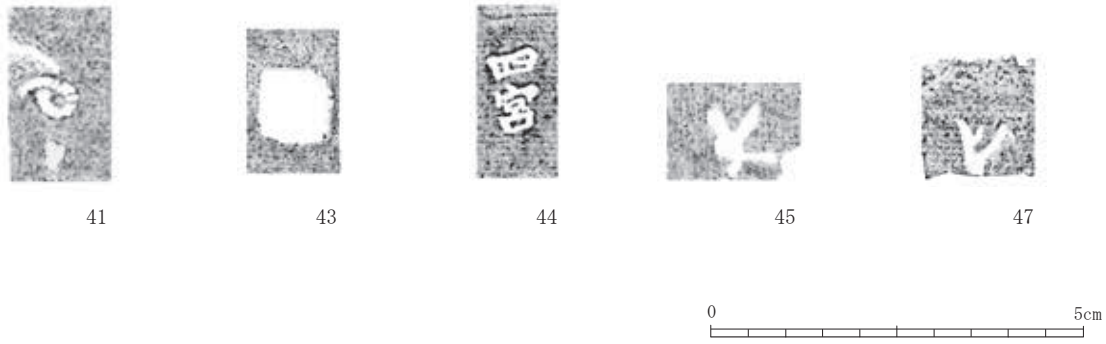


図109　武家屋敷地区第11地点出土瓦（11）
Fig.109　Various roof tiles from BK11 (11)

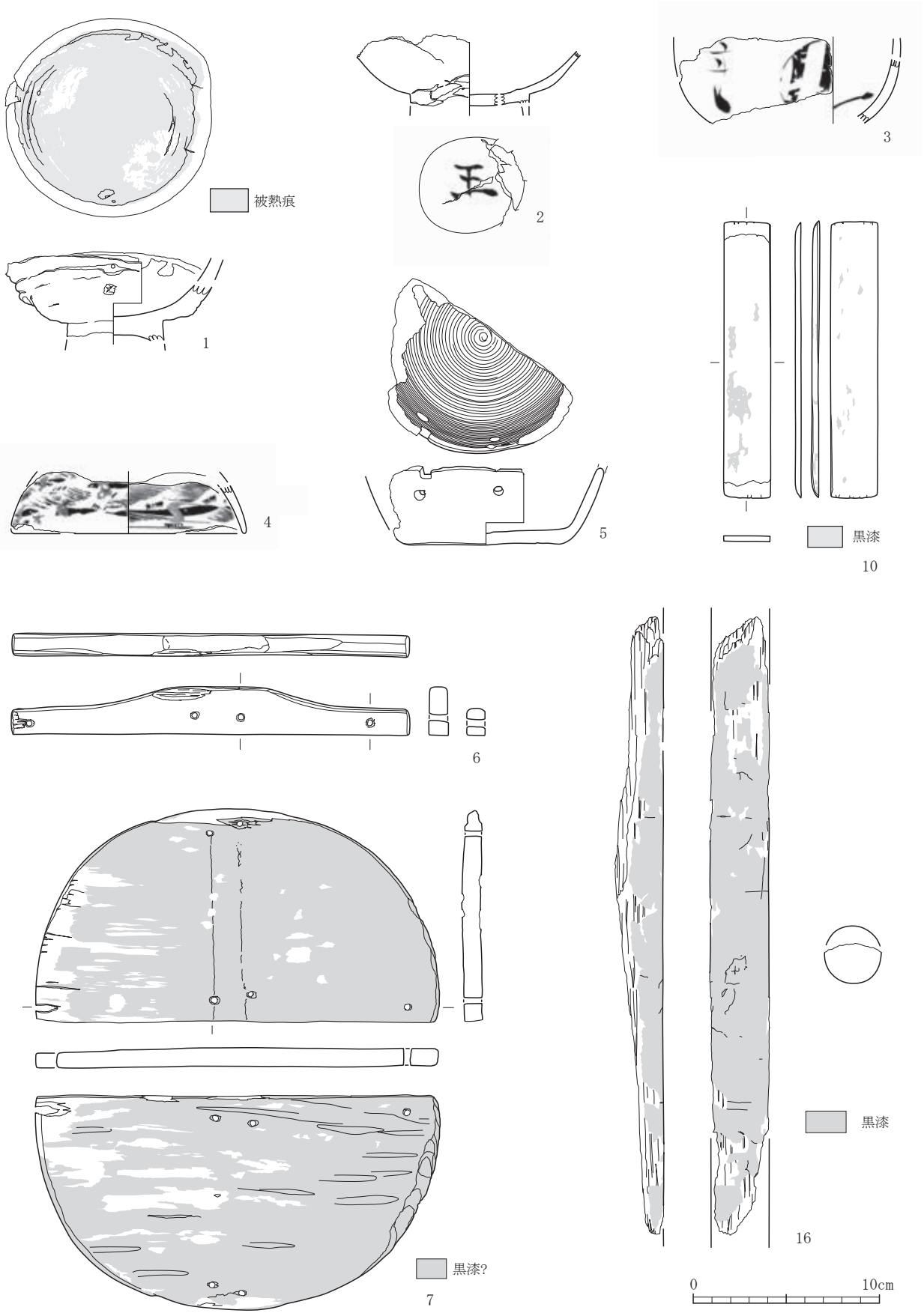


図110　武家屋敷地区第11地点出土漆塗製品
Fig.110　Various wooden implements with lacquer from BK11

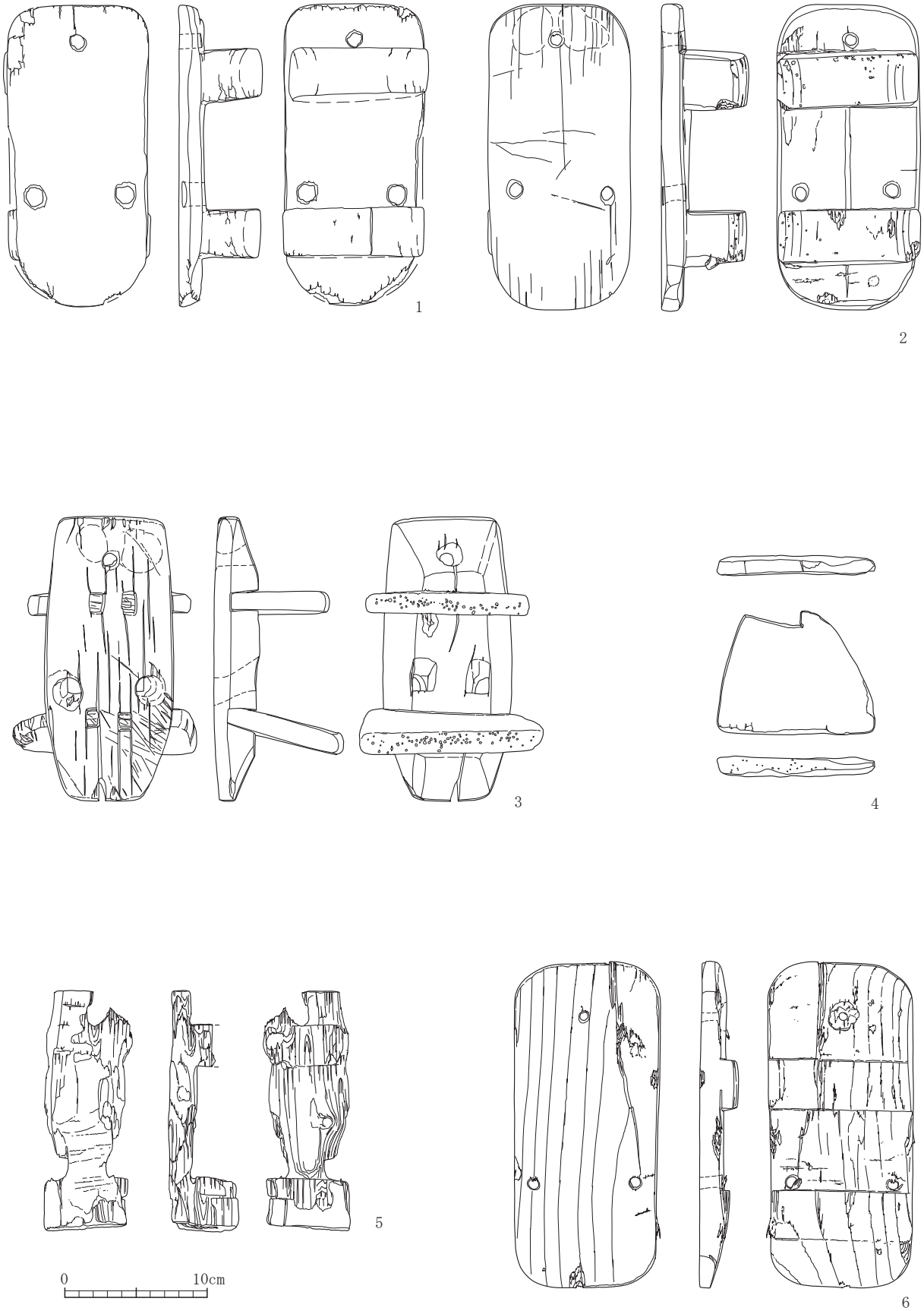


図111　武家屋敷地区第11地点出土下駄
Fig.111　Clogs from BK11

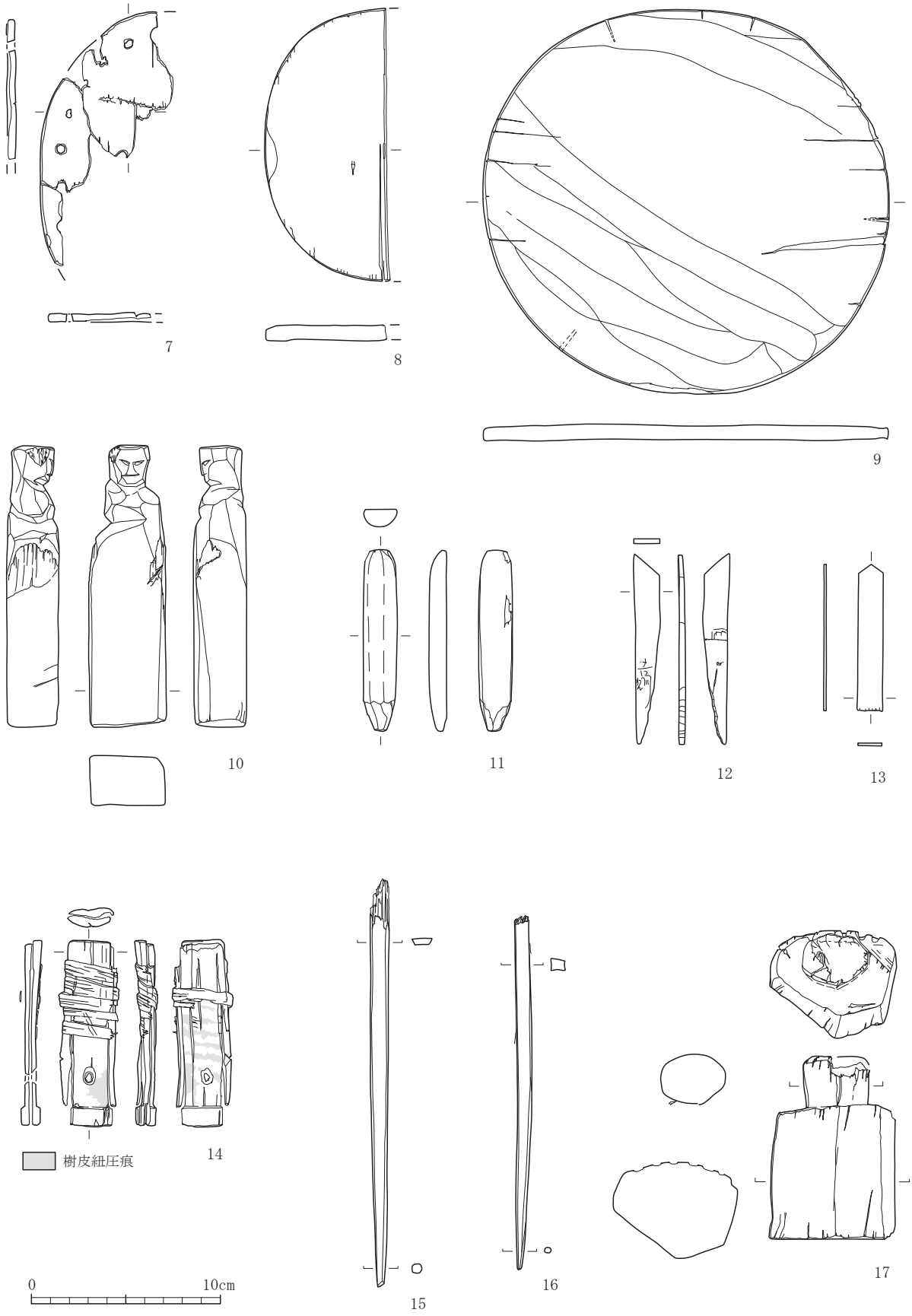


図112　武家屋敷地区第11地点出土その他の木製品（1）
Fig.112　Various wooden implements from BK11 (1)

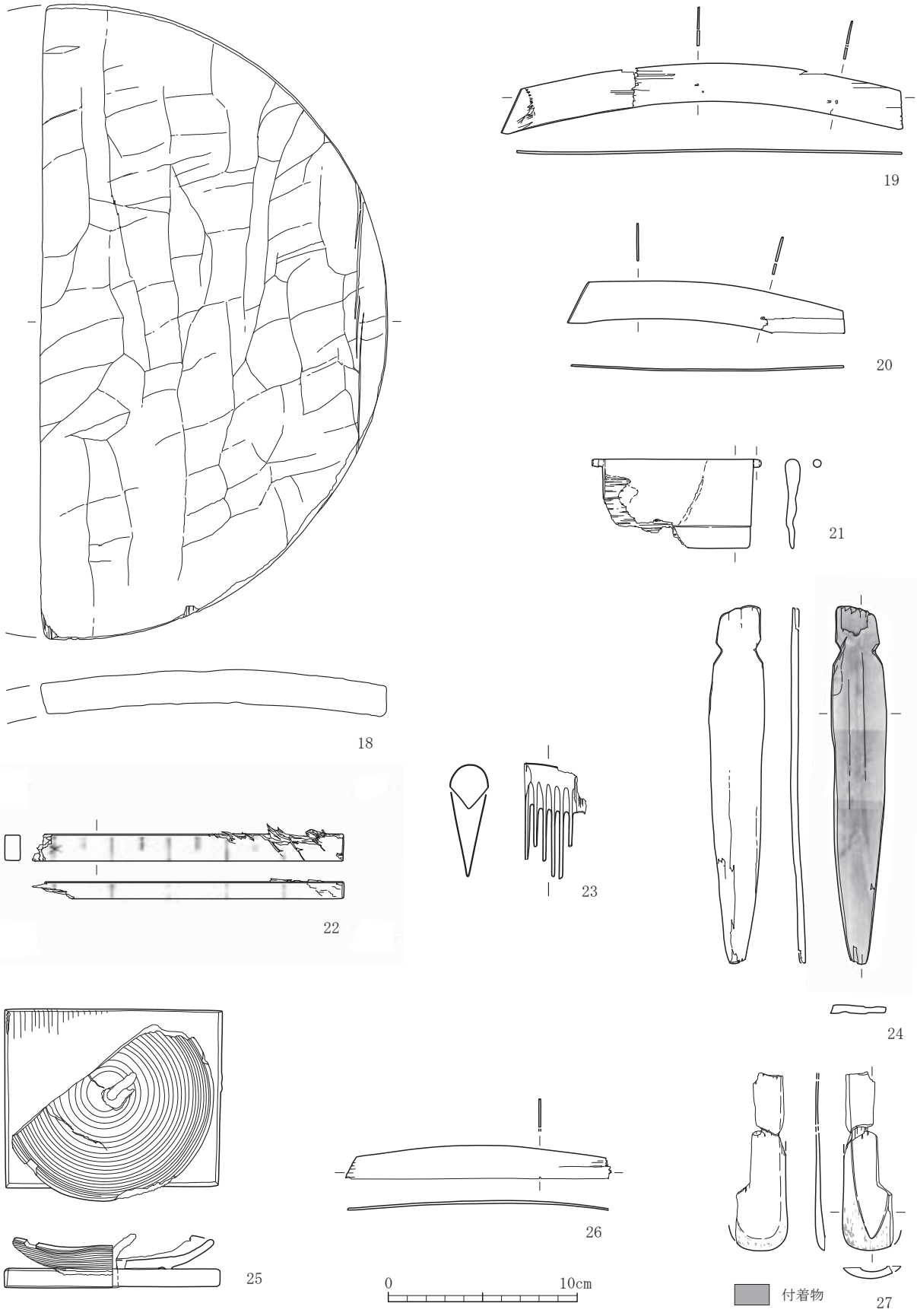


図113　武家屋敷地区第11地点出土その他の木製品（2）
Fig.113　Various wooden implements from BK11 (2)

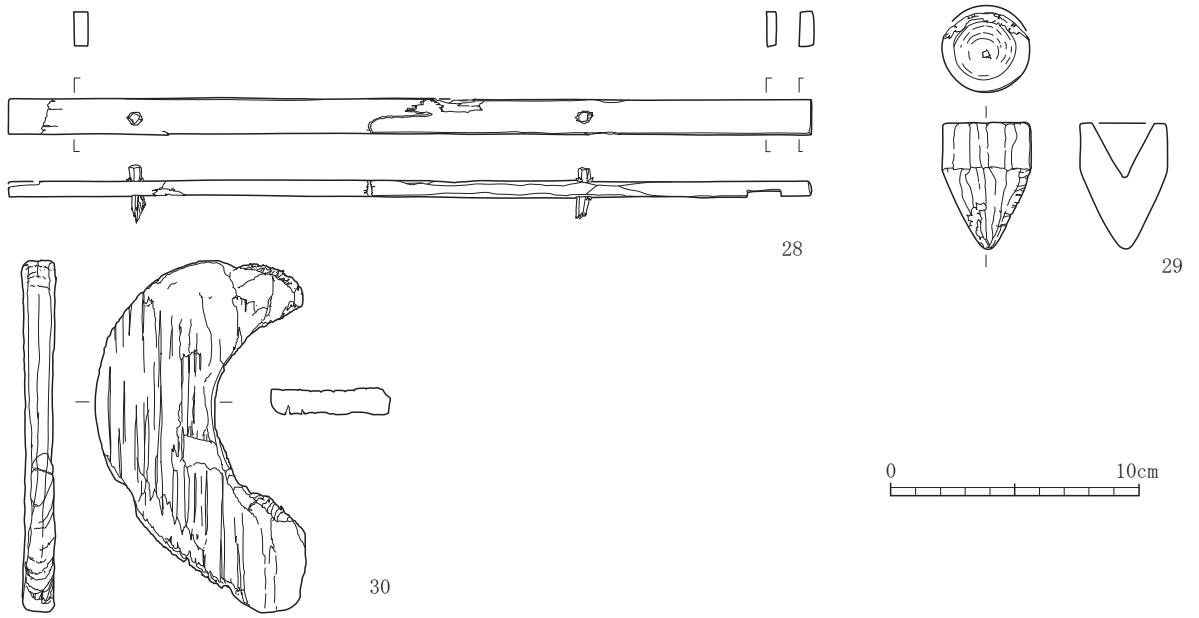


図114　武家屋敷地区第11地点出土その他の木製品（3）
Fig.114　Various wooden implements from BK11 (3)

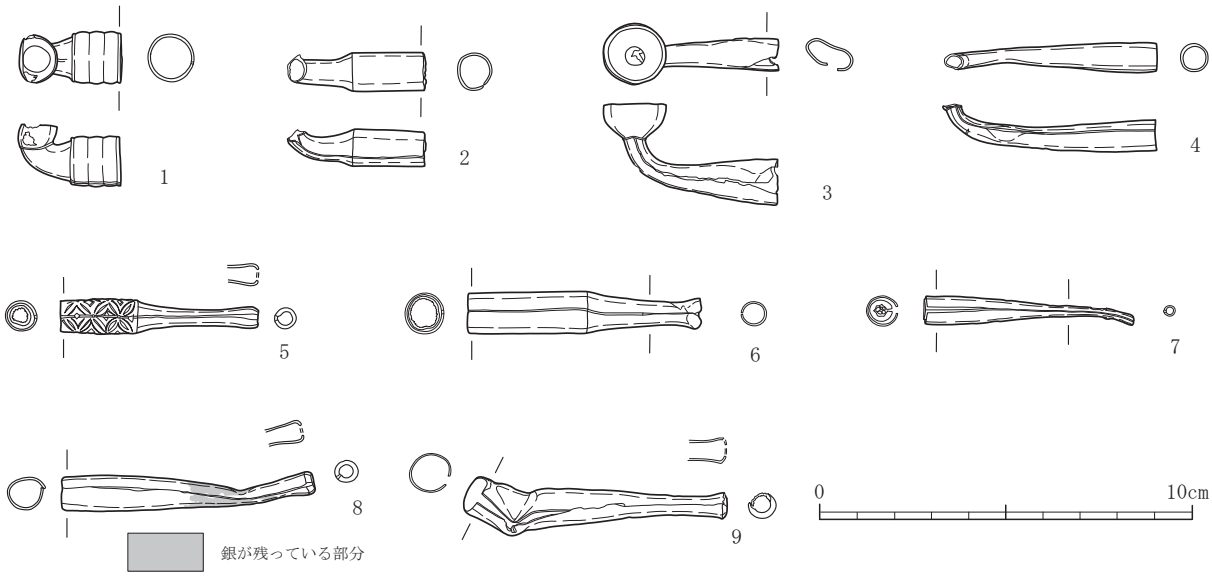


図115　武家屋敷地区第11地点出土煙管
Fig.115　Pipes from BK11

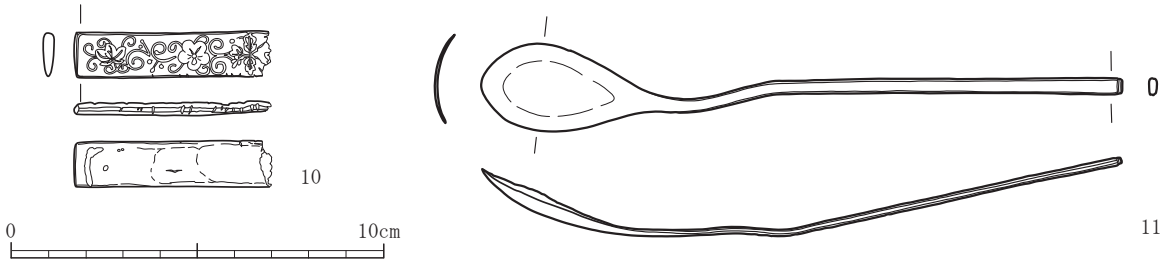


図116　武家屋敷地区第11地点出土その他の銅製品（1）
Fig.116　Various implements made of copper at BK11 (1)

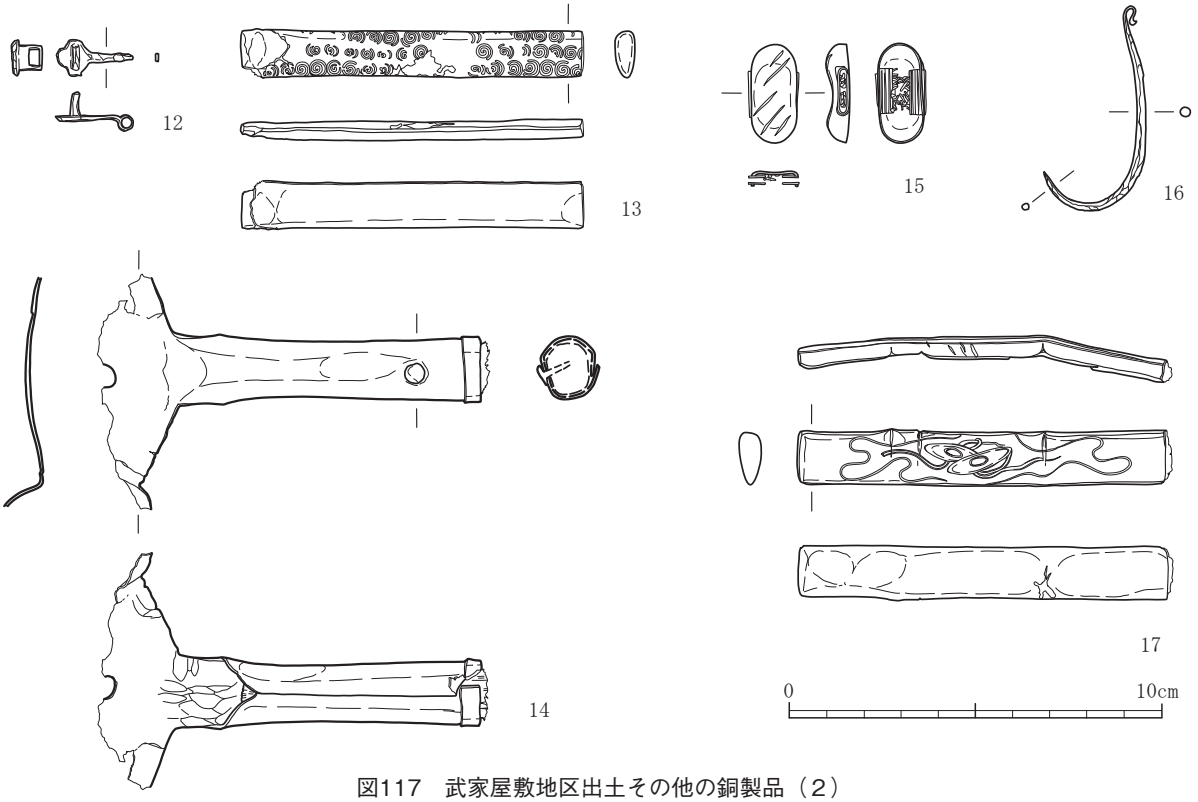


図117　武家屋敷地区出土その他の銅製品（２）
Fig.117　Various implements made of copper from BK11 (2)

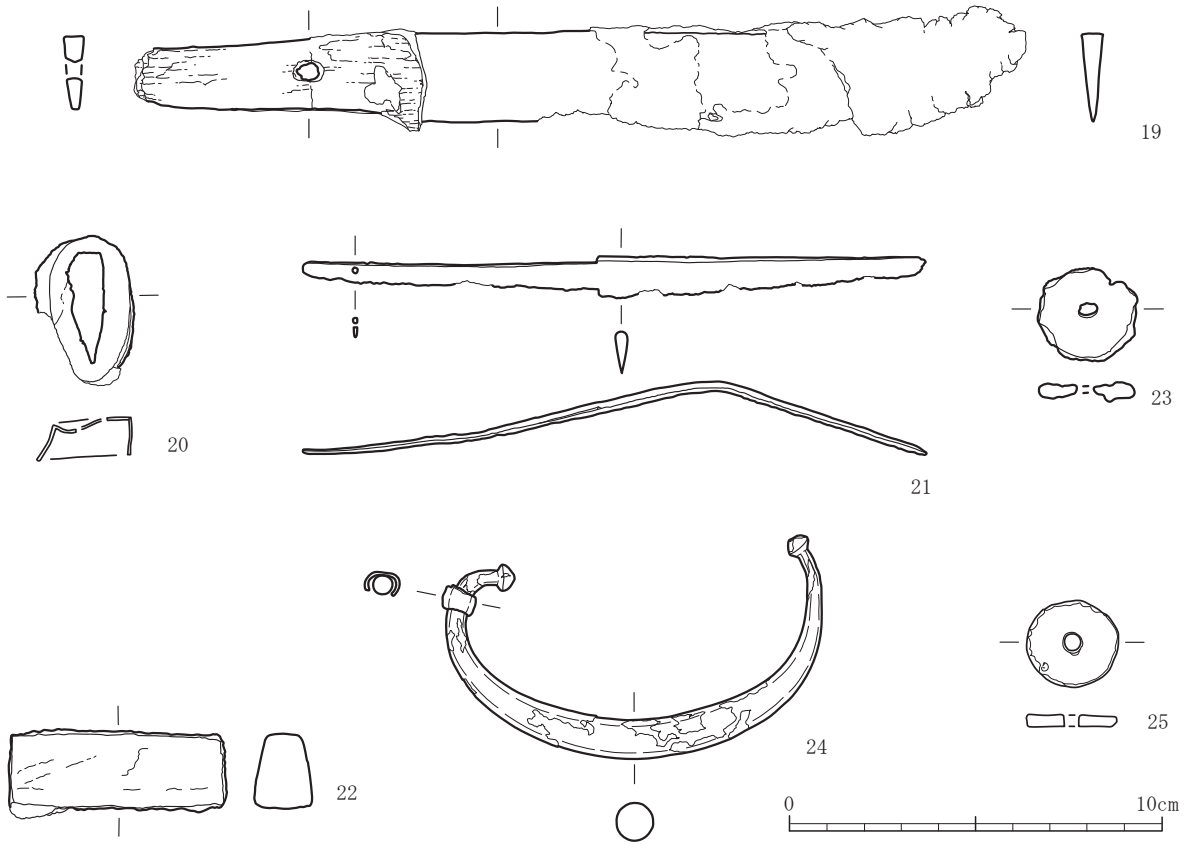


図118　武家屋敷地区出土鉄製品・鉛製品
Fig.118　Various implements made of iron and lead from BK11

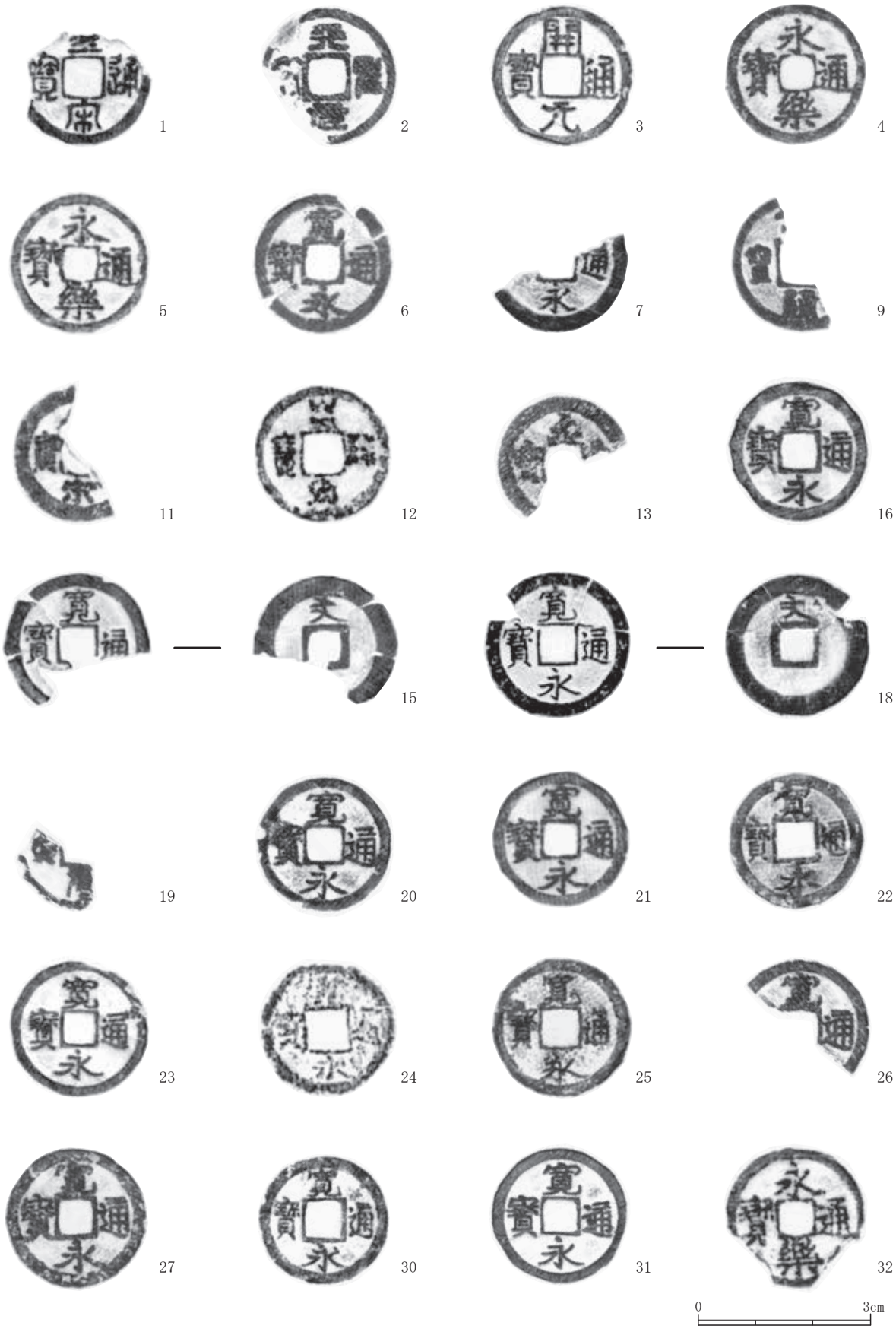


図119　武家屋敷地区第11地点出土古銭
Fig.119　Coins from BK11

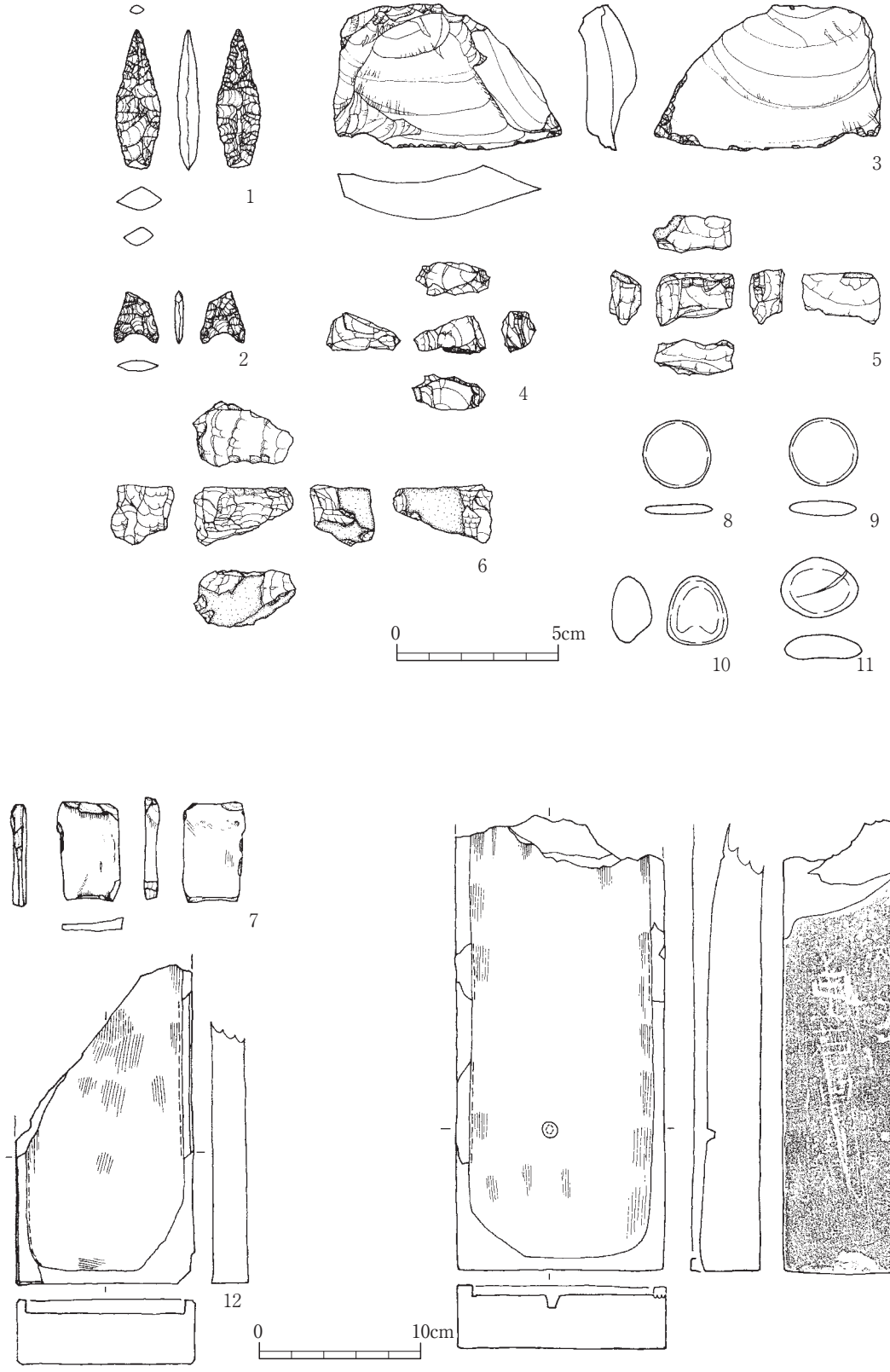


図120　武家屋敷地区第11地点出土石器・石製品
Fig.120　Stone tools and stone implements at BK11

表17　武家屋敷地区第11地点出土磁器集計表（1）
Tab.17　Distribution of porcelains at BK11 (1)

出土場所	大碗	中碗							小碗				碗不明	皿				鉢		碗鉢皿不明	袋物					蓋	その他	不明	合計
		中碗丸	中碗筒	中碗端反	中碗広東	中碗その他	中碗蓋	中碗不明	小碗丸	小碗筒	小碗端反	小碗不明		大皿	小中皿	極小皿	皿不明	大鉢	小中鉢		水注	瓶類	火入・香炉	袋物その他	袋物不明				
B層				1									2																3
B層相当													3	1	3					3								1	11
A層		10	1	5				41	1		1	3	68、端反2	2	29	1	43			61		4	6		7	5	急須1、人形または水滴?2、 蓋物1、紅皿1、猪口1、水滴1	30	327
A層瓦集中部													端反1							1								1	3
2層	1	14		9	1			50	5	2	2	4	109、端反4	6	39	8	46		1	117		16	6		23	3	合子2、蓋物2、猪口1	72	543
2層相当																												2	2
2a層		3		3				8			1	3	30、端反2		9	2	8			27		2	1		3		仏飯器1、紅皿1	13	117
2a層落込み				1								1	4		4		1			3							蓋物1	3	18
不明				1								1	3		1		2			3								9	20
1層・撹乱	1	31	3	28	3			122	10	7	3	25	253、端反4	1	86、変形皿1	13	126	1	7	197		34	10、火入1		34	18	蓋物6、蓋物 ?2、小坏1、急須2、 人形または水滴 ?5、紅皿4、合子3、 猪口3、水滴1、仏飯器1	81	1128
沢状遺構埋土1層		1										1	1		1													1	5
Ⅰ期以前のピット													1																1
5号建物													1							1									2
4号井戸		1													1					1									3
1号遺構上部埋土				1									1	1															3
1号遺構下部埋土													1							1								1	3
7号遺構																	1			1									2
14号遺構埋土								1																				1	2
14号遺構埋土上層													1				1										蓋物 ?1		3
14号遺構 A層								3					4		1		3			4									15
19号遺構								1							2													1	4
21号遺構								2					1		1		1											1	6
24号遺構		1											3		3		4			3		1	火入1						16
Ⅰ期のピット													8		2		1		1										12
Ⅰ期の遺構小計		2		1				7					20	1	10		11		1	11		1	1				1	4	71
Ⅰ期以降のピット																				1					1				2
10号遺構																	1												1
1号井戸		1													1		1			1									4
Ⅱa期の遺構小計		1													1		2			1									5
24号建物																							香炉1						1
25号建物																				1									1
26号建物													2															1	3
27号建物													1																1
28号建物													1																1
31号建物																	1												1
6号溝													3	1						1									5
7号溝																								1					1

表18　武家屋敷地区第11地点出土磁器集計表（2）
Tab.18　Distribution of porcelains at BK11 (2)

出土場所	大碗	中碗							小碗				碗不明	皿				鉢		碗鉢皿不明	袋物					蓋	その他	不明	合計
		中碗丸	中碗筒	中碗端反	中碗広東	中碗その他	中碗蓋	中碗不明	小碗丸	小碗筒	小碗端反	小碗不明		大皿	小中皿	極小皿	皿不明	大鉢	小中鉢		水注	瓶類	火入・香炉	袋物その他	袋物不明				
15号溝															1					3						1			5
6号井戸		1						5	1			1	4	1	3		3			3		1					紅猪口（小坏）1	2	26
6号遺構埋土1層								1					1				1			2									5
11号遺構												1			1		1												3
15号遺構埋土		1		1				2	1			1	6	1	3		6			3						1	猪口1、人形または水滴?1	3	31
15号遺構 A 層				1				1					4							2		1						1	10
20号遺構埋土																				1								1	2
20号遺構埋土1層								2					4			2	1		1	5					2		蓋物1	3	21
20号遺構埋土下層								2					1		3				1	1					1	1			10
20号遺構埋土上層		2						2				1	4		2	1	3			2			香炉1				仏飯器 ?1、蓋物2、猪口1	1	23
25号遺構埋土		5						8			2		5	1	17	2	4			6		3	1		2		水滴2	1	59
25号遺構 A 層相当								2					2																4
28号遺構				1									1																2
28号遺構 A 層相当		1						1														1							3
29号遺構								1					4		1		1			1							紅皿1	2	11
30号遺構								1																					1
Ⅱb 期のピット															1					1									2
Ⅱb 期の遺構小計		10		3				28	2		2	4	43	4	32	5	21		2	32		6	3		6	3	11	15	232
Ⅱb 期以降のピット		1						1							1										1			1	5
Ⅰ～Ⅱb 期のピット								1																					1
Ⅱc 期以前のピット																	1												1
33号建物													1																1
36号建物																							1						1
39号建物								1																					1
40号建物																											小坏1		1
9号溝								2									1												3
12号遺構													1																1
13号遺構								1	1						1		1			1		1					蓋物1		7
23号遺構													3		1					5			火入1				蓋物1	2	13
27号遺構		4						6					2	1	1		3			6		1	1		3			3	31
Ⅱc 期の遺構小計		4						10	1				7	1	3		5			12		2	3		3		3	5	59
42号建物		1																											1
43号建物															1													1	2
5号溝													1				1								1			2	5
10号溝															1		1			4		1						7	14
11号溝								1					1									1							3
12号溝													1				1									1		1	4
13号溝		1	3					2					7		2		1			4		1						2	23
5号井戸		1		1				5					6		4		1			3								1	22
17号遺構		5	1	3				7	1	1	1	2	6、端反1	1	6	1	3		1	13		4、徳利1	火入1			2	猪口1、紅皿1	7	70
18号遺構																							1						1

表19　武家屋敷地区第11地点出土磁器集計表（3）
Tab.19　Distribution of porcelains at BK11 (3)

出土場所	大碗	中碗							小碗				碗不明	皿				鉢		碗鉢皿不明	袋物					蓋	その他	不明	合計
		中碗丸	中碗筒	中碗端反	中碗広東	中碗その他	中碗蓋	中碗不明	小碗丸	小碗筒	小碗端反	小碗不明		大皿	小中皿	極小皿	皿不明	大鉢	小中鉢		水注	瓶類	火入・香炉	袋物その他	袋物不明				
26号遺構埋土																				2								2	4
26号遺構埋土下層													2		1	1	1			1		1					猪口1		8
26号遺構埋土上層		2		4				1	1				9		3	1	4		1	11		1			1		猪口1	1	41
26号遺構礫群中													1																1
26号遺構Ａ層相当		1						3		2		2	8		4		7			9		1、徳利2				2	猪口1、仏飯器 ?1	6	49
Ⅱd期の遺構小計		11	4	8				19	2	3	1	4	43	1	22	3	20		2	47		13	2		2	5	6	30	248
49号建物																				2							猪口1		3
2号溝				7	1			5	2		1	2	15、端反1		5		4			15		3			1	3	人形または水滴 ?1、蓋物1、猪口1、小坏1	5	74
3号溝		1		1			1	2					3	1			2			1							1		13
8号溝															1					2									3
14号溝		1						1			1		2							1								1	7
Ⅱe期の遺構小計		2		8	1		1	8	2		2	2	21	1	6		6			21		3			1	3	6	6	100
12・14号溝		2						2				1	2		1		1		1	2		1			1		蓋物1、小坏1		16
Ⅱd・Ⅱe期の遺構小計		2						2				1	2		1		1		1	2		1			1		2		16
Ⅱe期以降のピット													1																1
50号建物														1														1	2
7号井戸		3		5	1			7				1	13	1	8		1			8		2			2		蓋物1	2	55
Ⅲ期のピット															1	1											猪口1		3
Ⅲ期の遺構小計		3		5	1			7				1	13	2	9	1	1			8		2			2		2	3	60
Ⅰ～Ⅲ期のピット								2							2		1			2								3	10
1号暗渠埋土				3									4				5			9								3	24
1号暗渠蓋上埋戻土		1		1				20	3			5	28		4	2	12		1	18		6	1		3	2	人形または水滴 ?2、蓋物1、猪口1、紅皿1	1	113
1号暗渠埋戻土															1		1												2
1号暗渠裏込土				1									2				1												4
1号暗渠流込土																				1					1				2
1号暗渠の小計		1		5				20	3			5	34		5	2	19		1	28		6	1		4	2	5	4	145
合計	2	96	8	78	6	0	1	326	26	12	12	55	671	20	265	35	314	1	15	577	0	90	34	0	88	39	79	284	3134

表20　武家屋敷地区第11地点出土陶器集計表（1）
Tab.20　Distribution of glazed ceramics at BK11 (1)

出土場所	大碗	中碗					小碗	碗不明			皿					大鉢	小中鉢	擂鉢	鉢その他	碗鉢皿不明	土瓶		壺甕類				火灰吹入	袋物		土鍋	鍋蓋	その他	不明	合計
		丸形	端反	腰折	その他	不明		不明	端反	腰折	大	小中	極小	向付	不明						身	蓋	壺	瓶	甕	不明		不明	その他					
B層相当												4					1			2												2	9
A層	1	13	1	5	3	40	1	28	2	2		62		1	5	1	3	27	水鉢1	234	96	4	3	1、仏花瓶2	1	17		32	1	2		仏飯器1、餌猪口1、水滴1、灯明皿2、合子2、蓋1	91	688
A層礫集中部															1					1													2
A層瓦集中部														1							1												2
2層		15	3	4	6、筒2	63	1	64	6	5		86	2		9	3	2	32	植木鉢1	441	219	15	6	5	2	26	3	39		9		1、灯明皿5、合子2、仏飯器3、蓋2、水滴1、人形1	186	1270
2層相当																		1		1													2
2a層		4		1	1	11		11	1			13		1	2		1	6		86	35		1	1		3	2	5		1		灯火具1、蓋1	24	212
2a層落込み		1				2						2						2		11	5				1			2				水滴1	6	33
不明						2		2				3								8	5												6	26
1層攪乱	1	16	6	7	4、筒2	65	5	48	6	2	1	91			5	3	11	28	植木鉢1、角鉢1	354	187	17	4	5、仏花瓶1	2	19	9	48	1、香炉1	11		合子1、仏飯器1、蓋9、把手1、人形1、灯火具1	108	1084
沢状遺構埋土1層					3							1		1														1					1	7
5号建物																				1													1
13号建物					1																												1
1号柱列														1																			1
1号遺構下部埋土					2						2	4		1				2	片口1	1								1					14
1号遺構上部埋土			1		2							1		2																			6
2号遺構																				1													1
4号遺構												1																					1
5号遺構																						2											2
7号遺構														4				2		1					1			1			水滴1	1	11
9号遺構							1							1																			2
14号遺構埋土												1																					1
14号遺構埋土上層						1						3			変形?1			1	角鉢1	1													8
14号遺構A層		1				1		2				4						3		13	2					1						水滴1	7	35
19号遺構		1																		1						1							3
21号遺構						1						1		2	1				角鉢1													1	7
24号遺構		1	1		3							3		1	2		1			7	4				2	5		1	1			水指1	5	38
Ⅰ期のピット						2		5				1								3	3						1	1				2	18
Ⅰ期の遺構小計		3	2		8	5	1	7			2	19		12	4		1	8	3	29	9	2			2	8	1	4	1			3	16	150
Ⅰ期以降のピット														1				1		2													4
6号建物					1	1																											2
10号建物																												1					1
1号井戸						1		1				1					1			1													5
3号井戸												1																					1
10号遺構																				1						1							2
Ⅱa期の遺構小計					1	2		1				2					1			2						1		1					11

表21　武家屋敷地区第11地点出土陶器集計表（2）
Tab.21　Distribution of glazed ceramics at BK11 (2)

出土場所	大碗	中碗					小碗	碗不明			皿					大鉢	小中鉢	擂鉢	鉢その他	碗鉢皿不明	土瓶		壺　甕　類				火入灰吹	袋物		土鍋	鍋蓋	その他	不明	合計
		丸形	端反	腰折	その他	不明		不明	端反	腰折	大	小中	極小	向付	不明						身	蓋	壺	瓶	甕	不明		不明	その他					
Ⅱb期以前のピット																										1							1
23号建物																		1								1							2
24号建物																				1													1
25号建物																				2												1	3
26号建物																				1				小甕1								1	3
27号建物												1																					1
28号建物		1																		2						1						1	5
29号建物															1																		1
30号建物												1								1	1												3
32号建物																		1															1
6号溝		1										1								2	1											2	7
7号溝																				1												2	3
15号溝		1				1	1					1						1		7	1			1				1				1	16
6号井戸		1				2		1				5						1		5							1					3	19
6号遺構																				1	1										花生?1		3
11号遺構												1					1			1			1					1					5
15号遺構埋土		3				2	1	2				7					1	2		8	3							1		1	水指?1	2	34
15号遺構A層								3				2						1		11						1		1		1		1	21
20号遺構埋土						1												2			1					1					水滴1	4	10
20号遺構埋土1層		1			1、筒1	5		1				2			1	1				30	1					1	2					3	50
20号遺構埋土下層		1						1				1						3		5			1			2	1	3				1	19
20号遺構埋土上層		7						4				4								18	1						1	4			灯火具1	4	44
25号遺構		11				11		3				8		1	5	3		8		19	2	1	1	1		1		2				5	82
25号遺構A層相当								1				1			1					3	11	1			1、豆甕1	1				2		2	25
28号遺構				1																1	1											2	5
28号遺構A層相当												1						1			1				小甕1			1	1				6
29号遺構								1				2			1	1	1	2		2	1								花器?1				12
30号遺構								1				1																					2
Ⅱb期のピット								1				1								1												1	4
Ⅱb期の遺構小計		27		1	2	22	2	19				40		1	9	5	3	23		122	26	2	3	2	4	8	4	16	1	5		4	36	387
Ⅱb期以降のピット								1										1		1													3
Ⅰ～Ⅱb期のピット								1				2			1	1				2													7
33号建物																					1												1
34号建物								1												1	1												3
9号溝		2				1		1										1		5										1		3	14
8号井戸															1																		1
12号遺構												1								2	2										蓋1		6
13号遺構		1					1	3								1		1		3					1							1	12
23号遺構		4				1		1				4				1		1		17					1						髪水入2	2	34
27号遺構		1			1	2		2				5			1		1	3		12								2	1				31
Ⅱc期の遺構小計		8			1	4	1	8				10			2	2	1	6		40	4				2			2	1	1		3	6	102

表22　武家屋敷地区第11地点出土陶器集計表（3）
Tab.22　Distribution of glazed ceramics at BK11 (3)

出土場所	大碗	中碗					小碗	碗不明			皿					大鉢	小中鉢	擂鉢	鉢その他	碗鉢皿不明	土瓶		壺　甕　類				火灰吹入	袋物		土鍋	鍋蓋	その他	不明	合計
		丸形	端反	腰折	その他	不明		不明	端反	腰折	大	小中	極小	向付	不明						身	蓋	壺	瓶	甕	不明		不明	その他					
44号建物								1																									1
５号溝						1														5	1											1	8
10号溝								1				1								7	2		1					3				3	18
11号溝								1										1		3													5
12号溝												1																1				1	3
13号溝		1			1	6	1	4				5					2	2	片口1	15	10	2				1		2		2		灯火具1、蓋1、人形1	4	62
５号井戸		3			1	2		2				4					2			10	5	1											6	36
17号遺構		2	1			7	1	5	1			10				2	4	6		31	44	1	2	1	1	2		10	1	7	1	水滴1	11	152
18号遺構							1				1					1		1			1					1						人形1、水指1		8
26号遺構埋土						1						1								25	3												7	37
26号遺構埋土下層			1			1												1		12	4	2		徳利1		1		1				水滴1	2	27
26号遺構埋土上層						7	1	2	1			8		2		1		3		18	16	2	1	2、 徳利1	2	1	1	3				焙烙8	8	88
26号遺構礫群中												1									1													2
26号遺構Ａ層相当		2			1	4		5				10		1	1	2				34	19	1				3	2	4	2			仏飯器1、水滴1、 灯明皿1	9	103
Ⅱd期の遺構小計		8	2		3	29	4	21	2		1	41		3	1	6	8	14	1	160	106	9	4	5	3	9	3	24	3	9	1	18	52	550
48号建物																																蓋1		1
47号建物																				1														1
49号建物						2						1								3													1	7
２号溝		5	2			13	1	9				14		1		1	2	1		46	29	3	2	2	2	2	1	3				花生？1、餌猪口1、 把手1	4	146
３号溝		1				1												1		6	4											ミニチュア1	2	16
４号溝																				1														1
８号溝																														1				1
14号溝		1						2												7	2						1						2	15
Ⅱe期の遺構小計		7	2			16	1	11				15		1		1	2	2		64	35	3	2	2	2	2	2	3		1	0	5	9	188
12・14号溝			1					1				3				1		4		7	5	1					1						1	25
Ⅱd・Ⅱe期のピット						1														1						1								3
Ⅱd・Ⅱe期の遺構小計			1			1		1				3				1		4		8	5	1				1	1						1	28
50号建物															1																			1
52号建物																				1														1
７号井戸		8	1			15	1	11			1	6					1	3		43	28	1			小甕1			7	2				18	147
Ⅲ期のピット																				1														1
Ⅲ期の遺構小計		8	1			15	1	11			1	6			1		1	3		45	28	1			1			7	2				18	150
Ⅰ～Ⅲ期のピット		1						1				1								5	1							1						10
1号暗渠裏込土						1												2		3	5	3												14
1号暗渠流込土			2			2		1										1			1													7
1号暗渠蓋上埋戻土		6		1	筒1	12		6				9				2	1	6		45	22	6	1			4		6		2		蓋1、灯火具1	18	150
1号暗渠埋土								1												7													6	14
1号暗渠の小計		6	2	1	1	15		8				9				2	1	9		55	28	9	1			4		6		2		2	24	185
合計	2	117	20	19	37	292	17	243	17	9	5	410	2	22	40	25	36	167	8	1673	790	63	24	24	20	99	25	191	11	41	1	75	586	5111

表23　武家屋敷地区第11地点出土土師質土器・瓦質土器集計表（1）
Tab.23　Distribution of unglazed ceramics at BK11 (1)

出土場所	土師質土器						瓦質土器										合計
	皿	焼塩壺	鉢	焙烙	その他	不明	火鉢	蓋	蚊遣り	五徳	擂鉢	甕	鉢類	十能	その他	不明	
B層						4											4
B層相当	13	1				7										1	22
A層	124	9	3		さな1	187	1		3	3		4	2			31	368
A層瓦集中部	1					3											4
A層礫集中部	1								1								2
2層	153	12	1	1		423	1	1	3				4	1		34	634
2層相当						2										1	3
2a層	16					39	1		1	1			1			9	68
2a層落込み	3		1			6			2							2	14
不明	1					1											2
1層・攪乱	93	4、蓋?1	2	2		120	1、火鉢?1	3	5				3			20	255
沢状遺構埋土	5					8										1	14
Ⅰ期以前のピット	1					3											4
2号建物						1											1
5号建物	1	1				10											12
1号柱列	1																1
4号井戸	3																3
1号遺構上部埋土	12					7					3						22
1号遺構下部埋土	5					1	1				4		1			1	13
1号遺構埋土	2					2					1					2	7
2号遺構	2					1											3
4号遺構	1																1
7号遺構上部埋土						1											1
7号遺構埋土	12					3					3						18
9号遺構	1																1
14号遺構埋土上層	2	1				4											7
14号遺構A層	2					15										1	18
19号遺構	6					1											7
21号遺構	5					3							1			1	10
24号遺構	37	1				3					2		1			6	50
地鎮遺構	3																3
Ⅰ期のピット						3											3
Ⅰ期の遺構小計	95	3				55	1				13		3			11	181
Ⅰ期以降のピット	4					3											7
Ⅱa期以前のピット	3					1											4
6号建物	2					3											5
9号建物	1																1
11号建物											1					2	3
1号井戸	5					4											9
3号井戸	1																1
10号遺構	5					5											10
31号遺構	6					1											7
Ⅱa期の遺構小計	20					13					1					2	36
20号建物						1											1
25号建物	1															2	3
26号建物	2					4											6
28号建物						1											1
29号建物	1																1
30号建物						1											1
32号建物	1																1
6号溝		1				3											4
15号溝	2	1				6							1			3	13
6号井戸	11	2			さな1	8	1									1	24
11号遺構	5					2											7
15号遺構埋土	4	1				40											45
15号遺構A層	2					16										1	19
20号遺構埋土						2											2
20号遺構埋土1層	5		1			16	1		1							1	25
20号遺構埋土上層	3					4						2				1	10
20号遺構埋土下層	7	1				5		1								1	15

表24　武家屋敷地区第11地点出土土師質土器・瓦質土器集計表（２）
Tab.24　Distribution of unglazed ceramics at BK11 (2)

出土場所	土師質土器						瓦質土器										合計
	皿	焼塩壺	鉢	焙烙	その他	不明	火鉢	蓋	蚊遣り	五徳	擂鉢	甕	鉢類	十能	その他	不明	
25号遺構埋土	44	1	1			28	1								炭櫃1	3	79
25号遺構Ａ層相当	2		1			3	1										7
28号遺構埋土							1										1
28号遺構Ａ層相当									1								1
29号遺構	6	2				7										3	18
30号遺構	1																1
Ⅱb期のピット	2					2											4
Ⅱb期の遺構小計	99	9	3		1	149	5	1	2			2	1		1	16	289
Ⅱb期以降のピット	4					1											5
Ⅰ～Ⅱb期のピット	1					2											3
Ⅱb～Ⅱd期のピット						1											1
Ⅱc期以前のピット	2					1											3
34号建物	1																1
35号建物						1											1
40号建物						1											1
９号溝	4	1				7											12
12号遺構	4			2		7											13
13号遺構	2					10											12
23号遺構	3	2			灯明皿2	29										1	37
27号遺構	21					17											38
Ⅱc期の遺構小計	35	3		2	2	72										1	115
43号建物						2											2
５号溝						2											2
10号溝	4					3											7
11号溝	1					1											2
13号溝	5	1			灯明皿1	15			1				1			8	32
５号井戸	5					4	1									2	12
17号遺構	21		2			7			3				2		さな２		37
18号遺構	1					1											2
26号遺構埋土	2					15										1	18
26号遺構埋土上層	6					24							1	1		4	36
26号遺構埋土下層	5					5			1				1				12
26号遺構Ａ層相当	16	1	1			20										5	43
Ⅱd期の遺構小計	66	2	3		1	99	1		5				5	1	2	20	205
Ⅰ～Ⅱd期のピット						1											1
49号建物	2					1											3
２号溝	18					24				1			1			6	50
３号溝	2					3			2							5	12
８号溝						2											2
14号溝	2					1											3
Ⅱe期の遺構小計	24					31			2	1			1			11	70
12・14号溝	10					6	1	火消壺1	2							2	22
Ⅱd・Ⅱe期の遺構小計	10					6	1	1	2							2	22
Ⅱe期以降のピット						1											1
50号建物						1											1
52号建物						1											1
55号建物						1											1
７号井戸	12				灯明台の一部1	24									焜炉1、蓋1、さな１	3	43
Ⅲ期のピット	1																1
Ⅲ期の遺構小計	13				1	27									3	3	47
Ⅰ～Ⅲ期のピット	13		1			8										2	24
１号暗渠埋土	1					4											5
１号暗渠蓋上埋戻土	18		1			8			1							5	33
１号暗渠流込土	1																1
１号暗渠裏込土	2														焜炉1		3
１号暗渠の小計	22		1			12			1						1	5	42
合計	822	44	15	5	6	1286	13	6	27	5	14	6	20	2	7	172	2450

表25　武家屋敷地区第11地点出土土製品・軟質施釉陶器集計表
Tab.25　Distribution of unglazed ceramics at BK11

出土場所	土製品					軟質施釉陶器			合計
	土師質				軟質施釉	焙烙	その他	不明	
	玩具	人形	その他	不明					
B 層相当				1					1
A 層		3、犬1	鈴1	10	不明1、玩具（不明）1、玩具（擂鉢）1	39			57
A 層 礫集中部		猪1				1			2
2 層	瓶1、碗1、皿1、徳利1、硯1、不明1	6、猪1、花魁1	鈴 ?1、鈴1	9	玩具（不明）2、不明1	84		2	114
2a 層		1人形 ?1		3	玩具（不明）1	6			12
1 層攪乱	硯 ?1、土瓶 ?1	8		9	玩具（不明）1	33	仏飯器2		55
沢状遺構埋土1層		1							1
14号遺構 A 層						3			3
19号遺構 A 層		猪1							1
24号遺構						2			2
Ⅰ期のピット				1		1			2
Ⅰ期の遺構小計		1		1		6			8
1 号井戸	瓶 ?1								1
Ⅱa 期の遺構小計	1								1
27号建物		1							1
7 号溝						1			1
6 号遺構	不明1			1					2
15号遺構埋土						1			1
20号遺構埋土1層	不明1			2		1			4
20号遺構埋土上層				1					1
25号遺構埋土		1		4					5
25号遺構 A 層相当				2		2			4
28号遺構埋土	不明1			1		2			4
29号遺構					玩具（不明）1				1
Ⅱb 期の遺構小計	3	2		11	1	7			24
Ⅱb 期以降のピット		1							1
43号建物			鈴 ?1						1
13号遺構	瓶1								1
27号遺構	鉢 ?1								1
Ⅱc 期の遺構小計	2		1						3
12号溝						1			1
13号溝		2				4			6
5 号井戸		1				2			3
17号遺構			碁石1	1	玩具（不明）1	9			12
26号遺構埋土						1			1
26号遺構埋土上層	碁石1	1		2		8		1	13
26号遺構埋土下層	鉢 ?1								1
26号遺構礫群中		馬1							1
26号遺構 A 層相当	蓋1、瓶1	4		3		13	仏飯器1		23
Ⅱd 期の遺構小計	4	9	1	6	1	38	1	1	61
Ⅰ～Ⅱd 期のピット						1			1
2 号溝		1				17			18
3 号溝		1		2		2			5
8 号溝				1					1
Ⅱe 期の遺構小計		2		3		19			24
7 号井戸						9		1	10
Ⅲ期のピット		カニ1							1
Ⅲ期の遺構小計		1				9		1	11
1 号暗渠		1				1			2
1 号暗渠裏込						1			1
1 号暗渠流込土						1			1
1 号暗渠蓋上埋戻土	不明1			1	玩具（不明）1	11			14
1 号暗渠の小計	1	1		1	1	14			18
合計	19	41	5	54	11	257	3	4	394

表26　武家屋敷地区第11地点出土瓦集計表（1）
Tab.26　Distribution of roof tiles at BK11 (1)

（　）内は重量g

帰属	平瓦1類	平瓦2類	平瓦	丸瓦	丸瓦類	桟瓦	桟瓦類	板塀瓦	熨斗瓦	棟瓦	軒平瓦	軒平瓦類	軒丸瓦	軒桟瓦	谷丸瓦	面戸瓦	その他	不明	合計
B層	18(1885)	3(257)			8(796)				1(45)									18(178)	48(3161)
A層	673(70738)	11(800)	1(2400)		222(17470)							12(1895)	4(695)			1(150)	古代瓦1(216)	590(8402)	1515(102766)
2層	285(28243)	7(304)			120(7741)			3(359)	2(226)	1(330)		2(277)	2(411)				施釉瓦1(66)、特殊1(440)	275(3673)	699(42070)
2層相当					1(50)													6(20)	7(70)
2a層	26(2846)				15(1393)	1(150)							1(35)					18(330)	61(4754)
2a層相当	82(8945)	4(390)			30(1935)				1(90)			3(255)						76(930)	196(12545)
2a層相当落込み	2(385)																	4(56)	6(441)
瓦溜まり					1(185)	1(1220)												1(15)	3(1420)
G17・18　瓦集中部	13(2999)				1(625)													1(15)	15(3639)
不明																		18(37)	18(37)
1層・攪乱	8(583)	1(66)					2(422)					2(130)	2(255)	5(600)				5(73)	25(2129)
沢状遺構上部埋土	1(48)																		1(48)
沢状遺構埋土1層	35(3249)				11(1022)													25(236)	71(4507)
沢状遺構埋土6層					1(215)														1(215)
沢状遺構の小計	36(3297)				12(1237)													25(236)	73(4770)
I期以前のピット	1(98)				1(86)								1(139)					1(79)	4(402)
1号建物	1(270)																	2(10)	3(280)
2号建物	2(502)																		2(502)
3号建物	2(371)				1(81)													1(12)	4(464)
5号建物	21(4745)			1(40)	2(481)				1(40)									10(144)	35(5450)
4号井戸	31(4792)		1(1055)		10(1359)				1(145)			1(800)	2(425)					28(233)	74(8809)
2号井戸	13(850)				9(560)													4(165)	26(1575)
1号遺構上部埋土	92(7523)				26(2548)											2(183)		45(469)	165(10723)
1号遺構下部埋土	96(10979)				21(3227)				1(41)								特殊1(228)、2(272)	11(324)	132(15071)
1号遺構埋土	2(120)				1(10)													3(36)	6(166)
2号遺構	6(708)	1(122)		1(605)	1(204)														9(1639)
4号遺構	12(1757)				4(401)								1(72)					4(81)	21(2311)
5号遺構	2(140)																	2(11)	4(151)
7号遺構上部埋土	1(44)																	2(35)	3(79)
7号遺構17層	16(1090)				3(576)								1(103)					4(36)	24(1805)
7号遺構埋土	33(3309)			1(385)	9(1237)													9(136)	52(5067)
8号遺構	8(889)	1(107)			1(112)													2(52)	12(1160)
14号遺構A層	9(1061)				1(19)													3(6)	13(1086)
14号遺構埋土	6(710)																	1(1)	7(711)
14号遺構埋土上層	11(848)				2(53)													2(16)	15(917)
21号遺構	291(46446)	2(214)		1(918)	82(8341)				2(560)		1(135)	1(165)	6(422)			1(250)		154(2457)	541(59908)
24号遺構	619(91816)	2(241)	1(1800)	11(3667)	397(40799)		1(107)	1(246)	8(2611)		1(595)	5(2352)	4(630)		1(977)	10(2253)	特殊瓦1(44)、偶切瓦2(1180)、平瓦1類特殊1(183)	351(4729)	1416(154230)
I期のピット	6(1013)				2(354)													3(50)	11(1417)
I期の遺構小計	1280(179983)	6(684)	2(2855)	15(5615)	572(60362)		1(107)	1(246)	13(3397)		2(730)	7(3317)	14(1652)		1(977)	13(2686)	7(1907)	641(9003)	2573(273521)
石18	2(400)				1(689)														3(1089)
I期以降のピット	83(12831)		1(1380)	1(284)	37(5228)				3(1347)									13(141)	138(21211)
I期以降の遺構小計	85(13231)		1(1380)	1(284)	38(5917)				3(1347)									13(141)	141(22300)
IIa期以前のピット	7(477)																		7(477)
6号建物	1(186)																	1(12)	2(198)
7号建物	1(118)				1(49)														2(167)
8号建物	1(25)																		1(25)
10号建物	6(1348)																		6(1348)
11号建物	1(210)																		1(210)

表27　武家屋敷地区第11地点出土瓦集計表（2）
Tab.27　Distribution of roof tiles at BK11 (2)

（　）内は重量g

帰属	平瓦1類	平瓦2類	平瓦	丸瓦	丸瓦類	桟瓦	桟瓦類	板塀瓦	熨斗瓦	棟瓦	軒平瓦	軒平瓦類	軒丸瓦	軒桟瓦	谷丸瓦	面戸瓦	その他	不明	合計
14号建物	4(280)				1(185)														5(465)
15号建物	3(1413)																		3(1413)
16号建物	1(80)																		1(80)
1号井戸	38(8663)		1(145)	1(1550)	13(759)													21(310)	74(11427)
3号井戸	36(7241)				4(144)				1(333)									14(328)	55(8046)
31号遺構	8(505)				2(80)													3(75)	13(660)
10号遺構	12(1048)	1(170)			4(1198)													6(47)	23(2463)
Ⅱa期のピット	5(628)				1(32)													2(34)	8(694)
Ⅱa期の遺構小計	117(21745)	1(170)	1(145)	1(1550)	26(2447)				1(333)									47(806)	194(27196)
Ⅱa期以降のピット	2(275)				4(548)													1(22)	7(845)
Ⅱb期以前のピット	2(63)				3(122)													3(38)	8(223)
18号建物																		1(8)	1(8)
24号建物	2(210)																	1(10)	3(220)
26号建物	8(1184)				1(105)													3(29)	12(1318)
28号建物	8(1980)				1(57)													2(22)	11(2059)
30号建物					2(82)														2(82)
32号建物	8(278)				1(61)													5(42)	14(381)
3号柱列					1(10)													1(48)	2(58)
6号溝																		3(55)	3(55)
15号溝	5(775)																	4(59)	9(834)
6号井戸	50(7845)		1(1880)		18(3025)				1(160)									26(503)	96(13413)
6号遺構	2(150)				1(21)													10(54)	13(225)
11号遺構	1(80)	1(150)	1(3140)		1(35)													1(4)	5(3409)
15号遺構埋土	19(1379)				4(97)													7(95)	30(1571)
15号遺構A層	4(666)				3(62)													2(10)	9(738)
20号遺構埋土1	20(1007)				5(155)													12(77)	37(1239)
20号遺構埋土下層	26(2133)				8(518)													5(23)	39(2674)
20号遺構埋土上層	11(658)				3(303)											1(129)		5(23)	20(1113)
25号遺構埋土	37(5412)				6(583)								1(60)					6(93)	50(6148)
25号遺構埋土下層	380(49586)		3(5379)	2(1638)	1261(12010)				2(249)		1(98)		8(914)		1(555)	1(174)		139(1926)	1798(72529)
25号遺構埋土上層	183(34888)		4(7861)	6(8768)	52(9807)						2(1235)	2(2336)	2(419)					56(885)	307(66199)
25号遺構A層相当	5(790)				6(608)													6(65)	17(1463)
28号遺構埋土上層	3(655)				1(130)													1(15)	5(800)
28号遺構埋土	5(575)																		5(575)
28号遺構埋土下層	1(150)																	1(5)	2(155)
28号遺構	78(5525)				22(1725)								1(70)					36(471)	137(7791)
28号遺構A層相当	6(590)				1(25)														7(615)
30号遺構	27(4410)				4(540)		4(800)						1(210)						36(5960)
Ⅱb期のピット	4(614)			1(8)	1(20)								1(145)					3(96)	10(883)
Ⅱb期の遺構小計	893(121540)	1(150)	9(18260)	9(10414)	1403(29979)		4(800)		3(409)		3(1333)	23(2336)	14(1818)			2(303)		336(4618)	2680(192515)
Ⅰ～Ⅱb期のピット	2(300)																	1(22)	3(322)
Ⅱb期以降のピット	1(44)				1(40)														2(84)
Ⅱc期以前のピット	13(2253)				2(200)						1(621)	1(80)						3(30)	20(3184)
33号建物	3(375)				1(87)													2(21)	6(483)
34号建物	3(738)				4(479)													10(58)	17(1275)
35号建物	3(840)				1(56)													2(9)	6(905)
36号建物	3(612)																		3(612)
38号建物	1(38)																	1(35)	2(73)
40号建物																		1(56)	1(56)
8号溝	4(170)				2(295)													5(80)	11(545)
8号井戸	1(185)																		1(185)
12号遺構	5(905)	4(46)			1(65)													2(39)	12(1055)

表28　武家屋敷地区第11地点出土瓦集計表（3）
Tab.28　Distribution of roof tiles at BK11 (3)

（　）内は重量g

帰属	平瓦1類	平瓦2類	平瓦	丸瓦	丸瓦類	桟瓦	桟瓦類	板塀瓦	熨斗瓦	棟瓦	軒平瓦	軒平瓦類	軒丸瓦	軒桟瓦	谷丸瓦	面戸瓦	その他	不明	合計
13号遺構	7(705)				6(627)													8(123)	21(1455)
23号遺構	11(1370)				2(405)													11(182)	24(1957)
27号遺構	56(5305)			1(380)	18(1645)							1(135)						21(280)	97(7745)
Ⅱc期のピット																		1(21)	1(21)
Ⅱc期の遺構小計	97(11243)	4(46)		1(380)	35(3659)							1(135)						64(904)	202(16367)
Ⅱd期以前のピット					2(491)														2(491)
41号建物	1(62)																	2(37)	3(99)
42号建物	1(206)				1(13)													1(4)	3(223)
43号建物																		1(39)	1(39)
5号溝	3(215)				4(145)													11(225)	18(585)
10号溝	7(500)				4(475)													2(70)	13(1045)
11号溝	6(730)				6(395)													1(10)	13(1135)
12号溝	1(125)				1(380)													1(10)	3(515)
13号溝	41(4910)				16(1435)				1(445)	1(195)		1(915)					施釉1(95)、特殊1(430)	42(763)	104(9188)
5号井戸	14(3006)				4(740)					1(100)								7(197)	26(4043)
17号遺構	27(4497)				2(118)			2(254)										4(19)	35(4888)
18号遺構	16(1282)				4(340)													2(21)	22(1643)
18号遺構埋土1	7(552)				4(120)														11(672)
18号遺構埋土2	1(67)				1(21)														2(88)
18号遺構埋土3	4(469)																		4(469)
26号遺構埋土																		1(19)	1(19)
26号遺構埋土下層	12(1142)				1(70)													8(144)	21(1356)
26号遺構埋土上層	1(22)				5(275)													13(67)	19(364)
26号遺構礫群中	9(1222)				2(175)														11(1397)
26号遺構A層相当	33(3170)				16(1771)							1(25)						15(122)	65(5088)
Ⅱd期の遺構小計	184(22177)				71(6473)			2(254)	1(445)	2(295)		2(940)					2(525)	111(1747)	375(32856)
Ⅰ～Ⅱd期のピット	1(35)				1(31)														2(66)
46号建物	1(559)																		1(559)
47号建物	2(330)				1(14)													4(40)	7(384)
48号建物	6(562)				4(403)													3(39)	13(1004)
2号溝	36(5020)				15(1892)	1(105)		1(215)		1(60)			1(40)					30(922)	85(8254)
3号溝	8(882)				3(105)													8(128)	19(1115)
4号溝	1(141)																		1(141)
8号溝	1(35)																	7(148)	8(183)
14号溝	8(600)			3(245)														8(350)	19(1195)
Ⅱe期の遺構小計	63(8129)			3(245)	23(2414)	1(105)		1(215)		1(60)			1(40)					60(1627)	153(12835)
Ⅰ～Ⅱe期のピット	1(318)																	2(15)	3(333)
Ⅱe期以降のピット	3(676)				2(684)													2(11)	7(1371)
12・14号溝	15(2085)				5(690)													11(217)	31(2992)
Ⅱd･Ⅱe期の遺構小計	15(2085)				5(690)													11(217)	31(2992)
Ⅱa～Ⅱe期のピット	1(409)				1(30)													1(30)	3(469)
50号建物	5(516)				1(710)														6(1226)
53号建物	1(39)																	1(21)	2(60)
58号建物	1(303)																		1(303)
7号井戸	51(7485)				10(1440)	1(310)						1(20)	2(435)					33(542)	98(10232)
Ⅲ期のピット	2(156)				1(139)														3(295)
Ⅲ期の遺構小計	60(8499)				12(2289)	1(310)						1(20)	2(435)					34(563)	110(12116)
Ⅰ～Ⅲ期のピット	39(2343)				15(1308)								1(279)					14(201)	69(4131)
1号暗渠蓋上埋戻土	4(363)	2(864)			1(123)	1(573)				2(720)		2(664)		3(506)				1(2)	16(3815)
合計	4014(516207)	40(3731)	14(25040)	30(18488)	2628(149325)	5(2358)	7(1329)	7(1074)	25(6292)	6(1405)	6(2684)	35(10049)	42(5759)	8(1106)	2(1532)	16(3139)	12(3154)	2383(34041)	9280(786713)

表29　武家屋敷地区第11地点出土木製品集計表
Tab.29　Distribution of various wooden implement at BK11

出土場所	漆塗製品		木製品		竹製品	加工木				木羽 (g)	樹皮 (g)	合計
	椀	その他	下駄	その他の木製品		板材	角材	丸材	小片			
B層相当		漆膜1										1
A層		漆膜3										3
2a層									1			1
不明							1					1
1層・攪乱			1	不明1			1					3
沢状遺構埋土1層		漆膜1										1
沢状遺構埋土4層				不明1					1			2
沢状遺構埋土6層									1			1
沢状遺構下部埋土				不明1								1
沢状遺構の小計		1		2					2			5
1号遺構上部埋土		漆膜1		栓?1、箸?1、木簡1、籠?1			3	1	13	(3.5)		22
1号遺構下部埋土	不明6、身6、蓋1	不明5、皿1、漆膜1	5	円板状6、不明35、曲物1、蓋の取手1、蓋1、部材6、部材?1、箸2、箸?3、栓?1、人形1、物差1、串状?1、下駄?1、櫛1、板状1、棒状1、桶天底板2、樹皮紐1	1		36	9	428	(128.1)	2(0.8)	566
1号遺構落込埋土上面									2			2
1号遺構埋土	不明1											1
7号遺構埋土	身2	漆膜1	1	木樋1、不明6、灯明台1、箸1、箸?1、板状1、部材3、桶側板1、鞘1、円板状1、桶1、しがらみ?2		2	19	2	74	(20.6)	4(1.0)	121
19号遺構埋土		漆膜1		部材1、コマ状1、栓?1					12			16
24号遺構		漆膜2										2
Ⅰ期の遺構小計	16	12	6	94	1	2	58	12	529			730
1号井戸		漆膜2		板状1								3
10号遺構		不明1、漆膜1										2
Ⅱa期の遺構小計		4		1								5
6号井戸	不明1											1
11号遺構		漆膜2										2
15号遺構埋土		漆膜1										1
20号遺構埋土1層		漆膜1										1
25号遺構埋土下層		不明1										1
26号建物									1			1
Ⅱb期の遺構小計	1	5							1			7
23号遺構	身1	漆膜1										2
Ⅱc期の遺構小計	1	1										2
26号遺構埋土		漆膜1										1
17号遺構		不明1、漆膜1		部材3、円板状2、不明2			39		50	(5.0)	3(7.7)	98
Ⅱd期の遺構小計		3		7			39		50			99
2号溝		漆膜1										1
Ⅱe期の遺構小計		1										1
Ⅱe期以降のピット							1					1
Ⅰ～Ⅲ期のピット							1					1
1号暗渠裏込土							3		2			5
1号暗渠埋土									2			2
1号暗渠の小計							3		4			7
合計	18	31	7	105	1	2	104	12	587	(157.2)	9(9.5)	867

表30　武家屋敷地区第11地点出土金属製品・石器・石製品・その他の遺物集計表（1）
Tab.30　Distribution of various implements made of metal, ston tools and stone implements and the other implements at BK11 (1)

出土場所	古銭					煙管		その他の銅製品		鉄製品				他の金属製品	石器・石製品	その他の遺物	合計
	渡来銭	寛永通宝		その他	不明	雁首	吸口			釘		その他	不明				
		古	新					その他	不明	和	洋						
B層相当	渡来銭1							針金状1			4		1		使用痕剥片1、不明1、碁石1		10
A層		4					1	金具1、筒状製品1、柄付道具1	1	41		鉄銭1、把手1	15		使用痕剥片1、硯?1、火打石3、硯2、砥石1		75
2層		2	1			7	2	容器?1、釣針1、リング状金具1、銅釘1、小柄の柄1	5	42	3	洋折釘1、金具1、鏃1、小刀1	13		二次加工剥片2、碁石1、火打石1、硯再加工品?1、不明5、不明粘板岩3	ガラス製品1	98
2層相当															硯1		1
2a層								把手?1	2			金具1	3		硯1、不明1	ガラス製品1	10
2a層落ち込み															砥石1		1
B19　落ち込み								筒状製品1									1
G・H17・18　瓦集中部										2							2
1層・攪乱	永楽通寶1	1	1	2		3	3	ボタン2、家具把手1、小型容器1、薬莢3、針金状1、バックル1、割ピン状金具1、商標1、蝶番金具1	5	6	1	洋折れ釘2、角折れ釘2、円環付金具1、鏃1、金具1、容器蓋?1、環状金具1	9	不明1	使用痕剥片1、碁石1、硯3、不明1	ガラス製品5、歯ブラシ4	69

表31　武家屋敷地区第11地点出土金属製品・石器・石製品・その他の遺物集計表（２）
Tab.31　Distribution of various implements made of metal, stone tools and stone implements and the other implements at BK11 (2)

出土場所	古銭					煙管		その他の銅製品		鉄製品				他の金属製品	石器・石製品	その他の遺物	合計
	渡来銭	寛永通宝		その他	不明	雁首	吸口	その他	不明	釘		その他	不明				
		古	新							和	洋						
沢状遺構埋土１層	皇宋通寶1 天聖通寶1												1		石鏃1	植物（皮）1、 ガラス製品1	6
沢状遺構埋土６層												小刀1					1
沢状遺構の小計	2											1	1		1	2	7
Ⅰ期以前のピット										2							2
３号建物	開元通寶1																1
１号遺構上部埋土	永楽通寶1									1						ガラス製品1、編物1	4
１号遺構下部埋土	永楽通寶1							小柄の柄1		4		鑓1、小刀1			硯再加工?1		9
７号遺構埋土									1							俵2	3
14号遺構埋土上層						1											1
14号遺構Ａ層													2				2
24号遺構										1				戸車状1	砥石1		3
Ⅰ期以降のピット										1							1
Ⅰ期の遺構小計	3					1		1	1	7		2	2	1	2	4	24
Ⅱａ期以前のピット		1															1
10号建物										1							1
１号井戸	渡来銭2									3			1				6
３号井戸									1								1
10号遺構	渡来銭1								1	7			3				12
Ⅱａ期の遺構小計	3								2	11			4				20
Ⅰ～Ⅱａ期のピット															硯1		1
21号建物													1				1
25号建物										2							2
29号建物										1							1
32号建物			1						1	4							6
６号溝															火打石1、 碁石2		3
15号溝					1		1			3							5
６号井戸										3		楔1	5				9
11号遺構					1												1
15号遺構埋土										1			5		硯1		7
15号遺構Ａ層										2							2
20号遺構埋土１層										5							5
20号遺構埋土上層								筒状製品1	1								2
20号遺構埋土下層															硯1		1
20号遺構埋土Ａ層相当									1								1
25号遺構	渡来銭1							匙1		1				金箔状1	碁石1	須恵器1	6
25号遺構Ａ層相当								針金状1							砥石1、碁石1		3
30号遺構										1							1
Ⅱｂ期の遺構小計	1		1		2		1	3	3	23		1	11	1	8	1	56
Ⅱｃ期以前のピット										1							1
34号建物													1				1
36号建物									1	1							2
23号遺構													1				1
27号遺構																ガラス製品1	1
Ⅱｃ期の遺構小計									1	1			2			1	5
10号溝												鉄銭?1					1
13号溝							1					角折れ釘1	2		硯1		5
17号遺構												鉄鍋1					1
26号遺構埋土上層								留金具1	1						剥片1、砥石1 火打石1		5
26号遺構Ａ層相当	渡来銭1					1							3				5
Ⅱｄ期の遺構小計	1					1	1	1	1			3	5		4		17
Ⅰ～Ⅱｄ期のピット										1							1
49号建物															硯1		1
２号溝								鋲1		7			5	不明1			14
３号溝			文1							6			4				11
14号溝													1				1
Ⅱｅ期の遺構小計			1					1		13			10	1	1		27
12・14号溝埋土						1			1								2
Ⅱｄ・Ⅱｅ期の遺構小計						1			1								2
Ⅱｅ期以降のピット										2					尖頭器1		3
52号建物										2							2
７号井戸		1															1
Ⅲ期の遺構小計		1								2							3
Ⅰ～Ⅲ期のピット								小柄の柄1	1	3			1				6
1号暗渠埋土											2						2
1号暗渠蓋上埋戻土			1、 文1					薬莢1、ﾎﾞﾀﾝ1 筒状製品1		1		洋風建具1		銃弾1			8
1号暗渠の小計			2					3		1	2	1		1			10
合計	12	9	6	2	2	13	8	33	23	158	10	24	77	5	52	19	453

表32　武家屋敷地区第11地点出土磁器観察表（１）
Tab.32　Notes on porcelains at BK11 (1)

登録番号	出土場所	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	文様	胎土	生産地	製作年代	備考	図	図版
CJ001	沢状遺構埋土１層	小中皿	14.7	5.4	3.7	口紅　雲文	普通	肥前	17c 中葉	畳付砂付着	72	57
CJ002	１号遺構上部埋土	中型端反碗	13.8	4.8	6.3	花弁文　内面・見込み文様あり	普通	中国	17c 前半？	貫入　漳州窯系？	72	57
CJ003	19号遺構埋土３層	小中皿	27.0	13.5	4.3	青花　青海波窓絵七宝文　見込み鳳凰文	やや粗	中国	明末清初 17c 前半	漳州窯系　高台砂付着	72	57
CJ004	19号遺構埋土２層	小中皿	13.5	8.1	2.9	青花　唐草文　波文	密	中国	明末清初 17c 初～前		72	57
CJ005	21号遺構埋土上層	小中皿	－	4.4	－	見込み草花文（こんにゃく判）	普通	肥前	17c 末～ 18c 初	貼り付け高台	72	57
CJ006	24号遺構埋土下層	中型丸碗	10.1	4.2	5.4	丸に桐？（こんにゃく判）と菊花？（こんにゃく判）散らし文高台内銘？	普通	肥前	17c 末～ 18c	くらわんか手　波佐見か	72	57
CJ007	24号遺構埋土下層	皿不明	－	－	－	青花	普通	中国	明末清初 17c 初～前	芙蓉手	72	57
CJ008	24号遺構埋土下層	碗鉢皿不明	－	－	－	青花	普通	中国	明末清初 17c 初～前	虫喰い	72	57
CJ009	24号遺構埋土下層	小中皿	－	－	－	青花	密	中国	明末清初 17c 初～前		72	57
CJ010	１号井戸埋土３層	小中皿	－	6.3	－	見込み柳文	普通	肥前	17c 中～後	高台砂付着	72	57
CJ011	６号井戸埋土１層	小型丸碗	6.3	2.8	3.8	梅花文	普通	切込？	19c ？	高台砂付着	72	57
CJ012	６号井戸埋土１層	小中皿	13.5	8.3	3.4	雪輪に竹文　見込み文様あり（こんにゃく判）　外面唐草文	普通	肥前	18c		72	57
CJ013	６号井戸埋土内	小中皿	14.7	9.3	2.8	牡丹唐草文　外面梅花唐草文	普通	肥前	17c 末～ 18c 初		73	57
CJ014	11号遺構埋土	小碗不明	7.1	－	－	青花梅花文	普通	中国	明末清初 17初～前		73	57
CJ015	15号遺構埋土	猪口	7.4	4.6	5.4	白磁型打	密	肥前	18c		73	58
CJ016	15号遺構埋土	小中皿	13.7	7.9	2.9	葡萄文　高台内「□□年製」銘	普通	肥前	18c		73	58
CJ017	15号遺構埋土	大皿	－	15.9	－	唐草文	普通	肥前	17c 後～ 18c 前		73	58
CJ018	20号遺構埋土下層	小中皿	13.2	7.8	3.5	雪輪に梅花文　見込み五弁花文（こんにゃく判）　外面唐草文	普通	肥前	17c 末～ 18c 前		73	58
CJ019	20号遺構埋土１層	蓋物	13.1	－	－	丸に菊花散らし文	普通	肥前	18c		73	58
CJ020	20号遺構埋土１層	極小皿	8.2	4.1	1.8	見込み五弁花文（こんにゃく判）　外面折れ松葉文	普通	肥前	18c		73	58
CJ021	20号遺構埋土１層	小中鉢	14.0	8.2	3.8	菊花流水文　外面如意頭唐草文	普通	肥前	17c 後～末		74	58
CJ022	20号遺構埋土上層	中型丸碗	9.1	4.0	4.7	雲に飛龍文	普通	肥前	18c 前半		73	58
CJ023	20号遺構埋土上層	香炉	－	7.7	－	青磁	普通	肥前	17c 後～ 18c	波佐見	74	58
CJ024	25号遺構埋土下層	小型端反碗	7.0	－	－	白磁	普通	肥前	17c 後～ 18c 前		74	58
CJ025	25号遺構埋土下層	中型丸碗	11.7	4.2	5.8	老松一屋文　高台内銘	普通	肥前	17c 後半		74	59
CJ026	25号遺構埋土下層	小中皿	9.6	3.9	2.2	見込み草花文	普通	肥前	17c 中～後	高台内砂付着	74	59
CJ027	25号遺構埋土下層	大皿	29.0	－	－	鋸歯状文に点描　波状文	普通	肥前	17c 中	貫入	74	59
CJ028	25号遺構埋土下層	小中皿	9.4	5.1	2.6	色絵（赤・緑）染付花唐草文　見込み花文	密	肥前	17c 後～ 18c 前半		74	59
CJ029	25号遺構埋土下層	小中皿	－	5.1	－	松と網干文　高台内銘？	普通	肥前	18c 前葉		74	59
CJ030	25号遺構埋土上層	小中皿	20.3	－	－	吹墨雨雲文	普通	肥前	17c 中葉	貫入	74	59
CJ031	25号遺構埋土上層	小中皿	13.8	6.0	3.2	日の字鳳凰文	普通	肥前	17c 後半		74	59
CJ032	25号遺構埋土上層	中型丸碗	11.4	－	－	松竹文	普通	肥前	17c 後～ 18c 前		74	59
CJ033	25号遺構埋土上層	中型丸碗	10.0	4.4	5.8	草花文	普通	肥前	17c 後～ 18c 前	貫入	74	59
CJ034	25号遺構埋土上層	小型端反碗	7.5	3.5	5.3	竹梅文　高台内銘あり	普通	肥前	18c		74	59
CJ035	25号遺構埋土上層	瓶類（中型）	－	6.0	－	若松文	普通	肥前	19c ？		74	59
CJ036	25号遺構埋土上層	小中皿	－	13.5	－	見込み鳥文	普通	肥前	17c 後半	ハリささえ２	75	59

表33　武家屋敷地区第11地点出土磁器観察表（２）
Tab.33　Notes on porcelains at BK11 (2)

登録番号	出土場所	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	文様	胎土	生産地	製作年代	備考	図	図版
CJ037	25号遺構埋土上層	水滴	－	－	2.3	型押	普通	肥前	不明		75	59
CJ038	25号遺構A層相当	水滴	－	－	－	型押	普通	肥前	不明	七福神の布袋か	75	59
CJ039	25号遺構埋土	中型筒形碗	－	5.1	－	文様あり	やや粗	肥前	18c 前葉	波佐見	75	59
CJ040	24号建物 柱９	香炉	－	6.5	－	青磁　陽刻	普通	肥前	18c	波佐見 平底に鉄錆	75	59
CJ041	28号遺構埋土	中型端反碗	11.1	5.0	6.3	格子文　内面鳥文	普通	肥前	18c 末以降	焼継ぎ　高台内焼継ぎの文字	75	59
CJ042	29号遺構埋土	中碗不明	8.6	－	－	白磁	普通	肥前	不明		75	59
CJ043	29号遺構埋土	紅皿	5.6	2.9	1.5	白磁	密	肥前	18c ？	型打　高台貼付	75	59
CJ044	ピット502埋土	猪口	7.2	4.8	6.0	竹文	普通	肥前	18c		75	60
CJ045	ピット719埋土	小中皿	－	8.4	－	見込み葡萄文　高台内銘	普通	肥前	18c		75	60
CJ046	40号建物柱４	小坏	－	3.9	－	白磁　線彫	普通	肥前	18c ？		75	60
CJ047	13号遺構埋土１層	蓋物	7.1	4.1	3.9	蛸唐草文　鋸歯文　高台内銘あり	普通	肥前	18c	漆継ぎ	75	60
CJ048	13号遺構埋土１層	小型丸碗	8.0	－	－	色絵（赤・金）唐草文	普通	肥前	18c	貫入　漆継ぎ	75	60
CJ049	23号遺構埋土	火入	10.5	8.5	7.9	青磁　高台内削り込み・鉄化粧	普通	肥前	17c 後葉	貫入　漆継ぎ	75	60
CJ050	23号遺構埋土	蓋物	12.0	－	－	花唐草文	普通	肥前	18c		75	60
CJ051	27号遺構埋土	小型筒形碗	6.0	－	－	白磁	普通	肥前	18c 以降	体部に隆帯1条めぐる	76	60
CJ052	43号建物 柱7	小中皿	13.8	8.5	3.3	文様あり	普通	肥前	18c		75	60
CJ053	５号井戸埋土２層	小中皿	－	9.5	－	見込み草文　高台内銘あり	普通	肥前	17c 後～ 18c 前	ハリささえ１	76	60
CJ054	12号溝埋土	蓋	9.4	－	2.6	草花文　内面「太明年製」銘　高台内銘	密	瀬戸	19c 前～中		76	60
CJ055	17号遺構埋土	中型端反碗	－	4.6	－	竹林文　見込み文様あり	普通	肥前	19c 前～中	貫入	76	60
CJ056	17号遺構埋土	小型端反碗	7.3	－	－	墨弾き牡丹文	普通	肥前	19c	焼継ぎあり	76	60
CJ057	17号遺構埋土	小型丸碗	6.8	3.4	4.7	素描き草花文？	普通	肥前	19c 前～中		76	60
CJ058	17号遺構埋土	瓶類（中型）	－	6.6	－	雷文	普通	肥前	19c		76	60
CJ059	26号遺構埋土上層	小型端反碗	8.3	3.6	4.4	口紅　雪輪に草花文　見込み蝶？	密	東北産	19c 中葉		76	60
CJ060	26号遺構 A 層相当	瓶類	3.3	－	－	一屋山水図	普通	瀬戸？	19c	焼継ぎ	76	60
CJ061	49号建物 柱４	猪口	8.3	5.4	5.6	白磁　口紅	普通	肥前	17c 後半？		76	60
CJ062	２号溝埋土	中型端反碗	9.5	－	－	桜花文	普通	瀬戸	19c 中葉		76	60
CJ063	２号溝埋土	小坏	6.1	2.5	2.9	口紅（金）　上絵付一屋梅枝文　文字	密	不明	19c 中葉以降		76	60
CJ064	２号溝埋土	中型広東碗	13.0	4.9	6.0	外面蝙蝠文	普通	東北産	18c 後～ 19c 前	見込み目跡あり	76	60
CJ065	３号溝埋土	中型丸碗	10.0	3.0	4.8	窓絵一屋風景文　文字	普通	肥前	18c 前半	貫入	76	61
CJ066	３号溝埋土	蓋	6.0	－	2.3	花牡丹文	普通	肥前	19c		76	61
CJ067	14号溝埋土	小型端反碗	8.4	－	－	口紅　稲束文？	普通	瀬戸	19c 中～後		76	61
CJ068	12・14号溝埋土	小中皿	15.4	8.4	4.5	白磁型打	普通	肥前	18c ？		77	61
CJ069	12・14号溝埋土	中型丸碗	8.5	－	－	青磁色絵（金・赤・青・黒）梅花文	普通	肥前	18c 以降		77	61
CJ070	G19　A 層	蓋	10.2	－	3.0	楓文（こんにゃく判）	普通	肥前	18c	貫入	77	61
CJ071	D19　２層	小型筒形碗	7.2	3.9	－	素描き雷文　竹に雀文	普通	肥前	19c 前～中	漆継ぎ	77	61
CJ072	F18　２層	小中皿	12.9	4.5	3.9	二重斜格子文	普通	肥前	17c 末～ 18c 前	見込み蛇ノ目釉剥ぎ　波佐見か	77	61
CJ073	H14　２層	中型丸碗	9.0	3.4	4.7	山水文　見込み島に海鳥文？	密	肥前	18c 末～ 19c 前	貫入	77	61
CJ074	H14　２層	中型広東碗	10.6	5.9	5.9	縦鎖線文　見込み素描き文様あり　高台内銘あり	密	肥前	18c 後～ 19c 前	変形字を二重方形に収めた銘	77	61
CJ075	H16　２層	小中皿	13.8	9.0	2.9	墨弾き波に花文　外面唐草文　口紅	普通	肥前	18c		77	61
CJ076	H17　２層	小中皿	11.5	6.2	2.8	流水に桜花文　見込み松梅文　外面蓮弁文	普通	肥前	18c 後葉	貫入	77	61
CJ077	１層・攪乱	小中鉢	13.7	6.7	5.0	白磁型押　口紅	普通	肥前	18c ？		77	61
CJ078	１層・攪乱	瓶類（小型）	－	4.5	－	色絵（赤）網目文	普通	肥前	18c		77	61

表34　武家屋敷地区第11地点出土陶器観察表（１）
Tab.34　Notes on glazed ceramics at BK11 (1)

登録番号	出土場所	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	文様	釉薬	胎土	生産地	製作年代	備考	図	図版
CT001	沢状遺構埋土１層	小中皿	11.6	4.6	3.4		灰釉（暗緑褐色）	普通	肥前	16c 末～ 17c 初	唐津 見込み目跡あり	78	62
CT002	沢状遺構埋土１層	向付	－	－	－	鉄絵（黒色）	長石釉	やや粗	美濃	17c 初	志野	78	62
CT003	１号遺構下部埋土	天目碗	11.6	－	－		天目釉	普通	瀬戸・美濃	17c 初～前	口縁部体部下半外面、内面に漆付着 高台周辺露胎	78	62
CT004	１号遺構上部埋土	向付	－	5.3	－	鉄絵（暗茶褐色）松文	灰釉（灰色）	普通	肥前	17c 初	絵唐津 貫入	78	62
CT005	１号遺構上部埋土	碗鉢皿不明	－	－	－	鉄絵（暗茶褐色）	長石釉	やや粗	美濃	17c 初	志野	78	62
CT006	１号遺構上部埋土	碗鉢皿不明	－	－	－	鉄絵（暗茶褐色）	長石釉	やや粗	美濃	17c 初	志野	78	62
CT007	2号遺構埋土	碗鉢皿不明	－	－	－	鉄絵（黒色）	長石釉	普通	美濃	17c 初	志野 見込み目跡あり 半環足	78	62
CT008	4号遺構埋土３層	小中皿	11.6	7.1	2.3	型打	長石釉	普通	美濃	17c 初	志野 菊皿	78	62
CT009	7号遺構埋土	向付	－	5.0	－	鉄絵（黒褐色）草花文	灰釉（灰白色）	普通	肥前	17c 初	絵唐津 貫入	78	62
CT010	7号遺構埋土	向付	－	5.5	－	鉄絵（黒褐色）松文	灰釉（灰白色）	普通	肥前	17c 初	絵唐津 皮鯨 貫入	78	62
CT011	7号遺構埋土	擂鉢	26.3	－	－		鉄釉（暗赤褐色）	普通	瀬戸・美濃	17c 初～前		78	62
CT012	7号遺構埋土17層	向付	－	5.5	－	鉄絵（黒褐色）松文	灰釉（灰白色）	普通	肥前	17c 初	絵唐津 皮鯨 貫入 高台付近炭化部付着	78	62
CT013	9号遺構埋土	天目碗	7.6	3.3	4.1		鉄釉（暗茶褐色）	普通	瀬戸・美濃	16c ？	高台周辺鉄化粧	78	62
CT014	9号遺構埋土	擂鉢	27.5	9.4	9.7		鉄釉（暗赤褐色）	普通	瀬戸・美濃	17c 初～前		78	62
CT015	14号遺構 A 層	擂鉢	－	－	－		鉄釉（茶褐色）	やや粗	不明	19c ？		79	63
CT016	14号遺構埋土上層	変形皿	－	－	－		長石釉	密	肥前	17c 前～中		79	63
CT017	21号遺構埋土下層	小中皿	11.8	6.8	2.3		長石釉	普通	美濃	17c 初～前	志野 貫入 見込み・高台内目跡あり	79	63
CT018	21号遺構埋土下層	鉢	－	－	－	鉄絵（茶褐色）	長石釉	普通	美濃	17c 初	志野	79	63
CT019	21号遺構埋土上層	向付	－	－	－	鉄絵（黒褐色）	灰釉（淡褐灰色）	普通	肥前	17c 初	絵唐津	79	63
CT020	24号遺構埋土下層	小中皿	11.0	5.5	2.2		鉄釉（茶褐色）	普通	美濃	16c 末～ 17c 初	折縁ソギ皿 見込みと高台内に重ね積み痕	79	63
CT021	24号遺構埋土下層	小中皿	11.2	6.2	2.5		長石釉	やや粗	美濃	17c 初～前	鼠志野 貫入 底部黒色化	79	63
CT022	24号遺構埋土下層	小中皿	11.6	7.0	2.4		長石釉	やや粗	美濃	17c 初～前	志野 貫入 見込み目跡あり	79	63
CT023	24号遺構埋土下層	小中皿	12.7	7.6	2.7	鉄絵（茶褐色）蔓草文	長石釉	やや粗	美濃	17c 初～前	志野織部 見込み・高台内目跡あり	79	63
CT024	24号遺構埋土下層	小中皿	21.9	6.7	5.1		長石釉（淡緑灰白色）	普通	肥前	17c 前葉	失透釉 見込み胎土目あり	79	63
CT025	24号遺構埋土下層	小中鉢	24.8	20.5	5.7	鉄絵	長石釉	やや粗	美濃	17c 初	志野 半環足	79	64
CT026	24号遺構埋土下層	中型端反碗	11.5	4.3	7.3		長石釉	普通	肥前	17c 前葉	貫入 朝鮮の碗の写しか	80	64
CT027	24号遺構埋土下層	中型筒形碗	10.7	－	－	内面長石釉掛け分け	鉄釉（暗赤褐色）	普通	肥前	17c 初～前	灰釉貫入 茶器	80	64
CT028	24号遺構埋土下層	天目碗	10.8	4.2	7.4		天目釉	普通	瀬戸・美濃	17c 初～前	高台周辺露胎	80	64
CT029	24号遺構埋土下層	水指	－	15.8	－		鉄釉（茶褐色）	やや粗	不明	17c 初	耳付き	80	64
CT030	24号遺構埋土下層	壺・甕不明	－	14.3	－		鉄釉（黒褐色）	普通	信楽？	18c ？		80	64
CT031	24号遺構埋土下層	甕	22.1	15.5	13.3		鉄釉（暗茶褐色）	やや粗	肥前	17c 前半	口縁部無釉 内面同心円の当て具痕 底部、口唇部に窯詰め痕	80	64
CT032	24号遺構埋土上層	仏花瓶	8.8	4.7	12.9		鉄釉（黒）	普通	大堀相馬	19c		80	64
CT033	24号遺構埋土上層	壺・甕不明	－	－	－		無釉	やや粗	信楽？	16c ？		80	64
CT034	24号遺構埋土上層	壺・甕不明	10.0	－	－		鉄釉（茶褐色）	普通	不明	17c	鉄釉白濁	80	64
CT035	ピット518埋土	碗鉢皿不明	－	－	－	鉄絵（茶褐色）	長石釉	普通	美濃	17c 初	志野　半環足	80	64
CT036	ピット535埋土１層	小中皿	9.6	4.3	3.3		灰釉（淡灰白色）	普通	肥前	17c 初	唐津 皮鯨	80	64

表35　武家屋敷地区第11地点出土陶器観察表（２）
Tab.35　Notes on glazed ceramics at BK11 (2)

登録番号	出土場所	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	文様	釉薬	胎土	生産地	製作年代	備考	図	図版
CT037	ピット489埋土	向付	10.8	7.6	2.5		灰釉（淡緑灰白色）	普通	瀬戸・美濃？	17c 初？	志野 貫入 一部失透釉	80	64
CT038	13号建物 柱６	天目碗	−	4.7	−		鉄釉（暗茶褐色）	普通	瀬戸・美濃	17c	高台周辺露胎	80	64
CT039	１号井戸埋土２層	碗鉢皿不明	−	−	−	鉄絵文（黒色）	長石釉	普通	美濃	17c 初	志野	80	64
CT040	3号井戸埋土１層	小中皿	11.6	6.6	−		長石釉	普通	美濃	17c 初～前	志野 口縁部炭化物付着 高台内目跡	80	64
CT041	10号遺構埋土	さや鉢	16.0	14.5	8.1		無釉	普通	不明	不明	底部炭化物付着 口縁部敲打痕 見込みと内面に付着物 火入・灰吹に転用か	80	64
CT042	６号井戸埋土２内	中型丸碗	10.0	4.2	5.9		灰釉（淡緑灰白色）	普通	肥前？	不明	貫入顕著 練上手	80	65
CT043	６号溝埋土１層	小中皿	10.0	−	−	鉄釉による口紅 色絵(緑)草文 見込み色絵（緑・青）文様不明	灰釉（淡黄灰白色）	密	京・信楽	18c	貫入 漆継ぎ	80	65
CT044	６号溝埋土１層	中型丸碗	−	3.9	−		灰釉（淡緑灰白色）	普通	大堀相馬	18c	貫入 見込み目跡あり？	80	65
CT045	15号溝埋土	中型丸碗	10.6	3.7	6.7	上部灰釉（淡緑灰白色）	腰部鉄釉（茶褐色）	普通	大堀相馬	18c 中～末	貫入 高台内鉄釉	81	65
CT046	15号溝埋土	小型丸碗	7.7	2.4	4.4		灰釉（淡黄灰白色）	密	京・信楽	18c	貫入	81	65
CT047	15号溝埋土	不明	−	3.4	−	内面灰釉（淡青灰白色）	鉄釉（暗赤褐色）	普通	大堀相馬	18c 中～ 19c	半失透釉 貫入	81	65
CT048	15号溝埋土	袋物不明	−	5.6	−	色絵（金？）葉文	灰釉（淡緑灰白色）	やや粗	京・信楽	18c	貫入	81	65
CT049	６号遺構埋土１層	灰吹	5.6	−	−	鉄絵（茶褐色）草花文	灰釉（淡黄灰白色）	普通	肥前？	18c	貫入	81	65
CT050	15号遺構埋土	小中皿	−	9.3	−	色絵（青）錆絵	灰釉（灰白色）	普通	不明	不明	貫入	81	65
CT051	15号遺構埋土	中型丸碗	9.6	−	−	錆絵染付草花文	灰釉（淡緑灰白色）	密	京・信楽	18c	貫入	81	65
CT052	20号遺構埋土下層	擂鉢	−	−	−		鉄釉（暗赤褐色）	普通	不明	不明		81	65
CT053	20号遺構埋土下層	擂鉢	−	−	−		鉄釉（暗赤褐色）	普通	岸	17c ～ 18c 前		81	65
CT054	20号遺構埋土下層	壺	−	−	−		鉄釉（淡褐色）	やや粗	信楽	16c ？		81	65
CT055	20号遺構埋土下層	中型丸碗	11.8	−	−		灰釉（淡緑灰白色）	普通	大堀相馬	18c	貫入	81	65
CT056	20号遺構埋土１層	中型筒形碗	9.2	4.8	6.5	白化粧 鉄絵呉須絵	透明釉	密	不明	18c 以降	練上手	81	65
CT057	25号遺構埋土下層	中型丸碗	−	4.8	−		灰釉（淡黄灰白色）	密	肥前	17c 後～ 18c 前	貫入 呉来手	81	65
CT058	25号遺構埋土下層	中型丸碗	12.1	5.1	8.1		灰釉（淡黄灰白色）	密	肥前	17c 後～ 18c 前	貫入 呉来手	81	65
CT059	25号遺構埋土下層	中型丸碗	13.7	5.8	8.9		灰釉（淡黄灰白色）	密	肥前	17c 後～ 18c 前	貫入 呉来手	81	65
CT060	25号遺構埋土下層	向付	−	−	−	鉄絵（暗褐色）	灰釉（灰褐色）	普通	肥前	17c 初	絵唐津	81	65
CT061	25号遺構埋土下層	大鉢	−	11.8	−	印花文	鉄釉（暗茶褐色）	普通	肥前	17c 中葉？	見込み、高台に白土目あり	81	66
CT062	25号遺構埋土下層	壺・甕不明	−	−	−		鉄釉（暗褐色）	やや粗	信楽？	17c ？		81	66
CT063	25号遺構埋土下層	擂鉢	29.3	−	−		鉄釉（暗褐色）	普通	岸	17c 後～ 18c 前半	外面体部下半無釉	82	66
CT064	25号遺構埋土下層	擂鉢	33.6	−	−		鉄釉（暗赤褐色）	普通	岸	17c 後～ 18c 前半	外面体部下半無釉	82	66
CT065	25号遺構埋土下層	擂鉢	33.4	−	−		鉄釉（暗赤褐色）	普通	岸	17c 後～ 18c 前半	外面体部下半無釉	82	67
CT066	25号遺構埋土上層	小中皿	13.3	4.0	3.3		透明釉	普通	肥前	17c 後～ 18c 前	貫入 見込み蛇ノ目釉剥ぎ	82	66
CT067	25号遺構埋土上層	小中皿	14.4	−	−		灰釉（淡緑灰白色）	普通	瀬戸・美濃	17c 初～前	貫入	82	66
CT068	25号遺構埋土上層	碗鉢皿不明	−	−	−	鉄絵（茶褐色）	長石釉	普通	美濃	17c 初	志野 半環足	82	66
CT069	25号遺構A層相当	甕	7.0	−	−		鉄釉（暗茶褐色）	やや粗	不明	19c ？		82	66
CT070	29号遺構埋土	大鉢	−	−	−	緑銅釉 鉄絵	長石釉	普通	美濃	17c 前～後		83	67
CT071	29号遺構埋土	小中皿	−	4.5	−		銅緑釉（淡青緑灰色）	密	肥前	17c 末～ 18c 後	見込み蛇ノ目釉剥ぎ	83	67
CT072	29号遺構埋土	碗鉢皿不明	−	−	−	鉄絵	長石釉	普通	美濃	17c 初	志野 半環足	83	67

表36　武家屋敷地区第11地点出土陶器観察表（３）
Tab.36　Notes on glazed ceramics at BK11 (3)

登録番号	出土場所	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	文様	釉薬	胎土	生産地	製作年代	備考	図	図版
CT073	29号遺構埋土	不明	－	－	－	鉄絵	長石釉	普通	美濃	17c 初～中	志野織部	83	67
CT074	ピット510埋土	小中皿	－	9.6	－	呉須絵花文	灰釉（淡黄灰白色）	密	京・信楽	18c	貫入	83	67
CT075	ピット658埋土	大鉢	－	14.0	－	白泥刷毛目文	透明釉	普通	肥前	17c 末～18c		83	67
CT076	８号井戸埋土	小中皿	－	－	－	鉄絵文（黒色）	灰釉（灰色）	普通	肥前	17c 初	貫入 絵唐津	83	67
CT077	９号溝埋土	中型丸碗	8.5	－	－	錆絵呉須絵山水文	灰釉（淡緑灰白色）	密	京・信楽	18c	貫入	83	67
CT078	９号溝埋土	中碗不明	－	4.9	－		鉄釉（暗茶褐色）	やや密	不明	不明		83	67
CT079	12号遺構埋土	蓋	6.0	－	－		鉄釉（暗褐色）	普通	大堀相馬	19c		83	67
CT080	13号遺構埋土１層	小型丸碗	6.3	2.6	3.9		灰釉（淡緑灰白色）	密	大堀相馬	18c 末～19c 初	貫入 内面付着物あり	83	67
CT081	23号遺構埋土	中碗不明	－	3.9	－		灰釉（淡緑灰色）	密	大堀相馬	18c	貫入	83	67
CT082	23号遺構埋土	小中皿	－	4.0	－	見込み印花文	灰釉（淡緑灰白色）	普通	大堀相馬	18c	貫入	83	67
CT083	23号遺構埋土	小中皿	－	6.4	－	鉄絵（暗褐色）山水文	灰釉（緑灰白色）	普通	大堀相馬	18c 末～19c 中	見込み目跡3 ヵ所	83	67
CT084	23号遺構埋土	鬢水入	－	－	4.1		灰釉（淡黄灰白色）	普通	大堀相馬	18c	貫入	83	67
CT085	27号遺構埋土	小中皿	14.1	5.0	3.5	見込み印花文	灰釉（淡黄灰白色）	普通	大堀相馬	18c 末～19c 初	折縁 貫入	83	67
CT086	27号遺構埋土	擂鉢	－	－	－		鉄釉（茶褐色）	やや粗	瀬戸・美濃	17c 末～18c 初		83	68
CT087	５号井戸埋土	中型平形碗	11.3	－	－	鉄絵草文	灰釉（淡青灰白色）	普通	大堀相馬	18c 末～19c		83	68
CT088	５号井戸埋土	土瓶（蓋）	－	5.4	2.7		灰釉（淡灰白色）	普通	大堀相馬	19c 前～中	貫入顕著 失透釉	83	68
CT089	５号井戸埋土	小中鉢	18.7	－	－	灰釉流し掛け（淡青灰白色）	鉄釉（暗褐色）	やや粗	不明	19c	東北産？	84	68
CT090	５号井戸埋土２層	小中皿	－	4.1	2.3	見込み印花文	灰釉（淡黄灰白色）	普通	大堀相馬	18c	貫入顕著	84	68
CT091	13号溝埋土	中型丸碗	9.2	3.7	5.3		灰釉（淡緑灰白色）	普通	大堀相馬	18c	貫入	84	68
CT092	13号溝埋土	中碗不明	－	3.6	－		灰釉（淡青灰白色）	密	大堀相馬	18c 末～19c	失透釉	84	68
CT093	13号溝埋土	灯火具	9.7	5.0	5.4		鉄釉（暗黄褐色）	密	大堀相馬	19c	外面底部一部黒色化	84	68
CT094	13号溝埋土	壺・甕不明	－	7.1	－		灰釉（暗緑灰色）	普通	東北産？	19c ？		84	68
CT095	13号溝埋土	土瓶（蓋）	6.7	－	－	青釉鉄絵巴文	灰釉（淡黄灰白色）	密	大堀相馬	19c 中～後	灰釉白濁	84	68
CT096	13号溝埋土	蓋	7.6	－	－		鉄釉（暗赤褐色）	普通	東北産？	19c		84	68
CT097	13号溝埋土	小中鉢	－	13.1	－		鉄釉（暗緑褐色）	普通	東北産？	19c	見込み目跡あり	84	68
CT098	13号溝埋土	大鉢	25.2	－	－		鉄釉（暗緑色）	普通	東北産？	19c		84	68
CT099	13号溝埋土	甕	14.6	－	－	灰釉流し掛け（暗緑褐色）	鉄釉（暗赤褐色）	やや粗	東北産？	19c ？		84	68
CT100	13号溝埋土	土鍋	22.5	10.7	10.7		鉄釉（茶褐色）	普通	不明	19c	見込み目跡あり 底部付近黒色化	84	68
CT101	17号遺構埋土	擂鉢	38.4	－	－		鉄釉（暗茶褐色）	普通	不明	不明		84	68
CT102	17号遺構埋土	擂鉢	23.2	－	－		鉄釉（暗赤褐色）	やや粗	東北産？	19c ？		84	69
CT103	17号遺構埋土	壺・甕不明	－	11.8	－		鉄釉（暗茶褐色）	普通	不明	不明	底部・見込み窯詰め痕	84	69
CT104	17号遺構埋土	袋物不明	－	6.0	－		灰釉（灰白色）	密	大堀相馬	19c	底部無釉 貫入	84	69
CT105	17号遺構埋土	小中鉢	13.5	－	－	見込み線彫花文 内面黄彩 外面緑彩	鉛釉	密	不明	不明	華南三彩か	84	69
CT106	17号遺構埋土	蓋	17.8	－	－		鉄釉（暗茶褐色）	やや粗	東北産？	19c ？		84	69
CT107	17号遺構埋土	土鍋	22.5	－	－		鉄釉（茶褐色）	普通	不明	19c	外面体部下半無釉	85	69
CT108	17号遺構埋土	土鍋	－	5.9	－		鉄釉（茶褐色）	密	大堀相馬	19c	外面体部下半無釉	85	69
CT109	17号遺構埋土	土鍋	22.0	8.9	－		鉄釉（暗赤褐色）	普通	東北産？	19c	外面体部下半無釉	85	69
CT110	17号遺構埋土１層	小中皿	－	4.4	－	鉄絵（黒色）山水文	灰釉（灰白色）	密	大堀相馬	18c 末～19c	半失透釉 見込み目跡あり	85	69
CT111	18号遺構埋土	小型碗	－	3.7	－		灰釉（灰白色）	普通	大堀相馬	19c	失透釉	85	69

表37　武家屋敷地区第11地点出土陶器観察表（４）
Tab.37　Notes on glazed ceramics at BK11 (4)

登録番号	出土場所	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高	文様	釉薬	胎土	生産地	製作年代	備考	図	図版
CT112	18号遺構埋土	人形	－	－	3.9		鉄釉（暗茶褐色）	普通	不明	不明	幅2.9cm 奥行2.4cm	85	69
CT113	18号遺構埋土	水指	11.8	－	－	灰釉（淡黄灰白色）流し掛け	鉄釉（暗褐色）	普通	瀬戸・美濃？	17c 後半以降		85	69
CT114	26号遺構埋土下層	瓶類（大型）	－	7.6	－	口頸部、内面鉄釉（黒褐色） 鉄絵（黒褐色）走馬文	灰釉（淡青灰白色）	密	大堀相馬	19c	半失透釉 貫入	85	69
CT115	26号遺構埋土下層	土瓶（蓋）	3.8	－	－	青釉鉄絵巴文 白化粧	透明釉	密	大堀相馬	19c 中～後		85	69
CT116	26号遺構埋土下層	土瓶（蓋）	9.5	－	3.0		灰釉（淡灰白色）	密	大堀相馬	19c 前～中	貫入顕著 失透釉	85	69
CT117	26号遺構埋土上層	灰吹・火入	9.6	－	－	白化粧鉄絵染付梅枝文	灰釉（緑灰色）	普通	不明	19c ？	貫入	85	70
CT118	26号遺構埋土上層	向付	－	－	－	鉄絵白泥山形文 口縁部銅緑釉	長石釉	やや粗	美濃	17初～前	鳴海織部	85	70
CT119	26号遺構埋土上層	瓶類	4.1	－	－		鉄釉（茶褐色）	密	大堀相馬？	19c	漆継ぎあり	85	70
CT120	26号遺構埋土上層	瓶類（大型）	－	8.5	－		灰釉（灰白色）	普通	大堀相馬	19c ？		85	70
CT121	26号遺構埋土上層	甕	－	－	－		灰釉（淡黄灰白色）	普通	瀬戸・美濃	19c ？	貫入	86	70
CT122	26号遺構 A 層相当	仏飯器	7.8	－	－		鉄釉（茶褐色）	密	大堀相馬	19c		85	70
CT123	26号遺構 A 層相当	灯明皿	9.3	3.5	1.6		鉄釉（暗茶褐色）	密	大堀相馬	19c	見込み目跡3 ヵ所 底部外面炭化物付着	85	70
CT124	26号遺構 A 層相当	大鉢	39.4	－	－	緑釉刷毛目文	鉄釉（暗茶褐色）	普通	不明	18c 以降？		86	70
CT125	２号溝埋土	不明	－	－	－	灰釉流し掛け（淡灰白色）	鉄釉（暗茶褐色）	やや粗	東北産？	19c ？		86	70
CT126	２号溝埋土	土瓶（蓋）	7.8	－	2.5	白土筒描文	鉄釉（暗緑褐色）	普通	大堀相馬	19c 中～後		86	70
CT127	２号溝埋土	土瓶（蓋）	5.1	－	－	飛び鉋	鉄釉（暗褐色）	普通	大堀相馬	19c		86	70
CT128	２号溝埋土	小中鉢	17.6	8.0	7.0	白泥刷毛目文	透明釉	密	肥前	17c 後～ 18c 前		86	70
CT129	２号溝埋土	小中鉢	－	11.9	－		鉄釉（暗茶褐色）	粗	不明	19c ？	見込み目跡あり	86	70
CT130	２号溝埋土	向付	－	－	－	鉄絵文（黒色）	灰釉（灰色）	普通	肥前	17c 初	絵唐津	86	70
CT131	２号溝埋土	小中皿	11.3	4.3	3.9		灰釉（淡緑灰白色）	普通	大堀相馬	18c 中～末	見込み目跡3 ヵ所 貫入	86	70
CT132	２号溝埋土	小中皿	11.3	4.6	3.7		灰釉（淡緑灰白色）	普通	肥前	17c 末～ 18c 後	見込み蛇ノ目釉剥ぎ	86	70
CT133	２号溝埋土	甕	12.6	－	－		灰釉（暗緑灰色）	やや粗	東北産？	19c ？		86	71
CT134	２号溝埋土	甕	14.8	－	－	掛け分け 灰釉(暗緑褐色)	鉄釉（暗赤褐色）	やや粗	堤？	19c ？		86	71
CT135	２号溝埋土	壺・甕不明	－	8.4	－	内面灰釉（淡青灰白色）	鉄釉（茶褐色）	粗	不明	不明	高台内施釉 高台に砂付着	86	71
CT136	２号溝埋土	中型端反碗	9.6	－	－		灰釉（淡灰白色）	普通	大堀相馬	19c	貫入顕著 失透釉	86	71
CT137	２号溝埋土	小型碗	－	3.6	－		灰釉（淡灰白色）	普通	大堀相馬	19c	貫入 失透釉	86	71
CT138	２号溝埋土	中碗不明	－	4.5	－		灰釉（淡黄灰白色）	普通	大堀相馬	19c	失透釉	86	71
CT139	14号溝埋土	火入・灰吹	－	8.0	－		灰釉（暗緑灰白色）	粗	不明	19c	貫入 底部目跡あり	86	71
CT140	12・14号溝埋土	擂鉢	33.0	－	－		鉄釉（暗茶褐色）	粗	東北産？	19c ？		86	71
CT141	12・14号溝埋土	擂鉢	－	－	－		無釉	やや粗	丹波	17c 前葉	焼締め	87	71
CT142	12・14号溝埋土	大鉢	30.4	－	－	白泥刷毛目文	透明釉	普通	肥前	17c 後～ 18c		87	71
CT143	７号井戸埋土１層	大皿	30.2	19.4	4.5		長石釉	普通	美濃	17c 初～前	志野	87	71
CT144	７号井戸埋土１層	鉢	－	12.5	－		鉄釉（暗緑褐色）	普通	東北産？	19c	見込み、高台畳付に重ね焼痕 堤か	87	71
CT145	７号井戸埋土	擂鉢	36.4	－	－		鉄釉（暗茶褐色）	普通	東北産？	19c ？		87	71
CT146	７号井戸埋土	小中皿	－	5.5	－	色絵（青・緑）高台内色絵銘（青）	灰釉（淡黄灰白色）	密	京・信楽	18c	貫入 型打	87	71
CT147	７号井戸埋土	中型丸碗	9.5	－	－	色絵（赤・緑）松文	灰釉（淡黄灰白色）	普通	京・信楽	18c	貫入	87	71
CT148	ピット753埋土	小中皿	－	5.8	3.4		灰釉（淡青灰白色）	普通	肥前？	17c 初？	失透釉 見込み目跡あり	87	71

表38　武家屋敷地区第11地点出土陶器観察表（５）
Tab.38　Notes on glazed ceramics at BK11 (5)

登録番号	出土場所	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	文様	釉薬	胎土	生産地	製作年代	備考	図	図版
CT149	１号暗渠蓋上埋戻土	擂鉢	－	－	－		無釉	普通	堺	18c		87	71
CT150	ピット145埋土	中型丸碗	－	4.9	－		灰釉（淡緑灰白色）	普通	瀬戸・美濃？	18c ？	貫入 高台内施釉 漆継ぎ	87	71
CT151	H7　B 層相当	小中皿	14.3	－	－		織部釉	普通	美濃	17c 初～前	総織部	87	71
CT152	H7　B 層相当	小中鉢	－	8.1	－		長石釉	普通	美濃	17c 初	志野　高台内施釉	87	72
CT153	G15　A 層	小中皿	11.6	6.4	2.7	鉄絵（茶褐色）蔓草文	長石釉	やや粗	美濃	17c 初～前	志野 見込み・高台内目跡あり 漆継ぎ	88	72
CT154	E15　A 層	小中皿	－	－	－	白化粧 色絵（銀？・緑）呉須絵花弁文	透明釉	やや粗	京	18c	陶胎染付	88	72
CT155	F19　A 層	蓋	5.3	－	－		鉄釉（暗緑褐色）	普通	不明	不明		88	72
CT156	H14　A 層	仏花瓶	－	－	－		灰釉（淡緑灰色）	普通	相馬系？	18c 後～ 19c 前	貫入	88	72
CT157	F18　A 層	仏花瓶	－	4.7	11.2		灰釉（淡黄褐灰色）	普通	東北産？	19c	堤か	88	72
CT158	H18　２層	擂鉢	30.5	－	－		鉄釉（暗茶褐色）	普通	不明	17c ～ 18c ？	擂目が浅い	88	72
CT159	H15　２層	極小皿	8.8	3.4	1.9	掻き目による文様	灰釉（淡緑灰白色）	密	大堀相馬	19c	貫入　外面無釉 底部墨書 口縁部外面タール状付着物	88	72
CT160	G18　２層	小中皿	14.4	－	－		長石釉	普通	美濃	17c 初～前	志野	88	72
CT161	１層・攪乱	小中鉢	10.3	7.4	3.9		灰釉（淡黄灰白色）	普通	東北産？	19c ？	口縁部に敲打痕？ 失透釉 堤か	88	72
CT162	１層・攪乱	灯明皿	6.5	4.0	2.1		鉄釉（暗赤褐色）	普通	東北産？	19c	底部回転糸切無調整ｂ左回転	88	72
CT163	１層・攪乱	蓋	6.4	－	2.6		鉄釉（黒褐色）	普通	不明	不明		88	72
CT164	１層・攪乱	小中皿	－	7.0	－	型打	長石釉	普通	美濃	17c 初	志野 菊皿 見込み・高台内目跡あり	88	72
CT165	１層・攪乱	沓茶碗	－	－	－	鉄絵	灰釉（灰色）	普通	肥前	17c 初	絵唐津 皮鯨 貫入	88	72
CT166	１層・攪乱	仏飯器	－	4.4	－		灰釉（淡青灰白色）	普通	小野相馬	18c 中～ 19c 前	半失透釉 貫入 底部回転糸切無調整ａ右回転	88	72
CT167	１層・攪乱	擂鉢	14.5	－	－		鉄釉（茶褐色）	普通	不明	不明	擂目５条一組	88	72
CT168	１層・攪乱	擂鉢	－	14.0	－		鉄釉（暗赤褐色）	粗	東北産？	不明	底部刻印「○」堤か	88	72

表39　武家屋敷地区第11地点出土土師質土器（皿）観察表
Tab.39　Notes on unglazed ceramic plates from BK11

登録番号	出土場所	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	調整			回転方向	炭化物付着部位	備考	図	図版
					内面調整	外面調整	底部糸切技法					
CH001	1号遺構下部埋土	11.3	8.1	2.2	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	不明			89	73
CH002	7号遺構埋土	12.2	8.0	2.9	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	不明	口縁		89	73
CH003	7号遺構埋土	14.4	8.4	2.8	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	不明	底部外面一部、内外面一部	内外全体が黒色化	89	73
CH004	19号遺構埋土2層	12.5	8.0	2.6	ロクロナデ	ロクロナデ	a	左	外面、内面一部	内外全体が黒色化	89	73
CH005	21号遺構埋土下層	13.5	6.9	3.9	ロクロナデ	ロクロナデ	b	右			89	73
CH006	24号遺構埋土下層	12.9	7.2	2.7	ロクロナデ	ロクロナデ	a	左	口縁、底部内面	底部外面黒色化	89	73
CH007	24号遺構埋土下層	11.4	7.0	2.5	ロクロナデ	ロクロナデ	a	右		一部黒色化	89	73
CH008	24号遺構埋土下層	11.5	6.5	2.2	ロクロナデ	ロクロナデ	a	左			89	73
CH009	24号遺構埋土下層	10.6	6.9	2.1	ロクロナデ	ロクロナデ	b	右			89	73
CH010	24号遺構埋土下層	8.0	5.7	2.0	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	不明	口縁、内面		89	73
CH011	地鎮遺構	12.4	7.1	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	a	左		見込み墨書輪宝と梵字の「ア」器面全体に点状の付着物	89	73
CH012	地鎮遺構	12.6	3.7	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	不明		器面全体に点状の付着物	89	73
CH013	6号建物 柱10	8.0	5.8	1.8	ロクロナデ	ロクロナデ	a	左	内面？	内外全体が黒色化	89	73
CH014	1号井戸埋土4層	11.0	6.0	2.8	ロクロナデ、軽いミガキ	ロクロナデ、軽いミガキ	ミガキ	不明			89	73
CH015	10号遺構埋土	10.1	6.4	2.0	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	不明		全体が斑状に黒色化	89	73
CH016	6号井戸内部埋土	9.4	5.4	2.2	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	不明	口縁		89	73
CH017	11号遺構埋土	9.0	6.0	2.0	ロクロナデ	ロクロナデ	a	右	口縁一部	内外全体が黒色化	89	73
CH018	15号遺構埋土	10.9	6.2	2.4	ロクロナデ	ロクロナデ	b	左	口縁、底部内面		90	73
CH019	20号遺構埋土1層	5.0	2.7	1.6	ロクロナデ	ロクロナデ	b	不明	口縁	底部、外面一部黒色化	90	73
CH020	25号遺構埋土下層	11.6	6.8	2.6	ロクロナデ	ロクロナデ	b	右	口縁	内外全体が黒色化	90	74
CH021	25号遺構埋土上層	6.1	4.0	1.8	ロクロナデ	ロクロナデ	b	右	口縁一部		90	74
CH022	25号遺構埋土上層	7.4	4.6	1.4	ロクロナデ	ロクロナデ	b	右			90	74
CH023	25号遺構埋土上層	13.5	7.6	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	不明		内面一部、底部一部黒色化	90	74
CH024	25号遺構埋土上層	8.1	5.0	2.6	ロクロナデ	ロクロナデ	a	右	口縁一部	外面一部、底部一部黒色化	90	74
CH025	25号遺構埋土	8.7	5.0	2.2	ロクロナデ	ロクロナデ、軽いミガキ	不明	不明	口縁一部		90	74
CH026	ピット395埋土	12.3	7.8	2.5	ロクロナデ	ロクロナデ	a	右		器面の風化顕著	90	74
CH027	12号遺構埋土	20.0	13.5	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ	b	左	内面の半分		90	74
CH028	17号遺構埋土	10.1	6.0	2.1	ロクロナデ	ロクロナデ	b	不明			90	74
CH029	17号遺構埋土	12.4	6.9	2.7	ロクロナデ	ロクロナデ	b	不明			90	74
CH030	17号遺構埋土	15.5	11.0	2.9	ロクロナデ	ロクロナデ	a	左	底部、内外面一部	内外全体が黒色化	90	74
CH031	17号遺構埋土	10.4	6.0	2.3	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	不明		底部墨書あり	90	74
CH032	17号遺構埋土	9.5	6.0	1.5	ロクロナデ	ロクロナデ、ミガキ	ミガキ	不明	内外面一部		90	74
CH033	17号遺構埋土	11.9	6.6	2.5	ロクロナデ	ロクロナデ、ミガキ	ミガキ	不明			90	74
CH034	26号遺構埋土下層	9.5	6.0	1.7	ロクロナデ	ロクロナデ、ミガキ	不明	不明			90	74
CH035	26号遺構A層相当	8.8	4.8	1.8	ロクロナデ	ロクロナデ	b	左			90	74
CH036	12・14号溝埋土	7.0	4.1	1.8	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	不明	口縁一部		90	74
CH037	7号井戸埋土1層	8.0	4.9	2.1	ロクロナデ	ロクロナデ	b	右		内外全体が黒色化	90	74
CH038	H15　A層	6.9	3.6	1.6	ロクロナデ	ロクロナデ	b	左		内面が黒色化	90	74
CH039	D14　2層	18.6	13.0	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	不明	口縁外面一部	外面全体・底部内面が黒色化	90	74

表40　武家屋敷地区第11地点出土その他の土師質土器観察表
Tab.40　Notes on various unglazed ceramics (except plates) from BK11

登録番号	出土場所	種類	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	調整	特徴	図	図版
CH040	５号建物 柱２	焼塩壺	－	－	－	内外面：ロクロナデ		91	75
CH041	１号遺構下部埋土	鋳型？	－	7.0	2.5	外面：抑え、ナデ	内面黒色化　底部に方形の圧痕 側面に径６㎜の小孔あり	91	75
CH042	７号遺構埋土	不明	－	長辺5.5	3.9	外面：ケズリ　内面：ロクロナデ	断面八角形　　底部墨書あり	91	75
CH043	14号遺構埋土上層	焼塩壺？	－	5.0	－	内外面：調整不明		91	75
CH044	24号遺構埋土下層	焼塩壺	－	5.8	－	外面：調整不明　内面：ロクロナデ		91	75
CH045	６号井戸内部埋土２層	焼塩壺	－	5.4	－	外面：格子タタキ　内面：ロクロナデ	地元系	91	75
CH046	11号遺構埋土	不明	－	－	－	外面：調整不明　内面：布目圧痕	内面にタール状の付着物あり	91	75
CH047	15号遺構埋土	焼塩壺	－	4.8	－	内外面：ロクロナデ	底部回転糸切無調整	91	75
CH048	20号遺構埋土下層	不明	－	－	－	内面：ナデ	外面の沈線内に黒色付着	91	75
CH049	25号遺構埋土上層	焼塩壺	－	7.0	10.7	外面：格子タタキ　内面：ロクロナデ	底部回転糸切無調整a左回転	91	75
CH050	29号遺構埋土	焼塩壺	－	5.8	－	外面：格子タタキ　内面：ロクロナデ		91	75
CH051	12号遺構埋土	焙烙	26.0	15.6	6.4	内外面：ロクロナデ	底部内面、外面全体が黒色化 内耳３ヵ所	91	75
CH052	13号遺構埋土１層	不明	5.4	－	－	内外面：ロクロナデ		91	75
CH053	23号遺構埋土	灯明皿	6.4	3.6	1.6	内外面：ロクロナデ	底部回転糸切無調整b左回転 灯芯受部剥落 口縁部に炭化物付着	92	75
CH054	23号遺構埋土	灯明皿	6.5	3.6	1.9	内外面：ロクロナデ	底部回転糸切無調整b左回転 灯芯受部貼り付け 口縁、灯心受先端部炭化物付着	92	75
CH055	13号溝埋土	灯明皿	6.5	3.8	1.6	内外面：ロクロナデ	底部回転糸無調整b左回転 灯芯受部貼り付け 口縁部内外面に炭化物付着	92	75
CH056	17号遺構埋土１層	鉢	10.9	－	－	内外面：ロクロナデ		92	76
CH057	17号遺構埋土	擂鉢	－	－	－	外面：ロクロナデ		92	76
CH058	ピット655埋土	不明（台）	7.4	－	－	内外面：ロクロナデ		92	76
CH059	D19　２層	焼塩壺	－	7.7	－	外面：格子タタキ　内面：ロクロナデ		92	76
CH060	E17　２層	焼塩壺	5.4	－	－	外面：格子タタキ　内面：ロクロナデ	地元系　格子目が小さい	92	76
CH061	F18　２層	不明	－	－	－	内面：ナデ、抑え	外面に刻印？あり	－	76
CH062	１層・攪乱	不明	－	4.8	3.8	外面：ケズリ　内面：ロクロナデ	断面八角形　外面被熱痕	92	76
CH063	１層・攪乱	焼塩壺	－	6.2	－	外面：格子タタキ		92	76
CH064	１層・攪乱	焼塩壺（蓋）	－	6.2	－	内外面：ロクロナデ		92	76
CH065	１層・攪乱	焙烙	－	－	－	内外面：ロクロナデ	取っ手部分のみ　小孔あり	92	76

表41　武家屋敷地区第11地点出土土製品観察表
Tab.41　Notes on clay objects and figures from BK11

登録番号	出土場所	種類	素材	口径／長さ（cm）	底径／幅（cm）	器高／厚さ（cm）	特徴	図	図版
CO001	１号井戸 埋土３層	玩具　瓶？	軟質施釉	－	2.0	－	鉄釉　釉の剥落顕著 最大径3.5cm ロクロ成形　底部回転糸切痕ｂ？	97	81
CO002	ピット502 埋土	土人形　蟹	土師質	－	－	2.1	型作り　蟹を模したものか　甲羅部分に穿孔あり	97	81
CO003	ピット524 埋土１層	土人形　人物？	土師質	－	3.5	－	前後合型作り　底部に穿孔あり	97	81
CO004	13号遺構 埋土	玩具　瓶	軟質施釉？	2.6	2.9	6.9	鉄釉？　釉の剥落顕著　最大径4.8cm　ロクロ成形 右回転？　底部回転糸切痕ａ	97	81
CO005	17号遺構 埋土	玩具　碁石	土師質	2.2	－	0.6	手づくね	97	81
CO006	26号遺構A 層	土人形　人物	土師質	－	2.2	－	前後合型作り　中実　胡粉・雲母を塗布か	98	81
CO007	26号遺構 A 層相当	玩具　蓋	軟質施釉	2.8	－	1.2	透明釉？　施釉は外面のみ 緑色の彩色あり型作り	97	81
CO008	26号遺構礫群中、 26号遺構埋土上層	土人形　馬	土師質	13.4	7.0	－	左右合型作り　中空　脚部貼り付け　鞍等馬具の表現 馬の腹部と鞍の中央部に孔　内面に成形時の指圧痕	97	81
CO009	G14　A 層礫集中部	土人形　猪	土師質	－	－	－	左右合型作り　中空　体毛の表現　内面に指圧痕	98	81
CO010	F16　A 層	不明	土師質	－	－	－	墨書あり　中空？	98	81
CO011	F19　A 層	土人形　犬	土師質	－	－	－	左右合型作り　中実	98	81
CO012	E15　２層	玩具　碗	土師質	4.4	1.8	1.9	型作り　紅猪口を模したものか	98	81
CO013	H15　２層	玩具　硯	土師質	－	2.2	0.7	型作り？　胡粉・雲母を塗布か	98	81
CO014	１層・攪乱	玩具　土瓶？	土師質	－	3.8	－	ロクロ成形　注口部は剥落 左回転 底部回転糸切り痕ｂ	98	81

表42　武家屋敷地区第11地点出土瓦質土器観察表
Tab.42　Notes on fumed ceramics from BK11

登録番号	出土場所	種類	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	調整	特徴	図	図版
CG001	1号遺構下部埋土	火鉢	24.0	15.7	13.4	外面：掻き目、ミガキ 内面：ロクロナデ、ミガキ	脚部あり 胎土に砂粒（あるいはシャモットか）を含む	92	76
CG002	1号遺構下部埋土	擂鉢	21.4	6.6	8.6	内外面：ロクロナデ 口縁部軽いミガキ	ロクロ成形 擂目４条一組	92	77
CG003	1号遺構下部埋土	擂鉢	21.8	7.0	10.9	内外面：ロクロナデ	ロクロ成形 擂目４条一組	92	76
CG004	1号遺構下部埋土	擂鉢	－	9.1	－	外面：ロクロナデ　内面：調整不明	ロクロ成形 擂目がわずかに残存	92	77
CG005	1号遺構上部埋土	擂鉢	－	－	－	内外面：ロクロナデ 口縁部軽いミガキ	ロクロ成形 擂目６条一組 外面に把手状突起あり	93	77
CG006	7号遺構埋土	擂鉢	26.0	－	－	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ、軽いミガキ	ロクロ成形 擂目５条一組	93	77
CG007	7号井戸埋土1層	さな	径12.8	厚さ 0.9		外面：ナデ		93	77
CG008	7号井戸埋土1層	焜炉	19.6	－	－	外面：ミガキ　内面：ロクロナデ	窓あり 内部突起あり	93	77
CG009	24号遺構埋土下層	不明	－	－	－	内外面：ロクロナデ	ロクロ成形 脚部貼り付け 外面に剥落痕	93	77
CG010	24号遺構埋土下層	擂鉢	27.2	－	－	外面：ロクロナデ　内面：調整不明	ロクロ成形 擂目５条一組	93	78
CG011	11号建物 柱1	擂鉢	－	10.2	－	外面：ナデ	ロクロ成形 擂目５条一組	93	77
CG012	6号井戸埋土3層	不明	－	－	－	外面：軽いミガキ	脚部 手づくね	94	77
CG013	20号遺構埋土上層	甕	18.7	－	－	外面、口唇部：ミガキ　内面：ロクロナデ	ロクロ成形	94	78
CG014	20号遺構埋土上層	甕	18.7	－	－	外面、口唇部：ミガキ　内面：ロクロナデ	ロクロ成形	94	78
CG015	20号遺構埋土下層	蓋	長辺10.2 短辺8.6		5.3	内面：指抑え	型作りで成形後、沈線と刺突によって屋根を表現 寄棟屋根か	94	78
CG016	25号遺構埋土	不明	－	－	－	外面：ナデ、軽いミガキ　内面：ナデ		94	78
CG017	25号遺構埋土下層	炭櫃	－	30.0	27.0	内外面：ナデ	板作り	94	78
CG018	13号溝埋土	蚊遣り	－	22.8	－	外面：ロクロナデ、軽いミガキ 内面：ロクロナデ	ロクロ成形	94	79
CG019	13号溝埋土	不明	－	－	－	外面：軽いミガキ　内面：ナデ	板作り、L字部分は貼り付け	95	79
CG020	17号遺構埋土	蚊遣り	－	15.8	－	内外面：ロクロナデ	ロクロ成形 底部回転糸切無調整a右回転 脚部あり欠損	95	79
CG021	17号遺構埋土	鉢類	－	14.2	－	外面：ミガキ　内面：ロクロナデ	ロクロ成形 底部回転糸切無調整a	95	79
CG022	17号遺構埋土	さな	径13.1	厚さ 1.1		外面ナデ		95	79
CG023	17号遺構埋土	さな	径11.0	厚さ 1.3		外面ナデ		95	79
CG024	26号遺構埋土下層	蚊遣り	－	－	－	内外面：ロクロナデ	ロクロ成形	95	79
CG025	26号遺構埋土上層	十能	－	－	10.5	内外面：ナデ、軽いミガキ		95	79
CG026	12・14号溝埋土	蚊遣り（蓋）	21.4	－	－	外面：ロクロナデ	ロクロ成形 内面に炭化物多量に付着	95	79
CG027	12・14号溝埋土	不明	－	－	－	内面：筋目　外面：ナデ、線刻	全体に平坦	95	79
CG028	12・14号溝埋土	火消壺（蓋）	－	7.1	2.9	外面：ロクロナデ	ロクロ成形 内面底部回転糸切無調整	96	80
CG029	2号溝埋土	五徳	24.4	23.4	8.6	内外面：ロクロナデ　外面：軽いミガキ	ロクロ成形	96	80
CG030	G15A 層	五徳	18.3	－	－	外面：ミガキ　内面：ロクロナデ	ロクロ成形 外面に付着物	96	80
CG031	G15A 層	不明	－	－	13.5	外面：軽いミガキ 内面：ナデ、一部軽いミガキ	板作り　L字部分は貼り付け	96	80
CG032	H14 2層	不明	－	－	－	外面：ロクロナデ　内面：調整不明	ロクロ成形 外面：ロクロナデ、細かく不規則な圧痕、ミガキ	96	80
CG033	2a 層	五徳	－	－	－	内外面：ロクロナデ	ロクロ成形 外面に１条の沈線	96	80
CG034	1層・攪乱	火消壺（蓋）	14.1	7.9	3.1	内外面：ロクロナデ	ロクロ成形 底部回転糸切無調整a左回転 外面にごく浅い刺突	96	80

表43　武家屋敷地区第11地点出土軟質施釉陶器観察表
Tab.43　Notes on lead glazed soft ceramics from BK11

登録番号	出土場所	器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	備考	図	図版
CN001	2号溝埋土	焙烙	15.4	13.9	4.1	鉛釉　底部外面に炭化物付着	98	81
CN002	G15　2層	焙烙	13.0	10.0	3.6	把手付　鉛釉　底部無釉 底部外面、把手の一部に炭化物付着	98	81

表44　武家屋敷地区第11地点出土古代瓦観察表
Tab.44　Notes on ancient roof tile under for Nara and Heian periods at BK11

登録番号	出土場所	特徴	図	図版
T001	H14　A 層	厚さ 2.4cm。表面には格子状の布目、裏面には縄目あり。	99	82

表45　武家屋敷地区第11地点出土軒丸瓦観察表
Tab.45　Notes on round eaves tiles at BK11

登録番号	出土場所	瓦当文様	瓦当直径（cm）	瓦当内径（cm）	周縁幅（cm）	釘穴	備考	図	図版
T002	ピット757埋土	連珠三巴（左巻き）	−	−	1.9	−		99	82
T003	4 号井戸埋土 1 c 層	連珠三巴（左巻き）	−	−	2.1	−		99	82
T004	7 号遺構17層	三巴？（右巻き）	−	−	−	−		99	82
T005	21号遺構埋土下層	連珠三巴（左巻き）	−	−	1.7	−		99	82
T006	25号遺構埋土上層	連珠	−	−	2.0	−		99	82
T007	25号遺構埋土下層	連珠三巴（左巻き）	−	−	1.9	−		99	82
T008	30号遺構埋土上層	連珠三巴（左巻き）	−	−	1.6	−		99	82
T009	ピット537埋土	連珠三巴（左巻き）	−	−	1.8	−		99	82
T010	ピット765埋土	連珠三巴（左巻き）	−	−	1.8	−		99	82
T011	G17・18　A 層瓦集中部	連珠三巴（左巻き）	−	−	2.1	−		99	82
T012	H18 2 層	連珠三巴（左巻き）	−	−	1.9	−		99	82
T013	1 層・撹乱	菊花	−	−	−	−		99	82

表46　武家屋敷地区第11地点出土軒平瓦観察表
Tab.46　Notes on flat ezves tiles at BK11

登録番号	出土場所	瓦当文様	瓦当形状	瓦当垂長（cm）	頭幅（cm）	備考	図	図版
T014	ピット25埋土 1 層	四弁花＋唐草 6 類	木瓜	−	−	滴水瓦	99	82

表47　武家屋敷地区第11地点出土軒平瓦類観察表
Tab.47　Notes on a kind of flat ezves tiles at BK11

登録番号	出土場所	瓦当文様	瓦当形状	瓦当垂長（cm）	頭幅（cm）	備考	図	図版
T015	24号遺構埋土下層	細葉雪持笹＋唐草 4 類	太剣	5.3	−		100	82
T016	25号遺構埋土上層	細葉雪持笹＋唐草 2 類	並剣	4.5	−		100	82
T017	25号遺構埋土上層	細葉雪持笹＋唐草 2 類	太剣	5.4	−		100	82
T018	25号遺構埋土上層	四弁花＋唐草 3 d類	中剣	5.0	−		100	82
T019	27号遺構埋土上層	四弁花＋唐草 3 d類	−	−	−		100	82
T020	G7　B 層相当	細葉雪持笹＋唐草 4 類	並剣	4.0	−	T014 に類似	100	82
T021	G17・18　A 層瓦集中部	細葉雪持笹＋唐草 4 類	中剣	4.8	−		100	82

表48　武家屋敷地区第11地点出土丸瓦観察表
Tab.48　Notes on round roof tiles at BK11

登録番号	出土場所	胴長(cm)	頭幅(cm)	尻幅(cm)	玉縁長(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)	備考	図	図版
T022	1号井戸埋土4層	27.5	−	−	4.3	7.1	2.0		100	83
T023	25号遺構埋土上層	26.5	11.5	14.5	4.6	7.1	2.1		101	83
T024	25号遺構埋土上層	25.1	−	15.1	4.5	6.2	2.0		101	83
T025	25号遺構埋土上層	24.2	14.2	14.9	3.7	7.2	2.0		102	83
T026	25号遺構埋土上層	23.2	14.0	14.5	3.6	7.5	2.1	釘穴1	102	83
T027	25号遺構埋土上層	27.2	−	−	4.8	7.0	2.3		103	83

表49　武家屋敷地区第11地点出土丸瓦類観察表
Tab.49　Notes on a kind of round ezves tiles at BK11

登録番号	出土場所	胴長(cm)	頭幅(cm)	尻幅(cm)	玉縁長(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)	備考	図	図版
T028	24号遺構埋土下層	−	−	−	−	−	1.9	斜めに切られている	103	82

表50　武家屋敷地区第11地点出土平瓦観察表
Tab.50　Notes on flat roof tiles at BK11

登録番号	出土場所	長さ(cm)	頭幅(cm)	尻幅(cm)	谷深頭(cm)	谷深尻(cm)	厚さ(cm)	備考	図	図版
T029	4号井戸埋土2b層	27.0	25.0		2.7	−	1.5		103	84
T030	21号遺構埋土下層	25.2	21.8	−	2.3	−	1.8		104	84
T031	24号遺構埋土下層	26.1	−	25.0	−	4.3	2.0		104	84
T032	24号遺構埋土下層	−	−	−	−	−	2.1	隅切り瓦	104	84
T033	ピット34埋土2層	26.1	−	21.7	−	2.7	1.7		104	85
T034	11号遺構埋土	33.8	30.0	−	3.8	−	2.2	正方形	105	85
T035	25号遺構埋土下層	27.1	−	23.2	−	2.6	2.0		105	85
T036	25号遺構埋土上層	27.2	−	23.0	−	2.4	1.5		105	85
T037	25号遺構埋土上層	28.0	−	26.2	−	2.4	1.8		105	86
T038	H17 瓦集中部	28.3	25.0	−	−	−	−		106	86
T039	H17 瓦集中部	27.8	22.0	24.2	3.0	3.1	1.9		106	86
T040	H18　A層	27.0	22.7	25.7	1.8	1.5	2.0		106	86

表51　武家屋敷地区第11地点出土平瓦1類観察表
Tab.51　Notes on type 1 of flat tiles at BK11

登録番号	出土場所	長さ(cm)	頭幅(cm)	尻幅(cm)	谷深頭(cm)	谷深尻(cm)	厚さ(cm)	備考	図	図版
T041	24号遺構埋土下層	−	−	23.3	−	2.7	1.7	刻印？あり（幼虫のような痕）	109	89
T042	ピット34埋土2層	−	−	−	−	−	1.8	交差する線あり	106	87
T043	29号建物柱3	−	−	−	−	−	1.7	刻印あり（「□」）	109	89
T044	1層・撹乱	−	−	−	−	−	1.9	刻印あり（「四宮」）	109	89
T045	1層・撹乱	−	−	−	−	−	2.3	刻印あり（「V」字状）	109	89

表52　武家屋敷地区第11地点出土平瓦２類観察表
Tab.52　Notes on type 2 of flat tiles at BK11

登録番号	出土場所	長さ（cm）	頭幅（cm）	尻幅（cm）	谷深頭（cm）	谷深尻（cm）	厚さ（cm）	備考	図	図版
T046	24号遺構埋土上層	−	−	−	−	−	2.3	側面に３mm 四方の穴あり	106	87

表53　武家屋敷地区第11地点出土桟瓦類観察表
Tab.53　Notes on a kind of pan tiles at BK11

登録番号	出土場所	全長（cm）	全幅（cm）	きき幅（cm）	きき足（cm）	尻切込幅（cm）	頭切込幅（cm）	釘穴	備考	図	図版
T047	１層・撹乱	−	−	−	−	−	−	−	刻印あり（「V」字状）	109	89

表54　武家屋敷地区第11地点出土熨斗瓦観察表
Tab.54　Notes on ridge tiles at BK11

登録番号	出土場所	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	耳長（cm）	備考	図	図版
T048	24号遺構埋土下層	23.7	22.7	1.8	−	割熨斗が接合	107	87
T049	24号遺構埋土下層	−	10.3 〜 11.0	1.9	−	割熨斗　溝状の線あり　幅が一定でない	107	87
T050	ピット34埋土３層	−	11.2	1.6	−	割熨斗　細い線あり	107	87
T051	ピット34埋土２層	24.9	10.8	1.7	−	四辺整形	107	87
T052	13号溝埋土	−	12.7	1.8	−	溝状の線あり　四辺ほぼ整形	107	87

表55　武家屋敷地区第11地点出土面戸瓦観察表
Tab.55　Notes on filler tiles at BK11

登録番号	出土場所	長さ（cm）	幅（cm）	高さ（cm）	厚さ（cm）	備考	図	図版
T053	21号遺構埋土下層	10.5	−	−	2.4		107	88
T054	24号遺構埋土下層	8.6	−	−	1.7		107	88
T055	24号遺構埋土下層	9.8	14.4	6.1	1.7		107	88
T056	24号遺構埋土上層	10.0	−	−	1.8		108	88
T057	24号遺構埋土下層	9.7	−	−	1.8		108	88
T058	25号遺構埋土下層	9.4	−	−	1.6		108	88

表56　武家屋敷地区第11地点出土その他の瓦観察表
Tab.56　Notes on various roof tiles at BK11

登録番号	出土場所	種類	備考	図	図版
T059	１号遺構下部埋土	その他	谷丸瓦の一部か？	108	88
T060	24号遺構埋土下層	その他	谷丸瓦の一部か？	108	88
T061	24号遺構埋土上層	谷丸瓦	釘穴１	108	88
T062	25号遺構埋土下層	谷丸瓦（右）	垂れ下部が水平ではなく扁平な M 字形	108	88
T063	25号遺構埋土下層	特殊	線あり	109	89
T064	25号遺構埋土下層	特殊	斜線あり　左辺は線に沿って割れたと考えられる	109	89
T065	13号溝埋土	特殊	割れ面に溝状の線あり　若干湾曲	109	89
T066	H14 ２層	特殊	溝状の線あり　調整・焼成は瓦に近いが分類不明	109	89

表57　武家屋敷地区第11地点出土漆塗製品（椀）観察表
Tab.57　Notes on wooden implements with lacquer at BK11

登録番号	出土場所	種類	漆の色	法量	備考	図	図版
WL001	1号遺構下部埋土	漆椀（身）	内面：朱　外面：黒	底径5.5cm	孔2カ所　内面に被熱痕	110	89
WL002	1号遺構下部埋土	漆椀（身）	内外面：朱　文字：黒	底径6.0cm	文字「王」	110	89
WL003	1号遺構下部埋土	漆椀（身）	内外面：黒　文様：朱	−	文様あり	110	89
WL004	1号遺構下部埋土	漆椀（蓋）	内外面：黒　文様：朱	−	文様あり	110	89
WL008	1号遺構下部埋土	漆椀	内外面：黒　文様：朱	−	文様あり	−	90
WL009	1号遺構下部埋土	漆椀	内面：朱　外面：黒　文様：朱	−	文様あり	−	90
WL011	7号遺構埋土	漆椀（身）	内外面：黒　文様：朱	−	文様あり	−	90
WL013	24号遺構埋土下層	漆椀（蓋）	内面：黒　外面：黒　文様：朱	−	内面：三引両文　外面：三引両文3カ所	−	90
WL014	1号井戸埋土3層	漆椀？	内面：朱　外面：黒　文様・文字：朱	−	梅花文　高台内「忠」文字（朱）	−	90

表58　武家屋敷地区第11地点出土その他の漆塗製品観察表
Tab.58　Notes on wooden implements with lacquer at BK11

登録番号	出土場所	種類	漆の色	法量	備考	図	図版
WL005	1号遺構下部埋土	刳り物	内外面：黒	底径8.5cm	孔2カ所	110	90
WL006	1号遺構下部埋土	蓋	内外面：黒？	長さ21.0cm 高さ2.5cm 厚さ1.1cm	4カ所の孔あり　WL007と同一個体 孔で結束していたか	110	89
WL007	1号遺構下部埋土	蓋	内外面：黒？	直径21.2cm 厚さ1.0cm	6カ所の孔あり　WL006と同一個体 孔で結束していたか 取手の痕跡あり　塗りあり？	110	90
WL010	1号遺構埋土	箱状製品	内外面：黒	長さ14.6cm 幅2.5cm 厚さ0.3cm		110	90
WL012	19号遺構埋土3層	不明	内外不明：黒　文様：朱	−	点描文（朱）　漆膜のみ　箸か	−	90
WL015	11号遺構埋土	不明	内外不明：朱　文様：金	−	文様あり　漆膜のみ	−	90
WL016	17号遺構埋土	不明	黒	径3.0cm		110	90
WL017	B層相当	不明	内外不明：黒　文字：朱	−	文字あり　漆膜のみ	−	90

表59　武家屋敷地区第11地点出土下駄観察表
Tab.59　Notes on wooden clogs at BK11

登録番号	出土場所	種類	長（cm）	幅（cm）	高（cm）	備考	図	図版
W001	1号遺構下部埋土	丸型連歯下駄	21.1	9.8	5.8	底面に小石付着　W002と対か	111	91
W002	1号遺構下部埋土	丸型連歯下駄	21.3	9.9	6.1	表面に使用による指の凹み　底面に小石付着 W001と対か	111	91
W003	1号遺構下部埋土	角型露卯差歯下駄	19.8	9.0	9.1	表面に使用による指の凹み　底面に小石付着	111	91
W004	1号遺構下部埋土	差歯	−	−	8.6		111	91
W005	7号遺構埋土	連歯下駄	16.8	−	4.8	欠損が著しい	111	91
W006	1層・攪乱	丸型連歯下駄	22.6	10.1	2.7		111	91

表60　武家屋敷地区第11地点出土その他の木製品観察表
Tab.60　Notes on various wooden implements at BK11

登録番号	出土場所	種類	法量	備考	図	図版
W007	沢状遺構下部埋土	不明	厚さ0.5cm	孔あり	112	92
W008	1号遺構下部埋土	円板状木製品	直径14.3cm　厚さ0.3cm	砂付着あり	112	92
W009	1号遺構下部埋土	円板状木製品	直径21.2cm　厚さ0.8cm	側面に鉄釘2カ所　釘穴1カ所　調整痕あり	112	92
W010	1号遺構下部埋土	人形	長さ14.7cm　幅4.0cm　厚さ2.7cm	顔型の彫りがみられる	112	92
W011	1号遺構下部埋土	栓？	長さ9.5cm　幅1.8cm　厚さ0.9cm		112	92
W012	1号遺構下部埋土	不明	長さ10.0cm　幅1.3cm　厚さ0.3cm	刻みあり　文字か？	112	92
W013	1号遺構下部埋土	不明	長さ7.7cm　幅1.3cm　厚さ0.1cm		112	92
W014	1号遺構下部埋土	不明	長さ9.7cm　幅3.1cm　厚さ1.0cm	孔あり　板状2枚を樹皮紐で縛る	112	92
W015	1号遺構下部埋土	串状	幅1.0cm　厚さ0.3cm	上部は方形　下端は細く、略円形に加工	112	92
W016	1号遺構下部埋土	串状	幅0.7cm　厚さ0.6cm	上部は方形　下端は細く、略円形に加工	112	92
W017	1号遺構下部埋土	不明	長さ9.6cm　幅6.6cm　厚さ5.6cm	武家屋敷地区第7地点に類例あり	112	92
W018	1号遺構下部埋土	楯	直径44.0cm　厚さ2.4cm	加工痕顕著	113	92
W019	1号遺構下部埋土	木羽？	長さ20.9cm　幅2.0cm　厚さ0.1cm	小孔4カ所	113	93
W020	1号遺構下部埋土	木羽？	長さ14.4cm　幅2.0cm　厚さ0.1cm	小孔1カ所	113	93
W021	1号遺構下部埋土	不明	長さ8.8cm　幅4.7cm　厚さ0.8cm		113	93
W022	1号遺構下部埋土	物差	幅1.4cm　厚さ0.8cm	一目盛り＝1寸	113	93
W023	1号遺構下部埋土	櫛	厚さ1.3cm		113	93
W024	1号遺構上部埋土	木簡	長さ18.7cm　幅2.9cm　厚さ0.4cm	墨書あり（片面のみ）　033型式 「レ 冂 冖」	113	93
W025	7号遺構埋土	灯明台	台部11.3×9.3cm　厚さ1.0cm 皿部直径11.0cm　高さ1.6cm	皿と台を鉄釘で下から固定　付着物あり	113	93
W026	7号遺構埋土	木羽？	厚さ0.1cm	小孔1カ所	113	93
W027	7号遺構埋土	鞘？	厚さ0.5cm	黒色付着物あり　鞘を貼り合わせた痕跡か	113	93
W028	7号遺構埋土	部材	長さ32.0cm　幅1.4cm　厚さ0.6cm	木釘2カ所	114	93
W029	19号遺構埋土3層	コマ状木製品	長さ5.0cm　幅3.5cm	武家屋敷地区第7地点に類例あり	114	93
W030	17号遺構埋土	不明	長さ14.0cm　幅8.3cm　厚さ1.3cm		114	93
W031	1号遺構上部埋土	編物	−		−	93
W032	7号遺構埋土	俵	−		−	94
W033	7号遺構埋土	俵	−		−	94

表61　武家屋敷地区第11地点出土古銭観察表
Tab.61　Notes on coins from BK11

登録番号	出土場所	銭名	外径(mm)	穿径(mm)	重量(g)	備考	図	図版
MC001	沢状遺構埋土１層	皇宋通寶（篆書）	—	7	2.2	ほぼ完形　錆化顕著　北宋・1039年初鋳	119	96
MC002	沢状遺構埋土１層	天聖元寶（篆書）	24	6	2.1	一部欠損　錆化顕著　北宋・1023年初鋳	119	96
MC003	３号建物 柱３	開元通寶	24	7	2.3	完形　唐・621年初鋳	119	96
MC004	１号遺構下部埋土	永楽通寶	24	6	2.6	完形　明・1408年初鋳	119	96
MC005	１号遺構上部埋土	永楽通寶	24	6	2.4	完形　明・1408年初鋳	119	96
MC006	ピット178埋土	寛永通寶（古）	24	6	2.0	完形	119	96
MC007	32号建物 柱７	寛永通寶（新）	24	6	1.5	1/2欠損	119	96
MC008	15号溝埋土	不明	—	—	0.6	2/3欠損　錆化顕著　□□□寶？	—	96
MC009	１号井戸埋土３層	渡来銭	24	—	1.4	1/2欠損　□□通寶？	119	96
MC010	１号井戸埋土３層	渡来銭	—	—	0.9	2/3欠損　□□□寶？	—	96
MC011	10号遺構埋土	渡来銭	24	—	1.3	1/2欠損　皇宋通寶（真書・北宋・1039年初鋳）？	119	96
MC012	11号遺構埋土	不明	24	7	1.6	完形　錆化顕著　□□通寶？	119	96
MC013	25号遺構埋土下層	渡来銭	23	6	1.4	1/3欠損　やや変形	119	96
MC014	26号遺構Ａ層相当	渡来銭	24	7	2.0	1/5欠損　景祐元寶（篆書・北宋・1005年初鋳）？	—	96
MC015	３号溝埋土	寛永通寶（新）	25	6	1.4	2/5欠損　文銭	119	96
MC016	７号井戸埋土１層	寛永通寶（古）	24	6	2.7	完形	119	96
MC017	１号暗渠蓋上埋戻土	寛永通寶（新）	—	7	1.1	ほぼ完形　変形　錆化顕著	—	96
MC018	１号暗渠蓋上埋戻土	寛永通寶（新）	25	6	2.7	一部欠損　文銭	119	96
MC019	Ｆ8　Ｂ層相当	渡来銭	—	—	0.5	1/4 のみ残存　錆化顕著　□元□寶？	119	96
MC020	Ｅ14　Ａ層	寛永通寶（古）	24	6	2.7	ほぼ完形	119	96
MC021	Ｅ18　Ａ層	寛永通寶（古）	24	6	2.9	完形	119	96
MC022	Ｆ19　Ａ層	寛永通寶（古）	24	6	1.9	完形　やや変形	119	96
MC023	Ｇ18　Ａ層	寛永通寶（古）	24	5	2.7	ほぼ完形	119	96
MC024	Ｉ14　Ａ層	寛永通宝（新）	23	5	3.0	完形　鉄銭	119	96
MC025	Ｈ17　２層	寛永通寶（新）	24	6	2.2	完形　延尾永	119	96
MC026	Ｈ17　２層	寛永通寶（古）	24	—	1.6	1/2欠損	119	96
MC027	Ｈ14　２層	寛永通寶（古）	25	6	3.0	完形	119	96
MC028	１層・攪乱	百円銀貨	22	—	4.5	完形　昭和33年	—	96
MC029	１層・攪乱	1セント	19	—	2.8	完形　アメリカ合衆国	—	96
MC030	１層・攪乱	寛永通寶（新）	23	6	3.0	完形	119	96
MC031	１層・攪乱	寛永通寶（古）	24	6	2.5	完形	119	96
MC032	１層・攪乱	永楽通寶	25	6	2.0	一部欠損　錆化顕著　明・1408年初鋳	119	96

渡来銭か日本での写しかについては、区別がはっきりしないので、すべて渡来銭として記載している

表62　武家屋敷地区第11地点出土煙管雁首観察表
Tab.62　Notes on pipes (stems and bowls) from BK11

登録番号	出土場所	全体形状	火皿形状	接合方法	首部アワセメ	全長(mm)	火皿直径(mm)	ラウ口直径(mm)	備考	図	図版
MO001	12・14号溝埋土	ＩＣ	2a	2	下	27.0	12.5	12.8	火皿やや変形	115	94
MO002	Ｈ19　Ａ層	ＩＢ	—	—	左	—	—	9.5×10.2		115	94
MO003	Ｇ18　２層	ＩＢ	1a	3	左	46.0	16.8	12.6×5.6		115	94
MO004	Ｉ17　２層	ⅡＢ	—	—	左	—	—	7.9		115	94

表63　武家屋敷地区第11地点出土煙管吸口観察表
Tab.63　Notes on pipes (mouth pipes) from BK11

登録番号	出土場所	全体形状	全長(mm)	ラウ口直径(mm)	吸口直径(mm)	備考	図	図版
MO005	13号溝埋土	ⅡＡ	52.6	8.6	5.5	線彫りによる七宝繋ぎ文	115	94
MO006	Ｈ14　２層	ⅡＡ	61.3	10.5	—	内部にラウ遺存	115	94
MO007	Ｉ17　２層	ⅡＢ	55.7	8.2	—	内部にラウ遺存	115	94
MO008	１層・攪乱	ⅡＢ	66.8	10.3×8.7	6.2		115	94
MO009	１層・攪乱	ⅡＢ	68.4	11.2	7.1		115	94

表64　武家屋敷地区第11地点出土その他の銅製品観察表
Tab.64　Notes on various implements made of copper from BK11

登録番号	出土場所	種類	特徴・法量など	図	図版
MO010	1号遺構下部埋土	小柄の柄	幅1.2cm　厚さ0.3cm　片面に桐・梅・唐草の文様あり	116	95
MO011	25号遺構埋土下層	匙	長さ17.5cm 匙幅2.3cm 柄幅0.4cm 厚さ0.2cm	116	95
MO012	26号遺構埋土上層	留金具	長さ2.0cm　幅1.0cm　厚さ0.8cm	117	95
MO013	ピット368埋土	小柄の柄	柄長さ9.1cm　幅1.2cm　厚さ0.5cm　片面に渦巻き状の文様あり	117	95
MO014	G18　A層	柄付道具	柄幅1.4cm　柄厚さ1.7cm　柄の内部に木質残存	117	95
MO015	F16　A層	組紐付金属	長さ2.6cm　幅1.3cm　厚さ0.6cm　内部に組紐残存	117	95
MO016	F18　2層	鈎針	長さ5.4cm　幅2.7cm　径0.3cm	117	95
MO017	I17　2層	小柄の柄	柄長さ9.9cm　幅1.4cm　厚さ0.6cm　片面に文様あり　機織の杼と糸の文様か	117	95
MO018	1層・攪乱	商標	長さ3.3cm　幅4.7cm　厚さ0.03cm 刻印「實用新案第二四六六四號岡本式階段三脚托架製造發賣元山崎嘉吉」	—	95

表65　武家屋敷地区第11地点出土鉄製品観察表
Tab.65　Notes on various implements made of iron from BK11

登録番号	出土場所	種類	特徴・法量など	図	図版
MO019	沢状遺構埋土埋土6層	小刀	長さ23.6cm　厚さ0.8cm　柄部に小孔あり　錆化顕著	118	95
MO020	1号遺構下部埋土	鏃	長幅3.9cm　短幅2.6cm	118	95
MO021	1号遺構下部埋土	小刀	長さ16.9cm　厚さ0.3cm　柄に小孔あり	118	95
MO022	10号遺構埋土	棒状	長さ5.7cm　幅2.0cm　厚さ1.5cm　錆化顕著	118	95
MO023	10号溝埋土	鉄銭？	径2.6cm　錆化顕著	118	95
MO024	F18　A層	取手	長幅10.0cm　短幅5.8cm　径1.0cm	118	95

表66　武家屋敷地区第11地点出土鉛製品観察表
Tab.66　Notes on a implement made of lead from BK11

登録番号	出土場所	種類	特徴・法量など	図	図版
MO025	24号遺構埋土下層	不明	径2.4cm　厚さ0.3cm　鉛か	118	95

表67　武家屋敷地区第11地点出土石器・石製品観察表
Tab.67　Notes on stone tools and stone implements at BK11

登録番号	出土場所	器種	長さ（mm）	幅（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	石材	備考	図	図版
S001	ピット247埋土	石鏃	43.1	13.5	6.4	3.3	頁岩		120	97
S002	沢状遺構埋土1層	石鏃	15.4	13.4	2.7	0.5	玉髄	先端部折損	120	97
S003	G15 A層	使用痕ある剥片	43.8	69.4	14.5	38.4	玉髄	微小剥離痕が認められる	120	97
S004	26号遺構埋土上層	火打石	11.9	22.2	10.9	2.5	メノウ		120	97
S005	6号溝埋土1層	火打石	16.9	23.8	11.6	5.4	メノウ		120	97
S006	E18　A層	火打石	18.1	30.4	20.0	11.3	メノウ		120	97
S007	24号遺構埋土下層	砥石	31.5	19.0	4.8	3.4	凝灰岩		120	97
S008	25号遺構A層相当	碁石	21.2	21.1	3.1	2.3	粘板岩	正円　薄型	120	97
S009	25号遺構埋土上層	碁石	21.2	21.2	4.8	3.6	粘板岩	正円　薄型	120	97
S010	6号溝埋土1層	碁石	21.4	18.6	11.8	6.5	粘板岩	楕円　厚型	120	97
S011	6号溝埋土1層	碁石	23.9	18.5	8.3	5.1	粘板岩	楕円　厚型	120	97
S012	ピット180埋土	硯	98.8	55.7	14.8	118.9	粘板岩		120	97
S013	13号溝埋土	硯	141.2	64.2	20.0	338.4	粘板岩	背面に刻字あり	120	97

５．分析

（１）仙台城跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

①　測定対象試料

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点は、宮城県仙台市青葉区川内41（北緯38° 15′ 41″、東経140 ° 51′ 07″）に所在する。測定対象試料は、沢状遺構から出土した木片３点（No. １～３：IAAA －82587 ～ 82589）である。

②　測定の意義

沢状遺構から年代の判明する遺物が出土していないため、遺構の年代を明らかにしたい。江戸時代の遺構であるのか、それより古い時代のものであるのかを年代測定によって検討したい。

③　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

（２）酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では 1N の塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では、1N の水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお、AAA 処理において、アルカリ濃度が 1N 未満の場合、表中に AaA と記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では 1N の塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。

（３）試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で 30分、850℃で２時間加熱する。

（４）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

（５）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。

（６）グラファイトを内径１㎜のカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

④　測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした ^{14}C － AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたショウ酸（HO_X Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

⑤　算出方法

（１）年代値の算出には、Libby の半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。

（２）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（OyrBP）として遡る年代である。この値は、$\delta^{13}C$ によって補正された値である。^{14}C 年代と誤差は、１桁目を四捨五入して 10年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（± １ σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2％であることを意味する。

（３）$\delta^{13}C$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。

加速器により $^{13}C/^{12}C$ を測定した場合には表中に（AMS）と注記する。

（４）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。

（５）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（１σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（２σ＝95.4％）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い、OxCalv4.0較正プログラム（Bronk Ramsey 1995　Bronk Ramsey 2001　Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

⑥　測定結果

沢状遺構から出土した木片３点の ^{14}C 年代は、890±30yrBP、200±30yrBP、550±30yrBP である。測定対象試料は、樹皮が残存する木片であり、その枯死・伐採年代を反映する年代が示されると予想された。暦年較正年代（１σ）から判断すると、３点の年代は異なり、11世紀後半から12世紀（No. １）、17世紀後半から20世紀前半（No. ２）、14世紀から15世紀初頭（No. ３）に分かれる。各試料の埋没状況や遺構の性格等を考慮して、遺構の年代を特定する必要がある。なお、No. ２は暦年較正年代範囲が広いが、その理由として、暦年較正曲線の歪みがあげられる。この歪みは、化石燃料の燃焼による大気中の ^{14}C 濃度の希釈効果（Suess 効果）を反映したものである。試料の炭素含有率は 50 ～ 60％ほどであり、木片としては十分な値であった。化学処理および測定内容にも問題が無く、測定結果の精度を保証するものである。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}C$（‰）（AMS）	$\delta^{13}C$ 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-82587	No.1	遺構：沢状遺構	木片	AAA	−31.57±0.60	890±30	89.51±0.34
IAAA-82588	No.2	遺構：沢状遺構	木片	AAA	−23.35±0.60	200±30	97.52±0.36
IAAA-82589	No.3	遺構：沢状遺構	木片	AAA	−30.59±0.80	550±30	93.42±0.37

［＃2699］

測定番号	$\delta^{13}C$ 補正なし		暦年較正用（yrBP）	１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-82587	1,000±30	88.31±0.32	889±30	1052AD-1081AD（21.1%） 1127AD-1135AD（ 4.8%） 1152AD-1209AD（42.3%）	1041AD-1109AD（34.4%） 1116AD-1218AD（61.0%）
IAAA-82588	170±30	97.86±0.35	201±30	1658AD-1680AD（19.8%） 1764AD-1801AD（34.7%） 1939AD-1952AD（13.7%）	1646AD-1689AD（25.9%） 1730AD-1810AD（51.4%） 1926AD-1955AD（18.1%）
IAAA-82589	640±30	92.35±0.33	546±31	1326AD-1344AD（21.4%） 1394AD-1424AD（46.8%）	1313AD-1358AD（36.7%） 1387AD-1435AD（58.7%）

［参考値］

参考文献

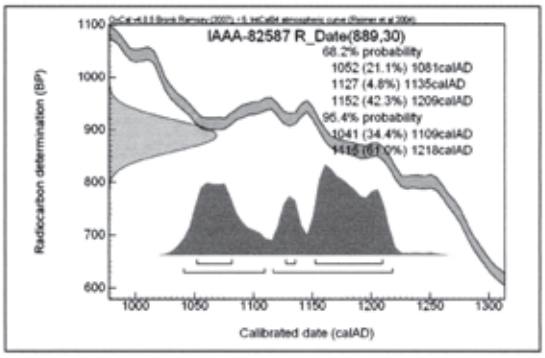
Stuiver M. and Polash H. A. 1997 Discussion : Reporting of 14C data, *Radiocarbon* 19, 355-363

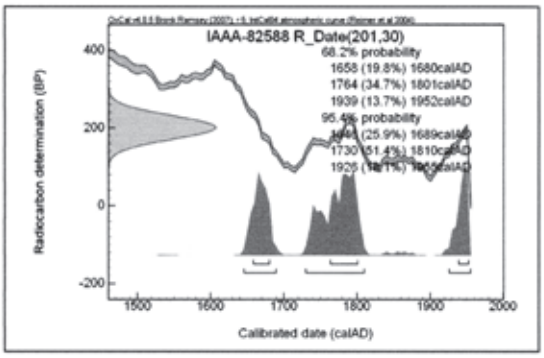
Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarnon calibration and analysis of stratigraphy : the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430

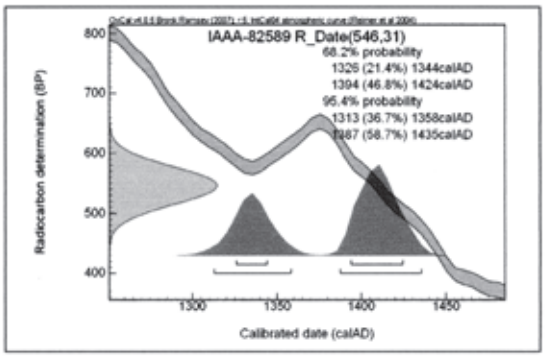
Bronk Ramsey C. 2001 Development of the radiocarbon Program OxCal, *Radiocarmon* 43(2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389

Reimer, P. J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, O-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058







［参考］暦年較正年代グラフ

（2）仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点（BK11）より出土した種実遺体

吉川純子（古代の森研究舎）

① はじめに

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点は二の丸の北方に位置し、近世に武家屋敷が置かれていたが、本地点の遺構の詳細な年代は不明である。本地点では池と考えられる1号遺構と1号井戸のほかは使用目的不明の土坑である。当時の植物利用を調査する目的でこれら遺構から出土した種実遺体の同定を行った。

② 同定結果

表１に種実試料の同定結果を示した。以下に同定された種実のうち、特筆すべき種実遺体の形態記載を行う。

表68　武家屋敷地区第11地点出土種実観察表
Tab.68　Notes on seeds and nuts at BK11

種No.	遺構	区	層位	分類群	部位	個数
1	沢状遺構	E･F －4･5	埋土上面落ち込み撹乱	モモ	核完形	1
2	沢状遺構	E･F －4･5	埋土上面落ち込み撹乱	モモ	核完形	1
3	1号遺構	E －2	下部埋土	オニグルミ	内果皮風化	1
4	1号遺構	E －2	下部埋土	オニグルミ	内果皮風化	1
5	1号遺構	F －4	下部埋土	オニグルミ	内果皮半分割跡	1
6	1号遺構	F －3	下部埋土	オニグルミ	内果皮半分割跡	1
7	1号遺構	F －4	下部埋土	オニグルミ	内果皮半分割跡	1
8	1号遺構	F －3	下部埋土	オニグルミ	内果皮風化	1
9	1号遺構	E －3	下部埋土	オニグルミ	内果皮風化	1
10	1号遺構	F －3	下部埋土	オニグルミ	内果皮半分割跡	1
11	1号遺構	－	下部埋土	オニグルミ	内果皮半分割跡	1
12	1号遺構	E －3	下部埋土	オニグルミ	内果皮風化	1
13	1号遺構	E －3	下部埋土	モモ	核半分	1
14	1号遺構	E －3	下部埋土	オニグルミ	内果皮半分割跡	1
15	1号遺構	E －3	下部埋土	オニグルミ	内果皮半分割跡	1
16	1号遺構	E －3	下部埋土	オニグルミ	内果皮半分割跡	1
17	1号遺構	E －3	下部埋土	オニグルミ	内果皮半分割跡	1
18	1号遺構	F －4	下部埋土	オニグルミ	内果皮半分割跡	1
19	1号遺構	F －4	下部埋土	モモ	核完形	1
20	7号遺構	F －7	埋土	モモ	核完形	1
21	7号遺構	F －7	埋土	クリ	果皮破片	1
22	7号遺構	F －7	埋土	コナラ属	虫えい	1
23	7号遺構	F －7	埋土	コナラ属	虫えい	1
24	7号遺構	F －7	埋土	コナラ属	虫えい	1
25	7号遺構	F －7	埋土	コナラ属	虫えい	1
26	7号遺構	F －7	埋土	コナラ属	虫えい	1
27	19号遺構	－	埋土２層	モモ	核半分	1
28	19号遺構	－	埋土３層	オニグルミ	内果皮半分割跡	1
29	19号遺構	－	埋土上層	オニグルミ	内果皮風化	1
30	26号遺構	G －17	埋土下層	モモ	核半分炭化	1
31	1号井戸	－	埋土下層	オニグルミ	内果皮風化	1
32	1号井戸	－	埋土下層	オニグルミ	内果皮風化	1
33	1号井戸	－	埋土下層	オニグルミ	内果皮食痕	1
34	1号井戸	－	埋土下層	オニグルミ	内果皮破片	1
35	1号井戸	－	埋土下層	オニグルミ	内果皮半分割跡	1
36	1号井戸	－	埋土下層	オニグルミ	内果皮食痕	1
37	1号遺構	F －4	下部埋土	酸化鉄		

コナラ属：細長い鱗片が集合したような形状の虫えい、いわゆる虫こぶを出土した。虫えいは樹種や虫の種類によって形が異なり、ある程度分類が可能である。この形状の虫えいはコナラ属に比較的頻繁に見られる。

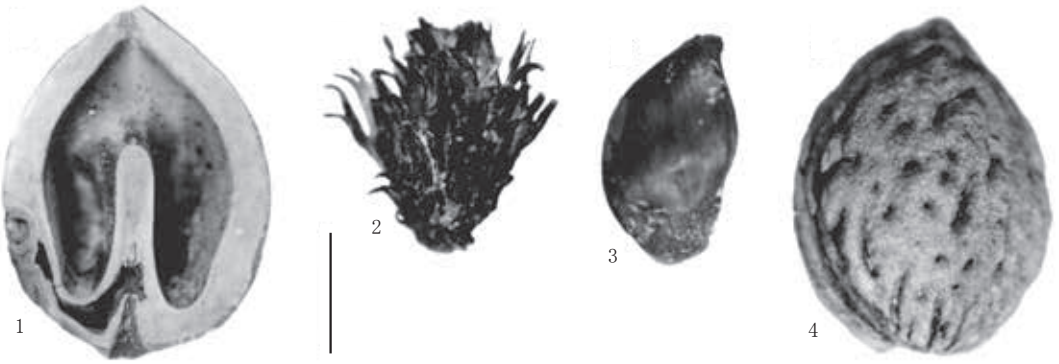
③　出土種実からみた当時の植物利用

表２に遺構別出土種実をまとめた。池と見られる１号遺構からはわずかにモモを出土した。1号井戸からはオニグルミを出土している。そのほかの使用目的不明の土坑は、１号遺構からはオニグルミをやや多く出土し、ほかにモモを出土した。７号遺構からはコナラ属虫えいとクリ、モモを、19号遺構からはオニグルミとモモを、26号遺構からはモモを出土したが、いずれも少量である。

時期や使用目的が不明の土坑と言うことで詳細な検討はできないが、仙台城二の丸ではオニグルミ、コナラ属などが生育していたと考えられる。また、モモは核の大きさから食用とされる種類であると考えられるが、出土数はそれほど大量ではない。食用として栽培されていたか食用後に核だけ廃棄されたと思われる。

表69　武家屋敷地区第11地点遺構別出土種実
Tab.69　Count the seeds and nuts from the each features at BK11

分類群名		出土部位＼遺構	沢状遺構	１号遺構	７号遺構	19号遺構	26号遺構	１号井戸
オニグルミ	*Juglans mandshurica* Maxim.	内果皮半分割跡	－	10	－	1	－	1
	Var. *sachalinensis*（Miyabe et Kudo）Kitamura	内果皮破片	－	－	－	－	－	1
		内果皮食痕	－	－	－	－	－	2
		内果皮風化	－	5	－	1	－	2
コナラ属	*Quercus*	虫えい	－	－	5	－	－	－
クリ	*Castanea crenate* Sieb.et Zucc.	果皮破片	－	－	1	－	－	－
モモ	*Prunus persica* Batsch.	核完形	2	1	1	－	－	－
		核半分	－	1	－	1	－	－
		核半分炭化	－	－	－	－	1	－



１．オニグルミ、内果皮半分割跡（種 No.7）　２．コナラ属、虫えい（25）　３．クリ、果皮破片（21）　４．モモ、核（20）

図121　武家屋敷地区第11地点出土種実
Fig.121　Seeds and nuts from BK11

（3）動物遺存体

川口貴史（東松島市奥松島縄文村歴史資料館）

武家屋敷地区第11地点からは動物遺存体が出土している（表70 ～ 74、図版98・99）。同定作業の結果、貝類9種類、魚類2種類、鳥類2種類、哺乳類4種類が確認された。同定に当たっては、奥松島縄文村歴史資料館（東松島市）および東北大学考古学研究室所蔵の骨格標本を使用させていただいた。

貝殻の一部にはカルシウム分の溶脱が進んで脆弱なものがある。水分の豊富な湿地状の遺構から出土した骨類の多くは、茶褐色に変色していた。脆弱な資料体は、樹脂（パラロイド B72）により保存処理が施された。

同定された動物遺存体の種名一覧を表70 に示す。

表70　武家屋敷地区第11地点出土動物遺存体種名表
Tab.70　List of animal remains from BK11

腹足綱　Gastropoda
　アワビ属　*Nordotis sp.*
　アカニシ　*Rapana venosa venosa*
　ヒメエゾボラ　*Neptunea arthritica*
二枚貝綱　Bivalvia
　アカガイ属　*Scapharca sp.*
　シジミガイ科　Corbiculidae gen. et sp. indet.
　マガキ　*Crassostrea gigas*
　アサリ　*Ruditapes philippinarum*
　シオフキガイ　*Mactra veneriformis*
　ウバガイ　*Pseudocardium sachalinense*
硬骨魚綱　Osteichthyes
　スズキ　*Lateolabrax japonicus*
　マダイ　*Pagrus major*
鳥綱　Aves
　ガンカモ科　Anatidae gen. et sp. indet.
哺乳綱　Mammalia
　イヌ　*Canis familiaris*
　ニホンジカ　*Cerves nippon*
　ウシ　*Bos taurus*
　ヒト　*Homo sapiens sapiens*

【貝類】

遺構により出土する貝の組成は異なる。最も多く確認されたのはアカニシで、最小個体数22 を数える。1 号遺構、7号遺構から出土している。これらの遺構では、アワビ属（最小個体数４）、ヒメエゾボラ（最小個体数２）、マガキ（最小個体数１）が共伴している。このほか 25号遺構からアサリ、1号暗渠からはシジミガイ科が確認されている。また、アサリ、シオフキガイ、ウバガイ、シジミガイ科、アカガイ属などが遺構外の層位から出土している。

以下、種類ごとに出土状況を記載する。

アワビ属は、1号遺構、7号遺構から出土している。とくにカルシウム分の溶脱が進んでおり、他の貝種と比べてより脆弱な状態にある。原形を保持しているものは、ともに採取された周囲の土壌によってかろうじて形をとどめている場合が多く、形態的な特徴が不明瞭である。そのため属レベルで同定をとどめた。ただし、クロアワビ（*Nordotis discus discus*）か、その北方型であるエゾアワビ（*N.d.hannai*）である可能性が高い。また、破片化している資料も比較的多く回収されている。

アカニシは、1号遺構、7号遺構から出土している。形をとどめた資料が比較的多く回収されており、これらの残存状態を勘案して最小個体数を算定した。このほかに、破片資料も多く回収されている。

ヒメエゾボラは 1号遺構から 1点、7号遺構から 1点確認された。分解が進み、非常に脆弱な状態である。本種は東北地方において「ツブ」と俗称される貝のひとつである。

シジミガイ科は、A 層および 1号暗渠から 1点ずつ出土している。淡水性のマシジミ（*Corbicula leana*）か汽水性のヤマトシジミ（*Corbicula japonica*）のいずれかであると考えられるが、区別はできなかった。

マガキは 1号遺構から完形に近い右殻が出土しているほか、17号遺構、18号遺構からマガキとみられる若干の

小破片が出土している。

アサリは25号遺構および2層からの出土である。殻頂部で最小個体数を算定している。殻頂部を欠く破片資料は少ない。

シオフキガイは右殻1点のみ、2層から確認された。

ウバガイは、1層から右殻が1点と、ウバガイと見られる破片が2層およびⅠ層から少量出土している。一般にホッキガイとも呼ばれる貝である。

アカガイ属は、Ⅰ層から破片1点のみの確認である。アカガイ（*S. broughtonii*）あるいはサトウガイ（*S. satowi*）と考えられる。

【魚類】

スズキおよびマダイが同定された。それぞれ遺構内からの出土である。

スズキは、腹椎1点が6号井戸から確認された。被熱により白色化している。また、金属器により鋭く半裁されたような残存情況を呈する。

12号遺構からマダイの歯骨1点と、タイ科と同定される尾椎が1点確認された。ともに茶褐色に変色している。

【鳥類】

ガンカモ科と考えられる骨が確認された。ガンカモ科鳥類は属する種が多く、互いに類似した外観の骨格を有しており、部位骨からの種の同定が困難なため、大きさでおおよその区別をおこなった。マガモと同程度のサイズのものと、マガンと同程度のサイズのものの2種類が確認された。

マガモと同程度のサイズとみられるものは、上腕骨（近位）と肩甲骨（近位）が1点ずつ12号遺構で確認された。肩甲骨は、被熱して灰白色に変色している。上腕骨には際立った変色はみとめられない。

マガンと同程度のサイズとみられるものは、1号遺構の下部埋土から、手根中手骨の遠位、第三指基節骨、第三指末節骨が出土している。この3点は連結する部位であり、出土状況から同一個体のものと考えられる。いわゆる「手羽」のもっとも先端に当たる部位である。いずれも茶褐色に変色している。

【哺乳類】

イヌ、ニホンジカ、ウシ、ヒトが同定された。

イヌは、1号遺構から前肢および体幹部の部位骨が確認された。前肢は下部埋土からの出土で、上腕骨、撓骨、尺骨の３点である。尺骨と撓骨は同一個体のものであるが、出土状況から判断して、上腕骨も同一個体のものである可能性が高い。上腕骨、撓骨、尺骨のいずれも両骨端部が欠損しており、化骨状況は確認できない。骨端部の欠損により有効な計測値を求められないが、小型犬として知られる縄文犬などと比べると大柄な個体である。骨表面は淡い茶褐色に変色しており、部分的にビビアナイトの析出が観察された。体幹部にあたる頸椎・胸椎・肋骨は、上部埋土および下部埋土から出土している。椎骨はいずれも椎体と椎板との癒合が完了している。いずれも茶褐色に変色している。重複する部位がなく、またサイズ的にも近似することから、これらが同一個体に由来する可能性も考えられる。

また、イヌに似た特徴を有する踵骨が1号遺構の下部埋土から出土している。骨端部の化骨は完了しているが、現生のタヌキと同程度のサイズであり、イヌとしては非常に小さい。現生骨格標本との比較が不充分であるため、本報告ではイヌ科として扱った。被熱により白色化し、骨表面の収縮ひびわれが見られる。

ニホンジカは、25号遺構から上腕骨遠位、E18区のA層から腰椎が確認された。またD17区のA層からニホンジカと思われる基節骨の遠位が出土している。25号遺構出土の上腕骨は遠位端の化骨が終了している。際立っ

た変色は認められないが、風化がすすみ、骨表面の剥落が観察された。A 層出土の腰椎は、椎板と椎体との癒合が完了したものである。保存状態は良好だが、前半部は失われている。

ウシは、ピット34から遊離した上顎第4前臼歯が1点確認された。部分的に茶褐色および青灰色に変色している。

ヒトは、7号遺構から左の腓骨が確認された。両骨端を欠いており、茶褐色に変色している。

表71　武家屋敷地区第11地点出土貝類集計表
Tab.71　List of Mollusca from BK11

出土場所	出土貝類	最小個体数
沢状遺構埋土1層	マガキ（R）	1
沢状遺構埋土上面（落込）	アカニシ	2
1号遺構下部埋土	アカニシ	17
	アワビ属	3
	ヒメエゾボラ	1
1号遺構上部埋土	アカニシ	1
7号遺構埋土	アカニシ	2
	アワビ属	1
	ヒメエゾボラ	1
17号遺構埋土	マガキ？（破片）	−
18号遺構埋土1層	マガキ？（破片）	−
25号遺構A層相当	アサリ（L）	2
	アサリ（R）	3
25号遺構埋土	アサリ（L）	1
27号遺構埋土	不明（破片）	−
1号暗渠蓋上埋戻土	シジミガイ科（L）	1
2号溝埋土	不明（破片）	−
13号溝埋土	不明（破片）	−
1層・攪乱	アワビ属（破片）	−
	ウバガイ（R）	1
	シジミガイ科（R）	1
2層	アサリ（L）	1
	アサリ（R）	1
	シオフキ（R）	1
	ウバガイ？（破片）	−
A層	シジミガイ科（R）	1
2a層	ウバガイ？（破片）	−
	アカガイ属（破片）	−

表72　武家屋敷地区第11地点出土魚類集計表
Tab.72　List of Pisces (fish) from BK11

出土場所	種名	部位
6号井戸内部埋土	スズキ	腹椎
12号遺構埋土	マダイ	歯骨
	タイ科	尾椎

表73　武家屋敷地区第11地点出土鳥類集計表
Tab.73　List of Aves from BK11

出土場所	種名	部位
12号遺構埋土	ガンカモ科（マガモサイズ）	上腕骨（近位、L）
13号遺構埋土	ガンカモ科（マガモサイズ）	肩甲骨（近位、R）
14号遺構埋土	鳥類・種不明	長管骨（破片）
1号遺構下部埋土	ガンカモ科（マガンサイズ）	手根中手骨（遠位、L）
	ガンカモ科（マガンサイズ）	第3指基節骨（R）
	ガンカモ科（マガンサイズ）	第3指末節骨（R）

表74　武家屋敷地区第11地点出土哺乳類集計表
Tab.74　List of Mammalia from BK11

出土場所	種名	部位
1号遺構上部埋土	イヌ	第2頸椎
	イヌ	第3頸椎
	イヌ	第4頸椎
	イヌ	胸椎
	イヌ	胸椎
	イヌ	肋骨（近位、R）
	イヌ	肋骨（骨幹部）
	イヌ	肋骨（骨幹部）
1号遺構下部埋土	イヌ	上腕骨（骨幹部、L）
	イヌ	撓骨（骨幹部、L）
	イヌ	尺骨（骨幹部、L）
	イヌ	胸椎
	イヌ	胸椎
	イヌ	肋骨（近位、R）
	イヌ	肋骨（近位、R）
	イヌ	肋骨（骨幹部）
	イヌ科	踵骨（R）
7号遺構埋土	ヒト	腓骨（骨幹部、L）
25号遺構埋土上層	ニホンジカ	上腕骨（遠位、R）
ピット34埋土2	ウシ	上顎第4前臼歯（L）
D17　A層	ニホンジカ	腰椎
	ニホンジカ？	基節骨（遠位）
H15　2層	種不明	不明

６．まとめ

二の丸北方武家屋敷第11地点の調査は、調査面積1,401㎡という、東北大学が実施した武家屋敷地区の調査としては、第４地点（年報13）・第７地点（年報19）に続く、３ヶ所目の大規模調査となった。今回の調査区は、後世の削平も多く、遺構の残存状況は必ずしも良好ではなかった。それでも、掘立柱建物をはじめ、多数の遺構が発見された。また、遺物も江戸時代初頭から明治初頭に至る、各時期の多様なものが出土している。ここでは、調査の成果を概観するとともに、いくつかの点について若干の検討を加え、まとめに代えておきたい。

（１）検出遺構について

①屋敷区画と検出遺構の関係

検出遺構を考えるに際しては、調査区域と、絵図に描かれた屋敷地の区画との関係について、検討しておくことが必要となる。しかし、第Ⅴ章２において検討しているように、二の丸北方の武家屋敷地区では、道路が明治時代に大きく改変されており、江戸時代の道路の位置を復元することが容易でない。特に、東西方向の道路の位置復元が難しい。そのような限界を踏まえて、今回の調査区が、どの屋敷地に相当する可能性が高いと考えられるのかを検討してみたい。

今回の第11地点の調査区は、東西方向の道路では「亀岡通」と「中ノ坂通」にはさまれ、南北方向の道路では「裏下馬通」の東側にあたり、現在グランドとの境となっている段丘崖との間の区域に相当することは、間違いがないものと思われる（図122）。その中での細かな位置関係については、道路の位置復元によっては、変わってくることとなる。

東西方向の道路との関係で見ると、今回の調査区が、北側の「亀岡通」に面した区画か、南側の「中ノ坂通」に面した区画か、あるいはその両方にまたがるのかが問題となる。第Ⅴ章２で示した道路の復元からは、今回の調査区は、南側の「中ノ坂通」に面した区画に相当する可能性が高い。しかし、「亀岡通」と「中ノ坂通」の位置が、推定より南側に存在した場合には、今回の調査区に、北側の「亀岡通」に面した区画が入ってくる可能性は残っている。

南北方向の道路である、「裏下馬通」は、千貫橋の石垣が現存することから、ほぼ正確な位置で復元できていると思われる。一方、東側に存在する段丘崖については、絵図のいくつかに、描かれているものがある。千貫沢の脇の「筋違橋通」に沿っている屋敷は、「裏下馬通」から３区画目の屋敷が不整形となっている。図122の１に示した、元禄４・５年（1691・92年）の『仙台城下五釐卦絵図』では、矢印で示した「成田助之丞」の屋敷の東側に、土手を示すような表現が見られ、位置関係から、これが段丘崖を示していることは間違いないものと考えられる。しかし、このような表現は、この部分だけで、「中ノ坂通」より北側の区域では、段丘崖の表現は見られない。図122の２に示した宝暦10～明和３年（1760～66年）の『仙台城下絵図』では、「中ノ坂通」より北側の、矢印で示した「渡部滝助」の屋敷の東側の境界が、二重の線で表現されている。この区画以外では、同様の二重線の表現はないので、これが段丘崖を表しているのか否か確実ではないが、位置関係から考えると、段丘崖の可能性が高いと考えられる。

このように考えるならば、「裏下馬通」から段丘崖までは、３区画の屋敷地があったと考えることができるであろう。ただし、図122の３に示した、安政３～６年（1856～59年）の『安政補正改革仙府絵図』では、北側の区画では、東側２区画分が統合されて「大町因幡」の屋敷となっており、ここだけは、２区画分となる。

「裏下馬通」から段丘崖までの３区画の屋敷地の中でも、南側の「中ノ坂通」に面する３つの屋敷では、西端の屋敷地がやや狭く描かれている。それぞれの屋敷の幅の、正確な割合は不明であるが、おおむね絵図に描かれた幅が、実際の屋敷の大きさに比例していたと思われる。以上の検討から、今回の調査区は、「裏下馬通」と段

1．元禄四・五年（1691･92年）仙台城下五鑓卦絵図
2．宝暦十～明和三年（1760～66年）仙台城下絵図
3．安政三～六年（1856～59年）安政補正改革仙府絵図
4．現代絵図上での道路復元と調査区の位置

1・3：『絵図・地図で見る仙台』、2：『絵図・地図で見る仙台　第二輯』

図122　武家屋敷地区第11地点周辺の絵図・地図
Fig.122　Picture maps around the area of BK11

丘崖の間の３区画のうち、真ん中の区画に、主に相当すると考えることができるであろう。東西両側の区画が、今回の調査区の中に入ってくるか否かは､絵図の検討からだけでは､不明とせざるを得ない。図122の３の絵図に、想定される調査区のおおよその位置を、網掛けで示しておいた。

「中ノ坂通」と「亀岡通」にはさまれ､「裏下馬通」から３区画目まで、合計６区画の屋敷を使用していた人名を、城下絵図から拾い出したものを、第Ⅱ章の表６に示しておいた。この６区画では、南西隅の区画が一時期南北に分けられており、その場合には禄高がやや低い家臣が拝領している。それを除くと、この６区画では、家格では召出・着座が比較的多く、平士（大番士）では虎の間番士と中の間番士が見え、その中でも虎の間番士が多い。禄高は30貫文から50貫文のものが多いが、100貫文を越えるものも含まれている。幕末の安政３～６年の絵図では、胆沢郡金ヶ崎に知行地を有していた､「大町因幡」の屋敷がこの区域に置かれている。大町氏は一族の家格で、安政３年（1856年）に奉行職に就いている。それまでの２区画分を使用している。このように、今回の調査区とその周辺は、江戸時代を通じて、30貫文以上の、虎の間番士以上の家格の家臣が屋敷を構えていた場所であった。

次に、検出遺構と屋敷の境界との関係を考えてみたい。上述のように、江戸時代の道路の位置をどのように考えるか、また絵図に描かれた個々の屋敷の範囲をどのように考えるかによって、調査区が屋敷地のどの部分に相

当するかが変わる。そのため、屋敷の境界部分が、今回の調査区の中に入る可能性も考慮しておく必要がある。そこで、検出遺構の中に、屋敷の境界を区画した可能性のある遺構が存在したかどうかを、検討してみたい。

今回の調査で検出された遺構の中で、屋敷境に造られた区画施設の可能性のある遺構としては、溝があげられる。屋敷境の塀と考えられるような、長い距離にわたって続く柱列は検出されていない。溝の中でも、比較的長さが長く、直線的に延びるものを、区画施設の可能性があると考えると、Ⅱｂ期の15号溝、Ⅱｄ期の５号溝、Ⅱｅ期の２号溝・３号溝・８号溝・14号溝があげられる。

これらの溝については、同じ時期の建物、あるいは異なる時期の建物が、溝をまたいで展開している。

Ⅱｂ期の15号溝では、同じⅡｂ期の24号建物・26号建物・31号建物が、15号溝をまたいで展開する。

Ⅱｄ期の５号溝については、Ⅱｂ期の19号建物が、５号溝をまたぐ形で展開する。Ⅱｄ期には、５号溝以外にも、調査区南東側に、南北方向の13号溝・10号溝・11号溝・12号溝が、平行して並んでいる。これらは、いずれも北側がH列北端かG列までしか延びないことから、屋敷境の区画と考えるのは、やや難点があるだろう。

Ⅱｅ期の２号溝・３号溝・８号溝は、十字に交差する形で溝が延びているが、Ⅱｄ期の41号建物が、これらをまたぐ位置にある。同じくⅡｅ期の14号溝は、他の時期にこの溝をまたいで展開する建物は認められない。しかし、北側ではⅡｂ期の28号建物が14号溝の方向を延長した位置に一部が重なりそうな位置にある。

今回の調査区周辺の屋敷地では、時期によって複数の区画を合わせたり、一つの区画を細分することは行われていたと考えられるが、屋敷境の位置を大きく変えていたとは考え難い。各時期の城下絵図を見ると、屋敷の区画の数には基本的に変化がなく、屋敷の境界の位置が大きくずれていった可能性は少ないと見て良いであろう。そのため、時期が異なっていても、溝をまたぐ形で建物が展開する場合、その溝を屋敷境の区画施設と見なすことは難しいと言わざるを得ない。

このように、今回検出された遺構で、屋敷境の区画施設と考えられる遺構は、確実なものを指摘することは難しい。しかしこのことが、今回の調査区内に、屋敷の境界が位置しないことを、直ちに示すものではない。仙台城下の武家屋敷では、道路に面した部分には塀が設けられていたが、それ以外の部分については、塀や溝のような区画施設は、必ずしも設けられていない可能性がある。千葉正樹は、仙台城下の武家屋敷について、文献史料や絵図・絵画から検討している（千葉正樹2003）。それによれば、「三〇〇石から五〇〇石の中級家臣の屋敷」では「屋敷の前に幅数尺の堀を設け、土塀をめぐらせていた」が、「屋敷相互の境は三尺の空地を挟んだ二重の生け垣」としていた。また、「下級武士や足軽の屋敷では」、「屋敷相互の境は空地がなく、生け垣は一重」であったとする。

二の丸北方武家屋敷地区では、道路に面した部分の調査は、東北大学では行ったことがない。屋敷境の部分については、第４地点で調査を行っている（年報13）。第４地点の調査では、調査区の西端付近に屋敷境が位置していたことが、地形と絵図との関係などから確実で、屋敷の境と考えられる部分で溝や掘立柱列が検出されている。屋敷境の施設と考えられる遺構としては、Ⅰ期（細別時期不明・17世紀初頭～17世紀後葉）の１号溝と、Ⅱ期（細別時期不明・17世紀末葉以降）の７号柱列が挙げられる。１号溝が埋まった後、ほぼ同じ位置で７号柱列が造られている。また、１号溝と７号柱列のすぐ東側に、２号池とした溝状の遺構に不定形の池状遺構が連なったものが存在する。この２号池を境にして、東西で当時の地表面の高さが異なっている。そのため、２号池も屋敷の境を区画する施設である可能性がある。しかし、複雑に落ち込みが連なる形態は、区画施設というより、屋敷境での排水を意識した施設である可能性を想起させる。また18世紀後葉以降には、ほとんど埋没してごく浅い落ち込みとなっていたと考えられる。そのため、少なくともこの時期以降には、２号池は明確な区画施設と呼べるようなものではなくなっている。

結局の所、第４地点での屋敷境を区画する確実な遺構は、Ⅱ期以降は７号柱列が確認できただけである。掘立柱列による塀は、二の丸地区では各所で検出されているが、頻繁に建て替えられており、掘立柱による塀の耐用

年数がさほど長くないことを示している。第４地点の７号柱列の存続期間を、特別長期に見積もることはできないだろう。したがって、第４地点で確認された屋敷の境では、溝や掘立柱の塀が造られていた時期もあるが、屋敷境を区画する施設が造られていない時期もあったと考えざるを得ない。その場合、生け垣や空閑地を設けるか、あるいは屋敷林を構成する樹木を並べて植えるなどして、屋敷の境を区画していたと考えられる。

かかる事例を見ると、今回の第11地点の調査区において、屋敷境の区画施設と考えられる遺構が検出されていないことをもって、屋敷境が調査区内に入ってこないと考えることは早計である。目立った遺構が見られない空閑地が、屋敷の境であった可能性がある。また、屋敷境に樹木が並べて植えられていた場合には、植栽痕が確認される可能性も考えておく必要がある。しかし、多数存在するピットの中から、植栽痕を確実に抽出して指摘することは簡単でない。そのため、次に建物などの遺構が分布しない、空閑地について見てみたい。

Ⅰ期では、建物は散在し、特に集中する場所がない。建物が存在しない区域には、比較的規模の大きな遺構が各所に存在する。そのため、まとまった空閑地は見出し難い。Ⅱａ期では、建物が２箇所に集中する傾向が見て取れる。そのため、Ｇ列以南の区域、またＦ列以北でも、10列から 12列、17列以東は、遺構が少ない空閑地となっている。Ⅱｂ期では、10列以西では建物が少なく、特に５列から 10列にかけては、小規模な建物が見られるだけである。Ⅱｃ期・Ⅱｄ期・Ⅱｅ期においては、12列ないし 13列より東側に建物が展開し、それより西側には、ほとんど建物が見出せない。

このように、ほとんどの時期に建物が見られない空閑地が存在するが、江戸時代を通じて一貫して空閑地となっている場所は見出せない。全体としては西よりの区域に空閑地が見られる場合が多いと言え、西よりの区域に屋敷の境が存在した可能性を指摘することもできる。しかし、調査区西側は、削平が大きい区域であるため、遺構の残存状況が良くない可能性もある。また、調査区南西よりの区域は、江戸時代以前に沢状遺構があり、それが埋まった場所であるため、地盤が良くなかったことも考えられる。このように、空閑地の検討から屋敷境の位置を確実に復元することは、簡単ではない。結局のところ、建物配置との関係などから、総合的に判断する必要があるだろう。その際に問題となるのが、礎石建物である。今回の調査区では、建物の礎石がまったく検出されていない。検出された建物は、全て掘立柱建物であった。近世の建物の一般的な様相から、礎石建物がまったく存在しなかったと考えることは難しい。

仙台城と周辺武家屋敷地区での調査から、近世の礎石建物では、建物の性格や規模、特に礎石にかかる荷重によって、礎石および掘り方や根固めの構造や規模は、大きく異なっていることが明らかとなっている（年報19第５分冊）。荷重がさほど大きくない建物では、礎石や掘り方の規模は小さく、後世に削平を受けると、全く痕跡が残らない場合も多いと考えられる。 今回の調査区の場合、西側では明治時代以降に削平を受けていた。削平が少ない東側でも、明治時代初頭に畑の耕作土の可能性のある２層が分布しており、畑の耕作の際に礎石が取り除かれた可能性もある。そのため、もともと礎石建物が存在しなかったのか、本来は存在したが後世の破壊によって検出できなくなっているのか、その判断が困難である。

このことは、検出された掘立柱建物の評価にもつながる問題である。礎石建物が存在したと想定した場合には、主要な建物が礎石建物で、付属的な建物が掘立柱建物であった可能性が高くなるであろう。一方、礎石建物が存在しないと想定した場合には、掘立柱建物の中に、屋敷の母屋となる、主要な建物が含まれていると考えることとなる。この両方の可能性を考慮しつつ、掘立柱建物をはじめとする遺構の配置、空閑地の位置関係を、総合的に検討する以外、現状では検討の方法がない。しかし今回の第11地点の調査では、建物が調査区外へ延びるものも多く、確実な結論を導き出すことは難しい。今回の 1,401㎡という調査面積は、東北大学での調査としては大規模なものであるが、川内北地区に所在する比較的上級の家臣の屋敷地の敷地面積からすると、その半分にも至らない面積である。そのため、屋敷地の一区画内部の様相を把握するには、より広い面積での調査データの積み重ねが必要である。いたずらに困難さを指摘するにとどまってしまった感があるが、二の丸北方武家屋敷地区お

ける、遺構に関わる調査研究の現段階を、これによって確認しておきたい。

②地鎮遺構

今回の調査では、地鎮遺構と考えられる遺構が１基検出された。明治時代以降に削平を受けている可能性が高い場所であり、埋設された土師質土器の皿が、かろうじて残存していた。２枚の皿を、合わせ口にして埋設していたと考えられるが、上側の皿は半分以上が削平で失われ、一部が残されていたにとどまる。下側の皿は正位で、ほぼ全体が残されていた。下側の皿の内面に、輪法文が墨書されていたことから、地鎮遺構であると判断した。残存状況が良くなかったことから、埋設された状況を詳しく明らかにすることはできなかった。

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区においては、第４地点において、地鎮遺構が発見されている（図123、年報13）。近接して３基が発見されており、同時に埋設された可能性がある。いずれも、小規模なピットの底面に、土師質土器の皿を合わせ口に重ねて埋設したものである。地鎮跡１では、皿の内部に永楽通寶が12枚入っていた。皿の一方の底面には「東」との墨書が見られる。地鎮跡２では、ピット埋土に柱痕跡が明瞭に確認されており、柱穴の底面に皿を埋納したことが明確になった。しかし、３基のピットが組み合う位置関係にはない。地鎮跡３から出土した皿の内部には、永楽通寶11枚が入っていたほか、稲の籾が良好に遺存していた。上側で出土した皿の底面には「中北天」との墨書が見られる。地鎮跡１と地鎮跡３から出土した銭貨が、全て永楽通寶で占められていることから、17世紀初頭の遺構と考えられている。

今回の第11地点の調査で発見された地鎮遺構も、この第４地点のものと同様に、合わせ口にした土師質土器の皿を、柱穴などのピットに埋納した可能性が考えられる。第４地点の事例との類似点も参考に、Ⅰ期の可能性が高いものと考えたが、より下る可能性も残されている。そのため、このような方法の地鎮遺構が、時期的に限定できるのか否かは、これらの事例からは判らない。多賀城市高崎遺跡第７次調査のＳＸ233では、不整楕円形の土坑に、土師質土器皿10点を全て上向きに並べ、その皿の外側から寛永通宝７点が出土している（石川俊秀1989）。川内地区で検出されている事例とは、埋納方法などで違いが大きく、様々な方法があったことが伺われる。今後、比較検討を進めていくことが必要である。

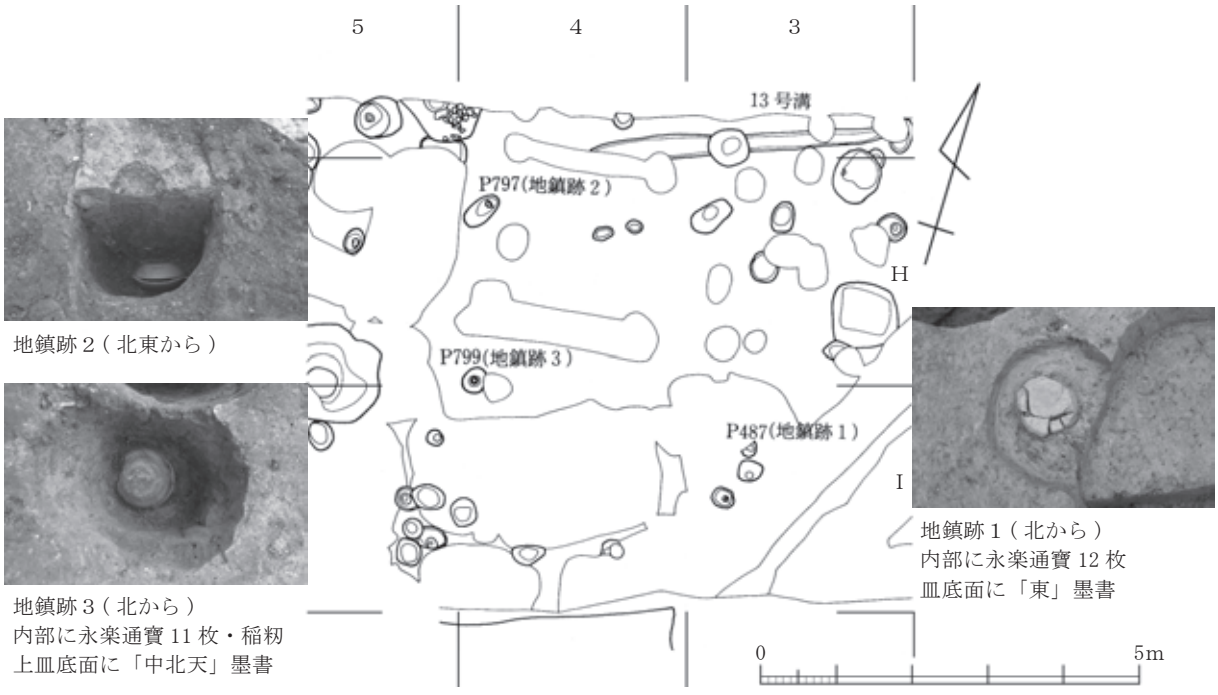


図123　武家屋敷地区第４地点の地鎮遺構
Fig.123　Features of land purification ritual (jichin) at BK4

③防空壕

今回の調査では、防空壕の可能性のある遺構が検出されている。本章３の検出遺構の報告では、明治時代の陸軍時代より新しいものは、すべて撹乱としてあつかっており、個別に記載はしていないので、簡単にここで触れておきたい。

今回の調査では、大別すると二種類の、防空壕の可能性のある遺構が確認された。

一つは、図124 において、撹乱Ａ１～Ａ４としたもので、下幅40 ～ 50cm 前後の細長い通路状の掘り込みが、屈折するもので、深さは１ｍ前後である。端部には地山を掘り残して造られた階段が設けられており、出入り口と考えられる。撹乱Ａ１・Ａ３では、階段は両側に認められる。撹乱Ａ２では、東側の出入り口では、明確な階段は検出されなかったが、他の撹乱に壊されている部分が多いため、良く判らない。撹乱Ａ４では、階段は片方のみで、全体の長さも短く、屈折もしていないため、一部が構築されただけで放棄されたものである可能性も考えられる。撹乱Ａ１では、西側の入り口から入ると屈折して内部へ続いていくが、それとは別にまっすぐ南に進んで行き止まりとなる部分がある。ここは、下幅が狭いところでは 30cm 以下と極めて細く、人間が通行することは困難である。この部分の南端が、一番深く掘られていることから、溜まった水を浸透させるために造られた可能性が考えられる。

類似した施設は、東京都千代田区の文部科学省構内遺跡などで検出されている、防空壕とされた遺構がある（文

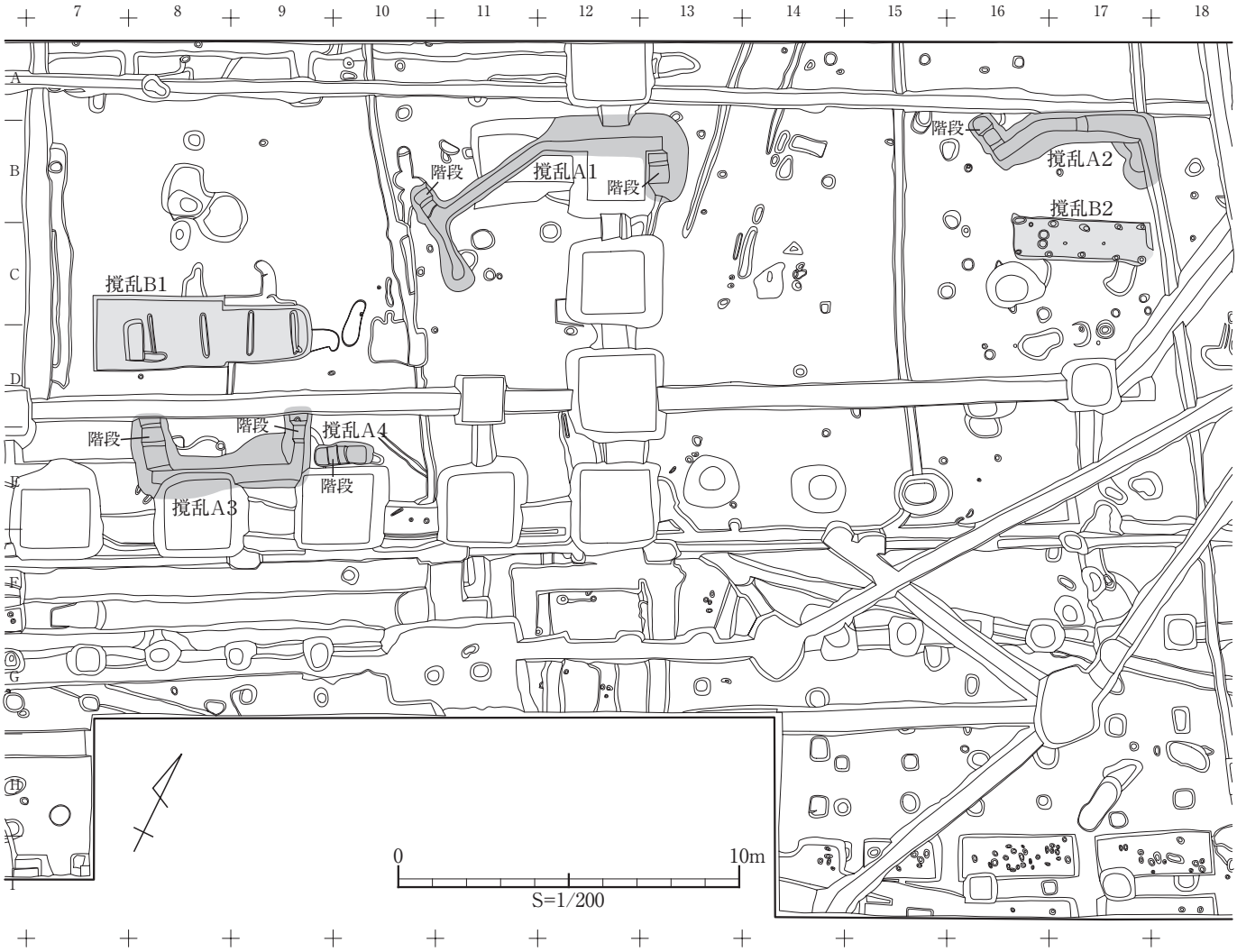


図124　武家屋敷地区第11地点の防空壕
Fig.124　Shelters at BK11

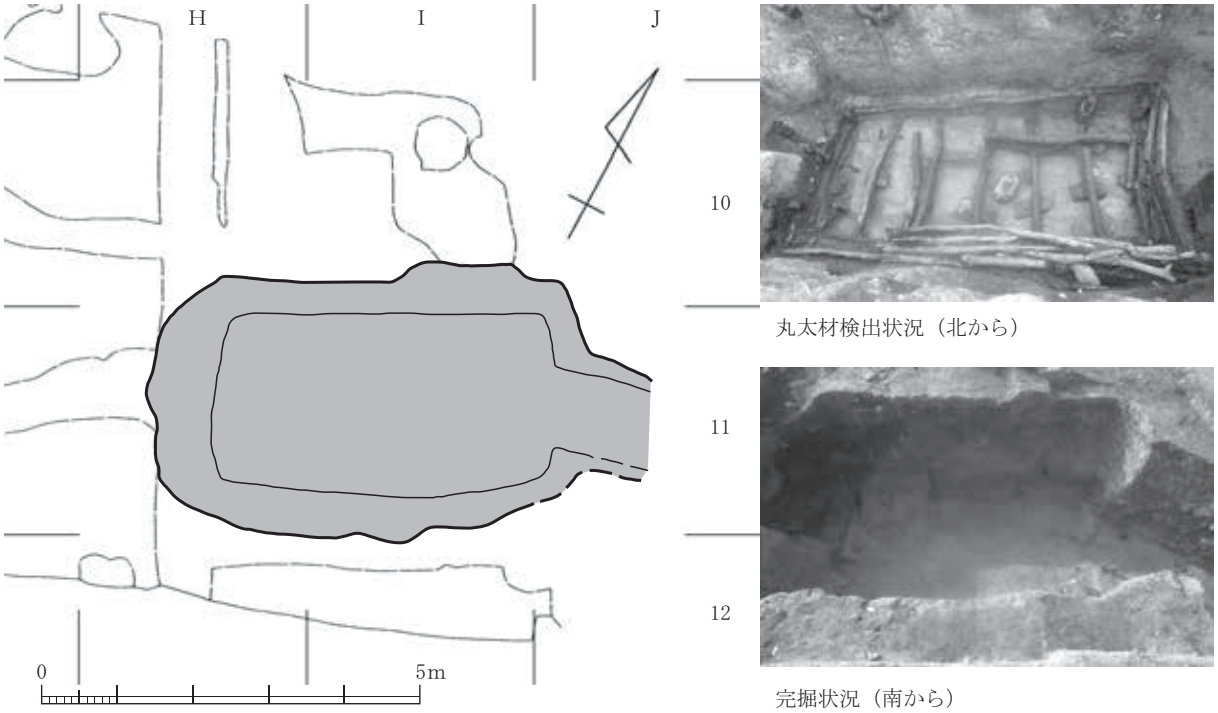


図125　武家屋敷地区第７地点の防空壕
Fig.125　A shelter at BK7

部科学省構内遺跡調査会編2001)。関東ローム層を掘り込んで、主室部と階段を有する入口部からなる施設が３基検出されており、その内の１基の主室部はコンクリートを用いて構築されていた。調査報告書では、検出された防空壕の特徴と、当時の文献史料の記載とを比較して検討している。出入り口からの通路が屈折している点は、爆風・弾片などが直接内部へ入らないようにするものと考えられており、武家屋敷地区第11地点で検出されたものと、類似している。ただし、今回の調査で検出されたものと比べると、文部科学省構内遺跡のものは、通路の幅や収容室の規模が大きく、深さも 1.3 ～ 1.5mと深い。

今回検出された撹乱Ａ１～Ａ４については、幅が狭いことから、人間が退避するための施設と考えて良いか疑問が残る。重要な物品や書類などの避難用の施設である可能性も考える必要があるだろう。また、後世に上部が削平されていたとしても、さほど深くなるとは思われないことから、トンネル状に構築されたものとは考え難い。板や丸太などで蓋をして土を盛り上げる半地下式の掩蔽型の構造が想定されるが、あるいは上部が塞がれない開放型となる可能性も考えておく必要がある。

もう一種類は、ほぼ長方形の掘り込みの中に、丸太を使った構築物を伴うものである。図124 において、撹乱Ｂ１・Ｂ２としたものである。撹乱Ｂ１は、6.4×2.2mのほぼ長方形の平面形で、深さは 50㎝ほどである。長軸方向に直交する向きで、1.3 ～ 1.6m間隔で底面に溝が認められ、根太状に丸太を据えた痕跡と考えられる。西よりの底面に、一段掘り下げられた部分があり、その中から旧陸軍の「発射発煙筒」が入った木箱が出土している（図10－３）。撹乱Ｂ２は、４×1.2mのほぼ長方形の平面形で、深さは 30㎝ほどである。長辺に沿って、0.8 ～ １m間隔で丸太杭が打ち込まれていた。

類似した施設は、武家屋敷地区第７地点で確認されている（図125、年報19第１分冊）。第７地点では、調査区東端が１m以上の高さの段差となっていた。この段差は明治時代の第二師団によって造成されたものであるが、段差の崖面から、幅１mほどの通路を掘り、下場の大きさが 4.5×2.4mの、平面形が隅丸長方形の施設が造られていた。通路は、本体の長軸方向からはずれて、傾いて接続している。本体の内部には、壁に組み上げられてい

たと思われる丸太が残されていた。底面にも、丸太材が70㎝程の間隔で並べられており、床板を支える根太であった可能性が考えられる。上部の構造は不明であるが、板や丸太などで蓋をして土を盛り上げる半地下式の掩蔽型の構造となる可能性も考えられる。この第７地点で検出された事例は、確証は無いものの、防空壕の可能性も考えて良いと思われる。

今回の第11地点で確認された撹乱Ｂ１・Ｂ２については、丸太を利用した、平面形がほぼ長方形の施設という点で、この第７地点の事例と類似している。ただし、今回検出された遺構は、掘り込みの深さが浅く、第７地点の事例とは異なっている。そのため第７地点の事例とは目的が異なる可能性も高いが、防空壕の可能性も考えておく必要があるだろう。

（２）出土遺物について

今回の調査では、様々な種類の遺物が多数出土した。遺物の出土場所は、Ａ層と２層からの出土が多く、そのほとんどが幕末前後のものである。これ以外の江戸時代の遺構から、まとまった遺物が出土しているものはさほど多くない。陶磁器などの、器種や産地の量的比率を細かく検討できるような、まとまった数量の遺物が出土している遺構は見られなかった。そのため出土遺物については、特徴的ないくつかの点について、簡単に指摘しておくにとどめる。

詳細な検討は難しいためおおよその傾向であるが、各種遺物の構成や量的比率については、武家屋敷地区の特徴を示していると考えられる。二の丸北方武家屋敷地区第４地点の調査報告では、武家屋敷地区の遺物の出土傾向を、二の丸地区での傾向と比較し、いくつかの特徴が見られることを指摘している（年報13）。そのほとんどは、今回の第11地点における遺物の出土傾向にもあてはまる。武家屋敷地区における大規模調査としては、第７地点の調査もあるが、ここでは空屋敷の時期に、二の丸地区からゴミが大量に運び込まれた可能性が高く、武家屋敷地区の特徴が表れているとは言い難いので、比較対象にはふさわしくない（年報19）。

武家屋敷地区の特徴の一つは、土師質土器の皿の出土量が少ないことである。土師質土器の皿は、灯明皿として利用されることも多いが、本来は饗宴などの際に用いられる器であり、一度利用するだけで廃棄される。そのため、藩としての饗宴などが頻繁に行われたと考えられる二の丸地区では、大量の土師質土器の皿が出土する。また、箸置きに使用された耳皿の出土も見られる。しかし、武家屋敷地区第４地点や、今回の第11地点では、土師質土器の皿の出土量は格段に少ない。武家屋敷では、土師質土器の皿を用いた饗宴の頻度が低かったことを反映したものと考えることができるであろう。なお、武家屋敷地区第４地点では、土師質土器皿の中で、ススの付着した灯明皿として利用されたものの割合が、抽出資料の 47.4％と高いことも指摘されている。今回の調査地点では、土師質土器皿が小破片になっているものが多く、一定基準以上の残存が見られる抽出資料は 54点だけであった。そのうち炭化物の付着がみられたものは、26点（48.1％）と、武家屋敷地区第４地点と類似している。抽出資料全体の数量がさほど多くないため、厳密性には問題が残るが、比較的高い割合である。二の丸地区出土の土師質土器の皿では、炭化物が付着しているものの割合はおおよそ３割以下である。このことは、二の丸地区と武家屋敷地区の場の違いに起因すると考えられる。二の丸地区では武家の饗宴などの儀礼的な席上で使用され、そのまま廃棄された皿の割合が非常に高く、そのため炭化物の付着率は低いものと考えられる。一方、武家屋敷地区では、そのような儀礼的な席上で用いられた皿の割合が低いため、炭化物の付着率が高くなっているものと考えられる。

土師質土器の皿が少ない一方で、土人形などの土製品は、比較的多い。二の丸地区では、土人形などの土製品の出土量は、きわめて少ない。武家屋敷地区第４地点では、この一箇所の調査において、二の丸地区の総出土量を上回る量が出土している。今回の第11地点では、第４地点ほど多くはないものの、比較的多くの土製品が出土している。藩士の生活の場でもある、武家屋敷地区の性格を示すものであろう。

瓦が比較的少ないことも、武家屋敷地区の特徴である。仙台城下の武家屋敷では、瓦葺の建物は限定的であったと考えられる。武家屋敷では、門・塀・蔵・長屋などが瓦葺で、屋敷本体の家屋は柿葺であったことが、絵画資料から伺える。この中でも、瓦葺の門は、上級家臣の中でも、特別に格式の高い門に限定される。長屋建物が屋敷に附属するのも、かなり上級の家臣の屋敷に限定される。今回の調査地点では、瓦葺の門や長屋が存在した可能性はかなり低いと見て差し支えない。また瓦葺の蔵が存在したとしても、その規模はさほど大きかったとは考え難い。塀も、道路に面した側にはめぐらされていたと考えられるが、道路に面しない屋敷の境は、前述のように塀がなかった可能性が高い。一方、二の丸地区においても、御殿建物は基本的に柿葺などで、瓦葺の建物は門･塀･蔵などに限定される。その場合でも、門や蔵の規模は、武家屋敷地区のものと比べると、格段に大きかったと考えらる。必然的に用いられた瓦の量も多くなる。塀も周囲全体をめぐり、内部を区画する塀も多数存在していたことが絵図から判る。瓦を葺いた塀の割合も高かったものと考えられる。二の丸地区では、各地点で膨大な量の瓦が出土している。それに対して、武家屋敷地区第４地点では瓦の出土量が極めて少なく、今回の第11地点と同様の傾向を示す。瓦の出土量の違いは、上述のように、武家屋敷地区では、瓦葺の建物が極めて限定されていたことを反映したものと考えられる。

このように、今回の第11地点での遺物の出土傾向は、武家屋敷地区第４地点と全体的に良く類似した様相を示していると言えるであろう。このことは、二の丸地区と武家屋敷地区という、遺跡の性格の違いを反映したものと考えられる。

遺物の中で時間的変化をもっとも良く表す陶磁器についても、量的にまとまった一括資料といえるようなものは、今回の調査では得られていない。そのため詳細な検討が難しく、各時期ごとに、その様相を概観するにとどめた。陶磁器の時期ごとの変遷については、これまでの二の丸地区や、二の丸北方武家屋敷地区における調査で明らかとなってきた様相と、大きく異なるものは見あたらない。18世紀以降、陶器では相馬産が主体を占めること、幕末になって堤などの相馬以外の東北産陶器が一定量を占めるようになること等である。また、江戸時代初頭頃の陶器が比較的多く出土したことは、注意しておきたい。これまでの二の丸北方武家屋敷地区の調査では、ほとんどの調査地点において､江戸時代初頭に遡る陶磁器が出土している。この区域における武家屋敷の整備が、江戸時代初頭に、広範に進められていたことを示すものと言えるだろう。江戸時代初頭の武家屋敷の様相については、その時期の城下絵図が知られていないため、不明な点が多い。考古学的な調査の成果をもとに、江戸時代初頭における武家屋敷の実態を解明していくことが必要である。

今回の調査で出土した遺物の圧倒的多数は、江戸時代以降のもので占められている。しかし、ごく少数ではあるものの、江戸時代より古い時期の遺物も出土している。縄文時代と思われる石器３点、古墳時代から古代の須恵器１点、古代の瓦１点が出土している。いずれも、江戸時代以降の層序からの出土で、本来の位置を保ったものではない。

川内地区では、これまでにも５地点において、縄文時代や弥生時代の遺物が出土している。川内南キャンパスの二の丸第４地点では、石器が出土している（年報５）。川内北キャンパスの二の丸北方武家屋敷地区第４地点では、江戸時代以前に遡る自然の沢状の落ち込みが検出され、その埋土上層部から、縄文時代中期前葉、弥生時代前期後半から中期中頃にかけての縄文土器・弥生土器と石器が出土している。遺物は、沢状の落ち込みの上部のみで出土することから、周囲から流れ込んだものである可能性が高い。さほど摩滅が見られないことから、ごく近傍に当該期の遺跡が存在することが想定されている（年報13)。武家屋敷地区第７地点では、縄文時代の陥し穴の可能性のある土坑が１基検出され、石器も出土している（年報19)。武家屋敷地区第８地点では、石器が２点出土している。武家屋敷地区第９地点では、縄文土器１点が出土している（年報21)。遺構が検出されているのは第７地点の陥し穴の可能性のある土坑のみで、まとまった遺構は検出されていない。江戸時代以降の様々な造成工事により破壊されている可能性もあるため、判断は難しいが、遺物はかなり広い範囲で出土している。

川内地区の広い範囲が生活の舞台となっていた可能性がある。

古代の遺物は、川内地区の３地点において、これまでに確認されている。川内南キャンパスの二の丸第６地点では、調査区近くの段差の壁面で、底面の焼けた遺構の断面が確認された。一部が調査されただけなので、遺構の性格などははっきりしないが、底面から平安時代のロクロ土師器の甕が１点出土している（年報３）。川内北キャンパスの武家屋敷地区第４地点では、多賀城創建期の軒平瓦１点の他、平瓦２点と須恵器１点が出土している（年報13）。武家屋敷地区第９地点では、ロクロ整形の内黒土師器の坏が１点出土している（年報21）。小破片のため詳細は不明であるが、平安時代のものと思われる。これらの古代の遺物、特に瓦については、評価が難しい。江戸時代には、多賀城の古瓦を採集して、土産物にしたり硯に加工することが流行していたことが文献記録により知られている。奈良時代の多賀城創建時の瓦については、土師器が平安時代のものであり年代がずれるため、江戸時代に持ち込まれた可能性を完全に否定することは難しい。しかし、須恵器や土師器も出土していること、二の丸第６地点で遺構が確認されていることから、古代の何らかの遺跡が存在した可能性が高いと考えるべきであろう。古代の瓦が、当時の遺跡に伴うものであるか否かについては問題が残っているが、川内地区に古代の瓦を使用した遺跡が存在したとするならば、その意味は非常に重要となる。今後の資料の増加が望まれるところである。

（３）小結

二の丸北方武家屋敷地区第11地点の調査は、東北大学による武家屋敷地区の調査としては、第４地点、第７地点に続く３ヶ所目の大規模調査となった。江戸時代の仙台城周辺武家屋敷に関わる、多数の遺構が検出され、多種多様な遺物が出土し、新たなデータを加えることとなった。

江戸時代以前については、確実な遺構としては、沢状遺構のみがある。自然の流路と考えられる。

江戸時代から明治初頭にかけての遺構は、Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期に大別された。Ⅲ期までの遺構の上部には、明治時代初頭の耕作土層の可能性がある２層が存在する。Ⅱ期は、さらにⅡａ期からⅡｅ期に細別された。出土遺物などから推定される、各期の時期は、次のとおりである。

Ⅰ期：17世紀初頭から前葉
Ⅱａ期：Ⅰ期以降の17世紀代
Ⅱｂ期：18世紀
Ⅱｃ期：18世紀末葉から19世紀初頭
Ⅱｄ期：19世紀前葉から中葉
Ⅱｅ期：19世紀中葉から後葉（明治時代初頭）
Ⅲ期：明治時代初期

主な検出遺構には、掘立柱建物58棟、掘立柱列４条、溝16条、井戸８基などがある他、性格が不明の規模の大きな掘り込みが30基確認されている。これらの遺構の屋敷地内での性格などについては、未解明な部分も多く残されている。特殊な遺構としては、土師質土器の皿を合わせ口にして埋設した、地鎮遺構と考えられるものが１基検出されている。

出土遺物は、江戸時代初頭から明治時代初期のものまで、様々な種類の遺物が出土している。量的にまとまった一括資料は、ほとんどなかったが、全体の量的な構成比率などは、武家屋敷地区の特徴を示している。江戸時代初頭の陶器も比較的多く出土しており、この区域における武家屋敷の整備が、江戸時代初頭に進められていたことを示している。

今回の第11地点のすぐ北側に隣接する区域、あるいは北東側に隣接する区域では、仙台市教育委員会による地下鉄東西線建設に伴う発掘調査が、2008年度から2009年度にかけて実施されている。当然ながら、今回の調査

区から連続していく遺構、あるいは密接に関連する遺構が検出されていると考えられる。調査成果が取りまとめられ、公表された際には、第11地点の遺構の様相について、これらのデータを踏まえて、再度検討することが必要である。

第11地点の隣接地だけでなく、川内北キャンパスの北側に沿って、地下鉄東西線建設に伴う調査が実施されている。明治時代以降に大きく削平されている区域を除くと、ほぼ川内北キャンパスの北側全体で調査が行われている。その中には、以前に東北大学で調査を実施した、第７地点に隣接する場所も含まれている。新たなデータの蓄積を踏まえ、以前の調査成果を見なおしていくことが必要である。

川内地区だけでなく、広瀬川の東側にあたる西公園の区域でも、地下鉄東西線建設などに伴う発掘調査が実施されている。これらの事例との比較検討を進め、川内地区の武家屋敷の実態解明を進めていくことが、今後の課題であろう。

第Ⅳ章　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第12地点

１．調査経緯

（１）調査地点の位置

今回の調査地点は、東北大学川内北地区の中央からやや東寄りの場所に位置する。川内北地区は、仙台城二の丸の北方に位置し、江戸時代には武家屋敷が存在した区域に相当する。後述のように、調査は給水管の管路に沿って行われており、全体の工事箇所は鈎の手状に折れつつ、旧武道場及び体育館の西側、南側、東側、ハンドボールコート南側、厚生会館北西側などを縫うように位置している（図126）。本調査を実施することとなった箇所は、１・３・４区の３箇所である。１区は体育館南西隅から逆Ｌ字状に北側に延びる範囲である。３区は厚生会館の北西側の箇所である。３区の南東側には、武家屋敷地区第８地点（年報20）の調査区が存在する（図２参照）。４区は、１区に接続し、体育管南西隅から東側に延びる箇所である。２区は、武道場及び体育館の西側で、玄関前にあたる箇所である。明治時代初頭の整地層（２層）や地山が残存しており、当初は精査対象としていたが、掘削が２層まで及ばないこととなり精査は行っていない。

（２）調査にいたる経過

今回の調査は、地下鉄東西線整備に伴う機能補償の一環として、地下鉄工事で支障となる屋外給排水設備及び電気ケーブルのルート変更とハンドホールの埋設のために行われた工事に伴うものである。本調査を実施した区域を武家屋敷地区第12地点（BK12）とし、立会調査を実施した区域は立会調査地点2007－15とした。

川内北地区の既存給水管は、北東隅にポンプ室があり、そこから敷地北側の市道脇を通り、武道場の西側から南に折れ、体育館西側を通って厚生会館北側へと続いていた。この給水管が地下鉄工事の支障となるため、サッカー場と野球場の間を通って、体育館南側を経て厚生会館北側へルート変更することとなった。体育館から厚生会館の周辺区域では、場所によっては遺構面に掘削が達する可能性があったため、できる限り既存管の掘り方を利用して埋設することとした。しかしながら、管路の接続部分など、既存管掘り方を利用できない部分では、掘削が遺構面に達する可能性が考えられた。そのため、工事実施時に立会調査を行い、既存管掘り方からはずれ、掘削が遺構面に達する場合には、工事を中断し、記録保存のための本調査を実施することとした。東側のグラウンド部分については、周知の遺跡の範囲からは外れるが、念のため立会調査を実施することとした。

また、体育館東側部分の電気ケーブルとハンドホール設置工事箇所は、武家屋敷地区第９地点の調査（年報21）で、明治時代以降の盛土が１ｍ以上の厚さであることが明らかとなっていた。そのため、工事による掘削が盛土の範囲内に収まると判断して立会調査で対処することとした。

（３）調査の方法と経緯

川内北地区における武家屋敷地区のこれまでの調査から、明治期になって屋敷が取り払われた後、軍隊が使用するまでの間、畑として使われていた場合があることが判っている。武家屋敷地区第４地点（年報13）、第７地点（年報19）で、畑の耕作土と考えられる褐色土層が確認され、その上面が畝状となっている部分も検出されている。今回の調査でも、この明治初頭の畑耕作土に類似する地層が確認され、これを２層とした。この２層より上位の地層は１層・撹乱として一括した。

調査は給水管の設置工事と併行して、2008年１月11日から３月14日にかけて、断続的に実施した。立会調査の結果、工事による掘削が明治時代初頭の地層（２層）や地山に達する可能性のある区域について、順次１～４区として、本調査に移行した。ただし、先述の通り、２区は掘削が２層まで及ばないこととなったため、精査対象から除外した。そのため、本調査を行った箇所は、１・３・４区の３ヵ所である。明治時代初頭の整地層（２層）

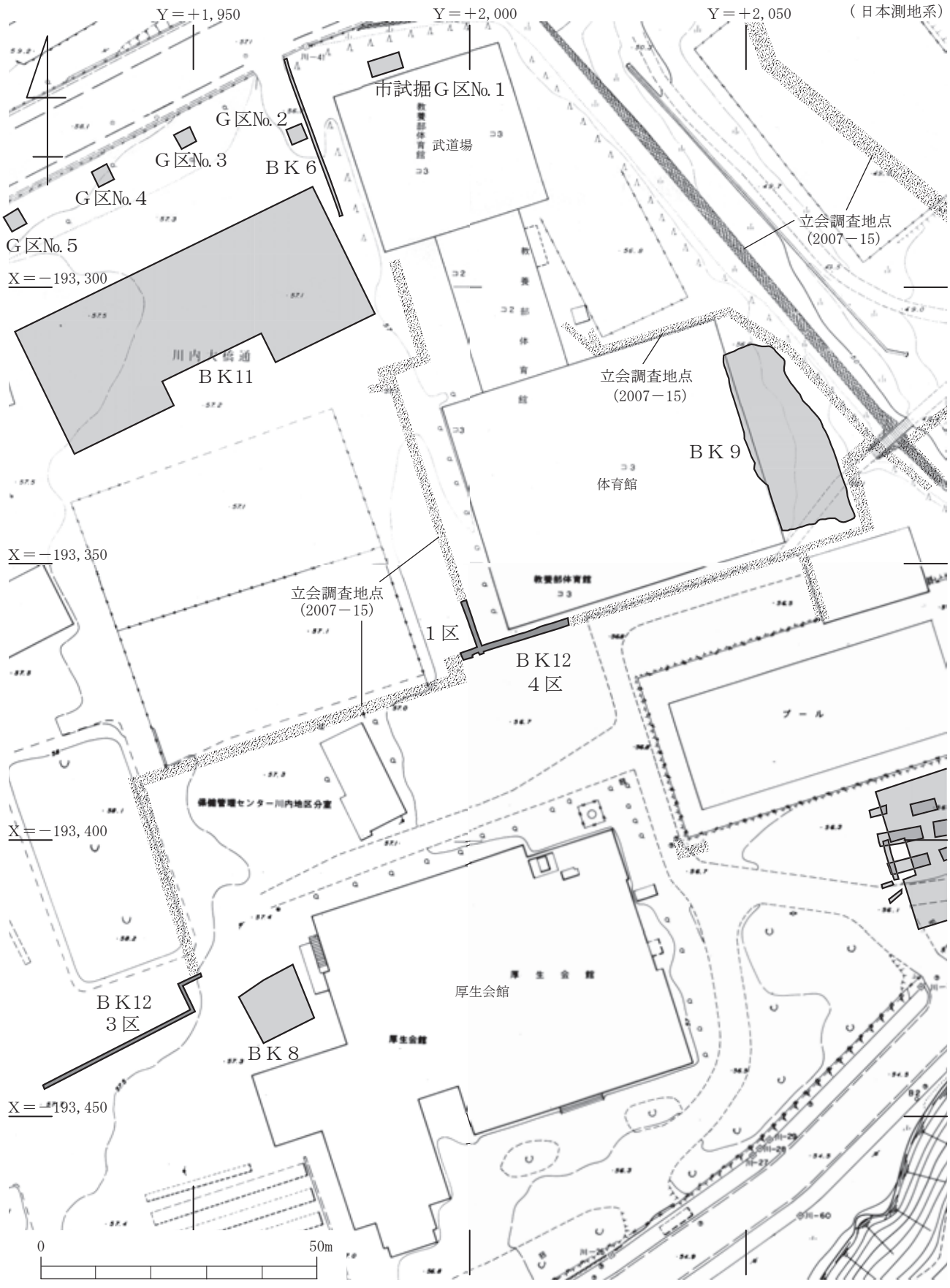


図126　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第12地点調査区の位置
Fig.126　Location of BK12 (BK12 i.e. Location 12 of samurai residence)

や地山が残存しており、手掘りによる精査を行った（図127・128）。調査面積は、１・３・４区を合わせて59.6㎡である。１・３・４区のいずれの調査区においても、１層･撹乱の除去、および２層の精査と掘り下げをを行った。２層の下位は、いずれの調査区でも地山となっており、その上面で遺構の確認作業を行った。今回の工事による掘削は、地山層上面に止まり、それより深くは及ばないため、検出された遺構について検出状況の記録をしたが、遺構埋土の掘り下げは行っていない。これら以外の箇所では、立会調査の結果、既存管による既掘削範囲か、新しい盛土の範囲内であったため、本調査は行っていない。

２．検出遺構と出土遺物

（１）検出遺構

【１区】（図127、図版100）

１区では、北側部分に２層が分布している。２層からは、陶磁器４点、土師質土器６点、瓦１点が出土した。また、ピット７基が検出されており、いずれも地山上面で確認している。ピット１は長楕円形、ピット２、５は不整形、ピット３は円形、ピット４、６、７は調査区の壁際で検出されているため半円形を呈している。ピット５・６・７はやや大型のものである。いずれのピットも、工事による掘削が及ばないため、確認のみで掘り下げは行っていない。

【３区】（図128、図版100・101）

３区では、地山上面でピット２基が検出されている。ピット11 は調査区北東端で検出されており、一部が調査区外まで広がるため不整形をしている。ピット12 は調査区南西端で検出されており、一部が検出されただけであり、形状は不明であるが、やや大型の遺構となる可能性もある。いずれも工事による掘削が及ばないため、確認のみで掘り下げは行っていない。また、３区では２層も確認されなかったため、遺物は出土していない。

【４区】（図127、図版101）

４区では、調査区東端で２層の分布が確認されている。２層からは陶器が２点出土している。また、ピットが３基検出されており、いずれも地山上面での確認である。いずれも調査区の壁際で検出されており、全体形状がわかるものはないが、おおよそ円形を呈するものと推測される。確認のみで、掘り下げは行っていないため、ピットから遺物は出土していない。

（２）出土遺物（表75）

出土遺物は、いずれの調査区においても、遺構埋土の掘り下げを行っていないため、１層・撹乱と２層出土のものである。磁器、陶器、土師質土器、瓦が出土しているが、ごく少量である。また、いずれも小破片のみで、図示したものはない。

磁器は、７点出土している。２層からは肥前とみられる染付の小中皿、18世紀代とみられる染付若松文の中型丸碗などが確認されるが、いずれも小破片で詳細は不明である。陶器は、８点出土している。２層には、19世紀代とみられる大堀相馬の土瓶､18世紀代とみられる肥前産の可能性のある灰釉碗などが含まれる。土師質土器は、皿の破片と器種不明の小破片のみの出土である。皿では、灯明皿に転用されたと考えられるタール状の付着物が観察される破片が２点含まれている。瓦は、４点出土している。２層からは、平瓦１類とみられる破片が１点出土している。内面には櫛目が施されていることから、桟瓦になる可能性が考えられるが、破片のため詳細は不明である。１層・撹乱では、反りをもたない素材の特殊な瓦が１点出土している。垂れが付くとみられるが、垂れ部分は剥落しており、全体の形状は不明である。

表75　武家屋敷地区第12地点出土遺物集計表
Tab.75　Distribution of various implements at BK12

出土場所	磁　器				陶　器							土師質土器		瓦			合計
	中型丸碗	小中皿	碗皿鉢不明	袋物不明	大碗	碗皿鉢不明	中型丸碗	瓶類	袋物不明	土瓶（身）	不明	皿	不明	平瓦1類	特殊	不明	
1層・撹乱			1	2	1	1					2		1		1	1	10
2層（1区）	1	1	1						1			3	3			1	11
2層（2区）		1								1				1			3
2層（4区）							1	1									2
合計	1	2	2	2	1	1	1	1	1	1	2	3	4	1	1	2	26

3．まとめ

本調査地点は、地下鉄工事で支障となる屋外給排水設備及び電気ケーブルのルート変更とハンドホール埋設に伴った調査であり、調査区はおおよそ1m程度の幅で、鉤の手状に長い形状をしている。工事による掘削が及ばないことから、遺構を検出し、記録を作成したが、遺構埋土の掘り下げは行なっておらず、遺構出土の遺物もない。そのため、いくつかの遺構を確認したものの、遺構の全体形状をとらえることができたものはなく、検出遺構がどのような性格を有しているのかは不明である。それでも、遺構が残存している区域や深さについて、新たな地検を得ることができた。また、一部で明治初頭の地層が残存していることも確認できた。武家屋敷地区第8地点など、これまでの調査成果と併せて考えると、体育館－プール－厚生会館の周辺では、大学の施設などによって破壊されていない区域では、江戸時代の遺構が残されている可能性が高いことが明らかとなった。

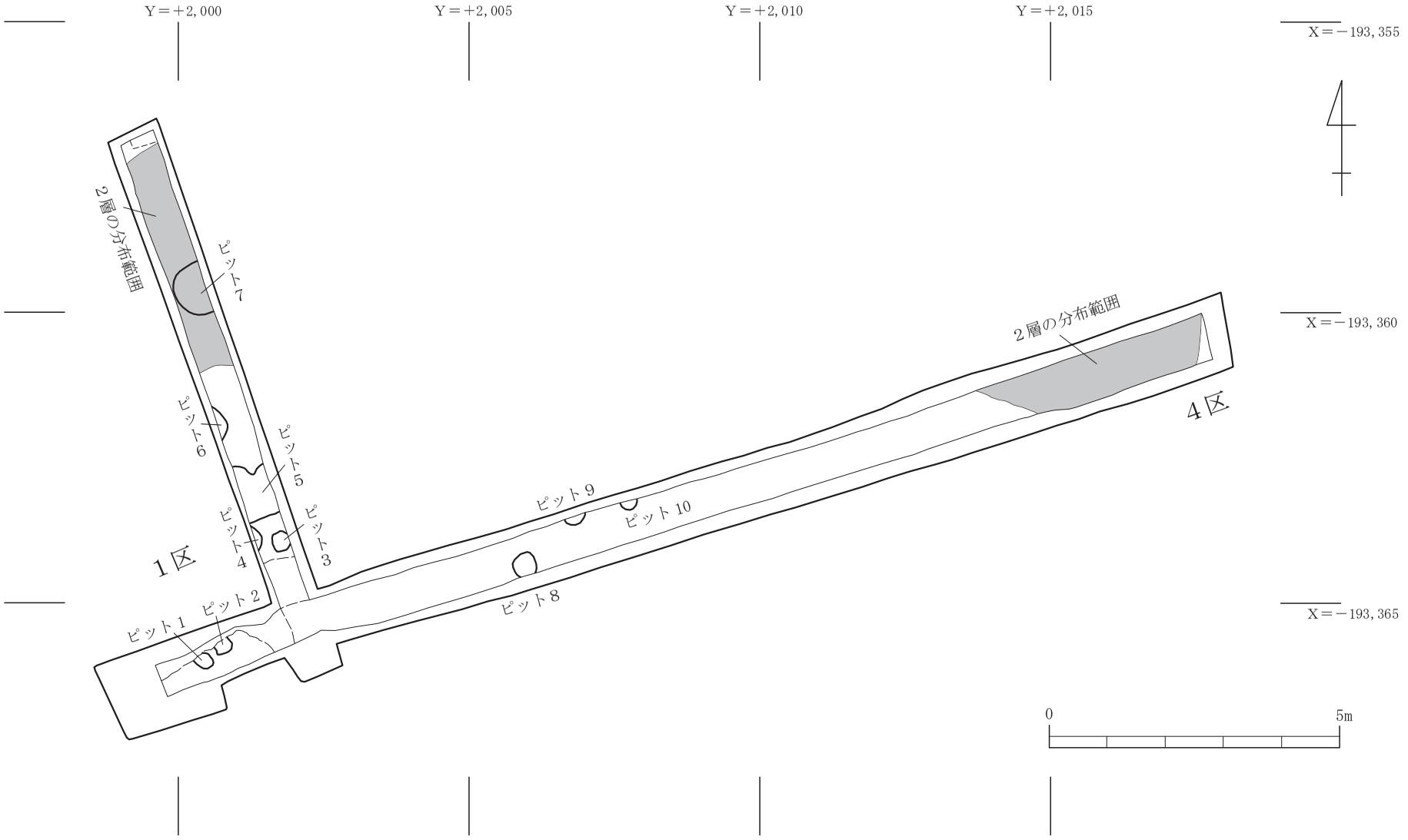


図127　武家屋敷地区第12地点１区・４区遺構配置図
Fig.127　Distribution of features at location 1 and 4 of BK12

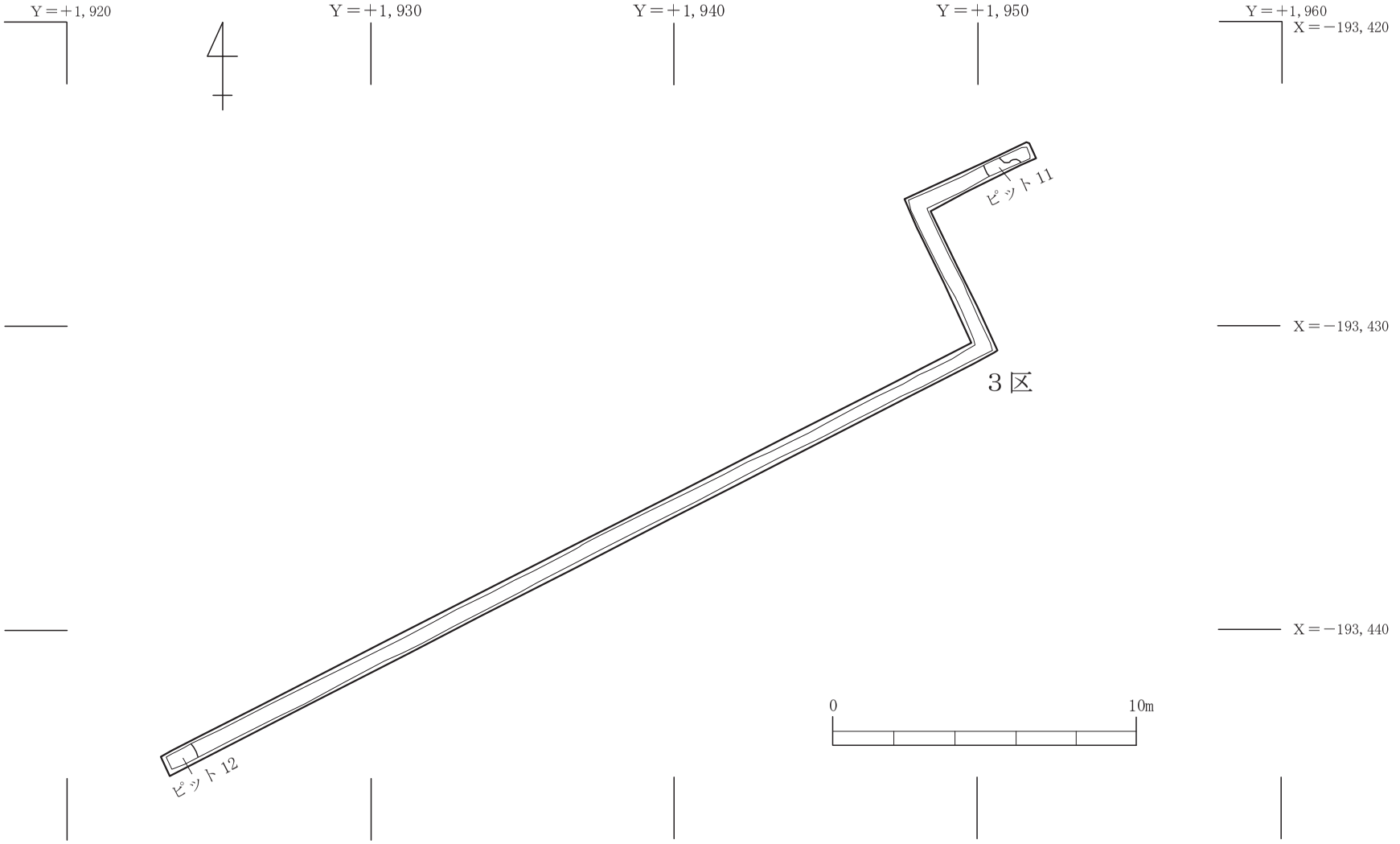


図128　武家屋敷地区第12地点３区遺構配置図
Fig.128　Distribution of features at location 3 of BK12

第Ⅴ章　仙台城周辺の武家屋敷地区についての検討

1.仙台城下絵図にみる屋敷拝領者変遷と階層性－川内地区の事例に基づいて－

澁谷　悠子（東北大学大学院文学研究科日本史研究室）

はじめに

本稿では、仙台藩家臣団のなかでも上級家臣の拝領屋敷が多く存在したという仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区（以下、川内地区と呼称）の屋敷拝領者の変遷と階層性について、城下絵図にもとづき考察する。

近世期における川内地区の概略を示すと、「南部に本丸、その北東に東の丸（三の丸）があり、東の丸をめぐる外堀東に一家格の片倉小十郎屋敷、その南続きに追廻馬場などの馬事馬政に関する施設、大手門を挟んで西に二の丸がある。大手門を東へ城下に結ぶ大橋（仙台橋）があり、侍屋敷の川内柳丁、職人屋敷の川内川前丁・川内大工町、茶室などのあった数寄屋丁、小人衆などの置かれた川内元支倉丁・川内明神横丁のほか川内中ノ瀬町などがあった。澱橋通以西には亀岡八幡神社に通じる亀岡通があり、大身の侍屋敷が割られ、一筋南の川内中の坂通も同様である。二の丸北西裏は旗本足軽屋敷の山屋敷、亀岡通突当りを南北に川内大堀通が延び、その西筋に亀岡町、その北に旗本足軽屋敷の三十人町」（平凡社地方資料センター 1987）があった。これらのことから、近世の川内地区は上級家臣の屋敷と職人屋敷・足軽屋敷が混在する地区だったことが分かる。

現在までに、立会調査を除いて川内地区では計4地点で発掘調査が行われてきた。『東北大学埋蔵文化財調査年報19』では調査地点に該当する区画に限って絵図から人名を抽出し、屋敷拝領者の家格および知行高・禄高の変遷を分析している（東北大学埋蔵文化財調査研究センター 2006）。出土遺構・遺物の性格を考える上で、限定された区画だけでなく調査地点を含む地区全体の屋敷拝領者の階層性などについて検討することは有意義であると考える。なお、先行研究では①近世後期、仙台藩の中級家臣クラスでは武家屋敷の交換や賃貸が頻繁に行われ、拝領した屋敷と居住する屋敷が別であったという事例（渡辺2004）や、②城下町の拡大した17世紀において川内地区では奉行（他藩では家老にあたる）や小姓頭などを務める者が多く、片平丁では家格および知行高・禄高の高い者が多くを占めることなどが報告されている（後藤1983）。①での指摘通り、城下絵図に記されているのはあくまでも拝領者の氏名であり、特に中級家臣以下においては居住実態を示すものではない可能性がある。しかし、中級家臣ほど移動が激しくないと推察される上級家臣は絵図からある程度実態を把握することができると思われる。また、誰の屋敷地をどこに配置するのかという藩側の意図を窺い知ることは可能であろう。また、②で分析対象としているのは17世紀中の事例のみであり、城下絵図に記された屋敷拝領者の家格および知行高・禄高をふまえて通時的に分析した研究はこれまでにない。よって、仙台城下の中で重要な位置を占める川内地区の上級家臣に着目し、その移り変わりから城下町編成の在り方を明らかにしたい。

（1）使用史料と分析方法

これまでに知られている近世期に作られた仙台城下絵図は、個々の屋敷の区画が記されていない正保2年（1645）絵図を除いて主要なものが25件確認されている。そのうち、大判の図版が刊行されている寛文4年（1664）から安政3～6年（1856～1859）までの絵図9点を用いて、川内地区の変遷を捉えることとする（表76）。『仙台城下絵図の研究』・『絵図・地図で見る仙台』・『絵図・地図で見る仙台』第2輯所収の絵図を基本史料とした。それとあわせて、寛文4年絵図は宮城県図書館のホームページ（「叡智の杜 http://eichi.library.pref.miyagi.jp/」）で公開されているデジタル画像も利用し、天明6年～寛政元年（1786～1789）絵図は仙台市博物館所蔵のマイクロフィルム紙焼きを参照した。なお、各絵図は製作年代で呼び表すこととする（例　寛文4年絵図）。

分析にあたり、江戸時代の道路復元図（『東北大学埋蔵文化財調査年報19第1分冊』掲載、図15）をもとに、

絵図上で川内地区に該当する範囲を1区から24区までの区画（大区画）に分け、さらに屋敷拝領者名や土地利用の内容（「畑」・「御塩噌蔵」など）が記された区画（小区画）に通し番号を振って、絵図の模式図および人名などの一覧表を作成した（図129 ～ 137、表77 ～ 92）。各絵図を比較・検討する都合上、図130 ～ 137は寛文4年絵図をベースマップとして作成しており、厳密な絵図のトレースではないことを付記しておく。屋敷拝領者の氏名が記されている場合は、『私本仙台藩事典』・『史料仙台藩伊達氏家臣団事典』を利用して家格および知行高・禄高を調べた。家格は一門格から家格不明までの13に分け、知行高・禄高は201貫文以上のAから禄高不明のGまでの7つに分類した。仙台藩は家臣に知行地として土地を給付し、そこから入る年貢を家臣の知行収入とする地方知行制を採っていた。家臣の多くは知行高の大小に関係なく知行地を与えられているが、一方、切米（現金）や扶持米（米）として直接藩から貨幣や米を給付されていた者も多数存在した（仙台市史編さん委員会2001）。今回扱った事例では、切米・扶持米を与えられた者は知行地を与えられた者に比べ2割程度と少数であったため、切米・扶持米支給の場合はFに一括した。なお、仙台藩では生産高や知行高を貫高で表示しており、貫高と石高の換算方法は寛永検地を経て1貫（1000文）を10石に換算するように定められた（仙台市史編さん委員会前掲）。今回使用した絵図は寛永検地後のもののみなので、1貫を10石として換算すればよいこととなる。

（2）川内地区における各区画の特徴

はじめに、1区から24区までの大区画ごとにその特徴を捉えることとする。なお、ここでは絵図上に氏名（名義人）が記された拝領屋敷を中心に検討を行う。その他については図129 ～ 137、表77 ～ 92を参照されたい。

大区画ごとに屋敷拝領者の家格および知行高・禄高をみたところ、その特徴は大きく4類型（Ⅰ～Ⅳ）に分類できた。Ⅰは、はじめ家格が召出格ないし虎間格で、知行高はDからEを中心とする家臣の屋敷がみられる。延宝9年～天和3年（1681 ～ 1683）絵図から元禄4・5年（1691・1692）絵図にかけて、上級家臣である一門格・一家格で知行高Aの藩士が配置されるようになる（1・7・8・10・11・16・17・18区）。特に8区では、着座格・Aや虎間格・Aなど、比較的知行高の多い家臣がみられた。16区では安政3 ～ 6年絵図にのみ「御小人」・「御簇元」が確認できた。Ⅱは近世前期に家格が虎間格ないし家格不明、知行高・禄高はEから禄高不明に属する家臣の屋敷地が置かれ、おおむね元禄4・5年絵図を境に個人名表記ではなく「御簇元足軽」・「御小人」・「御職人」などの一括記載がされるようになる（2・3・4・5・13・14・15・20区）。Ⅲは享保9年（1724）絵図まで家格および知行高・禄高が不明の屋敷（苗字および名前から武士と推察される）や「御作事小屋」・「御勘定蔵」が置かれているが、宝暦10年～明和3年（1760 ～ 1766）絵図以降は絵図上に何も記されなくなる（9・12区）。Ⅳは近世全体を通して区画の構成にほとんど変化が認められないものとした（6・19・21・22・23・24区）。そのうち、6区と24区では名義人の苗字の変化から多少の入れ替わりは確認できるものの、概して一門格・一家格や知行高がAに属する上級家臣の屋敷地が置かれている。また、これ以外の区画では「大工衆」・「職人衆」、「御小人衆」などが配置されている。ただし、21区では宝暦10年～明和3年絵図から天明6年～寛政元年（1786 ～ 1789）絵図に家格および知行高・禄高が不明の個人名義の屋敷地が置かれている。川内地区の拝領屋敷のうち、上級家臣の屋敷配置に着目すると、川内地区と広瀬川を挟んだ対岸地区を結ぶ橋の周辺1・6・18・24区には寛文期（1661 ～ 1673）から一門格や一家格の屋敷が置かれ、城の北側にあたる7区から11区では元禄期（1688 ～ 1704）以降、上級家臣が配置されるようになったことが分かる。この配置は有事の際に上級家臣の屋敷を拠点に城を防衛するため、または役職などに配慮したためと推察される。職人・大工屋敷や足軽屋敷は基本的に川内地区の周縁部に置かれ、近世を通じて大きな変化はみられなかった。

（3）屋敷拝領者数の増減と移動・定着について

ここでは、絵図に記された名義人の苗字に着目し、前後の絵図で屋敷地の名義人に変更がないか（他家との交

換・賃貸)、川内地区における屋敷拝領者の移動および定着について検討したい。

川内地区に拝領屋敷を持つ者の数について分析する。なお、名義人変更の有無については、ある小区画に屋敷地を持つ名義人の苗字に前後の絵図で変更がなければ「家」内部で相続したとし、苗字が変わっていれば他家に屋敷地の名義が移ったものと判断した。その際、漢字の音ないし訓が同じ「川野」・「河野」や「道仙」・「道泉」は同一人物と判断した。また、字形がよく似た異なる漢字が用いられている場合(「次郎右衛門」・「次郎左衛門」)や、1文字脱落の場合(「勘之丞」・「勘丞」)も同一の人物として扱った。

表93は小区画の数、絵図ごとの個人名義の屋敷地数と、前後の絵図で名義人の変更がみられなかった件数(川内地区に拝領屋敷を持ち続ける者の数)を示している。個人名義の屋敷地数をみると、寛文4年絵図から延宝9年～天和3年絵図までは110件から140件ほどで推移しているものの、元禄4・5年絵図から宝暦10～明和3年絵図では100件を切っている。天明6年～寛政元年絵図では再び118件まで増えるが、安政3～6年絵図は81件に減少している。特に安政3～6年絵図は、屋敷地の名義人が具体的な個人名から「御小人」や「御簇本足軽衆」などと一括表記される事例が増えており、名義人の数としては増えないということが指摘できる。検討の結果、川内地区に屋敷地を持つ者のうち、絵図上に個人名が記された者は延宝9年～天和3年絵図までは微増ないし横ばい傾向がみられるが、それ以降は天明6年～寛政元年絵図を除いて緩やかに減少していくことが分かった。

次に屋敷拝領者の定着率について検討する。前後の絵図を比較した際に名義人の苗字に変更がない場合は、「家」内部で相続したと考え、変更があれば屋敷地を所有する「家」が変わったものと判断した。まず、原則として定着率は絵図作成年の幅と関連性があることを指摘したい。これは史料的制約ともいえるが、比較する絵図間の作成年がひらけばひらくほど屋敷地の名義人の照合率が低下する。例えば、製作年の幅が最大5年と見積もられる寛文4年絵図と寛文8・9年(1668・1669)絵図を比較すると、名義人の照合率は85%(112件のうち95件)であった。一方、製作年の幅が最大12年の寛文8・9年絵図と延宝6～8年(1678～1680)絵図では、49%(146件のうち72件)である。そして、近世後期から末期の絵図は特に製作年の幅が大きいため、照合率は3割から2割ほどであった。その一方で、近世中期に作成されたとみられる享保9年の絵図では、特に照合率が低く、その前の元禄4・5年絵図と照合できたのは1割未満(78件のうち7件)であった。現時点でその理由は不明である。以上のことから、川内地区では享保期(1716～1736)以降、屋敷地の名義人変更が広範にみられることが明らかになった。しかし少数ではあるものの長期にわたって川内地区に住み続ける「家」も存在し、それは一門格・一家格で大禄を有する上級家臣層に多い傾向が認められた(表94)。

(4)川内地区に屋敷地を有する家臣の家格および知行高・禄高

川内地区に屋敷地を所有する者の家格および知行高・禄高について検討を行う。はじめに家格の時期的変遷をみると、延宝9年～天和3年絵図まで虎間格以下の者が7割弱を占めている(図138)。元禄4・5年絵図では召出格以上が約5割に増え、享保9年絵図から安政3～6年絵図にかけて着座格以上の家格を有する者が増加する。特に安政3～6年絵図では一族格の増加が著しい。同様に知行高・禄高をみると、延宝9年～天和3年絵図までは50貫文以下が7割程度を占めている(図139)。享保9年絵図は50貫文以下が約4割に減少し、51貫文以上が約6割となり、比率が逆転する。宝暦10年～明和3年絵図では50貫文以下が再び増えるものの、天明6年～寛政元年の絵図以降は101貫文以上の知行高を有する者が増加している。家格および知行高・禄高の変遷を検討した結果、川内地区では時代が下るにつれて家格の高い家臣が増え、大禄を有する者が増えることが分かった。役職経験をみると、一家格から宿老格では奉行・少老や小姓・近習詰などの役職を務めた人物が多いといえる。なお、仙台藩では一門格は奉行など藩の役職に就くことがなかったため、川内地区に拝領屋敷を持つ一門格の中には役職就任者はみられない。

次に、家格と知行高・禄高の間に相関関係が認められるかどうか分析する。分析にあたり、データ精度確保の

ため、時期ごとではなく近世全体として一括したデータを使用した。一門格・一家格では知行高201貫文以上が約9割を占め、準一家格から着座格ではおおむね100貫文以上の知行高を持っている（図140）。召出格・虎間格では100貫文以上は約2割から約1割程度であり、中間格以下では50貫文以下が大半を占めている。家格と知行高・禄高は必ずしも連動するわけではなく、家格としてはさほど高くない虎間格のうち、201貫文以上の知行高を持つ者が僅かながら認められた。しかし、今回扱った事例では基本的に家格と知行高・禄高はほぼ連動しており、一門格・一家格は201貫文以上、準一家格から着座格までは100貫文以上の知行高を有している。以上のことから、延宝・天和期（1673 ～ 1684）まで川内地区における上級家臣数はさほど多くなく、当時期は虎間格で知行高が50貫文以下を中心とする中級家臣が主体であったといえる。宝暦・明和期（1751 ～ 1772）になると、奉行や少老といった藩の要職に就き、一族格などに属する100貫文以上の知行高の上級家臣が多くなったことが明らかになった。

（５）上級家臣の家格確定時期

4では川内地区に屋敷地を持つ家臣の家格および知行高・禄高について分析したところ、近世後期に一族格など上位の家格を有する大禄の家臣が増えるという結果が得られた。ところで、仙台藩の上級家臣の家格はいつ頃定められたのだろうか。先行研究では、「江戸時代初期には家格を与えられた家臣を総称して「御一門・一家・一族衆」とよんでいるから、上位の一門・一家・一族の家格はこのころからすでに定まっているものとみられる」（仙台市史編さん委員会前掲）と述べられているにすぎない。近世後期に高位の家格を持つ者が何らかの理由で増えた可能性も考えられるため、ここでは川内地区で家格の高い大禄の上級家臣が増えたことと、家格確定年の間に時期的一致がみられるのかどうかについて確認したい。

まず、知行高100石以上の家臣の由緒をまとめた『伊達世臣家譜』から宿老以上の家臣の家格確定年を抽出した。なお、家格は賞罰のため上下する場合があるものの、そのような事例はごく少数であった。その場合は最終的な確定年代を採用するものとした。集計結果をみると、検討対象となる63件のうち中世までに家格が定められたことが明らかなのは14件であった。近世に入ると延宝期（1673 ～ 1681）以前に家格が決められたのは21件、それ以降が8件、年代不明が20件となった。宿老以上の家格を有する「家」に限れば、おおむね延宝期までに家格が確定されていることが分かった。よって、川内地区での上級家臣数の増加時期と家格確定年の間には時期的に関連性が認められないと結論付けられ、近世後期に川内地区で上級家臣が増える現象には別の要因が存在するものと考えられる。

おわりに

最後に、本稿で明らかにできた点について簡単にまとめたい。川内地区の各区画の特徴は、橋に近い1・6・18・24区では寛文期から上級家臣の屋敷が置かれ、城の北側にあたる7区から11区でも元禄期以降、同様の傾向がみられはじめた。この配置は有事の際に上級家臣の屋敷を拠点に城を防衛するため、または役職を務める上での利便性などに配慮したためと推察される。拝領屋敷の名義人をみると、川内地区では享保期以降、名義人の変更が広範にみられることが明らかになった。しかし、長期にわたって川内地区に屋敷を持つ「家」もあり、それは一門格・一家格などの上級家臣層に多い傾向が認められた。これらの「家」の家格ならびに知行高・禄高を時期ごとに分析すると、延宝・天和期まで川内地区における上級家臣数はさほど多くなく、当時期は虎間格で禄高が50貫文以下を中心とする中級家臣が主体であったといえる。宝暦・明和期になると、奉行などの要職を務め、一族格に属する100貫文以上の知行高を有する者などが増えることが明らかになった。また、仙台藩における上級家臣の家格確定年は、宿老以上の家格を有する「家」に限れば、おおむね延宝期までに定められていることが分かった。よって、川内地区での上級家臣数の増加時期と家格確定年の間には関連性が認められず、近世後期に

川内地区に上級家臣が増える現象には別の要因が存在するものと考えられる。

今回の分析では、データから導き出された事実関係の指摘にとどまり、近世後期以降に川内地区へ上級家臣が集中した理由について明らかにすることができなかった。武家屋敷の交換・移動について、町奉行や郡奉行などへの役職就任や在郷居住すなわち役職不就任が主たる理由であると指摘がなされているが（渡辺・後藤前掲）、それだけでは説明できない事例も散見された。今後の課題としては、絵図史料だけでなく『治家記録』など関係史料の検討を行い、役職就任との関係性について踏み込んだ議論を行いたい。分析にあたって作成した絵図の模式図や一覧表は、川内地区というごく一部の地区に拝領屋敷を有した者に限られるが、仙台藩家臣の人名データベースとして利用頂ければ幸いである。

引用・参考文献

阿刀田令造　1936『仙台城下絵図の研究』斎藤報恩会

後藤雄二　1983「城下町仙台の構造」『宮城の研究』第4巻　近世篇Ⅱ、356～387頁、清文堂

仙台市史編さん委員会編　2001『仙台市史』通史編3近世1仙台市

仙台市史編さん委員会編　2003『仙台市史』通史編4近世2仙台市

平重道解題　1975『伊達世臣家譜　第一巻』復刻版仙台叢書、宝文堂

高倉　淳ほか編　1994『絵図・地図で見る仙台』今野印刷

東北大学埋蔵文化財調査研究センター　2006『東北大学埋蔵文化財調査年報19』第1分冊　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第7地点の調査・芦ノ口遺跡第5次調査、東北大学埋蔵文化財調査研究センター

本田　勇編　2003『史料仙台伊達氏家臣団事典』丸善仙台出版サービスセンター

吉岡一男ほか編　2005『絵図・地図で見る仙台』第2輯、今野印刷

平凡社地方資料センター編1987『宮城県の地名』日本歴史地名大系第四巻、平凡社

坂田　啓編　1995『私本仙台藩士事典』創栄出版

渡辺浩一　2004「近世後期仙台における武家屋敷交換の実態」『仙台都市研究』vol.4、30～40頁、東北都市学会

渡辺浩一　2005「武家屋敷に住む都市民衆―仙台城下町の宿守に関する基礎的考察―」『市史せんだい』vol15、55～69頁、仙台市博物館

表76　検討対象となる仙台城下絵図
Tab.76　List of picture maps of Sendai town

名称	製作年代	年代幅（最大値）	『仙台城下絵図の研究』	『絵図・地図で見る仙台』	『絵図・地図で見る仙台』2	現所蔵	旧所蔵	模式図
仙台御城下絵図	寛文４年（1664）	－	二　付図２	②		宮城県図書館73	伊達家	図129
仙台城下絵図	寛文８・９年（1668・1669）	５年間	三　付図15				第二高等学校	図130
仙台城下大絵図	延宝６～８年（1678～1680）	12年間	七　付図４・16			宮城県図書館78	宮城県図書館	図131
仙台城下絵図	延宝９年～天和３年（1681～1683）	５年間			①	仙台市歴史民俗資料館		図132
仙台城下五釐卦絵図	元禄４・５年（1691・1692）	11年間		③		齋藤報恩会		図133
仙台城下絵図	享保９年以降（1724～）	33年間			②	東北歴史博物館		図134
仙台城下絵図	宝暦10年～明和３年（1760～1766）	42年間			③	齋藤報恩会		図135
仙台城下絵図	天明６年～寛政元年（1786～1789）	29年間	十六　付図10	④		仙台市博物館	個人	図136
安政補正改革仙府絵図	安政３～６年（1856～1859）	73年間	十九　付図13・17	⑤		戦災焼失	第二師団	図137

＊報告書『東北大学埋蔵文化財調査年報19』第1分冊の表５を改変

表77　寛文4年絵図　川内地区人名など一覧（1）
Tab.77　List of names around Kawauchi of picture map where Sendai town was drawn in 1664 (1)

通し番号		人名・寺院名など	名義人変更なし	知行高・禄高		家格など	役職など	通し番号		人名・寺院名など	名義人変更なし	知行高・禄高		家格など	役職など
1	1	（三）十人衆	−					3	21	同	−				
1	2	三十人衆	−					3	22	同	−				
1	3	香明院	−					3	23	坊主衆	−				
1	4	白鳥明神	−					3	24	御鍛冶衆	−				
1	5	三十人衆	−					3	25	八巻道斎	−				
1	6	三十人衆	−					3	26	同	−				
1	7	三十人衆	−					3	27	坊主衆	−				
1	8	等覚院	−					3	28	貝山左太夫	−	E	12貫文	広間	
1	9	三十人衆	−					3	29	八巻権吉	−	F	３両３歩４人	不明	
1	10	早坂彦作	−					3	30	板垣久哲	−				
1	11	三十人衆	−					3	31	坊主衆	−				
1	12	橋本閑人	−					3	32	同	−				
1	13	橋本九十郎	−					3	33	遊佐次兵衛	−				
1	14	小泉周庵	−	E	25貫文	その他（内科医）		3	34	佐藤留主松	−				
1	15	吉田図書	−	E	30貫文	虎間		3	35	大友加左衛門	−	F	１両３歩10匁４人	不明	
1	16	鈴木主税	−	D	61貫文	召出		3	36	門馬次郎衛門	−				
1	17	和田織部	−	C	150貫文	着坐		3	37	今泉嘉左衛門	−	F	２両２歩７人	不明	
1	18	戸田喜太夫	−	C	101貫文	着坐		3	38	大内源右衛門	−	F	３両５人（台）	不明	
1	19	錦織休琢	−	E	36貫文	着坐		3	39	小出茂右衛門	−	F	１両２歩４人	不明	
1	20	大和田四郎右衛門	−	D	90貫文	召出		3	40	大越十三郎	−	F	14両４人	不明	
1	21	笠原出雲	−	B	161貫文	着坐		3	41	白石勘三郎	−				
1	22	松本縫殿	−	C	123貫文	着坐		3	42	岡本利兵衛	−	F	１両１歩	不明	
1	23	（剥離）	−					3	43	千枝宗庵	−	F	２両２歩５匁３歩３人	不明	
2	1-1	光明院	−					3	44	前野勘丞	−	F	２両４人	不明	
2	1-2	明神	−					3	45	小野源内	−	F	３両１歩４人	不明	
2	2	高橋次左衛門	−	F	１両４人	不明		3	46	坊主衆	−				
2	3	三十人衆	−					4・5	1	市川江左衛門	−				
2	4	中井覚兵衛	−	F	20両20人	不明		4	2	平田伝之丞	−	E	37貫文	虎間	
3	1	御比丘尼寺	−					5	2	真柳権丞	−	E	37貫文	不明	
3	2	坊主衆	−					6	2	成田作太夫	−				
3	3	同	−					6	3	永沼作左衛門	−	C	101貫文	召出	
3	4	同	−					6	4	伊達肥前殿	−	A	407貫文	一門	
3	5	同	−					6	5	和久田半太夫	−				
3	6	同	−					6	6	清野久左衛門	−				
3	7	牛田主殿	−	E	15貫文	虎間		6	7	紺野加右衛門	−	F	４両１歩14匁５人	不明	
3	8	坊主衆	−					6	8	佐藤善左衛門	−	E	11貫文	中間	
3	9	同	−					6	9	渡部半兵衛	−				
3	10	同	−					6	10	宍戸吉左衛門	−				
3	11	同	−					7	1	青木掃部	−				
3	12	同	−					7	2	中村伊右衛門	−				
3	13	宗意	−					7	3	佐藤三太夫	−				
3	14	菅野寿三	−					8	1	橋本善兵衛	−				
3	15	伊藤寿作	−					8	2	渋谷益庵	−	F	５貫文（蔵米）	その他（内科医）	
3	16	職人衆	−					8	3	和久田福助	−				
3	17	同	−					8	4	御作事小屋	−				
3	18	同	−					9	1	御小人衆	−				
3	19	同	−					9	2	御小人衆	−				
3	20	同	−					9	3	今野市右衛門	−	F	１両１歩３人	不明	

表78　寛文4年絵図　川内地区人名など一覧（２）

Tab.78 List of names around Kawauchi of picture map where Sendai town was drawn in 1664 (2)

通し番号		人名・寺院名など	名義人変更なし	知行高・禄高		家格など	役職など
10	1	岡部有節	−	E	17貫文	その他（内科医）	
10	2	米山兵左衛門	−	E	15貫文	中間	
10	3	今村善太夫	−	E	30貫文	不明	
10	4	入江左太夫	−	E	22貫文	虎間	
10	5	中塚十兵衛	−	E	30貫文	不明	
10	6	真山刑部	−	A	270貫文	虎間	
10	7	川野三四郎	−				
10	8	渋川助太夫	−	C	108貫文	虎間	
10	9	黒沢勘右衛門	−	E	30貫文	虎間	
10	10	望月正太夫	−	E	30貫文	虎間	
10	11	遠藤正九郎	−	E	50貫文	不明	
10	12	武田五郎左衛門	−	C	118貫文	召出	
10	13	内馬場蔵人	−	D	60貫文	虎間	
10	14	大町清九郎	−	E	40貫文	不明	
10	15	加藤長太郎	−				
11	1	芦沢頼母	−	E	50貫文	虎間	
11	2	伊藤道泉	−	E	14貫文	その他（内科医）	
11	3	林八郎兵衛	−	E	１貫文	虎間	
11	4	大河内善左衛門	−	E	20貫文	不明	
11	5	大立目将監	−	E	45貫文	虎間	
11	6	木村久馬	−	D	83貫文	召出	
11	7	鴇田次右衛門	−	B	217貫文	虎間	
11	8	中村久兵衛	−				
11	9	中里道朔	−	E	32貫文	中間	
11	10	茂庭圓太郎	−	E	25貫文	不明	
11	11	高屋松庵	−	D	66貫文	その他（内科医）	
12	1	御作事小屋	−				
12	2	御作事小屋	−				
12	3	御勘定蔵	−				
13	1	飯渕三太夫	−	E	30貫文	虎間	
13	2	遠藤丹三郎	−				
13	3	斎藤与惣右衛門	−	E	50貫文	不明	
13	4	（判読不能）	−				
13	5	氏家柏庵	−	E	31貫文	不明	
14	1	大田	−				
14	2	鈴木玄東	−	F	判金１枚８人	その他（内科医）	
14	3	戸田小左衛門	−	E	10貫文	不明	
14	4	熊田市兵衛	−	E	35貫文	不明	
15	1	堀越甚兵衛	−	D	61貫文	召出	
15	2	（剥離）	−				
16	1	上［　　］	−				
16	2	真山次郎三郎	−				
16	3	（判読不能）	−				
16	4	斎藤山三郎	−				
16	5	（剥離）	−				
17	1	里見正兵衛	−	E	48貫文	不明	
17	2	堀越七兵衛	−				
17	3	伊藤三右衛門	−	E	35貫文	虎間	
17	4	松崎十太夫	−	E	50貫文	虎間	
17	5	（判読不能）	−				
17	6	馬籠五郎右衛門	−	F	７両４人	不明	
17	7	古内造酒祐	−	A	749貫文	不明	
18	1	古内勘（之）丞	−	D	62貫文	虎間	
18	2	高［　　］	−				
18	3	高屋喜庵	−	D	100貫文	着坐	
18	4	古内源太夫	−	A	328貫文	着坐	
18	5	小国七右衛門	−	E	47貫文	虎間	
18	6	御炭蔵	−				
18	7	御目付様	−				
18	8	御目付様	−				
18	9	会所	−				
19	1	御小人衆	−				
19	2	御小人衆	−				
19	3	御小人衆	−				
19	4	御小人衆	−				
19	5	御小人衆	−				
19	6	御小人衆	−				
19	7	御塩噌蔵	−				
20	1	多ヶ谷金弥	−				
20	2	川野半兵衛	−	E	25貫文	虎間	
21	1	（判読不能）	−				
21	2	大工衆	−				
22	1	大工衆	−				
22	2	御小人衆	−				
23	1	大工衆	−				
23	2	高橋甚之丞	−				
24	1	白津七郎右衛門	−	E	40貫文	召出	
24	2	御口取衆	−				
24	3	御馬屋　岩渕加兵衛	−	E	33貫文	中間	
24	4	御馬屋 草刈市右衛門	−	E	30貫文	不明	
24	5	佐伯九太夫	−	E	10貫文	次間	
24	6	桑嶋采女	−				
24	7	御口取衆	−				
24	8	伊藤次兵衛	−	F	４両５人	不明	
24	9	佐々二郎作	−				
24	10	御馬屋 草刈太右衛門	−	E	20貫文	不明	
24	11	御馬屋 戸津弥左衛門	−	E	５貫文	不明	
24	12	御馬屋 日下又右衛門	−	E	45貫文	次間	

＊知行高は１貫文以下切り捨てとした
＊漢字は原則として常用漢字を用い、変体仮名・合字などは通常の仮名に改めた
＊「○」は判読不能の文字を表し、文字数が不明の場合は［　　］、判読に疑問が残るものは（　）で示した
＊「■」は１文字分が空白のものを示す
＊「※なし」は小区画内に何も文字が記されていないものを示す
＊前後の絵図を照合した際、漢字の音ないし訓が同じ「川野」・「河野」や「道仙」・「道泉」は同一人物と判断した　また、字形がよく似た異なる漢字が用いられている場合（「次郎右衛門」・「次郎左衛門」）や、１文字脱落の場合（「勘之丞」・「勘丞」）も同一の人物として扱った

表79　寛文8・9年絵図　川内地区人名など一覧（1）
Tab.79　List of names around Kawauchi of picture map where Sendai town was drawn in 1668・1669 (1)

通し番号		人名・寺院名など	名義人変更なし	知行高・禄高		家格など	役職など	通し番号		人名・寺院名など	名義人変更なし	知行高・禄高		家格など	役職など
1	1	三十人衆						3	22	道寿					
1	2	三十人衆						3	23	同					
1	3	光明院						3	24	坊主衆					
1	4	三十人衆						3	25	貝山庄太夫					
1	5	三十人衆						3	26	八巻権（吉）	●	F	3両3歩4人	不明	
1	6	三十人衆						3	27	坊主衆					
1	7	三十人衆						3	28	休哲					
1	8	東岳院						3	29	坊主衆					
1	9	橋本閑人	●					3	30	佐藤留主松	●				
1	10	橋本九十郎	●					3	31	大友加左衛門	●	F	1両3歩10匁4人	不明	
1	11	小泉周庵	●	E	25貫文	その他（内科医）		3	32	白石甚三郎	●	F	2両4人	不明	
1	12	吉田図書	●	E	30貫文	虎間		3	33	岡本利兵衛	●	F	1両1歩	不明	
1	13	鈴木主税	●	D	61貫文	召出		3	34	千條宗庵	●	F	2両2歩5匁3歩3人	不明	
1	14	和田織部	●	B	160貫文	着座		3	35	門間二郎右衛門	●				
1	15	戸田喜太夫	●	C	101貫文	着座		3	36	今泉嘉右衛門	●	F	2両2歩7人	不明	
1	16	錦織休琢	●	E	36貫文	着座		3	37	大内源右衛門	●	F	3両5人（台）	不明	
1	17	大和田四郎右衛門	●	D	90貫文	召出		3	38	小出茂左衛門	●	F	1両2歩4人	不明	
1	18	笠原出雲	●	B	161貫文	着座		3	39	大越十三郎	●	F	14両4人	不明	
1	19	松本縫殿	●	C	123貫文	着座		3	40	前野勘之丞	●	F	2両4人	不明	
2	1	中井覚兵衛	●					3	41	小野源内	●	F	3両1歩4人	不明	
2	2	三十人衆						4・5	1	市川伊右衛門	●				
2	3	高橋次右衛門	●	F	1両4人	不明		4	2	平田伝之丞	●	E	37貫文	虎間	
2	4	光明院						5	2	真柳権之丞	●	E	37貫文	不明	
3	1	比丘尼寺						6	1	成田作太夫	●				
3	2	坊主衆						6	2	永沼作左衛門	●	C	101貫文	召出	
3	3	同						6	3	肥前様＜伊達肥前＞	●	A	407貫文	一門	
3	4	同						6	4	和久田半太夫	●				
3	5	同						6	5	清野久左衛門	●	F	1両2歩7匁6分4人	不明	
3	6	牛田主殿	●	E	15貫文	虎間		6	6	衛門					
3	7	坊主衆						6	7	佐藤善左衛門	●	E	11貫文	中間	
3	8	同						6	8	渡部半兵衛	●				
3	9	同						6	9	宍戸吉左衛門	●				
3	10	同						7	1	青木掃部					
3	11	同						7	2	伊藤三太夫		F	3両2歩4人	不明	
3	12	宗意	●					8	1	澁谷益庵		F	5貫文　（蔵米）	その他（内科医）	
3	13	寿三	●					8	2	御小屋					
3	14	寿作	●					9	1	御小人衆					
3	15	同						9	2	御小人衆					
3	16	同						9	3	今野市右衛門		F	1両1歩3人	不明	
3	17	同						10	1	米山兵左衛門	●	E	15貫文	中間	
3	18	同						10	2	今村善太夫	●	E	30貫文	不明	
3	19	同						10	3	入江左太夫	●	E	21貫文	虎間	
3	20	同						10	4	中塚十兵衛	●	E	30貫文	不明	
3	21	坊主衆						10	5	真山刑部	●	A	270貫文	虎間	

表80　寛文8・9年絵図　川内地区人名など一覧（2）

Tab.80　List of names around Kawauchi of picture map where Sendai town was drawn in 1668・1669 (2)

通し番号		人名・寺院名など	名義人変更なし	知行高・禄高		家格など	役職など
10	6	大町清九郎	●	E	40貫文	不明	納戸頭
10	7	加藤長吉	●				
10	8	川野三四郎	●				
10	9	黒沢勘右衛門	●	E	30貫文	虎間	
10	10	望月正太夫	●	E	30貫文	虎間	
10	11	遠藤正九郎	●	E	50貫文	不明	
10	12	武田五郎左衛門	●	C	136貫文	召出	
10	13	内馬場蔵人	●	D	60貫文	虎間	
11	1	芦沢頼母	●	E	50貫文	虎間	
11	2	伊達道仙	●	E	14貫文	その他（内科医）	
11	3	林八郎兵衛	●	E	１貫文	虎間	
11	4	中村久兵衛	●				
11	5	中里道朔	●	E	32貫文	中間	
11	6	茂庭圓太郎	●	E	20貫文	不明	
11	7	高屋松庵	●	D	66貫文	その他（内科医）	
11	8	大河内善左衛門	●	E	20貫文	不明	
11	9	大立目将監	●	E	45貫文	虎間	
11	10	木村久馬	●	D	83貫文	召出	
11	11	鴇田次右衛門	●	A	217貫文	虎間	
12	−	百間蔵					
13	1	飯渕三太夫	●	E	30貫文	虎間	
13	2	遠藤丹三郎	●				
13	3	才藤九郎兵衛	●	D	54貫文	不明	
13	4	成田助之丞		D	51貫文	虎間	
13	5	氏家柏安	●	E	30貫文	不明	
14	1	堀越甚三郎	●				
14	2	鈴木	●				
14	3	戸田	●				
14	4	熊田	●				
15	−	玉虫太郎左衛門		E	48貫文	中間	
16	1	山本三郎兵衛		D	60貫文	虎間	
16	2	真山杢兵衛	●	D	66貫文	虎間	
16	3	吉田三介					
16	4	才藤玄丘	●				
17	1	里見正兵衛	●	E	48貫文	不明	
17	2	堀七兵衛					
17	3	上田弥					
17	4	真籠五郎右衛門	●	F	７両４人	不明	
17	5	伊藤三右衛門	●	E	35貫文	虎間	
17	6	松崎十太夫	●	E	50貫文	虎間	
17	7	古内造酒助	●	A	749貫文	不明	
18	1	高屋宗怡		E	44貫文	その他（内科医）	
18	2	高屋喜庵	●	D	100貫文	着座	
18	3	古内志摩	●	A	330貫文	着座	奉行職
18	4	小国七右衛門	●	E	47貫文	虎間	
18	5	御炭蔵					
18	6	御目付衆					
18	7	御目付衆					
18	8	会所					
19	1	御小人衆					
19	2	御小人衆					
19	3	御小人衆					
19	4	御小人衆					
19	5	御小人衆					
19	6	御小人衆					
19	7	御塩噌蔵					
20	1	多ヶ谷金弥	●				
20	2	河野半兵衛	●	E	25貫文	虎間	
21	1	鈴木六兵衛		F	１両２歩４人	不明	
21	2	志賀（重）蔵					
21	3	大工衆					
22	1	大工衆					
22	2	御小人衆					
23	1	大工衆					
23	2	高橋甚之丞	●				
24	1	津田玄蕃		A	800貫文	虎間	
24	2	白津七郎右衛門	●	E	40貫文	召出	
24	3	御口取衆					
24	4	御馬屋　岩渕加兵衛	●	E	33貫文	中間	
24	5	御馬屋					
24	6	草刈市右衛門		E	30貫文	不明	
24	7	佐伯八郎右衛門	●				
24	8	桑嶋采女	●				
24	9	御口取衆					
24	10	伯楽　伊藤次兵衛	●	F	３両２歩４人	不明	
24	11	佐々二郎作	●				
24	12	御馬屋　草刈太郎右衛門	●	E	20貫文	不明	
24	13	御馬屋 戸津弥左衛門	●	E	５貫文	不明	
24	14	御馬屋 日下五右衛門	●	E	45貫文	次間	

＊知行高は１貫文以下切り捨てとした
＊漢字は原則として常用漢字を用い、変体仮名・合字などは通常の仮名に改めた
＊「○」は判読不能の文字を表し、文字数が不明の場合は［　　］、判読に疑問が残るものは（　）で示した
＊「■」は１文字分が空白のものを示す
＊「※なし」は小区画内に何も文字が記されていないものを示す
＊前後の絵図を照合した際、漢字の音ないし訓が同じ「川野」・「河野」や「道仙」・「道泉」は同一人物と判断した
　また、字形がよく似た異なる漢字が用いられている場合（「次郎右衛門」・「次郎左衛門」）や、１文字脱落の場合（「勘之丞」・「勘丞」）も同一の人物として扱った

表81　延宝6～8年絵図　川内地区人名など一覧（1）
Tab.81　List of names around Kawauchi of picture map where Sendai town was drawn in 1678～1680 (1)

通し番号		人名・寺院名など	名義人変更なし	知行高・禄高		家格など	役職など
1	1	御簇本御足軽衆					
1	2	御簇本御足軽衆					
1	3	御簇本御足軽衆					
1	4	御簇本御足軽衆					
1	5	御簇本御足軽衆					
1	6	御簇本御足軽衆					
1	7	東覚院					
1	8	御簇本御足軽衆					
1	9	御簇本御足軽衆					
1	10	（真）木三右衛門		F	２両４人	不明	
1	11	職人衆					
1	12	職人衆					
1	13	職人衆					
1	14	同					
1	15	同					
1	16	同					
1	17	同					
1	18	同					
1	19	同					
1	20	同					
1	21	同					
1	22	坊主衆					
1	23	橋本喜兵衛	●	E	33貫文	虎間	
1	24	小泉周庵	●	E	25貫文	その他（内科医）	
1	25	吉田勘右衛門	●	D	57貫文	虎間	
1	26	鈴木主税	●	D	61貫文	召出	
1	27	和田半之助	●	C	150貫文	着坐	
1	28	戸田喜太夫	●	C	102貫文	着坐	
1	29	大越十左衛門		E	50貫文	虎間	槍奉行など
1	30	大和田佐渡	●	D	90貫文	召出	
1	31	笠原内記	●	B	161貫文	着坐	
1	32	松本采女	●	C	123貫文	着坐	
1	33	小梁川市左衛門		D	60貫文	虎間	
2	1	御山守					
2	2	井上源次郎					
2	3	御簇本御足軽衆					
2	4	高橋弥左衛門	●				
2	5	光明院					
3	1	御比丘尼寺					
3	2	御比丘尼寺					
3	3	坊主衆					
3	4	牛田甚兵衛	●	E	15貫文	虎間	
3	5	坊主衆					
3	6	坊主衆					
3	7	伊藤権六		F	３両３歩４人	不明	
3	8	坊主衆					
3	9	坊主衆					
3	10	桑原佐兵衛					
3	11	菅ノ小太郎		E	５貫文	不明	
3	12	伊藤三郎兵衛		F	４両４人	不明	
3	13	御山守					
3	14	職人衆					
3	15	同					
3	16	同					
3	17	同					
3	18	同					
3	19	坊主衆					
3	20	平塚五左衛門		F	４両４人	不明	
3	21	○○○衛門					
3	22	大友○阿弥					
3	23	○○源右衛門					
3	24	坊主衆					
3	25	同					
3	26	坊主衆					
3	27	星久阿弥					
3	28	坊主衆					
3	29	（横）沢秀巴					
3	30	八巻善介	●				
3	31	（遊佐）○衛門					
3	32	佐藤六右衛門	●	F	１両３歩４人	不明	
3	33	大友伊兵衛	●				
3	34	白石九右衛門	●				
3	35	岡本利兵衛	●				
3	36	菊地（三）右衛門					
3	37	曽根田市郎兵衛		F	１両２歩４人	不明	品川定詰大所人
3	38	明屋敷					
3	39	■山正左衛門					
3	40	前野勘之	●				
3	41	小野源内	●	F	３両１歩４人	不明	
3	42	大内源右衛門	●	F	３両５人	不明	
3	43	矢部理兵衛					
3	44	大越長次郎	●	F	14両４人	不明	
4・5	1	市川伊右衛門	●				
4	2	草刈長右衛門					
5	2	真柳正右衛門	●	E	37貫文	不明	
6	1	[　　]					
6	2	吉田長太夫		E	41貫文	虎間	
6	3	永沼作左衛門	●	C	101貫文	召出	
6	4	伊達肥前殿	●	A	407貫文	一門	
6	5	守屋又右衛門		F	２両４人	不明	
6	6	佐瀬九助		F	３両４人	虎間	
6	7	今野加右衛門		F	４両１歩14匁５人	不明	
6	8	日野又兵衛		E	６貫文	不明	
6	9	渋谷左伝次		E	10貫文	虎間	
6	10	坊主衆					
7	1	白石七十郎		F	６両４人	不明	
7	2	中村伊右衛門					
7	3	宮内権六		E	36貫文	召出	
7	4	山崎平太左衛門		C	108貫文	虎間	
7	5	明屋敷					
8	1	橋本伊左衛門		E	20貫文	虎間	
8	2	佐賀五郎左衛門					
8	3	渋谷益庵	●	E	５貫文	その他（内科医）	
8	4	内ヶ崎久助					
8	5	福井玄興		E	30貫文	その他（内科医）	
8	6	御作事小屋					
9	1	御門松立　加左衛門					
9	2	御使者　理兵衛					
10	1	鈴木弥左衛門		E	50貫文	召出	
10	2	新妻勘兵衛		E	39貫文	虎間	
10	3	鈴木求馬					
10	4	入江左助	●	D	55貫文	虎間	
10	5	中塚十兵衛	●	E	30貫文	不明	
10	6	真山内蔵介	●	A	270貫文	虎間	

表82　延宝6～8年絵図　川内地区人名など一覧（2）
Tab.82　List of names around Kawauchi of picture map where Sendai town was drawn in 1678～1680 (2)

通し番号		人名・寺院名など	名義人変更なし	知行高・禄高		家格など	役職など
10	7	大町清九郎	●	E	40貫文	不明	納戸頭
10	8	加藤十三郎	●	E	50貫文	召出	
10	9	田村彦八					
10	10	中村久兵衛					
10	11	斎藤吉兵衛					
10	12	黒沢勘兵衛	●				
10	13	望月内記	●	E	50貫文	虎間	
10	14	遠藤九十兵衛	●				
10	15	内馬場蔵人	●	D	64貫文	虎間	
11	1	三沢頼母殿		D	100貫文	一門	
11	2	芦沢孫兵衛	●	E	50貫文	虎間	
11	3	伊藤道仙	●	E	14貫文	その他（内科医）	
11	4	林八郎兵衛	●	E	1貫文	虎間	
11	5	橋木○					
11	6	中村十郎兵衛					
11	7	茂庭圓太郎	●	E	25貫文	不明	
11	8	高屋松庵	●	D	66貫文	その他（内科医）	
11	9	大河内善左衛門	●	E	20貫文	不明	
11	10	大立目弥覚	●	E	45貫文	虎間	
11	11	大松澤甚右衛門		D	89貫文	虎間	
11	12	小梁川修理		A	310貫文	一家	奉行
12	1	御作事小屋					
12	2	御炭蔵					
12	3	御勘定蔵					
13	1	桑嶋孫太夫		E	30貫文	召出	
13	2	遠藤正兵衛	●	E	13貫文	虎間	
13	3	斎藤九郎兵衛	●	D	54貫文	不明	
13	4	氏家柏安	●	E	30貫文	不明	
13	5	成田助之丞	●	D	51貫文	虎間	
14	1	大田卯之吉					
14	2	堀越甚兵衛	●	D	61貫文	召出	
14	3	鈴木玄丞	●				
14	4	中津川新四郎		E	10貫文	虎間	
14	5	名村長兵衛		E	37貫文	虎間	
15	−	玉虫太郎左衛門	●	E	48貫文	中間	
16	1	各務采女		D	80貫文	不明	
16	2	山本十太夫	●				
16	3	真山杢兵衛	●	D	66貫文	虎間	
16	4	下郡山隼人		E	40貫文	一族	小姓
16	5	斎藤道益	●	E	37貫文	その他（内科医）	
17	1	里見平吉	●	E	48貫文	不明	
17	2	堀越十右衛門		E	26貫文	虎間	
17	3	伊藤仲次郎	●	D	55貫文	虎間	
17	4	永井六之助		E	36貫文	虎間	
17	5	上田伊太夫	●				
17	6	内馬場門弥		E	39貫文	虎間	
17	7	古内造酒助	●	A	749貫文	不明	
18	1	古内助之丞		D	62貫文	虎間	
18	2	高屋宗怡	●	E	57貫文	その他（内科医）	
18	3	高屋喜安	●	D	100貫文	着坐	
18	4	古内左門	●	A	328貫文	着坐	
18	5	小国七右衛門	●	D	61貫文	虎間	
18	6	将監殿＜伊達将監＞		A	2163貫文	一門	
18	7	大蔵殿＜伊達大蔵＞		A	2000貫文	一門	
19	1	御小人衆					
19	2	御小人衆					
19	3	御小人衆					
19	4	御小人衆					
19	5	御小人衆					
19	6	御小人衆					
19	7	御塩噌蔵					
19	8	梶田栄甫		E	10貫文	その他（口医師）	
20	1	多ヶ谷金左衛門	●	E	20貫文	虎間	
20	2	川野半兵衛	●	E	25貫文	虎間	
21	1	鈴木六兵衛	●	F	1両2歩4人	不明	
21	2	志賀良庵	●				
21	3	職人衆					
22	1	職人衆					
22	2	御小人衆					
23	1	職人衆					
23	2	高橋源内	●	G	不明	次間	歩小姓組頭
24	1	片倉小十郎		A	1735貫文	一家	
24	2	高橋儀右衛門					
24	3	橋本新助					
24	4	岩渕与三郎					
24	5	横田半之丞		F	4両4人	不明	
24	6	青野十兵衛		F	395文	その他（馬乗）	
24	7	桑嶋五助		F	6人	不明	
24	8	鈴木八右衛門		F	3両4人	不明	
24	9	横田文之丞					
24	10	高橋甚左衛門		F	5両5人	その他（馬乗）	
24	11	横田正八		F	4両4人	その他（馬乗）	
24	12	岩渕市郎兵衛					
24	13	岩渕十次郎		F	3両4人	不明	
24	14	御口取衆 菅原正左衛門		F	2両10人	その他（馬乗）	
24	15	御馬屋 岩渕加兵衛	●	E	15貫文	中間	
24	16	御馬屋 草刈市右衛門	●	E	30貫文	不明	
24	17	佐伯九太夫	●	E	10貫文	次間	
24	18	草刈左伝次		E	25貫文	次間	
24	19	御口取衆					
24	20	伊藤久兵衛	●	F	3両6人	不明	
24	21	佐々作右衛門	●	E	7貫文	不明	厩頭
24	22	御馬屋 草刈太郎右衛門	●	E	20貫文	不明	
24	23	御馬屋 戸津弥左衛門	●	E	5貫文	不明	
24	24	御馬屋 日下五右衛門	●	E	15貫文	次間	

＊知行高は1貫文以下切り捨てとした
＊漢字は原則として常用漢字を用い、変体仮名・合字などは通常の仮名に改めた
＊「○」は判読不能の文字を表し、文字数が不明の場合は［　］、判読に疑問が残るものは（　）で示した
＊「■」は1文字分が空白のものを示す
＊「※なし」は小区画内に何も文字が記されていないものを示す
＊前後の絵図を照合した際、漢字の音ないし訓が同じ「川野」・「河野」や「道仙」・「道泉」は同一人物と判断した
　また、字形がよく似た異なる漢字が用いられている場合（「次郎右衛門」・「次郎左衛門」）や、1文字脱落の場合（「勘之丞」・「勘丞」）も同一の人物として扱った

表83　延宝9年～天和3年絵図　川内地区人名など一覧（1）
Tab.83　List of names around Kawauchi of picture map where Sendai town was drawn in 1681～1683 (1)

通し番号		人名・寺院名など	名義人変更なし	知行高・禄高		家格など	役職など
1	1	同					
1	2	御簇本御足軽					
1	3	秀明院					
1	4	同					
1	5	同					
1	6	同					
1	7	御簇本御足軽					
1	8	同					
1	9	御簇元足軽					
1	10	矢本三右衛門		F	５両７人	不明	
1	11	同					
1	12	職人					
1	13	坊主					
1	14	橋本喜兵衛	●	E	33貫文	虎間	
1	15	小泉周安	●	E	25貫文	その他（内科医）	
1	16	吉田勘右衛門	●	D	57貫文	虎間	
1	17	山口権八		E	50貫文	不明	
1	18	大町備前		A	203貫文	一族	少老
1	19	戸田喜太夫	●	C	102貫文	着坐	
1	20	大越十左衛門	●	E	50貫文	虎間	槍奉行など
1	21	大和田佐渡	●	D	90貫文	召出	
1	22	笠原内記	●	B	161貫文	着坐	
1	23	松本采女	●	C	130貫文	着坐	
1	24	小梁川市左衛門	●	D	60貫文	虎間	
2	1	井上源次郎	●				
2	2	御簇元御足軽					
2	3	高橋次左衛門	●	F	１両４人	不明	
2	4	光明院					
3	1	同寺					
3	2	御比丘尼寺					
3	3	坊主					
3	4	牛田甚兵衛	●	E	15貫文	虎間	
3	5	坊主					
3	6	同					
3	7	イトヲ権六	●	F	3両3歩4人	不明	
3	8	坊主					
3	9	同					
3	10	クハ原作兵衛	●				
3	11	カンノ小太郎	●	E	５貫文	不明	
3	12	イトヲ三郎兵衛	●	F	４両４人	不明	
3	13	御山守					
3	14	職人					
3	15	同					
3	16	同					
3	17	同					
3	18	同					
3	19	坊主					
3	20	牛坂五左衛門					
3	21	八巻作〇右衛門					
3	22	板垣源右衛門		F	６両４人	不明	
3	23	坊主					
3	24	坊主					
3	25	坊主					
3	26	星久阿弥	●				
3	27	同					
3	28	坊主					
3	29	八巻善助	●				
3	30	白石彦兵衛	●	F	３両７人	不明	
3	31	岡本弥平					
3	32	菊地三右衛門					
3	33	佐藤長太夫	●				
3	34	大友伊兵衛	●				
3	35	曽根田市郎兵衛	●	F	１両２歩４人	不明	品川定詰大所人
3	36	松山庄左衛門		F	３両４人	不明	
3	37	前野甚之丞	●	F	２両４人	不明	
3	38	小野源内	●	F	３両１歩４人	不明	
3	39	大内源右衛門	●	F	３両５人	不明	
3	40	矢部利兵衛	●				
3	41	大越長七郎	●				
3	42	今野一右衛門		F	１両１歩３人	不明	
4・5	1	市川江左衛門	●				
4	2	平田長右衛門		E	37貫文	虎間	
5	2	真柳庄右衛門	●	E	37貫文	不明	
6	1	吉田覚左衛門		E	３貫文	虎間	
6	2	吉田長太夫		E	41貫文	虎間	
6	3	永沼作左衛門		C	101貫文	召出	
6	4	佐々伊賀		A	303貫文	着坐	奉行職
6	5	守屋又右衛門	●	F	２両４人	不明	
6	6	佐瀬九助	●	F	３両４人	虎間	
6	7	今野加右衛門	●	F	４両１歩14匁５人	不明	
6	8	日野又兵衛	●	E	６貫文	不明	
6	9	渋谷左伝次	●	E	10貫文	虎間	
6	10	坊主					
7	1	白石七郎右衛門		E	20貫文	虎間	
7	2	中村伊右衛門					
7	3	宮内権六		E	36貫文	召出	
7	4	山崎平太左衛門		C	108貫文	虎間	
7	5	月畔和尚					
8	1	橋本伊左衛門		E	20貫文	虎間	
8	2	佐賀市郎左衛門					
8	3	渋谷益安		E	５貫文	その他（内科医）	
8	4	吉田玉雲		E	30貫文	虎間	
8	5	福井玄奥		E	30貫文	その他（内科医）	
8	6	市川江左衛門					
9	1	御門松立　加左衛門					
9	2	御使者　利兵衛					
10	1	鈴木孫左衛門	●	E	15貫文	不明	
10	2	新妻勘兵衛	●	E	39貫文	虎間	
10	3	新妻求馬		E	22貫文	中間	
10	4	入江左助	●	D	55貫文	虎間	
10	5	中塚十兵衛	●	E	30貫文	虎間	
10	6	真山三次郎	●	A	270貫文	虎間	

表84　延宝9年～天和3年絵図　川内地区人名など一覧（２）

Tab.84　List of names around Kawauchi of picture map where Sendai town was drawn in 1681～1683 (2)

通し番号		人名・寺院名など	名義人変更なし	知行高・禄高		家格など	役職など
10	7	大町清九郎	●	E	40貫文	不明	納戸頭
10	8	加藤十三郎	●	E	50貫文	召出	
10	9	中村久兵衛	●				
10	10	永沼五郎右衛門		C	150貫文	着坐	奉行職
10	11	黒沢勘右衛門	●	E	30貫文	虎間	
10	12	望月内記	●	E	50貫文	虎間	
10	13	遠藤九郎兵衛	●	E	50貫文	不明	
10	14	武田伊右衛門		C	123貫文	召出	
10	15	内馬場蔵人	●	D	64貫文	虎間	
11	1	三沢頼母殿	●	A	300貫文	一門	
11	2	芦沢孫兵衛	●	E	50貫文	虎間	
11	3	長沢与兵衛					
11	4	林八郎兵衛	●	E	１貫文	虎間	
11	5	橋本兵九郎	●	E	16貫文	虎間	
11	6	中村七郎兵衛	●				
11	7	青木市太夫		E	20貫文	不明	
11	8	高屋松庵	●	D	66貫文	その他（内科医）	
11	9	大河内善左衛門	●	E	20貫文	不明	
11	10	芝多文之丞		B	200貫文	着坐	
11	11	冨田壱岐		D	60貫文	着坐	
12	1	御作事小屋					
12	2	御炭蔵					
12	3	御勘定所					
13	1	桑嶋孫太夫	●	E	30貫文	召出	
13	2	遠藤庄兵衛	●	E	13貫文	虎間	
13	3	斎藤九郎兵衛	●	D	54貫文	不明	
13	4	氏家柏安	●	E	30貫文	不明	
13	5	成田助之丞	●	D	51貫文	虎間	
14	1	太田卯之吉	●				
14	2	堀越甚兵衛	●	D	61貫文	召出	
14	3	鈴木玄良	●				
14	4	中津川新四郎	●	E	10貫文	虎間	
14	5	名村長兵衛	●	E	37貫文	虎間	
15	－	玉虫三郎左衛門	●				
16	1	各務内膳	●	D	80貫文	不明	
16	2	山本三郎兵衛	●	D	60貫文	虎間	
16	3	真山惣右衛門	●	D	66貫文	虎間	
16	4	下郡山隼人	●	E	40貫文	一族	近習詰
16	5	斉藤道益	●	E	37貫文	その他（内科医）	
17	1	里見平吉	●	E	48貫文	不明	
17	2	堀越十右衛門	●	E	26貫文	虎間	
17	3	伊藤仲次郎	●	D	55貫文	虎間	
17	4	永井六之助	●	E	36貫文	虎間	
17	5	上田伊太夫	●				
17	6	内馬場門弥	●	E	39貫文	虎間	
17	7	古内造酒祐	●	A	749貫文	不明	
18	1	古内勘之丞	●	D	62貫文	虎間	
18	2	高屋宗怡	●	D	57貫文	その他（内科医）	
18	3	高屋喜安	●	D	100貫文	着坐	
18	4	古内左門	●	A	328貫文	着坐	
18	5	小国七右衛門	●	D	61貫文	虎間	
18	6	伊達将監殿	●	A	2163貫文	一門	
18	7	伊達大蔵殿	●	A	2000貫文	一門	
19	1	御小人					
19	2	御小人					
19	3	御小人					
19	4	御小人					
19	5	御味噌蔵					
19	6	梶田栄甫	●	E	10貫文	その他（口医師）	
20	1	田ヶ谷金右衛門	●	E	20貫文	虎間	
20	2	河野半兵衛	●	E	25貫文	虎間	
21	1	鈴木市兵衛	●				
21	2	豊嶋					
21	3	職人					
22	1	職人					
22	2	同					
23	1	職人					
23	2	高橋源内	●	G	不明	次間	歩小姓組頭
24	1	片倉三之助	●	A	1735貫文	一家	
24	2	高橋義左衛門	●				
24	3	橋本新助	●				
24	4	岩淵十三郎	●	F	４両４人	その他（馬乗）	
24	5	横田半之丞	●	F	４両４人	不明	
24	6	青野十兵衛	●	F	395文	その他（馬乗）	
24	7	鈴木八右衛門	●	F	３両４人	不明	
24	8	横田文之丞	●				
24	9	高橋甚左衛門	●	F	５両５人	その他（馬乗）	
24	10	横田庄八	●	F	４両４人	その他（馬乗）	
24	11	岩淵市郎兵衛	●	F	３両４人	不明	
24	12	岩淵十次郎	●	F	３両４人	不明	
24	13	菅原正左衛門	●	F	２両10人	その他（馬乗）	
24	14	御馬屋　岩淵加兵衛	●	E	33貫文	中間	
24	15	御馬屋　草刈市右衛門	●	E	30貫文	不明	
24	16	佐伯九太夫	●	E	10貫文	次間	
24	17	草刈左伝次	●	E	25貫文	次間	
24	18	御口取					
24	19	イトヲ休兵衛	●	F	３両６人	不明	
24	20	佐々作右衛門	●	E	７貫文	不明	厩頭
24	21	御馬屋　草刈太郎右衛門	●	E	20貫文	不明	
24	22	御馬屋　戸津弥右衛門	●	E	15貫文	次間	
24	23	御馬屋　佐々作右衛門	●	E	７貫文	不明	厩頭

＊知行高は１貫文以下切り捨てとした
＊漢字は原則として常用漢字を用い、変体仮名・合字などは通常の仮名に改めた
＊「○」は判読不能の文字を表し、文字数が不明の場合は［　　］、判読に疑問が残るものは（　）で示した
＊「■」は１文字分が空白のものを示す
＊「※なし」は小区画内に何も文字が記されていないものを示す
＊前後の絵図を照合した際、漢字の音ないし訓が同じ「川野」・「河野」や「道仙」・「道泉」は同一人物と判断した
　また、字形がよく似た異なる漢字が用いられている場合（「次郎右衛門」・「次郎左衛門」）や、１文字脱落の場合（「勘之丞」・「勘丞」）も同一の人物として扱った

表85　元禄4・5年絵図　川内地区人名など一覧（1）
Tab.85　List of names around Kawauchi of picture map where Sendai town was drawn in 1691・1692 (1)

通し番号		人名・寺院名など	名義人変更なし	知行高・禄高		家格など	役職など
1	1	[　　]					
1	2	御旗本御足軽衆					
1	3	[　　]					
1	4	[　　]					
1	5	[　　]					
1	6	御旗本御足軽衆					
1	7	御旗本御足軽衆					
1	8	御旗本御足軽衆					
1	9	御旗本御足軽衆					
1	10	御職人衆					
1	11	御旗本御足軽衆					
1	12	御旗本御足軽衆					
1	13	[　　] 院					
1	14	但木主馬		C	150貫文	宿老	少老、兼役者支配
1	15	御旗本御足軽衆					
1	16	御職人衆					
1	17	御職人衆					
1	18	片寄兵右衛門					
1	19	佐藤七之丞					
1	20	柴田内蔵		A	515貫文	一家	少老
1	21	大越十左衛門	●	E	50貫文	着座	槍奉行など
1	22	古内酉之助		E	30貫文	着座	
1	23	大和田四郎右衛門	●	D	90貫文	召出	
1	24	笠原出雲	●	C	111貫文	着座	
1	25	佐藤木工		D	70貫文	召出	
1	26	木村久馬		D	100貫文	召出	
2	1	御山守					
2	2	（井上覚之丞）	●				
2	3	（井上左助）	●	F	20両20人	不明	
2	4	御旗本御足軽衆					
2	5	御旗本御足軽衆					
3	1	[　　]					
3	2	[　　]					
3	3	千手院					
3	4	秀明院					
3	5	福蔵院					
3	6	御山守					
3	7	御旗本御弓衆					
3	8	御旗本御弓衆					
3	9	御旗本御弓衆					
3	10	[　　]					
3	11	[　　]					
3	12	[　　]					
3	13	[　　]					
3	14	[　　]					
3	15	[　　]					
3	16	[　　]					
3	17	大内源右衛門	●	F	3両5人	不明	
3	18	[　　]					
3	19	御旗本御弓衆					
3	20	[　　]					
3	21	[　　]					
3	22	[　　]					
3	23	[　　]					
4	1	山田土佐守					
4	2	町屋					
5	1	禰宜屋敷					
5	2	町屋					
6	1	町屋					
6	2	町屋					
6	3	遍明院					
6	4	龍性院					
6	5	無量院					
6	6	慈眼院					
6	7	[　　]					
6	8	[　　]					
6	9	多田勝之助					
6	10	遠山帯刀		D	100貫文	不明	
6	11	佐々豊前	●	A	303貫文	着座	奉行職
6	12	佐々 [　　]					
6	13	白石孫助					
6	14	金須兵太夫		D	70貫文	虎間	
6	15	金須半助		C	150石	不明	
6	16	日野又兵衛	●	E	6貫文	不明	
6	17	渋谷左伝次	●	E	10貫文	虎間	
6	18	[　　]					
7	1	渋谷権七郎		E	15貫文	中間	
7	2	大河内源太夫		D	90貫文	召出	近習・近習目付、少老
7	3	木幡修理					
7	4	浜田平十郎					
8	1	中條寿閑		E	36貫文	不明	
8	2	吉田玉雲	●	E	30貫文	虎間	
8	3	大條理兵衛		E	15貫文	虎間	
8	4	福井泉庵	●				
8	5	北図書		D	100貫文	召出	近習目付、江戸番頭少老など
9	−	※なし					
10	1	朽木元佐		E	50貫文	虎間	近習医、元禄十年江戸留守居火消頭
10	2	塙喜三郎		E	50貫文	虎間	
10	3	牛田三之丞		E	15貫文	虎間	
10	4	渋川助太夫		C	108貫文	虎間	
10	5	中塚平吉	●				
10	6	中地靭負		D	100貫文	召出	
10	7	大町清九郎	●	E	40貫文	不明	納戸頭
10	8	加藤十三郎	●	E	50貫文	召出	
10	9	田村数右衛門		E	10貫文	虎間	
10	10	[　　]					
10	11	長沼玄蕃	●				
10	12	黒沢勘右衛門	●	E	30貫文	虎間	
10	13	望月庄太夫	●	E	50貫文	虎間	
10	14	遠藤九郎兵衛	●	E	50貫文	不明	
10	15	武田伊右衛門	●	C	123貫文	召出	
11	1	林八郎右衛門	●	E	1貫文	虎間	

表86　元禄4・5年絵図　川内地区人名など一覧（2）

Tab.86　List of names around Kawauchi of picture map where Sendai town was drawn in 1691・1692 (2)

通し番号		人名・寺院名など	名義人変更なし	知行高・禄高		家格など	役職など
11	2	橋本兵九郎	●	E	15貫文	虎間	
11	3	西大條卯兵衛		D	56貫文	一族	小姓
11	4	黒沢雨水		E	20貫文	その他（内科医）	
11	5	三沢左京殿	●	D	100貫文	一門	
11	6	太田次郎兵衛		C	130貫文	召出	少老
11	7	成田助之丞					
11	8	芝多対馬	●	B	200貫文	着座	
11	9	冨田壱岐	●	B	200貫文	着座	
12	−	御二之丸破損小屋					
13	1	桑嶋孫太夫	●	E	30貫文	召出	
13	2	遠藤正兵衛	●	E	13貫文	虎間	
13	3	斎藤九郎兵衛	●	D	54貫文	不明	
13	4	皆川覚衛門		E	21貫文	不明	
14	1	大田惣助	●				
14	2	堀越甚兵衛	●	D	61貫文	召出	
14	3	馬場道斉					
14	4	[　　]					
14	5	大越弥右衛門		F	4両1歩7人	不明	
15	−	※なし					
16	1	永沼作左衛門		C	101貫文	召出	
16	2	渋谷益安		E	5貫文	その他（内科医）	
16	3	加藤〇次郎					
17	1	里見半之助	●				
17	2	橋本左内		E	15貫文	虎間	
17	3	中村七郎兵衛					
17	4	我妻次左衛門					
17	5	中村左衛門		A	352貫文	一家	
18	1	古内孫十郎	●	D	63貫文	虎間	
18	2	内馬場門弥		E	39貫文	虎間	
18	3	高屋快安	●	D	100貫文	着座	
18	4	後藤孫兵衛		A	250貫文	不明	
18	5	伊達将監殿	●	A	2163貫文	一門	
18	6	伊達若狭殿	●	A	2000貫文	一門	
19	1	[　　]					
19	2	御小人衆					
19	3	[　　]					
19	4	御小人衆					
19	5	御小人衆					
19	6	御小人衆					
19	7	御小人衆					
19	8	御小人衆					
19	9	[　　]					
19	10	御塩噌蔵					
19	11	[　　]					
19	12	[　　]					
20	−	御小人衆					

通し番号		人名・寺院名など	名義人変更なし	知行高・禄高		家格など	役職など
21	1	[　　]					
21	2	[　　]					
21	3	御職人衆					
22	1	御職人衆					
22	2	御小人衆					
22	3	御職人衆					
23	1	御職人衆					
23	2	[　　]					
23	3	[　　]					
24	1	御馬方衆					
24	2	御馬方衆					
24	3	御馬方衆					
24	4	岩淵加兵衛	●	E	33貫文	中間	
24	5	御馬方衆					
24	6	草刈左伝次	●	E	25貫文	次間	
24	7	草刈太郎右衛門	●	E	20貫文	不明	
24	8	御馬方衆					
24	9	御馬方衆					
24	10	[　　]					
24	11	戸津弥左衛門	●	E	15貫文	次間	
24	12	日下十蔵		E	17貫文	次間	
24	13	御馬方衆					
24	14	御馬方衆					
24	15	佐伯九太夫		E	10貫文	次間	

＊知行高は1貫文以下切り捨てとした
＊漢字は原則として常用漢字を用い、変体仮名・合字などは通常の仮名に改めた
＊「〇」は判読不能の文字を表し、文字数が不明の場合は［　　］、判読に疑問が残るものは（　）で示した
＊「■」は1文字分が空白のものを示す
＊「※なし」は小区画内に何も文字が記されていないものを示す
＊前後の絵図を照合した際、漢字の音ないし訓が同じ「川野」・「河野」や「道仙」・「道泉」は同一人物と判断した
　また、字形がよく似た異なる漢字が用いられている場合（「次郎右衛門」・「次郎左衛門」）や、1文字脱落の場合（「勘之丞」・「勘丞」）も同一の人物として扱った

表87　享保9年絵図　川内地区人名など一覧

Tab.87　List of names around Kawauchi of picture map where Sendai town was drawn in 1724

通し番号		人名・寺院名など	名義人変更なし	知行高・禄高		家格など	役職など
1	1	同					
1	2	三十人町御旗元足軽ヤシキ					
1	3	同					
1	4	同					
1	5	同					
1	6	同					
1	7	同					
1	8	御足軽屋敷					
1	9	白鳥明神					
1	10	高野隼人		C	120貫文	着坐	少老
1	11	南條玄什		F	蔵米200石	その他（医師）	
1	12	石田定之丞		C	150貫文	召出	物頭、屋敷奉行・川奉行など
1	13	亘理石見		A	509貫文	一家	奉行
1	14	油井善助		E	50貫文	虎間	
1	15	和田舎人		E	40貫文	虎間	
1	16	成田兵右衛門					
1	17	片寄利右衛門		E	37貫文	虎間	
1	18	和田半之助		C	150貫文	着坐	
1	19	大河内源太夫		D	90貫文	召出	少老
1	20	秋保中務		D	100貫文	召出	
2	1	同					
2	2	同					
2	3	同					
2	4	同					
2	5	亀ヶ岡八幡					
3	1	千手院					
3	2	御旗元足軽屋敷					
3	3	北村加左衛門					
4	−	山田土佐守	●				亀ヶ岡八幡神主、代々土佐守を称する
5	−	禰宜屋敷					
6	1	同					
6	2	亀ヶ岡丁					
6	3	泉田					
6	4	伊達肥前殿		A	807貫文	一門	
6	5	貞樹院様					
7	1	渡辺伝五郎					
7	2	氏家養順					
7	3	小嶋蔵人					
7	4	黒沢武之助					
7	5	大和田源之助					
7	6	岡元友閑					
7	7	新田秀哲					
7	8	高橋丈之進					
8	1	矢ノ右近		F	２両４人	不明	
8	2	真山十左衛門		A	270貫文	虎間	
8	3	[　　]					
8	4	[　　]					
8	5	高（井）左衛門					
8	6	黒沢正太夫					
9	−	※なし					
10	1	白石善三郎					
10	2	内崎新左衛門					
10	3	鴇田正兵衛		E	20貫文	虎間	近習、番頭、奉行職
10	4	熊谷仲左衛門		E	10貫文	次間	
10	5	芝多文九郎		B	200貫文	着坐	
10	6	清水仲右衛門					部屋近習
10	7	鈴木治助					
10	8	佐々木左七郎		E	40貫文	虎間	
10	9	大町出雲		D	63貫文	着坐	
10	10	橋内柳安					
10	11	望月仲右衛門	●	E	50貫文	虎間	
10	12	金上伝之進		E	30貫文	召出	
10	13	武田五郎左衛門	●	C	118貫文	召出	
10	14	茂庭権左衛門		D	70貫文	召出	
11	1	黒沢要人		A	300貫文	着坐	奥小姓、小姓組番頭、若老
11	2	岩山縫殿介		D	62貫文	虎間	小姓、小姓頭、歩小姓頭、祭祀奉行
11	3	佐伯太之助					
11	5	木村彦〇					
11	7	林甚太夫					
11	8	田辺喜七郎		D	60貫文	召出	
11	9	戸田喜太夫		E	50貫文	着坐	奥小姓、近習
11	10	松前主膳					
11	11	中嶋十郎		A	200貫文	一族	
11	12	苹名刑部		C	150貫文	準一家	奉行職
12	−	破損小屋					
13	1	大須賀正左衛門		E	10貫文	中間	
13	2	山崎喜兵衛					
13	3	（大友）丹左衛門					
13	4	牧村伊左衛門					
13	5	白津安太夫		E	40貫文	召出	
14	1	[　　]郎左衛門					
14	2	[　　]					
14	3	橋元新五郎					
14	4	清水道啓					
14	5	[　　]五郎					
14	6	佐瀬五郎兵衛		E	25貫文	虎間	
15	−	伊藤（竹蔵）					
16	1	橋元権八郎		D	80貫文	虎間	
16	2	苹名		C	150貫文	準一家	
16	3	今田彦右衛門		E	40貫文	虎間	
17	1	笠原［　　］七					
17	2	浜田平十郎		E	33貫文	虎間	
17	3	朴沢九左衛門		E	31貫文	虎間	
17	4	田村左覚		E	50貫文	虎間	
17	5	中村日向	●	A	352貫文	一家	近習、番頭、奉行職
18	1	福井玄効		E	50貫文	その他（内科医）	
18	2	鮎貝右兵衛		D	100貫文	一家	大番頭、少老
18	3	大條監物		A	400貫文	一家	少老、兼評定奉行
18	4	御炭蔵					
18	5	高屋喜安	●	D	70貫文	着坐	
18	6	伊達近江殿	●	A	2000貫文	一門	
18	7	伊達出羽殿	●	A	1613貫文	一門	
19	1	同					
19	2	同					
19	3	同					
19	4	御小人					
19	5	御小人					
19	6	御小人					
19	7	大工丁					
19	8	御塩噌蔵					
20	−	※なし					
21	−	同					
22	1	大工丁					
22	2	御小人					
23	−	大工町					
24	−	片倉小十郎		A	1735貫文	一家	

＊知行高は１貫文以下切り捨てとした
＊漢字は原則として常用漢字を用い、変体仮名・合字などは通常の仮名に改めた
＊「〇」は判読不能の文字を表し、文字数が不明の場合は［　　］、判読に疑問が残るものは（　）で示した
＊「■」は１文字分が空白のものを示す
＊「※なし」は小区画内に何も文字が記されていないものを示す
＊前後の絵図を照合した際、漢字の音ないし訓が同じ「川野」・「河野」や「道仙」・「道泉」は同一人物と判断した
　また、字形がよく似た異なる漢字が用いられている場合（「次郎右衛門」・「次郎 左衛門」）や、１文字脱落の場合（「勘之丞」・「勘丞」）も同一の人物として扱った

表88　宝暦10年～明和3年絵図　川内地区人名など一覧（1）

Tab.88　List of names around Kawauchi of picture map where Sendai town was drawn in 1760～1766 (1)

通し番号		人名・寺院名など	名義人変更なし	知行高・禄高		家格など	役職など
1	1	拝借地					
1	2	御旗本					
1	3	御ハタ本					
1	4	御ハタ本					
1	5	白鳥別当光明院					
1	6	星場					
1	7	畑					
1	8	御職人					
1	9	御旗本足軽					
1	10	白鳥明神					
1	11	御旗本足軽					
1	12	御旗本足軽					
1	13	御坊主					
1	14	御旗本足軽					
1	15	御旗本ヤシキ分					
1	16	御旗本ヤシキ分					
1	17	御旗本足軽					
1	18	不動院					
1	19	高野備中	●	B	165貫文	着座	少老
1	20	杉沼長作		E	30貫文	中間	
1	21	石垣文之丞					
1	22	柴田佐渡		B	200貫文	着座	
1	23	鈴木志摩		E	40貫文	不明	
1	24	和田六之丞	●	E	40貫文	虎間	
1	25	原多門		E	23貫文	不明	
1	26	小嶋典膳					
1	27	武藤覚太夫		D	100貫文	虎間	
1	28	布施清五郎		B	170貫文	着座	
1	29	秋保金吾	●	D	100貫文	召出	
2	1	御山守					
2	2	同					
2	3	御坊主					
2	4	御坊主					
2	5	桜井三内					
2	6	御坊主					
2	7	御山守					
2	8	討方遠丁場					
2	9	御旗本鉄砲場					
2	10	亀岡宮					
3	1	千手院					
3	2	秀明院					
3	3	福蔵院					
3	4	生竹〇太夫					
3	5	[　　]					
3	6	御山守					
3	7	御ハタ本					
3	8	御旗本足軽					
3	9	同					
3	10	的場					
3	11	御ハタ本					
3	12	御旗本足軽					
3	13	御旗本足軽					
3	14	同					
3	15	同					
3	16	御旗本足軽					
3	17	御旗本					
3	18	御旗本足軽					
3	19	御旗本足軽					
3	20	御ハタ本足軽					
3	21	小村久之丞					
4	1	山田土佐守					亀ヶ岡八幡神主、代々土佐守を称する
4	2	町屋					
5	1	禰宜ヤシキ					
5	2	町屋					
6	1	町屋					
6	2	大町将監		A	300貫文	一族	奉行職
6	3	伊達出羽殿		A	807貫文	一門	
6	4	町屋					
6	5	遍照院					
6	6	龍性院					
6	7	無量院					
6	8	慈眼院					
6	9	佐藤兵吉					
6	10	鈴木八之丞					
7	1	横沢軍蔵					
7	2	イトウ左太夫					
7	3	萱場衛覚					
7	4	矢野善三郎		D	60貫文	虎間	
7	5	和田松之助					
7	6	市川三右衛門		E	30貫文	虎間	
7	7	志茂伝之助		E	７貫文	次間	
7	8	松井元亮		E	35貫文	その他（内科医）	
7	9	小原周伯					
8	1	矢野善三郎	●	D	60貫文	虎間	
8	2	岡道恕		F	蔵米300石	その他（内科医）	
8	3	古内六兵衛					
8	4	真山大之助	●	A	270貫文	虎間	
8	5	冨塚平馬					
9	－	※なし					
10	1	松本縫殿右衛門		C	130貫文	着座	
10	2	村上六兵衛					
10	3	高ハシシツマ					
10	4	高橋シツマ					
10	5	沼部兵庫					
10	6	早川斉		C	120貫文	召出	
10	7	金上玄蕃		E	40貫文	召出	
10	8	木村蔵馬					
10	9	沼部左太郎		E	32貫文	召出	
10	10	渡部滝助		E	15貫文	虎間	
10	11	小平善太夫		E	23貫文	虎間	
10	12	奥山右膳		B	189貫文	着座	少老
10	13	芝田					

表89　宝暦10年～明和3年絵図　川内地区人名など一覧（2）

Tab.89　List of names around Kawauchi of picture map where Sendai town was drawn in 1760 ～ 1766 (2)

通し番号		人名・寺院名など	名義人変更なし	知行高・禄高		家格など	役職など
11	1	大立目下野		D	100貫文	一族	奉行職
11	2	弓的場鉄砲星場					
11	3	円林院殿旧御ヤシキ添地ニナル					
11	4	小川草元		F	350俵	その他（小児科医）	
11	5	田辺良輔	●	D	60貫文	召出	
11	6	鮎貝志摩		D	100貫文	一家	奉行職
11	7	中嶋					
12	－	※なし					
13	1	牧野伊左衛門		E	14貫文	中間	
13	2	遠藤左兵衛					
13	3	遠藤善兵衛					
13	4	町屋					
13	5	大須賀勇太夫	●	E	10貫文	中間	
13	6	古内源右衛門		E	30貫文	着座	
13	7	拝借地					
14	1	町屋					
14	2	猪苗代玄祝		E	36貫文	準一家	
14	3	拝借地					
14	4	清水石之助	●				
14	5	赤坂塩之助					
15	－	高橋九左衛門					
16	1	伊東十左衛門	●	E	33貫文	虎間	
16	2	古内治太夫		A	328貫文	着座	
16	3	東山水漸		F	５両４人	その他（内科医）	
16	4	木村甚三郎					
16	5	青木蔵之助		E	20貫文	虎間	
17	1	岡村左門		F	300俵	中間	
17	2	浜田平十郎	●	E	33貫文	虎間	
17	3	朴沢九吉	●	E	31貫文	虎間	
17	4	志賀孫之丞		E	27貫文	虎間	
17	5	中村淡路	●	A	352貫文	一家	
18	1	福井道甫	●	E	23貫文	その他（内科医）	
18	2	高屋喜庵	●	C	103貫文	着座	
18	3	大條蔵人	●	D	60貫文	着座	
18	4	御炭蔵					
18	5	伊達式部殿	●	A	2000貫文	一門	
18	6	伊達駿河殿	●	A	1613貫文	一門	
19	1	御小人					
19	2	御小人					
19	3	御小人					
19	4	御小人					
19	5	御小人					
19	6	御小人					
19	7	御小人					
19	8	御塩噌蔵					
19	9	冨沢三郎左衛門					
19	10	同（拝借地ヵ）					
19	11	拝借地					
20	1	御小人					
20	2	御小人					
21	1	布沢平助					
21	2	三浦久太郎					
21	3	御職人					
22	1	[　　]					
22	2	[　　]					
22	3	[　　]					
22	4	[　　]					
22	5	[　　]					
22	6	[　　]					
22	7	[　　]					
22	8	御小人					
22	9	御職人					
23	1	[　　] 助五郎					
23	2	御職人					
23	3	氏家 [　　]					
23	4	拝借地					
24	1	片倉小十郎	●	A	1735貫文	一家	
24	2	岩淵権太夫					
24	3	御口取					
24	4	藤野新五兵衛					
24	5	黒沢藤右衛門					
24	6	岩淵十左衛門					
24	7	御口取					
24	8	御馬方					
24	9	佐伯運三郎					
24	10	岩淵千之丞					
24	11	佐々深之助					
24	12	御馬方					
24	13	御口取					
24	14	横田源十郎					
24	15	及川勘左衛門		E	10貫文	広間	
24	16	斉藤小三郎					
24	17	佐トウ左太夫		F	１両１歩６匁５分８厘４人	不明	
24	18	御口取					
24	19	日下五左衛門		E	17貫文	次間	
24	20	御口取					

＊知行高は１貫文以下切り捨てとした
＊漢字は原則として常用漢字を用い、変体仮名・合字などは通常の仮名に改めた
＊「○」は判読不能の文字を表し、文字数が不明の場合は［　　］、判読に疑問が残るものは（　）で示した
＊「■」は１文字分が空白のものを示す
＊「※なし」は小区画内に何も文字が記されていないものを示す
＊前後の絵図を照合した際、漢字の音ないし訓が同じ「川野」・「河野」や「道仙」・「道泉」は同一人物と判断した
　また、字形がよく似た異なる漢字が用いられている場合（「次郎右衛門」・「次郎左衛門」）や、１文字脱落の場合（「勘之丞」・「勘丞」）も同一の人物として扱った

表90　天明6年～寛政元年絵図　川内地区人名など一覧（1）
Tab.90　List of names around Kawauchi of picture map where Sendai town was drawn in 1786 ～ 1789 (1)

通し番号		人名・寺院名など	名義人変更なし	知行高・禄高		家格など	役職など
1	1	御旗元御足軽					
1	2	御旗元御足軽					
1	3	御山守					
1	4	御坊主					
1	5	御坊主					
1	6	御旗元御足軽					
1	7	白鳥明神社					
1	7’	星場					
1	7”	光明院					
1	8	白鳥明神社					
1	9	御旗元御足軽					
1	10	御旗元御足軽					
1	11	御旗元御足軽					
1	12	御坊主					
1	13	御旗元御足軽					
1	14	御旗元御足軽					
1	15	法楽院					
1	16	高野隼人	●	B	165貫文	着座	少老
1	17	御旗元御足軽					
1	18	御旗元御足軽					
1	19	御坊主					
1	20	御旗元御足軽					
1	21	御坊主					
1	22	御旗元御足軽					
1	23	御旗元御足軽					
1	24	山家勇治					
1	25	古田舎人		E	40貫文	着座	
1	26	平賀蔵人		D	100貫文	着座	奉行職
1	27	佐伯直衛					
1	28	熊谷盛之助		E	20貫文	虎間	
1	29	原（元右）太右衛門	●				
1	30	大松沢直之進		D	61貫文	一族	
1	31	武藤孫四郎	●	D	100貫文	虎間	
1	32	布施文之助	●	B	170貫文	着座	
1	33	秋保運之丞	●	D	100貫文	召出	
2	1	御坊主					
2	2	桜井源七郎	●				
2	3	御坊主					
2	4	御山守					
2	5	御旗元御足軽大筒討遠丁場ニ被相渡候					
2	6	御旗元御足軽					
2	7	菊地市左右衛門					
2	8	御旗元御足軽					
2	9	御旗元御足軽					
2	10	亀岡八幡宮					
3	1	千手院					
3	2	秀明院					
3	3	福蔵院					
3	4	[　　]					
3	5	[　　]					
3	6	御山守					
3	7	御旗元御足軽					
3	8	御旗元御足軽					
3	9	佐藤弥作					
3	10	御旗元御足軽					

通し番号		人名・寺院名など	名義人変更なし	知行高・禄高		家格など	役職など
3	11	御旗元御足軽					
3	12	的場					
3	13	御旗元御足軽					
3	14	御旗元御足軽					
3	15	御旗元御足軽					
3	16	御旗元御足軽					
3	17	御旗元御足軽					
3	18	御旗元御足軽					
3	19	御旗元御足軽					
3	20	御旗元御足軽					
3	21	御旗元御足軽					
3	22	御旗元御足軽					
3	23	北村嘉左衛門					
4	1	山田伊豆守	●				亀ヶ岡八幡神主、代々土佐守を称する
4	2	町屋					
5	1	禰宜屋敷					
5	2	町屋					
6	1	町屋					
6	2	町屋					
6	3	遍明院					
6	4	龍性院					
6	5	無量院					
6	6	慈眼院					
6	7	泉田大隅		C	141貫文	一家	奉行職
6	8	伊達六郎殿	●	A	807貫文	一門	
7	1	和田内記		B	161貫文	着座	
7	2	小原勘解由		E	50貫文	一族	
7	3	松井元（亮）	●	E	30貫文	その他（内科医）	
7	4	市川三治	●	E	30貫文	虎間	
7	5	芳賀皆人					
7	6	藤間仲左衛門					
8	1	矢野郷助	●	D	60貫文	虎間	
8	2	伊藤友順		E	16貫文	その他（外科医）	
8	3	真山九郎兵衛	●	A	200貫文	虎間	
8	4	佐々伊織		A	303貫文	着座	
9	−	※なし					
10	1	竹内寿伯					
10	2	金上伝之進		E	40貫文	召出	
10	3	山路八郎治		E	38貫文	虎間	
10	4	高橋圓之丞	●				
10	5	永田十兵衛		E	36貫文	虎間	
10	6	沼辺内蔵人	●	D	100貫文	一族	
10	7	大立目頼母		D	100貫文	一族	
10	8	古内筑前		A	328貫文	着座	
10	9	木村藤馬	●	D	100貫文	虎間	
10	10	沼辺陳伍	●	E	42貫文	召出	
10	11	黒沢左門		E	30貫文	中間	
10	12	望月多膳					
10	13	伊東頼母		D	70貫文	着座	
10	14	笠原内記		C	111貫文	着座	
10	15	小嶋欽治					
11	1	高泉主計		A	270貫文	準一家	
11	2	高橋定五郎		E	40貫文	次間	
11	3	弓的場鉄砲星場					

表91　天明6年～寛政元年絵図　川内地区人名など一覧（2）

Tab.91　List of names around Kawauchi of picture map where Sendai town was drawn in 1786～1789 (2)

通し番号		人名・寺院名など	名義人変更なし	知行高・禄高		家格など	役職など
11	4	御尼屋敷					
11	5	小川草元	●	F	350俵	その他（小児科医）	
11	6	田邊喜右衛門	●				
11	7	古内進					
11	8	大町久馬		D	63貫文	着座	
11	9	大内主膳		C	129貫文	一族	
11	10	亘理内膳		A	500貫文	一家	
12	－	※なし					
13	1	牧野三［　　］					
13	2	○佐治［　　］					
13	3	佐野［　　］					
13	4	白石（龍）之丞					
14	1	町屋					
14	2	猪苗代平五郎	●	E	36貫文	準一家	
14	3	拝借屋敷					
14	4	清水道光	●				
14	5	赤坂［　　］	●				
15	－	大松沢郡記		E	35貫文	召出	
16	1	伊東勇之助	●	E	33貫文	虎間	
16	2	只野孫右衛門		C	120貫文	着座	
16	3	熊谷直之丞					
16	4	木村勘十郎	●	E	1 1貫文	中間	
16	5	瀬上筑後		A	200貫文	一家	
17	1	岡村勇治	●	F	300俵	中間	
17	2	平井清太夫屋敷 中村日向○御（添）地二○○		E／A	40貫638文／452貫文	虎間／一家	
17	3	朴沢九吉	●	E	31貫文	虎間	
17	4	志賀熊太郎	●	E	27貫文	虎間	
17	5	中村日向	●	A	452貫文	一家	奉行職
18	1	高城宅三郎		E	10貫文	召出	
18	2	高屋快庵	●	C	103貫文	着座	
18	3	大條内蔵人	●	A	400貫文	一家	少老
18	4	御炭蔵					
18	5	伊達式部殿	●	A	2000貫文	一門	
18	6	伊達将監殿	●	A	1613貫文	一門	
19	1	御小人					
19	2	御小人					
19	3	御小人					
19	4	御小人					
19	5	御小人					
19	6	御小人					
19	7	御小人					
19	8	御小人					
19	9	御小人					
19	10	新（国）良輔					
19	11	御塩噌蔵					
19	12	大野源左衛門		F	蔵米100俵	次間	
19	13	[　　]					
20	－	御小人					
21	1	布沢郷助	●				
21	2	三浦勘治	●				
21	3	御職人					
22	1	御職人					
22	2	今野［　　］					
22	3	（小倉平内）					
22	4	御職人					
22	5	今野幸三郎					
22	6	御職人					
22	7	嶋○卯源治					
22	8	御職人					
22	9	御小人					
23	1	松原助五郎					
23	2	御職人					
23	3	氏家勇五郎	●				
23	4	大（宝）院					
24	1	片倉小十郎	●	A	1735貫文	一家	
24	2	（斎藤）小（右）衛門					
24	3	太田源左衛門					
24	4	庄子（九二）					
24	5	[　　] 忠兵衛					
24	6	鈴木幸右衛門					
24	7	横［　　］門					
24	8	岩渕十三郎					
24	9	○本新助					
24	10	岩渕勇之進					
24	11	御口取					
24	12	桑嶋九一郎					
24	13	伊藤与市郎					
24	14	黒沢源七郎	●				
24	15	岩渕勘三郎	●				
24	16	御口取					
24	17	御馬方会所					
24	18	佐伯○之進					
24	19	横田源兵衛		E	10貫文	広間	
24	20	岩渕十左衛門					
24	21	草刈仲蔵					
24	22	御口取					
24	23	御口取					
24	24	日下五郎左衛門	●	E	17貫文	次間	
24	25	御口取					
24	26	御口取					
24	27	及川又右衛門		E	10貫文	広間	
24	28	岩渕嘉藤太	●				
24	29	佐々作太夫					
24	30	鈴木源右衛門					
24	31	青野［　　］					
24	32	高橋太兵衛					
24	33	高橋平治					
24	34	佐藤弥蔵					
24	35	吉田市三郎					
24	36	戸津九郎治		E	10貫文	次間	
24	37	草刈卯之丞					
24	38	佐藤作右衛門					
24	39	伊藤久三郎					

＊知行高は1貫文以下切り捨てとした
＊漢字は原則として常用漢字を用い、変体仮名・合字などは通常の仮名に改めた
＊「○」は判読不能の文字を表し、文字数が不明の場合は［　　］、判読に疑問が残るものは（　）で示した
＊「■」は1文字分が空白のものを示す
＊「※なし」は小区画内に何も文字が記されていないものを示す

＊前後の絵図を照合した際、漢字の音ないし訓が同じ「川野」・「河野」や「道仙」・「道泉」は同一人物と判断した
また、字形がよく似た異なる漢字が用いられている場合（「次郎右衛門」・「次郎左衛門」）や、1文字脱落の場合（「勘之丞」・「勘丞」）も同一の人物として扱った

表92　安政3～6年絵図　川内地区人名など一覧
Tab.92　List of names around Kawauchi of picture map where Sendai town was drawn in 1856～1859

通し番号		人名・寺院名など	名義人変更なし	知行高・禄高		家格など	役職など
1	1	御旗元足軽					
1	2	高野仲人	●	B	165貫文	着座	
1	3	遠藤丹治					
1	4	山本助右衛門					
1	5	石田伊勢		C	150貫文	着座	奉行職
1	6	笠原内記		C	111貫文	着座	
1	7	佐藤大弼					
1	8	佐藤新介		C	110貫文	一族	
1	9	白川七郎殿		C	102貫文	一門	
1	10	片平大丞		C	119貫文	一族	奉行職
1	11	秋保松三郎	●	D	100貫文	召出	
2	1	御旗元足軽					
2	2	亀岡八幡					
3	1	的場					
3	2	千手院					
3	3	秀明院					
3	4	福蔵院					
3	5	御山守					
3	6	御旗元					
3	7	御旗元					
3	9	的場					
3	10	御旗元					
3	11	御旗元					
3	12	御旗元					
3	13	御旗元足軽					
3	14	御旗元足軽屋敷					
3	15	御旗元足軽					
3	16	御旗元足軽屋敷					
3	17	御旗元					
3	18	御旗元					
4・5	1	襴宜屋敷					
6	1	遍明院					
6	2	龍性院					
6	3	無量院					
6	4	慈眼院					
6	5	亀岡御殿					
6	6	伊達式部殿	●	A	807貫文	一門	
7	1	和田常之丞	●	B	161貫文	着座	
7	2	久世平八郎		D	64貫文	虎間	
7	3	高城兼二郎					
7	4	喜多山大吉		F	300俵	虎間	
7	5	小学校					
8	1	遠藤左近		D	60貫文	一族	
8	2	佐々豊前	●	A	303貫文	着座	奉行職
8	3	真山大吉	●	B	200貫文	虎間	
9	－	※なし					
10	1	大町因幡		A	300貫文	一族	奉行職
10	2	浜田大善					
10	3	高橋小津一郎	●				
10	4	猪苗代佐渡		E	36貫文	準一家	
10	5	坂英力		E	50貫文	一族	奉行職
10	6	大立目宮内	●	D	100貫文	一族	
10	7	大越定八		E	15貫文	虎間	
10	8	佐藤春太					
10	9	木村皆之助	●	D	100貫文	虎間	
10	10	平賀図書		D	100貫文	着座	
10	11	志賀三太夫					
10	12	望月武之介		E	50貫文	虎間	
10	13	伊藤左衛門	●				
10	14	下郡山内記		E	30貫文	一族	
10	15	小嶋■之進	●				
11	1	布施備前		B	170貫文	着座	
11	2	石母田但馬		D	100貫文	一族	奉行職
11	3	錦織即休		E	30貫文	着座	
11	4	御尼屋敷					
11	5	高城備後		E	42貫文	一族	
11	6	田邊宮之進	●				
11	7	佐伯勇五郎					
11	8	大松沢越中		D	61貫文	一族	
11	9	松前主水		B	200貫文	準一家	
11	10	亘理伯耆	●	A	500貫文	一家	
12	－	※なし					
13	1	御旗元					
13	2	佐野勇一郎					
13	3	遊佐伊右衛門		E	20貫文	虎間	
13	4	御小人					
13	5	寒河江丹蔵					
13	6	御小人					
14	1	御小人					
14	2	御小人					
14	3	御旗元足軽					
14	4	御小人					
15	1	御旗元御小人御旗元					
15	2	御小人					
16	1	御小人					
16	2	御旗元					
16	3	御小人屋敷					
16	4	御旗元					
16	5	御小人					
16	6	只野数之助	●	C	120貫文	着座	
16	7	革名靭負		C	150貫文	準一家	少老
17	1	大町勘解由		E	50貫文	一族	少老
17	2	御旗元足軽					
17	2 '	御坊主清斎					
17	3	中村宗一郎	●	A	452貫文	一家	少老
18	1	鈴木直記					
18	2	高屋喜庵	●	C	103貫文	着座	
18	3	大條孫三郎	●	A	400貫文	一家	奉行職
18	4	御炭蔵					
18	5	伊達筑前殿		A	2100貫文	一門	
18	6	伊達上野殿		A	1613貫文	一門	
19	1	御小人					
19	2	拝借地					
19	3	御小人					
19	4	御塩噌蔵					
20	1	御小人					
21	1	御小人					
21	2	御職人					
21	3	御小人屋敷					
21	4	御職人屋敷					
21	5	御小人屋敷					
22	1	御小人屋敷					
22	2	御小人屋敷					
23	－	御小人屋敷					
24	1	片倉小十郎	●	A	1800貫文	一家	
24	2	御足軽					
24	3	岩渕					
24	4	庄子〇左衛門	●				
24	5	岩渕					
24	6	〇沢（駒）太郎					
24	7	岩渕■之助	●				
24	8	太田（新六）郎		C	130貫文	召出	
24	9	草刈（慶）左衛門					
24	10	（岩渕英豊）					
24	11	黒（沢源）之丞	●				
24	12	及川仙之助					
24	13	真					
24	14	高橋京二郎	●				
24	15	草刈（亀五）郎					
24	16	佐藤（平）兵衛	●				
24	17	（吉田茂左）衛門	●				
24	18	[　]					
24	19	[　]					
24	20	伊藤[　]					
24	21	伊藤健治	●				
24	22	佐伯乙五郎					
24	23	葦沢乙治郎					
24	24	青木■郎					
24	25	伊藤（寅）之助					
24	26	鈴木■右衛門	●				
24	27	佐々〇右衛門	●				
24	28	御馬方衆					
24	29	岩渕（和）兵衛					
24	30	横田（源）四郎					
24	31	（斉藤雄五郎）					
24	32	高橋（弥二）兵衛					
24	33	御口取					
24	34	御口取					
24	35	下十蔵					
24	36	御口取					

＊知行高は１貫文以下切り捨てとした
＊漢字は原則として常用漢字を用い、変体仮名・合字などは通常の仮名に改めた
＊「〇」は判読不能の文字を表し、文字数が不明の場合は［　］、判読に疑問が残るものは（　）で示した
＊「■」は１文字分が空白のものを示す
＊「※なし」は小区画内に何も文字が記されていないものを示す

＊前後の絵図を照合した際、漢字の音ないし訓が同じ「川野」・「河野」や「道仙」・「道泉」は同一人物と判断した
また、字形がよく似た異なる漢字が用いられている場合（「次郎右衛門」・「次郎左衛門」）や、１文字脱落の場合（「勘之丞」・「勘丞」）も同一の人物として扱った

表93　川内地区における拝領屋敷の名義人数と名義変更
Tab.93　Number and changes in titular who granted the homestead around Kawauchi

大区画	寛文４年絵図			寛文８・９年絵図			延宝６～８年絵図			延宝９年～天和３年絵図			元禄４・５年絵図			享保９年以降絵図			宝暦10年～明和３年絵図			天明６年～寛政元年絵図			安政３～６年絵図		
	小区画数	名義人の数	名義人変更なし	小区画数	名義人の数	名義人変更なし	小区画数	名義人の数	名義人変更なし	小区画数	名義人の数	名義人変更なし	小区画数	名義人の数	名義人変更なし	小区画数	名義人の数	名義人変更なし	小区画数	名義人の数	名義人変更なし	小区画数	名義人の数	名義人変更なし	小区画数	名義人の数	名義人変更なし
１区	25	14	—	19	11	11	33	12	9	24	12	9	26	10	3	20	11		29	11	3	36	11	5	12	10	2
２区	4	1	—	4	1	2	5	2	1	4	3	2	5	2	2	5			10	1		11	3	2	2		
３区	46	22	—	41	20	17	44	25	10	42	23	16	23	1	1	6	1		28	4		23	2		17		
４区	1	1	—	1	1	1	1	1		1	1		2	1		1	1	1	2	1		1			1		
５区	1	1	—	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2			1			2			1			1		
６区	10	9	—	9	9	8	10	8	2	10	9	5	18	9	3	5	2		3	2		8	2	1	6	1	1
７区	3	3	—	2	2		5	4		5	5		4	4		8	8		9	9		6	6	2	5	4	1
８区	4	3	—	2	1		6	5	1	6	6		5	5	2	6	4		5	5	2	4	4	2	3	3	2
９区	2		—	3	1		2	2		2	2		1			1			1			1			1		
10区	15	15	—	13	13	13	15	15	9	15	15	12	15	14	8	14	14	2	13	13		15	15	4	15	15	5
11区	11	11	—	11	11	11	12	12	7	11	11	7	9	9	5	12	11		7	5	1	10	8	2	10	9	2
12区	3		—	1			3			3			1			1			1			1			1		
13区	5	4	—	5	5	4	5	5	4	5	5	5	4	4	3	5	5		7	5	1	4	4		6	3	
14区	4	4	—	4	4	4	5	5	2	5	5	5	5	4	2	6	5		5	3	1	5	3	3	4		
15区	2	1	—	1	1		1	1	1	1	1	1	1			1	1		1	1		1	1		2		
16区	5	2	—	4	4	2	5	5	3	5	5	5	3	3		3	3		5	5	1	5	5	2	7	2	1
17区	7	6	—	7	7	5	7	7	4	7	7	7	5	5	1	5	5	1	5	5	3	7	7	4	4	2	1
18区	9	4	—	8	4	3	7	7	4	7	7	7	6	6	4	7	6	3	7	5	5	6	5	4	6	5	2
19区	7		—	7			8	1		6	1	1	12			8			10	1		13	2		4		
20区	2	2	—	2	2	2	2	2	2	2	2	2	1						2			1			1		
21区	2		—	3	2		3	2	2	3	1	1	3			1			3	2		3	2	2	5		
22区	2		—	2			2			2			3			2			9			9	4		2		
23区	2	1	—	2	1	1	2	1	1	2	1	1	3			1			4	2		4	2	1	1		
24区	12	10	—	14	11	9	24	23	8	23	22	22	15	6	4	1	1		20	13	1	39	32	5	36	27	10
計	184	114	—	166	112	94	208	146	71	192	145	109	172	83	38	120	78	7	188	93	18	214	118	39	152	81	27

表94　川内地区に拝領屋敷を持つ上級家臣
Tab.94　List of superior Samurai who granted the homestead around Kawauchi

	一門	一家	準一家	一族	宿老
寛文４年絵図	伊達肥前（宮床）				
寛文８・９年絵図	伊達肥前（宮床）				
延宝６～８年絵図	伊達大蔵（登米）、伊達将監（水沢）、伊達肥前（宮床）、三沢頼母	片倉小十郎、小梁川修理		下郡山隼人	
延宝９年～天和３年絵図	伊達大蔵（登米）、伊達将監（水沢）、三沢頼母	片倉三之助		大町備前、下郡山隼人	
元禄４・５年絵図	伊達若狭（登米）、伊達将監（水沢）、三沢左京	柴田内蔵、中村左衛門		西大條卯兵衛	但木主馬
享保９年以降絵図	伊達近江（登米）、伊達出羽（水沢）、伊達肥前（宮床）	鮎貝右兵衛、大條監物、片倉小十郎、中村日向、亘理石見	葦名刑部	中嶋十郎	
宝暦10年～明和３年絵図	伊達式部（登米）、伊達駿河（水沢）、伊達出羽（宮床）	鮎貝志摩、片倉小十郎、中村淡路	猪苗代玄祝	大立目下野、大町将監	
天明６年～寛政元年絵図	伊達式部（登米）、伊達将監（水沢）、伊達六郎（宮床）	泉田大隅、大條内蔵人、片倉小十郎、瀬上筑後、中村日向、亘理内膳	猪苗代平五郎、高泉主計	大内主膳、大立目頼母、大松沢直之進、小原勘解由、沼部内蔵人	
安政３～６年絵図	白川七郎、伊達筑前（登米）、伊達上野（水沢）、伊達式部（宮床）	大條孫三郎、片倉小十郎、中村宗一郎、亘理伯耆	葦名靭負、猪苗代佐渡、松前主水	石母田但馬、遠藤左近、大立目宮内、大町因幡、大町勘解由、大松沢越中、片平大丞、坂英力、佐藤新介、下郡山内記、高城備後	

＊下線部は川内地区に屋敷地を所有していることが３回以上確認できた者を示す

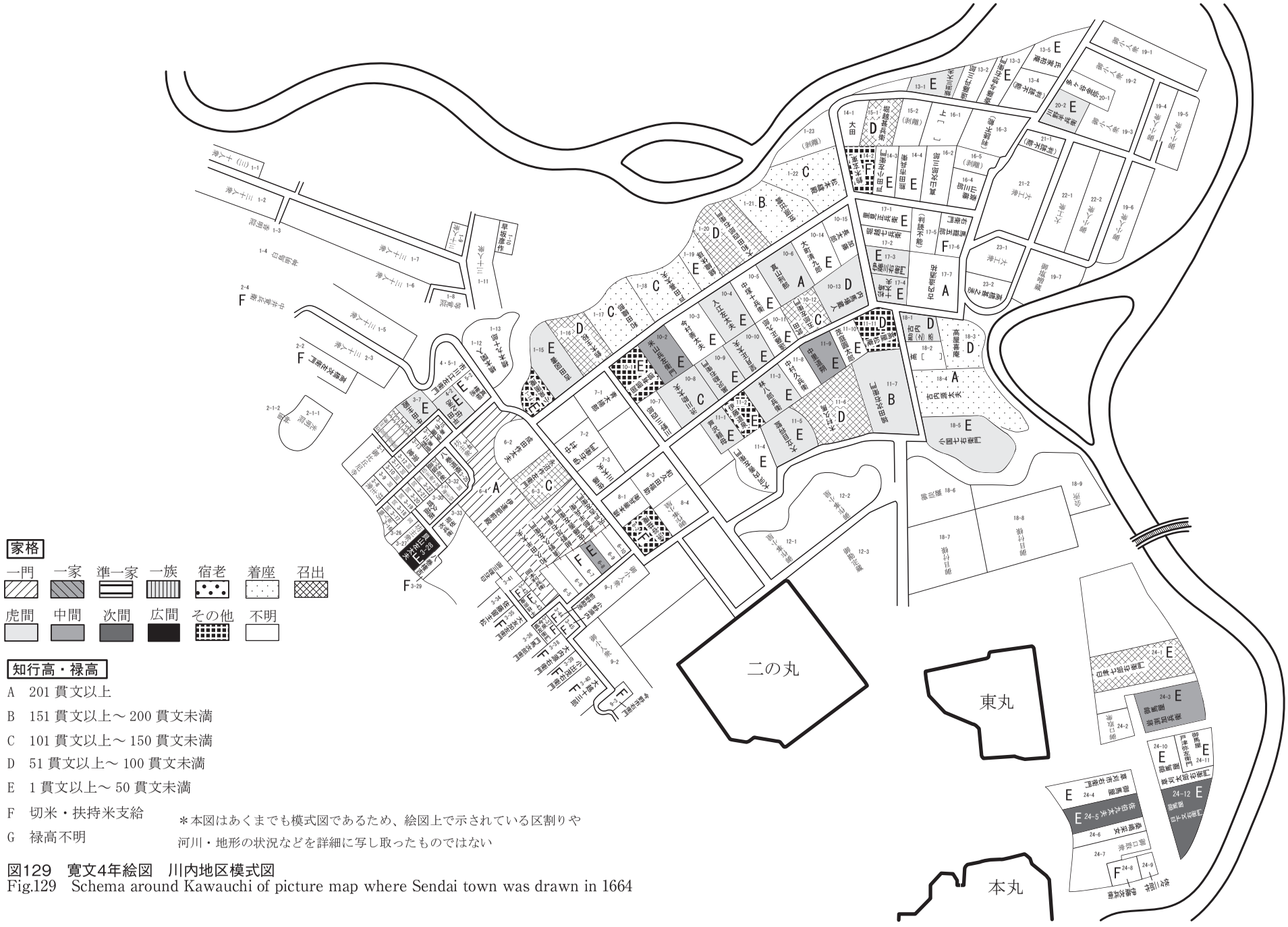


図129　寛文4年絵図　川内地区模式図
Fig.129　Schema around Kawauchi of picture map where Sendai town was drawn in 1664

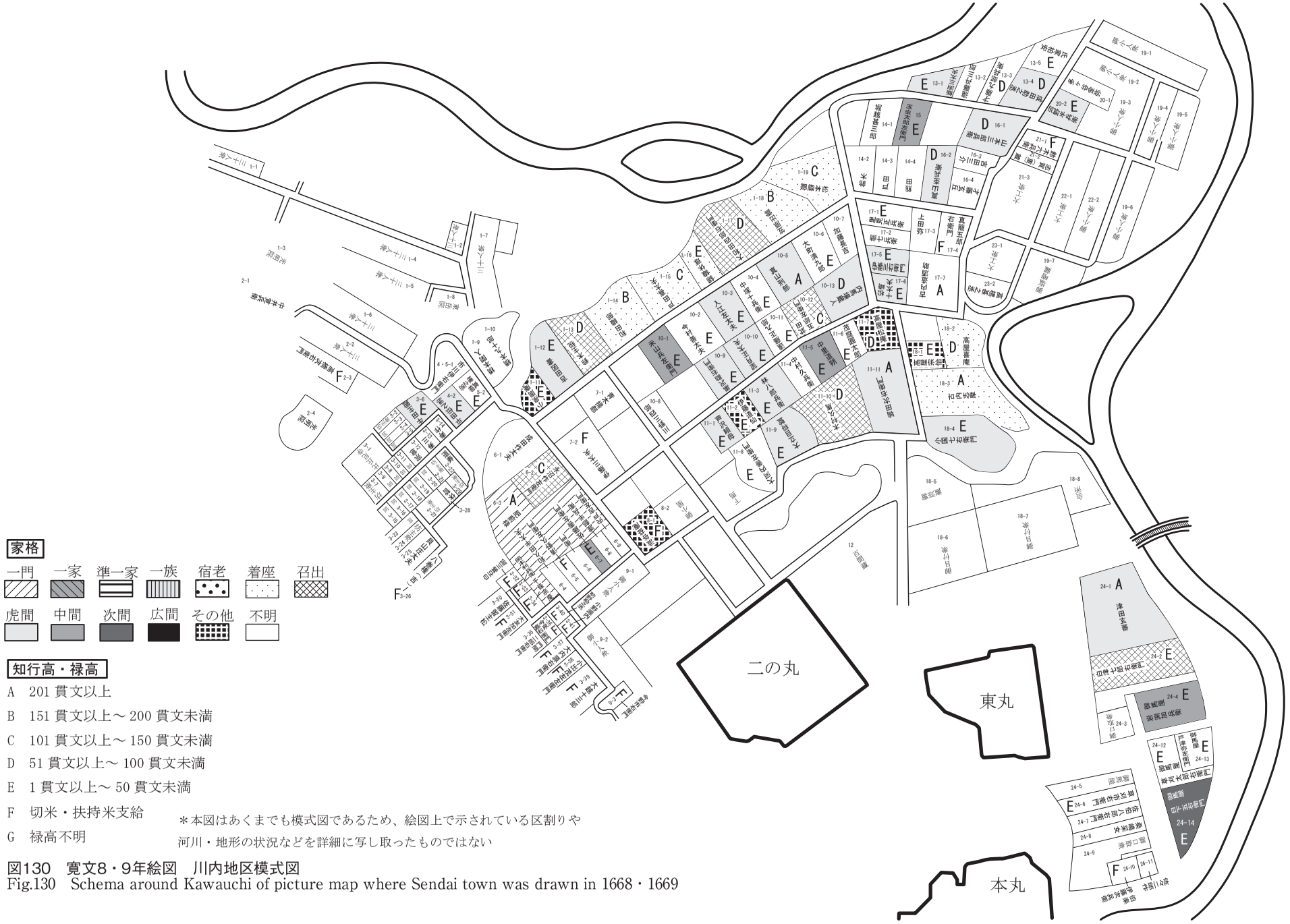


図130　寛文8・9年絵図　川内地区模式図
Fig.130　Schema around Kawauchi of picture map where Sendai town was drawn in 1668・1669

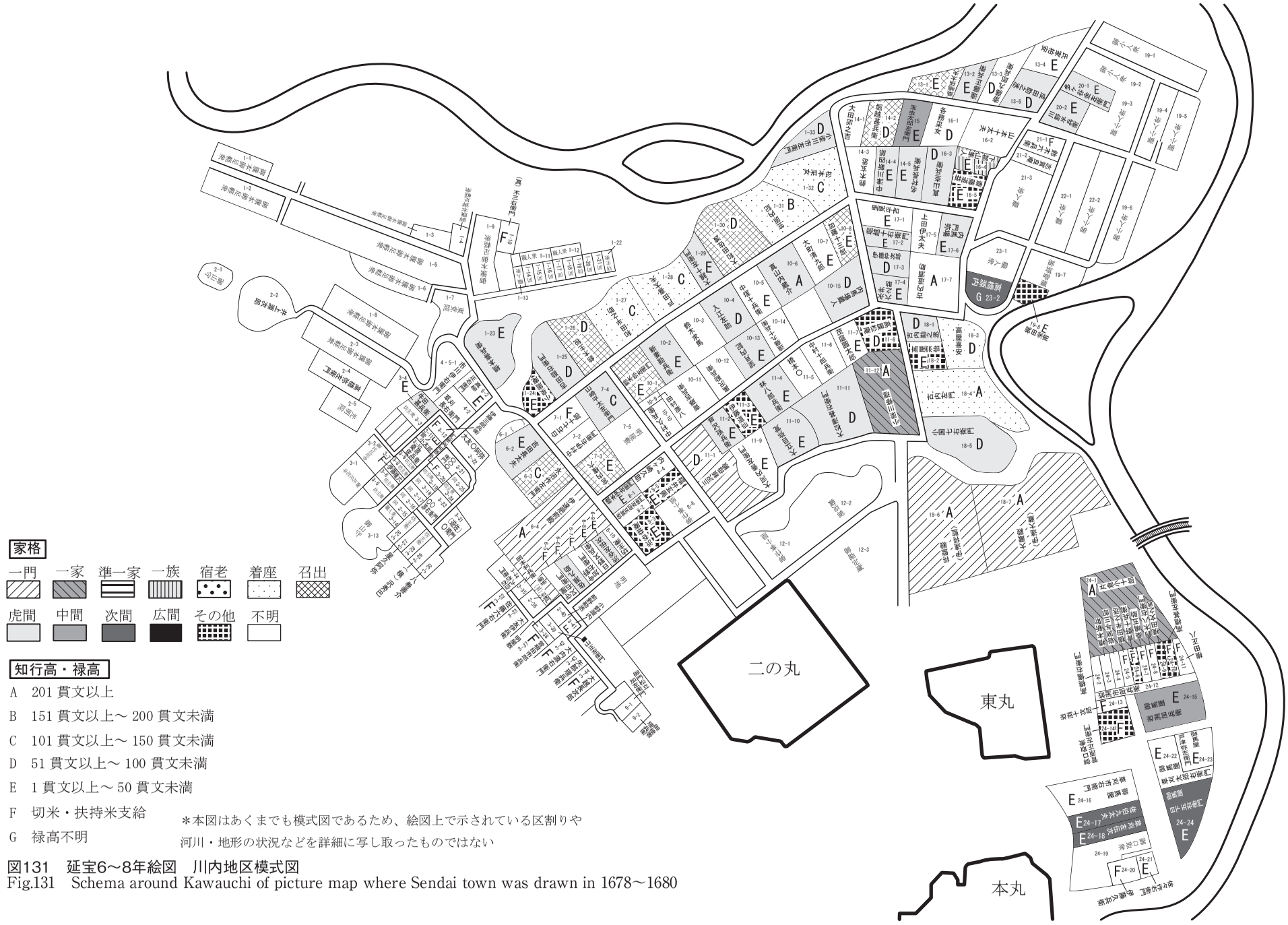


図131　延宝6～8年絵図　川内地区模式図
Fig.131　Schema around Kawauchi of picture map where Sendai town was drawn in 1678～1680

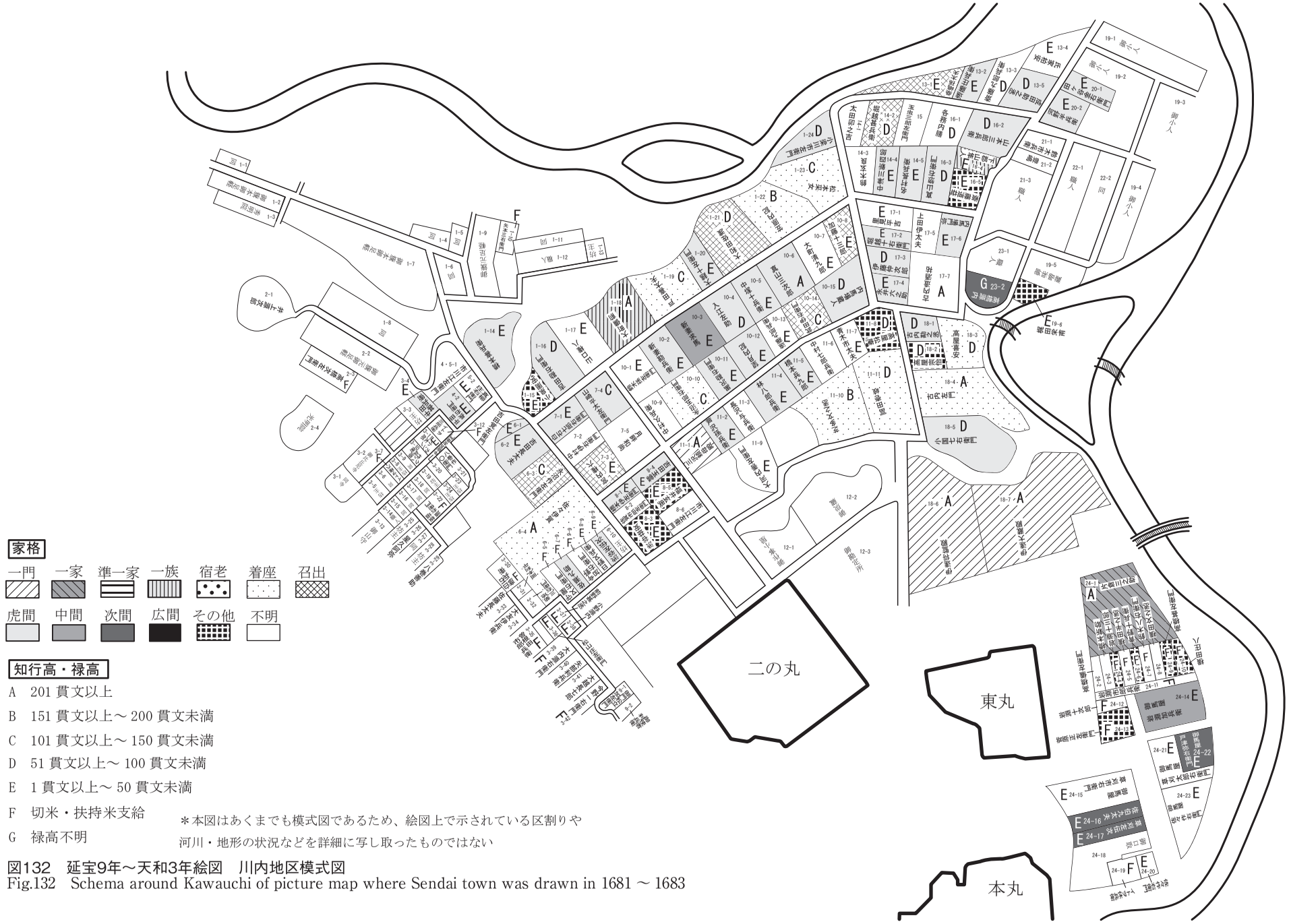


図132　延宝9年～天和3年絵図　川内地区模式図
Fig.132　Schema around Kawauchi of picture map where Sendai town was drawn in 1681 ～ 1683

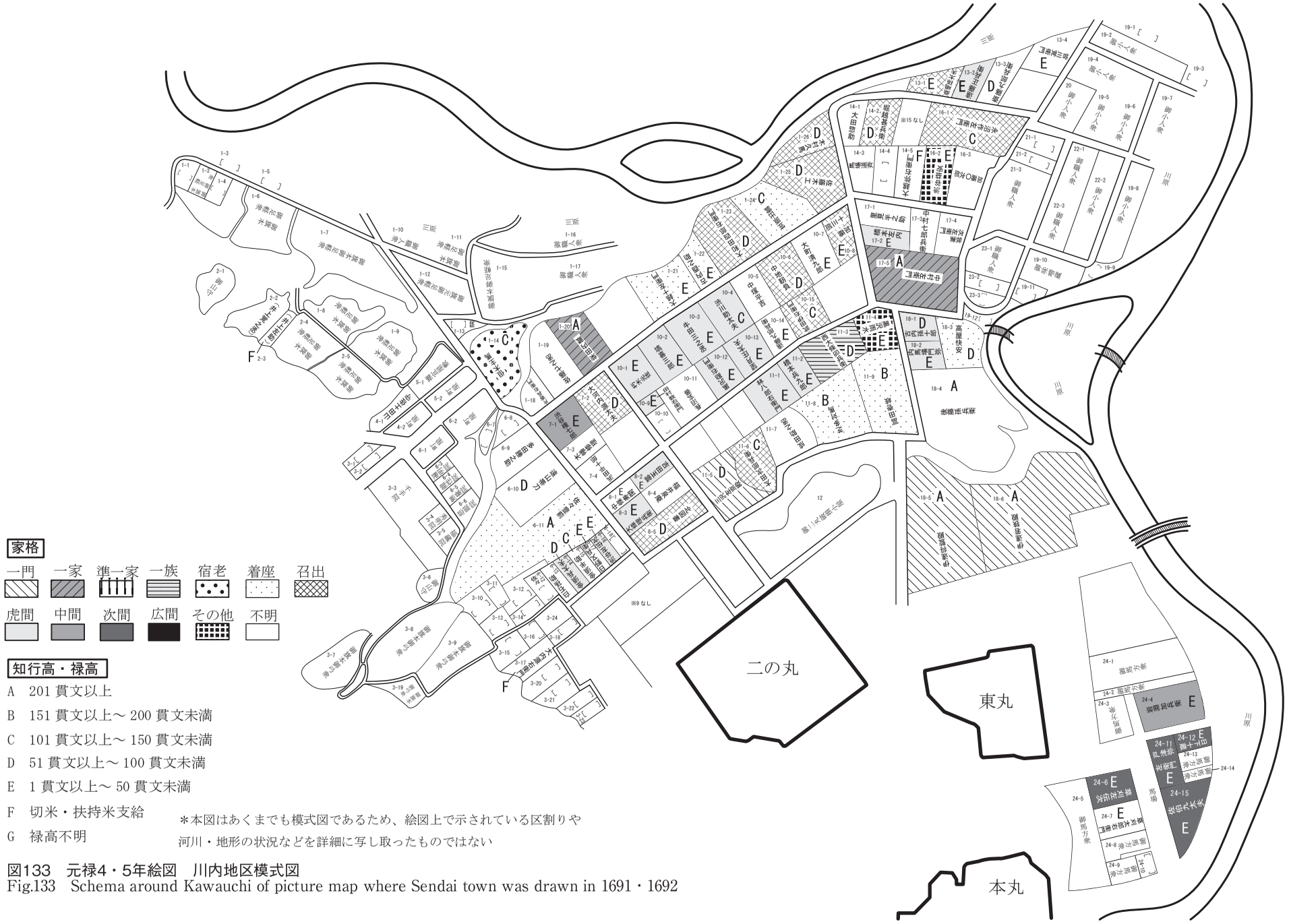


図133　元禄4・5年絵図　川内地区模式図
Fig.133　Schema around Kawauchi of picture map where Sendai town was drawn in 1691・1692

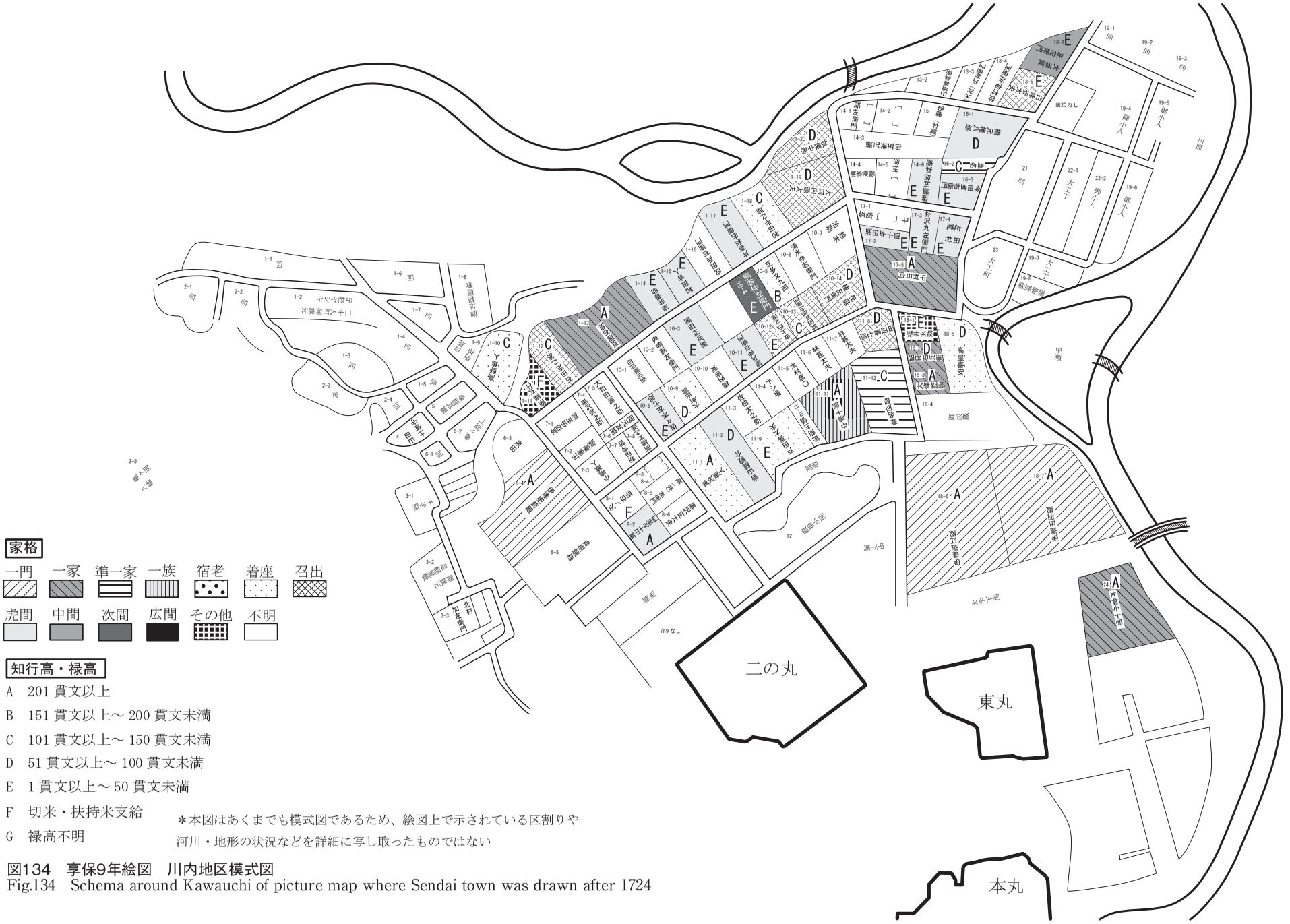


図134　享保9年絵図　川内地区模式図
Fig.134　Schema around Kawauchi of picture map where Sendai town was drawn after 1724

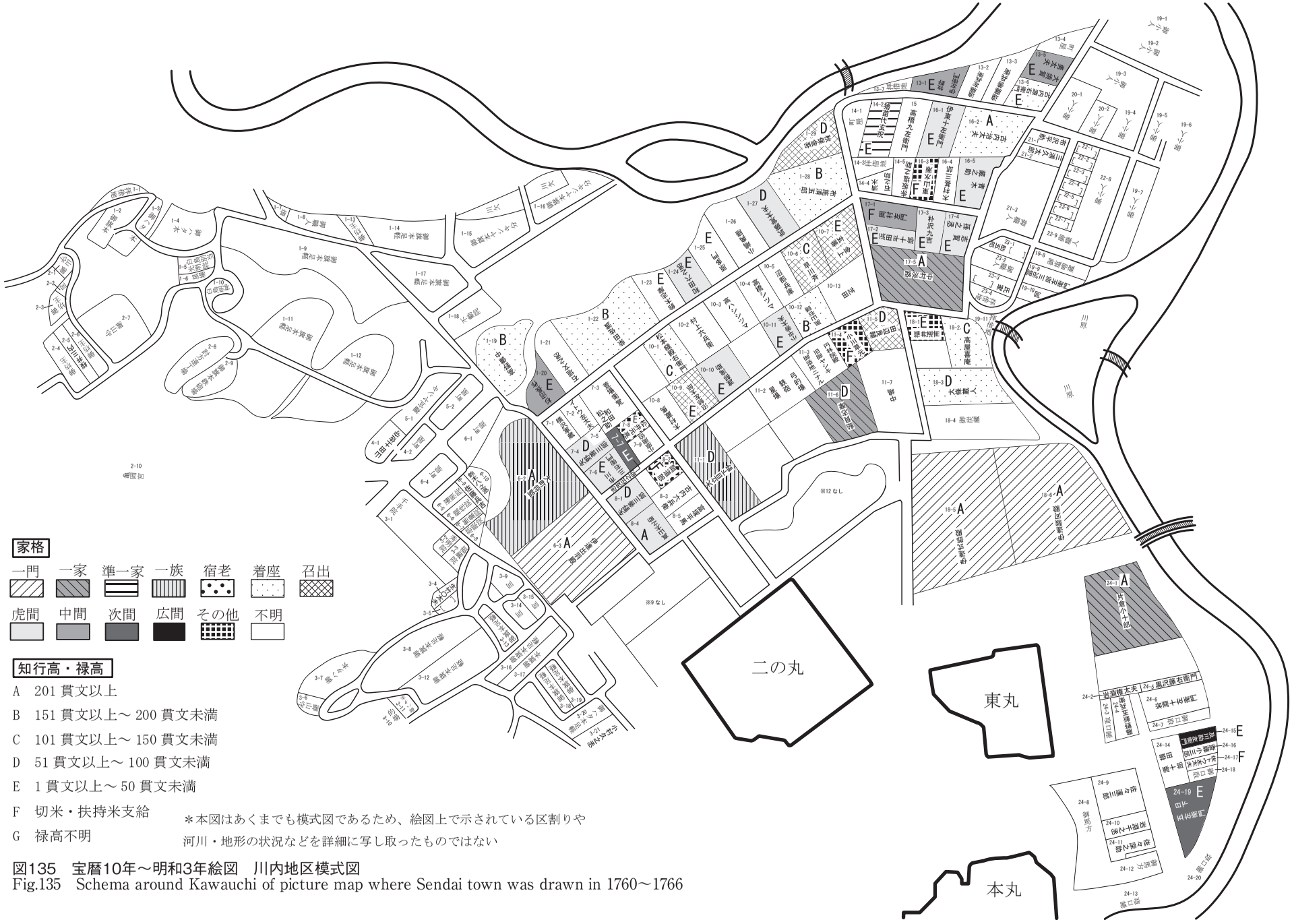


図135　宝暦10年～明和3年絵図　川内地区模式図
Fig.135　Schema around Kawauchi of picture map where Sendai town was drawn in 1760～1766

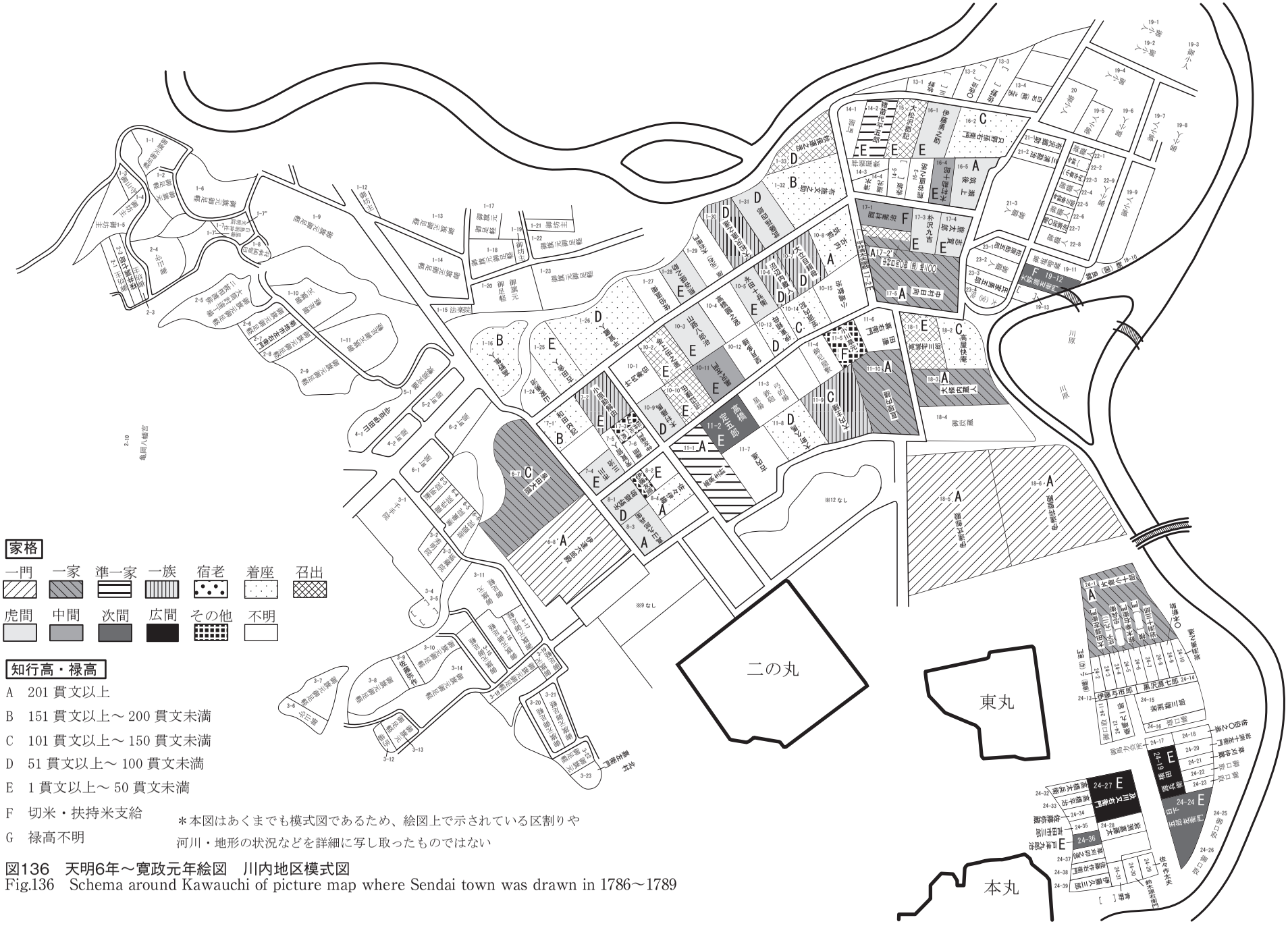


図136　天明6年～寛政元年絵図　川内地区模式図
Fig.136　Schema around Kawauchi of picture map where Sendai town was drawn in 1786～1789

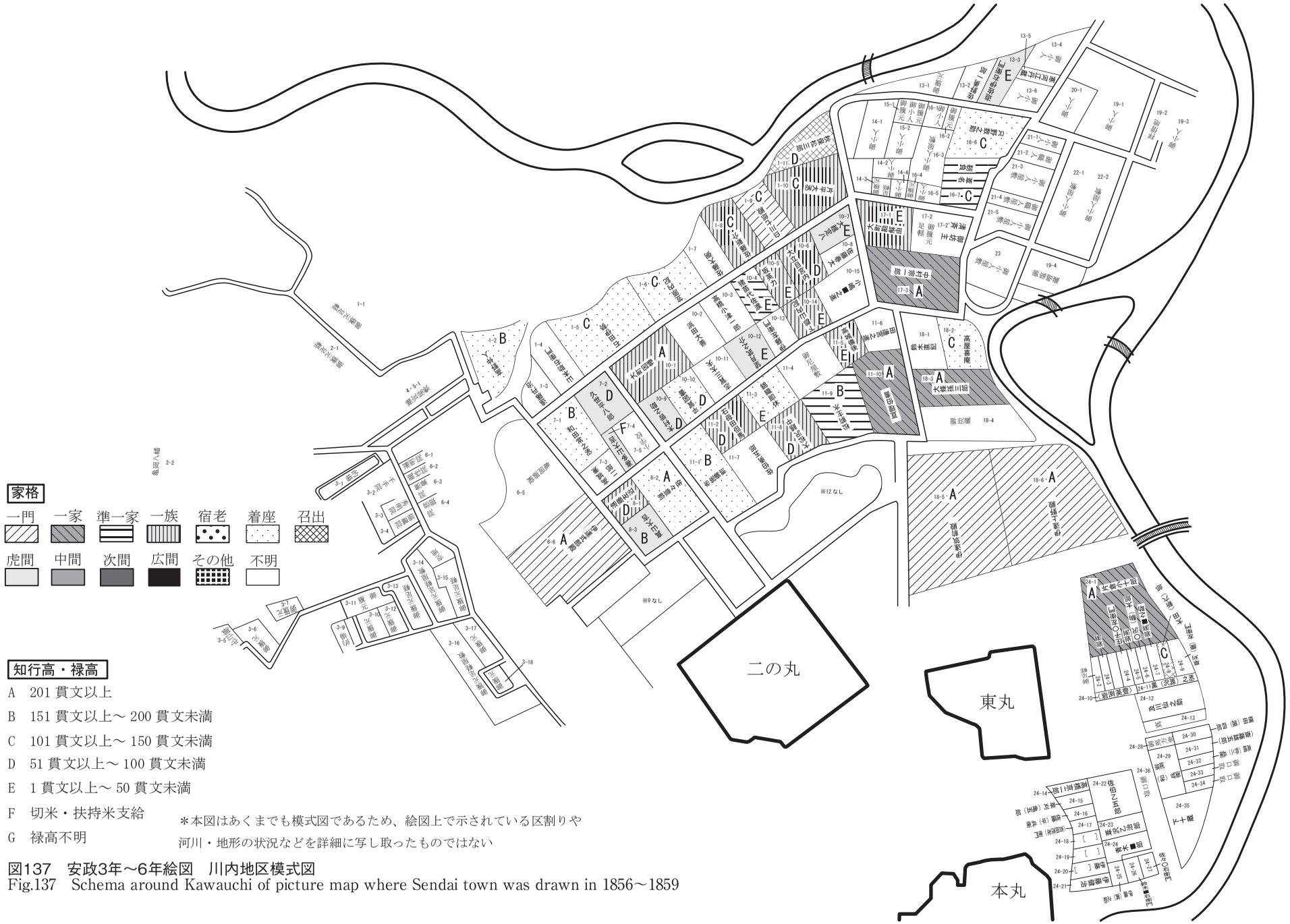


図137　安政3年～6年絵図　川内地区模式図
Fig.137　Schema around Kawauchi of picture map where Sendai town was drawn in 1856～1859

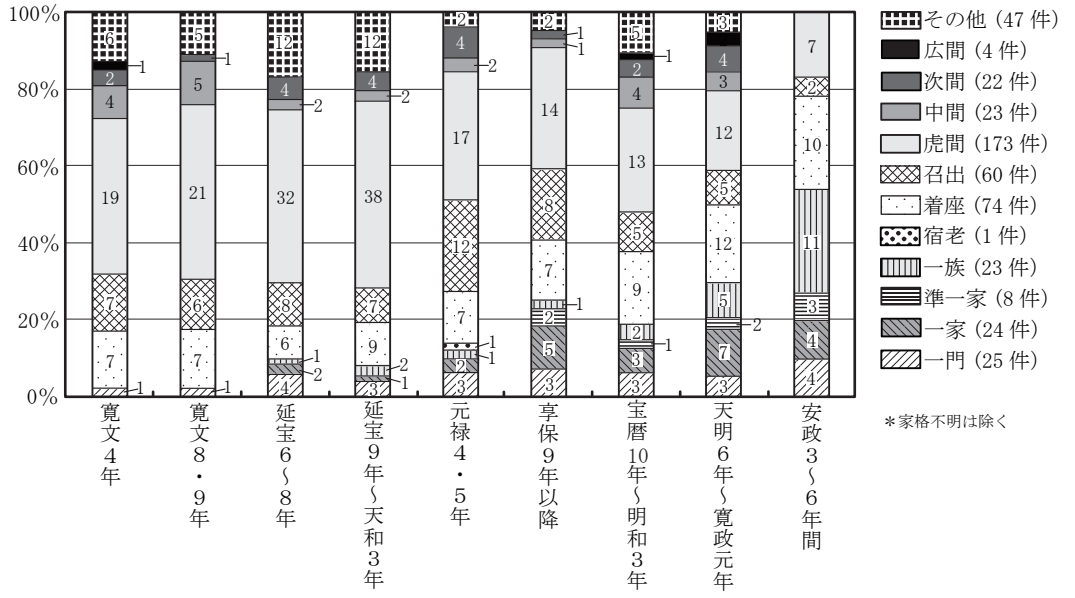


図138　川内地区に拝領屋敷を持つ家臣の家格の変遷
Fig.138　Changes status of Samurai who granted the homestead around Kawauchi

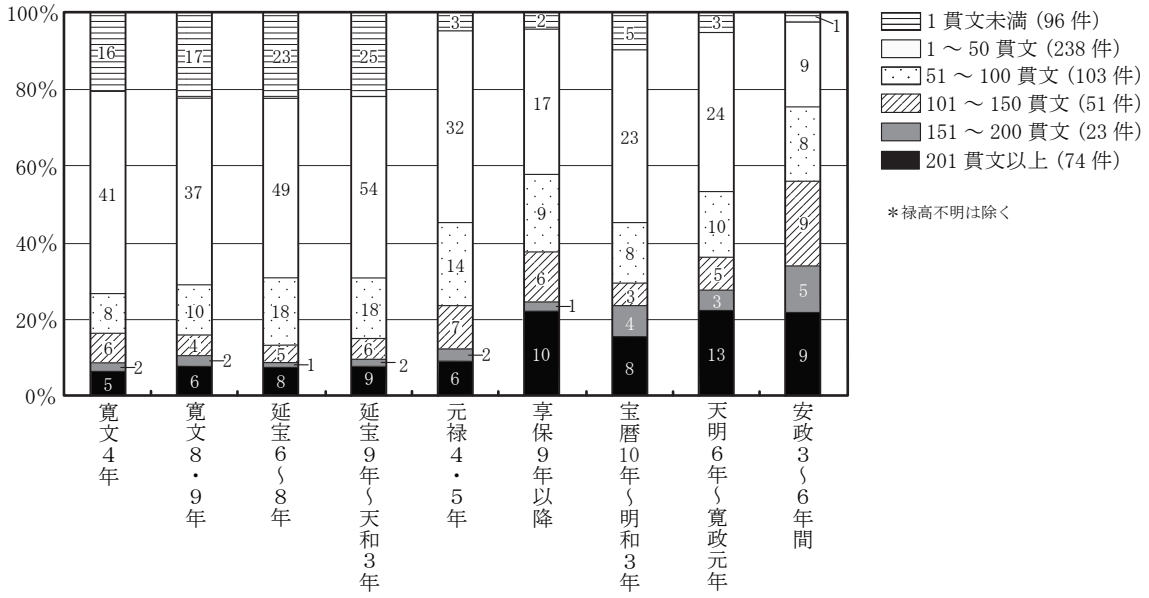


図139　川内地区に拝領屋敷を持つ家臣の知行高・禄高の変遷
Fig.139　Changes salary of Samurai who granted the homestead around Kawauchi

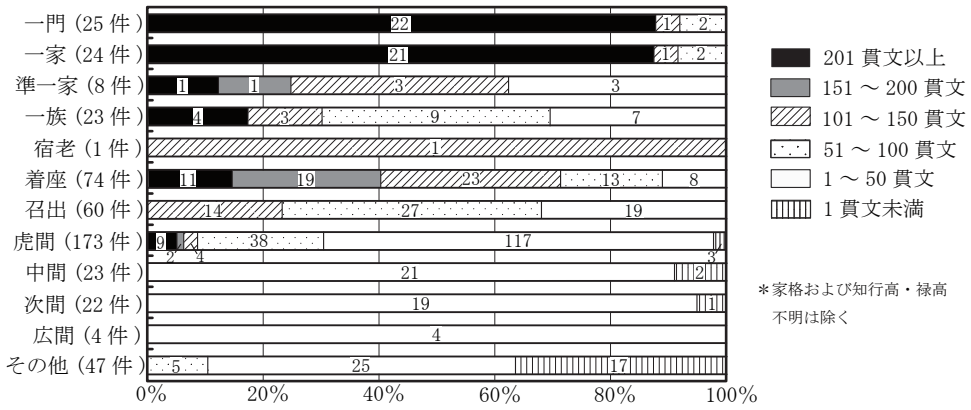


図140　川内地区に拝領屋敷を持つ家臣の家格および知行高・禄高の相関関係
Fig.140　Correlation statue with salary of Samurai who granted the homestead around Kawauchi

２．川内地区における江戸時代の道路の復元

（１）はじめに

武家屋敷地区の調査を実施していくに際しては、調査した場所が、どの屋敷区画に相当するかを検討することが必要となる。その際、江戸時代の道路の位置が判明しているなら、城下絵図と対比することによって、屋敷区画の推定は比較的容易である。屋敷区画が推定できれば、絵図記載人名から屋敷拝領者に関わる情報が得られる場合も多い。その情報を、考古学的知見と比較検討することで、様々な側面を明らかにしていくことが可能となる。ところが、後述するように、川内地区は明治時代以降に行われた道路の改変が大きく、江戸時代の道路の位置復元が容易でない。道路部分の発掘調査事例も少なく、確論を導くことは容易でないが、現状から考えられる川内地区における江戸時代の道路の復元を試みたい。今後の調査の進展によって、多くの補訂が必要となると思われるが、現状での復元根拠を整理して示しておくことが、今後の検討を進めていくためにも必要であると考えられる註)。

（２）検討素材となる絵図・地図

本書の第Ⅱ章２．において、仙台城下の絵図について簡単に紹介し、江戸時代の主要な城下絵図の一覧を表５に示しておいた。また、図４・５に、主要な絵図と、明治時代の地図について、川内北地区の部分を示しておいた。これらに示したものが、道路の復元にあたっての、検討素材となる絵図・地図である。

仙台城下の主要区域の道路については、現存する最も遡る城下絵図である、正保２年（1645年）の『奥州仙台城絵図』以降、幕末まで基本的には変化していない。ただし、時期によって城下の範囲は変化しており、そのような周辺の区域では、当然変化が見られる。このような周辺の区域を除くと、主要な区域においては、大きな変化はほとんど見られない。それでも、江戸時代を通じてまったく変わらなかった訳ではなく、部分的には変化したところもある。川内地区周辺では、澱橋付近の変化などについて、早くに阿刀田令造が指摘している（阿刀田令造1936)。江戸時代にもこのような改変は見られるため、道路の復元にあたっては、江戸時代の中ではもっとも新しい時期の絵図を用いるのが、近代以降の地図と比較する上では得策である。そこで最も新しい城下絵図である、安政三～六年（1856 ～ 59年）の「安政補正改革仙府絵図」を使用することとする。

江戸時代の絵図は、現在のような測量技術によって正確に測量して作成されたものではない。明治時代の地図も、初期のものは、全てを正確に測量して作成されたものではない。明らかに方向や距離が実際と異なっている部分も、明治初期の地図には多く見受けられる。ある程度信頼が置けるものは、明治26年の地図以降であるが、後述のように、この段階では川内地区の道路は、大きく改変された後である。改変以前の道路を正確に測量した地図は、確認できていない。したがって、江戸時代の絵図や明治時代初期の地図を、現代の地図に直接対比させることで、当時の道路を正確に復元することは難しい。そのため以下では、江戸時代から踏襲されている道路と、改変された部分について、それぞれに根拠を示しつつ検討を加えてみたい。

（３）江戸時代から踏襲されている道路

江戸時代の絵図から、明治以降現代に至る地図を見比べることから、変化がないと見られる道路を探し出す作業によって、江戸時代から現在まで踏襲されていると考えられる道路を抽出した。その際、自然地形や他の道路、あるいは寺社など時代を越えて維持されている施設などとの位置関係が判断の基本となるが、特徴的な形状の道路の場合は判断は比較的容易な場合もある。

このような作業によって、江戸時代から現在まで踏襲されていると考えられる道路を、図141 に示した。幕末の「安政補正改革仙府絵図」、明治15年の地図、明治26年の地図、そして現代の地図で対応関係が判るように、

1．安政三～六年（1856 ～ 59 年）安政補正改革仙府絵図
2．明治 15 年（1882 年）仙台区近傍村落之図
3．明治 26 年（1893 年）仙台市測量全図
4．現代地図

図141　川内地区周辺の道路の対比
Fig.141　Picture maps around Kawauchi area

踏襲されていると考えられる道路を黒塗りで示した。

ただし道路の幅については、具体的に検討できる素材がないため、現在の道路の幅が、江戸時代にも同じであったとは限らない。このような細部については、必ずしも一致しない可能性もあるが、図141に示した道路の位置関係が大きくずれている可能性は低いと考えて良いであろう。

（４）明治以降の道路の改変

①大橋東側

明治時代になって、最も早い時期に改変が確認できるのが、大橋東側の部分である。大橋東側に延びる道路は、大橋東側に建っていた「肴蔵」を過ぎると、すぐに鉤の手状になっていたことが絵図から伺える。段丘崖の高低差を通るために、鉤の手状の道路になっていたと思われる。大きな削平や盛土を行わないならば、大きな高低差のある部分を横切る道路を造るには、段差部分を鉤の手状にすることが必要であったと思われる。仙台城下の各所で、段丘崖を横切る所には、鉤の手状の道路が見られる。このような鉤の手状の道路は、いずれ直線的な道路へ改変されていく。その中で大橋東側の部分では、いち早く改変が見られる。明治８年（1875年）の地図までは鉤の手状になっているが、明治13年（1880年）の地図では、すでに直線で描かれており、いち早く改修されたことが伺える（図142－１・２）。

仙台市博物館が所蔵する、明治９年の明治天皇行幸の際に撮影された可能性が指摘されている写真に、大橋東側から大手門方向を望んだものがある（入間田編2006、図142－３）。その写真の手前側の、大橋から東に延びる道路の路面の状況が、途中から異なっている。道路に盛土工事を行っている途中、あるいは工事直後の状況のように見て取ることができる。脇に残っている「肴蔵」との位置関係から見て、段丘崖の低い側に盛土を行い、鉤の手状の部分を直線に改変するための工事のように思われる。この写真が明治９年の明治天皇行幸に関わって撮影されたのであれば、明治天皇の行幸の際に、輿あるいは馬車での通行を考え、直線の道路へ改修された可能性も考えられるだろう。なお明治天皇は、明治９年６月24日に仙台に到着し、同26日に二の丸に置かれていた仙台鎮台を訪れている。

１．明治８年(1875 年)地図

２．明治 13 年(1880 年)地図

３．大橋東側から二の丸方向を見た古写真

１・２：『絵図・地図で見る仙台　第二輯』
３：仙台市博物館所蔵写真

図142　大橋東側の道路の変化
Fig.142　Maps and view of the road on east side of *Ohashi* bridge

大橋の東側では、現在の西公園周辺での改変も著しい。この区域は、明治５年（1872年）の櫻岡大神宮の遷宮、明治８年（1875年）桜ヶ岡公園（現西公園）の開園と翌明治９年の宮城博覧会の開催など、公共的施設へと変化していく。明治19年（1886年）には、陸軍将校クラブである偕行社や、和洋食料亭挹翠館（後に仙台市が買収して仙台市公会堂となる）などが造られている。その後も、昭和３年（1928年）の東北産業博覧会の第２会場として利用されるなどの過程を経て、西公園周辺では江戸時代の武家屋敷の区画や道路は、大きく改変されることとなった。

②川内地区

川内地区では、明治以降の改変が大きい。正保２年（1645年）絵図（図４－１）以降、明治15年（1882年）の地図（図５－13）に至るまで、川内地区の道路には基本的に変化がない。しかし、明治26年（1893年）の地図（図５－14）では、道路が大きく変化している。

二の丸と北方武家屋敷との境には、千貫沢とそれを広げた堀がある。この千貫沢や堀の北側に沿って「筋違橋通」が東西に走っている。それより北側には、東西方向の道路は「中ノ坂通」と「亀岡通」の２本が江戸時代にはある。ところが明治26年の地図以降は、千貫沢沿いの道路の北側には、東西方向の道路は１本だけである。同時に、大手門から北側へ延びる道路も改変されている。大手門前から北へ延びる道路は、もともとは、千貫沢を渡る筋違橋の北側で鉤の手状に屈曲していたが、この時にまっすぐ北へ延びる道路へ変わっている。同様に、広瀬川を渡る大橋から大手門へいたる道路も、もとは大手門手前で屈曲していたのが、大橋からまっすぐ延びる形に変わっている。明治22年（1989年）の広瀬川の洪水によって木橋であった大橋が流失し、第二師団の要請で鉄橋が架けられることとなり、明治25年（1892年）に竣工した際に、大橋から大手門へ至る道路が直線になった。川内北地区の道路がつけ替えられたのが、大橋鉄橋の架橋と同時かどうかは確認できていないが、明治21年（1888年）の第二師団の設置以降、師団の諸施設の整備が行われていくのと一連の過程で、川内地区の道路の整備が進められていったものと考えられる。

（５）改変された道路の位置復元

①復元根拠のある道路

明治時代以降に改変された道路の位置復元について、検討素材がある事例は多くない。検討素材となるのは、発掘調査によって道路に関わる遺構が発見されている事例や、土橋の石垣など現在も遺構が確認できる事例などである。なお現存する石垣の番号は、仙台市教育委員会によって 2003年度に実施された仙台城跡の遺構現況調査で付された番号を使用した（渡部紀ほか 2004）。

【裏下馬通】

二の丸の裏門である台所門から北へ延びる「裏下馬通」は、千貫沢を土橋である千貫橋で渡っている。千貫橋を渡り「筋違橋通」と交差するところに、台所門から二の丸に入る際に、下りた馬を繋いでおく「北下馬厩」が置かれていた。「裏下馬通」との名称は、これに因んだものである。この千貫橋の東側には石垣が造られており、現存している（石垣2003）。部分的な補修は行われていると思われるが、本来の位置を保って、維持されてきたものと考えられる。現在の道路も、この石垣の上を走っており、道路の東端が石垣の位置となる。この「裏下馬通」は、絵図の表現では、千貫橋の北側に一直線に延びるように描かれており、途中で方向が変わっているような表現は見られない。したがって、道路の幅は不明ながら、千貫橋から北へ延長していった形で、「裏下馬通」は復元が可能である。

【大堀通】

「裏下馬通」の西側の「大堀通」については、発掘調査によって、関係する遺構が確認されている。

図143　大堀通の復元
Fig.143　Reconstruction map of the road called *Obori-dori*

仙台市教育委員会による地下鉄東西線川内駅部の発掘調査によって、「大堀通」の遺構が検出されている（仙台市教委2007）。道路面と東側の石組側溝が確認されている。この側溝が江戸時代に造られたものか、明治以降のものかについてなどの詳細は、調査報告がなされた後に再度検討する必要があるが、道路の位置が大きく移動したことは考え難い。

東北大学による二の丸北方武家屋敷地区第10地点（ＢＫ10）の調査においても、「大堀通」に関わる遺構が検出されている（年報24）。第10地点の２区で、石垣が検出されている。大学の建物による破壊が大きいため、石組溝の片側の石積のみが残っていた可能性が高く、仙台市が調査した「大堀通」東側側溝の延長に位置が合致する。そのため、第10地点２区検出の石垣は、「大堀通」東側側溝の、西側石組であった可能性が高い。第10地点２区で発見された石垣についても、明治時代に存在した可能性が高いが、造られた時期が江戸時代まで遡るのか否かについては、明らかになっていない。

調査で明らかとなった道路側溝の時期については、今後も検討が必要な部分が残っている。それでも、「大堀通」

は、現在の東北大学北キャンパスの範囲内では、明治以降も踏襲されていた可能性が高い。現在も残っている段差の下側に、第二師団時代の「大堀通」が存在したと考えられる。道路幅は拡幅されている可能性もあるが、その位置は踏襲されている可能性が高い。このように考えて良いのであれば、仙台市の調査と東北大学の調査で検出された「大堀通」に関わる遺構を結んで、南北に延ばすことによって、図143のように「大堀通」の復元が可能である。

【筋違橋通】

千貫沢の北側を東西に走る「筋違橋通」は、「裏下馬通」と交差する部分より東側では、現状の道路と、大きく変化していないと思われる。この区域では、千貫沢が改変されることなく維持されてきたと考えられ、江戸時代以来現在まで、「筋違橋通」は千貫沢に沿っていたと考えられる。そのため、江戸時代の「筋違橋通」も、現状とほとんど変わっていないと考えて良いであろう。

一方、「裏下馬通」より西側は、千貫沢を広げる形で、二の丸北側の堀が造られており、「筋違橋通」は堀に沿って延びていく。二の丸北側の堀の北岸が、二の丸第８地点（ＮＭ８・年報５）と二の丸第12地点（ＮＭ12・年報11）において検出されており、その成果をもとに二の丸北側の堀の復元がなされている。これらの調査では、堀の外側の調査範囲が狭いこともあり、明確な江戸時代の道路の遺構は検出されていないが、堀の形に沿って道路の位置を復元することができる（図144）。なお堀の西端の位置は、調査によるデータが無く、絵図からのおおよその位置を推定したものである。

図144　二の丸北側の堀の復元
Fig.144　Reconstruction map of a moat on the north side of *Ninomaru*

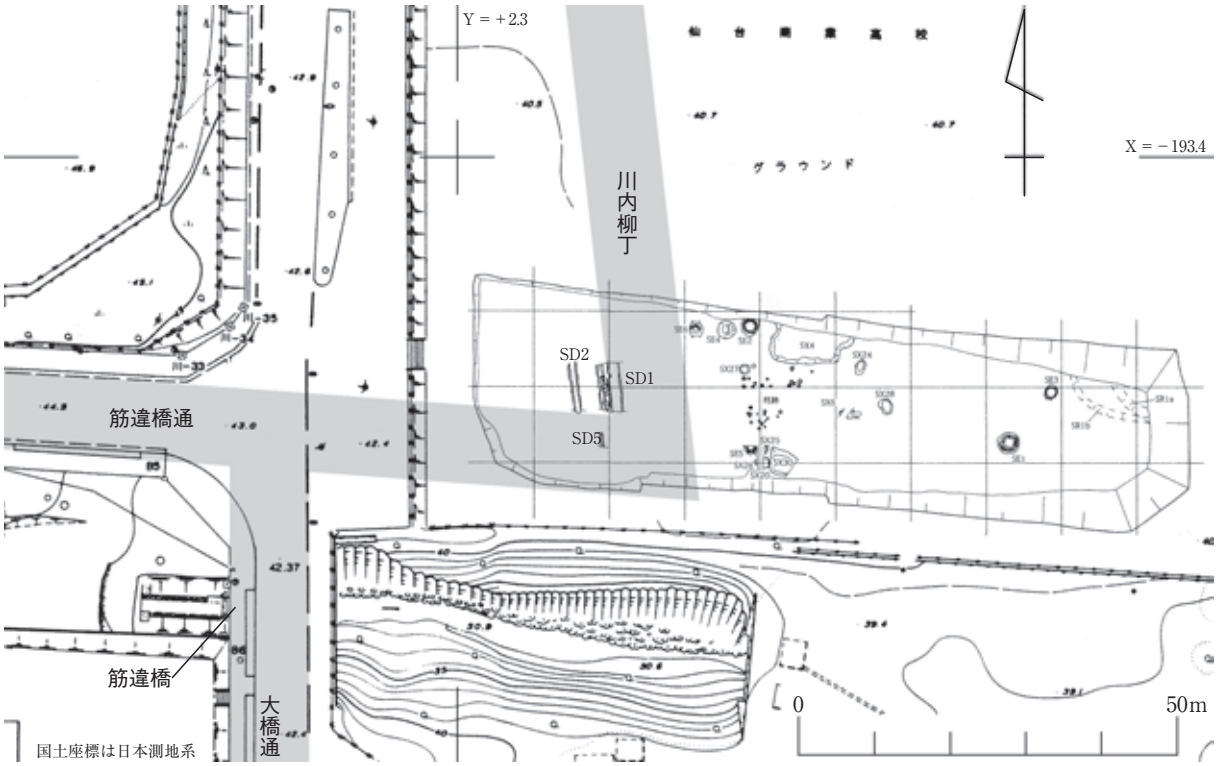
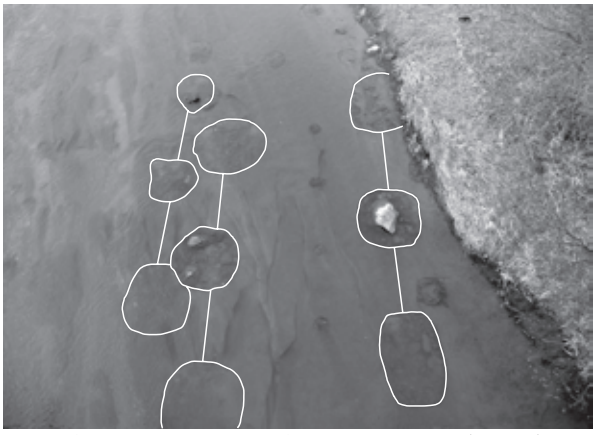


図145　川内Ａ遺跡周辺の道路の復元
Fig.145　Reconstruction map of the road around Kawauchi A site

1．現大橋北側の河床に並ぶ木橋時代の橋脚柱穴（東から）

2．西岸から見た河床の橋脚柱穴（西から）



3．東岸付近の橋脚柱穴に見える複数の組合せ（南から）

図146　大橋の橋脚柱穴（2010年12月撮影）
Fig.146　Post holes of *Ohashi* bridge

【筋違橋付近】

大手門から北側に延びる道路は、千貫沢を土橋で渡っており、この土橋は「筋違橋」と呼ばれている。「筋違橋」を通る千貫沢は、幅２ｍ程の水路となっており、その両側に石垣が見られる（石垣2004）。この石垣は、上部は明治時代以降の改変は受けているものの、下部は江戸時代の「筋違橋」に伴う石垣が残されている可能性がある。石垣の西端は、現在の道路の西端にほぼ一致している。東側の幅は不明であるが、これによって「筋違橋」の位置を確認することができる。

現在の道路は「筋違橋」の北側まで直線に延びるが、江戸時代には「筋違橋」の北側で鉤の手状に屈曲していた。北側に延びる道路が、「川内柳丁」から「川内澱橋通」へ至る道路である。「筋違橋」から東に少し進んだところで北へ折れていた部分が、地下鉄東西線建設に伴う川内Ａ遺跡の発掘調査において調査されており、関係する可能性のある遺構が検出されている（図145、竹内俊之ほか2007）。溝跡ＳＤ１が、「筋違通」と「川内柳丁」が交わる場所に近い、「川内柳丁」の西側側溝の可能性が指摘されている。保存状態も良くないため、道路側溝と見なして良いか、確実ではない。位置的に見ると、可能性はあると思われる。そのため、この溝跡ＳＤ１を、「川内柳丁」西側の側溝と考えておきたい。

【大橋付近】

大橋は、明治25年（1892年）に鉄製の近代的橋梁に架け替えられ、さらに昭和13年（1928年）に現在の鉄筋コンクリート製の橋梁に架け替えられている。これらの架け替えの際に、大橋と道路の位置は若干移動している。現在の橋から北側を見ると、江戸時代の木製橋の橋脚を据え付けた柱穴が、河床の岩盤に残されているのが観察できる（図146－１・２）。中には、柱根が残存しているかのように見える柱穴も存在する。明治初期に撮影された大橋の古写真を見ると、横方向に並ぶ３本の柱が一組となって、一つの橋脚を構成していることが判る。現在の残されている柱穴の中で規模の大きなものを観察すると、少なくとも３通りの組み合わせがあるように見受けられる（図146－３）。大橋は、大雨により、たびたび流失したり、あるいは破損するという被害を受けていたことが記録に残っている（齋藤鋭雄2004）。掛け替えなどの際に、橋の規模や構造が変化していた可能性も考えられるであろう。規模の大きな柱穴以外にも、小規模な柱穴が多数観察される。橋の上流側の小規模な柱穴については、流木よけの杭が立てられていたことが古写真で判るため、これに相当する可能性が考えられる。それ以外の小規模な柱穴については、各所に見られることから、工事の際の足場用の柱穴、あるいは補修用の柱穴などの可能性が考えられるであろう。これらの柱穴については、正確な位置の測量を行った上で、組み合わせや、変遷の様子を明らかにしていくことが今後必要である。詳細な検討は将来の課題であるが、現状でも木製時代の大橋のおおよその位置は判明する。これをもとに江戸時代の大橋の位置と、その両側に延びる道路の位置を復元することができる。

②復元根拠のない道路

上記した以外の復元根拠のない道路については、段丘崖などの地形を基準に、位置関係を勘案して推定復元するしかない。そのため特に記すことも多くないが、以下に地区ごとに概観しておく。

【二の丸北方地区】

二の丸北側の地区では、先述のように南北方向の道路については、復元可能なものがあるが、東西方向の道路については、「筋違橋通」以外には検討素材がほとんどない。「中ノ坂通」と「亀岡通」の位置が明らかになれば、川内北キャンパスにおいて調査を実施した際、かなりの確度で誰の屋敷地であったか推定できるようになるが、残念ながらこの２本の道路の位置が判らない。位置関係から見ると、川内北キャンパスの敷地内に、「中ノ坂通」が入ってくることは間違いないと思われる。二の丸北方武家屋敷地区の第５地点（年報７）と第10地点（年報24）、あるいは第９地点（年報21）は、「中ノ坂通」に近い位置にあると想定されるが、確実に道路に関係すると

判断できる遺構は検出されていない。そのため、絵図の記載をもとに、周囲の道路との関係から、位置を推定して復元することとなる。

【川内大工町周辺地区】

川内地区の北東よりの区域は、広瀬川が大きく蛇行して、東から南向きに方向を変える部分にあたる。広瀬川を渡って北側へ至る澱橋、同じく東側へ至る仲の瀬橋にはさまれた区域である。この地区の東半部については、現在まで江戸時代の道路が踏襲されている可能性が高い。一方、西半部については、道路は大きく改変されている。また、澱橋と仲の瀬橋とも、現在の橋は、江戸時代の橋の位置から移動していると考えられる。これらの改変されている部分については、道路を復元する根拠は残っていないため、絵図をもとに位置関係を案分して復元する他に方法はない。

【追廻地区】

三の丸の東側にあたる追廻地区は、明治時代以降に第二師団の練兵場や射的場が置かれたため、江戸時代の道路は全く残っていない。しかも追廻地区の南側では、河川の位置も大きく変化している。江戸時代には、広瀬川は仙台城本丸東側の崖のすぐ下まで蛇行して流れていた。現在は、流路は本丸東側の崖から離れ、かつての流路の部分にはテニスコートなどが造られている。広瀬川の西岸には護岸石垣が造られ､大橋から南へ延びている(石垣5001・5002・5003)。この石垣は、広瀬川の蛇行にそって、途中から西へ向きを変えて続いていたと想定されるが、明治以降の改変で現状では確認できなくなっている。追廻地区では、2006年度から 2008年度にかけて、３次にわたり遺構確認調査が仙台市教育委員会によって実施されているが、道路の位置を明らかにできるような資料は得られていない（渡部・黒田・大口2009)。このように追廻地区については、道路を復元する際の検討素材はほとんど得られていない状況にあり、絵図の記載をもとに、三の丸の堀や広瀬川護岸石垣などとの位置関係を案分して復元した。

【大橋東側】

広瀬川の東側の、現在の西公園の周辺は、先述のように明治以降の改変が大きい区域である。この地区では、桜ケ岡公園遺跡として、仙台市教育委員会により発掘調査が進められている。これまでに報告されたものでは、道路に関わる可能性のある遺構も存在するが、確実な道路関係遺構は検出されていない（廣瀬・中山2007、伊藤雅和ほか 2008、鈴木・関根2010)。そのため、周辺の道路や段丘崖の位置などの地形を基準に、位置関係を案分して復元した。

（６）江戸時代の道路の復元

以上の検討を踏まえて、現在の地図に江戸時代の道路を復元したものが、図147 である。根拠が乏しい部分も多く残っており、発掘調査を初めとする新たなデータの蓄積とともに、常に見なおしていく必要があることを明記しておきたい。

この道路の復元について、川内北地区についてあらためて見るならば、南北方向の道路は比較的確実な復元ができるが、東西方向の道路はほとんどが推定に留まっている。そのため、調査区がどの屋敷区画に相当するかを検討する際には、東西の位置関係については比較的容易に推定可能であるが、南北の位置関係ははっきりしない場合が多い。東西の位置関係については、「裏下馬通」「大堀通」の位置復元が可能であることに加えて、「裏下馬通」と「通」の間に存在する段丘崖についても、江戸時代の絵図で表現されているものがあることから、位置を割り出しやすい。一方、「筋違橋通」以外の東西方向の道路が推定に頼らざるを得ないため、南北の位置関係については、はっきりしない場合が多い。

今回の第11地点の調査区をはじめ、東北大学調査の第７地点、仙台市教育委員会が実施している地下鉄東西線に関わる調査地点は、いずれも現在の東北大学川内北キャンパスの北側を通る東西道路に近い位置での調査であ

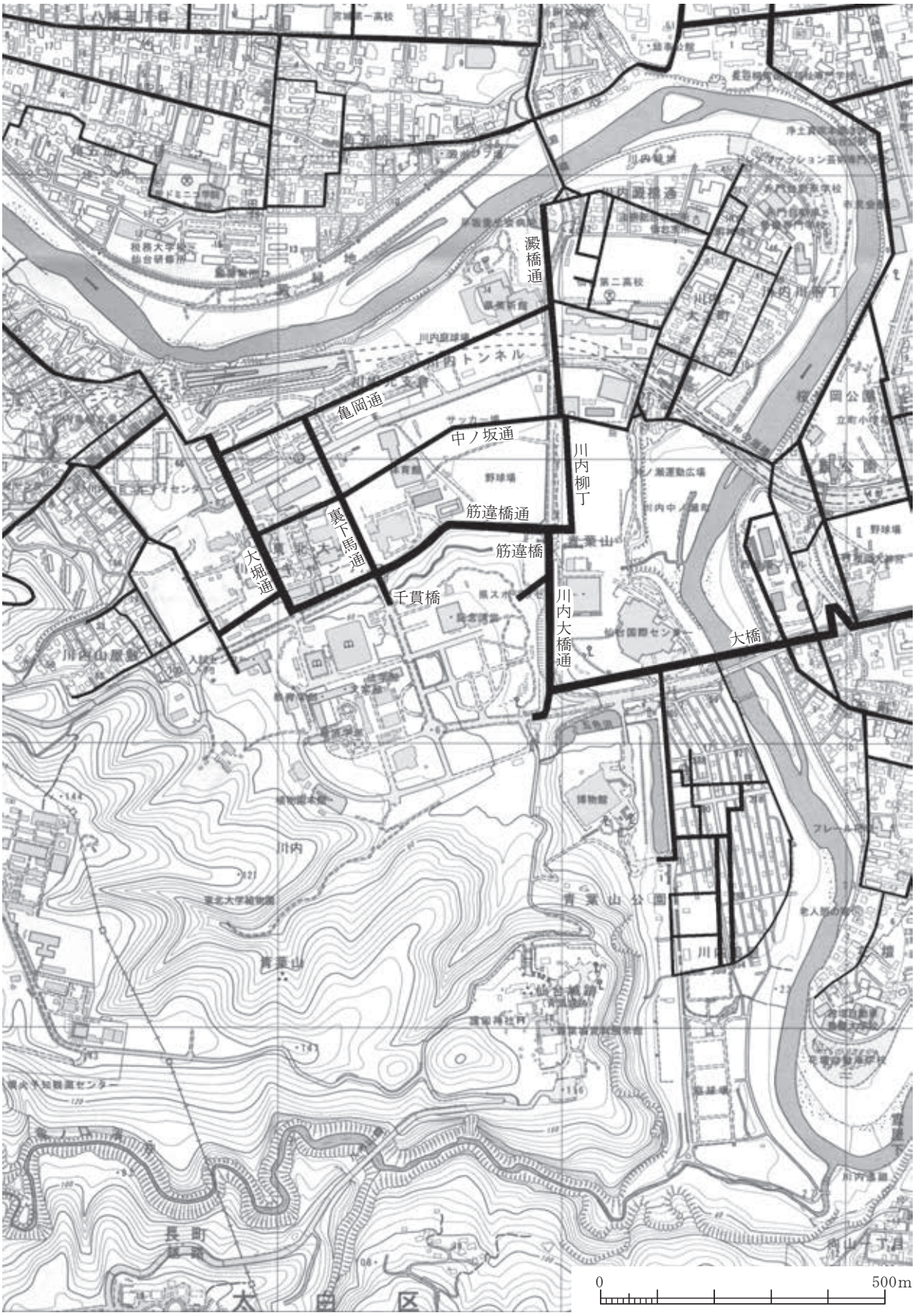


図147　川内地区における江戸時代の道路の復元
Fig.147　Reconstruction map of the road of Edo period at Kawauchi area

る。これらの大規模な調査区は、江戸時代の東西道路である「中ノ坂通」と「亀岡通」の間に入る位置に相当すると思われる。そのため、これらの調査において、東西方向の道路に関わる直接的なデータを得ることは難しいと考えられる。

第Ⅲ章６.においても指摘したが、屋敷の正面とその付近以外には、屋敷の境界を示す施設は造られていなかった可能性もある。道路の裏側の屋敷境は、明確な遺構が見られない場合も想定される。その場合、遺構の配置のあり方などから総合的に検討して、屋敷の区画を復元していくことが必要となる。このような屋敷区画の復元を含めて、道路の位置をどのように考えるべきであるかについて、調査された区域の遺構配置などをもとに、さらに検討を加えていくことが必要であろう。

註）明治13年や明治15年の地図には、道路の脇に「大堀通」「川内大橋通一丁目」などの記載がなされている。これらの記載が、道路の名称なのか、道路に面した地区の地名であるのか、あるいはその両方で用いられたのか、はっきりしない。ここでは道路を示すために、便宜的に利用するが、必ずしも道路自体の名称ではない可能性もあることに留意されたい。

〈引用・参考文献〉

《仙台市教委刊行仙台城関係報告書・東北大学刊行報告書以外（50音順）》
愛知県陶磁資料館　1984 『近世城館出土の陶磁』
青山礼志　1982 『新訂貨幣手帳』ボナンザ
赤松和佳　2006 「畿内出土の17～18世紀の京焼について」『京焼の成立と展開－押小路、粟田口、御室－』関西陶磁史研究会研究集会資料　24～48頁
浅川滋男・箱崎和久編　2001 『埋もれた中近世の住まい』同成社
阿刀田令造　1936 『仙台城下絵図の研究』斎藤報恩会博物館図書部研究報告4
石川俊秀　1989 『高崎遺跡調査報告書』多賀城市文化財調査報告書19
石村真一　1997 『桶・樽Ⅰ』ものと人間の文化史82－Ⅰ　法政大学出版局
石村真一　1997 『桶・樽Ⅱ』ものと人間の文化史82－Ⅱ　法政大学出版局
石村真一　1997 『桶・樽Ⅲ』ものと人間の文化史82－Ⅲ　法政大学出版局
市田京子　2000 「江戸時代の下駄」『江戸文化の考古学』吉川弘文館　26～54頁
岩井宏實　1994 『曲物』ものと人間の文化史75　法政大学出版局
江戸遺跡研究会編　1991 『よみがえる江戸』新人物往来社
江戸遺跡研究会編　1992 『江戸の食文化』吉川弘文館
江戸遺跡研究会編　2000 『江戸文化の考古学』吉川弘文館
江戸遺跡研究会編　2001 『図説江戸考古学研究事典』柏書房
江戸遺跡研究会編　2004 『江戸の祈り　信仰と願望』吉川弘文館
江戸遺跡研究会編　2009 『災害と江戸時代』吉川弘文館
江戸陶磁器土器研究グループ　1992 『江戸出土陶磁器・土器の諸問題』シンポジウム資料
江戸陶磁器土器研究グループ　1996 『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ』シンポジウム資料
ＮＨＫプロモーション　2007 『乾山の芸術と光琳』
大月義徳・小岩直人・平野信一・松本秀明　1994 「Ⅱ自然の現在のすがた　2地形と地質」『仙台市史特別編1　自然』　46～93頁
大橋康二・西田宏子監修　1988 『古伊万里』別冊太陽
大橋康二　1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館　152～157頁
大橋康二・尾崎葉子　1988 『有田町史　古窯編』有田町教育委員会
大橋康二　1993 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55　ニューサイエンス社
大橋康二　1994 『古伊万里の文様　初期肥前陶磁器を中心に』
大平　茂・松本　睦　1992 『三田市下相野窯址－近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書ⅩⅦ』兵庫県文化財調査報告書第107冊
小川啓司　1974 『そば猪口絵柄事典』
関西陶磁史研究会　2006 『京焼の成立と展開－押小路、粟田口、御室－』
喜多川守貞著、朝倉治彦・柏川修一校訂編集　1992 『守貞謾稿』第一～五巻　東京堂出版
九州近世陶磁学会　2000 『九州陶磁の編年』
九州近世陶磁学会　2002 『国内出土の肥前陶磁　西日本の流通をさぐる』第一分冊
九州近世陶磁学会　2002 『国内出土の肥前陶磁　西日本の流通をさぐる』第二分冊
九州近世陶磁学会　2004 『受容層の違いによる九州陶磁の様相』
小泉袈裟勝　1977 『ものさし』ものと人間の文化史22　法政大学出版局
古建築研究会編著　1992 『宮城県の古建築－江戸・明治期の建造物－』宮城県文化財調査報告書第151集
小林　克　2000 「あかりの道具研究の方向」『江戸文化の考古学』吉川弘文館　221～242頁
小林謙一　1991 「江戸における近世瓦質・土師質焜炉について」『江戸在地系土器の研究Ⅰ』1～46頁
小林清治編　1982 『仙台城と仙台領の城・要害』日本城郭史研究叢書第二巻　名著出版
小林博範・斎藤進・小島正裕ほか2000 『汐留遺跡Ⅱ－旧汐留貨物駅跡地内の調査』　東京都埋蔵文化財センター調査報告第79集
小林博範・西澤明・小林裕ほか　2003 『汐留遺跡Ⅲ－旧汐留貨物駅跡地内の調査』

東京都埋蔵文化財センター調査報告第125集
財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター　2006 『江戸のやきもの－生産と流通－』
財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター　1999 『列島に拡がる大窯製品　東日本の様相』
齋藤鋭雄　2004 「第二章第三節　城下の災害」『仙台市史通史編５近世３』仙台市　122 ～ 137頁
斉藤良輔　1968 『日本人形玩具辞典』
佐賀県立九州陶磁文化館　1984 『国内出土の肥前陶磁』
佐賀県立九州陶磁文化館　1990 『柴田コレクション展Ⅰ　－初期伊万里から柿右衛門へ－』
佐賀県立九州陶磁文化館　1991 『柴田コレクション展Ⅱ』
佐賀県立九州陶磁文化館　1993 『柴田コレクション展Ⅲ』
佐賀県立九州陶磁文化館　1993 『世界の染付展』
佐賀県立九州陶磁文化館　1995 『柴田コレクションⅣ　－古伊万里様式の成立と展開－』
佐賀県立九州陶磁文化館　1996 『名品図録』
佐賀県立九州陶磁文化館　1997 『柴田コレクションⅤ　－延宝様式の成立と展開－』
佐賀県立九州陶磁文化館　1998 『柴田コレクションⅥ　－江戸の技術と装飾技法－』
佐賀県立九州陶磁文化館　1999 『柿右衛門－その様式の全容－』
坂田啓編　1995 『私本仙台藩士事典』創栄出版
佐久間光平ほか　1993 『上野館跡－近世茂庭氏居館跡発掘調査報告書－』宮城県文化財調査報告書第156集
佐久間光平ほか　1995 『佐沼城跡』迫町文化財調査報告書第２集
佐藤広史ほか　1990 『切込窯跡』宮崎町文化財調査報告書第３集
佐藤　巧　1979 『近世武士住宅』叢文社
潮田鉄雄　1973 『はきもの』ものと人間の文化史８　法政大学出版局
白神典之　1990 「堺擂鉢と明石擂鉢」『江戸の陶磁器』江戸遺跡研究会第３回大会発表要旨　47 ～ 51頁
白神典之・増田達彦　1999 「堺環濠都市出土の調理具・貯蔵具」『関西近世考古学研究』Ⅶ　79 ～ 100頁
白川昌三　1987 『新寛永通宝カタログ』新寛永クラブ
島崎とみ子　2000 「江戸時代の料理と器具」『江戸文化の考古学』吉川弘文館　86 ～ 98頁
新宿区内藤町遺跡調査会　1992 『内藤町遺跡』
新宿区歴史博物館　1990 『江戸のくらし－近世考古学の世界－』
鈴木省三　1937 『仙台風俗志』（1977年歴史図書社より再刊）
鈴田由紀夫　1995 「17世紀末から19世紀中葉の銘款と見込み文様」『柴田コレクションⅣ－古伊万里様式の成立と展開』　272 ～ 279頁
関根達人　1998 「相馬藩における近世窯業生産の展開」『東北大学埋蔵文化財調査年報10』51 ～ 90頁
関根達人　1999 「相馬焼の生産と流通」『江戸の物流－陶磁器・漆器・瓦から－』江戸遺跡研究会第12会大会発表要旨　65 ～ 90頁
関根達人　2006 「流通①北海道・東北」『江戸時代のやきもの－生産と流通－』記念講演会・シンポジウム資料集　瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター　199 ～ 228頁
芹沢長介編　1978 『切込』東北大学文学部考古学研究会
瀬戸市史編纂委員会　1993 『瀬戸市史　陶磁史篇四』
瀬戸市史編纂委員会　1998 『瀬戸市史　陶磁史篇六』
瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター　2006 『江戸時代のやきもの－生産と流通－』記念講演会・シンポジウム資料集
仙台市教育委員会　1967 『仙台城』
仙台市教育委員会　1994 『仙台市青葉区文化財分布地図』
仙台市教育委員会　1995 『仙台市太白区文化財分布地図』
仙台市教育委員会　2007 「仙台市仙台城跡」『平成19年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』宮城県考古学会　43 ～ 48頁
仙台市教育局生涯学習部文化財課　2004 『仙台城跡整備基本構想』
仙台市教育局生涯学習部文化財課　2005 『仙台城跡整備基本計画』
仙台郷土研究会　1991 「仙台藩歴史用語辞典」『仙臺郷土研究』復刊第16巻第１号（通巻242号）
仙台市史図録編纂委員会篇　1980 『増補改訂版　目で見る仙台の歴史』宝文堂
仙台市史編さん委員会編　1994 『仙台市史特別編１　自然』仙台市

仙台市史編さん委員会編　1995『仙台市史特別編２　考古資料』仙台市
仙台市史編さん委員会編　1997『仙台市史資料編３　近世２城下町』仙台市
仙台市史編さん委員会編　1997『仙台市史特別編４　市民生活』仙台市
仙台市史編さん委員会編　2001『仙台市史通史編３　近世１』仙台市
仙台市史編さん委員会編　2003『仙台市史通史編４　近世２』仙台市
仙台市史編さん委員会編　2004『仙台市史通史編５　近世３』仙台市
仙台市史編さん委員会編　2006『仙台市史特別編７　城館』仙台市
仙台市史編さん委員会編　2008『仙台市史通史編６　近代１』仙台市
仙台市博物館　1996『仙台市博物館収蔵資料目録Ⅷ－三原良吉コレクション－』
仙台市博物館　1996『みちのくの人形たち－三春・堤・花巻・相良－』
平重　道編　1973『伊達治家記録二』宝文堂
高倉淳ほか編　1994『絵図・地図で見る仙台』今野印刷
高橋富雄ほか編著　1979『角川日本地名大辞典４宮城県』角川書店
高橋幹夫　1994『江戸萬物辞典　絵で知る江戸時代』芙蓉書房出版
高橋幹夫　1994『江戸の暮らし図鑑　道具で見る江戸時代』芙蓉書房出版
高橋良一郎　1977『相馬のやきもの』ふくしま文庫40　福島中央テレビ
田口昭二　1983『美濃焼』考古学ライブラリー17　ニューサイエンス社
谷田有史　2000「江戸時代のたばこ」『江戸文化の考古学』吉川弘文館　171～191頁
たばこと塩の博物館編　1983『きせる』
千葉正樹　2003「第三章仙台城下の景観と構造　第一節城下町の景観」『仙台市史通史編４　近世２』160～187頁
坪井利弘　1976『日本の瓦屋根』理工学社
坪井利弘　1977『図鑑瓦屋根』理工学社
坪井利弘　1979『桟瓦屋根のデザイン』理工学社
坪井利弘　1981『古建築の瓦屋根』理工学社
東北大学埋蔵文化財調査室　2008「2007年度宮城県内主要発掘紹介　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点」『宮城考古学』第10号　宮城県考古学会　210頁
東北陶磁文化館　1987『東北の近世陶磁』
東北歴史資料館　1990『宮城県の諸職』東北歴史資料館資料集27
東北歴史資料館　1993『宮城県の瓦職』東北歴史資料館資料集34
東北歴史資料館　1995『仙台・堤のやきもの』
東北歴史資料館　1995『宮城県の桶職』東北歴史資料館資料集38
土岐市美濃陶磁歴史館　1993『桃山の華　大阪出土の桃山陶磁』
土岐市美濃陶磁歴史館　1994『大阪出土の桃山陶磁Ⅱ』
土岐市美濃陶磁歴史館　1996『特別展堺衆のやきもの　堺環濠都市遺跡出土の桃山陶磁』
土岐市美濃陶磁歴史館　2002『第14回織部の日特別展　美濃桃山陶』
土岐市美濃陶磁歴史館　2003『第15回織部の日特別展　織部の流通圏を探る　東日本』
土岐市美濃陶磁歴史館　2004『第16回織部の日特別展　織部の流通圏を探る　西日本』
土岐市美濃陶磁歴史館　2005『第17回織部の日特別展　織部様式の成立と展開』
土岐市美濃陶磁歴史館　2006『第18回織部の日特別展　天下人とやきもの』
土岐市美濃陶磁歴史館　2007『第19回織部の日特別展　ポスト織部の時代　元和寛永の茶陶』
土岐市美濃陶磁歴史館　2008『第20回織部の日特別展　桃山時代の茶陶生産』
土岐市美濃陶磁歴史館　2009『第21回織部の日特別展　遺跡にみる茶の湯とやきもの』
都立一橋高校内遺跡調査団　1985『江戸　都立一橋高校地点発掘調査報告』
中井さやか　1992「近世の漆椀について－その器種と組み合わせを考える－」『江戸の食文化』吉川弘文館　180～204頁
永井久美男編　1997『近世出土銭Ⅰ』兵庫埋蔵銭調査会
永井久美男編　1998『近世出土銭Ⅱ』兵庫埋蔵銭調査会
永田久光　1956『日本の郷土玩具』東京創元社
西　和夫　1990『図解古建築入門』彰国社

西沢笛畝　1957 『日本の人形と玩具』岩崎書店
西沢笛畝　1965 『日本郷土玩具事典』岩崎美術社
日本馬具大鑑編集委員会　1991 『日本馬具大鑑　第四巻近世』日本中央競馬会
日本民具学会　1989 『信仰と民具』雄山閣
日本民具学会　1997 『日本民具辞典』ぎょうせい
丹羽基二　1971 『家紋大図鑑』秋田書店
根津美術館　1998 『華南のやきもの　黄瀬戸・織部・青手古九谷の源流を求めて』
根津美術館　2002 『知られざる唐津　二彩・単色釉・三島手』
根津美術館　2004 『仁清の茶碗』
根津美術館　2005 『特別企画展大名茶陶高取焼展図録』
野馬追の里原町市立博物館　1999 『相馬のやきもの－収蔵資料を中心として－』
乗岡　実　1999 「近世備前焼の擂鉢－素描メモ－」『関西近世考古学研究』Ⅶ　119 ～ 130頁
畑中英二　2003 『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版
畑中英二　2007 『続信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版
原町市教育委員会　1995 『相馬地方の古陶』
平泉研究会　1996 『地鎮・遺構の廃棄儀礼検討会資料』
福島県立博物館　1990 『企画展東北の陶磁史』
福田敏一・石崎俊哉ほか　1997 『汐留遺跡Ⅰ－旧汐留貨物駅跡地内の調査』東京都埋蔵文化財センター調査報告書第37集
福田敏一・石崎俊哉ほか　2006 『汐留遺跡Ⅳ－旧汐留貨物駅跡地内の調査』東京都埋蔵文化財センター調査報告第189集
藤沢　敦　2008「宮城県の考古学－この10年の歩みと展望－Ⅶ．近世」『宮城考古学』第10号　宮城県考古学会　89 ～ 102頁
藤沢良祐　1998 『瀬戸市史　陶磁史編六』瀬戸市史編纂委員会
ポーラ文化研究所　1989 『日本の化粧－道具と心模様』ポーラ文化研究所コレクション２
堀江　格　1998 『岸窯跡－近世窯跡の調査－』福島市埋蔵文化財報告書111
本田勇編著　2003 『史料仙台伊達氏家臣団事典』丸善
松本権六・羽野禎三　1939 『時代椀大観』文化出版局
三浦正幸監修　2002 『最新日本名城古写真集成』別冊歴史読本第27巻第14号　新人物往来社
宮内　悊　1991 『箱』ものと人間の文化史67　法政大学出版局
宮城県教育委員会　1998 『宮城県遺跡地図』宮城県文化財調査報告書第176集
宮城県図書館　1993 『宮城県図書館所蔵絵図・地図解説目録』
宮澤智士　1983 「近世民家の地域的特色」『講座・日本技術の社会史第七巻建築』日本評論社　151 ～ 182頁
村上直・木村礎・藤野保　1988 『藩史大事典第１巻北海道・東北編』雄山閣
室井　綽　1973 『竹』ものと人間の文化史10　法政大学出版局
両角まり　1996 「瓦質土器類の分類について」『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ』85 ～ 98頁
文部科学省構内遺跡調査会編　2001 『文部科学省構内遺跡』
山崎信二　2008 『近世瓦の研究』同成社
山本忠尚　2001 『和英対照日本考古学用語辞典』東京美術
吉岡一男ほか編　2005 『絵図・地図で見る仙台　第二輯』今野印刷
渡辺浩一　2003 「第三章仙台城下の景観と構造　第二節武家屋敷と武士」『仙台市史通史編４　近世２』　188 ～ 207頁　仙台市
渡辺信夫ほか編著　1994 『宮城県姓氏家系大辞典』角川書店

《仙台市教育委員会刊行仙台城跡および関連遺跡調査報告書（報告書番号順）》

佐藤洋ほか　1985『仙台城三の丸跡』仙台市文化財調査報告書第76集

金森安孝・根本光一　2002『仙台城跡１－平成13年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第259集

金森安孝・伊藤　隆　2003『仙台城跡２－平成14年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第264集

渡部　紀・中山　純・豊村幸宏・伊藤　隆　2004『仙台城跡３－平成15年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第270集

渡部　紀・中山　純・伊藤　隆　2004『仙台城跡４－平成15年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第271集

金森安孝　2004『仙台城跡第１次調査－石垣修復工事に伴う発掘調査報告書－第４分冊石垣図版編』仙台市文化財調査報告書第275集

金森安孝・渡部　紀　2005『仙台城跡第１次調査－石垣修復工事に伴う発掘調査報告書－第３分冊出土遺物編』仙台市文化財調査報告書第282集

鈴木　隆・渡部　紀　2005『仙台城跡５－平成16年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第285集

斎野裕彦・北原正範・澁谷正信　2005『仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査（１）概要報告書』仙台市文化財調査報告書第289集

佐藤淳ほか　2005『若林城跡－第４次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第292集

鈴木　隆　2006『仙台城跡６－平成17年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第297集

渡部　紀　2006『仙台城跡第１次調査－石垣修復工事に伴う発掘調査報告書－第２分冊遺構編』仙台市文化財調査報告書第298集

金森安孝・渡部　紀・鈴木　隆　2006『仙台城跡地震災害石垣復旧事業及び史跡整備事業報告書　中門跡・清水門跡』仙台市文化財調査報告書第299集

橋本顕嗣・古川久雄・村尾政人　2006『仙台城跡登城路第１次調査－平成17年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第300集

佐藤甲二・竹内俊之ほか　2006『仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査(２)概要報告書』仙台市文化財調査報告書第302集

佐藤　淳　2010『若林城跡－第６次・第７次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第306集

鹿野仁子・鈴木隆・渡部紀　2007『仙台城跡７－平成18年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第309集

竹内俊之ほか　2007『川内Ａ遺跡－仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ－』仙台市文化財調査報告書第312集

佐藤甲二・竹内俊之ほか　2007『仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査(３)概要報告書』仙台市文化財調査報告書第316集

廣瀬真理子・中山豊　2007『桜ケ岡公園遺跡－第２次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第318集

佐藤　淳・佐藤好司・後藤太一・高梨雅幸　20『若林城跡－第５次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第323集

渡部　紀・在川宏志・鹿野仁子　2008『仙台城跡８－平成19年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第330集

土橋尚起・関　美男・福井流星　2007『仙台城跡－仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ－』仙台市文化財調査報告書第342集

佐藤　洋・在川宏志　2009『仙台城跡９－平成20年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第348集

伊藤雅和ほか　2008『桜ケ岡公園遺跡－第３次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第335集

渡部　紀　2009『仙台城跡第１次調査－石垣修復工事に伴う発掘調査報告書－第１分冊本文編』仙台市文化財調査報告書第349集

渡部　紀・黒田恵之・大口和樹　2009『仙台城跡－追廻地区遺構確認調査－』仙台市文化財調査報告書第350集

佐藤　洋・福井流星　2009『仙台城跡登城路第２次調査－平成21年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第354集

馬場由行・福原千恵・伊勢　契　2010『仙台城跡－北方武家屋敷第２次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第356集

佐藤　淳・瀬戸かな子・吉村　晶・北野桂子　2010『若林城跡－第８次・第９次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第377集

鈴木　隆・関根信夫　2010『桜ケ岡公園遺跡－第４次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第378集

〈東北大学埋蔵文化財調査室刊行報告書一覧〉

《東北大学埋蔵文化財調査年報》

書　名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学埋蔵文化財調査年報１	1985	昭和 58 年度（1983 年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第１地点（ＮＭ１）	
		仙台城跡二の丸第２地点（ＮＭ２）	
		仙台城跡二の丸第３地点（ＮＭ３）	
東北大学埋蔵文化財調査年報２	1986	昭和 59 年度（1984 年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		青葉山Ｂ遺跡第１次調査（ＡＯＢ１）	
		青葉山Ｂ遺跡第２次調査（ＡＯＢ２・旧称ＡＯＦ）	
		青葉山Ｅ遺跡第１次調査（ＡＯＥ１）	
東北大学埋蔵文化財調査年報３	1990	昭和 60 年度（1985 年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第６地点（ＮＭ６）	
		芦ノ口遺跡第１次調査（ＴＭ１）	
		芦ノ口遺跡 1976 年考古学研究室による調査（ＴＫ）	
		研究編－東北地方における近世窯業と陶磁器をめぐる問題ほか	
東北大学埋蔵文化財調査年報４・５	1992	昭和 61 年度（1986 年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		昭和 62 年度（1987 年度）事業概要	
		仙台城跡二の丸第４地点（ＮＭ４）	
		仙台城跡二の丸第７地点（ＮＭ７）	
		仙台城跡二の丸第８地点（ＮＭ８）	
東北大学埋蔵文化財調査年報６	1993	昭和 63 年度（1988 年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第５地点（ＮＭ５）	
東北大学埋蔵文化財調査年報７	1994	平成１年度（1989 年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第５地点（ＮＭ５）付帯施設部分	
		仙台城跡二の丸第５地点（ＮＭ５）調査成果の検討	
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第５地点（ＢＫ５）	
		川渡農場町西遺跡第１地点（ＫＷ１）	
東北大学埋蔵文化財調査年報８	1997	平成２年度（1990 年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第９地点（ＮＭ９）	
東北大学埋蔵文化財調査年報９	1998	平成３年度（1991 年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第 10 地点（ＮＭ 10）	
		芦ノ口遺跡第２次・３次調査（ＴＭ２・ＴＭ３）	
		考察編－仙台城二の丸跡の考古学的調査－	
東北大学埋蔵文化財調査年報 10	1998	平成４年度（1992 年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第 13 地点（ＮＭ 13）	
		青葉山地区分布調査	
		研究編－相馬藩における近世窯業生産の展開	
東北大学埋蔵文化財調査年報 11	1999	平成５年度（1993 年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第 12 地点（ＮＭ 12）	
		仙台城跡二の丸第 14 地点（ＮＭ 14）	
		青葉山Ｅ遺跡第２次調査（ＡＯＥ２）	
東北大学埋蔵文化財調査年報 12	1999	平成６年度（1994 年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第 15 地点（ＮＭ 15）	
		青葉山Ｅ遺跡第３次調査（ＡＯＥ３）	
東北大学埋蔵文化財調査年報 13	2000	平成７年度（1995 年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第 11 地点（ＮＭ 11）	
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第４地点（ＢＫ４）	
		青葉山Ｅ遺跡第４次調査（ＡＯＥ４）	
		研究編－東北大学構内（仙台城二の丸跡）遺跡出土漆器資料の材質と製作技法	
東北大学埋蔵文化財調査年報 14	2001	平成８年度（1996 年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第６地点（ＢＫ６）	
		青葉山Ｅ遺跡第５次調査（ＡＯＥ５）	
		芦ノ口遺跡第４次調査（ＴＭ４）	
東北大学埋蔵文化財調査年報 15	2001	平成９年度（1997 年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第 16 地点（ＮＭ 16）	
		青葉山Ｅ遺跡第６次調査（ＡＯＥ６）	

書　名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学埋蔵文化財調査年報 16	2001	平成 10 年度（1998 年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		研究編－糖アルコール含浸法における予備実験	
東北大学埋蔵文化財調査年報 17	2002	平成 11 年度（1999 年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
東北大学埋蔵文化財調査年報 18	2005	平成 12 年度（2000 年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第 17 地点（ＮＭ 17）	
東北大学埋蔵文化財調査年報 19 第１分冊	2006	平成 13 年度（2001 年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		芦ノ口遺跡第５次調査（ＴＭ５）	
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７） 遺構	
東北大学埋蔵文化財調査年報 19 第２分冊	2009	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７） 陶磁器・土器・土製品・瓦	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報 19 第３分冊	2007	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７） 木簡・墨書ある木製品	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報 19 第４分冊	2008	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７） その他の遺物	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報 19 第５分冊	2010	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７） 分析・考察	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報 20	2006	平成 14 年度（2002 年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第８地点（ＢＫ８）	
		青葉山Ｅ遺跡第７次調査（ＡＯＥ７）	
		青葉山Ｅ遺跡第８次調査（ＡＯＥ８）	
東北大学埋蔵文化財調査年報 21	2007	平成 15 年度（2003 年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第９地点（ＢＫ９）	
		芦ノ口遺跡第６次調査（ＴＭ６）	
東北大学埋蔵文化財調査年報 22	2008	平成 16 年度（2004 年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報 23	2009	平成 17 年度（2005 年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報 24	2010	平成 18 年度（2006 年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第 10 地点（ＢＫ 10）	
		青葉山新キャンパス地区試掘調査	

《東北大学埋蔵文化財調査室調査報告》

シリーズ名	書名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学 埋蔵文化財調査室 調査報告１	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地 区第 11 地点・第 12 地点 －仙台市高速鉄道東西線機能補償関係 調査報告書－	2011	東西線補償関係埋蔵文化財調査の概要	東北大学 埋蔵文化財調査室
			仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第 11 地点（ＢＫ 11）	
			仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第 12 地点（ＢＫ 12）	
			川内地区の絵図記載人名の検討	
			川内地区における江戸時代の道路の復元	

《東北大学埋蔵文化財調査室年次報告》

書　名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告 2007	2010	平成 19 年度（2007 年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告 2008	2010	平成 20 年度（2008 年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室

Samurai Residences around Sendai Castle.
Excavation reports of Loc.11 and Loc.12 of samurai residences located at the side of north outer moat of Ninomaru i.e. Secondary Citadel of Sendai Castle.
Research reports in archaeology on the campus of TOHOKU UNIVERSITY No.1
JUNE 2011

The Archaeological Research Office
on the Campus, Tohoku University
1-1, Katahiracho, 2chome, Aoba ward,
Sendai 980-8577 JAPAN

Summary

On the Campus of Tohoku University, a lot of sites are known. Among them, Sendai Castle is the most famous and largest one. Almost all of the south part of Kawauchi campus is located on its secondary citadel area. The north part of Kawauchi campus is located on the sites of samurai residences.

In Japan, if existing circumstances need to be changed in the known site area, excavation research on the buried cultural properties must be carried out. The Office mainly carries out salvage excavations of archaeological sites on campus.

This report is the research result of salvage excavations of BK11 and BK12 on Kawauchi campus, which was conducted by the Archaeological Research Office on the Campus of Tohoku University in 2006-2007.

BK11 site (Loc.11 of samurai residences located at the side of north outer moat of Ninomaru, i.e. Secondary Citadel of Sendai Castle)

The investigation of BK11 became a large-scale survey in the third place by Tohoku University following BK4 and BK7 as a survey of the samurai residences around the Sendai Castle. We obtained the new data by discovery archaeological features and artifacts related to the samurai residences in the Edo period.

The only feature prior to the Edo period is a swampy feature. This is thought to be a natural channel of nature.

The features from the Edo period to the beginning of Meiji period can be classified into phase I, phase II and phase III. Layer 2 with the possibility of the cultivation soil at the beginning of Meiji period exists in the upper part of the features until phase III. Phase II was subdivided into phase IIa to phase IIe. The time range of each period estimated from the artifacts etc. is as follows.

Phase I is from the beginning of the 17th century to the early stage of the 17th century.

Phase IIa is the 17th century after phase I.

Phase IIb is the 18th century.

Phase IIc is from the last stage of 18th century to the early stage of 19th century .

Phase IId is from the early stage of 19th century to the middle stage of 19th century.

Phase IIe is from the middle stage of 19th century to the latter stage of 19th century (the beginning of the Meiji period).

Phase III is the beginning of the Meiji period.

Among the main features, there were 58 buildings were with pillars embedded directly in the ground, 4 lines of pillar-holes, 16 ditches, 8 wells, and additionally, 30 huge pits of uncertain character. The character of these features in the samurai residence has not yet clarified sufficiently.

In BK11, a variety of artifacts from the beginning of the Edo period to the beginning of the Meiji period have been excavated. There is a limited amount of associated batch artifacts. However, the entire quantitative distribution ratio etc. show features of the samurai residence area.

Because relatively abundant glazed ceramics have been excavated, it is understood that the maintenance of samurai residences in this area had begun since the Edo period.

In the adjoining area on the north side and the northeast side of BK11, the Sendai city board of education conducted excavations for the subway Tozai Line construction in 2008-2009.

It is thought that the features detected by the investigation are the same as the features of BK11. When the investigation results by the Sendai city board of education are made public, we shall examine the character of these features again.

Moreover, excavation of the same period has been carried out along the north side of the north part of Kawauchi campus. In the investigation area, an adjoining area is included in BK7 that Tohoku University excavated before. It is necessary to reexamine past investigation results with such new data.

The excavation for the subway Tozai Line construction etc. is executed not only in the Kawauchi area but also in the area at the Nishi Park on the east side of the Hirose River. Future tasks are to clarify the realities of samurai residences in the Kawauchi area by comparative study with these cases.

BK12 site (Loc.12 of samurai residences located at the side of north outer moat of Ninomaru, i.e. Secondary Citadel of Sendai Castle)

The causes for this investigation are re-routings of the piping facilities that becomes an obstacle by the subway Tozai Line construction. The investigation area was about 1m in width, and of elongated shape along the route. The features found are 12 pits.

写　真　図　版

図版 1～99　：仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点（ＢＫ11）
図版100～101：仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第12地点（ＢＫ12）

２００７年４月撮影（左側が北）

図版１　武家屋敷地区第11地点全景（１）
Pl.1　Views of BK11 (1)

２００７年８月撮影（左側が北）

図版２　武家屋敷地区第11地点全景（２）
Pl.2　Views of BK11 (2)

1．調査区北壁３・４列セクション（南から）

2．調査区北壁５・６列セクション（南から）

3．調査区北壁７・８列セクション（南から）

4．調査区北壁９・10列セクション（南から）

5．調査区北壁11・12列セクション（南から）

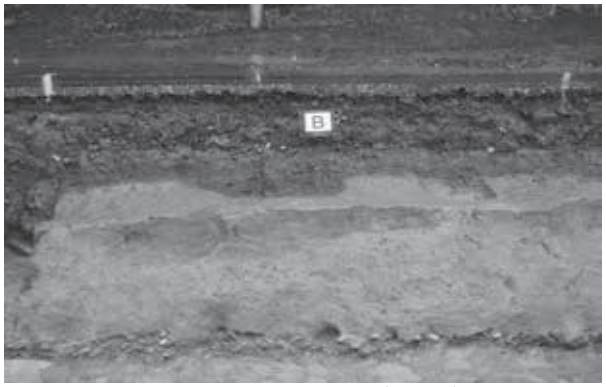
6．調査区北壁13・14列セクション（南から）

7．調査区北壁15・16列セクション（南から）

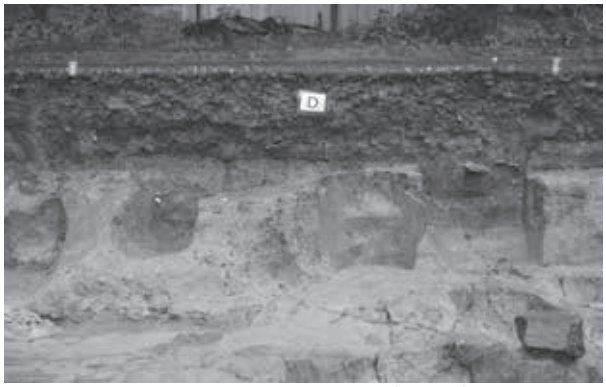
8．調査区北壁18～20列セクション（南から）

図版３　武家屋敷地区第11地点広域セクション（１）
Pl.3　Cross sections of BK11 (1)

1．調査区東壁 A 列セクション（西から）



2．調査区東壁 B 列セクション（西から）



3．調査区東壁 D 列セクション（西から）

4．調査区東壁 E 列セクション（西から）

5．調査区東壁 F 列セクション（西から）

6．調査区東壁 G 列セクション（西から）

7．調査区東壁 H 列セクション（西から）

8．調査区東壁 I 列セクション（西から）

図版４　武家屋敷地区第11地点広域セクション（２）
Pl.4　Cross sections of BK11 (2)

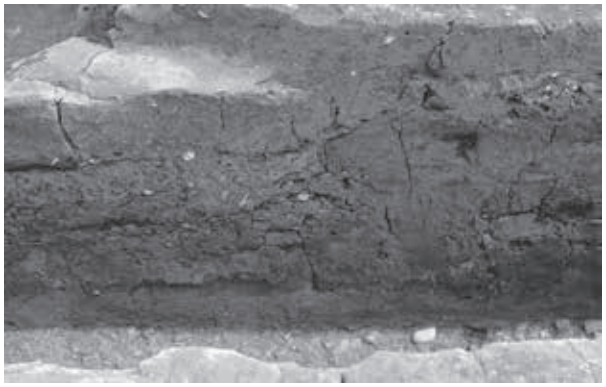
1．東西広域セクション 10 列（北から）

2．東西広域セクション９列（北から）

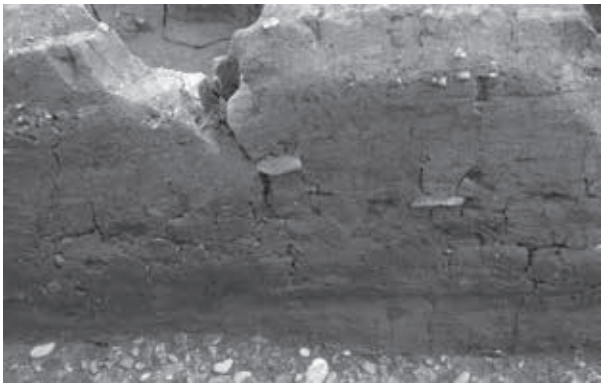
3．東西広域セクション８列東側（北から）

4．東西広域セクション８列西側（北から）

5．東西広域セクション７列東側（北から）



6．東西広域セクション７列西側（北から）

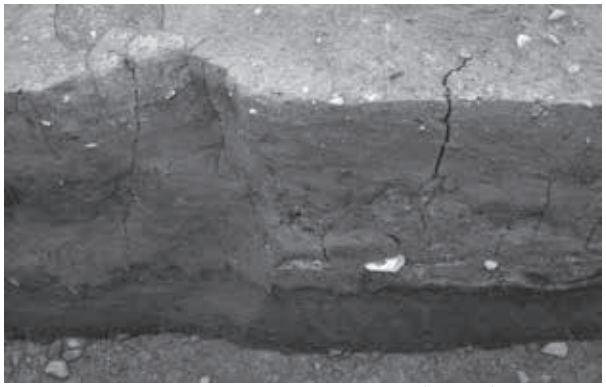


7．東西広域セクション６列東側（北から）

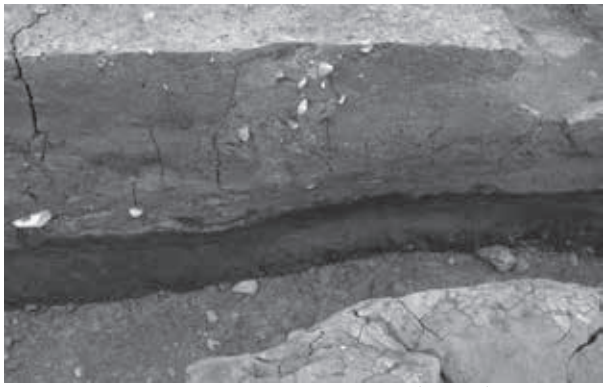
8．東西広域セクション５列東側（北から）

図版５　武家屋敷地区第11地点広域セクション（３）
Pl.5　Cross sections of BK11 (3)

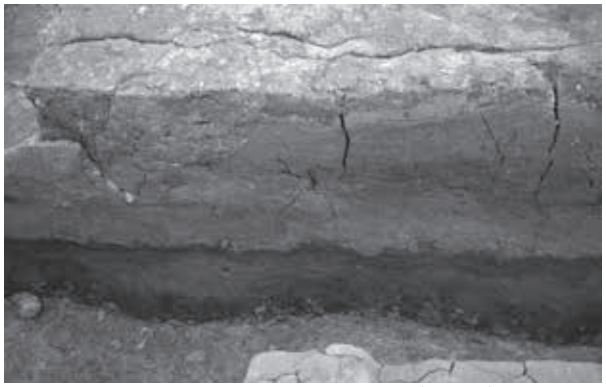
1．東西広域セクション５列西側（北から）



2．東西広域セクション４列東側（北から）

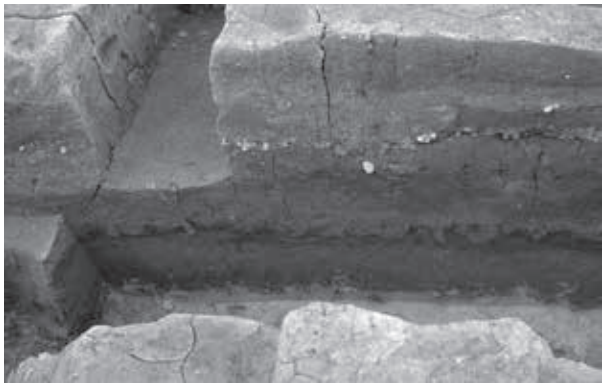


3．東西広域セクション４列西側（北から）

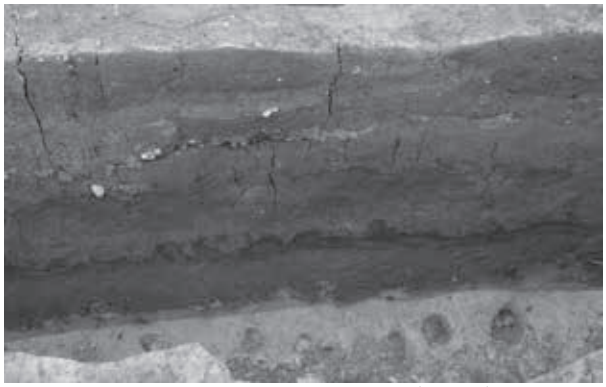


4．東西広域セクション３列東側（北から）

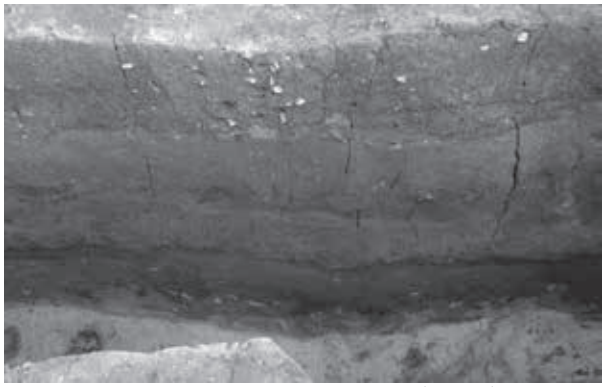
5．東西広域セクション３列西側（北から）



6．東西広域セクション２列東側（北から）



7．東西広域セクション２列西側（北から）

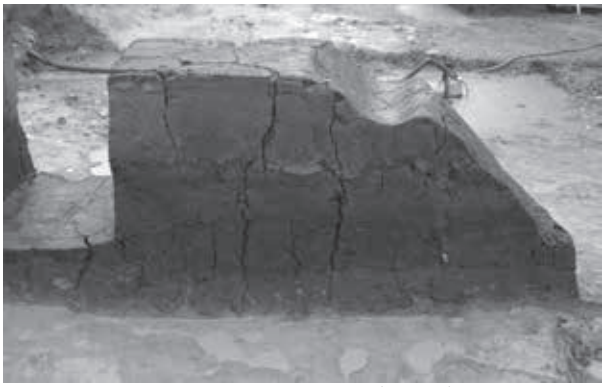


8．東西広域セクション１列東側（北から）

図版６　武家屋敷地区第11地点広域セクション（４）
Pl.6　Cross sections of BK11 (4)

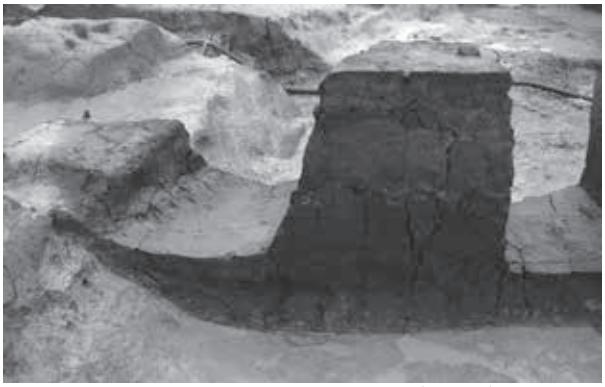
1．東西広域セクション１列西側（北から）

2．南北広域セクションＣ列（西から）



3．南北広域セクションＤ列（西から）

4．南北広域セクションＥ列上部（西から）



5．南北広域セクションＥ列下部（西から）

6．南北広域セクションＥ・Ｆ列（西から）

7．南北広域セクションＧ・Ｈ列（西から）

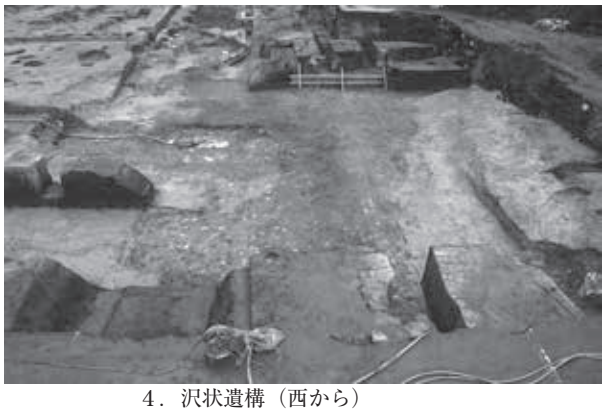
8．南北広域セクションＨ・Ｉ列（西から）

図版７　武家屋敷地区第11地点広域セクション（５）
Pl.7　Cross sections of BK11 (5)

1．沢状遺構（北から）

2．沢状遺構（北西から）

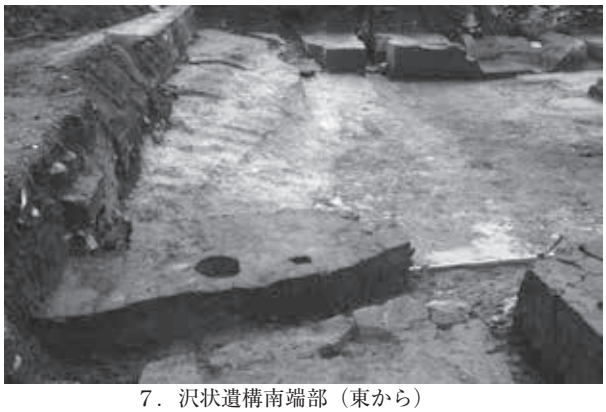
3．沢状遺構（東から）



4．沢状遺構（西から）

5．沢状遺構北端部（北西から）

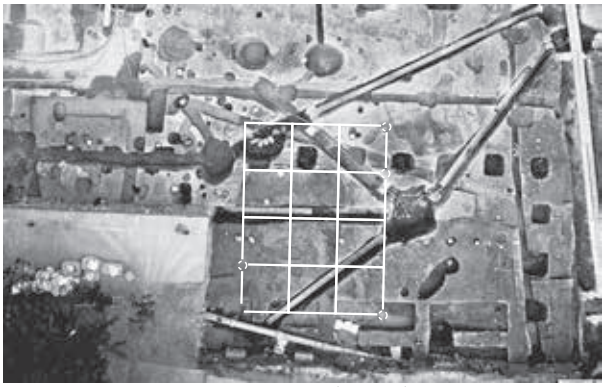
6．沢状遺構北端部（南東から）



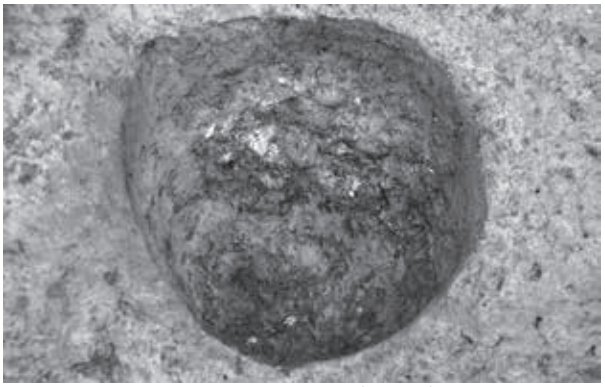
7．沢状遺構南端部（東から）

8．沢状遺構南端部（西から）

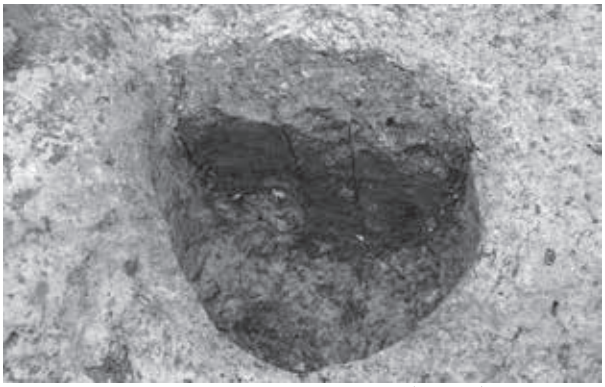
図版８　武家屋敷地区第11地点江戸時代以前の遺構
Pl.8　Features before Edo period at BK11



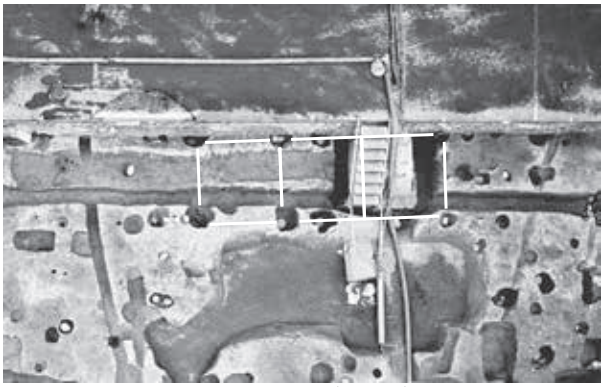
1．１号建物（上が北）



2．１号建物柱１（東から）

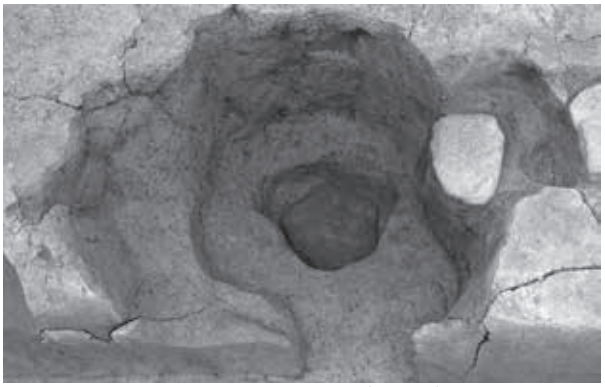


3．１号建物柱１セクション（東から）

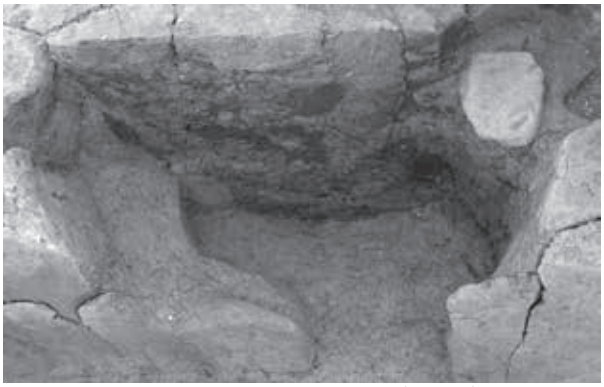


4．２号建物（上が北）

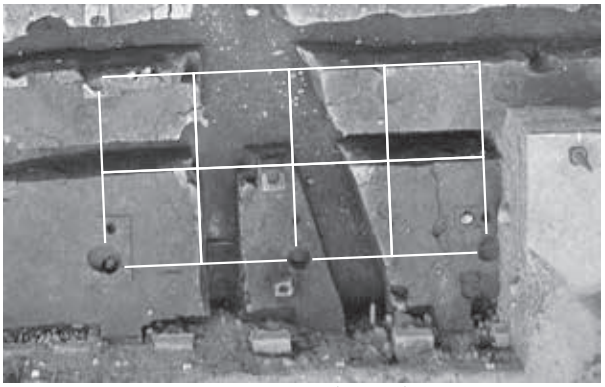
5．２号建物柱１セクション（南から）



6．２号建物柱４（南から）

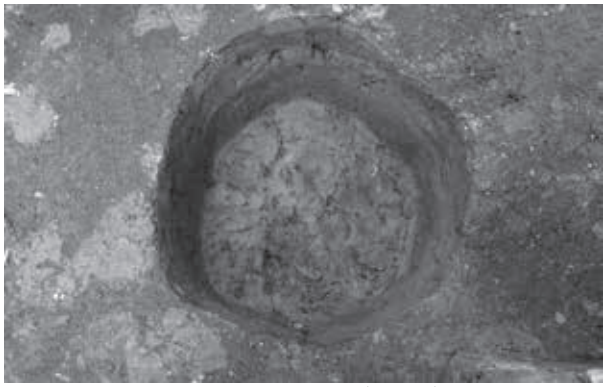


7．２号建物柱４セクション（南から）



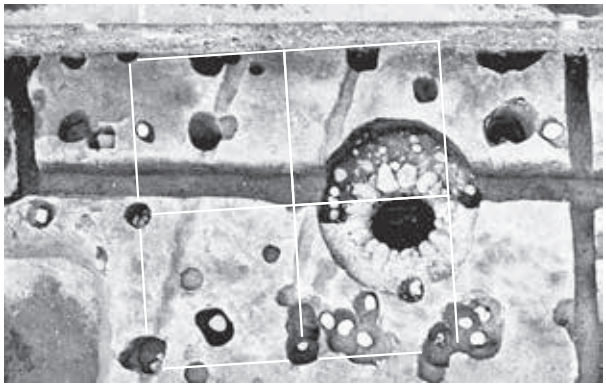
8．３号建物（上が北）

図版9　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（１）
Pl.9　Features of phase Ⅰ at BK11 (1)

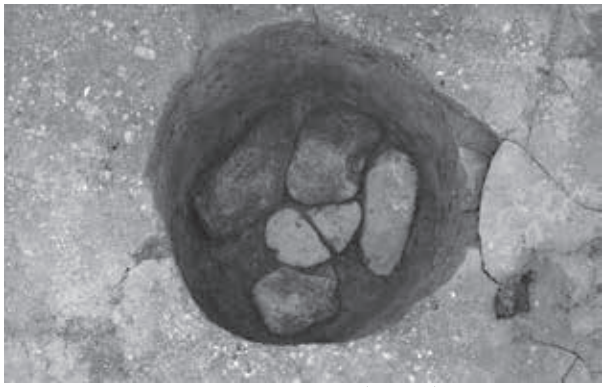


1．３号建物柱３（東から）

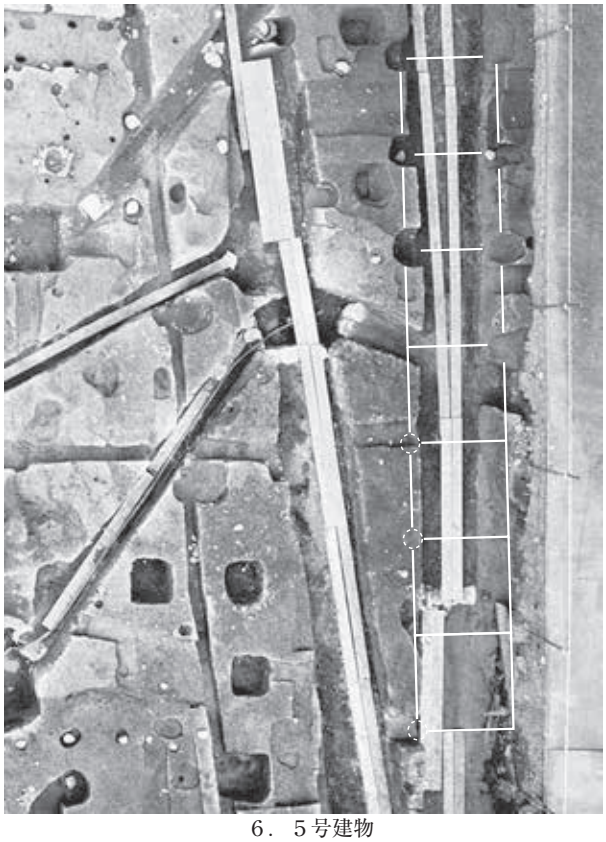
2．３号建物柱３セクション（東から）



3．４号建物

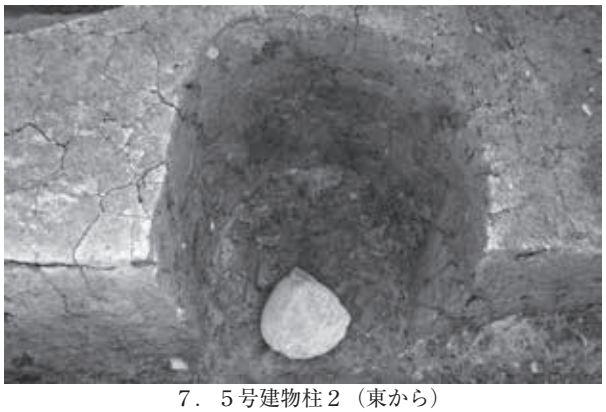


4．４号建物柱２（北から）



6．５号建物

5．４号建物柱２セクション（南から）



7．５号建物柱２（東から）

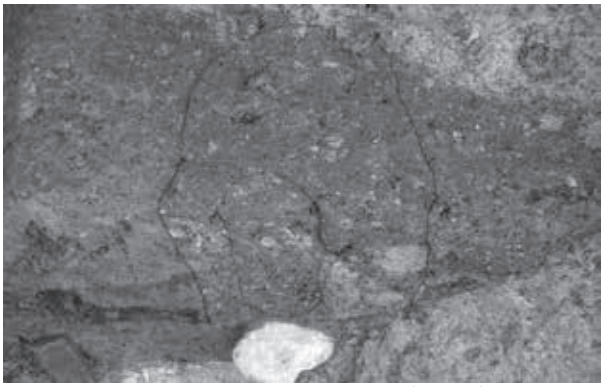
図版10　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（２）
Pl.10　Features of phase Ⅰ at BK11 (2)

1．５号建物柱２セクション（東から）

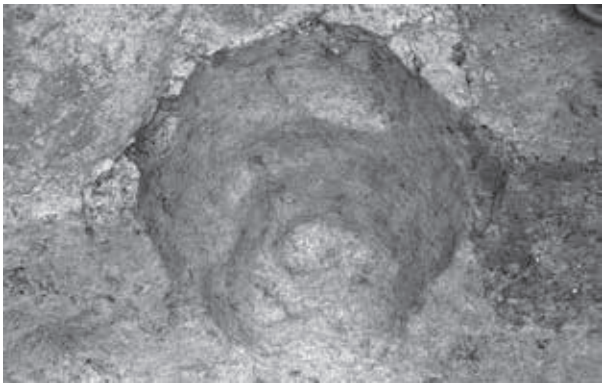
2．５号建物柱３（西から）

3．５号建物柱３セクション（東から）

4．５号建物柱８（西から）

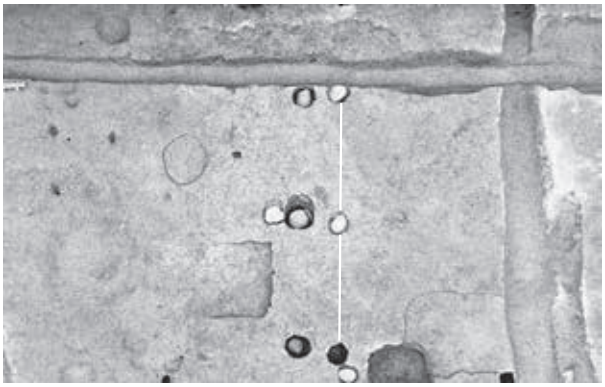


5．５号建物柱８セクション（西から）



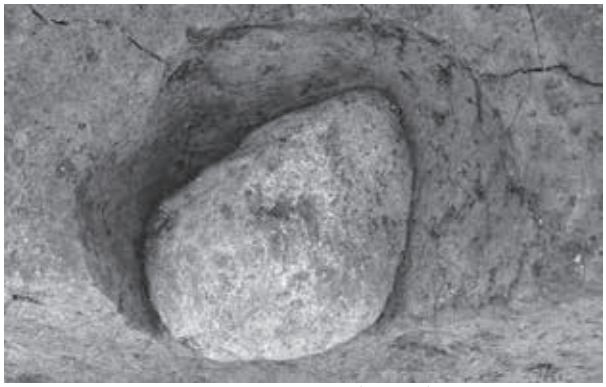
6．５号建物柱９（西から）

7．５号建物柱９セクション（西から）

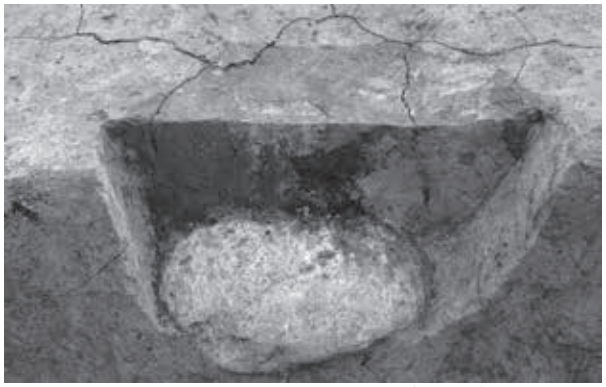


8．１号柱列

図版11　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（３）
Pl.11　Features of phase Ⅰ at BK11 (3)



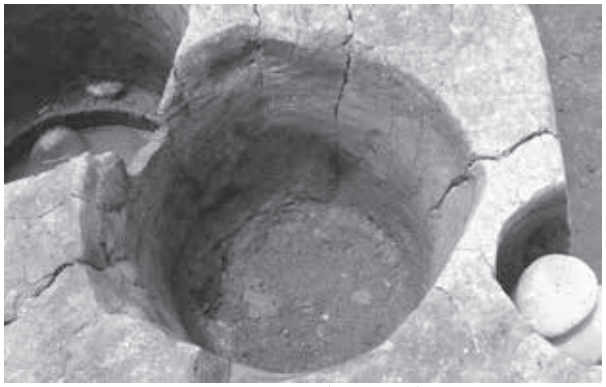
1．１号柱列柱１（北から）



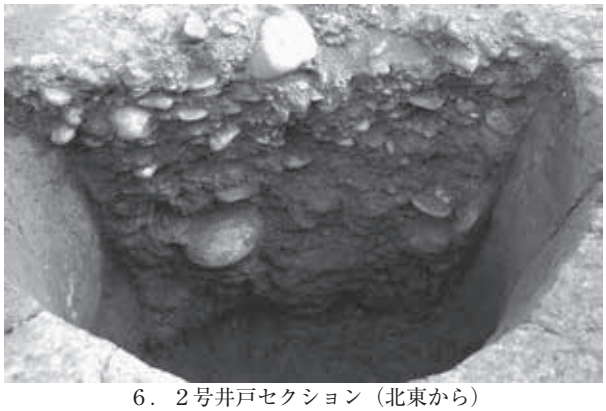
2．１号柱列柱１セクション（北から）

3．木樋（東から）

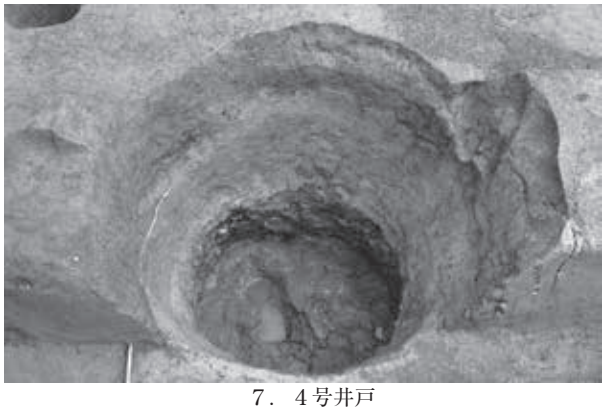
4．木樋（北西から）



5．２号井戸（南東から）



6．２号井戸セクション（北東から）



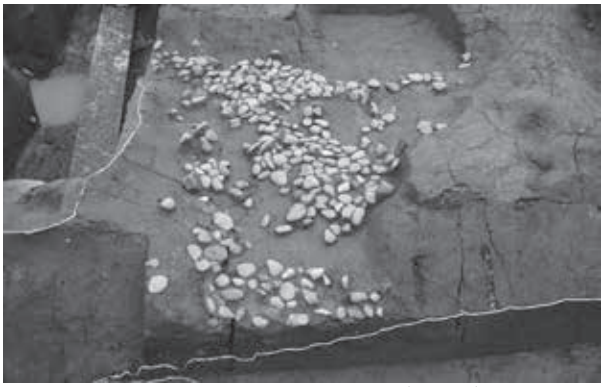
7．４号井戸

図版12　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（４）
Pl.12　Features of phase I at BK11 (4)

1．４号井戸セクション（北から）

2．１号遺構（北から）

3．１号遺構（東から）

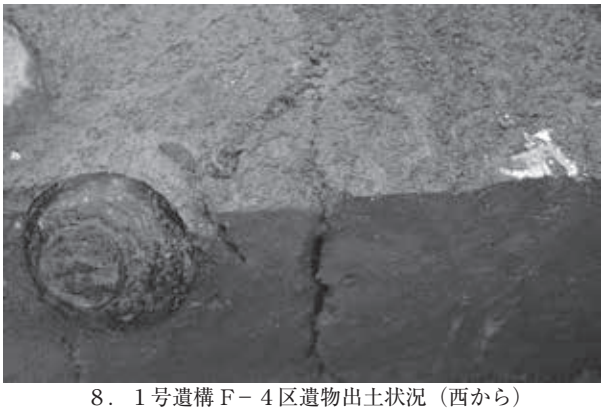


4．１号遺構Ｆ－２区石敷（北から）

5．１号遺構Ｇ－２区石敷（北から）

6．１号遺構土留め（東から）

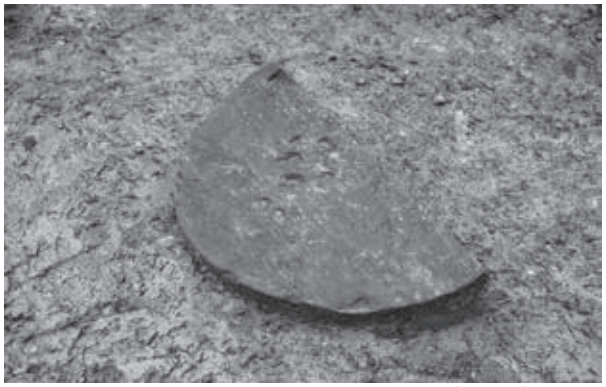
7．１号遺構Ｆ－４区セクション（北から）



8．１号遺構Ｆ－４区遺物出土状況（西から）

図版13　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（５）
Pl.13　Features of phase Ⅰ at BK11 (5)

1．１号遺構Ｆ－５区遺物出土状況（北から）

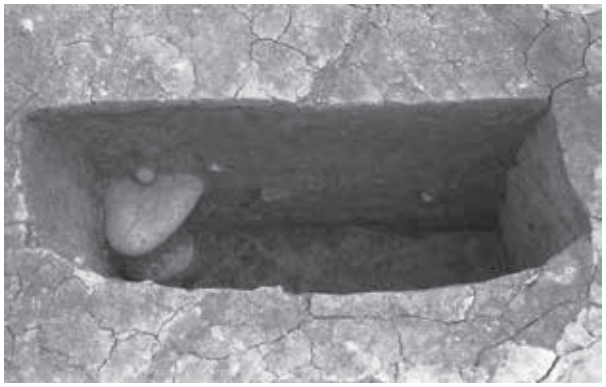


2．１号遺構Ｆ－３区遺物出土状況（北から）

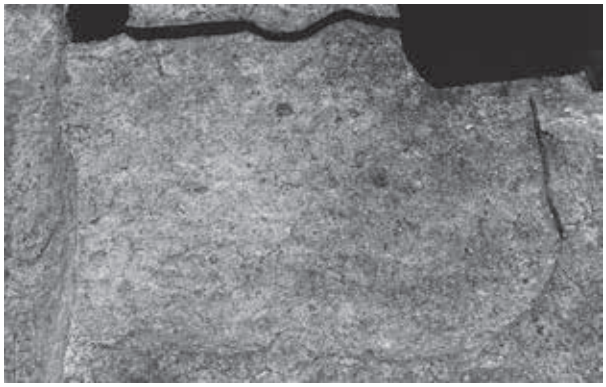
3．２号遺構（北から）

4．２号遺構セクション（東から）

5．４号遺構（北から）



6．４号遺構セクション（北から）



7．５号遺構（北から）

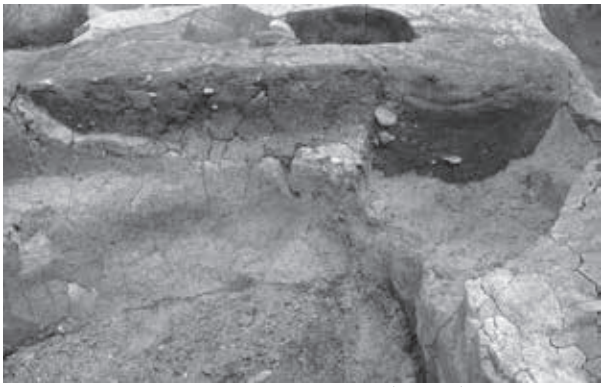
8．５号遺構セクション（北から）

図版14　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（６）
Pl.14　Features of phase Ⅰ at BK11 (6)

1．7号遺構（北西から）

2．7号遺構しがらみ検出状況（南から）

3．9号遺構（南から）

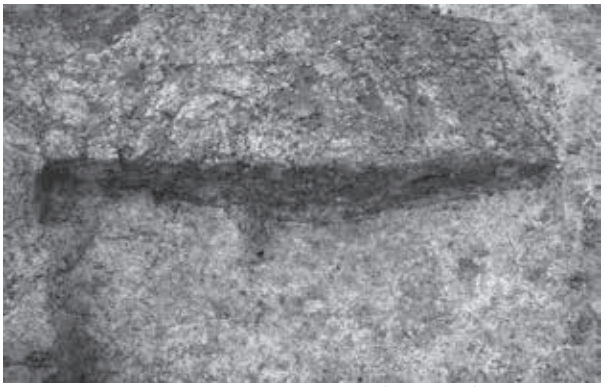


4．9号遺構セクション（南から）

5．14号遺構（東から）

6．14号遺構セクション（西から）

7．16号遺構（西から）



8．16号遺構セクション（西北から）

図版15　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（7）
Pl.15　Features of phase Ⅰ at BK11 (7)

1．19 号遺構（西から）

2．19 号遺構セクション（北から）

3．21 号遺構（南から）

4．21 号遺構セクション（南から）

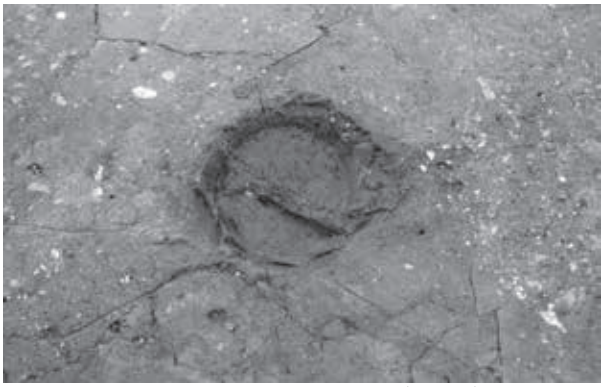
5．24 号遺構（西から）

6．24 号遺構セクション東部（北から）

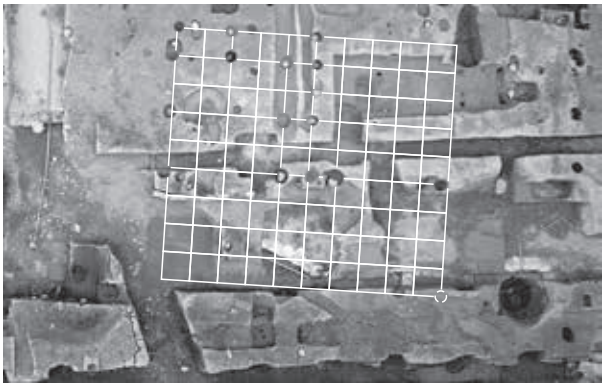
7．24 号遺構セクション西部（北から）

図版16　武家屋敷地区第11地点Ⅰ期の遺構（8）
Pl.16　Features of phase Ⅰ at BK11 (8)

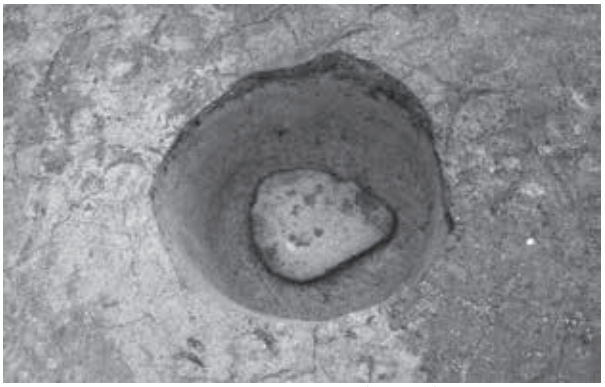
1．地鎮遺構（北から）



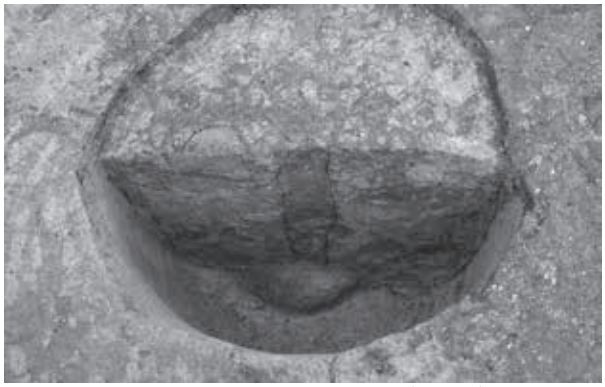
2．地鎮遺構下皿除去状況（北から）



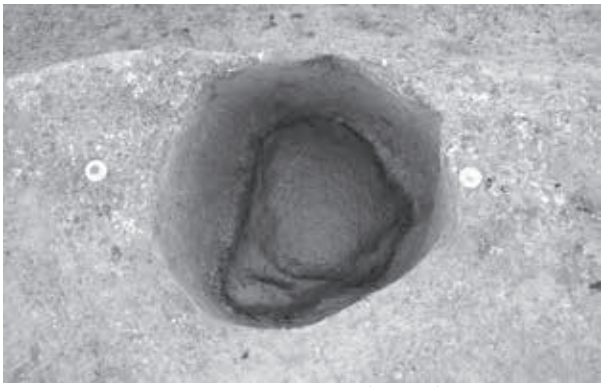
3．6号建物



4．6号建物柱3（西から）

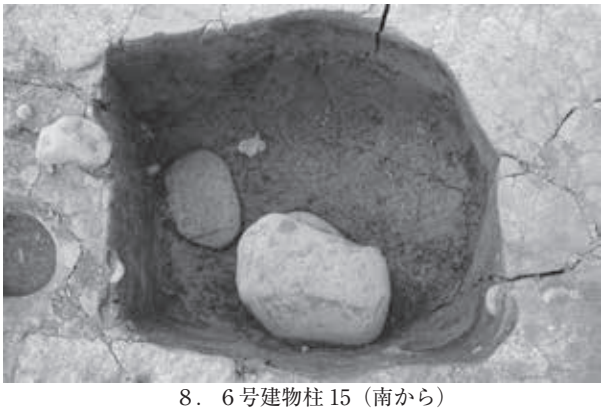


5．6号建物柱3セクション（西から）



6．6号建物柱10（東から）

7．6号建物柱10セクション（西から）



8．6号建物柱15（南から）

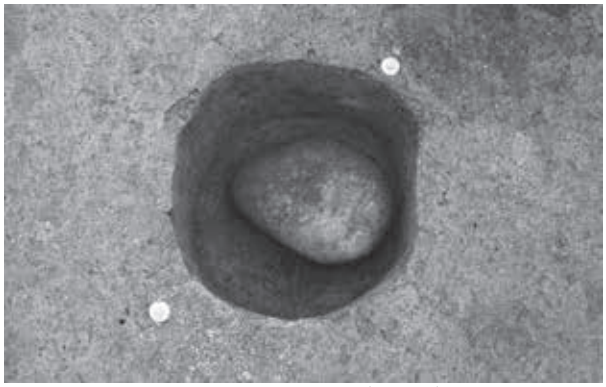
図版17　武家屋敷地区第11地点Ⅰ～Ⅱa期の遺構
Pl.17　Features of phase Ⅰ～Ⅱa at BK11

1．6号建物柱15セクション（東から）

2．7号建物

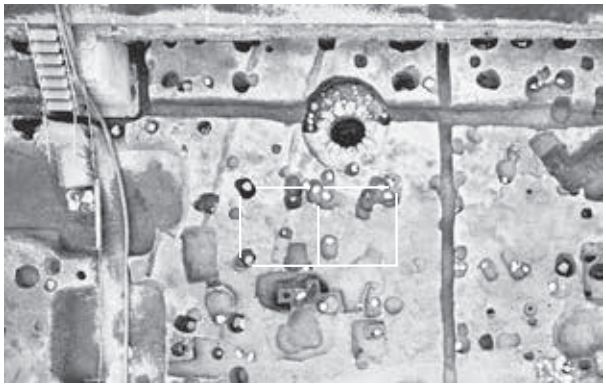
3．7号建物柱1（南西から）

4．7号建物柱1セクション（南西から）

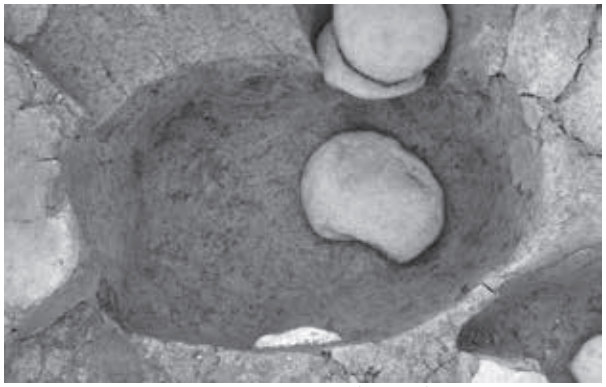


5．7号建物柱4（北から）

6．7号建物柱4セクション（北西から）



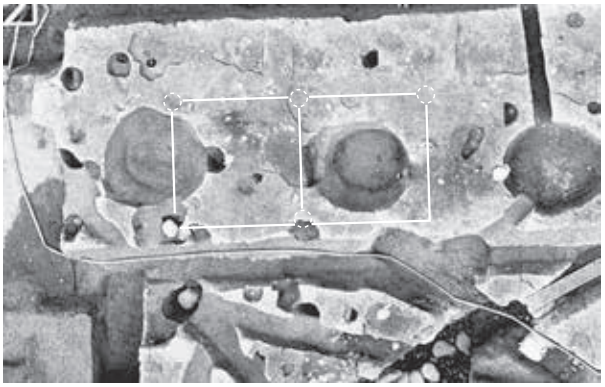
7．8号建物



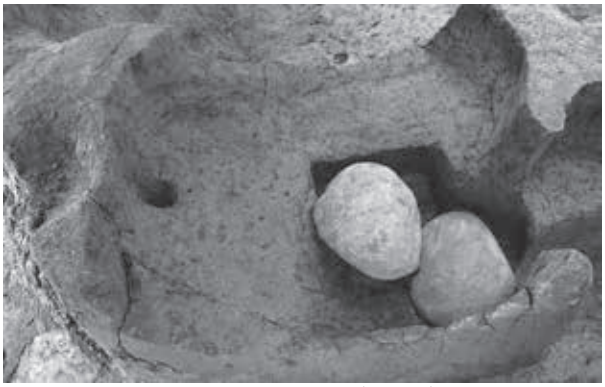
8．8号建物柱2（東から）

図版18　武家屋敷地区第11地点Ⅱa期の遺構（1）
Pl.18　Features of phase Ⅱa at BK11 (1)

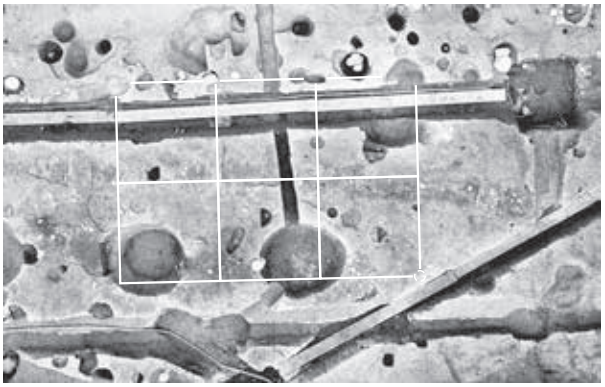
1．8号建物柱2セクション（東から）



2．9号建物



3．9号建物柱4（南から）



4．10号建物

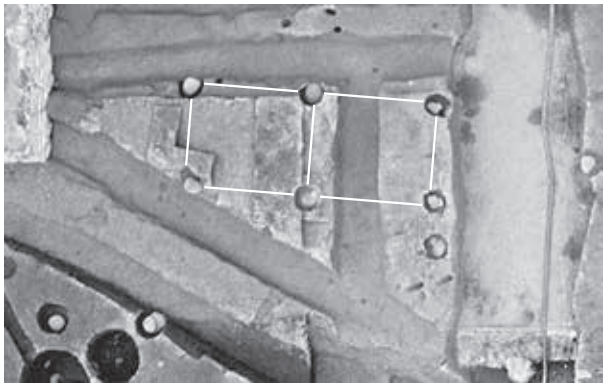
5．10号建物柱4（北から）

6．10号建物柱4セクション（南から）

7．10号建物柱5（東から）

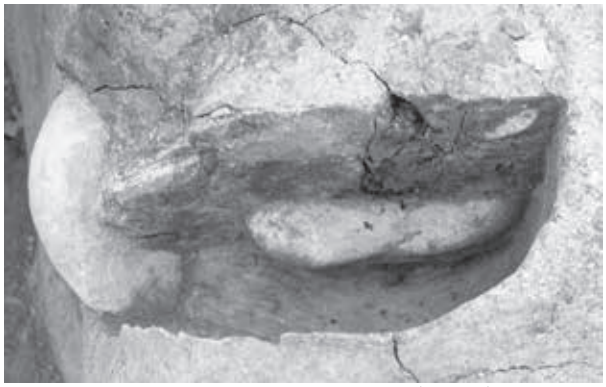
8．10号建物柱5セクション（南から）

図版19　武家屋敷地区第11地点Ⅱa期の遺構（2）
Pl.19　Features of phase Ⅱa at BK11 (2)



1．11 号建物

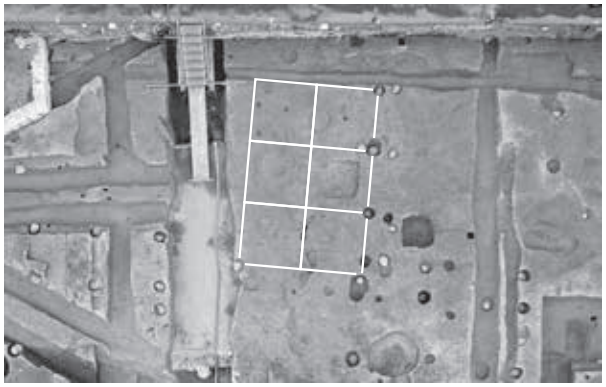
2．11 号建物柱３（東から）



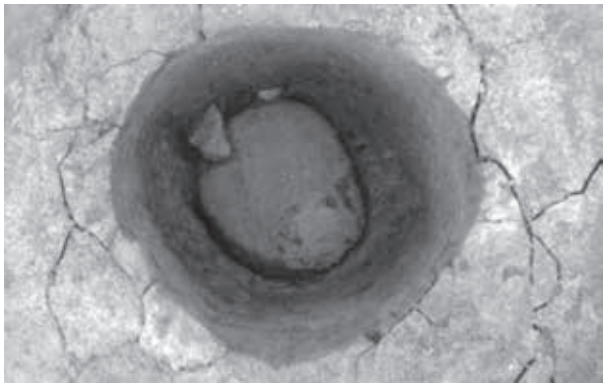
3．11 号建物柱３セクション（北から）

4．11 号建物柱６（南から）

5．11 号建物柱６セクション（北から）



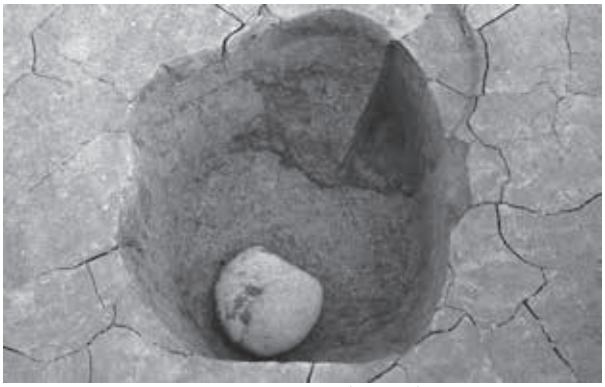
6．12 号建物



7．12 号建物柱４（南西から）

8．12 号建物柱４セクション（北から）

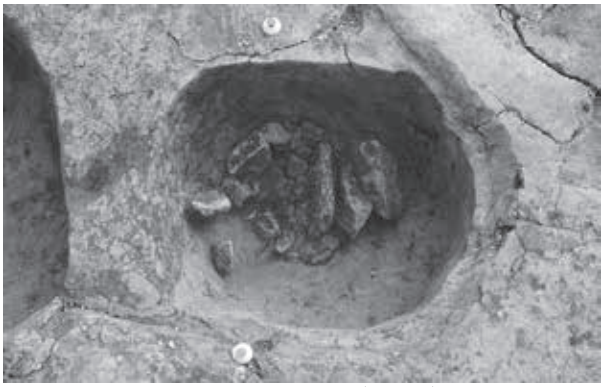
図版20　武家屋敷地区第11地点Ⅱa期の遺構（３）
Pl.20　Features of phase Ⅱa at BK11 (3)



1．12 号建物柱５（北から）

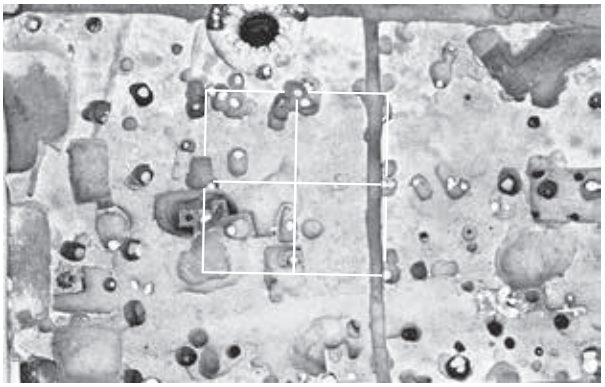
2．12 号建物柱５セクション（北西から）

3．13 号建物

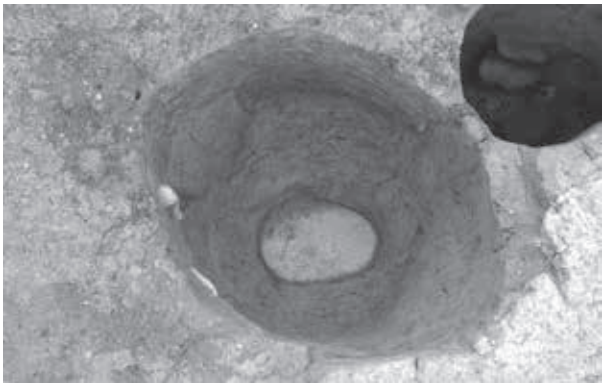


4．13 号建物柱３（北から）

5．13 号建物柱３セクション（西から）



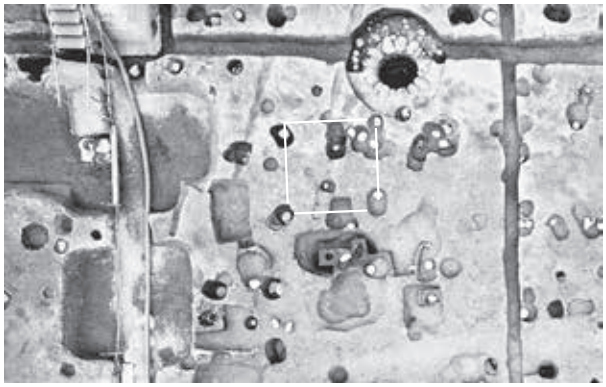
6．14 号建物



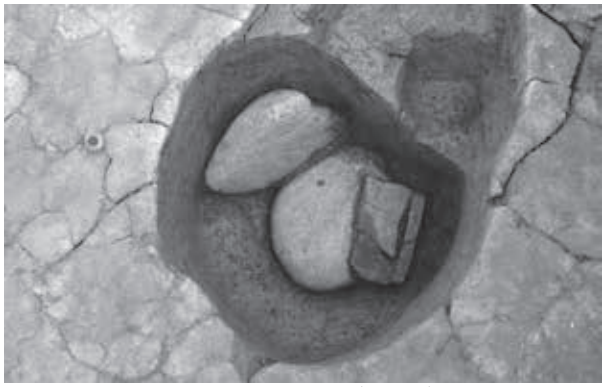
7．14 号建物柱２（北から）

8．14 号建物柱２セクション（北から）

図版21　武家屋敷地区第11地点Ⅱa期の遺構（４）
Pl.21　Features of phase Ⅱa at BK11 (4)

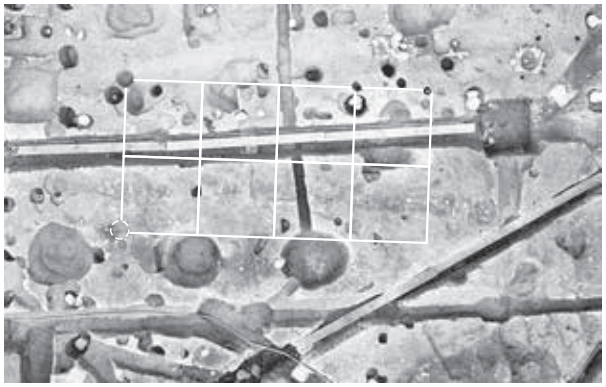


1．15 号建物

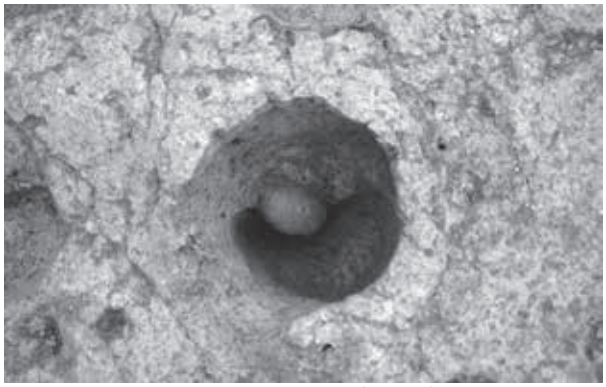


2．15 号建物柱２（北から）

3．15 号建物柱２セクション（北西から）

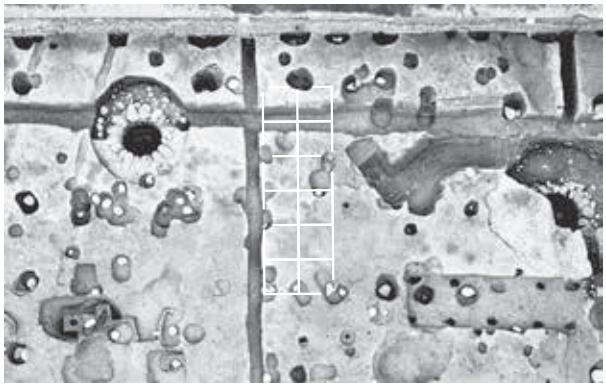


4．16 号建物



5．16 号建物柱３（北から）

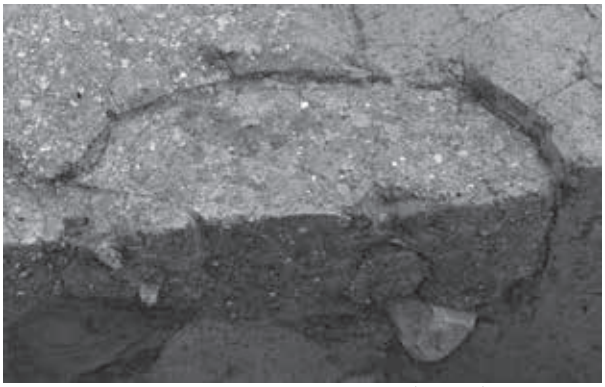
6．16 号建物柱３セクション（北から）



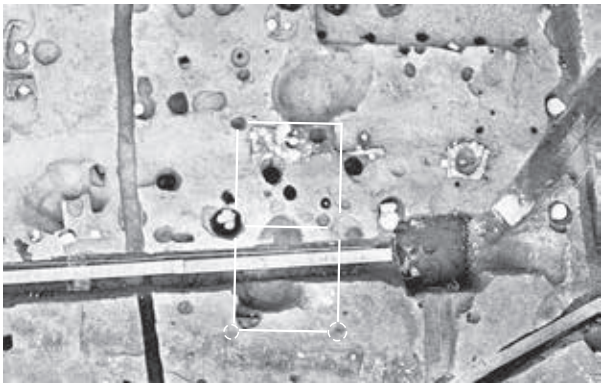
7．17 号建物

8．17 号建物柱３（西から）

図版22　武家屋敷地区第11地点Ⅱa期の遺構（５）
Pl.22　Features of phase Ⅱa at BK11 (5)



1．17 号建物柱３セクション（西から）

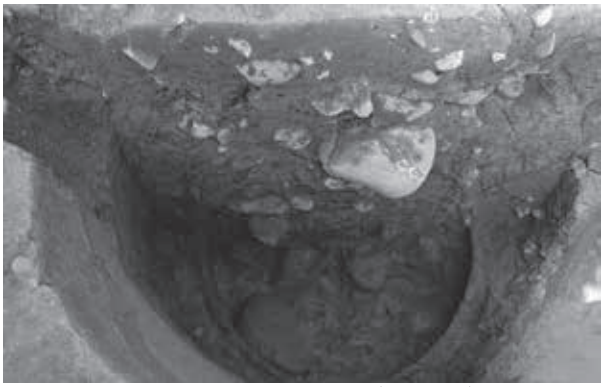


2．18 号建物

3．18 号建物柱２（北から）

4．18 号建物柱２セクション（北西から）

5．１号井戸（西から）



6．１号井戸セクション（南西から）

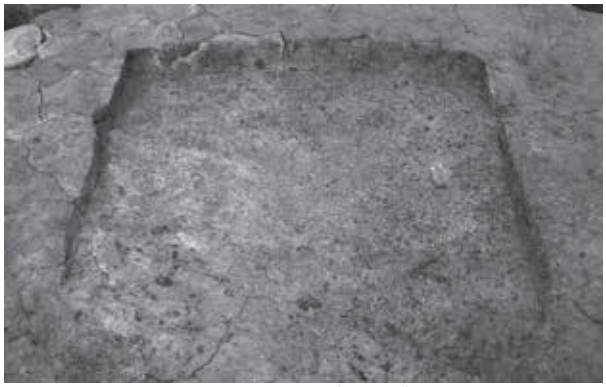
7．３号井戸（南から）

8．３号井戸セクション１（南から）

図版23　武家屋敷地区第11地点Ⅱa期の遺構（６）
Pl.23　Features of phase Ⅱa at BK11 (6)

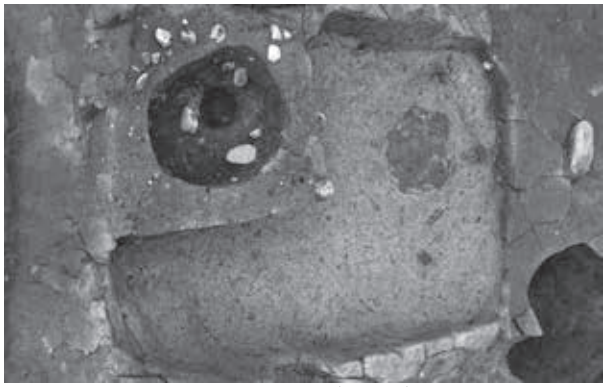
1．3 号井戸セクション 2（南から）

2．3 号井戸セクション 3（南から）

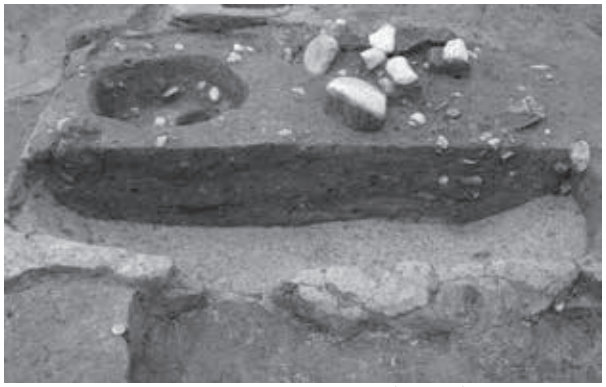


3．3 号遺構（西から）

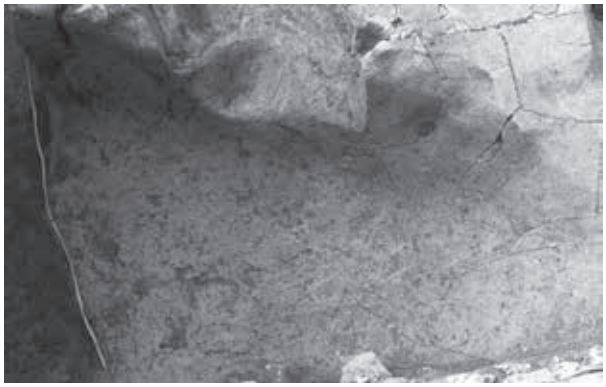
4．3 号遺構セクション（北から）



5．10 号遺構（西から）



6．10 号遺構セクション（西から）

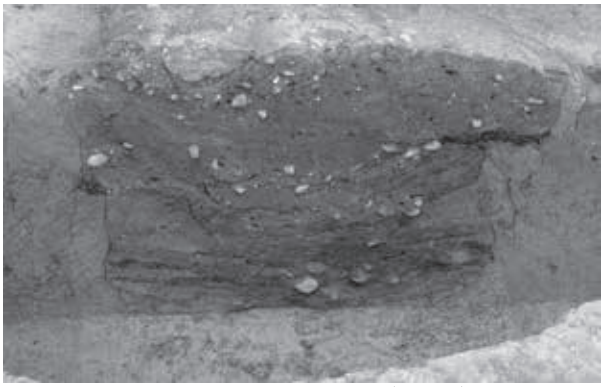


7．22 号遺構（南から）

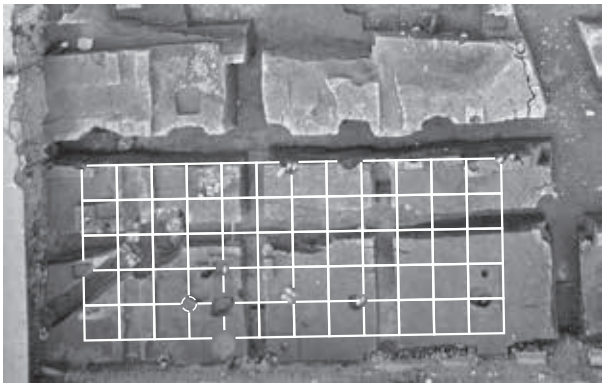
8．22 号遺構セクション（東から）

図版24　武家屋敷地区第11地点Ⅱa期の遺構（7）
Pl.24　Features of phase Ⅱa at BK11 (7)

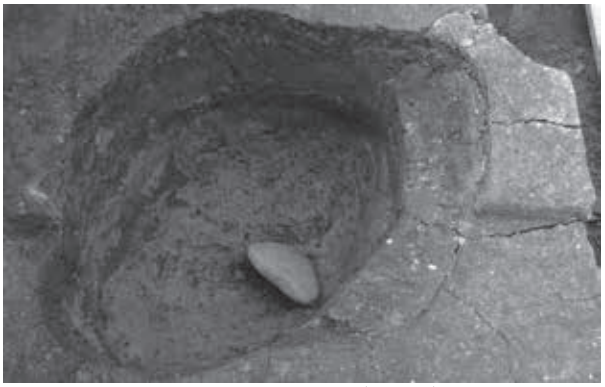
1．31 号遺構（北から）



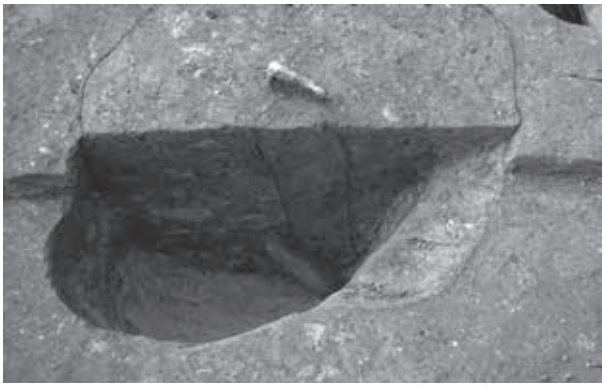
2．31 号遺構セクション（南から）



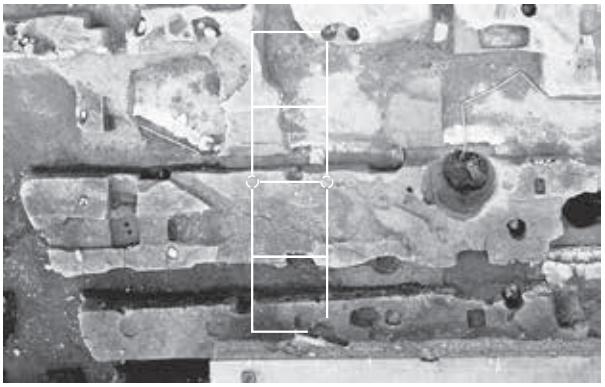
3．19 号建物



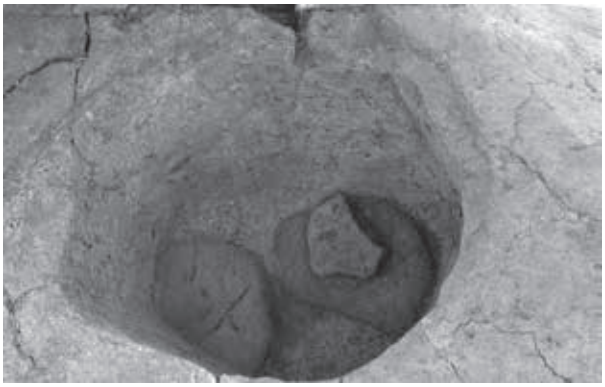
4．19 号建物柱８（南から）



5．19 号建物柱８セクション（南から）



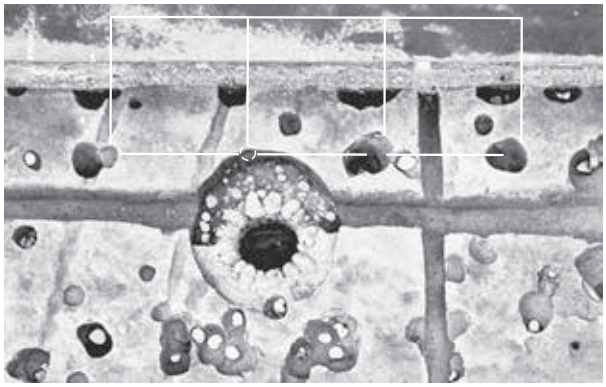
6．20 号建物



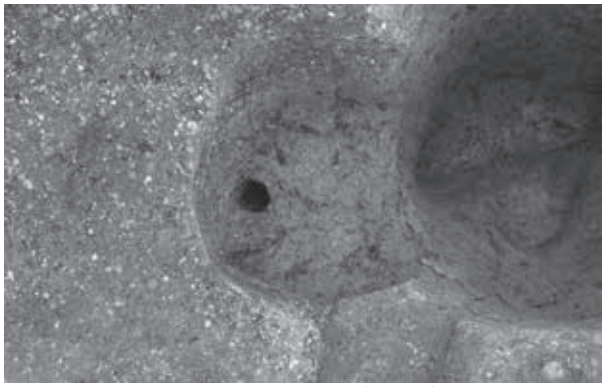
7．20 号建物柱２（北から）

8．20 号建物柱２セクション（南から）

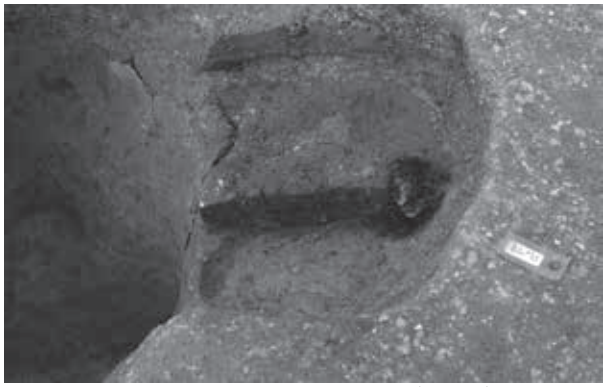
図版25　武家屋敷地区第11地点Ⅱa～Ⅱb期の遺構
Pl.25　Features of phase Ⅱa～Ⅱb at BK11



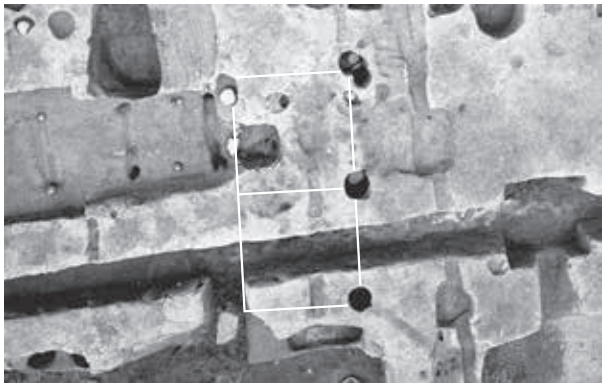
1．21 号建物



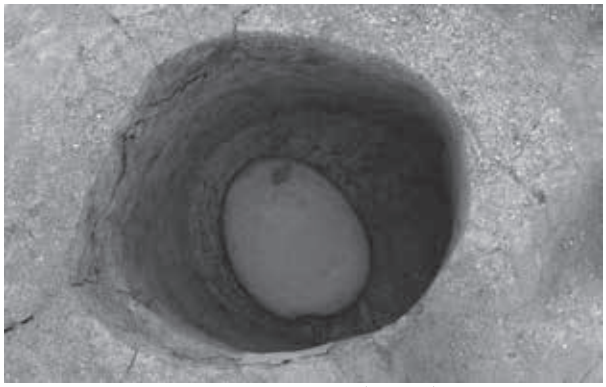
2．21 号建物柱 1（北から）



3．21 号建物柱 1 セクション（南から）

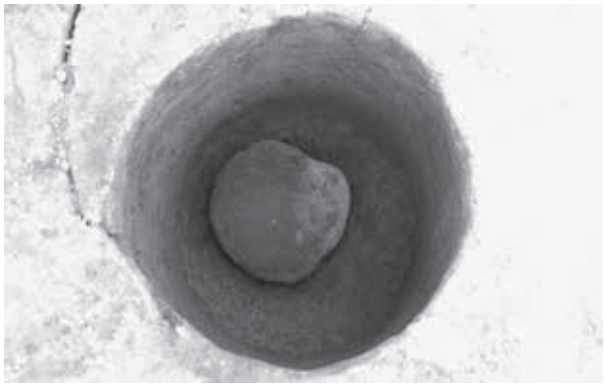


4．22 号建物

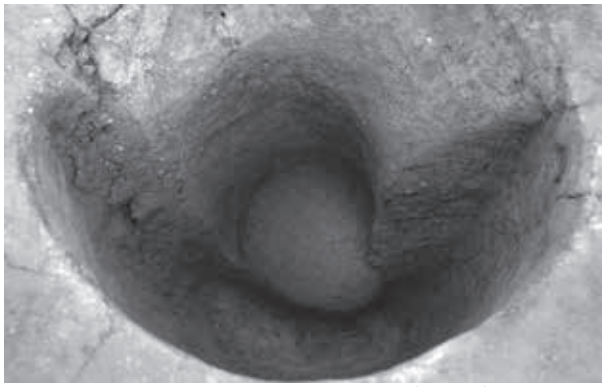


5．22 号建物柱 3（東から）

6．22 号建物柱 3 セクション（東から）

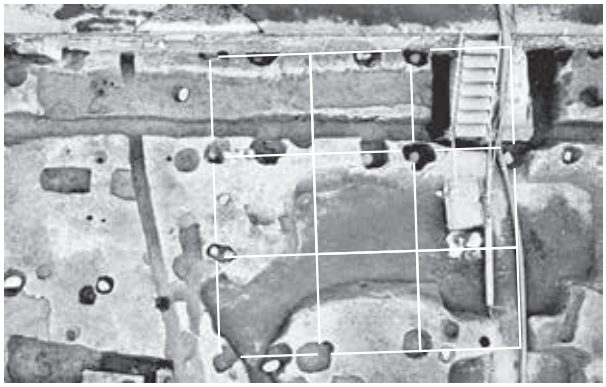


7．22 号建物柱 4（東から）

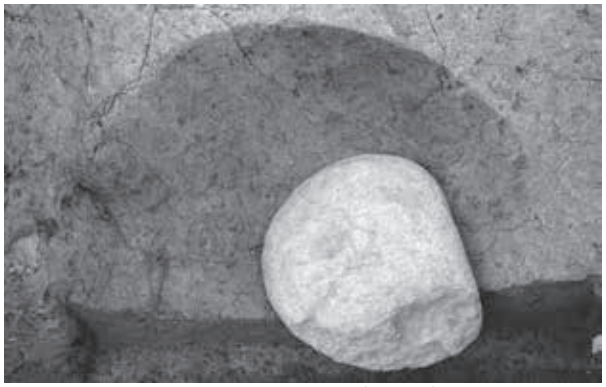


8．22 号建物柱 4 セクション（北から）

図版26　武家屋敷地区第11地点Ⅱb期の遺構（1）
Pl.26　Features of phase Ⅱb at BK11 (1)

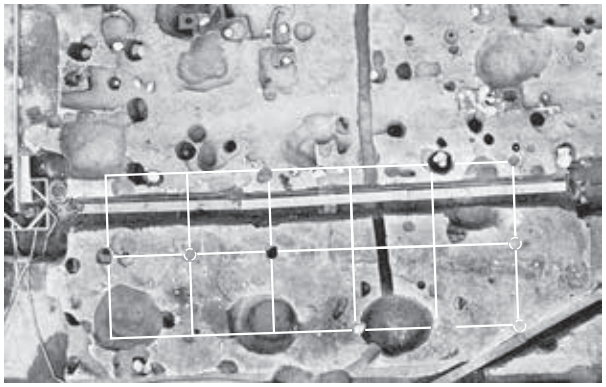


1．23 号建物



2．23 号建物柱５（北から）

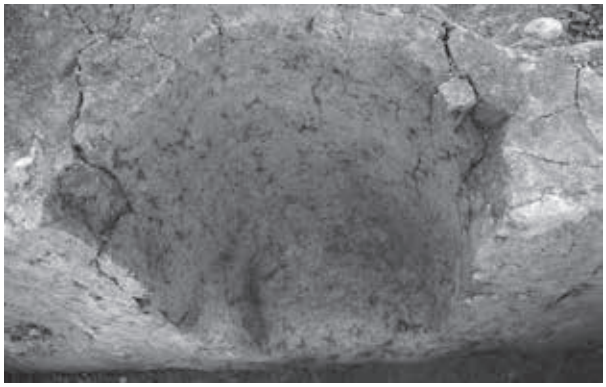
3．23 号建物柱５セクション（北から）



4．24 号建物

5．24 号建物柱２（北から）

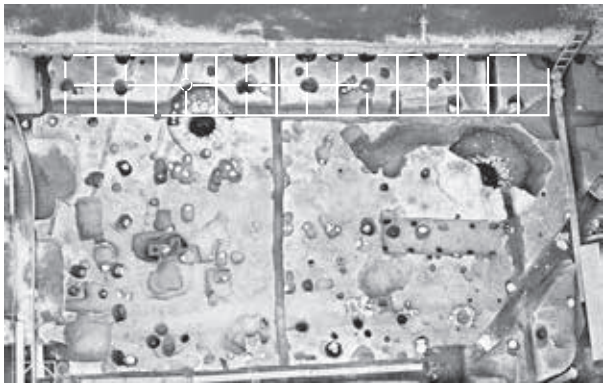
6．24 号建物柱２セクション（北西から）



7．24 号建物柱 10（南東から）

8．24 号建物柱 10 セクション（南東から）

図版27　武家屋敷地区第11地点Ⅱb期の遺構（２）
Pl.27　Features of phase Ⅱb at BK11 (2)

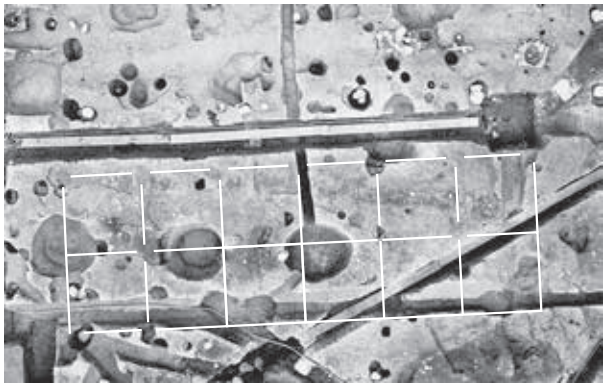


1．25 号建物

2．25 号建物柱 4 セクション（南から）

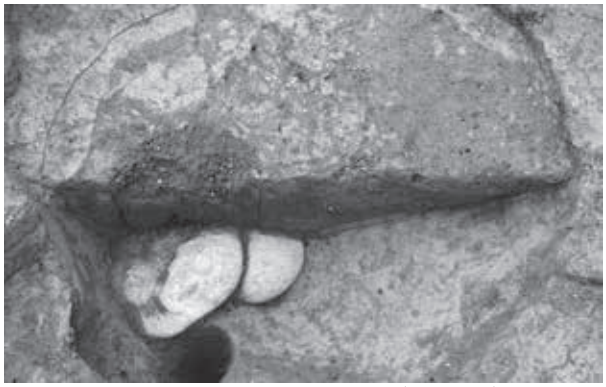
3．25 号建物柱 10（北から）

4．25 号建物柱 10 セクション（北から）

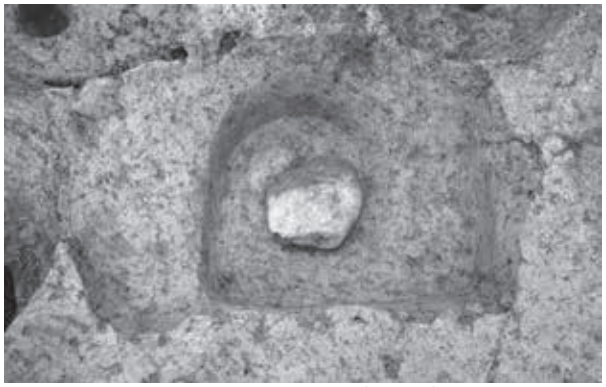


5．26 号建物

6．26 号建物柱 1（東から）



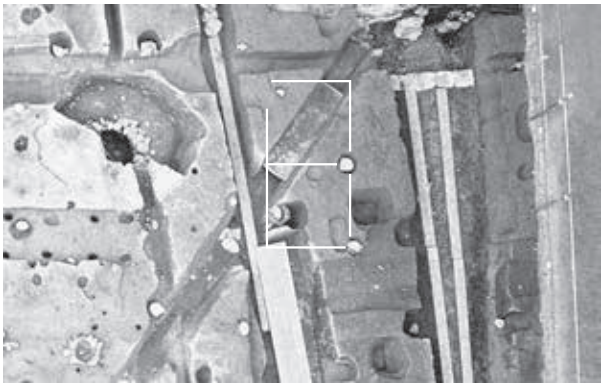
7．26 号建物柱 1 セクション（南東から）



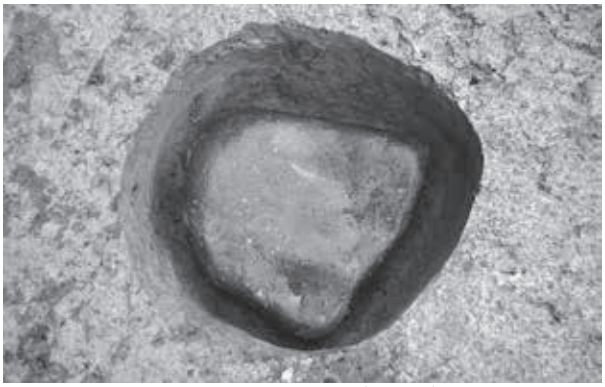
8．26 号建物柱 6（東から）

図版28　武家屋敷地区第11地点Ⅱb期の遺構（３）
Pl.28　Features of phase Ⅱb at BK11 (3)

1．26 号建物柱 6 セクション（東から）

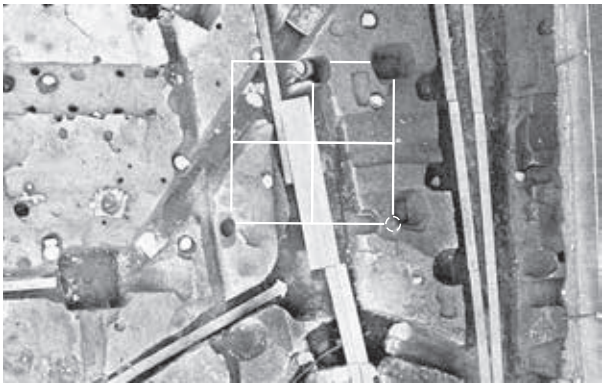


2．27 号建物



3．27 号建物柱 2（北から）

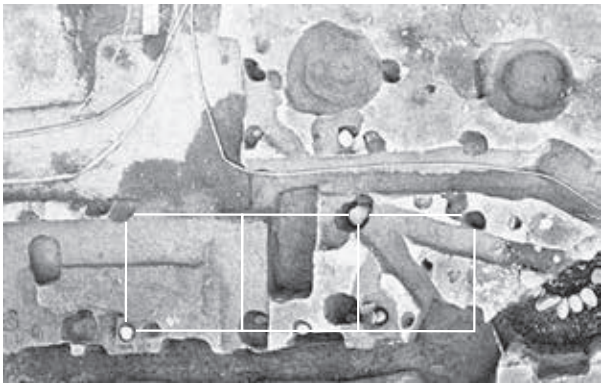
4．27 号建物柱 2 セクション（西から）



5．28 号建物

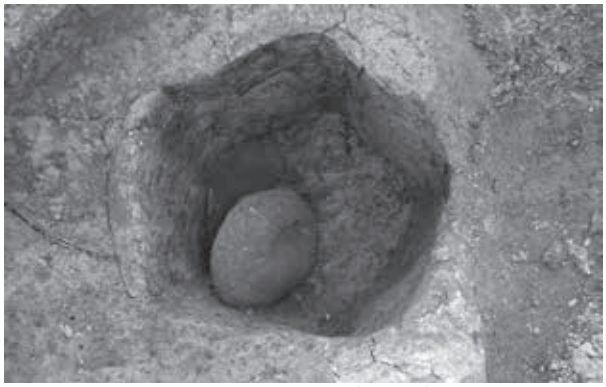
6．28 号建物柱 2（北から）

7．28 号建物柱 2 セクション（西から）



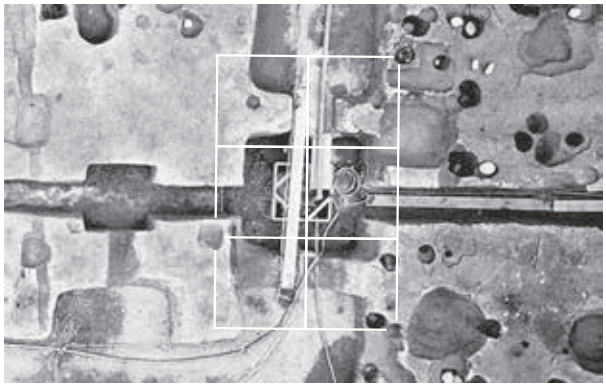
8．29 号建物

図版29　武家屋敷地区第11地点Ⅱb期の遺構（４）
Pl.29　Features of phase Ⅱb at BK11 (4)

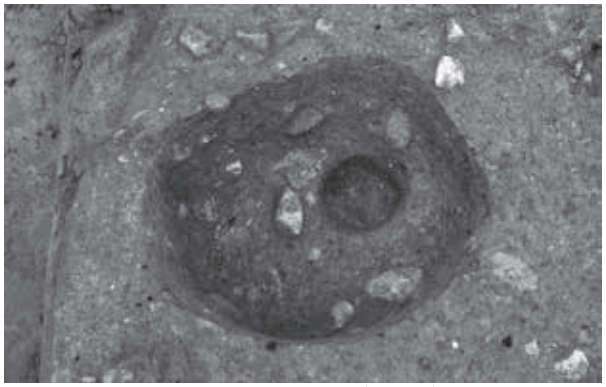


1．29 号建物柱２（東から）

2．29 号建物柱２セクション（東から）

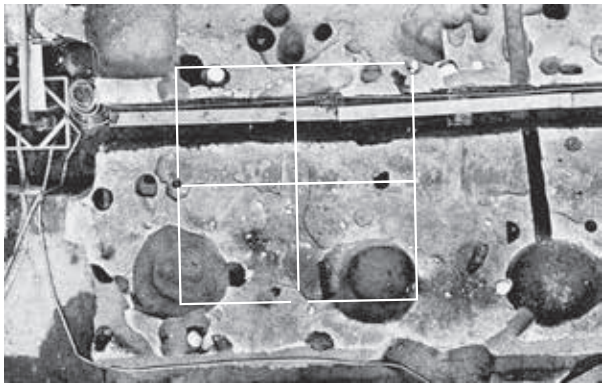


3．30 号建物

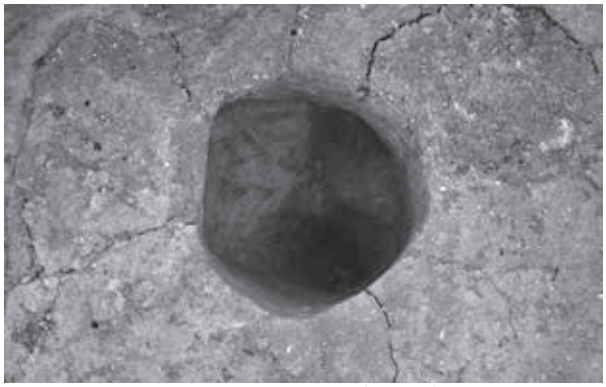


4．30 号建物柱２（南から）

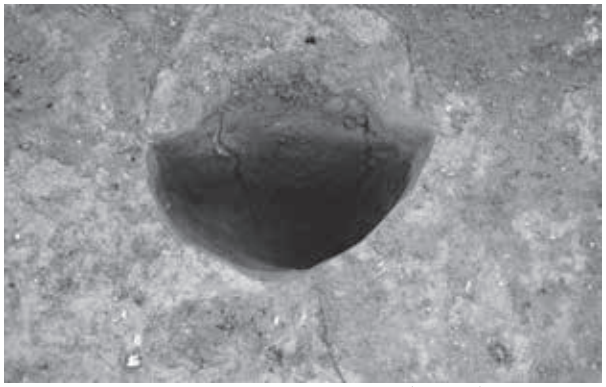
5．30 号建物柱２セクション（南から）



6．31 号建物

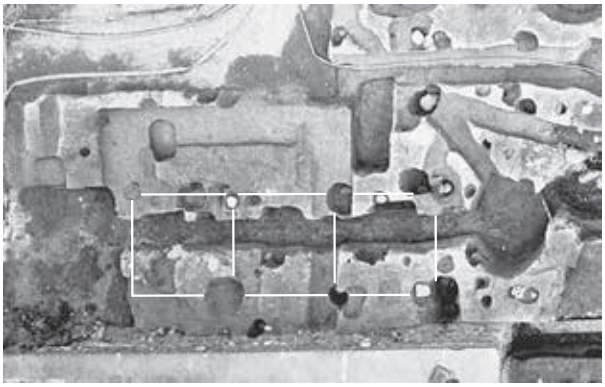


7．31 号建物柱２（東から）

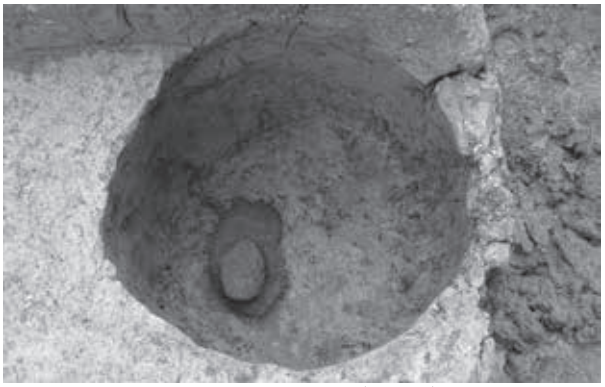


8．31 号建物柱２セクション（東から）

図版30　武家屋敷地区第11地点Ⅱb期の遺構（５）
Pl.30　Features of phase Ⅱb at BK11 (5)

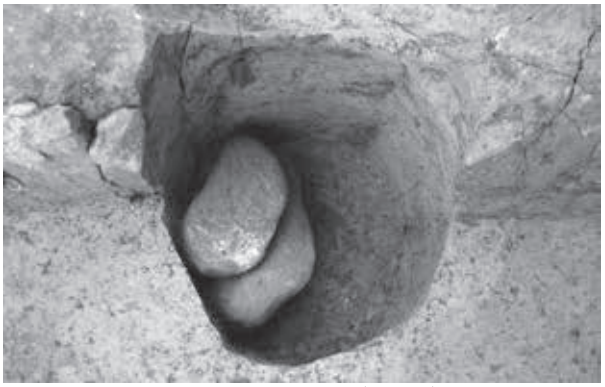


1．32 号建物



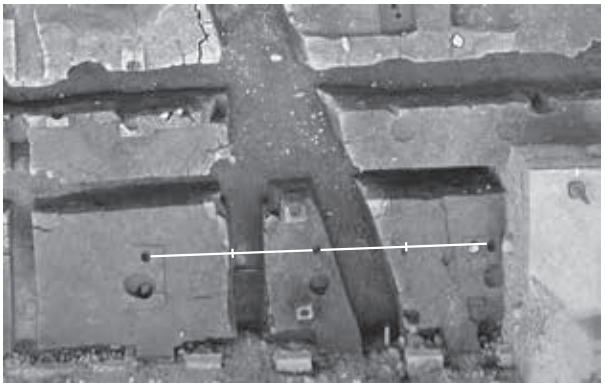
2．32 号建物柱３（西から）

3．32 号建物柱３セクション（西から）

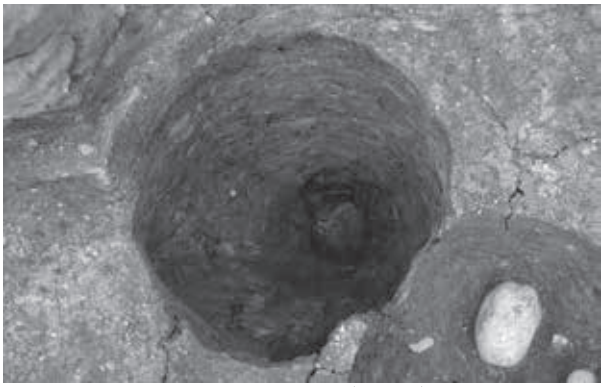


4．32 号建物柱６（西から）

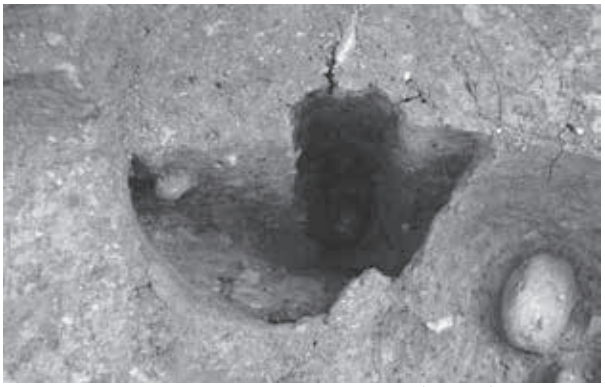
5．32 号建物柱６セクション（西から）



6．２号柱列

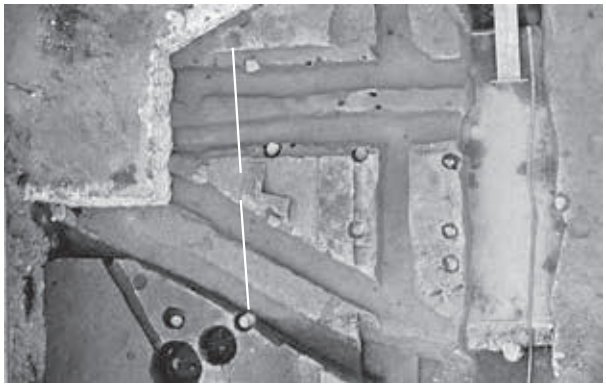


7．２号柱列柱３（西から）



8．２号柱列柱３セクション（西から）

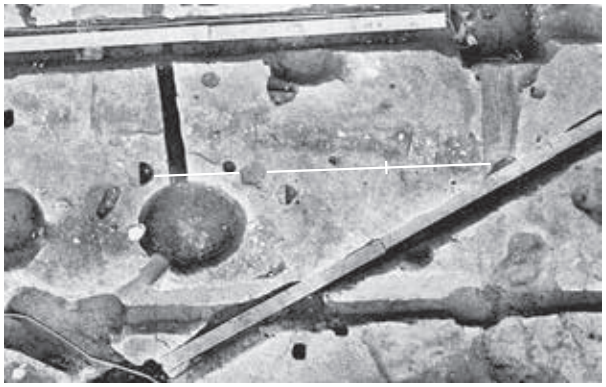
図版31　武家屋敷地区第11地点Ⅱb期の遺構（６）
Pl.31　Features of phase Ⅱb at BK11 (6)



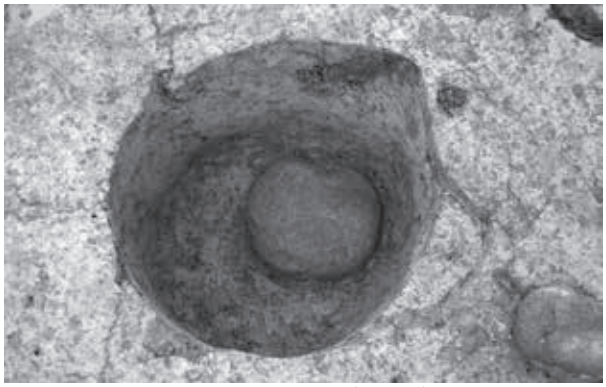
1．3号柱列

2．3号柱列柱3（南から）

3．3号柱列柱3セクション（北東から）



4．4号柱列



5．4号柱列柱1（北から）

6．4号柱列柱1セクション（東から）

7．6号溝（北西から）

8．6号溝セクション（北西から）

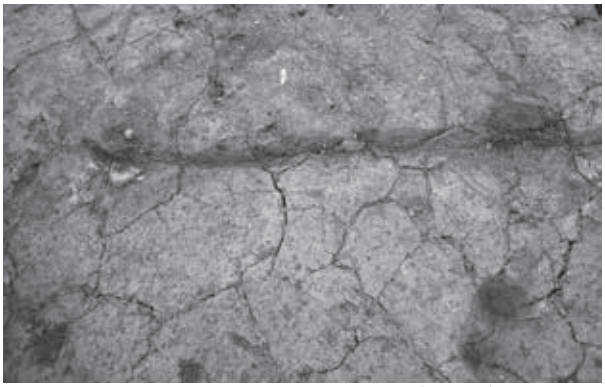
図版32　武家屋敷地区第11地点Ⅱb期の遺構（7）
Pl.32　Features of phase Ⅱb at BK11 (7)

1．7 号溝（北から）

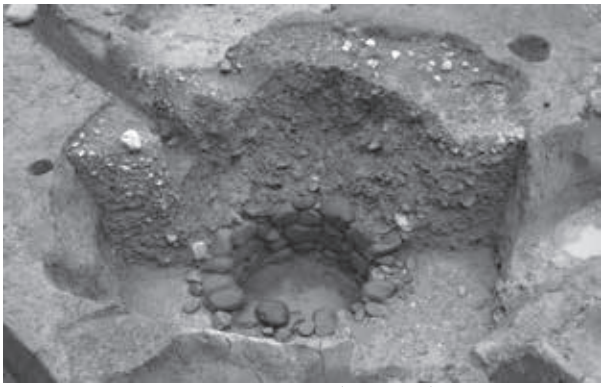
2．7 号溝セクション（北東から）

3．15 号溝全景（北西から）

4．15 号溝 E-16 区セクション（東から）



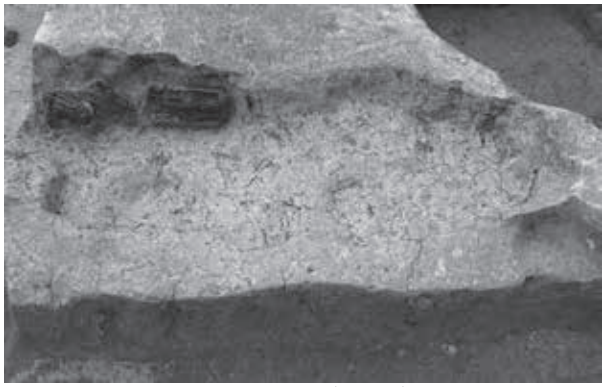
5．15 号溝 E-15 区セクション（東から）



6．6 号井戸（北東から）

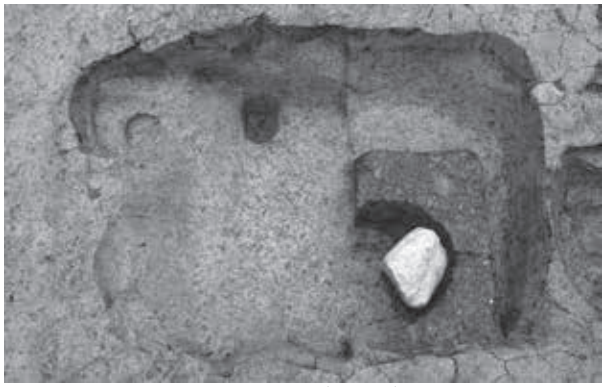
図版33　武家屋敷地区第11地点Ⅱb期の遺構（８）
Pl.33　Features of phase Ⅱb at BK11 (8)

1．6 号井戸セクション（北東から）



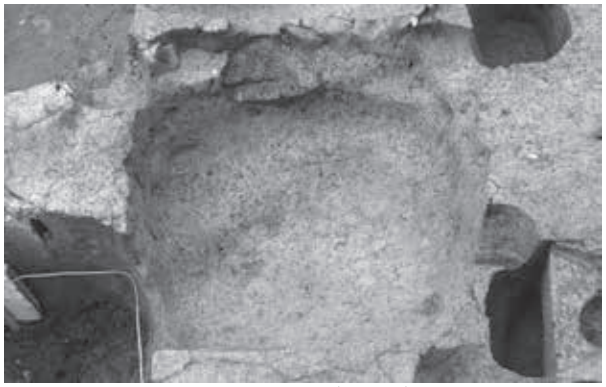
2．6 号遺構（東から）

3．6 号遺構セクション（東から）



4．8 号遺構（東から）

5．8 号遺構セクション（南から）

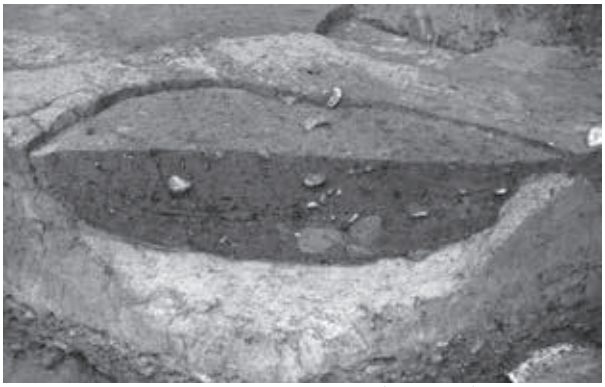


6．11 号遺構（南から）

7．11 号遺構セクション（西から）

8．15 号遺構（北から）

図版34　武家屋敷地区第11地点Ⅱb期の遺構（９）
Pl.34　Features of phase Ⅱb at BK11 (9)



1．15 号遺構セクション（南西から）

2．20 号遺構（東から）

3．20 号遺構セクション（東から）

4．25 号遺構（南から）

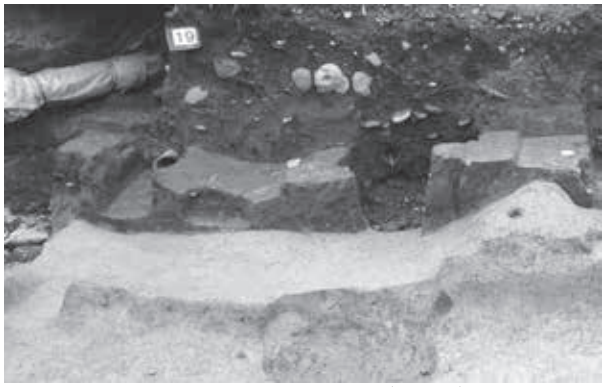
5．25 号遺構（東から）

6．25 号遺構東西セクション１（北から）

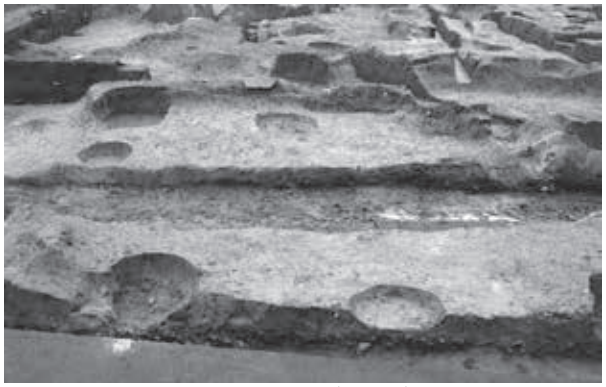
7．25 号遺構東西セクション２（北から）

図版35　武家屋敷地区第11地点Ⅱb期の遺構（10）
Pl.35　Features of phase Ⅱb at BK11 (10)

1．28 号遺構（東から）



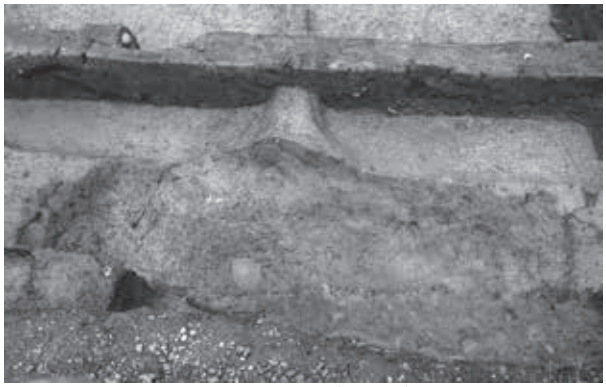
2．28 号遺構セクション（北から）



3．29 号遺構（東から）

4．29 号遺構セクション南半分（東から）

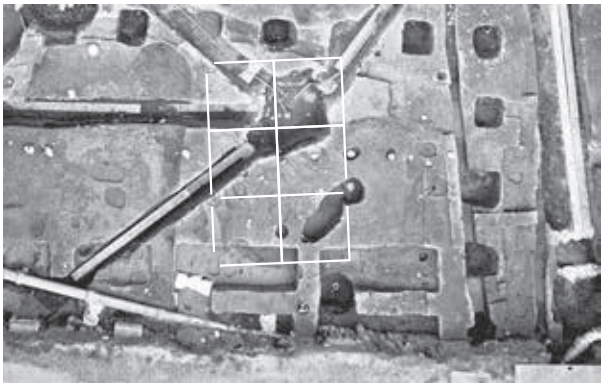
5．29 号遺構セクション北半分（東から）



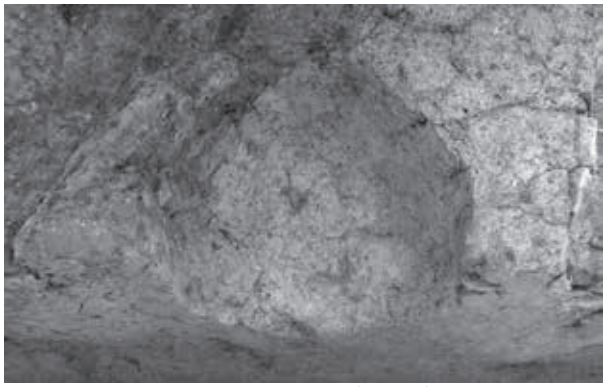
6．30 号遺構（南から）

7．30 号遺構東西セクション（北から）

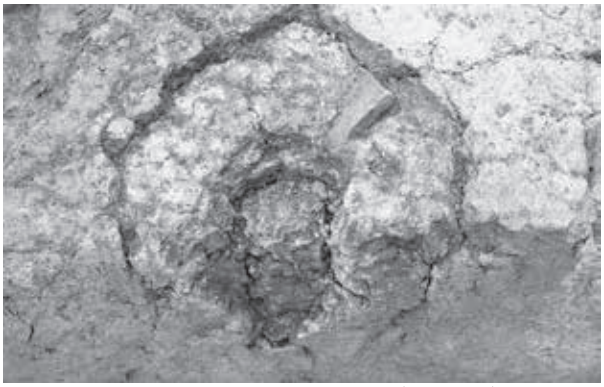
図版36　武家屋敷地区第11地点Ⅱb期の遺構（11）
Pl.36　Features of phase Ⅱb at BK11 (11)



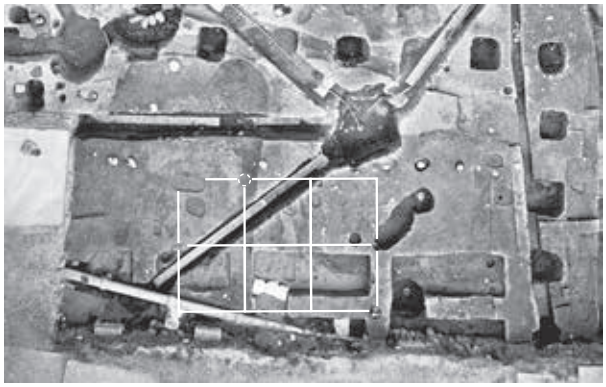
1．33 号建物



2．33 号建物柱２（北から）



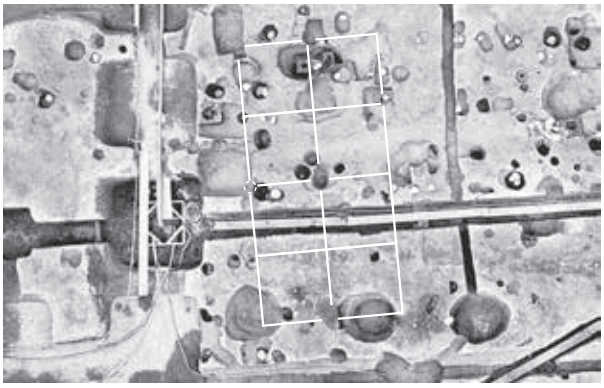
3．33 号建物柱２セクション（北西から）



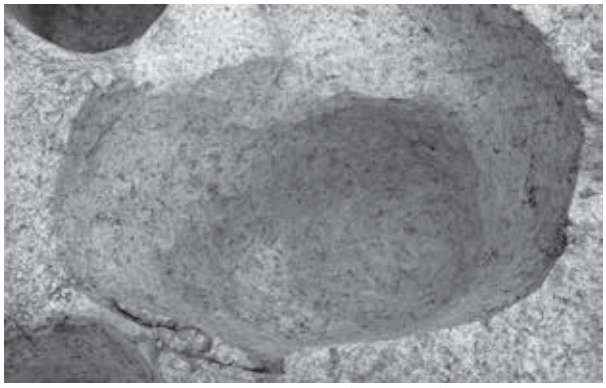
4．34 号建物

5．34 号建物柱１（北から）

6．34 号建物柱１セクション（西から）



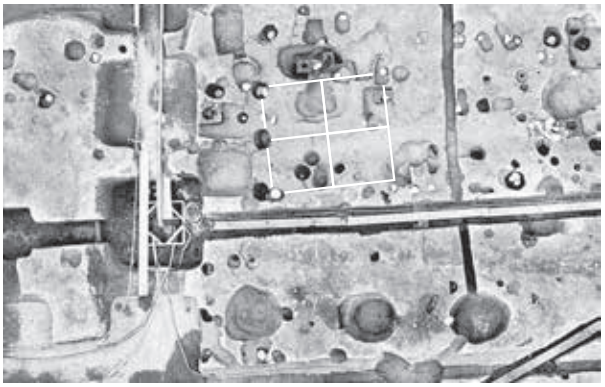
7．35 号建物



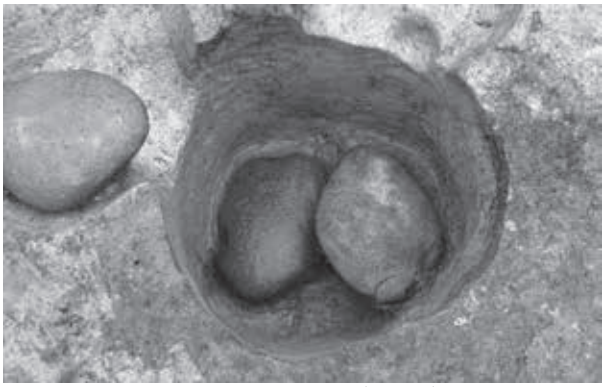
8．35 号建物柱４（北西から）

図版37　武家屋敷地区第11地点Ⅱc期の遺構（１）
Pl.37　Features of phase Ⅱc at BK11 (1)

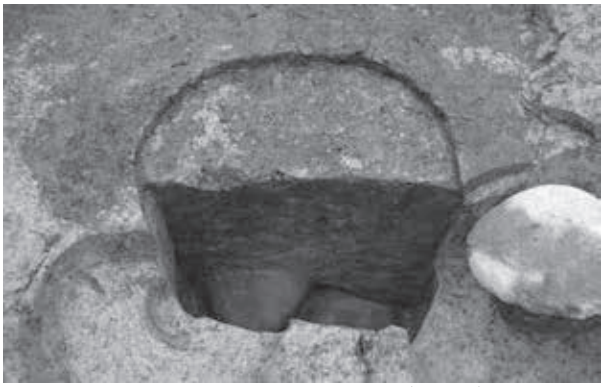
1．35 号建物柱 4 セクション（北から）



2．36 号建物

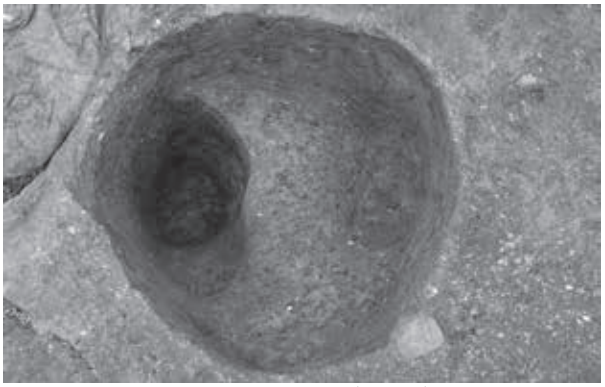


3．36 号建物柱 1 （南から）

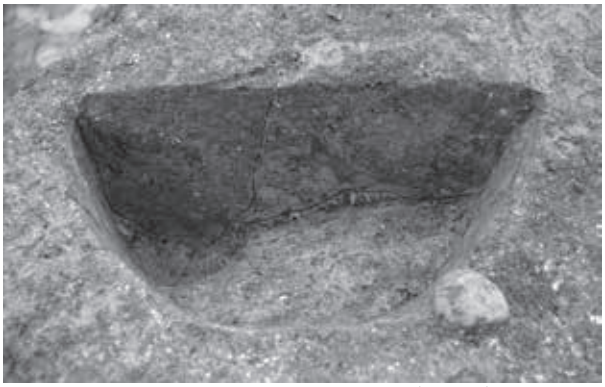


4．36 号建物柱 1 セクション（北から）

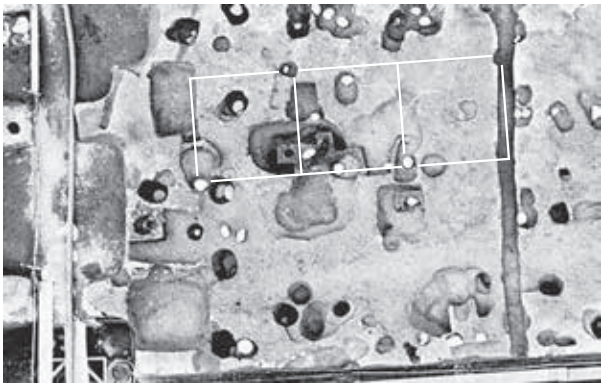
5．37 号建物



6．37 号建物柱 1 （南から）



7．37 号建物柱 1 セクション（南から）

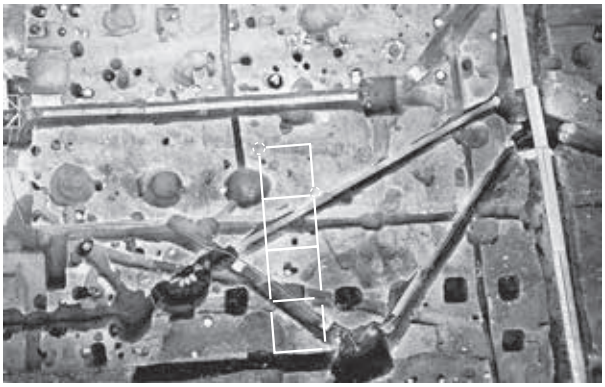


8．38 号建物

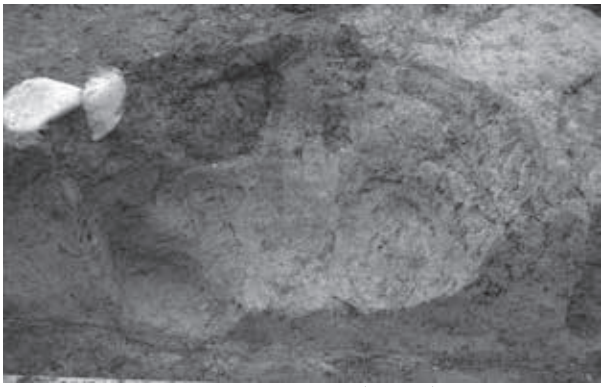
図版38　武家屋敷地区第11地点Ⅱc期の遺構（２）
Pl.38　Features of phase Ⅱc at BK11 (2)

1．38 号建物柱 4（北から）

2．38 号建物柱 4 セクション（北南から）

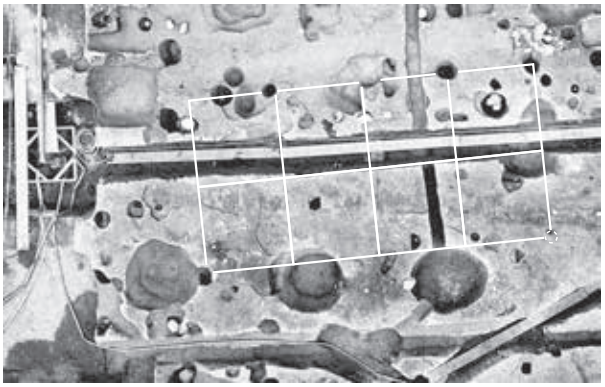


3．39 号建物



4．39 号建物柱 2（北から）

5．39 号建物柱 2 セクション（北東から）

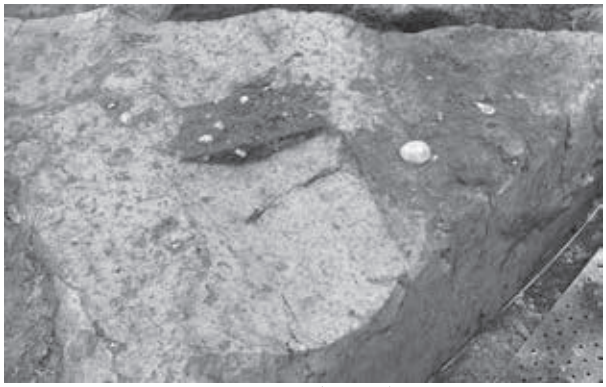


6．40 号建物

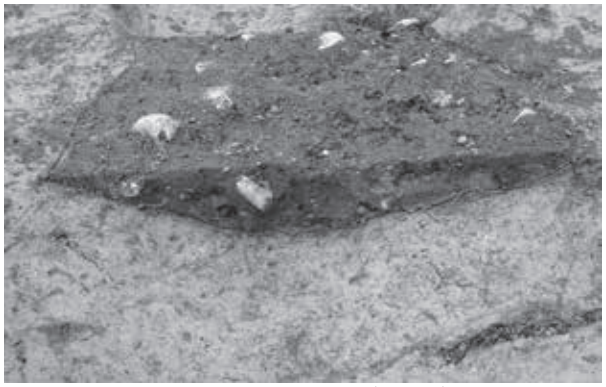
7．40 号建物柱 2（北から）

8．40 号建物柱 2 セクション（北西から）

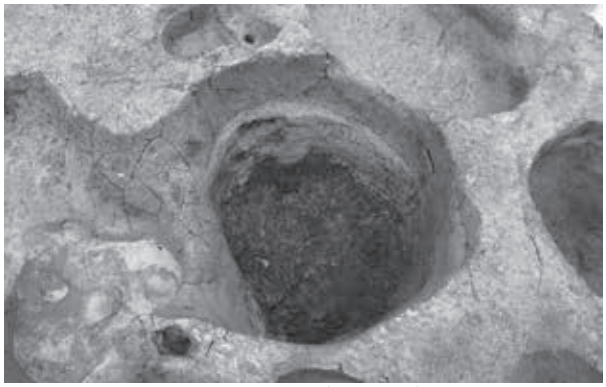
図版39　武家屋敷地区第11地点Ⅱc期の遺構（３）
Pl.39　Features of phase Ⅱc at BK11 (3)



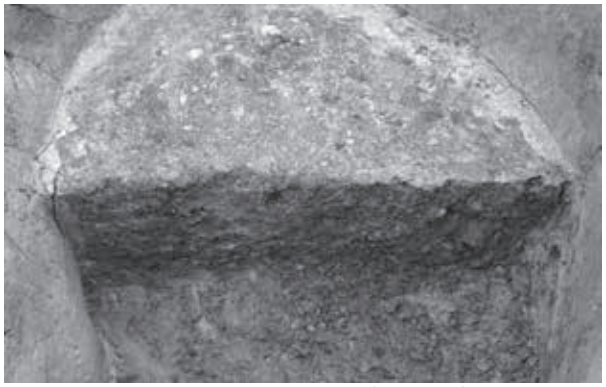
1．9号溝（南から）



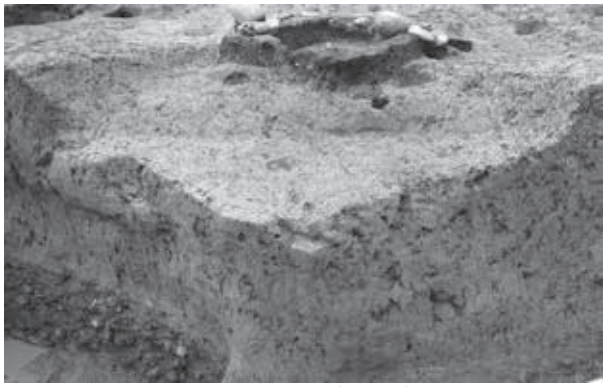
2．9号溝セクション（南から）



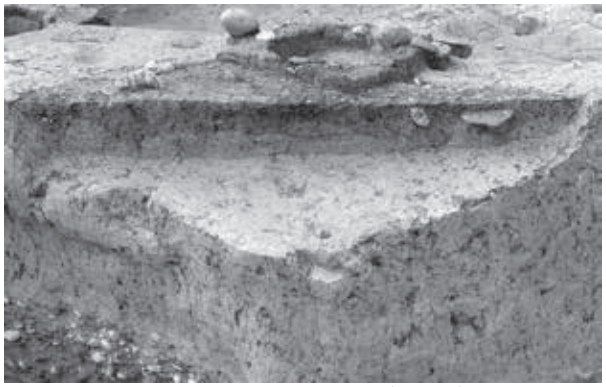
3．8号井戸（北西から）



4．8号井戸セクション（南西から）



5．12号遺構（南から）

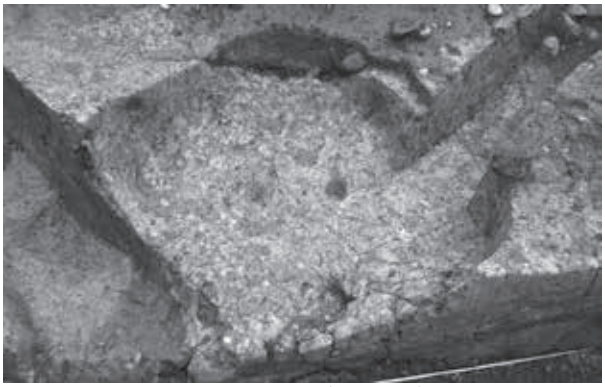


6．12号遺構セクション（南から）

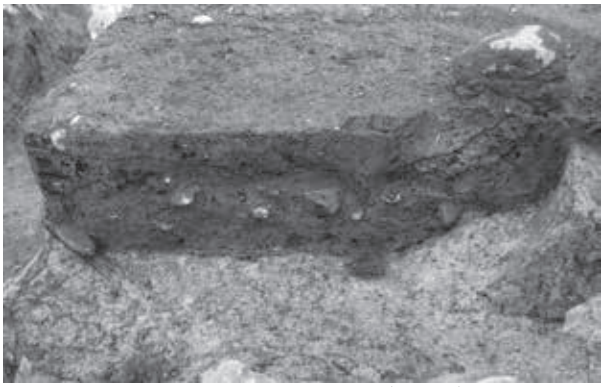
7．13号遺構（南から）

8．13号遺構セクション（東から）

図版40　武家屋敷地区第11地点Ⅱc期の遺構（4）
Pl.40　Features of phase Ⅱc at BK11 (4)



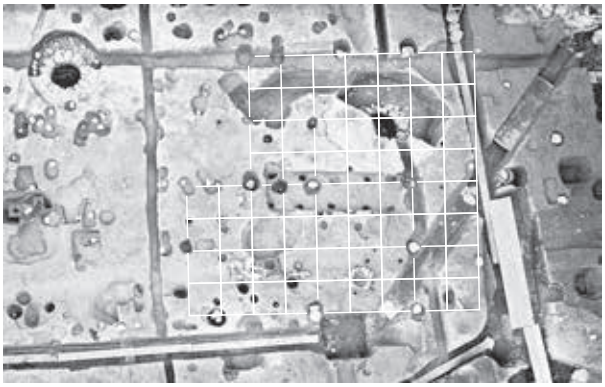
1．23 号遺構（北西から）



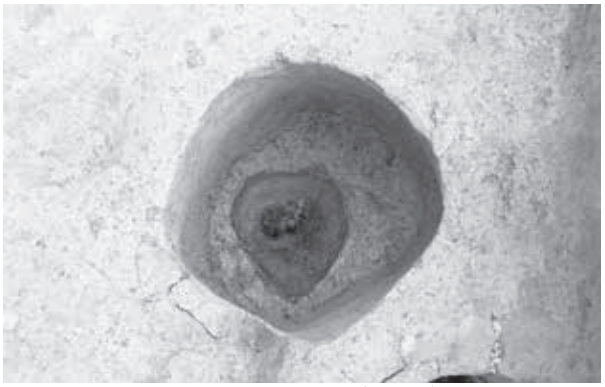
2．23 号遺構セクション（東から）

3．27 号遺構（西から）

4．27 号遺構セクション（南西から）



5．41 号建物



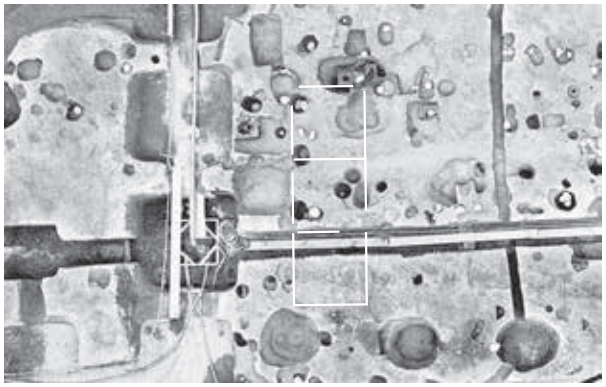
6．41 号建物柱 8（西から）

7．41 号建物柱 8 セクション（南から）

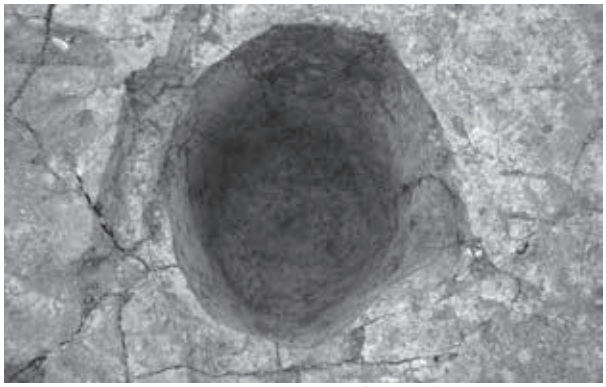
8．41 号建物柱 14（西から）

図版41　武家屋敷地区第11地点Ⅱc～Ⅱd期の遺構
Pl.41　Features of phase Ⅱc～Ⅱd at BK11

1．41 号建物柱 14 セクション（南東から）

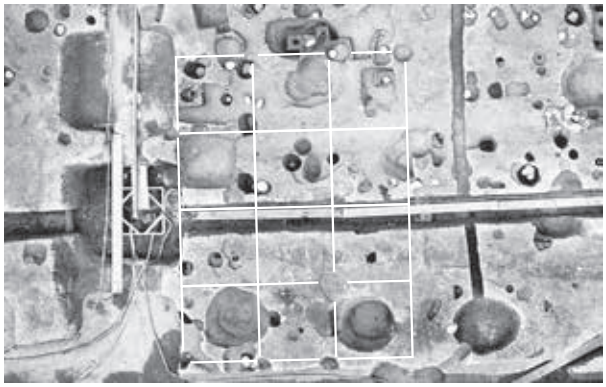


2．42 号建物

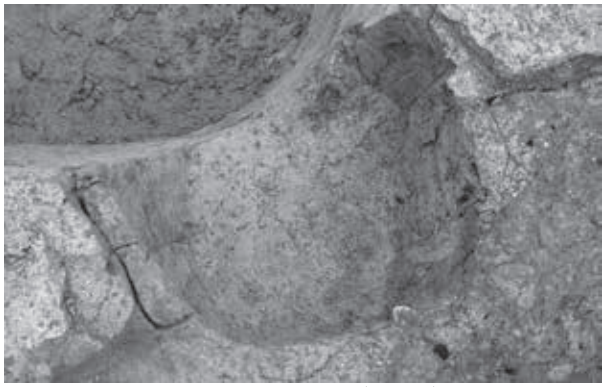


3．42 号建物柱 7（西から）

4．42 号建物柱 7 セクション（西から）

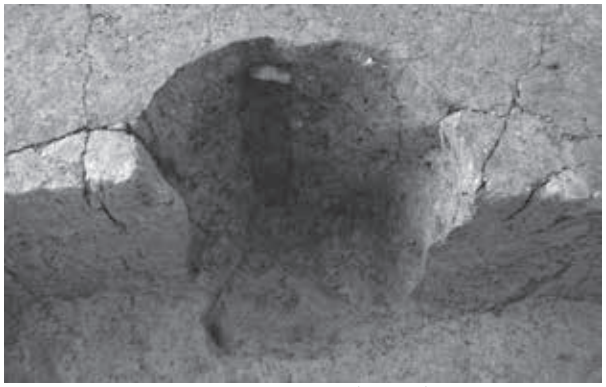


5．43 号建物



6．43 号建物柱 1（南から）

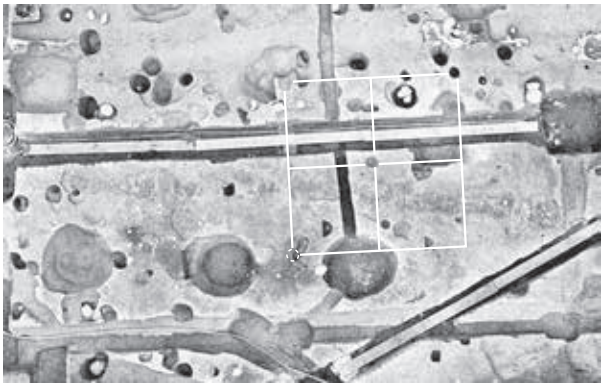
7．43 号建物柱 1 セクション（北西から）



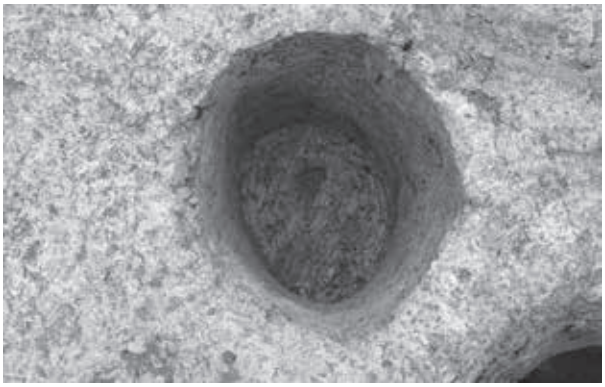
8．43 号建物柱 7（南から）

図版42　武家屋敷地区第11地点Ⅱd期の遺構（1）
Pl.42　Features of phase Ⅱd at BK11 (1)

1．43 号建物柱７セクション（南から）



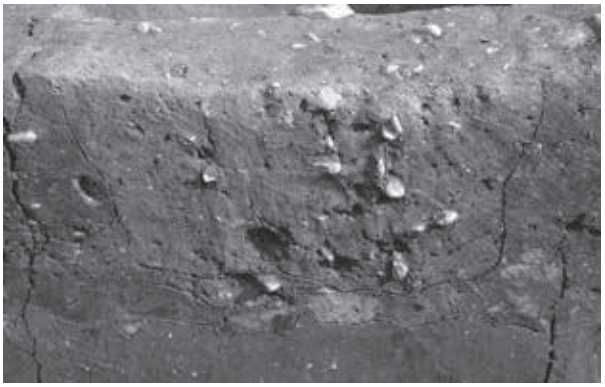
2．44 号建物



3．44 号建物柱２（北から）

4．44 号建物柱２セクション（東から）

5．5 号溝（北から）



6．5 号溝セクション（北から）

7．10 号溝セクション（南から）

図版43　武家屋敷地区第11地点Ⅱd期の遺構（２）
Pl.43　Features of phase Ⅱd at BK11 (2)

1．10 号溝（南から）

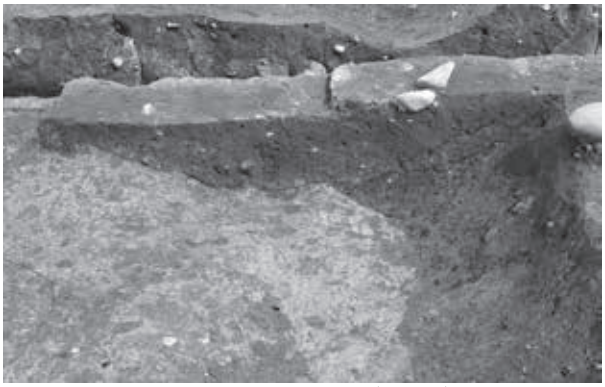
2．11 号溝・12 号溝（南から）

3．11 号溝 H–19 区セクション（北から）

4．12・14 号溝セクション　右 12 号溝、左 14 号溝（北から）

5．13 号溝（南から）

図版44　武家屋敷地区第11地点Ⅱd期の遺構（３）
Pl.44　Features of phase Ⅱd at BK11 (3)



1．13 号溝セクション（南から）

2．5 号井戸（北から）

3．5 号井戸セクション（北から）

4．17 号遺構（南西から）

5．17 号遺構セクションG列（西から）

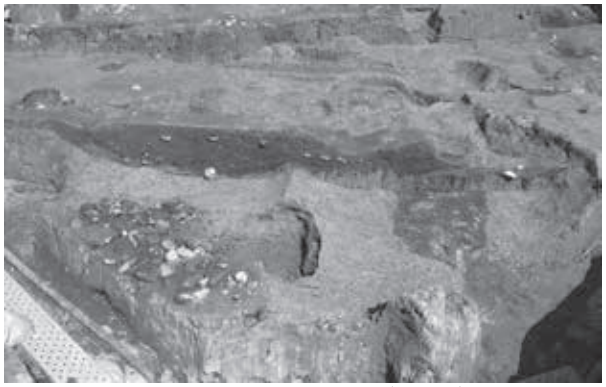
6．17 号遺構セクションH列（西から）

7．17 号遺構セクションI列（南西から）

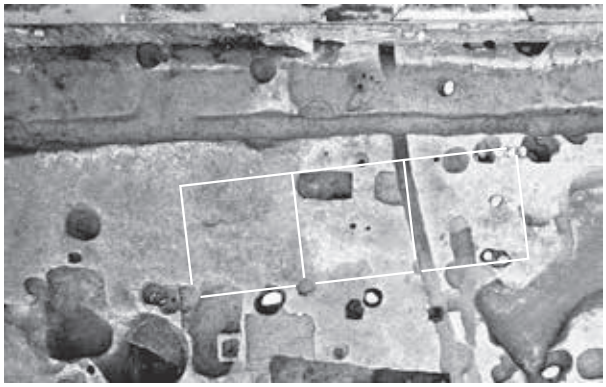
8．18 号遺構（東から）

図版45　武家屋敷地区第11地点Ⅱd期の遺構（4）
Pl.45　Features of phase Ⅱd at BK11 (4)

1．26 号遺構（南から）



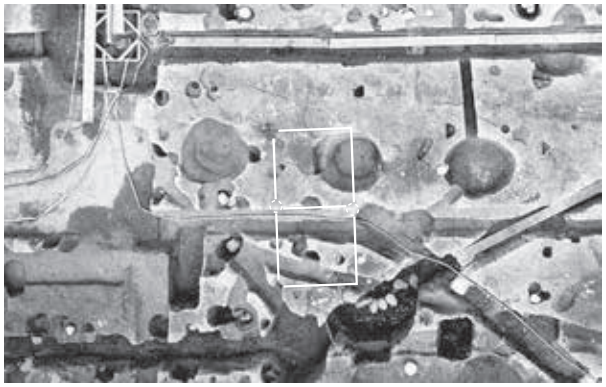
2．26 号遺構セクション（南から）



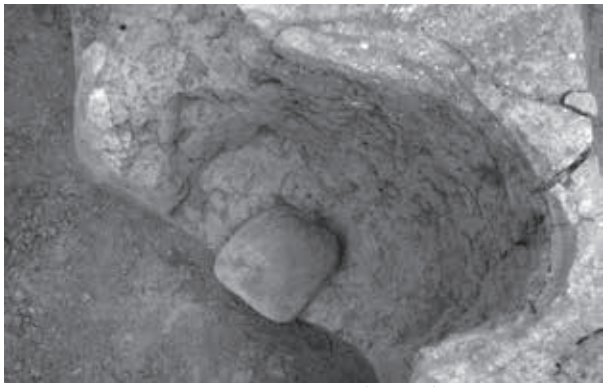
3．45 号建物

4．45 号建物柱 1（北から）

5．45 号建物柱 1 セクション（北東から）



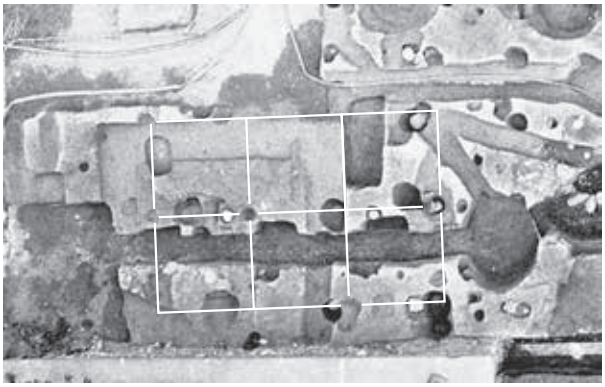
6．46 号建物



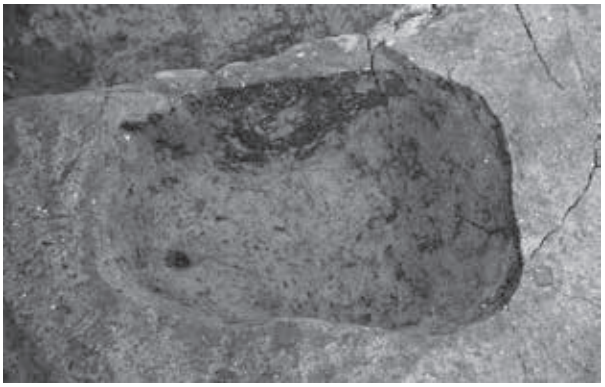
7．46 号建物柱 4（南から）

8．46 号建物柱 4 セクション（南東から）

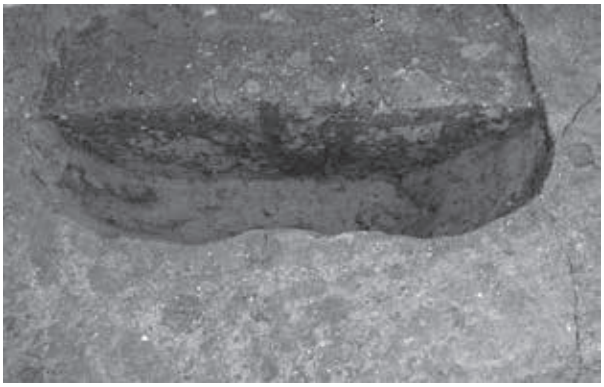
図版46　武家屋敷地区第11地点Ⅱd～Ⅱe期の遺構
Pl.46　Features of phase Ⅱd～Ⅱe at BK11



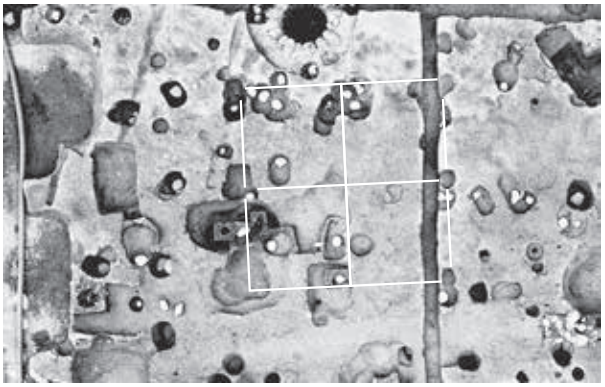
1．47 号建物



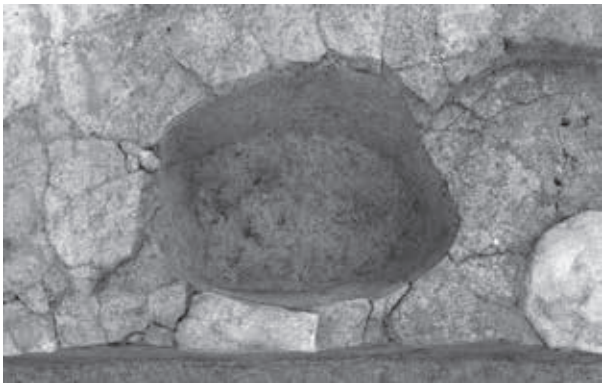
2．47 号建物柱５（南東から）



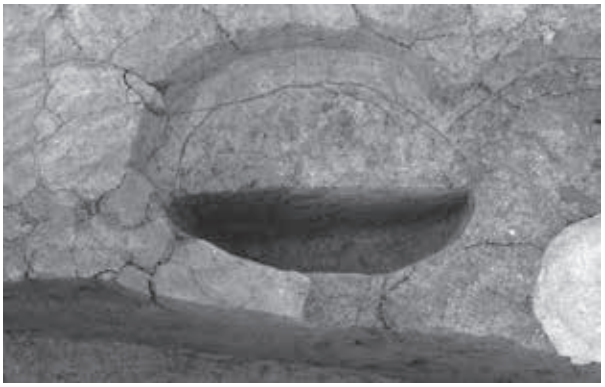
3．47 号建物柱５セクション（東から）



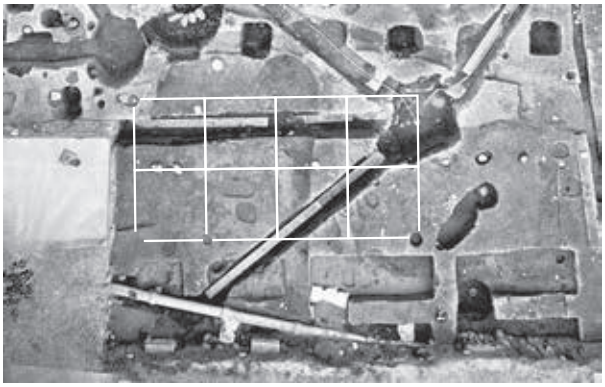
4．48 号建物



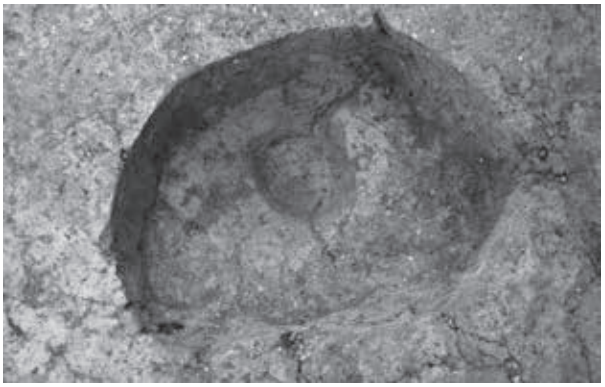
5．48 号建物柱５（西から）



6．48 号建物柱５セクション（西から）

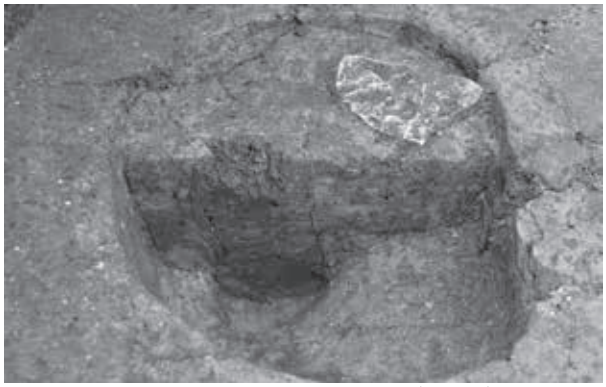


7．49 号建物

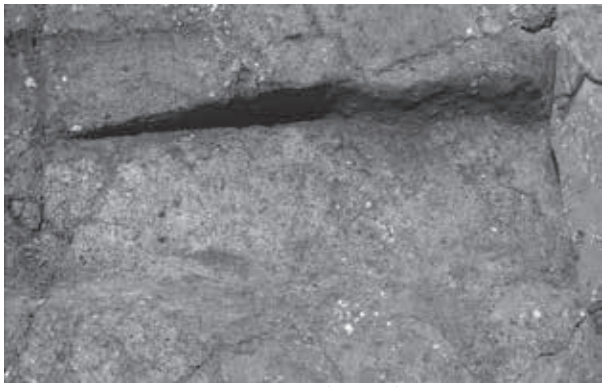


8．49 号建物柱２（北から）

図版47　武家屋敷地区第11地点Ⅱe期の遺構（１）
Pl.47　Features of phase Ⅱe at BK11 (1)



1．49 号建物柱２セクション（東から）



2．1 号溝（東から）

3．1 号溝セクション（南から）

4．2 号溝（西から）

5．2 号溝 13 列セクション（西から）

6．2 号溝 14 列セクション（西から）

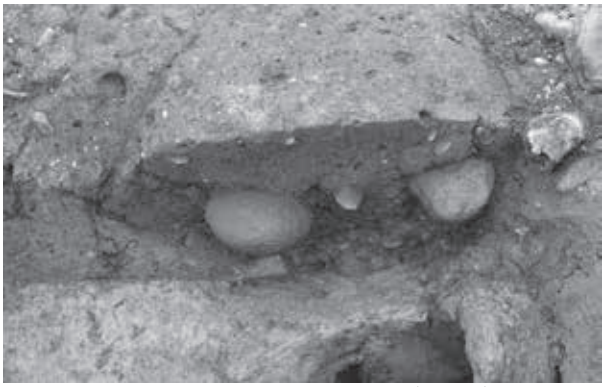
7．2 号溝 15 列セクション（西から）

図版48　武家屋敷地区第11地点Ⅱe期の遺構（２）
Pl.48　Features of phase Ⅱe at BK11 (2)

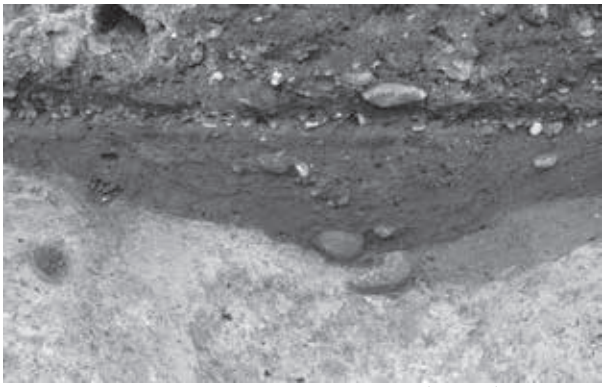
1．2 号溝 C–20 区セクション（西から）

2．2 号溝 15・16 列（北から）

3．3 号溝（北から）



4．3 号溝 B–17 区セクション（南から）

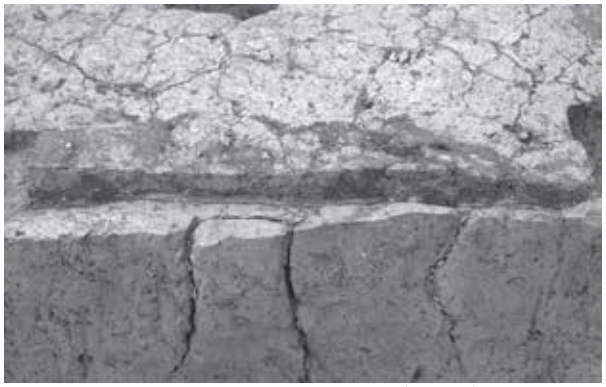


5．3 号溝調査区北壁セクション（南から）

6．4 号溝（東から）

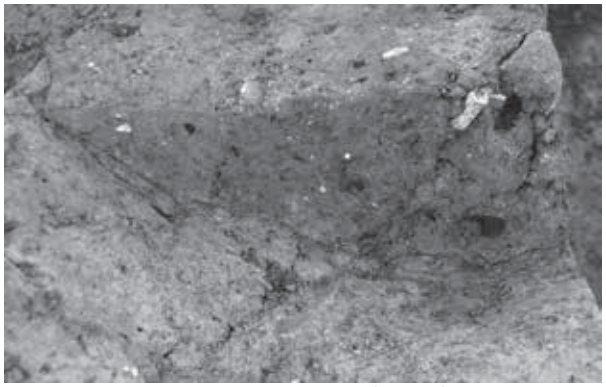
図版49　武家屋敷地区第11地点Ⅱe期の遺構（３）
Pl.49　Features of phase Ⅱe at BK11 (3)

1．4 号溝セクション 16 列（南から）



2．4 号溝セクション 17 列（南から）

3．4 号溝セクション（東から）

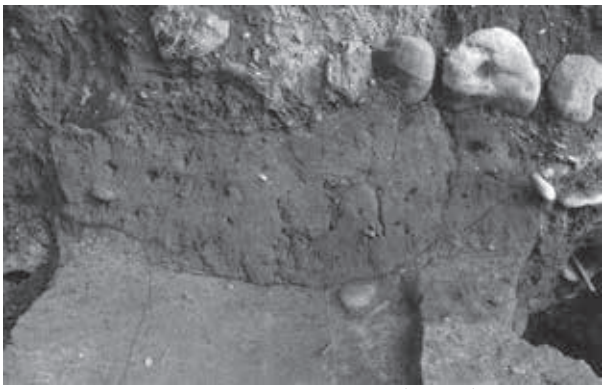


5．8 号溝セクション（南から）

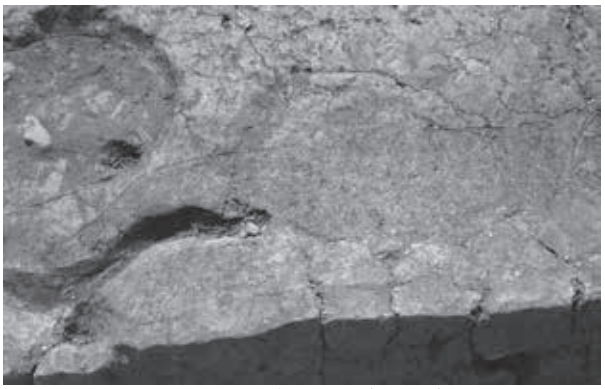
4．8 号溝（南から）

6．14 号溝（南から）

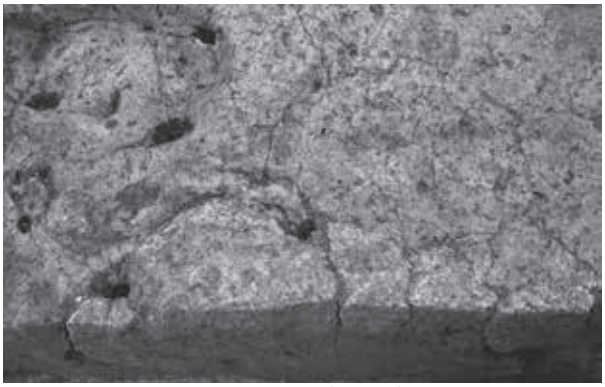
図版50　武家屋敷地区第11地点Ⅱe期の遺構（４）
Pl.50　Features of phase Ⅱe at BK11 (4)



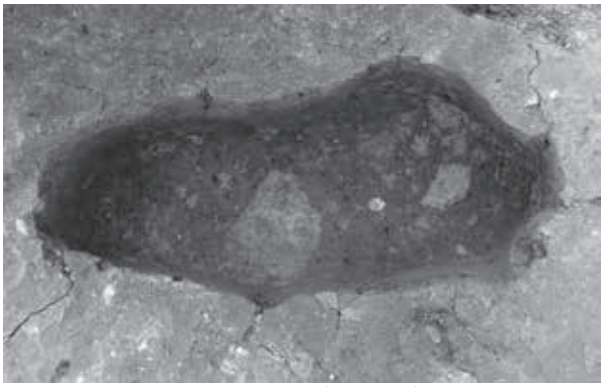
1．14 号溝南壁セクション（北から）



2．16 号溝検出状況（東から）

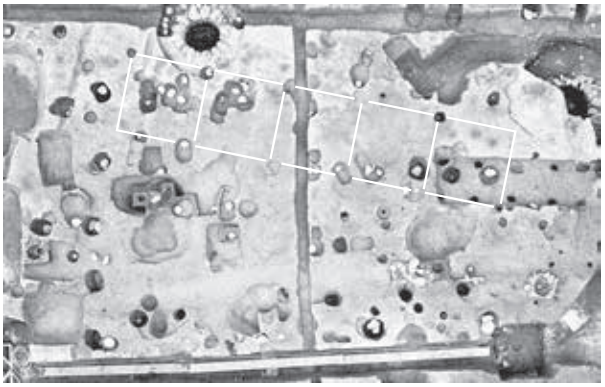


3．16 号溝（東から）

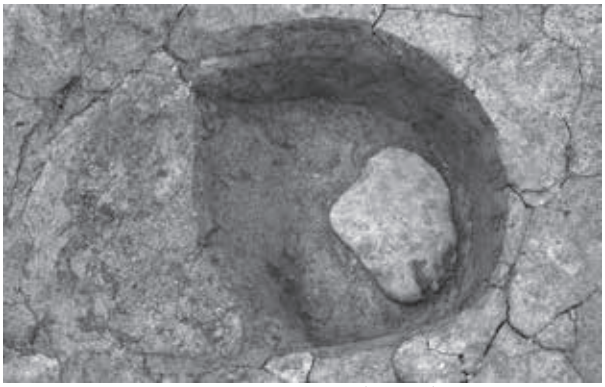


4．焼土遺構（南東から）

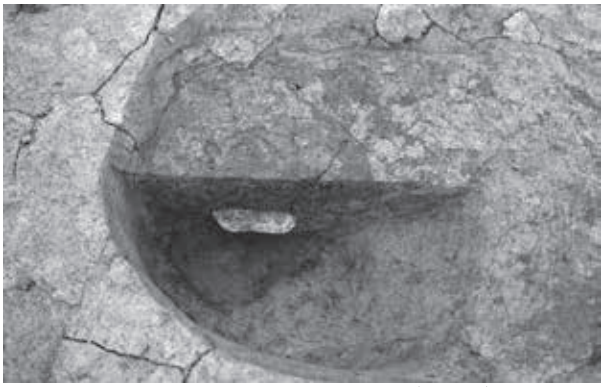
5．焼土遺構セクション（南東から）



6．50 号建物

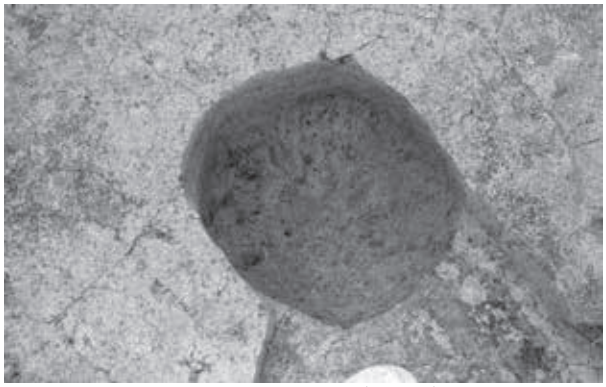


7．50 号建物柱 6（東から）



8．50 号建物柱 6 セクション（西から）

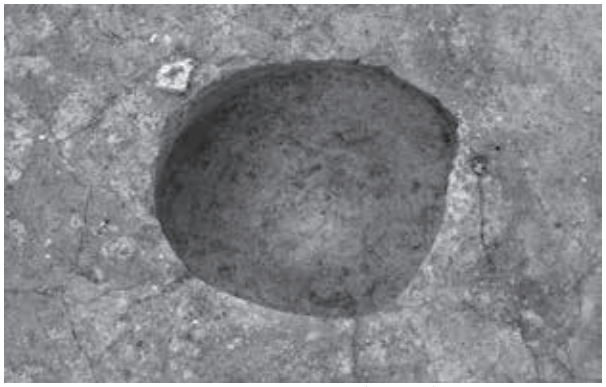
図版51　武家屋敷地区第11地点Ⅱe～Ⅲ期の遺構
Pl.51　Features of phase Ⅱe～Ⅲ at BK11



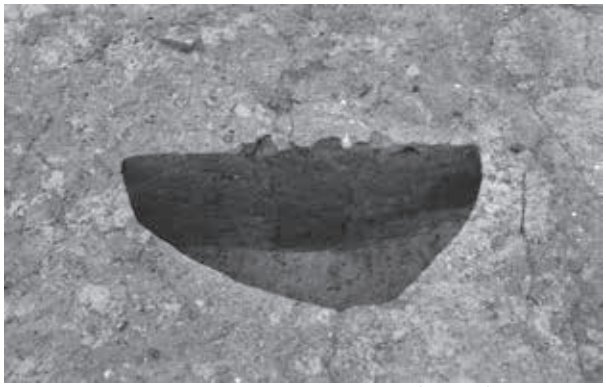
1．50 号建物柱 8（北から）

2．50 号建物柱 8 セクション（南西から）

3．51 号建物

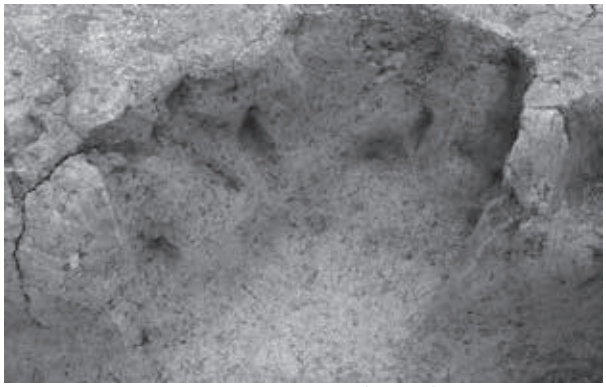


4．51 号建物柱 1（北から）

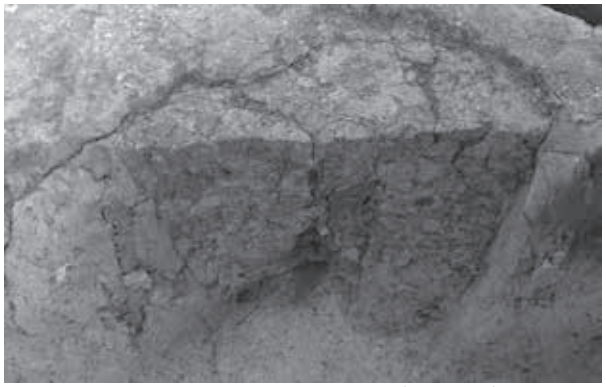


5．51 号建物柱 1 セクション（北から）

6．52 号建物

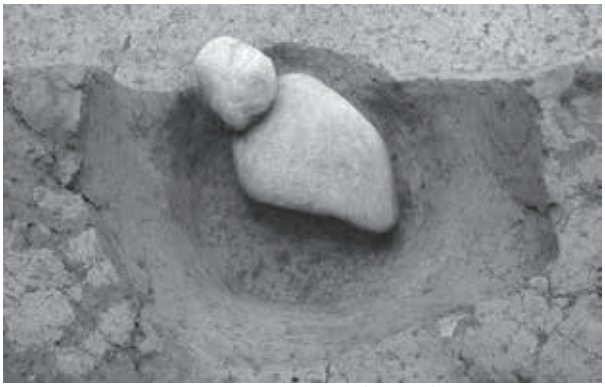


7．52 号建物柱 1（北から）

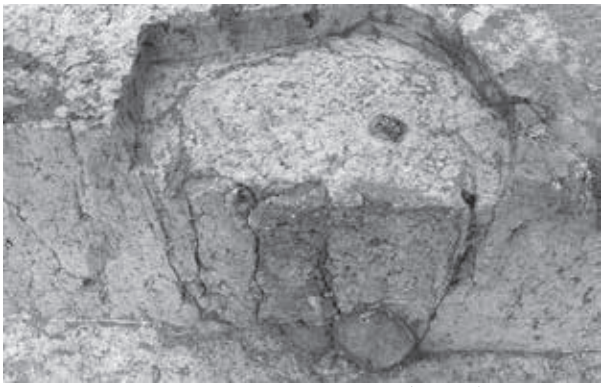


8．52 号建物柱 1 セクション（北西から）

図版52　武家屋敷地区第11地点Ⅲ期の遺構（1）
Pl.52　Features of phase Ⅲ at BK11 (1)

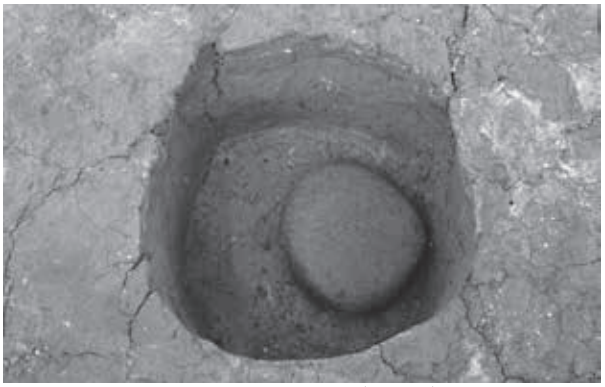


1．52 号建物柱３（北から）



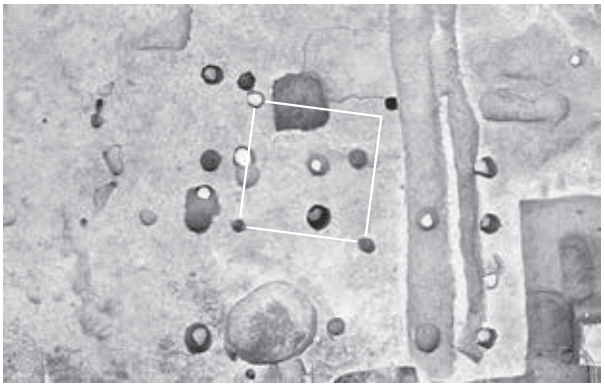
2．52 号建物柱３セクション（南から）

3．53 号建物

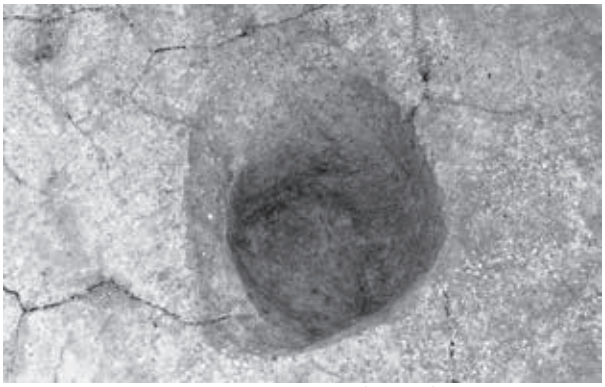


4．53 号建物柱１（西から）

5．53 号建物柱１セクション（西から）



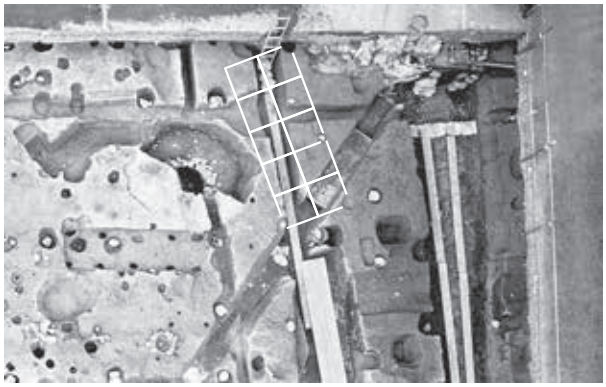
6．54 号建物



7．54 号建物柱２（西から）

8．54 号建物柱２セクション（南から）

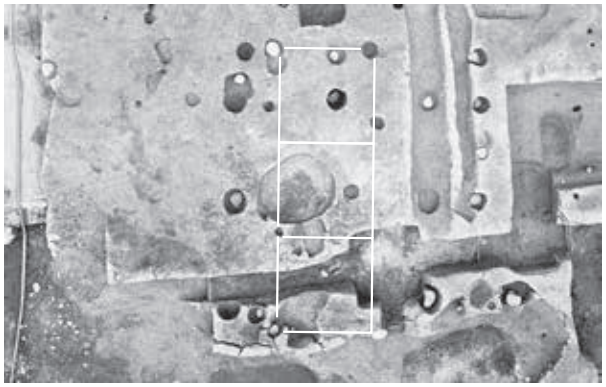
図版53　武家屋敷地区第11地点Ⅲ期の遺構（２）
Pl.53　Features of phase Ⅲ at BK11 (2)



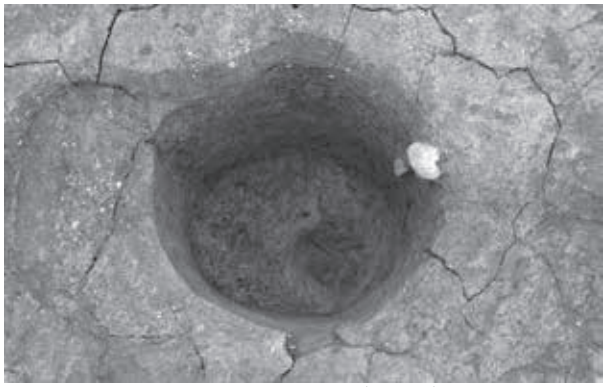
1．55 号建物

2．55 号建物柱 2（南から）

3．55 号建物柱 2 セクション（南から）

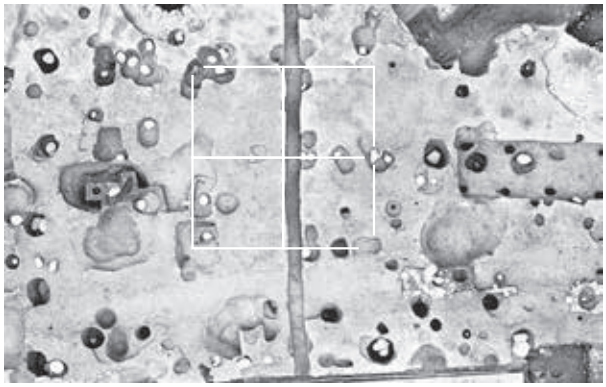


4．56 号建物

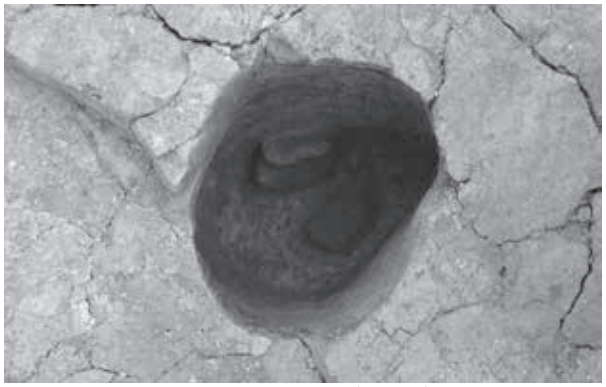


5．56 号建物柱 4（北から）

6．56 号建物柱 4 セクション（北から）



7．57 号建物

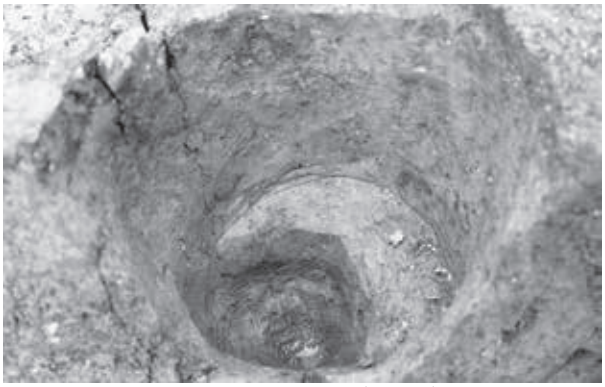


8．57 号建物柱 1（北から）

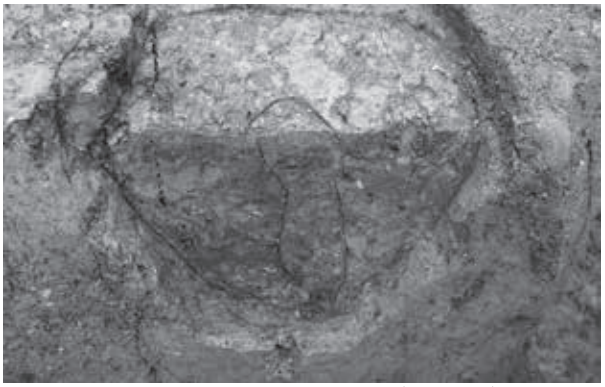
図版54　武家屋敷地区第11地点Ⅲ期の遺構（3）
Pl.54　Features of phase Ⅲ at BK11 (3)

1．57 号建物柱 1 セクション（北から）

2．58 号建物



3．58 号建物柱 2（東から）



4．58 号建物柱 2 セクション（南東から）

5．7 号井戸（南から）

6．7 号井戸セクション（南から）

7．1 号暗渠蓋石検出状況全景（北から）

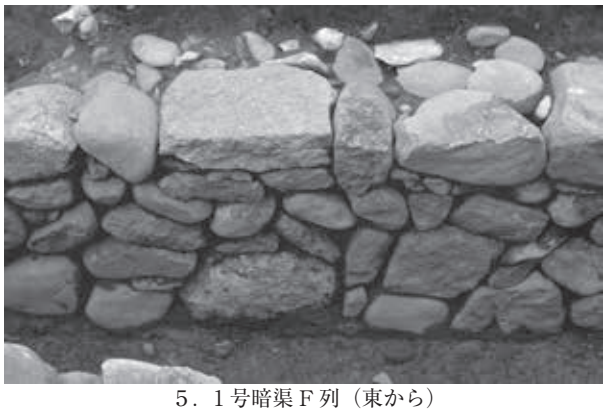
図版55　武家屋敷地区第11地点Ⅲ期・2層上面の遺構
Pl.55　Features of phase Ⅲ・surface of layer 2 at BK11

1．1 号暗渠蓋石撤去状況全景（北から）

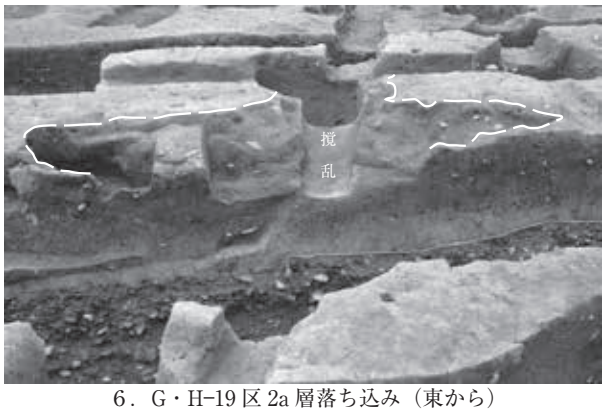
2．1 号暗渠（南から）

3．1 号暗渠北壁セクション（南から）

4．1 号暗渠 C 列（西から）

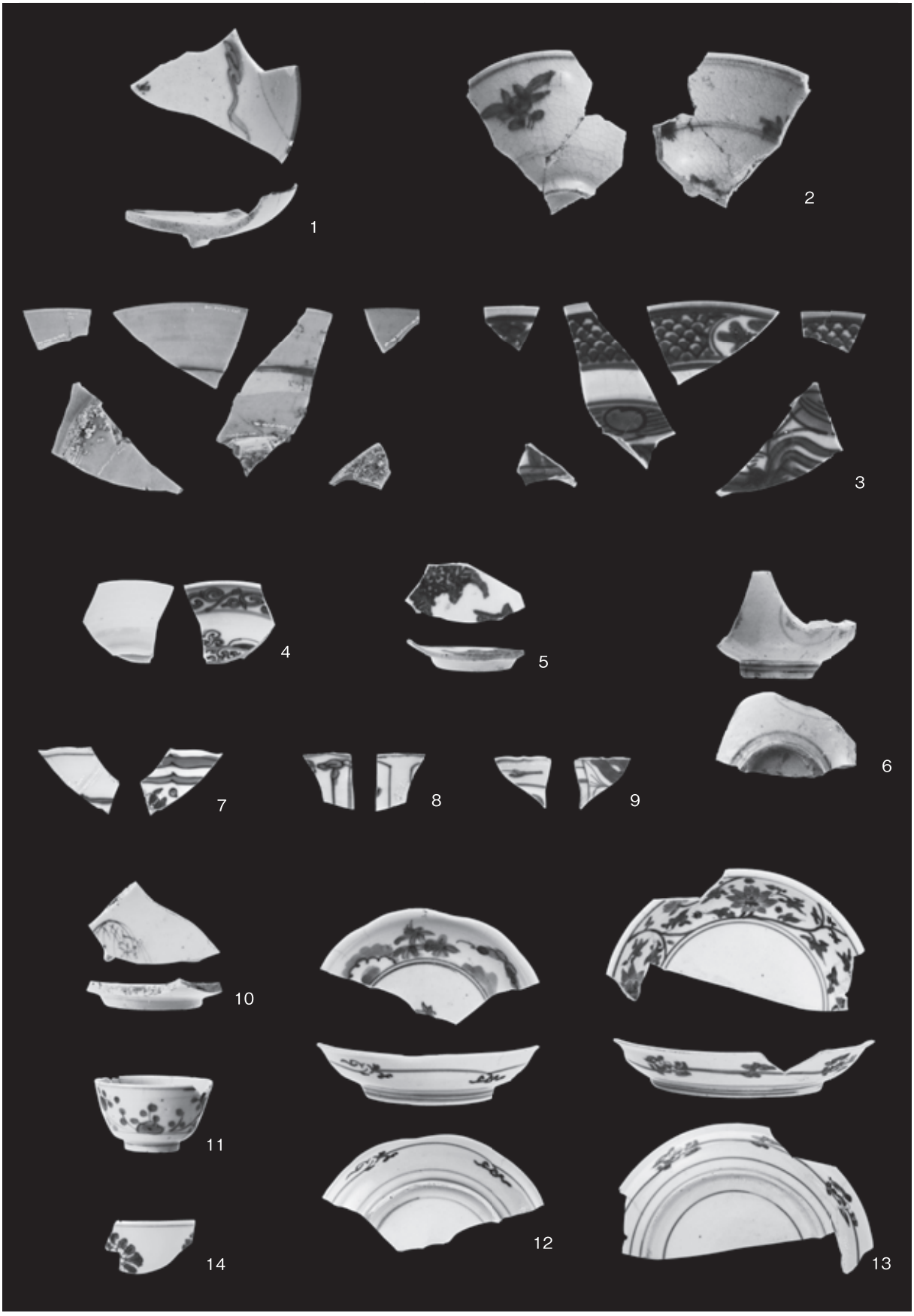


5．1 号暗渠 F 列（東から）



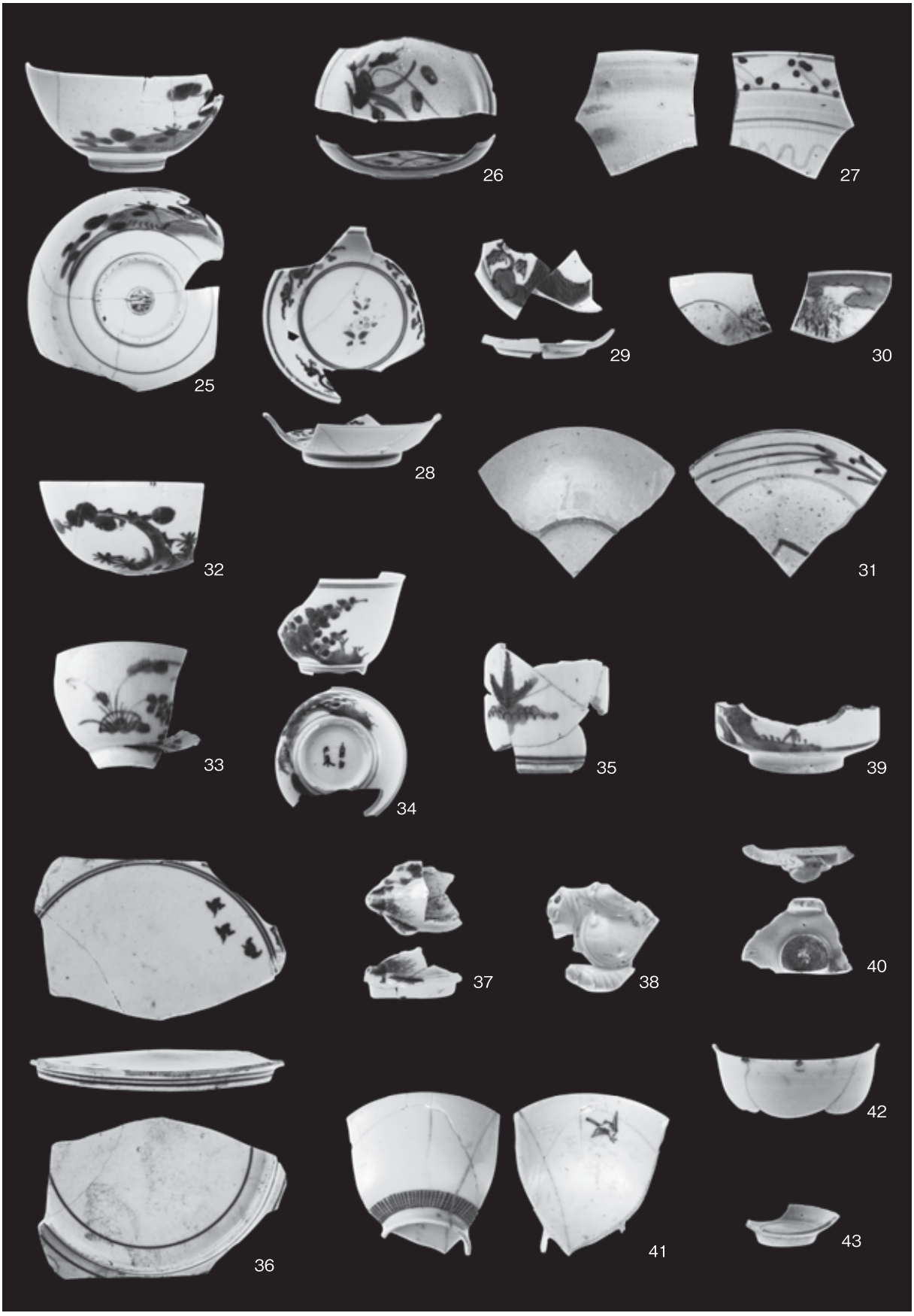
6．G・H-19 区 2a 層落ち込み（東から）

図版56　武家屋敷地区第11地点２層上面の遺構
Pl.56　Features of phase surface of layer 2 at BK11

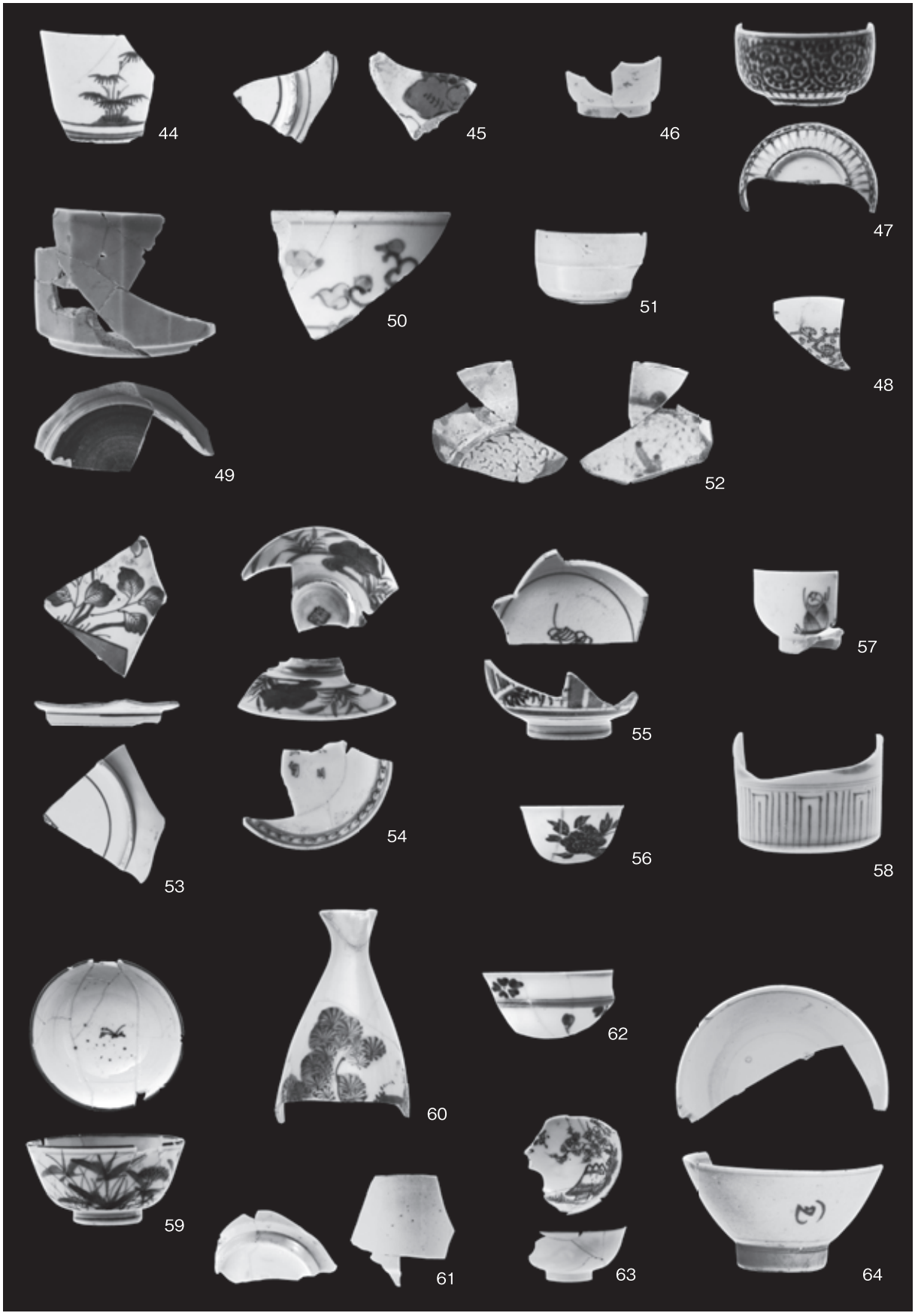


図版57　武家屋敷地区第11地点出土磁器（1）　S= 1 : 3
Pl.57　Porcelains from BK11 (1)

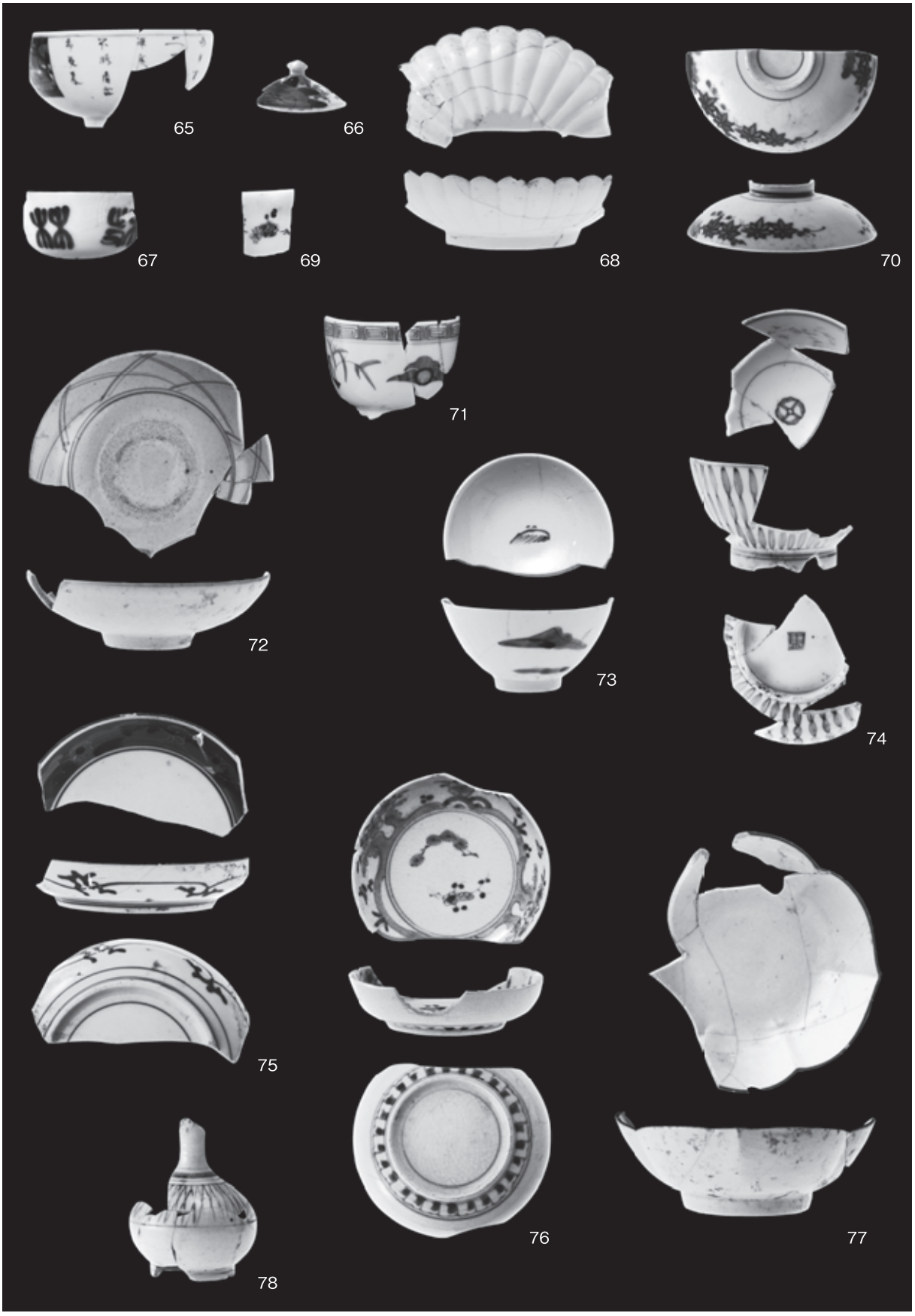
図版58　武家屋敷地区第11地点出土磁器（2）　S= 1 : 3
Pl.58　Porcelains from BK11 (2)



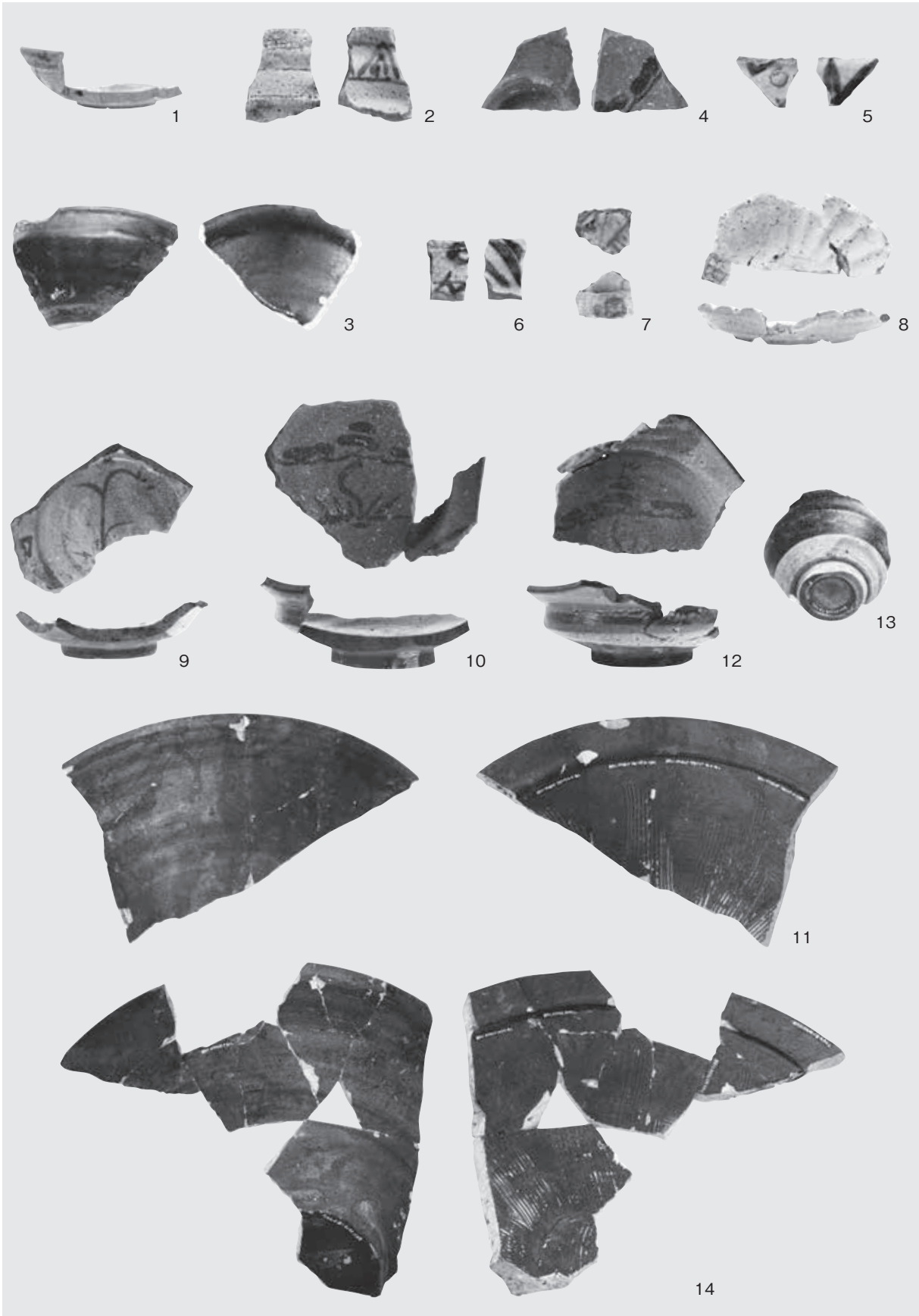
図版59　武家屋敷地区第11地点出土磁器（3）　S= 1 : 3
Pl.59　Porcelains from BK11 (3)



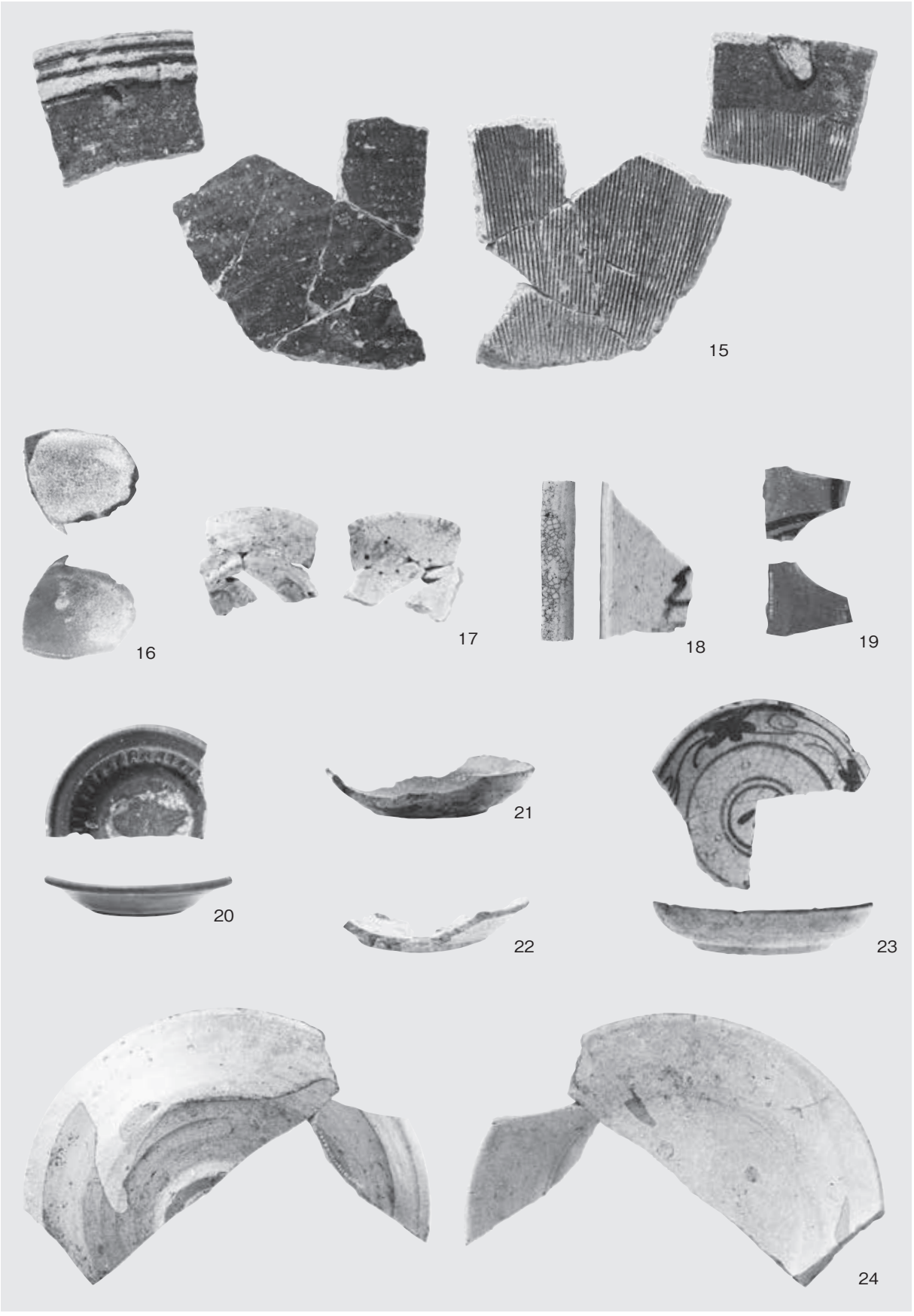
図版60　武家屋敷地区第11地点出土磁器（4）　S= 1 : 3
Pl.60　Porcelains from BK11 (4)



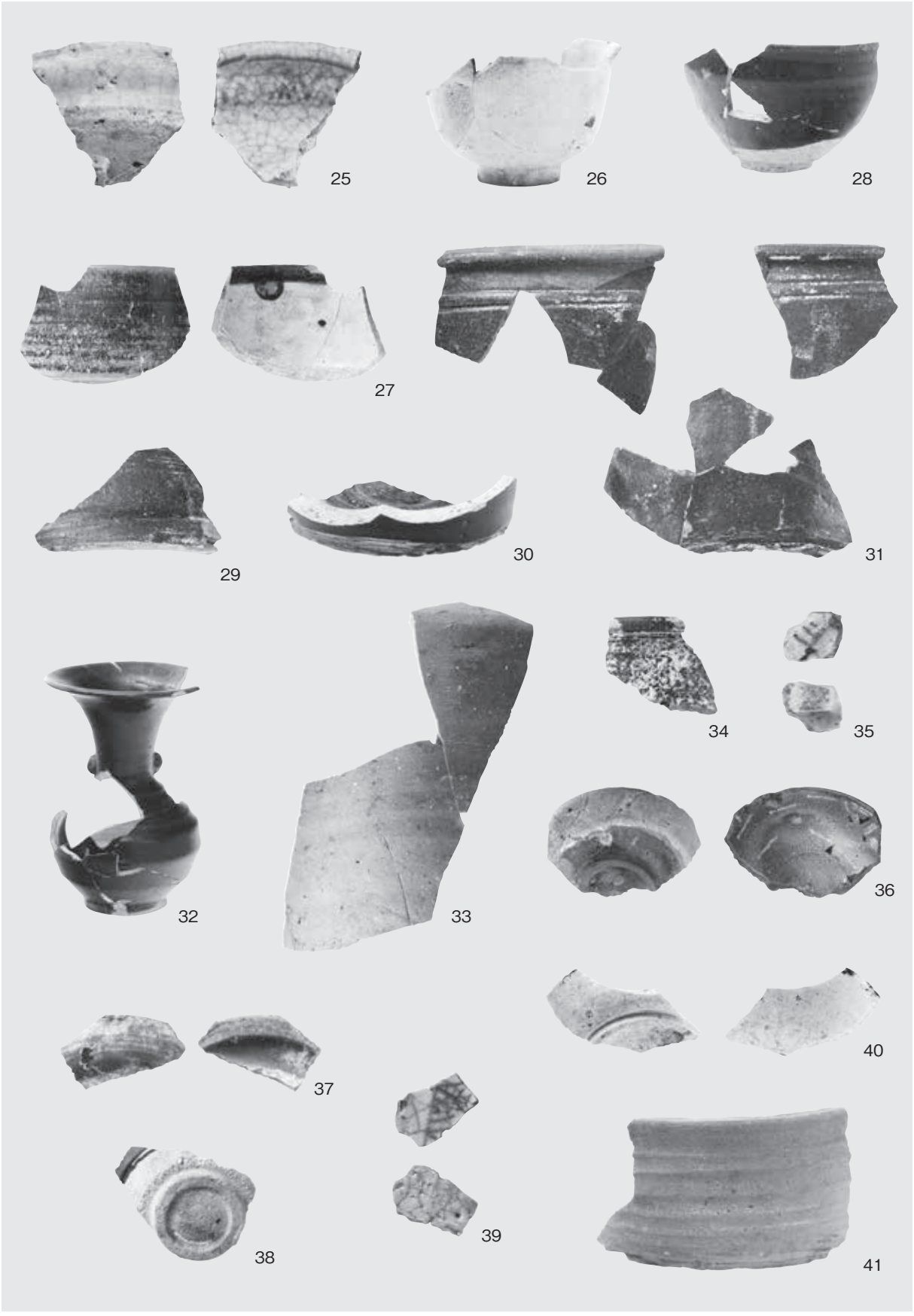
図版61　武家屋敷地区第11地点出土磁器（５）　S= 1 : 3
Pl.61　Porcelains from BK11 (5)



図版62　武家屋敷地区第11地点出土陶器（1）　S= 1 : 3
Pl.62　Glazed ceramics from BK11 (1)

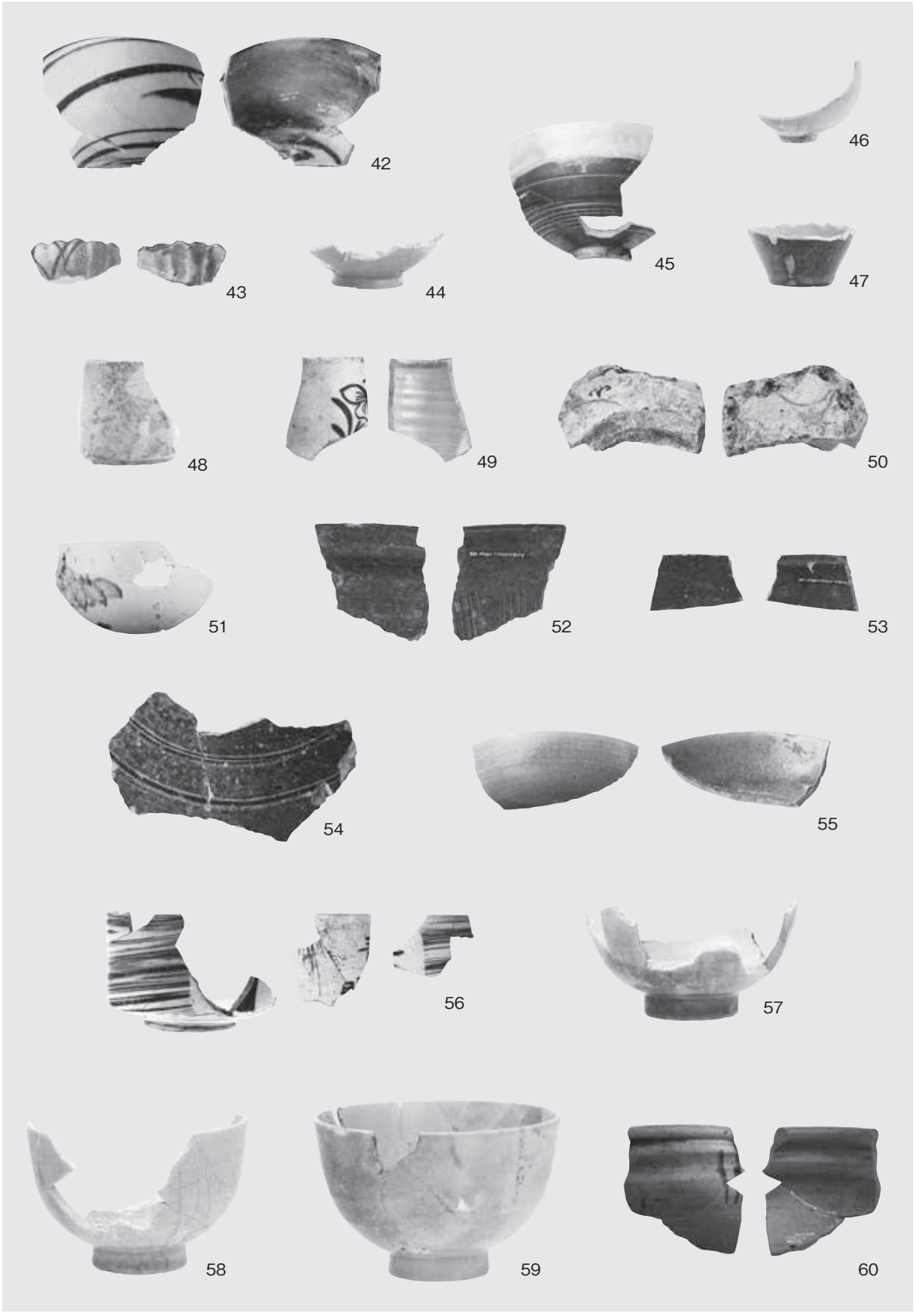


図版63　武家屋敷地区第11地点出土陶器（2）　S= 1 : 3
Pl.63　Glazed ceramics from BK11 (2)

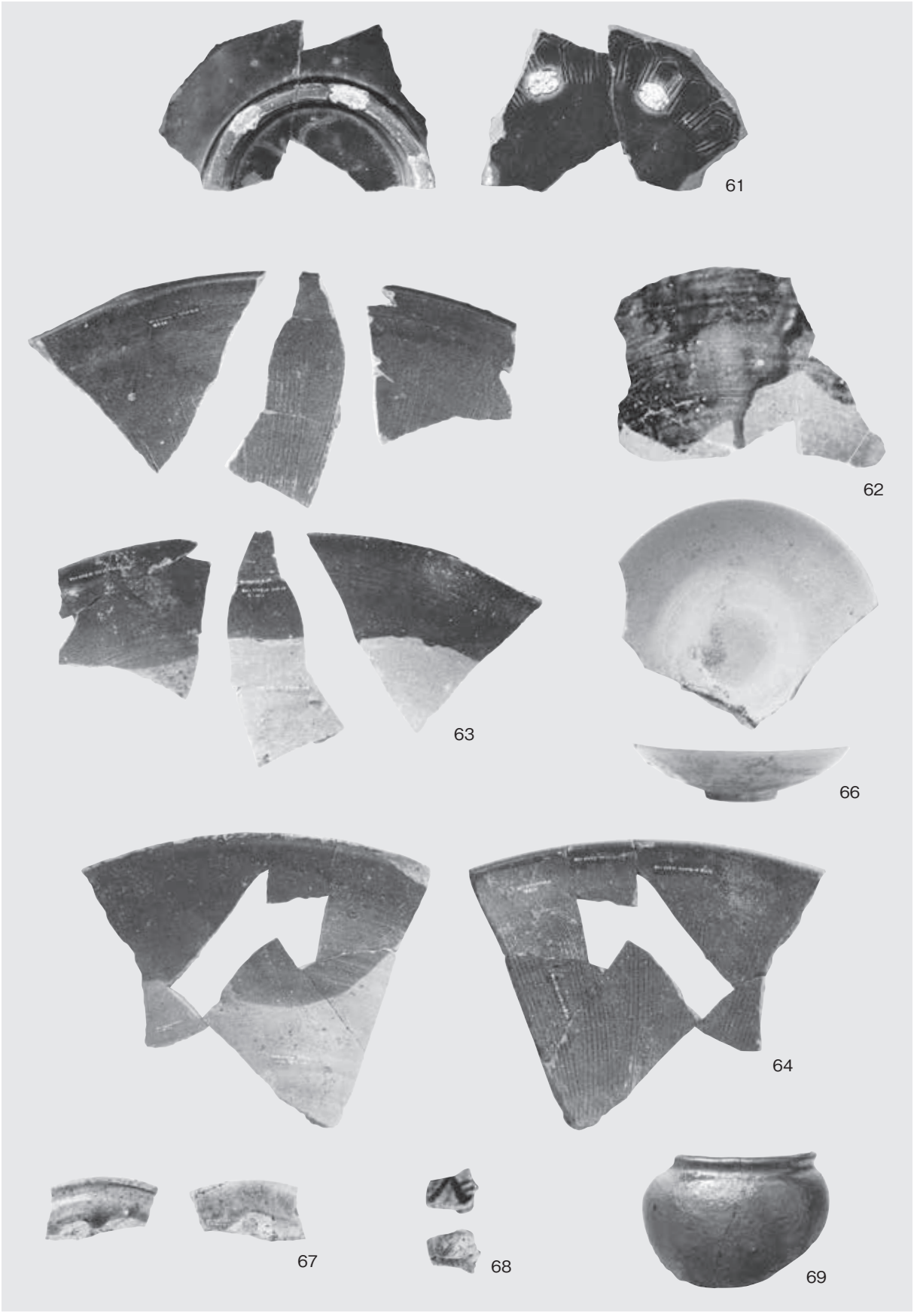


図版64　武家屋敷地区第11地点出土陶器（3）
Pl.64　Glazed ceramics from BK11 (3)

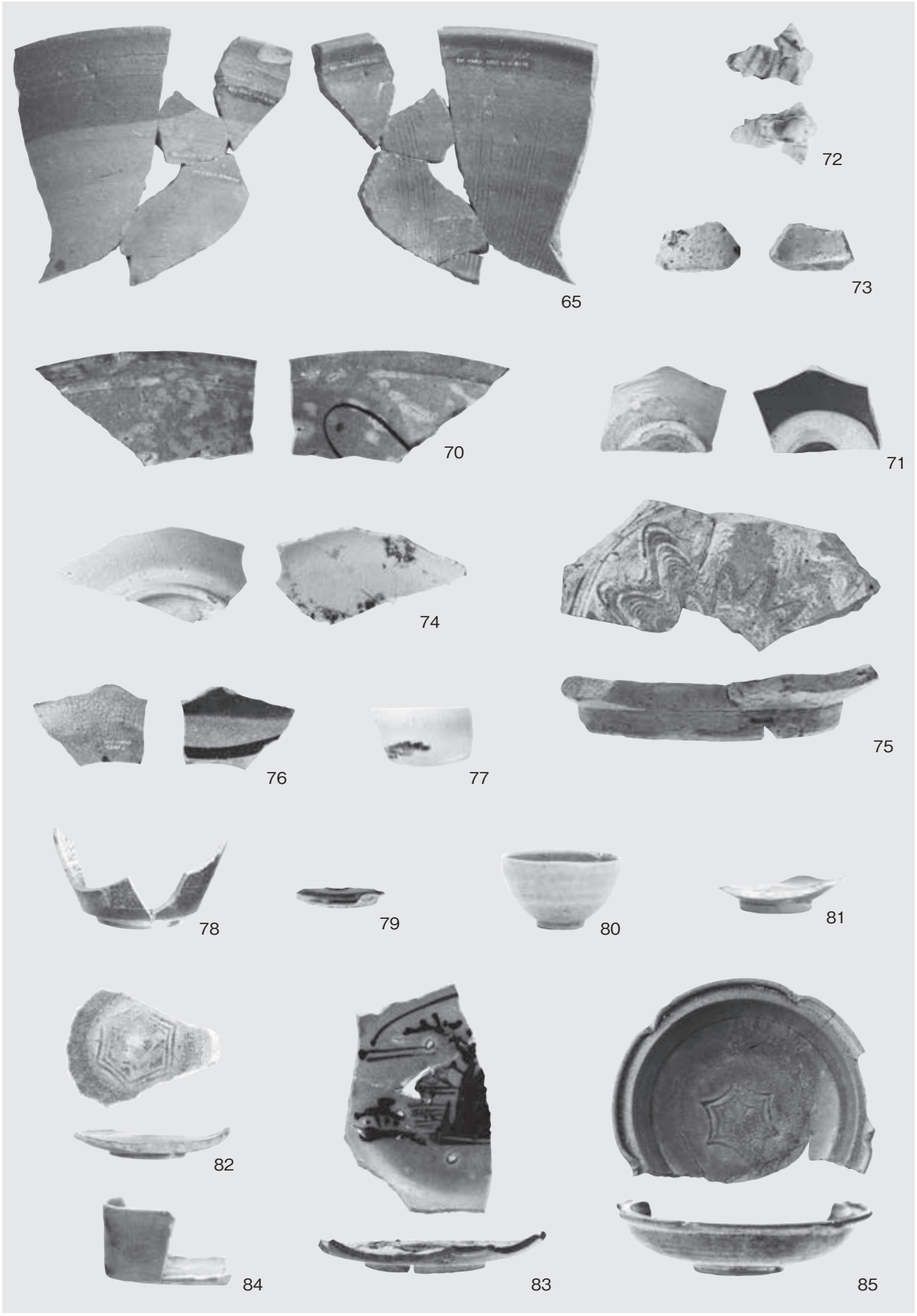
S= 1 : 3



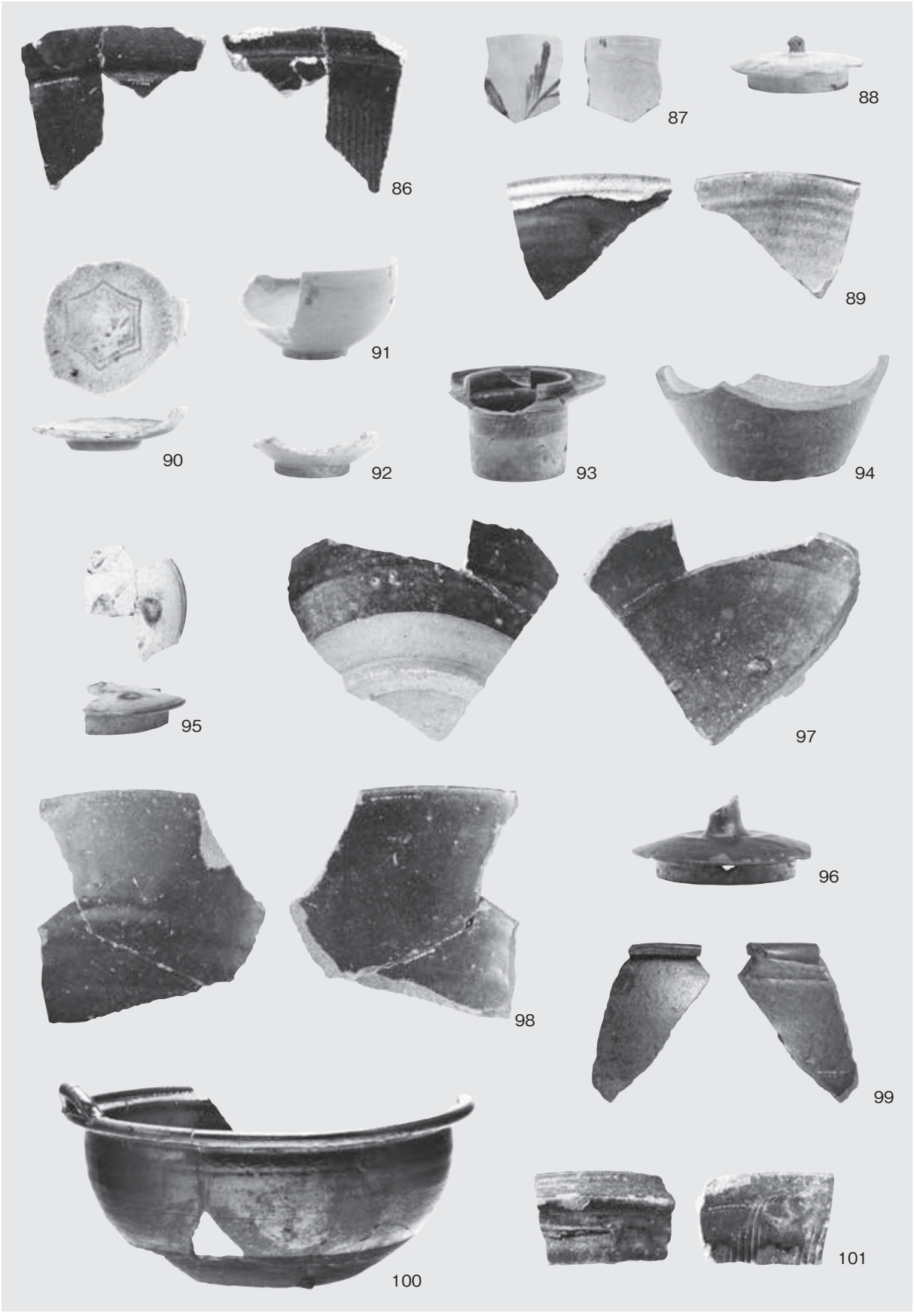
図版65　武家屋敷地区第11地点出土陶器（4）　S= 1 : 3
Pl.65　Glazed ceramics from BK11 (4)



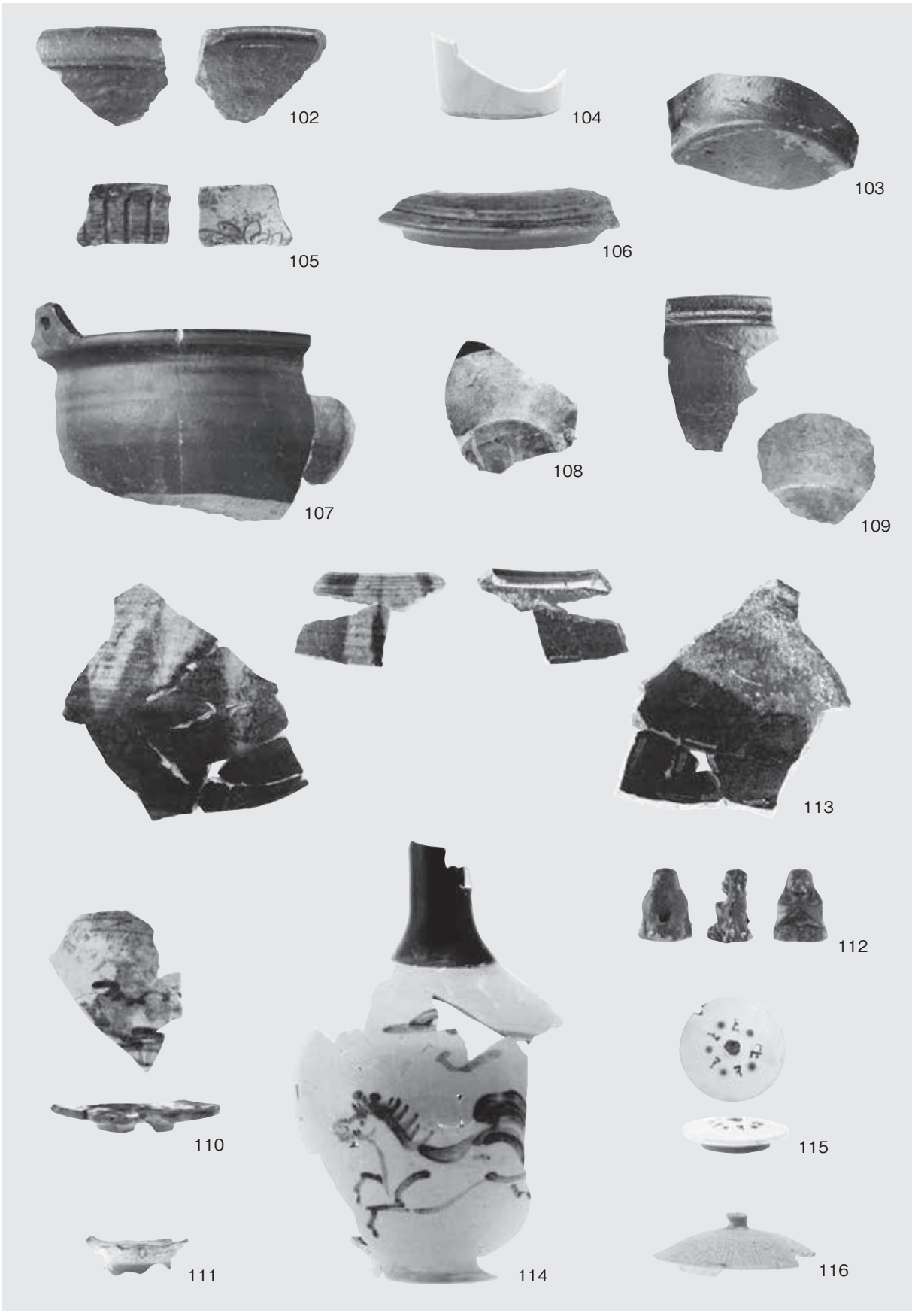
図版66　武家屋敷地区第11地点出土陶器（5）　S= 1 : 3
Pl.66　Glazed ceramics from BK11 (5)



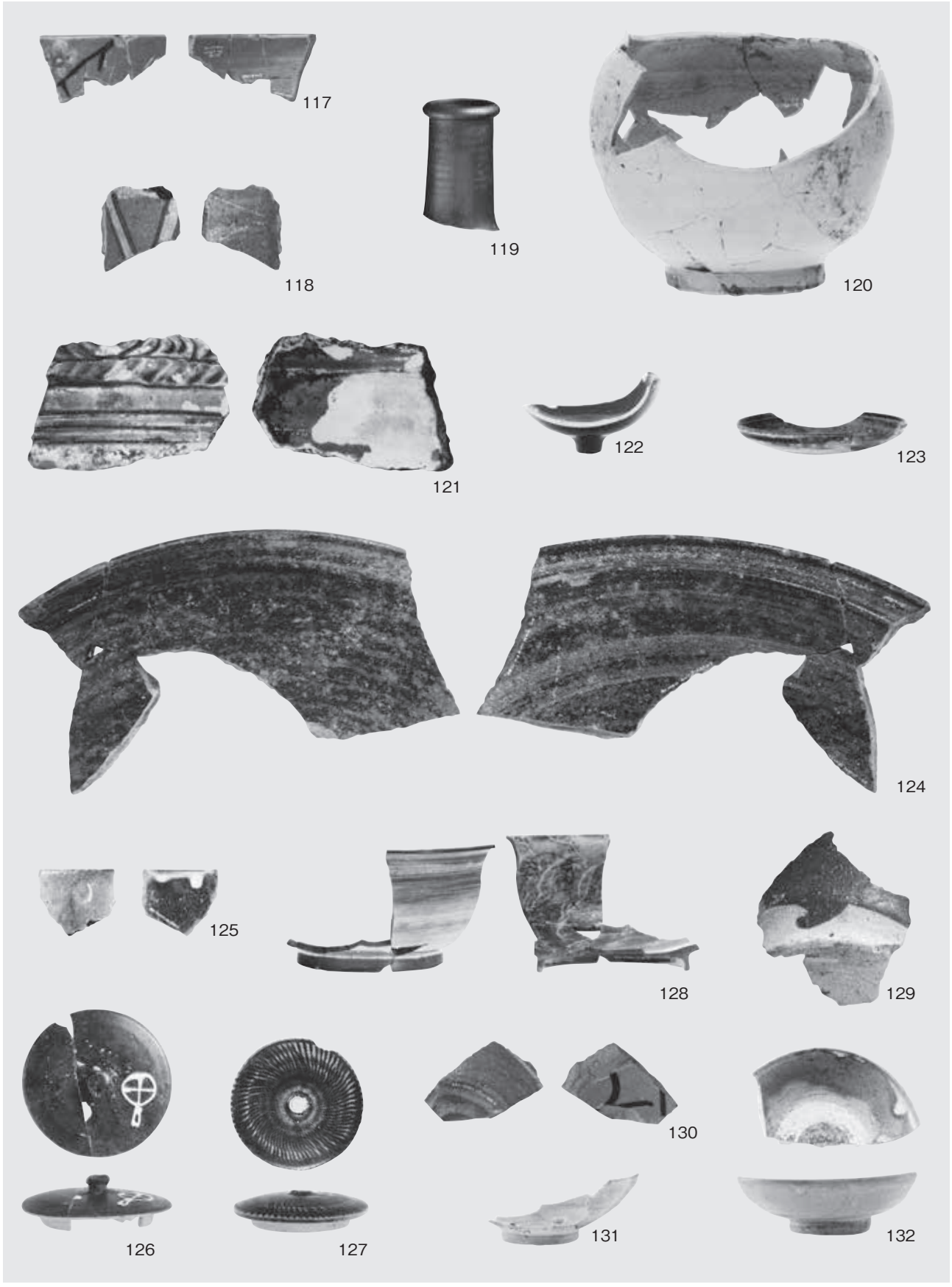
図版67　武家屋敷地区第11地点出土陶器（6）　S= 1 : 3
Pl.67　Glazed ceramics from BK11 (6)



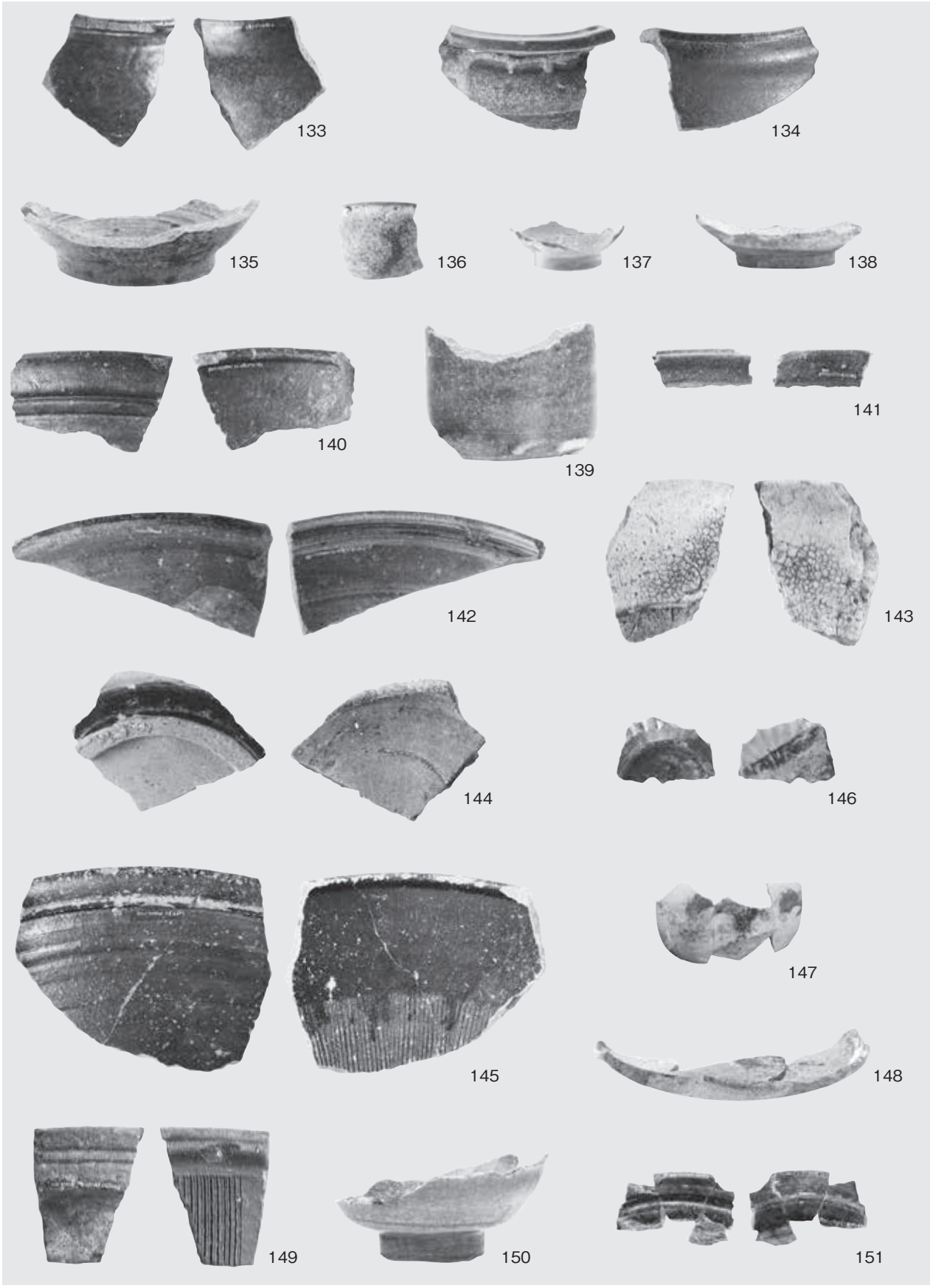
図版68　武家屋敷地区第11地点出土陶器（7）　S= 1 : 3
Pl.68　Glazed ceramics from BK11 (7)



図版69　武家屋敷地区第11地点出土陶器（8）　S= 1 : 3
Pl.69　Glazed ceramics from BK11 (8)

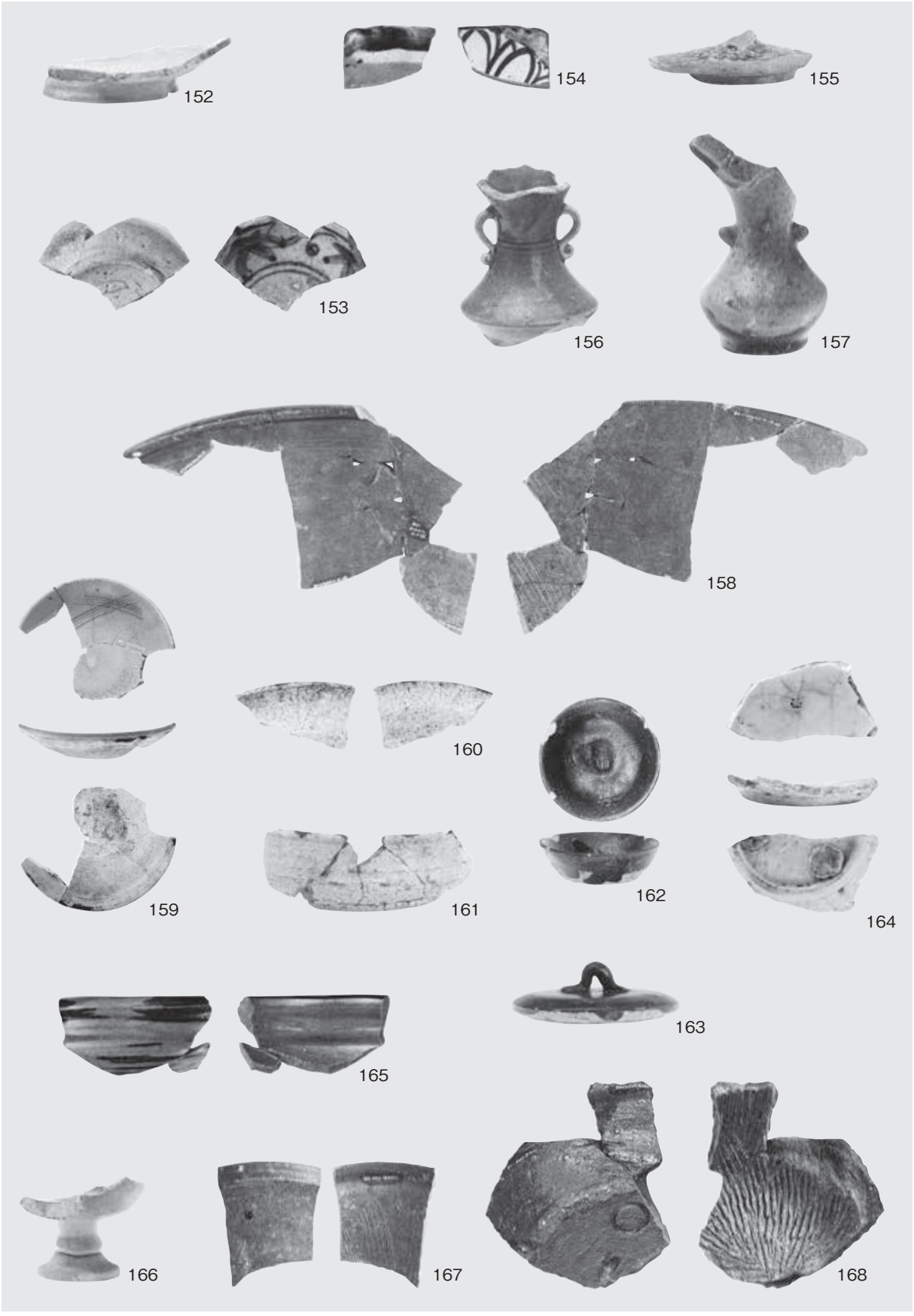


図版70　武家屋敷地区第11地点出土陶器（9）　S= 1 : 3
Pl.70　Glazed ceramics from BK11 (9)

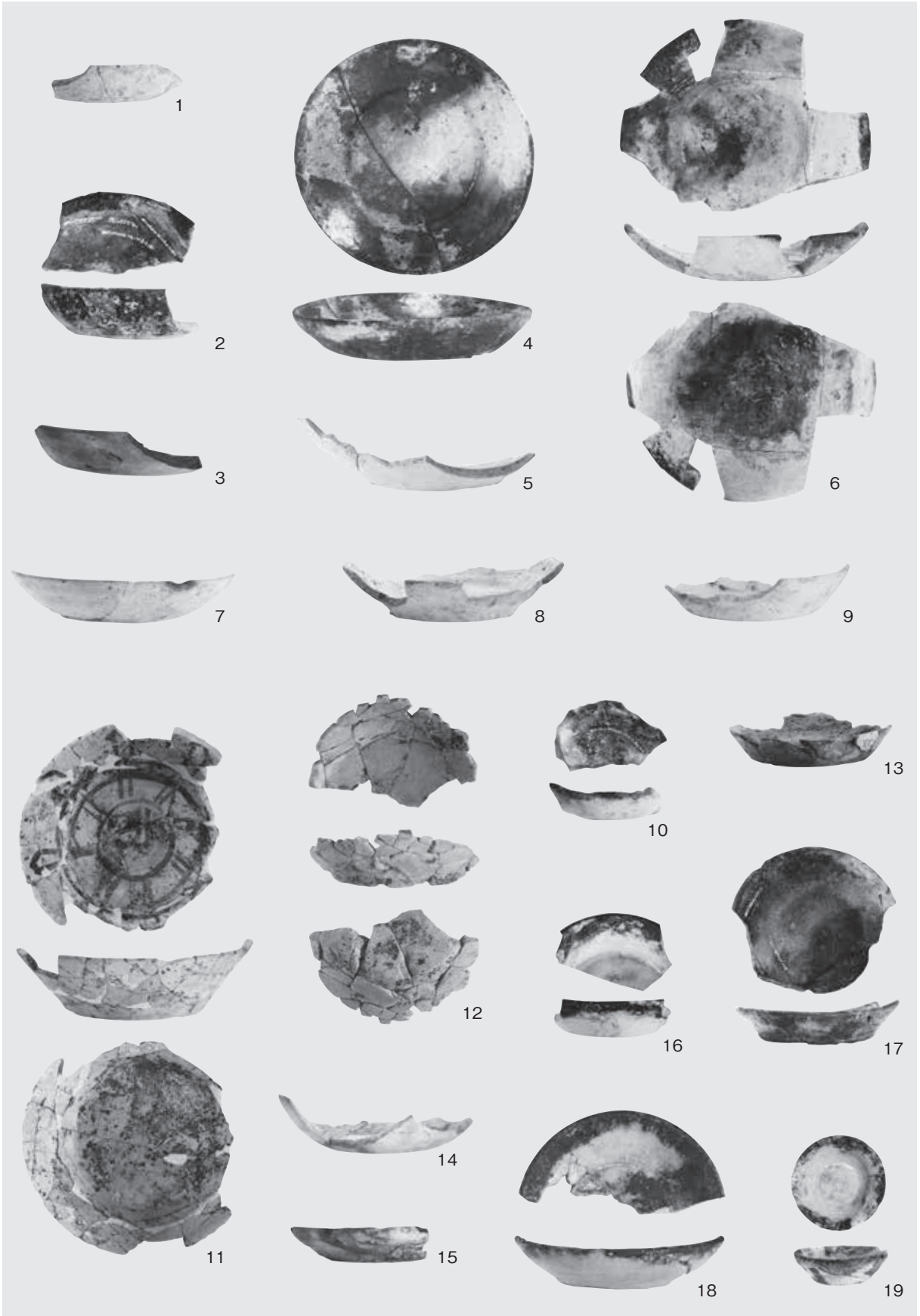


図版71　武家屋敷地区第11地点出土陶器（10）
Pl.71　Glazed ceramics from BK11 (10)

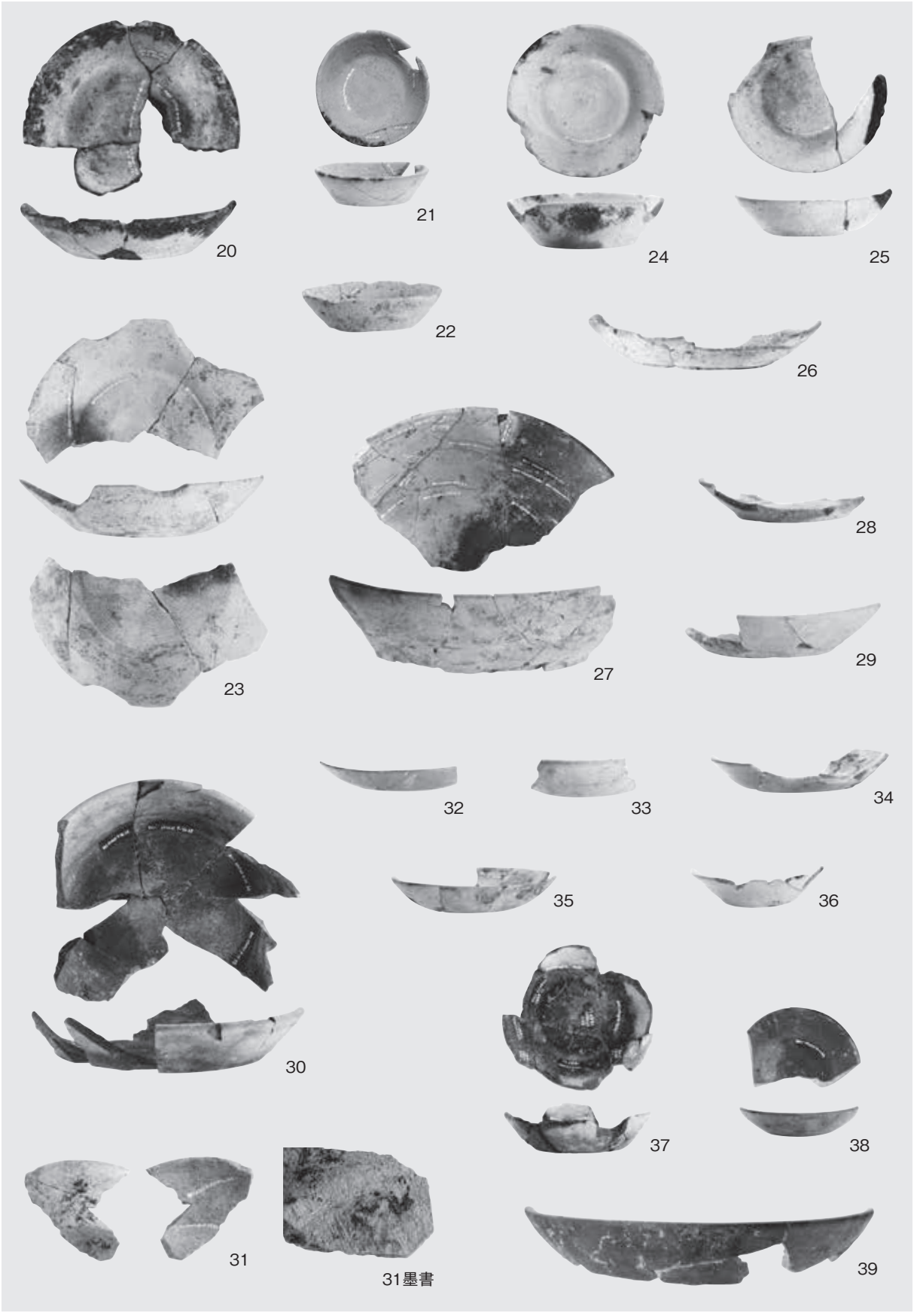
S= 1 : 3



図版72　武家屋敷地区第11地点出土陶器（11）　S= 1 : 3
Pl.72　Glazed ceramics from BK11 (11)



図版73　武家屋敷地区第11地点出土土師質土器（1）　S= 1 : 3
Pl.73　Unglazed ceramics from BK11 (1)

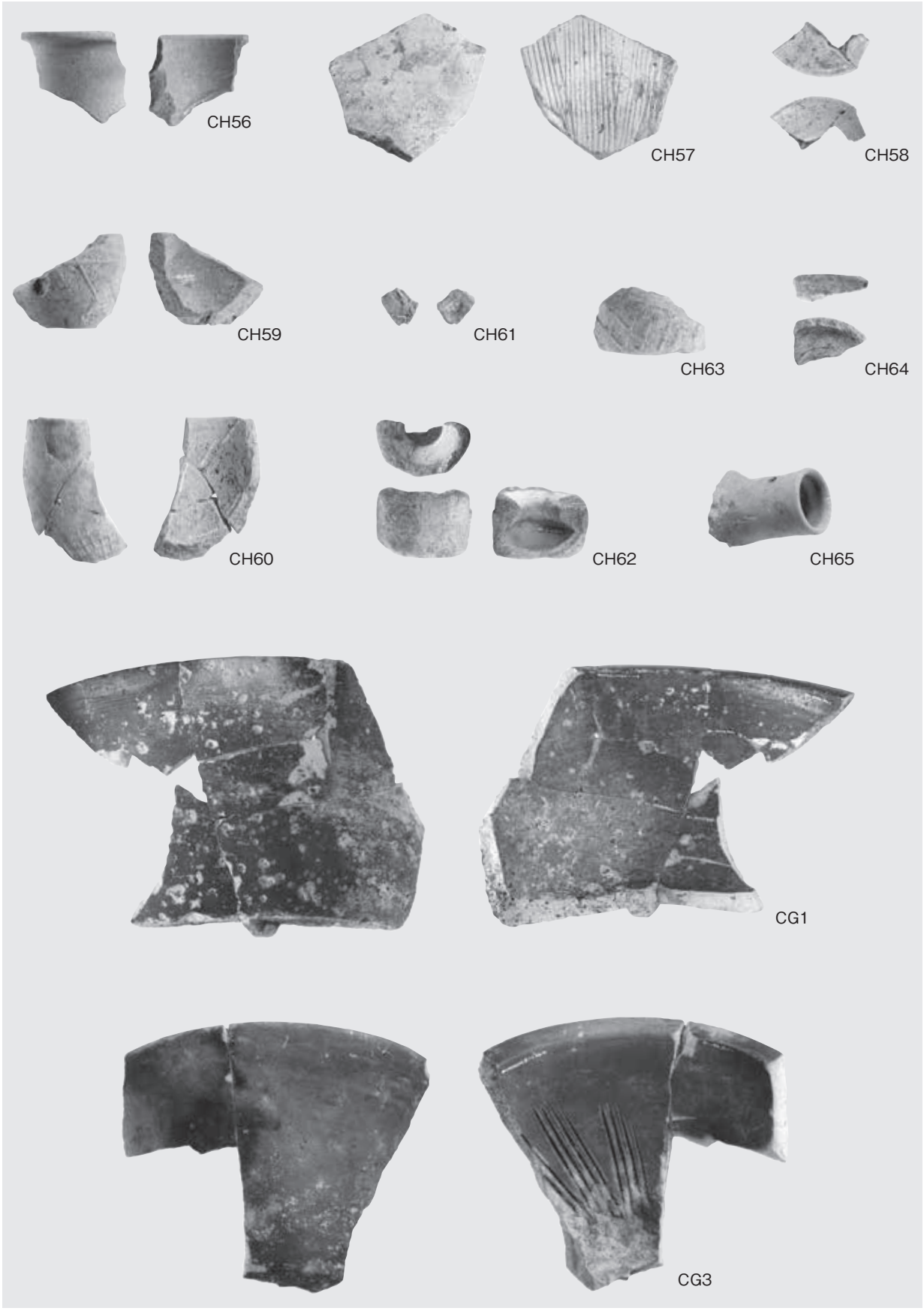


図版74　武家屋敷地区第11地点出土土師質土器（2）
Pl.74　Unglazed ceramics from BK11 (2)

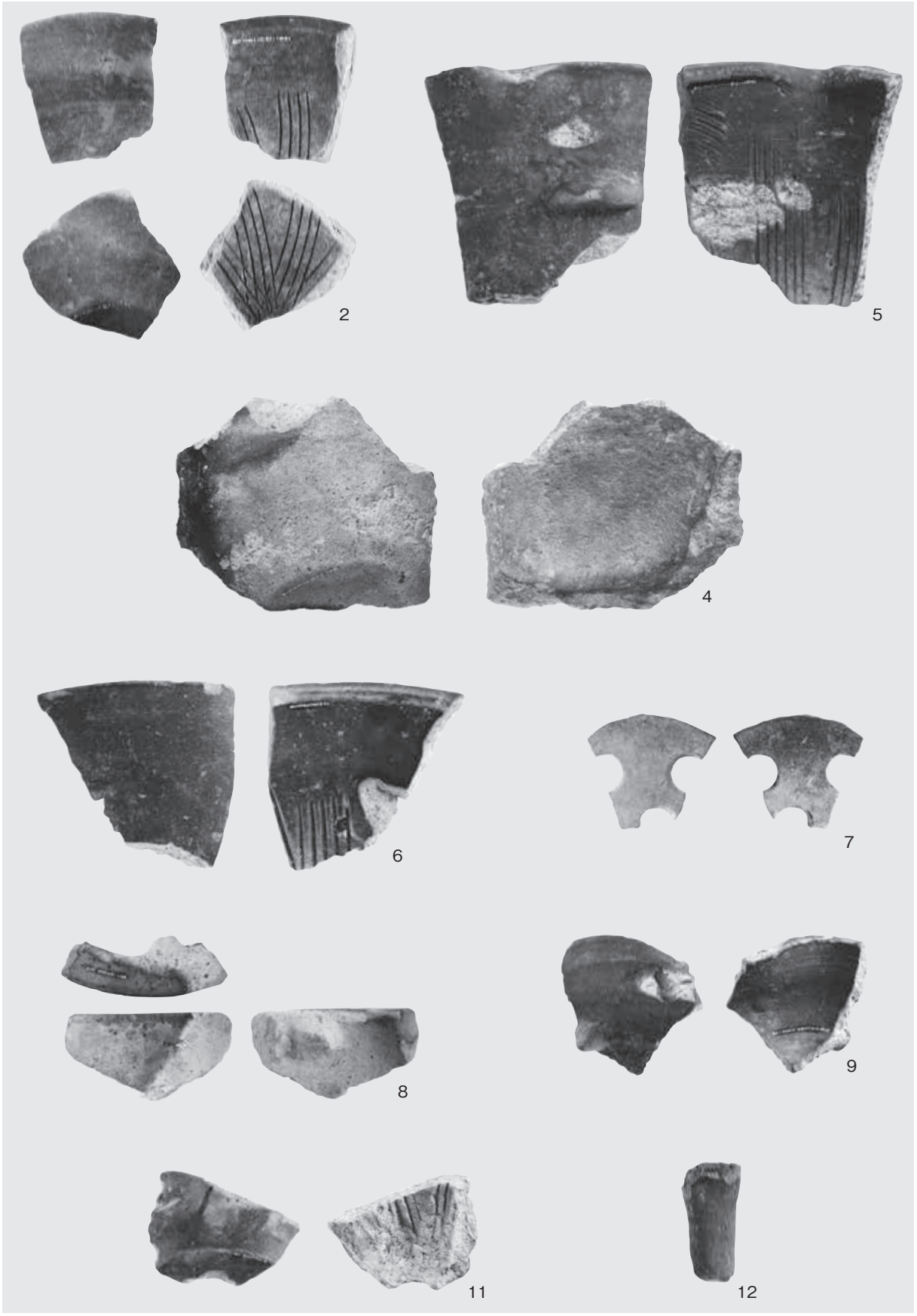
S= 1 : 3
31墨書 S= 1 : 1

図版75　武家屋敷地区第11地点出土土師質土器（3）
Pl.75　Unglazed ceramics from BK11 (3)

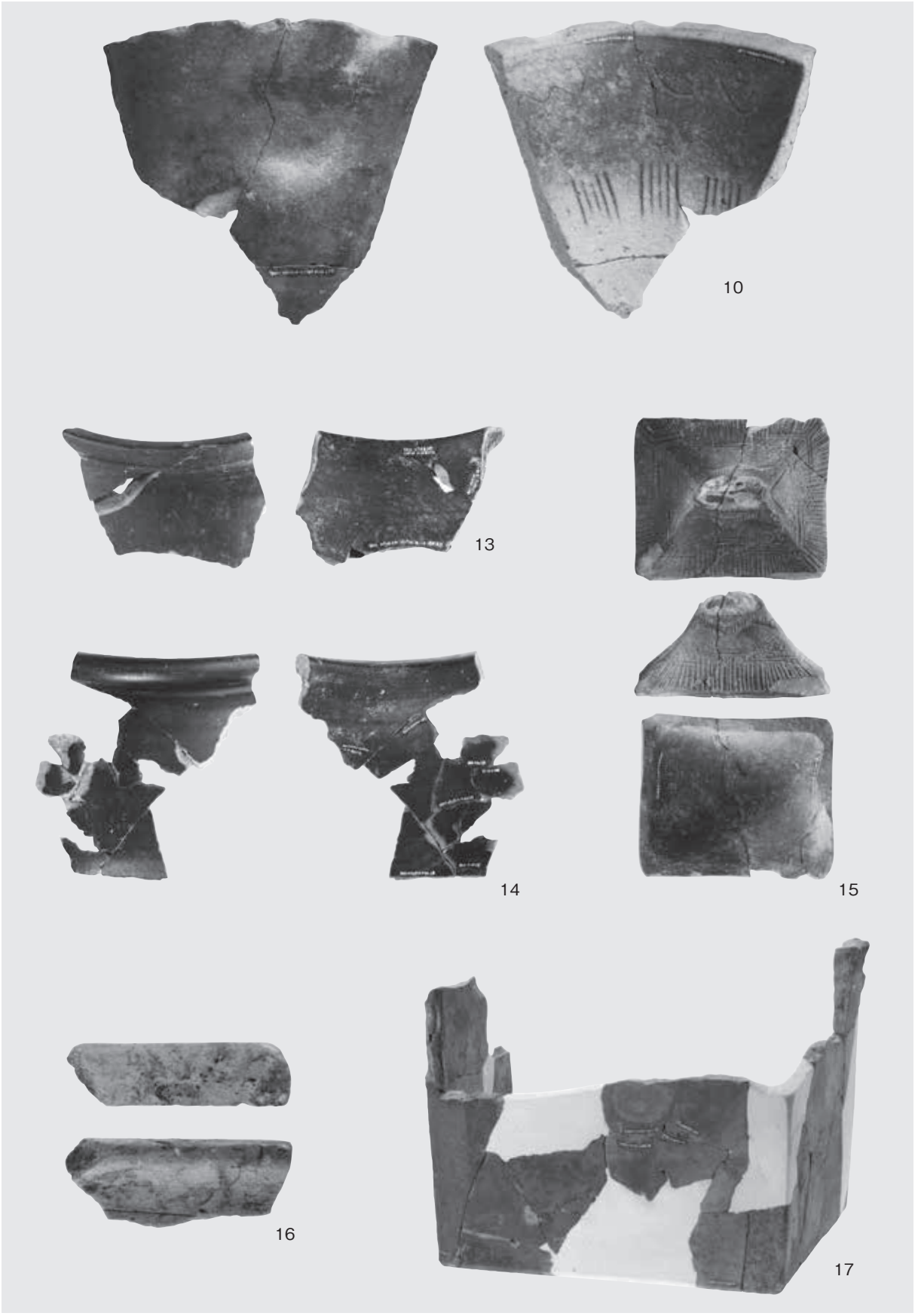
51以外 S= 1 : 3
51 S= 1 : 5



図版76　武家屋敷地区第11地点出土土師質土器（4）・瓦質土器（1）　S= 1 : 3
Pl.76　Unglazed ceramics from BK11 (4)

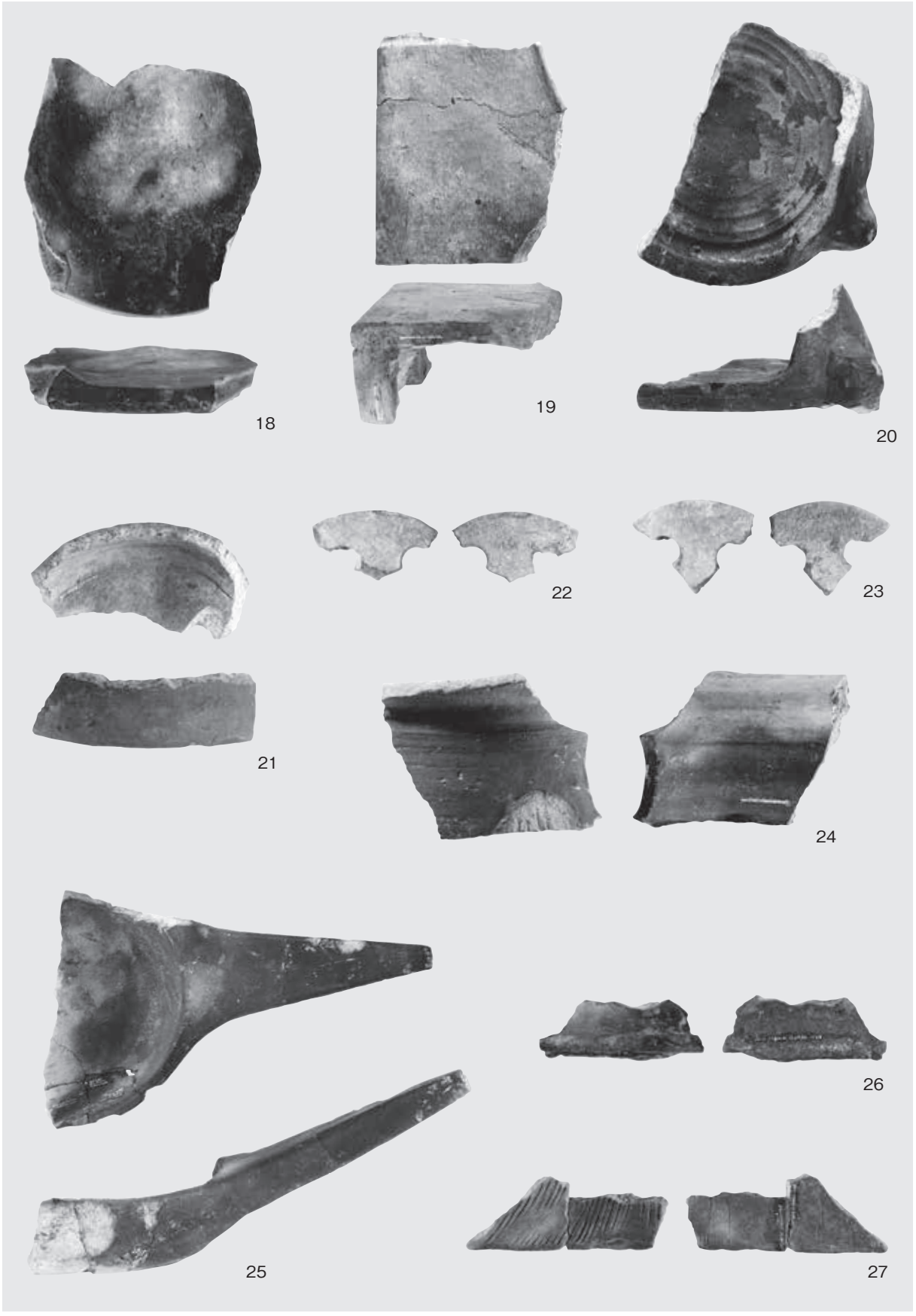


図版77　武家屋敷地区第11地点出土瓦質土器（2）　S= 1 : 3
Pl.77　Unglazed ceramics from BK11 (5)

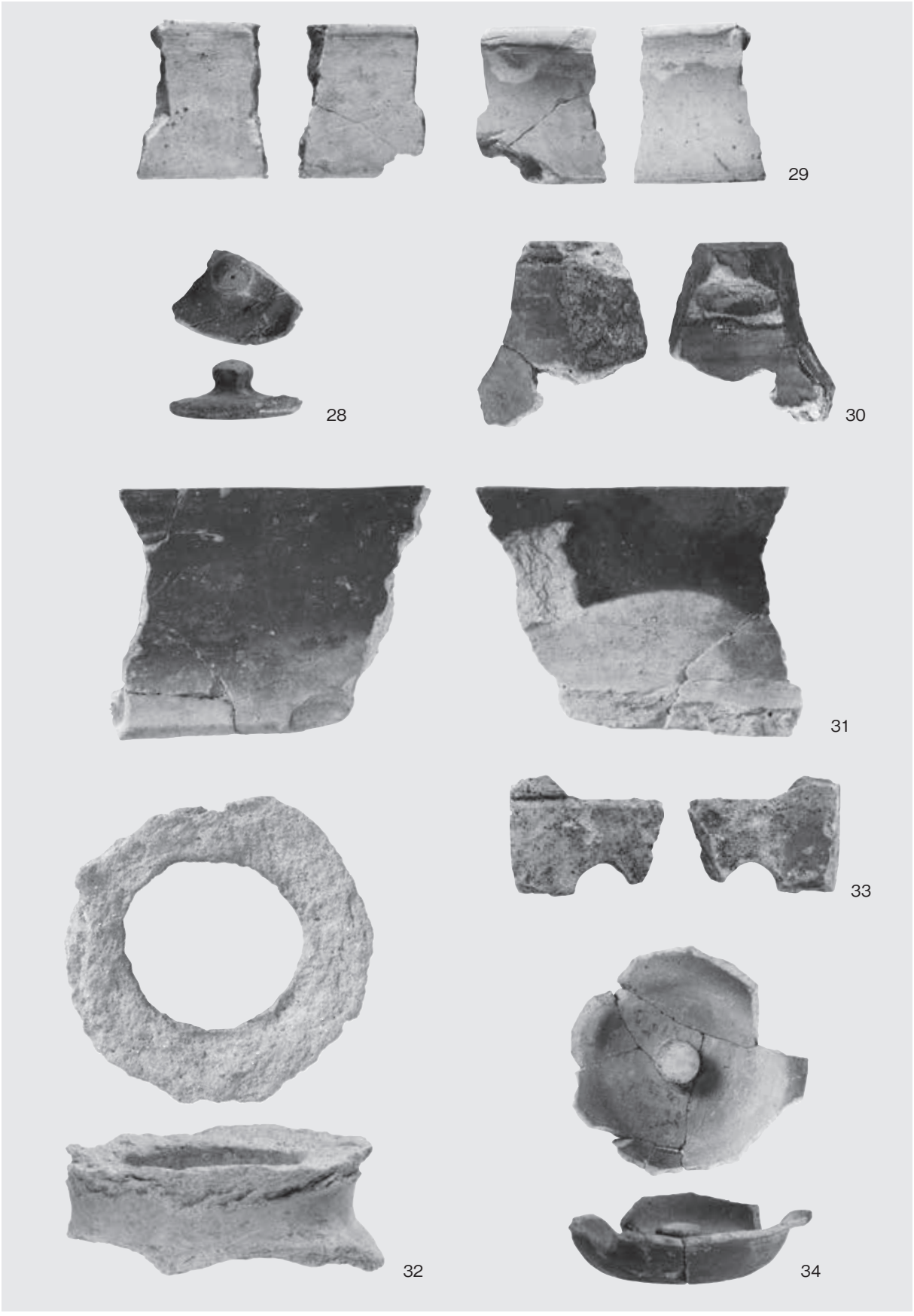


図版78　武家屋敷地区第11地点出土瓦質土器（3）
Pl.78　Unglazed ceramics from BK11 (6)

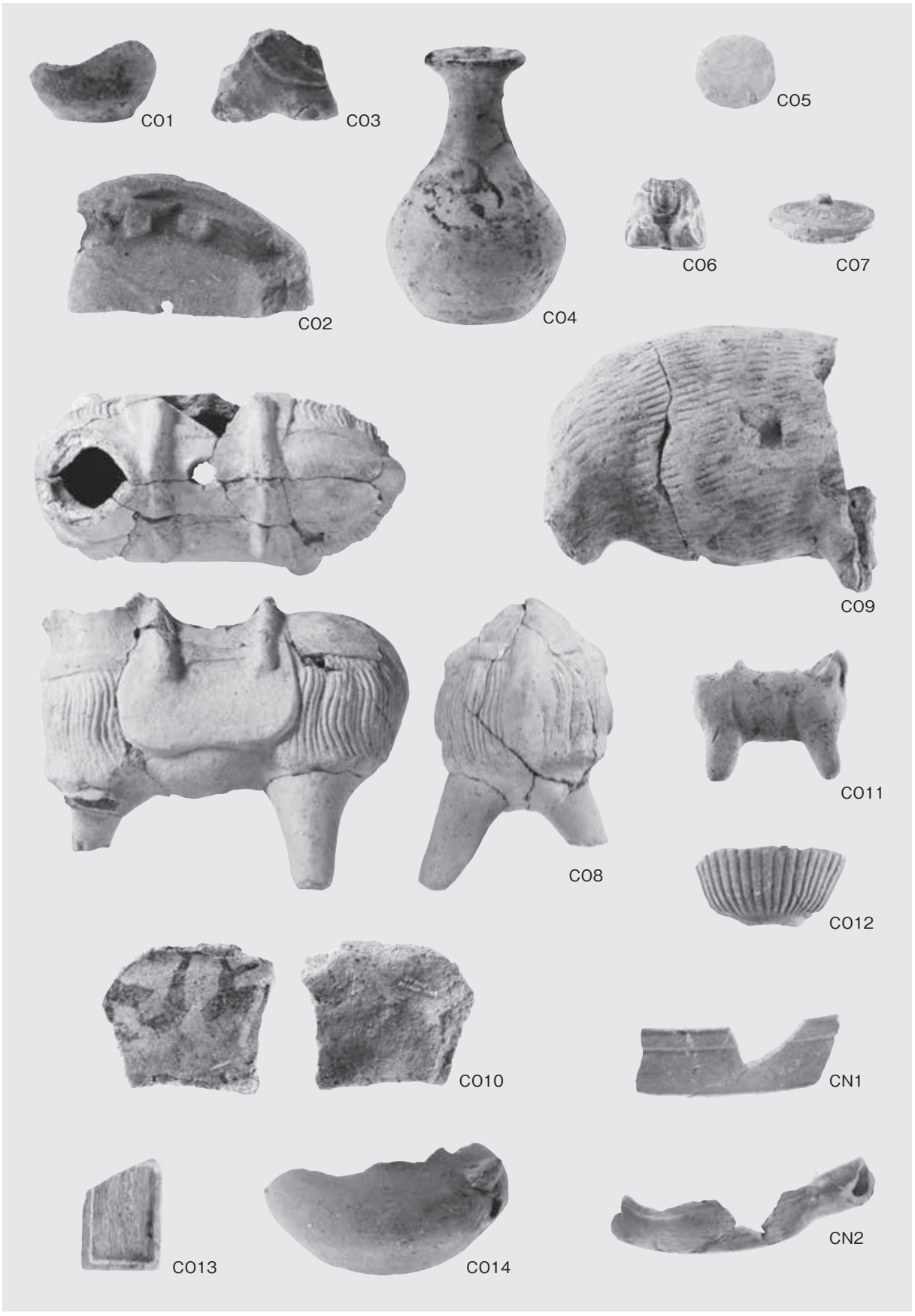
17以外 S= 1 : 3
17 S= 1 : 5



図版79　武家屋敷地区第11地点出土瓦質土器（4）　S= 1 : 3
Pl.79　Unglazed ceramics from BK11 (7)



図版80　武家屋敷地区第11地点出土瓦質土器（5）　S= 1 : 3
Pl.80　Unglazed ceramics from BK11 (8)

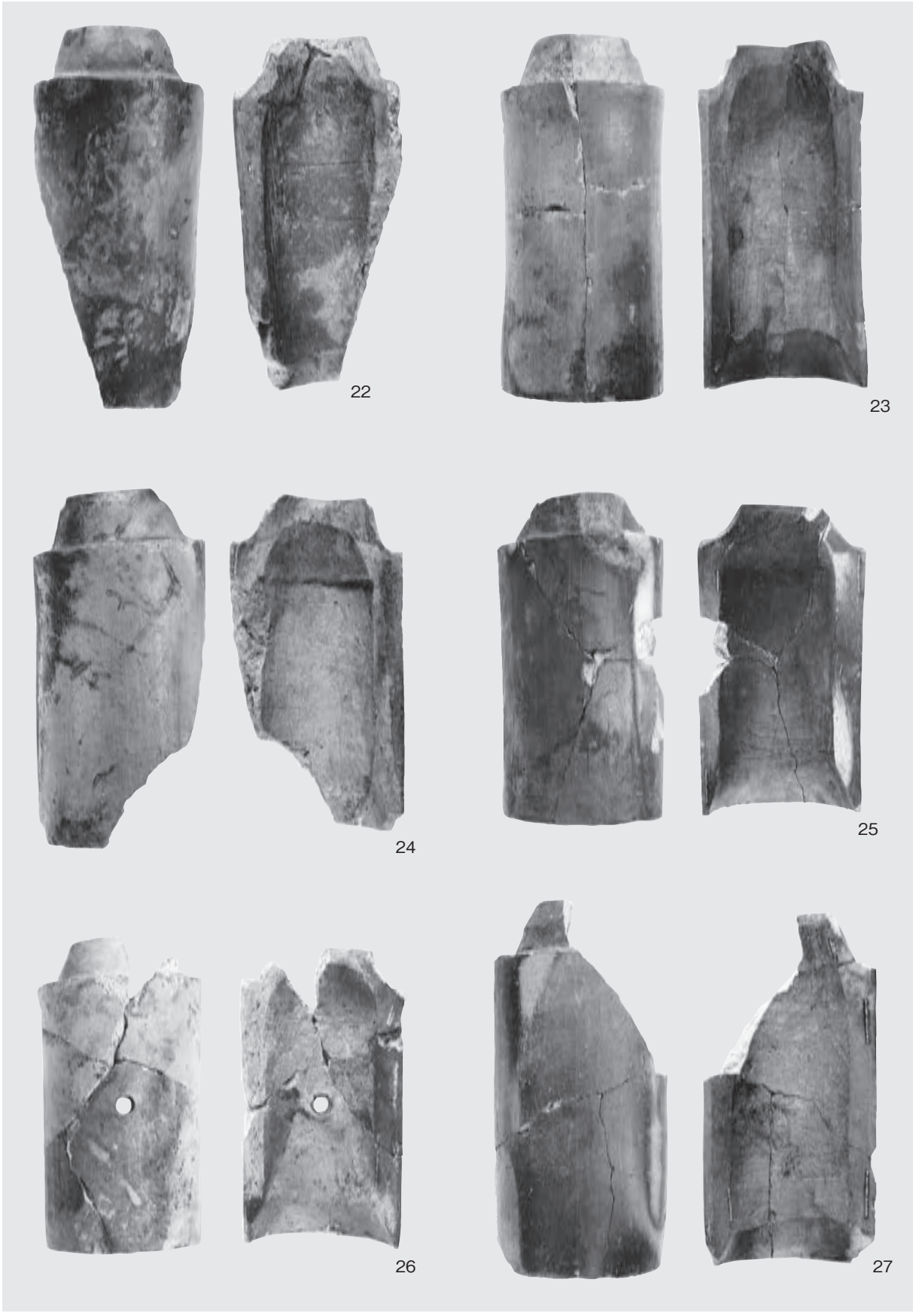


図版81　武家屋敷地区第11地点出土土製品・軟質施釉陶器
Pl.81　Clay objects and figures, lead glazed soft ceramics from BK11

CO1～7・9～14 S= 2：3
CO8 S= 1：2
CN1・2 S= 1：3

図版82　武家屋敷地区第11地点出土瓦（1）
Pl.82　Various roof tiles from BK11 (1)

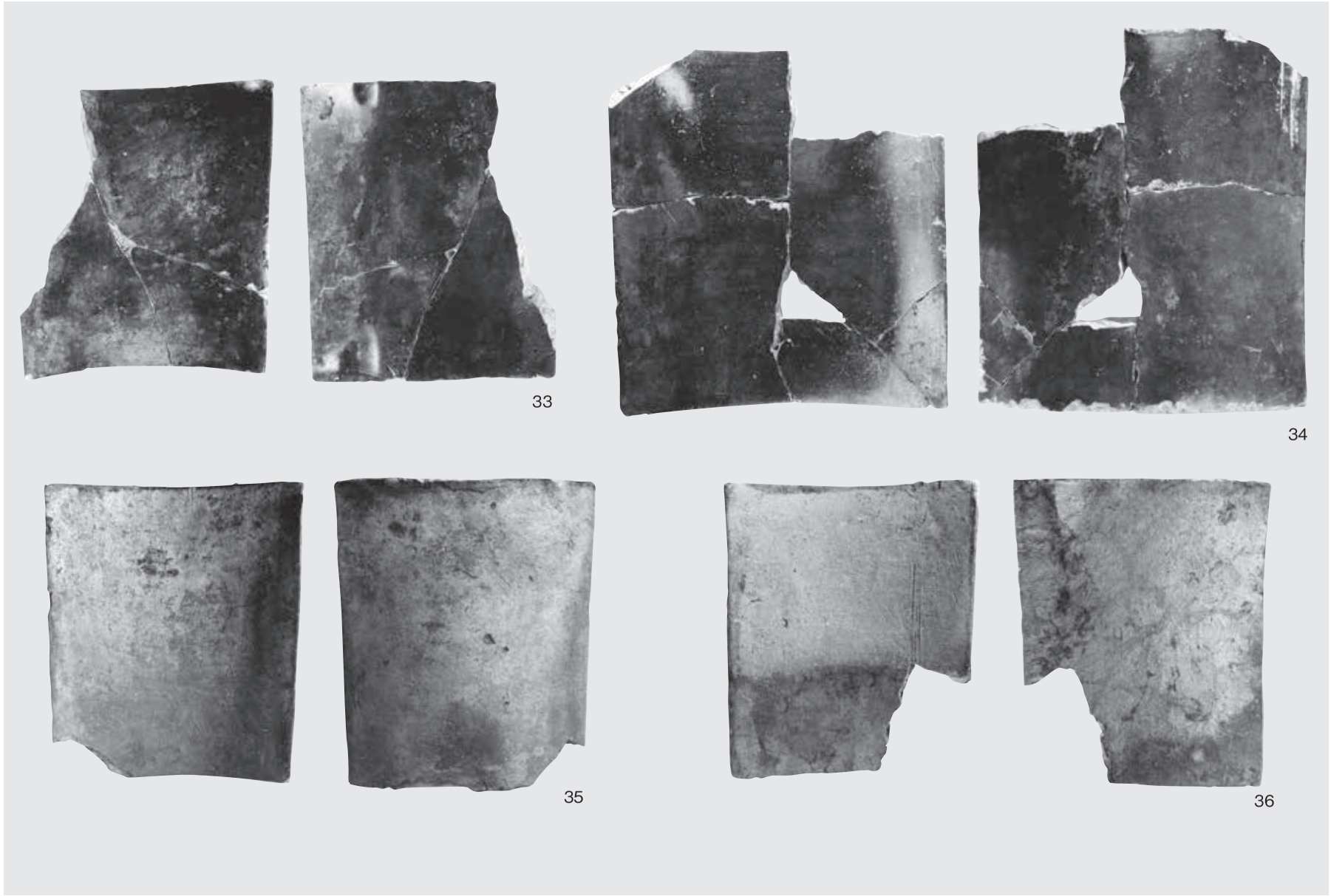
1～21 S= 1：4
28 S= 1：5



図版83　武家屋敷地区第11地点出土瓦（２）　S= 1 : 5
Pl.83　Various roof tiles from BK11 (2)

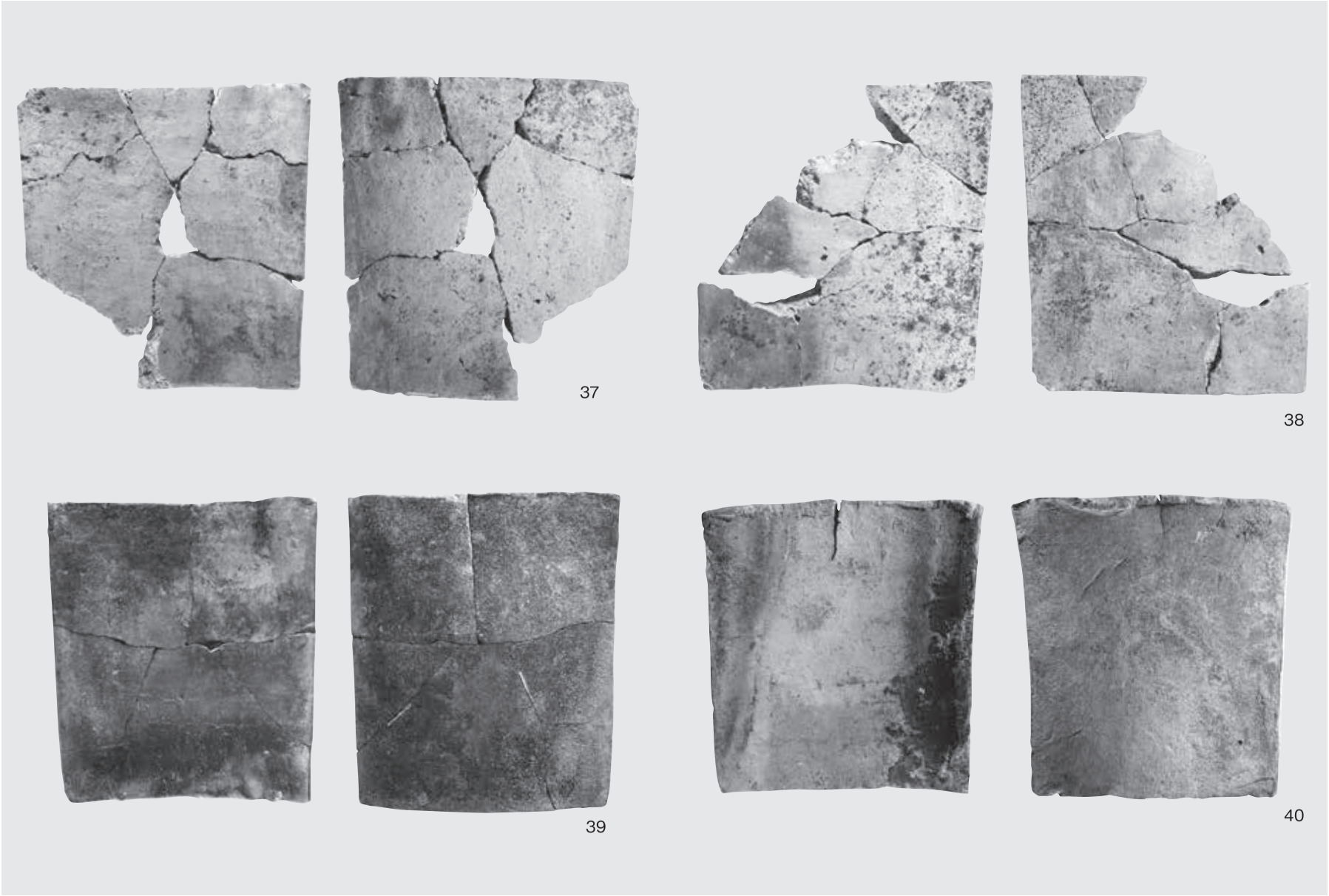
図版84　武家屋敷地区第11地点出土瓦（3）
Pl.84　Various roof tiles from BK11 (3)

S= 1 : 5



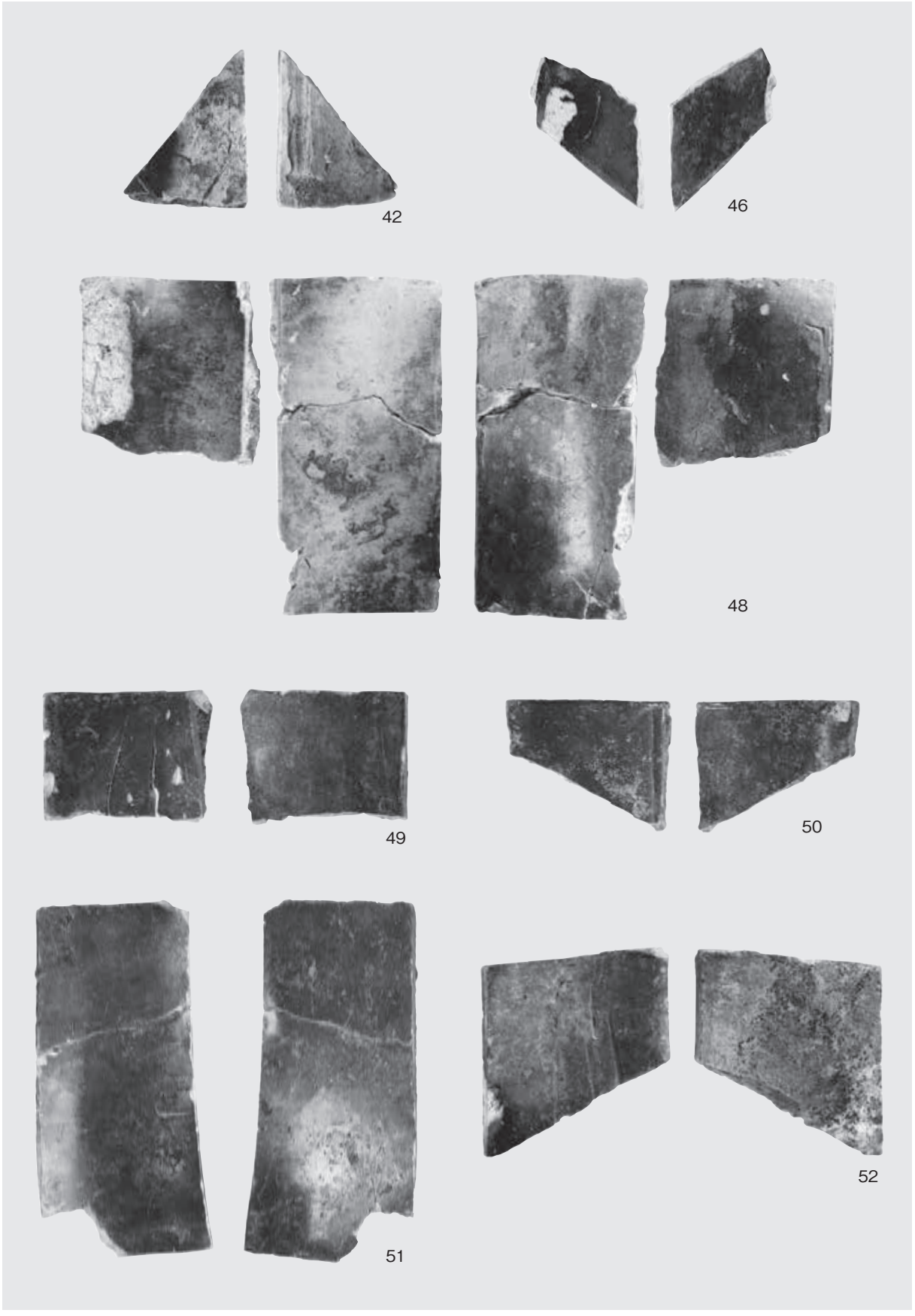
図版85　武家屋敷地区第11地点出土瓦（4）
Pl.85　Various roof tiles from BK11 (4)

S= 1 : 5



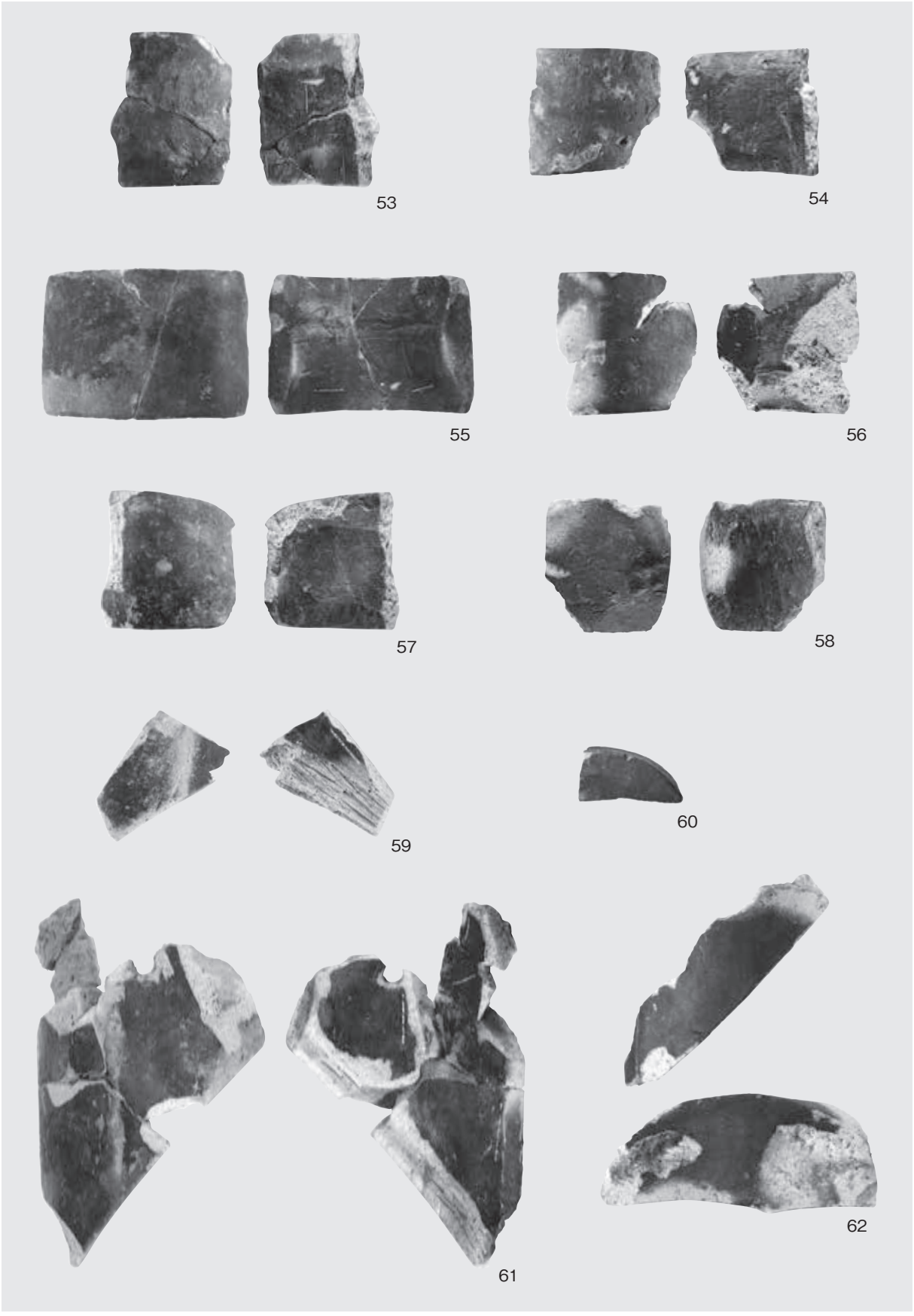
図版86　武家屋敷地区第11地点出土瓦（５）
Pl.86　Various roof tiles from BK11 (5)

S= 1 : 5



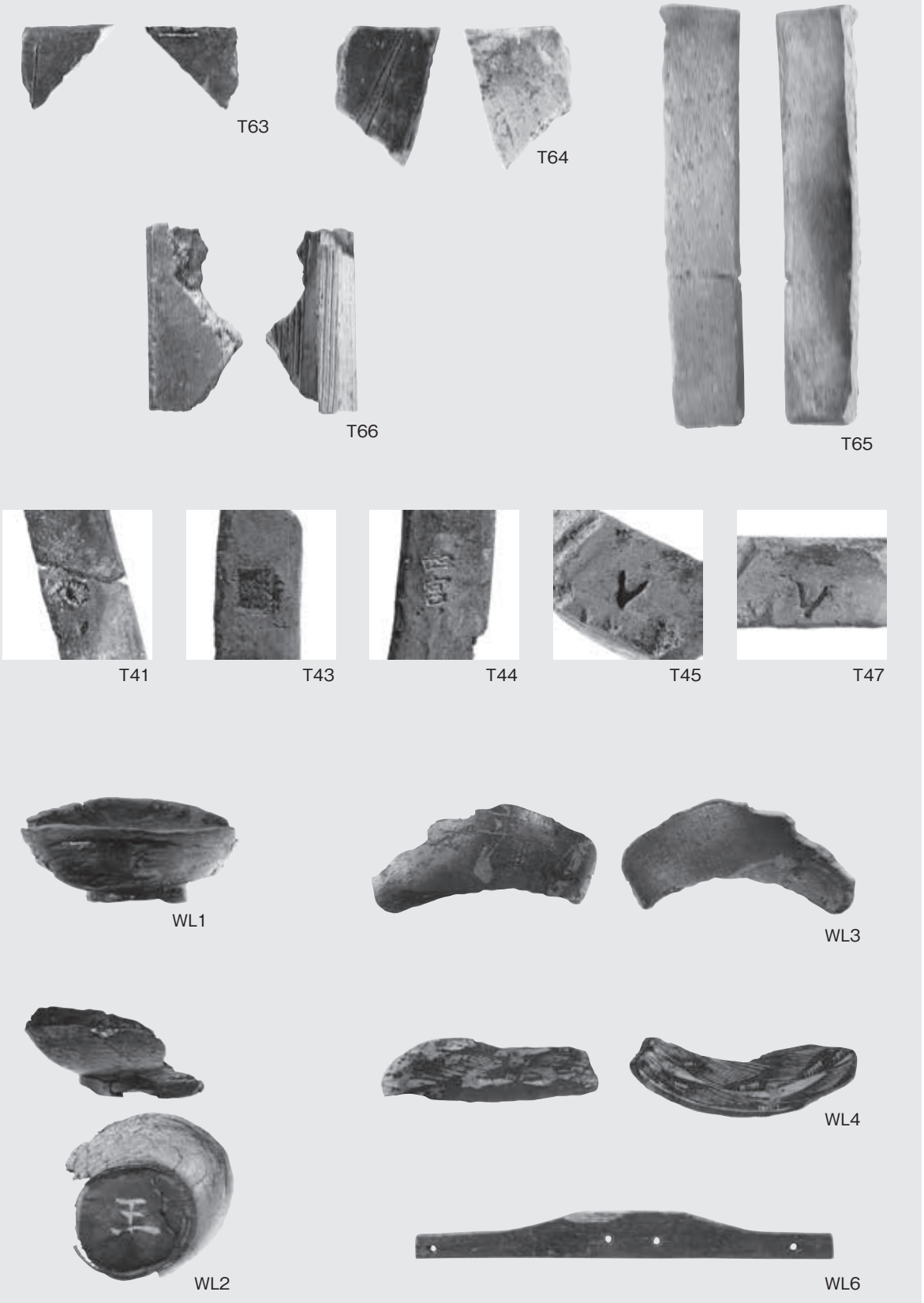
図版87　武家屋敷地区第11地点出土瓦（６）
Pl.87　Various roof tiles from BK11 (6)

S= 1 : 4



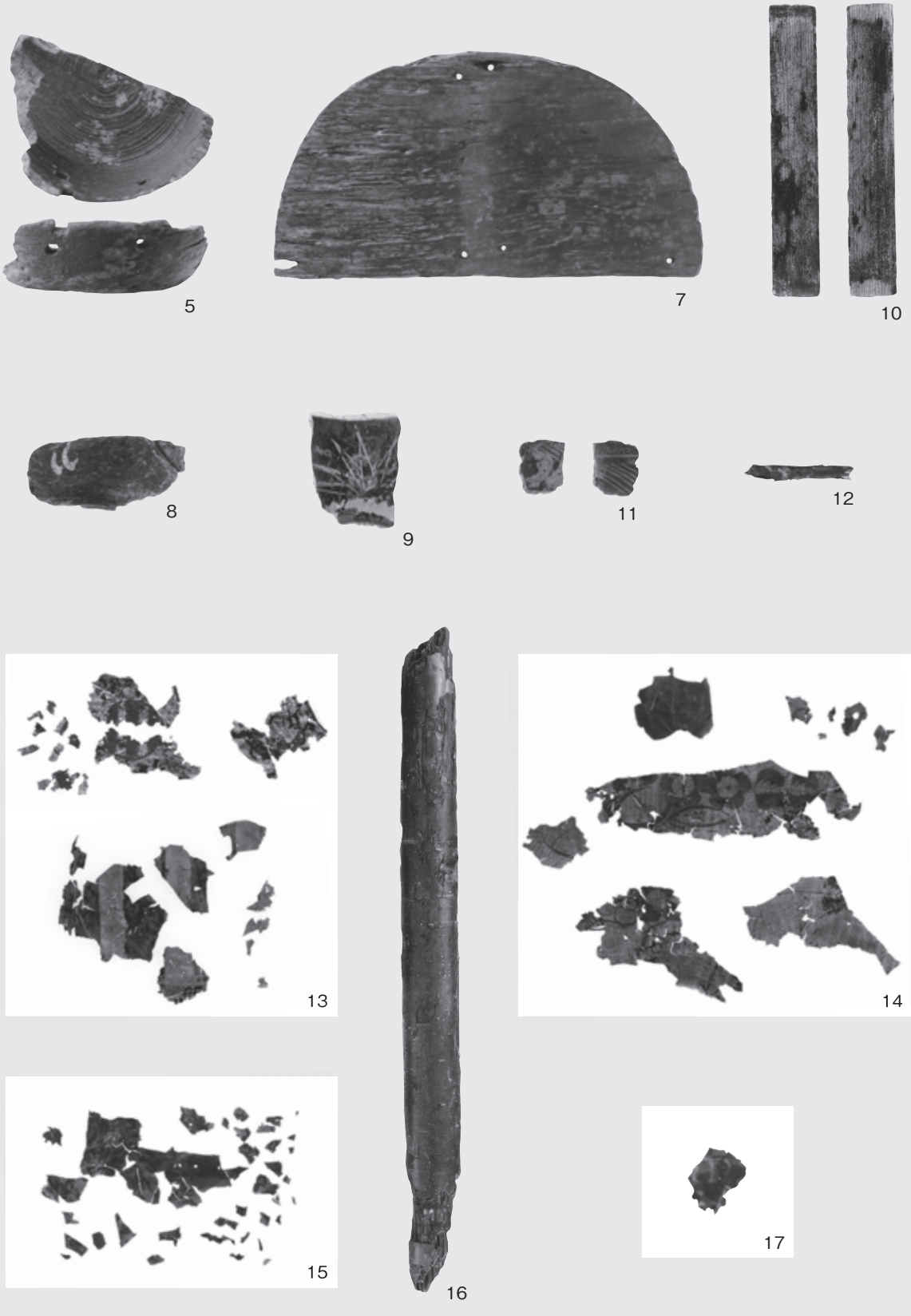
図版88　武家屋敷地区第11地点出土瓦（7）
Pl.88　Various roof tiles from BK11 (7)

S= 1 : 4



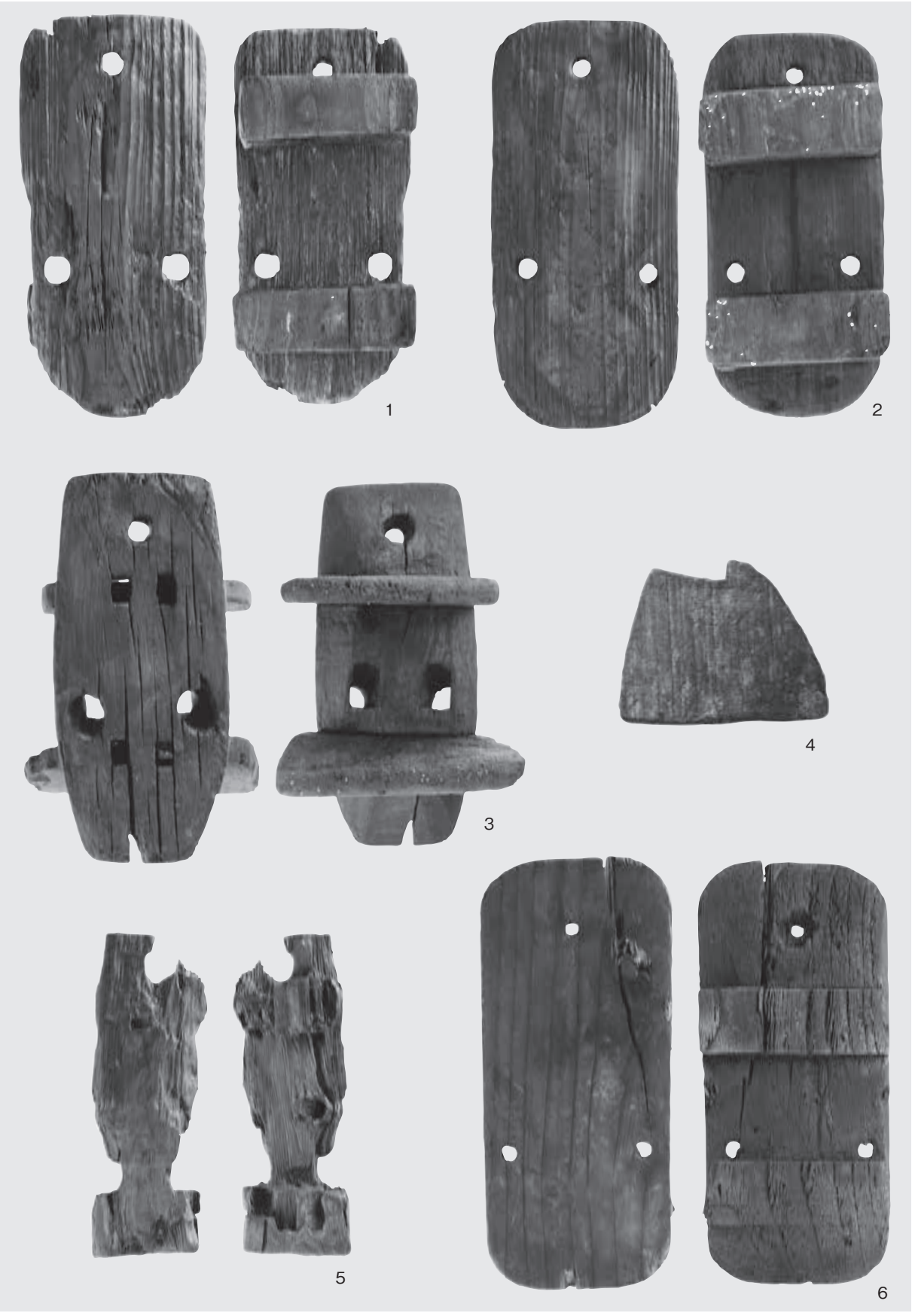
図版89　武家屋敷地区第11地点出土瓦（8）・漆塗製品（1）
Pl.89　Various roof tiles and lacquerwares from BK11

T63～66 S= 1：4
T41・43～45・47 S= 4：5
WL1～4・6 S= 1：3

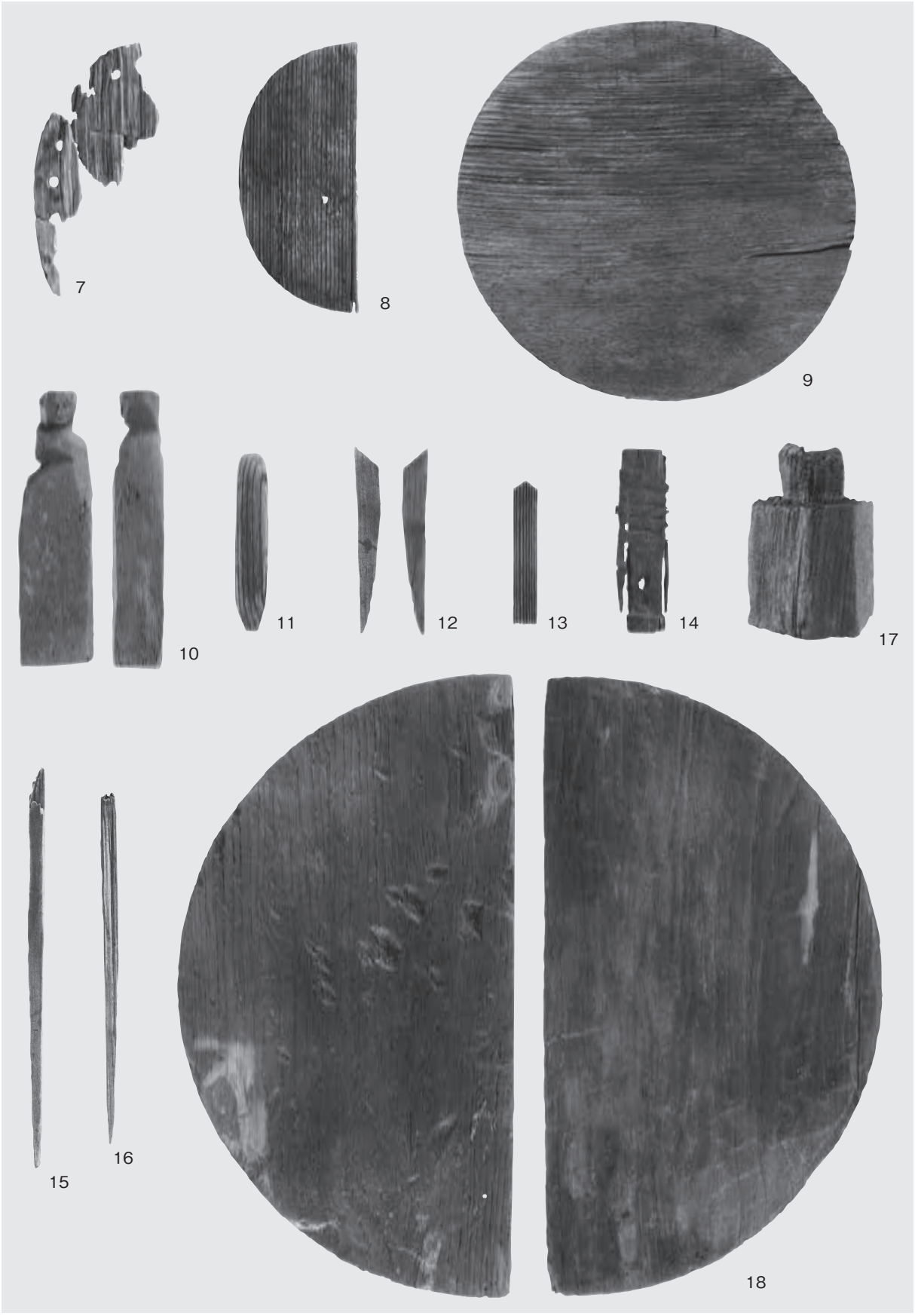


図版90　武家屋敷地区第11地点出土漆塗製品（2）
Pl.90　Various wooden implements with lacquer from BK11

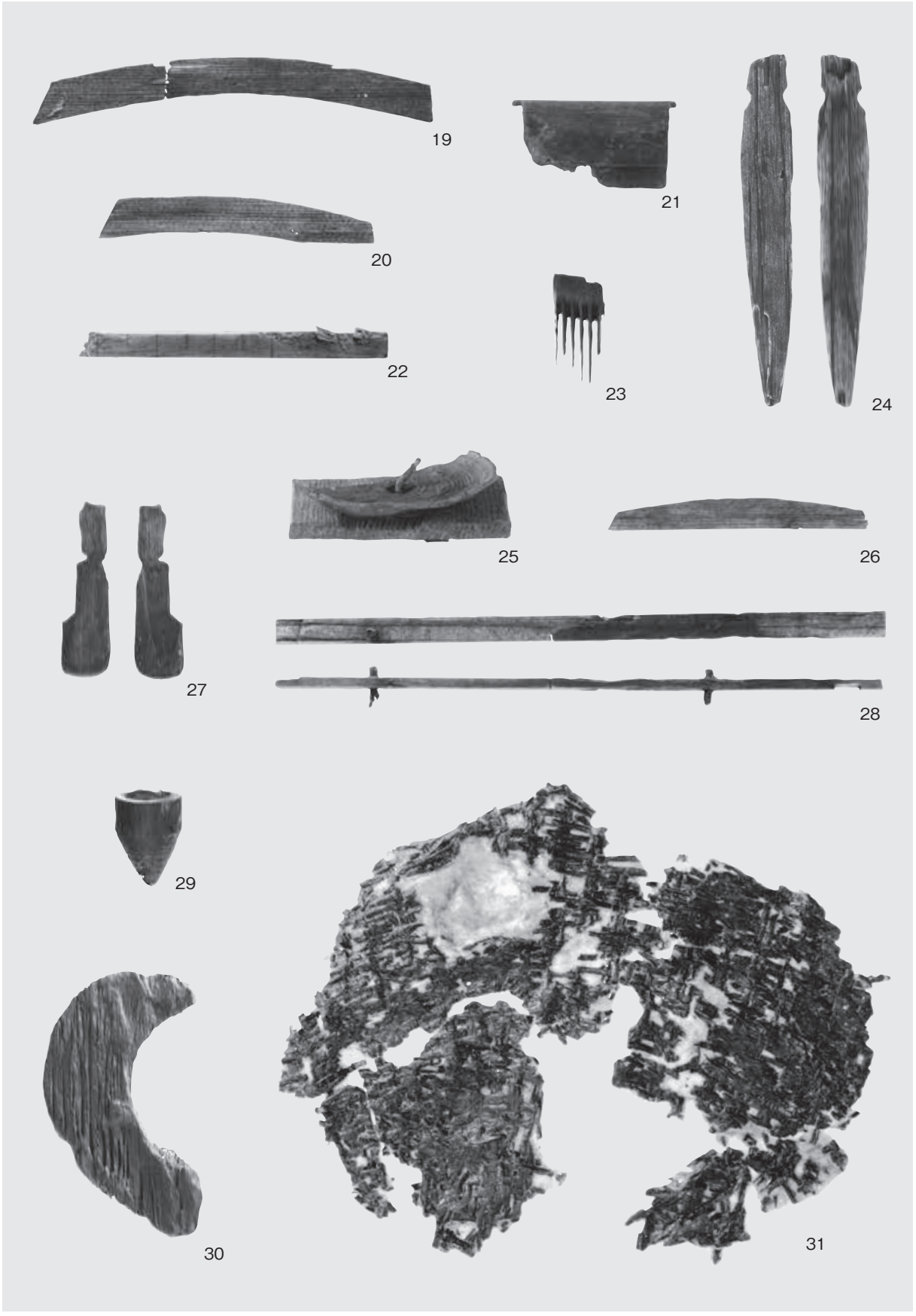
17以外 S= 1 : 3
17 S= 1 : 1



図版91　武家屋敷地区第11地点出土下駄　　S= 1 : 3
Pl.91　Clogs from BK11

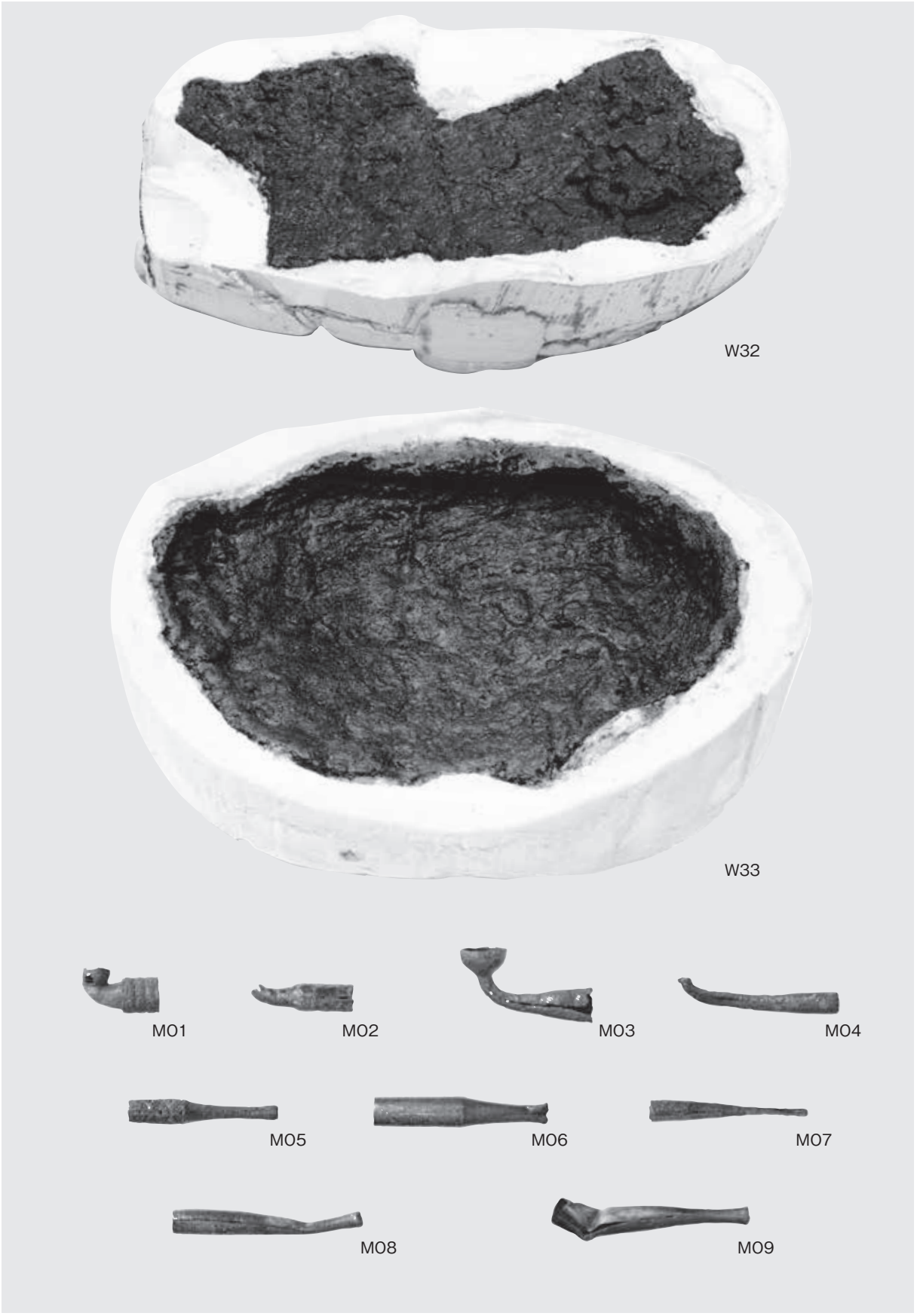


図版92　武家屋敷地区第11地点出土その他の木製品（1）　S= 1 : 3
Pl.92　Various wooden implements from BK11 (1)

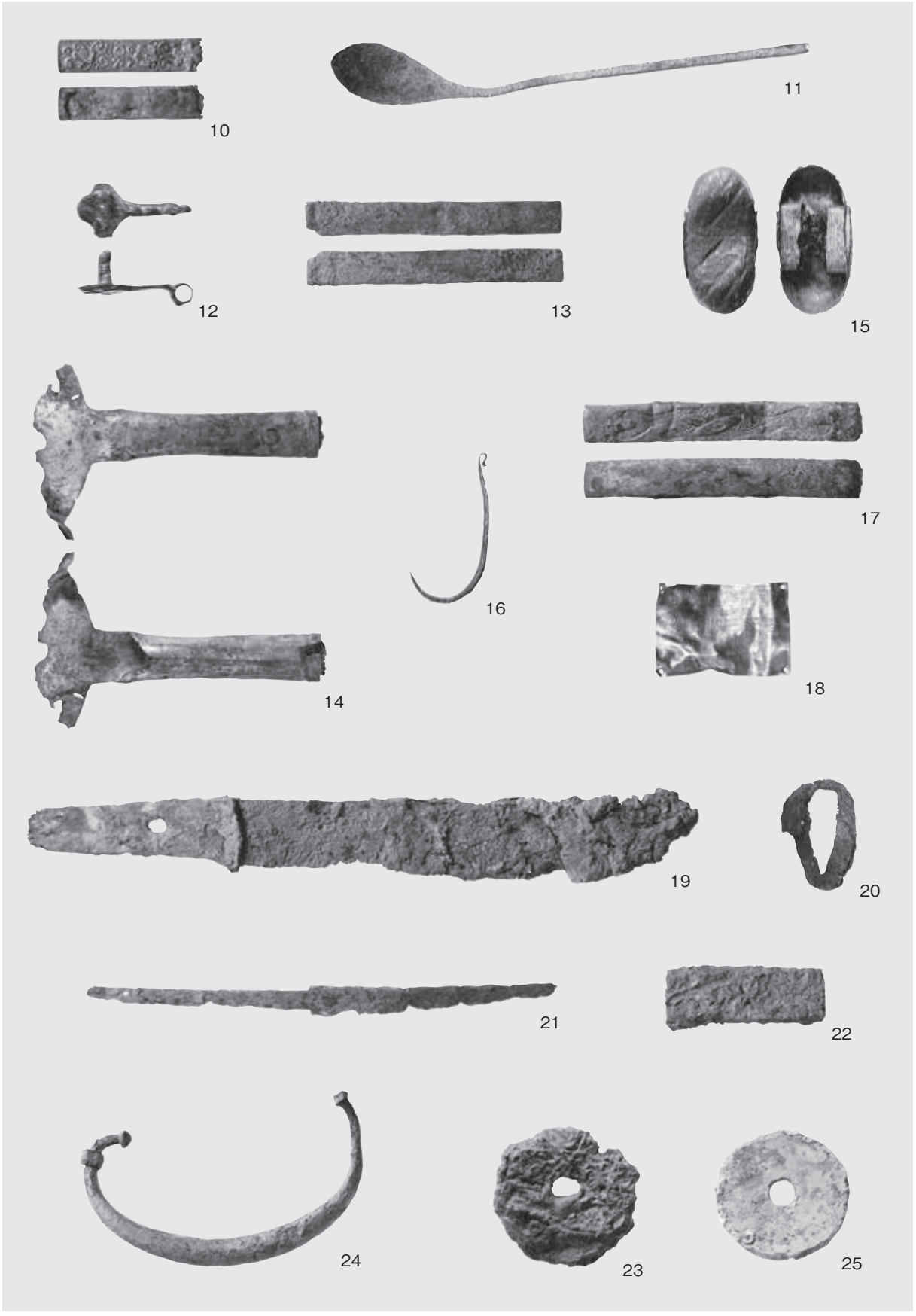


図版93　武家屋敷地区第11地点出土その他の木製品（２）
Pl.93　Various wooden implements from BK11 (2)

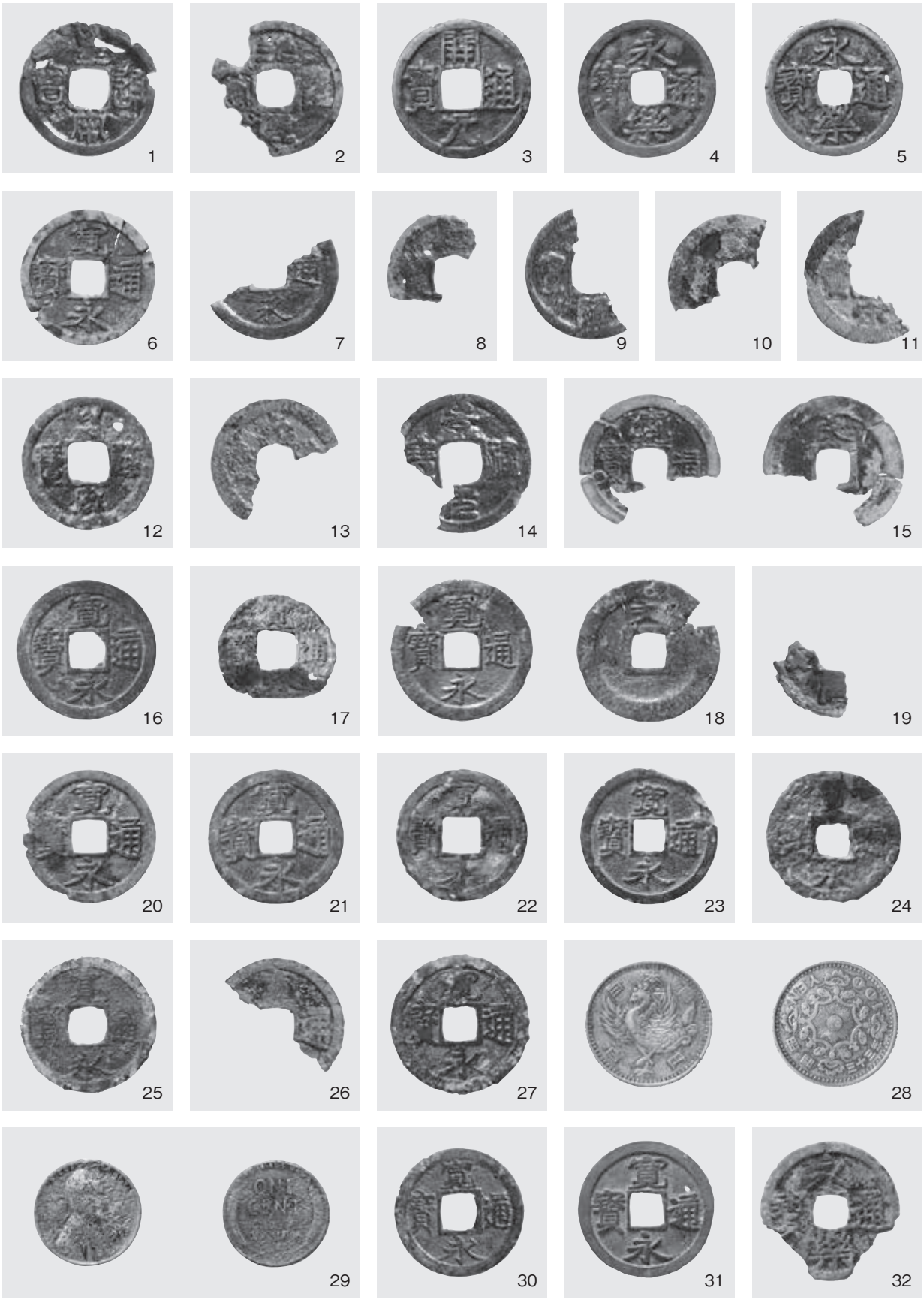
31以外 S= 1 : 3
31 S= 1 : 4



図版94　武家屋敷地区第11地点出土その他の木製品（3）・煙管　W32･33 S= 1 : 8
Pl.94　Various wooden implements and pipes from BK11　M01～9 S= 1 : 2

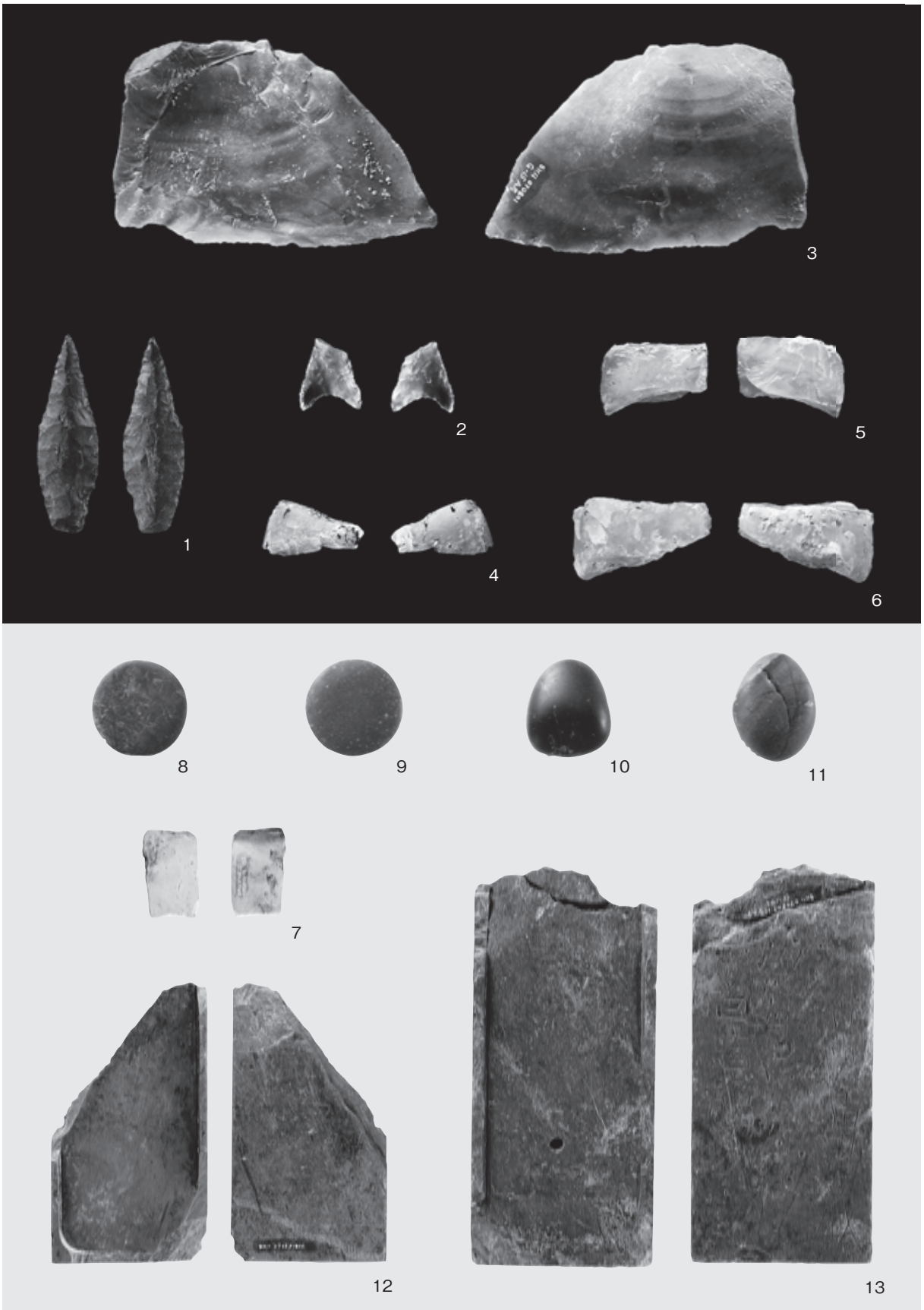


図版95　武家屋敷地区第11地点出土その他の金属製品　10・11・13・14・16～22・24 S= 1：2
Pl.95　Various metal implements from BK11　12・15・23・25 S= 1：1



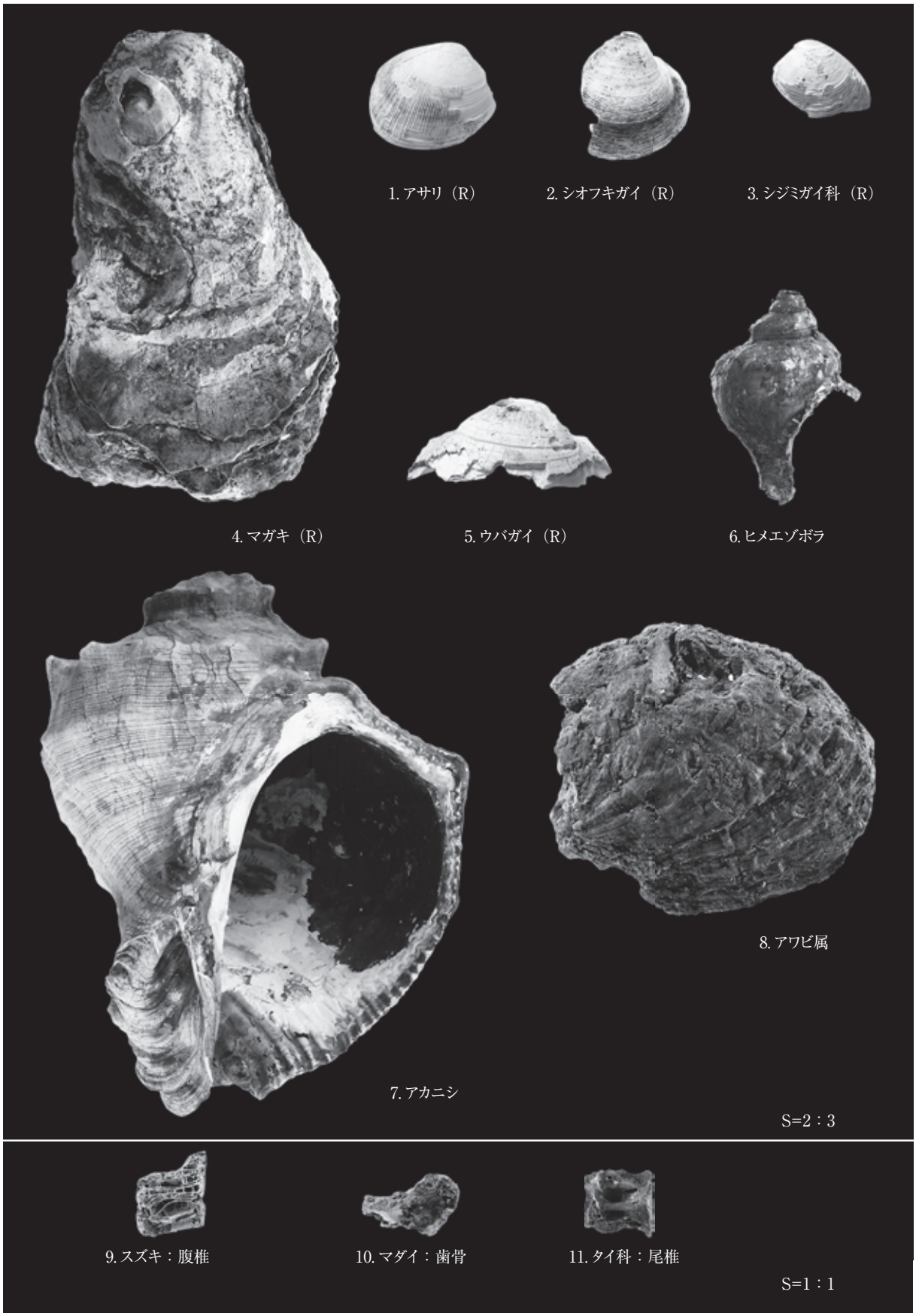
図版96　武家屋敷地区第11地点出土古銭
Pl.96　Coins from BK11

S= 1 : 1

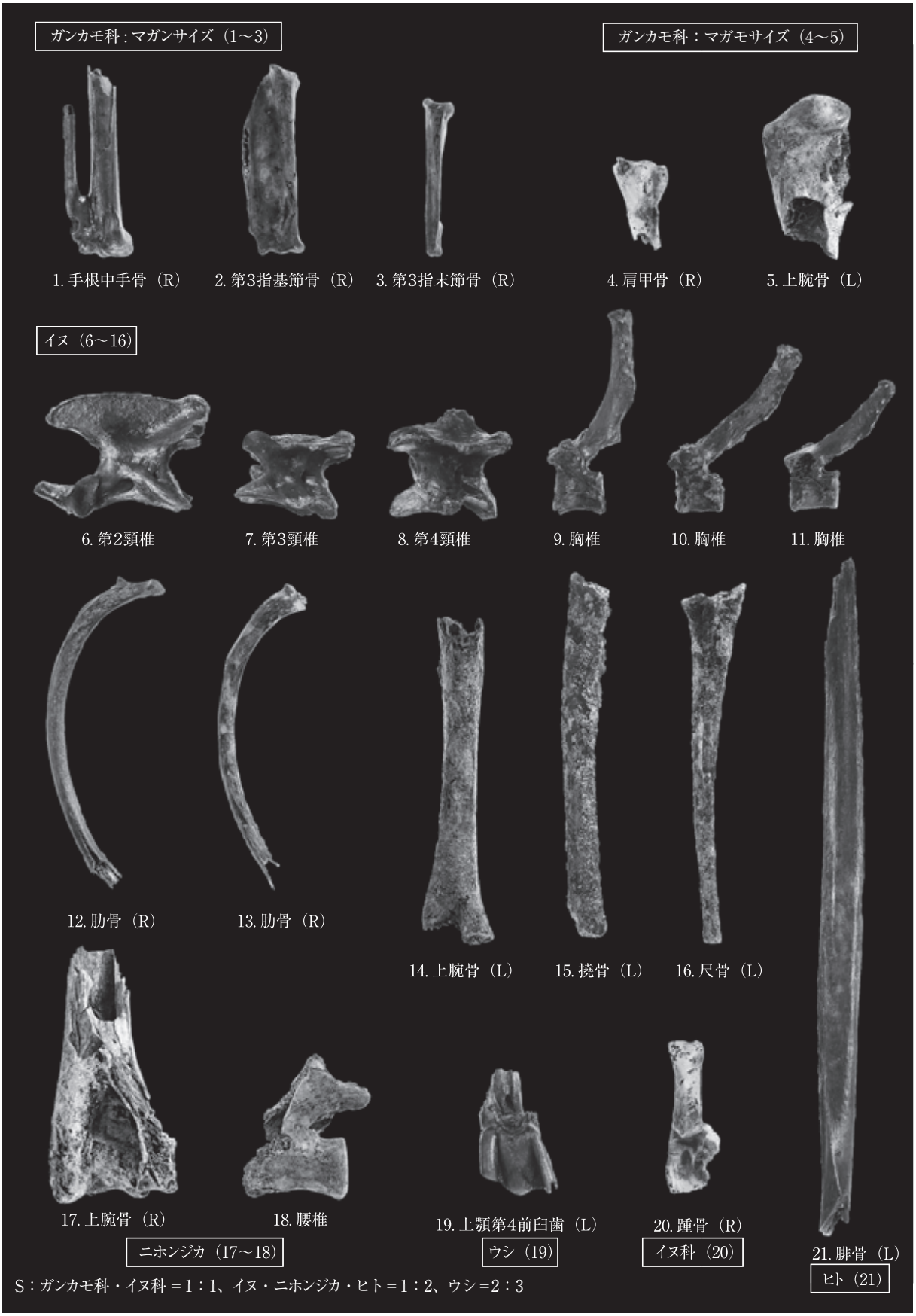


図版97　武家屋敷地区第11地点出土石器・石製品
Pl.97　Stone tools and stone implements from BK11

1～6・8～11 S= 4 : 5
7・12・13 S= 1 : 2



図版98　武家屋敷地区第11地点出土動物遺存体（貝類・魚類）
Pl.98　Mollusca and pisces (fish) from BK11



図版99　武家屋敷地区第11地点出土動物遺存体（鳥類・哺乳類）
Pl.99　Aves and mammalia from BK11

1．１区遺構検出状況（南から）

2．ピット１・２・３検出状況（西から）

3．ピット３・４・５検出状況（東から）

4．ピット７検出状況（南から）

5．３区調査区全景（東から）

図版100　武家屋敷地区第12地点全景・検出遺構（1）
Pl.100　View and features at BK12 (1)

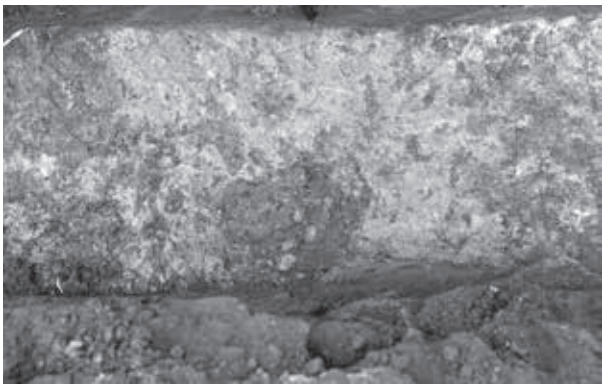
1．3区調査区全景（西から）

2．ピット12検出状況（南から）

3．ピット11検出状況（東から）

4．4区調査区全景（東から）

5．ピット9・10検出状況（北から）



6．ピット8検出状況（南から）

図版101　武家屋敷地区第12地点全景・検出遺構（2）
Pl.101　View and features at BK12 (2)

報 告 書 抄 録

ふりがな	せんだいじょうあとにのまるほっぽうぶけやしきちくだい11ちてん・だい12ちてん
書名	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点・第12地点
副書名	仙台市高速鉄道東西線機能補償関係調査報告書
巻次	
シリーズ名	東北大学埋蔵文化財調査室調査報告
シリーズ番号	1
編著者名	阿子島香・藤沢　敦・柴田恵子・高木暢亮・小原一成・菅野智則・百々千鶴
編集機関	東北大学埋蔵文化財調査室
所在地	〒980-8577　宮城県仙台市青葉区片平二丁目1－1　TEL022－217－4995
発行年月日	西暦2011年６月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
仙台城跡 二の丸北方 武家屋敷地区	宮城県仙台市 青葉区川内41	04100	01033	38度 15分 41秒	140度 51分 07秒	2006.10.2 ～ 2007.9.10	1,401 ㎡	川内サブアリーナ棟新営
仙台城跡 二の丸北方 武家屋敷地区	宮城県仙台市 青葉区川内41	04100	01033	38度 15分 37秒	140度 51分 07秒	2007.1.11 ～ 3.14	59.6㎡	屋外給排水管設備その他工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点	城館	近世	建物・柱列・杭列・溝・木樋・暗渠・井戸・沢状遺構・地鎮遺構・ピット	陶磁器・土器・瓦・木製品・金属製品・土製品・石製品・俵	
仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第12地点	城館	近世	ピット	陶磁器・土器・瓦	

要約 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点	江戸時代から明治初頭に至る各種の遺構・遺物が確認された。これらの遺構は３時期に大きく区分できる。主な遺構としては、掘立柱建物、掘立柱列、溝、井戸などのほか、性格不明の規模の大きな掘り込みが確認された。また、江戸時代初頭から明治時代初期の様々な種類の遺物が出土し、その全体の量的な構成比率などは武家屋敷地区の特徴を示している。江戸時代初頭の陶器も比較的多く出土しており、この区域における武家屋敷の整備が、江戸時代初頭から開始されていたことがわかる。
仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第12地点	地下鉄工事で支障となる屋外給排水設備および電気配線管ルート変更・ハンドホール埋設に伴う調査である。調査区は約１m程度の小規模なもので、ピットが12基検出されている。遺物は、２層からごくわずかに陶磁器・土師質土器・瓦が出土するのみである。

東北大学埋蔵文化財調査室調査報告１

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点・第12地点
― 仙台市高速鉄道東西線機能補償関係調査報告書 ―

平成23年６月30日

発行　東北大学埋蔵文化財調査室
〒980-8577　仙台市青葉区片平2丁目1-1　TEL 022（217）4995

印刷　笹氣出版印刷株式会社
〒984-0011　仙台市若林区六丁の目西町8-45　TEL 022（288）5555

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点・第12地点　付属 DVD－ROM　収録内容

1．本 DVD－ROM には、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点から出土した遺物等のカラー写真データ（JPEG 型式）が収録されています。
2．写真データは、図版別のフォルダに収納されています。そのフォルダ名は、写真図版キャプションと対応しています。
3．図版57 ～ 97 の写真データのファイル名は、観察表の登録番号と同一です。一つの登録番号で、表面・裏面や、見込み・側面・底部など、写真が複数ある場合は、掲載番号に a、b、c などの記号を付して区別しています。（例：CT042a.jpg，CT042b.jpg）
4．図版98・99 の写真データのファイル名は、写真図版の掲載番号と対応し、「図版番号－掲載番号」と表記しています。
5．写真は、整理作業の途中で撮影したものです。そのため、一部の写真には、登録番号とは異なった、整理段階で用いた仮番号のラベルが写っているものがあります。正式な登録番号は、ファイル名を参照ください。
6．本 DVD－ROM は、学術資料としての観点から、複写・転載に関しては、基本的に許可申請を必要としませんが、有償による販売を目的とした刊行物などで使用される場合は、東北大学埋蔵文化財調査室までお問い合わせ下さい。
7．本 DVD－ROM の使用により生じたいかなる損害に対しても、東北大学埋蔵文化財調査室では責任を負いかねます。あらかじめご了承ください。

Research reports in archaeology on the campus of TOHOKU UNIVERSITY No.1

Samurai Residences around Sendai Castle (BK11 site and BK12 site)

- Excavation reports of Loc.11 and Loc.12 of samurai residences located at the side of north outer moat of Ninomaru i.e. Secondary Citadel of Sendai Castle -

Archaeological Research office on the Campus,
Tohoku University